SPECIAL EDITION

ユーロ・ロック集成

2me EDITION

M A Y

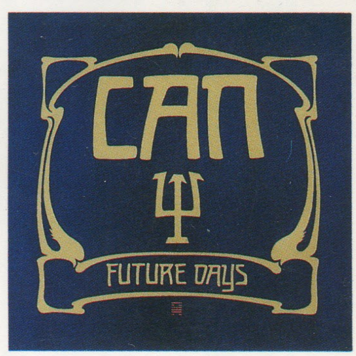
1 9 9 0

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN ROCK 1966—1987

2me EDITION





EDITED BY

NAOHIRO YAMAZAKI

MASAHIKO KAGAWA

SUGURU FURUTA

MASAYUKI MATSUMOTO

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK

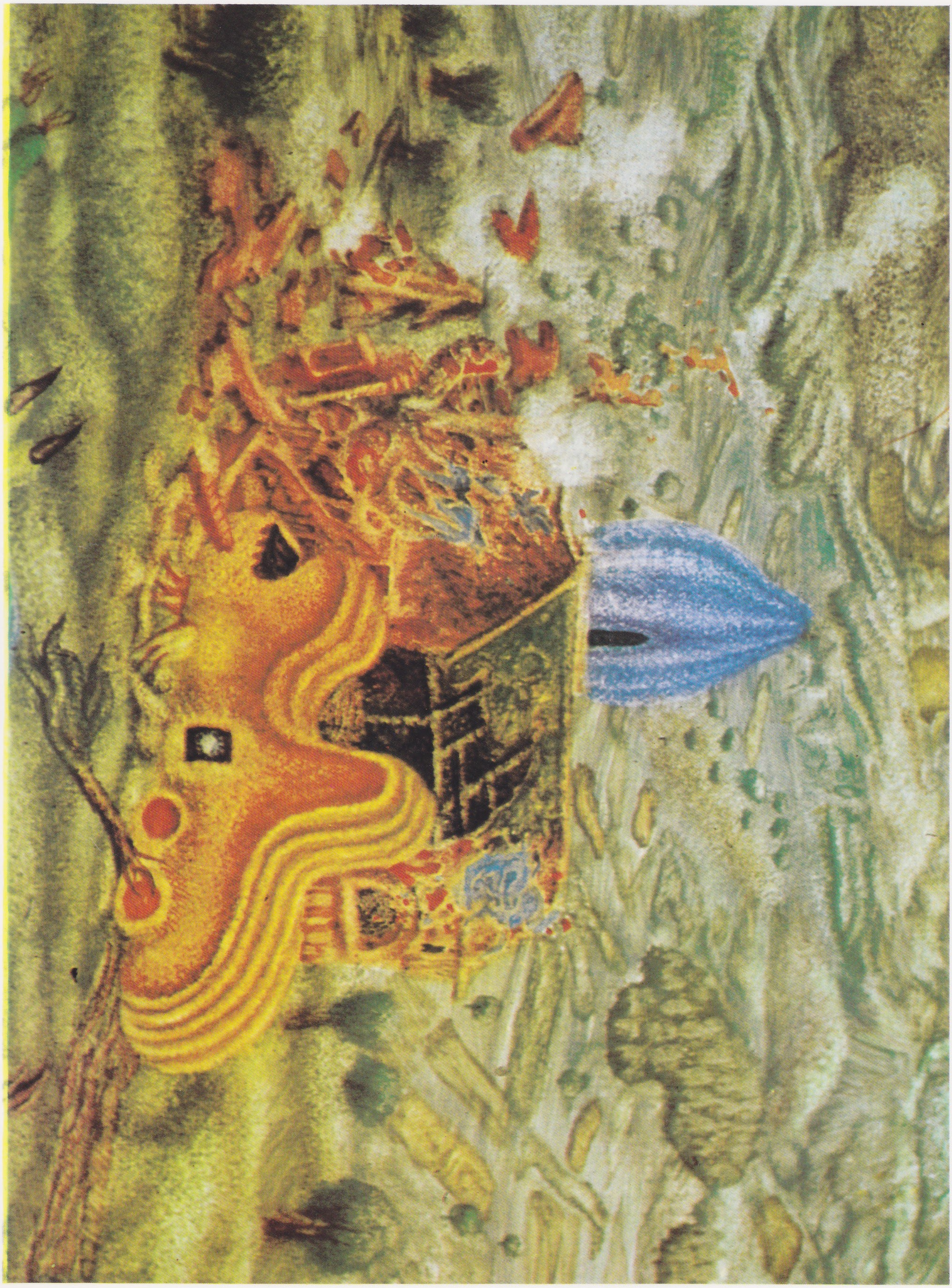
1966-1987



EDITED BY
Naohiro Yamazaki
Masahiko Kagawa
Suguru Furuta
Masayuki Matsumoto

MARQUEE'S ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK





MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK

1966-1987



EDITED BY
Naohiro Yamazaki
Masahiko Kagawa
Suguru Furuta
Masayuki Matsumoto

ユーロ・ロック集成である。言葉の通り、これはヨーロッパのプログレッシヴ・ロックの総カタログである。20年弱にも渡る膨大なその歴史を一冊の本に求めた世界初の試みである。MARQUEE が過去７年に渡り蓄積してきた資料の全てをここに注いで創られた一つの完結した宇宙——それがこの本の意味するところである。人類の全歴史をふり返っても、唯一無比といっても良いこのヨーロッパのプログレッシヴ・ロック・シーン。ある意味では全ての音楽、あるいは音楽的思想は70年代にロックという自由な表現形態の中で、他の芸術とまじりあいながら、結合、分化を繰り返し、新しい変容体を生み出したといえる。伝統と進歩(プログレス)は融合され、有害無実でしかないヒエラルヒーから離脱し、壮大な夢の空間を生んだのである。ある者は自らの脳裡に夢をくくりつけることに命を賭け、又、ある者は人間の限界に、世界の壁に挑んだのである。不幸なことにこれら２つの思想を含んだロック・ミュージックを総合し、プログレッシヴ・ロックと呼んでしまっているが為に、多くの誤解、混乱を呼びおこしてしまった。しかし戦う者も夢みる者も、現実との壁の狭間に漂うという意味合いに於いては同志である。従ってここには両者を含んだ広義でのプログレッシヴ・ロックの作品が紹介されている。イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガル、オランダ、ベルギー、スカンディナヴィア諸国、オーストリア、ギリシアから我国という広大な地域で生み出された作品群をリストアップした。

この壮大な夢の世界を探求する者の為に。あるいは迷宮に遊ぶ者の為に。

山崎尚洋

アルバム選評・協力（五十音順）

青木　洋
飯塚　彰
伊藤友隆
いわねあつみ
植村美穂子
宇田川岳夫
江田　和宏
榎本リュウイチ
大関　善行
岡本　太郎
小野　真一
賀川　雅彦
川上　史郎
木野　草司
久野　真澄
後藤　秀樹
今野　純一
斎藤　千尋
斎藤　隆之
坂地　昭一
坂本　理
島田　博之
城本　隆志
杉山　薫
鈴木　伸一
高石　源太
高橋　理
鷹部屋荘平
たかみひろし
田中　昌延
土川　裕
中島　洋一
中田　幸嘉
中西　鴨久
長沼　武司
中野　泰博
中藤　正邦
韮沢　健二
NUMERO UENO
古田　賢
松尾　宏正
松本　修一
松本　真和
松本　昌幸
丸美屋健吉
モダーン・ミュージック
本木　利英
森　崇
山崎尚洋
山田　悟
山田美雪
山中健一
山本雅幸
UKエジソン
EUFA
吉瀬　孝行
渡辺　好之

Pierrot Lunaire

« ...La storia è sempre la stessa. Tanto che cominciò a pensare che la scuola italiana, se non altro, serva a far incontrare i futuri musicisti... », questo scrive Fiorella Gentile a proposito della storia dei Pierrot Lunaire: rock e avanguardia.







Il fascino e un po' di confusione



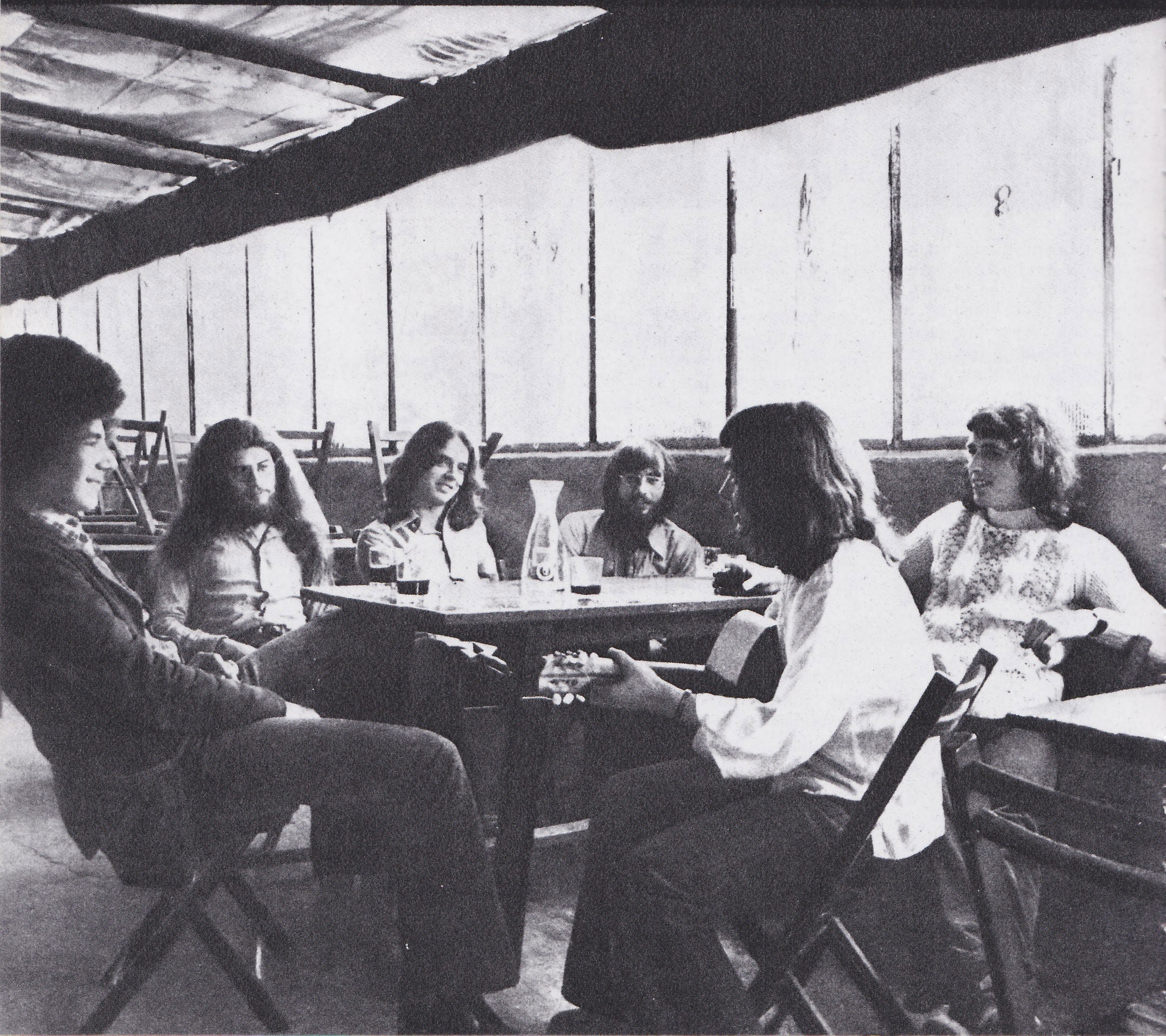
▲ワパスー、幻のファースト・アルバム時にプロモート用に制作されたポスター。


PETER HAMMILL

Oggi, Quella Vecchia Locanda

▼73年、CIAO 2001に掲載された
Q.V.LOCANDA

E' USCITO IL SECONDO ALBUM
DI QUELLA VECCHIA LOCANDA CON
ALLA BASE L'EVIDENTE RECUPERO
DELLE TRADIZIONI ITALIANE;
A VOLTE GLI SFORZI VENGONO PREMIATI,
ALTRE NO. LA NOSTRA INTERVISTA.




IL BALLETTO DI BRONZO


UNO

CONTENTS

ユーロ・ロック集成

税込定価3090円（本体価格3000円）
1987年3月15日第1刷発行
1990年5月10日第2刷発行

編集人 山崎尚洋
発行人 賀川雅彦
発行所 マーキームーン社
161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
TEL.03-954-2055 FAX.03-954-9563
印 刷 ㈱アルファ21
編 集 松本昌幸
古田 賢
沢田 守

PRINTED IN JAPAN

BELLE ANTIQUE

404, SY Bld
3-15-18 Shimo-Ochiai
Shinjuku-ku Tokyo 161
JAPAN 03-954-2055

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.

WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN OUR MAGAZINE & DISTRIBUTE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

ベル・アンティーク・レーベルは、国内外の秀れたアーティストの作品を発掘し、リリースする為に生まれたMARQUEEのレーベルです。今年も素晴らしいアルバムをあなたにお届けする為にさらに充実したラインナップでお送りします。御期待下さい。

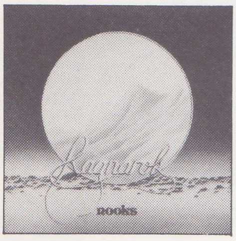
NEW RELEASE



ビブリア
天地創造（CD）

MARQUEE9003
¥2920（税抜）
好評発売中
①Introduction ②Genesis ③Moises ④Las Guerras ⑤Profecias ⑥Libros Sapienciales ⑦Cristo ⑧Apocalipsis

ビブリアとはすなわちバイブルのこと。聖書をめぐるトータル・コンセプト作品。オーケストラを複雑にからみあわせて演出するその世界は、オザンナやチェルヴェッロにも通じる闇のエナジーを発散させ，我々を，しばし異空間へと誘います。このプロジェクトが母体となり様々なシンフォニック・グループが生まれる，アルゼンチン・プログレッシヴ・シーンのモニュメンタルな作品。



ラグナロク
神々の戦い（CD）

POLYDOR/MARQUEE 9004
¥2920（税抜）
7月15日発売
①Five New Years ②Waterfall-Capt. Fagg ③Fourteenth Knock ④Paths Of Reminiscence ⑤The Volsung ⑥Semolina ⑦Nooks

最も洗練されたオセアニアのシンフォニック・グループ。その甘美なアンサンブルは，かのセバスティアン・ハーディーがそうであったように，真夏の夕暮れに水平線の彼方に沈む太陽のように，美しく，はかなく，甘い感傷に満ちています。太陽と海の国，ニュージーランドから生まれたラグナロクの世界は，多くのユーロ・ロックの作品を聴き続けたあなたにさえ，衝撃を与えることでしょう。



バナナ
影法師（CD）

MARQUEE 9010
¥2920（税抜）
近日発売予定
①El Escultor Y La Estatua ②Un Hombre En La Hoguera a) Preparation b) Sacrificio c) Humo Y Cenizas ③Aun Es Tiempo De Sonar ④Vispera ⑤Preguntas Al Cielo ⑥Quien Se Acordata

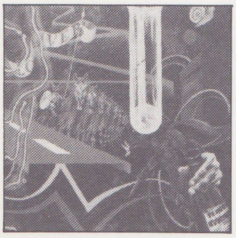
ラテン的な陰影を楽曲に投下し，濡れたようななめらかさと技巧的なテンションを共存させるバナナ。全編を支配するナイーヴで無垢なイメージこそが，彼等の原点であり，アイデンティティーでもある。美しさは，その心と，表現する為に必要不可欠な演奏能力とのせめぎ合いから生まれる。そうして誕生したこの作品が，今，あなたの心へとしのびよろうとしている。風のように。



マクィナ・デ・アセル・パハロス/ブブリーナ（CD）

MARQUEE 9011
¥2920（税抜）
近日発売予定
①Bubulina ②Como Mata El Viento Norte ③Boletos, Pases Y Abonos ④No Puedo Verme Mas ⑤Rock ⑥Por Probar El Vino Y El Agua Salada ⑦Ah Te Vi Eitre Las Luces

アルゼンチン・プログレッシヴ界の鬼才，チャーリー・ガルシア率いるグループ。2枚のアルバムがあるが，これらは甲乙付け難い完成度を誇っている。多種多彩なキーボードを駆使したサウンドは，ラテン的フィルターにかかった万華鏡のように色彩感にあふれ，エモーショナルな躍動感で満たされている。彼の才能が開花した，比類なきシンフォニック作品である。

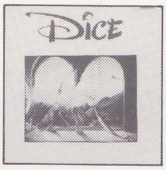


スピリット・オヴ・クリスマス/荒野で呼ばわる者の声（CD）

MARQUEE 9012
¥2920（税抜）
①All The Wrong Roads ②Stay Dead Lazarus! ③Voice In The Wilderness ④War Story ⑤The Factory ⑥Beyond The Field We Know

'60年代後半のサイケデリック・シーンが持っていた，あらゆるものを飲み込もうとするかのような貪欲さと，プログレッシヴ・シーンの明晰さ／洗練を吸収したこのグループのサウンドは，ヘヴィーで躍動感に富み，例えるなら，オザンナのパレポリにでも通じるような，夢幻的な「絵」を放つ作風。豪華ブックレット付CDにて，遂に再発決定。完全限定プレス。

好評発売中



ダイス
北欧の夢（CD）

BELLE ANTIQUE 8906
¥3200（税抜）
①東方の国②アニカ③理想郷の日光浴④ヴェネツィア条約⑤組曲"フォリーズ"



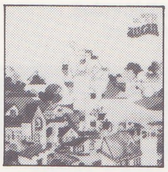
タウラス
夜間飛行（CD）

BELLE ANTIQUE 9001
¥3200（税抜）
①Back On The Street ②The Gurus ③Mount Aineer ④Farmers Battle ⑤⑤Illusions Of A Night ⑥Kaboom ⑦My Will ⑧Barbara ⑨Nickname ⑩Same Old Story



ウィリアム・シェラー
永却の光（CD）

MARQUEE ¥3200（税抜）
①侵入②ようこそ兄弟，バラの繁み，そして庭園③気高き楽曲パート1④気高き楽曲パート2⑤永却の光⑥双魚宮⑦ハーレ・クリシュナ⑧宝瓶宮



アウカン
理想郷への飛翔（CD）

MARQUEE ¥2920（税抜）
①Llegando A Casa ②Primavera De Una Esquina ③Cancion De Mi Padre ④Hacia El Destierro ⑤Tres De Octubre ⑥Mi Amor Y Yo Contra Todos Los Que Rayen ⑦Misterio Azul



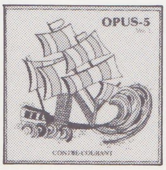
ミルクウィード
ミルクウィード（LP）

SYN-PHONIC/MARQUEE 9011 ¥2800（税抜）
A/①ナーヴァス・ハウス②ミルクウィード③タイム・ボム・ティッキング
B/①アウト・フォー・ア・ウォーク



カラバン
失われた空（LP）

SYN-PHONIC/MARQUEE 9010 ¥2800（税抜）
A/①イントロダクション②ビトゥイン・ザ・ラインズ③グレイスレイヤー④プロキオンの逝去
B/①ミュータンツ・オーヴァー・マイアミ②真夜中のほうき星



オパス・サンク
オパス・サンクの軌跡Vol.1&2（CD）

MELOS 各¥2920（税抜）
Vol.1/①Le Temps Des Pissenlits ②Il Etait Magicien ③Les Saigneurs ④La Bal ⑤Contre Courant
Vol.2/①Provisor ②Periude Au Suivant 他

マーキー／ベル・アンティーク・レーベルでは、上記の作品の販売店を募集しています。卸し売りに関して下記まで御連絡下さい。詳細を御説明致します。

〒161 東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404 マーキー／ベルアンティーク（担当：沢田） TEL 03-954-2055 FAX 03-954-9563

WORLD DISQUE

営業時間13:00−19:30
火曜定休

404 SY Blg,3-15-18 Shimo-Ochiai, Shinjuku-ku, Tokyo
161 JAPAN Phone:03-954-2055 Fax:954-9563

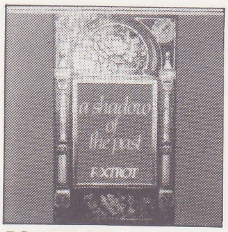
第10回 WORLD DISQUE SPECIAL BARGAIN SALE

7月14日(土),15日(日) 11:00a.m. START!

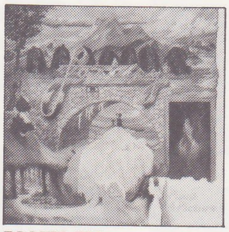
去年のクリスマス以来久々のセールです。ここのところ御無沙汰している中古盤／オリジナル盤が大量に入荷します!!イギリス，イタリア，フランス，ドイツ，ベネルクス，北欧等から集められた約1000枚のレコードがこの日の為に用意されます!!

○前回のセールにひき続き，先着順のシステムは中心します。当日の朝10：30分に抽選をし，それに従い順にはいっていただくことになります。抽選終了後にいらした方には，従来通り整理巻を発行致します。(10：00以前には住人の方の迷惑になりますので10：00以降に御来店下さいますようお願いします。

WORLD DISQUE 5～6月の特選レコード（入荷の極々一部です）



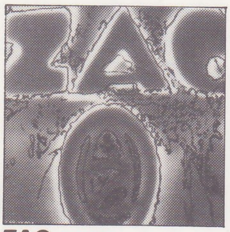
FOXTROT (NORWAY)
打ち込み風のビートとジェネシスの叙情性を持ったグループ。正に90年代のシンフォを暗示する新しい感覚のシンフォ作品です。素晴らしいセンスで磨かれた洗練された音です。 (CD)



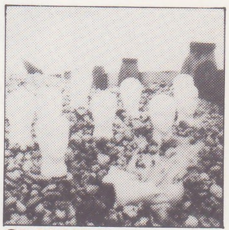
FANTASY (UK)
幽幻で叙景的なサウンド描写でトップ・クラスのシンフォ作品として評価の高い作品。ドイツからの正規再発盤。美しくコーティングされたダブル・ジャケットでのリリース!! (LP)



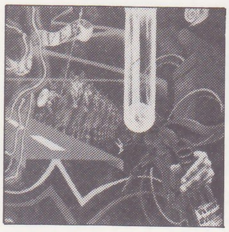
SURPRISE (USA)
メロディとヴォーカルを大切にしたシンフォニック・ロック。聴けば聴く程にはまり込んでいくような，奥深い魅力を持った作品。オリジナル盤での限定入荷です!! (LP)



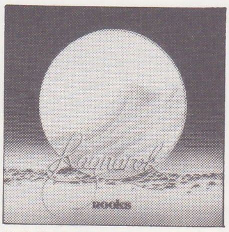
ZAO (FRANCE)
ジャズ・ロックの真髄とも言うべきザオのサード及びフォース・アルバムがCD化されます。ヴァーチュオウゾウ達によるスピーディでメロディアスな演奏は圧倒的です。 (CD)



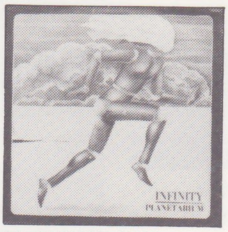
CRESSIDA (UK)
ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック屈指の名作が遂にCDで登場。オルガンを中心にした重々しく影のあるサウンドは正にブリティッシュならではのものです。 (CD)



SPIRIT OF CHRISTMAS (CANADA)
カナディアン・プログレッシヴ・シーンの超レアー・アイテム，スピリット・オヴ・クリスマス。そのヘヴィで壮大なサウンドはオザンナなどに通じるものがあります。 (CD)



RAGNAROK (NEWZEALAND)
セバスチャン・ハーディと並ぶオセアニア・シーンの雄ラグナロク。ギター，キーボード中心のメロディアスな演奏はヨーロッパのトップ・クラスの作品に匹敵する出来です。 (CD)



PLANETARIUM (ITALY)
ファン待望のプラネタリウムがいよいよ再発。メロトロン等を巧みに用いたドラマチックなサウンドは正にイタリアン・シンフォニックの逸品と言うに相応しいものです。 (CD)



MAY BLITZ (UK)
サイケ＆ハード・ロック・ファンの間で人気の高いメイ・ブリッツの作品がCD化されました。プログレ色をも含んだ1st，ストレートなノリを持つ2nd，ともに大推薦です。 (CD)



WIND (W. GERMANY)
メロトロンの大洪水，甘いメロディ，つたないヴォーカル，そしてジャケット…。ドイツ叙情派シンフォニック・ロックの中では間違いなく最高傑作の一枚。待望の再発！ (LP)

その他の入荷

［輸入CD］
AREA-Crac
FOXTROT-A Shadow Of The Past
GAVIN BRYARS-Hommage
LE ORME-College, Florian, etc.
ANALOGY-same
FRANCO LEPRINO-Integrati Disintegrati
JADE WARRIOR-Floating World, Way To The Sun
Mike OLDFIELD-new
MINIMUM VITAL-2nd
TIENKO-2nd
KING CRIMSON-Pandemonium
GENESIS-Live Super, Live Tango
KLAUS SCHULZE-X
FORGAS-New
PULSAR-Pollen
ARTI E MESTIERI-Live
V.A.-Enchantment(with Additional Tracks)
PLANETARIUM-In The Beginning
NOVA-Blink
COCTEAU TWINS-new
GONG-Expresso, You, Angel's Egg, etc.
I POOH-new
CLEARLIGHT-Clearlight Symphony II
EMBRYO-Opal
O TERCO-Criaturas Da Noite
SECONDA GENESI-Tutto Deve Finire
GARADRIEL-Muttered Promises

［国内CD］
ANGE-Emile Jackoty
SEBASTIAN HARDY-2nd
GENTLE GIANT-Acquiring Taste
FLAMING YOUTH-Ark 2
GINO DELISO-海の詩
MARIO CASTERNUOVO-7本の麻糸
UMBERTO BALSAMO-蒼い天使
WEB-妖獣
CIRKUS-One
AUGUST-new
MILKWEED-same
ZAO-Kawana, Shekina
TRANSIT EXPRESS-Couleurs Naturelle
ALAN SORRENTI-Aria
TRIANA
GRANADA
BUON VECCHIO CHARLY-same

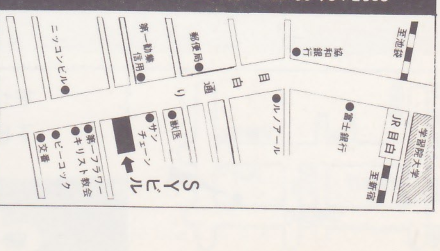
［輸入LP］
FANTASY-Paint A Picture
MIKE OLDFIELD-new
SPIRIT OF JOHN MORGAN-same
MUSHROOM-same
FUZZY DUCK-same
GNIDROLOG-Lady Lake
MOONKYTE-same
JERUSALEM-same
FAIRFIELD PARLOUR-From Home To Home
ANDROMEDA-Unreleased Album
FOXTROT-A Shadow Of The Past
AUNT MARY-Janus, Loaded
COCTEAU TWINS-new
STEEL MILL-Green Eyed God
POPOL VUH-Quike Maya, Stone From Time
HARMONIUM-Les Cinq Saison(Fold-Out Cover)
LIGHT OF DARKNESS-same
OPEN AIR-same
LAGGER BLUES MACHINE-Live
HECENIA



WORLD DISQUE SET SALE LIST VOL.62 5月25日発行！

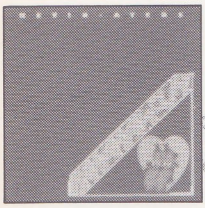
ユーロ・ロックが一般性がないと言われる理由の一つにディストリビュートの悪さがあげられます。もし，日本中どこに住んでいてもレコードを入手できれば，未だこのジャンルを知らない，鋭い感性を持ったあなたの為にこの通信販売システムは発足しました。マーキーに紹介された作品のほとんどがこのシステムで入手可能であるばかりでなく，次号掲載予定の新入荷盤をいち早く入手することすら可能です。限定盤の多いこのジャンルです。毎月，このリストを御利用になっていれば，名盤を買いのがす恐れもありません。推薦盤，オリジナル盤を格安で放出するサービス盤，入手可能なCD/LPを網羅したスペシャル・ストック，そして廃盤になって入手困難なオリジナル盤を御届けする貴少盤コーナーと充実したリストです。御希望の方は100円切手同封の上，最新リスト希望と明記の上，MARQUEE内ワールド・ディスク係まで御申し込み下さい。毎月25日前後にリストを御送り致します。

WORLD DISQUE: 161 東京都新宿区下落合3-15-18
SYビル403 TEL.03-954-2055



アナログ盤で堪能したいプログレッシヴな音

ディスクユニオン新宿店４Ｆでは、イギリス、イタリアから中南米にいたるまで世界各国のプログレッシヴな音楽を直輸入LPで、各種取揃えております。
（輸入CD、中古LP、CDも連日入荷中）



KEVIN AYERS／BANANAMOUR

スティーヴ・ヒレッジ、ロバート・ワイアット等をゲストに迎え、ソフト・マシーンを継承発展させた73年発表の名作。



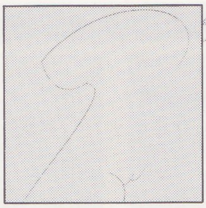
RECOMMENDED RECORDS SAMPLER

これを聴かずして前衛音楽は、語れないと断言できる。濃度の高い異端音楽団達のオムニバス２枚組。



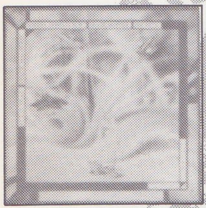
CURVED AIR／PHANTASMAGORIA

ダリル・ウェイのヴァイオリンとソーニャ・・クリスティーナのヴォーカルが美しく融合した72年発表のセカント・アルバム。



SPACE BOX／KICK UP

グル・グル脱退後に、ウリ・トレプテが結成した即興的要素の強いプロジェクトのデビュー・アルバム。



PIP PILE'S EQUIP OUT

エルトン・ディーン、ヒュー・ホッパー等を迎え、カンタベリー・ロックは、現在進行形であることを示した87年発表のアルバム。



UNIVERIA ZEKT／THE UNNAMABLES

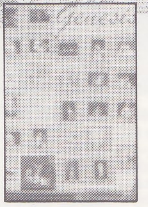
マグマ結成以前のクリスチャン・ヴァンダーのプロジェクト。マグマ節の萌芽を感じ取ることができる。

洋書でプログレッシヴ体験



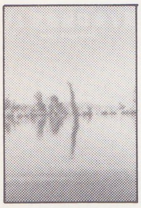
ROGER DEAN／VIEWS

イエスのジャケットで有名なロジャー・ディーンの画集。イエスだけでなく、グリーン・スレイド、ジェントル・ジャイアント、ユーライア・ヒープなど彼の手掛けたジャケットをほとんど網羅している豪華オール・カラーの画集です。



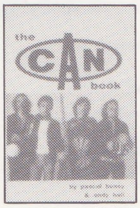
GENESIS／FROM ONE FAN TO ANOTHER

ジェネシス在籍時のピーター・ガブリエルの奇怪な衣装を身にまとったライヴ・フォトや、各メンバーの幼い頃のフォト等を多数オール・カラーで収録している写真集です。



HYPNOSIS／WAKE AWAY RENE

ロジャー・ディーンと並び、70年代ブリティッシュ・ロックの数多くのジャケットを手掛けたアート集団ヒプノシスの作品集。ジャケット作品からライヴ・ポスターまで、彼らの活動を幅広くオール・カラーで紹介しています。

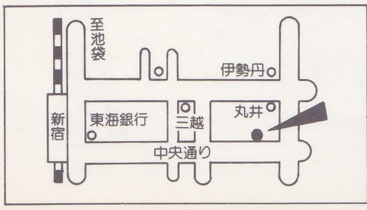


CAN／THE CAN BOOK

カンの歴史のみならず、メンバーの伝記（カン脱退後の軌跡など）も記載しているヒストリー・ブック。又、今まで見たこともないマルコム・ムーニーやダモ・スズキ在籍時のライヴ・フォトも収録されています。

ユーロ、プログレッシヴ・ロック高価買取中 !!

ユーロ、プログレッシヴ・ロックのLP、CDの買取りは、ディスクユニオン新宿店におまかせ下さい。廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。詳しくは、お問い合わせください。



〒160 新宿区新宿３−31−４
TEL03(352)2691

営業時間　平日　11:00〜20:00
日曜・祝日　11:00〜19:00
年中無休

disk union 新宿店

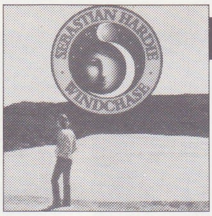
'70年代プログレッシヴ・ロックの金字塔ともいうべき名盤の日本初のCD化!!

ロック・オリジナル・コレクターズ
レア・コレクション

SPECIAL PRICE

¥2,200(税込) **¥2,136**(税抜) ◆歌詞・対訳付 **7月5日発売予定**

WIND CHASE
SEBASTIAN HARDIE



風の唄/セバスチャン・ハーディ
●PHCR-2001

「Four Moments」('75年)に続く2ndアルバム。神秘的で雄大なオーストラリアの大自然の美をそのままサウンドで表現したかのような、ファンタジックな作品。最近、注目を集めているオセアニアン・プログレッシヴ・ロックのバンドの中でも最も知名度が高い。メランコリックで比類なき美しさをたたえたマリオ・ミロのギターとメロトロン、オルガン、ムーグ・シンセサイザーを見事に使いわけるトイヴォ・ピルトのアンサンブルも見事。バンド自体は本作を最後に解散。ミロとピルトはウインド・チェイスを結成する。

〈収録曲〉風の唄/アット・ジ・エンド/ラブ・アンド・ミュージック/ハロー・フィミスター/ピースフル

MAY BLITZ 1st
MAY BLITZ



メイ・ブリッツ 1st/メイ・ブリッツ
●PHCR-2002

VERTIGOからデビューしたハード・ロック系アーティストの中でも、CLEAR BLUE SKYと並ぶ独創的な音楽性を持った幻の名バンド。元ジェフ・ベック・グループのトニー・ニューマン(ds)がカナダ人のティーンエイジャー、ジェイムズ・ブラック(g,vo)、レイド・ハドスン(b)と結成したトリオ。本1stアルバムはアコースティック・パートとエレクトリック・パートの対比にハード・ロックとプログレッシヴ・ロックの両方かの影響を見てとれるダイナミックな音楽性を披露。

〈収録曲〉スモーキング・ザ・デイ・アウェイ/アイ・ドント・ノウ/ドリーミング/スクィート/トゥモロウ・メイ・カム/ファイアー・クィーン/ヴァージン・ウォーターズ

2nd Of MAY
MAY BLITZ

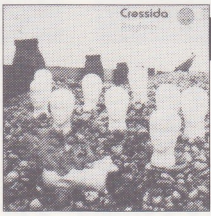


2nd オブ・メイ/メイ・ブリッツ
●PHCR-2003

1stで見られたプログレッシヴ寄りの感性は多少かげをひそめ、よりアグレッシヴな面が強調された2ndアルバム。ヘヴィなリズム・セクションに進歩的なリフがからむハード・ドライヴィング・ナンバーのファンキーな側面も見せるナンバーにも着手するなど、独創的でオリジナリティあふれるHRサウンドを確立した幻の名盤。ブリティッシュ・ロックのレア・アイテムのひとつだ。世界初CD化!

〈収録曲〉ワォー・マッド・メン・オンリー/スネイクス・アンド・ラダース/1969年12月25日/イン・パート/8 マッド・グリム・ニッツ/ハイ・ビーチ/ハニー・カラード・タイム/ジャスト・シンキング

ASYLUM
CRESSIDA



アサイラム/クレシダ
●PHCR-2004

VERTIGOのプログレッシヴ・ロック系の作品としては、GRACIOUS、AFFINITY、DR Zと並び人気の高い1枚、ハモンド・オルガンを中心としたそのサウンドは、ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック創成期の名作として知られている。ぶあついストリングスを配した"Munich/ミュンヘン"はブリティッシュ・ロックが世に送り出した叙情的ナンバーの中でも1、2をほこる屈指の名曲。このメロディアスなナンバーを聴くだけでも価値はある。今までCD化はおろか、再発すらままならなかった幻の1枚が20年の歳月を経て今、復活する! '70年の名デザイナー、KEEFによるジャケット。

〈収録曲〉アサイラム/ミュンヘン/グッバイ・ポスト・オフィス・タワー・グッドバイ/サバイバー/リプリーブド/リサ/サマー・ウィークエンド・オブ・ア・ライフタイム/レット・ゼム・カム・ホェン・ゼイ・ウィル

ARK 2
FLAMING YOUTH



アークII/フレイミング・ユース
●PHCR-2005

GENESISで、そしてソロとして世界のミュージック・シーンをリードする男、フィル・コリンズのプロ・デビュー作がこれだ! 後にJACKSON HEIGHTSに参加するブライアン・チャットン(kb)も在籍したF.Y.唯一のアルバム。火星、金星、木星など、題材を宇宙に求めたトータル・コンセプト・アルバム。ビート系のサウンドからプログレッシヴ・ロックへと移行していく過程を体験するうえでも重要な作品だ。

〈収録曲〉ガイド・ミー、オリオン/アースグロウ/ウェイトレス/ザ・プラネッツ 火星・戦いの使者~金星・平和の使者~水星・翼の使者~木星・喜びの使者~土星・老年の使者~天王星・マジシャン~海王星・ミスティック/チェンジス/パルサー/スペース・チャイルド/イン・ザ・ライト・オブ・ラブ/フロム・ナウ・オン

発売元 日本フォノグラム株式会社

僕たち、プログレ 作るひと

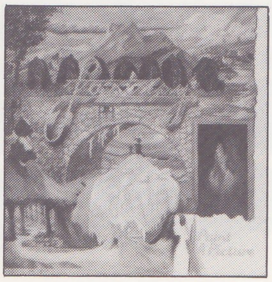
EDSON EUROPEAN Rock SERIES "BRITISH"

6.25 ON SALE

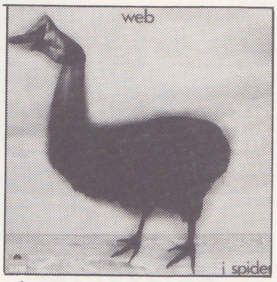




サーカス ERC-28028
「ONE」 ¥2,800



ファンタジー ERC-29229
「心の絵」 ¥2920



ウェブ ERC-29230
「妖獣」 ¥2,920

"CANTAUTOLE"

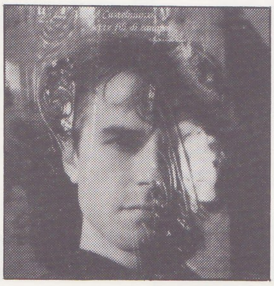
5.25 ON SALE

"時は熟せり"
大英帝国の
偉大なる遺産

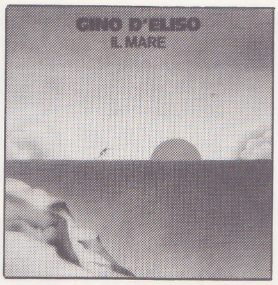
CD:各2,800-



ウンベルト・バルサモ
「蒼い天使」
ERC-28025 ¥2,800



マリオ・カステルヌーヴォ
「七本の麻糸」
ERC-28026 ¥2,800



ジノ・デリソ
「海の詞」
ERC-28027 ¥2,800

MADE IN JAPAN RECORDS





ロザリア
「ジリオン・ティアーズ」
MCD-2014 ¥2,000



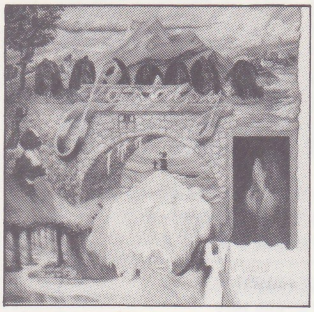
オーガスト
「八月の印象」
MCD-2016 ¥2,000

EDISON EUROPEAN Rockシリーズと MADE IN JAPAN RECORDSの中から 3枚まとめて買うと、"プログレ・ハンド・ブック"がもらえるぞ!!
(6/10～7/31 全国有名プログレ専門店にて)

ロザリア・インフォメーション
03-365-3535

SPRING SONG CORPORATION
〒151 渋谷区初台1-8-3
Tel. 03-5371-8889

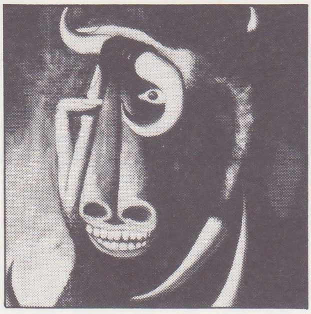
春だ!!再発乱れ射ち!



FANTASY/Paint A Picture
LP:¥3600
(CDは6/25国内発売)



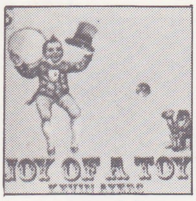
GNIDROLOG/Lady Lake
LP:¥2500



ブオン・ヴェッキオ・チャーリー
CD:¥3200



ミルクウィード
CD:¥2920



KEVIN AYERS/Joy
/Joy of A Toy
CD:¥2500/LP:1900



WIND/Morning
LP:¥2500



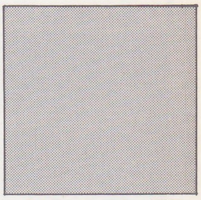
SECOND HAND
/Reality
LP:¥2500



THIRD EAR BAND
/Magic Music
CD:¥2800 LP:¥2500



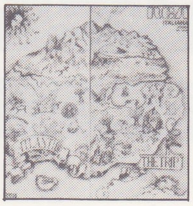
BANCO/Donna Plautilla
LP:¥3200 (未発表集)



RDM. IL BALLETTO
METAMORFOSI
/未発表集
LP:¥3200



RDM/Contaminazione
LP:¥1950



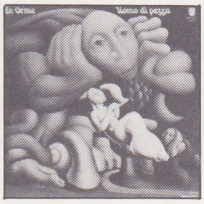
THE TRIP
/Atlantide(オリジナル・ジャケ)



OPUS AVANTRA
/Strata
CD:¥2800



FUZZY DUCK / Same
LP:¥2500



LE ORME/各種
CD:¥2350



ARRAKEEN/Folle Marie
カセット:¥1200

No.22号絶賛発売中!! ¥150

バックナンバーあります。各¥150

エジソン・オリジネート 会員募集中!!
(ユーロ・プログレ専門紙)

毎月20日発売!! 年間会費¥2000
資料希望の方は¥72切手同封の上エジソン
新宿店まで!! 通販リストはもちろんのこと、
新譜情報や日本のプログレ情報、また
マニアが泣いて喜ぶ(?!)情報、企画など
盛りだくさん 全12ページ ¥150にて
各店の店頭にて発売中!! 最新情報や
読みもののページもいっぱい!! 読んでネ!!

プログレ・ライヴ情報 (最寄りのエジソンでも取扱ってます)

〈ロザリア〉
5/15(火) 博多Be-1

〈テルズ・シンフォニア〉
6/11(月) 渋谷エッグマン

〈ホワイト・ファング〉
5/16(水) 大宮フリークス
5/29(火) 博多Be-1
5/30(水) 小倉In&Out
6/2 (土) 岡山ペパーランド
6/4 (月) 岡崎CAMホール
6/7(木) 京都Big-Bang
6/14(木) 札幌メッセホール

EURO & 70s'
EDISON

新宿 03(227)3264
新宿区西新宿7-15-14
大阪 06(365)6283
大阪市北区曽根崎町17-15
梅田若原ビル6F
札幌 011(271)0166
札幌市中央区南2条西5丁目オ13雄ビル5F

新潟 0252(41)9200
広島 082(245)3692
福岡 092(721)5930
大宮 048(648)8989
仙台
5/25オープン予定.

1 ITALY

ヨーロッパの各国々にはそれぞれ固有のアイデンティティーを持ったいわゆるユーロロックが存在しているが、それらの国々の中で最も層が厚く、かつ演奏水準、作曲センスの高いのがイタリアン・ロックである。プレミアータ（ＰＦＭ）が英マンティコアを通じて日本盤もリリースされた73年頃から少しずつではあるが日本でもイタリアン・ロックに対する関心が高まりだした。しかしこの時点ではせいぜいバンコの一部のアルバム、プレミアータのイタリア原盤、オルメあたりしか知られてはいなかった。日本でイタリアン・ロックが本格的に話題になり始めたのは76年頃からであろうか。この間に本国イタリアでは数々の名盤がリリースされては廃盤になってしまいつつあったことを考えるとまことに残念ではある。が、それはイタリア自身にも問題があった。あれ程自国のプログレッシヴ・シーンが隆盛を極めていたにもかかわらず、ほとんど他国へとディストリービュートしようという意志がなかったのである。彼等がもし、他の国々へのディストリビュートに力を入れていたらシーンの状況はもう少し変化していたかもしれないだろう。

それはともかくとして、76年以降は名を聴いたこともない無名のグループの作品が存在することを一部のマニア達が知り始めていた。この時期以降は日本へもイタリア盤が輸入されていたのであるが、残念ながらそれらは巨大なイタリアのシーンの極一部分に過ぎなかった。79年ぐらいまでの間には現在では希少盤として高値を呼んでいるマクソフォーネ、フォルムラ・トレ、イル・ヴォーロ等が輸入盤として入荷してはいたが、しかし絶対数が少なく、やはり一部のマニアが入手できた程度であった。本格的にイタリアン・ロックの全貌が日本で明らかになり始めたのはキング・レコードが始めたユーロピアン・ロック・シリーズを通してである。このシリーズを通じてユーロ・ファン、イタリアン・ロック・ファンになった読者の方も結構多いことと思う。このシリーズを通じて、過去には考えられなかったマニアックな作品群――イル・ヴォーロ、フォルムラ・トレ、ニュー・トロルス、オザンナからはてはトリアーデ、ムゼオ・ローゼンバッハ、アルーザ・ファラックス、チェリー・ファイヴ etc が我が国に紹介されたのである。さらには近くＲＣＡレーベルの作品群も国内プレスされる予定で、かなりな数のイタリアン・ロックが日本で再発されたことになる。

しかしこれ程多くの作品が再発されてなお、ブロッコ・メンターレ、オパス・アヴァントラ、プロセッション、ヤクラ等々まだまだ名盤の数々が謎のヴェールに包まれているのも事実である。改めて70年代のイタリアン・ロックの層の厚さに驚かされる。ブリテッシュ・ロックでさえも、一部のメジャー・グループ（ジェネシス、キング・クリムゾン等）を除くとこれ程まで水準の高いプログレッシヴ・グループは多く存在しないような印象を受ける。

イタリアン・ロックの美学は情熱の美学である。瞬時の美に命をかけたアーティスト達の青春の記録である。情熱的ではかなく、明るい太陽の下の孤独である。思想云々よりも感性に根ざしたイタリアの伝統がロック・ミュージックの中にかえり咲いた輝き――それこそがイタリアン・ロックの持つリリシズムといえないだろうか。

イタリアン・ロックの美しさに気付き、それを世界的にプログレッシヴ・ロック・ファンへと紹介したのは日本人であったというのも皮肉な話である。熱心なマニア達の探求により、現在、イタリアン・プログレッシヴ・ロックの全てはあばかれた。最後に発掘された第一級のグループはヤクラであり、それ以後は高いヴォルティジを持つグループは見つかってはいない。従ってここに紹介されたレコード群を持って70年代のイタリアン・ロックの全てであると言い切っても良いだろうと思う。カンタウトーレ達の作品はまだまだ未開の地ではあるが…。MARQUEE 012で紹介した作品群にさらに約100枚ものアルバムを加えたこのカタログは、従って最も完全なイタリアン・ロックのカタログとしての意味を持つものである。

どこまでも青い青い空の中に一人すい込まれていくようなイル・ヴォーロ。いまや全てのシンフォニック・アーティストの中でも別格視されているプレミアータ、余りにイタリアらしい キーボード・トリオ、レ・オルメ。孤高の道を歩んだアレア。驚ろしい程の音楽水準を誇ったバンコ。数えあげたらきりのない程にイタリアン・ロックへの思いは募る。めくるめくあたかも迷宮のようなこの世界へあなたもさまよい出てみてはいかがだろうか。無数の夢が、歴史が、愛が、せめぎあいながらあなたの精神を圧倒し続けることだろう。

山崎尚洋

BANCO DEL MUTUO SOCCORSO

多くの実力あるプログレバンドが現れては陽の目を見ずに消えていった70年代のイタリア。そんな中でニュー・トロルス、オルメ、PFMと並び数少ない“10年選手”として君臨して来たのがこのバンコである。インターナショナルな成功を収めたPFMは例外としてもオルメ、NTとて元々はポップスバンドとしてスタートした経緯があり、デビュー以来純プログレの路線を崩さぬままこれ程の長きにわたって完成度の高い作品を次々と創り上げて行ったグループは他に見当たらない。そこで本稿ではそんな彼らの歴史を簡単に振り返ってみる。

正式なグループ名はBANCO DEL MUTUO SOCCORSO。辞書によると“共済組合”“共済銀行”といった意味の言葉らしいが、トスカーナ地方の共済組合から取られた名であることは国内盤のライナーにも明記されている。グループの母体となったのは60年代にはノチェンツィ兄弟が中心となってローマ大学で結成されたロックバンド。70年代に入るとR.ダンジェロ、P.カルデローニといったメンバーが次々とグループに参加、2年程独自の演奏活動を行っていたが72年、リコルディよりレコードデビューの運びとなった。リコルディで3作を製作した後、マンティコア、再びリコルデイ、そしてCBSとレーベルを移り計12枚のアルバムを残しているが、ポップな色合いを増した80年代の作品を除けば、いずれも独創的でプログレッシヴロックとして質の高いものとなっている。

バンコ・サウンドの魅力は、キングのユーロロックシリーズで国内発売が実現した初期の3枚とマンティコアでの3作目“Come In Un'Ultima（最後の晩餐）”の計4作品に凝縮されている。いずれも典型的なシンフォニックサウンドであるが、リスナーの心理を読んで常に先回りをする意表を突いた展開が繰り返され、全てが計算ずくの緻密な曲構成はまさに一級品である。その柱となるのはノチェンツィ兄弟の操るキーボード群であるが、各メンバーの演奏技量が非常に高いレベルにあるため、キーボードばかりに寄り掛からない組み立てが可能になる訳である。その上、巨漢ヴォーカリスト、フランチェスコ・ディ・ジャコモの翳みの無い、よく伸びる歌声はシンフォニック系のサウンドを構築するのに理想的と言え、彼らのサウンドの有するオリジナリティをより強固なものにしている。

初期の3枚は微妙に異なったタッチで作り上げられている。1stでは力強い面がある程度強調されているが、2nd“Darwin!”では独特の暗い影を宿したサウンドに少々アバンギャルドな味付けがなされ、構成自体も非常に稠密なものになっている。3rd“Io sono Nato Libero”は完ぺきなアレンジで聴かせる、シンフォニックロックの“教科書”とも言うべき大作だ。しかしデビュー後僅か1年たらずで、早々と完成された3類型のサウンドを確立してしまった彼らも、この後大いなる挫折を味わうことになる。

PFMに続け、とばかりにインターナショナル市場進出を狙ってマンティコアからリリースされた4thアルバム“Banco”は日本でもキングのユーロロックシリーズが始まるずっと前に発売された。主に1stと3rdから数曲をセレクトし英語の歌詞を付けたものだが、受けを狙ったためか、その小じんまりとしたアレンジは余りにもインパクトが弱過ぎ“世界進出作戦”の結果たるや惨澹たるものに終った。なお本作からはオリジナルギタリストのMarcello Todaroに代わってRodolfo Malteseが参加している。次の“Garofano Rosso”はサウンドトラック盤。看板であるフランチェスコのヴォーカルが聴かれないという点で相変わらず物足りなさを残しているが、7枚目の“Come In”ではようやくキーボード郡を駆使した畳み込む展開が復活。前期の総決算とも言うべき大作に仕上げた。本作にはアルバムデビュー間もないA.ブランドゥアルディが参加しているが、バンコのメンバーも後に、彼の“地中海キャラヴァン”でバックをを務めることになる。

再びリコルディに戻って製作された8枚目の“Di Terra”は彼らにとって2枚目のインスト作品だが“Garofano Rosso”とは趣きが大きく異なり、キーボードプレイ等は控え目のまま、オーケストラを大胆に導入、よりドラマチックな展開を模索した作品となっている。同作で転機を迎えた彼らは、翌年にはヴォーカルを全面に出した“Canto Di Primavera”を発表、ポップな方向へのイメージチェンジに力を注ぐが、「春の歌」のタイトルに相応しい、柔らかく温か味のあるサウンドはCBS移籍後の諸作品とは比べ物にならない程みずみずしいものになっていいる。（本作からはオリジナルベーシストのR.Dangeloに代わり、Giancolaiacomoがベースを弾いている。）“Copolinea”は9作目にして初のライヴ。ミラノのカポリネア・ジャズクラブでの実況盤だ。“…Di Terra”を除く全作品から満遍なく選曲されているが、バックにブラスセクションを従えるなどしてどの曲も驚く程現代風にアレンジされており、ユーロファンからフュージョンファンまで楽しめる非常に受け口の広い音作りになっている。

その後CBSに移籍した彼らは80年から83年までの間に“Urgentissimo”“Buone Notizie”“Banco”の3作品をリリースするが、いずれもポップな音作りが中心で、プログレ愛聴家には物足りない作風となってしまった。なお80年にはノチェンツイ兄弟が、元デ・デ・リンドのヴォーカリスト、ヴィト・パラディソのアルバムでバックを務めているが、こちらも非常にポップなサウンドとなっている。 **江田和宏**

PFM

PFM――本名プレミアータ・フォルネリア・マルコーニ（ブレシア地方にあるパン屋の名前）は71年6月にヴィアレッジョ・ポップ・フェスティバルでデビューを飾った。

彼らの前身はルチオ・バッティスティの門下生の集まりであるイ・クエッリというポップス・バンドで、フランコ・ムッシーダ、フラヴィオ・プレモーリ、ジョルジオ・ピアッツァ、フランツ・ディ・チョッチョ，アルベルト・ラディウスの5人で68年のカンタジーロ・フェスティバルでデビューをしている。しかし、それほど注目を集める事はなく、どちらかというと、グループとしての活動よりもセッションとしての仕事が多く、アルバムはリコルディから1枚しか発表していないが、この期間における国内でのヒット・シングルの8割に彼らが参加していた。その中の仕事の一つにバッティスティの「8月7日午後」のレコーディングがあった。このアルバムにはクエッリ全員が参加していたが、バンド自体は崩壊寸前であった。この状況をバッティスティが見てとり、このままでは危ないと思い、彼の助力によってクエッリを解散させ、新たに2つのグループを誕生させた。1つはラディウスを中心とするフォルムラ・トレであり、もう一つが残りの4人にマウロ・パガーニを加えたこのPFMである。

トレはこのレコーディングの最中に結成され、順調なすべり出しをしたが、PFMの方は先のフェスティバルでデビューを果たしたものの、アルバムを出す程のアイデアや確固たる自分たちの音楽性を見出すレベルに達してはいなかった。そんな迷いの中にある彼らに指針を与えたものの一つにジェントル・ジャイアントのファースト・アルバムがあった。これによってPFMとしてのオリジナリティや方向性を見出すことができ72年3月12日にヌメロ・ウーノからデビューアルバムがリリースされた。この「1分の物語」と題されたレコードは国内で大ヒットし、チャートの4位まで上り、その年の暮れに早くもセカンド「Per Ur Amico」発表と精力的に活動を続ける。このアルバムはELPのイタリア公演に同行したピート・シンフィールドが聴いて興味を持ち、73年1月20日に設立されたばかりのマンティコア・レーベルから英詩版がリリースされることとなる。プロデュースと英訳をピートが行い、1stから一曲と新曲を加え、残りは全て2ndからで日本でも「幻の映像」のタイトルで発売された。録音は2月7日にロンドンのコマンド・スタジオで行われ、グレッグ・レイクが立ち会っている。このアルバムがイギリスでのデビューであり、事実上のマンティコア第一弾であり、彼らにとって世界へ羽ばたく大きな転機であった。レコード番号はELPの「タルカス」がアトランティック6666だったのにちなみマンティコア6667になっている。しかし、ヌメロ・ウーノ側とでマネージメント問題が発生し、マンティコアとの契約が大幅に遅れたために結局、ピートのソロが第一弾として先にリリースされ、PFMは後回しになってしまった。マンティコアはその後バンコとも契約を交わしている。

PFMはこの年イギリスを中心にヨーロッパ・ツアーを行い8月24日には第12回ナショナル・ジャズ&ブルース・フェスティバルにジェネシス，リンディスファーンらと共に出演。この頃の彼らのステージのプロデュースは全てピートとグレッグがやっていた。この間にクラウディオ・ファビとの共同プロデュースでアクア・フラジーレのデビュー・アルバムをヌメロ・ウーノからリリース。9月に入るとベースのジョルジオが脱退し、新たに元アレアのパトリック・ジヴァス（フランス人）が加入、11月から74年2月にかけロンドンのアドビジョン・スタジオで「甦る世界」の録音に入る。このテープは1月にイタリアに持ち帰り、ミラノのフォノラマ・スタジオで手を加え、ファビとのプロデュースで4月にリリースされた。この直前にシングル「甦る世界」が出たがB面の「ハンスの馬車」はアルバム未収録のライヴ曲である。タイトル曲はファーストに収められていたものの焼き直しで今回も全曲英詩だが後発でヌメロ・ウーノから伊語版「L'isola Di Niente」が出された。（ここでマニアがよくカン違いするのだが「幻の映像」から「ジェット・ラグ」まではオリジナルは全てマンティコア盤であり、ヌメロ・ウーノではない。つまり英語版がオリジナルであり、Zooから出ている「ジェット・ラグ」も再発である。）アルバム発表に合わせ、3月から4月上旬まで初のイタリア・ツアーを行う。その後、8月22日のトロント大学のコンヴォケーションホール、31日のニューヨーク・シェファー・セントラル・パーク・ミュージック・フェスティバルを収めたライヴ盤「クック」（伊盤のタイトルは「Live in USA」）解散したアクア・フラジーレからベルナルド・ランゼッティを加えた6人組で「チョコレート・キングス」をたて続けにリリースし活発な動きを見せている。



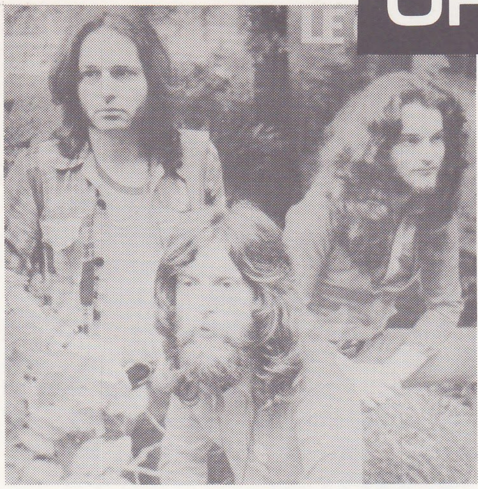
やがてアメリカ指向を目指すPFMと民族音楽へと傾倒していくパガーニとの間で衝突が起こり脱退、新たにアメリカ人バイオリニスト、元イッツ・ア・ビューティフル・デイのグレゴリー・ブロックが加入し「ジェット・ラグ」を77年に制作（日本盤のライナーは間違いだらけ）。しかし、どういうわけか彼らもアコースティックな方向へと転換していった。個人的な推測だが恐らくファブリツィオ・デ・アンドレとの出会いがそうさせたのだろう。

そして自らのレーベルZooを設立、バンコの作ったプロダクション／ムジーザ、そしてフランコ・マモーネと共に国内アーティストの育成、バックアップの担い手として活躍しアンジェロ・ブランデュアルディ、マウリツィオ・ファブリツィオを送り出す。PFMも78年に「Passpartu」79年にデ・アンドレとの共演ライヴ「イン・コンチェルト Vol.1」「同 Vol.2」（これはオリツォンテというレーベルから廉価盤で出た）と国内に活動のターゲットを絞っていく。

次作「Suonare Suonare」ではベルナルドとグレゴリーが脱退し、ルチオ・ファブリが加入。81年6月にはプレモーリも脱け、4人組でヌメロ・ウーノより「Come ti va inriva alla citta」を、また7月24日に行われたフィレンツェのテアトロ・テンダにおけるライヴを収録した2枚目のライヴ盤「Peformance」と、この年精力的な活動を行う。この頃からフランツがフロント・ヴォーカルとなり、ドラムスにはパガーニの2ndソロに参加しているワルテル・フォインが入ってツイン・ドラムとなる。また各メンバーはそれぞれセッション・ミュージシャンとしても動き回り、アルベルト・フォルティスを始め多くのカンタウトーレのバックを務めている。83年にはサントラ「Attilaflagello di Dio」がリリースされた。　その後のアルバムのニュースは途絶えたままだが、現在でも彼らはセッションやプロデュースを等、裏方で活躍しているようである。

いわねあつみ

ORME



レ・オルメの歴史の始まりは今だ霧に包まれて不鮮明である。結成は67年頃で当初はシングル・ヒットをチャートに送り込む若き5人のアイドル・グループだった。ちょうど同時期にデビューしたイ・プーと共に60年代後半のイタリア・ポップス・シーンを彩っていたに違いない。そんな彼らにピッタリの名前のレコード会社カー・ジュークボックスから「帰ってきた夏」「ミラノ1968」等のヒット・シングルをたて続けに飛ばしていたが、やがてアルバムも出せるようになり「Ad Groriam」「L'aurora」の2枚がリリースされたが2枚目の方はプロモーション・プレスの段階で、発売はされていないらしい。(しかし見た、と言っているイタリア人も居る)このアルバムのタイトル曲 である「L'aurora」は70年夏のフェスティバル・ディスキに出演した際に演奏されたが、この時すでにトリオ編成になっていて後のELPサウンドを確立していた。ELPが鳴り物入りでハデなデビューをしたのが同じ70年夏の8月29日に行われた第3回ワイト島ポップ・フェスティバルだった事を考えるとなかなか興味深い。恐らくは当時時代を先取りしていたこのアルバムはあまりに異端すぎたがためにレコード会社側からストップがかかったのだろう。そんな彼らに門戸を開放したプロデューサーがジャンピエロ・レヴェルベリである。彼は50年代後半からカンタウトーレとして活躍し、ルチオ・バッティスティやニュートロルスのプロデュースなどをしてきた、いわばバティスティと並ぶ「もう一人のドン」と言っていいだろう。その大物が彼らを大手フィリップスへ紹介したとしても会社は断れないに決まっている。こうして全てがラッキーな彼らは「Collage」で大手から堂々たるデビューを果たしたわけで、ちなみにこの年大手からデビューしているのはCBSのイ・プーだけでこれ以前は全くない。とするとこの「Collage」こそが外資系大手からデビューした記念すべき最古のイタリアン・ロックのアルバムといえよう。メンバーはアントニオ・パリウカ、アルド・タリアピエトラ、ミケーレ・ディ・ロッシの3人。このアルバムもタイトル曲がシングル・カットされ、彼らの人気はいよいよ凄まじいものになってきて72年に発表された「Uomo di Pezza」はついにミリオンセラーを記録してしまった。時を同じくして大規模な国内ツアーを行い、完全に不動の地位を築き上げた。このツアーの模様はのちに「In Concert」と題され74年に出された。その前の年73年にはトータル・アルバム「Felona e Solona」をリリース。愛と平和と光に輝く星フェローナ、永遠の闇に閉ざされた暗黒の星ソローナ、この2つの惑星が全ての幸福の根源を否定した神によってお互いの立場が逆転し、破滅へと向かうストーリーで、この一大宇宙叙事詩はピーター・ハミルの目に止まり彼自身の手で英訳されてカリスマから「Felona & Solona」として出された。この時、渡英した際にマーキーでライヴを行ったが、PFMと対照的な音の無機質なイメージのせいか、失敗に終わっている。この間にアルバム未収録シングル「Gioco di bimba」を出し、翌74年には「Collage」以来、ずっとプロデュースを続けていたジャンの最後の、そして第二期オルメの最高作である「Contrapunti」を発表。ジャン自身もピアノで参加している。この後ジャンと別れた彼らは世界へと目指しバンドの改革を行う。初めてのギタリスト、トーロ・マルトンを加入させアメリカへ渡り、ロサンゼルスで「Smogmagica」を録音。音楽性もよりインターナショナルな方向へと大きく変化してしまった。ギターリストはすぐにジェルマーノ・セラフィンに代わってしまったが、アメリカ、イギリス、ドイツでワールド・ツァーを敢行し、76年「Verita Nascoste」77年「Storia o Legenda」とリリースしていったが結局彼らの世界に対する挑戦は無残な敗北に終わり、活動休止状態となってしまった。第三期オルメの終焉である。しかし79年以後、「Florian」「Piccola Rapsodia dell'ape」という印象的な2枚のアルバムが出された。全編、生楽器で構成され、ジェルマーノまでもがバイオリンを弾いていてさながらヴェネチア風琴を奏でる室内楽とでも言える異質な雰囲気が漂っている。この後またもや大変革が起こり、再び自らの音楽性を解体し始め、ジェルマーノが脱退、フィリップスとも決別し、往年のトリオに戻りオルメの歴史上、最高に緻密な音作りがされたラスト・アルバム「Venerdi」を発表。録音はミラノのスタジオ・ラディウス、プロデュースはロベルト・コロンボでドログェリア・ディ・ドルゴーロというレーベルから出された。またこの中の「Marinai」が第32回サンレモ音楽祭に入賞し、三たびチャートを歩んでいく期待が高まる中、85年に解散してしまった。18年に及ぶ波乱の歴史のまさに終幕である。なお、86年に日本でのみ発表されたライヴ2枚組が出ている。先の75年のツアーでギターはジェルマーノでツェッペリンやジェスロ・タルの曲など演っていて結構楽しめる。

いわねあつみ

AREA

'79年6月14日、イタリアで、ディメトリオ・ストラトスの追悼コンサートが開かれた。マウロ・パガーニ、バンコ、A・ブランドゥアルディ、そしてヴォーカリストを失なったアレア等、35ものグループが出演し、6万を越える聴衆を動員した。その模様は2枚組の「1979 il Concerto」として残っており、ディメトリオに対する参加グループの感情――追悼の念、音楽に対する熱意等――を伝えている。だが、このイベントが一つの終わりを象徴していたことも、多分、確かだろう。

アレアは'73年に「Arbeit Macht Frei」でシーンにデビューした、ジャズ的なイディオムとバルカン半島系民族音楽の手法を混合させたサウンドは音楽的にも、又、技巧的にも極端に完成度の高いものだった。特にA－1はイタリア国内において、学生集会等の場で、学生達に歌われるという程、ポピュラーな存在だったようだが、この事は、日本において、かつて「反戦フォーク」が学生達に合唱されたことと、音楽的な意味においては多少異なる。バルカン半島（特にブルガリア、ギリシア）の民族音楽から影響を受けた彼等のサウンドは、付加リズムと呼ばれるリズム形を主体にしている。当然、不規則拍子の曲を複数の人間によってユニゾンで合唱するということは普通の四拍子の曲をやる場合に比べて難易度が高いと言える。逆に言えば、その場でこの曲を歌った人間は、この曲を歌える程度には聴きこんでいた、ということになる。

さて、ディメトリオ・ストラトス（vo,per,kbd）、パオロ・トファーニ（g,syn）、パトリツィオ・ファリセッリ（pf,kbd）、パトリック・ジヴァス（b）、ジュリオ・カピオッツォ（dr）、エドゥアルド・ブスネッロ（sax,clarinet）の6人編成で始められたアレアだが、1st アルバム発表後、P・ジヴァスがPFMに引き抜かれ、E・ブスネッロがグループを脱退、結局新任ベーシストにアレス・タヴォラッツィを迎え、5人編成で、2ndアルバム「Caution,Radiation Area」を'74年に発表。以後、'77年まではこの5人で活動を行なうことになる。

'75年に発表された3rd アルバム「Crac!」がイタリア・レコード批評家賞を受賞、又、同年、ライブ・アルバム「Are(A)zione」発表。'77年にはポール・リットン（per）、スティーヴ・レイシー等をゲストに 5th アルバム「Maledetti」を発表。新境地を切り開く意欲作とでも言うべき作品である。又、同年にはベスト・アルバム「Anto Logicamente」を発表している。



そしてP・トファーニ脱退後の'78年、4人編成となったアレアは、それまでのクランプス・レーベルからアスコルト・レーベルへ移籍、「1978,gli dei se ne vanno,gli arrabbiati restano!」を発表。ディメトリオ最後のスタジオ録音となった。この作品は、再びレコード批評家賞を受賞した。

「1978――」は或る意味ではアレアの総決算とも言える作品である。前作「Maledetti」よりは、「Arbeit Macht Frei」、「Crac!」といった辺のアルバム作りを元に、よりグレード・アップした作品集であると言えよう。アルバム・トップにスピーディで変則拍子のヴォーカル・ナンバーを持ってくるところも同じであるが、彼らのこの路線の中でも、この曲の出来が最も高度で、かつインパクトのあるものであることは異論のないことであろう。

そして'79年6月13日、ディメトリオ・ストラトゥス死亡。死因は骨髄の病気であるとも、血液関係であるとも伝えられている。

彼の死によってドサクサのように出たレコードが2枚ある。一枚は'76年11月にミラノで行なわれたアレアの即興演奏を全面に収録した「Event'76」。もう一枚はディメトリオが、M・パガーニ、P・トファーニ等と'78年11月に行なったロックン・ロール・ライブを収録した「Rock'n'Roll Exibition」。又、「1978－」当時に、アレアのメンバーと共にM・パガーニの 1st ソロアルバムに参加していることも忘れる訳にはいかないだろう。B－1でのアレア十パガーニの超絶インター・プレイ。彼等がここまでやりながら、多分、まだ余力を残しているように見えることに、恐怖さえ感じてしまう。

'80年、残された3人は「TIC & TAC」を発表。決して悪いアルバムではない。だが、ほとんどの人々はディメトリオがもはやこの世に存在しないのだということを再び思い知らされたような気分になった。

ディメトリオがアレアにもたらしたのはバルカン半島系民族音楽、政事色、攻撃性だった。だが、その斧で断ち割るようなインパクトと裏腹に、とてもヒューマンな男だったのじゃないかと思うのは僕だけではないだろう。この場合のヒューマンとは「Event'76」のジャケのように、『野原で少女と共に花をつむフランケンシュタイン』のような感覚で、人が惨らの中に良く忘れてきてしまうような感情のことだ。とにかく、彼の死によってプログレ／アヴァンギャルド系音楽は10年遅れることになったと言えよう。

斎藤千尋

NEW TROLLS

ニュートロルスの結成は古く、1966年頃でヴィットリオ・デ・スカルツィを中心にジェノヴァで活動していた。翌年には、早くもローリングストーンズのイタリア公演の前座を務めるまでとなり、これがきっかけで国営レーベル、フォニット＝チェトラにスカウトされた。そしてシングル「Senzazione」でデビュー。68年に2ndシングル「Visioni」が大ヒットし、ようやくアルバム制作のチャンスが訪れた。メンバーはヴィットリオの他、ニコ・ディ・パーロ、ジャンニ・ベッレーノ、ジョルジオ・ダダモ、マウロ・キアルージの5人でプロデュースにはファブリツィオ・デ・アンドレとジャンピエーロ・レヴェルベリとでその年に発表された。翌69年にはアルバムは出してはいないがサンレモ音楽祭に出演している。待望の2ndは70年に「New Trolls」と題されてリリースされたがこのアルバムではマウロが脱退して4人組となっている。このメンバーで翌71年にトーマス・ミリアン主演のホラー映画「La Vittima Designata」のサントラを友人ルイス・エンリケス・バカロフと共に「コンチェルト・グロッソ」として4月に発表。しかし、この後ジョルジオが脱け新たにマウリツィオ・サルヴィとフランク・ラウジェッリが加入し4枚目の「Searching for a Land」をリリース。このアルバムはスタジオ録音とライヴのカップリング2枚組でライヴの方に2曲だけジョルジオが参加している。タイトル、歌詞は全て英語でフランクが書いている。この後、ニュートロルス最高作として名高い「UT」を72年にリリース。これまで安定した活動を見せてきた彼らだが73年にヴィットリオを除く全てのメンバーが脱退してしまい、4人の連盟で「？」のジャケットで別バンドとしてアルバムを出してしまった。このバンドが発展し、後にイビスとなる。残されたヴィットリオはバンドの立て直しを計り、ジョルジオが戻って来て、後にイビスへ参加するレナート・ロセット等総勢8人を集め、彼の実父ジャンニ・デ・スカルツィの経営するプロダクション、スタジオGに所属し、「アトミックシステム」を製作するが、発表当時はチェトラ側との契約問題でニュートロルスの名は使えずに当初は「N.T.Atomic System」のステッカーが貼られてマグマ・レーベルから出ていた。このアルバムがニュートロルスの名で出るようになったのはスタジオGのディストリビューターがリコルディからチェトラに移ってからだった。なお、ドイツ盤は「禿山の一夜」のタイトルでジャケ違いでPanから出ており、一曲カットされ代わりにイタリアで発売されたシングル「禿山の一夜」が入っていて、日本盤は全曲＋「禿山」という構成になっている。74年にはジェノヴァのアリキオーネ劇場でのライヴ盤「テンピ・ディスパリ」を出したがその後しばらく活動が途絶えてしまった。その間に解散したイビスと除々に和解が進み、ニコとジャンニが復帰し、元ヌオヴァ・イデアのリッキー・ベローニが入り、再びバカロフとセルジオ・バルドッティを迎え76年に「コンチェルト・グロッソII」をリリース。一曲だけジルベール・ベコーの曲が入っている。このアルバム発表に合わせたコンサートを収めたライヴ盤が用意されたが音質面での問題で3年後の79年にようやく発表された。この時期はスタジオGも傾きかけ、会社立直しのために無理に発表された感が強く、ニュートロルスもWEAに移籍している。メンバーも後にソロとして独立することとなるジョルジオ・ウーザイを加えた6人編成で「アルデバラン」「ニュートロルス」の2枚をリリースしている。81年になると2人のジョルジオが脱退し、古巣チェトラに舞い戻り「コンチェルト・グロッソIII」の布石とも言うべき「F.S」を出す。ベーシスト不在のた



めにニコがベースを弾いている。この頃から次第に彼らはポップ化していき、カンタウトーレの連中ともつき合っていくようになる。82年にはドゥルピのアルバムに全面参加、他にもオルネラ・ヴァノーニ，ミーナ等数多くの歌手のアルバムに名を連ねている。翌83年には「America O.K.」というラディウスが激怒しそうなタイトルでアルバムを発表。詩は全曲ルチオ・バティスティとのコンビを解消し、ジャンニ・ベッラと組んでいたモゴールが担当。またベースは3人のゲストが入れ替わりでレコーディング参加をしている。またトロルスと並行してヴィットリオはCASCOという名のバンドを結成し、12インチ・シングルを出している。

これ以後、トロルスは完全なポップ・バンドと化し、かつての面影は全くといっていいほど無く、本誌の読者の興味をそそるような話もないし、第一グロッソIIIを期待している愚かな読者は一人も居ないだろうとの勝手な推測によりペンを置かせてもらう。

いわねあつみ

FORMULA 3

IL VOLO



ジミ・ヘンドリックス、クリーム、バニラ・ファッジ、ドアーズといったアート・ロック、ニュー・ロックと呼ばれていた音楽が、ここイタリアでも強い影響力を与えるようになり、この国の若者たちの中からも新しい音楽を作り出そうとたくさんのグループが生れて行く。フォルムラ・トレもその中のひとつにすぎなかったが、ルチオ・バティスティの強力の援助のおかげで、恵まれたスタートをきることができた。しかも、人々を印象づけるには十分なギター、オルガン、ドラム、そして、ドラマーがリード・ヴォーカルも取るというイタリア国内ではもちろん、本場アメリカ、イギリスでさえ数が少ない、変則的な編成も商業的成功を求めての結果と考えるのもあながち的はずれではないだろう。

結成１年後、バティスティらの手によって設立したヌメロ・ウーノの専属第１号として、69年秋記念すべきデビュー・シングル“Questo Folle Sentimento”を発表、モゴール作詞（全部の詞を手がけている）バティスティの作曲、プロデュースによるものでヴォーカルはトニー・チッコが担当し、ところどころラディウスの独特のひきづるようなギターがすでに聴ける。B面“Avevo Una Bambola”は外国のカバーもので、ラディウスが歌っている。いろいろな意味で話題に事欠かないこのシングルはヒットし、デビュー・アルバムの製作に取りかかる。70年２月に発表された“Dies Irae”は当時の水準を越えた演奏を聴くことができ、特に３人の合作であるＬＰタイトル曲は、本人たちが何を意識していたのか、プログレシッヴ・ロックと呼んでもおかしくないサウンドを作り出している。５月にはLPからカットされたバティスティ作曲“Sole Giallo Sole Nero”、ヌメロ・ウーノのもう１人の生みの親サンドロ・コロンビーニ作曲による“Se Non E'Amare Cos'e'”を発売する。両面ともチッコのヴォーカルで、後に数々の名盤を作り上げる名プロデューサーの手になるB面が今までの彼らにない静かで美しい面を引き出している。10月にはさすがバティスティと思わせるヒット性に富んだチッコが歌う“Io Ritorno Solo”，すでに作曲家としても知られていたマリオ・ラヴェッツィ作、ラディウスのヴォーカルの“Nananano”を発表する。

翌71年２月、両面ＬＰ未収のため、彼らのシングルの中でも一番存在価値が高い“La Folle Corsa PartI,Part II”を出す。C.Donidaという人の作曲によるもので、Part Iはチッコのヴォーカル，B面のパートIIは彼らの派手な演奏を聴けるインストでライヴ録音というファンにとってはまことに貴重な１枚である。彼らの最大のヒットとなったバティスティ作，チッコのヴォーカルによる“Epper Mi Son Scordato Dite”，“Nessuno Nessuno”を５月に発表し、彼らの人気も決定的なものになって行く。９月には、全曲バティスティ作曲の 2nd LP「Formula 3」を発表し、その後、レコードに関しては８ケ月沈黙してしまう。そうこの年10月にシングル、翌年１月にＬＰとＰＦＭが衝撃的なデビューを遂げるのである。それがトレのメンバーたちにどのくらい刺激を与えたかはもう語る必要もないだろう。

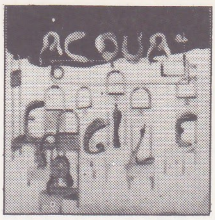
新生フォルムラ・トレとして、バティスティの手による２曲“Sognando E Risognando”“Storia Di Un Uomo E Una Donna”を72年５月発表する。ともに、彼らの代表作のひとつといえるこの名曲、今までの彼らにはない緊張感と美しさに満ちている。ラディウスのヴォーカルもこのＢ面で花開いたようだ。今までジャケットにメンバー写真を使用していたのに対して、これより、象徴的なものに変って行く。そして、９月には演奏の充実を計った 3rdLP“Sognando E Risognando”それにラディウスのソロ・アルバムを発表する。ここでは評論家からも支持を得たというラディウスのソロについて簡単に触れてみよう。ディメトリオ・ストラトス，ヴィンチェ・テンペラ，ジャンニ・ダラリオ等総勢15名が参加したジャム・セッション・アルバムで、ブルース・ロック，ジャズ・ロック的な内容を持っている。もちろん、主役はラディウスのギターである。この時期になぜ作ったのかと疑問に感じないわけにはいかないが、ラディウスが多くのものを吸収するためにと考えたい。

シングル・チャートに別れを告げた彼らは１年振りのシングルとして73年５月には両面オリジナル曲を発表する。A面チッコの自作、ヴォーカルの“La Ciliegia Non E' Di Plastica”，　B面はロレンツィ作曲、ラディウスのヴォーカル“Cara Giovanna”。そして、６月には最終アルバム“La Grande Casa”，９月にはＬＰからのカット、ラディウス初のシングルのＡ面となった“Rapsodia Di Radius”，ロレンツィ作曲、同じくラディウスのヴォーカル“Bambina Sbagliata”を発表し、次第にラディウスのしめる役割りは大きくなりグループの解散を招くことになってしまうのである。イル・ヴォーロについては、彼ら（３人以上）が参加したレコードを参考までに上げさせていただき終りにしたい。

ファウスト・レアーリの“Amore Dolce,Amore Amaro,Amore Mio”（75年）は当り前として、ヴォーロ・サウンドの片鱗に触れることができるレコードとして、ラヴェッツィの恋人でもあったロレダーナ・ベルテの“Normale O super”('76)，といってもメンバー全員が参加しているがどうか定かではない。マルチェラのライヴ“L'anina Del Matti”(75年)には全員参加して演奏だけの部分にはそれらしきところを聴きとることができる。マルチェラとしては，ラヴェッツィ，テンペラが参加した“Bella”(76年)の方が良い出来。バティスティのレコードに加わっているのは意外と少なく，ヴォーロ結成以前の“Il Mio Canto Libero”(72年)に、ダラリオ，ラヴェッツィ，ラディウス，ロレンツィ，そしてチッコの名を見つけることができる。“Lucio Battisti,La Batteria,Il Contra－basso, Eccetera”(76年)では，ラディウス，ロレンツィ，ダラリオ，ボブ・カレロの４人が１曲だけバックを担当している。ヌメロ・ウノからのBruno LauziのＬＰにもメンバーのほとんどが参加していた。しかし、内容はただの歌もの。マルチェラのお兄さん，ジャンニ・ベラの“…Io Canto E Tu”（「僕は歌う、そして君は…」）はダラリオ，ラヴェッツィ，テンペラが顔を連らね、前作にはメンバー・クレジットがないため参加メンバーは不明だが、やはり何人かは協力していたにちがいない。何故これ程、個性豊かな６人がバック・バンド，セッションの仕事をやり出したのか。そのエネルギーでせめてもう１枚ぐらいはレコードを作ってほしかったと考えるのは私だけではあるまい。



吉瀬孝行

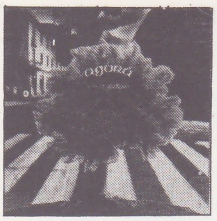


ACQUA FRAGILE
same title

Numero Uno　DZSLN 55656 廃　キング　K22P 113 廃　1973年

A	B
MORNING COMES	SONG FROM A PICTURE
COMIC STRIPS	EDUCATION STORY
SCIENCE FICTION SUITE	GOING OUT
	THREE HANDS MAN

P.F.M.の初プロデュース・グループとして世に出たアクア・フラジーレは、ブリティッシュ・ロック、とりわけジェネシス、ジェントル・ジャイアントの強い影響下にあった。実際、曲によってはオリジナリティの欠如を認めざるを得ない部分もあるが、溢れんばかりの躍動美と人間味に満ちたその演奏は十分に魅力的だ。また、清涼感溢れるコーラス・サウンドは、多くのイタリアン・ロックの中にあって異彩を放っているといえよう。彼らは、この1stアルバム発表の翌74年、ディスキ・リコルディに移籍して2ndアルバム「Mass-Media Stars」を発表。よりインターナショナルな可能性を提示していたが、翌75年にVo.のベルナルドが兄貴格のP.F.M.に加入したことにより、その短かい歴史は幕を閉じたのである。（城）



AGORA
Live In Montreux

Atlantic　T 50171 廃　W.パイオニア　P-10399A 廃　1975年

A	B
PENETRAZIONE	SERRA S
SERRA S	QUIRICO PART 2
QUIRICO PART 1	ACQUA CELESTE
	L'ORTO DI OUIDIO

75年7月7日に行われたモントルー・ジャズ・フェスティヴァルでデビュー。その時のライヴをそのままファースト・アルバムに収めた。グループ名のアゴラとは古代ギリシャの自由と民主主義への「唱和と参加」を理想とする民衆の広場の事。メンバーは全員ミュージカル等で仕事をしていたスタジオ・ミュージシャンの集まり。ジャケットに「ウェザー・リポートにベーシックな影響を受けたエレクトリック・ジャズ」というバンドのインフォメーションが載っている。翌年に若干のメンバー・チェンジを行い「Agora 2」(Atlantic：T-50324) を発表するがその後解散してしまった様だ。メンバーは G.B.D.Kyd.Sax. の5人でセカンドはもう一人サックスとパーカッションが加わっている。（い）



ALLUMINOGENI
Scolopendra

FONIT CETRA LPQ-09065 '72 廃

PATRIZIO ALLUMINIO-VO. ORG. P. KBD.
DANIELE OSTORERO-DS. TIMPANI
ENRICO CAGLIERO-G. B.

Patrizio Alluminio率いる3人組アルミノジェニは、72年にフォニット―LPQより唯一のアルバムを発表している。キーボードトリオのスタイルはトリップと同じであるが、若干ボルテージは落ちる。サントラを含め5枚程出ているシングルはいずれもポップな音作りがなされている。これが彼ら本来のサウンドとも言えようが、本作では幾分ポップな要素を生かしながらもパイプオルガンまで導入した典型的なキーボードロックが聴かれ彼らの作としてはむしろ異端的とも言えよう。ただ、時として本来の持ち味とプログレ的要素がうまくマッチしていない部分も見受けられ、完成度自体は今一つ。が、まとまりは良い方で、泥臭さの中にも味わいがあり、コレクターからは割と受けが良い作品。（江）



ALPHATAURUS
same title

MAGMA　MAGL 18001 廃　キング　K22P-328 廃　1973年

A	B
PECCATO D'ORGOGLIO	LA MENTE VOLA
DOPO L'URAGANO	OMBRA MUTA
CROMA	

ジェノバを本拠とするストゥディオGによって設立されたマグマ・レーベル。アルファタウラスはその第一弾としてストゥディオGのプロデュースの下にリリースされた。メンバーは以下の通り。ピエトロ・ペッレグリーニ（キーボード）、グイド・ヴァッセルマン（ギター）、ジョルジョ・サンタンドレア（ドラムス）、アルフォンソ・オリーヴァ（ベース）、ミケーレ・バヴァロ（ヴォーカル）。スタイルとしてはさほど新しいものではなく、ヘヴィーで荒けずりなプログレッシヴ・ロックと言える。ただその荒けずりさが不思議な魅力をかもしだしているのも事実で、めずらしさも手伝って一時はかなりなプレミアムがつけられていたようだ。オリジナルは3面開きのジャケットである。（山）



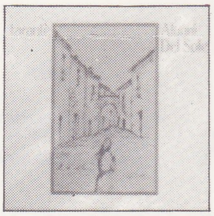
ALUNNI DEL SOLE
Dove Era Lei A Quell'Ora

PRODUTTORIASSOCIATI：PA/LP-38 '72 廃

A	B
DOVE ERA LEI A QUELL'ORA	UN RICORDO
IL PAESE DEI CORALLI	COSA VOGLIO
LA MIA INNOCENZA	FANTASIA
VENTO AZZURRO, L'ACQUA VERDE DEL PORTO OMBRE DI LUCI	
COLLANE DI CONCHIGLIE	

PAOLO MORELLI - VO ETC.

「太陽の息子達」と名乗る彼らの記念すべき 1st アルバム。60年代後半にシングルデビュー、本作リリース後はほぼ1年に1枚の割でアルバムを発表、10年以上を経た今もその輝きを失うことはない。イタリア独得の哀感、語り掛ける様なヴォーカル、溢れんばかりのストリングス、リリカルなピアノの響き…どれ一つを取っても叙情派サウンドの愛好者をセンチメンタルな気分にさせるのに十分すぎる位だ。さすがに最近はポップな色合いを帯びて来てしまったが、それでも10枚以上の作品に共通の物哀しさが秘められており、時代を超越した美しさがそこにはある。そんなみずみずしさを常に保って行くことによって彼らのアルバムデビューの年は〝古き良き時代〟の一言で片付けられてしまう様な、単なる安っぽい過去にはならなかった。（江）



ALUNNI DEL SOLE
Tarantè

RICORDI SMRL 6248 '79 廃

A	B
BELL'AMERICA	GIOCATTOLO
INNAMORARSI	CARME'
TUTTO COME UN ANNO FA'	BIANCANEVE NON TORNA
TARANTE'	CANZONE 'INT' 'O SUONNO
	UNA FOGLIA BRUCIATA

60年代の中期から長い活動を続けるアルンニ・デル・ソーレである。パオロ・モレルリを中心としたこのグループのサウンドは、最初期からほとんど変化しておらず、時代時代で身にまとう服が変わる程の変化で、イタリアの愛を世界中に歌いかけている。本アルバムは79年にリコルディ・レーベルより発表されたもの。従来通り、ジャン・ピエロ・レベルベリのオーケストラ・アレンジを加えて、甘い哀愁を秘めた歌声を聴かせてくれる。初期のものに比べると、アレンジがシンプルになっているが、やはり歌いまわしは彼等のものである。ジャケットはモレルリのペンシル画。聴いていると、このレコードに出会ったイタリア中部の坂のある小さな町アレッツォの石だたみを想い出す。（山）



ALUSA FALLAX
Intorno Alla Mia Cattiva Educazione

Fonit-Cetra　　KING K25P-428　廃　1974年
LPQ-09082　廃

A: SOLILOQUID
NON FATEMI CASO
INTORNO ALLA MIA CATTIVA EDUCAZIONE
FUORI DI ME
DENTRO DI ME
RIFLESSIONE AL TRAMONTO
IL PESO DELLE TRADIZIONI

B: PER CHÈ HO VENDUTO IL MIO SANGUE
PER INIZIARE UNA VITA
E' OGGI, E' COSI'
POCOQUEL CHE CONOSCO
CIO' CHÈ NASCE CON ME
SPLENDITA SENSAZIONE
CARTA CARBONE

74年にフォニット・チェトラから唯一のアルバムをリリースしたアルサ・ファラックスは、マニアの間でさえその名をほとんど知られていない存在であろう。タイトルは邦訳すると「私の奇妙な教育法について」という意味で、全面を通じて短い曲が13曲もクレジットされていて、その全てがトータルな相関関係を成している。サウンドはプログレッシヴ・ロックとしては極めてオーソドクスなスタイルを持ち、地味な印象さえ受けるのであるが、所々にユーモアをきかせた叙情的な展開はかなり魅力的といえるだろう。聴く度に彼等のサウンドにはまり込んでしまうような不思議な魅力だ。　（山）



ANALOGY
same title

VENTOTTO PRVLP 2204　'72　廃

JUTTA NIENHAUS-VO.
H.J."MOPS" NIENHAUS-DS
WOLFGANG SCHOENE-B.
MARTIN THURN-G.FL. BONGO
NICOLA PANKOFF-KBD.

PRO: ALDO PAGANI

アナロジーは女性１人を含む５人組で、72年に超マイナー・レーベルのVENTOTTOから唯一のアルバムを発表している。クレジットされたメンバー名を見る限りイタリア人のグループではないようだ。音的にもさして取り上げるべきものは無く、60年代の英国を感じさせるオルガンが目立つ程度。ややポップなパートも見受けられるが根本的にイタリアン・ロックの本質からは外れた音で、演奏技術も若干劣る。その名のみが知られていた頃はコレクター達も騒いでいたが、実際に音を聴いた時点では失望した人もいよう。なお薄紙製のジャケにはメンバーのヌード写真、中には足跡をデザインした大型ポスターが入っている。結局、プログレファンにとっては単なる〝資料的価値〟といったところか。　（江）

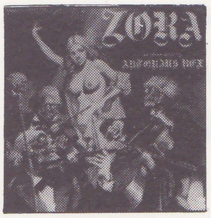


ANONIMA SOUND LTD.
Red Tape Machine

ARCOBALENO: ARCLP 000111　'72 廃

PRO: VELIO GUALAZZI

60年代後半にCBSからAnonima Sound 名義のシングルを何枚か発表、Anonima Sound LTD. と改名して72年に本作をリリースしている。ドイツロックを思わせる暗い幕明けだが、間もなくやや古めかしい感じのブリティッシュ風サウンドが支配的となり、結局これが最後まで続く。60年代の英国志向のサウンドはアナロジーなどと共通だがオルガンは余り多用せず、アコースティックギターを重点的に使っているのが特徴。ブルージーな曲も聴かれる一方で、ピンク・フロイドなんかが時々やるフォークタッチの曲を思わせる部分も。演奏技術自体はそれ程でもないが、アナロジーに比べれば録音状態は良い方。なお、レーベルのアルコバレノはリコルディの傘下である。　（江）



ANTONIUS REX
Zora

TICKLE: TLPS 5013　'77 廃

DORIS "ZORA" NORTON-KBD
ALBERT GOODMAN-DS
ANTONIO BARTOCCETI-G, VO

ヤクラ解散後、リーダー格だったAntonio Bartoccetti は英国人と思われる２人と共にアントニウス・レックスを結成、77年に1st アルバム"Zora"を発表した。ジャケットデザインにはヤクラの面影が残るが、よりロック的なアヴァンギャルド・ミュージックを目指していると思われ、シリアスな部分はすっかり影を潜めてしまっている。ヤクラの曲も２曲、焼き直して演っているが若干迫力は不足している。ハープシコードは使っているものの、派手なギターやドラムスの導入など、より力強い音を目指しており、その分キーボードの薄さが目立ってしまうためである。ヤクラの幻影を振り払ってから針を落とすべきであろう。なお、本作は翌78年に未収録の１曲を加え、ジャケ違いながら再発されている。　（江）



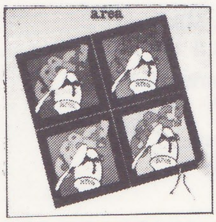
APOTEOSI
same title

Said Record　　1975年
MAP145 SI　廃

A: EMBRION
PRIMA REALTA'
FRAMMENTARIA
RIVOLTA

B: IL GRANDE DISUMANO
ORATORIO (CORALE)
ATTESA
DIMENSIONE DA SOGNO
APOTEOSI

５人のメンバーから成るアポテオジは、75年にこの素晴らしいアルバムを発表した知られざるグループである。静けさを誘なうピアノ、自由自在に繰られるシンセサイザー、伸びやかなギター、強力なリズム・セクション、そして音の波間に現われては花を添える美しい女性ボーカル。これらが彼等の魅力であるといえるだろう。ロックとクラシックのエッセンスが見事な調和を保っているこのアルバムから、彼らの求めていたものが全盛期イタリアン・ロックに見受けられるあくまでもイタリア的感性による狂おしいまでの美意識の発露であったことが伺える。決して派手ではないが極めて純粋な音楽的姿勢を感じ取れるアポテオジ。お粗末なジャケットに封じ込め闇に葬るには余りに惜しいグループである。　（鈴）



AREA
Crac !

Cramps　　1975年
CRSLP5103 廃

A: L'ELEFANTE BIANCO
LA MELA DI ODESSA
MEGALOPOLI

B: NERVI SCOPERTI
GIOLA E RIVOLUZIONE
IMPLOSION
AREA 5

アレアの３枚目のアルバムである〝クラック！〟は初期のコミュニストとしてのアレアから後期のカオス的なアレアのちょうど中間にあたる時期に発表された。時期的な点のみならず、その音楽的内容においても、彼らの一つの頂点を示すアルバムだろう。Ａ－１の流れるようなボーカルの、爆発するような感性のほとばしりは、後期のアレアの妙にカオス的でシャーマニックな色彩はなく、地中海的な力強さに満ちている。リンゴをかじる効果音が印象的なアジテート・ソングのＡ－２、そして都市の生成と崩壊を表わした象徴的なＡ－３と、息をもつかせぬ緊張の連続である。これに対してＢ面は多少緊張の糸が解けたような所もあるが、ジャズ・アルバムとしては出色の出来である。日本盤の発売を強く希望する。　（宇）



ARTI E MESTIERI
Tilt

Cramps 5205 501 廃 — W.パイオニア P-10303C 廃 — 1974年

A: GRAVITÀ 9,81
STRIPS
CORROSIONE
POSITIVO/NEGATIVO
IN CAMMINO

B: FARENHEIT
ARTICOLAZIONI
TILT

自らを「芸術家と職人」と名乗るアルティ・エ・メスティエリのデヴュー・アルバム。その内容は、その名の通り高い芸術性と確かな技術に裏打ちされた超高水準のものとなっている。緻密に計算された構築美を基本とし、ジャズの即興性をもその要素として加え、徹頭徹尾緊張感溢れる音楽を創りあげている。正しく不滅の名作といえよう。彼らは'75年に2ndアルバム「Giro Di Valzer Per Domani」を発表。ややジャズ・ロック色を強め、より研澄まされた音は、1stに劣らぬ傑作であった。が、大幅なメンバー交替後、'79年に発表された3rd「Quinto Stato」では、高い技術のみでは良い音楽は生み出せない、ということを証明する様な内容に終始し、かつての栄光を汚してしまっているのは残念でならない。（城）



CLAUDIO BAGLIONI
E Tu...

RCA: TPL1 1067 '74 廃

バリオーニの5作目。若者の愛を描いた前2作でスターダムにのし上がった彼だが、今度はシンセ奏者として日本でも良く知られるヴァンゲリスを迎えての意欲作だ。ピアノでトト・トルカーティも参加している。これまでのストリングスに代わり、ヴァンゲリスの演出によるオーケストレーション（キーボード群）を大胆に導入しているが、派手派手しいプレイや殊更構えたところも無く、典型的なラヴ・ソング・スタイルのポップスを中心に展開する。恋をささやく男女のシルエットをデザインしたジャケットは、恋愛映画かムード音楽といった体でもあるが、作品の内容を端的に表したものとも言えそうだ。なお、オリジナルは見開きジャケで、裏面に歌詞を綴ったポスターが付されている。（江）



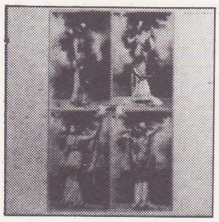
IL BALLETTO DI BRONZO
Sirio 2222

RCA PSL-10459 廃 — 1970年

A: A UN POSTO
EH EH AH AH
NEVE CALDA
MATI ASPETTERO'
MEDITAZIONE

B: GIROTONDO
INCANTESIMO
TI RISVEGLIERAI CON ME
MISSIONE
SIRIO 2222

イル・バレット・ディ・ブロンゾの幻のファースト・アルバム。メンバーのクレジットがないのでよくわからないのだが、ギター、ドラム、ベース、ボーカルの4人編成で、この時点ではキーボードは参加していない。内容のほうは純粋なハード・ロックであるが、そうかといって決して出来は悪くはない。年代を感じさせるものの、まとまりがとてもよい。又、一曲だけ出玉の出来の曲があり、ここではチェンバロ、ヴァイオリン、ビオラ、チェロを大胆にフューチャーしてイタリアンバロックの深遠な世界とバラードのリリカルな融合を聴くことができる。この後彼らはセカンド、「YS」を発表後解散、又、キーボードのジャンニ・レオーネはEMIよりLEO NERO/VEROというアルバムをリリースした。（山）



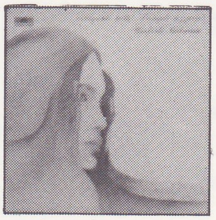
IL BALLETTO DI BRONZO
YS

Polydor 2448 003 廃 — ポリドール 23MM 0149 — 1972年

A: INTRODUZIONE
PRIMO INCONTRO

B: SECONDO INCONTRO
TERZO INCONTRO
EPILOGO

遅すぎた日本発売によって、ようやく多くの人々の知る所となったイル・バレット・ディ・ブロンゾの2ndアルバム「イプシロン・エッセ」は、信じ難いまでの重厚さと神秘性に満ちた圧倒的名作だ。'72年というイタリアン・ロック全盛時に生まれ出た名作群の中にあっても、この作品の存在感は絶大なものであると言えよう。ギター、キーボード、ベース、ドラムの4人のメンバーは、4人が4人とも全編、これでもか、これでもかとばかりに攻撃的な演奏を繰り広げ、聴き手にわずかな息をつく間さえ与えない。アルバムは5つのパートから成るトータルなものだが、我々の予想を次々に覆しながら展開する曲作りは見事としか言い様がなく、十年以上の月日を経た現在も斬新さに満ち満ちているのである。（城）



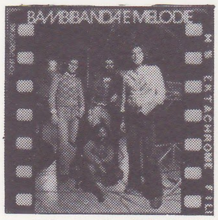
UMBERTO BALSAMO
Malgrado Tutto...L'Angelo Azzurro

POLYDOR 2448 054 A '77 廃

A: MALGRADO TUTTO
L'ANGELO AZZURRO
COSA FAREI
MESSICANA
SEI TU

B: STUPENDO
TIGUARDAI, TI SFIORAI
ERA QUI
UNA ROSA PROFUMATA
UN'IMMAGINE, UN'IDEA

42年、シシリーはカッターニャ生まれのカンタウトーレ。69年頃から作曲家として知られ、後に自らもカンタウトーレとしてデビュウ。75年にサンヴァンサン夏のフェスティヴァル入賞作品〝ナタリー〟が有名。本アルバムは77年の作品で、ナタリーと較べると、都会的で、感情の起伏がなだらかになり、悲しみを赤裸々に悲しみとして表現してしまわない昇華された人生観がしっとりとしたストリングスをバックに表現される好作品である。僕個人としてはこの作品以降の彼のスタイルを好む。以後一年に一枚程の割合でアルバムをリリースしていたが、最近は新作の発表の噂を聞かない。日本でもキングより「愛を置き去りにして」がリリースされた。このアルバムも彼の持ち味を生かすことに成功した素晴らしい作品である。この作品に何も感じない方にはバルサモの良さはわかるまい。（山）

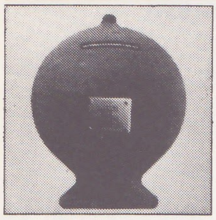


BAMBIBANDA E MELODIE
same title

FONIT CETRA LPQ 09085 '74 廃

BAMBI FOSSATI-G. VO. MARACAS
MAURIZIO CASSINELLI-DS. VO. PERC. VIB.
RAMASANDIRAN SOMSUNDARAM- PERC.
ROBERTO RICCI-B. VO.

ガリバルディ解散後の74年、ギタリストのバンビ・フォッサーティは前ガリバルディのドラマー、M.カッシネッリ、元ニュー・トロルスのパーカッショニスト、R.ソムスンダラム、それにベーシストを加え本グループを結成、1枚のアルバムを発表した。ガリバルディ時代あれ程ジミヘン風サウンドに傾倒したバンビだが、その面影は全く無い。力強さがまるで失われてしまっているのだ。クレジットによるとパーカッションが2人、バンビ自らもマラカスを手にするなど、どちらかと言えばパーカッシヴな面に重きを置いている様で、全面を通じひずみのある荒々しいギタープレイとは無縁である。明るくゆったりとした曲作りが主流で、トロピカルな印象を与える。（江）



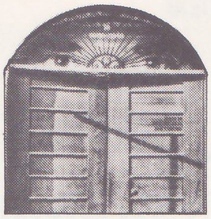
BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
same title

Ricordi SMRL 6094 廃 キング GXH 2022 廃 1972年

A: IN VOLO
R.I.P.
PASSAGGIO
METAMORFOSI

B: IL GIARDINO DEL MAGO
TRACCIA

ローマ出身のベテラン・グループ、バンコの輝ける1stアルバム。後の2nd、3rd、そして6th「Come In Un'Ultima Cena」と共に、イタリアン・ロック史上、決して忘れることのできない名盤中の名盤といえよう。表面的にはラフな感じを受け、そのためか低い評価を下す方もおられる様だが、むしろダイナミックな面が強調されたその演奏は、彼らの本質である繊細かつ優美な感覚とあいまって、非常にみずみずしい印象を与えてくれる。そうした点においてこの1stアルバムは、彼らの全作品中でも最も魅力溢れる一枚だといえよう。なお、このアルバムのオリジナル・ジャケは、レコードサイズの壺貯金箱型（もちろん平面）で、ジャケ上部の穴から、なにやらオマケが出てくるというかなり変態的な代物である。（城）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Io Sono Nato Libero

Dischi Ricordi SMRL 6123 廃 キング GXF-2054 廃 1973年

A: CANTO NOMADE PER UN PRIGIONIERO POLITICO
NON MI ROMPETE

B: LA CITTA' SOTTILE
DOPO...NIENTE E' PIU' LO STESSO
TRACCIA II

バンコ・デル・ムトゥオ・ソッコルソのサード・アルバム。彼等の結成はジェネシスやジェントル・ジャイアントといった英国のバンドに触発されての事ではあったが、ノチェンツィ兄弟のキーボード、フランチェスコ・ディ・ジャコモの唱法に代表されるまごうかたなき民族性はデビュー当初より第一級の独自性を示していた。熱狂と悲愴とが入り混じり眩を禁じ得ない前作「DARWIN!」に比べ、このサードは整然とした印象を与える。A面で聴かれるアコースティック・ギターの織り成す牧歌的な調べは新境地と言える。しかし初期バンコの魅力——前衛精神と気高い伝統美との見事な共存はここでも失なわれていない。相変わらずの演奏水準の高さには舌を巻く。（古）

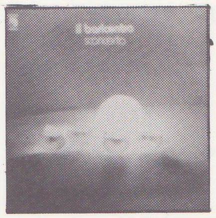


J.B.BANFI
Glaxy My Dear

RED VPA 123 '78 廃

J.B.BANFI-SYN. KBD.
PRO: A. BRIVIO, S. VESCHI

元ビリエット・ペル・インフェルノのキーボードプレイヤー、バフォ・バンフィは最近ではベテラン歌手ミーナのバックを務めるなど、スタジオミュージシャンとして活躍中だ。本作はビリエット解散以来4年ぶりに発表した1stソロアルバムである。しかし、昔のシンフォニックな面影は既に無い。裏ジャケにショルツの言葉が記してあることからも分かるように、完全に彼を意識したエレクトロニクス作品となっている。モノトーンの寂しさは無く、割と活発なシンセ音が飛び交う。レベルとしてはヴァルター・クリスチャン・ローテのソロあたりと同程度で、部分的には晩期のエルドンを思わせるパートも。なお、この後ドイツのICレーベルから2枚の作品を出すが、やはりシンフォニック色は薄い。（江）



IL BARICENTRO
Sconcerto

EMI 3C 064-18152 '76 廃

A: SCONCERTO
LIDO BIANCO
MERIDIONI E PARALLELI

B: AFKA
PIETRE DI LUNA
DELLA VENIS
COMUNCHE...(TODO MODO)

RCAレーベルの数あるグループ達の中でもひときわ異彩を放っていたテクニカル・シンフォニック・グループFesta Mobile。彼等はおしくも一枚のアルバムのみで解散してしまうが、実は若干のメンバー・チェンジの末にバリチェントロ（重心の意味）と改名し、2枚のアルバムをEMIに録音した。サウンド・イメージはシンフォニックからジャズ・ロックへと移行したが、あいかわらずアレンジとソロ・プレイの均性の取れた高水準な演奏を繰り広げてくれている。2枚とも良いが、どちらかを取れといわれればこのファーストであろう。ダブル・キーボード・スタイルの4人編成で、イタリアのこのカテゴリーの作品としては、アゴーラ、エトナ、ノヴァ、アルティ等と並び称しうる傑作アルバムである。（山）



LUCIANO BASSO
Voci

Ariston ARLP/12288 廃 1976年

A: PRELUDIO
PROMENADE I°
PROMENADE II°

B: VOCI
ECHO

ルチアーノ・バッソはシリアス・ミュージック畑の素養を生かして、麗美なサウンドを創り出すアーティストである。76年にリリースされたこのファースト・アルバム「ボーチ」では、バッソの奏でるピアノ、メロトロン、チェンバロ、オルガン等を中心に、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、ギター等のリード楽器を巧みにからませて見事な叙情美を創り出すことに成功している。次いで78年にセカンド・アルバム「COGLI IL GIORNO」(ARISTON AR/LP/12333)、80年にサード・アルバム「LUCIANO BASSO」(AR/LP/12374)をリリース。セカンドは、ソプラノ・ヴォイスを加え、より完成されたアンサンブルを聴かせてくれる。サードになると、現代音楽的な要素が強くなっていて、ロック畑の人間には多少、難解な印象を与えるかもしれない。（山）



FRANCO BATTIATO
Fetus

Bla...Bla BBXL-1001 廃 1972年

A: FETUS
UNA CELLULA
CARIOCINESI
ENERGIA
FENOMENOLOGIA

B: MECCANICA
ANAFASE
MUTAZIONE

鬼才バッティアートの記念すべき第1作。タイトルも「胎児—新世界への回帰」と以降の変容を予想させる。密度の高い内容を難解めかさずにアピールするカリスマティックな才能は計り知れない。続いて発表されたPollutionと共にこの意味で彼の本領が伺われる。ヴァンゲリスやJ・M・ジャールの耽美性にクリティカルなアイロニーを加えながら観念主義に陥らないのは懐疑的で真剣な音楽家であるからである。しかも彼の詩人肌がユーモアを理解する性のものなので硬質な死物にならない。現在大ヒット中の作品群はポップ・ミュージック全盛時代へのアンチテーゼであり、なおかつ作品として魅力的な輝きを放っているという不可思議なものだ。近作のL'arca di Noèはフェアライトを駆使して製作されている。（岡）



LUCIO BATTISTI
Umanamente Uomo : Il Sogno

Numero Uno　　RCA　　1972年
ZSLN 55 060 廃　　6194 廃

A: I GIARDINI DI MARZO
INNOCENTI EVASIONI
...E PENSO A TE
UMANAMENTE UOMO: IL SOGNO

B: COMUNQUE BELLA
IL LEONE E LA GALLINA
SOGNANDO E RISOGNANDO
IL FUOCO

イタリアン・ロックの基盤を作ったルチオ・バッティスティは作詞家、モゴールとともにヌメロ・ウーノを設立し、フォルムラ・トレ、P.F.M.をデビューさせたことは既知のところであろう。彼はリコルディよりオムニバスを除く３枚のアルバムを発表しており、本作は自らのプロデュースによる通算、４作目に当たるとともにヌメロ・ウーノにおける彼の初作でもある。トニー・チッコ、マリオ・ラヴェッツィ等をバックに彼の歌声はリコルディ時代に比べ、よりリラックスしており、彼の持ち味が確実にイタリアという土地に根付きながらオリジナリティーに満ちた形で開花している。彼とモゴールのペンによるＢ－３、「ソニャンド・エ・リソニャンド」はフォルムラ・トレが３作目で取り上げた曲と同曲である。（松）



LUCIO BATTISTI
Anima Latina

Numero Uno　　RCA-6283 廃　　1974年
DZSLN 55675 廃

A: ABBRACCIALA ABBRACCIALI ABBRACCIATI
DUE MONDI
ANONIMO
GLI UOMINI CELESTI

B: GLI UOMINI CELESTI
DUE MONDI
ANIMA LATINA
IL SALAME
LA NUOVA AMERICA
MACCHINA DEL TEMPO
SEPARAZIONE NATURALE

現在も一線で活躍するルチオ・バッティスティのこの作品はヌメロ・ウーノ移籍後、４作目、オムニバスを除く通算７枚目に当たる。本作までのアルバムに、しばしばフォルムラ・トレのメンバーが起用されたように、ここでもアルベルト・ラディウスとマリオ・ラヴェッツィが参加している。前作は彼がブラジルから戻っての制作であり、それを反映してか部分的にサンバのリズムやパーカッションが前面に出ていた。本作にもその傾向は認められ、やや複雑な音作りであるが、彼なりに見事に処理されている。これ以後、インターナショナルな方向性を前面に打ち出し、現在までに13枚ものアルバムを発表している。作詞はモゴール、バッティスティはヴォーカル、ギターのほかピアノとアレンジも手懸けている。（松）



LOREDANA BERTÉ
Streaking

CGD : 69073 '74 廃

LOREDANA BERTE - VO
PRO : ENRICO RICCARDI

とても美しいカヴァーデザインが印象的なロレダナ・ベルテの 1st アルバム。アクア・フラジーレの 1st より一回り大きい６面開きのジャケの内部はタイトルからも想像がつく様に彼女の全裸写真で綴られており、話題性も十分と言える。ただ、薄手のジャケのため傷み易いのが難点。ジャケのイメージとは裏腹に、音の方は軽快なノリで押す割とオーソドックスなロック調のナンバーが目立つが、彼女の持ち味であるハスキーヴォイスが十分に生かされた展開で、元デリリウムのイヴァノ・フォッサーティ参加の下、現代風の音作りで迫る近作とは異なる素朴な味わいが感じられる。2nd "Normale O Super" ではロック色が薄まり、歌物としての体裁もかなり整ってくる。（江）



BIGLIETTO PER L'INFERNO
Same title

Trident　　1974年
TRI 1005 廃

A: ANGIA
CONFESSIONE
UNA STRANA FEGINA

B: IL NEVARE
LAMICO SUICIDA

トリデントの５番、ビリエット・ペル・リンフェルノは、先に日本発売されたムゼオ・ローゼンバッハやイル・バレット・ディ・ブロンゾ、そして同じトリデントのセミラミスなどと並ぶ、イタリアン・ヘヴィー・シンフォニック・ロックの極致をゆく名作だ。決して器用とはいえないが終始迫力一杯のギター、エフェクト処理によって多彩な音色を聞かせるキーボード、そしてある時はたたみかける様に、またある時は舞うように吹かれるフルートなど、どれもが素晴らしい。なお、キーボードのバフオ・バンフィは、後にレッド・レーベルから１枚、またドイツのＩＣレーベルから２枚のソロ・アルバムを発表しているが、内容はシュルツェ風、あるいはポップで、いずれもこのビリエットの影を見ることは全くできない。（城）



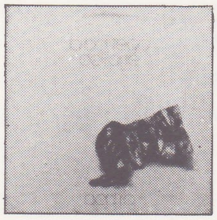
BLOCCO MENTALE
Poa

Titania　　1973年
BM 2301 廃

A: CAPITA
ARIA E MELE
IMPRESSIONI
IO E ME

B: LA NUOVA FORZA
RITORNO
VERDE

このブロッコ・メンターレはDuriumレーベルの販売傘下にあるTitaniaレーベルから本作品「ポア」を発表した。おそらくこれが唯一のアルバムと思われる。メンバーはG., Key., B., Dr., そして Flute & Sax の５人で、Vo.は主にベーシストと管楽器奏者の２人が担当している。表ジャケの中央に見える花の部分はくり抜かれていて、中ジャケでは白い服をまとった５人のメンバーがその花のまわりで手を差しのべて立っている。音の方もそんな雰囲気を反映して、とても優しく暖か味のあるものになっている。演奏スタイルは随所にメロトロン、ピアノ、フルートなどをちりばめた、当時のイタリアのごく平均的なもので、斬新さなど少しもないが、それでもすがすがしさを伴ったこの美しさには、心魅かれるものがある。（城）



LA BOTTEGA DELL'ARTE
Dentro

EMI　　1977年
3C 064-18248 廃

A: DENTRO
IL SUO SGUARDO
LA MALINCONIA
LA MIA POESIA
CHE DOLCE LEI
A RENEE
CANZONE DEL SOLE D'INVERNO

B: QUANDO UNA DONNA
INCONTRO
MUSICANTE
QUESTA SERA E PER NOI
L'ULTIMA STORIA

ボッテーガ・デラルテのセカンドアルバム。イタリアのいわゆる「ラヴ・ロック・グループ」、例えばイル・ジアルディーノ・デイ・センプリーチやジー・メン等のカテゴリーに属するグループであるが、極めて質の高い演奏を聴かせてくれ、又、メロディーラインの美しさも特筆すべきで、ここにとり上げることになった。ピアノ、クラヴィネット、アープ、ミニ・ムーグ、ハモンド・オルガン、メロトロン等、多彩なキーボード群により厚みのある、しかもとてもイタリアらしい哀愁に満ちたサウンドを聴かせてくれる。ピエロ・カラブレーゼ、マッシモ・カラブレーゼ、ロマーノ・ムズマッラ、フェルナンド・チュッチ、アルベルト・バルトークの５人の男達により創られた。（山）



BRAINTICKET
Celestial Ocean

RCA　1973年
DLISP 34158　廃

A: EGYPTIAN KINGS
RAINBOW
ERA OF TECHNOLOGY
TO ANOTHER UNIVERS

B: THE SPACE BETWEEN
COSWIC WIND
VISIONS

「COTTONWOOD HILL」(BLPS-19019)、「PSYCHONAUT」(BI 15 156)のアルバムをドイツのベラフォン・レーベルからリリースしていたブレイン・ティケットのサード・アルバム。73年にリリースされた。本アルバムでのメンバーはジョエル・ファンドルーゲンブロック、カローレ・ムリエル、バーネイ・パルムの３人で多種のキーボードを中心にシタール、ドラム、エコーのかかったヴォイス等をちりばめたトリップ・サウンドを演奏している。しかし決してたれ流し的なものではなく、曲としてバランスよくまとめられているので極めて完成度は高い。他の２枚とは比べようもない程の名盤といえよう。メンバーはイタリア、ドイツの混合チームと思われる。尚、特大の楽譜とおぼしきポスターが付されている。　(山)



ANGELO BRANDUARDI
Alla Fiera Dell'Est

Polydor　1977年
2448 051

A: ALLA FIERA DELL'EST
LA FAVOLA DEGLI AIRONI
IL VECCHIO E LA FARFALLA
CANZONE PER SARAH
LA SERIE DEI NUMERI

B: IL DONO DEL CERVO
IL FUNERALE
L'UOMO E LA NUVOLA
SOTTO IL TIGLIO
CANZONE DEL RIMPIANTO

イタリアを代表するカンタウトーレであるアンジェロ・ブランドゥアルディは73年にデビューし、RCAより２枚、ポリドールより６枚のアルバムを本国で発表している。１作目と８作目はポール・バックマスターのアレンジだが、本作を含め殆どの作品でアレンジ他を務めているマウリツィオ・ファブリツィオの存在を抜きにブランドゥアルディを語ることはできない。地中海民族音楽を彼の感覚で処理したメルヘン的な特徴あるサウンドは、バンコのジャンニ・ノチェンツィも参加したサード・アルバムに当たる本作をはじめ、いずれの作品にも流れている。なお、ピート・シンフィールドが英訳した「ハイダウン・フェアー」は本作の英語版である。この作品はイタリア盤のみリーフレットが付けられている。　(松)



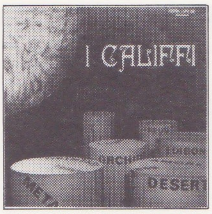
ANGELO BRANDUARDI
Cercando L'oro

MUSIZA 813 462-1　'83 廃

A: IL LIBRO
LA GIOSTRA
L'ACROBATA
PIANO PIANO
NATALE

B: CERCANDO L'ORO
L'ISORA
PROFUMO D'ARANCIO
LA VOLPE
ORA CHE IL GIORNO E FINITO

1983年にリリースされたアルバム。ポール・バックマスターを起用した前作が不評であっただけに従来通り、アレンジャーにマウリツィオ・ファブリツィオを迎えたこのアルバムの完成度の高さは嬉しく、後期の作品の中では一つの頂点を形成する作品である。彼が大々的にヨーロッパ・ツアーを行なった最後のアルバムでもある。この後、85年にリリースされたイーツの詩に曲をつけた最新作では、小編成での演奏で、ツアーも国内だけのものであった。彼のポリシーが一徹であるだけに、時代の流れの外側に位置してしまったということであろうか。今後はサウンド・トラックスを手がける方向に進むようだ。多くのカンタウトーレ達がアメリカ志向になっている今、彼のアイデンティティーは重要である。　(山)

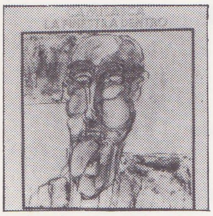


CALIFFI
Fiore Di Metallo

FONIT CETRA LPX 23　'73 廃

AMADEI VINCENZO-G. VO.
BOLDRINI FRANCO-B. SYN. VO.
CINOTTI SANDRO-ORG. P. SYN.
BOLDRINI MAURIZIO-DS. VO. PERC.

カリフィはキーボードをフィーチュアした極く標準的なロックバンドでプログレ色は薄い。Ａ面４曲、Ｂ面５曲で、割と緩やかなタッチの曲とアップテンポのハードな曲に分かれており、オルガンが余り前に出て来ない場合はギターが主導権を取っている。全体的なイメージとしてグループ自体の目指す方向性が今一つはっきりせず、中途半端な印象を与える。ただＡ４のインストではパイプオルガンまで用いた驚異的なプログレナンバーを披露、リスナーの度肝を抜く。途中ジャジーな展開を織り交ぜながら、力強いドラミングに乗ってキーボードワークで押しまくるというまさに白眉の出来。これだけのプレイが出来ることから、本気でプログレッシヴロックを志していれば傑作を残していたことだろう。　(江)



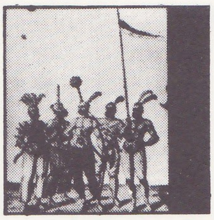
CAMISASCA
La Finestra Dentro

BLA BLA BBXL 10005　'73 廃

A: UN GALANTUOMO
HO UN GRANDE VUOTO NELLA TESTA
SCAVANDO COL BADILE

B: JOHN
UN FIUME DI LUCE
IL REGNO DELL'EDEN

今や大スターとなったフランコ・バッティアートだが、70年代には彼は自らのレーベルBLA BLAを設立し、意欲的、前衛的なポリシーを持つアーティスト達のレコードをリリースしていた。これらのグループにはカプシクム・レッド、アクチュアラ、オサージ・トリベetc.がいるが、このユリ・カミサーシャなるシンガーもBLA BLA が世に送り出した極めて個性的なソングライターである。ギターの弦をかきむしるような多少神経症的な歌声もさることながら、アナーキックなディストーション・ギターを用いたと思うと生ピアノとチェロでバックを演奏したりと革新的なセンスの良さを感じとることができるだろう。オザンナと同様イタリアの「闇のサウンド」を象徴するカミサーシャは従来のカンタウトーレとは一線を画するものである。素晴らしい。　(山)



CAMPO DI MARTE
same title

United Artists　1973年
UAS 29497　廃

A: PRIMO TEMPO
SECONDO TEMPO
TERZO TEMPO
QUARTO TEMPO

B: QUINTO TEMPO
SESTO TEMPO
SETTIMO TEMPO

カンポ・ディ・マルテとはマルス広場の意味。神話上の人物、軍神マルスの名をとったもので、実際に同名の広場もイタリアにある。本アルバムは73年にリリースされたもので、全体的にヘヴィーな内容ではあるが、単なるハード・ロックとは明らかに一線を画している。イギリス人を１人含む５人のアーティストにより演奏されているが、変拍子を使用したり、フルート、ホーン、メロトロン、ピアノ、オルガン等を随所にちりばめたりと、変化に富み、なかなかの好盤といえるのではあるまいか。筆者個人としては、ジャケットのセンスの悪さが気になるが、このジャケットだけで内容を判断してしまっては危険であるように思う。唯一のアルバムと思われる。　(山)



CANZONIERE DEL LAZIO
Spirito Bono

INTINGO ITGL 14006 '75 廃

A : BALLO IN RE (FESTA)
BALLU

B : MORTE DI PULCINELLA
SPIRITO BONO

ヨーロッパ各国には自国のトラッド・ミュージックとロックの融合を試みた数多くのアーティストがいる。イギリスのフェアポート・コンヴェンション、スティールアイ・スパン、アイルランドのサブライ・アンド・ディマンド・カーヴ、フランスのマリコルヌ等はそれらを代表するものであろう。イタリアにおいても、マウロ・パガーニの 1st ソロがその種の作品として広く知られているが、パガーニが一時在籍したカンツォーニエレ・デル・ラッツィオもその分野では長いキャリアを持つグループである。本2ndでも地中海音楽を巧みにロックに取り入れ、一部ジャズ的要素を加えて、彼ら独自のサウンドを作り出している。民族音楽色の濃いボーカル、カルロ・シリオットの素朴なバイオリンが印象的である。 (賀)



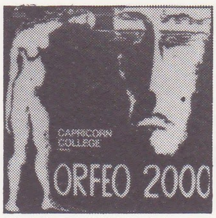
CAPITOLO 6
Frutti Per Kagua

IT ZSLT 70014 '72 廃

E. DE ANGELIS
F. DE GREGORI
L. DONATI
L. BERTI
R. BARTOLOTTI

PRO : FRANCESCO TESSANDORI

ハード・プログレッシヴ・グループ、カピトロ・セイは72年にアルバム・デビューを飾っているが、ポップス様のサウンドも得意としていた様で、同年のサンレモフェスティバルにも参加している。しかし本作では硬質的なヴォーカルとヘヴィなギターによる攻撃的なサウンドが目立つ。フルートの導入はデ・デ・リンドあたりと共通な構成だが、それ程シンプルな音ではなく、全体的に多少入り組んだ印象を与える。部分的にはプロセッションに近い所もあるが、A面終盤からB面にかけて割と哀感を帯びた展開が見られるほかは、イタリア的な感性は余り現れて来ない。むしろ、音の端々に時として暗い陰が感じられる。まず標準作と言えるが、長い曲になるとそれを支える展開力に若干乏しい嫌いがある。 (江)



CAPRICORN COLLEGE
Or.feo 2000

KANSAS LDM 17004 '72 廃

NINO ANTONIO-G. FL. VO. BONGO
PINO FERRO-G. VO.
ORESTE FERRO-B. VO.
ADAMO BIELLO-DS. PER. VO.
ALFRANCHINI GUERRINO-FL. SAX
MARIO BARIGAZZI-P. ORG. HPD.

カプリコーン・コレージェの 1st アルバム。根本的にはピアノ、フルート、サックスそれに軽やかなリズムセクションを中心に据えたイージーな音が下地である。次作や Capricorn College Brass 名義のシングルを聴けば明白だ。ただ、本作ではイタリア臭い情緒的なナンバーが6割方を占め、そこそこのサウンドが楽しめる。演奏技量、録音状態の面では今一つだが、全体的に非常に柔らかな音作りがなされ、チェンバロの導入が効果的で、クラシカルな趣をも湛えている。A 3、5 あたりはなかなかの佳曲と言えよう。また、B 1 などではリズミカルなピアノ、パーカッションがイージーな雰囲気を漂わすが、ヴォーカルが入ると一変してイタリア特有の哀愁が満ち溢れてくる。 (江)



CAPSICUM RED
Appunti Per Un'Idea Fissa

Bla-Bla 1972年
BBL-11051 廃

A: PATETICA
1° TEMPO
2° TEMPO
3° TEMPO
LO SPEGNIFUOCO

B: EQUIVOCO
RABBIA & POESIA
CORALE

このアルバム一枚を発表して解散したカプシクム・レッドは、現在イ・プーのベーシストとして活躍中のレッド・カンツィアンが在籍していたグループ。彼はギターとボーカルを担当している。A面ではベートーヴェンのピアノ・ソナタ第8番「悲愴」——奇しくもラッテ・エ・ミエーレの「パピヨン」でも用いられていたが——がロック風のアレンジで全曲演奏されている。タイプとしてはリック・ヴァン・ダー・リンデン率いるオランダのエクセプションあたりが思い浮かぶが、イタリア的叙情に彩られた演奏には未完成ながらも捨て難いものがある。この内容から察するに、イ・プーの「パルシファル」、「ロマン組曲」といった気品あふれる名作群は、レッドの加入に依る所が大きいとも思われるのである。 (古)



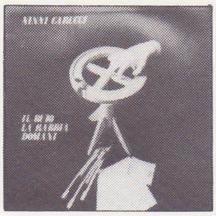
ENZO CAPUANO
Storia Mai Scritta

DIVERGO : DVAE 002 '75 廃

A : I : IN FORMA DI VITA
II : LA NUOVA STAGIONE
III : VOLO NELLA NOTTE
IV : RISVEGLIO

B : V : DAL TEMPO VISSUTO
VI : LA NATUA DENTRO
VII : MEMORIA
VIII : IL BUIO

Mario Panseri 参加のこのアルバムはアコースティックで地味な印象が強いサウンドであるにも拘わらず、聴く度に、新鮮な感動を与えてくれる。別段キーボードが縦横無尽に飛びまわる訳でもなくむしろその役割は色彩を添える程度に止まっているのだが、それでも尚、全編を包む言葉にならぬ余情と奇妙な温もりはCapuano自身のボーカルとPanseriの素晴らしいアレンジ能力に因るのだろう。8つのパートに分けられ、トータル・アルバム的色合いの濃いこの作品は、ボーカリストのアルバムであり乍、極端にボーカルパートを抑え、その展開の妙、構成力には驚きを禁じえない。 (鈴)

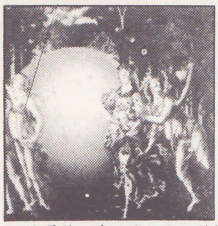


NINI CARUCCI
Il Buio La Rabbia Domani

TWO NUNS : TNN 35003 '73 廃

NANNI RICORDI : PRO

ジェットのシングルや女性シンガー、ジョヴァンナのアルバムでアレンジを担当しているニニ・カルッチは、自らも少なくとも2枚のリーダーアルバムを作製している。1st と思われる本作ではかなり良質なプログレッシヴ・ラヴロックが楽しめる。ピアノ、acギター、ストリングス等によるきれいなメロディーが持ち味だが、露骨なイタリア色は抑えめ。同国の歌物作品によく見られる叙情的なフレーズの"波状攻撃"は余り無く、どちらかと言うとサビの盛り上げ方で勝負する実力派の作品だ。驚く程ポップで、それでいて全く俗っぽいところが無いのもいい。もう一枚のアルバムは75年に Ultima Spiaggia から出された"Da Bambino Di Hanno Detto"だが出来としては本作の方が上。 (江)



CATERINA CASELLI
Primavera

CGD 69071 廃 — 1974年

A: PRIMAVERA
MOMENTI SI MOMENTI NO
DE SIDERARE
IL MAGAZZINO DEI RICORDI
UNA GRANDE EMOZIONE
PRIMA NON SAPEVO

B: IO DELUSA
PIANO PER NON SVEGLIARTI
BUIO IN PARADISO
NOI LONTANI NOI VICINI
PRIMAVERA

カテリーナ・カッセーリは、カンツォーネ畑で活躍する女（ひと）である。場違いな印象を受けるかも知れないがこのアルバムだけは特別に紹介する必要がありそうなのでここに掲げることになった。プリマヴェーラ――「春」をテーマにするトータル的な色彩が濃く、壮大なオーケストラをバックに切々と歌い上げる彼女の歌声は、まるでイタリアの栄光の日々をさすらうかのようでもある。ジャケットはボッティチェッリの「春」をあしらったもので、外ジャケはモノ・トーンで、そして内ジャケはフル・カラーで「春」が描かれている。プーの「パルシファル」をはるかに上回る感動を与えてくれることを確信する。74年――往年のイタリアの芽吹きを感じさせる一枚である。（山）



CELESTE
same title

Grog GRL 02 廃 — キング K22P-184 廃 — 1976年

A: PRINCIPE DI GIORNO
FAVOLE ANTICHE
EFTUS

B: GIOCHI NELLA NOTTE
LA GRANDE ISOLA
LA DANZA DEL FATO
L'IMBROGLIO

わずか5枚のアルバムをリリースして消滅したグロッグ・レーベル。その中でもこのチェレステはひときわ高貴な光を放っている。メンバー等に関して詳しい事は伝わって来てはいないが、アコースティック・ギター、ベース、フルートを中心に曲は進行し、メロトロン、シンセサイザー、時折思い出したように用いられるパーカッションが花を添えるといったものである。このように彼等の音楽は非常に静的、内省的であり、幼な子が初めて世界を目の前にした時のような純粋な驚き、不安、感動に満ちている。地味ながら深い味わいを持つこのチェレステ、実に愛すべきアルバムである。メンバーのうちサックスとキーボードが、同じくグロッグよりリリースされたピッキオ・ダル・ポッツォのファーストに参加している。（古）



CERVELLO
Melos

Dischi Ricordi SMRL 6119 廃 — キング K22P-308 廃 — 1973年

A: CANTO DEL CAPRO
TRITTICO
EUTERPE

B: SCINSIONE (T.R.M.)
MELOS
GALASSIA
AFFRESCO

オザンナ一派の数あるアルバムの中でもパレポリと並び称される名盤である。ダニーロ・ルスティーチの弟、コルラド・ルスティーチのバンドで、コルラドは後にダニーロと共にノヴァを結成することになる。73年にリリースされた本アルバムの内容は、ギリシアの古伝説に基づく「メロス」の物語である。サテュロスの夜宴から物語は幕を明け、フレスコ画と称された不思議な象徴詩に致るまで美しいイタリア語の響を伴いながら圧倒的な曲展開をする。コルラドのギターを中心に各人が使い分ける多数の楽器が怖るべき変拍子を伴いながら古伝説を見事に現代に甦らせている。ダニーロとエリオ・ダンナの協力の基に作成された。しかしこの素晴らしい内容とは裏はらにチェルヴェロの活動は、はかなく短いものであった。（山）



CHERRY FIVE
same title

Cinevox Record SC33.27 SC27 廃 — KING K25P 614 廃 — 1975年

A: COUNTRY GRAVE-YARD
THE PICTURE OF DORIAN GRAY
THE SWAN IS A MURDERER

B: THE SWAN IS A MURDERER
OLIVER
MY LITTLE DOUD-LAND

チェリー・ファイヴは、ゴブリンのクラウディオ・シモネッティとマッシモ・モランテのユニットで、彼等2人が全ての曲を書き下している。ドラムをたたいているのは、名作「オペラ・プリマ」を作成したルスティケッリ＋ボルディーニのカルロ・ボルディーニ。内容は割とハードなプログレッシヴ・ロックと呼べるもので、時折前にでてくるメロトロンの響きがなかなか魅力的である。ゴブリンの一連の作品から、想像するのはむずかしいだろうが、強いて言うとするならば「IL FANTASTICO VIAGGIO DEL"BAGAROZZO"MARK」あたりの作風に近いような気もする。全体的に軽快な曲が多く、多少物足りなさも残るが、一聴には値すると思う。（山）



CICO
Notte

CBS CBS 69085 廃 — キング K22P-226 廃 — 1974年

A: INSONNIA
IL SUCCESSO
SE MI VUOI
I CATTIVI CONSIGLI
IL FIORE ROSA

B: IL PRETE E IL SEMPLICE
IL GATTO DI CASA
NON DIRE DI NO
DISTRAZIONE MENTALE
PIU'
LA NOTTE

フォルムラ・トレのドラマー、トニー・チッコがグループ解散後チコと名を改め、ソロ・シンガーとして初めて発表したのがこの名作「ノッテ」である。ここでのチコは水を得た魚の様に生き生きとして見え、その歌唱もアップ・テンポなナンバーからしっとりと歌いあげるバラードまで、彼の実力の程を示す素晴しさである。加えてパオロ・オルミによるオーケストラ・アレンジが哀感たっぷりに愛の物語を盛り立ててゆく。この後チコは同傾向の2ndとベスト・アルバム、CGDよりEMI移籍後にも2枚程アルバムを発表するが、彼のロマンティックな持ち味は失われているようだ。どこにでもありそうな男と女の情景をファンタジーへと昇華してしまった彼の名はしかし、決して忘れられることはないであろう。（古）



CINCINNATO
same title

PDU PLD. A 5091 '74 廃

GIANNI FANTUZZI-G.
GIACOMO URBANELLI-KBD. VIB.
ANNIBALE VANETTI-B.
DONATO SCOLESE-PERC.

PDUから唯一のアルバムをリリースしているチンチナートはアヴァンギャルドなジャズ・ロックを得意とする。ピアノがサウンドの核をなし、A1ではそれにひずんだギターが絡みロック色の濃い演奏を聴かせる。しかし全体を通して見ると、ジャズ風のインストパートが大半を占め、ヴォーカルは一部で聴かれるのみ。演奏の端々に〝技巧派〟を目指しているフシが伺えるものの、アルティ・エ・メスティエリあたりと比べ隔たりが感じられるのは仕方あるまい。録音状態が完璧でないせいもあろう。曲構成はA面3曲、B面は1曲で全て費やしている。メロトロンはB面の中程で顔を出すが、若干の哀愁をそそるのみで、シンフォニック通を満足させるまでには至っていない。（江）



CIRCUS 2000
An Escape From A Box

Rifi 1972年
RDZ-ST 14215 廃

A: HEY MAN
YOU AREN'T LISTENING
OUR FATHER

B: NEED
WHEN THE SUN REFUSES TO SHINE

サーカス2000(ドゥエミッラ)のセカンドＬＰである本作品は、残念ながら日本では知名度も人気も低い。編成は女性ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムスと比較的オーソドックスなタイプで、サウンド的には早い話アシッド・ロックである。だが当時の他のバンドのように混沌だけを売り物にしている訳ではなく、整然としていて心地良い、フォーク・ロック風に始まるＡ－１を頭だけ聴いて『ようするにジェファーソンか』と思う人も大胆にギターが入って来ると意見を変えざるを得なくなるだろう。Ｂ－１に至っては、もはや完璧に乱れたメロディーが暴れ回っている、というよりも散歩している。本国では日本よりも高価で売買されているようだが、メンバーの写真を見て納得してしまった。ハッキリ言って眼がキマっとるわ。(千)



CITTA FRONTALE
same title

Fonit Cetra KING K25P-472 廃 1974年
LPX 45 廃

A: ALBA DI UNA CITTÀ
SOLO UNITI...
EL TOR
DURO LAVORO

B: MUTAZIONE
LA CASA DEL MERCANTE "SUN"
MILIONI DI PERSONE
EQUILIBRIO DIVINO?

オザンナの４枚目「ランドスケイプ・オブ・ライフ」が発表される少し前の74年６月にエリオ・ダンナとダニーロ・ルスティーチはクラウディオ・ロッキと活動していたドラマー、エンツォ・ヴァリチェッリとピンク・フロイドの「狂気」に参加していたライザ・ストライクを加えウーノを結成、残りのリノ・ヴァイリッティとマッシモ・グァリーノは新たに４人のメンバーを加え、チッタ・フロンターレを作る。ウーノとは違い、全曲イタリア語で唄われ、曲もリノとマッシモが全て書いている。しかし、このアルバム一枚で行方不明となってしまった。ジャケットはウーノ、「ランドスケイプ」と同じくドラマーのマッシモのデザイン。メンバーは実際は５人だが一人のホーン奏者の名前は判っていない。(い)



COCAI
Piccolo Grande Vecchio Fiume

STYLE CT.7185 '77 廃

A: MILIONI D'ANNI FA
LE MIE STORIE
DIRO NO!

B: PICCOLO GRANDE, VECCHIO FIUME
TI AMO DAVVERO
LE MELE MATURE
CONCLUSIONE

ジャケットとはうらはらにラヴ・ロック色の強いサウンドを聴かせる。イタリア語のヴォーカルが見事に溶け込んだＡ-1は、美しいメロディがちりばめられており、演奏も仲々良く、単なるラヴ・ロックと片付けてしまうには惜しい。その後、平均的な曲が続き、多少我慢していると、シンセの哀愁のあるイントロで始まるＢ-3で、再びすばらしさを思い知ることになる。Il Giardino Dei Semplici, La Bottega Dell'arteに通じる美しい曲。短いのが難点だが、インストゥルメンタルのＢ-4は一番プログレ色が強い。叙情性あふれるこういった曲は、イタリアならではのもので、他の国々の追随を許さない。ボローニャでの録音となったのは、ローマ、ミラノ、トリノといった都市においてこの手の音はすでに廃れていったあおりだろうか。(吉)



RICCARDO COCCIANTE
Anima

RCA TPL-1-1060 '74 廃

A: BELLA SENZ'ANIMA
IL MIO MODO DI VIVERE
L'ODORE DEL PANE
QUI

B: QUANDO FINISCE UN AMORE
LUCIA
PUOI CHAMARMI COL MIO NOME
SE IO FOSSI

リッカルド・コッチャンテの中で最もプログレッシヴな作品は、パオロ・ルスティケッリらを加えたMuであろうが、より、内省的な作品として何を選ぶかといえば、Concerto～か、本作である。Concerto～ではヴァンゲリスをアレンジャーを迎えたが、ここではE.モリコーネのつややかなオーケストラ・アレンジが彼のしゃがれ声と一体となり美しく悲しい愛の世界を描いている。オリジナルはこのダブル・ジャケットのもので、フォロンの絵のものは再発。フランス語ヴァージョンもフランスでリリースされており、それはフォロンの絵でダブル・ジャケットである。尚、彼の良質な作品にふれたい方は、76年までの作品を一聴することをお勧めしておく。サイゴン生まれの情熱的なカンタウトーレである。(山)



RICHARD COCCIANTE
Mu

RCA DPSL 10549 '72 廃

A: INTRODUZIONE -
I PARTE-ORA CHE IO SONO LUCE
COLTIVO' TUTTE LE VALLI
II PARTE-UOMO, FESTA

B: III PARTE-ERA MATTINO SUL MONDO VITA
IV-PARTE-ADIO
CORPI DI CRETA

72年にリリースされたコッチャンテの作品。複雑な変形ジャケットといい、そのサウンドといい、当時のプログレッシヴ一色だった熱いシーンが想像できるシンフォニックなアレンジが成された作品である。ゲストも多数プログレッシヴ畑のアーティストを起用しており、Rustichelli & Bordiniのキーボーダー、パオロ・ルスティケッリ、ANONIMA SOUNDのデレク・ウィルソン、BRAINTICKET のジョエル・ヴァンドローゲンブローク、キャロル・ムリエルetc.が色どりを添えている。この時期には多くのカンタウトーレがプログレッシヴ色を強めた作品を残しているが、その中でも完成度の高い一枚である。尚、この頃のコッチャンテは名のスペルをイタリア風に Riccardo とはしていない。(山)



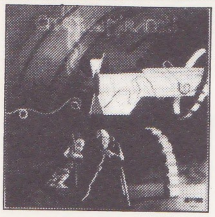
RICCARDO COCCIANTE
Concerto Per Margherita

RCA 1976年
TPL 1-1220

A: NONOSTANTE TUTTO
MARGHERITA
SUL BORDO DEL FIUME
INVERNO
PRIMAVERA

B: VIOLENZA
ANCORA
QUANDO SI VUOLE BENE
QUANDO ME NE ANDRÒ DA QUI
NONOSTANTE TUTTO

サイゴン生まれのカンタウトーレ、コッチャンテはそのルックスにもかかわらず常に抒情的な心に残る作品を顕わし続けている。マルゲリータなる清らかな少女に捧げられたこのアルバムは、Lucia（これも女性名）と並びリリカルな美しさではちょっと白眉。それもそのはずアレンジをヴァンゲリスやＥ・モッリコーネという巨匠が手がけている（とてもＥ・バカロフの比じゃない）。彼はアレンジにこだわる人でペリジェオのＧ・トマーゾ、Ｄ・ローズ、Ｐ・バックマスターらを起用し雅やかな有能性を醸し出している。Poesia、Anima、L'alba、Concerto per Margherita、Riccardo Cocciante、Mu、...e io canto、Cervo a primavera、Coccianteのいずれも質の高いものばかりだ。(岡)



CORTE DEI MIRACOLI
same title

Grog　　　　　　KING K22P-326 廃　　1976年
GRL 04 廃

A:...E VERRA L'UOMO VERSO IL SOLE
UNA STORIA FIABESCA
B:IL RITUALE NUTTURNO
I DUE AMANTI

コルテ・デイ・ミラーコリの唯一のアルバムは、ニュートロルスのビットリオ・ディ・スカルツィをゲストにむかえて作られた。ツイン・キーボードという意欲的な編成、ユートピア志向を示した歌詩と曲作りと、素晴しいグループになる萌芽を持ったグループだった。A面1曲目の〝人間がいなければ″はユートピアとしての自然が人間によって破壊されていく悲哀を歌っているが、これが彼らのベストだと言って良いだろう。ビットリオ・ディ・スカルツィのギターにツイン・キーボードがからむところなどは秀逸の一語に尽きる。全体としてはニュートロルスの影響から抜け出していない部分も多く目につくが、これから彼らの個性が発揮され、ビッグなグループになるという矢先にグロッグレーベルが消滅してしまったのである。（宇）

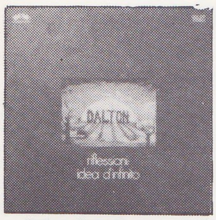


DALLAGLIO
Sera-Mattina

LOVE : 5360 001A '72 廃

GIANNI DALLAGLIO - DS, P, VO
ALBERTO VALLI - EL-G, AC-G
WALTER BRAVI - B
GAETANO LEANDRO - ORG, MTN, SYN

ジャンニ・ダラリオはIL VOLO加入前の72年、自らのバンドを率いて本作を発表している。内容的にはプログレというよりも歌物としての色彩が濃く、カンタウトーレの一連の人気作に劣らぬ出来栄えを誇っているが、ストリングス等で盛り上げていく叙情派タイプとは一線を画す。きれいなメロトロンや彼自身が奏でるピアノを絡ませながら、あくまでもヴォーカルパートを中心に据え、非常にマイルドな仕上がりを見せている。作曲は全て彼が手掛けているが、キーボードばかりを突出させた安易な〝泣き″に走る気配もなく、曲の端々ににじみ出たセンスの良さは目を見張るものがある。もっとも一流セッションマンの彼がこの程度の作品を作り上げるのは朝飯前？のことだったかも知れない。（江）



DALTON
Riflessioni : Idea D'Infinito

MUSIC : LPM 2011 '72 廃

REDUZZI TEMISTOCLE - P, ORG, MTN, SYN, VO
CEREDA AMONNE - G, VO
LIMONTA RINO - B, VO
LOCATELLI TATI - DS, VO
CHIESA ALEX - FL, VO

非常に癖の強いシンフォニックロックを得意とするダルトンの 1st アルバム。ピアノ、オルガン、メロトロン等kbd系を中心とした屋台骨はその不器用さ故に少々頼りない印象を受けるが、フルートの導入によりかなり引き締まったサウンドとなり、哀愁を帯びたメロディーラインも俄然生きてくる。曲と曲の間隙にはピアノとフルートによる淋しげなテーマが幾度となく繰り返される。しかし、どの場面でも極端なイタリア色は感じさせず、特にB面では、力強いリズムをバックにワイルドなギターが右に左に飛び回り、荒々しいオルガンがうなりを上げるなど、ブリティッシュナイズされた演奏も披露している。2ndは75年の発表。プログレ色は薄まり、強い個性も影を潜めてしまっているが、巷で酷評される程ひどい出来ではない。（江）



CIRO D'AMMICCO
same title

EMI : 3C.064 17818 '72 廃

CIRO D'AMMICCO - VO

オレンジ色の封筒型変形ジャケ。表面には切手が貼られ消印まで押してある。一風変わった趣向のチロ・ダミコの 1st アルバムであるが、叙情派カンタウトーレの作品の中ではトップクラスの出来栄えを誇る。彼自身が奏でるのであろうか、全面に施されたメロトロン、抜群の歌唱力、重厚な音作りどれを取っても2流プログレバンドがジタバタしたところで遠く及ばない崇高な世界がそこにはある。曲によってはバイオリン、フルート、acギターの美しい音色が聴く者を虜にし、ラストでは麗しいピアノを徹底的にフィーチュア、聴き終えた後も暫く余韻が残る様な印象的な終幕となっている。なお彼はこの後Daniel Santacruz Ensembleを結成、数枚のポップス作品を発表するが〝哀しみのソレアード″は日本でもちょっとしたヒットとなった。（江）



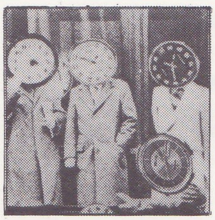
DATA
same title

NUMERO UNO ZSLN 55668 '74 廃

A : COMPLEANNO
STRADA BIANCA
CONGRESSO DI FILOSOFIA
TUTTO IL MIO MONDO
DOVE VA L'UMANITA ?

B : PER MIA MADRE
ARIA IN ME
WENIWA
IO E LA MIA SCIMMIA
MAGIA
DATA II

70年代後半には、ソロシンガーとしてヒットをとばし、キング・レコードより日本盤もリリースされたウンベルト・トッツィが、それ以前に在籍していたグループにストラーナ・ソチエタとこのダータがある。ダータのほうは当時意欲的な作品群をリリースしていたヌメロ・ウーノからのデビュウと、その意味深げなジャケットからして、プログレッシヴ・ロックの中でもかなり革新的な内容を想像しがちだが、彼等の持ち味はストラーナ・ソチエタ同様ソフトでメロウなカンタウトーレ・タイプのポップ・ロックである。最近日本で、プログレッシヴ・マニアの中にクローズ・アップされてきたカンタウトーレ達であるが、それらを好む方には絶好の作品としてあげておこう。良質なポップス・アルバム。彼等唯一の作品。（今）



DEDALUS
same title

TRIDENT : TRI 1001 '73 廃

FIORENZIO BONANSONE - EL-CEL, EL-P, SYN
MARCO DI CASTRI - G, S, PER
FURIO DI CASTRI - B, PER
ENRICO GROSSO - DS, PER
RENE MANTGNA "AKUTUALA" - PER

シンフォニック系の好作品が華やかに注目を集める中で、イタリアン・ジャズ・ロックの人気は今一つ地味であるが、興味深い作品は意外に多い。Tridentレーベルに2枚の作品を残しているデダルスは前衛ジャズ・ロックの代表格とも言え、割と個性的な存在である。2ndではフリーな部分を極限まで押し進めた実験音楽を披露しているが、本作では〝本格派″としての体裁を十分に整えながらも、サックス、elピアノ、elチェロ等を駆使、更には民族ジャズ・ロック・グループ〝アクチュアラ″から参加したReneのパーカッションも加わり、部分的には徹底的にフリーな空間を創り上げている。演奏技術もまずまずで、重量感溢れるリズム陣の働きが効いている。時計を取り入れたカヴァーはCaesar Montiの手によるもの。（江）



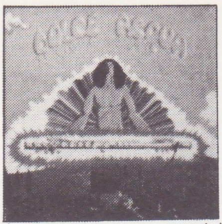
DE DE LIND
Io Non So Da Dove Vengo E Non So Dove Mai Andro,Uomo E Il Nome Che Mi Han Dato.

Mercury 1972年
6323 901A 廃

A: FUGA E MORTE
INDIETRO NEL TEMPO
PAURA DEL NIENTE

B: SMARRIMENTO
CIMITERO DI GUERRA
VOGLIA DI RIVIVERE
E POI

おごそかな雰囲気につつまれて、このデ・デ・リンドのアルバムは幕を開ける。他の多くのイタリアン・ロックと同様、この作品もトータルな曲作りがなされており、アコースティック・ギターとフルートをメインに使った〝静〟の部分と、ブラック・サバスばりのヘヴィーなギターをメインに使った〝動〟の部分とが、何度となく対比されながら曲が進行してゆく。が、部分部分を聴く限りは輝きを見い出すことも容易なのだが、両面通して聴いた後には、少々散漫な印象のあることは否めない。彼らは、本アルバム以前にもシングルを発表しており、そのジャケット写真ではほつらつとした青年の姿を見せていたのだが、本作の中ジャケに見える姿が、何とも不健康な雰囲気に満ちているのは、一体何故なのでしょう？ （城）



DELIRIUM
Dolce Acqua

Fonit Cetra 1971年
LPX 11 廃

A: PRELUDIO
MOVIMENTO I
MOVIMENTO II
TO SATCHMO
BIRD AND OTHER
UNFORGETTABLE FRIENDS

B: SEQUENZA I & II
JOHNNIE SAYRE
FAVOLA O STORIA DEL LAGO DI KRISS
DOLCE ACQUA

デリリウムはトロルスを始め多くのロック・アーティストを生み出したジェノヴァの出身であるが、随所にジャズのエッセンスをちりばめながら抒情性とアグレッシヴなパワーも持ったユニークなグループである。リーダーのイヴァノ・フォッサーティはこの1作にのみ参加し、後はオスカル・プルデンテとの共作とソロとを合わせ6枚のアルバムを発表しているものの彼の本領はミュージック・メイカーとして他のアーティストに手を借す時に発揮され、ソング・ライターとして数多くのヒットを放っている。グループの方はメンバーを補充し Lo scemo e il villaggio、Delirium III の2枚の秀作をリリースし解散している。どこか郷愁をただよわすフォッサーティのヴォーカルとフルートが印象的な作品。 （岡）



DELIRIUM
Viaggio Negli Arcibelaghi del Tempo

FONIT CETRA : LPX 20 '74 廃

PINO DI SANTO - DS, PER, VO
MARTIN FREDERICK - FL, S, KBD, VO
MARCELLO REALE - B, VO
ETTORE VIGO - P, ORG, VIB, SYN, MTN, VO
MIMMO DI MARTINO - G, VO

デリリウムの3rdアルバム。1st ではアコースティックパートを中心にジャズ的な要素も絡めながらイタリア特有の郷愁、切なさを奏で上げ、2nd はメロトロンを前面に押し出し、よりプログレッシヴな手法を模索した意欲作であった。本作では前2作の持ち味をソツなく吸収することにより、より完成された形でのプログレッシヴ・ロックが聴かれる。最後のアルバムになってしまった点は惜しまれるが、残された作品はいずれも良質なものばかりで特にフルート、ピアノに加えオーケストレーションが効果抜群の本作などは国内盤リリースには持って来いだったはずだ。トロルス等のビッグネームの陰になって今一つ地味な印象を拭い切れない彼らが、我が国で正当な評価を受ける日は遠のいたままである。 （江）



GINO D'ELISO
Il Mare

NUMERO UNO ZSLN 55683 '76 廃

A : NON E' SOLO MUSICA
IL MARE
IL PALCO E' VUOTO
I SANTI SUI MURI

B : CARSO
IL CANTASTORIE EQUILIBRISTA
L'OROLOGIO
EMILIO BARBONE

76年に本アルバムでアルバム・デビュウしたジノ・デリソは現在までに4枚のアルバムをリリースしているカンタウトーレである。2作目以降は、いわゆるチャート入りを意味したようなポップなカンタウトーレ・タイプであるが、この「Il Mare(海)」と題されたアルバムだけは、当時の第一線イタリアン・プログレッシヴ・アーティスト達と肩を並べ得る躍動感に満ちた素晴らしいアルバムである。彼の自由な歌声も素晴らしいが、このアルバムの仕掛人はフルート、サックス、キーボードを担当するクラウディオ・パスコリであろう。雄大なストリングスのうねりはかのイル・ヴォーロを想わし、アコースティック・ギターのつま弾きやフルートが効果的に配されている。イタリアらしい好作品である。 （山）



DIK DIK
Suite Per Una Donna Assolutamente Relativa

Ricordi KING K25P-613 廃 1972年
SMRL 6095 廃

A: DONNA PAESAGGIO
IL VISO
IL CUORE
INTERMEZZO
LA CATTEDRALE DELL'AMORE
LE GAMBE

B: SUITE REALTIVA
MONTI E VALLI
ISOGNI
LA NOTTE
SINTESI

ディク・ディクは'66年にデビューして以来活躍を続けてきた5人組のベテラン・ポップス・グループだ。が、本作はトータルな内容の壮大かつ叙情味溢れるシンフォニック・ロックとなっており、彼らの音楽活動の中では極めて特異な存在の作品である。こうした作品が生まれた背景としてレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカの関与が噂されているが、本作とレアーレのアルバムを画作した人物が共にマウリツィオ・ヴァンデリであること、また製作スタッフに共通の人物がいること、そして何よりその演奏内容等から判断すれば極めて信憑性の高い説であるといえる。しかし楽器担当者のクレジットが一切ない以上推測の域は出ない。なお、作曲者はディク・ディクのキーボーダーであるマリオ・トターロ自身である。 （城）



DUELLO MADRE
same title

PRODUTTORIASSOCIATI : PA/LP 47 '73 廃

PIPPO TRENTIN - S, FL
MARCO ZOCCHEDU - G
BOB CARELLO - B
DEDE LO PREVITE - DS, PER
PRO: GIAN PIERO REVERBERI

IL VOLOのベーシストとして活躍したボブ・カレロ(VOLOの1stアルバムには"OLOV"としかクレジットされていない)が在籍したことで知られるグループDuello Madreは73年に唯一のアルバムを発表している。彼はバッティスティのバックミュージシャンとしても有名だが、72年には本グループのギタリスト、マルコと共にOssage Tribeなるバンドに籍を置き、やや実験的な音楽をプレイしていた。本作ではジャズロックを披露しているが残念ながらプログレファンを仰天させる様な作とは行かない。G.P.Reverberi が2曲程キーボードで参加しているが全体的にもう少しアクセントを付けたかったところだろう。リズム陣が割としっかりしている為、演奏自体は締まって聞こえるが、管楽器系のソロが幾分迫力不足のように感じる。 （江）

MARQUEE
EUROPEAN ROCK CATALOG



E.A.POE
Generazioni (storia di sempre)

Kansas 1974年
5300 503 A 廃

A: PROLOGO
CONSIDERAZIONI
PER UN'ANIMA
ALLA RICERCA DI
UNA DIMENSIONE

B: AD UN VECCHIO
LA BALLATA DEL
CANE INFELICE
GENERAZIONI

キーボードを中心とするグループ。グループ名からゴシック・ロマンス的なイメージをいだきがちだが、音のほうに暗さはなく、どちらかというとブリティッシュナイズされた軽快なプログレッシヴ・ロックを聴かせてくれる。タイプ的にはレ・オルメに近く、一種なごやかさもかねそなえたボーカルもここちよい。特に派手さがない為か、イタリアの超一流グループ——例えばマクソフォーネやクェラ・ベッキア・ロッカンダ、ピエロ・リュネール、オパス・アヴァントラ等とは比較し難いが、ルオヴォ・ディ・コロンボ、オディッセアあたりのグループと同様の評価を与えることができるだろう。(山)



ELEKTRIKTUS
Electronic Mind Waves

PDU PLD.A 6050 '76 廃

A: FREQUENCER DEPARTURE
-FLYING AT DAY-BREAK
FIRST WAVE
POWER HALLUCINATION

B: SECOND WAVE
IMPLOSION
THIRD WAVE
FLYING AT SUNSET
FREQUENCER ARRIVAL

エレクトリクツスというのが、個人のユニットの名称なのか、あるいはグループ名なのかはっきりしない。76年に、前衛的な作品を積極的にプロモートしていたPDUレーベルからリリースされた彼等(彼)の唯一の作品である。当時、イタリア盤としても数動く紹介されていたドイツのグループ達、タンジェリン、シュルツェ、クラスター、クラフトヴェルク等の影響を受けて創られたことが想像できるエレクトロニクス・ミュージックである。なめらかな、耳あたりの良いサウンドは、ドイツのエレクトロニクス・ミュージックを消化した上での彼等の生んだ一つの帰結なのであろう。洗練されたイタリア人の感覚を反映した秀れた作品である。カヴァー・ワークも特筆に値する素晴らしい作品。(山)



EQUIPE 84
ID

RICORDI: SMRL 6072 '70 廃

A: ID
BUON GIORNO AMICO MIO
LA NOTTE DI VERITA'
GIOCHI D'AMORE
PADRE E FIGLIO

B: JO
UN BRUTO SOGNO
LA NOTTE DI S.LUIGI
IL RE DEI RE
FINE

60年代後半に"Equipe 84"(Vedette: VPA 8051)でアルバム・デビューを飾ったエキペ84。60年代にはもう1枚アルバムを残しているが、当時はストーンズ・ナンバーを取り入れるなど、今聴く限りでは極く標準的なオールディーズといったところだ。しかし70年代に入るとポップス・バンドとして着々と力を着け、基本的な路線は維持しながらもプログレッシヴロックとの融合点を模索し始めた。本作は第2期エキペの1作目に当たる。メロトロン、チェンバロ、バイオリン、ハモンド・オルガン等を随所に散りばめ、非常に柔らかな音作りとなっているが、この時点ではまだポップな要素が勝っていると言えそう。なお、後にP.F.M.に加入するFranz Di Cioccioがドラムスでゲスト参加している。



EQUIPE 84
Sacrificio

ARISTON: AR/LP 12134 '74 廃

80年前後、イタリアン・ロックの叙情性に魅せられたリスナー達が、まだ日本では情報量が豊かではなかった歌物の世界に触手を伸ばし始めたが、シンフォニック系プログレと共通の美意識を持った良質な作品群は違和感無しに受け入れられていった。彼らのアルバムの中で最もプログレ色の濃い本作などはポップス作品と受け止める向きは少なかったが、結果的にロックとポップスとの橋渡し役を担ったのは彼らとDIK DIKであった。70年代に入って質の良い作品を次々に発表したエキペは本作で頂点を極めることになる。ストリングス、メロトロン、キーボード系の使い方もポップスの域を遙かに超えた非常に積極的なものとなっている。更にacギターやフルートの優しい音色が加わり、典型的なイタリアのカラーが現出される。(江)

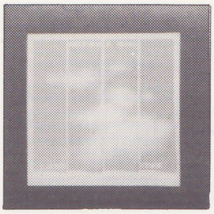


ERA DI ACQUARIO
Antologia

RCA: PSL 10565 '73 廃

MICHELE SEFFER - B, G, VO
ANGELO GIORDANORDANO - FL, S, CL, VO
PIPPO CATALDO - DS, PER, VO

IL VOLOの初代ベーシストとなるミケーレ・セファー率いるトリオEra di Acquarioは73年に唯一のアルバムをリリースしている。キーボードレスの上、地味なカヴァーワークも手伝ってか、廃盤ブームをよそに人気の方は今一つであるが、確かにプログレファンにアピールするものには欠ける。A、B面各5曲ずつで、肩の凝らない小品集といったイメージだ。acギターとフルートの澄んだ音色が中心になるが、殊更叙情的なパートが多い訳でもなく、もう少しメリハリが欲しかったところだろう。みずみずしさは十分に保たれている為、メロトロンを導入しても面白かったろうが、ヘヴィなプログレッシヴロックを聴き続けた後、リラックスムードで締めくくるには、この程度のサウンドが適しているのかもしれない。(江)

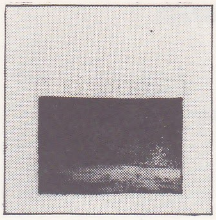


ERRATA CORRIGE
Siegfried, Il Drago E Altre Storie

G7: 1 '76 廃

MIKE ABATE
MARCO CIMINO
GIANNI CREMONA
GUIDO GIOVINE

76年の自主製作。イタリア人コレクターの話によると200枚の限定プレスだそうだ。事実とすれば、市場を見る限り、その1割近くが日本に流れて来ていることになる。内容は、適度な甘さとイタリアン・ロック特有の繊細さを十分に兼ね備えた良質なもので、ファンにとっては気になる1枚だ。ただ72、3年頃の名作群の様な爆発力には欠ける。フルート、ピアノ、acギターの澄み切ったサウンドを核として、全面にわたりほのぼのとした手作りの温かさがにじみ出た作りになっている。派手さは無いが、キーボード類も適宜散りばめられ、時に顔を出すチェロが素朴な雰囲気を作り上げている。叙情派というよりも清澄派といった印象が強い。なお、A面は全面費やしての組曲になっている。(江)



TONI ESPOSITO
Rosso Napoletano

Numero Uno 1974年
DZLSN 55677 廃

A: ROSSO NAPOLETANO
B: DANZA DEI BOTTONI
IL VENDITORE DI ELASTICI
BREAKFAST
L'EROE DI PLASTICA

エスポシトはノルマン系ナポリっ子である。イタリアでは特にピーノ・ダニエーレと共演するようになって以来、彼とトゥリオ・デ・ピスコポの株が異常に高い。2人共割合どこにでも姿を現わす人だが、もともと彼はソレンティと仕事を始めたようだ。Rosso Napoletano、Processione Sul Mare、Gente Distratta、La Banda el Sole、Tamburoを製作した経歴にはP.バックマスター、ジジ・デ・リエンツォ、ロベルト・フィックス、フランチェスコ・ブルーノらの協力がものを言い、特に後者3人らと共にテレーザ・デ・シオのアルバム作りに参加する等、ナポリ・パワーの一端を担う者として活躍のおとろえを知らぬパーカッション・マンである。（岡）



ETNA
same title

CATOCA : CTL 1-1002 '75 廃

CARLO PENNISI - G, MLN
ELIO VOLPINI - B
AGOSTINO MARANGOLO - DS, PER
ANTONIO MARANGOLO - KBD, CL

有名なシチリアのエトナ火山をグループ名に冠した彼らはイタリア・ジャズロック界屈指のテクニシャン集団である。その高度な演奏技量はGoblin (Marangolo兄弟)、L'Uovo Di Colombo（ベースのE.Volpini）等を聴けば分かることだ。全編インストで、イタリアでは類を見ない本格派ジャズロックと言えるが、3rd以降のArti＋Mestieriの様に小手先の技術ばかりが先行する訳でもなく、迫力は十分。ホーンの導入は無く、ギターワークとelピアノが中心となる。ロック色が濃く、非常にアグレッシヴなフュージョンサウンドとでも言えば適切だろうか。なお、彼らは72年にFleaと名乗り1枚のアルバムを発表しているが、その内容は本作とは180度異なるハードロックで、かなり荒々しいものであった。（江）



EUROPE
same title

BUBLE : BLU 19609 '82 廃

A: QUEEN BEE
DON'T LET THEM DIE
EUROPE
BLUEBIRD

B: U.S.ROCK
DON'T LET THEM DIE
SOMEDAY
CRASH
TASTE OF LIFE

近時のイタリアン・プログレッシヴ・ロックの中でレコード・デビュウをはたせたのはヒューマン・イクスプレッションとこのヨウロッパである。さらにこのヨウロッパはイギリス盤もリリースされるというめぐまれたグループである。プログレ＝ハード路線のグループであり、その点完全なプログレッシヴ・ファンには多少なじまぬ作品かもしれないが、安定したテクニックでおしまくる胸のすくサウンドは正にイタリアである。イエスからの影響を随所に感じるが、おそらくメンバー間で、プログレ路線とハード路線に好みが別れているのだろう。しかしその融合がここでは非常に良い方向にむかっており、一聴には値するアルバムに仕上げられている。グループの核となるのはRDMのギターだったS.Ursoである。（山）



EXPLOIT
Crisi

CGO : FC 1008 '72 廃

CARLO CRIVELLI - ORG, P, CLAVICENBALO, VO
ENZO CUTULI - B, VO
ALDO PIGNANELLI - DS, PER, TIMPANI

キーボード・トリオ、エクスプロイトはCGOレーベルにＬＰ１枚とシングル3枚を残している。見開きジャケながら表、裏、内ジャケとも頼りない線画が描かれており、自主製作との噂があるが真偽の程ははっきりしない。ただしプレス枚数はさ程多くない様だ。内容は典型的なオルガン・ロックで随時ピアノを併用するが電子系の音は聴かれない。英国的な泥臭いイメージも併せ持ち、プログレとしては若干地味な印象は免れないが、オルガン系の音が好きな人であれば十分に傾聴出来る作品である。曲構成はA面が3パートに分けたタイトル曲で全て費やし、B面は少々ポップな味付けをした6曲の小品集。フェイドアウトされているB4“Anima Nuda”はシングル盤で完全収録されている。（江）



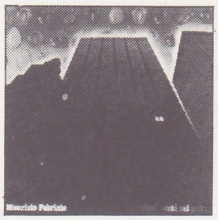
LUCIO “VIOLINO” FABBRI
Amarena

CRAMPS 5205 651 '78 廃

A: DYNAMO
DANCIN' & SINGIN'
SNEEW
AMARENA
TELEPHONE LINE

B: BLACKGOLD
CHARLESTONED
CRAMPS
IL LUPO, I CINESI & LA FAVOLA DELLE PARLE DI VETRO

マウロ・パガーニに替わってPFMのメンバーとなり、また、クランプス・レーベルの数多くの作品でも巧みなサポートを見せたルチオ・ファブリのソロ。Walter Calloni (ds), Hugh Bullen (b), Claudio Pascoli (sax, fl) らの協力を得て、ファブリが才人ぶりを発揮した力作である。ファブリはバイオリンを始めとしてヴィオラ、チェロ、ギター、シンセ、ベースを見事に使い分け、バラエティに富んだ演奏を展開している。ジャズィに、ポップに、そして、クラシカルに、いずれの形態においても彼の演奏は極めてテクニカルである。種々の音楽的要素を取り入れたためアルバムとしての統一感にやや乏しく、また、一部リズム・セクションがファンキーなため軽い感じを受けるが、音楽的完成度の高い作品である。（賀）



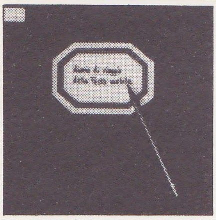
MAURIZIO FABRIZIO
Movimenti Nel Cielo

Polydor 1978年
2448 075 廃

A: CIELO
PIANETI
DANZA DELLE STELLE
MOVENZE DEGLI ANELLI DI SATURNO
EPISODIO LUNARE
CIELO
MOVIMENTI NEL CIELO

B: IL SOLE
NASCI DEI NUOVI SATELLITI
SPUTNIK SUITE
DANZA DELLE STELLE
MOVIMENTI NEL CIELO

アンジェロ・ブランドゥアルディ、リッカルド・フォッリらの名アレンジャーとして知られるマウリツィオ・ファブリツィオは、古くはディク・ディク「風のように」、ドナテッロ「恋のとりこ」等の作曲家として活躍していた。ソロ・アルバムを現在までに4枚リリースしているがこれはその2枚目にあたる。スカラ座オーケストラ、ロベルト・プレオ（セッション・ギタリスト、87年12月に来日した）、そしてアンジェロ・ブランドゥアルディがヴァイオリンで参加し、見事なバロック・ロックを披露してくれている。B－1太陽は、マウリツィオ自身のピアノが美しい佳曲。彼はすべての作曲、オーケストラ・アレンジ、指揮を担当している。来日の経験もある。（山）



FESTA MOBILE
Diario Di Viaggio Della Festa Mobile

RCA 1973年
DPSL-10605 廃

A: LA CORTE DI HON
CANTO
ARISPEA

B: LJA LJA
RITORNO

RCAレーベルのセッションマン達によるグループ。安定した、かつ正確無比のピアニストをメインにした曲が全面を貫く。このグループのピアニストはイタリアというテクニシャン揃いのシーンの中でもけたはずれの腕と体力を持っていて、正に驚異的な存在であるといえる。他のメンバーもそれぞれが安定したテクニックを持ち、軽快なプログレッシヴ・ロックを創り上げている。現在のところこのアルバムしか知られていないが、このアルバムだけで潰れてしまったとしたら余りに惜しいグループだ。同年、やはりRCAからリリースされている「JACOPONE/JACOPONE」(RCA DPSL 10608)というロック・ミュージカル的なアルバムにも彼等が参加していた。フェスタ・モビーレとは「移動祝日」のこと。 (山)



EUGENIO FINARDI
Sugo

Cramps W.パイオニア 1976年
5205-152 P-10313C 廃

A: MUSICA RIBELLE
LA RADIO
QUASAR
SOLDI
NINNANNANNA

B: SULLA STRADA
VOGLIO
OGGI HO IMPARATO A VOLARE
LA C.I.A.
LA PAURA DEL DOMANI

現在も活躍中のカンタウトーレの一人。デビューはヌメロ・ウーノで、このアルバムはクランプスに移籍してのファースト。バックを全面的に盛り上げているのはアレアのパトリツィオ・ファリセッリ、パオロ・トファーニ、アレス・タヴォラッツィの3人でこれにルチオ・ファブリ、アルベルト・カメリーニ、ルチオ・バッティスティもよく起用する売れっ子スタジオ・ミュージシャン、ウォルター・カッローニとヒュー・ブレン等の豪勢なゲストが参加している。タイトルの「SUGO」とはスパゲッティ・ソースの商品名。詩の面ではフランチェスコ・グレゴーリの様なプロテストソングのタイプだが音楽的には日本でもイタリアでも彼自身の最高作と評される程の実力を充分に発揮した快作。 (い)

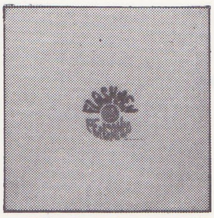


FLASHMEN
Hydra

KANSAS: LDM 17001 '71 廃

ROBERTO CAROLI - DS
LUCIANO SPOTTI - G
GIULIANO QUARANTOTTO - B, VO
SILVER SCIVOLI - ORG, VO

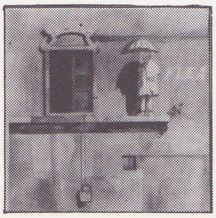
ラヴロックグループ、フラッシュメンは60年代後半にデビュー、当時のシングルには有名なチャイコフスキーの「白鳥の湖」をラヴロック風にアレンジしたものも見受けられた。本作は彼らの 1st アルバム。年代的なものを考えるとまずまずの出来と言えそうだ。オルガン系の音が割と積極的に使われているため、ラヴロックという言葉から受ける〝ぬるま湯〟的なイメージを多少は払拭出来よう。ただ、本来の路線を逸脱しない部分ではかなり楽しめるのだがロック調の長い曲になると今一つ煮え切らず、若干の古めかしさ共々プログレファンには少々物足りないかも知れない。なおグループは同レーベルに計6枚のアルバムを残している。また、タイトルの〝ヒュドラ〟とはヘラクレスが退治したという水蛇のこと。 (江)



FLASHMEN
Pensando

KANSAS: LDM 17003 '72 廃

フラッシュメンの3rd アルバム。彼らが本来得意とするのはいわゆるラヴロックであるが、本作では迫力十分のハードプログレッシヴ・サウンドが楽しめる。元々使用頻度が高かったオルガンに加え、ハードなギターや力強いヴォーカル等を積極的に取り入れ、彼らの作品の中では最もロック色の濃い作りになっている。メロディーライン等に本来の持ち味が見え隠れするが、70年代の熱い息吹とほとばしる躍動感で満たされたサウンドは熱心なファンにとって捨て難いところ。ただ、時に比較の対象とされるJET, JUMBO等の作品よりもスケールは小さいし、手法的にも極くオーソドックス。あくまでも、ラヴロックの延長線上でパワーアップを図った結果、好作品に仕上がった訳で、プログレを意図してのアルバム製作ではないようだ。 (江)



FLEA
Topi O Uomini

FONIT: LPQ 09070 '72 廃

AGOSTINO MARANGOLO - DS, VIB, PER
ANTONIO MARANGOLO - VO, P, HCA
CARLO PENNISI - G, MLN, VO
ELIO VOLPINI - B, S, VO

ETNAの前身バンドFLEAは72年に唯一のアルバムを発表しているが、全く同じメンバーによる演奏とは思えない程、両者のサウンドには隔たりがある。ETNAは技巧派ジャズロック・バンドとの印象が強かったが、本作ではヘヴィなギタープレイを満載、ドラムソロまで盛り込んだエネルギッシュなハードロックが聴かれる。荒々しくかなりアーシーな音作りは、当時イタリアのロッカー達も憧れたであろうブリティッシュ・ハードのスタイルで、郷愁めいたものとは一切無縁である上、オルガンレスのためプログレファンが聴きこなすのは若干キツイ感じだ。なお、Etnaとして再結成されるまで各メンバーはGoblin, L'Uovo Di Colombo等で独自の演奏活動を行うことになる。 (江)



FORMULA 3
Dies Irae

Numero Uno 1970年
ZSLN 55010 廃

A: DIES IRAE
NON E' FRANCESCA
PERCHE'...PERCHE' TI AMO
QUESTO FOLLE SENTIMENTO (INTRO)

B: QUESTO FOLLE SENTIMENTO
WALK AWAY RENEE
SE NON E' AMORE COS'E'
SOLE GIALLO, SOLE NERO

フォルムラ・トレが '70年に発表したこのデビュー作は、後の輝かしいイタリアン・ロック・ムーヴメントの先兵的役割を果たした記念碑的作品である。後の3rd, 4thアルバムのような多彩なキーボード群による壮大なサウンド・オーケストレイションは未だ聴かれないものの、ラディウスのヘヴィーなギターとロレンツィのオルガンを中心とした、一味違った重厚な音に仕上がっている。その中でも特に注目に値するのは神々しい雰囲気に包まれて展開するA-1のタイトル曲である。この曲は彼らの後の名作群と比しても決して見劣りしない名曲と言えよう。他の曲も音楽的に成熟したものとは言えないが、イタリアらしい情緒に満ちたものとなっている。しかし、何故にこの作品は忘れ去られているのだろうか？ (城)



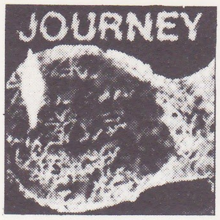
FORMULA 3
La Grande Casa

Numero Uno　　キング　　1973年
DZSLN 55655 廃 GXF K22P-153 廃
RCA-6250 廃

A: RAPSODIA DI RADIUS
LA CILIEGIA NON E'DI PLASTICA
LIBERTA' PER QUEST'UOMO

B: LA GRANDE CASA
CARA GIOVANNA
BAMBINA SBAGLIATA

フォルムラ・トレ４枚目にして最後の作品である。彼等はモゴール、バッティスティの擁護下にあったわけだが、ここにきて初めて全曲をメンバー自身が作曲している。大仰な構想がかえって彼等の未熟さを露呈してしまっていた前作〝夢のまた夢〟に較べ、カンタウトーレ達の持つ生と愛への渇望を率直に〝歌〟として表現しているようだ。ラディウスがアコースティック・ギターをつま弾き切々と語りかけるＡ－１、Ｂ－２等の、清楚な曲想に投影された詩情は10年を経た今でも決してみずみずしさを失うことがない。このアルバム発表後ラディウスとロレンツィはイル・ヴォーロを結成、ドラマーのトニー・チッコはソロ・シンガーとして、それぞれ素晴しいアルバムを発表している。（古）



BUCCHELI FRANCESCO
Journey

Edizioni Musicali 2000　　1979年
AL/79L.P.

A: JOURNEY

B: ANNALIA
DREAM
SOLITUDE
I KNOW THE TIME
JESUS CHRIST

ブッケッリ・フランチェスコというマルチ・キーボーダーによるアルバム。シンセサイザーによるメディテイショナル・ミュージックがくりひろげられているのだが、そこはイタリア人らしくメロディーを聴かせるもので、多種のキーボードの上を鳴り響く生ピアノが印象的である。若干テクニックの甘さ、シンセサイザーの音色に問題が残るが、センスは十分合格点を与えられる。同系統のイタリアのバンド「サンジュリアーノ」と比較すると多少見劣りがするが、決して二流にまで落ちることはないであろう。自主製作らしい。（山）



GARYBALDI
Nuda

CGD : FGL 5113 '72 廃

"BAMBI" P.N.FOSSATI - G, VLA, VO
LIO MARCHI - ORG, P, MTN
MAURIZIO CASSINELLI - DS, PER, HCA, VO
ANGELO TRAVERSO - B
PRO: IVO CALLEGARI

ジミヘンの支持者と言われるギタリストBambi Fossatiをリーダーとしたグループ Gleemenは70年に唯一のアルバムを出したが、2年後、全く同じメンバーながらGarybaldiと改名、本作をリリースした。ジャケは３面開きで裸女に群がる動物達を描いた印象的なデザインだ。サウンドの核を成すのはやはりバンビのギタープレイでプログレ色は余り濃くないが、ジミヘン色ばかりがクローズアップされても正確な内容が伝わらない。たまに登場するピアノも仲々きれいで、Ｂ１などはイタリア色をとどめる好ナンバーになっている。2nd"Astrolabio"ではスタジオライヴを披露しているが、ベーシストが交代、キーボードのLioも正式メンバーを外れゲスト参加にとどまっている。（江）



GIALMA 3
L'isola Del Tonal

DRUMS : EDL 2046 '79 廃

A: L'ISOLA DEL TONAL
LA CORSA SBALLATA
PAVANE

B: BELO HORIZONTE
FRANCIS DRUMS
MARANGUE'
BALLAD

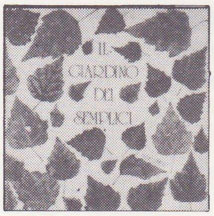
80年前後に発表されたアルバムの内でも、極めて高水準な内容を誇る作品。プログレッシヴ・ロックというよりはむしろジャズ・ロックの範ちゅうに入るのだろうが、彼等の奏でる清澄な音空間から喚気されるイメージは、かのArti E MestieriのTiltが最も近い。メンバーはRiccardo Zegna (Corte Dei Miracoli？、同姓同名だが同一人物かどうかは不明。)を中心とする３人で、他に３人のゲストを迎えている（バイオリン２人オーボエ１人)。全編インストゥルメンタルで電気楽器は一切使われていないが、R. Zegnaのリリカルなピアノと２台のバイオリンの美しくも哀し気な音色が溶け合うサウンドは静ひつなまでの叙情を湛え、一種官能的でさえある。（鈴）



FRANCO MARIA GIANNI
Affresco

ARIS : ANL 4000'74 廃

74年にリリースされた男性シンガー、フランコ・マリア・ジャンニのアルバム。自主製作の噂もあり、「シンガー系では随一のコレクターズ・アイテム」(イタリア人コレクターの話)だという。音の方は、表面的な派手さに欠けるもののキーボードやヴァイオリン、チェロ等の導入により十分にプログレッシヴな形態が保たれている。ストリングス等による爆発的で一気の盛り上がりは余り見られず、acギターをバックにした歌を中心に丁寧な音作りでじっくりと聴かせるタイプで、繰り返し耳にする度に味わいを増して行く。穏やかな作風ながらもバックの演奏にはプログレ全盛時の輝きが見て取れる。特にヴァイオリンが効果的だ。これにacギター（ピアノ)、シンセ系の音が絡み溢れんばかりのみずみずしさを醸し出している。（江）



IL GIARDINO DEI SEMPLICI
same title

CBS : 81170 '75 廃

グループ系の叙情派アーティストの中でもAlunni Del Sole, La Bottega Dell'Arteと並んで人気が高い彼らの1st アルバム。哀愁たっぷりのメロディーライン、美しいストリングスやacギターの爪弾き…と、盛り上げ方としてはオーソドックスな手段を用いているが、ピアノよりもオルガンの使用頻度が高いため、曲によってはロック色が若干濃くなる。また、ストリングスは余り多用せず、オーケストレーション効果にはメロトロン等キーボード系を代用するというケースが目立っている。なお冒頭に出て来た美しいメロディーがB面の最後で再び顔を出し、とても印象的なエンディングになっている。この後、グループは次々と良質の作品を発表することになるが、次第にポップな色合いを増して行く。（江）



GIGANTI
Terra In Bocca

RIFI : RDZST 14207 '71 廃

ビートグループだったジガンティは71年、ヴィンチェ・テンペラ等多彩なゲストを迎え、突如としてプログレッシヴロックの大作"Terra in Bocca"を発表した。全面に亙りメロトロンが満遍なく散りばめられ、ピアノ、acギターの美しい音色、哀愁たっぷりのメロディーライン、息もつかせぬドラマチックな展開等、全てに於て完璧な仕上がりである。ムゼオ等国内発売された名作群とも十分に比肩できる出来と言っていい。なお、曲は全てPiero De Rossi/Vince Temperaのコンビが書き上げている。また、彼らのこの他のレコードは、ほとんどがビートもしくはポップスでデヴィッド・ボウイの〝スペース・オディティ〟を収録した3曲入りシングルも出ている。 (江)



GLEEMEN
same title

CGD : FGS 5073 '70 廃

BAMBI P.N.FOSSATI - G, VO
LIO MARCHI - ORG, P
MAURIZIO CASSINELLI - DS, VO
ANGELO TRAVERSO - B
PRO : IVO CALLEGARI

バンビ・フォッサーティ率いるGLEEMEN(遍歴の楽人達)は70年に唯一のアルバムをリリースしている。60年代の名残が色濃く漂うサウンドはガリバルディよりもシンプルなものだ。オドロオドロしいカヴァーデザインを象徴するかの様な思わせ振りのオープニングながら、間もなく威勢の良いリズムに導かれて彼らの得意とするパターンが出て来る。曲によってはブルースギターがうなりを上げる一方で、古臭いオルガンの音色はどこか頼りなげ。いずれにしてもプログレファンの嗜好にマッチした作風ではない。現地イタリアではプログレ系廃盤の価格が高騰する以前は、オールディーズ的価値が高いこの手のレコード(他にGIGANTIやTRIPの初期など)が遙かに高値を付けていた。 (江)



G. MEN
Oggi

EDIA ZSKE 55380 '75 廃

A :	B :
NOTTE AMARA	RIFLESSIONI
STORIA DI UOMINI	LA STORIA DI ME E DI TE
AMAREZZA E ELUSIONI	LA COLPA
ERRORI TUOI	IN FONDO AGLI OCCHI TUOI
OGGI	PREGHIERA
LA NOSTRA LIBERTA	SE MI LASCI

G.メンは70年代の中盤に3枚のアルバムを残したグループ。本作品は彼等のセカンドにあたる。いわゆるカンタウトーレ・タイプの曲を得意としていたグループで、このグループも良いアレンジャーを加えてオーケストラをバックに配したら又、違った面白い作品ができたと思う。幸か不幸か彼等はオーケストラのかわりにメロトロンを大幅に導入した。これにより、アレンジの甘さはあるにしろ、かなりプログレッシヴ・タイプのイメージを持たれている。ただ基本スタイルはポップス・グループであるから間違えぬように。当時の熱いプログレッシヴ・シーンに影響を受けてこの時期にはポップス・グループ、あるいはカンタウトーレまでもが意欲的なサウンドを模索したことはシーンの厚味を増すのに貢献した。 (今)



GOBLIN
Il Fantastico Viaggio Del Bagarozzo Mark

Cinevox SC 33.37　　KING K25P-360　　1978年

A:	B:
MARK IL BAGAROZZO	LA DANZA
LE CASCATE DI VIRIDIANA	OPERA MAGNIFICA
TERRA DI GOBLIN	NOTTE
UN RAGAZZO D'ARGENTO	....E SUONO ROCK

ゴブリンのグループ活動とアルバム・リリースはかなり乱脈をきめこんでいてわけのわからないベスト物があったりするが、これは「ローラー」に続くコンセプト・アルバムでスケールの大きさも増し聴いているとハッとさせられるような研ぎ澄まされた音がある。4人の力量が最大限に生かされた中でユニークなのはM・モランテのヴォーカルである。彼は後にシェイプ・アップに成功しソロに専念、左にならってヒゲをそりおとした軽佻浮薄なナルシストC・シモネッティもソロに、Patrick発表後はA・マランゴロはNew Perigeoに参加、残ったF・ピニャテッリのあまりいただけない新生ゴブリンも1st、Voloのおあとは再び旧交を温め直してサントラTenebreを製作するという次第である。 (岡)



GRANDE FAMIGLIA
Una Cittá Possibile

RCA : DPSL 10622 '72 廃

PRO : PAOLO DOSSENA

カラフルなイラストカヴァーに包まれたグランデ・ファミリアのアルバムはA、B面各6曲を収録した小品集。基本的にフォーク/トラッド的な演奏形態を取っているが、イタリアンポップスの愛聴家であれば歌物の延長として楽しめる作品だ。曲によってはハープシコードやメロトロン、バイオリン等を活用しアクセントを付けてはいるものの曲間の格差が大きいのが難点で、一概に評価を下しにくいタイプの作品ではある。が、全体的にほのぼのとした雰囲気に満たされているため、今一つ迫力不足との感は否めない。シンフォニック通が聴けばなおさらであろう。ただ、この手のサウンドを得意とするバンドは他に余り見受けられず、案外貴重な存在と言えるのかもしれない。 (江)

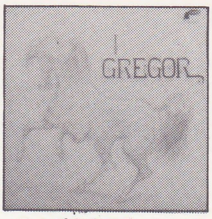


BILLY GRAY
Feeling Gray ?

POLYDOR : 2448 009 '72 廃

BILLY GRAY - VO, G
ADALBERTO ANDREOZZI - G
ROBY FAVARO - B
GABY MOSCHINI - DS, PER
GIAN LUIGI PEZZERA - P
SHEL SHAPIRO - G, KBD
PRO : SHEL SHAPIRO

71年、トリップは彼らの最高傑作とされる2ndアルバム"Caronte"を発表するが、ギタリストのビリー・グレイは同作を最後にグループを脱退、翌年ポリドールよりソロアルバムをリリースしている。ギタリストのソロのため標準的なロックサウンドが中心でプログレ色は薄いが、曲によってはストリングスを導入、シングルカットされたトリップの"Little Jenny"の様にゆったりとした歌で聴かせる佳曲も見られる。またキーボードを絡めての泣きのメロディーも適宜盛り込まれている他、B面ラストでは凄まじいばかりのブルースギターがうなりを上げるなど多少のメリハリは認められる。全曲とも彼のペンによるもので、グループを離れ伸び伸びしたタッチでのアルバム作りではあるが、歌詞が英語であることを含めイタリア的色彩は薄い。 (江)



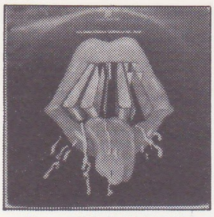
I GREGOR
same title

KANSAS 5300-504A '75 廃

A : LASIAMI UN SORRISO
NON SO CHE COSA HAI
DOMANI SI
NON PIANGERE PER ME
SAMBA PAMELA

B : CENTO RAGAZZE
IL COLORE DEI MIEI SOGNI
DOPO TANTO TEMPO
SPEGNI L'ILLUSIONE
CANZONE PER UN'AMICO

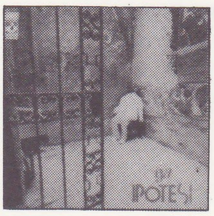
E.A.ポウやフラッシュマンを配したカンサス・レーベルにおそらく唯一のアルバムであろう本作品を吹き込んだグレゴールは女性キーボード奏者を含む5人編成のグループである。当時オーヴァーグラウンドに浮上できずに消えた一例えばストラーナ・ソチエタやG・メン等と同じタイプの歌を中心としたグループで、メロディや曲は非常に良いものを持っているのであるが、彼等の最大の欠点は良いアレンジャーにめぐまれなかったことであろう。全て自分達で演奏をしているのだが、それがかなり地味な印象を与えてしまうのである。彼等がもし、ジャンピエロ・レヴェルヴェッリにめぐり会っていたら、プーやアルンニ・デル・ソーレばりの作品に成った可能性が高い。スターダムを夢みて消えた惜しいグループである。(山)



GROUP X
Out, Off

RADIO : ZPLRR 34052 '78 廃

グループXは73年、"Frrrrrigidaire" (C.P.T. : LPOK-5) なる作品でアルバムデビューを飾っている。謎めいたバンド名と思わせ振りな変形ジャケが関心を集めたが、内容的にはフュージョン色の濃いものでプログレファンの支持は得られなかった。以来5年を経てリリースされた推定2枚目の本作は、出来としては 1st を遙かに上回る。サウンドトラックとしての録音のため短い曲が多いものの、コマ切れとの印象は受けず、またキーボード系が積極的に使われているためプログレファンでも十分に聴きこなせる好作品に仕上がっている。効果音の使い方等は、サントラを数多く手掛けているゴブリンの手法を思い浮かべてもらえばいいが、シンセの音色やメロディーライン等には若干暗い陰が感じられる。(江)

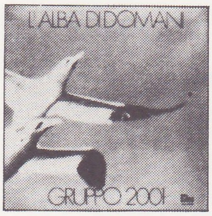


GRUPPO D'ALTERNATIVA
Ipotesi

EMI : 3C.064 17873 '72 廃

LEONARDO DOSSO - AC- G, FAGOTTO
GIANFRANCO FUMAGALLI - FL
PAOLO - RIZZI - B
ROBERTO ROMANO - KBD, PER
NINO FLENDA - DS, PER
TINO GUASCONI - VO
RODOLFO PACE - G
GIANCARLO BASSI - WORDS

グルッポ・ダルテルナティーヴァは72年に"Ipotesi" を題する個性的なアルバムをリリースしている。ピッキオ・ダル・ポッツォの 1st とも共通な準アヴァンギャルド的な展開を得意とするが、混沌とした中にもフルート、オルガン等イタリアのカラーを色濃く残したフレーズが見え隠れしている。"シンフォニック・ロック" と呼ぶには抵抗があるが、非常にち密で奥行きの深い曲構成を誇り、意表を突く展開は常に聴く者を魅き付ける。高度な演奏技術に裏打ちされた計算ずくの曲作りとも言えよう。グループは作詞家のG.Bassi を含め8人編成の大所帯だが、本作のみで解散してしまった模様。なお最近、一部の店でレギュラー入荷が見られたことから、同年代の他の廃盤に比べ安価での入手が可能と思われる。(江)



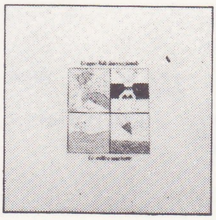
GRUPPO 2001
L'alba Di Domani

King
NLU 62019 廃 KING K25P-413 1972年

A: MAGGIO
UNA BAMBINA...UNA DONNA
ERA BELLO INSIEME A TE
PAESAGGIO

B: VOLO D'ANGELO
PADRE VINCENZO
DENISE
L'ALBA DI DOMANI

「明日への夜明け」と題されたグルッポ2001(ドゥエ・ミッラ・ウーノ)唯一のアルバムである。夜明けに向かって飛翔するカモメがこのレコードの内容をよくあらわしている。ロッカンダ・デレ・ファーテの持つ構成力とカンタウトーレ達の持つほのぼのとした愛の賛美が程よくブレンドされたそのサウンドはイル・ヴォーロやフォルムラ・トレにもその共通点を見い出すことができる だろう。切々と歌いあげるしゃがれ声のボーカルはリッカルド・コッチャンテ やクラウディオ・バリオーニ風であり、とてもあたたかみのあるものだ。イタリアの黎明とでもいうべき72年に製作され、人知れず消えていった彼等のサウンドは、しかし今尚、素敵な夜明けの歌を私達へと歌いかける。(山)



GRUPPO FOLK INTERNAZIONALE
Le Mille E Una Notte

L'orchestra
OM 101 1979年

A: CITTA BIANCA E AZZURRA
FESTA POMPOSA

B: MORTE DI SHERAZADE
DANZA FINALE

グルッポ・フォルク・インテルナツィオナーレは76年に結成されたバンドで以来「FESTA POPOLARE」(OLP 10005)、「DALOY POLITZEI」(OLP 10013)「IL NONNO DI JONNI」(OLPS 55001) と3枚のアルバムをロルケストラより発表、3枚目のアルバムを発表した79年にこのマキシ・シングルを同時にリリースする。従来のアルバムでの彼等のサウンドはイタリア、イギリス、メキシコ、ギリシャ等の民族音楽を独自の解釈でコンテンポラリーなものに変形させてしまうといったものである。しかし、このマキシ・シングルで聴けるサウンドは一段と冴えをみせているといえよう。そのサウンドはグリフォンとサード・イヤー・バンドを足したようなもので、別ないい方をすればイタリアのユニヴェル・ゼロ的なサウンドを有している。(山)



IL GUARDIANO DEL FALO
Domani

CETRA LPX53 '77 廃

A : DOMANI
OCCHI SCURI CIERO CHIARO
DOLCE SOGNI
PER UNA NOTTE
PER UNA NOTTE
QUESTA SERA O MAI PIU

B : LEI
THE HIGH AND THE MIGHTY
PAJASO
I ONLY HAVE EYES FOR YOU
DOMANI

主にフォニット・チェトラに作品を吹き込んでいるグアルディアーノ・デル・ファーロ(燈台守)がいったい何枚のアルバムをリリースしたのかは僕は知らない。長く、イージー・リスニング的なロック作品を手がけてきている。バック・ミュージシャンは流動的であるが、基本的にシンセサイザー奏者を中心としたユニットである。本アルバムではドラムにトゥリオ・デ・ピスコポ、ベースにジジ・カペロットを迎え、イタリアらしいソフトなイージー・リスニング・ロックとでもいうべきものを聴かせてくれる。生のストリングス・オーケストラも導入される。プログレッシヴ・ロックとはいい難いが、そこに流れる情熱は充分にイタリアのアイデンティティーを感じることができる。一聴に値する作品であると思う。(山)



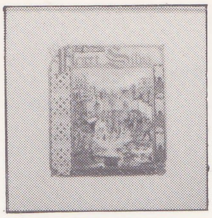
GUERCIA(Figura Goffa)

same title

GUERCIA : 8224 482 '82 廃

DANIELLE FERRETTI : DS, AC-G, VO
ADRIANO TARRONI - B
GIULIANO PANTOLI - G
VITTORIO BONETTI - P, KBD, SYN

ゲルチアは82年に１枚のアルバムを自主製作しているテクニカルな４人組である。往年のプログレ名作群に比べると遜色は隠し切れないが、80年代の作としてはまずまずの出来だ。尤も〝軽薄短小〞が主流である時代性に照らしてみても、かつての様な重々しい音作りが期待出来ないのも無理からぬこと。果たして本作でも軽やかなテンポのナンバーが中心となり、フュージョンタッチの仕上がりとなっている。時たま流れるアープオディッセイの音色や一部のメロディーラインにイタリアらしい影をかすかに伺い知ることが出来、純然たるフュージョンとは言い難いが、いわゆる〝ポンプ〞とも全く流れを異にし、プログレッシヴロックと呼ぶには若干物足りなさが残る内容である。（江）



KAY HOFFMANN

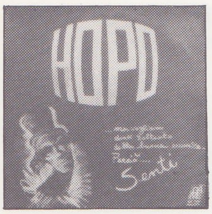
Floret Silva

BELLE ANTIQUE 8502 '85 廃

A : ISTE MUNDUS
FLORET SILVA
EXORCIMUS
ICH WILL TRUREN
RONDO
MAI TANZ
QUOT SUNT HORAE
TOT
SONUS DULCIS LYRAE

B : OUVERTURE ZUM FEST
INTERMEZZO
TEMPO INSTAT
LANGUEO
CHUME, CHUME
NUMMUS
POST COMMUNIO SANCTI CYRILLI

フロレット・シルヴァはドイツ人女性ケイ・ホフマンを中心にフィレンツェで結成されたグループで、ピエロ・リュネールのジャクェリーネ・ダルビィやガイオ・キョッキョ等を迎えて77年にアルバムを一枚制作した。中世歌謡カルミナ・ブラウナを原曲に彼等独自の解釈をほどこしたもので、ピエロ・リュネールやオパス・アヴァントラ等と同等に評価されて然るべき作品である。彼等個々のメンバーの音楽的素養は多岐に渡るが、それが良くこなれた形でサウンドに反映しているのが素晴らしい。このアルバムはリリースされることなくオクラ入りになっていたものを本誌ベル・アンティーク・レーベルが85年にリリースしたものである。グループ解散後はメンバー達はソロ活動を続けている。（山）



HOPO

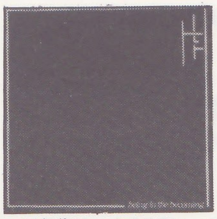
Senti

GAME GLP11982 '82 廃

A : SENTI
PER STRADA
NASCONDINO DELLA LUNA

B : RANA
CREMA
SINGOLARITA

以前に比べるとかなりプログレ関係のレコードも入手し易くなり、80年代に関しては聴きもらしは少なくなったように思われる。とはいえ、イタリアとなると話は別だ。レコードの流通機構がちがうせいか、大手レーヴェル以外はなかなか輸入されて来ない。このHopo の多分唯一のアルバムも人知れず廃盤となってしまったようだ。短い曲はポップな感覚を持った曲で、彼らの真価が発揮されるのは長い曲である。彼らの特徴は曲作りのおもしろさと甘く美しいトーンのギターにあるだろう。さらには、控えめで美しいキーボード、歯切れが良く素直なヴォーカル、ドラマーの吹くフルートとレコードを一気に聴かせる力を持っている。テクニカルにせまる訳ではないのに、好印象をあたえるのは、メロディを重視し、意外な展開をみせる曲作りにある。（吉）



HUMAN EXPRESSION

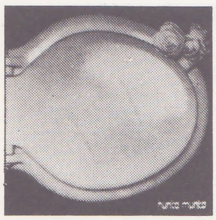
Being In The Becoming

HE 7 '85

A : TOWARDS THE ETERNAL
PASSED INSTANTS
EXPECTATION

B : A LONG WAY
DREAMS THAT WILL NEVER END
TO A RISING GENERATION
WATCH WAITING

80年代は、イタリアン・プログレッシヴは完全に死滅していたかのような様相だったが、実は、自主製作レベルではあるが、新しいグループが生まれていたことが判明した。しかし、それらのグループのほとんどはＬＰを製作するに到らず、テープ作品をリリースするに止まっている。しかし例外的にＬＰをリリースしているグループが２つ存在し、１つがヨウロッパ(EUROPE)、もう１つがこのヒューマン・イクスプレッションである。黒に統一されたジャケットや、御手製のブックレットをみると、手創りの良さが伝わってくる。イタリアくささこそ少ないものの、夢幻的なイメージのトータル色の濃い素晴らしい作品である。ちなみにバロックというグループはテープではあるが、やはり高水準の音を有しているニュー・グループである。（山）



HUNKA MUNKA

Dedicato A Giovanna G.

Dischi Ricordi
SMRL 6096 廃 1972年

A: NASCE UN GIORNO
RUOTE E SOGNI
L'AEREOPLANO D'ARGENTO
CATTEDRALI DI BAMBU
ANNIVERSARIO

B: IO CANTERO' PER TE, INTERMEZZO N.1
GIOVANNA G.
INTERMEZZO N.2
IL CANTO DELL AMORE
MUORE IL GIORNO MUORE

ディスキ・リコルディより、72年にリリースされた本アルバムは、元アノニマ・サウンドのキーボード奏者ロベルト・カルロットのソロアルバムである。（シングルはリコルディに２枚、後にN.UNOに１枚ある。）フンカ・ムンカはキーボードとヴォーカルを担当しており、たおやかなセンスの良いメロディにプログレッシヴなアレンジをほどこした曲で占められている。。ポップな曲と叙情的な曲がブレンドされているが、どちらの曲想も美しいイタリア語で埋めつくされ、演奏もなかなかの名盤といえる。特にＡ－４が驚くべき出来。尚、ジャケットは便器をあしらったもので蓋の部分が開くようになっている変わり種である。（山）



IBIS

Sun Supreme

Polydor 2448-022 廃　ポリドール 23MM0144 廃　1974年

A: DIVINE MOUNTAIN/ JOURNEY OF LIFE PART 1～4

B: DIVINITY. PART 1～3

72年、ニュー・トロルスが二つに分裂した際、ニコ・ディ・パーロ、ジャンニ・ベッレーノ、フランク・ラヴジェッリ、マウリツィオ・サルヴィの４人はヴィットリオ・デ・スカルツィと別れ連名のアルバムを発表した。その後、ジャンニがトリトンズに参加しリック・パーネルと交替、イビスと名乗り、74年に制作されたのが本作である。ニコの音楽性を反映し、かつ、国外市場を意識したイビスの音楽は、本作では組曲となっており、ハードな音作りが中心となっている。75年にはマウリツィオ、リックに替え、レンツォ・トルトーラとパスクァーレ・ヴェンディッテを迎え、２作目「イビス」を発表するが、ニコがヴィットリオと和解しジャンニとともにニュー・トロルスへ復帰したことにより、イビスは活動を停止した。（松）



IN TRE SULLA STRADA
same title

RADIO : RRS 153 '73 廃

A : RIFRESSIONI
SE DEVO DIRE LA VITA'
IL SALE NEL CAFFE'
MEDITERRANEA
IERI E DOMANI

B : SENZA RITORNO
IN TRE SULLA STRADA
L'INTERVALLO
SOLTANTO UN'ORA
CASA E STRADA

イタリアン・ロック絶頂期の隠れた1枚。メンバーは3人で中心人物Rinaldo Prandoniはボーカル、ギター、キーボードを担当し更に作曲、アレンジまで一手に引き受けている。テクニカルな面では語るべきものは何もないが、A-1､2の美しさには無条件に感動する。爪弾かれる生ギターの調べに聴き惚れる内に知らぬ間に次曲は始まり、いつしか淡い郷愁と悔恨の彼方へと移行する。展開自体極めて単純であり、目新しいものは何もない。しかしそれでも尚この古法に則った、心の深奥に働きかけるかのような、淋し気なメロディーと愁いを帯びたボーカルは、眠りについた筈の記憶を呼び醒まさずにはおかない。E.A.Poe, Formula 3等を更に私的にしたようなと言ったら少しは的を得ているだろうか？ (鈴)



JACULA
Tardo Pede In Magiam Versus

THE ROGERS TRS 010001 '75 廃

この一枚の作品は、正にイタリアという国土がキリスト教生誕とバロック音楽発祥の地であるという事を改めて再認識させてくれるであろう。いや、それぱかりか数多くの名作を輩出したイタリアン・ロック界の頂点を極めた、金字塔とも言うべき名作であると断言できる。宗教の持つ荘麗かつ至上の愛に包まれた明るさとは正反対に、彼らには邪悪と暗黒、怪奇とパラノイアの渦巻く奈落の底へと引きずり込むかの様な緊迫が漂っている。パイプオルガンと、何かに取り憑かれたかの様に歌いあげる女性 Vo をメインに、チェンバロ、フルート、ヴァイオリン、ベース…etc が絡んでいく様は、ダンテの神曲を我々の目の前に体現しているかのようだ。75年に自主製作された、悪夢の世界への招待状である。 (大)



J.E.T.
Fede, Speranza, Carità

Durium
ms A 77307 廃
1972年

A: FEDE,SPERANZA, CARITA
IL PRETE E IL PECCATORE

B: C'E CHI NON HA
SINFONIA PER UN RE
SFOGO

ドリウム・レーベルは、イタリアン・ロック・ファンの間でも割と馴染みの薄い存在だが、イタリア本国では規模の大きい会社であるらしい。中ジャケに貼り付けられている金杯が、表ジャケのくり抜かれた部分から浮き出ているという、気品溢れるジャケットに包まれたJ.E.T.のアルバムは、全体的にハードな音創りがなされている。全盛期のユーライア・ヒープを彷彿とさせるようなA－1のタイトル・ナンバーは、その代表的な存在だが、B面では、ニュー・トロルスの｢U T｣中の名曲｢Chi Mi Può Capire｣を思わせるような、シンフォニックな趣を持った曲も聴かれ、いずれもがそれなりに魅力的である。全体的な出来としては、中堅的存在といった印象だが、忘れ去られてしまうには惜しい好作品と言えよう。 (城)

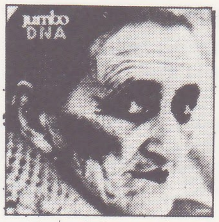


JUMBO
same title

PHILIPS : 6323 012 '72 廃

ALVARO FELLA "JUMBO" - VO, AC-G, PER
VITO BALZANO "JUARAK" - DS, PER, VO
"SAMUEL" CONTE - KBD, VO
"PUPO" BIANCHINI - G
DARIO GUIDOTTI - FL, HC, AC-G, VO
ALDO GARGANO - B, EL-G

ジャンボはヌメロ・ウーノからシングルデビューを飾った後、フィリップスに移り 1st アルバムをリリースしている。日本ではたまたま、セッション的色彩の濃い 3rd アルバムが最初に紹介されたため誤った先入観が植え付けられてしまった嫌いがあるが、本作では彼らの原点とも言うべき泥臭いブルースロックがとっくりと聴ける。ブルース特有のコード進行に渋めのギターやハーモニカが絡めば、もうそこはプログレ愛好家の守備範囲ではないがこうした曲展開ではA.Fellaのダミ声が俄然生きて来る。ただしB面に入るとピアノ、フルートの使い方等、2ndと共通の要素も見られるようになり多少趣が変わって来る。素朴な印象さえ与えるB-1の曲は、次作A-3にも収録され、迫力満点となって再登場することになる。 (江)



JUMBO
DNA

Philips
6323-017L 廃
1971年

A: SUITE PER IL SIG K
①Sta Accadendo Qualcosa Dentro Me
②Ed Ora Corri
③Dio E

B: MISS RAND
E'BRUTTO SENTIRSI VECCH
HAI VISTO...

ジャンボのセカンド・アルバム。サード・アルバムがゲスト・ミュージシャンを加え、緻密な構成とハイクォリティな演奏力を誇るのに対し、本アルバムは、オリジナル・メンバー自身によってのどかさを感じさせる歌を中心にしたしぶみのある曲を展開させている。クセのあるボーカルが好き嫌いを分けてしまいそうな気がするが、聴き込めば聴き込む程に深みが増してくるアルバムだと私は思う。バックに流れるピアノやフルートがとてもイタリア然とした響きを持っている。この時点でのメンバーは、アルヴァロ・フェッラ(Vo.Gui)、ヴィート・ヴァルツァーネ(Dr)、セルジォ・コンテ(Org)、ダニエーレ・ビアンキーニ(G)、ダリオ・グイドッティ(Fl)アルド・ガルガーノ(Bas)。 (山)



JUMBO
Vietato Ai Minori Di 18 Anni？

Philips
6323 025A 廃
1973年

A: SPECCHIO
COME VORREI ESSERE UGUALE A TE
IL RITORNO DEL SIGNOR K
VIA LARGA

B: GIL
VANGELO?
40 GRELO?
NO!

ジャンボのサード・アルバム。彼等は本アルバムを最後に解散してしまう。前作とはうって変わり、サウンド重視のアルバムとなり、テクニックを前面に押し出した緻密な構成力を誇っている。アルヴァロ・フェッラ(ヴォーカル、アコースティック・ギター、ピアノ、オルガン、サックス)、セルジォ・コンテ（キーボード)、ダリオ・グイドッティ（アコースティック・ギター、フルート、ハーモニカ、エレクトリック・ギター)、ダニエッレ・ビアンキーニ（アコースティック・ギター)、アルド・ジャルガーノ（メロトロン他)、ツッリオ・グラナテッロ（ドラムス）のメンバーの他、ムゼオにも参加していたアンジェロ・ヴァッジ（ミニ・ムーグ）やフランコ・バッティアート等多彩なゲストも参加している。 (山)



LATTE E MIELE
Passio Secundum Mattheum

Polydor 2448 011A 廃　ポリドール 23MM 0146　1972年

A: INTRODUZIONE
IL GIORNO DEGLI AZZIMI
ULTIMA CENA
GETZEMANI
IL PROCESSO
I TESTIMONI (PARTE 1)

B: I TESTIMONI
IL PIANTO
GIUDA
IL RE DEI GIUDEI
IL CALVARIO
IL DONO DELLA VITA

新約聖書中の〝キリスト受難〟をテーマに創られたこのアルバムこそ、イタリアン・ロック史上、まごうことなき最高の名盤だ！　ヨーロッパの伝統芸術に触れる時、その精神的背景にあるキリスト教の存在の大きさを認識せずには決していられない。同じ聖書の内容にしても、ほとんど原体験に近いヨーロッパ人にとっての重み、深みは、(信仰の有無に関わらず)「知識」ないしはそれに類するものとしてしか得ない我々日本人から見れば、到底はかり知れないものだ。そしてそこから生まれる「真実」に圧倒され、「伝統」を感じとる時に、私達はこの作品の素晴らしさを知るのだ。多彩なキーボード群とか、合唱団を使っているとかは、この作品を賛辞する上で、あくまで二次的なものにすぎない。（城）



LATTE E MIELE
Papillon

Polydor 2448 015A 廃　ポリドール 23MM 0147 廃　1973年

A: PAPILLON
PRIMO QUADRO
SECONDO QUADRO
TERZO QUADRO
QUARTO QUADRO
QUINTO QUADRO
SESTO QUADRO
SETTIMO QUADRO
DIVERTIMENTO

B: PATETICA:
PARTE PRIMA
PARTE SECONDA
PARTE TERZA
STRUTTURE

彼等の第2作はファーストが発表された翌年の73年9月にリリースされた。メンバーは全く変わっていないがストリングスとホーンが入っている。タイトルの「パピヨン」とは、人形劇で、ルナ・パークでみた人形劇にインスパイアされて彼等がそれを音楽化したもの――がこのセカンドアルバム―パピヨン―である。A面の組曲はこの物語がテーマになっている。B面はショパン、バッハ、ヴィヴァルディの曲をアレンジしてまとめたもの。この後、解散しドラマー(当時18才)を残し全てメンバー・チェンジを行い76年に再編されマグマより3枚目をリリース。その後もラッテ・ミエーレ名儀のシングルを製作するが、完全なポップスになってしまっている。(い)



FAUSTO LEALI
Amore Dolce, Amore Amaro, Amore Mio

CBS 69173 廃　キング K22P-227 廃　1975年

A: IL VOLO DELLA FARFALLA
BRUCIA IL PARADISO
AMORE DOLCE, AMORE AMARO, AMORE MIO
UNA GRANDE FESTA
L'ULTIMA VOLTA

B: UNA CHIESA DI ALBERI E GINESTRE
HEY PSST PSST DONNA
DUM DUM LA LA
AMORE VIVO
AI DEDIK IU

カンタウトーレであるファウスト・レアーリが、バックをセカンド・アルバムを出した当時のイル・ヴォーロに託したアルバム。レアーリは他にも「LEAPOLI」等数枚のソロ・アルバムがある。独特のしゃがれ声を持つレアーレとイル・ヴォーロのサウンドは見事に一体化して生き生きとした印象を受ける。特にタイトル・チューンであるA－3が典型的な例といえるだろう。B面ラストではイル・ヴォーロのみのインストゥールメンタル・チューンが収録されているが、恐らくこの曲はイル・ヴォーロのセカンド・アルバム録音時に於ける未発表テイクであろうと思われる。ラディウスの12弦ギターが印象的である。尚、国内盤にはアルバムの未発表テイクが収録してある。（山）

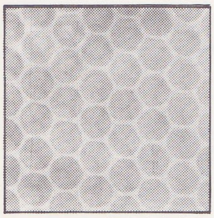


LEO NERO
Vero

EMI : 3C.064 18272 '77 廃

LEO NERO - KBD
PRO : CORRADO BACCHELLI

IL BALLETTO DI BRONZOのキーボード・プレイヤー、ジャンニ・レオーネはレオ・ネロと改名して77年に 1st ソロアルバムを発表した。その存在自体は早くから知られていたが、地味なカヴァーが災いしてか日本に初めて入って来たのは意外に遅く、3年程前のことである。様々な憶測が流れていたが出来としてはほぼ期待通りのものと言ってよさそう。A面は歌を中心にしたちょっと意外な展開であるが、典型的なイタリアンサウンドで、十分に楽しめる。圧巻はB面のプログレパートだ。多種多彩なキーボード群を自在に操り、若干ヘヴィな面が失われつつあるものの、バレット時代を彷彿とするプレイで聴く者を陶酔の世界へといざなう。なお、3年後に発表した 2nd ソロ“Monitor”はニューウェイヴ色の濃いものになっている。（江）



FRANCO LEPRINO
Integrati...Disintegrati

ELEVEN ELC25133 '77 廃

A : PARTE 1°　B : PARTE 2°

Leprino の作り出す音楽は、寄せては引く波の如く反復をくり返し、聴く者の内面に向って語りかけてくる。時には安らぎを与え、時には意識をめざめさせてくれる。イタリアにあってはこの種の音楽はほとんどなく貴重な存在であろう。それだけにとどまらず、内容的にも成功していると思われる。彼の本業はギターらしく各種多様に使いこなしており、他にもシンセサイザー、ヴァイヴなどの演奏も行いセンスの良いところを見せている。両面で1曲という大作ながら、ピアノ、フルート、オーボエ、効果音を盛り込み単調さを克服している。このアコースティック楽器の使用がメカニックな感じをなくし、彼のめざしているサウンドを一際輝けるものにしているようだ。また、この Eleven レーヴェルは Fonit Cetra 系でファンの興味をそそらせる。（吉）



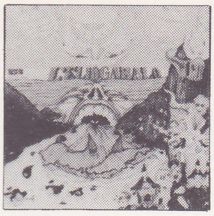
LOCANDA DELLE FATE
Forse Le Lucciole Non Si Amano Piu'

Polydor 2448 055 廃　ポリドール 23MM 0148　1977年

A: A VORTE UN ISTANTE DI QUIETE
FORSE LE LUCCIOLE NON SI AMANO PIU'
PROFUMO DI COLLA BIANCA

B: CERCANDO UN NUOVO COFINE
SOGNO DI ESTUNNO
NON CHIUDERE A CHIAVE LE STELLE
VENDESI SAGGEZZA

西洋音楽が数百年来追い求め続けてきた構築美――その一つの完成された姿がここにある。ツイン・ギター、ツイン・キーボード、ベース、ドラム、ヴォーカル、そして時折ギタリストが吹くフルートも加えた、計7人のメンバーによって織り成される完璧無比なアンサンブルとテクニックには、聴く者すべてが圧倒されるに違いない。イタリアン・ロックがその輝きをほぼ失いかけていた'77年にロカンダ・デッレ・ファーテは世に出た。しかし彼らは、その先駆者達が持ち続けてきた〝美意識〟を見事に受け継ぎ、遂にそれを極限にまで昇華させてしまったのだ。この煌きを、一体どのような言葉を用いて伝えたら良いのか。とにかく、すべての人々にこの作品を聴いていただきたい。ただそれを願うばかりである。（城）



EMILIO LOCURCIO
L'Eliogabalo

UNA SORS CONIUNXIT : ZPLU 34023 '77 廃

派手なイラストカヴァーに包まれたエミリオ・ロクルチオ名義のアルバム〝レリオガバーロ〟は、彼自身の他、ルチオ・ダッラ、テレサ・デ・シオ、クラウディオ・ロッリを配役に据えたオペレッタが収録されている。イタリア語で早口にまくし立てる唱法が好みを別つ感があるが、非常に完成度の高いプログレッシヴ・ロックが聴かれる。Pierrot Lunaire, Crash, Odeonの３グループがバックを務めているが、注目のPierrot は主にアコースティック・パートを担当、ピアノやメロトロンの奏法に面影を伺い知ることが出来る。が、彼らの演奏ばかりを前提とした評価はこの際避けるべきだ。どのパートに針を落としても、ズッシリとした確かな手応えは同じなのである。70年代後期を代表する好作品と言えるだろう。　(江)



MUZI LOFFREDO
Tu Ti Nni Futti !

IT : ZSLT 70031 '76 廃

MUZZI LOFFREDO - VO. G.
ARTURO STALTERI - ORG, P, EL-G, SYN, PER, CELESTA
GAIO CHIOCCHIO - EL-G, B, CELESTA

ムッツィ・ロフレッドというシンガーのアルバム。ピエロ・リュネールのA.スタルテッリ、G.キュッキョが参加している。裏ジャケには、グループとしてのPierrot Lunaireの名が見て取れるが、中心はあくまでもMuzzi。一聴してピエロと認識出来るナンバーは1分にも満たない2、3曲のみだ。基本的にはアヴァンギャルド・トラッドといった趣で、大半がギター伴奏をバックにした悲痛な叫びとも言える歌声で埋め尽くされている。全編を支配する重々しく陰鬱な雰囲気で好き嫌いが分かれそうだが、甘さと切なさの大盤振る舞いに飽食気味のリスナーにとっては耳を傾けてみるのも一興だろう。尤も、その特異な世界を垣間見た時は少なからずショックを受けるだろうし、針を落としたまま終幕まで付き合えるという保証は出来ないが。　(江)



L'UOVO DI COLOMBO
same title

EMI　1973年
3C.064-17889 廃

A: L'INDECISIONE
10
ANJA
VOX DEI

B: TURBA
CONSIGLIO
VISIONE DELLA MORTE
SCHERZO

このルオヴォ・ディ・コロンボは５人編成のダブル・キーボード・バンド。所々ギターも入っているが、あくまで補助的な演奏にとどまっている。"A&R Suppoter"とクレジットされたリノ・チェリという人物の担当楽器が明確ではないが、彼とエンゾ・ヴォルピーニの２人がキーボーダーであると推測される。ピアノ、オルガン、シンセサイザー、ストリングス等のキーボード群をメインに繰り広げられるそのサウンドは当時のイタリアにあっても決して目新しい物とは言えないが、このグループの場合リズム隊の好プレイのおかげで作品全体が引き締まったものとなり、他の同系統グループの作品と比べても見劣りしない出来となっている。個性に欠ける点は少々残念だが、キーボード・ファンには必聴の一枚だろう。　(城)



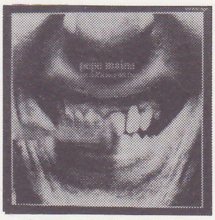
MADRUGADA
same title

Philips　1974年
6323 033 A 廃

A: MADRUGADA I
CAMMINAR
VIENI NELLA STRADA
UOMO BLU

B: D.M.T.
MANDRAX
MADRUGADA II

76年に「インカストロ」というアルバム（ＰＦＭに加入したバイオリニスト、ルチオ・ファブリなどをゲストに迎えている。）を発表した３人組のグループ、マドルガーダのこれは１枚目のアルバムである。詩情に満ちた美しい音世界を展開するこの作品は、例えばイ・ディク・ディクやエキペ84あるいはＵＴといった当時の多少ラヴ・ロック的なグループが残した名作に勝るとも劣らない内容となっている。キーボード類こそ多用してはいないが美しく清らかなボーカル・ハーモニーとイタリア的な叙情的なメロディー・ラインがトータルな構成の中に泉の如くあふれ出る。夢見るような音の綴織りの中でみずみずしい生命の息吹きを感じずにいられない。(鈴)



PEPE MAINA
Il Canto Dell'Arpa E Del Flauto

ASCOLTO ASC 20004 廃
KING GXH-2018 廃

A: IL CANTO DELL'ARPA
IL CANTO DELL'ARPA E DEL FLAUTO
SPRING SONG

B: TWO BALLS
AFRICA
IL CANTO DELL'ARPA E DEL FLAUTO
SAN NICOLA

前衛的な作品を世に送り出し、注目をあびたユニークなレーベル、アスコルトより唯一のアルバムをリリースしたペペ・マイナは、ミステリアスなヴェールに包まれたマルチ・ミュージシャンである。国内盤もリリースされたので日本での知名度はあるが、本国では極めてマイナーな存在であったことは想像できる。ハープ、フルート、ギター、ピアノ、ピッコロ、パキスタン・ベル、リラetcを使用して、たおやかな地中海音楽のうねりを雄大に表現したペペ・マイナの音楽性は唯一無比のものであり、プログレッシヴ・ロックの持つ、もう一つの側面を見事に描き切った意欲作である。蛇足ながら、このアスコルト・レーベルはカテリーナ・カッセルリが革新的なアーティストを育てる為に設立したレーベルで、他にも好作品がある。　(山)



MATIA BAZAR
1

ARISTON : AR/LP 12283 '76

先頃来日公演を果たしたマティア・バザールの 1st アルバムである。ムゼオやジェットに在籍したミュージシャン達を中心に結成されたバンドと聞いて、これほど現代感覚溢れる洗練されたポップ・サウンドを想像できる人はいまい。ラッテ・ミエーレ等と同様、過去のサウンドとはキッパリと訣別し、時代の流れの中に積極的に身を投じたことが結果的に成功へとつながったわけである。当時のリーダーは殆どの作曲を担当したキーボード奏者ピエロ・カッサーノ（81年に脱退）で、フュージョンタッチのソフトなナンバーから無難なイタリアンポップスまで幅広く手掛けているが、全体的に、声量豊かな女性ヴォーカリスト、マティアの歌声が十分に生かされた作りになっている。なお、2ndではライヴが聴かれる。　(江)



MAXOPHONE
same title

Produttoriassociati 1975年
PA/LP 57 廃

A:C'E UN PAESE AL MONDO
FASE
AL MANCATO COMPLEANNO DI UNA FARFALLA

B:ELZEVIRO
MERCANTI DI PAZZIE
ANTICHE CONCLUSIONI NEGRE

マクソフォーネが残した唯一のアルバムでは、極めて高水準のシンフォニック・ロックが聴ける。各メンバーが圧倒的技量と洗練された感覚の持ち主で、そのプレイを叙情派ロックの範疇で語るには難がある。ホルン、サックス、クラリネット、フルート等の管楽器を多用した饒舌なアンサンブル、目まぐるしく入れ替わる個々のソロはジャズをも包含し、加えてボーカル・ハーモニーのポップ性はバロック・ロックに耳慣れた私達には新鮮である。しかし随所に押し寄せるパッションの嵐、これこそが本作を叙情派たらしめ、パステル・カラーのジャケットも彼等のロマンチシズムを伝えるには充分である。尚、ドイツ盤はテイク違い、本国イタリアではアルバム未収録のシングルがリリースされている。 （古）



METAMORFOSI
...E Fu Il Sesto Giorno

Vedette 1972年
VPA 8168 廃

A:IL SESTO GIORNO
E LUI AMAVA I FIORI
CREPUSCOLO

B:HIROSHIMA
NUOVA LUCE
SOGNO E REALTA'
INNO DI GLORIA

メタモルフォッシはヴェデット・レーベルに２枚のアルバムを残している。このアルバムの存在を知る人の多くは、これが２ndだと言っている様だが、それは本作の番号が8168で、一方の「Inferno」が8162であるためだろう。しかし、レーベルに表記されている発表年は、本作が1972年で、一方が1973年となっており、音の方と照らしてみても、本作を１stとする方が納得がゆく。と、いうわけで、このメタモルフォッシはVo.＋flute,G,B,Key,Dr.の５人編成のバンド。サウンドの核は華麗なキーボード群である。A・B面とも基本的には同様の音創りがなされているが、よりドラマティックな内容のA面に彼らの持ち味が発揮されており、これが次なる名作「Inferno」へと受け継がれてゆくのである。 （城）



METAMORFOSI
Inferno

Vedette 1973年
VPA 8162 廃

A:INTRODUZIONE
SELVA OSCURA
PORTA DELL'INFERNO
CARONTE
SPACCIATORE DI DROGA
TERREMOTO
LIMBO
LUSSURIOSI
AVARI

B:VIOLENTI
MALEBOLGE
SFRUTTATORI
RAZZISTI
FOSSA DEI GIGANTI
LUCIFERO(POLITICANTI)
CONCLUSIONE

前作のメンバーからギタリストが抜け、ドラマーも交替し、より強固なチーム・ワークによって創りあげられたこのアルバムこそ、イタリアらしい美と力強さに満ちた名作中の名作だ。徹底的にキーボードをフィーチャーし、これでもかこれでもかとばかりにスリリングな場面が続く。バンコやラッテ・エ・ミエーレに魅せられたことのある人がこの音を聴けば、きっと溜め息が出てしまうに違いない。こんな文章を読んだ時、あなたは一体どうすれば良いのか。札束を握りしめてレコード店に駆け込むのか。あるいは微力ながらも、日本発売を望む声をレコード会社やこのマーキー・ムーンに寄せるか。それとも端から諦めて知らんぷりを決め込むか。どれを選ぶもあなたの自由だ。とにかく、良く考えていただきたい。 （城）



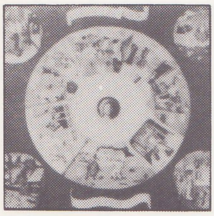
PASQUALE MINIERI & GIORGIO VIVARDI
Carnascialia

MIRTO 6323 750 '79 廃

A：CANZONE NUMERO UNO
FIOCCHI DI NEVE E BRUSCOLINI
ALMEISAN

B：KAITAIN
CRUZEIRO DO SUL
CAMELA

玄人好きの作品をリリースしていたミルト・レーベルから発表されたこのアルバムは、カンツォニエーレ・デル・ラッツィオのジョルジオ・ヴィヴァルディを中心にデメトリオ・ストラトスやマウロ・パガーニ等が参加して創られたものである。地中海音楽～アレア～マウロ・パガーニ～カンツォニエーレという硬質でレベルの極めて高いミュージック・アマルガムの様相を呈しているといって良いと思う。A面はどちらかというとカンツォニエーレのヴァイオリニスト、カルロ・シリオットのソロ・アルバムにも通じるようなゆったりとした地中海音楽が、B面はより硬質なアヴァンギャリズムを注入した作品である。又、デメトリオが死去する直前の録音としても話題を求める一枚。 （山）

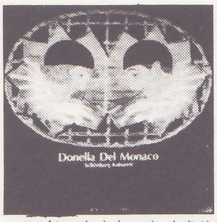


MIRO
Real Life Games

VEDETTE：MLP 5551 '77 廃

MIRO - VO
KEN STAGE - G
MARCO PELLEGRINI - DS
GIANNI DALL'AGLIO - PER
LUIGI CAPPELLOTTO - B
VINCE TEMPERA - AC-P, EL-P, SYN, PIPE ORG
LUIGI QUAGLIA - P
PRO：ALLAN GOLDBERG

実力派シンガー、ミーロの作品の中で、元イル・ヴォーロのジャンニ・ダラリオ、ヴィンチェ・テンペラ等をゲストに迎えて製作された本作は一際光っている。V.テンペラの奏でるキーボードがイニシアチヴを取るバックの演奏は、時にイル・ヴォーロの面影が見え隠れするほどで、70年代前半のみずみずしい感覚が色濃く残されている。加えて、テンペラによるストリング・アレンジも見事なもの。一方でA-3の様にファンキーでポップなナンバーも聴かれるが、イタリアンロックのファンであれば十分に傾聴できる作品となっている。難点は全曲とも英語で歌われていること。79年発表の"Amniguitá"という作品を聴いたが、よりポップで軽やかな音作りがなされており、むしろ本作よりも英語が似合いそうな雰囲気である。（江）



DONELLA DEL MONACO
Schönberg Kabarett

Cramps 1978年
5207305 廃

A:GALATHEA
GIGERLETTE
DER GENUGSAME LIEBHABER
EINFALTIGES LIED
MAHNUNG JEDEM DAS SEINE
ARIE ANS DEM SPIEGEL VON ARKADIEN

B:NACHTWANDLER
ECLOGE
DER WANDERER
ERWARTUNG

'82年に亡くなったイタリアの名テノール、マリオ・デル・モナコの姪であるドネラ・デル・モナコのソロアルバム。彼女はオパス・アヴァントラの一員として74年と75年にそれぞれアルバムを発表したがその後バンドは解散してしまう。以後、ITALIA、クランプス、HOLLYと現在までに３枚のソロアルバムをリリースしてシリアス・ミュージック畑で活躍中である。このアルバムはシェーンベルグの歌曲集であり、ピアノをバックに彼女が完全にシリアス・ミュージック側の唱法で歌っているものである。全てがシェーンベルグが20代の時に書き下ろした作品で、ロマン派の色彩の濃い作品である。テキストはリヒャルト・デーメル、ニーチェ等によるもの。 （山）



ADRIANO MONTEDURO E REALE ACCADEMIA DI MUSICA
same title

RCA 1974年
TPL1-1038 廃

A: BUONGIORNO NEL BOSCO
LA FAVOLA DEL GUARDIANO DEL BOSCO
MEZZOGIORNO
LE FIGLIE DELL'ERBA

B: VIAGGIO LIBERO
LE MONTAGNE NEL TRAMONTO
PRELUDIO A...
UNA CANZONE
SUONI DI UNANITA

ギタリストであるアドリアノ・モンテドゥーロとレアーレ・アカデミア・ディ・ムジーカの共演盤。この時点でのレアーレは、オリジナル・メンバーはキーボードのフェデリコ・トロイアーニとドラムスのロベルト・センサソーノの二人となってしまったが、それでもあのアコースティックピアノを中心とするレアーレ節は健在である。レアーレのアルバムでもそうであったように、歌を大切にしながらも時としてもり上がるインストゥールメンタル部の叙情は、地味ながらも甘美な調べをつくり出している。A－1は後半部の演奏が素晴らしい。又A－2の印象的なスキャットは私達をイタリアの街並へとさそい込んでくれるかのよう。ジャケットもとても綺麗だ。（山）



MORGAN
Nova Solis

RCA 1972年
LISP 34154 廃

A: SAMARKHAND
THE GOLDEN
ALONE
WAR GAMES

B: NOVA SOLIS

イギリス人モーガン・フィッシャーのグループ「モーガン」のファースト・アルバム。ホルストの惑星をアレンジしたりして軽快なプログレッシヴ・サウンドが繰り広げられている。翌年、ヴォーカルをロベルト・サブセッドからティム・スタッフェルに替え、前作同様の見事なアルバムを制作するが、これは76年にアメリカのインポートレコードからリリースされるまでは陽の目を見なかった。（BROWN OUT IMP1006）彼は後にイギリスに戻りモット・ザ・フープル、モット、ブリティッシュ・ライオンズを経てソロ活動にはいり、ロル・コックスヒルとのデュオ、ミニアチャーズの編集を行ない、又、ハイブリッド・キッズと自らを称しアルバムを一枚発表している。（山）



IL MUCCHIO
same title

Carosello 1970年
SCLN 25001 廃

A: PER UNA LIBERTA
QUALCUNO HA UCCISO
IL CAMMINO DI CHI NON VERRA

B: MISERICORDIA
UN ANGELO VERO
AVE MARIA
QUESTI SIAMO NOI

イル・ムキオが本作を発表したのは'70年のこと。他の多くのグループが活動を起こし始めながら未だあるレベルに達し得ないでいたこの早期にムキオはイタリアン・ロックの魁と言うべきサウンドを創り上げていた。詳しいクレジットがないので楽器編成が明確ではないが、おそらくVo. Keyb.×2、B. Dr.の5人と思われる。一応ダブル・キーボードのスタイルではあるが、彼らの音の特徴はそのキーボード・プレイよりもむしろヴォーカルが歌い上げる哀愁漂うメロディーにあると言える。イタリアン・ロックに限った事ではないが、その土地の香りと、そしてそこに住む人々の精神の発露から生まれた音楽の魅力は、多少の年月を経て変質する様なものでは毛頭なく、むしろ時流と無関係に生き続けているのである。（城）



MURPLE
Io Sono Murple

Basf-Fare 1974年
20 23137F 廃

A: ANTARTIDE
METAMORFOSI
PATHOS
SENZA UN PERCHE'
NESSUNA SCELTA
MURPLE ROCK

B: PRELUDIO E SCHERZO
TRA I FILI
VARIAZIONI IN 6/8
FRATELLO
UN MONDO COSI'
ANTARPLASTIC

このムルプレは割と最近になって発堀されたグループなので、あまり知られていないと思う。「私はペンギン」と題されたこの作品は、12のパートから成るトータル・アルバムだ。Key. G. B. Dr.の4人という平凡な編成だが、メインはピアノ、オルガンを中心としたキーボードである。それなりに聴き所もあり、キーボード・ファンには結構受ける音だろう。しかしながら、手放しで誉めることのできるアルバムではない。作曲、演奏とも全体的に今一つまとまりを欠いており、せっかくのトータル・アルバムも企画倒れの感がある。また、もともとキーボードがメインなので、どうでも良いことなのかも知れないが、ギターのお粗末ぶりは目（耳？）に余る。少々酷な言い方だが、これならギターレスの方が良かったのでは？（城）



MUSEO ROSENBACH
Zarathustra

Dischi Ricordi　キング 1973年
SMRL 6113 廃　K22P-280 廃

A: ZARATHUSTRA:
L'ULTIMO UOMO
IL RE DI IERI
AL DI LA DEL BENE E DEL MALE
SUPERUOMO
IL TEMPO DELLE CLESSIDRE

B: DEGLI UOMINI
DELLA NATURA
DELL'ETERNO RITORNO

ニーチェの哲学的叙事詞「ツァラトゥストラかく語りき」をテーマにした一大トータル・アルバム。イタリアン・ロック黄金時代の73年に発表された幻の名盤と噂の高い一枚。詳しい事は国内盤のライナーに述べてあるのでそちらを参照して頂きたい。グループはこの一枚で解散し、メンバーの内2人がドゥリウムからアルバムを出していたJ.E.T.のメンバー2人と合体し、75年「イ・バザール」を結成。後に女性シンガー、アントネッラ・ルッジェーロを加えマティア・バザールと名を変えデビュー。アリストンから7枚のアルバムを出す。昨年、世界歌謡祭に来日し、決勝進出を果し川上賞を受賞したピエロ・カッサーノはJ.E.T.→マティア・バザールのキーボード。現在でもムゼオのメンバーはマティアで活動中。（い）



NEW TROLLS
Concerto Grosso Per I New Trolls

Fonit Cetra　キング 1971年
LPX 8　GXF 2043 廃

A: ALLEGRO
ADAGIO
CADENZA
SHADOWS

B: NELLA SALA VUOTA

ニュー・トロルスの3作目。映画音楽界で活躍しているルイス・エンリケス・バカロフのオーケストラ・アレンジにより壮大なバロック・スタイルのロックを演奏している。コンチェルト・グロッソとはバロック時代の器楽コンチェルトの形式でメロディーが合奏により奏される形式をさす。これに対し小合奏形式をとるものをコンチェルティーノという。ニュー・トロルスは現在まで実に長い活動を続けるベテラン・グループで、現在、かつての名グループ達がマンネリズムに陥っている中で、なかなかの好盤（エッフェ・エッセ）を発表している。コンチェルト・グロッソのパート3も製作中である。本アルバムは日本でも好セールスを記録している。71年という早い時期に作成された作品とは思い難い程完成度が高い。（山）



NEW TROLLS
UT

Fonit Cetra　　キング　　1972年
LPX-20 廃　　GXF-20 廃

A: STUDIO
XXII° STRADA
I CAVALIERI DEL LAGO DELL'ONTARIO
STORIA DI UNA FOGLIA
NATO ADESSO

B: C'E TROPPA GUERRA
PAOLO E FRANCESCA
CHI MI PUÒ CAPIRE

5作目。タイトルの「UT」とは音階のドの音を指す。ヴィットリオ・デ・スカルツィは一曲も書いておらず、メンバー以外の人間が作曲に参加している。その内の一人、ダイナ・ディーニは本アルバムのヴィットリオを除いたメンバー、ニコ、ジャンニ、フランク、マウリツィオの作ったアルバム、通称「?」に参加している。実質的には「UT」もこの4人のアルバムと見てよいだろう。その後、4人がグループを離れ、イビスを作りヴィットリオがアトミック・システムを作る分裂劇の原因こそがこのアルバムなのである。A面の組曲についてはスペースがないのだが、内ジャケを訳してもらえればわかると思う。A－1ではピアノ練習曲のツェルニーがそっくりそのまま使われている。（い）



NICO, GIANNI, FRANK, MAURIZIO
Canti Di Innocenza,
Canti Di Esperienza

Fonit-Cetra　　1973年
LPX 22 廃

A: INNOCENZA
ESPERIENZA
SIGNORA CAROLINA
SI MONA

B: L'AMICO DELLA PORTA ACCANTO
VECCHIA AMICA
ANGELO INVECCHIATO

ニュー・トロルスは名作「UT」を発表後、2つのチームに分裂してしまう。ヴィットーリオ・ディ・スカルツィは「N.T.アトミック・システム」を製作し、残りの4人、すなわち、ニコ、ジャンニ、フランク、マウリツィオはグループ名も決まらないまま、4人の連名で本アルバムを発表する。内容は純粋なハード・ロック・サウンドであり、「UT」のB－1の曲を連想していただければよいだろうが、かなりへヴィーに仕上げられている。このアルバム発表後、ジャンニ・ベッレーノは「TRITONS」に加入してしまい、残りの3人に元アトミック・ルースターのリック・パーネルを加え、イビスが結成されることになる。（山）



I NOMADI
Un Giorno Insieme

EMI 3C 064-17880 '73 廃

A: UN GIORNO INSIEME
IL GIGANTE
TORNERO
ABBI CURA DI TE

B: STAGIONI
UN PO' DI ME
DOMANI
ICARO

ノマーディは実に長い活動を続けるグループである。60年代中期には結成され、筆者の持っている彼等のレコードで最も古いものが、68年のもの(EMI SCPSQ 545)―このアルバムはプログレッシヴな手法とビートルズの影響が感じられる好作品）である。その後、10年以上に渡り多数のアルバムをリリースしているが、最高作は本アルバムであろう。生のストリングス群、メロトロンをも使用して、センシティヴで情熱的な歌を中心とした素晴らしいアンサンブルを聴かせてくれる。彼等の作品には出来不出来のバラツキがあるが、本アルバムや74年のI Nomadi Interpretano Gucciniあたりが推薦盤である。本アルバムは変型ジャケット、ポスター付きと豪華なもので、彼等の頂点に位置する作品である。（山）



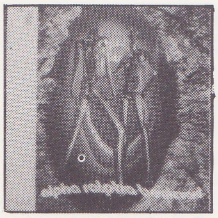
NOVA
Blink

Arista　　1975年
ARTY 118

A: TAILOR MADE PART 1,2
SOMETHING INSIDE KEEPS YOU DOWN PART 1,2
NOVA PART 1,2

B: USED TO BE EASY PART 1,2
TOY PART 1,2
STROLL ON PART 1,2

ウーノがアルバムを出した後、エンツォ・ヴァリチェッリは脱退し、コラード・ルスティーチ、ニュートロルスのレナート・ロセットらが加わり、ノヴァを結成。イギリスに進出しこのファーストをリリース。プロデュースは当時クォンタム・ジャンプにジョン・G・ペリーと共に参加していたルパート・ハイン。翌年、アイソトープの「Deep End」を手掛けたロビン・ラムレイ&ジェリー・スミスのプロデュースによる「Vimana」発表。ダニーロ・ルスティーチはルーナ結成の為脱退し、パーシー・ジョーンズ、フィル・コリンズ、ナーラダ・マイケル・ウォルデンがゲスト参加。続く「Wings of Love」では元イビス、アトミック・ルースターのリック・パーネル加入。78年には4枚目「Sun City」をリリース。（い）

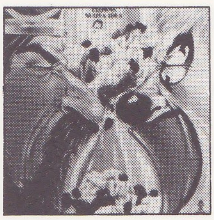


NUMI
Alpha Ralpha Boulevard

POLARIS: POLBP 708 '71 廃

GUIDO BOLZONI
MARIO CARLOS ROGNONI
BEPPE TIRANZONI
ROBERTO TAVA
PAOLO BUCCELLI
FURIO SOLAZZI
PRO: WOOST

ヌーミは71年に唯一と思われるアルバムを残しているが、60年代のカラーが色濃く残っているサウンドから判断してプログレッシヴ・ロックを意図しての演奏ではない様である。たまたまチェンバロ、オルガン等が積極的に使われているため、一部の曲では準プログレ的な色合いが濃くなるが、本来得意とすべきはラヴロック／ポップス系のサウンドだろう。高水準のシンフォニックロックや甘さたっぷりのカンタウトーレ作品を聴き慣れた我々にとっては今一つ“半熟”とのイメージが強い作風である。ただ、イタリアン・プログレッシヴロックの黎明期に於けるフォルムラ3やエキペ84などを見る限り、この手のバンドが良質のプログレバンドに成長する可能性は有ったと言える。LP1枚での解散は彼らにとっても不本意だったことだろう。（江）



NUOVA IDEA
Clowns

Ariston　　1973年
AR/LP 12100 廃

A: CLESSIDRA
UN'ISOLA
IL GIARDINO DEI SOGNI

B: CLOWN
UNA VITA NUOVA

ヌオヴァ・イデアは、アリストン・レーベルのプログレッシヴ・シリーズとして計3枚のアルバムをリリースしていたグループ。77年にファースト・アルバム「IN THE BEGINNING」(ARISTON: AR/LP-12061)を、72年に「MR. E JONES」(ARISTON: AR/LP-12075)を、73年に本作を発表した。キーボードのジョルジォ・ウザイを中心としたグループで、この時点ではリッキー・ヴェローニ(G)をアントネッロ・ガベッリのかわりに新加入させ5人編成になっている。ファーストは、未完成な部分が多いが、所々オザンナ風の佳曲もあった。セカンドは、彼等のアルバム中、ポップ色がいちばん強いが、バックに流れるウザイのキーボードが不思議なムードを創り出していた。本作は一応、彼等の最高作といえるだろう。（山）



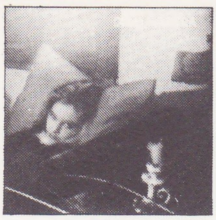
ODISSEA
same title

Rifi 1973年
RDZ-ST/S 14228 廃

A: UNIONE
GIOCHI NUOVI-CARTE NOUVE
CRISALIDE
CUOR DI RUBINO

B: DOMANDA
IL RISVEGLIO DI UN MATTINO
VOCI
CONTI E NUMERI

イタリアン・ロックの名作群を聴き通してきた方にとって、このオディセアの残した唯一のアルバムは、決して衝撃的な音ではあるまい。目まぐるしく複雑な曲展開をするわけでも、超人的な演奏技術を見せるわけでもない。むしろ各曲とも小じんまりとした印象である。しかしながら、歌心を大切にし、聞かせ所をしっかり押さえた曲創りと演奏はなかなか見事で、捨て去ることのできぬ好アルバムとなっている。編成は Vo.G.Key.B.Dr.の５人。誰か一人が目立つというわけではないが、Ａ－３のインストゥルメンタルをのぞけば、ヴォーカルのパートが比較的多い作品である。そのヴォーカルのロベルト・ゾラは、決して美声の持ち主ではないが、リッカルド・コッチャンテに近いタイプのなかなか渋い歌い手である。（城）



OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
same title

Trident 1974年
TRI 1006 廃

A: LES PLAISIRS SONT DOUX
LA MARMELLATA
CARILLON
L'ALTALENA MONOLOGO
IL PAVONE

B: AH! DOULEUR
AH!
DELIEE
ORO
RITUALE
ASHRALEM
NEL PICCOLO GIARDINO

オパス・アヴァントラというアンサンブルと、ドネラ・デル・モナコの出会いにより、このアルバムは作成されることになる。曲はドネラ・デル・モナコとアルフレッド・ティゾッコが創り、オーケストレイションの指揮はアルフレッドが担当している。アルフレッドはグループのメンバーではないが、彼とそして彼等の師とでもいうべきディレクションをするジョルジォ・ビゾットを含めたユニットをオパス・アヴァントラとみるべきであろう。シリアス・ミュージックをベースにしながらもあくまでポップな彼等のサウンドは伝統を受け継いではいるが、全く新しい音楽といえる。パーカッションとして、トニー・エスポジトが参加している。多くの人々に聴かれるべき、そして評価されるべき音楽である。（山）



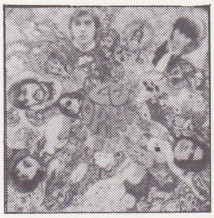
OPUS AVANTRA
Lord Cromwell Plays Suite For Seven Vices

Suono 1975年
SRLP 1002 廃

A: FLOWERS ON PRIDE
AVARICE
LUST
MY VICE

B: IRA
GLUTTONY
ENVY
SLOTH

オパス・アヴァントラのセカンドアルバム。ドネラ・デル・モナコも参加している。「クロムウェル卿の奏する７つの大罪の為の組曲」と題され、オリヴァー・クロムウェルをめぐる一大組曲である。彼等のサウンドはシリアス・ミュージックとフリーロックの中間に位置し、しかも驚く程ポップだ。Ａ－１は原曲はハイドン、詩はドネラ・デル・モナコに依るもので英語で歌われている。前作と比較すると多少フリーな部分が増してきているが、基本的な路線は全く変化してはいない。Ａ－３に於ける叙情性は前作をあきらかに継承しており、この曲こそ彼等本来の持ち味である。ロックとシリアス・ミュージックの融合とかいった表面的な次元ではなくもっと根深い所に彼等の「美」は眠っているようだ。（山）



LE ORME
Ad Gloriam

CAR JB : CRJLP 00015 60年代終盤 廃

ALDO TAGLIAPIETRA - VO, AC-G, FL, CELESTE
NINO SMERALDI - G, VO
CLAUDIO GALIETI - B, CEL, VO
TONI PAGLIUCA - ORG, HPD, EL-P
MICHI DEI ROSSI - DS, PERC
PRO : C.A.ROSSI, TONY TASINATO

オルメはCar JBレーベルに多くのシングルを残しているが、最初のアルバムはこの"Ad Gloriam"である。我々には馴染が深いキーボードトリオとしての演奏は聴かれず、素朴で少々荒削りとの印象は否めないが、メロディーライン等にオルメらしい所も見受けられ曲によっては味わいがある。チェンバロやチェロ、効果音の導入など当時としては思いっ切りプログレッシヴなサウンドだったと推測され、事実シングルではそこそこの秀作を残しているが、時代的に今のプログレファンが聴いて満足できる様なアルバムの製作は困難だったとも言える。なおL'aurora"なる2ndアルバムについてはプロモのみ、または存在しないと見る向きが支配的。また本作以前にも前身バンドのレコードがリリースされている模様である。（江）



LE ORME
Uomo Di Pezza

Philips フォノグラム 1972年
6323 013A BT-8116 廃

A: UNA DOLCEZZA NUOVA
GIOCO DI BIMBA
LA PORTA CHIUSA

B: BREVE IMMAGINE
FIGURE DI CARTONE
ASPETTANDO L'ALBA
ALIENAZIONE

CAR-JUKEBOXからファースト「AD GLORIAN」そしてセカンド「L'AURORA」を発表後、キーボード・トリオとなりフィリップスに移籍し続々とアルバムを発表してきたレ・オルメ。彼等は現在までに計13枚ものアルバムを発表するベテラン・グループである。残念ながら最新作ではポップスになってしまっているが、このフィリップスでの２枚目はとてもういういしい印象を受ける好アルバムだ。彼等の傑作を上げるとすればこのアルバムと「FELONA E SORONA」、「CONTRAPPUNTI」の３枚だろうが、後期のアルバムもキャメル・タイプのサウンドとして十分評価できる。主要メンバーはほとんど変動なく、ボーカルとベースのアルド、キーボードのアントニオ、ドラムスのミッキの３人によって構成されている。（山）



OSAGE TRIBE
Arrow Head

BLA BLA : BBL 11052 '72 廃

MARCO ZOCCHEDDU - VO, G, P, HCA, ORG
"BOB" CALLERO - B, VO
CUCCIOLO - DS, VO
PRO : PINO MASSARA

オサージェ・トリベは、後にドゥエロ・マドレを経てイル・ヴォーロに参加するベーシスト、ボブ・カレロが在籍していたグループである。D.マドレの項では実験音楽と紹介したが、どちらかと言うとつかみどころが無いサウンドと言った方が正確だろう。プログレ色は薄く、力強いギター音の他、若干ポップなメロディーやジャジーなパートも盛り込まれている。たまにD.マドレを思わせるベースラインが出てくるものの全般的には消化不良気味。もっと変化を付けるにはキーボード系の積極的な導入が不可欠だったろう。表、内ジャケともカヴァーワークの方はなかなかしゃれている。なお、本作以外のアルバムについては未確認であるが、本作発表以前の71年、ブラ・ブラレーベルよりシングルを１枚リリースしている。（江）



OSANNA
Palepoli

Fonit LPX 19 廃　キング GXF 2051 廃　1972年

A: ORO CALDO / STANZA CITTA　B: ANIMALE SENZA RESPIRO

カーニバル的な、呪術的なアルバムである。しかもA－1はナポリ方言で歌われている。パレポリとは幻想としてのナポリに他ならない。オザンナのサード・アルバムである。このアルバムで、彼らの音楽性が確立した、と言うべきか。イタリアン・ロックにおいて、いや世界のロック史上において、はじめて、地方主義的アイデンティティを前面に打ち出した記念すべきアルバムである。そしてこのアルバムを頂点として、オザンナは堕落の道をたどっていくのである。素晴しいほどにダイナミズムとロマンチシズムを兼ねそなえたグループはオザンナ以外に存在していただろうか。国内盤と原盤とはA面最後の部分のテイクが違うのであるが、入手しやすい国内盤でオザンナの秘教的世界に親しんで欲しいと思う。（宇）

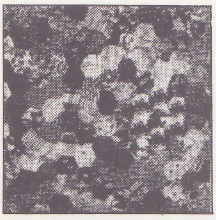


OSANNA
Suddance

ITALY : CBS 82449　'78 廃

A : CE VULESSE / 'A ZINGARA / 'O NAPULITANO
B : SUDDANCE / CHIUSO QUI / SARACENO / NAPLES IN THE WORLD

74年のウーノ、チッタフロンターレへの分裂劇から３年の時を経て再編成されたオザンナの通算５枚めのアルバム。「パレポリ」に代表される絶頂期のサウンドとはかなり趣を異にし、オザンナ分裂一派のノヴァに近いジャズ・ロックに仕上がっている。したがって旧来のイメージが強過ぎるだけに、この作品に入り込んで行けないファンも多いのではないか。しかしそうした思い入れと別に、作品の質そのものは、このアルバムが78年のレコード批評家賞に輝いた事実からもわかる通り、上質の作品となっている。またジャズ・ロックといっても厳密にはアメリカを指向したノヴァと違い、そこはさすがオザンナ、あくまでイタリアの音に仕上げている。リーダーのダニーロは翌79年にルーナを結成。オザンナは､再び活動を休止した。（城）



IL PAESE DEI BALOCCHI
same title

CGD FGL 5115 廃　キング K22P-244　1972年

A: IL TRIONFO DELL'EGOISMO/DELLA VIOLENZA/DELLA PRESUNZIONE E DELL'INDIFFERENZA/IMPOTENZA DELL'UMILTA' E DELLA RASSEGNAZIONE/CANZONE DELLA SPERANZA/EVASIONE
B: RISVEGLIO E VISIONE DEL PAESE DEI BALOCCHI/INGRESSO E INCONTRO CON I BALOCCANTI/NARCISISMO DELLA PERFEZIONE/VANITA' DELL'INTUIZIONE FANTASTICA/RITORNO ALLA CONDIZIONE UMANA

72年に唯一のアルバムを発表しただけのイル・パエーゼ・デイ・バロッキについて私達に伝えられている情報は何もない。生のストリングスを大胆にフィーチャーして時に力強く、時に可憐な少女のように繊細な展開をする本アルバムは、派手さこそないものの、野原に人知れず咲く草花のような味わいがある。「子供達の国」というアルバム・タイトルからもうかがいしれようが、過ぎ去りし日々を回想しているように曲は進行し、私達の幼年時代が彼等の音とともに静かに静かに甦ってくるかのようだ。ジャケットから感じられるイメージも、イタリアの太陽の下にあるかげりといったもので、郷愁をさそう。（山）



MAURO PAGANI
same title

ASCORTO ASC 20093　'78 廃
KING GXF-2041 廃

A : EUROPA MINOR / ARGIENTO / VIOLER D'AMORES / LA CITTA' AROMATICA
B : L'ALBERO DI CANTO / CHORON / IL BLU COMINCIA DAVVERO / L'ALBERO DI CANTO

マウロ・パガーニのファースト・ソロ・アルバム。彼はプレミアータ（ＰＦＭ）のメンバーとして著名であるが、このアルバムでは、プレミアータ、アレア、カンツォニエーレ・デル・ラッツィオ等のメンバーを起用して、アレアの硬質なサウンドとたおやかな地中海音楽をブレンドしたような純度、完成度の高い、独自の領域を創り出した。従来のいわゆるシンフォニック・ロック・グループ達のサウンドとはやや一線を画すが、もう一つのイタリアン・プログレッシヴを代表する一枚。アレア、カンツォニエーレ、カルナシャリア、アスコルト＆ロルケストラ・レーベル周辺のアーティスト達のサウンドも決して忘れることのできない重要なものなのである。（山）

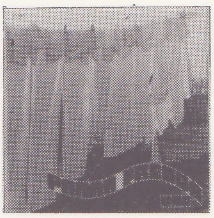


BEPPE PALOMBA
A Rosa, A Giovanni E Alle Altre...

MIZAR : MZ PP 01　'72 廃

BEPPE PALOMBA - AC-G, P, MLN, HCD, SYN, VO
MICHELE LUGLIO - B
GIACINTO CARAMIA - CEL
LUIGI CALABRO - EL-G, AC-G
RINO SANGIORGIO - DS, PERC
MARIA GRAZIA VIVALDI - VLN

無名シンガー､ベッペ･パロンバの作品。傍らにペットを侍らせ､ベッドの上でゴロ寝を決め込むエルトン･ジョンみたいな青年がその人である。例によって経歴は不詳であるが、事情通のファンならクリムゾンタイプの物凄いプログレッシヴロックを演っていたと言われるBuon Vecchio Charlieなるバンド(レコードは存在しないらしい)のメンバー２人がバックミュージシャンとして参加していることに注目するはずだ。しかし本作の内容に限っては標準的な歌物である。acギターをバックにした弾き語り的なパートを初めピアノ､チェンバロ等､彼自身が奏でる音を中心に緩やかなタッチで仕上げられている。これにバイオリン､チェロが静かに絡み雰囲気作りも上々､時には陽気な地中海音楽に早変わりするなど非常に親しみ易い作品。(江)



PANNA FREDDA
Uno

VEDETTE : VPA 8134　'71 廃

キーボードサウンドをバックにガンガン攻めまくる正統派のプログレッシヴ・ロック。俗っぽい音作りではあるが非常に好感が持てる。〝幻の名盤〟などという文句に踊らされ大して良くもないレコードを買い漁っている人が突如こんな作品に出会ったなら、きっと新鮮な感動を覚えるだろう。演奏技量やコンセプト的なものばかりが目立っても、躍動感に欠ける音楽はどこか空しいものである。その点、本作は若干荒削りの演奏ながら、プレイヤー達の意気込みが直に伝わって来る仲々の秀作と言えそうだ。チェンバロやacギターを使った静のパートでは不器用さが目に付くが､一方ではグレイシャスのフレーズを導入するなど意欲的なプレイを繰り広げている。なお本作以前にシングルが２枚程出ている。（江）



MARIO PANSERI
Adolescenza

RCA : DPSL 10585 '73 廃

MARIO PANSERI - VO
PRO : V. MICOCCI

一部のファンの間で非常に評価の高いカンタウトーレ、マリオ・パンセーリは、知る限りではRCAに2枚、ポリドールに1枚のアルバムを残しているが、2ndと思われる本作は、歌物の中でもチロ・ダミコ等と並び高水準の出来栄えを誇る。作詞作曲、アレンジ全てが彼自身の手によるもので、みずみずしい旋律とともに〝青春(Adolescenza)″ストーリーが綴られている。他の2作に比べ多分にプログレッシヴな要素が濃く、ストリングス、ピアノ、acギター等の他、曲によっては力強いギターソロやホーンも導入しているが、どのパートに針を落しても聴く者を温かく招じ入れてくれよう。美的感覚という点でもシンフォニック勢に後れを取ることはあるまい。なおバックミュージシャンについてはクレジットされていない。（江）



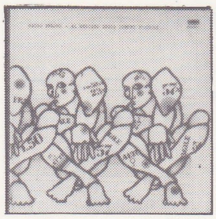
RENATO PARETI
Dal Mio Lontano

DUCALE : DUC 8 '73 廃

A : RIASSUNTO DELLE PUNTATE PRECEDENTI
IL FANTASMA DEL CASTELLO DAL MIO LONTANO
PASSATO PROSSIMO
IN VIALE ZARA O IN VIALE FORLAMINI
PADRE NOSTRO

B : MA TI RICORDI MAMMA
LA MOSCA
MARIA A MILANO
LA GIORNALAIA INTANTO VENDE
MADONNA LEI GIUSEPPE LUI
ESTATE IN DIANA
FESTA D'INIZIAZIONE

Homo Sapience, La Strana Societaのメンバーとして、又Fili D'erbaのプロデュース等幅広い活動を行なっていた彼の 1st ソロ・アルバム。後にPolydor, Fonit Cetra, 最近ではHarmonyとレーベルを変えているが、若々しくみずみずしい感性が惜しみなく流露されたこの作品こそ彼の音楽性を評価するに相応しい。クラシカルでシンフォニックな側面も随所に見受けられるが、それもそのはずでPiscopo始め当時の腕達者達がバックを務めている。取り分けアレンジ及びキーボードのSergio Parisini なる人物は謎の実力者である。ジャケは見開きで歌詞がブックレット型式で折り込まれている。ジャケのイラストも美しい仕上がりでとても丁寧に作られたアルバムという印象が強い。（鈴）



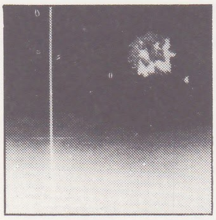
MAURO PELOSI
Al Mercato Degli Uomini Piccoli

POLYDOR : 2448 017A '73 廃

A : AL MERCATO DEGLI UOMINI PICCOLI
UN MATTINO
EHI !SIGNORE
NON TORNANO PIU'

B : CON TE
TI PORTERO' VIA
NO, IO SCHERZO
MI PIACEREBBE DIVENTAR VECCHIO INSIEME A TE

マウロ・ペロシはポリドールにアルバム4枚を残している。若干ポップなカラーを増した4thが今一つ不人気だが、G.レオーネ参加の 1st を初め質の高い作品ばかりだ。とりわけ 2ndに当たる本作は評価が高い。他作にも共通であるが、とにかく彼の創り出す音空間は他に類を見ない特異なもので、一度針を落すやとらわれ、外界とは完全に隔絶された世界に引き込まれるが如き感覚にとらわれ、容易には抜け出せなくなる。ストリングス、ピアノ、acギターそれに悲壮感さえ漂う彼のヴォーカルによって演出される暗さは尋常なものではなく、聴く者の双肩にズッシリとのし掛かり、押し潰されてしまいそうな錯覚さえ起こさせる。なお、ポリドールからベスト盤が出ている他、シングルも数枚存在するものと推定される。（江）



LA PENTOLA DI PAPIN
Zero-7

Disco Piu 1977年
DP 39010 廃

A: INTRODUZIONE
STACCO I (PER SVAGO)
CIELI APERTI

B: UNA VECCHIA STORIA
45/ I
45/ II
CONCLUSIONI

美しくも衝撃的なジャケットに包まれた「ゼロー7」なるアルバムを世に送り出したラ・ペントーラ・ディ・パピンは4人から成るロック・スピリット溢れるグループである。彼等の中心を成すのはボーカリストを兼ねる、フェリー・ベティーニの繰る多種多様のキーボード群であり、それらにからみつくかのようなアンジェロ・レナッティの粘りのあるギターである。そしてドリー・ドリガッティの堅実なベース、ブルーノ・スタンゴニの力強いドラムスが更に現代的感覚を添える。過去のイタリアン・ロックへの憧憬とインターナショナル指向の見え隠れするチューンには一抹の淋しさを感じるが、イル・ボーロ亡き後の後期イタリアン・ロックを代表するグループである。（鈴）



VICTOR PERAINO'S KINGDOM COME
No Man's Land

'75 廃

VICTOR PARAINO : VO, KBD
PAUL ROGERSON : VO. B
DAVID CHRISTIAN : G
DAVID WILD : DS
JOHN MARC LAFLOTTE : FL, G, VO
ROBERT MICH : G
EDWARD HOWLEHAN : DS
HERMAN DALOIN : B

ついに再発が決定したこのブリティッシュ・ロック・ファンも、イタリアン・ロック・ファンも喜ばせる幻の名盤。オリジナル・ジャケットのモノクロのトーンと、手のこんだ印刷にどこまで近づけるか、それはそれで、音に接することができるのは有意義なことだ。75年という、プログレッシヴ・ロックがイギリス、アメリカで下火になりつつある時期のためか、Paraino自身プログレだのハード・ロックだのにこだわらず自由奔放に楽しみながらレコード製作に励んだという感じがする。それは師匠、アーサー・ブラウンの音楽観に多大な影響を受けたからに違いあるまい。アーサー・ブラウンこそ、自分の個性を強く残しながらもジャンルにこだわらない音楽活動をしている数少ない人物なのだから。ＬＰ未収のシングル（あるいはＥＰ）の中にはこのＬＰの別テイクが含まれているらしい。（吉）



PERIGEO
Azimut

RCA 1972年
PSL 10555 廃

A: POSTO DI NON SO DOVE
GRANDANGOLO
ASPETTANDO IL NUOVO GIORNO

B: AZIMUT
UN RESPIRO
36° PARALLELO

Azimut(72) Abbiamo Tutti Un Blues Da Piangere(73) Genealogia(74) La Valle Dei Templi(75) Non E Poi Cosi Lontano(76) がペリジェオのディスコグラフィーである。加えてAlice-Perigeo Special(80)とNew Perigeo として Effetto Amore(81)があるがコンセプションが全く異ってきているので便宜的に1stを選んだ。旧ペリジェオとして最も完成度の高いのは4thあたりでのクリムゾンのレッドあたりを彷彿させるがジャズ系グループとして高度なテクと音楽性を誇る彼らを簡単に片付けるわけにはいかない。現にF.ダンドレアを筆頭に元メンバーの誰もがジャズ畑で活躍している。G.トマーゾはNew Perigeo以外にも広範な活動をしており、いずれにしてもジャズ・スピリットを味わいたい人にだけお勧め。（岡）



PIAZZA DELLE ERBE
Saltaranocchio

Intigo　　1978年
ITLM 14502　廃

A: UN TEMPO LONTANO
《SALTARANOCCHIO
FAMMI DIVERTIRE!》
LA FIABA
UN FESTA CI SARA
《SCIMMIONI
INCATENATI!?!》

B: FIABE
PRESAG
LA FESTA
MANCA POCO ALLA
MEZZANOTTE L'ARTE
DEL BUFFONE
LA VENDETTA

奇妙なグループである。民族音楽の香りを漂わせながらフリー・ミュージック、カンツォーネ等の要素もとり入れ、しかし知性によるオブラートがかけられ、変形させてしまっている。強いていうならば、全体の感じがジェーン・ソレンティ率いる「サン・ジュスト（Saint Just)」に似ているように思う。特に女性ボーカルのアンニュイな響きは通じるところがある。エドガー・アラン・ポーの作品をベースにしているようで、A面5曲、B面6曲がトータルな感じに仕上げられている。ピアノ、フルート、ギター、チェロ、オルガン、マンドリン等アコースティック楽器を多用している。サウンド・コンセプトはギタリストのアンドレア・ベラーニがにぎり、ルチオ・ファブリがヴァイオリン等で参加している。（山）



PICCHIO DAL POZZO
Abbiamo Tutti I Suoi Problemi

L'orchestra　キング　1980年
OLPS 55013　K22P 243 廃

A: LA SGARGIANZA I
I PROBLEMI DI
FERDINANDO P
LA SGARGIANZA II
MODERNO BALLABILE
LA SGARGIANZA III e IV

B: STRATIVARI
METTIAMO IL CASO CHE
(UCCELLIN DEL BOSCO)
フレクシ・ディスク

ピッキオ・ダル・ポッツォはカンタベリー系のアヴァンギャルド・グループの影響を感じさせるバンドである。76年にグロッグ・レーベルよりファースト・アルバム「PICCHIO DAL POZZO」をリリースした後、しばらく音沙汰がなかったが80年に本アルバムをクランプスと並ぶアヴァンギャルド・ミュージックの宝庫ロルケストラ・レーベルよりリリースする。ニュー・トロルスのヴィットリオ・デ・スカルツィの実弟、アルドのグループで変拍子を多用した密度の高い音楽性を誇っている。去年の春に彼等はサード・アルバムを製作していたが、今だにリリースされてはいない。解散してしまったという説もある。ROCK IN OPOSITION加入グループでもありリコメンディッドのオムニバスにも彼等の曲が収録されている。（山）



GIAN PIERETTI
Il Vestito Rosa del Mio Amico Piero

RICORDI : SMRL 6112　'73 廃

ジャン・ピエレッティは60年代後半から70年代前半にかけて数枚のアルバム及びシングルをリリースしているが、本作が最も出来が良いと思われる。派手さは無いものの聴き込むにつれて味わいを増して行くタイプだ。彼の優しい歌声と効果的なオーケストラ導入、更にはピアノ、フルート等を絡めて、時には春の日差しの様な暖かさを、またある時はセピア色のカヴァーデザインに象徴される秋、冬の淋しさを、非常にツボを心得た盛り上げ方で演出している。"掘り出し物" という感が強いものの、プログレッシヴ一辺倒のリスナーに対しては若干アピール力が弱いという感じもする。A面は全面費やしての組曲だが、アルバム自体トータル的な内容を持っていると思われ、B面ラストではオープニングと同じテーマが登場し、静かに幕を閉じる。（江）



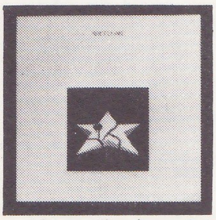
PIERROT LUNAIRE
same title

IT　　1974年
ZSLT 70025　廃

A: OUVERTURE XV
RAIPURE
INVASORE
LADY LIGEIA
NARCISO
GANZHEIT

B: VERSO IL LAGO
IL RE DI RAIPURE
SOTTO I PONTI
ARLECCHINATA
LA SAGA DELLA
PRIMAVERA
MANDRAGOLA

シェーンベルグの12音技法による代表作「月に憑かれたピエロ」からその名をとったピエロ・リュネールのファースト・アルバム。「ライプーレの地」、「湖に向かって」、「マンドラゴラ」等の曲名からさっするに、このアルバムも次作同様、童話をモチーフにしたトータル・アルバムなのであろう。アルトゥーロ・スタルテッリ、ヴィンチェンツォ・カポラレッティ、ジャノ・キョッキョの3人が多彩な楽器群を使いこなしてファンタジックなサウンドに仕上げている。フォーク的な色彩も強いが、すでにスタルテッリの才能は開花している。バンドとしては2枚のアルバムを発表し、スタルテッリとキョッキョがそれぞれソロ・アルバムをリリースしている。（山）



PIERROT LUNAIRE
Gudrun

IT　　1977年
ZPLT 34000　廃

A: GUDRUN
DIETRO IL SILENZIO
PLAISIR D'AMOUR
GALLIA

B: GIOVANE MADRE
SONDE IN PROFONDITÀ
MORELLA
MEIN ARMER ITALIENER

ピエロ・リュネールのセカンド・アルバム。前作時のメンバーのうち、ヴィンチェンツォ・カポラレッティが脱退し、替わりに女性ヴォーカルのジャクェリーネ・ダルビィが加入した。北欧神話「サガ」の中に出てくる「グドルン」をめぐるトータル・アルバムである本作は、信じ難い展開をする。アルトゥーロ・スタルテッリの天才は、この時点に於いて見事に開花し、ピアノ、エレクトロニクス、チェンバロ、アコースティック・ギター、フルート、ヴァイオリンを自由に操り、恐ろしい程の緊迫感を伴い私達を神話の中へとひきずり込んでしまう。ジャクェリーネのオペラ調のボーカルも凄まじい。アルトゥーロ・スタルテッリはこの後ソロ・アルバムを製作するが、これ又、本作同様、素晴らしいものだ。（山）



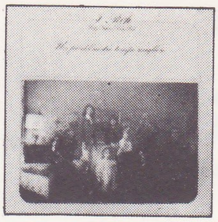
I POOH
Per Quelli Come Noi

VEDETTE VRM 36033　'69 廃

A: PER QUELLI COME NOI
LA SOLITA STORIA
ORA CHE COSA FARAI
ISTINTIVAMENTE IO E TE
QUELLO CHE NON SAI
VIENNI FUORI

B: NON LA FERMARE
LA VOSTRA LIBERTA'
NEL BUIO
BRENNERO '66
SONO L'UOMO DI IERI
NESSUNO PORTA' RIDERE DI LEI

イ・プーはCBSに移籍以降ビッグ・ネームになり現在まで長い活動を続けているが、CBSよりのファースト・アルバムOpera Prima以前にヴェデッテ・レーベルに2枚の作品を残している。本アルバムはそのファースト・アルバムのオリジナル盤である。この時期には、80年代にはいって脚光をあびることとなるリッカルド・フォッリがメンバーとしてクレジットされている。レッドはまだ参加しておらず、現在まで在籍しているメンバーはロビー1人である。当然CBS時代のサウンドとは異なり、ビート・サウンド的なものである。しかしもちろん聴きどころもあり、初期の熱い情熱のほとばしりを感じることができる。この初期のサウンドは現在でも再発盤があるので入手することが可能。（山）



I POOH
Un Po' Del Nostro Tempo Migliore

CGD 69118　　CBS ECPO-61 廃　KING GP-588 廃　1975年

A: PRELUDIO
CREDO
UNA STORIA CHE FA RIDERE
OCEANO
FANTASIA
MEDITERRANEO

B: ELEONORA MIA MADRE
1966
ORIENT EXPRESS
IL TEMPO UNA DONNA LA CITTA

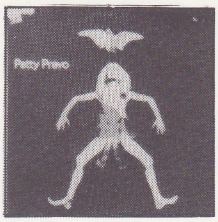
プーの長い歴史の中で「パルシファル」と「ロマン組曲」の２枚が最も強くクラシック色を打ち出したものとなっている。だからどうというわけではなく例えば「プーラヴァー」や「プーメラン」「ヴィヴァ」以降の飛び切りポップな音創りのプーも非常に良いのである。結局プーなるバンドはアイドル・グループのくせにやること以上のことはやっていてメジャーものではしっかり聴いて良いのだ。もしも貴方がイタリアものを少しはかじっていてバッティスティとプーを軽んずる風であると、これはちょっとマズイ。バッティアートやピーノ・ダニエーレと違って日本でもちゃんとレコードが出ているんだから「女ともだち」くらいは聴いといて下さい。パガーニだって勧めてるのですよ。　（岡）



PLANETARIUM
Infinity

VICTORY : VY 10051　'71 廃

プラネタリウム―この驚異的なシンフォニックバンドについて語る資料は残念ながら何も無い。裏ジャケの解説によるとバンドは４人編成らしいのだが、肝腎のメンバー名はベールに覆われたままだ。作品は、地球上に於る生命の誕生とその歩みをテーマにしており、全編インストによる壮大な宇宙シンフォニーが奏で上げられるが、全曲ともA.Ferrariなる人物が書き上げている。雷鳴で始まり雷鳴で幕を閉じるまで、常にドラマチックな展開により「愛」「戦争」といったテーマが次々と描かれて行く。溢れんばかりのメロトロンワークを中心に、ピアノ、acギター、フルート、コーラス、各種効果音等をテーマ毎に巧みに使い分けてのち密な構成には全くスキが見当たらず、非常に高い完成度を誇っている。プレス状態が良くないのが玉に傷だ。　（江）



PATTY PRAVO
same title

RICORDI : SMRL 6193　'76 廃

パティ・プラヴォはヴェネチア出身の中堅女性歌手。60年代後半にＲＣＡよりデビュー、往年のカトリーヌ・ドヌーヴを思わせる金髪がとても印象的だった。当時のアルバムでは割とスタンダードなナンバーを披露していたが、70年代に入るとＬＰの片面を全て使った歌物語や、ルー・リードの曲を取り入れるなど徐々にレパートリーを広げていった。本作は76年、リコルディからのリリース。バックにG.ダッラリオ、A.ラディウス等の著名なスタジオミュージシャンを揃えロック色の濃いサウンドを聴かせる。一方ではしっとりとした歌唱を中心にじっくりと聴かせる曲も配してあり、イタリアン・ロック/ポップスの愛好家なら無難に聴きこなせそう。だが、70年代終盤から80年代にかけては現代風なサウンドが中心となり少々ボルテージは落ちる。　（江）



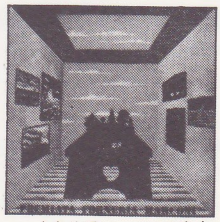
PREMIATA FORNERIA MARCONI
Storia Di Un Minuto

Numero Uno ZSLN 55055 廃　1972年

A: INTRODUZIONE
IMPRESSIONI DI SETTEMBRE
E'FESTA
DOVE...QUANDO...

B: DOVE...QUANDO...
LA CARROZZA DI HANS
GRAZIE DAVVERO

68年にクエッリが結成され、プレミアータの歴史は幕をあける。クエッリはマウロ・パガーニをむかえ、プレミアータ・フォルネリア・マルコーニと改名し、この記念すべきファースト・アルバムをリリースする。Ａ－２、９月の印象は、後に「甦る世界」としてヒットする曲。Ａ－３は有名なセレブレイションの原曲である。プレミアータは現在も活動を続けているが、マウロ・パガーニばかりでなく、キーボードのフラヴィオ・プレモリさえも失い、ドラムスのチョッチョのグループとなってしまい、低迷してしまっている。プレモリは最近ジャンジルベルト・モンティのアルバムに参加、パガーニは２枚のアルバムをリリースしている。このファーストには彼等の若い、無垢のイメージがつめ込まれている。　（山）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Per Un Amico

Numero Uno DZSLN 55155 廃　1972年

A: APPENA UN POCO
GENERALE!
PER UN AMICO

B: IL BANCHETTO
GERANIO

イタリアン・ロック史上、最も偉大なる足跡を残したP.F.M.の２ndアルバム。後にマンティコアを通じて世界に発表された「Photos of Ghosts」は本作を母体とし、更に２曲を加えて作られたものである。本作はもちろん全曲伊語で歌われており、またテイクの違っている曲も２曲ある。まずＡ－１は、大海原を思わせるメロトロンとハープの調べに導びかれて始まり、また中間部と終末部のオーケストレーション・パートも、本作ではメロトロンのみで演奏され、マンティコア盤よりも素朴な印象を受ける。また、マンティコア盤で英詩の付けられていた本作のＡ－２は、インストゥルメンタルの曲である。なお、本作のオリジナル盤はＷジャケであり、中ジャケではスタジオで演奏する彼らの姿を見ることができる。　（城）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Live in U.S.A.

NUMERO UNO　DZSLN 55676　'74

FRANZ DI CIOCCIO - DS
MAURO PAGANI - VLN, FL
FRANCO MUSSIDA - G, VO
PATRICK DJIVAS - B
FLAVIO PREMOLI - KBD
PRO : PFM, CLAUDIO FABI

「甦る世界」発表直後の74年8月、トロント及びニューヨークでのライヴ。プログレッシヴロックがメジャーシーンでも十分な市民権を享受していた当時、本場での公演を夢見たミュージシャンはイタリアにも数知れずいたと思われるが、インターナショナル市場進出に成功し、アメリカ公演のライヴ盤まで残すことが出来たのは彼らだけだった。その貴重なライヴ演奏が最高の録音状態でいとも簡単に楽しめるのだからこのレコードの価値をもう一度見直したいものである。英語版の曲が多いのは致し方無いが名曲"Dove Quando"も忘れずに収録した他、A4「セレブレイション」～「甦る世界」では絶妙のつなぎで聴かせてくれる。ウィリアム・テル序曲まで盛り込んだB2ではパガーニの凄まじいばかりのヴァイオリンソロが堪能出来る。　（江）

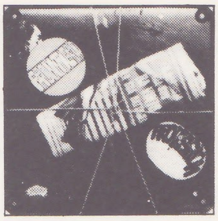


PRIMA MATERIA
La Coda Della Tigre

ANANDA 2 '77 廃

ROBERTO LANERI : VO
SUSAN E. HENDRICKS : VO
CLAUDIO RICCIARDI : VO
GIANNI NEBBIOSI : VO

イタリアには数多いシンフォニック・グループが70年代に存在していたが、一方、アヴァンギャルド畑でもアレア、アスコルト・レーベル、ロルケストラ・レーベルを始め数多いグループが輩出されていた。このプリマ・マテリア——第一元素——と名付けられたグループは、イタリアの若手現代音楽家のレコードをリリースしているアナンダ・レーベルの第2弾として発表されたものである。この作品は4人のヴォイスのみによって演奏されるもので、タミア、ジュリー・ティペッツ、メレディス・モンク等と共通点のある音宇宙を創造している。グループ名も楽器以外の人間の持つ音声的器管をプリマ・マテリアと称したのであろう。いわば人間の肉体の可能性に挑戦した作品といえるだろう。（山）



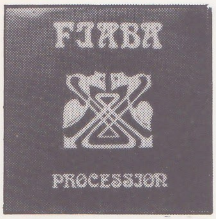
PROCESSION
Frontiera

Help 1972年
ZSLH 55131 廃

A: ANCORA UNA NOTTE
UOMINI E ILLUSIONI
CITTA GRANDE
INCONTRO
ANCHE IO SONO UN UOMO

B: UN MONDO DI LIBERTA
SOLO 1
UN'OMBRA CHE VAGA
SOLO 2

プロセッションはG.×2、Vo.B.Dr.というイタリアン・ロックにあっては珍しいツイン・ギター・バンド。A面終盤部を除いて基本的にキーボードはいないが、アコースティック・ギターとヘヴィーなエレクトリック・ギターを対比させて曲に起伏を生んでいる。特にアコースティック・ギターをバックに金属質のヴォーカルが歌い上げるところなどはなかなか聴かせる。しかし全体の完成度という点では今一つといったところだろう。トータルな内容のA面終盤では溢れる様なメロトロンが飛び出して盛り上がるが、これも全体の流れから見ると少々浮き上がっている。曲創りにもう一工夫欲しかったところだ。なお、彼らは'74年にチェトラから2ndアルバム「Fiaba」(LPQ 09081)を発表している。（城）



PROCESSION
Fiaba

FONIT : LPQ 09081 '74 廃

GIANFRANCO GAZA - VO
ROBY MUNCIGUERRA - G
MAURIZIO GIANOTTI - S, FL
PAOLO D'ANGELO - B
PRO : PINO TUCCIMEI

プロセッションの2ndアルバム"Fiaba"は、かなり前からそのタイトルと番号のみが知られていたが、12号のカタログ作成の時点で少なくとも編集部では現物を確認していなかった。音についての憶測は多々あったが、オリジナルメンバーは2人だけ(vo, g)となり、従来のカラーはある程度残しながらもsax(fl)を正式メンバーとして加入させた他、デリリウムのE.Vigo、元サーカス2000のS.Aliotta等多彩なゲストを迎え、より洗練された演奏を聴かせている。1st同様キーボード系の出る幕は余り無いものの、トゲトゲしいイメージはすっかり消えた。オープニングの力強いパーカッションに象徴される攻撃性、フルートや曲によってはメロトロンによって生み出される叙情性、牧歌性を巧く散らし、時にはジャジーな展開までも盛り込んでいる。（江）



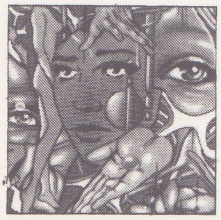
QUELLA VECCHIA LOCANDA
same title

Help 1972年
ZSLH 55091 廃

A: PROLOGO
UN VILLAGGIO, UN' ILLUSIONE
REALTA'
IMMAGINI SFOCATE

B: IL CIETO
DIALOGO
VERSO LA LOCANDA
SOGNI, RISVEGLIO E...

イタリアン・ロック・ファンの間で、今や幻のグループの代表格的存在となったクエラ・ヴェッキア・ロッカンダ。しかし彼らの遺した"音"は決して幻のまま終わらせて良いようなものではない。本作は彼らの1stアルバムだ。彼らの特徴は、何といってもヴァイオリンとフルートを前面に押し出していることだろう。後の2ndアルバムと比べると、美的感覚において若干見劣りするものの、全体に力強い音創りのなされた本作もかなりの魅力に満ちている。しかしどれにも増して素晴らしいのはB－4の曲だろう。美しくも寂しげなピアノの調べに導びかれて、信じ難いまでに哀しい旋律を奏でるヴァイオリンとフルート。この"哀愁"こそが彼らの最大の持ち味であり、私達の心を捕えて放さないものなのである。（城）



QUELLA VECCHIA LOCANDA
Il Tempo Della Gioia

RCA 1974年
TPL1-1015 廃

A: VILLA DORIA PAMPHILI
A FORMA DI...
IL TEMPO DELLA GIOIA

B: UN GIORNO, UN AMICO
E ACCADUTO UNA NOTTE

未だ国内発売がされていないイタリアン・ロックのアルバムの中で、叙情派サウンドのグループに話を限定するならば、このクエラ・ベッキア・ロッカンダのセカンド・アルバム、「イル・テンポ・デラ・ジョイア」（歓喜の時）が代表格的存在である。特にA－1の感情の高揚は他の追従を許さぬ程の圧倒的な仕上がりをみせている。ソロ・ヴァイオリンとアコースティック・ピアノが中心となったリリカルな響きは、今まで多々、イタリアのロックに親しんでこられた方にさえ、新鮮なショックを与えるに違いない。クエラ・ベッキア・ロッカンダ——すなわち朽ちはてた家とはそのままイタリアの古い街並を連想させる。伝統の彼方からつながるバロックの糸は彼等によって見事に甦った。（山）



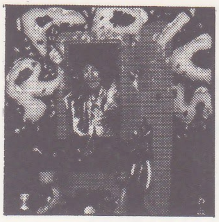
RACCOMANDATA RICEVUTA RITORNO
Mondo Di Cristallo

Fonit Cetra KING K25P-426 廃 1972年
LPX 15 廃

A: NULLA
SU UNARUPE
IL MONDO CADE SU DI ME
NEL MIO QUARTIERE

B: L'OMBRA
UN PALCO DI MARIONETTE
SOGNI DI CRISTALLO
NULLA

フォニット・チェトラは日本ではキング・レコードに発売権がある。このラコマンダータ・リチェブータ・リトルノを始め、デリリウム、アルザ・ファラックス、ガリバルディの「アストロラヴィオ」(GARYBALDI/ASTROLABIO・FONIT LPQ 09075)等は国内発売にたえられるだけの内容を持っているのでぜひとも発売してほしいものだ。このラコマンダータは、邪教的なイメージを持ち、オザンナあたりに共通しそうなサウンドを有している。サックス、フルート、コントラバス、ピアノ、ハモンド・オルガン、ギター、ベース、ドラムスと様々な楽器を使用するが、ギターはおもしろいことにアコースティックが多用されている。ジャケットはトリップやクェラ・ベッキアのファースト等と同じくスタジオ・アップ・アンド・ダウン。（山）



ALBERTO RADIUS
Radius

Numero Uno 1972年
ZSLN 55133 廃

A: AREA
RADIUS
ROCK 1°

B: TO THE MOON I'M GOING
PRIMA E DOPO LA SCATOLA
IL MIO CANE SI CHIAMA ZENONE

フォルムラ・トレ、イル・ヴォーロを経て現在、ソロ活動を続けるラディウスが、フォルムラ・トレ在籍時に発表したソロ・アルバム。トレの、3枚目と4枚目との中間時に発表されたものである。ヴィンチェ・テンペラ、トニー・チッコ、ジャンニ・ダッラリオ、デメトリオ・ストラトス、ジュリオ・カピオッツォ、パトリック・ジヴァスと、トレ、イル・ヴォーロ、アレア混合チームの一大セッション・アルバムだが、曲としての構成はなく、トレの初期を思わせるようなアート・ロック的なセッション・アルバム。とてもヘヴィーなものである。ラディウスはこの他に5枚のソロ・アルバムを発表して現在も活躍中である。又、マルチェラ等のセッション活動も盛んである。 (山)



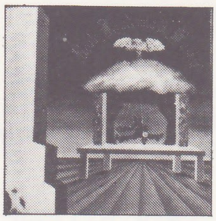
ALBERTO RADIUS
Che Cosa Sei

CBS キング 1976年
81476 廃 K22P-224 廃

A: CHE COSA SEI
L'ASINO
IL RESPIRO DI LAURA
LA META

B: SOUND
SALAMOIA
SUONI
ZENIT
POP STAR

アルベルト・ラディウスがイル・ヴォーロ解散後に発表した、ソロとしては2作目にあたるアルバムである。前作ではインプロヴィゼイション主体の奔放なプレイが堪能できるが、彼をギタリスト、シンガー、コンポーザーを含めた一人のソロ・アーティストとして見るならばやはりこの「ケ・コザ・セイ」、次作「CARTA STRACCIA」あたりを代表作としたい。カンタウトーレのアルバムとみなして軽くBGMとして聞き流すことも出来るし、また注意深く聴くならば随所に匂うトレ、ヴォーロの名残りはユーロロック・ファンにもアピールするものと思う。またもの憂いヴォーカルも絶品である。 (古)



REALE ACCADEMIA DI MUSICA
same title

Dischi Ricordi キング 1972年
SMRL 6105 廃 K22P-281 廃

A: FAVOLA
IL MATTINO
OGNUNO SA

B: PADRE
LAVORO IN CITTA'
VERTIGINE

牧歌的な中にも不思議な曲想を持つレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカの唯一のオリジナル・アルバムである。エコーのかけられたアコースティック・ピアノの響きが大きなカラーとなっており、又歌心を大切にして切々と語るようなヴォーカルも哀愁感に満ちている。地味ではあるが名盤である。特にA－2が珠玉の出来。彼等はこの他にもアドリアーノ・モンテドゥーロとの共演盤があり、そしてイ・ディク・ディクの「SUITE PER UNA DONNA」にゲスト参加しているという説（メンバーのクレジットがないのではっきりしない）、さらに本カタログでも紹介したFUNKA MUNKはレアーレのキーボーダー、フェデリコ・トロイアーニのソロ・アルバムだという説がある。 (山)



RICORDI D'INFANZIA
Io Uomo

FONIT CETRA : LPP 227 '73 廃

リコルディ・ディンファンツィアは73年に唯一のアルバムを発表している。ヘヴィーなプログレッシヴ・サウンドを得意とするためか、彼らの音を例える際、時にブラック・サバスの名が取り沙汰されるが、適切な例とは言い難い。ヘヴィーなギターワークのみを取れば類似性は見い出せるものの、サウンドの核を成すのはあくまでもオルガンであるし、ピアノ等を導入したサビの部分は紛れもなくイタリア的な手法に依拠しているからだ。但し全体的な音作りとしてはブリティッシュ・ロックからの影響が感じ取れるし、叙情性を求めるリスナーの耳に合うかどうかは保証出来ないが、多少なりともロック音楽の持つ重々しさに魅力を感じている人には推薦出来る作品。 (江)



CLAUDIO ROCCHI
Essenza

Ariston 1973年
AR/12112 廃

A: ESSENZA
SONO UN UOMO
È PER TE

B: RADICI E SEMI
TEMPLI E MERCATI
IL PASSO DA FARE
PER SCIAGLIERE UN FIOCCO

ミラノのブルジョアのお坊っちゃんらしくナルシスティックでみずみずしく脆弱な感性とパセティックな美意識に心を怠かれるクラウディオ・ロッキはマウロ・パガーニに見い出され Viaggio、Volo Magico n.1、La norma del cielo、Essenza、Il miele dei pianeti le isole le api、Rocchi、Suoni di frontiera をルチアーノ・バッソ、マティア・バザールの在籍するアリストン・レーヴェルからリリース。いくらかハードな印象派といった様相でA fuoco、Non c'è ne per nessunoをクランプスよりリリース。後は元アレアのP・トファニと宗教活動にいそしむようになりイスコン・レーヴェルからUn gusto superiore、Ras mandal neg gaeをリリース。後者はともかく彼の人なつこさと甘いリリシズムは魅力である。 (岡)



ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
La Bibbia

RCA PSL 10521 '71 廃

アルバム"Io Come Io"ではバンド名（メダルの裏側）を地で行く変形ジャケ（ジャケ中央に実物のメダルを組み込んだ）で我々の度肝を抜いた彼らであるが、その前にアルバムを1枚リリースしており、こちらにはメダル型のブックレットが付されている。日本ではシンフォニック色の濃い"Contaminazione"が有名であるが、初期に於る彼らの演奏内容は同作とは相入れないものである。次作とある程度共通の音作りがなされており、インプロヴィゼーション的な幕開けながら、荒々しいギターサウンドに支配されたハードロックで大半が埋め尽くされている。ジャケットには"dal vivo"のコメントがあり、スタジオライヴと推定されるが、キーボードレスでもありヘヴィな面ばかりがストレートに出過ぎた作りは評価が分かれそう。 (江)



IL ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Io Come Io

RCA　　1972年
PSL 10545　廃

A:	B:
IO	NON IO
FENOMENO	IO COME IO
a: PROIEZIONE	a: DIVENIRE
b: RAPPRESENTAZIONE	b: LOGICA

イル・ロベスチオ・デラ・メダリャのセカンドアルバム。ヘーゲルの実存主義をそのサウンドコンセプトにおいているようである。ここで聴かれるサウンドは、次のコンタミナツィオーネとはかなり趣の違ったもので、ラフな輪郭のハードロック的なアヴァンギャルド・ロックである。コンタミナツィオーネの壮大なオーケストレイトされたスリリングなサウンドと比較すると一目も二目もおいてはいるが、それなりの楽しみ方もできよう。驚くべきはジャケットで、中央の部分は金属のメダルでできており、彼等のグループ名がさかさまにうちだしてある。(グループ名はメダルの裏側の意でそれをもじったものである。)いくら当時のイタリアは変形ジャケットが多いといってもここまで徹底したものも珍しい。英盤もでていた。　（山）



IL ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Contaminazione

RCA　　1974年
TPL-1-1049　廃

A:	B:
ABSENT FOR THIS CONSUMED WORLD	JOHANN SCOTLAND MACHINE
ORA NON RICORDO PIU'	CELLA 503
IL SUONO DEL SILENZIO	CONTAMINAZIONE 1960
MI SONO SVEGLIATO E...HO CHIUSO GLI CCH	ALZO UN MURO ELETTRICO
LEI SEI TU: LEI	SWEET SUITE
	LA GRANDE FUGA
	LA MIA MUSICA

イル・ロベスチオ・デラ・メダリャは71年に「LA BIBBIA」、72年に「IO COME IO」、74年に本作を発表する。75年にはFROGレーベルに移籍して4枚目のLPを発表（FROG FRL0101）し、解散してしまう。ファーストはメダル型ブックレット付き、セカンドは金属のメダル付きジャケットと変形ジャケットの頂点を行くようなものであったが、ここまでの彼等はドイツ的なヘヴィー・ロックを演奏していた。本作ではアレンジャーにルイス・エンリケス・バカロフを迎え、生のストリングスを大胆に導入し、壮大なバロック・ロックを演奏している。4枚目のLPに関しては同年に発表されたシングルしか手元にないので全体像は把握しかねるが、多少ポップさを増してはいるもののなかなかの出来であるようだ。　（山）



RUSTICHELLI E BORDINI
Opera Prima

RCA　　1973年
DPSL-10594　廃

A:	B:
NATIVITA	UN CANE
ICARO	E SVEGLIARSI IN UN GIORNO
DOLCE SORELLA	CAMMELLANDIA

二人のスタジオ・ミュージシャンが創りあげたこのアルバムは、すべてのプログレ・ファンを驚嘆させることだろう。ドラム担当のカルロ・ボルディーニは縁の下の力持ち的役割りに徹しており、主役は全編に渡ってメロトロン(!!)、ピアノ、オルガン、アープを縦横無尽に操るパオロ・ルスティケッリである。曲のスタイルは、Key,B,Dr.というトリオ編成のものを想像していただければよいのだが、この作品にベースは入っていない。そのかわり唸りをあげて迫ってくるアープ・シンセが圧巻で、ベース・パートを補ってあまりあるものがある。キーボードを中心としたバンドは、世界中に数多く存在したが、これ程の重厚さと広がりを持った作品はちょっと見あたらない。とにかくスゴイアルバムなのである。　（城）



SAINT JUST
same title

EMI　　1973年
C064-17870　廃

A:	B:
IL FIUME INONDO'	UNA BAMBINA
IL RISVEGLIO	TRISTE POETA DI CORTE
DOLCI MOMENTI	SAINT JUST

恐怖のヴォーカリスト、アラン・ソレンティの姉か妹かはわからぬが、ジェニー・ソレンティの歌を一聴すれば、彼の血筋であることは疑う余地もない。このジェニー(Vo.)とアントニオ・ヴェルデ(G.B.Vo.)、ロベルト・フィクス(Sax)の3人を中心としてこのサン・ジュストは結成された。他にもドラムのアントニオ・エスポジートをはじめ、ギター、キーボード奏者の3人が参加し、レギュラーに近い活躍をしている。またアラン自身もこのアルバム作りに関わっており、B－1の曲では自らあのヴォイスを披露している。本作は彼らの1stアルバム。基本的にはアランの初期の作品に強く影響されており、美と狂気の交錯した空間を創出している。さらに、とてもとてもうつろな雰囲気に包まれたジャケットも最高だ!!　（城）



SAINT JUST
La Casa Del Lago

EMI　　1974年
3C064-18033　廃

A:	B:
TRISTANA	VIAGGIO NEL TEMPO
NELLA VITA	LA CASA DEL LAGO
UN PIANTO	MESSICANO
	LA TERR DELLA VERITA

フランス革命期の人物SAINT JUSTから名を取ったサン・ジュストはアラン・ソレンティの兄妹(姉弟？)ジェーン・ソレンティのバンドだ。これはセカンド・アルバムで、前作よりやや力強くなっているが、やはりアラン・ソレンティの女版といった曲展開を聴かせてくれている。バンドはこのアルバム発表後解散してしまうが、後にジェーンはジェニィ・ソレンティ（JANNY SORRENTI）というクレジットで2枚ソロ・アルバムを発表している。このうち2作目は最近のアラン・ソレンティ同様ポップな音創りとなってしまった。又、バンドのベーシスト、トニー・ヴェルデはロル・コックスヒル、デヴィッド・ボウハウス等をむかえてソロ・アルバムを1枚発表した。　（山）



SAMADHI
same title

FONIT: LPQ 09080　'74　廃

LUCIANO REGOLI - VO
NANNI CIVITENGA - G
ALDO BELLANOVA - B, AC-G
STEFANO SABATINI - KBD
SANDRO CONTI - DS
RUGGERO STEFANI - PER
STEVO SARADZIC - S, FL
PRO: NANNI CIVITENGA

元L'Uovo Di Colombo, Raccomandata Ricevuta Ritornoのメンバーを中心に結成されたサマディは74年に唯一のアルバムを発表している。当初、「ブラスをフィーチャーしたソウルフルな音で完成度は今一つ」との変な噂が独り歩きしてしまい、正当な評価を受ける機会を逸して来たが、実際には水準以上の素晴らしい演奏が楽しめる。シンフォニック性という点では確かに疑問符が付くものの、ブラスを取り入れた曲は2曲のみで、他は流麗なピアノや透明度の高いヴォーカルを中心に無難な演奏を聴かせている。しかし特筆すべきは8分にも及ぶB面ラストの曲"L'Ultima Spiaggia(究極の浜辺)"だ。イタリアン・ロックの持つ叙情性を余すところ無く詰め込んだ秀曲となっている。　（江）



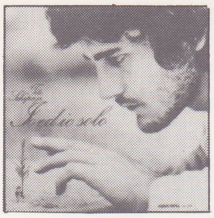
SANGIULIANO
Take Off

RCA　　1978年
PL 31361 廃

A: TIME CONTROL

B: SAFFO'S GARDENS
TAKE OFF

電子楽器類、ピアノ、ヴォイスが複雑化されたシンフォニーを奏でる。スタイルはいわゆる近代的な管弦楽法のモチーフを電子的に処理するというものである。ピエロ・リュネールに近い感性を持ちあわせてはいるが、決して似ているわけではなく、あくまで全体の「感じ」としてである。的確な表現をするとすれば「後期ロマン派の叙情をサウンドコラージュとして電子的処理のもとに新解釈するグループ」とでもいえるのだろうがこれではたしてこの作品の持つ特異性を正確に伝えることができるのだろうか。壮大な空間はワーグナーからシェーンベルグの前期に致る刹那的な叙情に満ち満ちている。サンジュリアーノはイタリアという枠を越えた一つの偉大な感性の塊である。アドリアノ・モンテドゥーロのプロデュース。（山）



TITO SCHIPA JR.
Io Ed Io Solo

FONIT CETRA : LPX 31　'74 廃

ティト・スキーパ・ジュニアは73年に発表した２枚組のポップオペラ・アルバム“Orfeo”(Fonit Cetra : LPX 16/17)が割と良く知られており、日本でも人気がある様だが、翌74年に同レーベルからリリースされた本作もその叙情的な内容が高く評価されている。アルバムには70年から73年までに作られた曲が収録されており、B面は組曲構成になっている。acギターをバックにした、独特の語りかける様な歌唱がたまらない魅力となっており、それをピアノ、ストリングス等が見事に引き立てている。ポップな面はさ程見受けられず、M.ペロシの暗さとも一線を画した、“感傷的”とも言える音作りが支配的となっており、歌物の中ではチロ・ダミコ等と並び非常にアピール力のある作品となっている。79年、スペシャル3000シリーズで再発されている(Fonit Cetra : SFC 218)。（江）



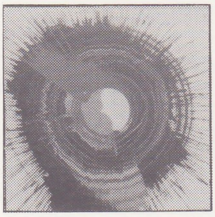
TITO SCHIPA JR.
Concerto Per Un Primo Amore

GATTOCICOVA : LP33604　'82 廃

A : ANNA VIOLA(SUITE)
NON PASSERETE
HO PENSATO A TE PAPA

B : CHILD OF DARKNESS
UCCIDENTEMI
DONNA DANIELA
PORTA PIA
ANNA VIOLA(RIPRESA)

あの名作“Io Ed Io Solo”を創りあげたこの天才アーティストは、その後80年に芳しくない３枚組ポップ・オペラ“Er Dom Pasquale”に参画。その後の動向を知る由も無く新録音など思いもよらなかったのだが、このアルバムを突如発表。Ａ・Ｂ面通してトータル性が感じられるが、特にA-1、16分を超す組曲は感動的なフレーズに包まれた傑作である。又、B-1は貴重なライヴ録音でしみじみと訴えかけるかのような涙の名曲。全編を通じて往年の姿を彷彿とさせ、繊細にして緊張感を伴う劇的な唱法は、今もなお神のみに成せる業である。80年代に於て群を抜いたアルバムであるのは勿論のこと、70年代の名作と同列に扱うべき逸品である。尚、バックを務めるHorusというグループは気になる存在である。（鈴）



LA SECONDA GENESI
Tutto Deve Finire

PICCI : GLA 2002　'72 廃

ALBERTO ROCCHETTI - KBD, VO
PARIDE DE CARLI - G
NAZZARENO SPACCIA - B
GIAMBATTISTA BONAVERA - S, FL
PIER CARLO LEONI - DS

セコンダ・ジェネシ唯一のアルバム。72年、ローマのマイナー・レーベルPicciからのリリースであるが、200枚の限定製作で、カラフルな絵の具を施した手作りのジャケは200枚全てデザインが異なる。ただ、演奏の方は純シンフォニックとは行かず、評価が分かれそうだ。サックスを積極的に取り入れ、イタリア物としては珍しくドロドロした、割とフリーな部分が目に付くが、フレンチ・ジャズロックの様な難解さは無く、一つ一つの音を取れば、かえってシンプルな印象さえ抱かせる。特にギターとオルガンが中心になるパートではオーソドックスな展開も見られるが、一方所々でセンスの良さがキラリと光り、その美的感覚はまさしくイタリア独特の物と言える。限られた要素の割には水準の高いプログレッシヴ・ロックとなっている。（江）



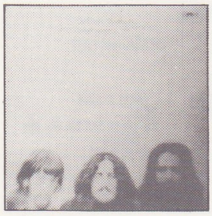
SEMIRAMIS
Dedicato A Frazz

Trident　　1973年
TR 1004 廃

A: LA BOTTEGA DEL RIGATTIERE
LUNA PARK
UNO ZOO DI VETRO

B: PER UNA STRADA AFFOLLATA
DIETRO UNA PORTA DI CARTA FRAZZ
CLOWN

古代バビロニアの女王で、空中庭園を造ったことで知られる「SEMIRAMIS」からグループ名をとったセミラミスは73年にトリデント・レーベルの４番として唯一のアルバムを発表して消えた神話的存在である。邪悪な匂いを漂わせるムードは彼等独特のもので、チェルヴェッロ、ラコマンダータ、オザンナ、ムゼオ等にも通じる暗のエナジーを発散している。ドラムとビブラフォーン担当のパオロ・ファエンツァ、ベースのマルチェッロ・レッダヴィーデ、ギター等のジャンピエロ・アルテジャンニ、ギターとボーカルのミケーレ・ザッリーロ、キーボードのマウリツィオ・ザッリーロの計５人のミュージシャンから成る。曲はミケーレ・ザッリーロのペンで、彼は後にソロ・アルバムを出すが完全なポップ・アルバムである。（山）



SENSATIONS' FIX
Portable Madness

POLYDOR 2448 034 A　'74 廃

A : SMOOTH AND ROUND
FULLGLAST
PHASE ONE AND PHASE
UNDERWATER

B : THE NEXT PLACE OF NOBODY
PASTY DAY RESISTANCE
LEAVE MY CHEMISTRY ALONE
STRANGE ABOUT THE HANDS
WITH RELATIVE JUMP INTO WATER

「Fragments Of Light〈Polydor 2448 023〉　年」に続くセンセイションズ・フィクスの2hd。如何にもロック的な乗りのリズム・セクションを従えて、フランコ・ファルシーニがシンセサイザーを中心に、ギターも多用して、伸びやかかつメロディアスな演奏を展開している。所謂、エレクトリック・ミュージック系のサウンドであるが、音に暖かみがあり軽快で聴き易いものとなっている。本作以後も「Finest Fingers〈同2448 048〉76年」「Boxes Paradise〈同2448 064〉77年」「Flying Tapes〈同2448 074〉　年」と３枚のアルバムを発表しているが、これらは初期の２作とは異なり、いずれもボーカルを主体としたポップな作品である。なお、ファルシーニは　年にサントラ盤「Cold Nose〈同2449 012〉」を発表している。（賀）



I SIGNORI DELLA GALASSIA
Qualcosa Si Crea,
Nulla Si Distrugge

MAGIC : MRLP 1004 廃

FRANCO DELFINO - KBD, VO
BEPPE ALEO - DS, PER
SERGIO BABBONI - B, VO
BRUNO GOVONE - G
MANUEL GUSTAVINO - STEEL G, VO
GIGGI MOSELLO - KBD, VO
PAOLO MARCELLI - AC-G, VO
DANIELA MANICARDI - VO

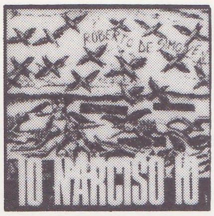
「ガラシアの紳士達」と名乗るこのグループは数枚のシングルとリフィから出した“Iceman”というLPが知られているが本作は恐らく最初のLPと思われる。美しいサウンドが好評のシングルナンバー“Creazione”等質の高い曲で綴られている。A、B面各6曲の小品集といった体で、プログレというよりはやはりラヴロックという感じだがピアノやメロトロンの美しい響きは圧巻で、軽めの電子音に傾倒した“Iceman”からは想像出来ない素晴らしい内容になっている。DIK DIKやEQUIPE 84といったポップ・ロック系の有名どころと同等の評価が下せそうだ。キーボードのフランコがリーダー格でアレンジも担当する。一部では若干重量感に欠ける嫌いもあるが、キーボード系の踏ん張りが聴き応えのある作品にしている。（江）



CARLO SILIOTTO
Ondina

PHILIPS : 6323 083 '79 廃

カルロ・シリオットーイタリアン・ロックに詳しい人ならカルナシャリア、カンツォニエーレ・デル・ラツィオに参加したヴァイオリニストとして彼の名を記憶していることだろう。他にソロが出ているかどうか不明だが、本作では両バンドのメンバーを含む16人のゲストを迎え、地中海民謡に根差したたおやかな調べで水の精オンディーヌの物語を奏で上げる。彼自身が弾くヴァイオリンや語り掛ける様なヴォーカルを初め、ピアノ、マンドリン、マリンバ、各種管楽器等を駆使、美しいジャケットや内袋のイラストのイメージそのままの甘く切ないメロディーで綴られており、〝民族音楽〟に拒否反応を示すシンフォニック通でも十分に堪能出来る素晴らしい内容になっている。（江）



ROBERTO DE SIMONE
Io Narcisolo

RCA : PL 31254 '77 廃

A : IO NARCISO IO
RICERCARE
IL BALLATA DELLA CALPA
IL GIOCO DEL CAVALLO A DONDOLO
E IL DILUVIO

B : LEGGENDA PER UN FIORE BRUCIATO
LO SHIMMY DEL MITOMANE
INTERMEZZO-LA STRAGE DEGLI INNOCENTI
ANNA NON MI ABBANDONARE
DIES IRAE

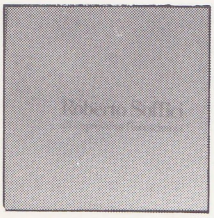
ナポリの前衛民衆オペラグループN.C.C.P.(Nuova Conpagnia Di Canto popolare）は、現在までに10枚を超えるアルバムを発表し続ける貴重なグループである。（蛇足乍らMusica NovaはNCCPの分裂から生れたグループである。）彼等の大衆歌劇はロック雑誌に於てさえ好意的に紹介され、Osanna 等と同列に言及された記事も見かけられる程だ。そんな彼等のリーダーであるR.De Simoneのこの作品はNCCPから泥臭さを除き、よりソフトな仕上がりとなっている。そのサウンドからBranduardiを思い出してしまうのは私だけだろうか。哀愁を帯びた夢見るようなサウンドは、まるで童話の世界そのままで、無垢で純真な心を呼び醒ましてくれる。なお、A-1は悲哀感に満ちた名曲である。（鈴）



CLAUDIO SIMONETTI
same title

BANANA : PLBAN 5033008 '81 廃

ゴブリンのクラウディオ・シモネッティが81年にリリースした 1st ソロアルバム。彼はこの他にもソロを出しており、また同じゴブリンの主要メンバー、マッシーモ・モランテのソロアルバムも存在するが、本作が最も出来が良い様に思われる。美しいピアノで幕を開け、ストリングスがフォローするオープニングは透明感溢れる作風を象徴するかの様であるが、全体としては現代的な軽いタッチで仕上げられており、また女性ヴォーカルを取り入れたかなりポップなナンバーも含まれるなど往時のゴブリンを知るリスナーには若干物足りないかも知れない。しかしB面ラストには、あの名曲“Profondo Rosso”が収録されており（もちろん別テイク）、感動的な終幕が約束されている。（江）



ROBERT SOFFICI
All'improvviso L'incoscienza

CETRA LPX 57 '77 廃

A: ALL'IMPROVVISO L'INCOSCIENZA
POESIA, MUSICA, E ALTRE COSE
SI BALLAVA...SI RIDEVA...
OCEANO
MILANO LOVE STORY

B : L'AMORE FINISCE
SUSAN
NEL DOLCE RICORDO DEL SUO SORRISO
ECCETERA ECC...

ロベルト・ソフィーチに関しては72年にリコルディ・レーベルよりリリースされたアルバム In Queste Ore Chiare (Ricordi SMRL 6106) と77年にフォニット・チェトラからリリースされた本アルバム、及びその後チェトラからの2枚の今日風のサウンドの計4枚しか資料がないが、おそらく他にもアルバムがあるだろうと思う。しっとりとした歌声を持つカンタウトーレで、生のストリング・オーケストラを加えて優しい歌を歌いかける。彼は歌の他にギターとアレンジも手がけ、その才能の冴えを聴かせてくれる。バックにはアンディ・スルディやサイモン・ルカ等が参加しており、曲によってはリリカルなインストゥールメンタル・ナンバーもあり変化がつけられている。（山）



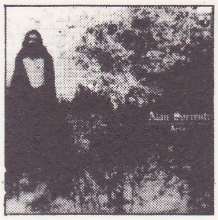
ALBERTO SOLFRINI
same title

PE-MI : LPASF 20

ALBERTO SOLFRINI - VO
CIRO ETTORE - G, KBD, PER
PINO ETTORE - B
LUCA ORIOLI - KBD
ENZO VALLICELLI - DS, PER

PRO: MICHELE PETRALIA

アルベルト・ソルフリーニなるシンガーのアルバムである。彼に関して詳しい事は一切分からないが、歌物の非常に良質なサンプルとして取り上げてみた。発表年は不明で、70年代終盤とする推測も根拠に乏しい。ジャケの片隅に描かれたリアルト橋はB面ラストの曲“Venezia”のイメージだろうか。叙情派のシンガー達とは一線を画すものの、イタリアの土の香が漂って来る様な手作りのサウンドで、あたかも地中海の民の喜怒哀楽を歌い上げるが如き雰囲気はブランドゥアルディの愛聴者あたりには支持されそうだ。ムーグ等キーボード類も取り入れているが、それ程前には出て来ない。むしろ、たまに顔を出すヴァイオリンや、歌心を大切にした説得力のある彼の歌唱が心に染みる。（江）



ALAN SORRENTI
Aria

EMI 1972年
3CO64-17836 廃

A: ARIA

B: VORREI INCONTRARTI
LA MIA MENTE
UN FIUME TRANQUILLO

現在でも活動を続けるアラン・ソレンティのファースト・アルバム。最近の彼はポップ・シンガー風に移行してしまい、当時の面影を感ずることは難しいが、サード・アルバムあたりまでの彼の作品は、豊饒な空間で占められる見事なものである。特に本アルバムでのジャン・リュック・ポンティがヴァイオリンで参加するA面全てを費した大作「アリア」の肥沃な空間は素晴らしいものだ。マントをひるがえし、髪をふりみだして山野を闊歩する姿を本アルバムのジャケットで見ることができるが、この時代のソレンティの目はとても生き生きとしているような気がする。カンタウトーレの中でもクラウディオ・ロッキ等らと同じく一癖も二癖もある男である。（山）



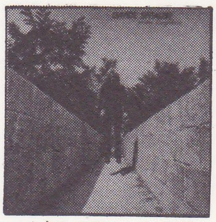
ALAN SORRENTI
Come Un Vecchio Incensiere All'alba Di Un Villaggio Deserto

EMI 1973年
3C 064 17878 廃

A: ANGELO
SERENESSE
UNA LUCE SI DECENDE
ORATORE
A TE CHE DORMI

B: COME UN VECCHIO...

73年にロンドン録音されたA.ソレンティの2ndアルバムである。1st以来のトニー・エスポジト（per）に加え、デイヴ・ジャクソン（Sax、元ヴァン・ダー・グラフ）、フランシス・モンクマン（Kbd、元カーヴド・エア、スカイ）といったミュージシャンを迎え、1st同様、水流の様なヴォーカルを聴かせてくれる。彼のヴォーカル・スタイルは自然との合致の方向をとっており、その点自らの内的宇宙へ向かっていたP.ハミルとは見事な対照を成している。ソレンティの液体状にからみつきながらも蒼天へ突き抜けて行くような声は彼独自のものであり、夏の夕立を思い出す程の爽快さである。ちなみにジャケットは中央がくり抜かれており、リーフレットが付いているという変形物である。（千）



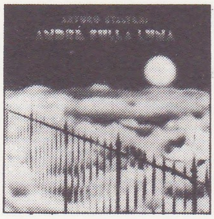
DAVIDE SPITALERI
Uomo Irrengolare

CIAO: CIA 1004 '80 廃

DAVIDE SPITALERI - VO
GIANNI MARCHETTI - P, KBD
STEFANO SANESI - P
WALTER CALLONI - DS
MASSIMO FABRESCHI - B
MAURIZIO DE LAZZARETTI - DS
VINCENZO MANCUSO - G
FRANCO COLETTA - G
GIORGIO COCCILOVO - G
MAURO PAGANI - VLN
GIAN ODDI - S

PRO: MARIO SIMONE
GIANNI MARCHETTI

メタモルフォーシのヴォーカリスト、ダヴィデ（ジミー）・スピタレッリのソロアルバム。針を落とすと間もなく彼の歌声が聞こえて来るが、かすかにヴィブラートのかかった独特の唱法は昔のままだ。しかし作品の内容は典型的なカンタウトーレ路線、プログレとはすっかり縁を切ってしまったらしい。7年間の空白については推測するしかないが、タイトル曲などでは現代風のアレンジもすっかり板に付いており、見事な変貌ぶりと言ってもいいだろう。もちろん歌物としては水準を超えた出来で、かつては余り聴かれなかった高音域で畳み込む歌唱が冴える。数曲でM.パガーニの弾くヴァイオリンが聴かれるが、かつてのバンド仲間の参加は無い。なお彼はニックネームの"Thor"名義でも作品を発表している。（江）



ARTURO STALTERI
Andre Sulla Luna

It 1979年
ZPLT-34062 廃

A: IL SOGNO DI ANDRE
L'alba Ancestrale
Il Prisma Magico
Viaggiando Trairiflessi
Verso La Luna

B: ANDRE SULLA LUNA
Gli Hins,
Sul Mare Omicida
I Kroll!
Andre e Sabiba
Verso La Realta
Morte Mentale Di Un Sogno

ピエロ・リュネールのキーボード奏者、アルトゥーロ・スタルテッリのソロアルバム。ピエロ・リュネールは74年と77年にアルバムをリリースしているが、これは79年の作品である。名作「グドルン」をあきらかに継承したサウンドコラージュが展開されている。ピアノや様々な電子キーボード群、そしてリコーダーやシーケンサーを用いて彼おとくいの万華鏡のようなサウンドがところせましとかけ回って行く。彼のたぐい稀なセンスには驚くばかりで、おそらく現在のイタリアンロック・シーンの中で唯一無比の存在ではなかろうか。「月の上のアンドレ」という童話的なストーリーを持つトータル・アルバムである。（山）



STORMY SIX
Macchina Maccheronica

L'orchestra 1980年
OLPS 55009 廃

A: MACCHINA MACCHERONICA
LE LUCCIOLE
MADONINA
MEGAFONO
MADONINA
BANCA

B: PIANETA
RUMBA SUGLI ALBERI
ENZO
VERBALE
MADONINA
SOMARIO
MADONINA

ロルケストラ・レーベルの中心的存在であるストーミィ・シックスは8枚のアルバムを発表し、尚現在も活動を続けるアヴァン・ギャルド・ミュージックの雄である。ニュー・レジスタンス時代から政治的なアジテート・ソングを歌っていた彼等は、ヘンリー・カウとの出会いにより、より複雑化された音楽性を持つようになり、この7枚目であるライヴ・アルバム「マッキーナ・マッケロニーカ」でその頂点を極めるに至る。見事なアンサンブルは、多種の音楽のアマルガムの様相を呈し、アレアと双璧を成すといっても過言ではあるまい。このあと、多少ポップになった最新作「V-OLO」を発表するが、まだまだ彼等の創作意欲は衰えてはいない。（山）



LA STRANA SOCIETA'
Fai Tornare Il Sole

DURIUM MS A 77354 '74 廃

A: FAI TORNALE IL SOLE
DUE RIGHE PER DANIELA
SOLO IERI
DIARIO DI UN FORTE
ANCORA INSIEME

B: E' AMORE
SOLE GIALLO
QUANTI PASSI!
BAMBINA STRANA
E COSI' TE NE VAI

後にソリストとして活躍するウンベルト・トッツィが在籍していたことで知られるストラーナ・ソチエタは2枚のアルバムをリリースして消えたグループである。FONITのLPQシリーズとしてリリースされたファーストアルバム「Pop Corn」はムード・ミュージックを演奏するアルバムでどうひいき目にみてもあまり良い出来とはいい難いが、このドゥリウムよりリリースされたセカンド・アルバムは、うってかわり好アルバムに仕上げられている。いわゆるカンタウトーレ・タイプのサウンドで、歌を中心としたアンサンブルが非常にイタリアらしい、みずみずしい感性にあふれている。愛くるしい、ほのぼのとしたそのサウンド・イメージは彼等独特の持ち味である。（山）

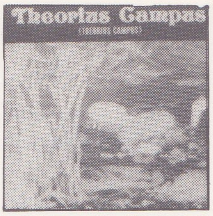


STEFANO TESTA
Una Vita Una Balena Bianca E Altre Cose

DISCO PIU : DP 39007 '77 廃

STEFANO TESTA - VO, P, G
MARCO COPPI - FL
ALBERTO MONPELLIO - MOOG
COSIMO FABIANO - B
OTTAVIO CORBELLINI - DS

ペントラ・ディ・パピンと同じDisco Piuレーベルからリリースされたステファーノ・テスタというシンガーのアルバム。歌物の持つ叙情的な味わいとプログレッシヴな緊張感が程良く調和した好作品である。特に、幻想的なフルートの調べで幕を開けるＡ１の組曲（オペラに題材を求めている）はアコースティックなパートと、ストリングス、フルート等を駆使した動きのあるパートのコントラストが際立つ秀作で、最もイタリア的なタッチで仕上げられている。他のナンバーは多少、歌の占める比重が大きくなるが魅力的なものばかりで、春のうららかな日差しを感じさせる素朴な作風、叙情的なストリングスやacギターをバックに切々と歌い上げるイタリア特有の手法と、２通りの楽しみを提供してくれる。（江）



THEORIUS CAMPUS
same title

IT ZSLT 70007 '72 廃

A : CIAO UOMO
SIGNORA AQUILONE
LA CANTINA
E' CADUTO L'INVERNO
POLCE SIGNORA CHE BRUCI
LA CASA DEL PAZZO

B : VOCAZIONE 1 E 1/2
L'AMORE E' COME IL TEMPO
IN MEZZO ALLA CITTA'
ROMA CAPOCCIA
LITTLE SNORING WILLY
SORA ROSA

A.ヴェンデッティとF.デ・グレゴーリが在籍していたイタリアン・プログレッシヴ初期に存在していたグループ。当時の気運から、シンセサイザーを効果音的に使用したり、前衛的なアレンジを聴くことができるが、全体を通して感じられるものは、歌を中心としたトラディショナルなもので、若い、熱を帯びたような感覚が非常に初々しさを伝えてくれる。P.リュネールと同じITレーベル、あるいはミレーの美しいカヴァーから、典型的なプログレッシヴ・グループの音を想像した方には期待はずれかもしれないが、カンタウトーレ・タイプのグループを愛する方々には好盤である。イタリアン・ロックの春に製作された１枚――テオリウス・カンプスのおそらく唯一のアルバムである。（山）



ALFREDO TISOCCO
Kátharsis

SUONO : SRLP 1001 '75 廃

ALFREDO TISOCCO - P, ORG, KBD
VINCENZO CAROLI : FL
DANIELA COLONNA : ARP
RICCARDO PERRARO : CEL
PIEREGIDIO SPILLER : VLN
ENRICO PROFESSIONE - VLN
LUCIANO TAVELLA - FL, S
RENATO ZANELLA - G
GIORGIO PIAZZA - B
ROBERTO RONDA - VO
PAOLO SIANI - PER
PRO : ALFREDO TISOCCO
FRANCA DELLA LIBERA

オパス・アヴァントラのリーダー、アルフレッド・ティゾッコのソロ・アルバム。同じSuonoレーベルの２番はオパスの2nd "Lord Cromwell" であるが数曲が両作に重複して収録されている。本作は、Gruppo Italiano Di Danza Libera なる舞踊集団のために書き下ろされたバレエ音楽らしいのだが、彼の名はジャケの下の方に小さく記されているだけで、うっかりすると見過ごしてしまいそう。"Lord Cromwell" との重複部分を除けば、サウンド・コラージュが大部分を占め、その凄まじい展開はオパス・ファンでなくとも思わずゾクリとしてしまうが、その過程の中で不連続的に現れる美しいフレーズが更に情趣を盛り上げている。なお、オパスのメンバーの他にPFMのジョルジョ・ピアッツァが参加している。（江）

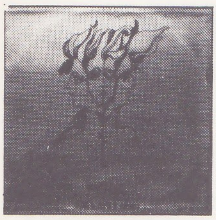


TOTO TORQUATI
Gli Occhi Di Un Bambino

RCA : DPSL 10573 '73 廃

TOTO TORQUATI - KBD
MASSIMO BUZZI - DS
MICHELE JANNACONE - DS, PER
LUCIANO CICCAGLIONI - G
MARIO SCOTTI - B
GEPY & GEPY - VO, PER
PRO : GEPY & GEPY

キーボード奏者トト・トルカーティのリーダーアルバム。ローガン・ドワイト、クラウディオ・バリオーニ、ミーナ等の作品に参画している彼だが、自分名義のアルバムは本作のみと思われる。非常に質の高いポップ・プログレが聴かれ、73年という百花りょう乱の時代に於ても埋没することなく十分な自己主張をなし得たことだろう。残念ながらブームの最盛期でさえも日本のリスナーとは疎遠であった。トトのキーボードワークと美しいオーケストレーションをメインに、曲想は割と多岐に渡る。クラシカルなストリングスから突如ロック調のフレーズが出て来たかと思うと、哀愁たっぷりの歌から緩やかなバラード調のナンバーへ、といった具合だが、どのスタイルの曲も円熟した演奏と好アレンジでキメ細かに仕上げられている。（江）



TRIADE
1998 : La Storia Di Sabazio

Darby DBR-65801 廃　KING K25P-414 廃 1973年

A : SABAZIO
a : NASTICA
b : IL VIAGGIO
c : IL SOGNO
d : VITA NUOVA
IL CIRCO

B : ESPRESSIONE
CARO FRATELLO
1998

トリアーデとは英語のトリオのことである。いわゆるエマーソン・レイク・アンド・パーマーに触発されたキーボードを中心としたトリオであるのだが、それだけではすませられない魅力を備え持っている。テクニック的にはさして聴くべきものはないのであるが、全体を支配するとりとめのない雰囲気はトリアーデ独自のものを感じさせる。ベースの代わりにチェロを使用してみたり、ギターやピアノのソロを随所にちりばめたりしているが、キーボードの持つイメージはめずらしく印象派からの影響があることも特徴といえよう。ただ難をいえばプロデュースの甘さがみられ、それが非常に残念である。彼等の残したこの唯一のアルバムは金色のジャケットに包まれている。（山）



THE TRIP
same title

RCA : PSL 10460 '70 廃

BILLY GRAY - G, VO
ARID "WEGG" ANDERSEN - B, VO
PINO SINNONE - PER
JOE VESCOVI - ORG, VO

トリップの1stアルバム。多少なりともプログレッシヴな方向を志してのキーボードロックとしては、イタリアでは最初期の作品と言える。次作 "Caronte" ではかなり完成された演奏を聴かせているが、本作は構成面でも若干劣り、60年代の古めかしさから完全に脱皮し切れない、"プログレ" としてはまさに手探りの状態であった。それでもオルガンを徹底的にフィーチャーした演奏の端々には次作と共通するスタイルが伺え、Ｂ１あたりではさり気なくイタリアらしさをアピールするフレーズも配してある。アルバム自体の完成度はともかくとして、バンド自身の原点というだけでなく、イタリアン・プログレッシヴロック黄金時代の夜明けを告げる、先駆的な作品との位置付けは許されると思う。（江）



THE TRIP
Caronte

RCA 1971年
PSL 10509 廃

A: CARONTE I'
TWO BROTHERS
LITTLE JANIE

B: L'ULTIMA ORA E ODE A J.HENDRIX
ODE A.J. HENDRIX
CARONTE II

トリップのセカンド・アルバム。メンバーはJOE VESCOVI（キーボード）、WILLIAM GRAY（ギター）、ARVID《WEGG》ANDERSEN（ベース）、PINO SINNONE（ドラム）の４人で、うちドラムスのピノ以外はイギリス人である。曲名を見ていただければおわかりと思うが、ヘンドリックスを愛するヘヴィーなギターワークと、ジョーのキーボードワークの織り成す変幻自在のサウンドに加え、様々な効果音も加えられ、見事な内容である。スタジオ・アップ・アンド・ダウンの担当するジャケットも仲々のもの。この後、ギターが脱退し、サード「アトランティーデ」、フォース「タイム・オブ・チェンジ」（TRIDENT 1002）と計４枚のアルバムを発表して解散してしまう。 （山）



THE TRIP
Atlantide

RCA 1972年
PSL 10540 廃

A: ATLANTIDE
EVOLUZIONE
LEADER
ENERGIA

B: ORA X
ANALISI
DISTRUZIONE
IL
VUOTO

トリップのサード・アルバム。ファースト、セカンドアルバムまではギターが加入していたが、このアルバムよりキーボード・トリオ・スタイルになる。翌73年に４枚目のアルバム「Time Of Change」（Trident：TRI-1002）を発表後、解散。ドラマーのフリオ・キリコはアルティ・エ・メスティエリを結成することになる。本アルバムは幻の大陸アトランティスをめぐるトータル・アルバムであり、エレピとオルガンという地味な楽器を中心に、しかもほとんどダビングもなしで（つまりそのままライヴ演奏できるように）創られていて、そういう事実を考慮するならば、なかなかの力作といえる。アトランティス大陸を描いた変形ジャケットは「UP & DOWN」なるグループ（クエラ・ベッキアの1stも彼等による）の手によるものだ。（山）



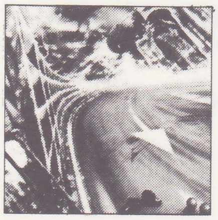
FEDERICO TROIANI
Strade

RICORDI - SMRL 6223 '78 廃

FEDERICO TROIANI - P, VO
CARLO PENNISI - G, VO
FERNANDO FERA - G
DINO CAPPA - B
GLAUCO BORELLI - B, VO
SANDRO CENTOFANI - KBD
GIANCARLO ARU - DS
MAURO CHIARI - HCA, VO
LINDA JACONELLI - VO

PRO : F. TROIANI, MAURO CHIARI

元レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカのキーボード奏者フェデリコ・トロイアーニの1st ソロ。既に往年の流麗なピアノプレイは消えてしまい、標準的なカンタウトーレの道を歩み始めた様だ。77年にレアーレ時代をほうふつとさせるシングル（RCA）を発表していることが明らかになりマニアを慌てさせたが、他のソロ作品を聴く限り大勢に変化は無く、昔の演奏形態に戻ることはなさそうだ。バックの演奏が少々スマート過ぎるのが気に懸かるが、そこはA.モンテドゥーロとの共演盤であれ程ファンタジックな内容をこなした実力者、雰囲気作りも心得たもので、切々と歌い上げるナンバーで真価を発揮。たまに奏でられるacピアノ以外は殆どヴォーカルに専念、Sandroのキーボードやコーラス陣が専らバックアップに回る。なおレアーレからの参加はD. Cappa １人だけ。 （江）



ULTIMA SPIAGGIA
same title

Ultima Spiaggia 1975年
ZLUS 55181 廃

A: L'《INCIDENTE》
VOGLIO VIVERE
MOTIVO ANGOSCIA 1
CANTO DELLE STREGHE E DEL DEMONIO
MOTIVO ANGUSCIA 2
SAMBA DELLA TORTURA E DELLA GUERRA
CHE CUSA E...

B: MOTIVO ANGUSCIA 3
ROCK DELLA RICOSTRUZIONE
DAVANTI AL NASTRO CHE CORRE
MOTIVO ANGUSCIA 4
ZUCCHERO MIO
PIACERE E POTERE
MOTIVO ANGUSCIA 5
L'《INCIDENTE》

自動車事故に会った男の心臓の音が次第に弱まり、停止してしまう。男の魂は肉体を離れ、地獄巡りが開始される、といったストーリーの元にウルティマ・スピアッジアの残した唯一のアルバムは展開されていく。構成力もテクニックも高水準の出来である。グレゴリア聖歌や、ケチャ祭り風のサウンドエフェクトを使用したり、あるいは美しい叙情ナンバー等がちりばめられ、次から次へと地獄絵図が進行する。全体の展開はピンク・フロイドの「狂気」を想わせるが、曲の内容は彼等のオリジナリティーにあふれている。これまた薄気味の悪いブックレットが御丁寧に付されている。グループ名は「究極の浜辺」の意。曲名は「生への望み」、「苦しみの理由」、「妖術と悪魔の歌」等、リスナーに地獄を見せようという意志に満ちている （山）



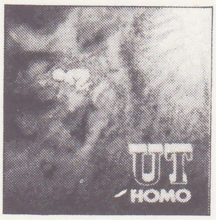
UNO
same title

Fonit Cetra 1974年
LPX 26 廃

A: RIGHT PLACE
POPULAR GIRL
I CANI E LA VOLPE
STAY WITH ME

B: UOMO COME GLI ALTRI
UNO NEL TUTTO
GOODBYE FRIEND

74年に、オザンナのエリオ・ダナとダニロ・ルスティチを中心に作られたセッション・グループ、ウーノ。アルバムはイタリアとドイツで発売された。イタリア盤は英語とイタリア語で歌われ、ドイツ盤は全て英語で歌われている。ジャケットデザインも異なっているので同じグループの同じ作品とは思えないほどである。イタリアン・ロックの伝統と、ブリティッシュ・ロックの残光による化合物として存在した。メロトロンを多用し、効果的なフルートの音色が哀愁をさそう。オザンナの４枚目、「ランドスケイプ・オブ・ライフ（人生の風景）」のプロトタイプとして作られたのであろうが、それ以上の出来になっている。しかし、ここでは初期オザンナの持つ秘教的雰囲気は全くない。国内盤発売が待たれるのだが。 （宇）



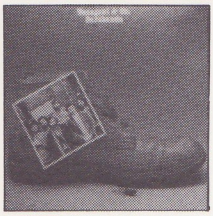
UT
Homo

Erre 1974年
RRL 2013 廃

A: INCARNAZIONE
AFRODITE
MORFEO
MARS

B: HOMO
LA MIA VITA
PACE
TRASMIGRAZIONE

アドリアーノ・トマッシーニ（ヴォーカル、ギター）、マウリツィオ・トマッシーニ（ドラム）、フランコ・タッラリタ（ベース、ピアノ、フルート）、ジャンカルロ・グラニエリ（キーボード）から成るウー・ティは74年にこのトータル・アルバムを発表した。典型的なラヴ・ロック調のヴォーカル・パートと甘い音色のギターやアコースティック・ギター、フルート、チェロ、チェンバロなどのアコースティック楽器による繊細な響きを折り混ぜた演奏はオーケストラと効果音を交え、程好く計算された構成となっている。全体的に余裕のある音作りのためか気負ったところもなく優しさのあるサウンドとなっているが、演奏面において取り上げるほどの緊張感はない。他にも２枚のアルバムがある。 （松）



VENEGONI & CO.
Sarabanda

CRAMPS 5205 504 '79 廃

A : MEZZOGIORNO
OPA
BATON

B : SARABANDA

アルティ・エ・メスティエリのオリジナル・ギターリストであり、曲作りにおいても中心的役割を果たしていたジジ・ヴェネゴーニは2ndアルバムを発表後グループを去り(3rdにおいても1曲のみゲスト参加している)、自らのバンド、ヴェネゴーニ・アンド・カンパニーを結成した。本作は彼らの「Rumore Rosso 〈Cramps CRS LP 5503〉77年」に続く第2弾である。アルティ・エ・メスティエリが一貫してジャズ的要素を取り入れた緊張感に富んだロックを演奏していたのに対して、彼らのサウンドはより多彩でゆとりを持ったものとなっている。曲は多少ポップで一部民族音楽的であるが、ギターを始めとしてキーボード、ドラムス、ベース等の演奏は非常にテクニカルであり、全体のアンサンブルも素晴らしい。(賀)



TONY VERDE
same title

EMI 1977年
3C 064-18239 廃

A: COCOO JAY
FLUIDO
NOVA LOSA
BENZE-DREAM
CALYPSO

B: VALLE SERENA
DANZA
CLAP

ジェーン・ソレンティ率いるサン・ジュストのベーシスト、トニー・ヴェルデのソロ・アルバム。サン・ジュストからの影響を感じさせる曲想である。意外な人間が参加しているので書いておこう。ロル・コックスヒル、ホワイトハウスのデヴィッド・ボウハウス、そしてヴィンセント・クレーン、元ニュークリアスのブライアン・スミス等。いったいこんな雑多なジャンルの人間が参加してどんな音になっているのだろうと首をかしげる人もいるだろうが、彼等はあくまでサポートとしてバッキングを担当しているので決して散漫になってはいない。ほとんどがインストゥールメンタル・チューンで、浮遊感のあるセッション的なイメージに統一されている。サン・ジュストでのトニー・ヴェルデの役割は重要であったようだ。(山)

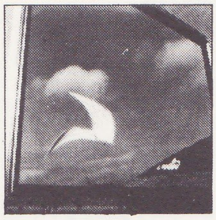


ALICE VISCONTI
La Mia Poca Grande Età

CBS : 69153 '75 廃

PRO : GIANCARLO LUCARIELLO

72年(19歳当時)Carla Bissi の本名でサンレモ音楽祭に参加していた彼女。Alice Viscontiと改名して初のアルバムを発表したのは3年後のことである。この後はAlice名義で次々と作品をリリースする訳であるが、本作の内容は、人気絶頂となった80年前後のロック調の曲作りとはかなりの隔たりがある。柔らかな曲調を中心にストリングスをも盛り込んだ70年代中期の作としては当然予想されるパターンの歌物。美しくも幻想的なカヴァーデザインに象徴されたソフトタッチの仕上げである。内ジャケの顔写真も薄化粧で何となく初々しい。後にバッティアート/ピオの助力を得る様になって彼女の際立った個性が浮き彫りになって来る訳だが、初期の作品に秘められた美的感覚を軽々に捨て去ることは許されないだろう。(江)



IL VOLO
Essere O Non Essere ?

Numero Uno キング 1975年
DZSLN 55679 廃 K22P-152 廃

A: GENTE IN AMORE
MEDIO ORIENTE 249000
TUTTO COMPRESO
CANTO DI LAVORO
ESSERE

B: ALCUNE SCENE
SVEGLIANDOMI CON TE
ALLE SEI DEL
MATTINO
CANTI E SUONI

6人の強者ミュージシャンにより結成されたイル・ヴォーロ。このセカンドに於いてそのボルテージは頂点に達する。制しようのない情感の奔流、信じ難いテンションの持続、そして各パートがせめぎあい高めあう様は、さながら翼を広げ今まさに飛び立たんとする男の姿に似て崇高である。前作より更に切りつめられたボーカル・パートの穴を埋めるように、ラディウスのギターが舞い、歌う。他のイタリア芸術同様、美のただ中に身を投じて顧みることのない民族の血はここにも明らかであろう。彼等は他にファウスト・レアーリのアルバム「愛の物語」でバックを務め、耐え難い程の悲哀をレアーリとともに紡ぎ出した。現在メンバーはソロ或いはセッション・マンとしてイタリアでは周知の存在である。(古)



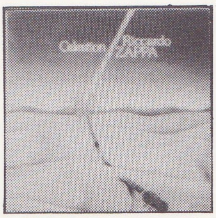
ZAUBER
same title

MU UM-104 '78 廃

A : DEIMONS
VALZER SU BACH
CANZONE PER UN'AMICA
GLOCKENTURM

B : DIETRO LA COLLINA
RIFLESSIONI
SPLEEN

トリノのGigi Venegoniのスタジオで録音されたこのレコード、女性2人を含む5人組によって作られた。自主製作らしく音質は悪く、サウンド的にも緊張感に欠け、女性ヴォーカルも素人臭く、第一級クラスのものと比較するとかなり聴き劣りがする。それでも、クラシカル・ロックと呼ぶにふさわしい内容を持っており、この手の音が好きな人には好意的に受け取られよう。とにかく、のっけからオルガン、ピアノ、シンセがたたみかけて来るのだから、多少不満があっても大目に見よう。その他、フルート、チェロ、ギターといった楽器も効果的に使用され奥行のある音作りがなされている。彼らは80年代にはいっても他の仲間たちと連名アルバムを作っており、ニュー・ウェーヴがかったラヴ・ロックに取りくんでいる。ヴォーカルの女性もかなり上手になって一安心。(吉)



RICCARDO ZAPPA
Celestion

DIVERGO 5335 516 '77 廃

A : FRAMMENTI
TRE E QUATTRO QUARTI

B : CELESTION
SONATA MEDITERRANEA
MIRAGE

クランプス、ロルケストラ等と同様に前衛的、あるいは意欲的なアーティストを多く輩出していたディヴェルゴ・レーベルからデビュウしたリッカルド・ザッパはオヴェイション・ギターを中心とした美しい調べを紡ぎ出すアーティスト。タイプとしてはペペ・マイナあたりと近いもので、彼ほど、オベイションのセミ・アコースティック・ギターの音色を大切にアルバムを作ったアーティストも少ないだろう。マイク・オールドフィールドの持っていたリリシズムと地中海サウンドがミックスしたような好作品。本アルバムにはキーボードとしてヴィンチェ・テンペラ、又ベースにはジュリウス・ファーマー等が起用されている。尚、彼は80年代になっても生き残り、ソロ作品をリリースし続けているたのもしいアーティストでもある。(山)

Accademia
Same(Ariston AR/LP 12388)'81
Acqua Fragile
Same(Numero Uno ZSLN 55656)'73
Mas Media Stars(Ricordi SMRL 6150)'74
Agora
Live In Montreaux(Atlantic T 50171)'75
Agora 2(Atlantic T-50324)'76
Aktuala
Same(Bla Bla BBL 11054)'74
La Terra(Bla Bla BBXL 10004)'74
Tappeto Volante(Bla Bla BBXL 10009)'76
Albatros
Volo AZ 504(CLN;25665)
Albermotore
Il Grande Gioco(Intingo ITGL 14001)'74
Alice
La Mia Poca Grande Età(CGD 69153)'75
Cosa Resta...Un Fiore(CGD 20040)'78
Caponord(EMI 3C 064-18489)'80
Alice(EMI 3C 064-18543)'81
Azimut(EMI 3C 064-18596)'82
Falsi Allarmi(EMI 64 1186291)'83
Gioilli Rubati(EMI 64 1187091T)'85
Alluminogeni
Scolopendra(Fonit LPQ 09065)'73
Alphataurus
Same(Magma MAGL 18001)'73
Alunni Del Sole
Dove Era Lei A Quell'Ora(Produttori Associati PA/LP 38)'72
...E Mi Manchi Tanto(P.A. PA/LP 50)'73
Jenny E La Bambola(P.A. PA/LP 53)'74
Raccolta Di Successi(P.A. PA/LP 55)'75*Best
Le Maschere Infuocate(P.A. PA/LP 66)'76
Canzuncella(P.A. PA/LP 70)'76
Liu(Ricordi SMRL 6225)'78
Tarantè(Ricordi SMRL 6248)'79
Cantilena(Ricordi SMRL 6263)'80
Carezze(RCA PL 31594)'81
Quando Si È Soli Come Me(
Alusa Fallax
Intorno Alla Mia Cattiva Educazione(Fonit LPQ 09082)'74
Analogy
Same(Ventotto PRV/LP 2204)'72
Anomary
Mcluhan(BL 754172)
Anonima Sound LTD
Red Tape Machine(Arcobaleno/AR CCP 000,111)'72
Antinius Rex
Zora(Tickle TLPS 5013)'77
Zora(Tickle TLPS 5018)'78*re-issue.1 tune added
Ralefun(Radio ZPLRR 340048)'79
Apoteosi
Same(Said MAP 145 S1)'75
Area
Arbeit Macht Trei(Cramps CRSLP 5101)'73
Caution Radiation Area(Cramps CRSLP 5102)'74
Crac!(Cramps CRSLP 5103)'75
Are(a)zione(Cramps CRSLP 5104)'75*live lp
Maledetti(Cramps CRSLP 5105)'77
Anto-Logicamnto(Cramps CRSLP 5106)'77
Event '76(Cramps CRSLP 5107)'77
1978(Ascolto ASC 20063)'78
Tic Tac(Ascolto ASC 20224)'80
Aeti E Mestieri
Tilt(Cramps 5205 501)'74
Giro Di Valzer Per Domani(Cramps CRSLP 5502) '75
Quinto Stato(Cramps CRSLP 5503)'76
Acquario(Studio MS 1002)'81
Assemblea Musicale Teatrale
Il Sogno Di Alice(EMI;3C 064 18424)
Asteri X
Paligiafici Pensionati Trambai & Santi (Tickle TLPS 5014)'77
Asylum
Elektroshock(Numero Uno ZPLN 34063)'77
Auto Mat
Same(EMI 3C 064-18323)'78
Claudio Baglioni
Same(RCA PSL-10465)
Un Cantastorie Dei Giorni Nostri(RCA PSL-105 11)
Questa Piccolo Grande Amore(RCA DPSL-10551)
Gira Che Ti Rigira Amore Bello(RCA DPSL 10587)
E Tu...(RCA TPL 1067)
Sabato Pomer Iggio(RCA TPL 1-1161)
Solo(RCA PL-31235)
E Tu Come Stai?(CBS-84764)
Strada Facendo(CBS-84764)
La Vita E Adesso(CBS
Ale O O'-dal vivo-(CBS-88612)'82
La vita E Adesso(CBS 26533)'85
Balletto Di Bronzo
Sirio 2222(RCA PSL 10459)'70
y s(Polydor 2448 003)'72
Bambibanda E Melodie
Same(Fonit LPQ 09085)'74
Banco Del Mutuo Soccorso
Same(Ricordi SMRL 6094)'72
Darwin!(Ricordi SMRL 6107)'72
Io Sono Nato Libero(Ricordi SMRL 6123)'73
Banco(Manticore MAL 2013)'74
Garofano Rosso(Manticore MAL 2014)'75
Come In Un'Ltima Cena(Manticore MAL 2015)'76
...Di Terra(Ricordi SMRL 6249)'79
Canto Di Primavera(Ricordi SMRL 6249)'79
Capolinea(Ricordi SMRL 6260)'79*live album
Urgentissimo(CBS 84677)'80
Buone Notizie(CBS 85415)'81
Same(CBS 25729)'83
Bricentro
Sconcerto(EMI 064 18152)'76
Trusciati(EMI 064 183222)'78
Lucio Battisti
Same(Ricordi SMRL 6063)'70
Amore Non Amore(Ricordi SMRL 6074)'71
Emozioni(Ricordi SMRL 6091)'70
Vol.4(Ricordi SMRL 6191)'71*best album
Umanamente Uomo;Il Sogno(Numero Uno ZSLN 550 60)'72
Il Mio Canto Libero(Numero Uno ZSLN 55660)'72
Il Nostro Caro Angelo(Numero Uno ZSLN55660)'73
Anima Latina(Numero Uno ZSLN 55675)'74
La Batteria Il Contrabbasso E Ccetera (Numero Uno ZSLN 55685)
Io Tu Noi Tutti(Numero Uno ZSLN 34006)
Images(RCA TFL 1 1839)
Una Donna Per Amico(Numero Uno ZPLN 34036)'78
Una Giornata Uggiosa(Numero Uno ZPLN 34084)
E Già(Numero Uno ZPLN 34182)
Don Giovanni(Numero Uno PL 70991)'86
J.B.Banfi
Galaxy My Dear(Red VPA 123)'78
Ma Dolce Vita(Inovative Communication IC 58.066)'79
Heart(K/KS 80.008)'81
Biglietto Per L'Inferno
Same(Trident TRI 1005)'74
Bella Band
Same(Cramps 5205 601)
Susy Bellucci
Nel Paese Di Susy(RCA PL 31407)'78
Loredana Berte
Streaking(CGD 69073)'74
Normale O Super(CGD 81178)'75
Tir(CGD 20023)'77
Bandaberte(CGD 20158)'79
Same(CGD 20209)'80
Made In Italy(CGD 20260)'81
Lorinedita(CGD 20367)'83
Jazz(CBS 25724)'83
Spvoir Fair(CBS 26107)'84
Carioca(CBS 26534)'85


Aqua Fragile

Blocco Mentale
Poa(Titania BM 2301)'73
Blue Moning
Same(Tom Orrow ZSTOM 2000)'73
Bottega Dell'Arte
Same(EMI 3C 064-18106)'75
Dentro(EMI 3C 064-18152)'77
L'Avventura(EMI 3C 064 18423)'79
Brain Ticket*Swiss group
Cottonwood Hill(Bellaphon BLPS-19019)
Psychonaut(BI 15156)'72
Celestial Ocean(RCA PLISP 34158)'73
Anyway...Don't Luse(BT 4471)'80
Adventure(BT 80.1)'80
Voyage(BT 80 2)'80
Angelo Bronduardi
Same(RCA TPL 1 1004)'74
La Luna(RCA TPL 1 1160)'75
Alla Fiera Dell'Est(Polydor 2448 651)'76
La Pulce D'Acqua(Polydor 2448 002)'77
Cogli La Prima Mella(Polydor 2448 094)'79
Gullier,La Luna E Altri Disegni(Polydor 2448 115)'80*re-recorded lp of "Luna"
Concerto(Polydor 2675 200)'80*live.3 lps.
Same(Polydor 5001 609)'81
State Buoni Se Potete(Musiza 811 797-1)'83
Cercando L'Oro(Musiza 813 462-1)'83
DieciBallate Su Liriche Di Willam Butler Yeats (Musiza 829 476-1)'86
Momo(Musiza 813 296-1)'86
Roberto Cacciapaglia
Sonanze(PDU PLDSQ 6025)
Sei Notte Logica(
Camel
Under Age(RCA PESL 10449169)'70
Juri Camusasca
La Finestra Dentro(Bla Bla BBXL 10005)'73
Campo Di Marte
Same(United Artist UAS 29497)'73
Canziniere Del Lazio
Lassa Sta La Me Creatura(Intingo ITGL 14003)
Spirito Bono(Intingo ITGL 14006)
Morra(Intingo ITLM 14503)
Miradas(Cramps 5351)
Capitolo Sei(6)
Frutti Per Kagua(IT:ZSLT 70014)'72
Capricorn Collage
Orfeo 2000(Kansas LDM 17004)'71
LP Di Primavera(Kansas 5300 502 A)'74
Capsicum Red
Appunti Per Un'Idea Fissa(Bla Bla BBL 11051)'72
Enzo Capuano
Storia Mai Scritta(Divergo DVAE 002)'75
Cariffi
Cosi'Ti Amo(Rifi RFS-ST 14030)
Fiore Di Metallo(Fonit LPX23)'73
Carnascialia
Same(Mirto 6323 750)'79
Carta Canta
Il Tempo Delle Ciliegie(Vedette VPA 8471)'80
Nini Carucci
Il Buio La Babbia Domani(Two Nuns TNN 35003)'73
Da Bambino Mi Hanno Detto...(Ultima Spiaggia ZLUS 55184)'75
Cavernicoli
Un Etto Di Sicilla(Fonit LPQ 09076)
Canti Di Furnari(Fonit LPQ 09090)
Celeste
Same(Grog GRL 02)'76
Cervello
Same(Ricordi SMRL 6119)'73
Cherry Five
Same(Cinebox SC 3327)'75
Gaio Chiocchio

Londra(Una
Cico
Notte(CBS 69085)'74
E Mia Madre(CBS 69205)'75
La Gente Dice(CBS S 81472)'76*best album
Macchine-Macchinette(EMI 3C 064 18344)
Cincinato
Same(PDU PLDA 5091)'74
Circus 2000
Same(Rifi RFL-ST 14049)'71
An Escape From a Box(Rifi RDZST 14215)'72
Citta Frontale
El-Tole
Cocai
Piccolo Grande Vecchio Fiume(Style CT 7185)'77


Ares

Riccardo Cocciante
Mu(RCA DPSL 10549)'72
Poesia(RCA DPSL 10578)'73
Anima(RCA TPL 1060)'74
L'Alba(RCA TPL1-1167)'75
Concerto Per Margherita(RCA TPL1-1220)'76
1978(RCA PL 31332)
E Io Canto(RCA PL 31421)
Cervo A Primavera(RCA PL 31546)
Cocciante(RCA PL 31623)'82
Sincerita(Virgin V2294)'84
Il Mare Dei Baraveri(Virgin V 2336)'85
Quando Si Vuole Bene(Virgin 2VP 2515)'86
*2 lps.live album
Roberto Colombo
Sfogatevi Bestie(Ultima Spiaggia ZLUS 55185)'76
Botte Da Orbi(Ultima Spiaggia ZPLS 34012)'77
Astrolympix(Ciao 1005)'80
Corte Dei Miracoli
Same(Grog GRL 04)'76
Cyan
Same(RCA LISP 34157)'72
Dall'Aglio(Gianni)
Sera Mattina(Love 5360 001A)'72
Dalton
Riflessioni;Idea D'Infinito(Music LPM 2011)'72
Argitari(IAF LP 19001)'74
Ciro D'Ammico
Same(EMI 064 17818)'73
Gente(Durium MSAI 77424)'81
Data
Same(Numero Uno ZSLN 55668)'74
Dedalus
Same(Trident TRI 1001)'73

Meteriale Per Tre Esecutori...(Trident TRI 1008)'74
De De Lind
Io Non So Da Dove Vengo E Non So Dove Mai Andro Uomo E Il Nome Che Mi Han Dato(Mercury 6323 901A)'72
Delirium
Dolce Acqua(Fonit LPX 11)'71
Lo Scemo E Elivillaggio(Fonit LPX 18)'72
Viaggio Negli Arcipelagobi Del Tempo(Fonit LPX 29)'73
Donella Del Monaco
Dodici Canzoni Da Battelo Su Melodie Veneziane Del Settecento(Italia ITL 70030)'77
Schonberg Kabarett(Cramps 5207305)'78
Il Carnevale Di Venezia(Holly HR 26706)'85
Gino D'Eliso
Il Mare(Numero Uno ZSLN 55683)'75
Ti Ricordi Vienna?(RCA PL 31253)'77
Santi Ed Eroi(Philips 6323 070)'79
Cattivi Pensieri(CGD 20348)'83
Alessandro De Lucchi
Same(ADL:ADL-1)'78
Roberto De Simone
Io Narciso Io(RCA PL 31254)'77
Claudio Dentes
Pantarei(Mirto 6323 752)'78
Tulio De Piscopo
Tulio De Piscopo Rbvolt Group-Sotto E' Ncoppa (Carossello CLN25061)'76
Volume 2(Carosello CLN25067)'76
Future Percussion(Carosello CLN21038)
Concerto Per Un Film:"L'Arma"(Carosello CLN 25088)'78
Live(Carosello CLN25089)'81
Acqua E Viento(EMI 64-1655291)'83
Dik Dik
Same(Ricordi MSP 9035)'67
Same(Ricordi SMRP 9070)'69
Suite Per Una Donna Assolutamente Relativa (Ricordi SMRL 6095)'72
Storie E Confessioni(Ricordi SMRL 6103)'73
Volando(Rifi Dil ST 47001A)'76
Amico(Rifi Dil ST 47002A)'77
E Questione D'Amore(Durium MSAI 77454)'85
Roberto Donnini

Duello Madre
Same(Produttori Associati PA/LP 47)'73
E.A.Poe
Generazioni(Kansas 5300 503)'74
Electric Frankenstein
Same(Cramps 5202 001)
Elektriktus
Electric Mindwaves(PDU pld A 6050)'76
Egotrya
Same(MDTR 127)'81
Equipe 84
Io Ho In Mente Te(Ricordi
Stereosquide(Ricordi
ID(Ricordi SMRL 6072)

Casa Mia(Ricordi SMRL 6066)'72
Dr.Jekyll & Mr.Hyde(Ariston AR/LP 12107)'73
Sacrificio(Ariston AR/LP 12134
Era Di Aquario
antologia(RCA PSL 10565)'73
Errata Corrige
Siegfried;Il Drago E Aitre Storie(G7-1)'76
Toni Esposito
Same(Numero Uno ZSLN 55677)'74
Processione Sul Mare(Numero Uno ZSLN 55686)'76
Gente Distratta(Numero Uno ZPLN 43015)'77
Incontro Con(Numero Uno ZNLN 33062)'78
La Banda Del Sole(Philips 6323 056)'78
kalimba De Luna(
As Tu As(
Tamburo(Bubble
Etna
Same(Catoca CTL 1-1102)'75
Exploit
Crisi(CGO FC 1008)'72
Lucio Fabri
Amarena(Cramps 5205 651)
Maurizio Fabrizio
Azzurri Orizzonti(CIV ZSCVE 55743)
Movimenti Nel Cielo(Polydor 2448 075)'78
Primo(Polydor 2448 091)
Per Somaggi Come Il Vento(CDE 20221)
Franco Falsini
Cold Nose(Polydor 2449 012)'75
Famiglia Degli Ortega
Same(Carosello CLN 25029)'73
Fantasy
Uno(EMI 3C 064 18306)'77
Festa Mobile
Diario Di Viaggio Della Festa Mobile(RCA DPSL 10605)'73
Eugenio Finardi
Non Gettate(Cramps 5205 151)'75
Sugo(Cramps 5205 152)'76
Diesel(Cramps 5205 153)'77
Blitz(Cramps 5205 154)'78
Roccando Roluando(Cramps 5205 155)'79
Finardi(Cicogna EMA 3002)'81
Secret Streets(Fonit LPX 102)'82
Dal Blu(Fonit LPX 116)'83
Strade(Fonit LPX 125)'84
Colpi Di Fulmine(Fonit LPX 139)'85
Flashmen
Cercando La Vita(Kansas SLP-8)'70
Hydra(Kansas LDM 17001)'71
Pensando(Kansas LDM 17003)'72
Same(Kansas LDM 17005)'73
Sempre E Solo Lei(Kansas LDM 17012)'74
Same(Kansas 5300501)'74
Flea
Totp O Uomini(Fonit LPQ 09070)'72
Flea On The Honey
Same(Delta ZSLP 55026)'71
Flona Fauna E Cemento
Rock(Numero Uno ZSLN 55653)'74
Disamore(CBS 69114)'75

Flying Tapes
Same(Polydor 2448 074)
Formula tre
Dies Irae(Numero Uno ZSLN 55010)'70
Same(Numero Uno ZSLN 55013)'71
Sognando E Risognando(Numero Uno ZSLN 55152)'72
La Grande Casa(Numero Uno ZSLN 55655)'73
Forzenova
Autoanalisi(TOP:TLP 202)'81
Buccheri Francesco
Journey(Edizioni Musicali 2000 AL/79 LP)'79
Franco Maria Gianni
Affresco(ARIS ANL 4000)'74
Claudio Fucci
Same(TRI 1007)
Rino Gaetano
Aida(IT ZPLT 34010)'77
Garybaldi
Nuda(CGD FGL 5113)'72
Astorolabio(Fonit LPQ 09075)'73
Giardino Dei Semplici
Same(CBS 81170)'75
Le Favole Del Giardino(CBS 82092)'77
B/N(WEA T 58089)'79
...E.Amiamoci(FI TEAM LP 3354)'82
Giarma Tre
L'Isora Del Tonal(Drums EPL 2046)'79
Giganti
Same(Rifi
Mille Idee Dei Giganti(Rifi
Terra In Bocca(Rifi RDZ-ST 14207)'71
Gleemen


Agora

Same(CGD FGS 5073)'70
G.Men
Same(Edia ZSKE 55377)
Oggi(EDIA ZSKE 55380)
In Fondo Agli Occhi Tuoi(Edia
Goblin
Profondo Rosso(Cinebox MDF 33/85)'75
Roller(Cinebox MDF 33/101)'76
Suspiria(Cinebox MDF 33/108)'77
Il Fantastico Viaggio "BAGAROZZO"Mark (Cinebox SC 33/37)'78
Zombi(Cinebox MDF 33/121)'78
Amo Non Amo(Cinebox MDF 33/133)'79
Patrick(Cinebox MDF 33/133)'79
Suadra Antigangsters(Cinebox MDF 33/131)'80
Contaminazion(Cinebox MDF 33/142)'83
Volo(Cinebox 3C 33/45)
Grande Famiglia
Una Citta Possibile(RCA PSL 10622)'72

Billy Gray
Felling Gray?(Polydor 2448 009)'72
Gregor
Same(Kansas 5360 504)'75
Grosso Autonno
Same(EMI 3C 064 18208)'76
Almanacco(EMI
Group X
Frrrrrigidaire(EMI:C.P.T. LPOK 5)'73
Out Off(Radio ZPLRR 34052)'78
Gruppo D'Alternativa
Ipotesi(EMI 3C 064 17873)'72
Gruppo 2001
L'Alba Di Domani(King Universal NLU 62019)'72
Gruppo Folk Internazionale
Festa Popolare(L'Orchestra OLP 10005)'76
Daloy Politzei(L'Orchestra OLP 10013)'77
Il Nonno Di Jonni(L'Orchesta OLPS 55001)'79
Le Mille E Una Notte(OM 101)'79*mexi single
Guercia
Guerccia Figura Goffa(Guercia 8224 482)'82
Kay Hofmann
Floret Silva(Belle Antique 8502)'84
Hopo
Secti(GAME GLP 11982)'82
Human Expression
Being In The Becoming(HE 7)'85
Hunka Munka
Dedicato A Giovanna G(Ricordi SMRL 6096)'72
Ibis
Sun Spreme(Polydor 2448 022)'74
Same(Polydor 2448 036)'75
In Tre Sulla Strada
Same(Radio RRS 153)'73
Jacula
Tardo Pede In Magium Versus(Rogers:TRS010001)'75
Janus
Al Marstrale(J 02)
J.E.T.
Fede Speranza Carita(Durium MS A77307)'72
Jumbo
Same(Philips 6323 012)'70
D.N.A.(Philips 6323 017)'71
Vietato Ai Minori Di 18 Anni?(Philips 6323 025)'72


Claudio Rocchi

Kaleidon
Free love(Fonit LPQ 09074)
Lapera
Same(Durium:MSA 77360)
Leo Nero(Gianni Leone)
Vero(EMI 3C 064 182)'77
Moniter(CBO LBL 1004)'80

Leoni
La Foresta(Ricordi SMRL 6081)'71
Latte E Miele
Passio Secundum Mattheum(Polydor 2448 011)'72
Papillon(Polydor 2448 015)'73
Aquire E Scoiattoli(Magma MAL 01)'76
Living Life
From Experience To Experience(Shirak LL-001)
Mysterious Dream(Shirak LL-3301)
Locanda Delle Fate
Forse Le Lucciole Son Si Amano Piu'(Polydor 2448 055)'77
Emilio Locurcio
L'Eliogabalo(UNA ZPLU 34023)'77
Muzzi Loffredo
Tu Ti Nni Futti!(IT ZSLT 70031)'76
Logan Dwight
Same(PDU DLDA 5054)
Luna
Same(Splash SPL 716)'79
Maad
Same(Divergo:DEVE 008)
Madrugada
Same(Philips 6323 3033)'74
Incastro(Philips 6323 046)'76
Pepe Maina
Il Canto Dell'Arpa E Del Flauto(Ascolto ASC 20004)'77
Mandillo
Same(Grog:GRL01)'76
Matia Bazar
1 (Ariston AR/LP 12283)'76
Gran Bazar(Ariston AR/LP)'77
L'Oro Dei Matia Bazar Solo Tu(Ariston AR/LP)'78
Semplicita(Ariston AR/LP)'78
Tournee(Ariston AR/LP)'79
Il Tempo Del Sole(Ariston AR/LP 12383)'80
...Berlino...Parigi...Londra(Ariston AR/LP 12392)'82
Tango(Ariston)'83
Aristocratica(Ariston AR/LP/12)'84
Melanchólia( )'85
Maxophone
Same(Produttori Associati PA/LP 57)'75
Mediterranea
Ecce Rock(Amiamochi:AM4001)
Metamorfosi
...E Fu Il Sesto Giorno(Vedette VPA 8168)'72
Inferno(Vedette VPA 8162)'73
Adriano Monteduro
+ Reale Accademia Di Musica(RCA TPL 1-1038)'74
Morgan
Nova Solis(RCA LISP 34154)'72
Mucchio
Same(Carosello SCLN 25011)'70
Murple
Io Sono Murple(BASF 20 23137)'74
Museo Rosembach
Zarathustra(Ricordi SMRL 6113)'73
Napoli Centrale
Same(Ricordi SMRL 6159)'75
Mattanza(Ricordi SMRL 6187)'77

Quallosa Ca Un'Amore(Ricordi SMRL 6224)'78
New Trolls
Senza Orario Secza Bandiera(Fonit LPX 3)'68
Same(Fonit LPX 7)'70
Concerto Grosso(Fonit LPX 8)'71
Searching For A Land(Fonit LPX 12/13)'71
UT(Fonit LPX 20)'72
Atomic System(Magma MAGL 18003)'73
Tempi Dispari(Magma MAGL 18005)'74
Concerto Grosso 2(Magma MAL 02)'76
Live(Magma MAL 04)'76
Aldebaran(Werner WBT-56589)'77
Same(Werner WBT 56761)'79
F S(Fonit LPX 93)'81
America OK(Fonit)
Nico,Gianni,Frank,Maurizio
Canti Di Innocenza,Canti Di Esperanza(Fonit LPX 22)'73
Nicosia & C.Industria Musicale
Una Favola Vera(Fonit LPQ 09073)'73
Nova
Blink(Arista ARTY 118)'75*U.K.pressing
Vimana(Arista ARTY 138)'76*U.K.
Wings Of Love(Arista SPARTY 1021)'77*U.K.press.
Sun City(Arista AB 4203)'78*U.S.A.pressing
Numi
Alpha Ralpha Boulevard(Polaris POLBP 708)'71
Nuova Idea
In the beginning(Ariston AR/LP 12001)'70
Clowns(Ariston AR/LP 12068)'71
Mr.E.Jones(Ariston AR/LP 12075)'72
Nuovi Angeli
Same(Polydor 2448)
Stasera Clowns(Polydor 2448 03)
Odissea
Same(Rifi RDZ-ST/S 14228)'73
Opera Puff
Invito(EMI;3C 063 17407)
Opus Avantra
F Donella Del Monaco(Trident TRI 1006)'74
Lord Cromwell Plays Suite For Seven Veces (Suono SRLP 1002)'75
Orme
Ad Gloriam(Car-Juke Box CRJ LP 00015)'68
L'Aurora(Car-Juke Box CRJ LP 00023)'69
Collage(Philips 6323 007)'71
Uomo Di Pezza(Philips 6323 013)'72
Felona E Sorona(Philips 6323 023)'73
In Concerto(Philips 6323 028)'73
Contrappunti(Philips 6323 035)'74
Smogmagica(Philips 6323 041)'75
Verita Nascote(Philips 6323 045)'76
Storia O Leggenda(Philips 6323 052)'77
Florian(Philips 6323 086)'79
Picola Rapsodia(Philips 6323 102)'80
Venerdi(D.D.D. ZPLDR 34145)'82
Live Orme(King K20P611-2)'86*Japanese press.
Osanna
L'Uomo(Fonit LPX 10)'71
Milano Calibro 9(Fonit LPX 14)'72
Palepoli(Fonit LPX 19)'73
Landscape Of Life(Fonit LPX 32)'74
Suddance(CBS:S-82449)'78

Osage Tribe
Arrow Head(Bla Bla BBL 11052)'72
Paese Dei Balocchi
Same(CGD FGL 5115)'72
Mauro Pagani
Same(Ascorto ASC 20093)'78
Sogno Di Una Notte Destate(Fonit LPX 99)'81


Franz Di Cioccio (PFM)

Beppe Palomba
A Rosa.A.Giovanni(Mizar:MZPP01)'72
Panna Fredda
Uno(Vedette VPA 8134)'71
Mario Panseri
Same(RCA PSL 10453)'70
Adolescenza(RCA DPSL 10585)'73
Sulla Spiaggia D'Inverno(Polydor 2448 067)'78
Renato Pareti
Dal Mio Lontano(Ducale DUC 8)'73
Particelle
Azimuti(CGD FGS 5091)'70
Claudio Pascoli
Naifunk(Mirto 6323 751)
Mauro Pelosi
Same(Polydor 2448 010L)'72
Al Mercato Degli Uomini Piccoli(Polydor 2448 017L)'73
Same(Polydor 2448 056 A)'77
Il Signore Dei Gatti(POlydor 2448 092)'79
Pentola Di Papin
Zero 7(Disco Piu DP 39010)'77
Perigeo
Azimut(RCA PSL 10555)'72
Abbiamo Tutti Un Blues Da Piangere(RCA PSL 10609)'73
Genealogia(RCA TPL-1 1080)'74
La Valle Dei Templi(RCA TPL-1 1175)'76
Non E Poi Cosi Lontano(RCA TPL-1 1228)
Alice(RCA PL 31470)'80*21ps
Effetto Amore(RCA PL 31608)'81
Pholas Dactylus
Concerto Delle Menti(MAGMA:MAGL 18002)'73
Piazza delle Erbe
Saltara Nocchio(Intingo ITLM 14502)'78
Piero E I Cottonfields
Il Viaggio La Donna Un'Altra Vita(Music LPM 2006)'72
Picchi & Poveri
RP 2(Fonit LPX 36)
I Musicanto(Fonit LPX 46)
Picchio Dal Pozzo
Same(Grog GRL 03)'76
Abbiamo Tutti I Suoi Problemi(L'Orchestra OLP S 55013)'80
Maurizio Piccoli
Same(Fonit LPX 59)

Ping Pong
Same(ER)'70
Same(Spark SRLP 246)'74
Planetarium
Infiny(Victory VY 10051)'71
Pooh
Per Quelli Come Noi(Vedette VRM 36033)'66
Memorie(Vedette VPA 8083)'69
Opera Prima(CBS -S 64592)'71
Alessandra(CBS-69023)'72
Parsifal(CBS S 69043)'73
1971 I Pooh 1974(CBS 69089)'74
Un Po' Del Nostro Tempo Migliore(CBS 69118)'75
Forse Ancora Poesia(CBS 69212)'75
Poohlover(CBS 86015)'76
Rotolando Respirando(CGD 20012)'77
1975 - 1978(CGD 20038)'78
Boomerang(CGD 20077)'78
Viva(CGD 20162)'79
Harricane(CGD 20210)'80
Stop(CGD 20225)'80
1978-1981(CGD 20244)'81
Buona Fortuna(CGD 20264)'81
Palasport(CGD 21210)'82
Tolopico Nord(CGD)
Aloha(CGD)
Premiata Forneria Marconi
Storia Di Un Minuto(N.Uno ZSLN 55055)'72
Per Un Amico(Numero Uno ZSLN 55155)'72
Photo Of Ghosts(Numero Uno ZSLN 55661)'73
L'Isola Di Niente(Numero Uno ZSLN 55666)'74
The World Became The World(Numero ZSLN 55669) '74
Live In U.S.A.(Numero Uno ZSLN 55676)'74
Chocolate Kings(Numero Uno ZSLN 55684)'75
Jet Rag(ZOO ZPLZ 34008)'77
Passpartu(ZOO ZPLZ 54032)'78
Suonare Suonare(Numero Uno ZPLN 34092)'80
Come Ti Va Riva Alla Citta(Numero Uno ZPLN 34140)'81
Performance(Numero Uno ZPLN 34161)'81*21ps.
Prima materia
La Coda Della Tigre(Ananda 2)'77
Procession
Frontiera(HELP ZSLH 55131)'72
Fiaba(Fonit LPQ 09081)'74
Profeti
Era Bella(CBS 64750)
L'Amore E...(CBS 69033)
Quelli
Same(Ricordi SMRP 9053)'69
Quella Vecchia Locanda
Same(HELP ZSLH 55091)'72
Il Tempo Della Gioia(RCA TRL 1 1015)'74
Raccomandata Ricevuta Ritorno
Mondo Di Cristallo(Fonit LPX 15)'72
Alberto Radius
Same(Numero Uno ZSLN 55133)'72
Che Cosa Sei(CBS 81476)'76
Carta Straccia(CGD 81476)'76
America Good-By(CGD 20122)'79
Regende(CGD 20236)'81
Gente Di Dublino(CGD 20333)'82

Ragazzi Del Sole
Il Suono del Sole(DKF K/S 30138)'69
Reale Accademia Di Musica
Same(Ricordi SMRL 6105)'72
Ricordi D'Infanzia
Io Uomo(Fonit LPP 227)'73


Angelo Branduardi

Claudio Rocchi
Viaggio(Ariston AR/LP 11020)'70
Volo Magico 1(Ariston AR/LP 12067)'71
Volo magico 2(Ariston AR/LP 12088)'72
Essenza(Ariston AR/LP 12112)'73
Il Miele Dei Pianeti Isole Le Api(Ariston AR/LP 12135)'74
Rocchi(Ariston AR/LP 12279)'75
Suoni Di Frontiera(Ariston AR/LP 12293)'73
A Fuoco(Cramps CRSLP 5451)'76
Non C'E Ne Per Nessuno(Cramps)
Rocky's Filj
Storie Di Uomini E Non(Ricordi SMRL 6115)'73
Rovescio Della Medaglia
La Bibbia(RCA PSL 10521)'71
Io Come Io(RCA PSL 10545)'72
Contaminazione(RCA PSL 10593)'73
Rustichelli & Bordini
Opera Prima(RCA DPSL 10594)'73
Saint Just
Same(EMI C 064-17870)'73
La Casa Del Lago(EMI 3C 064-18033)'74
Salis
Sa Vida Ita Est(PA/LP 37)'71
Seduto Sull'Alba A Guardare(CPT LPOK 13)'74
Dopo Il Buio La Luce(IAF:LPA 89018)'78
Samadhi
Same(Fonit LPQ 09080)'74
Sangiuliano
Take Off(RCA PL 31361)'78
Tito Schipa jr
Orfeo 9(Fonit LPX 16/17)*2 lps
Io Ed Io Solo(Fonit LPX 31)'74
Concerto Per Un Primo Amore(Gattocico VA LP33604)'82
Seconda Genesi
Tutto Deve Finire(Picci GLA 2002)'72
Segno Dello Zodiaco
Same(Rifi RDZ-ST 14237)'74
Parlami Sotto Le Stelle(Rifi)
Semiramis
Deditato A Frazz(Trident TRI 1004)'73
Sensation's Fix
Same(Polydor AS 273)
Fragment Of Light(Polydor 2448 023)'74
Potable Madness(Polydor 2448 034)'74
Finest Fingers(Polydor 2448 048)'76
Boxes Paradise(POlydor 2448 064)'77
Flying Tapes(Polydor 2448 074)'78
Shoman
Same( )
2(BBB NL 0001)
Sigillo Di Horus
Rendes Vous(Grog GRL 05)'77
Signori Della Galassia
Quallosa Della Galassia(Magic MRLP 1004)
Iceman(Rifi RDZ ST 14311)'79
Carlo Siliotto
Ondina(Philips 6323 083)'79
Marivana(DDD:25409)'83*with Marivana Viscuso
Claudio Simonetti
Same(Banana PLBAN 5033 008)'81
Strana Societa
Pop Corn & Cracker Jax(Fonit LPQ 09067)
Fai Tornale Il Sole(Durium ms A 77354)'74
Roberto Soffici
In Queste Ore Ohiare(Ricordi SMRL 6106)'72
All'Inprovviso L'Incosienza(Fonit LPX 57)'77
Il Cato Dello Scorpione(Fonit LPX 65)
Alberto Solfrini
Same(PE-MI LD ASF 20)
Alan Sorrenti
Aria(EMI 3C 064-17836)'72
Come Un Vecchio Incensiere All'Alba Di Un Villaggio Deserto(EMI 3C 064 17878)'73
Same(EMI 064 18059)'74
Poco Piu Piano(EMI 3C 064 18059)'76
Sineteme It's Time To Lord(EMI 3C 064 18206)'77
Frigts Delle Stelle(EMI 3C 064 18206)'77
LAZNY(EMI 3C 064 62669)'79
Di Notte(CBL 1003)'80
Anoeli De Strada(CBO CBLP 1006)'82


Arti e Mestieri

Jenny Sorrenti
Suspiro(Harvest)
Same(RCA PL 31425)'79
Davide Spitaleri
Uomo Irregolare(Ciao CIA 1004)'80
Arturo Stalteri
Andre Sulla Luna(IT ZPLT 34062)'79
Stomy Six
Le Idee Di Oggi Per La Musica Di Domani(First FR 50.001)
Canti Della Rivoluzione Nel Mondo(Ariston
L'Unita(Ariston FR 50050)'71
Un Biglietto Del Tram(L'Orchestra OLP 10001)
L'Appresdista(L'Orchestra OLP 10012)
Cliché(L'Orchestra OLP 10010)'76
Macchina Maccheronica(L'Orchestra 55009)'79
Ar Volo(M/LP 70001)
Teatro Temporante Trabllante
Capannone B(EMI:3C 064 17965)'74
Teoremi
Same(Polaris:POL BP 711)'72
Stefano Testa
Una Vita Una Balena Bianca E Altre Cose (Disco Piu DP 39007)'77
Theorios Campus
Same(IT ZSLT 70007)'72
Alfred Tisocco
Katharsis(Suono SR LP 1001)'75
Toritons
Satisfaction By(Fonit PL 423)
Federico Troiani
Strade(Ricordi SMRL 6223)'78
Same(Ricordi)
Hotel Eden(Bubble)
Toto Torquati
Gli Occhi Di Un Bambino(RCA DPSL 10573)'73
Triade
1998:La Storia Di Sabazio(Derby DBR 65801)'73
Trip
Same(RCA PSL 10460)'70
Caronte(RCA PSL 10509)'71
Atlantide(RCA PSL 10540)'72
Time Of Change(Trident TRI 1002)'73
Ultima Spiaggia
Same(Ultima Spiaggia ZLUS 55181)'75
Underground Set
Same(Radio RRS 134)'70
War In The Night Before(Tickle TLPS 5002)'71
Uno
Same(Fonit LPX 26)'74
Uovo Di Colombo
Same(EMI 3C 064 17889)'73
UT
Same(Radio)'70
Homo(Erre RRL 2013)'74
La Strada Era Bella(Erre RRL 53001)'76
Venegoni & Co
Rumore Rosso(Cramps 5503)
Sarabanda(Cramps 5504)
Venezian Power
The Arid Land(CBS 64796)'71
Tony Verde
Same(EMI 3C 064 18239)'77
Victor Peraino's Kingdom Come
No Man's Land(Private Press)
Volo
Same(Numero Uno ZSLN 55667)'74
Essere O Non Essere?(Numero Uno ZSLN 55679) '75
Riccardo Zappa
Aulhhla & Zappa(PDU pld A 6008)
Celestion(Divergo 5335 516)
Chatka(Divergo 5335 521)
Haermea(Ariola 205 226 270)
Trasparenze 1982(Ariola 205 227 270)
Same(Ariola)'84
Raccolta(Ariola)
Zaubel
Same(MU UM-104)'78
Zebra Crossing
Same(EMI 3C 064 77011)
Zucchero
Same(Fonit LPX 33)'74

2 FRANCE

フランスのロック（フレンチ・ロック）というものを意識したのはいつ頃のことであろうか。思い起こすに、各種音楽雑誌に掲載された３つの文章が印象に残っている。

筆者の知る限り、フレンチ・ロックについて書かれた最初の文章はニューミュージック・マガジン（現在のミュージック・マガジン）誌72年12月号に掲載されたクロード岡本氏の「注目したいフランスのロック」である。氏はその中でジョニ・アリデイ、アントワーヌ、ジャック・ジュトロン、ミッシェル・ポルナレフの４人のシンガーの他、ズー、マグマ、マルタン・サーカス、ゴング（これらのアーティストはいずれも日本盤がリリースされた）を紹介しており、更にトリアングル、トータル・イシュー、ディナスティ・クライシスらの名前を挙げている。個人的にはこれを読んで「フランスにもロック・シーンがあるんだ。」と思った程度で、特にレコードを聴いてみたいとは思わなかった。当時まだ英米に数多くの未知のアーティストがおり、そこまで気が回らなかったためであろう。

次にフレンチ・ロックに関する本格的文章を見たのはロッカダム誌VOL.2においてである。そこでは、たかみひろし氏が「ぼくのヨーロッパ・メモリアル・第一回フランス編」と題して、かなり詳しくフランスのロックについて書いている。タイ・フォン、ヴィジターズ、ラード・フリー、マージャン、カトリーヌ・リベロ＆アルプらが紹介されており、特にタイ・フォンに関しては、伊藤政則氏も他に３ページに渡る大絶賛の文章を書いている。こうしたこともあってか、彼らのレコードは日本でも発売されそれなりのセールスを記録した（ヴィジターズに関しても日本発売の予定があると書かれていたがそれは実現せず、結局、彼らのレコードはフレンチ・ロックの中でも最も入手困難なものの１つとなってしまった)。しかし、ここで紹介された他の多くのレコードは日本発売されることなく、また、輸入盤としてもほとんど入荷しなかった。当時、輸入盤店で比較的容易に入手できたのはアンジュとマグマ（主に英盤あるいは米盤）の作品ぐらいであった。

もう１つが音楽専科誌に３回（76年11月号～77年１月号）に渡って連載された、やはり、たかみひろし氏の「いまプログレに何かが起こっている」(フランス編は77年１月号）とそれに附随した佐藤斗司夫氏の「第３世界の実力グループ探訪～ヨーロッパ大陸のプログレ必聴盤ベスト10～」(76年12月号）である。そこでたかみ氏はアトール、タイ・フォン、トランジット・エクスプレス、エルドン等を紹介している。また、佐藤氏はアルティ・エ・メスティエリ、アレア、コルテ・ディ・ミラコーリ、マクソフォーネ、フィンチらのレコードとともにピュルサーの「Pollen」，アトールの「L'Araignee−Mal」，アンジュの「Au−Dela Du Delire」を取り上げている。アンジュ以外はほとんど知られておらず、数ヶ月後、ピュールサーとアトールのレコード（両グループとも1stと2nd）が一部の輸入盤店に入荷した時は、作品の出来が良いこともあって、ファンの間で大きな話題となった。

この頃からフレンチ・ロックに対するファンの関心も徐々に高まり、それと並行してレコードもレーベル単位で相当数が入荷するようになった。ディスジャンクタ＝ウラスのエルドン、ザオ、コブラのエルドン、アーバン・サックス、ラード・フリー、イサドラのZNR，ママ・ベア・テキエルスキー、アルカン＝クリプトのパンタクル、モナ・リザ、ワパス、カルプ・ディアン、RCAのザオ、トランジット・エクスプレス等が次々にレコード店に並び始めた。これらのレコードを買い続けていくうちに筆者はフレンチ・ロックの虜となっていった。そこには当時既に人気の高かったイタリアン・ロックとは全く異質のサウンドがあった。ロック的感覚を失うことなく緊張感に富んだテクニカルな演奏を展開するジャズ・ロック、繊細で音にきらめきのあるシンフォニック・ロック、アーバン・サックス、ラード・フリーらのやや実験的（少なくとも当時はそう思った）サウンド、プログレッシヴな演奏をバックに唄う個性的シンガー達、更に、その後しばらくして登場してきたアール・ゾイ、ユニヴェル・ゼロ（ベルギーのグループであるが、フランスで活動し1stアルバムも仏アテム・レーベルからリリースされた）のチェンバー・ロック。今、振り返ってみてもそれらは本当に素晴らしいものであった。

そして現在。イタリア、ドイツ、イギリスのプログレッシブ・ロック・シーンがほぼ完全に世代交替し、新世代による発展途上状態にあるのに対して、フランスでは一部ながらも流れに継続した部分がある。それ故に、フランスには今なお知られざるとてつもない作品が眠っている可能性や驚異の新作が登場する可能性が残っていると言えるだろう。　賀川雅彦

ANGE

フレンチ・ロックの一方の雄アンジュはフランス東部の都市ベルフォールで結成された。結成された時期に関しては諸説あるが、フランスの数種の音楽雑誌（Pop Music,Best,Rock & Folk等）を見ると、一番早いもので69年９月、一番遅いもので70年１月と記されている。グループはChristian Decamps（org,vo）、Francis Decamps（org,tp,vo）、Jean-Claude Rio（b,vln,vo）、Gerard Jelsch（ds）、Jean-Michel Brezozar（g）の５人で構成されていた。70年１月、彼らはクリスチャン・デカンがWhoの「Tommy」の成功に刺激されて製作したロック・オペラ「La Fantastique Epopee Du General Machin」を地元ベルフォールで上演した。この頃、彼らがフレンチ・ロック・シーンのトップ・スターとなっていく過程でマネージャーとして非常に重要な役割を果たしたジャン・クロード・ポニャンと知り合い、当時彼が運営していた超マイナー・レーベル（シングルを２枚リリースして活動を停止した）からファースト・シングル「Israël／Cauchemar」を発売した。彼ら独特のサウンドはまだ確立されておらず、そのころのブリティッシュ・ロックの影響下にあるややブルーズィなサウンド、キース・エマーソン（ナイス）を思わすオルガン・プレイはアンジュの原点を知るという意味で興味深い。ポニャンを正式のマネージャーとしたアンジュは、同年３月、フランス各地から新人バンドを集めて行なわれたGolf Drouotのコンテストでピュルサーらとともに入賞し（当日の演奏の一部は71年にリリースされたＬＰ「Groovy Pop Sessionに収録されている）成功への切っ掛けを掴んだ。その後、３月28日に開かれたFestival de Bourgeを皮切りに、４月から７月にかけてBesan on,Ferrand,Clermont等、フランス各地でコンサートを開き喝采を博した。

そして、71年１月にはフィリップス・レコードと正式に契約し、名実共にプロとしてのスタートを切った。７月にはセカンド・シングル「Tout Feu,Tout Flamme／Dr.Mann」（フィリップスからの第１弾）を発表、続いてサード・シングル「Le Soleil Est Trop Vert／Le Vieux De La Montagne」もリリースされた。彼らはライヴ活動にも力を入れ数多くのコンサートを開いた。78年にRCAから発表された２枚組アルバム「En Concert」で当時のかれらの演奏を聴くことができる。なお、この１年強の間に若干のメンバー・チェンジがあり、リオ（ベースからリズム・ギターに転向）及びリオに変わってベーシストとなったP·Kachainianはグループを去り、新たにDaniel Haas（b）が参加した。

72年５月には待望のファースト・アルバムを発表。まだ、荒削りの部分もあるものの、アンジュ・サウン



ドが確立されつつあることを強く感じさせる内容となっている。そして、６月17日からはアルバムのプロモーションを兼ね、ジョニー・アリディ・サーカスとともに全仏ツアーを行なった。こうしてアンジュの名前はフランス中に知れ渡った。

翌73年から約５年間は彼らの黄金時代である。セカンド・アルバム「Le Cimetière Des Arlequins」（73年）、サード・アルバム「Au-delâ Du Délire」（74年）は正に彼らの代表作と呼ぶにふさわしい内容を有している。そこではフランス語独特の発音とイントネーションを生かしたシアトリカルなボーカルときらびやかな音色（これまたフランス独特のものである）のオルガンを中心としたメロディアスな演奏が一体化したオリジナリティ溢れるサウンドを聴くことができる。それは多くの後進に大きな影響を与え、今なお数多くのファンにフレンチ・シンフォニック・ロックの典型として認識されている。なお、4thアルバム「Emile Jacotey」（75年）ではドラマーがGuénolé Bigerに、5thアルバム「Par Les Fils De Mandrin」（76年）では同じくドラマーがJean Pierre Guichardに変わっているが、内容的には前２作と同傾向の好作品である。当時、彼らはイギリス等、フランス国外でも数多くのコンサートを行なっており、5thアルバムのボーカルを英語に差し替えたインターナショナル・ヴァージョン「By The Sons of Mandrin」もリリースしている。

このアルバムを最後にブルゾヴァール、アースがグループを脱退、オリジナル・メンバーはデカン兄弟のみになってしまった。こうした状況下で製作された「Guet-Apens」（78年）はメンバーこそ異なるものの今まで通りの方法論で作られた作品であり、従来通りのサウンドが楽しめる。その後、現在までに６枚のアルバムがリリースされているが、それらはいずれもややポップな音作りがされており、初期の作品を凌ぐには至っていない。

デビュー以来17年。アンジュが如何にフレンチ・ロック・シーンに貢献したかは計り知れない。

賀川雅彦

MAGMA

1970年、フランスにおいてマグマはレコードデビューする。冒頭で地球“Earth”への決別と遊星“KOBAIA”への移住のすすめ、そして既成の美意識と進化と呼ばれるものに対する盲信の破棄を呼びかけている。ややもすると一方的で脅迫的な宣言であり、また一見ＳＦ的な設定であるため商業的音楽界にありがちなこけおどし、あるいはハッタリではないかと疑うむきもあったようだ。しかしそれが冗談や茶番ではなかったことはその後、今日に至るまでの作品群が証明している。ともあれ彼らの一貫した姿勢が一方で狂信的な信奉者を生み、他方で誤解を生むことになったのだった。しかしこうした反地球的な状況設定とはうらはらにそのサウンドは古典的西洋音楽がベースであり、そこから逸脱することのない明快なものである。しかしなおマグマが比類なきオリジナリティを保持しているのは作品に霊感が宿っているからであり、叫びが奥深いところから発せられているからだ。マグマのオリジンを探ろうとするならやはり創始者であるChristian Vanderという人物について知ることからはじめる必要があろう。



彼はJohn Coltraneのプレイを耳にして以来、究極的な照準を彼に合わせた。それは現在に至っても不変である。それは音楽形態をコピーすることではなく、純粋な精神の探究においてであった。２枚組の1stですでに歌詞としてコバイア語が使用されている。コバイア人、“Univeria Zekt”の言語である。フランス語がオペラティックな曲調にうまく乗らないという理由から彼が作り出したというが、もはや彼の前世のコバイアでの記憶が甦えったのだといえるほど異和感（異様ではあるが）はなくマグマのサウンドの大きな魅力の一つである。ここでアルバム群を貫くコバイア・ヒストリーについて書き始めると紙面が尽きてしまうので別の機会にゆずりたい。翌71年 2nd アルバム“1001 Centigrades”を発表する。サウンドはよりリズミックになり、Vanderのビジョンはより明確になってきている。７２年に“Univeria Zekt”の名で“The Unnamables”をリリースする。音は1stと2nd相方に相通ずる部分がある。2ndの延長にはやはり3rdがくるといえるだろう。その“Mekanik Destruktiw Kommandöh('73)は最初英国で、続いて米、仏、そしてついに日本でも発売された。当時の日本でマグマはどのように迎えられたのだろうか。想像はつくが。翌年も引続きVertigoより“Köhntarkösz”を発表する。Mekanikは天上界、すなわちコバイアから降りそそぐ讃美歌であったがこの4thは３つのテーマを持ち標題曲はド・レ・ミの３音階がハーモニックに繰り返され、その後劇的な展開をみせる永続性を感じさせる傑作だ。このＬＰの主要部分は次の“Magma Live”('75)でスケールアップして再現される。ここでの“Köhntarkösz”は原曲でClavinetが担っていたパートはLockwoodのViolinがとってかわる。それは曲にさらなる自由度を与え、ダイナミックで変幻自在、しかし一糸みだれぬ驚異的な演奏が記録されている。76年、Janik TopのMagical illusory tour “De Futura”をフイーチャーした“Üdü Ẁüdü”を発表、77年には未発表曲ライブ編集盤“Inedits”を出している。ところで74年にVanderはサウンド・トラックとして“Tristan & Isolt”を残している。内容は2e Movement de Theusz Hamtaahkという副題が示すようにコバイア・ストーリーそのものである。後のマグマのライブ盤でも別ヴァージョンで聴ける。78年、“Atthak”を発表。UrgonとGorgoの出合い、その後の彼らの体験が異様に美しい作品に翻訳されてる。
Islandの“Pictures”同様、この美しいアルバムも再発していただきたいものである。Well Come To Japan, HRG。その後マグマ結成10周年記念コンサートのライブ“Retrospective Vol·1～3('81)を出したのちしばし沈黙する。３年後に“Merci”をひさびさに発表、マグマの消滅の噂をくつがえす。初めて英語の歌詞も用いており、またそのサウンドの変化に古くからのファンはとまどいをみせた。しかしマグマは通俗に堕したわけではない。このアルバムは彼に音楽的啓示を与えた人々への返礼の歌曲集である。To John, Otis, Eliphas, …。その精神は彼らの新しいプロジェクト“Offering”('86)にも引き継がれている。この２枚組のアルバムではあの原初的リズムは甦り、Vanderは歌いまくっている。一方でリリカルでジャージーなピアノ曲、ボーカル曲もあり、その音楽的領域は無限的広がりをみせる。また実際コンサートではコルトレーンの曲なども演奏しているようだ。そこでVanderがボーカルを取る様はまさしくサックスを吹き続けるジョンそのものである。マグマの音楽はもはやカルト・ミュージックと言われるよりも真の意味でのユニバーサル・ミュージックと呼ばれるにふさわしい。

松本修一

EMMANUEL BOOZ

Emmanuel Boozは今日までに4枚のアルバムを残し、また4枚のシングルが確認されている。彼の詳細な経歴は不明だが一時期フランスの社会運動組織“Chanson Liberte”に関与していたと伝えられる。時代背景を考慮すればいわゆるプロテスト・シンガー的な活動を当初行っていたのかもしれない。70年、“Le Restaurant d'Alice”(Barclay 920, 186)を発表する。シャンソン風の作品だといわれるが、歌われている詞についても留意する必要があるだろう。

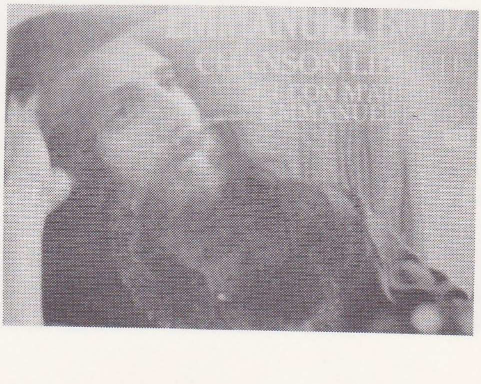
私が初めてBoozを知ったのは確か1981年、4thアルバム“Dans Quel Etat J'erre”(Polydor 2393259,79年)だった。日本では78年にアンジュの3rd“新ノア記”がフィリップスから発売された。母国語で歌うフレンチ・ロックに接したのはこれが最初だったが、かなりの新鮮な衝撃だった。たかみ氏のライナーにも書かれていたが、これ以前に日本で発売されていたグループはゴング、タイ・フォン、パルサーなどで、詞には英語が使われていた。なお、氏の好みからその昔、たしか日本盤がでていたはずのMagma(“Mekanik Destructiv Komhando”, 73年)の名は除外されていた。当時氏の情報をたよりにレコードを聴いていた私はしたがってマグマにはまだめぐりあっていなかった。Booz以前にマグマを知っていたら心の準備ができていたかも知れないが、このBoozの4thアルバムに初めて針を落したときは、何というか一種の狂った強烈さにすっかり一本取られてしまった。先頭からいきなり効果音と共にヘヴィな嵐のような演奏とともにBoozの叫びがスピーカーから飛び出してきたとき、私が求めていた種の音楽に遂に巡り合ったのだと感じた。この2年の歳月を費やした作品以降、彼の動向はほとんど伝わってこないようだが、このような極限の世界を極めてしまってはもうやり残したことはないということなのだろうか。

さかのぼって3rd“Clochard”(Atlantic 50294, 76年)、浮浪者、あるいはどこにも属さない者、彼自身のことかもしれない。4thに比べれば嵐の前の静けさが漂よう作品だが、順序正しく2nd“La Jour Ou Les Vaches”(Atlantic 50095, 74年)から見れば嵐の後、という方が正しいか。しかし彼のボーカルはあいかわらず深く前後作の橋渡し的作品である。

2ndのフロントジャケットに見られる写真は荒涼とした岩々、あるいは瓦礫の廃虚の地の上に大きな古い地球儀と共に黒マントに長髪をなびかせたBoozがカブキ役者のように静止したポーズをとっている。足元のねじれた人形、そして赤道部分で分離してしまった地球儀は暗黒の裂目をのぞかせている。この象徴的な風景は彼の予言する終末のイメージだろうか。しかしまだ希望も彼の歌声から感じ取れるような気もする。彼はまずシンガーであり、詩人であり、同時に作曲家である。その理屈抜きの深い表現力に聴く者は言葉の壁を越えて、また言葉では言い表せない何かを感じとる。同様の精神を持つアーティストとしてMama Bea Tekielski, Catherine Ribeiro + Alpesの名を上げることができるだろう。あと世界をみわたせばやはりPeter Hammillだろうか。彼らは疑いなく人間の精神の深淵まで降りていった人々であろう。そしてイタリアのPierrot Lunare, Opus Avantra, Alan Sorrentiの名も同列に記しておきたい。特にファースト・アルバム“Aria”(72年)におけるSorrentiはその風貌からしてBoozに酷似した印象を私などは受けた。長髪をなびかせ、マントをひるがえして野を行く姿、そして作品においてはヴォーカルによって空間を切り裂いていく様はさながら荒野を突き進む放浪の旅人のようだ。しかし彼はその後、憑き物が落ちてしまったかのように退行し、ポップス・シンガーとなってしまったが。しかしBoozはフレンチ・ポップ・シンガーではなく隠遁者の道を選んだということなのだろうか。我々は彼の復活を切望してやまないが。

最後にBoozの作品への協力者たちについて少々メモしておきたい。3rd“Clochard”はアレンジャーとしてJoel Dugrenotが起用されている。彼はZaoのオリジナルベーシストであり、76年当時はCyrile Verdaux率いるクリアーライトのベースを担当していた。同グループには当時、Tim Blake (syn), Didier Lockwood (violin)らも参加していた。このLPにはこの2人以外のYves Chouard(g), Serge Haouzl(dr)が参加している。またDugrenotもベースを弾いている。その前の2ndアルバムにはジャンルを越えた様々な人々が参加しているが、やはりWiliam Shellerのアレンジによるカラーが強い。(彼についてはマーキーNo.22に詳しい。)4th“Dans Quel…”には前記のLockwoodが実に効果的にヴァイオリンで参加しているほか、元Alpha Ralphaのベーシストだった Charrieras Charlieの名もある。D'agostini Jean Claude(g)とTinayle Gilles(key)のアレンジも光る。

松本修一



ATOLL

“フランスのyes”と言う触れ込みで、日本に紹介されて以来、Atollは最も人気の高いフレンチシンフォニックグループとなって現在に至っている訳だが、近年ユーロロックのマイナー化、コレクター化がすすみ、ともすると忘れられがちであるので、ここに再認識を促したい。

Atollは、1972年7月にMetzで結成された。結成当時のメンバーは、Jean-Luc Thillet (g). Andre Balzer(vo). Alain Gozzo(ds). Luc Serra(g).Francis Paul(b).の5人である、彼らは、ZOOの前座としてデビューし、しばらくの間は、Golf Drouotクラブ等でライヴ活動に専念していたが、1973年Eurodiscと契約し、シングル「Je L'aiwe guaud Je te vois／Change ta vie」(両面共LP未収録)でレコードデビューを果した。このシングルは1973年と言うこともあり、ポップな感は否めないが、既にAtollサウンドの原形とも言えるものが形造られている。このシングル発表後は、再びライヴ活動に専念し、1974年6月には、Angeとツアーを行い、大成功を収めている。こうして飛躍への足掛りを掴んだ彼らは、1974年暮れに、2ndシングル「Le Secret Du Mage／Je Fais un rêve」をリリースする。この時には、ベースがPat Kifferに替わり、キーボードのMichel Tailletが加わって、6人編成になっていた。このシングルは粗削りながらもAtollサウンドを確立した名作である。時に“Je Fais un rêve”(LP未収録、A面は新録音で1stアルバムに収録されている。)は、叙情的なスローバラードで、哀愁を帯びたギーボードとヴォーカルが印象的な名曲である。次いで1975年1月には1stアルバム『Musiciens Magiciens』がリリースされた。ここでは、ベースのPat Kifferが脱退し、Jean-Luc Thilletがベースにまわり、5人編成に戻っている。このアルバムは、構成力と言う点で、幾分未熟さが感じられるものの、新鮮な若さ溢れる力作となっている。Andre Balzerのシアトリカルなハイトーンヴォイスを中心とした、テクニカルでスリリング、それでいてメロディアスなサウンドは、重さを引きづっている様な他のフランスのグループとは、完全に一線を画す、Atollならではのものである。続いて同年に、早くも2ndアルバム『L'araignée-Mal』がリリースされた。ギターが元Amon Düül IIのChristian Beyaに替り、ゲストに、元Kominternのヴァイオリニスト Richard Aubertと、1st にもゲスト参加していたキーボーダーBruno Gehinを迎えて制作されたこのアルバムで、彼らは一気に頂点に登りつめた。圧倒的なテクニックに裏打ちされた複雑華麗なアンサンブル、変幻自由な曲構成、正にフレンチシンフォニックの金字塔的な名作である。このアルバムは、セールス的にも大成功を収め、Atollは一躍フレンチロックシーンのビッグネームとなった。

アルバム『L'araignée-Mal』の成功から2年後の1977年、3rdアルバム『Tertio』がリリースされた。前作の成功にもかかわらず、再びライヴ活動に専念していた成果が如実に表われた、前作に負けず劣らずの名作である。前作のヴァイオリンとキーボードに替って、コーラスにMagmaのStella Vander, Lisa Deluxeを迎えて制作された本作は、最もAtollらしいアルバムと言えると思う。前作で見られた複雑なインストルメンタルはやや後退した様に思われるかもしれないが、かえってインストルメンタルパートとヴォーカルパートのバランスが良くなる方に作用している様に思う。表現力タップリのAndre Balzerのヴォーカルを核に、Christian Beyaの自由奔放なギターを上手に絡ませた、リリカルでメロディアスなサウンドはAtollの最も完成された姿であると言っても過言ではないだろう。このアルバムは、シングル「Paris C'est Fini/Tunne1」の大ヒットとも相まって、前作を上回るビッグセールスを記録し、彼らの人気を確固たるものとした。(ただ、当時を知る人の話に依ると、Pari周辺の都市部ではAngeをしのぐ人気があったが、地方では、PulserやMona Lisaの方が人気があったとのことである。)又、このアルバムは、ドイツ、イギリス等でもリリースされており、国外でもかなり好評を博していた様である。

こうした大成功にもかかわらず、彼らは再びライヴ活動に専念し、4thアルバム『Rock Puzzle』シングル「Smarto Kitshy／L'ultime Rock」がリリースされたのは、1979年の暮れであった。このアルバムは、明らかに前作の延長線上に在るものの、曲はややポップとなり、ヴォーカルの比重は増々増大している。Atollらしさを十分に備えた、高水準な作品ではあるのだが、前2作の様なインパクトが感じられなくなってしまったのが残念である。

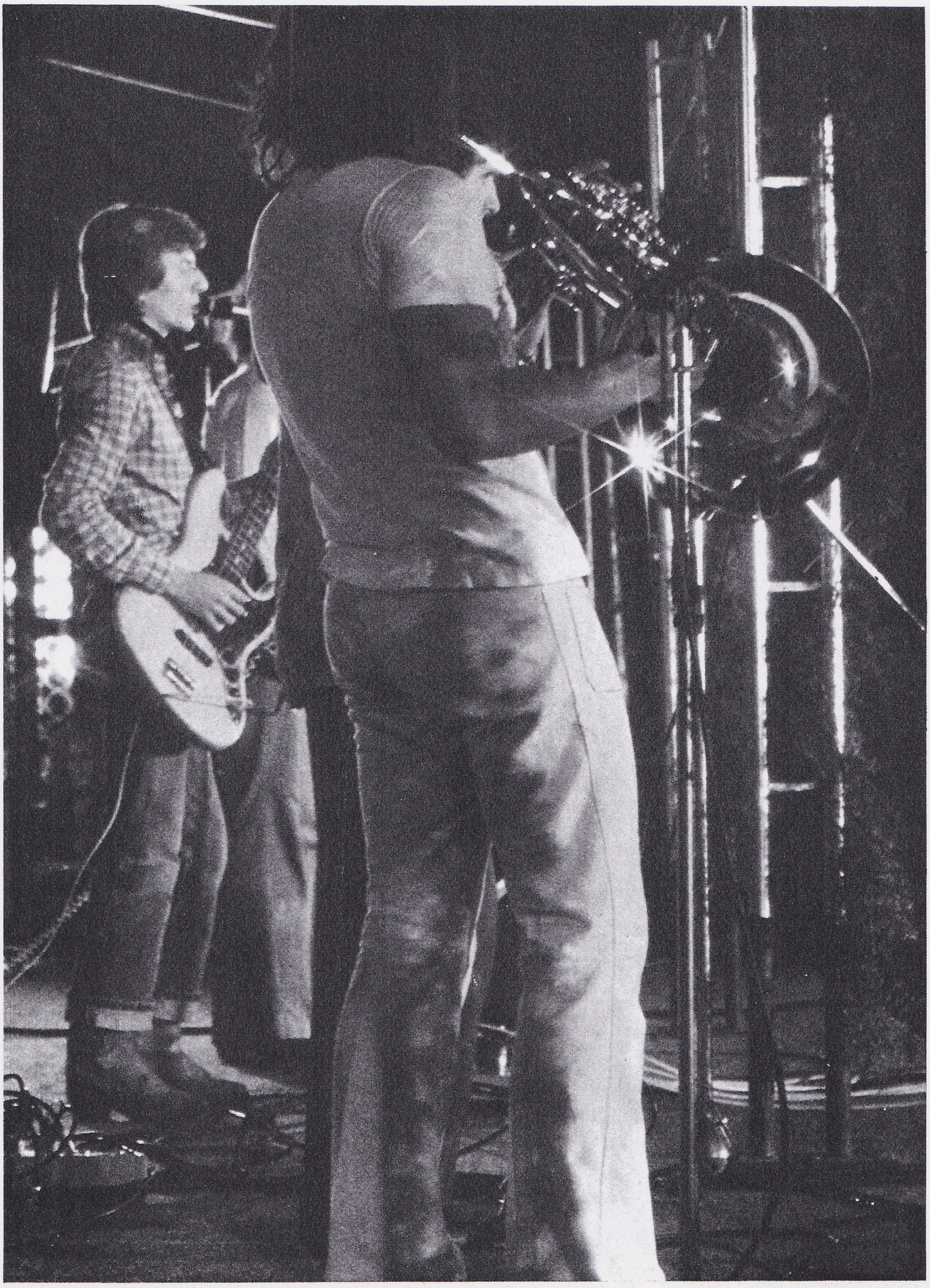
この後、彼らは作品を発表することなく、1981年頃に解散、同年ベストアルバム『Cosmic Trips』がリリースされた。これは悲惨な編集のベスト盤であり、Atollの最後としては余りに悲しいものである。グループ解散後、Andre Balzerは、B3sudと言うグループを結成し、2枚のシングルをリリースしているが、いずれもただのロックンロールでAtollの面影はまるでない。他のメンバーは、恐らくスタジオミュージシャンになったものと思われる。ポップスシンガーのバック等で、Christian Bèyaの名を見かけたことがあるのだが…。

Taiphongは復活したけれど、Atollは復活しないのだろうか？

中島洋一



Il Ritratto di Dorian Gray



Tra la nebbia di Milano: MAXOPHONE





GRYPHON

ART ZOYD

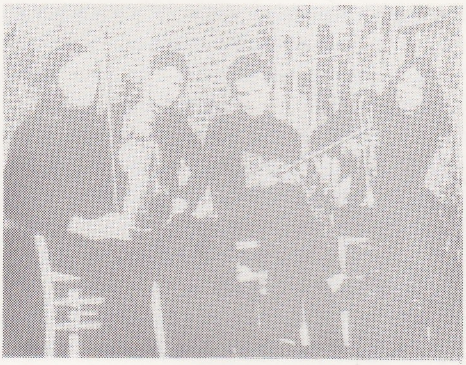
　フランスのロック・シーンにアール・ゾイと名乗るグループが登場したのは70年代初頭のことである。71年に彼らはマイナー・レーベル Opaline からシングル「Sangria／Something In Love」をリリースした。それは60年代のロック・シーンにおいて最もプログレッシヴな存在であったクリームの影響を受けていたが、サックスを大胆に導入するなど独自の試みも為された意欲作であった。当時のグループのパーソネルに関しては詳しく分っていないが、上記のレコードから判断するにギター、ベース、ドラムス、サックスから成る5人組だったものと思われる。シングルのA面はR.Fernandez の作、B面はR.Fernandez と J.P.Dulion の共作、更に、アレンジは Alain Loewenguth となっているが、彼らがグループのメンバーだったか否かも不明である。

　76年、創設期のメンバーこそいないもののオリジナル・アール・ゾイの流れを組むアール・ゾイ・トロワがファースト・アルバム「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités」をリリースした。Thierry Zaboitzeff（b,per,vo），Jean-Pierre Soarez（tp,per），Alain Eckert（g,per,vo），Gérard Hourbette（vln,fl）の4人によって作られたこの作品はその独創性及び以後のシーンに与えた影響力という点で70年代のフレンチ・プログレッシヴ・ロックにおける最も重要な作品の1つと言える。クラシックとジャズの要素をロックの中に巧みに導入した演奏を展開するトランペットとバイオリン、変拍子を多用した曲作り等はチェンバー・ロックの時代の幕開けを告げている。当時の彼らはフランス南部の都市トゥールーズを中心に数多くのライヴを行なっていた。82年に英リコメンディッドからリリースされたシングル「Manége」は76年2月19日にパレス・デ・スポルト・ドゥ・トゥールーズで開かれたコンサートの一部を収録したものである。グループ名をアール・ゾイに戻した彼らのセカンド・アルバム「Musique Pour L'Odyssée」はユニヴェル・ゼロのダニエル・デニス（ds），ミッシェル・ベルクマン（oboe,bassoon）をゲストに迎えてベルギーの Overjse で録音され、アテム・レーベルから発表された。ヘンリー・カウを中心とするロック・イン・オポジションに参加した彼らのアルバムはリコメンディド・レコードを通じて日本、アメリカ、ヨーロッパ各国にディストリビュートされ、彼らの名前を一躍有名にした。

　翌80年2月にはスイスのKirchbergにあるサンライズ・スタジオでサード・アルバム「Génération Sans Fufur」を製作。前作同様、アテム・レーベルからリリースされた。このアルバムにもダニエル・デニスが加わった作品が1曲収められているが、そのサウンドは前作のアール・ゾイとしてはややクラシカルなものからジャズ的要素を多少強調した実験的なものへと変化している。

　更に、同年7月には、自主製作盤のためプレス数が少なく、既に入手困難な状況にあったファースト・アルバムを再録音し、フォース・アルバムとしてリリースした。オリジナル盤のメンバーに Frank Cardon（vln），Patricia Dallio（p），Gilles Renard（sax）が加わって製作されたこの作品は音楽的完成度においてオリジナル盤を遥かに凌いでいる。

　最も充実した時期を迎えつつあったアール・ゾイであるが、アテム・レーベルが活動を停止してしまったため、フィフス・アルバムを発表するまでには長い時間を要した。英リコメンディッド・レコードからのリリースが決まり、82年4月～5月にかけて録音された「Phase Ⅳ」は何と2枚組、ジャズ的要素を見事に昇華し、独自のチェンバー・ロックを作り上げたアール・ゾイの6年を越える活動の集大成とも言うべきものとなった。



　83年にはフランスの新興レーベル Cryonic から6枚目のアルバム「Espace Inquiets」を発表。作品としてのボルテージは落ちていないものの、そろそろ新たな展開を求められる時期に差し掛かった。

　果たして、84年には彼らは新分野に進出した。まず、メンバーの1人、Thierry Zaboitzeff が劇団 Le Collectif Theatral Du Hainaut による「Promethee」のために劇用の曲を作り、それをソロ・アルバムとして発表した。続いて、ローラン・プティの創作バレー「Le Mariage Du Ciel Et De L'enfen」でグループとして音楽を担当し、その一部をセブンス・アルバムとしてリリースした。これらの作品は、その性格上、音楽的に従来の作品を凌ぐものとは言えないが、彼らの音楽に対する積極的な姿勢を示している。

　以後、2年以上に渡って彼らは沈黙を続けている。しかし、彼らが新作を携えて復活する日を心待ちにしているファンは少なくないであろう。　**賀川雅彦**

PULSAR

1970年代後半に隆盛を極めたフレンチシンフォニッククシーンも、1980年代に入る頃には、すっかり冬枯れの様相を呈してしまう。大半のグループは解散し、生き残った数少ないグループも、サウンドを変化させてしまった。そんな中で唯一、固くなな迄に自らのサウンドを守り抜いたグループがいる。

Pulsar の歴史は古く1966年に遡る。当時 Lyon のハイスクールバンドとして活動していた Free Sound と言うグループに、Philippe Roman(B), Jacques Roman(Key), Gilbert Gandil (g,vo)., Victor Bosch(ds)の４人が在籍していた。このバンドは、当初リズム＆ブルースを演っていたが、コンサートで共演した、David Gilmour のステージを見てサウンドポリシーをプログレッシヴなものに変えたのである。1966年のグループ結成以来幾度かメンバーチェンジがあったが、1968年に、前述の４人に落ち着いた。彼らは地元 Lyon で精力的にコンサートを行ない、1970年４月に Pulsar と改名する。そして、Malaval Festival、次いで1971年には、グループにとって重要なターニングポイントとなった Golf Drouot でのコンテストに参加する。このコンテストで成功を収めた彼らは、フランスツアーを行い着々と人気を得て行った。又、前述の Golf Drouot のコンテストの模様を収録したオムニバスアルバム『Groovy Pop Session』も1972年にリリースされ、Ange と共に高い評価をうけた。ここに収録されている“Pulsar”は、後の彼らのサウンドとは多少異なり、ややヘヴィーで混とんとしたものである。

こうして人気、実力を身に付けた彼らは、1974年12月遂に 1st アルバム『Pollen』をリリースする。メンバーは前述の４人に、フルートの Roland Richard を加えた５人編成である。随所に Pink Floyd からの影響を感じさせるものの、イマジネーションのつづれ織りの様な繊細で夢幻的な浮遊感漂うサウンドは、十分にオリジナリティを感じさせる素晴しいものである。ファンの間でも、このアルバムを最高作として推す人も少なくない。セールス的にも一応の成功を収めた様である（このアルバムは、Kingdom レーベルよりのリリースであり、イギリス他でも好評であったらしい。）。

1st アルバム発表後、彼らは約１ケ月に渡るブリティッシュツアーを行い、好評を博し、ビックグループへの足掛りを掴んだ。そして1976年４月、2nd アルバム『The Strands Of The Future』を録音する。このアルバム製作時に、ベースの Philippe Roman が脱退し、ゲストと言う形での参加となった。Rock'n Folk 誌に「これは豊かで情熱に満ちた非常に素晴らしいレコードである。全ての人々が、長い間正に待ち望んでいた最上の完成度を持ったグループである。偉大な印象派の作曲家マーラーの様な叙情性を感じさせる。」と絶賛されたこのアルバムは、サウンドクオリティに問題があるものの、ＳＦ的な浮遊感のあるＡ面の大作、叙情的なＢ面の小品、共に彼らのオリジナリティが十分発揮された佳作となっている。セールス的にも、このアルバムは大成功を収め、Ange、Atoll と並ぶビッググループとなった。



2nd アルバム発表後、彼らはイギリス、ベルギー、スイス、ポルトガル、と長期間に渡るツアーを行い、大成功を収めた。この人気に目をつけたフランス CBS は、好条件で彼らと契約。1977年12月に 3rd アルバム『Halloween』がリリースされた。ベースに Michel Masson を加えたこのアルバムは、オリジナルストーリーに基づいた、トータルコンセプトアルバムであり、フルートとメロトロンが描き出す、比類無き叙情性を持った最高傑作である。又このアルバムから、プロモートオンリー（少なくとも私の手許に在るレコードには、Special Promotion と明記されている。）でシングル「Sorrow in my dream／Dawn over darkness」がカットされている。このアルバムは、彼ら自身にとってもかなりの自信作であったが、プロモート不足からセールス的には失敗に終わってしまう。

3rd アルバム発表後、彼らは CBS を離れ、ベースも脱退し、活動は不活発なものとなって行った。シーンはパンク、ニューウェーブに移り、彼らにとっては、冬の時代が続いた。そんな中でも、彼らは自らの音楽を放棄しなかった。1980～81年にかけて、Le Compagnie Du Theatre De La Satire と言う劇団の演劇のバックを努め、その内の１作『Bievenue au Conseild' Administraction』は、1982年にレコード化されている。コンテンポラリーな要素が加わっているが、Pulsar サウンドは健在である。そしてそれ以降も彼らは、散発的にコンサートを行う等、活動を続け、1986年には、Jacques Roman 名義でカセットアルバム『Melodie Boreale』がリリースされた。リラックスした作品ではあるが、Pulsar サウンドの美だけを抽出した様なキーボードワークは、彼らのサウンドポリシーが今なお不変であることを示している様に思えてならない。

フレンチシンフォニックの歴史を、今なお歩みつづけている彼らの今後に、期待せずにはいられない。

中島洋一

GONG

1938年1月13日、デーヴィッド・クリストファー・アレンはメルボルンで生まれた。彼は10代後半にギター一本でヨーロッパ各地を放浪し、59年頃フランスに住みついた。この頃にイギリスの詩人ギリー・スミスと出会い、これがアレンの感性を触発し、詩を書くようになる。この詩をバンドで生かせないものかと61年にロバート・ワイアット、マイク・ラトリッジ、ヒュー・ホッパーらとデーヴィッド・アレンズ・カルテットを組む。しかし、ワイアット、ホッパーの2人は63年にワイルドフラワーズへ行ってしまい、カルテットは消滅したが、これが母体となり66年8月にソフトマシーンが結成された。このバンド名はアレンが与えたもので、彼は以前（65〜66年）バロウズと共にBBCラジオの仕事をしていて、その時に思いついたらしい。ソフトマシーンは67年春にUFOクラブでデビューを飾ったが、アレンは「Love Makes Sweet Music」のシングルとアルバム「ファースト・マシーン」のみ参加し、「できるだけ多くの人々が演奏し、共同生活のできる状況」という理想を求め、ヨーロッパ・ツアー直前に脱退し、スミスらと共にデーヴィッド・アレンズ・ゴングを67年に結成。12月に初めてギグを行った。「Improvising around nothing for hours on end」と呼ばれる即興を中心としたステージを、パリを中心に行っていた。バロウズが朗読で加わったり、また楽器演奏のできない人々も大勢参加した。当時、彼らはコミューンとして活動していたため、人の出入りが数知れず、一般に第一期と呼ばれる71年4月まで実に27回のメンバー・チェンジを繰り広げている。

そのさなか、ファーストの「マジック・ブラザー・ミスティック・シスター」は69年10月に録音された。メンバーは総勢9人にも及び、このうち半分はゲストと言われているが彼らにとってはゲストだの正式メンバーだのという概念は全くなく、当人たちは勝手気ままにスタジオへフラリとやってきて、適当に演奏していっただけらしい。音はサイケデリック、ミスティック、ギミックといった類のもので正当なテクニックは全くないが、全曲ギリー・スミスのペンによる事は特筆に値する。

この後、5月革命の際、デーヴィッド・アレンズ・ゴングは一時的に解散し、アレンはイギリスに渡り、新たにバナナムーンを70年に結成。ホッパー、ワイアットら旧友と共に活動し、71年1月にアルバム「バナナムーン」をリリース。ちなみにこの中の「Memories」はホッパーの曲で後にワイアットがシングルで焼き直している。一方、グループの方はアルバム発表直後に突如ゴングが再活動を始め、バナナムーンは解散。バンド名も「ゴング」とシンプルになり、今までのように単なるコミューンではなく、グループとして充実していき、「カマンベール・エレクトリク」を71年4月に発表。無駄がなく、まとまりも良く、間違いなくゴングの、というよりアレンの最高作と言い切っていいだろう。この頃から精力的に活動を始め、「カマンベール」の時に録ったダッシェル・エダヤの「オブソリュート」をシャンダールからリリース（メンバーは同じでさらにバロウズとサム・ワイアット参加）。また、ジャコモ・ダゴスティーニのドキュメント映画〈モーターサイクルレーサー〉のサントラ「コンチネンタル・サーカス」や、グラストンベリー・フェアのライヴを収めた3枚組オムニバス「エレクトリック・スコア」がたて続けに発表された。

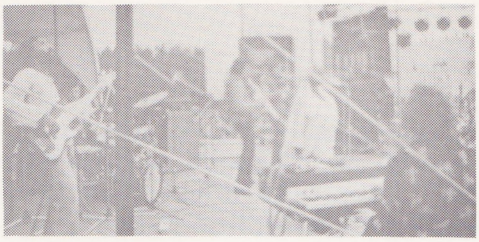


そして、いよいよスティーヴ・ヒレッジ、ティム・ブレイクらを加えた「フライング・ティーポット」「エンジェルス・エッグ」「ユー」と続くラジオ・ノーム・インヴィジブル3部作が作られる。家畜豚を研究するエジプトの学者ミスター・T・ビーイング、骨董品のティーポット売りのフレッド・ザ・フィッシュ、人と会うたびに「ビールを飲め！」としか言わないヒンズー教の賢人バナンダ・アナンダ、この3人が惑星ゴングの人々と出会い、バナナ・ニルヴァーナの世界へ到達するというストーリーで、これに緑色の小人や空飛ぶティーポット、英雄ゼロ・ザ・ヒーロー、魔女シャクティ・ヨニ、ポット頭の精、導師オクターヴ・ドクター等、書ききれないくらいの登場人物が入り乱れ、支離滅裂な宇宙神話が展開されている。ゴング・ファンならばすでにこの物語はなじみの深いものだろうし、このスペース・オペラを詳しく説明するとなるとあと20頁程必要となるくらいなのでここでは割愛させていただく。

さて、ラジオ・ノーム以後は御存知の通り、アレンはバンドを解散させたかったが、マネージメントの問題でできずに、アレン、スミス、ヒレッジ、ティムが脱け、ピエールを中心に活動が続くが、これはもはや別バンドと見てよく、従ってアレンが脱退した時点でゴングの神話と歴史の物語は幕を閉じたものと見なすのが正しく、そしてまたアレンの願いでもある。

いわねあつみ

ZAO



ザオの誕生はヨッコ・ジェフ・セファーとフランソワ・ファトン・カーンがマグマで共演したことに端を発する。マグマのメンバーとして活躍し、アルバム「Magma」(70年。カーンのみ参加)、「2」(71年)、更には、ユニヴェリア・ゼクト名義の作品「The Unnamables」(72年)にも参加した2人はロック・ミュージックの持つ新たなる可能性に賭け、73年ザオを結成する。当時、セファーはジーグフリード・ケスラー(p)，ディディエ・ルヴァール(b)，同じくザオのメンバーとなったジャン・ミ・トゥルオンとともにパーセプションとしても活動しており、ザオ結成後もパーセプションがしばらくの間存続したため、セファー，トゥルオンは2つのグループで並行的に活動していた。

セファー(sax,cl)，カーン(p)，トゥルオン(ds)，ジョエル・デュッド・デュグルノー(b)，ジャン・イヴ・リゴー(vln)，モーリシア・プラトン(vo)，の6人から成るザオは活動の中心をライヴに置き、数多くのコンサートを開いた。こうした地道な活動は徐々にではあるが確実に彼らの支持者を増していった。そして、73年の秋、待望のファースト・アルバムが発表された。セファー，カーンがマグマで得たものと彼らを中心に各メンバーの持つ独自の音楽性を融合させて作り出したサウンドは最高水準の完成度を示している。ロックの情熱とジャズの高度なテクニックが一体化した演奏は緊張感に富んだ見事なものである。このように優れた作品であるにもかかわらず、レコード会社はこのアルバムの販売促進に積極的でなかった。彼ら自身の手でできる唯一のプロモーションはライブを行ない自分達の音楽をより多くの人々に知ってもらうことであった。彼らは連日のようにライヴ・ハウス等に出演した。それは肉体的にも精神的にも非常にハードなものであった。そして、遂にリゴーのグループ脱退という事態に至ってしまった。彼は余裕を持った静かな生活を望んだのである。更に、しばらくしてプラトンもグループを去っていった。

こうした状況下、残りの4人は、メンバーの補充を行なうことなく、3人のゲスト(内1人は元メンバーのリゴー)を迎えてセカンド・アルバムの製作に取り掛った。74年9月のことである。完成した作品は「Osiris」と命名され、エルドンの作品で知られる創造的マイナー・レーベル，ディスジャンクタ(後のウラス)から発表された。専任のボーカリストこそいないものの基本的にはファースト・アルバムと同傾向の好作品である。

この時期あたりからフランスのプログレッシヴ・ロック・シーンは一気に盛り上がりを見せる。数多くの優れた作品が作られ、大手のレーベルもこの種の作品をリリースするようになった。中でもRCAは「バランス」というシリーズを作り、ジャズ・ロック系の作品を積極的に発表した。ザオのサード・アルバム「Shekina」もその一環としてリリースされた。75年7月に録音されたこのアルバムには、イギリスに渡ったデュグルノーに変わってジェラール・プレヴォス(b)が参加しており、また、前作にゲスト参加したピエール・ギュイニョン・TY・ブーム(per)の名前も見られる。それはクラシックの弦楽四重奏団クワトール・マルガンとのコラボレーションを含む意欲作であり、セファーの音楽的教養の広さを改めて認識させるものとなっている。バンドのみによる演奏は極めてテクニカルでドライヴ感に富んだジャズ・ロックとなっており、一方、クワトール・マルガンとの共演部分ではクラシック的要素とジャスあるいはロック的要素が無理なく融合して独自のサウンドを作り出している。こうした試みはセファーのソロ・プロジェクト，ネフェシュ・ミュージックに引き継がれ、より完成度の高いものとなっていった。

翌年、彼らは新たにディディエ・ロックウッド(vln)をメンバーに迎え、ジャズ・ロックの真髄とも言うべき作品を発表した。実質的にはザオのラスト・アルバムとなった「Kawana」である。トゥルオン，プレヴォスのスピーディかつ正確なリズム，セファー、カーン、ロックウッドの白熱のインタープレイ，そして、絶妙のアンサンブル，正にジャズ・ロックの金字塔である。

この作品を最後に各メンバーは独自の道を歩み始めた。プレーヤーとしてのみの存在に飽き足らなかったトゥルオン、ロックウッドはザオを脱退し、自らの音楽性をよりストレートに反映させたスルヤ(Surya)を結成した。また、セファーもソロ・プロジェクト、ネフェシュ・ミュージックに専念するためグループを去った。残されたカーン、プレヴォスは新たにトロンボーン、サックス、ドラムス、パーカッションの4人を加え、フィフス・アルバム「Typhareth」を発表したが、かつての精彩は見られなかった。カーンもそれを十分に認識し、遂にグループを解散した。こうしてフランスのプログレッシヴ・ロック・シーンが生んだ最大のジャズ・ロック・グループ，ザオの歴史は閉じられた。

時は流れ1986年。幻の名盤となったファースト・アルバムの再発を記念して、セファー、カーン、トゥルオン、デュグルノーがステージに立った(他にデボラ・セファーがバイオリンで参加)。一夜のみ(6月6日)のコンサートであったが、それは正にザオ伝説の復活であった。

賀川雅彦



ACYNTYA
La Cité Des Oubiliés

SRC : 161754 '78 廃

PHILIPPE DE CANCK - SYN, ORG, P, EL-P
BERNARD PETITE - DS, PER
JEAN-LOUIS TAUVEL - B
PHILIPPE CLESSE - VLN, G

78年にリリースされたアシントヤ唯一のアルバム。演奏技量こそ極く標準的なレベルであるが、シンフォニックロックの愛聴者であれば全編を埋め尽くすキーボード群とヴァイオリンの大攻勢には圧倒されるであろう。あくまでも叙情的な展開が中心とはいえ、透明感ばかりが先行しがちなフレンチ・シンフォニックに対して聴く側が絶えず求め続けて来た迫力満点のプレイがそこにはある。メロトロンこそ使用していないが、シンセ音の大乱舞は若干薄めの音作りを補って余りがあろう。これだけではキーボード系の凄さばかりが目立ってしまう訳だが、ヴァイオリンにも互角の重責を課し、常に前面に位置させることによって非常にバランスの取れた曲作りを可能にしているのである。（江）

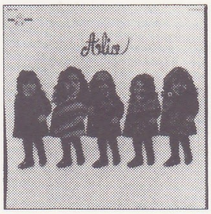


JEAN PIERRE ALARCEN
Tableau N° 1

Scoppuzzle 1979年
ZZ-001 廃

A: 1er Et 2e Mouvements　B: 3e Mouvement

ジャン・ピエール・アラーサンの第2作である。絵画、光景、描写などの意味の「タブロ」は、そのサウンド内容とを考え合わせれば、実に適切なタイトルのように思われる。ベランジェのバック・バンドから、ジェラール・コアン、ジャン・ルー・ブソンを得、さらにダニエル・ゴヨン(key)ともう一人のパーカッション、フィリップ・ルロウの5人が演奏している。気心の知れた仲間達と創造されたこの「タブロ」、勿論アラーサンの曲、構成である。内容は、まさに芸術と呼べるものであり、アラーサンはこの時、作曲家としての力量をいかんなく発揮した。この作品が「～N°1」とされているので、もしかすると「N°2」も作っているかも知れない。（中）



ALICE
Alice

BYG　東宝
101 廃　BYG 101 廃

A: Axis
Onurb
Le Nouveau Monde
L'Arbre
Valse
L'enfant

B: Extrait Du "Cercle"
Final
Thème
Mexican Song
Venez Jouer I
Venez Jouer II
Tournez La Page...
Fumée Grise Et Marrons Chauds

アリスのデビュー作。5人編成中の楽器構成はギター、ベース、ドラム、キーボード、管弦楽器である。曲はどれもアレンジされたもので、傾向のばらつきや演奏のあまさがあるものの、60年代以来というべきポップ感覚を下地にしていて、メロディアス、かつ、ほのぼのとした雰囲気をもっている。アップ・テンポな部分でのポップ感覚は少々露骨だが、フルート、オルガン、ヴァイオリン、サックス、アコースティック・ギターの柔かな音色による静の部分でのそれは、70年代初頭の淡い感覚に満ちている。後年には2作目「ARVETZ LE MONDE」(Polydor 2393 043) を発表し解散に至るが、キーボードのアラン・スーザンはソロ製作外にドラムのアラン・ヴェスと共にエマニュエル・ブーズの2作目へ参加している。（松）



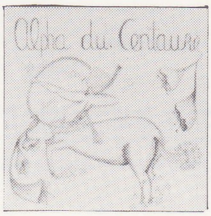
DAEVID ALLEN'S GONG
Magick Brother

BYG　コロムビア　1970年
529305 廃　BYG-103 廃

A: Magick Brother-Mystic Sister
Change The World
Glad To Sad To Say
Chain Store Chant
FredFish-Hope You Fell OK

B: Ego
Gong Song
Princes Dreaming
5 & 20 Schoolgirls
Cos You've Got Green Hair

ゴングとしての初めてのアルバムとされているが正式にはデーヴィッド・アレンズ・ゴングの唯一のアルバムと見た方が正しい。メンバーは9人編成だが実際にはもっと居てスタジオ内は常時15～6人位出入りしていたらしい。その中には現在ECMで活動している・アール・フリーマン、バートン・グリーン、バール・フィリップスらもいた。アレン、スミスの他にはディディエ・マレルブ、ラシッド・ハウリ、タスマン・スミス、等で全曲ジリ・スミスのペンによるものでこれは特筆に値する。音の方はミスティック、ギミック、サイケデリックの類で正当なテクニックは全くないがこれこそがゴングの真の魅力と言えるだろう。（い）



ALPHA DU CENTAURE
Contact

SPIRALES SRP 3318 '79 廃

A : CONTACT
PETITE FEE

B : MAXIMA
FUSION-MERINGUE

フレンチ・ロック・シーンにおける伝説のグループ、コミンテルンのドラマー、ジル・ロベールによって75年に結成されたアルファ・ドゥ・サントール。その後、幾多のメンバー・チェンジを経て、本ファースト・アルバムを発表した時にはロベールもグループを去っていた。本作品を録音したg, ac-b, dsという編成はジャズ・ロック・グループとして一風変わったものと言える。3人のプレイを個別に見ると、J.P.リシャールのギターはロック・サイドに位置するもので、かすかながらもロバート・フリップの影響を感じさせる。一方、O.コクランのウッド・ベースはジャズ色の濃いものとなっている。これらにJ.ディキンソンの典型的ジャズ・ロック・タイプのドラムスが加わり、完成度の高い作品に仕上っている。（賀）



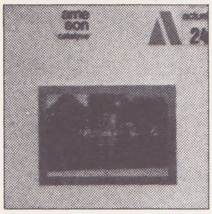
ALPHA RALPHA
Alpha Ralpha

Warner 1977年
56 330 Y 廃

A: Synergie
Nova
Syrtis Major
Genese

B: Rez
Gothic
Magellan
Lagune Ouest
Hymn

タイ・フォンの親戚バンドとして知られるアルファ・ラルファ唯一の作品。グループは5人編成で、中心人物はミシェル(g)とクロウドゥ(g, Violin)の2人である。そしてキーボードにはジャン・アラン・ギャルデ（元タイ・フォン)、ベースにはシャルリー・シャリラ（後にBoozのアルバムに参加）といった、なかなかの強者バンドだ。音の方は基本的にヴォーカルレスでギターがメイン。明るさと哀愁を兼ねそなえた曲調が特徴である。全体の出来としては、タイ・フォンに比べれば分が悪いが、ジャンの哀愁のキーボード・ワークは変わっていない。さらにゲストとしてハーモニーを聞かせるのは、他ならぬタイ・フォン・コーラス隊。加えてフランソワ・ブレアン(key)の名前も見える。（城）



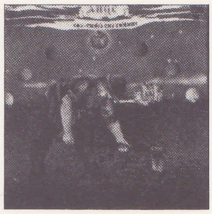
AME SON
Catalyse

BYG 529.324 1970年代初期
Actuel Volume 24 廃

A: Seventh Time Key
Eclosion
Cœur Fou

B: Reborn This Morning On The Way Of...
A Coup De Hache
Hein, Quant A Toi

マルク・ブランクとパトリック・フォンテーヌ(後にNYLへ)が初期ゴングへ参加し、そこで結成された4人組、アム・ソン。デビューはアムージでのコンサートで、それは67年末~70年前半のことである。本作はライヴ活動中心の彼等が残した唯一の作品である。何曲かはイギリスで録音され解散後、録音されてから2年後にリリースされた。内容はゴングの 1st 等に共通する、ポップスから脱し始めた当時のニュアンスを満載したものである。フリーな部分、ポップなメロディーを持つ部分、何れもフルートを多用し、かつサイケな雰囲気に包まれている。政治意識と実験的試みをその音楽の理念とし社会への働きかけを試みること。彼等のこの姿勢は音楽の分野で68年の5月革命に前後する時代背景を如実に物語る。 (松)



ANGE
Au-Delà Du Délire

Philips フォノグラム 1974年
9101 004 BT 5169 廃

A: Godvin Le Vilain
Les Longues Nuits D'isaac
Si J'etais Le Messie
Ballade Pour Une Orgie

B: Exodo
La Bataille Du Sucre
Fils De Lumiere
Au Delà Du Délire

アンジュは、クリスティアンとフランシスの、デカン兄弟を中心にしたグループである。メンバーのソロもあわせると20枚にもおよぶレコードを発表している、フレンチ・ロック史上のビッグ・グループである。音の作り方は、ジェネシスやキング・クリムゾンに似ていて、重厚なキーボード・プレイ、叙情的なギター、哀愁をおびたヴォーカルが前面に押し出されている。このアルバムは日本でも発売された、彼らのサード・アルバムである。中世とも未来ともつかぬ世界に暮らす農夫ゴドヴァンが救済をもとめて、遍歴するというストーリーは、非常にドラマチックである。メロトロンが非常に効果的に使用されていて、暗黒の世界に救済の光が射し込むような情景を思いおこさせる。 (宇)



ARACHNOID
Same Title

DIVOX/A 3304 '79 廃

A: LE CHAMADERE
PIANO CAVEAU
IN THE SCREEN SIDE OF YOUR EYES

B: TOUTES CES IMAGES
LA CUEPE
L'ADIEU AU PIERROT

何号か前に、本誌で名前のみ挙げていたフランスの幻のグループ "アラクノイ"はフランスにありがちの2流メロディアス・ロック・グループ等とは一線を画する確固たるサウンドを持っており、キング・クリムゾンのコンセプトに基ずいたサウンドがその主体。フィリップ奏法を用いたギターワークとリズム陣が一体となった重厚かつ、スリリングな演奏をさらに演出する陰欝多彩なキーボードと多くのアイデアを含むボーカル・スタイルが加わり、圧倒的な迫力を持つ聞き応えの多いアルバムに仕上っている。このアルバムはクリムゾンのコンセプトに基づき、さらにフランス色を強く押し出しオリジナリティーを築き上げた超一級品に属するプログレッシヴ&シンフォニック・ロックの"幻の名盤"である。 〔UNO〕



ARTCANE
Odyssée

Philips 1977年
9101 141 廃

A: Odyssée
Le Chant D'orphée
Novembre
25e Anniversaire

B: Artcane I
Nostalgie

アールカン唯一のアルバム。編成は g. key. b. dr. の4人で、vo. はドラマーを除く3人がとっている。彼らの場合、グループとしての個性は作曲によってではなく、むしろメンバー個々の楽器演奏スタイルと曲のアレンジによって形作られている。したがって表面的には硬質で少々暗いというイメージがあるが、全体のサウンドは今一つ掴み所がない。収められている6曲はいずれも佳曲ぞろいで、中でもB-1は16分以上に及ぶ大曲であり、ミニマル・ミュージックの要素を取り入れた意欲作だ。一曲、そしてアルバム一枚を通しての構成力という点で少々物足りない感もあるが、曲の部分部分はいずれも閃きを感じさせる。ところで表ジャケの図を見て察するに、アールカンとは「精巧に作られたあひる」といった所か。 (城)



ART ZOYD 3
Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités

Production Michel Besset 1976年
001 廃

A: Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités
1er Mouvement
2eme Mouvement

B: 3eme Mouvement
Deux Images De La Cité Imbecile

アール・ゾワイのデビュー作(厳密には本アルバム以前にシングルを1枚リリースしている)であるとともに、現在のユーロ・ロック・シーンで最も注目を集めているチェンバー・ロックの先駆けとなった作品でもある。ベース、トランペット、ギター、バイオリンの4人が作り出すサウンドは複雑なリズムでクラシカルな展開をみせる。それはジャズ・ロックでもシンフォニック・ロックでもない新しい形態の創造的ロック・ミュージックである。なお、本作品は81年にオリジナル・メンバーにバイオリン、サックスを加えて再録音されている(Atem 7010)。オリジナル盤が各人のソロに重点を置いているのに対して、再録盤は絶妙のアンサンブルを誇っている。彼らは現在までに6枚のLPと2枚のシングルを発表している。 (賀)



ASGARD
Tradition & Renouveau

WEA 1978年
56508 廃

A: Le Braconnier/Quand Je Menais Mes Chevaux Boire/J'ai Mon Ami Sous Les Brandebourgs/L'alouette Est Sur La Branche/D'ou Venez-Vouz Belle/La Petit Hirondelle

B: Ce Soir François Villon/Le Lac D'argent/Le Vent/Les Landes D'harou

アスガールはパトリック・グランドピエーロン(v, fl. dulcimar, psalterion)、ダニエル・モントヴァニ(g)、ドミニク・ウルティ(b)ドミニク・ラバル(key)の四人からなる。ヨーロッパのトラッドや南米のフォルクローレのメロディを活かして、新しいタイプのプログレッシヴ・フォークともいうべき音楽を創造している。一枚目のアルバム「L'HIRONDELLE」(WEA 56288)に比して、この二枚目では、土臭さがなくなって、メロディラインも非常に洗練されている。A面はフォルクローレやトラッドを新しい解釈とエレクトリックな楽器等により再生させている。B面は中世の詩人フランソワ・ヴィヨン等をモチーフにしたオリジナル曲中心で、叙情味豊かなヴォーカルとメロトロンがからみあってクライマックスに至る。 (宇)



ASIA MINOR
Between Flesh And Divine

WAM
101 1980年

A: Nightwind
Northern Lights
Boundless

B: Dedicace
Lost In A Dream Yell
Dreadful Memories

「CROSSING THE LINE」(79年、WAM001) に続くエイジア・マイナーの2ndアルバム。編成はg.Dr,ギターもプレイするフルート奏者、そして新加入のKey.(1stのKey.はゲスト)の計4人で、b.はギタリストとキーボーダーが兼任している。またVo.は全て英語で歌われている。彼らの曲は奇数拍子を多用し、そしてその拍子は複雑に変化する。それを彼らは高水準の演奏力によって実にさりげなく聞かせてしまう。曲調は叙情的であり、時にミステリアスな雰囲気も漂わす。彼らのサウンドはシンフォニック・ロックの典型と言える物だが、特定のアーティストの影響下にある物ではない。2枚の作品は共に自主製作による物だが、非常に洗練されており、高いレベルを有している。 (城)



ATLANTIDE
Atlantide

Crypto
ZAL 6423 廃

A: Atlantide
Le Regard Des Dieux
Images

B: Soleil Noir
Reverie

クリプトから唯一のアルバムを発表したアトランティーデについて、詳しい事は全く不明のままである。メンバーはヴォーカル、ギター、ベース、ドラムス、パーカッションの5人編成で、テクニックもセンスもほぼ標準的。どこか邪悪な匂いのたちこめるヘヴィーなプログレッシヴ・ロックを展開しているが、所々イエスからの露骨な盗用が目立つことと構成の甘さのため、引き込まれるような魅力に乏しい。反面アコースティック・ギターやヴォーカル・ラインには独特の叙情を備えており、彼らに関してはこの点をこそ評価すべきであろう。ヴォーカリストの声質も良い雰囲気を生むのに一役かっているようだ。発表年は記されておらず70年代後半の作という以外は不明。 (古)



ATOLL
L'Araignée-Mal

Euro Disc **913-002 廃** / **キング** **GXF 2049 廃** 1975年

A: Le Photographe
Exorciste
Cazotte N° 1
Le Voleur D'extase

B: L'Araignée-Mal
I) Imaginez Le Temps
II) L'Araignée-Mal
III) Les Robots Débiles
IV) Le Cimetière De Plastique

彼らは4枚のアルバムが全て日本発売されており、名実共にフレンチ・ロック界を代表するグループの一つである。1st「MUSICIENS-MAGICIENS」では多くの煌きを見せる一方多くの欠落した要素を抱えていたが、名ギタリスト、クリスティアン・ベヤと元コミンテルンのヴァイオリニスト、リシャール・オベール（本作のみに参加）を得たこの2ndにおいて一気に頂点へと登り詰めたのである。高度な曲構成力と卓越した演奏能力によって、緊張感の塊とも言える音を終始生み出している。続く3rd「TERTIO」と4th「ROCK PUZZLE」では若干ヴォーカルの比重が増え、全体的に柔軟な音創りへと変化を見せたが、彼らの特長である曲の流れの自然さと高い演奏技術は増々磨きがかかり、いずれも劣らぬ秀作である。 (城)



FRANCOIS BERANGER
L'alternative

L'escargot
ESC-328 廃 1975年

A: L'alternative
Tous Ces Mots Terribles
Sous Les Pavés
Y'a Qu'la Foi Qui Sauve
Amours Envolées
Tous Ces Mots Terribles (instrumental)

B: Paris-Lumiére
a) Sault Tout Le Monde
b) Paris-Lumiére

フランスでは本作よりも「ル・モンド・ブージュ」(ESC-323) の方が有名だと思われる。フランソワ・ベランジェの数あるアルバムの中で本作が何枚目にあたるのか皆目見当がつかない。何故に日本でこの「ラルテルナティヴ」の評価が高いかというと、B面全てを費した名曲が含まれているからであり、しかも、ジャン・ピエール・アラーサンのペンになる曲であるという事が大きな理由であろう。実際にはA面ラストの「トゥ・セ・モ・テリブル」からその音世界が拡がってゆく。B面の「パリ・リュミエール」と名付けられた大作は、イントロをはじめとしてバック・ミュージシャンの力量をいやという程に思い知らされる。オリジナルは見開きジャケットである。 (中)



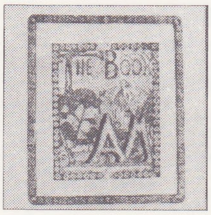
JEAN PASCAL BOFFO
Jeux De Nains

MUSEA FGBG 2001 '86 廃

A: DANCE
CARILLON
LA GRANGE AUX BOIS
JEUX DE NAINS
LE VIEUX CHATEAU
LE VOL DU DRAGON
REVE D'ENFANT

B: FARFELUTERIES
JEUX DE VILS NAINS
LEGENDE
FEERIE
NAISSANCE
NOCTURNE

フランスのジャズ・ロック系専門誌「Notes」関係者の手で設立されたMUSEAレーベルから、第一回作品として世に送り出された、トロルのギタリスト、ジャン・パスカル・ボフォのソロ作品、ジャケットデザインを御伽話か挿絵を思わせるファンタジックなイラストであしらった、A・フィリップスやS・ハケットの創作する夢見心地な世界を強く意識した作りが成されており、曲によって各種ギターを上手く使い分け、ベースからシンセサイザー…etcを手掛けるボフォの他、数名のゲストを迎えて様々な効果音（鳥の囀り、子供のはしゃぎ声…等）を配したサウンドは、人間誰しもが幼年期に抱いていた夢や空想、不安などを再び思い起こさせてくれる、不思議な魅力を持った回想のかけらとでも言えるだろう。 〔大〕



BOOK OF AM
Part One—Dawn And Morning

LTM
1016 廃 1978年

A: Introduction
The Song Of AM
Dawn (The Song Of The Void Come Unto Me The Song Ship Journeys West Fire The Cauldron Of Regeneration)

B: O Keepyress
Homage To Ra
Morning (As The Wind Blows Hear The The Voice Of The Bard I Am That Living Soul)

彼等の唯一の作品と思われる。5人のメンバーについては不詳であるがゴングのデヴィッド・アレンとジリ・スミスに謝辞が送られている事、ゲストの3人フィル・シェパード、パット・メドウズ、ステファニー・シェパードはジリ・スミスの1stソロ「MOTHER」に参加している事、サウンドが初期ゴング特有の例えば3rd中"I'm your fantasy"の様な夢幻的な響きで満たされている事等からアレン周辺の人脈が推察される。全曲英語で歌われ詩は詩人W・ブレイクやR・タゴール、ギリシャ神話に登場するヘルメスやピラミッドのテキスト等から多く引用されている。Aーギターを背後に女性ヴォーカル、シタール、柔かなフルートが奏でる東洋色の濃い繊細で夢見る様な響きは美しいジャケットの示すところのものである。 (松)



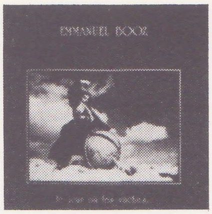
BOOMERANG
Same title

SPX 6839 '82 廃

A:Sweet and hard
Cycles
Like Eagles
Blood Pressure

B:Green
Raindy day
Just by love
It's game

ブーメランはザオのオリジナル・ベーシスト、Joel Dugrenot を中心に82年に発表された。いわゆるフレンチ・ジャズロックシーンのベテラン勢が集合している。David Rose (vl)、Claude Olmos (g, ex-magma) Jean My Trumng (drm, ex-zao) 他合わせて７人が参加している Zao の Z=Ƶ ('73) のラスト曲は Dugrenot の作だが、この曲など他の Cahen や Seffer といった本当の Magma 上りの人達の作品位上にそれに近いドラマチックな曲だったと記憶している。しかし本作では攻撃性やめまぐるしく変化する展開などはおさえられ、叙情的なメロディは全８曲に共通し、演奏者の比重も特定の人物に偏ることはなく、オーソドックスなセッションをとりおこなっている。このメンバーにしてはやや意外とも感じられる正攻法的なスタイルだが、余裕のうかがえる好作品といえる。〔修〕



EMMANUEL BOOZ
Le Jour Où Les Vaches...

ATLANTIC 50095 廃 1974年

A: Samedi 15 Décembre
Espérance
Réveillons-Nous
Réveillez-Vous
Donne
Je Ne Peux Pas Te Dire

B: L'homme Aux Mille Clés D'or
Angoulême
Le Jour Où Les Vaches...
Nous Les Enfants

本作は彼の２ndにあたると思われる。これ以前にバークレーから「ALICE AU RÉSTAURANT」と題されたシャンソン・アルバムが出ている。ブーズの作品はいずれも超強力無比な彼のヴォーカルをメインとして創り上げられてはいるが、各アルバムのサウンドはそれぞれ少なからず異質な物となっている。本作は壮大なオーケストラ・アレンジとバンドによる演奏が見事な調和を保ち、圧倒的な緊張感を持って進行する。曲調は重く、暗く、深い。それは正に彼独自の音空間であり、そのスケールの大きさは到底筆舌できる物ではない。続く３rdアルバム「CLOCHARD」は、クリアーライト３rdのメンバーを中心としたバンドをバックにした曲と、A・ギターのみをバックにした曲が半々で、本作よりも幾分リラックスした出来である。（城）



EMMANUEL BOOZ
Dans Quel État J'erre

Polydor 2393 259 廃 1979年

A: Ode Aux Rats

B: La Symphonie Catastrophique
Armoire Et Persil

ディディエ・ロックウッド(vln)、アルファ・ラルファのシャルリー・シャリーラ(b)等12名を迎え77年〜79年にかけて製作された４作目。前作「CLOCHARD」(Atlantic 50 294Y, '76)が彼の持ち味をシンガーとして活かした作品だったのに対し本作は大胆にロック色の濃いジャズ・ロックのアレンジを持ち込んだものとなっている。各奏者の高度な技術の絡み、小刻みな展開、緩急、ジャン・クロード・ダゴスティーニ(g)とジル・ティネール(key, syn, p)によるアレンジの冴え、そして製作を手掛けるブーズの怒鳴りつける様な豪快なヴォーカルが一体化した非常にテンションの高い作品である。なおアルト・ヴァイオリンのJean-Louis Majhun については MAHJUN の Jean-Louis Lefedvre と同一人物だとする説がある。（松）



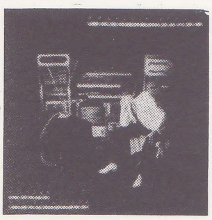
CHRISTIAN BOULE
Photo Musik

POLYDOR 2473 086 '78 廃

A : ELASTIC MINUTE
PHOTO MUSIK
CRISTAL PALACE
22 BROAD STREET

B : RADIO ARC-EN-CIEL
5° OCEAN
AQUA DEVA
INTER GALACTIC COSMIC TRIOLET
ORANGE CLIMAX

クリアライトのギターリストとして知られる(1st, 2nd, 4thの3枚のアルバムに参加している) クリスチャン・ブーレがシリル・ヴェルドー(key, per)らの協力を得て作り上げた1st ソロ・アルバム。クリアライトのサウンドをややポップにしたかのようなスペース・ロックの傑作で、ヴェルドーの上昇感に富んだシンセ、ウィスパー・ヴォイス、ポップなサックス等を交え、ブーレがスティーヴ・ヒレッジを思わす乗りの良いプレイを展開している。翌年、2nd「Non-Fiction<Polydor 2393 227>」を発表。これも1-stと同系統のサウンドを有する力作である。以後も、シングル（未確認）をリリースするなど、活動を続けている模様であるが、目立ったニュースはなく地味なものとなっている。（賀）



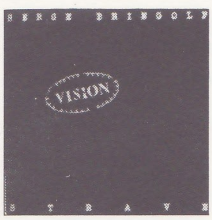
FRANCOIS BREANT
Voyeur Extra-Lucide

Egg 900 584 廃　キング GXH-2012 廃 1979年

A: Poursuite Sur Le Peripherique Nord
8 Aout,0h15,125ème Rue
L'Amour Au Grand Air
Cadence D'eperonnage

B: Danse Rituelle Talmouse
L'Eveil De L'acrobate
L'Obus Rouille,Trouve Dans La Dune
Les Funerailles Du Voyeur
We Ate The Zoo

フランソワ・ブレアンは長い活動歴を持つミュージシャンである。クリュリフェリゥ（本カタログ参照)、ネモ（フランス独特の毒のあるポップス・グループで「Nemo (Agave AG 35702)」「Doin' Nuthin' (同 AG 35703)」の２枚のアルバムを残している)、ベルナール・ラヴィリエのバック・バンド（本誌11号参照）と種々の活動を展開しているが、やはり２枚のソロ・アルバムの出来が素晴らしい。「Sons Optique (Egg 900553)」に続いてリリースされた本アルバムはディディエ・ロックウッド(vln)、クロー・ブラスキ(vo) らのゲスト・ミュージシャンを迎えて、ブレアンがコンポーザー及びキーボード・プレーヤーとしての実力を遺憾なく発揮した内容となっている。曲調もサントラ風のものからジャズ・ロックまで多岐に渡る。（賀）



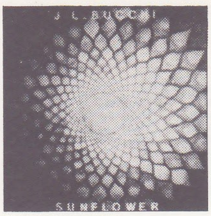
SERGE BRINGOLF'S STRAVE
Vision

Omega OM 67028 1981年

A: Vision
Plus I
Plus II

B: Plus III
Ma-Ho Peneta

何といっても、デビュー・アルバムが２枚組であったという事実の前には技量の不安などみじんも感じられない。1st (Omega OM-67016) は、セルジュ・ブランゴルフの「ストラーヴ」だったが、今作ではそのストラーヴがバンド・ネームになっており、しかも華々しいメンバー・チェンジがなされて、元アール・ゾワイのアラン・エケールが参加している。ここでの彼のギター・プレイは、自己のアルバムよりも遙かに冴えを見せており、曲の素晴らしさとメンバー間の迫力に輪をかける。ブランゴルフのマグマ、ザオ狂いは今だに終わっておらず、ヴァイブや金管が走り回る中を派手に気合いを入れてドラムをたたく。力作である。マグマ、ザオが解散した今となっては、このストラーヴこそがその後継者であると言えそうだ。（中）



J.L.BUCCHI
Sunflower

Trema 1978年
N 310047

A: Prelude
Aquafunk
Sunday Morning
Ganymede
Sunflower Dawn
Sunflower

B: Presqu'iles
Helio Funk
La Crau
Piedeplon
Night Fall

サンフラワーはジャン・ルイ・ビュッシ(key)を中心としたジャズ・オーケストラである。ジョセフ・ハマー(ds)、ヤニク・トップ(b)、パトリス・ティゾン(g)、ブランヌ・ベヤルド、ジャック・ブソ(tp)、アラン・ギュツィアン、アレックス・ペルディニョン(tb)、この他には、ヴァイオリン7名、ビオラ2名、チェロ2名、コントラバス1名、ヴォーカル1名、といった大編成である。このアルバムはサンフラワーの唯一のアルバムであり、センティピードやニール・アドレイのようなジャズ・ロック・シンフォニーという作風になっている。オーケストラをバックに、ジャン・ルイ・ビュッシのキーボードがおだやかに響く小曲集である。 (宇)



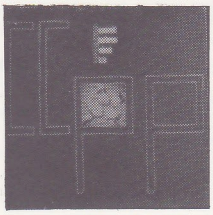
CARPE DIEM
En Regardant Passer Le Temps

Arcane 1975年
913-051 廃

A: Voyage Du Non-Retour
Reincarnation

B: Jeux Du Siecle
Publiphobie

カルプ・ディアンのデビュー作。グループ名をラテン語読みして「カルペ・ディエーム」とする説もあるが、少なくとも仏語ではカルプ・ディアンである。彼らはg.key.b.dr. に管楽器奏者の計5人のメンバーからなり、中でもソプラノ・サックスとフルートを吹く管楽器奏者がグループに独自のカラーを与えている。彼らの音からは非常に線の細い印象を受け、頼りなく感ずる方があるやも知れぬが、彼らの魅力はそこにこそあると言える。つまりその繊細さが、透明感と浮遊感のある美しさを生んでいるのである。続く2nd「CUEILLE LE JOUR」(Crypto ZAL 6403)も、全体のまとまりには欠けるものの、これまたなかなかの好作品である。なお、1stのオリジナル・アルカン盤は見開きジャケットである。 (城)



C.C.P.P.
same title

FLAMOPHONE 2933 104 '76 廃

A: FOR "J"
DEATH OF THE SPANISH LION
CLAVINET SHIT
PRIMITIVE SOUL

B: JORIS OF LUMINA
PRANCAI
MAIE
SWING TATAVE

グループ名のC.C.P.P.とは4人のメンバー、André Ceccarelli (ds), Marc Chantereau (per, key), Christian Padovan (b), Slim Pezin (g) の苗字の頭文字を取ったものである。フレンチ・ジャズ・ロック・シーンの実力派として知られ、スタジオ・ミュージシャンとしての活動も多い彼らが、Daniel Gojone (p,cl), Alain Hatot (sax,fl) らこれまた一流のゲスト達と作り出した唯一の作品はフレンチ・ジャズ・ロック・シーンの底力を見せつける力作である。切れの良いリズムに乗ってサックス、トランペット、トロンボーン、フルート、ギター等がソロやユニゾンでテクニカルかつ余裕を持ったプレイを展開している。全体の印象としてはややファンキー過ぎる感もあるが、良質のジャズ・ロックに仕上っている。 (賀)



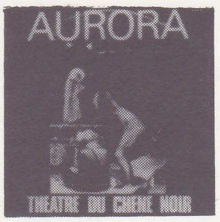
CECCARELLI
Ceccarelli

Carla
CAR 500 002 廃

A: Forget It
I'm A Skunk
Big City Bright
Ded' Circus

B: Life Is Real Only Here/1
Speed It Up
What The...
Where Is Here
Life Is Real Only Here/2
His Loven
Space out

フランスのジャズ・ロック界ではセンス、テク共に最高峰にあるドラマー、アンドレ・スカレリの初リーダー・アルバムである。60年代のビート・グループ、ピラナ・サウンズ時代からその卓抜したテクは、ジンジャー・ベイカー並みであったし、今となっては既に第一級と呼べるものである。D.ロックウッド、J.トップ、S.ヴァンデ他の豪華なメンバーを集めているが、A-4でのジャン・ポール・スカレリとのドラムのかけ合いはすさまじく、その後に続くドラム・ソロも圧巻である。その後、セッション・ドラマーをしながら、JMSよりセカンド・アルバム「André Ceccarelli (JMS-014)」を発表した。 (中)



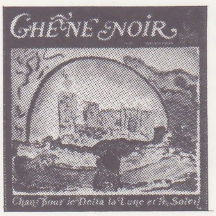
(Theatre Du) CHENE NOIR
Aurora

FUTURA VOIX 01 '71 廃

A: ARRIVEE DE LA TERRE EE DE SES ENFANTS
LE BONHEUR
LA VIEILLESSE ET LA MORT

B: LE CONTE DE LA TERRE ET DE SES ENFANTS, ET LA PREMIERE APPARITION
LA FASE INATION DES ENFANTS DE LA TERRE PAR LES HOMMES OISEAUR
VIRRE

フレンチ・ロック・シーンの超異端派シェン・ノワール。同じフランスのグランド・マジック・サーカスと並び称されることの多いシェン・ノワールであるが、彼らははるかに音楽的であり、その強烈なオリジナリティは比類ない。本1stアルバムでは、近時活動を再開した彼らの最初期の姿を窺い知ることができる。穏やかに、そして時には激しく響き渡るフルート、バンブー・フルート、不気味に鳴り響くゴング、ボンゴ、ドラムスのパーカッション群、力強いトランペット、虚ろでフリーキーなサックス等に、ニコル・オビアのあたかも呪術師のようなボイスが加わり狂乱の世界を描き出している。そのプリミティヴなサウンドは聴く者全てに衝撃を与えるに違いない。 (賀)



CHENE NOIR
Chant Pour Le Delta Lune Et Le Soleil

Chene Noir Disques 1976年
CN 001 廃

A: Le Train
Les Oiseaux
Hey...!

B: La 7
Le Nil

シェン・ノワールはアヴィニョンの演劇ロック集団である。彼らは活動の中心をレコード製作よりもステージに置いており、1969年に「La Paillasse Aux Seins Nus」でデビューして以来、数多くの創作音楽劇を上演している。本アルバムは70年にフュートゥーラ・レーベルからリリースされた「Aurora」に続く第2弾であり自主製作盤として発表された。そのサウンドは女性ボーカリスト、ニコル・オビアの感情を内に秘めた語りを中心に、サックス、ピアノ、各種パーカッション等が淡々としたリフを繰り返す構成になっている。曲は徐々にではあるが確実に変化し遂には静かなるクライマックスを迎える。派手さは無いがロック・テアトルを代表する一枚と言える。同年「Orphee 2000」を発表した後、彼らは消息を断つ。 (賀)



CLEARLIGHT
Les Contes Du Singe Fou

Isadra　1976年
ISA 9009　廃

A: La Clé (part one)
La Clé (part two)
Soliloque

B: Time Skater

クリアーライトはキーボーダーであるシリル・ベルドのユニットであり75年の1st「CLEARLIGHT SYMPHONY」(Virgin V2029)に始まり、2nd「FOREVER BLOWING BUBBLES」(Virgin V2039)、そして3rdにあたる本作と4th「CLEARLIGHT VISIONS」(LTM 1005)の計4作を発表している。参加メンバーはベルド以外アルバムごとに変化しているが、その顔ぶれがとにかくすごい。字数の関係上、全く詳しく触れられぬのが残念である。音の方は、1stはその名の通りシンフォニックな趣きが強く、2ndでは1stの要素と共にジャズ・ロックの要素が取り入れられ、この3rdではその新たな方向が定着すると同時に、理解し易い曲創りがなされている。4作共傾向は若干違うが、流麗なる美しさは不変である。　(城)



PASCAL COMELADE
Sentimientos

米DYS 05　廃　1982年

A: White Light/Approximative but Fair/Wyatt Ah um/Lettre de Mozart à sa petite cousine/Still life with goldfish/The grey velvet gentleman/From DC by PC/Taking tiger mountain/Habanera/Carmen

B: Avant-Midi/Sicilia/Again/White heat/Distant Pianos/Paralelo/In a lebanon park/Courant d'air sur le pommier du Japon/La Opera/Barrett

元Fluence「Same」(PÔLE 0008)、現Fall Of Saigon「Same」(ATEM7013)本作は彼の79—81年の集大成でアンビエントな趣きを湛えたピアノ曲、トイ・ミュージック、「Paralero」(PAR 002,'80)に顕著な無機質で数理的な電子音の反復等様々な傾向の曲を各作品から収録、再録音したものである。デヴィッド・カニンガムやエラティウのA・ミラール等が数曲に参加、イーノやサティ等の曲を含むが同レーベル所属のニーモニストによるヴィジュアル・マテリアル、内側に画家クールベの作品を転写した三つ折ジャケ等全てにおいて独創的である。他には500枚限定EP「Ready-Made」('80)、テープ「Slow Musics」('81) 同「Logique Du Sens」('83)等がある。いかにもフランスらしいノスタルジアとサティにも通じるユーモアに満ち溢れている。　(松)



CONFLUENCE
4 Voyages

RCA　1976年
FPL 1-0132　廃

A: Dekka
Convergences

B: 4 Voyages

コンフリュアンスのデビュー・アルバムであり、ライヴである。事実上のリーダーであるディディエ・ルヴァールを軸に織りなすフリー・インプロヴィゼイション群と、難解な曲構成が混在しており、混沌としたまま迫力のみが耳に残って終る。3枚のパーセプションのアルバムよりももっと硬派なつきつめた音である。その後、彼らはより柔軟な音づくりに向かうが、それは、カポンとエスクードゥの脱退によって拍車をかける。解散後、スウィング・ストリングス・システムやソロ活動を経た彼らの中でカポンはスタジオ・ミュージシャンになり、エスクーデはジョン・マクラフリンと来日したりして話題にもなったが、よりポップな音楽性に変化している。　(中)



LA CONFRERIE DES FOUS
La Confrerie Des Fous

Ballon Noir　1978年
BAL 13008　廃

A: La Danse Des Fous
Il Est Bel Et Bon
On M'appelle Fou
Valse De L'echiquier
La Part A Dieu
Le Cri Du Gueux

B: Le Diable
L'entree Du Titanic Dans le Port De New York
Nykel
Jeu De L'oie
Mon Ami Jouissance Vous Donnerai
La Danse Des Fous

道化師一座という名のグループである。中心人物はマリコルヌのユーグ・ドゥ・クールソンとローラン・ヴェルコンブルであり、エマニュエル・パルーナンの姿も見える。中世の人々の生活のすみずみまでを支配した神や悪魔、近代以前の社会で独自の地位を有していた道化＝狂人、そういったトリックスターたちをモチーフにしたアイロニカルで時に卑俗な笑いに満ちた世界がこのアルバムにはパッケージされている。歌詩や曲は時にはオリジナルであり、時には古謡の現代的解釈である。歌詩の持つ知的な魅力もさることながら、B-2、3でみられるような自由自在なアンサンブルの妙こそプログレッシヴの名にふさわしいのではないだろうか。　(宇)



CORTEX
Troupeau Bleu

Disques Esperance　1975年
ESP 155524　廃

A: La Rue
Automne
L'enfant Samba
Troupeau Bleu
Prelude A "60 Round"
60 Round

B: Chanson D'un Jour D'hiver
Mary Et Jeff
Huit Octobre 1971
Sabbat 1ère Partie
2ème Partie
3ème Partie
Madbass

コルテックスはアラン・ミオン(key)とアラン・ガンドルフ(dr) を中心に結成された。 サード・アルバム「Pourquoi Pas」(Crypto ZAL 6458)は78年にリリースされている。本作では、アラン・ミオンの軽やかなキーボード・プレイを中心として、多彩なゲストメンバーのプレイが色どりをそえている。特に、ジャン・クロード・ダゴスティニのギターと、紅一点のミレイユ・ダルブレイのスキャット風のヴォーカルが素晴らしい。全体の印象は軽やかなメロディラインを持つ透明感あふれるジャズ・ロックというものである。B面の大曲「サバ」(サバトのこと) は悪魔の宴というよりも妖精の踊りというような清らかな印象を与える。なお、サード・アルバムはかなりファンキーなものである。　(宇)



CORTEX
Vol.2

DISQUES ESPERANCE　ESP 165 501　'78 廃

A: DEVIL'S DANCE
FUNK AROUND THE PUNK
HURLUBERLU
SOUL
DATURA

B: POXA
REGINA
MISTER J.
EFFICACE SWING
OH, LORD

フランスのファンの間でもあまり知られていないコルテックスの2nd。参加メンバーの記載がなく、ジャケットの裏側にディスク・エスペランスからリリースされた他のレコードのジャケット写真が5枚も掲載されていることから考えて、当初より廉価盤として発売され、プロモートもほとんど行なわれなかったものと思われる（ほぼ同時期に1stもタイトルを「Mary & Jeff」と変えジャケット・デザインを一新して、オリジナルと同番号で再発されている)。1st同様、一部に女性スキャットがフィーチャーされているがその重要性は低く、キーボード、ギター、フルート等によるジャズィな演奏が中心となっている。ジャズ・ロックとしては軽く多少イーズィであるが、テクニカルで聴き易いものと言える。　(賀)



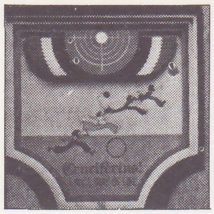
PATRICK MODIANO–HUGHES DE COURSON Fonds De Tiroir 1967

Ballon Noir
BAL-13011 廃

A: Valse Druze
Les Escaliers
La Polka Des Grosses Dames
Le Commandeur
Mouche La Reveuse
La Coco Des Enfants Sages

B: Les Romans Photos
Le Mele Cass
Valse Des Scaphandriers Somnambules
La Complainte De Roland Garros
Ma Liliputienne
La Valse Druze (reprise)

パトリック・モディアノの詩にマリコルヌのユーグ・ドゥ・クールソンが曲をつけて歌った、連名ではあるが実質上、ユーグ・ドゥ・クールソンのリーダー・アルバム。ほぼ半分の曲には、グリフォンを経たマリコルヌのブライアン・ガランドが参加している。マイナーなシャンソンだが、マリコルヌのようなトラッド臭さはなく、素直なメロディーである。そこここに入るガランドのバスーンの絡みが素晴らしく、聴く者をハッとさせる。「引き出しの中の宝物——1967年の思い出」とでも訳すのだろうか。ユーグ・ドゥ・クールソンの才能としたたかな音楽性がマリコルヌの大きな助けになっていたのが、このアルバムでわかる。（中）



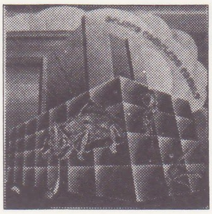
CRURIFERIUS A Nice Way Of Life

Egg 1970年前後
940011 廃

A: Big Bird
What Did You Do
Let's Try

B: A Nice Way Of Life
Gimme Some Lovin'
It's Got To Be A Rule
Jungle Child
Annabel Lee

フランソワ・ブレアンがネモ以前にクリスティアン・ヴァンデらと製作したアルバム。ジャケットにパーソネルの記載は無いが裏側に４人のメンバー写真が載っており、他の２人はマルク・ペール（ネモに参加）、ベルナール・パガノッティと思われる。製作年度も正確には分らないが、ネモのファースト・アルバムが73年にリリースされていることを考えると71,2年頃の作品と推測できる（60年代末に発表された可能性もある）。そのサウンドは当時のブリティッシュ・ロックの影響を受けた軽い感じのものであり、ブレアンのオルガンを中心にしたキーボード・プレイとヴァンデの如何にもロック的なドラム・ワークが印象に残る。なお、ジャケットはフランスでは数少ない変形物である。（賀）



DELIRED CAMELEON FAMILY Delired Cameleon Family

Pathe Marconi 1975年
QC 066 13087 廃

A: Raganesh
Weird Ceremony
La Fin Du Début
Le Boeuf

B: Novavana
Anantâ

クリアー・ライトの創設者、シリル・ヴェルドーのプロジェクトの一つである本アルバムは、クリアーライトの延長線上にあるという解釈と同時に「トリップ」サウンドとしての要素もかなり色濃く打ち出されている。クリスティアン・ブーレ、ジルベール・アルトマン、ティム・ブレイク、ジョエル・デュグルノー、アリエル・カルマ等々、当時のドラッグ・ミュージック的色彩を多少なりとも有した連中の一大セッション・アルバムということができるだろう。サウンド的にはクリアー・ライトの1stをよりフリーキーにしたようなもので好き嫌いのはっきり分かれる一枚といえそうだ。「VISA DE CENSURE N°X」という映画のサウンド・トラックスとして発売されたものである。（山）



PASCAL DUFFARD Dieu Est Fou

CBS 1976年
81589 廃

A: Trois Millions D'Annees Etre
Porte-Moi De L'Eau, Marie

B: Au Fond De Mes Yeux
Action-Reaction
Dieu Est Fou

謎のボーカリスト＆キーボード・プレイヤー、パスカル・デュファールの唯一の作品である。彼に関しては、このアルバムを発表したこと以外一切不明であるが、その無名さに反して、音楽的にはかなりの才能を持った人物と思われる。本作品にはアンナ・プリュクナル(vo)、ヨッコ・セファー(sax)、ティム・ブレイク(syn)、フランシス・モーズ(b)、クラウド・アンゲル(g) ら多くの有名ミュージシャンが参加しており、全員が力のこもった演奏を展開している。サウンド的には、多少なりともマグマの影響を感じさせるバンドを中心としたダイナミックな部分とピアノとオーケストラをバックにデュファールがやさしく唄うメロディアスな部分に大別される。そして、そのいずれもが素晴らしい出来である。（賀）



DÜN Eros

Quest Atlantique 1981年
SAB 001 廃

A: L'épice
Arrakis

B: Bitonio
Eros

デュンはパリの南西に位置するナントのバンドである。「エロス」と題された本作品は自主製作による彼らのデビュー・アルバムであり、ギター、ベース、ドラムス、キーボード、フルート、パーカッションの６人が参加している。その演奏は随所にジャズの影響を感じさせるものの、あくまでも本質はロックであり彼らの熱い息吹きがストレートに伝わってくる。メンバー全員がなかなかのテクニシャンであるが、取分けアラン・テルモのマリンバを中心にしたパーカッション・プレイはこのグループの演奏を一段と個性的なものにしている。また、変拍子とテンポの遅速を巧みに用いた曲構成は素晴らしく、時としてジェントル・ジャイアントを彷彿させる。グループは現在も活動を続けており新作のリリース予定もある。（賀）



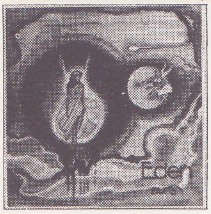
DYNASTIE CRISIS Dynastie Crisis

Harvest 東芝 1972年
2C062-12363 廃 EOP 80754(一部改編) 廃

A: Ère Lumière
Samouraï
Chicago
Merci Mr. Chapman
Chante, Fais Ce Qui Te Plait

B: Le Fantôme
Faust 72
Quatre Heures De L'après-Midi
Répétition (Johnny B. Good)

ミッシェル・ポルナレフのバック・バンドとして来日したこともあるディナスティ・クライシス。本作は「SAD LIBERA NOS A MALO (Somethin' Else 849522)」に続く彼らのセカンド・アルバムである。ディープ・パープルを思わすハード・ロック、ホワイト・ブルースと呼ばれた所謂ブルース・ロック、オルガンを主体にした暗い感じのキーボード・ロック等、曲調は変化に富んでいるが、そのいずれもに当時のブリティッシュ・ロックの影響が見られる。演奏の面では、キーボード奏者のセンスの良いプレイとドラマーの自作の楽器を用いた風変わりなサウンドが印象に残る。アルバムとしての統一性はなく完成度も決して高くないが、70年代初期のフレンチ・ロックの平均的水準を示す作品として資料性は高い。（賀）



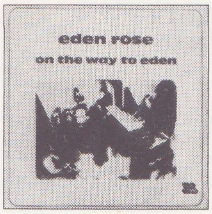
EDEN
Aura

Oxygene 1979年
OXY-045 廃

A: La Nuit Des Sorciers
Parures D'Automne
Les Enfants
Amour 76

B: Ouverture
Cauchemar
Thème O.V.N.I
Arc-En-Ciel

これはウベール・ヴレヤンス(keys)、アラン・リス(ds)から成るデュオ・グループ、エデンの唯一の作品である。内容はストリングス・シンセサイザーとハモンド・オルガンを中心とする均整のとれたクラシカル・ロックである。前者はバッキングを受け持ってサウンドに透明感を生み、後者のリック・ヴァン・ダー・リンデン（元トレース）を想わせるフレーズは主に主旋律を奏でているが、取分けこれらが重奏される部分での音の広がりは、その哀愁を湛えたメロディーと共に近年、稀のものである。メンバーの経歴等一切不詳であるが、フランスよりもむしろオランダの所謂プログレの影響を強く感じさせる。音の切れの良さが軽やかさを生むと同時にサウンド全体を引き締めていると言えるだろう。（松）



EDEN ROSE
On The Way To Eden

Katema
KA 33 507 廃

A: On The Way To Eden
Faster And Faster
Sad Dream
Obsession

B: Feeling In The Living
Travelling
Walking In The Sea
Reinyet Number

サンドローズの前身エデン・ローズの唯一のアルバムである。ジャケットにメンバーの記載はないが裏側の写真からジャン・ピエール・アラーサン、アンリ・ガルラが参加していることが分かる（サンドローズのボーカリスト、ローズはいない)。レコードに収録された全ての曲がガルラ作のインスト・ナンバーであり、そのサウンドは彼のオルガンを中心にしたポップなジャズ・ロックである。軽い感じの流れるような曲が多くアルバム全体としての完成度は決して高くないが、個々の演奏においてはかなり聴かせる部分もある。サンドローズがアラーサンのギターとローズのボーカルを中心にしたグループであるのに対して、エデン・ローズは正にガルラの音楽性を反映したバンドである。（賀）



EDHELS
Oriental Christmas

CA 94510 '85 廃

A:RAGTAG BABY
SPRING ROAD
TEPID WIND
CA...LI...VI...SCO
ORIENTAL CHRISTMAS

B:F...D...SMILE
IMAGJNARY DANCE
SOUVENIRS 76
ABSYNTHE
AGATHA

"ニッポンと言えば、フジヤマ、ゲイシャ…" と、いかにも外国人特有の誤解だらけな感覚がそのまま絵に描かれた様で、何とも気色の悪い、悪趣味なジャケットに包まれたモナコ出身のエドルスのデビュー作品。キーフの手法をパロディにしたようなデザインといい、御丁寧にジャケット裏には「東洋のクリスマス——絵努留寿」と、日本人向けに邦題、グループ名までが漢字読みで成されている。こんな遊び心を持っている反面、彼等は全盛期から80年代に至るクリムゾン影響下のオリエンタル指向の曲想を持ったグループで、Key、Ds、2人のGを含めた4人編成。収録されている全10曲、全てリーダーでGのMarc Ceccttiの手によるものである。ジャケで笑えて曲で泣かせる近年稀にみる傑作の一枚である。〔大〕



EDITION SPECIALE
Allee Des Tilleuls

United Artists 1976年
UAS 29965 廃

A: Rock & Roll
Reve, Reve
Tomorrow Morning
Un Coup Je Te Vois

B: Tu Naitras Demain
Marie Qui Te Maries
Mr Business
Allee Des Tilleuls

元トリアングルのマリウ・ミミ・ロランツィーニが結成したエディシオン・スペシアルのファースト・アルバム。彼らはこのほかに「ALIQUANTE (RCA PL 37069) '77年」、「HORIZON DIGITAL (RCA PL 37215) '78年」と2枚のレコードをリリースしているが、これらジャズ・ロック指向の3枚のアルバムの中で本作品は最もロック色の濃いものとなっている。ロランツィーニのギターは多少ハードなものからメロディアスなものまでバラエティに富み、バルスト（彼女のボーカルも良い）のセンスあるキーボード・ワークとともに曲を盛り上げている。また、インストのみの1曲を除きすべての曲においてボーカル又はコーラスが効果的に用いられていることも特筆に値する。このアルバム以後、彼らは更にジャズ色を強めていく。（賀）



ERGO SUM
Mexico

THELEME 6332 500 '72 廃

A : NIGHT ROAD
UNPARALLELED EMBRACE
JOHN'S NIGHTMARE
FACE
SECOND REBIRTH

B : MEXICO
I KNOW YOUR MOTHER
ALBION IMPRESSIONS
LYDIE

エクス・アン・プロヴァンス出身のエルゴ・サムはvo, key & fl, vln & g, b, ds, g から成る6人組である。本作は彼らの唯一のアルバム（他にシングルが2枚ある）で、上記のレギュラー・メンバーに加えて、一部の曲にvo, syn, a-g がゲスト参加している（プロデュースはローラン・ティボール)。リオネル・レディセのロジャー・チャップマンを思わす太く力強いボーカル、リリカルなフルート、クラシカルなバイオリン、ややブルーズィなギター、巧みなバッキングを見せるピアノ等が一体となった演奏は見事に構成されており、高い完成度を誇っている。彼らの強いオリジナリティを感じさせるサウンドは70年代初期のフレンチ・プログレッシヴ・ロックを代表するものとして本国でも極めて高く評価されている。（賀）



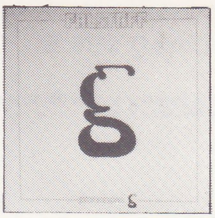
ESKATON
Ardeur

Musique Post-Atomique 1980年
E38001

A: Ardeur
Couvert De Gloire
Attente
Eskaton

B: Un Certain Passage
Pierre Et L'ange
Dagon

エスカトンはローゼンベルク兄弟とアンドレ・ベルナルディを中心としたグループで、今までにアルバム2枚、シングル1枚、テープ1本をリリースしている。マグマの影響を強くうけているが、マグマほど重いリズム・パターンは持っていない。歌詩の内容も重々しいものなのだが、二人の女性がスキャット風にフランス語で歌うためか、軽やかさすら感じる。デビュー・シングルでは生硬さがみられる部分もあったが、このアルバムでは音が厚みを増し、曲の進行もスムーズになっている。B面の曲においてマグマのヤニク・トップ風のベースが聞こえるなどオリジナリティに欠ける部分もあったが、セカンド・アルバムではそうした欠点は改善され、より軽い感じを受ける反面、洗練された内容になっている。（宇）



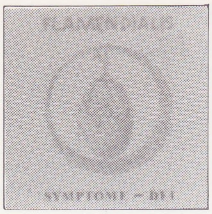
FALSTAFF
Prononcez

1981 001 '81 廃

A:T'AS QU'A VOIR
SUD-SUD-OUEST
LA MARCHE DES GNOMES
KEEP CLEAN

B:PAPAÎGOULOV
KÖSZÖNÖM, VIESSENDRA-TASRA!
FAUX ZERO
PHLOEME

白と黒の如何にも地味なカラーを基調にしたカヴァーワークに包まれた、ファルスタッフ。81年製作の唯一の作品である。全８曲中、B—２と４を除いた、ほとんどがキーボードで恐らくリーダーと思われる StepnaneJoly のペンによるもので、残り２曲はギターの Laurent Labouret の作である。演奏並びテクニックは決して派手ではなく、むしろカヴァーから象徴される穏かな印象そのものが、音に反映されている様だ。回数を繰り重ねて聴いていくうちに、持ち味の良さが徐々に浸透していく、そんな感じを受ける近年のフランスには例を見ない隠れた傑作と言える。何よりもテクニックのみにとらわれず、心の描写にも重点を置いているところがグループの身上。一作のみ残して消えるには、余りにも惜しい存在。〔大〕



FLAMEN DIALIS
Symptome-Dei

FLVM 3006 '79

A : DERNIERE CROISADE
LE SANCTUAIRE D'ARGILE
DEDALE VERT DU RETOUR
ILLUSION

B : MEANDRES ENVOUTES
ECLOSION
LABYRINTHE POURPRE DE LA CONNAISSANCE
ARC EN LUMIERE
RENAISSANCE
LE VILLAGE DU DIMANCHE MATIN
ECLATS

71年にシングル「Have You Ever Cried/Nauthere」をリリースした Yecta Plus Bandの流れを組むフラマン・ディアリ。78年にシングル「Découverte/Autre（FLVM 4504）」でレコード・デビューし、翌年、本ファースト・アルバムを発表した。その内容はオリジナリティ溢れるもので、ほぼ全編に渡って流れるメロトロンを中心に、コーラス、各種パーカッション、シンセサイザー、フルート等が一体となって波がうねるようなサウンドを作り出している。やや実験的で力強い音作りは聴く者に迫力を持って迫ってくる。シンフォニック・ロックとは異なった観点でメロトロンを巧みに利用した意欲作と言える。本作発表後、グループは解散したものと思われる。（賀）



PATRICK GAUTHIER
Bébé Godzilla

CY Records 1981年
CY733612

A: Bébégodzilla
Le Grand Maitre Orient
Mixtur Trautonium
Benoit Et Les Riverboppers

B: Heldon
Riding On White Horses
En Passant Par La Transylvanie
Nör

リシャール・ピナス、クリスティアン・ヴァンデ、キル・リュス、アルド・ロマーノ、ベルナール・パガノッティ、ディディエ・バタール、デビッド・ローズ、フランソワ・オジェ、イブ・ジュリャール、アラン・ジュリャール、ブノワ・ヴィドゥマン、ジャン・フィリップ・グード、ジャン・ピエール・フッキィー、シルヴァン・マルク‥‥驚くべき豪華メンバーであり、この他にもアラン・ルノーなどが参加している、パトリック・ゴーティエのソロ・アルバム。軽やかなジャズ・ロックであり、パトリック・ゴーティエの多彩なキーボード・プレイが聞きものである。ジャケットから受ける印象に反して、非常に透明な音色をしている。ザオに近い部分も多いようだ。B-1の「エルドン」が秀逸である。（宇）



GONG
Flying Teapot

BYG 東宝 1973年
529 027 廃 YX-7024 廃

A: Radio Gnome Invisible
Flying Teapot

B: The Pot Head Pixies
The Octave Doctors & The Crystal Machine
Zero The Hero And The Witch's Spell
Witch's Song
I Am Your Pussy

複雑な人脈、メンバーの変名、一大コンセプト等でマグマと双壁を成したゴングは74年以前のD・アレンズ・ゴングと75年以後のP・ムーランズ・ゴングに大別される。前者はドラッグ体験とアレンのコンセプトに基づく曖昧模糊としたサウンドを後者はテクニカルなジャズ・ロックを特徴とした。この４作目は5th「ANGEL'S EGG」（Virgin V2007）、6th「YOU」（同V2019）に渡って展開されたラジオ・ノーム・インヴィジブルなる物語の第１弾でティム・ブレイクやスティーヴ・ヒレッジ、元マグマのフランシス・モーズ等の加入により独自のスタイルが確立された作品でもある。アレンの持つユーモアと子供達にお伽噺を語る時の様な暖かさは常に感じられ、又それはゴングを理解する鍵でもあるように思われる。（松）

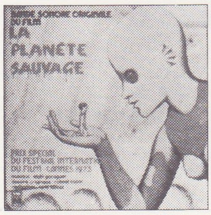


GONG
Est Mort

Tapioca 1977年
TP 10002～3 廃

A: Can't Kill Me/I've Been Stoned Before/Mister Long Shanks/O Mother/Radio Gnome Invisible B: Zero The Hero & The Witch's Spell/Flute Salade/Oily Way/Outer Temple C: Inner Temple (Zero Meets The Octave Doctor)/Iao Chant & Master Builder/Sprinkling Of Clouds D: From The Isle Of Every Where To The End Of The Story Of Zero The Hero/You Never Blow Your Trip For Ever

74年６th「YOU」発表後デヴィッド・アレン、ジリ・スミスの脱退により有名無実となったゴングであるが77年当時、個々独自の活動へと散在していた全盛期のメンバー、前述の両者、ティム・ブレイク、ディディエ・マレーブ、ピエール・ムーラン、マイク・ハウレット等が一時的にパリで行なったギグの、そしてゴング精神を極める「CAMEMBERT ELECTRIQUE」ラジオ・ノーム・インヴィジブル３部作の真の集大成が本作である。同年ヴァージン・レーベルが一方的に発売した「LIVE ETC」に対しアレンが抗議を行なった事は本作製作の要因であろう。ここにはアレンの精神を反映したお祭り要素を感じさせる自由な彼等の姿がある。彼等のライヴを収録したものとしては他に「ELECTRIC SCORE」「GLEASY TRUCKERS」がある。（松）



ALAIN GORAGUER
La Planete Sauvage

Pathe Marconi 1973年
2C 066-12698 廃

A: La Planete Sauvage
B: La Planete Sauvage

「野蛮な惑星」と題されたアニメーション・フィルムのサウンド・トラック・アルバム。このフィルムは10年程前、日本でも公開したとかしないとか——ＳＦ誌にも解説が載っていたようであるが、残念ながらあらすじは不明である。サウンドはテーマとなるべき印象的なフレーズがフルートやピアノ等で変奏されながら淡々と進行するものである。とりとめのない雰囲気が全体を支配している為に多少物足りなさを感じる人もあろうが、ＳＦ的なフィルムのバック・ミュージックとしてはかなりな高水準なものと確信する。時として現れる女性スキャットも魅力的である。基本は同パターンのリズム・セクションで、ドラッグ・ミュージック的な役割りもかね備えている。かくれた名盤といえる。（山）



JEAN-PHILIPPE GOUDE et OLIVIER COLÉ

Jeunes Années

Saravah 1976年
SH-10064 廃

A: Pavane
Piege
Melodie
Sarabande

B: Joli Morceau
Ego Sum Pauper
Chateau En Espagne
Rue Notre Dame De Nazareth 75003 Paris

ジャン・フィリップ・グードの1stアルバムで、パーカッションのオリビエ・コレとのデュオ。kbとpercのデュオというとイタリアのルスティケッリ&ボルディーニを思い出すが、まるで正反対の地味な虚脱した音である。グードのセカンド「ドローンズ」(ラムセス2473-108) 比べると、いささか遜色あるが、処々では同レベルにある。このアルバムが何故「青春時代」と題されているのか説明されてはいないが、今頃になって聞くと、ノスタルジアを感じさせ、ピッタリである。その後のコレの消息は不明。グードは、言うべくもない。純正フレンチ・エレクトリック・ミュージックの名手である。 (中)

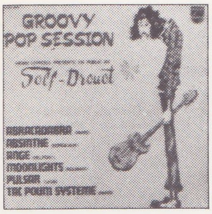


GRIME

Same Title Grime:D 5679 廃

Didier Morando-ds, Per, vo Thierry Duval-p, org, vo Nick Vicente-b, p, vo Didier Duval-g, vo Marc Nion-s, fl, vo

列車のドアを描いたカヴァーが印象的なグリム唯一のアルバムはヒステリックな喚き声で幕が開く。きれいなメロディーラインを柱にした内容ながら技術的には多少粗削りで、たどたどしいコーラスやどこか泥臭いサックスの音色等からは若干不器用との印象さえ受ける。しかし聴き進むに従って、素朴な中にも好感が持てるフレーズが顔を出す様になり、メロディアスな要素を前面に押し出したB面に入ると、澄み切った音色のacギターやフルート、バックに流れるキーボード等が俄然力を発揮し始め、ヴォーカルまでもが妙に説得力あるものに聴こえてくる。全体的に見て、曲により出来、不出来の差があり少々線が細い感じもするが、シンフォニック系の自主制作盤としては標準的なレベルと言える。 〔江〕



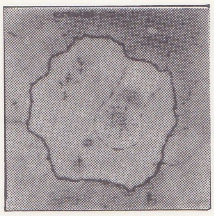
GROOVY POP SESSION

Philips 1972年
6332044 廃

A: Le Vieux De La Montagne (ANGE)
Tiger (ABRACADABRA)
Pulsar (PULSAR)

B: Everybody Need Somebody To Love (TAC POUM SYSTÈME)
Reviens Vers Moi (LES MOONLIGHTS)
Strange Life, Strange Girl (ABSINTHE)

72年にフランスのライヴ・ハウスの老舗「ゴルフ・ドゥルーオ」に各地から新人バンドを集めて行なわれたコンサートのライヴ・アルバムである。B面に収められた3バンドはいずれもオリジナリティに欠けるありきたりのハード・ロック・グループであるが、特筆すべきはA面。シングルを2枚発表した後の、そしてデビュー作「CARICATURE(72年)」発表当時のアンジュや結成2年後、そしてアルバム・デビュー以前のピュルサのライヴを聴くことができる。その演奏は素晴らしい出来となっている。更に、アブラカダブラの「タイガー」、これが名曲である。このグループにオルガニストとして参加しているフランシス・ロックウッドのプレイも興味深い。 (山田 悟)



PHILIPPE GUERRE

Cristal

NP 5258 '79 廃

A: NELLY-RYTHME
MARCHE-BLUES
AQUA-GUITARE
MANEGE
EXPLOSION
INDICATIF
THEME SAUTILLANT

B: PIANO SUR LA MER
TRIEDRE
DANCE DES VERS LUISANTS
TOURBILLON
FINAL MANU

このアルバムはフィリップ・グエルのファースト・アルバムで79年にリリースされたものである。基本的には次作「Concerto～」とのコンポジションに通じるもので、アレンジされたパートとノン・アレンジによる効果音が融合され、稚拙ではあるがロマン的な情感をたたえた、エレクトロニクス・ミュージックである。このアルバムは後(85年)に再録されて、曲順も入れかわり、ジャケット・カヴァーも全く一新してリリースされることになる。すなわち、これは印象が大分かわっており、彼は事実上、3枚のアルバムをリリースしていると解釈しても良いように思う。全ての点で最も進化しているのは再録のほうのクリスタルであるが、不完全でこそあれ、若いひたむきな情熱の感じられるこのアルバムもすて難い。尚、コンサート時にはレーザー等を使用していたようだ。 (山)



DASHIELL HEDAYAT

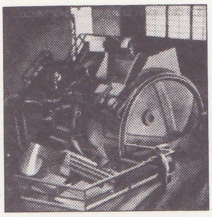
Obsolete

Shandar **RCA** 1971年
SR 10009 廃 **6124 廃**

A: Eh Mushroom, Will You Mush My Room?
Chrysler
Fille de L'ombre
Long Song For Zelda

B: Cielo Drive/17

ダシエル・エダヤは元メルモス「LA DEVANTURE DES LVRESSES」(Arion 30T079, 69年)の人物である。これは彼のソロ作でニーノ・ロータ作曲フェリーニ監督の「魂のジュリエッタ」のサントラを引用したものを含めて69年秋から書かれた曲のバックをゴングのデヴィッド・アレン(g) ディディエ・マレーブ(sax,fl)ピップ・パイル(dr,g)ジリ・スミス(vo) クリスティアン・トリッチ(b,g)サム・ワイアット(vo,ロバート・ワイアットの息子) 小説家ウイリアム・バローズ(vo)が担当したもの。本作はゴングの3-rd「CAMANBERT ELECTRIQUE」(BYG 529 353) を録音する1ヵ月前の71年5月に完成しており演奏もそれに近いものでエダヤの語り、ソロ・ギターと共にエコー・サウンド、スペース・ウィスパーは健在である。 (松)



HELDON

Un Rêve Sans Consequence Speciale

Cobra 1976年
COB 37002 廃

A: Marie Virginie C.
Elephanta

B: MVC II
Toward The Red Line

エルドンの通算5枚目、自らのレーベルDisjuncta Urusを離れCobraレーベルに移籍後の1枚目である。一つの転換期であった前作「AGNETA NILSSON」を経て、彼らの音楽はいよいよパワーと緻密さを増し、もはやフリップ&イーノの模倣の枠を打ち破ったと言える。特に本作以後は、シークエンサーと一体になって独特のリズムを生み出すパーカッショニスト、フランソワ・オジェのメンバー定着が大きい。リーダー、リシャール・ピナスの作品群の中でも、本作と続く6thアルバム「INTERFACE」、そして彼の2ndソロアルバム「CHRONOLYSE」を絶頂期の作品として上げたい。エルドン——リシャール・ピナスの魅力とは、一言で表わすならば〝理知的な暴力性〟とでも呼ぶべきものと考えるが、いかがなものか。 (城)



HERATIUS
Gwendolyne

Frigico Records 1978年
FLVM 3004 廃

A: Tajmahalcoco
Gwendo Blues
Gwendo Electrochoc
Rose Bonbon Est Une "O" En Boite
M... Perkutard

B: Les Palouses (En Allegro)
Le Vieil Hamme et Nephertiti
Intro A Blackcook

1978年8月6日～8日にフリジコ・スタジオで録音された自主制作盤。スタジオ内で試みられた演奏にエフェクト効果、テープ処理を加えて無造作にコラージュ、編集した趣味的な実験作である。使用楽器はギター、パーカッション、ピアノ、オルガン、クラリネット等。けだるいクラリネットの音色やブルースのフレーズ、女性ヴォーカルのシャンソン、フリー・ジャズ調のギター等が次々と飛び出すが、何れもアンダーグラウンドでアンニュイな雰囲気を湛えたものである。メンバーはロベール・ディア、アルマン・ミラール、フロランスから成り、A・ミラールは後にパスカル・コンラードの作品に参加している。奇妙な安っぽさを備えたこの作品はレジデンツ、ファウスト等に捧げられている。（松）



ILITCH
Périodik Mindtrouble

OXYGENE 1970年代末期
OXY 09 廃

A: Sequences (Parts From Inner Film Sequence)
Sequence 1
River Scene Theme Variation
Sequence 3
Sequence 4
Derriere La Fenetre
Matin D'un Blues

B: Periodikmindtrouble
Part 1
Part 2
Part 3

ティーリィ・ミュレとリュット・エリーリから成るイリッチの初作。彼等の音楽はg.keyを多用しつつも様々な音響処理を施し、またそれらをコラージュするなど二次的なものと言える。そして時に過激でいびつな響きは仏実験音楽とオルタナティヴ・サウンドを掛け渡すものでもある。本作はA面のa-gを折り混ぜたgサウンドB面の反復するorgサウンドから成り、それらは共に硬く冷たい音色のものである。以後更に実験色を加味し「10 Suicides」(Scopa SC 325, '80)テープ作品「P.T.M Works」(米Eurock ED 04, '80)を発表するが、何れも難解ではあっても稚拙さは感じられない。2ndに付されたブックレット、そのフォト・モンタージュ、各作品のラベルに至るまで、彼等のトータル・アートの意志がよく伝わっている。（松）



IRIS
Litanie

SONOPRESSE CONNECTION 1972年
CTN 69 561 B 廃

A: Chrysalide
Jus De Citron
Donnez Moi De L'eau
Songe

B: Oracle
Decadence
Ballade Pour Une Minétte Plastique
L'etoile Artificielle
Le Vivre Des Litanies

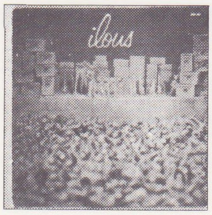
『70年代初期の優れたグループのほとんどは、アンジュ、ポニャンの影響下、または何らかの関係を持っていたが、彼等はそれに属さないにもかかわらず優れた素質と独自性を持っていた』（仏MS誌より）演奏形態はカタルシスをよりロック化して、モナリザをたしたと言うべきもの。バロック調のオルガンは彼等独特のもので、かなりのテクニックを持っている。そしてあくまで優しいヴォーカル。年代から考えるとやはり優れている。本作以外にシングルを発表しているが、アルバムとしては唯一のものと思われる。恐らく数多くのグループに影響を与えたグループであろう。IRIS＝鳶尾、LITANIE＝連禱。（山田　悟）



HONEYELK
Stoyz vi Dozeveloy

oxygene oxyo 47 '79 廃

フレンチジャズロックと言うと日本では敬遠されがちであるが、ここに紹介するHoneyelk は、軟弱ジャクロックとは一線を画す、ハイテクニックなグループである。しかしながら、テクニック志向だけに走ることはなく、Carp Diem を思わせるサックスをフィーチャーした叙情的なヴォーカルパートの占める比重も大きい。一部でMagma クローンなどと言った無責任な紹介をされているが、Magma 的な要素はほとんど感じられない。全体的に地味なアルバムだが、繊細で、それでいてしっかりとしたテクニックに支えられた好作品に仕上がっている。唯一欠点があるとすれば、それは収録時間が短いこと位いであろう。〔洋〕



ILOUS
Ilous

Flamophone 1974年
2933-101 廃

A: Pêle-Mêle
Au Pays Des Cigales
La Route à L'envers
Chanson Chagrin
Les Yeux Fermés

B: Les Yeux Ouverts
Rondeau
Cantique
Obsession

ベルナール・イルーのセンスを前面に押し出した、光輝やくポップ・アルバムである。同じフラモフォンという事もあって、バックにはシステム・クラプティクのメンバーが参加しており、他にもベルナール・リュバ、パトリック・ゴーティエ、ジャン・ルー・ブソン達が注目をひく。ビートルズ・エイジという印象が強い音作りであるが、レーベルのオーナーでもあるクロード・ピュテルフラムの方針が貫かれているようである。勿論、フランス的で明るいポップ・チューンはイルーの才能を示すものである。このアルバムは、イルー、ピュテルフラム、そして時代の要求、の3要素がうまくマッチした作品であろう。72年に、ギタリストのパトリス・デキュペルと組んだ双頭アルバム（フラモフォンFLAM-33.03）、を発表。（中）



GILLES JANEYRAND
Gilles Janeyrand

Heloïse Disques
HEL 67111 廃

A: Mona Lisa
L'aveugle
Midi
Le Fou
Le Ballon Blanc

B: Mandolines
Ville
Les Martiens
Hop La!
La Fleur Magique

今回のカタログではシャンソン畑のアーティストは極めてロックよりのものばかりだが、このジル・ジャネランのアルバムは純粋のシャンソンとしての評価を下すのが正しいように想う。ここには人生がある、喜びがあり、悲しみがある。ただし彼の視点はそんな世界の外側にある。ちょうど僕の愛するイタリアのカンタウトーレ、マウロ・ペロシがそうであるように。僕には残念ながら彼の事は何もわからない。ブラッセルの古いレコード店で見つけたレコードである。バックに流れる多彩なキーボードが彼の音世界を形成するのにとてもよい効果をあげている。それはこのアルバムのコンポーザーであるドミニク・プリエールに依るところが大きいようだ。彼は全てのキーボードを弾いている。（山）

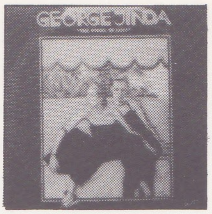


JEAN MICHEL JARRE
Oxygene

Polydor　ポリドール　MPF-1098　1976年

A: Oxygene part Ⅰ～Ⅲ　B: Oxygene Ⅳ～Ⅵ

フランスで数多くの映画音楽を手掛けてきたモーリス・ジャールの息子として脚光を浴びながらデビューした彼は、当初は作詩家として活動していた。クリストフ、フランソワーズ・アルディの詩を手掛け、CMの仕事を経て本作でデビューしたが、なぜか本国でも日本でもオーディオ・マニアに支持され、オーディオ雑誌で様々な賞を獲得している。事実、スーパーツィーターを装備したスピーカーでは音がまるで違って聞こえる。ちなみにフランスではヒットチャートの1位になった事もある。フランスのシンセサイザー・ミュージックというと他にはエッグ・レーベルあたりを想い出すが、彼らほど個性はなく、むしろ日本でいうトミタや喜多郎の様な割とイージーリスニングに近い音だが近作の中国でのライヴ盤は聞きもの。（い）



GEORGE JINDA
The Wheel Of Love

MOTONS MT 44051 '76 廃

A: AMERICAN VOGUE / FUNKY DADDY / THE WHEEL OF LOVE / GOOD BYE LOUIS / DIVIDING
B: NOSTARGIA / FUNKY SIDE OF THE STRUT / ABSOLUTION / OPEN BRIDGE / DEAD PAN / AMERICAN VOGUE N°2

スピード・リミットのリーダーとして知られるジョルジュ・ジンダ(ds)の唯一のソロ名義作品。ジャン・ルイ・ビュッシ(key)、ヨッコ・ジェフ・セファー(sax, fl)、ディディエ・バタール(b)らが参加しており、実質的にはスピード・リミットの3rdとも言えるものである。グループとしての2枚の作品よりもロック色が濃く、より高い完成度を誇っている。ジンダのクリスチャン・ヴァンデルを彷彿させるドラムス、ビュッシのメロディアスで歌心あるエレクトリック・ピアノ、セファーの変幻自在なサックスと他の作品ではあまり聴くことのできないリリカルなフルート等が中心となって迫力に富んだ演奏を展開している。作品自体の知名度は低いものの実力派ミュージシャンによって作られたジャズ・ロックの名作である。(賀)

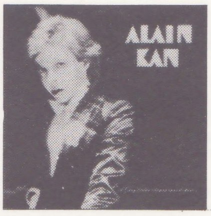


ARIEL KALMA & RICHARD TINTI
Osmose

SFP　35021-5022　廃　1980年

RECORD A
A: Saxo Planetariel/Message 18.10.77/Planet-Air
B: Forest' Ballad/Manège/Gongmo
RECORD R
A: 20 Pluie/6 And C'/4 An Afternoon
B: Pagi/Sore

アリエル・カルマはソノシート1枚、テープ2本、レコード3枚をリリースしているキーボード・プレーヤーである。彼はエルドンのアルバムやデライアード・カメレオン・ファミリーのアルバムにも参加している。このアルバムは、リシャール・タンティとの共作であり、ボルネオのジャングルでの自然音の生録り（雨や風の音、鳥や虫の声）を中心にした、タンティの作品(Record R)と、自然音とキーボードをはじめとしたエレクトリックな楽器音とをコラージュし、ミックスしてつくりあげたカルマの作品(Record A)のダブル・アルバムである。両作品とも非常に長い録音時間になっている。クールなキーボード・プレイと安らかでもあり時には活気にあふれた自然音の配合が巧みなアルバムである。（宇）



ALAIN KAN
Alain Kan

Motors　MT 44026　廃

A: Blaky / Une Espece De Lolita ....Toute Verte / Le Premier Bebe De Lady Star Lune / Cafe-Cafard / Pas Si Facile
B: Hollywood Suicide / Nadine, Jimmy Et Moi / Go Go Dancer / Falling In Love Again

アラン・カンのファースト・アルバム。彼はフレンチ・デカダン・ロックの雄として紹介されることが多く、そのため、きわ物的存在と思われている節が多少なりともあるが、実際はかなりの実力を持ったシンガーである。その声には独特の艶があり、本作品では激しくシャウトする唄い方から甘くささやくような唄い方まで変化に富んだ歌唱を見せる。バックの演奏も見事に彼の唄を盛り上げている。また、B-1の軽快なリズムを基礎に甘美なシンセサイザーとメロディアスなフルート、ギターが絡み合うインスト部分の出来は白眉である。更に、センスの良いジャケット・デザインも特筆に値する。次作(Motor MT 44036)も本アルバムと同系統の作品であるが、それ以後の作品はポップ色が強まっている。（賀）

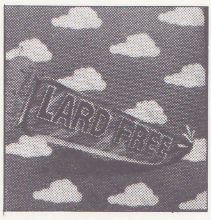


KOMINTERN
Le Bal Du Rat Mort

Harvest Pathe　2C 062 11774　廃　1971年

A: Bal Pour Un Rat Vivant / Bandiera Rossa / Los Cuatros Generales / Elle État Belle～Elle Aimait～Bach Et Chopin～Et, Les Beatles～Elle Était Très Intelligente～Et Moi Aussi
B: Le Bal Du Rat Mort / Hommage Au Maire De Tours / Petite Musique Pour Un Blockhaus / Pongistes De Tous Les Pays..... / Fou, Roi, Pantin

コミンテルンはフレンチ・ロック黎明期を代表するグループの一つである。彼らの作り出すサウンドは一聴したところコミカルな印象を与えるが、その実、ウィットに富んだ奥深いものである。中でもバイオリンやサックスを中心にしたノスタルジックな部分は特筆に値する素晴らしい出来と言える。また、アール・ゾワイやユニベル・ゼロ、更にはZ.N.R.に通じる曲展開も見られ、彼らの蒔いた種は70年代後半見事に花開いたことになる。コミンテルンはこのアルバム1枚をリリースして解散、バイオリニストのリシャール・オベールはアトールのセカンド・アルバム「L'ARAIGNÉE-MAL」に参加し、オリビエ・ズドルザリクも「LE JARDINIER DU COUVENT」以降のマリコルヌのアルバムでベースを担当している。（賀）

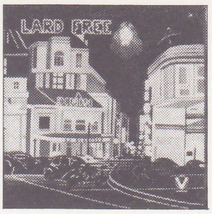


LARD FREE
Gilbert Artman's Lard Free

Vamp　VP 59 500　廃　1973年

A: Warinobaril / 12 Ou 13 Juillet Que Je Sais D'elle / Honfleur Écarlate
B: Acide Framboise / Livarot Respination / Culturez-Vous Vous Même

ラード・フリーはジルベール・アルトマン(dr, p, vibe)のコンセプトに基づくプロジェクトでこの初作の他2nd、重く沈んだインダストリアルな響きを持つ3rd「LARD FREE」(Cobra COB 37007 '77年)を発表した。メンバー重複がなく楽器編成が一定していた彼等のこれはエルベ・エイーアニ(b, syn)フィリップ・ボルリ(sax)、フランソワ・マティーヴ(g)によるもので1作ごとに過激さを増したそのサウンドの原型を収録している。彼等の頂点というべき3rdの解け合った音色からすれば曲の傾向が分散しており、それはジャズ色の濃いサックスやギター、ややブルース調のベース、初期エルドンに近い無機質なシンセサイザー等から成っている。活動終止後、アルトマンは次なるプロジェクト、アーバン・サックスを開始する。（松）



LARD FREE
I'm Around About Midnight

Vamp 1975年
VP 595202 廃

A: Violez L'espace De Son Refrigerant
In A Desert Alambic
Does East Bakestan Belong To Itself

B: Tatkooz A Roulette
Pale Violence Under A Reverbere
Even Silence Stops When Trains Come

ラード・フリーは、ジルベール・アルトマンを中心としたグループで、このアルバムは彼らのセカンドである。メンバーは、ジルベール・アルトマン、リシャール・ピナス、アラン・オーダ、アントワーヌ・デュヴェルノー、ジレ・イープルマン、アラン・アルマン、である。彼らは他にヴァンプ・レーベルから1枚、コブラ・レーベルから1枚、レコードをリリースしている。75年に発表された本アルバムは、音的には初期エルドンなどにも通じる、エレクトロニックでアヴァンギャルドな作風である。ジルベール・アルトマンのサックスは電気的に処理されて、特異なインプロヴィゼーションをくりひろげ、リシャール・ピナスの、ロバート・フリップ的なギター・プレイがこれにからみついていく。(宇)



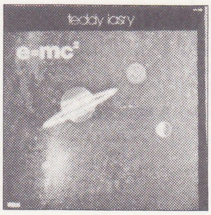
LA ROSSA
A Fury Of Glass

AG RECORDS AG 1013 廃

A:SYNOPSIS
WOODEN MONOLOGUE
LIGHT OF GONE
FACES WE MOVE

B:GLASSLEAVES
CHIMERA CHILL
TO THE LIFE
COSY CHUTE
THIS IS TO END IT ALL

VDGGの名作「Still Life」に収録されていた曲から名前を取ったラ・ロッサのデビュー作。詞と曲を手掛けるKeyとVoを核に、BとDs、2人のGを含めた6人編成で、フランス臭さを剝き出しにした叙情性豊かなアコースティックなナンバーと、ストレートかつヘヴィなナンバーの二つのパターンが程良く溶け合って、本アルバムを構成している。P、ハミルにも通じる内に秘めた激しい情熱と感傷的な心裏の高揚を感じさせるヴォーカル、端正でリリカルと強力さが同居した、詩的なピアノやアコースティックギターの調べは、単にシンフォニックなだけでは飽き足らなくなったマニアにとって、心地良い刺激剤となるであろう。VDGGの持っていた前衛的精神を継承した非シンフォニック系の申し子と言えよう。〔大〕



TEDDY LASRY
e=mc²

RCA **FPL 10148 廃**
RCA **RVP 6320 廃** 1976年

A: Life
Quaser
Earth
Nebula

B: Birth Of Galaxy
Birds Of Space
Nonsence
Life

テディ・ラスリーはマグマに在籍したことのあるミュージシャンであり、このアルバムの次に発表された「Seven Stones」(邦題『石晶幻想』)(RCA PL 37257)を御存知の方も多いであろう。その他にも自主制作盤「Tutti Frutti」(砂糖菓子の名)を発表している。本作はベースにヤニク・トップ、ドラムにアンドレ・スカレリをむかえている他は、全ての楽器を彼が演奏している。スペイシーなキーボード・プレイが虚空にしみわたるように広がっていき、フルートの旋律が小鳥のように飛びかう様は秀逸である。単調なシンセ・ミュージックにおちいらずに、フレンチ・ジャズのエッセンスと、エスプリのきいた暖かみのある名作である。なお、日本盤は発売直前で回収され、市場には少数しか出ていない。(宇)



TEDDY LASRY
Power

SONIMAGE SI829 '82 廃

A: POWER
EXTRACTION
COURSE
PULSATION
SUSPENSE
DANCE

B: OPUS 12
SPACE
RAGTIME
SUITE FOR CANON
GRAND HOTEL
SALSA

RCAレーベルからの2枚の公式レコード以外にも放送局用等、数多くの特殊レコードを作成しているテディ・ラスリー。しかし、それらの大部分は、その性格上、我々の興味を引くサウンドを有しているとは言い難い。こうした中で、本アルバム(ソニマージュ・レーベルには本作以外にも、「Action Printing 〈Sonimage SI 820〉'75」「La Femme Qui Venait D'Ailleurs〈同 SI 823〉'77」「Interpol〈同 SI 825〉'79」の3枚のアルバムがある)はそうした本来の目的を離れて、一枚のアルバムとして充実した作品と言える。各種キーボードとパーカッションを用いて1人で作り上げた12曲の中にはポップな作品もあるが、「e=mc²」を思わすドラマチックな曲、多重録音を効果的に利用したメロディアスな曲等は印象的である。(賀)



DIDIER LOCKWOOD
Jazz-Rock

Music Zag 1976年
773.001 廃

A: Tomorrow
Astral Trip
Elbow
What's The Matter

B: Volkor
Yellow Faces
Green
Naita

バニー・ブルネル(b)、パトリック・ゴーティエ(kb)、キル・リュス(ds)の3人に、ロックウッド・ブラザーズを加えた5人で吹き込まれたアルバム。76年の録音。ミュージック・ザグ、という新興レーベルの第一弾として発表されたが、レーベルはほどなく消滅した模様。実際のところ、このアルバムだけでは、録音データー、パーソネル等のクレジットがないために詳細は不明であった。しかし、近年、アメリカ・レーベルより「Lockwoods!」として再発された(AM-6162)事により メンバーが判明した。ゴーティエの作曲した1曲は一風変わっているが、他の曲は、いわゆるジャズ・ロックであり、D・ロックウッドのヴァイオリンも、まだまだソリッドであるようだ。(中)



MAAJUN
Vivre La Mort Du Vieux Monde

Vogue Collection
Loisirs SLVLX 545 廃

A: Avertissement
Houba
Passage Cloute
L'orgasme
Le Crepuscule Des Alchimistes

B: Choeur Du Peuple Las
Comptine I
La Longue Marche
Comptine II
La Chanson Du Boulot
Vivre La Mort Du Vieux Monde
Coda

マージャンのファースト・アルバム。このアルバムのみグループ名がM-AAJUNとつづられている。ジャン=ルイ・ルフェーヴル、ロジェ・スカグリ、アラン・ロー、シリル・ルフェーヴル、ジャン=ピエール・アルノーの5人が作り出すサウンドは正に彼ら独自のものである。東洋志向の呪術的雰囲気を持った曲、フルートとボーカルを主体にした叙情性溢れる曲、サイケデリック・サウンドの影響を感じさせる曲、単純なリズムとフリーキーなサックスをバックにトーキング・ボーカルが延々と続く曲等、アルバムとしての整合性に欠けることも事実であるが、個々の曲はいずれも捻りの利いた彼らのオリジナリティを強く感じさせる内容となっている。(賀)



MA BANLIEUE FLASQUE
Ma Banlieue Flasque

Celluloïd 1979年
LTM 1021 廃

A: 13'20 D'Happiness
N.S.K.

B: H.B.H.V.
Aller Retour Les Grésillons
Un Soir

マ・バンリュウ・フラスクはフィリップ・ボッタ(sax)を中心とした5人組のフリーキーなジャズ・ロック・グループで、音的には、フランク・ザッパや初期のゴングに近いものを持っている。アルバムはこの他には見つかっておらず、メンバーも無名の者ばかりである。サウンドの中心は、フィリップ・ボッタのフリーキーなサックスとチョボのけたたましく気狂いじみたヴォーカルにある。しかし、それを支えているダブル・リード・ギターとバッキング・ヴォーカル、そしてパーカッションも非常にセンスのあるプレイをしている。随所に用いられる効果音もドラマチックでシアトリカルである。特にA－1からA－2までの展開は聞く者の想像を絶しており、このアルバムのハイライトである。 (宇)



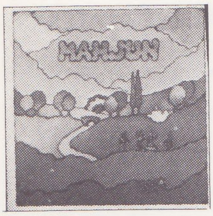
MADRIGAL
School Of Time

MAD 001 '77 廃

A:The Seeker
"Mad"
King's Dynasty
Across The Past
The Old Clock

B:School Of Time
The Ghost
Dear Mister Fantasy

オリジナリティこそあまり感じられないものの Madrigal も平均以上の内容を持ったアルバムを1枚残している。全員がそれぞれリード・ヴォーカルが取れるということもあり、歌が中心となっている（歌詩は英語である。）。アルバム・タイトルから推測できる通り、かなりポップ性が強く、演奏で押しまくるタイプではない。それでも、演奏自体はしっかりしており、フランスの音楽層の深さに感心させられる。クィーンの「キラー・クィーン」風のメロディに乗せて10CC並の美しいコーラスが聴けるA③、泣きのメロディを奏でるキーボードがその手のファンを喜ばすだろうA④、珍しくもチェロの美しいイントロで始まるB②（後半10CC風になってしまうが、）こんな具合にブリティッシュ・ロックの影響が時にはプラスへ、時にはマイナスへと作用している。 〔吉〕



MAHJUN
Mahjun

Saravah
SH 10040 廃

A: Le Jus De La Figue
Les Enfants Sauvages
Family Valse
Shaviravi
La Deniche

B: Chez Planos
La Fanfare A Rigaud

マージャンのセカンド・アルバム。このアルバムからつづりがMAHJUNに変わる。ジャン＝ルイ・ルフェーヴル(vln,fl,g,vo)、ジャン＝ピエール・アルヌー(ds,per)以外はメンバーが一新されており、新たに女性サックス奏者ピエール・リゴー、フィリップ・ボポワ(b,p,per)が参加している。サックスとバイオリンを中心にしたジャズィな演奏が繰り広げられるなか、通常のジャズ・ロックとは異なった彼ら独自の曲展開を見せる。テクニックの面では問題を抱えているものの魅力的な内容を持った作品と言える。以後、「MAHJUN(Saravah SH 10047)」「HAPPY FRENCH BAND(Gratte Ciel Z L 37049)」「UN HOMME SUR DEUX(CBS 85655)」と3枚のアルバムをリリース、次第にポップ色を強めていく。 (賀)



MAGMA
Köhntarkösz

Vertigo 1974年
6325 750 廃

A: Köhntarkösz part one
ORK Alarm

B: Körntarkösz part two
Coltrane Sündia

彼らの4枚目は前作と同じくジョルジュ・ゴメルスキーのプロデュースのもとにA＆Mから発表された。メンバーも半分が替わり、英ジャズ・ロック界で活躍していたブライアン・ゴディングも加わっている。メインとなるタイトル曲の出来は相当のものだが次作のライヴに収められている方が数段パワーに満ちている。ディディエ・ロックウッドのバイオリンがこの作品のカオスに満ちたエナジー全てを上回っているからだろう。他の2曲の内1曲はヤニック・トップ作でもう1曲がヴァンデの「コルトレーン讃歌」でむしろこの2つの重量感の方がダイレクトに伝わってくる。この後、ゴメルスキーの作ったユートピア・レーベルに移るがA＆Mでの2枚とユートピア時代の2枚はまさにマグマの絶頂期といえる。 (い)



MAGMA
Live

Utopia 1975年
CYL2-1245 廃

A: Köhntark(part 1)
C: Kobah
Lïhns
Hhaï

B: Köhntark(part 2)
D: Mëkanïk Zaïn

75年6月1日～5日、パリ、オランピア劇場での実況録音盤。5作目。本作以外のライヴ盤「INEDITS」「RETROSPECTIVE Vol.1～2」「同Vol.3」を含めた全作品の中でも傑出した作品である。プロデュースはジョルジオ・ゴメルスキー、クレジットメンバー8名中には新加入のベルナール・パガノッティ(b)の他、ヴァイオリンでディディエ・ロックウッドが名を連ねている。選曲は3rd「MEKANÏK DESTRUKTÏW KOMMANDÖH」4th「KÖHNTARKÖSZ」を中心に成されているが個性表出のための卓越した技術の一体化により緻密なアンサンブルを遙かに緊張感のあるものとしている。クリスティアン・ヴァンデの率いる研ぎ澄まされた感性の残したこの強烈なインパクトは音を手段とする芸術家の一つの理想像を実証したものである。 (松)



MAGMA
Attahk

Eurodisc 1978年
913 213 廃

A: The Last Seven Minutes
Spiritual
Rind ë
Lirïïk Necronomicus Kanht

B: Maahnt
Dondaï
Nono

本作は前作7th「INEDITS」が編集ライヴ盤であったことから新作としては2年ぶりのものでクリスティアン・ヴァンデズ・マグマとして発表された。裏ジャケットの頭部レントゲン写真とコバイヤ名から判断するとクロー・ブラスキ、ステラ・ヴァンデ、ベルナール・パガノッティ、ブノワ・ウィドゥマンは明白だが他の3名は不明であり、その中のベーシストがヤニック・トップであるという判断も推測の域を出ない。サウンドは基本的に不変でリズム・セクションの切れの良さ、ピアノの多用、ファンキー色を加味したコバイヤ・コーラスは本作の特徴である。中でもC・ヴァンデのドラムとブラスキのヴォーカルが冴えを見せる。プロデュースとエンジニアにローラン・ティボール。ジャケットはギーガーによるもの。 (松)



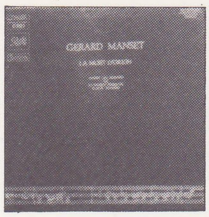
MALICORNE

L'extraordinaire Jour De France D'adélard Rousseau, Dit Nivernais La Clef Des Coeurs, Compagnon Charpentier Du Devoir

Ballon Noir 1978年
BAL 13006 廃

A: La Conduite/La Dance Des Damnés/Le Mari Jaloux/La Valse Druze/Si L'amour Prenait Racine/Une Fille Dans Le Désespoir/Les Couleurs
B: A Paris La Grande Ville/Compagnons Qui Roulez En Provence/La Complainte Du Coureur De Bois/L'auberge Sanglante/Le Départ Des Compagnons-La Conduite

マリコルヌはガブリエルとマリーのヤクブ夫妻に、ユーグ・ドゥ・クールソン、ローラン・ヴェルカンブル、オリヴィエ・ズドルザリク等から成るエレクトリック・トラッド・グループである。フランスの古謡を現代的なアレンジで演奏すること、新しいトラディショナル・ミュージックを創造すること、がこのグループの目標である。アルバムはエクサゴンから5枚、バロン・ノワールから3枚、エレクトラから1枚出ている。バロン・ノワール盤は現在はエレクトラから再発されている。このアルバムはバロン・ノワールに移籍後の初アルバムで通算6枚目に当たる。アデラール・ルソーという架空の人物を創造し、彼のフランス遍歴を題材にしてフランス各地の風物をとり入れた歌物語という形式でアルバム化している。(宇)



GÉRARD MANSET

La Mort D'Orion

EMI C064-15628 '70 廃

A: LA MORT D'ORION
INTRODUCTION
LA MORT D'ORION
OU L'HORIZON PREND FIN
SALOMON L'HERMITE
FINAL

B: VIVENT LES HOMMES
ENCHOINEMENT
ILS
PARADIS TERRESTRE
ELEGIE FUNEBUE

20年近いキャリアを誇り、今なお活躍を続けるジェラール・マンス。メロディアスなオーケストラとボーカルを中心とした現在の彼のサウンドは完成度の高いアダルト感覚のポップスであるが、70年代初期の彼は正にフレンチ・ロック界の寵児であった。本2ndは彼の10枚を越えるアルバムの中でも最もクリエイティヴな作品であり、フレンチ・プログレッシヴ・ロックの黎明期を代表する1枚でもある。作詩、作曲、オーケストレイションを全てマンスが担当し、ダイナミックで迫力に富んだ音作りがされている。弦楽器、フルート、チェンバロ等に女性ボーカルが絡む展開は一瞬オパス・アヴァントラを彷彿させる。また、クラシカルかつリリカルなオーケストラをバックに切々と歌い上げる男性ボーカルも印象的である。(賀)



MARTIN CIRCUS

En Direct Du Rock'n Roll Circus

Vogue Popmusic **東宝 Vogue** 1969年
SLVLX 428 廃 **VPL 3007** 廃

A: La 3ème
Moi J'ai Fait La Guerre
Tout Tremblant De Fievre
Tomahawk
Barbe-Bleue
Moi Je Lis Les Bandes Dessinees

B: Le Matin Des Magiciens
C'est Pas D'la Soupe
Troika
A Quoi Sert Ma Priere?
Nos Larmes Tombaient
La 3ème

このレコードは仏ロックを語る上でとても重要なものだ。デビュー・アルバムにも拘わらず、卓越した才能をフルに活かしており、充分な実力を見せつけている。特に「人生は夢だ」は仏ロック独特の美しい翳りのある代表的な曲ではないだろうか？　そして「スープじゃないよ」はフランスの大道芸的なものを感じる事ができる曲。この様に仏ロックシーンに欠かす事のできない要素を全て持ち合わせた最もフランスらしさを感じさせるアルバムの1枚ではないだろうか？　このアルバム発表ののちに、大幅なメンバー・チェンジがあり、アラン・ジャック・シヴィリザシオン(BYG)、バルタザール(Vogue)のメンバーを加えた。マルタン・サーカスは、エマニュエル・ブーズと共演した事もある。(山田美雪)



MELMOTH

La Devanture Des Ivresses

Arion 1969年
3OTO 79 廃

A: Le Voyage D'hiver
Vous Direz Que Je Suis Tombé
La Mort Multicolore

B: Papier À Fleurs
Le Blues Interminable De La Préposée Au Chalet D'aisance
Bureau D'emigration
Mary-Flord Bell
Le Voyage D'hiver

69年にクラシック畑のフランスの名門、アリオン・レーベルよりリリースされたメルモスの1 stアルバム。メルモスとは後にゴングとの共作をシャンダール・レーベルよりリリースするダシェル・エダヤその人のことで、彼は70年頃には雑誌ROCK & FOLKに現代音楽関係のレビュウを寄稿するなどはば広い活動を行っていた。このアルバムに聴くことのできるサウンドは当時、ソフト・マシーンやゴング達が行っていた方法論によって創られ、すなわち現代音楽、フリーミュージック等の斬新な音楽性を取り入れ、ロック・フィールドの中で開花させるといったもので、69年のフランスということを考えるととてつもない高水準のアルバムといえる。バックはリシャール・ロー(Sax)を含む4人のミュージシャン達が起用されている。(山)



MÉMORIANCE

Et Après...

Eurodisc 1976年
913 084 廃

A: Je Ne Sais Plus
La Grande Mémoriance

B: Et Après...
Tracsir

アトールと同じアラベラ・プロダクション出身のメモリアンス、Golf Drouot クラブでのLe Tremplin D'Or（金の踏切板）受賞をひっさげてのデビュー作である。彼らのサウンドは典型的なフレンチ・シンフォニック・ロックで、アトール、パンタクルといった良き先人達に影響を受けている。特にメロディックな曲創りが魅力である。しかし類型的過ぎる点と演奏技術の不足のためか、その先人達のレベルに達し得ていないのもまた事実であった。が、それらの欠点も次なる2nd「L'ÉCUME DES JOURS」では大幅に修正されていた。完成度という点では明らかに2ndに軍配が上がるが、しかしそれでもフランス臭さむき出しのこの1 stも捨て難い。どちらをより魅力的に感ずるかは論の分かれる所であろう。(城)



METABOLISME

Tempus Fugit

CRIPTO ZAL 6413 '77 廃

A: Apôtres et Martyrs
Tempus

B: Khoros
Nadia
La Danse des Automates

フレンチシンフォニック隆盛期の1977年、Metabolismeは本アルバムでクリプトレーベルよりデビューした。フランス語によるロックをポリシーとしていたクリプトらしい、いかにもフランス然とした味わいのあるアルバムである。同レーベルのMona Lisaと比べると、決定的なヴォーカリストが居ないことや、幾分音がシンプルなこともあって、地味な印象を受けてしまうが、ピアノを中心としたキーボードプレイや、語りかけるヴォーカルには、捨てがたい魅力があるのである。最近のフレンチシンフォニックの多くが、英語で歌う傾向にあるが、どうもしっくりこないものが多い。やはりフレンチシンフォニックにはフランス語が一番なのだ!!このアルバムを聴くと、思わずそう思ってしまうのである。〔洋〕



MONA LISA
Avant Quil Ne Soit Trop Tard

Crypto **1978年**
ZAL 6440 廃

A: Avant Quil Ne Soit Trop Tard
La Peste
Souvinirs De Naufrageurs

B: Tripot
Lena
Creature Sur La Steppe

モナリザは72年に結成された。中心人物はフランシス・プーレ(dr)とジャン・ポール・ピールソン(key)である。彼らはマルチ・メディア・グループと呼ばれていた。それは、ドミニク・ルグネのシアトリカルなヴォーカルを中心として、ライト・ショーや大道具・小道具をうまく用いた彼らのステージが、ジェネシスの強い影響を受けていたことによる。アルカン時代のアルバムはトータルな印象に欠ける点があったが、メンバーチェンジを経た後のサード・アルバムと本作(フォース・アルバム)では、アルバム全体を一つのコンセプトで統一して、トータルな印象を与えることに成功している。しかし、ドミニクが脱退した後のアルバムでは再び、全体としては散漫な印象を与えるものになってしまった。 (宇)



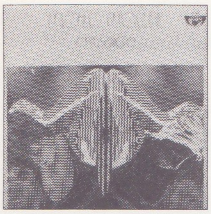
MORMOS
The Magic Spell Of Mother's Wrath

CBS 64979 '72 廃

A: HOMESIDE
WALK IN THE LIGHT OF THE LORD
OCTOBERSONG
PLASTERED IN PARIS
DOVES ARE WHITE
COWS IN MY COLORBOOK

B: HUSH (FOR LYNN'S PICTURE)
NO. 5 IN THE BOOK
RIT YELLOW
LADY OF NIGHT

「Great Wall Of China (CBS S 64430) '71」に続くモルモスの2ndアルバム。前作発表後、多少のメンバー・チェンジがあり、グループはボーカル、フルート、ギター、ウッドウインド、チェロをメインとする5人プラス作詩担当の6人編成となっている。そのサウンドは1stの延長線上にあり、極めて完成度の高いプログレッシヴ・フォーク・ロックに仕上がっている。各メンバーのプレイヤーとしての技量は素晴らしく音楽的教養の深さを感じさせる。メンバーは全員アメリカ人とのことであるが、作品から受ける印象は正にヨーロッパである。ヨーロッパ各国のファンの間ではメロウ・キャンドル、チュダー・ロッジ、スパイロジャイラ等と並んで最も高く評価されているフォーク・ロック・グループの一つである。 (賀)



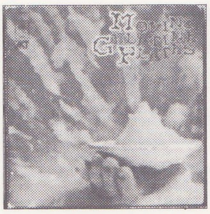
MICHEL MOULINIE
Chrysalide

Crypto
ZAL-6441 廃

A: Le Ballet Des Mouches
Les Cordes De La Mer
L'écho De L'acier

B: Le Philtre D'Echordus
Lente Course

ミシェル・ムリーニのおそらく1枚だけであろうと思われるアルバム、「クリザリド」は全編、彼のソロ・ワークである。ギター、ベース、ヴァイオリン、シンセサイザーをたくみにこなす彼のセンスは、例えば、チューブラー・ベルズ期のマイク・オールドフィールドに近い音だ。アコースティック・ギターの心休まる音色、流れをつくるエレクトリック・ギター。ドイツのポポル・ブフあたりが好きな人には好まれるかも知れないが、あくまでフランスの音である。アンジュのフランシス・デカンのプロデュースによって作られており、派手さはないが、いぶし銀のような名作である。なお、フランシスのソロ・アルバム「イストワール・ド・フー(フィリップス9101-212)」にも参加している。 (中)



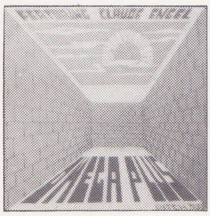
MOVING GELATINE PLATES
Moving Gelatine Plates

CBS
64399 廃

A: London Cab
X-25
Gelatine

B: Last Song
Memories

71年に「The World Of Genius Hans (CBS 64146)」を発表したM.G.P.の同名アルバム。2ndアルバムと思われる。ユーモラスなジャズ・ロックとでも言うべきサウンドである。3,4,5あたりのソフト・マシーンをフランス風味で演っている、という印象を受ける。ジェラール・ベルトラム(g.vo)、モーリス・アルマンジュ(kb,fl,sax)、ディディエ・ティボー(b,vo)、ジェラール・ポン(ds)の4人である。「天才〜」の方には、トロンボーン、バスーン、ヴァイブ等が加えられている。ジャズのサックスとドラムに、ロックのギターとベースを足した音楽性は、ともするとフュージョンになりがちだが、リズムの詰めの甘さがこのバンドをフランス風ジャズ・ロックに押えている。 (中)



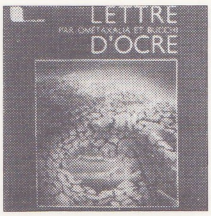
OMEGA PLUS
How To Kiss The Sky

PITCH 3001 '69 廃

A: UNFAITHFUL WOMAN
SPANISH FEELING
WILD CULT
WHICH COLOUR?
DO YOU NEED SUGAR?

B: VOYELLES

オメガ・プラスはマグマの初代ギターリストとして知られるクロード・アンジェル(g,vo,fl,s-recorder,t-recorder)がGerard Levy(b)、Marcel Engel(ds,vo)と結成していたトリオである。A面にはクロードのブルーズィで乗りの良いギターとボーカルを中心にしたクリームの影響下にある作品、フルート、アコースティック・ギターをバックにクロードが感情を込めて歌い上げる叙情的な作品、リコーダーによるユーモラスな小作品等が収められている。一方、B面は16分を越える大作で、キング・クリムゾン、アモン・デュール、ファウスト、ジミ・ヘンドリックスを融合させたかのような斬新かつ力強い演奏が展開されている。60年代のフレンチ・ロック・シーンが生んだ最もクリエイティヴな作品の1つと言える。 (賀)



PAR OMÉTAXALIA ET BUCCHI
Lettre D'ocre

Uniteledis Uni
19.776 廃

A: Prélude
Musique Ocre
Ulma
Suba

B: Nuit
J'attends
Axalia

C: Aube 1
Interlude

D: Aube 2

ヴォーカリスト、オメタクサリアの事実上の1stアルバム。フレンチ・ロック界では優能なセッションマンとして知られるジャン・ルイ・ビュッシとの共作という形式をとっている。ここでのビュッシはジャズ的要素は余り感じられなく、クラシカルなピアノを全編弾きまくっており、時として印象派からの影響のあるみずみずしさを感じさせてくれる。一方オメタクサリアのほうも重みのある素晴らしい歌を披露してくれていて、2枚組という大作を中だるみなしに歌い切っている。バックを彩るアーティスト達も緊張感のある見事な演奏である。尚、オメタクサリアは79年に2nd「ANTILOPE 1」をやはりビュッシの協力の基に創るが、弱冠パワーは落ちてしまったのが残念である。 (山)



OPALE
La Dernière Toile Du Maître

Podom:POD 02 '81 廃

Didier Carmier-vo, g, b, org Luc Debuire-vo, g, p, org Yves-Marie Debuire-p, el. p, syn Jean-Louis Georges-vo, g Guy Gilbert-ds

81年に自主制作されたオパールのアルバム。acギター、ピアノを中心に非常に洗練された美しい旋律が楽しめる。フランス語独特のヴォーカルが何とも耳に心地よい。それを控え目ながらも温かなシンセ音がそっと包み込む。華麗なキーボードプレイ等は一切盛り込まれておらず、純正のシンフォニックロックとは言えないかも知れないが、丁寧な手作りの音を積み重ねることにより驚く程みずみずしい世界を築き上げている。作品の完成度、演奏技量とも同年代にリリースされたアルバム群の中ではハイレベルの部類に属していると言える。なお、同レーベルからは本作よりカットされたシングルが出ているが、今のところ新作が発表されたというニュースは聞かれない。〔江〕



OPEN AIR
Same title

Chicago 2000 900155 '78 廃

A:Strange Form
Little Annie
The Creation
The Trickster

B:Leavin My Place
The Banishment
A Night Bird
What Have We Got There

Open Airのおそらく唯一のアルバム。元ALiceのJ, P, Aufredoがメンバーとして名を連らねている。サウンドの方は、典型的なフレンチシンフォニックであるが、全編に渡って英語で歌われている為か、それ程フランス臭さは感じさせない。小曲ばかりであり、音がやや軽いこともあって、一聴しただけでは印象が薄いかも知れないが、聴き込むにつれて良さが伝わってくる仲々の佳作なのである。特に細部まで丹念に行きとどいたアレンジがアルバム全体を爽やかでかつ味わい深いものとしている。

プログレ＝ドラマチックな大曲としか考えていない方には不必要なアルバムかも知れないが、フレンチシンフォニックをこよなく愛する方には、是非聴いて頂きたいのです。〔洋〕



ORION
La Nature Vit, L'homme Lui, Critique

OXYGEN : OXY 025 '79 廃

JANUSZ TOKARZ - KBD, VO
FRANCK - MAMOSA - G, VO
PATRICK WYREMBSKI - B, AC-G
MICHEL ROUSSEAUX - DS, PER
LAURENT DELENNE - VO, G, FL

79年リリースのオリオンのアルバム。ほとんどのパートはフレンチ・シンフォニック特有のクリスタルなイメージで統一されており、アトールあたりを少々小振りにした感じのサウンドと言える。シンセ系キーボードやフルートを多用した場面では実力が遺憾無く発揮されているものの、全体的にポップなフレーズが目立っており、もう少しアクの強い曲作りが欲しかったところだ。叙情的な展開に持って行こうとしても今一つ〝泣かせる〟ところまで行き切れないのがいかにもフランスのバンドらしいところでもある。だが、一部を除けば極く標準的な出来と言え、割と無難には聴きこなせそう。ただし、爆発的な盛り上がりを期待するイタリア系のファンには余り向かない作風だ。(江)



OSE
Adonia

Egg 90277 廃　　キング GP-704 廃　　1978年

A: Approche Sur A
Orgasmachine

B: 29h 08mn
L'Aube Jumelle
Retour Sur Adonia

オズは主に「ベスト」というフランスの音楽誌で評論家として活動していたエルベ・ピカールが作ったバンドでメンバーも実際にはピカール一人だけである。このアルバムではゲストにエルドンのリシャール・ピナスとフランソワ・オジェが参加し、エルドンに近い演奏をしているがエルドンよりは幾分けだるく重い雰囲気を持っている。アドニアとは架空の惑星でジャケ裏にストーリーが書かれてある。バンド名もフィリップ・ファーマーの小説のタイトルからとられていてＳＦ的要素が強い作品に仕上っている。圧巻はB-1のピナスのギターソロでオーガズム・マシーンという享楽を得る機械で人々が狂気の宴を繰り広げてゆくのを見事に表現している。クレジットではピカールが曲を書いているがピナスとの共作。(い)



BERNARD PAGANOTTI
PAGA

Cream 120 '85

A:Talk back
Mitchinoku

B:Show town
Une Parcelle d'urantia
Final d'urantia

B・Pagganottiという名を聴いてマグマ・ファンならば“Magma live”('75)での躍動するベースをまず想い起す人も多いだろう。それ以後のマグマの骨格的役割を彼は担ってきた。Merci ('84)には参加せず、ほゞ同時期にこのアルバムは製作されたと思われる。サポート陣にPatric Gauthier (Key) Maria Popkiewicz (vo)、その他、プロデュースにLaurent Tibaultを迎えている。その音楽的様式はMagma出身者のソロアルバムの中でもとりわけ〝母体〟との相似性が強い。Gauthier-Pagganottiとくればあの“Werdorje”であるがこのグループはMagmaの支部活動といった感があった。本アルバムはむしろこの延長上のものであるといえるだろう。

“WURD”の名を与えられたこのコバイアの名誉市民はVanderの使徒としてMagma Soundの伝承者となる決意を固めたようだ。〔修〕



EMMANUELLE PARRENIN
Maison Rose

Ballon Noir BAL 13001 廃　　1978年

A: Ce Matin À Frémontel
Plume Blanche, Plume Noire
Leiturgie
Thibault Et L'arbre D'or
Ritournelle
L'e'charpe De Soie

B: Topaze
Bell Virginie
Ballade Avec Neptune
Maison Rose
Après L'ondée
Le Rêve

エマニュエル・パルーナンは、本アルバムの他に、エマニュエル・フィル・クロード名義で、「CHATEAU DANS LES NUAGES」(Cezame CEZ 1016)をリリースしている女性である。彼女はまた、コンフレリー・デ・フーにも参加している。彼女の美しいヴォーカルを全面的にフィーチャーしたこのアルバムは、フランスやカナダのトラッドや、彼女自作のトラッド調の曲などが収録されている。どの曲も、印象的な歌詞とヴォーカルにテンションに満ちた弦楽器が伴う、美しくも透明な曲ばかりである。また、シタールをはじめとするインド系の楽器や、ダルシマーなども効果的に使われていて、催眠的な効果をも得ている。(宇)



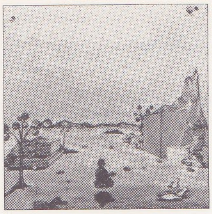
PATAPHONIE
Le Matin Blanc

FEERI MUSIC 1978年
FEERI 178 廃

A: Chanterelle
Valse Noble
Kerouac

B: Rue Alice
Le Matin Blanc

1st「PATAPHONIE」(Pôle 0003)より遅れる事3年、ようやく発表されたパタフォニの2作目。アンドレ・ヴィオー(g)、ジル・ルソー(d)、ピエール・ドゥムロン(b)の編成になり、サウンドもフリー・フォームで雰囲気の押し流しの様であった前作から飛躍的に緊張度を増した。それは技量と計算の上に立った変則的な曲進行、フリー音との絡みによるもので後期クリムゾンを意識したような部分も聴かれる。この「白い朝」と名付けられたアルバムは同じフリップに影響を受けたリシャール・ピナスのエルドンとは異なった方法論で作られている。ジャズの要素を発散させたヴィオーとコンテンポラリーの要素を押し進めたピナスの差だ。本作発表後しばらくしてグループは解散した。 (中)



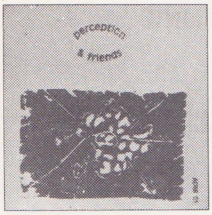
PENTACLE
La Clef Des Songes

ARCANE 1975年
913 001 廃

A: La Clef Des Songes
Naufrage
L'ame Du Guerrier

B: Les Pauvres
Complot
Le Raconteur

「夢の神の鍵」と題されたパンタクル唯一のアルバム。全編に渡り、美しくリリカルなメロディーを配したシンフォニックな作品である。彼らはメンバー個々も、またバンド全体としても決してハイテクニックの持ち主ではないが、リズム・セクションは実に堅実で、特にドラムは録音の適切さも手伝ってか非常に歯切れの良い音を聞かせてくれる。そしてその上に澄んだ音色のキーボード群と情感豊かなギター、そして叙情的なメロディーラインを持ったヴォーカルがちりばめられている。この地味ではあるが味わい深い作品が生まれた背景には、彼らを見い出し、またこのアルバムのプロデュースを務めた、アンジュのリーダーであるクリスティアン・デカンの存在と力があった事を忘れるわけにはいかない。 (城)



PERCEPTION
Perception And Friends

ADMI 01 廃 1972年

A: Colima
Adeqxi/Ville D'avril

B: Le Horla
The Outsider
Mamelai

「PERCEPTION(Futura GER 19)71年」に続くパーセプションのセカンド・アルバム。本作品にはヨッコ・セファー(ts, as, b-cl)、ディディエ・ルヴァール(b)、ジャン=ミ・トゥロン(ds)、ジーグフリード・ケスラー(p)のレギュラー・メンバーに加えて、テディー・ラスリー(cl, ss)、ジャン=シャルル・カポン(cello)、J.F.ジェニー=クラーク(cello)ら多彩なゲストが参加している。全5曲、いずれもフリー・インプロヴィゼイションを主体としたものであるが、曲ごとにメンバー構成が異なっており、変化に富んだサウンドを楽しむことができる。この後彼らは「MESTARI(Le Chant Du Monde LDX 74555)73年」を発表して解散する。その時点で既にセファーとトゥロンはザオとして活動を行なっていた。 (賀)



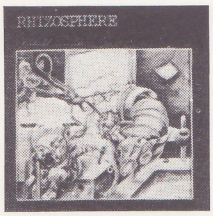
PETITES ANNONCES
same title

BB 33.33 '81 廃

A: UNE MESURE, DEUX TEMPS,
TROIX MPUVEMENTS S MOUV
CRYS TAL
LE TOUT PETIT TRAIN-TRAIN
EXPERIMENTAL
AFRO- JEROME

B: LE CHAT QUI REGARDAIT LA LUNE,
DE DERRIERE
ABOUL-BABEL
DON'T SHOT THE BASSMAN
THERESE'S BLUES
ALLEGRO 24 BLUES
FELLIN JUZZ MR. OLIVER ?

プティ・アノンスはOlivier Joss(b)を中心に、Bruno(ds), Cyrille(p), Jérome(g), Laurent(tp)のヴェルドー4兄弟、Brigitte Marchand(sax), Frédérick(syn, p), Jean-Patrick Voindrot(g)の8人から成るセッション的色彩の濃いグループである。本アルバムは自主製作盤として発表された彼らの唯一の作品であり、全11曲と収録曲は多いものの、曲の流れがスムーズで聴き易いものとなっている。切れの素晴らしいリズム・セクションとスピーディかつメロディアスなギターが一体となって熱演を展開するクリアライトをよりフレンチ・フュージョン風にしたかのような曲、リズミカルなピアノのサポートを受けてトランペットがダルな感じのソロを披露する伝統的ジャズの影響下にある曲等は特に印象的である。 (賀)



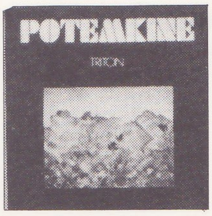
RICHARD PINHAS
Phizosphere

Cobra 1977年
COB 37005 廃

A: Rhizosphere Sequent
A Piece For Duncan
Claire P.
Trapeze/Interference

B: Phizosphere

エルドンの5thアルバムに続いて発表されたリシャール・ピナス初のソロ名義アルバムである。A面の4曲はいずれも完全なピナスのソロ作品であり初期のエルドン同様フリップ&イーノとジャーマン・シンセサイザー・ロックの影響を感じさせる。一方、フィリップ・グラスに捧げられたB面はフランソワ・オジェ(ds)とのデュオ作品であり、オジェの奔放なドラムとピナス独特の重々しいシンセが巧みにバランスした力作となっている。本アルバム以降、「Chronolyse(Cobra COB 37015)78年、録音は76年で1stより以前」「Ice Land(Polydor 2393 254)79年」「East West(CBS 84787)80年」「L'Ethique(英 Pulse 006)82年」と4枚のソロ・アルバムをリリースしている。 (賀)



POTEMKINE
Triton

Tartempion 1977年
V30/ST7162 廃

A: Asyle
Crepuscula
Loolit II

B: Liberserim Urb Et
Chant De Viamor
Eiram

ポタンカンは、グバン三兄弟を中心としたグループである。これは彼らのセカンド・アルバムである。この他に彼らは1st「FOETUS」(Pôle 0010—再発は Tapioca 0010)、3rd「NICOLAS II」(Phaeton 7801)をリリースしている。本作までは完璧なスタジオ・グループだったようで、ピアノ&ドラムというクレジットもあったが、サードではドラマーを加えて、ライヴが行なえるようになっている。70年代後半のフレンチ・ジャズ・ロックのグループの多くがマグマやザオの流れをくんでいるのに対して、彼らは全く独立した位置にあるグループとして存在した。クールでインテリジェンスあふれるプレイは、ハットフィールド&ノースを連想させる。 (宇)



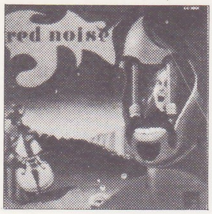
PULSAR
Halloween

CBS　　1977年
82477 廃

A: Halloween Part I
a) Halloween Song
b) Tired Answers
c) Colours Of Childhood
d) Sorrow In My Dream

B: Halloween Part II
a) Lone Fantasy
b) Dawn Over Darkness
c) Misty Garden of Passion
d) Fear Of Frost
e) Time

「POLLEN」(75年)、「THE STRANDS OF THE FUTURE」(76年) に続くピュルサの3rdアルバム。北部アイルランド民謡の「ダニー・ボーイ＝ロンドンデリーの歌」を歌う少女の哀しげなスキャットに導かれてアルバムは幕をあける。そしてそれに続くフルートとフルート・メロトロンの合奏のリリカルな響き。さらにその後もヴォルテージは下がる事なく、クライマックスの連続のまま終末を迎える。自らのペンになるオリジナル・ストーリーを基に創られたこのトータル・アルバムは、実に高い完成度を有している。それは全編に渡って「美しさ」と「哀しみ」に満ちており、彼らがそれらを表現する事に掛けて、世界で最も才能あるグループの一つであった事を確信する。叙情派ロックの作品として正しく屈指の一枚。　(城)

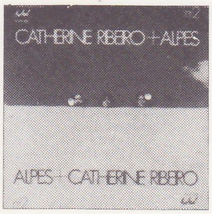


RED NOISE
Sarcelles-Lochères

Futura　　1970年
RED 01 廃

A: Cosmic Toilet Ditty/Caka Slow～Vertebrate Twist/Obsession Sexuelle N°1/Galactic Sewer-Song/Obsession Sexuelle N°2/Red Noise Live Au Cafe Des Sports/Existential-Import Of The Screw-Driver Eternity Twist/20 Mirror Mozarts Composing On Tea Bag And 1/2 Cup Bra/Red Noise En Direct Du Buffet De La Gare/A La Memoire Du Rockeur Inconnu
B: Petit Precis D'Instruction Civique/Sarcelles C'est L'avenir

68年5月、バリケードに囲まれたソロボンヌ大学内でコンサートを開き一躍有名になったレッド・ノイズ。このアルバムは、オリジナル・メンバーのフランシス・レモンニエらがコミンテルンに参加するために脱退するなど若干のメンバー・チェンジを経た後発表された唯一の作品である。パトリック・ヴィアン(g, vo)、ダニエル・ジョフロワ(b, vo)、ジャン＝クロード・サンスィ(sax, fl, vo)、フィル・バリー(ds, g, vo)に加えて、ジョン・リヴァンゴー(org)、オースチン・ブルー(per)の2人がゲスト参加している。A面ではロック、ジャズ、ポップス、効果音等が次々に飛び出すコラージュ的曲展開がみられる一方、B面はフリー・ジャズの要素を巧みに取り入れた実験的ロック作品に仕上がっており、中々の力作といえる。　(賀)



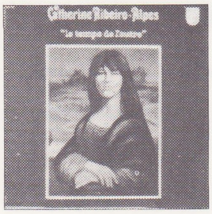
CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Catherine Ribeiro＋Alpes

FESTIVAL　　1970年
FLDX 531 廃

A: Prélude
Sirba
15 Août 1970
Silen Voy Kathy
Prélude

B: Prélude
Poème Non Epique
Ballada Das Aguas

カトリーヌ・リベロの2作目。デビュー作の2BISからALPESへと改名している。リベロはこのパトリス・ムールを中心とするアルプを率い、実質的には彼女自身を含めた一つのバンドとして7作目に至るまでに「AME DEBOUT」('72)「PAIX」('73)「LE RAT DEBILE ET L'HOMME DES CHAMPS」('75)「LIBERTES?」('75)を、それ以後「PASSIONS」('79)「LA DEBOUSSOLE」('80)を発表している。本作はa-g.に乗せたシャンソンの小曲とアルプのやや混沌とした演奏に彼女のうなるようなヴォイスや語り、叫びを乗せた大曲から成る。どちらの傾向も彼等のサウンドの原型と言うべきものである。またリベロのヴォーカルに関すれば円熟しきっていない初々しさと荒々しさを秘めている。以後の動向を占った初期の代表作と言える。(松)



CATHERINE RIBEIRO＋ALPES
Le Temps De L'Autre

Philips　　1977年
9101 155 廃

A: Le Temps De L'Autre
Cette Voix
Aimer Quoiqu'il Arrive

B: Le Silence De La Mort
Kel Epik Epok Opak

カトリーヌ・リベロの7thアルバム。現在までに、彼女は2ビスと1枚、アルプと8枚、ソロ名義で3枚、計12枚のアルバムをリリースしているが、本作はボーカリストとしての実力を十二分に発揮した代表作の一つである。女性らしからぬ重厚さを持った太く延びのある声に一層磨きがかかり、そのうら悲しさを感じさせる表現力豊かな歌唱は、リズムを強調したドラマチックな演奏やギターとキーボードを中心にした控え目ではあるが的を得た演奏と一体となって聴く者を圧倒する。B-2はアルプのみによるインスト・ナンバーであり、メロディアスなキーボードと力強いリズムが印象に残る。以後、グループは活動を2年間休止、リベロは4枚のソロ（ピアフとプレヴェールの作品を唄ったもの他）を発表する。　(賀)



RIPAILLE
La Vieille Que L'on Brûla

Balon Noir
BAL 13003 廃

A: Fils De La Lune
Le Jardin des Plaisirs
Il N'y A Plus Rien
Satané Jardin

B: La Veuve De Ricolas Kremer
Le Sabbat Des Sorcières
Les Loups
La Vieille Que L'on Brûla
Epilogue

とても素敵なジャケットにつつまれたリペーィュ唯一の作品。彼らの音の部分部分からは時々、ジェネシス、ジェントル・ジャイアント、アンジュといったグループの影響が見え隠れするが、それはこの作品の内容を伝える上であまり重要ではない。彼らは様々なアコースティック楽器を多用し、それがエレクトリック楽器と実に程良く溶け合っている。そして伝統性を重視し、鮮明なる場面展開を聴かせる曲創り及び構成力も見事だ。しかし彼らのこの作品を語る上で特に忘れてならないのは、メンバー個々の表現能力が極めて高い、という点である。それは彼らが器用である、と評しているのではもちろんない。対して言うならば、彼らは音楽を知っている、という事だ。故に安定した内容の作品となっている。　(城)



MICHEL RIPOCHE
Equinox

Atlantic　　1975年
50 194 廃

A: Neptune
Vimanas
Hier Aujourd'hui Demain
Mirage

B: Tirer Pousser
Equinox
Entre Le Ciel Et La Terre
Ballade Pour B-B
Divertissements

元ズーのヴァイオリニスト、ミシェル・リポーシュの1stアルバム。ズー自体がそうだったように、決してプログレではないし、いわゆるジャズ・ロックとも一味違う。ごく普通のロックをヴァイオリンをメインにして演っている、という印象を受ける。この作品(以後の作品もそうだが)では、フランス独特の渋みというものはなくて、ラテン民族の脳天気な明るさがある。パリ・コンセルバトワールの出身。スタジオ・ミュージシャンとして、あるいはヴァンゲリスへの参加などマイナーなレベルでの活動が多い。他の作品としては、「コントゥ・ミュジコ(Atlantic 50350)」、「ヴォリュプター―なんと、肉欲という意味――(加 Cadence CAD-1009、又は仏 Spalax 8.6832)」がある。　(中)

MARQUEE EUROPEAN ROCK CATALOG



DAVID ROSE
Distance Between Dreams

Gratte-Ciel 1977年
CIEL-2007 廃

A: Late Afternoon
The Beast
Le Petit Prince
Skyway
Starset
Starset (for Beld Bartok)

B: Distant Relations
Amid Daydream
Echoes
The Distance Between Dreams

ダヴィド・ロウズの唯一のリーダー・アルバム。バックはトランジット・エクスプレスがガッチリとかためている。本作は、いわゆるフレンチ・ジャズ・ロックの名盤であり、ブーヴィエ、ジュゼリ、ペラトネもさることながら、ロウズの安定したテクニックに支えられた、鋭角的なプレイと表現力は、群を抜いているようである。近代楽曲風のA-5を筆頭にクラシカルの要素の強い楽曲が多いが、リズム・セクションはジャズ・ロックのビートを強く打ち出しており、確実なロウズのヴァイオリンが絡み合って見事なアンサンブルを表出している。トランジット・エクスプレス亡き後は、自己のバンド、ロウズを結成、2枚のアルバムを発表し、現在は、ブルー・ロウズという名で、ポップな音楽を演っている。（中）



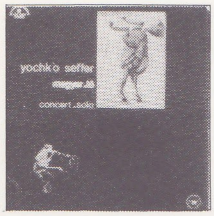
SANDROSE
Sandrose

Polydor 1973年
2393 030 廃

A: Vision
Never Good At Sayin' Goodbye
Chorea

B: Old Dom Is Dead
To Take Him Away
Summer Is Yonder
Metakara
Fraulein Kommen Sie Schlaffen Mit Mir

ジャン・ピエール・アラーサンとkbのアンリ・ガルラの双頭グループと思しきサンドローズの唯一のアルバム。共に元エデン・ローズのメンバーであるが、そこではガルラの音楽性が強く反映されていた。しかし、このアルバムになると、ローズを前面に押し出そうとして、アラーサン本人が前面に出てしまったのである。シャウトするローズのボーカル（英語で歌ってる）と、ブレークの後に出てくるメロトロンの嵐、さらにアラーサンのたくみなギターが絡み合う様は典型的なシンフォニック・ロックだ。多少古い感じは否めないが、時代を超越した素晴らしさがここにはある。この前後、アラーサンは幾つかのアルバムに参加しているが、このアルバムが第一絶頂期の頂点を極める作品であろう。（中）



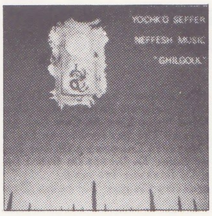
YOCHK'O SEFFER
Magyar-Lŏ

Le Chant Du Monde 1976年
LDX 74604 廃

A: Soulographe For S.K.
Magyar Lŏ I

B: Chorus For Relya
Gregoria
Magyar Lŏ II

75年11月21日、ライムにおけるライヴである。タイトルはハンガリー産のたくましい馬のことである。ヨッコ・セファーは、テナー・サックス、ソプラノ・サックス、クラリネット、ピアノ、そして自作の楽器『カムカ』を自在に使っている。ソロ・アルバムであり、彼の他のアルバムよりもフリー・ジャズに近く、ジャズ・アンサンブルとしてのパーセプション、ジャズ・ロック・ユニットとしてのザオ、異教的なスピリチュアリティを感じさせる一連のネフェッシュ・ミュージックなどとは異なり、ここでは、彼のコンポーザーという面よりもむしろ一人のサックス・プレイヤーとしての面が強調されている。インプロヴィゼーションが主体であるが、エスニックなものから得たようなプレイも多く、興味深い。（宇）



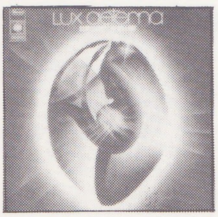
YOCHK'O SEFFER
Ghilgoul

Garou Garou 1978年
SR 116 廃

A: Dag
Sifra
Dailn

B: Larma
Ghilgoul

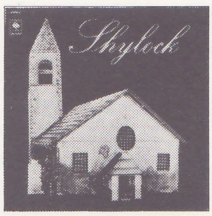
「Delire (Moshé-Naim MN 12008) 76年」「IMA (Moshé-Naim 12010) 77年」に続くネフェシュ・ミュージック最終作品である。前2作にも参加していたクワトール・マルガンに加えて、ドミニク・ベルトラム（b, IMAにも参加）、フランソワ・レゾー（ds）がセファーをバックアップしている。このアルバムに収められた音楽はクラシックからロックに至る各種音楽の融合物とも言うべき形態をとっているが、その本質は紛れもなくセファーの魂の音楽である。彼のサックス、ピアノとクワトール・マルガンの弦楽器を中心にボイスとリズム・セクションが絡み合い曲は進行する。セファーがプレーヤーとしてのみならず作曲家として実力を十二分に発揮した力作である。現在、彼は大作「Chromophonie」に取り組んでいる。（賀）



WILLIAM SHELLER
Lux Aeterna

CBS:65030 '75 廃

エマニュエル・ブーズのアレンジャーとして知られるウイリアム・シェラー。ブーズの作品が派手に騒がれる一方で、本作は地味なカヴァーも災いしてかそれ程評判にはならなかった様だ。しかし、ブーズの作品群にも比肩すべきその驚くべき完成度の高さは耳にした者なら誰もが認めるはずである。彼自身が指揮するオーケストラと壮大な混声合唱団を大胆にフューチャーして一種独特の陰を宿したシンフォニーが繰り拡げられる。その狭間を縫ってシンセ類がうなりを上げ、束の間のギターソロも展開される他、幻想的な演奏をバックにしての虚ろな女性ヴォイスも印象的だ。アルフレッド・カリオンあたりのファンにはたまらない内容であるが、〝プログレッシヴ・ロック〟の一言で片付けてしまうには余りにも重みのある演奏である。〔江〕



SHYLOCK
Gialorgues

CBS 1977年
82189 廃

A: Le Quatrième
Le Sixième

B: Le Cinquième

シャイロックの1stアルバム。厳密に言えば上記のCBS盤はオリジナルではなく、前年の76年にタイトルと同名のジアロルグ・レーベルから出た物が初回プレスである。編成はg.key.dr.の3人で、b.はギタリストが兼任している。全体的な音の印象は非常に攻撃的で、後期キング・クリムゾンからの影響を感ずるが、それはギタリストがその奏法をR.フリップから多く学んでいることによる。が、同時にキーボーダーのセンスはクリムゾンのそれとは異なっており、彼の存在がバンドの単なる類似化を防いでいる。新たにベーシストを加えた2nd「ÎLE DE FIÈVRE」（78年、CBS 82862）では本作の延長線にある大曲をメインにしつつ、即興の要素が強い曲も多く収められている。なおこの2枚の海賊盤がある。（城）



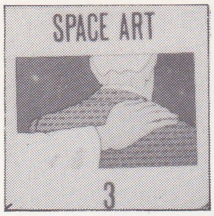
SKRYVANIA
same title

DMR 001 廃　　1978年

A: Tristan et Iseult
Raid
Château D'orphée

B: Intro
Epapée
Finale

自主製作盤としてリリースされたスクリーヴァニア唯一の作品（フランスのバンドであるがレコードはベルギーで作られた)。限定200枚ということもあって、フレンチ・ロック屈指のコレクターズ・アイテムとなっている。５人のメンバーによる演奏は技術的に傑出したものとは言い難いが、彼らの音楽性がストレートに反映された内容となっており、自主盤ならではの味わいがある。ややハードで力強いギターを中心にしたメリハリの利いた展開が聴き所である。いかにも自主盤といった感じの白黒ジャケットとあいまってファンの気をそそる不思議議な作品である。以後の動向に関しては、メンバーの１人がニュー・ウェイヴのバンドに加入したとの噂もあるが詳しくは不明である。（賀）



SPACE ART
3 (Play Back)

CARRERE 67.575 廃

A: FOLKSTONE HOVERCRAFT
JAURES
PARIS VISION

B: LOVE MACHINE
ALPHA DU CENTAURE
PART 1
PART 2
PART 3
PARAKEET ISLND
WELCOME TO LOVE

スペース・アートは70年代後期に３枚のアルバム(1st : Space Art/Carrere 2934 101, 2nd : Trip In The Center Head/Carrere 2934 104）をリリースしたエレクトロニクスユニットであり、基本的にキーボードのドミニク・ペリエとドラムスのロジャー・リツィテッリの２人で構成されている。本作は彼等の３枚目のアルバムである。彼等のサウンド・イメージというものは、一言でいうとするならトリッキーなエレクトロニクス・ミュージックといえる。どれも水準以上の作品であるが、後期になる程、センスが洗練されてきており、かなりポップなイメージがあるものの、ヴィジュアルに自由自在にエレクトロニクスを操る本作を代表作としておく。ドイツ品とは全く違う、正にフランスの音だ。洗練された良質のトリップ・サウンド。ハイ・センスなジャンキーに。（山）



SPEED LIMIT
Speed Limit

RCA
FPL1 0101 廃　　1975年

A: Time's Tune
Breeze Borealis
A Run Around The Block
Jettatura
Good Night Little Bear
African Dance N°3

B: Pastora Idyl
Pastoral Idyl Part 1
Lemon Tree
Reaching The Stars
To The Girl Of The Moon
Pastoral Idyl Part 2

スピード・リミットのセカンド・アルバム。ヤニック・トップ(b, per, vo, etc)、ヨッコ・セファー(ss, b-cl, fl, vo)、ジャン・ルイ・ビュッシ(p, vo)、シロック(per)、ジョルジュ・ジャンダ(ds, per)から成る５人の正式メンバーに加えて、ミッシェル・リポーシュを含む４人のバイオリニスト、ジャン＝シャルル・カポン(cello)がゲスト参加している。Ａ面には前作「SPEED LIMIT(Le Chant Du Monde LDX 74575）74年」をより軽快な感じにしたピアノとサックス中心のジャズ・ロック組曲とトップによって作られた「ÜDÜ ẂÜDÜ」を思わす曲が収められている。一方、Ｂ面はセファー作曲の組曲であり、ストリングス・アンサンブルを用いたメロディアスな曲とコンボによるジャズ・ロックを聴くことができる。（賀）



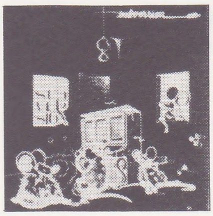
STEP AHEAD
Same Title

RCA/PL 37604 '82 廃

A: EYES
RIGHT OR WRONG
THINKING

B: HEAVEN
ELEVEN DAYS
HELL
WHITE LADY
THE END

このステップ・アヘッドというグループはフランスのグループと言うには、良い意味に於いて、あまりにインターナショナルな音作りのアルバムだ。イエスのジョン・アンダーソンを意識するが如く歌われる英詞による美しいボーカル・ラインといい、縦横無尽に飛び交うセンス溢れるギターワークといい、流れる様なシンセ＆ピアノのキラめくばかりの構成力といい、どれを取ってみても超一級品。これだけのセンスとテクニックの演奏を、抜群の作曲力と構成力によって全編に渡り聞かせてくれるのだから、もう。フランス臭さは無いが、このアルバムは、80年代のプログレの中で、稀に見る大傑作アルバムである。なお、このＬＰからのカットのプロモーション用の12インチ・シングルがある。〔ＵＮＯ〕



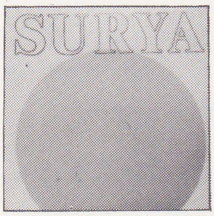
SUBVERSION
Subversion

Pôle
SVB 020 廃　　1976年

A: L'arbre Mort
Kalioni
Mektoub
Le Tube De L'été

B: Rêverie
Mort D'un Rat
4.5.6
Jazz From Sarcelles
Submersion

シュブヴェルシオンの唯一のアルバム。自主制作盤をポールがディストリビュートしている。サウンド的にはポール・レーベルの一連の作品群とは異なり、実験的なシンセサイザー・ミュージック的な面は少なく、メロディアスなプログレッシヴ・ジャズ・ロックという作風に仕上がっている。メンバーは全く無名で、現在の消息は不明である。Ａ-1はアコースティックなギターによるイントロではじまり、叙情的なヴォーカルと、シンフォニックというよりもジャジーなキーボードがからんでクライマックスに達する。その他の曲もカンタベリー系列やカルプ・ディアン風のジャズ・ロック調かつメロディアスな作風もかねそなえたものが多い。（宇）



SURYA
same title

CORNELIA COR 4310 廃

A: AGARTHA
ASPIRING ANSWER
AUTOMATIC MAN

B: AURA
PATTY
SPACE TRAVEL
STAKAU
DO ANYTHING YOU WANT

ザオの「Kawana」で素晴らしいプレイを披露したディディエ・ロックウッド(vln)とジャン・ミ・トゥルオン。この契機として、２人が自らの音楽性をよりダイレクトに反映させた音作りをするために結成したのがスルヤである。グループには他に Francis Lockwood(p), Sylvain Marc(b), Luc Plouton(syn) が参加し、J.C.Agostini(g) がゲストで加わっている。切れの良いスピーディなリズムをバックにバイオリン、シンセ、ピアノが熱気を帯びたインタープレイを展開する作品から安定したリズムを基礎にメロディアスでゆったりとした演奏が聴けるものまで、サウンドは緩急自在に変化している。作品としての知名度こそ低いものの、内容的にはフレンチ・ジャズ・ロックを代表する１枚と言える。（賀）



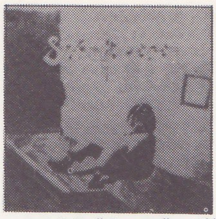
SWING STRINGS SYSTEM
same title

UNITELEDIS UNI 131078 '78 廃

A: PAYSAGES INTINES
  A) JOURNAL
  B) SIEGFRIED
  C) COUP D'CEIL EN ARRIERE
  D) A SUIVRE

B: SING ME SOFTLY OF THE BLUES
  TRIADE
  FLOS FLORUM

スウィング・ストリングス・システムは、その名の通り、6人の弦楽器奏者とクラヴィネット、ドラムスから成るグループである。コンフリュアンスを母体としており、リーダーのディディエ・レヴァーユ(b)、ジャン・シャルル・カポン((cello)、デニス・ヴァン・エッケ(cello)、クリスチャン・エスクーデ(b)の4人は同グループで共演している。他のメンバーもディディエ・ロックウッド(vln)、ジャン・イヴ・リゴー(vln)(ともに元ザオ)、ジークフリード・ケスラー(clavinette)(レヴァーユのパーセプション時代の同僚)、ベルナール・リュバ(ds)と強者である。ジャズ・ロック、ジャズ、そして、ややフリー・フォームな演奏が小気味良く軽ろやかに展開された名作である。 (賀)



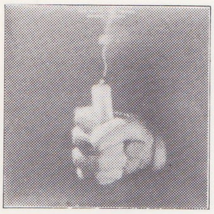
SYNOPSIS
Minuit Ville

SRC 351. 357 '79 廃

A: MINUIT VILLE
  JOUE-MOI QUELQUE CHOSE
  VILLE ORACLE

B: MELODIE SAOULE
  DESERT

2nd LP "Gamme" が輸入され評判になってからもうすでにかなりの時間が経つ。70年後半にかけてからのフレンチ・ロックが紹介される先がけともなったレコードだったとも記憶する。このデビュー作は、ついに輸入されることなく終ってしまい、入手も難しいらしい。メンバーは2ndとはヴォーカリストとベーシストがちがっており、演奏も粗削りなこころが感じられる。まとまりすぎて少し個性に欠けていた2ndに比べると、その未完成なところが、却って、われわれには魅力的に聴えるから不思議だ。作曲は全曲、Christian Bolze, Hoff Christian によれもので曲の傾向は2nd LPとほとんど変わらないとはいえ、印象的なメロディが出現する。一番のいい今はクラシカルなイントロで始まるA②で、泣きのメロディを奏でるギターがひたすら美しい。 〔吉〕



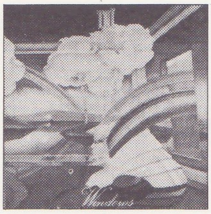
BERNARD SZANER
Some Deaths Take Forever

IRC 005
SONOPRESSE 2S 068 16666 '80 廃

A: WELCOME
  RITUAL
  EXECUTE

B: RESSURECTOR
  TERMS OF REALITY
  THE MEMORY
  NEWBODY FORM
  SUSPENDED ANIMATION
  THE DIFFERENCE IS NOT ALL THAT GREAT
  A KIND OF FREEDOM

バッハデンケル、ティム・ブレイクといったアーティストとの出会いがベルナール・スジャネールをエレクトロニクス奏者としての道を歩ませることになった。又、マグマのツアーに照明係として同行し、平行してライトショウを伴うエレクトロニクス・サウンドを創作していく。彼の最良の作品は80年にリリースされた本作であり、マグマのブラスキとパガノッティが参加して制作された。エレクトロニクスを先駆して創られた硬質なインダストリアル・ビートが収録されており、この種のサウンドとしてはエルドンの5th(Un Reve～)と並ぶ秀作であると確信する。生き物のように躍動するエレクトロニクス・ビートは唯一無比のものである。尚、1stは"Visions Of Dune"(IRC 003)、3rd"Superficial Music"(IRC 008)、4th"B-rute Reason"(Island 811319.1)、5th"The Big Scare(New Rose New34)-Maxi Single-である。 (山)



TAI PHONG
Windows

Warner ・W.パイオニア 1976年
56264 P-10364W

A: When It's The Season
  Games
  St.John's Avenue

B: Circle
  Last Chance
  The Gulf Of Knowledge

「我々はフランス人のグループではない。フランス出身のグループであり、イエス、PFM、アフロディティス・チャイルド等と同じジャンルの音楽を演奏する」と語るタイ・フォンは2人のベトナム系フランス人、タイとカーンを中心に75年に結成された。同じ年に出された同名のファーストはアンジュが絶賛し新人賞をとり、日本でも「シスター・ジェーン」という曲がもてはやされた。翌年、2ndの本作が出され幾分まとまりを見せたが3rdを発表して解散、86年に突如復活してシングルを発表している。

この2ndは彼らの最高作と評されていてヴォーカルがやや希薄なものの、誰が前面に出る訳でなく全員が同じラインでまとまってかもし出す叙情性あふれるエッセンスは群を抜いていると言える。 (い)



TANGERINE
De L'autre Côté De La Forêt

Arcane 1970年代中期
87.014 廃

A: De L'Autre Coté De La Forêt
  Death
  Méditations
  Liberté

B: It's Ending
  Listen
  Time
  Éveil
  Direction Sud

ジャン・クロード・ポニャンのアルカン・レーベルは後にクリプト・レーベルと改名された。これは改名前の同レーベルに残されたタンジェリーヌの初作であると思われる。彼等は続いて2nd「MÉMOIRE」(Crypto ZAL 6400)を、メンバーのヴァレリー・ブトウシュはポルランというグループを率いて「RÊVES CRISTAL」(Crypto ZAL 6414)を発表している。アコースティック・ギターとフランス語の語感を活かしたヴァレリーの透明感あるヴォーカルを中心とするサウンドはフォーク・ロックと呼ぶにはやや叙情的でそれはギターのアルペジオ、フルートの絡み、時折聴かれるキーボードのためである。メロディーに古さを感じさせるがフォーク・ロックの持つ繊細さとシャンソンの持つ陰りを備えており瑞々しさを感じる。 (松)



GHEDALIA TAZARTÈS
Tazartès' Transports

Cobalt 推定1981年
CBL 05 廃

曲目不明

ゲダリア・タザルテのセカンド・アルバム。クリアー・ビニール製なのでクレジット等は全くわからない。CBL05という刻印がかすかに読みとれるので、ファースト・アルバム「DIASPORA」(Cobalt CBL 02)のレコード番号から類推して、コバルト・レーベルからリリースされたものかもしれない。ゲダリア・タザルテはロック・ミュージシャンというよりも現代音楽の作曲家に近い所に属する人物であろう。ファースト・アルバムにおいてミッシェル・シオンの曲をとりあげていることがそれを示している。タザルテの音楽は、高度にメタフィジカルなコラージュ・ミュージックである。ストリートノイズ、読経、世界各地の民族楽器、それら全てがアマルガムとなって一体化したものが彼の音楽である。 (宇)



MAMA BEA TEKIELSKI
La Folle

Isadora 1976年
LSL 9010 廃

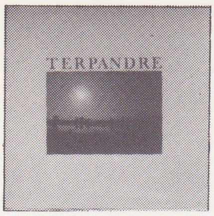
A: Le Préau
Le Vent
Le Secret

B: La Mort-Musik

C: Le Pissenlits
L'enfant
Les Clowns

D: La Folle
Visages

ママ・ベア・テキエルスキー（本名ベアトリス・テキエルスキー）のファースト・アルバム。このアルバム以前にも本名で何枚かアルバムをリリースしているが、フリー・フォームなヴォーカルというスタイルを確立したという点で画期的なアルバムである。メンバーは、彼女の他に、ジル・ティネール(p,syn)、フランソワ・ジャンノー(syn,fl,sax)、ジャン・クロード・ダゴスティニ(e-g)、ジョエル・デュグルノー(b)、ナイジェル・モリス(dr)といった実力者ぞろいである。彼女の書く詩は、子供の純粋な目を通しての現実批判、というテーマを持っている。ダゴスティニのギターとティネールのシンセサイザーは緊張感にあふれている。またそれ以上に彼女のヴォーカルはドラマティックな展開を見せている。（宇）



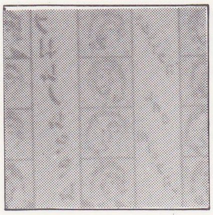
TERPANDRE
Same Title

DIONYSOS DI 3003 '80 廃

A:LE TEMPS
CONTE EN VERT
ANNE MICHAELE

B:HISTOIRE DUN PECHEUR
CAROUSSEL

最近解明されつつあるフレンチロックシーンの中でもArachnoidと並びずばぬけた音楽性を持っているのはこのTerepandreをおいて他にあるまい。テクニック的には目新しくも、すごいというわけでもないのにかかわらず、彼らの作り出す音楽には輝くばかりの叙情性であふれている。２人の織りなすピアノ、メロトロン、シンセサイザーのキーボード群がサウンドの中心でＡ面では静的要素が強く、特にＡ②のメロトロンが雄大に響き渡るところは、その手のマニアとならずとも涙ものであろう。Ｂ面は６人のメンバーが一体となったジャス・ロック的傾向が強い、攻撃的な演奏も聴くことができる。その中にも、叙情的なところも忘れず取り入れ、曲を効果的に盛り上げている。この１枚で姿を消し、その後の活動については分らずじまいなのが残念。〔吉〕



THALASSA
Suffer And Misery

PS:5037 '82 廃

PHILIPPE DARRIERE- DS, PER
"NINO" MARTINEZ- G, VO
THIERRY NICOLAJ- B, VO
MICHEL DASQUE- KBD, VO

78年頃からしゅう落の道をたどり始めたイタリアプログレ界とは対照的に、フランスのシーンは70年代終盤から80年代にかけて多数の好作品を輩出した。82年発表の本作もその中の一枚である。典型的なジェネシス・スタイル。タイトなパートはほとんど見受けられず、美しい音色のキーボード系を中心に、持ち前のセンスの良さで透明感溢れるシンフォニックワールドを構築している。若干新し目の音作りであるがシンフォニックファンには一聴の価値がある作品である。ただ、マリリオン以降のバンドに共通して言える強烈な個性の無さ、英語で歌われていることによる無国籍的な印象を嫌うリスナーにとっては少々不満が残るかも知れない。なお彼ら自身も作品内容が気に入らず市場からレコードを回収してしまっている。〔江〕



LAURENT THIBAULT
Mais On Ne Peut Pas Rêver Tout Le Temps

BALLON NOIR 1978年
BAL 13009 廃

A: Oree
Aquadingen

B: La Caravane De L'oubli
Mais On Ne Peut Pas
Rêver Tout Le Temps!

マグマ等数多くのアーティストのプロデュースを手掛けてきたローラン・ティボールの唯一のソロ名義作。アマンダ・パーソン、デビッド・ローズ、リシャール・ロー、フランシス・モーズ等多くの協力者を得て製作されている。サウンドは透明感ある女性ヴォーカル、主に自然音である効果音、フルート、ヴァイオリン等の使用、マグマ風のプレイ等を部分的に折り込んだ変化に富むものであり、それらを包むように繊細な音色のアコースティック・ギターとメロディアスで柔かな音色のベースを全体に配すことによって無理のない流れとまとまりを生んでいるものである。加えて柔かな音色の統一感と穏やかに溢れ出す抑揚感の演出は、まさに彼の力量を示すところのものである。ジャケットはアンリ・ルソーの作品。（松）



TOTAL ISSUE
Total Issue

UA 1970年代前半
UAS-29174 廃

A: Les Marins
La Porte Ouverte
Come Down
Over The Shadow

B: Rustique
Quiet Place
Dis-Mais-Dis
Resurrection

アンリ・テキシェ、アルド・ロマノ、ジョルジュ・ロカテリ等が結成したポップ・ロック・ユニット、トータル・イシューの唯一のアルバム。いわゆるフォーク・ロックに無理矢理突っ込んだジャズ風味が、何とも言えず楽しい。ロカテリはすでに安定したプレイを聞かせる。クリス・ヘイワードのギターが美しい。もう一人のギター、ミシュ・リブルティは、ロカテリに比べてよりロック的だが、今一歩である。このユニットがどういう経過をもって結成され、また解散していったのかは定かでないが、有数のジャズ・ミュージシャンが極度にポップなサウンドを展開した事にキ裂の原因があったのだろう。文頭にあげた３人は、今でも第一線の現役ジャズ・マンとして活躍している。（中）



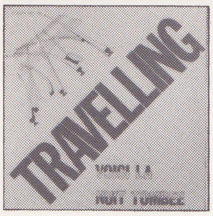
TRANSIT EXPRESS
Couleurs Naturelle

RCA 1977年
PL-37020 廃

A: 10^eme^ Rue Est
Visite Au Manoir
Marchand De Sable Et
Pere Fouettard

B: Au Dela Du Miroir
Le Grand Escalier
Cathedrale De Verre
Stress
L'Image Du Miroir
Qui Donc A Reve?

イヴ・シモンのトランジット・プロダクションに所属したグループで、元々、イヴ・シモンのバック・バンドとして結成されており、バンド・ネームはシモンの小説「トランジット・エクスプレス」からとられている。当初は４人であったが、２nd「オパス・プログレシフ」でゲスト参加のダヴィド・ロウズ（vln）が、本作では正式メンバーとしてクレジットされている。一般的に、トランジットの最高傑作、と言われるこの「クルェール・ナテュレル」は、ロウズがバンドの不可欠要素になってしまった事を裏づける音作りである。各人の完璧なテクニックと、そのエネルギッシュでプログレッシヴなジャズ･ロックはフランス独自のものであろう。この後、プロダクションの経済的理由により、バンドは解散する。（中）



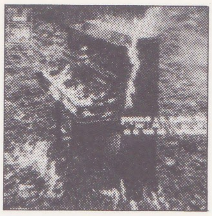
TRAVELLING
Voici La Nuit Tombee

FUTURA RED06 '73 廃

A : VOICI LA NUIT TOMBEE

B : FLAMENCO
PASSO
SOLEIL
TOUT COMPTE FAIT
SHEMA

Yves Hasselmann (p,org,vo), Jacques Goure (b), Roger Gremillot (ds)から成る伝説のトリオ、トラヴェリング。彼らの唯一の作品である本アルバムは本作発表後活動を停止したフュトゥーラ・レーベルの最後を飾るに相応しいジャズ・ロックの名作である。ソフト・マシーン、ナイスの影響を感じさせる彼らのサウンドはジャズ的要素を内包しているが、本質的にはロック的手法に基づくものである。ハッセルマンのマイク・ラトリッジを彷彿させるオルガン、キース・エマーソンにも通じる力強くテクニカルなピアノが最大の聴き所となっている。本作発表後グループは解散、ハッセルマンはクリプト・レーベル等から4枚のLPをリリースし、更にカセットによる作品を発表して、現在も活動を続けている。(賀)



TRIANGLE
Triangle

Pathé 1970年
2C 062 11147 廃

A: Peut-Être Demain
Left With My Sorrow
Blow Your Cool

B: Guerre Et Paix
M.L.-G.G.
Cameron's Complaint

トリアングルのファースト・アルバム。メンバーの正式なクレジットはないが、ジャン＝ピエール・プレヴォタ、パピロン、フランソワ・ジャンノー、マリウ・ロランツィーニの4人が参加しているものと思われる。当時、既に一部ではかなり有名なジャズ・ミュージシャンだったジャンノーの影響もあって、そのサウンドはジャズ的要素を取入れたポップなロックとなっている。以後、よりポップな「VIENS AVEC NOUS (Pathé 2C06411836)」、ステファン・グラッペリ(vln)をゲストに迎えた「HOMONYMIE (Pathé 2C06210873)」を発表してグループは解散する。後にロランツィーニはエディシオン・スペシアルを結成、パピロンもソロ・アルバムを発表する。またジャンノーは現在もジャズ界の第一線で活躍している。(賀)



TRIODE
On N'a Pas Fini D'avoir Tout Vu

Futura 1971年
RED 03 廃

A: Magic Flower
Misomaque
Moulos Grimpos
Blahsha
Lilie

B: Ibiza Flight
Adeubis
Come Together
Chimney Suite

フュテューラといえば、フランス・ジャズ界では老舗といったようなレーベルだが、残念ながら既に亡い。しかも意欲的に再発を行なっていたムジカも倒産した。そのフュテューラの中でも、REDのシリーズは、レッド・ノイズ(01)、マホガニー・ブレイン(02)等のロック色の強い作品を発表していたが、本作は、その系列中、最高の内容を誇っている。ドラマチックな構成、リリカルなフルート、ブルースを基本にしたジャズ・ロック・ギター。71年当時、これだけ本格的なバンドがフランスに存在していた、というのは驚き以外の何物でもない。加えて、日本では、マルタン・サーカスやズーぐらいしか紹介されていなかった頃、すでに彼等のような無名ではあるが実力ある人達が活動していたのである。(中)



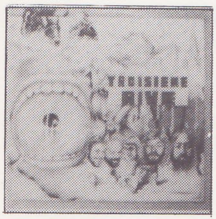
JEAN TRISTAN
Je Dois Ne Pas Me Taire

Disques Alvarès
C 495 廃

A: Je Dois Ne Pas Me Taire
Quai De L'horloge
La Mort Sur La Place
Chanson
Mon Cœur Est Une Cour

B: Sensation
Voyageur
Prison Centrale
Face À Face
Nausée Noire

ジャン・トリスタン(vo,g)自身、そして本作、参加アーティスト4名、一切不詳である。全曲、トルコ、スペイン、モザンビーク等計9名の前衛詩人の詩に彼が曲をつけて歌ったものである。作品自体は彼のシンギングを中心とした所謂シンガーの作品であるが、バックのアコースティック・ギター、ヴァイオリン、タブラ等の民族楽器等による演奏とそのメロディー・ラインにジプシー音楽、イスラム色、或いは中近東色を反映しており、かつ暗い雰囲気を生んでいる。この暗さや民族楽器の使用は、多少にかかわらず特に70年代前半のフォーク全般に独特の共通事項であったことから、本作もその頃の作品かと思われる。そして本作は彼が文学志向でありフォークという領域で意欲的なシンガーであることを物語っている。(松)



TROISIEME RÈVE
Banlieues

IRIS TR1010 '78 廃

A : BANLIEUES
LE PETIT JEU
AMALIA
LA BALLADE DES CHEVAUX NOIRS

B : LEGENDE
CHATEAU

トロワジエム・レヴの唯一の作品。ブザンソンを首都としたかつてのフランシュ・コンテ州出身の6人のミュージシャンと1人の詩人によって作られたものである。シャンソン、フォーク、シンフォニック・ロックの要素を巧みに融合し、斬新でメロディアスな音作りがされている。Alex Abouladzeの詩を切々と歌い込むボーカル、叙情的プレイを展開するエレクトリック・ギター、フォーク色の強いアコースティック・ギター、的を射たバッキングを端正に勤めるピアノ、きらめくような音色のシンセサイザー、シャンソンの香り漂うアコーディオン等による演奏は決して派手ではないが、非常に安定しており、聴き込むほどに味が出てくるものと言える。彼ら独自のサウンドを作り出すことに成功した名作である。(賀)



UNIVERIA ZEKT
The Unnamables

THÉLÈME 6332 501 '72 廃

A : YOU SPEAK AND SPEAK AND COLEGRAM
ALTCHERINGA
CLEMENTINE
SOMETHING CAST A SPELL
OURANIA

B : AFRICA ANTERIA
UNDIA

マグマの別名とも言うべきユニヴェリア・ゼクト。本アルバムはそのユニヴェリア・ゼクト名義の唯一の作品である（他に本アルバムに収録された2曲を収めたシングルが1枚ある)。クリスチャン・ヴァンデル(ds)、フランシス・モーズ(b, org)、フランソワ・カーン(p)、テディ・ラスリー(fl, org)、ジェフ・セファー(sax)、ティト・ピュアント(tp)、クロース・ブラスキ(vo,per)のレギュラー・メンバーに加えて、クロード・アンジェル(g)、ザビュー(vo)、リオネル・ルディッシュ(vo)がゲスト参加している。当然のことながら、そのサウンドはマグマに酷似しているが、ラスリーの持つリリカルな面が強く出たA-3等、ヴァンデル以外のメンバーの個性が反映された箇所もある。マグマの作品に引けを取らない名盤である。(賀)



UPPSALA
Same Title

UPPS 1114 '84 廃

A:ALGARADE
COSTE AND JUKKA
LES NOUVELLES
BOUCLE AUX OISEAUX D'ENFA
CE

B:COUP DE FOLIE
ETUDE NO
UPPSALA

ジャズ・ロックという言葉はこのバンドの独特な雰囲気を伝えたいと思うときやや不適格だ。ギタリストでありボーカリストである Phillipe-Cauvin の持つ個性は色濃くこのグループを支配している。84年に発表されたソロアルバム“Memento”を聴くとギターとボーカルを中心にすえた構成で、メロディアスで複雑な曲はセンシティブなギター、そしてハイトーンのまるでギターの弦のつまびき、あるいは揺らぎのような繊細なボーカルによって成り立っている。これがグループへと還元されるとよりダイナミックかつ構築的なサウンドへと進化する。曲によってはマグマを連想されるが、彼らはそう言われることは好まないようだ。Magma の本質がプリミティブであるとすれば Uppsala はモダニスティックな知性、狂気を備えたバンドだと言えようか。〔修〕



URBAN SAX
Urban Sax

Cobra
COB 37004 廃　1977年

A: Urban Sax Part 1
B: Urban Sax Part 2

クリスティアン・ヴァンデ、エマニュエル・ブーズ、ジルベール・アルトマン等々は独自の明確な音楽性＝コンセプト、個性を持ちそれを最大限に引き出す為の方法＝楽器の技術、作曲力を備えているがその様な人材こそがまず芸術家に相当すると言えるのではないだろうか。アーバン・サックスはG・アルトマンのラード・フリーでのコンセプトを押し進めたテナー＆アルト・サックス奏者計16名から成るグループで他に同傾向の2nd「URBAN SAX No.2」(Cobra COB 37017)82年には3rdピエール・アンリとの共作「PARADISE LOST」(Philips 6313 293)を発表している。本作は半ミニマル形式に乗せた不明瞭で柔かなサックスの音の重なりから成る音響である。ラード・フリーでの奏者A・デュベルネとJ・P・ティローが参加。（松）



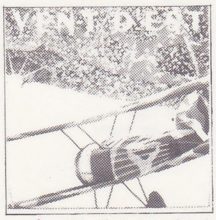
CHRISTIAN VANDER
Tristan Et Yseult

Barclay
80.528 廃
キング　1974年
GXH 2025 廃

A: Mala Welekaahm
Bradia Da Zimehn Iegah
Maneh Fur Da Zess
Fur Di Hel Kobaia
Blüm Tendiwa
Wohldünt Më M Deweless

B: Wainsaht!!!
Wlasik Steuhn Kobaia
Sehnnteht Dros Wurdah Süms
C'est La Vie Qui Les A Menes La!
Ek Sun Da Zess?
De «Zeuhl» Undazir

イヴァン・ラグランジュ監督の同名映画のサントラ盤。後にEGG レーベルよりジャケット違いで再発され国内発売もされたが現在は何れも廃盤となっている。コバイヤ語によるクレジット、クロー・ブラスキ(vo,per)、ステラ・ヴァンデ(vo)、ヤニック・トップ(b)、クリスティアン・ヴァンデ(p,ele-p,dr,vo)、製作にローラン・ティボール(同項参照)が参加、から明白なように本作は実質的に3rdから4thに至る時期のマグマの作品と考えて差しつかえない。全曲C・ヴァンデによるものでリズムを刻むピアノとコバイヤ語のヴォーカルを中心に3rdに近い演劇要素の濃いものである。また「RETROSPECTIVE Vol.1〜2」(RCA PL-37497 '81)には本作のライヴ・ヴァージョンを収録している。マグマの音楽性の核が凝縮された作品。（松）



VENT D'EST

Same title omega 67017 '80 廃

A:Traveller
La Toile
Your Eyes
La Dame En Noir

B:La Madonne Des Sleepings
California's Calling
East Wind
Night Time

プログレ系のアルバムを多数リリースしているOmega studio(元々はジャズの練習スタジオで、レコード会社ではない。)よりリリースされた Vent Dest 唯一のアルバム。オープニングの軽快なナンバーを聴くと、思わず Asia Minor を連想してしまうが、聴き込むにつれて彼らの本質が、もっと女性的で愛くるしいものであることに気付くであろう。曲調はややポップであり、英語で歌われている曲もあったりするが、Pentacle 思わせるナイーヴな感性は十分に魅力的である。本作一枚のみでグループは解散、キーボーダーの Patric Witt はソロ活動に移り、アルバム『For D. Js And Long High Ways』を発表。ポップな好アルバムあるが、プログレ色は大幅に後退してしまっている。近々新作もリリースされるらしい。〔洋〕



RICHARD VIMAL
Migrations

Polydor
2393 209 廃　1978年

A: Migration
Nuance
Evanescence
Septentrion

B: Infinitude
Lunatisme
Les Litanies Des Animaux Cybernetiques
Onirie
Entre Deux Eaux

1970年に発表した自主製作シングル、73年にバークレイ傘下の Zapa レーベルからリリースしたシングル「Je Vous Salue Leur France(Zapa BLY 81 898)」、LP「Transparences(Polydor 2473 059)77年」に続く作品である。ヴィマルの話では「ファースト・アルバムは全くプロモートをしなかったため800枚程度しか売れなかったが、本アルバムはフランスのみならずヨーロッパ各国で積極的プロモートを行った結果、7000枚弱の売上があった。」とのことである。ヴィマルのシンセサイザーとルネ・ラバールのアコースティック・ギターを中心に展開されるメロディアスな演奏はジャケットの絵に象徴される甘くロマンチックなものである。本作品に続いて80年には「Aquarythmies(Polydor 2417 345)」を発表している。（賀）



VISITORS
Visitors

Decca
278.049 廃　1974年

A: Dies Irae
L'extra-Aventure De Villas Boas
Terre-Larbour

B: Flatwoods Story
Nous
Visitors
Le Retour Des Dieu X

ヴィジターズという名前のグループは世界中に幾つかあるが、これはフランスの74年に唯一のアルバムを残したグループ。ロックウッド兄弟の名前がクレジットされている他、アンドレ・スカレリらしい顔写真もみることができる。おそらくロックウッドとしてはかなり初期の録音と思われる。フォルムラ・トレのファーストの1曲目、あるいはブリティッシュ・ロック・ファンにはグレイシャスのアレンジでも知られるミサ曲「怒りの日」で幕をあける本アルバムは、フランスの74年という時期を考えるなら、かなり高水準のシンフォニック・ヘヴィー・ロックであるといえる。ロックウッドのヴァイオリンが光っている。宇宙からの探訪者を一大テーマにしたスケールの大きなトータル的処理がなされている。（山）



WAPASSOU
Wapassou

Prodisc
PS 37342 廃

A: Mélopée
Rien
Musillusion (Wapassou)

B: Châtiment
Trip

ワパスーといえばクリプト・レーベル以後の4枚のアルバムが広く知られるところだが、彼等はそれ以前にも1stシングル「FEMMES FLEURS b/w BORGIA(APGF AS 001)」そして自主レーベルPRODISCより本アルバムを発表している。作詩・作曲、全てのキーボードを操るフレディ・ブルアを中心とする4人のレギュラー・メンバーの他に多彩なゲストを含んで製作されたものである。クリプトでの1stアルバムの原曲とでもいうべきA-3を始め、未だ完成度は発展途上でありながら、彼等の独自なスタイルによる夢幻的なサウンドはすでに確立されている。クリスタルのような響きの「美」を創り出すワパスー。フランスの黎明に埋もれた貴重な一枚である。 (山)



WAPASSOU
Salammbô

CRYPTO
ZAL 6437 廃
1977年

A: Salammbô
première partie

B: Salammbô
deuxième partie

計5枚のアルバムを発表しているワパスーの3rdアルバム。ギュスタヴ・フロベールの文芸作を基に創られたトータル・アルバムである。編成はkey. violin. そしてg.&b.担当の女性の計3人で、さらにゲストの女性ヴォーカリストが参加している。この作品とその前後における彼らのサウンドの特徴は、いわゆるリズム・セクションが存在しない事と、各楽器に極度のエコー処理を施している点にある。こうして生み出された彼らの音楽は独特の浮遊感に満ち、また優美さと厳格さが混在しており、真にオリジナルな存在となり得ている。演奏技術が未熟な為、他のバンドでは到底プレイできまいと思われる女性ギタリストも、このワパスーにあっては重要な個性となっている事が、彼らの独自性を証明している。 (城)



WEIDORJE
Weidorje

Cobra
COB 37014 廃
推定1978～1979年

A: Elhoims Voyages

B: Vilna
Booldemug

C・ヴァンデを除くマグマ、エルドンのほぼ共通のメンバーが集まって出来たヴェードルジュはマグマに近いヘヴィーなジャズ・ロックを奏している。彼らはツアーやTV出演等も行なっていたが、ピナスのバック・バンドであったという説もある。また一部スタジオ・ミュージシャン的な活動もしたようで、フィリップ・シャテルの「サンティマン」(RCA PL 37238)等に何人かが参加している。ゴーティエ＝パガノッティが他のメンバーと対立し活動短期間にして解散したが、当時活動の鈍りがちであったマグマを真向から受け継ぎ、しかも前記の両者がヴァンデの手を離れて制作しただけあって、より躍動感に溢れ伸々としたプレイで埋め尽くしている。A面はパガノッティ、B面はゴーティエのそれぞれペンによるもの。 (中)



WERTHEIMER
Wertheimer

BYG
529028 廃

A: Barjo City
L'enfan D'homme
Le Vent D'avant
Les Vents Perdus
Le Coin Du Bois
Le Ventre Gros

B: Enfantons
Aujourd'hui
Honolulu-Lune
L'arbre Est Mort
Si Un Jour
Pris De Frissons

フランソワ・ベルテーメのファースト・アルバム。彼の唄とエマニュエル・ブーズの「LE JOUR OÚ LES VACHES」でお馴染みのアラン・スーザン、ドゥドゥ・ヴェス(彼らはアリスのメンバーでもある)、イヴァン・ジュリアンらの演奏が見事に一体化した素晴らしい作品である。曲調は大きく二つに分れ、一つはジャケットのデザインに象徴されるファンタジックでメロディアスなものである。シャンソンの香りが漂うベルテーメの叙情的な唄声をギター、キーボード、オーケストラ等が巧みにサポートしている。もう一つはブーズを思わすハードで衝撃的なものである。リズムを強調した演奏をバックに彼が力強く唄う。また、曲と曲の間を「さくら、さくら」のオルゴールで繋いだ部分が数ヶ所あり印象に残る。 (賀)



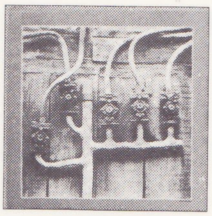
FRANÇOIS WERTHEIMER
Fermez Les Yeux

Philips
9101 133 廃
1977年

A: Bouton D'or
La Chanson Des Quatre Vents
Sainte-Marie Des Cêves
La Dame Ausc Pages
Le Clown

B: Monsieur To
La Petite Solitude
Au Fait
Le Petit Brouillard D'été
Un Cheralier A Traversé La Ville

フランソワ・ヴェルテーメの2作目。BYGよりの前作は、暗くアンニュイなシャンソンを絶妙なオーケストレイションをバックに唄っていたが、本作はあきらかに前作を凌ぐアルバムだと言える。A面は場末のサーカスを想わせるようなうら悲しさを伴うシャンソンだがアレンジの奇抜さに度胆を抜かれる。B面はヘヴィーさを伴う歌で埋めつくされているが、このアルバムの真髄はこちらの面にあるといっていい。まるでエマニュエル・ブーズ（しかも全盛期の）のアルバムかと想わせるようなベースのリフで始まり、熱を帯びた、パワフルな曲構成で息もつかせぬB-1からラストチューンまで素晴らしい流れを創り出している。ブーズやアラン・カーンらと親しく交流しているシンガーであるようだ。 (山)



ROBERT WOOD
Sonabular

EDICI
ED 0061030 廃

A: Inspiration
Shades Of Mu
Words For A Tunisian Song

B: Woodlands
Ed Wige

ヴィブラフォーン奏者ロベール・ウッドのセカンド・アルバム。彼は本国フランスにおいてもそれほど有名な存在ではないが、その音楽活動歴は長く、本作品以外にも1st「TAROT(Edici ED0061020)」、ゴングのピエール・ムーランらをゲストに迎えた3rd「VIBRA ROCK(Polydor 2393137)」4th「TOMBAC VIBE(Polydor 2393150)」と3枚のアルバムを発表している。本作品に収録された曲は、ウッドの完全なソロであるA-3を除いていずれもがジルベール・アルトマン(ds)とのデュオとなっている。ウッドのプレイは、多くのヴィブラフォーン奏者に見られるメロディアスなものではなく、ヴィブラフォーン独特の余韻を残す金属音を巧みに用いて音を組立てるというパーカッション的手法に基づいている。 (賀)



WURTEMBERG
Rock Fantasia Opus 7

Sterne STE 26511 '80 廃

A:Rockopus 7
Sous-titre
Berceuse Gratinée
Préfixe et danse
Allemandes

B:Concerto pour un minot
Invitation vous avez bien mn
Rockopus

元 Iris のキーボーダー Alain Carbonare が、Alain Markusfield との活動、Machin（プログレッシヴなトラッドグループ）を経て発表したのが本アルバムである。Machin 時代から用いていたプサルテリオン（中世の弦楽器）に自らの手で改良を加え（彼は楽器製作者としても著名である。）この四重奏を全面的にフューチャーして、透明で繊細かつ中世的気品漂う名作を創り上げた。ここではロック、ジャズ、トラッド、中世音楽が一体となって昇華され、至上の美となって結実しているのである。残念ながらフランスでの知名度は今一つの様だが、スイス、カナダでの評価は高く、本アルバムは、モントルーレコード大賞を受賞している。メンバーを一新して製作される 2nd も、本作同様高水準な作品が期待される。〔洋〕



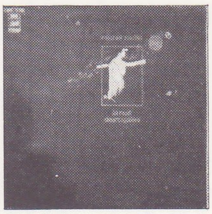
ZABU
My Coffin's Ready

Theleme ?
6332 750 廃

A: Yellow Girl
Doctor Moonshine
Coffin's Ready

B: Subversion Blues
Informer Blues
Silent Angel
Ice-Pick Blues

元ユニベリア・ゼクトのボーカリスト、ザビューのソロ・アルバムである。収録された 7 曲はクリスティアン・ヴァンデ、ヨッコ・ジョフ・セファー、テディー・ラスリー、フランシス・モーズらマグマ・ファミリーが参加したものとほとんど無名のミュージシャンがバックを勤めたものの 2 種類に大別されるが、両者ともザビューの個性を強く打ち出したブルース色の強い内容となっている。そうした中で、B-3に収められた「Silent Angel」におけるセファーのテナー・ソロは出色の出来と言える。このアルバムを発表した後レーベルをソノプレスに変え、バック・ミュージシャンも一新して（リシャール・ローがゲスト参加）、よりブルース色を強めた「Zabu & Co（Sonopresse Spot ST 69.643）」を76年にリリースしている。（賀）



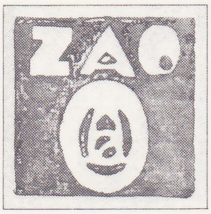
MICHEL ZACHA
La Nuit Des Cigales

EMI Pathe' 東芝EMI 1972年
2C 064-12299 廃 EOP 81012 廃

A: Accident
Mary-Anna
La Dame Nue
Shanghi-Wô
Temps De Pluie

B: Promesses D'atlantides
End Of The Beginning
Les Cigales

70年代初期、ミッシェル・ポルナレフをはじめとするフレンチ・ポップスが日本にも紹介された。シャンソンの枠を越えた彼らのサウンドは新鮮なものだったが、一部のアーチストを除いては、正しい評価を受けることはなかった。当時の評論家は全てをドラッグ・カルチャーの一語で片付けようとした。本アルバムは日本盤が出ているが、特にそのライナーを見ると、はなはだしく誤解されているようだ。「蟬の夜」と名付けられたこのアルバムは、センシティヴな感性に裏打ちされた叙情的な小曲集のA面とジャン・ピエール・アラーサンのギター・プレイが素晴しいB面の対比が興味深い。なお、彼のアルバムはこの他に、「VOL D'ICARE」（Pathe' 064 12729）と「INUTILE」（同 068 14489）がある。（宇）



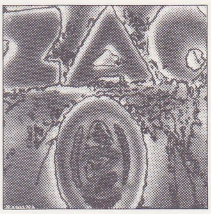
ZAO
Z＝Ƶ

Vertigo 1973年
6499 738 廃

A: Marochsek
Ataturc
Ronach

B: Atart
La Soupe
Satanyia

ザオのファースト・アルバム。セファー（ss,b-cl）、カーン（p）、トゥロン（ds）、ジョエル・デュグルノ（b）、ジャン＝イヴ・リゴー（vln）の 5 人に加えて女性ボーカリスト、モリシア・プラトンが参加している。セファー、カーンがマグマで得たものと自らのアイディアを融合させて創り出したサウンドは最高水準の完成度を誇る。プラトンのソプラノ・ボイスによるスキャットとソプラノ・サックスのアンサンブルを中心に、ピアノとバイオリンの各ソロもフィーチャーして、曲はスピーディかつダイナミックな展開を見せる。演奏は緊張感を伴ってメロディアスに進行する。切れのよいリズムも印象的である。それは、ジャズ・ロックという一言では決して表現できない、正に血がたぎるような音楽である。（賀）



ZAO
Kawana

RCA 1976年
FPL 10178 廃

A: Natura
Tesrouf
F. F. F.

B: Kabal
Sadie
Free-Folk

「Z＝Ƶ」「OSIRIS（Disjuncta 000004）74年」「SHEKINA（RCA FPL 10097）75年」に続くザオのフォース・アルバム。参加メンバーはヨッコ・セファー（ss, sopranino-s, vo, p）、フランソワ・カーン（p, syn）、ディディエ・ロックウッド（vln, b-vln）、ジェラール・プレヴォ（b）、ジャン＝ミ・トゥルオン（ds）の 5 人である。驚異的リズム・セクションをバックに、セファー、カーン、ロックウッドの 3 人が時には一体となりメロディアスに、また時には手に汗握るインタープレイでスピーディに、演奏を繰り広げていく。そのサウンドはロックとジャズを中心にしてクラシックや民族音楽の要素も取り入れた極めて完成度の高いものである。グループはこの後「TYPHARETH（RCA 3712'）77年」を発表し、解散する。（賀）



ZNR
Traité De Mécanique Populaire

Scopa 1 1979年
10002 廃

FACE ZAZOU: Ancien automate mexicain/Ecorcherie romantique por coeur fêlé/Enchevêtrement désordonné/Alia lasse/La vieille montre/Tout debout/Printemps au jardin potager vu dén haut/Triste prose et vieux billards/Garden party

FACE RACAILLE: Chanson triste pour faire/Nu au bain/Sérénades italiennes/Trou de blé/Vieille chanson irlandaise/Mémoire d'un chien/Un véritable monstre à musique/Printemps au jardin potager vu d'en bas/Deux pieces élémentaires pour piano et un prélude

「一般機械概論」という逆説的なタイトルを持つこの作品は79年に発表されている。76年に発表された前作「Barricade 3」を洗練/発展させた形になっている。具体的には電気ピアノのトレモロ効果といった電気的な音色処理を排し、生楽器による室内楽曲集といった感じでまとめてある。多分、初めてこれを聴く人は、BGMとして聴き流してしまうかもしれない。だが何度か流している内に、彼等のアイロニーやトリックが見えてくるはずだ。尚、メンバーのソロとしてはエクトール・ザズーが81年に「La Perversita」、82年に「Dix-Huit」、83年に「Malimba」（パパ・ウェンバとのデュオ）、ヨセフ・ラセイユが83年に「6 Petites Chansons」「Les Flots Bleus」（パトリック・ポルテラとのデュオ）をそれぞれ発表している。（千）

Abus Dangereux
Le Quatrième Mouvement (FLVM 3021) '80
Bis (Elanore Production EL 31482) '82
Happy French Band (Metro Records JB 105) '83
Live (Metro Records JB 106) '85
Acintya
La Cité Des Dieux Oubliés (SRC 161.754) '78
Jean-Pierre Alarcen
Jean-Pierre Alarcen (L'Escargot ESC 371) '78
Tableau No.1 (Scoppuzzle ZZ 001) '80
Alice
Alice (BYG 529.016) '70
Arrêtez Le Monde (Polydor 2393 043) '72
Alpha Centauri
Alpha Centauri (ATS 3071) '76
Alpha Du Centaure
Contact (Spirales SRP 3318) '79
Alpha Ralpha
Alpha Ralpha (WB 56 330) '77
Ame Son
Catalyse (BYG 529.324) '70
Ange
Caricatures (Philips 6332 066) '72
Le Cimetière Des Arlequins (Philips 6325 037) '73
Au-Delà Du Délire (Philips 9101 004) '74
Emile Jacotey (Philips 9101 012) '75
Par Les Fils De Mandrin (Philips 9101 090) '76
By The Sons Of Mandrin (Philips 9101 160) '76
Tome VI (Philips 6641 715) '77
En Concert (RCA 37153) '78
Guet-Apens (Philips 9101 184) '78
Vu D'Un Chien (Philips 6313 156) '80
Moteur ! (Philips 6313 156) '81
A Propos De (Philips 6313 404) '82
La Gare De Troyes (Philips 8121 391) '83
Fou (Trema 310 182) '85
Ange (Trema 310 216) '86
Angipatch
Vie (TO 1531) '81
Délirium (TO 1550) '82
Anubis
Anubis (RCA ZL 37781) '83
Apres La Pluite
La Célèbre ascension Abyssale De Joseph Celsius (Edition De Plein Vert (78.33.09) '79
Arachnoïd
Arachnoïd (Divox A 3304) '79
Dan Ar Bras
Douar Nevez (Hexagone 883 009) '77
Allez Dire A La Ville (Hexagone 883 021) '78
The Earth's Lament (Hexagone 883 034) '79
Acoustic (FLVM 3062) '83
Musiques Pour Les Silences A Venir (RS 3063) '85
Arcane V
Marron Dingue (Exit Records ARC 001) '79
Archaïa
Archaïa (CC 77.976) '77
Artcane
Odyssée (Philips 9101 141 '77
Art Zoyd
Symphonie Pour Le Jour Où Brûleront Les Cités (Art Zoyd 001) '76
Musique Pour L'Odyssée (Atem 7002) '79
Génération Sans Futur (Atem 7007) '80
Symphonie Pour Le Jour Où Brûleront Les Cités (Atem 7010) '81 *reissue of different mixing
Phase IV (Recomended Records 14 & 15) '82
Espaces Inquiets (Cryonic INC 1153) '83
Le Mariage Du Ciel Et De L'Enfer (Cryonic MAD 3009) '84
Asia Minor
Crossing The Line (WAM 001) '79
Between Flesh And Divine (WAM 101) '81
Atlantide
Atlantide (Crypto ZAL 6423) '76
Atmosphere
The German's Gates (PDA 002) '79
Atoll
Musiciens-Magiciens (Eurodisc 87 008) '74
L'Araignée Mal (Eurodisc 87 028) '75
Tertio (Eurodisc 913 132) '77
Rock Puzzle (Eurodisc 913 300) '80
Babel
Babel (Philips 9101 060) '76
Bahamas
Le Voyageur Immobile (Motor 2933 201) '76
Setrak Bakirel
Le Mur (Saravah SHL 1100) '83
Claude Barthélemy
Jaune Et Encore (Cobalt CBL 001) '79
Forrest One (Celluloïd CEL 6583) '81
Moderne (Owl 030) '83
Bedja Becht
Subrepticement (AWA Records BB 006) '79
Jacques Berrocal
Musiq Musiq (Futura SON 06) '73
Parallèles (DAV 01) '78
Dominique Bertram
Chinese Paradise (String 33853) '85
Philippe Besombes
Libra (Pôle 0004) '75
Besombes-Rizet (Pôle 0006 & 7) '76
Besombes (Divox A 3305) '79
Tim Blake
Crystal Machine (Egg 900.545) '77
Blake's New Jerusalem (Egg 90.298) '78
Dominique Blanc-Francard
Ailleurs (Riviera 521.209) '76
Sireguy Et Blanc-Francard (Pathé 2C 068-143 72) '73
Pierre Blanchard
Each One - Touch One (CY 733.618) '85
Bloom
Bloom (Sonopress 2S 068 16.686) '79
Didier Bocquet
Eclipse (KO 77.11.10) '77
Voyage Cérébral (FLVM 3012) '79
Sequences (Pulse 004) '81
Pictures Of Life (Pulse 008) '84
Roland Bocquet
Paradia (Cobra COB 37 008) '77
Robot Rose (RCA Media RCM 2) '82
La Balance (Milan A 188) '82
Jean-Pascal Boffo
Jeux De Nains (Muséa FGBG 2001) '86
Boomerang
Boomerang (SPX 6839) '82
Emmanuel Booz
Le Rastaurant D'Alice (Barclay 920.186) '70
Le Jour Où Les Vaches (Atlantic WEA 50.095) '74
Clochard (Atlantic WEA 50.294) '76
Dans Quel Etat J'Erre (Polydor 2393 259) '79
Christian Boulé
Photo Musik (Polydor 2473 086) '78
Non Fiction (Polydor 2393 227) '79
François Breant
Sons Opiques (Egg 900 553) '78
Voyeur Extra-Lucide (Egg 900 584) '79
Brezovar
Rue Du Salbert (Crypto ZAL 6448) '78
Serge Bringolf
Strave (OM 67018) '80
Vision (OM 67028) '81
Agboville (OM 67044) '83
Live (RBO R.1383 D) '83
Bunny Brunel
Touch (Warner WEA 56636) '79
Ivanhoe (Babybridge Records KUX 168.B) '8?
Valérie Btesh
Rêves Cristal (Crypto ZAL 6414) '77
Jean-Louis Bucchi
Sunflower (Terma 310 047) '78
Bulldozer
Des Gamelles Et Des Bidons (RCA PL 37283) '79
François Cahen
Piano Concerts (Le Chant Du Monde LDX 74588) '76
Tendre Piano Solo (Free Bird FLY 02) '78
Thanks You Friends (Atlantic 50489) '78 *with Didier Lockwood
Great Winds (Trema 310 069) '79
Ethnic Duo (Blue Morge BM 1004) '81 *with Yochk'o Seffer
Piano Rêves (Cryonic MAD 3019) '86
Philippe Caillat
French Connection, Dirty Rats (Ja & Ro 003) '81
Fire Brigade (Thirdway TW 001) '83
Carpe Diem
En Regardant Passer Le Temps (Arcane 913051) '75
Cueille Le Jour (Crypyo ZAL 6403) '76
Catastrophe
High Dynamis (Etonnates Music GC 911) '82
Catharsis
Masq (Saravah SH 10.025) '71
Les Chevrons (Saravah SH 10.035) '72
Rimbaud, C'Est Toi (Pathé Marconi 064 114 73 & 74) '72
Pop Poèmes (Pathé Marconi PES 528.002) '73
32 Mars (Festival FLD 653) '75
Illuminations (Festival FLD 655) '75
Le Boléro Du Veau Des Dames (Festival FLD 676) '76
Et S'Aimer Et Mourir (Festival FLD 678) '76
Catharsis (Soleil Musqué SMA 33004)
Philippe Cauvin
Climage (KI Records KC 1111) '82
Memonto (KI Records DEL 168) '84
C.C.P.P.
C.C.P.P. (Flamophone 2933 104) '76
André Ceccarelli
Ceccarelli (Carla CAR 500.002) '77
André Ceccarelli (JMS 014) '81
Chemin Blanc
Chemin Blanc (RCA PL 37010) '76
Chemin Blanc (Hexagone 883 016) '77
Chêne Noir
Aurora (Futura Voix 01) '71
Chant Pour Le Delta, La Lune Et Le Soleil (Disque Chêne Noir C.N.001) '76
Orphée 2000 (Disques Chêne Noir C.N.002) '77
Guigou Chenevier
Arthur Et Les Robots (SAP 305) '82
A L'Abri Des Micro-Climats (Recomended Records Music 07) '84
Jean-Luc Chevalier
Jean-Luc Chevalier (Cryonic MAD 3013) '85
Chute Libre
Chute Libre (Pathé 2C 066 14.359) '77
Ali Baba (Pathé 2C 068 14.522) '78
Clearlight
Clearlight Symphony (Virgin 2029) '75
Forever Blowing Bubbles (Virgin 2039) '75
Les Contes Du Singe Fou (Isadora ISA 9009) '77
Visions (Polydor 2393 185) '78
Messenger Of The Son (Catero CAT 008) *as solo work of Cyrille Verdeaux
Clivage
Regina Astris (Gratte Ciel 2003) '77
Mixtus Orbis (Gratte Ciel 2009) '79
Kassiopée (FLVM 3073) '85
Coeur Magique
Wakan Tanka (BYG 529.018) '71
Jean Cohen-Solal
Flûtes Libres (Sonopresse Daphy 69.504 U) '72
Captain Tarthopom (Sonopresse Connection CTN 69.569) '73
Coincidence
Coincidence (Tromblas RY 1133) '78
Clef De Ciel(Village 100 255 251) '79
Pascal Comelade
Paralello (Parasite PAR 002) '80
Sentimentos (DYS 05) '82
Détail Monochrome (DSA 2001) '84
Concept
Avis De Passage (Metro JB 101) '83
Confluence
4 Voyages (RCA FLP 10132) '76
Arkham (RCA PL 37109) '77
Chroniques Terrestres (RCA PL 37239) '79
La Confrérie Des Fou
La Confrérie Des Fou (Ballon Noir BAL 13008) '79
Cortex
Troupéau Bleu (Espérance ESP 155524) '75
Mary & Jeff (Espérance ESP 155524) '75 *different cover of Troupeau Blue
Volume 2 (Espérance ESP 165 501) '77
Pourquoi ? (Crypto ZAL 6458) '78
Cruciferius
A Nice Way Of Life (Egg 940 011) '70
Datura
Mr. Untel (01 JAC DA) '82
Daydé
J'Aime (Riviera 521 160) '71
White Soul (Riviera 521 189) '72
Mamy Blue (Riviera 121 384) '72
Ballades (Barclay 422 002) '76
Christian Decamps
Le Mal D'Adam (Philips 9101 233) '79
Francis Decamps
Histoire De Fou (Philips 9101 212) '79
Decko
Mythe Xero (FLVM 2011) '82
Delired Cameleon Family
Visa De Censure n.X (EMI 2C 066 13087) '75
André Demay
Généric (WEA 58115) '80
Claude Demet
Horde (Crypto ZAL 6404) '82
Introversion (S2.854) '85
Distance
Moshi Moshi (Mercury 6313 143) '81
Pascal Duffard
Dieu Est Fou (CBS 81589) '76
Dün
Eros (SAB 001) '81
Dynastie Crisis
Sed Libera Nos A Malo (Somethin' Else 849 5

22) '70
Dynastie Crisis (EMI 2C 062 12363) '72
Alain Eckert
Alain Eckert Quartet (L'Amanite AM 011) '82
Michel Edelin
Flûtes Rencontre (Marge 15) '83
Eden
Aura (Oxygène OXY 045) '79
Eden Rose
On The Way To Eden (Katema KA 33 507) '69
Edhels
Oriental Christmas (CA 94510) '86
Edition Spéciale
Allée Des Tilleuls (United Artists UAS 29 9 65) '76
Aliquante (RCA PL 37069) '77
Horizon Digital (RCA PL 37215) '78
Eider Stellaire
Eider Stellaire (K 001) '81
Eider Stellaire (K 2) '86
Elohim
A L'Aube Du Verseau (Philips 6325 207) '75
Elohim
Le Mana Perdu (ELO 666) '83
Emergency Exit
Sortie De Secours (Pôle 0015) '76
Claude Engel
Engel Story (CBS 65439) '73
Fantasmagory (CBS 81261) '76
Guitarisme (Apache 240291-1) '83
Ergo Sum
Mexico (Thélème 6332 500) '72
Eskaton
Ardeur (E 38001) '80
Fiction (E 38301) '83
Etron Fou Leloublan
Batelages (Gratte Ciel 2001) '77
Les Trois Fous Perdegagnent (Tapioca 10020) '78
En Direct Des Etats-Unis D'Amérique (Celluloîd CEL 6572) '79
Les Poumons Gonflés (TMSA 3301) '82
Les Sillons De La Terre (Le Chant Du Monde LDX 74813) '84
Face Aux Éléments Déchaînés (Rec Rec 08) '85
Expérience
Expérience (Vogue SLVLX 575) '71
Exvitae
Mandarine (EV 1) '79
Falstaff
Prononcez (001) '81
Fille Qui Mousse
Trixie Stapelton 291-Se Taire Pour Une Femme Trop Belle (Futura RED 04) '73 *test pressing only
Flamen Dialis
Symptome Dei (FLVM 3006) '79
Fluence
Fluence (Pôle 0008) '76
Foehn
Faèria (C.C 4610) '85
Patrick Forgas
Cocktail (Gratte Ciel 2006) '77
Marc Fosset
La Récré (America AM 6153) '78
Full Moon Emsemble
Crowded With Loneliness (CBS AKT S 64267) '71
Patrick Gauthier
Bébé Godzilla (CY 733.612) '82
Gong
Magick Brother (BYG 529 305) '70
Bananamoon (BYG 529 345) '71
Camenbert Électrique (BYG 529 353) '72
Continental Circus (Philips 6332 033) '72
Flying Teapot (BYG 529 027) '73
Angels Egg (Virgin V 2007) '73
You (Virgin V 2019) '74
Shamal (Virgin V 2046) '76
Gazeuse (Virgin V 2074) '77
Est Mort (Tapioca 10002 & 3) '77
Live (Virgin V 3501) '77
Floating Anarchy (LTM_1002) '77 *as planet Gong
(Pierre Moerlen's) Gong
Expresso 2 (Virgin V 2099) '78
Downwind (Arista SPART 1080) '79
Time Is The Key (Arista SPART 1105) '79
Live (Arista SPART 1130) '79
Leave It Open (Arista SPART 202 955) '81
Mother Gong
Mother (Charly CRL 5007) '78 *as solo of Gilly Smith
Fairy Tales (Charly CRL 5018) '79
Robot Woman (Butt 003) '81
Robot Women 2 (Butt HAI 100) '82
Alain Goraguer
La Planète Sauvage (EMI 2C 066 12698) '73
Jean-Philippe Goude
Jeunes Années (Saravah SH 10064) '76 *with Olivier Colle
Drones (Polydor 2473 108) '80
Daniel Goyone
Daniel Goyone (Cream 044) '83
Philippe Grancher
3000 Miles Away (Pôle 0014) '77
Grime
Grime (D 5679) '79
Groovy Pop Session
Groovy Pop Session (Philips 6332 044) '72 *including Ange, Pulsar, etc.
Georges Grünblatt
K-Priss (Polydor 2473 911) '80
Philippe Guerre
Cristal (NP 5255) '79
Concerto Pour La Mort D'Un Clown (PG 8111) '82
Gutura
Des Etres Au Cerveau Apparent (Sterne STE 26510) '80
Gwendal
Gwendal (EMI 2C 064 12725) '74
Gwendal (EMI 2C 064 13075) '75
Gwendal (EMI 2C 066 14403) '77
4 (EMI 2C 068 14841) '79
En Concert (EMI 2C 068 72379) '81
Locomo (EMI 2C 068 72707) '83
Danse La Musique (EMI 1729181) '85
Haike
Le Séquence Du Holter (AGE 175) '82
Jean-Luc Hamonet
Mélodie, Mélodie Rock (KO 821203) '83
Hamsa Music
Hamsa (Fiesta 360.068) '76
Hamsa Music (Mercury 6313 142) '81
Feel Good At Last (Freelance FRL 004) '84
Yves Hasselmann
Couleurs Du Temps (Crypto ZAL 6468) '78
Mécanique Mentale (Crypto ZAL 6497) '80
To Jazz Or Not To Jazz (Y.H. Impro 001) '83
Soleil Noir (Y.H. Impro 002) '84
Dashiell Hedayat
Obsolète (Shandar 10.009) '71
Heldon
Electronic Guerilla (Disjuncta 12/13) '74
Allez Teia (Disjuncta 000002) '75
It's Always Rock'n'Roll (Disjuncta 000006 & 7) '75
Agneta Nilsson (Urus 000011) '76
Un Rêve Sans Conséquence Spéciale (Cobra COB 37002) '76
Interface (Cobra COB 37013) '78
Stand By (Egg 900 578) '79
Heratius
Gwendolyne (Frigico 3004) '79
Herbe Rouge
Côté Cour, Côté Jardin (Scopa 10003) '78
Hiatus
Avant-Demain (HI 5893) '84
Honeyelk
Stoyz Vi Dozévéloy (Oxygene OXY 047) '79
Horde Catalytique Pour La Fin
Gestation Sonore (Futura SON 03) '71
Human
Un Certain Pays (Cryonic MAD 3016) '85
Human Egg
Human Egg (Crypto ZL 37156) '78
Hydravion
Hydravion (Cobra COB 37012) '78
Stratos Airlines (Carrère 67350) '80
Les Î
Les Î (Celluloîd CEL 6598) '81
Dans L'Hémisphére Nord (Le Chant Du Monde LDX 74797) '84
Icare
Aquarelle (SRC 491 454) '80
Ilitch
Periodik Mindtrouble (Oxygène OXY 09) '78
10 Suicides (Scopa 10007) '80
Ilous
Ilous (Flamophone 2933 101) '75
Ilous & Decuyper
Ilous & Decuyper (Flamophone 33.03) '72
Iris
Litanies (Sonopresse Connection CTN 69 561 B) '72
Alain Jack Civilization
Bluesy Mind (BYG 529 011) '69
Gilles Janeyrand
Gilles Janeyrand (Heloîse Disques HEL 67111)
Jenghiz Khan
Well Cut (Barclay 920.313T)
George Jinda
The Wheel Of Love (Motors MT 44051) '76
Françoise Joly
Opus 4756 (JJG 001) '83
Night And Deal (JJG 002) '85
Jean-Michel Kajdan
First Step (Polydor 2393 249) '79
Mummy (JMS 021) '83
Ariel Kalma
Ariel (Astral a 9999) '75
Noises (Kamikaze 4) '77 *side 2 only
Osmose (S.F.P.P. 35021 & 22) '78 *with Richard Tinti
Interfréquence (MP 2000 MP 120) '79
Alain Kan
Alain Kan (Motors MT 44026)
Heureusement En France, On Ne Se Drogue Pas (Motors MT 44036)
Komintern
Le Bal Du Rat Mort (Harvest 2C 062 11774) '71
Lard Free
Gilbert Artman's Lard Free (Vamp VP 59500) '73
I'm Around About Midnight (Vamp VP 59502) '77
Lard Free (Cobra COB 37007) '78
La Rossa
A Fury Of Glass (AG 1013) '83
Teddy Lasry
Action Printing (Sonimage SI 820) '75
e=mcc (RCA FPL1 0148) '76
Hypnose (IML 04) '77 *with Top, Thollot, etc
Le Femme Qui Venait D'Ailleurs (Sonimage SI 823) '77
Seven Stones (RCA PL 37257) '79
Interpol (Sonimage SI 825) '79
Tutti Flutti (Patchwork 22) '81
Power (Sonimage SI 829) '82
Music Band (Patchwork MC 76) '83
Lasry-Baschet
Chronophagie-Structures Sonores (Arion 30 U 060) '69
Structures Sonores Vol.1 (BAM 5878) '76
Cyril Lefebvre
Musique Française Et Américaine De La Même Époque (Cezame 1023) '76
Cocaîne Blues (Fléau 7001) '78
Vibrato (Fléau 7006) '79
Lievaux-Transfo
Passage Public (Trema 310 073) '80
Porte 50 (Trema 310 097) '81
Georges Locatelli
Eclectic Guitar (Musica MUS 3015) '80
Didier Lockwood
Jazz-Rock (Music Zag 773.001) '77
New World (MPS 0028.637) '79
Live In Montreux (JMS 011) '81
Fusion (JMS 015) '81 *with Top, Vander and Wideman
Fasten Seat Belts JMS 016) '82
Lockwood (America AM 6162) '82 *reissue of Jazz-Rock
The Kids (JMS 024) '83
Trio (JMS 031) '83 *with Catherine and Escoudé
Didier Lockwood Group (JMS 032) '84
Out Of The Blue (JMS 037) '85
Francis Lockwood
Debbi (America AM 6161) '82
Home Sweet Home (JMS 029) '83
Yves Et Alain Lorentz
Espaces 2 (SM 30 925) '81
Lorenzini-Ballester
Orchestra II (Paris Album DKB 3365) '84
Maajun
Vivre La Mort Du Vieux Monde (Vogue SLVX 545) '71
Ma Banlieue Flasque
Ma Banlieue Flasque (Celluloîd LTM 1021) '79
Madrigal
School Of Time (Corelia MAD 001) '78
Magicia
In Searching Of Mister Money (F.R Disques 3001) '81
Magma
Magma (Philips 6395 001 & 002) '70
2 (Philips 6397 031) '71 *reissued as 1001 Centigrades
Mekanïk Destruktïw Kommandöh (Vertigo 6499 729) '73
Köhntarkösz (Vertigo 6325 750) '74
Live (Utopia CYL2-1245) '75
Üdü Wüdü (RCA FPL1 7332) '76
Inédits (Tapioca TP 10001) '77
Attahk (Eurodisc 913 213) '78
Retrospective Vol.3 (RCA PL 37481) '81
Retrospective Vol.1 & 2 (RCA PL 37497) '81

Merci (Jaro 4120) '84
Mythes Et Légendes Volume 1 (Label Du Bon Indépendant Pathé Marconi 2404411) '85
Offering (Jaro 4129 & 30) '86 *as solo of Christian Vander

Michel Magne
La Terre (Egg 90 187) '78
L'Eau (Egg 91 039) '81

Mahjun
Mahjun (Saravah SH 10 040) '73
Mahjun (Saravah SH 10 047) '74
Happy French Band (Gratte Ciel 2005) '77

Mahogany Brain
Mahogany Brain (Futura RED 02) '71
Smooth Sick Lights (Pôle 0013) '77

Malicorne
Malicorne (Hexagone 883 002) '74
Malicorne (Hexagone 883 004) '75
Almanach (Hexagone 883 007) '76
Malicorne (Hexagone 883 015) '77
Quintessence (Hexagone 883 018) '78
L'Extraordinaire Tour De France (Ballon Noir BAL 13006) '78
En Public (Ballon Noir BAL 13010) '79
Le Bestiaire (Ballon Noir BAL 13012) '79
Balançoire En Fou (Elektra 52280) '81

Gérard Manset
Manset (EMI 2C 062 11788) '68
La Mort D'Orion (EMI 2C 064 15268) '70
Long, Long Chemin (EMI 062 12342) '72
Y'A Une Route (EMI 2C 062 13038) '75
Rien À Raconter (EMI 2C 070 14721) '76
2870 (EMI 2C 068 14482) '78
Royaume De Siam (EMI 2C 068 14281) '79
L'Atelier Du Crabe (EMI 2C 070 72291) '81
Le Train De Soir (EMI 2C 070 72443) '81
Comme Un Guerrier (EMI 2C 070 72556) '82
Lumières (EMI 261 1729011) '84
Prisonnier De L'Inutile (EMI 1729661) '85

Sylvin Marc
Nite Life (Cream 033) '83

Albert Marcoeur
Albert Marcoeur (WEA 40 546) '74
Album À Colorier (WEA 50 215) '76
Armes Et Cycles (Philips 9101 210) '79
Celui Où Y'A Joseph (Le Chant Du Monde LDX 74796) '84

Luc Marianni
Souvenirs Du Futur (Upon Type UT 180) '80
D.G Protrait (Upon Type UT 182) '82
Voyage Vers L'Harmonie (Upon Type UT 183) '83

Alain Markusfeid
Le Monde En Étages (Barclay XBLY 920 179) '70
Le Son Tombé Du Ciel (Barclay XBLY 920 327) '71
Le Désert Noir (Egg 900 528) '77
Platock (Egg 900 556) '78
Contemporus (Egg 900 581) '79
Live (Egg 200 146 & 147) '81

Martin Circus
En Direct Du Rock'n'Roll Circus (Vogue SLVX 428) '69
Acte II (Vogue SLVX 595) '71

Media
Réalité (FLVM 3019) '81

Melmoth
La Devanture Des Ivresses (Arion 30 T 079) '69

Melody
Come Fly With Me (Pôle 0011) '76
Yesterlife (Vogue LDA 20278) '77

Memoriance
Et Après (Eurodisc 913 084) '76
L'Ecume Des Jours (Philips 9101 265) '79

Métabolisme
Tempus Fugit (Crypto ZAL 6413) '77

Patrice Meyer
Racines Croisées (OM 67041) '83

Alain Mion
Pheno Men (Carrère CA 681 66106) '84

Patrick Modiano-Hughes De Courson
Fonds De Tiroir 1967 (Ballon Noir BAL 13011)

Mona Lisa
L'Escapade (Arcane 87015) '74
Grimaces (Arcane 913 050) '75
Le Petit Violon de Mr. Grégoire (Crypto ZAC 6402) '77
Avant Qu'Il Ne Soit Trop Tard (Crypto ZAL 6440) '78
Vers Demain (Crypto ZAL 6483) '79

Morange & Fertier
Love Spirale (Gratte Ciel 2008) '78

Mormos
Great Wall Of China (CBS S 64430) '71
The Magic Spell Of Mother Wratch (CBS S 64979) '72

Morning Calm
Song Under A Tree (Barclay 920238) '70

Mosaic
Ultimatum (Ekimoz 441.52.78) '78

M.O.T.U.S
Machine Of The Universal Space (Sonopresse Connection CNT 69.562) '72

Michel Moulinié
Chrysalide (Crypto ZAL 6441) '78

Moving
Moving (Amo CA 641) '80

Moving Gelatine Plates
Moving Gelatine Plates (CBS S 64399) '71
The World Of Genius Hans (CBS S 64146) '72

Francis Moze
Naissance (Harps Prod FM 1082) '85

Music Is My Honey
Music Is My Honey (Thélème 6332 752) '73

Nef
Mais, Alors, C'Est À L'Envers (340 MS + 1) '83

Nemo
Nemo (Agave AG 35702) '73
Doin' Nuthin' (Agave AG 35703) '74

Neo
Neo (PS 380 110) '80

Noa
Noa (Noa 1) '81

Noco Music
Evasion (NC 35001) '82
Saxophones Et Percussions (Auvidis AV 4723) '83

Nuance
Il Est Une Légende (FLVM 3048) '83

Nyl
Nyl (Urus 000013) '76

Ocarinah
Première Vision De L'Étrange (Calypsia CAL 78010) '78

Omega Plus
How To Kiss the Sky (Pitch 3001) '69

Ometaxalia
Lettre D'Ocre (Uniteledis UNI 19776) '77 *with Bucchi
Antilope 1 (Spalax 8.6812) '79

Oniris
L'Homme-Voilier (Barclay 900 583) '79

Opale
La Dernière Toile Du Maître (Podom POD 02)

Open Air
Open Air (Chicago 2000 900.155) '78

Ophiucus
Ophiucus (Barclay XBLY 930.378) '72
Salade Chinoise (Barclay XBLY 80 495) '73

Orion
La Nature Vit, L'Homme Lui, Critique (Oxygene OXY 025) '79

Ose
Adonia (Egg 90.277) '78

OZ Quartet
Instant (EC 11) '84

Bernard Paganotti
Paga (Cream 120) '85

Pandemonium
Ville Ouverte (Atem 7003) '79
Non, Jamais L'Espérance (Atem 7004) '79

Pantincruel
J'Y Retourne Immédiatement (CC 79.148) '79
Courants D'Airs (EC 4) '82

Papillon
La Planète Rock'n'Roll (EMI 2C 064 12734) '74

Jean-François Papin
Insane Dances (Upon Type UT 382) '81

Emmanuelle Parrenin
Maison Rose (Ballon Noir BAL 13001) '77

Emmanuelle (Parrenin), Phil (Fromont), Claude (Lefebvre)
Château Dans Les Nuages (Cezame CEZ 1016) '76

Pataphonie
Pataphonie (Pôle 0003) '75
Le Matin Blanc (Féeri 178) '79

Patchwork
Ouvertures (Cobra COB 37016) '78

Pentacle
La Clef Des Songes (Arcane 913 001) '75

Serge Perathoner
Impressionnisme (Gratte Ciel 2010) '78

Perception
Perception (Futura GER 019) '71
Perception & Friends (ADMI 01) '73
Mestari (Le Chant Du Monde LDX 74555) '74

Claude Perraudin
Mutation 24 (RCA PL 37070) '77

Petites Annonces
Petites Annonces (BB 33.33) '81

Richard Pinhas
Rhizosphère (Cobra COB 37005) '77
Chronolyse (Cobra COB 37015) '78
Iceland (Polydor 2393 254) '80
East West (CBS 84787) '80
L'Ethique (Pulse 006) '82
Perspective (WEA 24 0303-1) '84

Plat Du Jour
Plat Du Jour (Spedball 1002) '77

Pôle
Kotrill (Pôle 0001) '75
Inside The Dream (Pôle 0002) '75

Potemkine
Foetus (Pôle 0010) '76
Triton (Tartempion 7162) '77
Nicolas II (Phaeton 7801) '78

Pouin Final
Pouin Final (RCA FLP1 0147) '76

Jean-Paul Prat
Masal (Stand By SB 83121) '84

Puissance 13 + 2
Puissance 13 + 2 (Thélème 6641 037) '72

Pulsar
Pollen (Kingdom KY 28.031) '75
The Stands Of The Future (Kingdom KA 20.226) '76
Halloween (CBS 82477) '77
Bienvenue Au Conseil D'Administration (Theâtre De La Satire CS 811) '81

Rahmann
Rahmann (Polydor 2393 252) '80

Red Noise
Sarcelles-Lochères (Futura RED 01) '71

Alain Renaud
Renaud (Disjuncta 000003) '75
Out Of Time (Disjuncta 000010) '76
Back And In Again (Carrère 678369) '79

Résonance 2
Toutes Directions (CA 94272) '85

Rhésus O
Rhésus O (Epic AKT S 64560) '71

Catherine Ribeiro
Catherine Ribeiro + 2 Bis (Festival FLDX 487) '69
N. 2 (Festival FLDX 531) '70 *with Alpes
Ame Debout (Philips 6332 017) '72 *with Alpes
Paix (Philips 6325 019) '73 *with Alpes
Le Rat Débile Et L'Homme Des Champs (Philips 9101 003) '74 *with Alpes
Libertés (Fontana 9101 501) '75 *with Alpes
Le Temps De L'Autre (Philips 9101 155) '77 *with Alpes
Le Blues De Piaf (Philips 9101 156) '77
Jacqueries (Philips 9101 201) '78
Passions (Philips 9101 270) '79 *with Alpes
La Déboussole (Philips 6313 096) '80 *with Alpes
Soleil Dans L'Ombre (Philips 6313 354) '82
Percuphonante (Ioana Melodies IM 001) '86

Ferdinand Richard
En Forme (Celluloîd CEL 6577) '81
En Avant (Recommended 03) '84

Ripaille
La Vieille Que L'On Brûla (Ballon Noir BAL 13003) '77

Michel Ripoche
Equinoxe (Atlantic 50 194) '75
Contes Musicaux (Atlantic 50 350) '77 *with André Demay
Volupta (Spalax 86832) '82

Rock Critics
TV Show (Upon Tyne 282) '80
Pile Ou Face (Upon Type 780) '80

Henri Roger
Images (Polê 0050) '75
Energies Douces (Muriel Roger 8206) '82
Rythmigration (Muriel Roger 8306) '83
V.O (Alibi Production 8410) '84

David Rose
Distance Between Dreams (Gratte Ciel 2007) '77
Worlds Apart (Millennium XL 17749) '79
Behind The Line (Millennium XL 17754) '80

Olivier Roy
Pochette-Surprise (FLVM 3007) '79

Jean-Philippe Rykiel
Jean-Philippe Rykiel (Musiza 201895) '83

Saïno
Saïno (Sai 01) '82
Bitume Rouge (Sai 02) '84

Saint-Erhart
Paprika (OM 67020) '81

Sandrose
Sandrose (Polydor 2393 030) '72

Yochk'o Seffer
Magyar-Lô (Le Chant Du Monde LDX 74604) '76
Délire (Moshé-Naîm MN 12008) '76

Ima (Moshé-Naîm MN 12010) '77
Ghilgoul (Garou-Garou SR 116) '79
Chromophonie 1 = Le Diable Angélique (GC 2101) '82
Chromophonie 2 = Le Livre De Bahir (GC 2102) '84

Semool
Essais (Futura SON 02) '71

William Sheller
Lux Aeterna (CBS 65030) '72

Shub-Niggurath
Shub-Niggurath (Muséa FGBG 2002) '86

Shylock
Gialorques (Gialogues 8001) '76 *reissued from CBS (CBS 82189) '77
Ile De Fièvre (CBS 82862) '78

Skryvania
Skryvania (DMR 001) '78

So & Co
So & Co (Pathé 2C 064 13070) '75

Spacecraft
Paradoxe (SC 7802) '79

Speed Limit
Speed Limit (Le Chant Du Monde LDX 74575) '75
Speed Limit (RCA FPL1 0101) '76

Spheroe
Spheroe (Cobra COB 37006) '77
Primadonna (Cobra COB 37018) '78

Step Ahead
Step Ahead (RCA PL 37604) '82

Alan Stivell
Reflets (Fontana 6312 011) '70
Renaissance De La Harpe Celtique (Fontana 6325 302) '72
A L'Olympia (Fontana 6399 005) '72
Chemins De Terre (Fontana 6325 304) '73
E Langonned (Fontana 6325 332) '74
A Dublin (Phonogram 9101 850) '75
Treman Inis (Phonogram 9101 851) '76
Raok Dilestra (Phonogram 9101 852) '77
Un Dewez'h Barzh'ger (CBS 82823) '78
3rd Live : International Tour (CBS 83505) '79
Symphonie Celtique (CBS 88487) '80
Terre Des Vivants (AZ 373) '83
Legend, Mojenn, Légende (AZ 475) '83
Harpes Du Nouvel Age (WEA 240737.1) '85

Subversion
Subversion (Pôle SVB 020) '76

Surya
Surya (Cornélia Productions COR 4310) '79

Swing String System
Swing String System (Uniteledis UNI 131078) '79

Synchro Rhythmic Eclectic Language
Synchro Rhythmic Eclectic Language (Moshé-Naîm MN 12007) '75

Synopsis
Minuit-Ville (SRC 351.357) '79
Gamme (FLVM 3026) '81

Synthesis
Synthesis (ARC ZAL 2005) '77

Systeme Crapoutchik
Aussi Loin Que Je Me Souvienne (Flamophone FL 3301) '69
Flop (Flamophone FL 3302) '71
Le Systeme Crapoutchik (Flamophone FL 2933 103) '75

Bernard Szajner
Some Deaths Take Forever (Pathé 2C 070 14-863) '80
Superficial Music (IRC 008) '81

Brute Reason (Island 811319.1) '83

Taï Phong
Taï Phong (WB 56 124) '75
Windows (WB 56 264) '76
Last Flight (WB 56 740) '79

Tamia
Tamia (T 1001) '78
Senza Tempo (T 1002) '81

Tangerine
De L'Autre Côté De La Forêt (Arcane 913029) '75
Mémoire (Crypto ZAC 6400) '78

Taurus V
Taurus V (Vogue 508605) '80

Ghédalia Tazartes
Diasporas (Cobalt CBL 002) '80
Transports (Cobalt CBL 005) '81
Une Éclipse Totale De Soleil (Celluloîd CEL 6661) '84

Mama Bea Tekielski
Je Cherche Un Pays (SFP 14004) '72
La Folle (Isadora ISA 9010) '77
Faudrait Rallumer La Lumière Dans Ce Foutu Compartiment (RCA PL 37126) '77
Pour Un Bébé Robot (RCA 37203) '78
Le Chaos (RCA PL 37322) '79
Paroles Et Musiques N.5 (RCA PL 37334) '79
Pas Peur De Vous (RCA PL 37438) '80
Aux Alentours D'Après Minuit (RCA PL 37533) '81
Où Vont Les Stars ? (RCA PL 37710) '82
Edith Et Marcel (RCA PL 37761) '83

Terpandre
Terpandre (Dionysos DI 3003) '81

Thalassa
Suffer And Misery (PS 5037) '82

Jean-Pierre Thanes
Lux Terra (Phantasia 001) '84
Occitania (Cryonic MAD 3007) '84

Laurent Thibault
Mais On Ne Peut Pas Rêver Tout Le Temps (Ballon Noir BAL 13009) '79

Jacques Thollot
Quand Le Son Devient Aigu, Jeter La Girafe À La Mer (Futura GER 024) '71
Watch Devil Go (Palm 17) '75
Resurgence (Musica MUS 3021) '78
Cinq Hops (Free Bird FLY 03) '79

Antoine Tomé
Les Chants Du Coeur (Moshé-Naîm MN 10030) '78
Innocence (Argile ARG 2001) '79
L'Amour Titan (Flarenasch 723.632) '81
Farniente (Flarenasch 723.649) '82
Tous Les Murs De La Ville (Flarenasch 723.667) '85

Henry Torgue
Souvenirs Des Cités Crépusculaires (Sonart 7012) '76
Compartiment Fuchsia (Spalax FP 86811) '79
Le Prince Apatride (Spalax SPX 6824) '80
Piano Group Emile Dubois (Spalax SPX 6855) '84
Mémoires Des Écumes (Lisa Production 7080) '85
Les Aventure D Ivan Vaffan (Spalax 6858) '85

Total Issue
Total Issue (United Artists UAS 29.174) '71

Transit Express
Priglacit (RCA FPL1 0089) '75
Opus Progressif (RCA FPL1 0130) '76
Couleurs Naturelles (RCA PL 37020) '77

Trans Musiques
Concert À Paris (Free Bird FLY 04) '79

Travelling
Voici La Nuit Tombée (Futura RED 06) '73

Treponem Pal
Treponem Pal (Gratte Ciel 2004) '77

Triangle
Triangle (Pathé 2C 062 11147) '70
Viens Avec Nous (Pathé 2C 062 11836) '72
Homonymie (Pathé 2C 062 12493) '73

Triode
On N'A Pas Fini D'Avoir Tout Vu (Futura RED 03) '71

Jean Tristan
Je Dois Ne Pas Me Taire (Alvarès C 495)

Troc
Troc (CY 3002) '73

Troisieme Rive
Banlieues (Iris TR 1010) '78

Uppsala
Uppsala (UPPS 1114) '84

Urban Sax
Urban Sax 1 (Cobra COB 37004) '77
Urban Sax 2 (Cobra COB 37017) '78
Paradise Lost (Philips 6313 293) '82 *with Pierre Henry
Fraction Sur Le Temps (Celluloîd

Christian Vander
Gilles Elbaz (Alvares BAM C 456) '71
Fiesta In Drums (Palm 003) '73
Vander Et Les Trois Jeff (Palm 006) '73
Tristan & Iseult (Barclay 80528) '74
Fusion (JMS 015) '81 *with Lockwood, Top and Widemann

Vent D'Est
Vent D'Est (OM 67017) '80

Joan-Pau Verdier
Occitania Sempre (Philips 6325 033) '73
L'Exil (Philips) '74
Faits Divers (Philips) '75
Vivre (Philips 9101 058) '76
Tabou Le Chant (Philips 9101 129) '77
Le Nuage Dans La Tête (Philips 9101 173) '78
Le Chantepleure (Philips 9101 252) '80

Verto
Krig Volubilis (Pôle 0009) '76
Réel 19.36 (Fléau 7004) '78

Patrick Vian
Bruits Et Temps Analogues (Egg 900 541) '78

Video Liszt
Ektakröm Killer (Epic EPC 84773) '81

Richard Vimal
Transparences (Polydor 2473 059) '77
Migrations (Polydor 2393 209) '78
Aquarythmies (Polydor 2417 345) '79

Jean-Claude Vincent
Lettre Au Passé (Crypto ZAL 6412) '77

Visitors
Visitors (Decca 278 049) '74

Vortex
Vortex (JBP 463) '75
Les Cycles De Thanatos (FLVM 3008) '79

Wapassou
Wapassou (Prodisc PS 37342) '74
Messe En Ré Mineur (Crypto ZAC 6401) '76
Salammbô (Crypto ZAL 6437) '78
Ludwig (Crypto ZAL 6477) '79
Génuine (Sterne STE 26512) '80
Orchestra 2001 (OM 67060) '86

Weidorje
Weidorje (Cobra COB 37014) '78

François Wertheimer
Wertheimer (BYG 529 028) '71
Fermez Les Yeux (Philips 9101 133) '77

Benoît Widemann
Stress (Ballon Noir BAL 13002) '77
Tsunami (Ballon Noir BAL 13014) '79
Fusion (JMS 015) '81 *with Lockwood, Top and Vander
3 (CY 733 614) '84

Patrice Witt
For DJ's And Long Highway (OM 67035) '82

WLUD
Carrycroch' (OM 67005) '78
Second (OM 67010) '79

Robert Wood
Tarot (Edici ED 6.102) '72
Sonabular (Edici ED 6.103) '73
Vibrarock (Polydor 2393 137) '76
Tombiac Vibe (Polydor 2393 150) '77

Wooden Ear
Fantasy (Warner Music WM 002) '79

Würtemberg
Rock Fantasia Opus 9 (Sterne STE 26511) '80

Gabriel Yacoub
Pierre De Grenoble (Barclay 920.429) '73 *as the work of Marie and Gabriel Yacoub
Trad. Arr. (Ballon Noir BAL 13004) '78

Yog-Sothoth
Yog-Sothoth (Cryonic MAD 3010) '85

YS
Madame La Frontière (Philips 9101 056) '76

Claude Yvans
Longue Naissance (Saravah SH 10.052) '75
Revenance (ISA 9008) '77
Concept (Oxygène OXY 059) '79

Thierry Zaboitzeff
Prométhée (Cryonic INC 1154) '84

Zabu
My Coffin's Ready (Thélème 6332 750) '72
Zabu & Co. (Spot ST 69.643) '76

Michel Zacha
La Nuit Des Cigales (Pathé 2C 064 12299) '73
Le Vol D'Icare (Pathé 2C 064 12729) '74
Inutile (Pathé 2C 068 14487) '77

Zadri & Mo
Erebus (Polydor 2393 332) '82

Zanov
Green Ray (Polydor 2393 151) '77
Moebius (Polydor 2473 078) '78
In Course Of Time (Solaris SOL 8202) '83
Zanov (J 7001) '84

Zao
Z=7L (Vertigo 6499 738) '73
Osiris (Disjuncta 000004) '75
Shekina (RCA FLP1 0097) '75
Kawana (RCA FLP1 0178) '77
Typhareth (RCA PL 37121) '77

Zartong
Zartong (DOM D 50001) '79

Zed
Visions Of Dune (IRC 003) '79

ZNR
Barricades III (Isadora ISA 9002) '76
Traité De Mécanique Populaire (Scopa 10002) '79

Zoo
Zoo (Riviera 521.118) '69
I Shall Be Free (Riviera 521.147) '70
Hard Times, Good Times (Riviera 521.200) '72

Z.O.U.
Z.O.U. (Polydor 2393 103) '75

3 W. GERMANY SWITZERLAND AUSTRIA

パラケルスス、ヤコブ・ベーメ、マイスター・エックハルト、クリスチャン・ローゼンクロイツ、ヨハン・ヴァレンティン・アンドレーエ、アドルフ・ヒトラー、アルフレート・ローゼンベルク、そしてルドルフ・シュタイナー……ヨーロッパの中で最もオカルティズムが音楽化されているのはドイツである。

ドイツのオカルティスト達は、何よりも霊的能力と直感力に恵まれ、それはドイツの音楽家にも言えることである。それは単に美と夢幻性を求めるだけの芸術家以上のものがある。私は今でもロックならドイツが一番面白く奥深いと思っているのだが、それは何故なのだろう。

ドイツの神秘学者ルドルフ・シュタイナーがこんなことを言っている。「オカルティズムを知るには新しい音楽を聴くだけで良い」その通りであり、ロックそのものをオカルティズムで新しく解釈すると、今まで見えなかった部分が明白になって来る。ドイツ・ロックは予言的であり、それと同時に、巨人が地上を歩いていた超古代の時代の記憶を持つ。言い替えれば、根源的な恐怖をも持っている。それは人類の旧い記憶、例えばアトランチス時代の音楽を一番よく現代に伝えているのは、初期のドイツ・ロックである。これはキリスト教の音楽（クラシック）を完全に否定したものであり、古代の宗教、例えばエジプトのアモン神崇拝、ミトラ教、ギリシャのオリンポス神、あるいはペルシャのゾロアスター教、そしてドイツの主神ヴォーダンの復活に他ならない。バッハに代表されるバロックの伝統は、明らかにキリスト教会内の音楽であり、それ以前の音楽が不明であるからこそ、現代の音楽を聴く以外にない。異端としりぞけられた前記の宗教は、豊富な音楽を持っていたと想像がつくからである。これを本気でやり遂げたのはクラシックではワグナーとマーラーであるが、これは後にナチスと結びつく。戦後のドイツ・ロックこそは、アメリカのサイケデリックに影響を受けながらも、独自に発展し生き延びた。そもそもロック自体が反キリスト教的だから、キリスト教以前の音楽を知る手助けとなる、と言ったら、それは大げさだと思われるであろうか。しかし、ルドルフ・シュタイナーは、「5度や7度のインターヴァルは太古の時代の夢幻的意識に返す効果がある」と言っている。太古の時代の音楽は、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのジョン・ケールではないが、「反復」「くり返しの音楽」が主だったそうである。それだけで古代の人々は聴いていて脱魂状態に入っていたのである。これが、例えばクラスター、ノイ、タンジェリン、シュルツ、カン等に受け継がれていると言えぬわけがないではないか。反復の音楽は必ず魔術的な効果を持っている。他にも、シュタイナーは「未来から現在の方に流れて来るものは本質的にマイナーだ、短調だ」とも言っている。これはまさにドイツ・ロックにも当てはまる。ともかく、音楽における魔術、錬金術と言える域にまでドイツ・ロックは達したと思える。ポポル・ヴゥやアシュ・ラ・テンペルにはエジプト志向、アモン・デュールⅡやアジティション・フリーには中近東志向が見て取れる。また、グルグルの“UFO”の内ジャケットには「近い未来、地球人をはるかにしのぐ頭脳を持つ生物が地上に飛来し、地球を統治するであろう」という予言めいた事が書かれている。だから、通常言われている「ドイツのロックは暗く重くラジカルで」という事の深い根拠を探ってみると、非キリスト教的なオカルティックな世界の秘密にまで行き当たると思う。ヨーロッパの秘教的な流れの一番末に当たるのがロックであり、それはキリスト教、ギリシャ・ローマ的なアカデミックなものに対し、ディオニソス的な夜の部分に相当するものである。それらの地下の暗流として伝えられた錬金術、魔術、占星術等の秘密の知識は、真に人間を開放に導き、自由を与えるものであるにも関らず、今世紀まで殆ど非公開であったのが何故かと言えば、ひとえにそれらのものは全て、教会による迫害と、最悪の場合は火あぶりの刑が待っていたせいなのだ。ルネサンス以降でさえ異端排斥は盛んに行なわれている。やはり教会に迫害されたヤコブ・ベーメは「すべての神性と秘蹟は皆我々の肉体の中にある」と説き、ニーチェは「キリスト教こそ人類の唯一永遠の汚点」と言った。現代はもはや、哲学と宗教の時代を終え、神秘学の時代である。つまりアンチ・テーゼではなくジン・テーゼの時代である。現実に反逆するのではなく、現実を超えるのだ。現実が呪われた城ではなく、遊び場に、あるいは楽園になる時代なのだ。

植村美穂子

AMON DÜÜL

ドイツ出身のロック・グループに関する印象は、今と10年前では、極端に違うことだろう。70年代半ばまでのジャーマン・ロック――それは混沌、前衛、破壊、両手一杯のDRUGを手にしたジャンキーの群。初期のジャーマン・ロックはテクニカルであることよりも、いかにサイケデリックであるか。いかにブッ飛んでいるかが問題視された。存在としてのヘビィネス。ハーラン・エリスン流に言えば、『闇よりも暗く（Darker than Darkness）』。

'68年、ミュンヘンに一つのコミューンが存在した。当初10～13人の若者が、ここにいたと言われる。これがアモン・デュールである。彼等は最初、うまくいっていたのだが、その年の9月には、政治的な方向を打ち出す一派とより音楽的な路線を求めるグループに分裂し、後者はアモン・デュールⅡ（以後ADⅡ）と名乗るようになる。

69年に、オリジナル・アモン・デュールのチームは「Psychedelic Underground」,「Collapsing Singvögel Rückwärts」の2枚を発表。前衛というよりは攻撃的、即興というよりは混沌。このような作品がレコード化されたという事は、時代の象徴でもあったのだが、或る意味では極端にすごいことでもあるのだ。

一方、ADⅡの方は「Phallus Dei」を同年に発表。中近東系のメロデイ、電子音響、Drugに導かれたデカダンス、サイケデリック・ロック、フリー・ミュージックが、ミックス・ジュースのようにまとわりついてくる感覚は他の追随を死んでも許さない。存在感のある音色群とフラッシュ・バックのような強引なリズム・チェンジ。そしてB面全てを使って繰り広げられる大作「Phallus Dei」はロック系フリー・ミュージック史上、屈指の名作であり、人々に記憶されるべきものであろう。

翌70年になると、オリジナル・チームの方は「Para Dieswärts Düül」を発表。まるで静かな終末を現わしているかのような本作は、意外なことに聴き安いサウンドに仕上がっている。だが、オリジナル・チームはこれを最後に活動を止めてしまう。ADⅡの方は2枚組「Yeti」を発表。2枚の内、1枚は即興という意欲作である。クリス・カーレル（vln、g、sax etc）、フォルク・ログナー（Kbd）、ピーター・レオポルト（dr）（以上、オリジナル・アモン・デュール出身）、レナータ・クナウプ（VO）、ジョン・ヴァインツィール（g）、デイブ・アンダーソン（b）、シュラット（ボンゴ）に加え、オリジナル・アモン・デュールのレイナー・パウエル（g）、ハンス・ウルリッヒ・ワイゲル（b）をゲストに迎えての作品があるが、グループは当時日本でも『ロック共同体』という言い方で紹介されたように、メンバーは常に流動的であったようだ。



続く3rd「Tanz Der Lemminge」も2枚組のレコードで、C面は即興演奏であった。このあたりにも当時のいきおいを感じさせるものがある。A、B面はそれぞれ組曲形式（メドレーと言ってもよい）になっており、ドラッグ・カルチャーの為の迷宮世界となっている。B面のアコスティック・ナンバー「無力の天国」が、ただれて透きとおった朝焼けのように美しい。この3rdは或る意味で2ndと双子のような作品である。ホークウインド参加の為にD・アンダーソンが脱退。後任に元エンブリオ、パスポートのロウター・マイトが参加している。又、ジミー・ジャクソン（Kbd）（同じく、元エンブリオ、パスポート）がゲストで参加している。

72年になると「Carnival in Babylon」,「Wolf city」と2枚の作品を発表している。この時期のADⅡは曲ごとの完成度を重視するようになっている。この路線は「Wolf――」で頂点に達し、以後、少しづつポップ色を増やし始める。ADⅡの最高傑作がどれであるかは論議の別れるところだが、「Wolf―」, 1stを推す者、2ndか3rdを主張する者と大きく2つに別れるはずだ。

紙面の関係で余り詳しくは触れられないのだが、「Wolf－」はADⅡにとって分岐点となった。73年にはL・マイトが中心となってユートピア名義のセッション・アルバムを発表。74年にはADⅡのイギリスでの72年のライブ(曲目は2nd及び3rdのもの）を収録した「Live in London」、ADⅡ久々のスタジオ録音「Vive la trance」の2枚を発表。後者を聴いたファンの3分の1は「ADⅡは終わった」と言った。グループはポップ路線を取り入れ始めたのだ。以後ディスコグラフィにあるように、ヴォルテージを少しづつ落としながら、活動を続けていった。ただでさえ流動の激しいグループだったが、最後にはメンバーはC・カーレルが敗戦処理投手のように残っているだけとなった。（メンバーの出入りをもう少し知りたい方は筆者による「ユートピア」（キングレコードK22P329）のライナーを参照。）

斉藤千尋

CAN

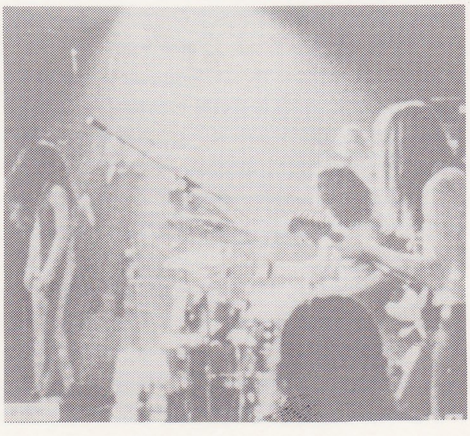
CANのグループとしてのスタートは、68年・ホルガー・シューカイ、ミカエル・カローリ、ヤキ・リーベツァイト、アーミン・シュミットの四人の基本メンバーに、デヴィッド・ジョンソンなるフルート奏者を加えて行なったコロンでのコンサートである。当時のプレイは仏・タゴマゴ社からのカセット、「プリヒストリック・フューチャー」で聞く事が出来るが、すでにテープ・エフェクトを使用している。同時期にH．シューカイはアルバム「カナクシス」の録音を行っており、現在に至るまでのサウンド・コラージュの手法をふんだんに活用している。その年の秋、I.Sの妻・ヒルデカルド(解散までCANのマネージメントを勤めた。)が黒人・マルコム・ムーニーをグループに加入させ、いきなり1stアルバム「モンスター・ムーヴィー」を録音。何とオープニング・ナンバーの「ファーザー...」はそれまで唄など歌った事の無かったマルコムの２度目の練習時のテイクだと言う。

68年、I.S名義のシングル「カーマ・スートラ」を全員で録音した後、フリー・ミュージックに専念するため、D.ジョンソンはグループを離れる。CANと言う名前はこの後になってやっと決定した。69年から本格的にコンサート活動を開始、現存するマルコムVo.のテイクは全てこの一年に録音されたもので、彼は早くも70年の始めにアメリカへと帰ってしまう。彼は現在でもメンバーと交流はあり、後のダモ・鈴木脱退の際にも再加入をさそわれ、独行きの飛行機チケットまで用意したにもかかわらず、実現はしなかった。そして70年５月、ケンジ「ダモ」鈴木とミュンヘンで出会うわけである。その日の晩のステージに引っぱり出された彼は、以来メンバーとして「フューチャー・デイズ」まで在籍する事になる。(ちなみに記念すべきこの日のコンサートは、彼が唄い始めるや客がぞろぞろ帰りだし、終了時には60名たらずのファンしか残っていなかったと言う。)この後、多くのサウンド・トラックの仕事を手がけ、本来2ndになるはずだった「タゴ・マゴ」に先がけリリースする。このタゴ・マゴまでの録音は古城の一室をスタジオ化した場所で行われている。その71年末に「Shikako－Maru－Ten」とカップリングした「スプーン」が独国内でNO.1のヒットを記録、グループの人気を不動のものとした。その後の72年、２月のフリー・コンサートでは実に一万人ものオーディアンスを集める。この時のステージは50分の記録映画「カン・フリーコンサート」として残されている。4thの「エゲ・バミヤジ」と前後して英国ツアーも行い、最高傑作との噂も高い「フューチャー・デイズ」を録音した73年夏、ダモ・鈴木はグループを離れる。この脱退については「エホバの証人の布教活動のため」とか、「スタジオの中で突然寄声をあげ、走り出たまま帰らなかった」等の話があるが、定かではない。

74年、四人編成のまま「スーン・オーバー・バブルマ」を制作。カローリがVoをとり、音楽的にも前作にひけをとらない作品に仕上る。この後、レコード会社をヴァージンに移すのだが、間にアウト・テイク集の「リミテッド・エディション」がUAからリリースされている。誰が最初に間違えたのか知らないが、昔からこのアルバムは「90ポンド」で売られたなどと言われたが、(通常レコードは３ポンド前後）全くのデマ。安価極まる97ペンスが当時の売価である。移籍第一作の「ランデッド」において行きづまりを感じた彼らは、元トラフィックの黒人ベーシスト、ロスコ・ジーを加入させ、ホルガーがテープ、エフェクト類に専念出来るようになったのもつかの間、元来持っていたアフロ指向のリズムに、彼はあまりに適しており、黒人音楽そのものへとグループのサウンドは変化してしまい、急速に独自性を失う結果になってしまう。「フロウ・モーション」と、ロスコと同じく元トラフィックのパーカッショニストを加えた「ソウ・ディライト」を期に、ついにホルガーがグループを脱退。その後の「アウト・オブ・リーチ」はとてもほめられた出来ではないが、しばらくのブランクの後発表されたラスト・アルバム「CAN(インナー・スペース)」では編集にホルガーが関ったためか、多少の独自性をとりもどしている。

あまりに多種の音楽性を持ち、定まったスタイルを持たなかった彼らは、その後のセッション・ワークの幅広さを見てもうなずけるが、ホルガーを筆頭に全員が現在でも活動を続けており、特にパンク／ニューウェーブ以降のミュージシャンの中にも彼らからの影響を語る人間が後を絶たない。

中野泰博



POPOL VUH

ジャーマン・ロックの主流が、まだ実験色の強いサイケデリック・サウンドやフリー・ジャズ、電子音楽などに彩られていた70年代前半から、ポポル・ヴフのサウンドは、既に異色だった。アヴァンギャルドでもなければ、シンフォニックでもない。サウンドの形態を第一の問題にするような商業主義とは無縁の、精神世界を音楽で描くアーティスト、ピアノ、シンセサイザー、ギター、ドラム、控え目なヴォーカル・パート、おおよそこれだけの編成で孤高の美的感覚を持ち続けている数少ないアーティストである。仮に、彼等の比較的、穏やかな曲調が環境音楽と比べられることがあったとしても、一貫した強い宗教色でもって、区別されてしまうことだろう。

中心人物であるピアニスト、フローリアン・フリッケは、1944年生まれ、ミュンヘンの出身である。彼はクラッシックを学んだにしては、16枚にも及ぶ作品の中で、目のさめるような指さばきを聴かせたことが、一度たりともない。それは何より、音の響きを大切にしようとする彼の姿勢に起因しているように思われるのだが。事実、彼の旧友で著名な映画監督、ヴェルナー・ヘルツォークの作品「生の証明」の中で、フリッケはショパンについて語りながら、ポポル・ヴフからは想像もできないような、馴れた指さばきで鍵盤をたたくのである。時にグループ結成以前の67年のことである。

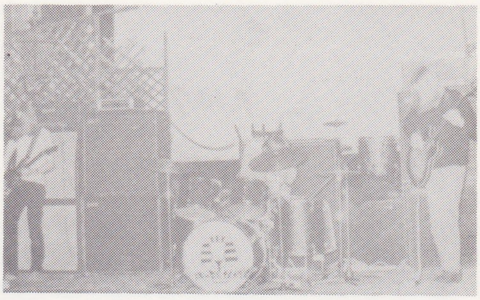


ポポル・ヴフの足跡はフリッケのそれである。71年、彼はマヤ文明の聖書に当たる「Popol Vuh」をグループ名に用いて、デビュー作「Affenstunde」を発表する。シンセサイザーによる音の響きの中に、民族打楽器や鳥の鳴き声が浮き沈みする、という作風は、72年の2作目「In Den Gärten Pharaos」まで続いた。72年後半、大幅なメンバー交代と共に、フリッケはピアノに転向し、サウンド形態も大きく変化する。韓国人女性ヴォーカリスト、ディヨン・ユン、Gilaのギタリスト、コニー・ファイト、Betweenのオーボエ奏者、ロベルト・エリスク等を迎えて、こうして73年発表されたのが、傑作「Hosianna Mantra」である。曲名が示すように、彼等流のミサ曲を収めたこの作品は、ひっそりと静けさが漂うような曲調に、言い尽くせない奥深い味わいがある。フリッケは、この後、Gilaの2作目にゲスト参加している。そして、Amon Düül Ⅱから、新たなギタリスト兼ドラマーとして、ダニエル・フィッヒェルシャーを迎え、4作目「Seligpreisung」を74年に発表。オーボエの音色が、ひときわ印象的な作品だった。75年から76年にかけては、フリッケ、フィッヒェルシャー、ユンのユニットで「Einsjäger & Siebenjäger」(75)、「Das Hohelied Salomos」(75)、「Letzte Tage Letzte Nächte」(76)の連作を発表する。フィッヒェルシャーの割合が増えたためか、3作とも、彼等にしてはロック寄りのサウンドである。親しみやすいメロディーの中にも、時折、聴く者を醒めさすかのような美的感覚がのぞくのも、この頃の作品である。また、76年には、フランスでヘルツォーグ監督の映画「アギーレ・神の怒り」が公開された際、そのサントラ盤として「Ageirre」を発表している。一応、7作目ということにしたいが、映画「アギーレ」の初公開が72年なので、シンセサイザーと混声コーラスからなるメイン・テーマをはじめとして、大半の曲はその頃に書かれているものと思われる。なお、この作品の再発盤、国内盤は、編集盤になっている。77年、シタール、タブラなどによる純インド音楽の9作目「Yoga」をイタリア・PDUから発表。この前後に2度目の目立ったメンバー交代があった。こうして、77年、ヘルツォーク監督の映画「ガラスの心」のサントラ盤として、10作目「Herz Aus Glas」を発表。フィッヒェルシャーのギターの他に、シタール、タブラもフィーチュアした力強いサウンドだった。78年にはイザベル・アジャーニが出演したことでも知られる、同じくヘルツォーグ監督の「ノスフェラトゥ」のサントラ盤を11作目「Brüder Des Schattens-Söhne Des Lights」として発表。フランス盤のみ、タイトルこそ「Nosferatu」ながら、収録曲はまったく別のもの。そして79年には、イタリア・PDUから13作目「Die Nacht Der Seele」を発表した。前作までとは、やや傾向が異なり、民族音楽調のパーカッションの使用が目立つ。この作品は後に、曲を組みかえて、アメリカで「Tantric Song」としてリリースされた。この頃から宗教色の重みがサウンド全体から感じられるようになり、また、曲もキリスト教というよりは、古代宗教のイメージを想起させるようになった。81年の14作目「Sei Still, Wisse Ich Bin」は、その頂点にある作品である。83年には15作目「Agape Agape」85年には「Spirit Of Peace」を発表した。往年のコニー・ファイト等を迎えたもので、やや落ち着いた曲調となっている。なお、未確認ながら、1枚のシングルと、そして14作目の直後に中東の死海で撮影されたイメージ・ビデオも残している。

松本昌幸

ASH RA TEMPEL

アシュ・ラ・テンペルは、数ある70年代のジャーマン・ロックを代表するアーテイストであるばかりではなく、グループの変遷が、そのままシーンの変遷を示した。という点でも興味深いグループである。スティープルチェイス・ブルース・バンドにいたギタリスト、マニュエル・ゴッチングが、クラウス・シュルッェ(Dr)、ハルトムート・エンケ(b)と共にアシュ・ラ・テンペルを結成したのが、70年。翌年、シーンの立役者ともいうべき、ロルフ・ウルリッヒ・カイザーが設立したマイナー・レーベル、Ohr からデ



ビュー作を発表した。その後、シュルツェが、シンセサイザーを使ってのソロ活動を始めるため脱退し、一方、グループは3人のメンバーを加えて、翌72年に2作目「Schwingungen」を発表した。この頃の彼等のサウンドは、ブルース・ロックを下地にした即興演奏に、必要以上とも思えるエコー処理を施したものだった。彼等が英米の、当時ニュー・ロックと呼ばれたサウンドに興味をもっていたことは、具体的には1作目のA面全てを使って展開される、マニュエル・ゴッチングの即興ソロや、2作目のB面などに、ジミ・ヘンドリクスや「神秘」期のピンク・フロイドの影響が、多分にうかがわれることから想像がつく。72年、彼等はカイザーが設立した、もう一つのレーベル、Kosmische Musik に籍を置いて、いわゆるカイザー一派のアーティスト達と幾つかのセッションを経験する。LSD人体実験の件でスイスへ亡命していたティモシー・リアリー博士を迎えての3作目「Seven Up」(72)、既にソロ活動に入っていたシュルツェが「Cyborg」期のサウンドをそのまま持ち込んだような4作目「Join Inn」(72)は、この時期のセッションをアシュ・ラ・テンペル名義で発表したもの。この他にも、オムニバス・アルバム「Kosmiche Musik」、カイザーが一方的にリリースした連名作「Tarot」「Cosmic Jokers」「Galactic Supermaket」「Sci Fi party」「Gilles Zeischeff」「Planeten Sit－In」が残っている。これらは、単なる音遊びとも受けとられるようなエコー処理が、全編に施された、スペイシーな感覚のサウンドだった。こうして72年のセッション期を過ぎた頃から、アシュ・ラ・テンペルは、マニュエル・ゴッチングのソロ活動そのものとなる。73年には、当時、恋人だったロジ・ミュラーと共に「Starring Rosi」をグループの7作目として発表するが、マニュエルのラフなギターをバックにロジがつぶやく、といったたぐいのこの作品は、初期の重苦しいサウンドとはうって変わり、また、非常に個人的なものだった。彼が本格的に独自の音世界を打ち出したのは、74年の8作目「Inventions For Electricguitar」からだった。まだ幾分、荒目のギター・ソロが入ったりもするが、キーボードとギターのきめ細かい反復を多用した作風は、現在のサウンドの原点ともいえる。76年、フランスのIsadoraから9作目「New Age of Earth」を発表。前作を更に柔らかくしたような、心地良いエレクトロニクス・サウンドでかためられている。美的感覚とエレクトロニクスの反復が微妙なバランスを保った内容だといえるかもしれない。この作品が、77年、Virginから再発売される頃、アシュ・ラ・テンペルをアシュ・ラと改名している。78年の「Blackouts」79年の「Correlations」80年の「Belle Alliance」は、リズム面の強化をはかる一方で、ポップな味付けもされている。あか抜けたギター・ソロや、ディスコ調のリズムも、これまでには、ほとんど聴かれなかったものだ。更に、84年の最近作「E2-E4」では、これまでの音作りをつきつめたような、ミニマル形式をとり込んだ作風だった。初期の、いかにもジャーマン・ロックらしい重苦しさからは、想像もできない程、平静なそして計算されたサウンドへと変化している。

松本昌幸



TANGERINE DREAM

タンジェリン・ドリームに関して全てを書きつくすのは、このスペースでは不可能だ。何しろ1st アルバムのメンバーがエドガー・フローゼ、クラウス・シュルツ、コンラッド・シュニッツラーなのだ。本誌13号のドイツ特集にも書かれていた通り、クラフト・ワークをのぞく、ドイツ電子音楽の流れは全てここから始まったと言って良い。とりあえずタンジェリンと言う名前に限って話を進めてみたい。

ドイツの初期のグループほとんどがそのルーツとしてのロック否定からスタートしているが、彼らにおいてはヘヴィなハード・ロック・バンドとしての前身をこの 1st アルバムにおいて解体している。彼らの指向は次作の「アルファ・ケンタウリ」までの間にギター、ドラムスと言ったロックの編成をも排除してしまい、1st で模索したフリーな音楽（いわゆるフリーミュージックでは無い）のためにキーボード・トリオと言う特異な編成として再スタートする。その点で彼らの原点でありひとつの頂点と言えるのは 3rd のツァイトだろう。黄金期を迎えるまでのメンバー、クリストフ・フランケとペーター・バウマンも揃い、そのインプロヴィゼーションによる感覚の異化と言うスタイルもこの時期に明確とされた。0hr 時代の作品には未だシーケンサーは導入されておらず、単調なオルガンとシンセの音のうねりを主体に構成されている。(ちなみに悪名高きM・M誌ー本誌ではないーが始めてアルバムレヴューで 0 点をつけたのがツァイトである。) この 0hr のアルバムが評判になり英国ヴァージンと契約、彼らの名前を世界的に有名にした。聞き手のイマジネーションをかき立てる、メロディを持たないフレーズと、元ドラマーであるフランケの刻々と変化するシークエンサーによる「フェードラ」「ルビコン」等の名作が生まれた。当時の英国は同じヴァージン勢を別としても自国内のプログレッシヴバンドが渦を巻いていたはずだが彼らはその中にあっても堂々とトップ・グループの座を得る。この時期の彼らはリーダーであるフローゼのソロ・アルバムを一作ごとにはさみ、その実験的アプローチで得た物をバンドの作品にフィードバックさせていた。(ゆえにフローゼのソロは実験をささえる明確なテーマが存在している。) Liveの「リコシェ」をはさみ、75年の「ストラトスフィアー（ロマン)」では彼らは初の用意されたフレーズを使用。次作の「サイクロン」では大失敗に終るのだが、「フォース・メジャー」を経てメロディのカットバックによるトータルなイメージと言う曲編成を完成させた。それまでのファンにとっては意外とも言えるこの音楽的変化は賛否両論を巻き起すが、続く勢力的な活動には有無を言わさないものがある。メンバーとしては「ロマン」完成後ピーター・バウマンがソロのため脱退。数作のアルバムを発表後、85年自身のレーベル・プライベート・ミュージックを設立し、エディ・ジョブソンのソロやジェリー・グッドマンのアルバムをリリース。視覚的変化を持った今日的シンセ・ミュージックをリリースしている。フローゼの「エイジス」、「サイクロン」においてはドラマーのクラウス・クリーガーが参加しており、彼はシュルツのレーベルからもソロ・アルバムを発表している。この時期、第三のメンバーは二転、三転し彼らの試行錯誤がうかがえる。80年以後、彼らはそのスタイルをほぼ統一してしまい、一作ごとの変化は各曲のテーマによる物になり、それまでの音楽的



冒険を考えると少々淋しい限りだが、長くドイツ・ロックが関った精神世界の暗黒面は、現在ポスト・インダストリアル系のノイズ・バンドが受けついでいる。まぁヴァージン以後の彼らはおよそ重いという形容詞は当てはまらず一貫して「夢」の音楽化に勤めており、思想的背景をうんぬんするのは適当ではあるまい。かつて彼らの音楽について様々な評論が乱れ飛んだが、それぞれに音楽自体よりも評者自身の思考を重ねた物がほとんどだった。「哲学的な啓示」「精神の解放」etc …間違いではないにしろ、やはり思い入れ以上のものではあるまい。冷めた目で見れば、ドラッグとの深い係りで出発した彼らは、その中での即興演奏により、日常の空間を異化していたわけで、そのためには通常の楽器より、自分自身ですら驚ける未知の楽器・シンセサイザーを使用するのが最良だったのだろう。次々と開発されてゆく新しいシンセと共に、彼らの音楽は表面上変化を見せ、しだいに具体的なイメージの創出が可能になったと考えるのは不自然だろうか。ともあれ、彼らは現在でも第一線で活動を続けており、その音楽性は凡百のシンセ・バンドとは比較にならないクオリティを有している。

中野泰博

KLAUS SCHULZE

独のミュージック・シーンにおけるシュルツの立場は多分我々が考えている以上に巨大なものであるに違いない。彼はこの20年近い年月に自身のソロ作品の他に数限りない活動を続けている。初期においては一連のコズミック・セッションシリーズで、これはアシュラ・テンプルを母体としウルリッヒ・カイザーなるコスミック・レーベル主催者によって行われた。「タロット」等の有名な作品があるが、その参加メンバーから期待されるほどの音楽的な内容は無い。しかし独ロックの原体験であるドラッグ体験がモロに表面に出ている点ではひとつの時代を知る重要な記録ではあるだろう。シュルツのソロ作品「イルリヒト」「サイボーグ」はそのコスミック・レーベルよりリリースされ、同じドラッグによる作品としても高水準の音楽性を持っていた。当初からシュルツの作品はいわゆるスペース・ミュージックとは一線を画しており、聞き手の安易な思い入れを許さない確固とした内容を展開していた。旧友・タンジェリン・ドリームが環境音楽的な評価を受け、BGMとして流される事はあっても、シュルツの音楽は聞き流す事は出来ない。レーベルをブレイン、ヴァーシンに移しての75年ごろ、彼としてもひとつの節目になる「タイム・ウィンド」を制作、異世界の創出を完成させた。大変大ざっぱな分類をしてみると「イルリヒト」から「タイム・ウィンド」までの初期と、「ムーン・ドーン」から「X」までの中期、デジタル化と共に彼の内なるワグナーが表出する現在までの三期に分けられる。しかし現在こうしてふり返ると、どうしても中期の作品には不満が残る。サントラの「ボディ・ラヴ」は別としても、精神面での重厚さが他の作品とくらべ薄まった様なイメージがある。水準以上の作品は「ミラージュ」と「X」だろう。この時期彼はツトム・ヤマシタのプロジェクトにも参加、はっきり言ってどうでもいいシンセを弾いている。これを考えると、つくずくシュルツと言う人はソロに向いている人間だと思う。そしてアーサー・ブラウンをVo（！）にむかえた「デューン」からが、実は彼の音楽が一番完成されて行く事になる。Xの２枚目で試みられたクラシック的手法も充分消化し、彼の作品中最も重厚な内容になって行く。デジタル録音を始めた「ディグ・イット」「トランスファー」において、彼は最も良きパートナー、リヒャルト・ヴァーンフリートを得、彼名義の作品もリリースする。実はこのヴァーンフリートとは彼の使用しているコンピューター・システムの名前で、シュルツは日夜彼と会話を続け作曲をしているらしい。当然ヴァーンフリートとしての作品は全てプログラム演奏で、通常のシュルツの作品とくらべると構成がしっかりしている分だけロックっぽい。80年前後の彼の活動は、おりからわき起ったニュー・ウェーブに対抗する訳では無いだろうが、I.Cなるレーベルを設立、実験音楽からニュー・ウェーブまで広域な作品をリリースしている。ヌ、ステージにおいて時おり共演していたライナー・ブロスとの共作を含む小シリーズ・「インティーム」もスタートさせ、長く音沙汰の無かったアシュラのマニエル・ゴッチングの作品を聞かせてくれた。この時の「アフリカ」は大変高度な内容を持ち、近年のシュルツの作品でも傑作である。その後、ブロスを加えてのライヴをはさみ発表された「オウディンティティー」においても様々なアプローチが試みられており、彼の止る所を知らない活動には本当に頭が下がる。今の所彼の最新作は「ドリームス」であり、今回はCDのみ１曲多い構成を持ち、新しいメディアに対する関心もうかがえる。ヴァーンフリートの一件でもわかるように、彼のメカ・マニアぶりは相当な物で、時おりジャケットに写る彼自身のスタジオ設備も個人の物としてはケタ外れの豪華さである。彼の音楽もタンジェリン同様、シンセサイザーの発達と共に表面的変化を見せてはいるが、曲の内容はアルバムを重ねる毎にヘヴィなものへ移っている。先にも記した通り、近年の作品にはデジタルのシンセサイザーをメインに使用しているにもかかわらず、ゲスト・メンバーの生ピアノ、チェロ等を加えても何ら不自然さを感じさせない音色・内容を持ち、ドイツ人としての精神面の課題を一手に引き受けている感がある。



今回は各アルバム毎の解説は意識的に触れずに話を進めてしまったが―そうしないと、とても終らない―彼の音楽は電子音楽と言う現在最先端の領域において、最も正統な音楽芸術を展開している事だけは記憶してほしい。最近軽々しく「シンフォニック・ロック」なる言葉が使用されるが、ほとんどが表面的にストリングスを使ったりしただけの粗末な物であるのに対し、シュルツの音楽こそ真の意味でのシンフォニック・ロックではないだろうか。

中野泰博

KRAFTWERK

クラフト・ワークの音楽はほぼ二つに分類出来る。アウトバーンをターニング・ポイントとして、以前の電子実験音楽と以降のいわゆるテクノ・ポップサウンドである。有名な伝説として68年、クラシックを学んでいたラルフ・ハッターとフローリアン・シュナイダーがケルンのラジオ局の電子音楽のプログラムを耳にし、その足でラジオ・パーツを買いに走ったと言う話が残っている。そうして3rdアルバムまで彼らは取りつかれたように未知の音原である電子音を抽出する作業にかかる。それはコラージュであり、インプロヴィゼイションであったが、注目したいのはそれら初期の作品に少しの「ロックに対する思い入れ」も見られないことだ。彼らの音楽は始めから、およそメッセージを主体としたロック幻想からはかけ離れており、この事がニューウェーブと共にわき起ったテクノ・ポップの一大ブームまで彼らの評価を低いままにしてしまう。彼らは当初から発明されたばかりのシンセサイザーをメインに使用する事により、「かつて無かった音楽」の創造にとり組んでいたのだ。アウトバーンの発表された当時、シンセサイザーはいわゆる実験音楽と、キース・エマーソン・タイプの音と冨田に代表される既成の音のイミテーションとしてしか、使用されていなかった。しかし彼らだけが電子音ならではの音の特性を知っており、その習性に合わせた音楽を組み立てて行ったのである。すなわち、パルス波によるリズム、コントロールされたノイズによるコード、定数倍によるリフレイン等である。オートバーン以降の作品が、その後巷にあふれたテクノ・ポップバンドと完全に一線を画すのはこの基本的な音への姿勢だった。ポップスをシンセにおき替えたのではなく、電子音のためのカモフラージュとしてのポップ性を彼らは使用したのだ。彼らのマスメディアに対する計算はそれゆえロックバンドと誤解されたのだが、又この計算があったからこそ彼らの音楽を一般の人間に聞けるものとしたわけだ。オートバーン以降の作品ではアルバムごとにテーマを定め、ラジオ・アクティヴィティまでは多少の人間性が表われてしまっていたが、トランス・ヨーロッパからはほとんど人間的な誤差を排除し、聞く者の感情移入をゆるさない鉄の骨格のみとして成立している。「モデル」で恋を唄おうが、もはやリスナーと彼らの間に精神の交流などは無い。彼らと同時期からやはり無機質な電子音楽にとり組んでいたクラスター・一派は、もっと個人的な芸術的アプローチを持っており、音響絵画的な作品を一貫して製作している。こちらもいわゆるロック的な主義・主張とは無縁である。彼らの音楽はその特質ゆえ、ロック・ファンからはあまり理解が無いが、プログレッシヴ・ロックとは形式ではなく「新しい認識の上での音楽」であったはずであり、ストリングスやメロトロンが入っていないからとか、複雑な曲構成を持っていないからと、見当違いの批判はちょっと了見が狭いのではあるまいか。さて、78年の作「マン・マシーン」発表前後にニューウェーヴからのテクノ・ポップ・ブームが世界を席巻し、彼らの打ち出し続けた電子音の感覚はようやく一般の物となるわけだ。機械音のリズムも新しいビートとしてディスコから火がつき、「オリジナル・テクノ」として彼らの名前は飛躍的に高まった。この時期に彼らは7インチ&12インチのシングルを多数制作。前作からアルバムも英語と独語の2種類をリリースしていたが、シングルにおいては仏語ヴァージョンも含み、各国での人気をうかがえる。81年には「コンピューター・ワールド」に合せ世界的なツアーを行い、この日本にも来日した。筆者はミュンヘンにてそのステージに接する事が出来たが、2時間を超えるコンサートは四台のビデオ・スクリーンを駆使し、カスタム・メイドのシンセサイザーのルックスも相乗して圧倒的な存在感があった。そして昨年、実に5年のブランクの後、最新作「エレクトリック・カフェ」を発表した訳だが、B面の構成とVoに若干の片鱗を残すものの、A面においては唯一人間を感じさせていた声ですら、サンプリングにより電子音の一片として組み込まれ、デジタル化されはるかにクリアーになったサウンドの中にちりばめられている。(このA面に関してはVoと聞こえる音も電子合成音だろう。)



70年代にいわゆるロック・バンドは様々な活動を行ったが、現在のポピュラー音楽に最も巨大な影響を与えたのは彼らではなかろうか。彼らはシーンと呼ばれる物をほとんど独力で創り上げ、発展させて来た。評価されるのは当然の事なのだが、今だに表面上の音ばかりが話題になり、彼らの基本的な特異性に気づかぬリスナーや評論家が居る事実は日本人の感覚の固さを表わしていて、頭が痛い限りだ。ビートルズがいなくてもロックは発展したろうが、彼ら無くして今日のPOPSはおよそ違う物になっていたはずだ。

中野泰博

FAUST

ファウストは68年にその母体が結成されたと言われている、ドイツのアヴァンギャルド・サイケデリックロックバンドである。

71年春、ファウストはグループのマネージメントからプロデュースまでの外面的な要素を統括していたウーヴェ・ネッテルヴェックと共に、ヴィメという町の廃校になっていた学校でコミューンを形成し、共同生活のもと創作活動を続け始める。

このコミューンは、ドイツ・ポリドールレコードがファウストの為にスタジオ等の音響設備を含め、提供したものと言われている。

真に理想的な環境のもと、彼らは71年12月に1st アルバム "Faust" をドイツ・ポリドールより発表する。ここでのメンバーは、ルドルフ・ゾスナ (G.Key)、ハンス・ヨワヒム・イルムナー (Key)、ヴェルナー・ザッパ・ディアマイヤー (Dr)、ジャン・エルヴェ・ペロン(B)、グンター・ヴェストボフ (Sax.Synth)、アルヌルフ・マイファート (Dr.Perc) の6人で、この内ペロンのみフランス人である。

この1st アルバムは、ジャケット、歌詞カード、レコード盤の全てを透明にした装丁でリリースされた。1st アルバム発表後、アルヌルフが脱退し72年3月より2rd アルバムの録音を開始する。5月から6月にかけて、ザッパ、ペロン、ヴェストボフの3人は、スラップ・ハッピーの1st アルバム" Sort of" のレコーディングに参加、さらに10月にはザッパ、ペロン、ソスナの3人が映像作家(ビジュアリスト)のトニー・コンラッドと共に "Outside The Dream Syndicate" を録音している。共にプロデュースはウーヴェである。

73年初頭、2nd アルバム" So Far" 発表。このアルバムも、ジャケットからレーベル (クレジットは黒インクで箔押しされている) レコード袋、附属のイメージ・イラスト (一曲ずつに添えられた9枚が黒地の紙に印刷されている) まで全て黒で統一された凝った形でリリースされた。

このアルバムからは "So For／It's a bit of Pain" がシングルとしてリリースされた。尚、B面の It's——は、後に "FaustⅣ" に収録された。 2ndアルバム発表後、ファウストはドイツ・ポリドールを離れ発足したばかりであったイギリスのヴァージン・レコードと契約し、イギリスへ渡る。

ヴァージン・レコードはそれまで彼らが録音していたプライヴェートなテープを編集したアルバム "The Faust Tapes" をサブ・レーベルのキャロラインから英国マーケットへの紹介の意味もあり、EP 盤程度の低価格で発表する。このアルバムは、プロモーションの為のアルバムで、メンバーはグループの3枚目のアルバムと見なされる事を望まなかった。表ジャケットは、イギリスの有名なDJ "ジョン・ピール" などによるファウストに関する文章が羅列され、裏ジャケットにはイギリスの画家ブリジット・ライリーの"Crest" という作品が使用されている。

73年前半、ファウストはそれまでほとんど経験のなかったライブ・パフォーマンスを開始する。しかもそれは、イギリスやフランスでのツアーという形のものであった。ツアーの後、6月よりマナー・スタジオにおいて次のアルバムの為の録音が開始された。"FaustⅣ" である。アルバム完成後の9月から10月にかけて彼らは、ヴァージン主催によるヘンリー・カウのプローモーション・ツアーに同行する。この間のステージでは、ペロンが現われなくなり、カウのジェフ・リーが加わったりもした様だ。さらにこの時期を前後して、ルドルフとヨアヒムが脱退、代りにグル・グル、ノイを経たウリ・トレプテとスラップ・ハッピーのピーター・ブレグヴァドが参加している。尚、ペロン、ザッパ、ギュンターの3人はこの年西ドイツにて、後にリコメンディッド・レコードより発売された "SLAPPHAPPY OR SLAPPHAPPY" (ヴァージンより発売された "Slapp Happy" と同じ曲目をフィーチャーした、それ以前のテイクが収められている) に参加している。

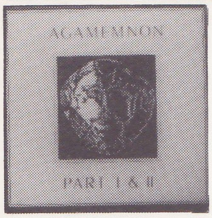


ウリとピーターの加入したファウストは、73年末ルドルフとヨアヒムの復帰により短期間で終った。

翌74年春、グループのスポークスマンであったウーヴェは「みんなの難しいキャラクターをひとつにまとめる事はむずかしすぎた」とグループを離れてしまい、ファウストは自然消滅へと至った。ファウストとして最後の活動であった解散コンサートでは、メンバーがステージの上で卓球をしただけと伝えられている。その後、ペロンだけがスラップ・ハッピーのヴァージンにおける最初のアルバムに四曲程参加しているが、やがてメンバー全員が消息不明となる。

尚、ファウストには様々なプライヴェート・テープ等が様々な所に残されている、と言われており、事実リコメンディッド・レコードより埋もれていた音が残骸を掘り起こす様にいくつかリリースされている。

榎本リュウイチ



AGAMEMNON (Switzerland)

Part I & II

AGAMEMNON AGA12410 '81 廃

A:PART I
(AGAMEMNON'S YOUTH)

B:PART II
(AGAMEMNON, KING OF MYKENE)

アガメムノンが残した唯一の作品かと思われる。トロイ戦争のギリシャ軍総大将でミケーネ王の名から取った彼等は、神話の如き深遠な音世界をアコースティック系とエレクトリックの楽器を上手く織り混ぜて使い分けながらも、決して派手に展開することはなく、地を這う様に響き渡る端正なメロディとハーモニーを大切にしながらも、時を超えて私達の前に繰り広げてくれるのである。メンバーは基本的にはG, B, Ds, Key & Voの4人だが、各人共皆それぞれに他の楽器もプレイしており、前述のメンバーに付け加えてライトショウを担当している者も参加している。アガメムノンの音には、木の温もりと香り、空と水、空気、大地にマッチした生命力の様なものが宿っている様だ。81年の自主製作かと思える。〔大〕



AGITATION FREE (W.Germany)

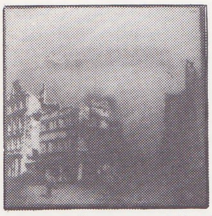
2nd

VERTIGO 6360 615 廃　1973年

A: FIRST COMMUNICATION
DIALOGUE AND RANDOM
LAILA, PART I
LAILA, PART II

B: IN THE SILENCE OF THE MORNING SUNRISE
A QUIET WALK
a) LISTENING
b) TWO-NOT OF THE SAME KIND
HAUNTED ISLAND

ルツ・ウルブリヒ、シュテファン・ディーツ、ブルクハルト・ラウシュ、ミヒャエル・ギュンター、ミヒャエル・ヘーニヒの5人によるアジテイション・フリーのセカンド・アルバム。ペーター・ミヒャエル・ハーメル参加のファースト（マレッシュ）に比して、実験性や攻撃性が薄れ、ノイジーな部分やフリー・フォームな部分があるにせよ、後にウルブリヒがゴッチングと創り出す後期のアシュラの音を思い起こさせる。このグループはドイツ・ロックの古参で、クリス・フランケ（現タンジェリン）ミヒャエル・ヘーニヒ（タイム・ウィンド、タンジェリン）らが在籍していたことで知られる。同系とはいっても、そのスタイルははるかにオーソドックスで、形式の創造というよりも、既成手段の否定という意味が強い。（島）



AGITATION FREE

Last

BARCLEY 80.162 FRENCH PRESSING '76 廃

A: SOUND POOL
LAILA II

B: LOOPING IV

アジテイション・フリーは2枚のスタジオ作品でトリップ・ミュージックとしてのロック・サウンドを追求し、中近東志向の見え隠れするファーストから、タイトにアレンジされた2ndへと移行し分裂、解散してしまう。この作品は彼等のスタジオ・セッション・テイクを集めた3枚目の作品でフランスでのみ発売された。A面は2nd時の作曲で、アレンジされた曲を演奏しているが、それ程の広がり感はない。が、B面にくり広げられるインプロヴィゼーションこそ、彼等のアイデンティティーの感じられる好テイクである。フリー・ロックの可能性を追求しながらもヘーニヒのエレクトロニクスのハード分野への興味も感じられ、彼等の歩んだ道の最高部に位置する音であるが、同時にそれが彼等の限界ともなってしまった。（山）



AMON DÜÜL (W.Germany)

Psychedelic Underground

METRONOME MLP 15 332 廃　ポリスター 22S-39　1969年

A: IM GARTEN SANDOSA
DER GARTEN SANDOSA
BITTERLINGS VERWANDLUNG

B: EIN WUNDERHÜBSCHES MÄDCHEN TRÄUMT VON SANDOSA
KASKADOS MINNELIED
MAMA DÜÜL UND IHRE SAUERKRAUTBAND SPIELT AUF

ベルリンの壁の近郊でコミューンを形成していた彼等は68年、総合芸術を目指すアモン・デュールIIと政治色の濃い一派、アモン・デュールに分裂した。これは後者、ライナー、ウルリッヒ、ヘルゲ、クリシュケ、ヘルオノーラ・ロマーナ、アンジェリカ、ウッシによるデビュー作でありジャケットも含めドラッグとの強い関連にあった当時の状況、ヒッピー・ムーヴメントを象徴する1枚である。無に等しい技術のパーカッシヴなドラム、歪んだギター音、叫き声等が単調な繰り返しをもって同時進行する重いノイズ音塊はそのエナジーの発散力においてロックの持つ過激性を赤裸々に表出している。独盤「ディス・イズ・アモン・デュール」「ミネリッド」米盤「アモン・デュール」国内盤「恋歌」は本作の再発盤である。（松）



AMON DÜÜL

Collapsing, Singvögel Rückwärts & Co.

METRONOME SMLP 012 廃　1969年

A: BOOSTER
BASS, GESTRICHEN
TUSCH FF.
SINGVÖGEL RÜCKWÄRTS
LUA-LUA-HE

B: SHATTERING & FADING
NACHRICHTEN AUS CANNABISTAN
BIG SOUND
KRAWALL
BLECH & AUFBAU
NATUR

アモン・デュールはレコード・リリース以前にIとIIに分裂し、Iが「サイケデリック・アンダーグラウンド」を、IIが「ファルス・ダイ」をそれぞれ69年にリリースする。Iは結局、メトロノームに2枚とオウルに1枚の計3枚のアルバムをリリースして解散してしまうが後にBASFより編集盤「ディザースター」がリリースされる《BASF 2929079-8 '71》。1stが赤裸々にプリミティヴな攻撃的エナジーを発散させていたのに対し、この2ndからは様々なエフェクト処理のもとに奇妙な浮遊感を感じることができる。独特のコラージュによる一連のジャケット・ワークもさることながら、この無自覚な集合体を統合し、操作し得たのは一体誰の仕業なのであろうか。ここにはロックの最も根源的な核が凝縮されている。（山）



AMON DÜÜL II (W.Germany)

Yeti

LIBERTY LBS-83359.60 廃　東芝 LP-80042 廃　1970年

A: SOAP SHOP ROCK
a) Burning Sister b) Halluzination Guillotine c) Gulp a Sonata d) Flesh-Coloured Anti-Aircraft Alarm
SHE CAME THROUGH THE CHIMNEY

B: ARCHANGELS THUNDERBIRD
CERBERUS
THE RETURN OF RUEBEZAHL
EYE-SHAKING KING

C: YETI

D: YETI TALKS TO YOGI
SANDOZ IN THE RAIN

アモン・デュール・セカンド、70年発表の2ndアルバム。2枚組の内、サイドAとBの曲は作曲がなされており、サイドCとDは即興演奏によるものである。方法の違いのため両者の間に若干の差違を感じるが、基本的には全編を通じてサイケデリックな雰囲気と攻撃的なエナジーが満ち満ちている。その攻撃性という点ではサイドCのタイトル・チューンとサイドDの1曲めで頂点に達するが、それに続くアルバム・ラストのD-2の曲では呪術的な世界が醸し出され、タイトルの「Yeti」をいやが上にも見せつけられてしまう。さらに本作以外の作品も含めて、彼らのジャケット・デザインの類稀なセンスにも圧倒される。なお、本作にはアモン・デュールIのレイナー(G.Vo.)とウルリッヒ(B.)がゲスト参加している。（城）



AMON DÜÜL II
Tanz Der Lemminge

LIBERTY 廃 東芝 1971年
LBS 83 473/74 X LP 93001 B 廃

A: SYNTELMAN'S MARCH OF THE ROARING SEVENTIES
B: RESTLESS SKYLIGHT—TRANSIRTOR—CHILD
C: THE MARILYN MONROE—MEMORIAL—CHURCH
D: CHEWINGGUM TELEGRAM STUMBLING OVER MELTED MOONLIGHT TOXICOLOGICAL WHISPERING

初作「ファルス・ダイ」ではオリジナル・アモン・デュールの名残か幾分パーカッシヴな面が見られたが、この３作目は前２作を継承しつつも特に組曲形式のＡ、Ｂ面においてアコースティック・パートやギミックを複雑に折り込み迷路のような難解な音作りの頂点にある。Ｃ面のインプロヴィゼイションに至ってはエコー、リヴァーヴによる不明瞭で多彩な音色が氾濫した音響でありドラッグ・サウンドとしての性格が強くジャケットのようなイメージ・フィルムを見る思いである。またシタールの使用等によりインド的な趣きが感じられる。構成は前作と酷似しているが曲想は対称的にソフィストケイトされたものである。以後７th「ヴィヴ・ラ・トランス」まではやや軟化傾向にありながら一定のヴォルテイジを保つ。（松）

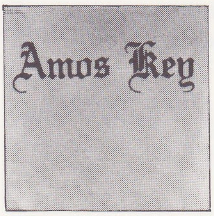


AMON DÜÜL II
Wolf City

UNITED ARTISTS 東芝 1972年
UAS 29406 廃 LLP-80783 廃

A: SURROUNDED BY THE STARS
GREEN-BUBBLE RAINCOATED-MAN
JAIL-HOUSE-FROG
B: WOLF CITY
WIE DER WIND AM ENDE EINER STRASSE
DEUTSCH NEPAL
SLEEPWALKERS
TIMELESS BRIDGE

６枚目。前作"CARNIVAL IN BABYLON"('72年)と比べると、カール・H・ハウスマン(kbd)が脱け、ピーター・レオポルド(per)もA-2,3、B-2にのみゲスト参加、代わりに前作ではゲスト扱いだったフォルク・ログナーが出戻りで正式参加している。この頃から次第にC・カーレル(vln,g)がデュールIIをリードするようになり、以前の即興重視から整然とアレンジされた曲を演奏する方向に進む。その頂点に達するのが本作で、ジャーマン・ロックのエスプリと曲自体の良さをかねそなえた名盤である。ユートピアにも収録されている名曲B-3と他のナンバーとの完成度に差がないことからもそれは明らかである。グループは現在までに20枚弱ものアルバムを製作し続けているが昔の面影はない。（千）



AMOS KEY (W. Germany)
First Key

SPIEGELEI 1973年
26 413-U 廃

A: SHOEBREAD
ENSTERKNICKSTIMM-STAMM
KNECHT RUPRECHT
SOMETIMES....
GOT THE FEELIN
B: ESCAPE
IMPORTANT MATTER
DRAGON'S WALK
FIRST KEY

E.L.P.に触発されて結成されたバンドは世界中いたるところにあるがアモス・キイもそんなバンドの１つである。ドイツでE.L.P.に触発されたバンドというと他にトリアンヴィラートやトリトナス、S.F.F.等がある。これらの中で商業的に成功したのはトリアンヴィラートくらいのもので、トリトナスにしろこのアモス・キイにしろほとんど話題にすらならずに消えていったバンドである。あまり緊張感のないサウンドがわざわいしてかアモス・キイはコレクターの間でもあまりいい評判を得られていないようであるが、ドイツ・シーンの中では中級程度には十分評価できる作品「ファースト・キイ」を唯一の遺産として今に伝えている。（山）



ANABIS (W. Germany)
Heaven On Earth

PM 1080 '80 廃

A: HEAVEN ON EARTH
WATER-PROBLEM
FADED DREAM
B: MALLEUS MALEFICARUM
ASSASSINATION

アナビスの1st、自主製作である。同国のアイヴォリーやノイシュヴァンシュタイン等と並んで、ジェネシスタイプのシンフォニック・ロックとしては高水準に値する素質を十分に兼ね備えたグループであると断言出来る。ガブリエルを意識しつつも独自のカラーを持ったヴォーカリストの歌唱力、安定した曲の構成や演奏、テクニックから察して、かなりの実力者揃いと考えられる。メンバーは恐らく５人編成かと思えるが、その中でトマス・シュミットなる人物（ペル・メルのメンバーと同姓同名!!同一人物という説もあるが？）の名前が挙がっている事から、何らかの関係があるのではないだろうか…？グループは翌年に2nd「Wer Will!!」をリリースするが、こちらも前作の延長線上、素晴らしい出来に仕上がっている。〔大〕

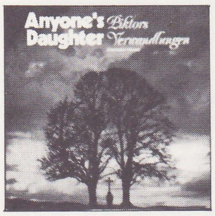


ANNEXUS QUAM (W. Germany)
Beziehungen

OHR 1972年
OMM 556 028 廃

A: TROBLUHS EL Ë ISCH LEYENBURG 1
B: DREH DICH NICHT UM LEYENBURG 2

70年前後、英・米の模倣音楽から意識的に脱却すべく様々な実験的試行が当時のアンダーグラウンド・シーンを形成、拡大していったが、その大半がドラッグに触発されたメディテイション・ミュージックや自己の感性に埋没した観念的な音楽であった。しかし意識的であったが故に体系判断に基づけばドイツ人の音の嗜好、強いては気質を顕著に表わすのもこの時期の作品群である。彼等の１st「オスモゼ」に続くこの終作もその典型作であり暗い音色のサックス、フリー・スタイルのギター、ベース、フルート、パーカッション等によるフリー・ジャズ色濃厚なサウンドを有している。また緊迫感の薄い取り留めのない演奏は全体にうっすらと浮遊感を伴っておりメディテイション・ミュージックのようにも響く。（松）

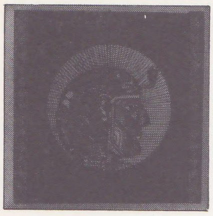


ANYONE'S DAUGHTER (W. Germany)
Piktors Verwandlungen

SPIEGELEI 1981年
INT 145 624

A: PIKTOR
ERSTES VORSPIEL
ERSTER TEIL DER ERZÄHLUNG
PURPUR
ZWEITES VORSPIEL
ZWEITER TEIL DER ERZÄNLUNG
DER BAUM
B: DRITTER, TEIL DER ERZ'AHLUNG
SEHNSUCHT
VIERTER TEIL DER ERZÄHLUNG
PIKTORIA, VIKTORIA
FÜNFTER TEIL DER ERZÄHLUNG
DER DOPPELSTERN

エニワンズ・ドーターの３rdアルバムは、81年１月に行なわれたコンサートにおけるライヴである。が、Ｂ面の最後になるまで拍手がない。スタジオ録音と思われる程の完璧な演奏力。半分程が朗読。その間の演奏がうすいのはライヴである証拠（ジャケットにabsolut live!と記されている)。1stの「ADONIS」から一貫した音楽性をもち続けているにもかかわらず、本作が違った形に聞こえるのは演奏技術の向上もさることながら、ドイツ語を使っている事と語りを入れた特殊な構成のため。その後の「IN BLAU」では元に戻っている。彼等の作品の中では少々異端だが、同じドイツのグローブシュニットやノヴァリスを完全に超越した、叙情派プログレの最高作と呼んで間違いないだろう。ジャケットもまた傑作である。（中藤）



ASH RA TEMPEL (W. Germany)
Ash Ra Tempel

OHR 1971年
OMM 56 013 廃

A: AMBOSS
B: TRAUMMASCHINE

ブルース・ロックを基底にコスミッシェ・レーベルにおいてトリップ・サウンドを象徴したマヌエル・ゴッチング(G)のアシュ・ラ・テンペル。72年期、ドラッグとの関係が極度に強力であったこの音楽集団の変遷こそドイツ・ロックの創成期から現在に至る過程を如実に表わしている。この1stでのメンバーは他にクラウス・シュルツェ(Dr)とハルトムト・エンケ(B)。A面の過激な内向性ハードロックB面の静寂なサウンド共に過多なエコー操作が成された即興演奏でありどろどろとした暗さを内包している。最終的にアシュ・ラ・テンペルはM・ゴッチングに集約され現在アシュ・ラと名乗り確実な足取りを示しているがこの変形ジャケットの中には一心不乱にギターに打ち込む18歳の情熱がある。（松）



ASH RA TEMPEL
Schwingungen

OHR 1972年
OMM556 020 廃

A: LIGHT
DARKNESS
B: SCHWINGUNGEN

アシュラテンペルのセカンドである「シュヴィングンゲン―振動―」はシュルツェの脱退後、ゴッチング、エンケ、スイープル・チェイス時代の仲間ヴォルフガング・ミュラー、アジテイション・フリーにいたヨーン・L、サックスのヴェラー、ボンゴ奏者ウィル・ポップによって録音された。アシュラテンペルの音楽的姿勢はドラッグによる精神解放と現代の没落した人間の表現にあり、彼らがLSD解放を叫ぶティモシー・リアリー博士や(何と7upでうたっている)オリダス・ハックスリー博士に強い影響を受けていることからも理解できる。音楽はこうした基盤の上で作用するものと考えられ、音だけを取り出して評価するのは意味がないが、一言でいえば、ヘヴィーで即興的なサイケデリック・サウンドである。（島）



ASH RA TEMPEL
New Age Of Earth

仏ISADORA
ISA 9003 廃
ビクター
VIP 6914 廃
ビクター
VIP 4172
1976年

A: SUNRAIN
OCEAN OF TENDERNESS
DEEP DISTANCE
B: NIGHTDUST

「セヴン・アップ」「ジョイン・イン」の両作品を残した72年期のセッションを通り抜けたマヌエル・ゴッチングがロジ・ミュラーとの共演「スターリング・ロジ」の後ディレイを多用した反復による音世界を打ち立てたのが前作「インヴェンションズ・フォー・エレクトリック・ギター」であったがこの7作目にはそれを踏襲しつつ煌めく感性が溢れんばかりの心安らぐ流麗な音粒の綴れやうねりが連脈している。A面を明B面を暗とし次作以後のポップ感覚導入の踏台となるこのドイツ電子音楽の淘汰による集積的作品、各タイトルが曲想を物語る。Key, Syn, G, プロデュース全て彼によるもので「ロジは私の力の源である」と記されている。尚ジャケット違いで発売の英ヴァージン盤はアシュ・ラ名義である。（松）

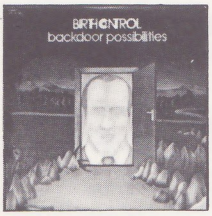


BETWEEN (W. Germany)
Contemplation

WERGO 1977年
WER-SM 1012

A: CONTEMPLATION
WATCH THE TREES
CIRCLE
IVORY AND STEEL
ORPHIKON
B: STATE OF SOUND

6枚のソロ・アルバムにて半ミニマル・ミュージック、東洋の伝統音楽等を鍵盤楽器に取り込んでいるペーター・ミヒャエル・ハーメルを基軸にポポル・ヴフ参加、実はクラシック界のオーボエ奏者でもあるロベルト・エリスク、アルゼンチン国籍のギタリスト、ロベルト・デトリー等をメンバーとするビトゥイーンの5作目。一貫してインド音楽、コンテンポラリー・ジャズの要素を内包した現代音楽を瞑想的音響空間にまで至らせる音楽性はウッド・ベース、シタール、タブラを使用しつつも浄化されきった理知的な響きと硬質な美しさを放つ。本作はより音色に清寒さ、凝結感があり静的かつ内向的、A面は曲ごとに各楽器を活かしておりグループの音楽構成要素を全体のサウンドまで拡大した形になっている。（松）



BIRTH CONTROLL (W. Germany)
Backdoor Possibilities

BRAIN
60.019
テイチク
UXP-731-EB 廃

A: ONE FIRST OF APRIL
BEEDEEPEES
FUTILE PLAYER
B: LA CIGÜENA DE ZARAGOZA
BEHIND GREY WALL
NO TIME TO DIE

4月の初めのある日、ストライヴァー氏は裏口から旅に出た。扉を開けるとそこには現実の自分と対峙するもう一人の内なる自分が居た…という物語で幕を開ける「裏口の可能性」と題されたこのトータル・アルバムは彼らの8枚目（ベスト含む）にあたる。プロデュースはジェネシス、キャメル、キャラバンを手掛けたデビッド・ヒッチコック。ジャーマン・ロックの中では英米両方ツアーした数少ないバンドでブルー・オイスター・カルトとジョイントした時はかなり注目された。そのせいか音の方もそれ以後、ポップで聞き易くなっている。メンバーも流動的だが「インクリース」以後、ツイン・ドラムスとなったメンバーでのブレイン・フェスティバルでのライヴはこの頃の彼らのベスト・テイクと言えよう。（い）



BLUE MOTION (Switzerland)
Same title

AMOS : LP 5438 '80 廃

STEPHAN AMMANN - KBD
STEPHAN GRIEDER - KBD
FRITZ HAUSER - DS, XYLQPHON

元サーカスの2人を中心に結成されたブルー・モーションは80年に500枚限定で本作を発表している。キーボード2台にパーカッションという変則的なトリオ編成であるが、全編にわたり非常にテクニカルで緊張感溢れるインストナンバーが綴られている。割と攻撃的でセンセーショナルな幕開けながら、曲中では動と静のコントラストが見事に表現されており、どちらの場面でもピアノを核にした展開が多く見られる。それをオルガンやシロホンが巧みにエスコート、3人が一体となった演奏で、僅か2日間のスタジオライヴ録音としては異例とも言える高水準の作品を作り上げてしまった。よくサーカス系の居品を「所詮はクリムゾンの亜流」と嫌う人がいるが、本作を耳にすれば一味違った印象を持つかも知れない。（江）



BRAINSTORM (W. Germany)
Second Smile

SPIEGELEI 28596 5U '73 廃

A: HIRNWIND
HERBEST
MY WAY

B: AFFENZAHN
THERE WAS A TIME
MARILYN MONROE

ブレインストームというとどうしても、1st アルバムのイメージから２流ジャズロックバンドと思われがちだが、どういうわけか、このセカンドアルバムではサウンドが一変していて驚かされる。内容はいわゆるシンフォニックタイプで、メロトロンを導入して、クリムゾン風の曲もおさめられている。しかし全体的にいうとメロディアスで聞きやすく、ボーカルは多少アメリカナイズされた傾向も感じられる。テクニック的にも 1st アルバムから格段の進歩で、聞かず嫌いのドイツロックシーンにもこんな名盤が埋もれていたのかと痛感させられる一枚である。（坂）



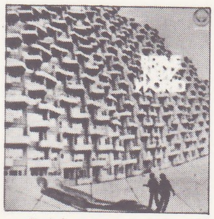
ARIK BRAUER (Austria)
Arik Brauer

POLYDOR
2371 224 廃
1971年

A: OHO HALALALI
DIE JAUSE
SIE HAB'N A HAUS' BAUT
WIE A HUND
WARUM IST ERSO DUMM
SEIN KÖPFERL IM SAND

B: REISE NACH AFRICA
DER SURMI SUI
DER SPIRITUS
ROSTIGER DIE FEUER-WEHR KO MMT
SERENADE
DSCHIRIBIM-DSCHIRIBAM

エリッヒ・ブラウアーはウィーン幻想派の画家である。この一派の画家としてはハウズナー、フックス、フッター、レームデン、ブラウアー等がいるが、それらの中でもブラウアーは直線のない夢幻的な色彩を持ち、すべての生物がアメーバのごとくにメタモルフォーズされてしまうという特異な感覚を持っている。ブラウアーは画家である傍、放浪癖が強く、フォーク・シンガーとしてスペイン・ギリシア、アフリカ、イスラエル等へと旅を続け、その期間に創られた曲をこのレコードとして発売したものと思われる。内容的にはフォルクローレ的な色彩が強く、しかも意外な程に明るいもので、彼の描く絵とは対照的な感じさえするものである。彼は他にも２枚程ＬＰをリリースしている。（山）



BRAVE NEW WORLD (W. Germany)
Impressions On Reading Aldous Huxley

VERTIGO
6360-606 廃
1972年

A: PROLOGUE
ALPHA, BETA, GAMMA, DELTA, EPSILON, FORD
LENINA
SONA
MALPAIS

B: THE END
EPILOGUE

タイトルにある Aldous Huxley とは、第一次大戦後に活躍したイギリスの作家の名。主知的傾向の強い作品で文学界にデビューした彼は、やがて東洋宗教に立脚した神秘主義に没頭してゆく。Brave New World というグループ名は彼の作品「すばらしい新世界」に由来している。タイトルとトータライズされたその内容からして、Huxley の作品を題材に、そこから受ける印象を彼らなりの解釈によって音に表わしたものであり、極めて実験性の強い作品である。サイケ、ジャズ、民族音楽等多彩な要素をとり入れながらも、ギター、キーボード、フルートを中心に奏でられるその音からは極度な難解さは感じられない。新しいタイプの前衛音楽といえよう。（江）



BRÖSELMASCHINE (W. Germany)
Bröselmaschine

PILZ
20 21100-2 廃
1971年

A: GEDANKEN
LASSIE
GITARRENSTÜCK
THE OLD MAN'S SONG

B: SCHMETTERLING
NOSSA BOVA

ロルフ・ウルリッヒ・カイザーが設立したオウル、コスミッシェと並ぶピルツ・レーベルは70年代初頭においてドイツの持つ深遠なロマンティシズムを表出していたが同時に神秘的色彩の濃いものであった。フォーク、トラッドに根ざしたサウンドを特色とする同レーベルにあって、この彼等の１st アルバムもヘルダーリンに比べ見劣りはするものの典型的なピルツ系サウンドと言えよう。Ｂ面ではフルート、シタール、コンガ、メロトロン等によるインド音楽風な部分もあるがジェニー・シュカーのヴォーカルをフィーチャーしアコースティック・ギターを基調とするリヴァーヴのかかったサウンドには奥深さが感じられる。後にギターのペーター・ブルシュは本グループを率い２枚、ソロで２枚の作品を残している。（松）



THE CAN (W. Germany)
Monster Movie

MUSIC FACTORY SRS 001 69 廃
UAS 29094 再

A: FATHER CANNOT YELL
MARY, MARY, SO CONTRACRY
OUTSIDE MY DOOR

B: YOO DOO RIGHT

カンのファースト・アルバム。彼等の自主レーベル、ミュージック・ファクトリーの第一弾としてリリースされたもので、２作目はホルガー・シューカイの Canexis 5 である。このレーベルは２枚の作品を残して消滅する。後にＵＡレーベルに移り、続々とアルバムを製作したことは周知の通りである。この頃のヴォーカリストはマルコム・ムーニィであり、極めてストイックな彼のヴォーカルは後の鈴木のものとは多少印象が異なる。ヴェルベットの影響のあるプリミティヴなサウンドであるが、計算された、ドイツ・アヴァンギャルドの歴史の一ページをひらくモニュメンタルな作品である。ロックというフィールドの中で、彼等のコンセプトをむきだしにしたストレートな意識が感じとれよう。（山）



CAN
Tago Mago

UNITED ARTISTS
UAS 29 211/12X 廃
東芝
LP-93025B 廃
ジャパン
JAL 1803～4
1971年

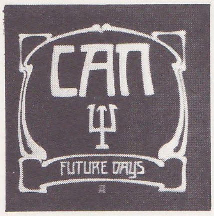
A: PAPERHOUSE
MUSHROOM
OH YEAH

B: HALLELUWAH

C: AUMGN

D: PEKING O
BRING ME COFEE OR TEA

フリー・ジャズ畑出身のヤキ・リーベツァイト（Dr）、現代音楽・クラッシック畑出身のホルガー・シューカイ（Ｂ）とイルミン・シュミット（Key）、黒人ヴォーカリスト、マルコム・ムーニー、ミヒャエル・カローリ（Ｇ）による１st「モンスター・ムーヴィー」発表後２nd「サウンドトラックス」制作中にマルコムが日本人、ダモ・鈴木に交替しての３作目、カンの力量を示す２枚組。アフロ・ビートを踏む重くタイトなドラムを中心にスケールの大きな音作りの成された本作はリズムの反復、サウンド・コラージュ等カンの特徴がより具体化されており躍動感、重量感に満ちた力強いサウンドを展開している。次作「エゲ・バミヤージ」は本作の縮小版、５th「フューチャー・デイズ」はUA時代において本作と対照を成す。（松）

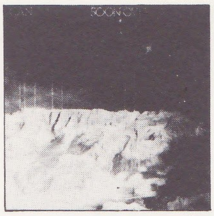


CAN
Future Days

UNITED ARTISTS UAS-29505 I 廃　ジャパン JAL 2305　1973年

A: FUTURE DAYS / SPRAY / MOONSHAKE　B: BEL AIR

ニューウェーヴ以降、又はホルガー・シューカイの活躍により再評価の高いカンの、73年、5枚目のアルバムである。多くの評論家により、彼らの最高作との名がある。たしかにキーボード・バンドで無いにも関わらずその音の空間的浮遊は強力なオリジナリティとなっている。彼らは数種類の音楽性を持っていたが、本作と7枚目の「スーン・オーヴァー・ババルマ」が最もこの傾向が強いようだ。良く知られるように、本作をもって日本人Vo.ダモ鈴木は宗教活動のため脱退。その後、彼らは黒人音楽へと傾斜して行くことになる。前作までのパーカッシヴなサウンドは影を潜め肌理の細かいメロディアスなものに移行している。「LIMITED EDITION」のA-1は本作B-1制作時の曲、或いはそれから派生した曲と思われる。（中野）

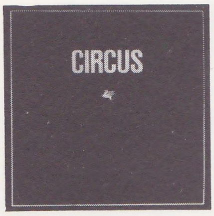


CAN
Soon Over Babaluma

UNITED ARTISTS UAS 29 673 廃　ジャパン JAL 2306　1974年

A: DIZZY DIZZY / COME STA, LA LUNA / SPLASH　B: CHAIN REACTION / QUANTUM DHYSICS

カン7枚目の本作は昔から何故か駄作と言われ続けたが、カンの作品中ベストの音楽性を持つ物ではなかろうか。異邦人Vo.を失った事により一段と緊張感のあるアンサンブルを繰り広げている。各曲の彼ら独自の微妙なエフェクトが効果的だ。彼らはこの後、黒人のベース、パーカッションを加入させるのだが、今回取上げた2枚ほどの音楽的成功は収められなかった。（ただしラスト・アルバム「CAN」は再びこの浮遊感覚を取り戻している。）ジャーマン・ロックにおいてはその後「SYPH」と言うバンドがカンの打ちだした傾向を受け継ぐ事になる。（蛇足だが本作のオリジナル・ジャケットは銀色に輝く美しい物だった。）ドイツ・ロックの一つの顔にもなった音感覚を完成させた作品と言えよう。（中野）

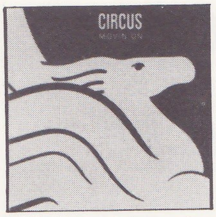


CIRCUS (Switzerland)
Circus

ZYT-208 廃　1976年

A: STORMSPRINTER / NOWADAYS / SUNDAY　B: DAWNTALK / ROOM FOR SALE

「サーカス」と名乗るグループはロック界にいくつかあるがテクニック面ではこのグループがピカ一だろう。特にリズム・セクションの迫力には圧倒されてしまう。それに多彩なエフェクトを用いたギターが絡み、随所に散りばめられたフルートも効果的で、彼ら独自の音空間を創り上げている。タイプとしてはクリムゾンの亜流派という感が強いが、あくまでも彼らの作品にはオリジナリティーが保たれているといえる。こうした音作りがスイス・ロックの本流であることは、後に登場したアイランドやフレーム・ドリームを聴いてみると容易に判断がつくからだ。なお、編成はb. ds. g. (sax) fl.の4人。キーボード抜きでもこれ程ヘヴィーなプログレッシヴ・ロックができるという点に注目したい。（江）



CIRCUS
Movin'on

ZYT 211 廃　1977年

A: THE BANDSMAN / LAUGHTER LANE / LOVELESS TIME / DAWN　B: MOVIN'ON

私の知るかぎり、スイスのグループでアイランドに続くグループはこのサーカスであろう。オリジナリティの面でも演奏水準の高さに於いてもアイランドのほうが数段秀れていることは否定できないが、後期キング・クリムゾンの強い影響下にある彼等のサウンドはかなりのものである。これは彼等のセカンド・アルバムで（1 st : CIRCUS/ ZYT 208 '76）この後、多少ポップ化したサードアルバム（Fearless Tearless & Evenless/ILLUMINATUS 001 '80）を発表、しばらくして解散した。又、彼等の他にゲストを参加させたライヴ・アルバム（CIRCUS ALL STAR BAND/ LIVE/ZYT 217）もリリースしている。本作は彼等の最高作で、特にB面全てを費したタイトル・チューンが圧巻である。（山）



CLUSTER (W. Germany)
Cluster

PHILIPS 6305 074 廃　1971年

A: 7: 42 / 15: 43　B: 21: 32

カラフルなジャケットである。これは後に「CLUSTER 71《SKY 047》」として再発されたCLUSTERの1 st。71年1月に録音されている。本作よりシュニッツラーに替ってコニー・プランクが関係しブレイン系電子音楽の展開をみた後スカイ・レーベルに場を移すのである。ここにはKLUSTER（同項参照）時代の硬質な難解さはなく次作「II」に近い増幅器や発信器を多用した機械的な音群が空間を形成している。この暗色の濁電子音から成る音響はややソフィストケイトされた「II」('72)、ハルモニアの1 st ('73)、再びCLUSTERのポップ色を含む「ツッケルツァイト」('74)まで継承されるが比較して本作は音色が著しく粗野で過激さが残る。ハルモニア2 nd ('75)以後の後期CLUSTERについては次項、ハルモニアの項を参照のこと。（松）

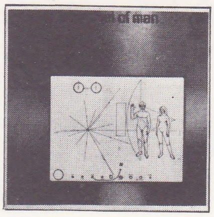


CLUSTER
Sowiesoso

SKY 005　1976年

A: SOWIESOSO / HALWA / DEM WANDERER / UMLEITUNG　B: ZUM WOHL / ES WAR EINMAL / IN EWIGKEIT

クラスターのスカイレーベルからの1枚目、ブレインから出ている粗雑とも云える作品から一変して、聴きやすい静かな音楽となっている。タイトルは"それなりに、なすままに"程の意味。この後イーノとの共作が発表され、各ソロ作品に移ってゆくが、その流れのいわば出発点となったアルバムである。ノイ、ハルモニアなど親類関係になるグループの中でも、クラスターは最もフラットでシンプルな音を創っている。多くのドイツ系グループが表現主義的とすると、これらは印象主義的である。この方法論がイーノやミュンヘン・サウンド、更にイギリスのニューウェーヴ、フランスのアヴァンギャルドに大きな影響をもったことは興味深い。イーノなどと同様、聴き込むことや、聴き手の思い入れを拒絶した音楽である。（島）



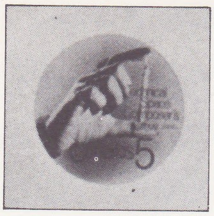
CODE III (W.Germany)
Planet Of Man

DELTA-ACUSTIC 1974年
25-125-1 廃

A: I. FORMATIONS/THE GENESIS
a) CODES
b) EVOLUTIONS
II. DAWN OF AN ERA
a) DROHUNG
b) DER MENSCH KOMMT

B: III. COUNTDOWN
a) HOPE
b) DISILLUSION
c) ESCALATION OF VIOLENCE
IV. PHOENIX RISING
a) GERMINATION
b) NOVA VITA

「ヘッドホーンの着用有無に関係なく同じ様に音が聴こえる」と注意書きされた同レーベルの第１弾。エレクトリック・エフェクトによる空間幅の広い音響の中にドイツ語の語り、イスラム風の女性コーラス、効果音(波の音、鳥の囀り）が現われ部分的にアコースティック・ギター、ドラム(担当のKLAUS SCHULZEについてあのシュルツェと同一人物か否かは不明)を交え曲として成立するものの実験音楽の色相が残っている。トータル作品として認識可能な点、計算された音の選択の点から混沌とした展開、雰囲気の押し流しは感じられず暗い色調を伴いながらも観念に陥ることなく極めてドイツ的な良質のサウンドを築いている。マンフレッド・シュンケ、エド・ケイによるこの作品、現代音楽からの流れを物語る。（松）

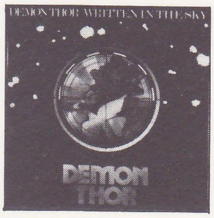


HOLGER CZUKAY, ROLF DAMMERS
Canaxis 5 (W.Germany)

MUSIC FACTORY 1969年
SRS 002 廃

A: BOAT WOMAN SONG
B: CANAXIS

本作はかつてカンの１st「モンスター・ムーヴィー」を限定600枚リリースした MUSIC FACTORY からその２番として発売されていたもので最近その再発により存在が明らかとなった。シューカイは現代になってようやく世に名を知られる様になったが、カン時代も含めて常に微妙な音処理の感覚を持つ。この15年も前のアルバムは未だ彼が現代音楽の領域から作成した物で今ほど派手でない分だけ手法が際立っている。すすり泣く様な電子音とヴェトナムの唄をコラージュした A面は秀作だ。カン以後のアルバムは全て国内盤で手にする事が出来るので一聴願いたい。テープ・コラージュを駆使した彼の音楽は大変穏やかで他のジャーマン・ロックバンドには無い人間味溢れるものだ。そしてそれはカンの浮遊感覚に通底する。(中野)



DEMON THOR (Switzerland)
Written In The Sky

独UNITED ARTISTS
UAS 29 496 I 廃

A: WRITTEN IN THE SKY

B: PINK MARY
FOR ONE LITTLE MOMENT
GOOD MORNING
SWEET CAROLINE

スイス人、トミー・フォートマンを中心とするデモン・トールは、ドイツ UA から２枚のアルバムを発表している。本作は「Anno 1972」に続く２ndアルバムである。このアルバムの真価は A面すべてを費したタイトル・ナンバーに集約されている。この曲はフォートマンの奏でるメロトロン、ピアノを中心とした壮大なナンバーであるが、所々に女性コーラスやブラス隊をフィーチャーして〝ファンキーなシンフォニック・ロック″とでも言うべき独特な音世界を展開している。B面はそれに比べると割と平凡なロック・ナンバーに終わっているが、全体を聴き通して見ると、当時の彼等がインターナショナル・レベルでの成功を念頭において活動していたであろうことが十分に感じられる作品である。（城）



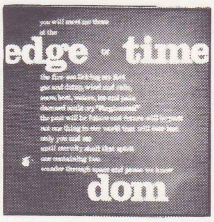
Dieter Dierks, Harald Großkopf, Jürgen Dollase, Klaus Schulze, Manuel Göttsching Sternenmädchen Gille (W.Germany)
Planeten Sit-In

KOSMISCHE MUSIK 1974年
KM 58 013 廃

A: RAUMSCHIFF GALAXY STARTET, THE PLANET OF COMMUNICATION/ELEKTRONENZIRKUS/DER NARR IM ALL/RAUMSCHIFF GALAXY etc...

B: ELECTRONIC NEWS/INTERGALACTIC RADIO GURI BROADCASTING/RAUMSCHIFF GALAXY GLEITET IM SONNENWIND/INTERSTELLAR ROCK etc...

73年発足したコスミッシェ・レーベルには８枚のセッション色の濃いアルバムがある。すなわちリリース順に「セヴン・アップ」「ロード・クリシュナ・フォン・ゴロカ」「タロット」「コスミック・ジョーカーズ」「ギャラクティック・スーパーマーケット」「サイ・ファイ・パーティー」「ギレズ・ツァイシッフ」そして本作がそれである。第４弾以後は同一の単なるセッションを編集したものでこれらエレクトロニクスによるスペイシーなトリップ・サウンドの指揮者がカイザーであり仕掛人がティモシー・リアリーであったと言える。シンセサイザーの飛び交う中をエコー・ヴォイス、ドラム等が入り乱れる様は本作において最も変化に富みまとまりをみせている。音楽的内容よりも録音技術、音の面白さの点で評価されうる１枚。（松）



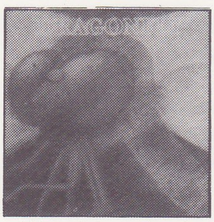
DOM (W.Germany)
Edge of time

Melocord ST-LP-DOO '72 廃

A: Introitus
Silence

B: Edge Of Time
Dream

タンジェリン・ドリームが頂点を極め、Ohr, Pilz といった一連の名作、秀作が生み出された時期に、限定500枚というまことにもってひっそりと発売された本作品は、Laszlo V. Baksay (b. vo), Gabor v. Baksay (g, vo, fl), Reiner Puzalowski (g, vo, fl), そして Hans Georg Stopka (org, g, vo) の四人によって作られた。全員がヴォーカルというか、ヴォイスと呼ぶにふさわしいパートを担当してるためか、彼らはエレクトロニクスよりもアコースティックなものに趣を置いており、それ故、派手な演奏はなく、地味な印象をあたえる。東洋的なメロディが実験音楽とかみ合い不思議な音世界を作り上げ、ドイツのグループらしく単に情緒的に流されず、思想的なものを背後に感じない訳には行かない。また、再発にもなっているらしい。〔吉〕



DRAGONFLY (Switzerland)
Dragonfly

HIGHFLY 11982 '82 廃

A: BEHIND THE SPIDER'S WEB
SHELLYCOAT
YOU KNOW MY WAYS (I BELONG TO YOU)
WILLING AND READY TO FACE IT ALL

B: DRAGONFLY

近年に数多くの高水準なグループを輩出しているスイス系シンフォニック勢。ここに取りあげたドラゴンフライも、それらの範疇に当てはまろうずば抜けた演奏力を持った存在と言えるだろう。Vo. G. B. Key. Ds の５人から成る基本的な編成で、ソリッドかつシャープな切れ味を持ったシンフォニック＆ハードなナンバーから、端正な生ピアノの調べに乗った透明かつ清涼感漂うリリカルな曲まで、82年作という事も考えると、当時において未熟な感が見受けられたブリティッシュ・ポンプ勢よりも、はるかに超越したブリティッシュナイズされたグループではないか。全曲どれもみな素晴しい出来映えだが、やはり B面を全曲費した“Dragonfly”が圧巻。一作のみ残して消滅するには余りにも惜しいと言えよう。〔大〕



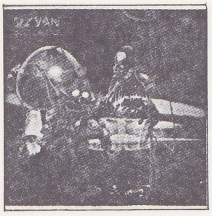
LA DUSSELLDORF (W. Germany)
Viva

TELDEC **6.23 626 AO** **キング** **GXF-2045** **1979年**

A: VIVA
WHITE OVERALL
RHEINITA
VOGEL
GELD

B: CHA CHA 2000

デュッセルドルフがNEUの発展バンドである事は周知の通り。本作はその２枚目の作品である。Ｂ面のSKY独得のビートに乗せた、きらめくばかりのナンバーは長年試行錯誤を続けた彼らの一つの頂天であろう。ジャーマンロックのイメージである「暗く重い」をはねのけ、真昼の明るさの中で自己を問うた彼らの音楽は下手な批評など受けつけないほど力強い。彼らの所属するスカイ・レーベルは共通してこのタイプの音作りをするが、現代においても彼らの影響を受けたバンドは後を絶たない。ドイツを語る時、忘れてはならないのは、英米のロックがニューウェーヴを区切りに世代が変ったのに対し、新旧の交流がさかんであり、基本的な音世界が変っていないと言う事である。（中）



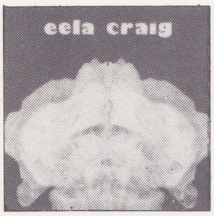
DZYAN (W. Germany)
Electric Silence

BELLAPHONE **BIPS 19202Q** **1974年**

A: BACK TO WHERE WE COME FROM
A DAY IN MY LIFE
THE ROAD NOT TAKEN

B: KHALI
FOR EARTHLY THINKING
ELECTRIC SILENCE

G,B,Dsの最小の編成をもつ、どこか北欧的響きを持つジャズ・ロック・グループ、デツィアンのサード・アルバムが、この「エレクトリック・サイレンス」である(一作目「DZYAN《ARONDA AS 10.006》」二作目「TIME M-ACHINE《BIPS-19161Q》」)。サウンドは３枚とも同系統、即興主体のジャズ・トリオに民族楽器、アコースティック楽器が加わる。特にサズ、シタール、カリンバ等がかなり前面に使用されている曲が多い。ECMのテリエ・リピダルやヴァンガードのオレゴンなどと共通の響きを有する。技術はほぼ標準、ドイツ的というより、コスモポリタンな音楽性を感じさせ、独得といえる。当時のドイツロックシーンには、このような傾向のグループも多数あったことの一つの証明である。（島）



EELA CRAIG (Austria)
same title

PRODISC 208711 '71 廃

A: NEW BORN CHILD PART 1–2
SELF MADE TRIP

B: A NEW WAY
INDRA ELEGY
1ST MOVEMENT-FROM NOWHERE
2ND MOVEMENT-BURNING
3RD MOVEMENT-ELEGY
4TH MOVEMENT-TO NOWHERE

現在まで存在が明らかにされていなかったイイラ・クレイグの幻のファースト・アルバムである。71年にプロ・ディスクなるレーベルからリリースされたこの作品は、ロールシャッハ・テストを想わす不気味な二ッ折のジャケットに包まれて発表された。71年というオーストリア・ロックとしては早い時期にすでにこの作品が生み出されていたというのは驚きである。ZuschraderとBognermayrはすでに在籍しており、２作目以降の音とは多少趣を異にする、暗く淀んだ空間である。オルガンを中心にフルートやサックスがメロディを取るプログレッシヴ初期のサウンド。しかし哀愁に満ちており、当時のシーンを想いおこすに足る好盤である。（山）



EELA CRAIG
Missa Universalis

独PHILIPS **6360-639** **フォノグラム** **BT-8119 廃** **1978年**

A: KYRIE
GLORIA
CREDO PART Ⅰ

B: CREDO PART Ⅱ
SANCTUS
AGNUS DAI
AMEN

イーラ・クライグの4thアルバムである。「One Niter」以前にもオーストリア本国で発表された自主製作作品が71年にリリースされている。本作はミサを題材としたトータル・アルバムであるが、荘厳な雰囲気の中にもポップな感覚が見え隠れし、かなり聴き易い音に仕上がっている。彼らの最高作がどれであるかは人によって論の分かれる所であろうが、本作は彼らの持ち味である「透明感のある美しさ」が最も安定した形で発揮された作品といえよう。それにしても、フィードバック奏法を完璧に操るライデルベルガーのギターの美しさには嘆息さえ出してしまう。なお３人のキーボード奏者の内、ボグナーマイヤーとツッシュラーダーの２人はドイツ・テルデックから「Erdenklang」というアルバムを発表している。（城）



ELOITERON (Switzerland)
Lost Paradise

Eloiteron:LP 4681/01 '81 廃

Martin Frey-p, org, syn, mtn, stringer.
Dani Reimann-ds
Harry Scharer-b, el. g, vo, syn
Christian Frey-p, org, syn, mtn, vc, stringer
Stefan Frey-fl, tp, s, cornet
Michi Winkler-g
pro. Eloiteron

サーカス、ブルー・モーション、アイランドといった刺激性の強いバンドに比べ少々小粒との印象は免れないが、正統派のシンフォニックロックとしては水準以上の出来栄えを誇る。メロトロンも去ることながら、ピアノプレイに重きを置いたのは成功だった。時にＢ面を聴いてみるとその良さが際立つ。acギター、フルートといった割とオーソドックスな要素でそれを巧くサポート、トランペットも要所要所で巧みに立ち回る。ただ、極く一部で変に明るい彩りが施され、若干の迫力不足を感じさせる。なおオリジナルはジャケットの上にニューウェイヴ風にデザインされたモノクロのカヴァーが貼られており、意識的に破かれたドクロの左目の部分から僅かに下地が覗くという面白い趣向になっている。〔江〕



EMBRYO (W. Germany)
Opal

OHR **OMM 56.003 廃** **1970年**

A: OPAL
YOU DON'T KNOW WHAT'S HAPPENING
REVOLUTION
GLOCKENSPIEL

B: GOT NO TIME
CALL
END OF SOUL
PEOPLE FROM OUT THE SPACE

オウル・レーベルに残されたエンブリヨのファースト・アルバムである。音的には初期の名作であるセカンド「胎児の逆襲」への前段階的な試みが成されているが、そこには広がるような豊饒感は未だ感じられず、沈むような重苦しさが感じられる。明確な方法論を捜し出す試行錯誤作であるといえる。メンバーはジョン・ケリー、エドガー・ホフマン、クリスチャン・ブルヒャルド、ラルフ・フィッシャーの４人で他に３人のゲスト・ミュージッシャンが参加している。フォース以降のエンブリヨは政治色を強めていくと同時にジャズへの傾倒を示して行くが、芸術的な意味合いに於いて最もエナジーを感じさせるのはU･Aレーベル時代の２枚である。現在までに12枚のリーダー・アルバムを作成している。（山）



EMBRYO
Father Son And Holly Ghosts

LIBERTY　　1972年
UAS 29 344 I 廃

A: THE SPECIAL TRIP
NIGHTMARES
KING INSANO
FREE

B: THE SUN SONG
MARIMBAROOS
FORGOTTEN SEA

中近東、南アジア圏の民族音楽を素材にすることの多いドイツ・ロックにおいてエンブリヨの場合それが単なるモチーフでないことは、その集大成11作目「EMBRYO'S REISE」に顕著である。またエイプリル・レーベル設立、インド、アフガニスタン、パキスタン等、未電化地域への発電機導入コンサート等、精力的な音楽活動は特筆に値する。ギター、ベース、ドラムの他サックス、フルート、ヴァイオリン、キーボード、マリンバを使用したジャージーな彼等のサウンド。この3作目ではベースを軸とし、より柔軟性のある地味な音作りではあるがマリンバを潤滑油とした流れのあるサウンドはアコースティック・ギター、落ち着きのあるフルート、ヴァイオリンを部分的に配置することにより、アクセントをつけている。（松）



EMBRYO
We Keep On

BASF　　1974年
2021865-3 廃

A: NO PLACE TO GO
FLUTE AND SAZ

B: EHNA, EHNA, ABU LELE
HACKBRETT-DANCE
ABDUL MALEK
DON'T COME TOMORROW

ドラム、マリンバ等担当の CHRISTIAN BURCHARD を中軸とするエンブリヨは幾多のメンバー移動を重ねながらも13作のアルバムを発表している。本作は5 th「ロックセッション」に続き74年リリースされたがレコーディングは2 nd「エンブリヨズ・ラッヒェ」に参加していたロマン・ブンカ（ギター）を再び加え更にチャーリー・マリアノ（サックス、フルート）等を迎えて72年12月、3作目と4 th「スタイッヒ・アウス」との中間期に行なわれている。サックスとギターが前面に出ることによるジャズへの傾斜と中近東色の濃い民族音楽への傾斜がそれぞれ C.BURCHARD のドラムとパーカッションを底辺に前者のパワフルな演奏、後者の土埃と蜃気楼が舞うような曲想に両極化されている。非常にアグレッシヴな作品である。（松）



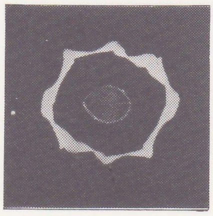
EMTIDI (W.Germany)
Saat

PILZ　　1972年
20 29077-8 廃

A: WALKIN' IN THE PARK
TRÄUME
TOUCH THE SUN

B: LOVE TIME RAIN
SAAT
DIE REISE

かつて、「よいこのジャーマンロック」で常に上位ランキングされていたエムティディのセカンド。ジャーマンロックファンは、ミーハーであるということを如実に物語る決定的な1枚である。カナダ人女性ドリー・ホルメスの奏でるオルガン、ピアノ、ハープシコードの無常感ただよう調べは、自然を慈しむ素直な感情の発露ともいうべきボーカルに一層の効果を及ぼし、全盛期を迎えんとするジャーマンロックの礎に一つの可能性を見い出し得た素晴らしいものだ。プロデュースは取締役のロルフ・ウルリッヒ・カイザー氏自らがやり、エンジニアとしての出たがり屋、ディエーカー氏の名も“ファンタスティック・マン”とクレジットされている。アートデザインは言うまでもなく、ヘルムート・フリッツ氏である。（丸）



EPIDERMIS (W.Germany)
Genius Of Original Force

KERSTON 65063 '77 廃

A: THE NON EXISTENT SURROUNDINGS OF GOD
A RIDDLE TO MYSELF

B: GENIUS OF ORIGINAL FORCE
PRIME ORIGIN

脳味噌のフォトグラフィーを用いた、シュールなイメージが香り漂うカヴァーに包まれたエピデルミスの 1st. Key. B. そしてリコーダーも兼ねるGとDsの4人編成で、全員がヴォーカルをとるという一風変ったグループは、さしずめ音的にはクセのないジェントル・ジャイアントかバンコといったところか。ある意味では、ドイツ臭さのない洗練された構築美を誇っている硬質のシンフォニック・グループと言えよう。クロス・リズムを生かした曲の構成と展開、強固にまとまってバラツキのない各メンバーのコーラスと演奏テクニック共に、ジャーマン系ということで考慮してみると、申し分のない完成度を持った作品ではないだろうか？彼等はこのあと 2nd を発表するが、完全にボルテージは落ちてしまっている。〔大〕



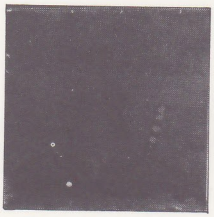
EROC (W.Germany)
Zwei

BRAIN　　テイチク　　1976年
60.007　　UXP-759-EB 廃

A: Nebelwelt/Ein unhöflicher anfang/Aktuelles vorwort/Der traum vom wald/Lied von der brücke/Toni Geht nach boeler heide/Geleerte Worte/Abendmeer/Kleine Freude

B: Prof. Erwin Senkellfuss/Sonnenfluch/Herr von schwabulahn/Das Irrsinnslied/Eine Erkenntnis/Ich bin ein Lachen/Sternenwelke/Ein Höflicher abgang

グローブシュニットのドラマーであり、事実上のリーダーでもある本名ヨアヒム・エーリッヒのセカンド・ソロアルバムである。発表は76年でちょうどグローブシュニットが3枚目の「ジャンボ」を出していた時期でこの頃のエロックはグループではドラムの他に各種エレクトロニクス、エンジニア、プロデュースまでこなし、このソロでも全ての楽器と処理を一人でこなしている。このアルバムは単に聞き流しているだけでは全て冗談の様に聞こえてしまうが、彼がグローブシュニットで果たした「裏切りのフレーズ」の集大成と見た方が正しい。次はこのメロディーで展開されるだろうという聴き手の予測をくつ返してしまうグローブシュニットでの彼のやり方が見事に開花されている。78年にも3枚目が出ている。（い）



ET CETERA (W.Germany)
Et Cetera

GLOBAL　　1970年
28001-8U 廃

A: THURSDAY MORNING SUNRISE
LADY BLUE
MELLODROMA

B: RAGA
MILKSTREETS

ダウナーはドイツの前衛ジャズシーンで有名な人で、オクメルズ、フリーアクション（ジャケットもデザインして才能を発揮）等が日本でも発売されている。オクメルズではビートルズの曲をアレンジしたりして早くからロックやエレクトロニクスに興味をしめしていたが、エトセトラを組んでロックに接近する。70年に本作、2 ndにコロシアムのハイズマンやジャズロックのラリー・コリエル等で KNIRCH、そして2枚組のライヴ。メンバーはドラムのF・ブレスフルを除いて流動的。74年には「KUNSTKOPFINDINER」を Vio. にズビグニェフ・ザイフェルトを迎えて発表。本作のメンバーはベースにECMで有名なE・ウェーバー、ギターにエンブリオのジギ、シェワブの5人編成によって、アラベスクなラーガやマニエリスティックなジャズエレクトロニクスを展開する。（木）



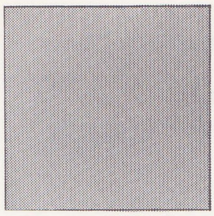
EULENSPYGEL (W.Germany)
2

SPIEGELEI 28 760-7U 廃 1971年

A: TILL
SON MY
KONSUMGEWÄSCHE

B: STAUB AUF DEINEM HAAR
DIE WUNDE BLEIBT
DAS LIED VOM ENDE

グループのリーダー格である、ジェイムス・スロウは自らを“ティル”と名乗り、6人の遊芸人を引き連れて71年ハンブルクに現われた。中世のドイツの民間伝承で余りにも有名なオイレンシュピーゲルのデビューアルバムである。“2”となってはいるが、72年に同レーベルから「アウシュス」というタイトルでセカンドが出ている。本アルバムでは、ジャーマンロックに例を見ない溌剌とした自由な演奏が展開され、ドイツ古都にまどろむ憂愁に満ちたフルートとオルガンの音色は、石畳に敷きつめられた世都市の面影をそのまま偲ばせてくれる。また、思わず吹き出してしまいそうなジャケットデザインもシリアスな中にもユーモラスな一面を欠かさない風俗志向を垣間見せてくれる奇抜な見せ物だ。（丸）



EULENSPYGEL
Ausschuss

Intercord 28780-5U '72 廃

A:Abfall

B:Menschenmacher
Teufelskreis
Heufelskreis
Der Fremade
Untertanenfabrik

ジャーマン・ロックの中で好きなものを10枚上げよといわれ、10枚選べるかどうか。このEulenspygelのレコードを10枚の中にいれるか、いれないかは別として、なかなかの力作にはちがいない。1枚目の方は、ジャケットに感心するぐらいで、到底自分の好みにはほど遠かった。本作は、イギリスのアップル・スタジオで録音され、ジャケットもドイツのグループらしいというか、段ボールがはりつけられているという風変りなもの。全体的には前作の延長線上ながら、それまでのドイツのグループには少ないシンフォニック的な面を耳にすることができる。なにはともあれA面を費やした大作の後半は、圧倒的ともいえるパワーで曲が進行する。当時全盛のメロトロンが大幅に使われいやが上にも曲を盛り上げて行くのである。〔吉〕



FAITHFUL BREATH (W.Germany)
Fading Beauty

FB AA 6963.233 廃 1973年

A: AUTUMN FANTASIA
1ST MOVEMENT
FADING BEAUTY
2ND MOVEMENT
LINGERING COLD

B: THARSIS

73年に自主製作として限定発売されたフェイスフル・ブレスのファースト・アルバム。77年に一時再発された（Code CSM-10002-FB）が現在ではこれも入手不能の状態であるようだ。マンフレッド・フォン・ブトラー（オルガン、メロトロン、ピアノetc）、ハインツ・ミークス（ギター）、ユルゲン・ヴァリッツ（ドラムス）、ホルスト・スタベノフ（ベース）の4人編成で重厚なシンフォニック・ロックを奏でている。テクニック的にはさして期待できるものではないがゲルマン人の心からわきでるロマンティシズムは正に叙情である。80年には再編し、スカイ・レーベルよりセカンド「ROCK ON MY HILL《SKY 038》」、翌年81年にサード「ROCK LIONS《SKY 055》」を発表している。（山）



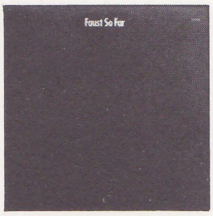
FAUST (W.Germany)
Faust

POLYDOR 2310 142 廃 ポリドール 23MM 0236 1971年

A: WHY DON'T YOU EAT CARROTS
MEADOW MEAL

B: MISSFORTUNE

透明ジャケットで創られたファウストのファースト・アルバム。彼等は本作、「SO FAR」「TAPES《VIRGIN VC 501 '73》」「Ⅳ《VIRGIN 87 739 '74》」と計4枚のリーダー・アルバムの他、トニー・コンラッドとの共作盤、アンソニー・ムーアの1stアルバム、スラップ・ハッピイの1st等にも参加していることが知られている。様々なモチーフを細断し、無作為に再構成するという手法を持つファウストの特異性はこの1stアルバムにおいて、エフェクトの使用を伴い最も明確に表われている。ことファウストに関しては諸説が粉々としているが、的確な表現は未だに成されてはいないように想う。ただ、プロデューサーであるウヴェ・ネッテルベックの役割もみのがすことはできないと思うがどんなものであろうか。（山）



FAUST
So Far

POLYDOR 2310 196 廃 ポリドール 23MM0126 1972年

A: IT'S A RAINY DAY, SUNSHINE GIRL
ON THE WAY TO ABAMÄE
NO HARM

B: SO FAR
MAMIE IS BLUE
I'VE GOT MY CAR AND MY TV
PICNIC ON A FROZEN RIVER
ME LACK SPACE...
...IN THE SPIRIT

ファウストの2作目。ジャケット、レーベル・マーク等全てが黒一色で統一され、9曲各々に対してのイメージ・イラストが添えられている。前作が継ぎ目なしの比較的長い曲の中に様々な音響コラージュを形成していたのに対し、本作では9曲という小品に細分され、各曲はそれぞれ独立した小曲として分離している。しかしこの場合、批評は各曲に対して成されるべきではなく、全体を見回して始めて成立するものである。ベルベット・アンダーグラウンドからの影響を感じさせるファウストであるが、ベルベットがルー・リードという強い個性によってひきずられるのに対し、ファウストには全体としての意志がバランス良くブレンドして一つの完結をみている。（山）



FLAME DREAM (Switzerland)
Elements

VERTIGO 6326976 '79 廃

A:SUN FIRE
SEA MONSTERS

B:EARTH SONG
A POEM OF DANCING

スイスのテクニカル・シンフォニック集団、フレイム・ドリーム。本作品は彼等の2ndである。前作の1st「Calatea」においては曲作りのアイディア等が先行していて、水準的にも今一歩の感が見受けられたが、それなりに聴き処を持った仲々の好作品でもあった。発表後にギターが抜け、Keyをメインに Vo & Sax・Fl, B, Dsの4人で製作された、この「Elements」では、手法と方法論は前作と同じ傾向ではあるが、構成や展開・テクニック的には一段と向上しており、スイスの広大な自然と国土を彷彿させるかの様に印象付ける。クリアーかつ壮厳な演奏が聴き物、仲でも流麗なキーボード群とサックス、フルートとのからみは特筆すべきところ。グループは本作以降、親しみのあるポップ風な音へと移行していった。〔大〕



FLAME DREAM
Out in The Dark

VERTIGO 6367 016 '80

A : FULL MOON
NOCTURNAL FLIGHT
OUT IN THE DARK

B : WINTERTIME NIGHTS
STRANGE MEETING(PART 1)
CALEIDOSCOPE
STRANGE MEETING(PART 2)

6枚のアルバムをリリースしているフレイム・ドリームは高水準の作品の多いスイスの中でも秀れたシンフォニックを演奏しているグループである。ファーストは荒削りながら、後の成長を予見させるに足る作品であり、彼等が最も高いヴォルテイジを保つのはセカンドからこのサード・アルバムに到る時期である。フォース以降は最新のイクウィップメント、録音技術を導入しながらも徐々にポップに平板になっていくが、どれも一聴には値する作品だと信じる。一方、セカンドとサードは甲乙付け難く、水準の高い演奏技術——特にローランド・ルックストゥールのキーボードのセンスの光る現代的イディオムを持つプレイを中心として素晴らしいシンフォニック・ロックを披露してくれる。テクニックもさることながら構成力も見事だ。 (山)



FLOH DE COLOGNE (W. Germany)
Geyer Symphonie

OHR
OMM 556.033 廃 1974年

A: 1 SATZ: GRANDE TRI-STESSE(REQUIEM)
2 SATZ: DANSE MACABRE (TOTENTANZ)

B: 3 SATZ: SÉRÉNADE DES VAUTOURS (LEICHENSCHMAUS)

彼等について知ることのできる最古の情報は68年10月に制作された「VI-ETNAM」《PLÄNE S 33 101》である。活動は現在も続いており、判明する限り11枚のアルバムをリリースする政治色の濃いバンドの様である。本作はオウル・レーベル在籍時にリリースされた5作目であり、同レーベルの最終作でもある。ボンゴ、ドラム、サックス、フルート、マンドリン、オルガン、ギター、ベース、シンセサイザー、メロトロン、ピアノ等、30種類におよぶ楽器による様々な形態の演奏と効果音が次々とコラージュされドイツ語の語りによって曲進行がはかられている。初期ザッパのドイツ版といった感がある。ブラック・ユーモアが全体を貫き賛否の分れるところであるのはジャケットを見ても判る通り。 (松)



FLUTE & VOICE (W. Germany)
Imaginations Of Light

PILZ
20 21088-2 廃
テイチク
UPS-549-B 廃
1971年

A: IMAGINATIONS OF LIGHT
THOUGHTS

B: RESTING THINKING ABOUT TIME
NOTTURNO

ハンス・レッフェルト（E・ギター、A・ギター、フルート）とハンス・ブランダイス（シタール、E・ギター、ヴォイス）のデュオ作、唯一の作品である。シタール、ジャズ色の伺えるE・ギター等を中心に全編、各楽器の絡みとソロによって静的で極めて東洋的な音世界が淡々と繰り広げられている。薄日の差し込む中を気の向くまま自由に奏でられた様なそれは瞑想音楽と呼ぶことの出来る類の音楽である。アネクサス・クァムの音楽性とヒッピー・ムーヴメントが生み出したというべき夢幻的或いは東洋的な響きを持つ例えばW&Wの様なフォークとの中間に位置し、更に音を浄化した内容と言えば察知できようか。70年前後の西洋文化圏に花咲いたインド志向が音に反映された意味でその典型的作品と言える。 (松)



GILA (W. Germany)
Gila

BASF
20 21109-6 廃 1971年

A: AGGRESSION
KOMMUNIKATION

B: KOLLAPS
KONTAKT
KOLLEKTIVITÄT
INDIVIDUALITÄT

ギラのファースト・アルバム。ギラは2枚のアルバムを残して解散してしまうが、ポポル・ヴフに加入していたコニー・ファイトがリーダー・シップをとっていたことで広く知られている。メンバーはダニエル・アルーノ（ドラムス）、フリッツ・シェイング（オルガン・メロトロン）、コニー・ファイト（ギター）、ヴァルター・ヴィーデルケール（ベース）の4人でディーター・ディークスがプロデュースにあたっている。本作でのギラは内的広がりをみせるトリップ・サウンドを演奏しており、セカンドの静寂感はあまり感じられない。しかしその完成度は71年にリリースされたドイツ・ロックのアルバムとしては、いや全ドイツのグループの中でも極めて高水準であるといえる。 (山)



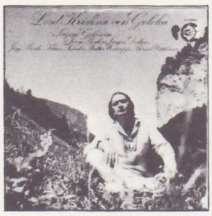
GILA
Bury My Heart At Wounded Knee

WARNER BROS.
WB 46 234 廃 1973年

A: THIS MORNING
IN A SACRED MANNER
SUNDANCE CHANT
YOUNG COYOTE

B: BLACK KETTLE'S BALLAD
LITTLE SMOKE
THE BUFFALO ARE COMING

ギラのセカンド・アルバム。前作が色彩感覚の強いどちらかというとドロドロとしたサウンドを有していたが本作になると、ある意味で昇華した静寂感が滞っている。前作のメンバーのうちコニー・ファイト以外は全員脱退し、新たにポポル・ヴフのフローリアン・フリッケとダニエル・フィッヒェルシャーがゲスト参加している。これはコニーのポポル・ヴフの72年のアルバム「ホシアナ・マントラ」への加入が大きく影響しているといえる。ここではフリッケはピアノの他にメロトロンも弾いている。A面は女性ヴォーカルをフィーチャーしたポップな小品が収められているがB面になるとギラの本領発揮といったところ。繊細なコニーのギターとフリッケとのコラボレーションは見事な広がりをみせている。 (山)



Sergius Golowin & Jerry Berkers, Jürgen Dollase, Jörg Mierke, Klaus Schulze, Walter Westrupp, Bernd Witthüser (W. Germany)
Lord Krishna Von Goloka

KOSMISCHE MUSIkK
KK 58 002 廃 1973年

A: DER REIGEN
DIE WEIßE ALM

B: DIE HOCH-ZEIT

ヴァレンシュタインのイェリー・ベルカーズ、ユルゲン・ドラゼ、W&W、クラウス・シュルツェ、ヨールグ・ミエルケが奏するギター、ベース、ピアノ、メロトロン、シンセサイザー、フルート、タブラ、コンガ等、様々な楽器を駆使しての掴み所のない混沌とした夢幻的な音の流れの上をエコー処理されたドイツ語による語りが響き渡るといった宗教的な雰囲気をも加味した本作、ゼルギウス・ゴロヴィンなる詳細不明人物の名義作である。内ジャケットやアルバム・タイトルからもユートピア指向が伺え全体にオルガンとアコースティック・ギターの響きが印象的であるがA-2におけるメロトロンによるコーラスを交えての神秘的空間は白眉。プロデュースはロルフ・ウルリッヒ・カイザー。コスミッシェ系サウンドの変種。 (松)



GROBSCHNITT (W.Germany)
Ballerman

BRAIN 2/1050　テイチク ULS-129～30-EB 廃　1973年

A: SAHARA / NICKEL-ODEON / DRUMMER'S DREAM
B: MORNING SONG / MAGIC TRAIN
C, D: SOLAR-MUSIC

第一次大戦中のヴェストファーレン軍楽隊の名をそのままグループ名にしたグロープシュニットは北部ドイツ、サクソンの地で70年に結成された。そして72年発表された同名のファーストはジャーマン・ロック最高作と評されるジャケットの世界をそのまま音に表現しつくしたブレイン最大の問題作と言える。このセカンドは前作をはるかに上回る出来でもって2枚組として73年に出された彼らの最高傑作である。冷たくよどんだ暗黒の空間を漂う凍結した宇宙気流の如く、遠い冥府宮への旅先案内人の12人の楽師たちが鋼鉄の木霊が響き渡る夢魔の森へと誘ってくれるであろう。そしてこの偉大なる作品は間違いなくジャーマン・ロック界5本の指に入ると私見を交えずに断言できる。（い）



GURU GURU (W.Germany)
UFO

OHR OMM 56 005 廃　1970年

A: STONE IN / GIRL CALL / NEXT TIME SEE YOU AT THE DALAI LHAMA
B: UFO / DER LSD-MARSCH

60年代後半イレーネ・シュヴァイツァー・グループ、グローブ・ユニティーといったフリー・ジャズ界で活動していたマニ・ノイマイアー（Dr）、とウリ・トレプテ（B）がアクス・ゲンリッヒ（G）と共にこのデビュー作を制作したのが70年。グループの代弁者であるマニ、30歳、ウリ・トレプテ、29歳時点での作品である。ポポル・ヴフのフローリアン・フリッケ、カンのホルガー・シューカイ等、30歳前後にして独自の世界を切り開いている点、前歴や後の足跡を考慮すると様々な興味ある言及ができよう。本作にはグル・グル独特のユーモアは皆無で非常に重苦しい空気がヘヴィーなサウンドと合い溶け込み、実験的作風（B-1)、マニのフリー・ジャズを引きずるドラミング等、初期ドイツ・ロックの代表作と言える。（松）



GURU GURU
Guru Guru

BRAIN 1025 廃　テイチク UPS-604-EB 廃　1973年

A: SAMANTHA'S RABBIT / MEDLEY a) Rocken Mit Eduard b) Something Else c) Weekend d) Twenty Flight Rock / WOMAN DRUM
B: DER ELEKTROLURCH / THE STORY OF LIFE

フリーキーなロックバンドは独国内に常に存在する様で、現在でも DAF タイプのエレクトリック・ビート以外にグルグルの影響を明らかに受けていると思われるものがいくつか有る。彼らの最もフリーキーな部分は Ohr の再発により耳にされた方も多いと思うが、もうひとつのブラック・ユーモア的なセンスは本作、又はカングルで聴ける。A面の毒に満ちたロックンロール・メドレーは代表的な例。特筆すべきはB-1で、ギター、ベース、ドラムスと言うロックの最も平凡な編成において、想像し難い音世界を作り上げている。タイトルは「電気ガエル」の意で、その通りカエルの聴覚化(!?)を試みているわけだ。(ちなみに彼らは現在でも、独国内において絶大なる人気を持っている。)（中野）



GURU GURU
Dance Of The Flames

ATLANTIC ATL 50 044　1974年

A: DAGOBERT DUCK'S 100TH BIRTHDAY / THE GIRL FROM HIRSCHHORN / THE DAY OF TIMESTOP
B: DANCE OF THE FLAMES / SAMBA DAS ROSAS / RALLULLI / AT THE JUNCTURE OF LIGHT AND DARK / GOD'S ENDLESS LOVE FOR MEN

グル・グルには12作のアルバムがあるがその間に2度の解散を経験している。1度目の解散は本作後であり、この時点でオリジナル・メンバーは既にマニ・ノイマイアーを残すのみである。初期4作以外は音の軽薄さ故にいささかマニの冗談も行き過ぎに感じられる中にあってこの6作目はホウシェンク・ネヤデプールのロック・スピリット溢れるジャズ・ギターを中心に真剣な演奏を繰り広げている。実にシャープな音を切り出す攻撃的なギターとハンス・ハルトマンのベースにいつになく巧みなマニのドラムが絡み最もスマートな形のグル・グルが演出される一方、民族打楽器を多用した曲等にも整合感を生んでいる。グル・グルすなわちマニは彼の最もテクニカルな作品＝本作を発表後、長く低迷し現在に至っている。（松）



HABOOB (W.Germany)
Haboob

• HÖRZO REP 34002 廃　1970年

A: ISRAFIL / BLUES FOR WILLY PEE / SOOLOO
B: MORNING PRAYER / KEEP ON PUSHING / SOLDIER BOY / TIME TO BE

ジミー・ジャクソン。あまり知られてない人であるが、ドイツ初期の重要な作品に多くその名をつらねている。アモンデュールII(以下ADII)、エンブリヨ、ナイアガラ、パスポート等々。そのジミーのアルバムともいえるのが本作でナイアガラのジョージ・グリーン(ドラム)、W・パウエル(ギター)のトリオ編成。プロデュースはADIIのオラフ・キュブラー。キュブラーとローター・マイトとは因縁浅からぬ仲で、パスポートの第1作、レミングの踊り、狼の町、マイトのユートピア等で共演。黒人ドラマーでジャズ色はかなり強いとはいえまぎれもなくサウンドはADIIの血縁。ドイツロック初期の息吹きを体感できる1枚。ジャケット・デザインはADIIのフォルケ・ログナーが手掛けており彼の多才がうかがわれる。（木）

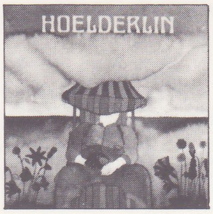


HARMONIA (W.Germany)
Deluxe

BRAIN 1073　テイチク UXP 739-EB 廃　1975年

A: DELUXE (Immer Wieder) / WALKY-TALKY
B: MONZA (Rauf und Runter) / NOTRE DAME / GOLLUM / KEKSE

ブレイン・レーベルに2枚の良質な作品を残したハルモニアの2nd。G, Key, Voのミヒャエル・ローターはノイのメンバーでありクラフトヴェルクの系譜、Key, Vo のハンス・ヨアヒム・レデリウス と Syn、ハープ、Voのディーター・メビウスは CLUSTER のメンバーであり、その系譜は KLUSTER、およびタンジェリン・ドリームへと連なっていく。前作「ムズィック・フォン・ハルモニア」は初期 CLUSTER の延長線上にある前衛的な音響サウンドであったが本作はM・ローターの個性を反映しポップ色とエレクトロニクスが調和したソフトなサウンドとなっている。プロデュースは彼等とコニー・プランク、グル・グルのマニがドラムで参加。分離後M・ローターはソロへ、レデリウスとメビウスは CLUSTER を復活させる。（松）



HOELDERLIN (W. Germany)

Hoelderlin

SPIEGELEI
26 511-6U 1975年

A: SCHWEBEBAHN
I LOVE MY DOG
HONEYPOT

B: NÜRNBERG
DEATHWATCHBEETLE

ヘルダーリンの通算2作め、スピーゲライに移籍し、グループ名の綴りをHoelderlinに変えての第1作めである。メンバーは大半が前作と同じであるが、トラッド色の強い1stから3年の時を経て彼等の音楽性はかなりの変化を遂げた。アコースティック楽器の響きを生かした曲創りは以前からの持ち味であるが、本作以後はよりロック色の強い方向へと向かったのである。例えば本作のA-1の曲などからは極度なまでに「太陽と戦慄」期のクリムゾンの影響がうかがわれる。彼等は以後76年に「Clowns & Clouds」77年に「Rare Birds」、そして78年には〝シンフォニック・ロック・グループ〟ヘルダーリンの集大成とも言うべき2枚組ライヴを発表。が、以降は彼等も徐々に時流に乗った音創りを目ざしている様だ。（城）



MICHAEL HOENIG (W. Germany)

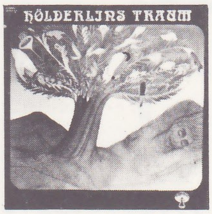
Departure From The
Northern Wasteland

WARNER BROS.
WB 56 464
W. パイオニア
P 10510W 廃 1977年

A: DEPARTURE FROM
THE NORTHERN
WASTELAND

B: HANGING GARDEN
TRANSFER
VOICE OF WHERE
SUN AND MOON

ミヒャエル・ヘーニヒのソロアルバム。タンジェリン・ドリームやクラウス・シュルツェとの共同作業を経て作られた最初のシンセサイザー・ソロアルバムである。アジテーション・フリーの中心メンバーとして活躍していたことでも知られている彼は、ドイツの現代音楽畑の人々との関係が深く又最も古いらしい。ベルリンのメタムジークフェスティバルという新しい発想からの音楽祭の運営にも携わっていたようだ。彼の音楽には全編を通して夜を感じさせるものが流れている。夜の色彩と微妙な変化を感じさせながら繰り返される反復は、西洋的な瞑想世界へと導いていく。このアルバムは体験する者に、亜空間にいる自分を発見させるのだろうか？ついでながら、シュルツェのタイムウインドのノイズィーな音は彼のものらしい。(韮)



HÖLDERLIN (W. Germany)

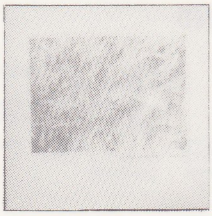
Hölderlins Traum

PILZ
2021314-5 廃 1972年

A: WAREN WIR
"PETER"
STROHHALM
REQUIEM FÜR EINEN
WICHT

B: ERWACHEN
WETTERBERICHT
TRAUM

ドイツの神々は既に滅び去り、老廃して役立たずの偽善的な悪臭を放つ秩序に対し、ひたすら異国への郷愁に身を焦がす狂おしさに自らを捧げた詩人ヘルダーリンの悲劇を現代によみがえらせたジャーマンロックの一つの神話的アルバム。一人の詩人の、その生への原点を自己の内に環元せんとする瞬間を切実に謳い上げるナニー・フォン・グルンコウの憂愁に満ちたヴォーカルは、童話的色調を帯びたアルバムのトータル性を但うに余りにも効を成している。当時のシーンに、はかなくも咲いた一輪の花は、かつての神々への、滅びえた英雄への挽歌を民族感情の根likeたる象徴として受けとめることができる。残念ながら、セカンドアルバム以後は、このアルバムに見るようなジークフリート以後の英雄の姿は見い出し得ない。（丸）



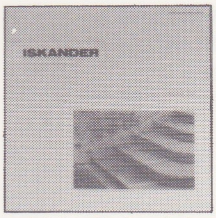
INDIGO (W. Germany)

Herbstwind

SSU:828 '80 廃

Martin Ernst-kbd, vo
Gerhard Huber-ds, vo
Wolfgang Krieg-g, vo
Albi Schmidt-Reinthaler-syn, vo

77年にデビューしたインディゴは計3枚の作品を残しているが本 3rdアルバムが最も完成された内容となっている。シンセ系を中心にキーボード群を前面に押し出した典型的なシンフォニックサウンド。若干新しめの音作りは今一つ押しの強さが足りない感じもするが、清澄度のレベルは常に一定に保たれ、確固たる演奏技術に裏打ちされた味のある演奏が展開される。第二の主役はシンセ音に追随して時にソロを取るギター。A3、B4ではユニゾンやオルガンとのコンビによる若干ヘヴィで泥臭いプレイを披露し、全体の流れに適度なメリハリをつけている。なおグループはダブルキーボードの4人編成。本作ではReinhart Kunstmannなるベーシストがゲスト参加している。〔江〕



ISKANDER (W. Germany)

Bohème 2000

HERKULES ETST 027 '82 廃

A: WINTERHAGEN
WINTERHAGEN 3
GLEITFLUG

B: DRAUSSEN
ELTNEG TNAIG
DOLLARHUT

イスカンダーというグループのファースト・アルバムは81年にリリースされた"Ouverture"（ST/PR 010581）で、本作はセカンドである。どちらも甲乙付け難い出来なのだが、このセカンドを選んでみた。この作品は劇場用に作曲されたもので、オリジナル・ヴァージョンを縮めて創られたのがこのＬＰ（完全版はテープのみ発表）である。甘美でメロディアスなリード・ギターにプロフェットの独特な、厚みのあるストリングス。静寂の中に響き渡るフルートの調べ。冷たい、さわると手の切れるような音空間。計算されたサウンド・スカルプチュア。それらが織り成す調べは、端正で悲しく、時に暖かいタピストリー。全てのナンバーを順に聴いていくと遠い夢幻の国々へと体がすいよせられていくかのようだ。（山）



ISLAND (Switzerland)

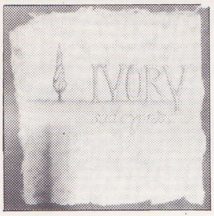
Pictures

ROUND RECORDS
01001 廃 1977年

A: INTRODUCTION
ZERO
PICTURES

B: HEROLD AND KING/
DLOREH
HERE AND NOW

アイランドはスイスのグループである。77年にイタリアのリコルディ・スタジオで録音された本アルバムのプロデュースにはアクア・フラジーレ等をてがけたクラウディオ・ファビが起用されている。ペーター・シェラーというマルチ・キーボード・プレイヤーを中心とする4人編成だが、ヴォーカル、ドラムス、サックス・フルート・クラリネット、キーボードというかなり変則的なものでベースはペーターがペダル・ベースで代用している。変拍子を伴う驚異的な曲進行はアヴァン・ギャルド・ロックとシンフォニック・ロックの融合という極めて特異な位置にあるもので、表現主義派のロックとしては最も先鋭的な存在である。ユニヴェル・ゼロのミスティシズムとSFFの構築美をかねそなえていると想えばよい。（山）



IVORY (W.Germany)
Sad Cypress

Jupiter:202 428-367 '80 廃

Goddie Daum-g
Christian Mayer-vo
Frqdrik Rittmuller-ds
Thomas Sommerlatte-kbd
Ulrich Sommerlftte-Kbd
Charly Stqchel-b
pro. Ulrich Sommerlatte

74年にイエスのコンサートを聴いたのがきっかけでロック音楽を手掛ける様になったという初老の Ulrich Sommerlatte が率いる６人組。彼の息子である医師の Thomas を初め銀行員、教師、学生と多彩な顔触れが集まって結成された一見ユニークなバンドであるが、抜群のチームワークにより、“ジェネシス系”と色分けされる数ある作品群の中でも一際光る好アルバムを作り上げてしまった。Sommerlatte 親子の奏でるキーボードを中心にした組み立ては、どれ程良質なユーロポンプでさえも及びもつかない緻密なもの。70年代の香りを色濃く残したサウンドからはポンプ系の作品と同列に扱われることをも潔しとしない毅然とした自己主張さえ感じ取ることが出来る。再発を機に是非、本作の素晴らしさを再認識して欲しい。〔江〕



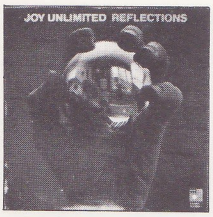
JOY UNLIMITED (W.Germany)
Schmetterlinge

PILZ 20 21090-1 廃　テイチク UPS-572-B 廃　1971年

A: CONTACTS
Rudiment/Connection/That's The Key/For You And Me
MANIFESTATIONS
Suppression/Rankness/Face Of War/Free

B: MANIFESTATIONS
Sensual Impressions/Quintessence
EMOTIONS
Eden-Park/Metamorphosis/In Search For The Last Word/Rising Mind/Eden-Park Again

デビュー作「OVERGROUND《POLYDOR 2371 050》」―ポップ色が強い―を70年に発表した彼等が２作目としてバレーの為に書き下した作品である。内容の性格上トータル作と成っている所からもフルート・ソロを巧みに交える等、凝った作風が非常に親しみ易いメロディアスな曲調と相まって興味を引く。しかしながら全体像として浮き上がるものはジョイ・フレミング―本作後脱退―のハスキー・ヴォイスによるソウルフルな唱法、70年初頭特有のオルガンの音色、オーソドックスな演奏スタイルでありブラス・セクションさえ挿入されるといった英米スタイルのメロディー・ラインである。初期のアース＆ファイアーの様な正統な国際的視点を備えていたが故にドイツ然とした要素は少ないが良質の資質を感じ取ることができる。（松）



JOY UNLIMITED
Reflections

BASF 20 21686-1 廃　テイチク UPS-567-B 廃　1973年

A: REINCARNATION
OCEAN OF RUINS
KING RICHARD'S COURT JESTER
COLOSSUS OF STEEL AND IRON
CHRYSTAL PALACE

B: a) MOTION IS MOVEMENT
b) HATE NINE AND TEN
THE SEARCH FOR FATHER TIME
SILENTLY SUNG
QUESTION

女性ヴォーカルのジョイ・フレミングスとギター、ウッドウインズ担当のクラウス・ナーゲルが脱け、新たにヴォーカル、ギター担当のケン・トレイラーが加わったジョイ・アンリミテッドの３rdアルバムである。オルガン、フルート、サックス等をフィーチャーした緩急自在の彼らのサウンドからは、ドイツ人気質よりもブリティッシュ・ロックからの強い影響が感じられる。しかしそれは二番煎じ的な軽薄さではなく、自己のスタイルとして完全に消化された安定した音楽性として表われている。全体的な魅力という点では２ndの「Schmetterlinge」もかなりのものだが、彼らの最も成熟した姿はこの「リフレクションズ」であると言えよう。彼らは74年に本作と同傾向にある４枚め「Minne」を発表し解散した。（城）



KASHMIR (Switzerland)
Je Suis...

DISQUES DL 3300 '79 廃

A: DESERT BLEU
JE SUIS...
ALARME !
LINEAR
FAR AWAY

B: SLOWLY
OH30
GO !

カシミールのファースト・アルバムである。スイス国内で自主製作（２つ折ジャケットで、内側にロジャー・ディーン風の夢幻的なイラストが描かれている）された後、ドイツ及びフランス・プレスがジャケット違いでリリースされた。全てのキーボード類を操る P.Guenat とドラムスの H.Dubelly のユニットで、曲想に多少のバラつきはあるものの、メロトロンを始めとした多種のキーボード群によるシンフォニックな音造りが彼等の持ち味である。生のオーケストラを導入したりして極めて意欲的な作品で、ところどころに荒さが目立つものの、音楽に対する姿勢は純粋なものが感じられ、好感が持てる。初々しさと夢幻性という、プログレッシヴの大切な一ファクターを持つグループとして紹介したい。（山）



KASHMIR
Histoire Cruelle

KOBOLD KOLP 949 '82 廃

A: PRELOGIE
BIEN FINI !
MICROCOSME
IMAGINATION
ANASTASIA
EPILOGIE

B: HISTOIRE CRUELLE
I AM.DING DONG
MEMENTO ZI
KAMPUS
SYNCOPE
TOUT-VA-BIEN

唯一のアルバムをリリースして消えたと考えられていたが、実はスイス本国でひっそりとセカンド・アルバムが創られていた。前作同様P. Guenat と H. Dubelly のオリジナル・メンバーは変化なく、他にドラムス、フルート、ヴァイオリン、ギター etc.と計10人のバック・ミュージシャンが参加している。トータルとしての叙情性は前作のほうが強いが、このアルバムでは演奏技術、センス、録音テクニックについて明らかに進歩がみられる。特にそれはＡ面ラストの曲に顕著で、ここでは叙情性すらも前作を上回っているかのようである。ただ全部を通して聴くと、シンフォニックという見地からのみ考えれば物足りないことも事実だ。どちらの作品を好みとするかは個人レヴェルでの問題であろう。（山）



KEDAMA (Switzerland)
At Sunrise Studios

SUNRISE 076-1949 '76 廃

A: OUVERTURE
FINARE

B: OUR POWER
ZUGABE

プログレッシヴ系の作品には必ずといっていい位、自主製作なり変形ジャケットという特典が付いたりして、しかも限定でプレスされた枚数が少なければ少ない程、極めて入手困難で高いプレミアが付くと相場が決まっているもの…。このケダマ（毛玉？）なるスイス出身のグループも、そういった部類に属するであろう。限定100枚で、決して変形ジャケットではないが白地にグループ名… etc がスタンプ印刷されている以外は全く不明という、正に幻と言うべき存在の作品。全４曲、70年代初期のブリティッシュの土臭いオルガンとメロトロンが聴き物で、メンバー個々（恐らく、G. B. Ds. Key の４人編成？）のプレイも安定して、スタジオライヴテイク一発録りとは思えない位の完成度を持った名作と言えよう。〔大〕



KING PING MEH (W. Germany)
King Ping Meh

POLYDOR 1971年
2371 259 廃

A: FAIRY-TALE
SOMETIME
DON'T YOU KNOW

B: TOO MANY PEOPLE
DRUGSON'S TRID
MY DOVE
EVERYTHING
MY FUTURE

キン・ピン・メイのファースト。彼等はブリティッシュナイズされたハード・ロックを得意とし、その姿勢は一貫している。がA-2、B-3で聴けるメロトロンを伴うバラードの出来は仲々のものである。歌詞は英語で歌われている。この後、ゼブラレーベルより2枚「KING PING MEH《ZEBRA 2949 005 '72》」、「KING PING MEH《ZEBRA 2949 011 '73》」、ノヴァ・レーベルより2枚「VIRTUES AND SINS《NOVA 6.22 015 '74》」、「CONCRETE《NOVA 6.28 370 DP'75》」、バチルスより1枚「KING PING MEH《BACILLUS BAC 2046 '77)」と計6枚（うち5枚目は2枚組）のアルバムをリリースして解散。2枚のコンピレイション・アルバムに収録されてもいる。（山）



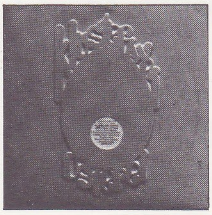
KLOCKWERK ORANGE (Austria)
Abrakadabra

CBS 1975年
S-81119 廃

A: DUONYUNOHEDEPRIN-CES
THE KEY

B: ABRAKADABRA

メロディーラインに重きを置いたクラシカルな音作りがなされている。注目されるのはクラシカルロックにトランペットを導入したということ。これが実に効果的でヨーロッパ独得の気品を醸し出す。彼らの創り上げた独自のスタイルといえよう。残念なのは音質の悪さ。まるで自主製作盤を聴いているようだ。「時計じかけのオレンジ」と名乗るこの4人組がデビューしたのは75年。隣国イタリアのロック界は既にピークを過ぎ円熟期に入っていた頃だ。当時、オーストリアのロック界が環境づくり、人づくりという面で他の西欧諸国に比べて大きく立ち遅れていたことを如実に物語るアルバムだ。未完成のまま姿を消して行ってしまった彼らの、多分唯一の作品と思われる。（江）



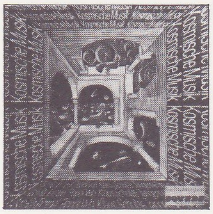
KLUSTER ZWEI (W. Germany)
Osterei

SCHWANN-STUDIO 1971年
512 廃

A: ELECTRIC MUSIK UND TEXTE

B: ELECTRIC MUSIK

クラスターは最初期のKで始まるスペル時代と3rd以降のCのクラスターに大別される。Kのクラスターはシュニッツラー（この時期はタンジェリンの一員でもあった）、レデリウス、メビウスの3人から成り KLOPFZEICHEN《SCHWANN STUDIO 511'71》と本作の2枚を発表後、シュニッツラーが脱退してCのクラスターへと改名する。2枚ともエレクトロニクスによる即興演奏で1stは信号の打信音が中心、本作はA面が復活祭の卵（OSTEREI）をめぐる朗読と3人による即興、B面は即興のみによって演奏されているが、その即興はロックに接近し始めた現代音楽とでも呼べるものである。最近ジャケット違いで2枚とも再発されたが、オリジナルはプラスチック・ジャケットで貴重な資料であるといえる。（山）



KOSMISCHE MUSIK (W. Germany)
Kosmische Musik

OHR 1973年
OMM 2/56027 廃

A: POPOL VUH
KLAUS SCHULZE

B: ASH RA TEMPEL

C: TANGERINE DREAM

D: ASH RA TEMPEL
KLAUS SCHULZE

オウル・レーベルのオムニバス・アルバムは3枚程リリースされているがその中でも代表的な存在がこのアルバムである。エッシャーの迷宮絵画に包まれた2枚組で各グループの詳しい解説とポートレイト入りのリーフレットが付されている。参加アーティストはポポル・ヴフ、クラウス・シュルツェ、アシュラ・テンペル、タンジェリン・ドリームの4グループでそのうち、アシュラ・テンペルとタンジェリン・ドリームはLP未収録曲である。73年という時期にリリースされているので当然のことだが、全てのグループのサウンドは初期のもので、エレクトロニクス、又はギターによる作品である。混沌とした神秘世界を体験することができる特異なオムニバス・アルバム。（山）



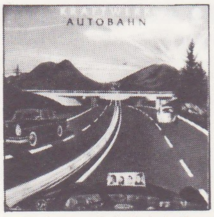
KRAFTWERK (W. Germany)
Kraftwerk

・PHILIPS フォノグラム 1970年
6305 058 BT-8101 廃

A: RUCKZUCK
STRATOVARIUS

B: MEGAHERZ
VOM HIMMEL HOCH

ラルフ・ヒュッター（オルガン）、フローリアン・シュナイダー（フルート、ヴァイオリン、エレクトリック・パーカッション）、アンドレアス・ホフマン、クラウス・ディンガー（ドラムス）、コニー・プランクがプロデュースとエンジニアに絡んでの1stアルバム。この実験色豊かなサウンドは3作目まで続き、よりソフィストケイトされ「AUTOBAHN」に受け継がれていく。ドイツ・エレクトロニクス・ミュージックの源流部に位置する本作は効果音的な楽器の使用法等、彼等が作り出した実験音を綿密な計算の下に複雑に組み合わせた音響サウンドと言える。初期タンジェリンやKLUSTERの没観念性はなく知性にコントロールされた薄明るい伸びやかな音楽性は後にノイ、デュッセルドルフを生み国外へ羽搏くのである。（松）



KRAFTWERK
Autobern

PHILIPS フォノグラム 1974年
6305 231 BT-8103 廃

A: AUTOBERN

B: KOMETENMELODIE 1
KOMETENMELODIE 2
MITTERNACHT
MORGENSPAZIERGANG

現在でこそ有名なクラフトヴェルクだが本作を発表するまでは、あまた有るジャーマンロックの一員だったのである。非常に実験的なバンドであった彼らはエレクトロニクスを研ぎ澄ませる事により従来とは全く骨組の異なるポップを創出したのだ。彼らが後のポピュラー音楽に与えた多大なる影響は、この日本の歌謡曲を聴いてさえ感じられる。本作はそれまで電子音を抽出する作業だった彼らが初めてそれを再構成した物であり、以後「マンマシーン」で頂点を極める。しかしそこで彼らの音楽は完成してしまい、それ以後に出された作品ではもはや進歩は見られない。今でこそ、当り前の音ではあるが、彼ら以前には全くこう言った曲は無かったのだ。西洋音楽は彼らによって流れを全く変えられてしまった。（中野）



KYRIE ELEISON (Austria)

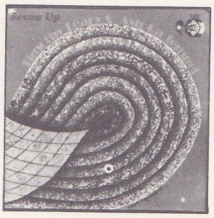
The Fountain Beyond The Sunrise

MERLIN RECORDS 001277 1976年

A: OUT OF DIMENSION
THE FOUNTAIN BEYOND THE SUNRISE
a) reign
b) voices
c) the last reign
d) autumn song

B: FORGOTTEN WORDS
LENNY

76年にオーストリアで限定 200枚、自主製作されたキリエ・エレイソン唯一のアルバム。初期のジェネシス――すなわちナースリー・クライム、フォックストロット時代からの強い影響下にあるサウンドを有している。メロトロン、ハモンド・オルガン、アコースティック・ピアノ等キーボード群を中心に複雑にからみ合う曲創りのセンスの良さが大きな魅力といえる。ただ残念なことに録音状態が非常に悪く、音が割れてしまっている。いかにも自主製作らしく、観音開きに作られた歌詞カードが添えられている。ギター、キーボード、ドラムス、ベース、ボーカルの5人編成で、ライヴ時にはライティング・スタッフが加わっていた様である。 （山）



TIMOTHY LEARY & ASH RA TEMPEL (W. Germany)

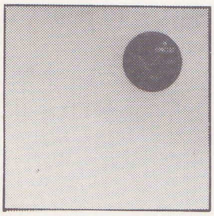
Seven Up

KOSMISCHE MUSIK KK 58001 1972年

A: SPACE
Downtown
Power Drive
Right Hand Lover
Velvet Genes

B: TIME
Timeship
Neuron
She

スイスへ亡命していたLSD研究者ティモシー・リアリー（LPを発表している）を迎えての3作目。前作までのバンド形態からオープン・セッション形式で録音されA面スタジオ・ライヴB面ベルン・フェスティヴァルでのライヴとなっている。ブルース、ロックン・ロール或いは「神秘」期のフロイドを彷彿とさせる曲調等、何れもラフな演奏に必然性の薄いエコー処理、音移動が成されておりスペイシーな効果音がそれら各曲を連結している。一連のセッション作（PLANETEN SIT-IN参照）の第1弾が本レーベルの初作であったことからもその位置づけ、取分この頃ドラッグ漬けであった彼等（エンケは発狂）による本作はリアリーとの出会いによりドイツ流サイケデリック・ムーヴメントを一際、象徴している。 （松）



LIZARD (Switzerland)

In Concert

無番号 '81 廃

A. PLUS QU'UN INSTANT
DON'T KNOW
C. JAM

B. ZEBRE
AFTERWARDS
D. GOING ON
LAST DAY
ENDING

スイスのグループと言うと国内事情のせいか多くのグループが出てはいないが、出るグループほとんどが魅力あるアルバムをリリースしている。その裏付けの特徴として高度の演奏技術を持ち合わせている事が上げられよう。さて、リザードだがテクニックに関しては他のスイスのグループに一歩譲ると言わざるを得まい。サウンドは一言でいうならクリムゾンということになろう。しかしながら、パワーに欠けて、二枚組の本作を一気に聴き通すには少々苦しいが、ライヴ盤であり録音状態の悪さも考慮すべきだろう。彼らは79年ごろから40回近いコンサートを行っていたようで、本作もその中のライヴを集めたもので、ジャケットも白地にステッカーが一枚とシンプルで完全自主製作盤であり、発展途上のアルバムと言った所だ。 〔杉〕



LUCIFER'S FRIEND (W. Germany)

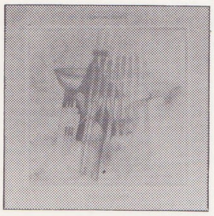
Banquet

VERTIGO 6360618 1974年

A: OUR WORLD IS ROCK'N ROLL BAND
SPANISH GALLEON
THUS SPOKE OBERON

B: HIGH FLYING LADY -GOODBY
SORROW
DIRTY OLD TOWN

本作は彼等の4作目である。'70年のデビュー以来ブリティッシュ・ハードを基調にしながらも変拍子を多用した2nd「...Where the Groupies Killed The Blus」('72)、ジャズ・ロック的なアレンジを持ち込んだ3rd「I'm Just a Rock'n Roll Singer」('73) 等意欲的な作品群を発表して来た訳だが、本作はさらに洗練されたポップ色を加味させており、彼等の最高傑作となっている。メンバーの中ではJ・ロウトン(vo)のユーライア・ヒープ、ゲイリー・ムーア・グループ（来日メンバー）への参加が有名であるが、H・ボーンホルト(ds)がラトルズに参加しているのは意外な事実である。彼等は現在までに9枚のアルバムと1枚のベストを発表しているが最近はアメリカ市場を意識した作品になってしまっている。 （千）



LENNY MACDOWELL (W. Germany)

Balance Of Power

BIBER BI 6230 '84

A: FREE FALL
BEDOUIN PATH
LIFTING THE VEIL

B: BALANCE OF POWER
A) BALANCE OF POWER
B) JOURNEY
C) ...INTO THE WAR
D) DELIVERANCE

このレニイ・マクドゥウェルの創ったアルバムは従来のドイツ・シンフォニックのスタイルを打ち破る革新的なイメージを持つものである。彼はフルート、グランドピアノ、シンセサイザー類を一人でこなし、他にギター、ベース、ドラムスを加えた編成でこのアルバムを制作した。雄大なストリングスのWAVEの中から美しく、端正で、リリカルで、そして恐ろしく技巧的なフルートが聴こえてくる様は今まで耳にしたことのないシンフォニック・ロックの領域を感じさせる。強いていえば、ジャン・ピエール・アラルサンのタブロウ・1で聴くことのできるリリシズムをフルートで演じ切っているといえばこの作品をいくらか想像していただけるだろうか。録音クオリティも非常に高い。A面3曲。B面は16分の大曲が収録されている。インストゥルメンタル作品。 （山）



MESSAGE (W. Germany)

From Books And Dreams

BELLAPHON/BACILLUS BLPS 19159 1973年

A: SLEEP!
DREAMS AND NIGHTMARES (DREAMS)
TURN OVER!

B: SIGH
DREAMS AND NIGHTMARES (NIGHTMARES)
INTRODUCING THE MYTH including THE UNPLEASANT SPELL

メッセージはベラフォン／バシルス、ノヴァ、ブレインの各レーベルにそれぞれ2枚のアルバムを残しており本作はマリー・ステュアート作の「ザ・クリスタル・ケイヴ」という書物からコンセプトを得た彼等の2作目である。ジャケット4面に渡り不気味な印象が持たれるがギター、ベース、ドラムそしてヴォーカル、サックス、メロトロンの4人組によるサウンドは荒っぽいギターを中心としたハード・ロックであり不気味な趣きの小曲を2曲含むものの当時のイギリス産ハード・ロックを模倣した次元に留まっている。強いて言えば音の濁りと暗さが特徴と言えようか。ドイツの場合、伊や仏とは違い立脚すべき伝統音楽の希薄さ故に独自の音楽性を展開成し得た音楽家が限定される点は認識不可欠の事項である。 （松）



MILESTONES (W. Germany)
Emigration

CBS 65 738 廃 — 1973年

A: NACHMITTAG IM STADTPARK / HAMLET / APFELBAUM / ALLE TAGE / DIE FREUNDE
B: DAS MÄRCHEN VON DER SONNE

マイルストーンズの 2nd アルバム。ドイツからリリースされてはいるが、グループのメンバーは共産圏人とドイツ人と、オランダ人との混合と思われる。楽器編成はオルガン、ピアノ、メロトロン、チェンバロ、ギター、ベース、ドラムス等で５人のミュージッシャンから構成されている。中期のオメガをプロデュースしていたクリスチャン・コロノヴネツがキーボードで参加している。A面はソフィストケイトされた小品集でポップな面が強調されている。しかしこのアルバムの持ち味は何といっても大曲であるB面に集約されているといえるだろう。清涼感のある軽快なプログレッシヴ・ロックがそこには展開されており、リリカルなピアノやオーボエの響きが実に印象的である。1st はフォーク色が強い。（山）

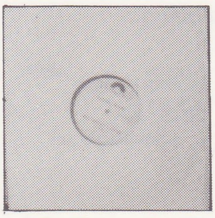


MINOTAURUS (W. Germany)
Fly Away

TONSTUDIO-LANGENDREER 1001 廃 — 1978年

A: 7117 / YOUR DREAM / LONELY SEAS
B: HIGHWAY / FLY AWAY / THE DAY THE EARTH WILL DIE

ミノタウルスとは人間の体に牛の頭を併せ持つギリシアの伝説上の怪物のことで、少年少女を生にえにして食べたという。困り果てたミノス王はこの獣人をクノッソス宮殿の奥に閉じ込めた…。しかし、このアルバムの内容は、そうした神々しくも怪しげな雰囲気とはかけ離れている。ギターとキーボードを中心としたオーソドックスなハード・プログレッシヴ・サウンド。切々と歌い上げるヴォーカルが特徴的で、それにメロトロンが絡み何とも物哀しい雰囲気を漂わせている。多分自主製作盤と思われるが、国籍は不明。クレジットはドイツ語で書かれているが、それだけでは何とも判断がつかない。とにかく、グループ名だけは、〝謎のグループ〞に相応しいものと言えようか。（江）



ANTHONY MOORE (W. Germany)
Reed Whistle & Sticks

POLYDOR 2310 250 '72 ＊PROMO ONLY

A: REED WHISTLE & STICKS 1
B: REED WHISTLE & STICKS 2

スラップ・ハッピィのアンソニー・ムーアは、70年代の初期——すなわち前衛的なロックが主流をなしていた時期ですら、異端的に思えるような、新しい感覚を持った特異なアーティストであった。その業績は今やFAUSTと共に伝説にすらなりつつある。彼が独ポリドールに残した３枚のアルバムは、ファウストのメンバー及びネッテルベックを加えて、とびきり前衛な作品であり、ドイツ現代音楽の系譜の上に位置するものである。本アルバムはポリドール時代の３枚目で、正規盤が創られずにオクラ入りしてしまったいわく付きの作品である。ゾッとするような感覚、そしてリアルな録音技術——恐しい程のセンスである。ヴァージン以降のソロ・ワークよりも、彼の才能の切れを感じる好作品としてあげておきたい。（山）



MYTHOS (W. Germany)
Mythos

OHR OMM 556 019 廃 — 1971年

A: MY THEOTT / ORIENTAL JOURNEY －HERO'S DEATH
B: ENCYCLOPEDIA TERRAE

ミソスの 1 st。メロディアスで確実なワークのベースに舞う様なフルートが絡みメロトロン、シタール等が色彩りを添えるといった幾分暗さのある深遠な趣きとハード・ロック・スタイルのギター、ドラムによるパートが統一された音色で噛み合いを見せている。B面のシンセサイザーによる戦闘機の飛来音とドラムによる発砲音、その後に現われる鳥の囀りと鐘の遠鳴り、妙にメロディアスな曲調は視覚的でもあり、この時期のドイツ・ロックに有りがちな曖昧さの少ない安定した作品である。ディーター・ディエルクスのプロデュース。STEPHAN KASKE（フルート、ギター、キーボード、ヴォーカル）をリーダーとし４年後に 2 nd「DREAMLAB」を発表。その後、VENUS、SKY レーベルに各２枚のアルバムを残し活動中。（松）

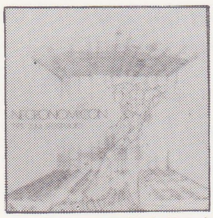


NAUTILUS (Switzerland)
20000 Miles Under The Sea

NLP 7801 廃 — 1978年

A: 20000 MILES UNDER THE SEA / SLEEPING IN THE WIND / LIKE A BIRD / DEEP INSIDE OF ME
B: LADY / LOST IN TIME / TO THE SKY / OPUS FOR GHOSTS, CROCODILS AND FOUR LIVING PERSONS

有名な「海底２万マイル」の潜水艦「ノーチラス」号からグループ名をとったノーチラスというグループは78年に本アルバムを残しているということ以外にはさして情報もない。キーボーダーのラルフ・スタッキなる人物（彼はアルバム・カバーも担当している。）を中心にベース、ギター、ドラムスの４人編成の形態をとり、あくまでメロディアスなプログレッシヴ・ロックを演奏している。歌詞は英語で歌われ、曲想もかなりブリティッシュナイズされたものである。テクニック、曲構成とも非常に平均的なグループで特に光る部分はないのだが、端正な姿勢には好感が持てる。A-4はリード・ギターのソロとアコースティック・ピアノの印象的な曲である。（山）

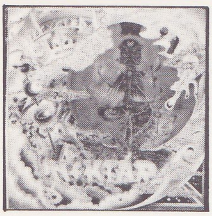


NECRONOMICON (W. Germany)
Tips Zum Selbstmord

Best Brehodi F60. 634 '72 廃

A: PROLOG / REQUIEM DER NATUR / TIPS ZUM SELBSTMORD
B: DIE STADT / IN MEMORIAM / REQUIEM UOM ENDE

アメリカの恐怖小説の大家 H. P. ラブクラフトにちなんで名付けられたグループ名からすると、とてつもない音楽でもやっているかと思われるが、内容は平たくいえば、ハード・ロックである。シンセは使用されているものの、70年代初頭ということでもあり、効果音的にあるいはオルガンの代用として使われ、ギターに重点が置かれたヘヴィーなサウンドになっている。男の狂気じみたスキャットから幕を開けるこの骨董品みたいなレコード、その後壮大なコーラスがあったり、一クセも二クセもあるコンセプト・アルバムである。自主製作らしい手がかかった変形ジャケットの方が好事家の興味をそそるかもしれない。この不気味な絵はドラマーの Harald Bernhard によるもので、スティックを持っているよりこっちの方に才能があるのではないかと思う。〔吉〕



NEKTAR (W. Germany)

Recycled

BELLAPHON BLPS 19219　フォノグラム RJ-7177 廃　1975年

A: RECYCLE
CYBERNETIC CONSUMPTION
RECYCLE COUNTDOWN
AUTOMATON HORRORSCOPE
RECYCLING
FLIGHT TO REALITY
UNENDLESS IMAGINATION?

B: SAN PAURO SUNRISE
COSTA DEL SOL
MARVELLOUS MOSES
IT'S ALL OVER

ネクターは69年に西ドイツで結成されたが、76年頃には活動の中心をニューヨークに移している。名前から判断してメンバー全員がドイツ人でないと思われる。少くともドラムのロン・ハウデンはイギリス生まれで、20歳の頃にはパリのローカル・バンドに居たという経歴の持ち主である。8枚目である本作はフランスのシャートー・ルーヴルとロンドンのエアスタジオでラリー・ファースト(シナジー)をゲストに迎え録音されている。彼等の唯一の傑作で、A面は特に極端に出来の良いシンフォニック・ロックである。ニューヨークでは大がかりなライトショーを伴ったコンサートを行なっており、その模様を収録した「Live in New York Vol.1」「同 Vol.2」があるが、サウンド的には荒さが目立っている。（千）



NEU! (W. Germany)

Neu 75

BRAIN 1062　テイチク UXP-702-EB 廃　ポリスター 22S 35 廃　1975年

A: ISI
SEELAND
LEB' WOHL

B: HERO
E. MUSIK
AFTER EIGHT

ノイはクラフトヴェルクと並び、現代のロックの重要な方向を創りあげたバンドである。彼らの残した3枚のLPの内、本作が最も親しみ易い構造を持っているが、これは後のラ・デュッセルドルフにおいて進められる方向性である。彼らが執拗に打ち続けたハンマービートも当時の音楽ファンには冷笑された物だが、ニューウェーヴ現象以後、(まるで70年前半の全てのロックバンドがブルースを下地にした様に）頭打ちのビートはロックに不可欠なものとなった。ファースト・アルバム（72年）から一貫したこのビートはスカイ・レーベル等に受けつがれ、現在でも追従者が多い。ちなみにプロデュースはコニー・プランク。B-1などは早すぎたパンクと言った感がある。（中野）



NEUSCHWANSTEIN (W. Germany)

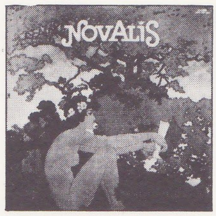
Battlement

RACKET RECORDS RRK 15.002 廃

A: LOAFER JACK
ICE WITH DWALE
INTRUDERS AND THE PUNISHMENT

B: BEYOND THE BUGLE
BATTLEMENT
ZARTLICHER ABSCHIED

初期及び中期のジェネシスから多大なる影響を受けたグループは世界中に数多く存在するものだが、それらのうち出来の良い例と余りにもお粗末な駄作の二つに大別されるケースが、かなり見受けられる様だ。ここに登場するノイシュヴァンシュタインは、ガヴリエル在籍時のジェネシスの血筋を見事に脈々と受け継いだグループであると言える。が、それ以上にスリリングかつドラマティックな曲の展開や各パートの奏法において、オリジナルよりもはるかな力量を発揮している。朽ち果てた中世の城跡のカヴァーワークをそのまま音にしたと言ってもいいだろう。単なる物真似やコピーという低次元な目標にとどまらず、より以上に彼らの根底にはヨーロピアン古来の構築美と様式美が生き続けているのである。〔大〕



NOVALIS (W. Germany)

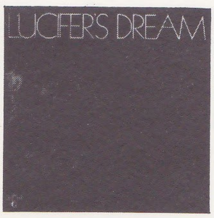
Sommerabend

BRAIN 1087　テイチク UXP-707-EB 廃　ポリスター 22S-27 廃　1976年

A: AUFBRUCH
WUNDERSCHÄTZE

B: SOMMERABEND

76年に発表された3枚目。メンバーはルッツ・ラーン(kyd)、デトレフ・ジョブ(g)ハルトヴィッヒ・ビーライヒェル(ds)ハイノ・シュンツェル(b)の4人でプロデュースはアヒム・ライヒェル。グループ名は19世紀ドイツロマン派詩人のフレードリッヒ・ノヴァーリス（1772～1801）から採られ、歌詩も彼の詩を使っている。「音の均衡を保つ為に、誰一人勝手なソロ・プレイはしない」というメンバーたちの言葉通りグループ全体の音をトータルなものに仕上げていく方向をとっている。こうした彼らの方法論が最も完成された形が本アルバム「ゾンマーアーベント」(夏の夕暮れ)である。しかしアレンジ面ではセカンドの方が優れている。それは恐らくゲストのカルロ・カルゲスによるものだろう。（い）



RALF NOWY (W. Germany)

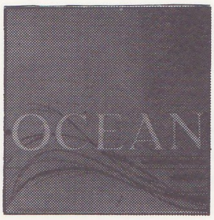
Lucifer's Dream

GROBAL 26015-8U 廃　1973年

A: BREADHAED
LUCIFER'S DREAM
SOMETHING'S HAPPENED ON THE CHICKEN FARM
HEAR ME CALLING

B: SOUL TANGO
ASHES TO ASHES
SHIWA'S DANCE
TSCHAD

ラルフ・ノーヴィーの1st。彼はこの他に「ESCALATION《ATLANTIC ATL 40556 '74》」、「NOWY 2《ATLANTIC ATL 50 205 '75》、と計3枚のアルバムを発表している。コンポーザーであり、かつバックを彩る甘美なオーケストラ（ストリングス群）のコンダクターでもあるノーヴィーはフルート、オーボエ、サックス等も手がける。クリムゾンばりのギターリフで始まるA-1から南方志向のみられるラスト・チューンまで実にバラエティに富んだ演奏を聴かせてくれるが、しかし何といってもノーヴィーの本来の持ち味とはムード音楽を想わせるような甘い甘いロマンティシズムであり、それがローター・マイト(アモン・デュール)等、多才なゲスト・ミュージシャン達により演じられるのである。美しいカバーも印象的である。（山）



OCEAN (W. Germany)

Melody

Tonstudio Bibier: TSB 507/81 廃

Peter Kunz-kbd
Mike Hoffmann-kbd
Thomas Pfeiffer-PERC

キーボード2台＋パーカッションというシンフォニック系にしては変則的な構成。"オペラ・プリマ"の様なダイナミックさは無いものの、シンセ類多用による陰気なイメージとも無縁だ。波の音で幕を開け、じわじわと盛り上げて行くが、el ピアノとシンセが縦横無尽に駈け巡るクライマックスは圧巻。A面ラストではアップテンポのナンバーでリズミカルに決め、ELPの"ナットロッカー"風の演奏も聴かれる。B面に入るとストリングシンセとピアノで美しく軽やか、かつクラシカルなプレイが披露されたかと思うとエルドン風イントロからオールド・フィールド風電子音、更にはジャジーなピアノプレイと案外多彩なサウンドが楽しめる。なお84年には P. Kunz がキーボーディスト Stefan Peters と組んで 2nd "Double Vision" を製作している。〔江〕

OKTOBER (W. Germany)
Die Pariser Commune



ANTAGON
ALP 3211/1-2 廃
1977年

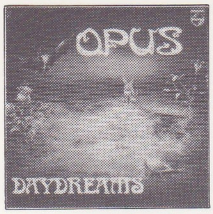
A: PROLOG
IHRE GESCHICHTE
C: ZWISCHENLIED
DER UNTERGANG
DER COMMUNE

B: DIE TAGE DER KOMMUNE

D: UNSERE GESCHICHTE
LOB DER DIDLEKTIK

内容が先きか、表現が先きかは、あらゆる表現活動の永遠の命題であるが、(テクニックのみを云々する人も多い) このアルバムはその問題を考えさせるような作品。前作「ばね時計」では一人の人間の階級的認識をテーマにしていたが、今回は1871年の普仏戦争後のパリ市民の烽起、パリコミューンに題材をとったトータルアルバム。この間にメンバーは２人変更して８人編成。内容はキーボードを多用したプロパガンダですばらしい出来となっている。材を過去にとったせいか、いささか哀調を帯びて１stのアグレッシヴな姿勢がうすれたような気もする。〝敵対〟音楽集会という名の過激なレーベルから出された２枚組。この後にも「Himmel Auf Erden (ES 2006)」を発表している。 (木)

OPUS (Austria)
Daydreams



PHILIPS 6322 035 '80 廃

A: SEEMING OUT OF REACH
MY STYLE
IN TOWN
JUICE QUEEN
GO ON YOUR WAY

B: NOT THE WAY
AUSTRIA
NO REMEDY
AS CLEAR AS
DAYDREAMS

オパスという名のグループは世界中にいくつかあるが、これはオーストリアのオパスである。オーストリアという国はクラシック音楽の都であるにもかかわらず、ロック・グループの数は決して多くない。そんな数少ないグループの中で、インターナショナルな成功を収めたのはこのグループだけであろう。70年代後半から活動を始め、数年後にはアメリカのヒット・チャート入りするグループにのし上がった。基本的にはハード＝ポップ路線のグループであるが、このサード・アルバムでは、クラシカルなアレンジの曲等も演奏しており、ジャケットの美しさも相まって以前本誌でも紹介された。ジャケットからの印象程はプログレッシヴではないが、オーストリアの数少ないグループの１つとして紹介しておこう。 (山)

OPUS (W. Germany)
Opus I



Peak:Best Nr. 8381 廃

若干ハードな下地が見え隠れしているものの、プログレファンの嗜好には十分マッチしたサウンドが聴かれる。一部、シンフォニックというよりロッカバラードタイプの演奏も含まれるが、ピアノを筆頭に各種キーボードを巧く使い分けて非常にきれいな音を出しており、重々しいギターが常にバックに控え出番を伺っているにもかかわらず、総合的にみると泣きの部分が勝っているとの印象を与える。B面ラストのインストはやや趣向が異なり、シンセなどキーボード系の音を前面に押し出した短いながらも最も叙情的なナンバー。本作の製作年度は明記されていないが、80年代に入ってからのリリースと推定される。2nd アルバムも根本的には同一路線と言えようが、完成度では本作を下回る。 〔江〕

ORGANISATION (W. Germany)
Tone Float



英RCA
SF 8111 廃
1970年

A: TONE FLOAT

B: MILK ROCK
SILVER FOREST
RHYTHM SALAD
NOITASINAGRO

オルガニゼーションはクラフトヴェルクの前身であり、かねがねその名のみ知られていたが、ラルフとフロリアンのクラシックを学ぶ２人が出会って結成されたという事で、実験的なアルバムを作ったと思われていた。メンバーは５人でKWよりもリズム楽器を多用してKFの１st・２ndで聴けるオルガンとエレクトリックフルートを主体にしたきわめてロックスピリット溢れる演奏をやっているのに驚かされる。すでにプロデュースにコニー・プランクの名がみられ、後にNEUを結成するクラウス・ディンガーは参加しておらず、KFの１stではバックを務めただけのようだ。KFとなってから次第に音は抽象的・シンプルな方向性をめざし、パーカッション群はエレクトロニクス楽器にとってかわり、「アウトバーン」で飛躍的な変化をとげていく。 (木)

OUGENWEIDE (W. Germany)
Eulenspiegel



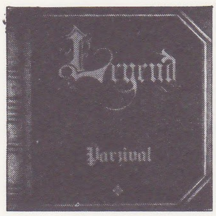
POLYDOR
2371 714
1976年

A: TILL
TYLLURIUS SPIEGELIUS
DER HOFMALER
TILL UND DIE GELEHRTEN
TILLS ENDE UND VERMÄCHTNIS

B: WELSCHER TANZ UND HUPFAUF
TOTUS FLOREO
WOL MICH DER STUNDE
DURCH DEN ERMEL GAT DAS LOCH
ENZIO

73年以来８作品を発表する彼等の４作目。その曲調、編成から仏のマリコルヌ同等本来トラッド・サイドで語られているグループである。エレクトリック楽器を多用し歯切れ良いドイツ語のヴォーカルを骨っぽいリズム楽器に乗せたダンス・チューンを得意とするが本作にはアコースティック楽器の素朴な響きがバランス良く保たれておりバラッド調の曲からもオリジナリティーを感じ取れる。また紅一点ミンネ・グローもトラッドを歌い熟すに相当する声量を保持している。驚くべきは大半が自作曲であること。ホーン、フルート、ハーモニウムの使用法、曲調はトラッドのそれと差がなくかなりの力量が伺い知れる。幾分ドラムが耳につくがドイツ産ヨーロピアン・エレクトリック・トラッドの洗練された風味が味わえる。 (松)

PARZIVAL (W. Germany)
Legend



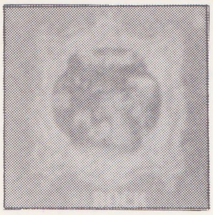
TELEFUNKEN
SLE 14 635-P 廃
1971年

A: MARSHY LEGEND
RESIGNATION
8 YEARS LATER
SENSELESS No 6
WALL BUNGALOW

B: EMPTY LAND
GROOVE INSIDE

パルジファルは古楽器（ヴァイオリン、フルート、チェロ等）を多用するアンサンブル・グループである。本作は彼等のファーストにあたるもので、翌72年には「BAROCK《Telefunken SLE 14685-P》」を発売し解散してしまう。75年にこの2枚をカップリングした盤「A GERMAN ROCK LEGEND《NOVA 6. 28337》」が再発されたがこれも現在では廃盤である。現在彼等のサウンドを聴こうとするのなら81年に発売された「ROCK IN DEUTSCHLAND Vol. 9《Telefunken 6. 24 610 AG》」に収録されているのを入手することができる。バロック的な要素を導入したシリアス・アンサンブルとフリーキーな古楽器によるセッション的な演奏を得意としているが、どちらかというと２ndのほうが多少ロック色が強い。 (山)

Nek
|
Pa



PARZIVAL
Barock

Telefunken SLE 14 685P 73 廃

A:Stories
Bladk Train
Misses Virgin
Frank Supper

B:Scarlet Horses
It's a pity
Thought
Paradise

普通のシンフォニックロックファンからは一般に地味な扱い方をされているパルジバルなのだが、このセカンドアルバムに限っていえば、内容的にみてドイツシンフォニックロックの５指にはいる作品と評価してもさしつかえない。曲の構成や演奏にシンフォニックファンをひきつける派手さはないが、バイオリン、ビオラ、チェロ等弦楽器を多用して、中世バロック期の音楽とロックの融合に成功している。バロックといっても彼等の場合、トラディショナルな面は少なく、ビートルズに影響された様なメロディアスで英国的なボーカルスタイルに特徴がある。メンバーは全員ドイツ人なのだが、ある意味で最も イギリス的な傾向を持っていたグループといえる。〔坂〕



PELL MELL (W. Germany)
From The New World

PHILIPS
6305193 廃　1973年

A: FROM THE NEW WORLD
TOCCATA

B: SUITE I (FIVE PAST FOUR A.M.)
SUITE II (DEFICIENCY)

ペルメルは言わゆるクラシカル・ロック・バンドである。72年のデビュー盤「Marburg」ではスメタナの「モルダウ」を、本作ではドヴォルザークの「新世界から」の第４楽章の他にバッハの「トッカータとフーガニ短調」をロックアレンジで演奏している。特にA-1、あの有名なテーマをフル・バンドで提示した後にAc.ギターのアルペジオをバックにヴォーカルが入ってくる部分はもはや圧巻としか言えない。さらにトーマス・シュミットのヴァイオリン独奏による変奏部、又テーマ再現部でのドラム・ソロに至っては超Ｂ級バンドマニアには絶対にこたえられないだろう。グループは76年に「Rhapsody」78年に「Only a star」を発表、しだいにポップ色を強くしていった。又、本作は78年に再発されている。(裏ジャケのみ違う。)（千）



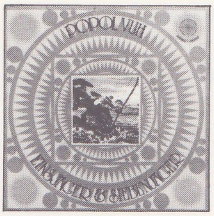
POPOL VUH (W. Germany)
Hosianna Mantra

PILZ
2029 143-1 廃　1972年

A: AH!
KYRIE
HOSIANNA-MANTRA

B: ABSCHIED
SEGNUNG
ANDACHT
NICHT HOCH IM HIMMEL
ANDACHT

フローリアン・フリッケがエレクトロニクスを捨てた後に生み出されたのがこのサード・アルバム「ホシアナ・マントラ」である。手法こそ違えフリッケの生み出す作品群は大自然と合致する方向へ向かっており、自然とはすなわちフリッケの神と同義である。アカデミズムやヒエラルヒーに一切とらわれることのない教会音楽が存在するとすれば、それがポポル・ヴフの音楽であるといえる。あらゆる現実とのしがらみから手を切り、精神の深みからわき出る情感を音に表現するメソードは、真に自由であり、歴史、現実、カテゴリーといったものからとき放たれた「神秘」の世界である。ゲストであるコニー・ファイト(ex. GILA)のエレキ・ギターもとても深みのある音を創り出してフリッケのピアノと一体化している。（山）



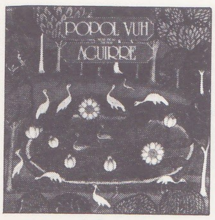
POPOL VUH
Einsjäger & Siebenjäger

KOSMISCHE MUSIK
KM 58 017 廃　1975年

A: KLEINER KRIEGER
KING MINOS
MORGENGRUẞ
WÜRFELSPIEL
GUTES LAND

B: EINSJÄGER & SIEBENJÄGER

３作目から８作目「レッツテ・タゲ・レッツテ・ナッハト」に至る時期のフリッケがキリスト教世界を色濃く反映していたことは４th「SELIGPREISUNG」＝新約聖書中、山上の垂訓の中心部分、６th「DAS HOHELIED SALOMOS」＝旧約聖書中「雅歌」等からも伺える。アモン・デュールIIよりダニエル・フィッヒェルシャー（G, Dr）を迎え韓国人女性ヴォーカリスト、ディヨン・ユンとの３人による本第５作はピアノ、Ａ・ギターの静、ドラム、Ｅ・ギターの動による対位作風が功を奏し完成度の高い作品となっている。次作ではより繊細美溢れる女性的なサウンドが、８作目では起伏ある力強いサウンドが聴かれ東洋的色彩をも備えた宗教色の濃い一貫した音楽性には比類なきドイツの深遠な美を垣間見ることができる。（松）



POPOL VUH
Aguirre

仏OHR
840.103 廃　1976年

A: AGUIRRE I
MORGENGRUSS II
AGUIRRE II
AGNUS DEI

B: VERGEGENWAERTIGUNG

フローリアン・フリッケの親友であり、映画監督であるヴェルナー・ヘルツォークの映画「アギーレ、神の怒り」のサウンド・トラックとしてリリースされたアルバム。映画は72年に製作されたが、初演は75年にフランスで行なわれた為、本アルバムもフレンチ・コズミッシェ・レーベルから同年リリースされた。ペルー征服の為に南米に渡ったピサロの分隊がアマゾンの奥にあると噂されたエルドラド（黄金郷）を求めてさまようが、遂に一人残らず死滅してしまうといったストーリーの映画であるが、エレクトロニクスを使用したポポル・ヴフの効果的なサウンドと絶妙にマッチした好作品である。フリッケとフィッヒェルシャーとユンの共作で発表年代順にいくと７枚目にあたる。（山）



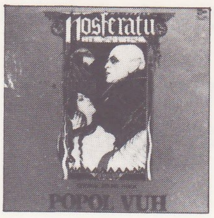
POPOL VUH
Yoga

PDU PLD SQ 6066 '76 廃

A : YOGA 1

B : YOGA 2

70年代のドイツ・プログレッシヴ・グループの中で、東洋志向を感じさすものは多い。アモン・デュール、コズミック系のアーティスト達、エンブリヨetc。あの時代のドイツ音楽の一要因である「捨てる」という作業が東洋思想との共通点をみい出したからであろう。ポポル・ヴフは東洋というものを一つのモチーフとして消化しているに過ぎないが、このアルバムでは、インドのミュージシャンを起用してほとんど純粋なインド音楽を録音している。フリッケはおそらく演奏には関与してはいないのではないだろうか。これも彼の純音楽への一つの試みであると理解できる。聴いてみると、ポポル・ヴフの音楽として同化してしまうのは、コンセプトが明確である為の現象である。イタリアのみのリリース。（山）



POPOL VUH
Nosferatu

伊PDU PLD.A 7005　テイチク SUX-168-EB 廃　1978年

A: BRÜDER DES SCHATTENS-SÖHNE DES LICHTS
B: HÖRE, DER DU WAGST DAS SCHLOSS DES IRRTUMS / DIE UMKEHR

4月のドイツ映画祭記念シンポジウムの席においてヴェルナー・ヘルツォーク監督自身の口から再三使用するポポル・ヴフの音楽について「自分の映像の中に何があるかを音楽で表現している。私の映画にとってフリッケの音楽以上のものはない」と語られた彼等の編集物を除く通算12作目、同監督の同名吸血鬼映画のサウンド・トラック収録作。クレジット・メンバーはフリッケ、フィッヒェルシャーの他ロベルト・エリスク（オーボエ）Alois Gromer（シタール）、Ted De Jong（タブラ）。本作では暖か味ある清澄かつ繊細なピアノ、アコースティック・ギターの多用から神秘的音響を導いている。熟練の点から前々作「HERZ AUS GLASS」同様、後期の核を成す作品。本作からはA-1とB-1が同映画に使用されている。（松）

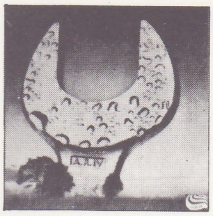


PUNCAKE (W.Germany)
Out Of The Ashes

BLUBBER LIPS BL 801 I 廃　1978年

A: PAINTED RUSH-HOUR / ARCTIC OCEAN / a) Fool's Nightmare / b) Back in the Reality / CAKEY FUNK
B: RAINBOW-SUITE / a) Introduction: Colours in the Rain) / b) Winds of Thor (including the Appearance of Aeolus) / c) The New Day / d) Gone with The Wind / OUT OF THE ASHES

パンケイキは75年にファースト「ROXY ELEPHANT」をリリースし、78年に本作をリリースして解散したバンドである。ファーストは76年《OFFERS OMP 7602》と78年《BLUBBER LIPS BL 804 H》に再発されているが内容のほうはどこにでもあるようなロックを演っていてさして注目すべきアルバムではない。が本作になるとトリトナスのペーター・K・ザイラーを迎えて麗美なシンフォニック・ロックを演奏している。灰の中から甦る不死鳥を描いたジャケットも必見であろう。前衛的なイメージの濃いドイツ・ロック・シーンの中で、このタイプのシンフォニック・ロックを奏するバンドはそれ程多くはないが、決して見過ごしてはならない1シーンではないだろうか。（山）

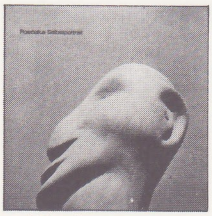


ACHIM REICHEL & MACHINES
AR Ⅳ (W.Germany)

ZEBRA 2949 008 廃　1973年

A: VITA
B: AQUA

巷間に広く流布している後期のサウンドの為に、今一つ人気のないARだが、コニー・プランクがVoc.で参加している大作2枚組〝エコー〟割と知名度の高い〝Ⅲ〟、そして本作、強力メロトロン配合の〝オートヴィジョン〟等どれを取っても傑れたアルバムを発表。その後BRAINで〝ERHOLUNG〟NOVA、TELDECと移籍。ARはそれ以前にワンダーランドバンドを名乗って2枚、71年に、AR & MACHINEで1st〝プロペラ〟を72年に出している。サウンドは、パーカッションを多用した、メディテイション・ミュージックでヤサシドラやナイアガラを連想させる。Ⅳでのアキム・ライヒェルのギターはヴァージン時代のアシュラ、とくにブラックアウト以降のギターに最も近いといえばあたっているだろう。（木）



ROEDELIUS (W.Germany)
Selbstportrait

SKY 028　1978年

A: IN LIEBE DEIN / GIRLANDE / INSELMOOS / FABELWEIN / PRINZREGENT
B: KAMEE / HEROLD / HALMHARFE / ARCONA / STAUNEN IM FJORD / MINNE

クラスターのハンス・ヨアヒム・レデリウスはバンド活動と並行して続々とソロアルバムを発表し続けている。78年に「DURCH DIE WÜSTE」を発表して以来、彼はゼルプストポートレイト（自画像）という連作を3作続けてリリースし、それが完結した後、5th「LUSTWANDEL」、6th「WENN DER SÜDWIND WEHT」7th「OFFENE TUEREN」8th「FLIEG VOGEL FLIEGE」をリリース。又、フランスのエッグより発売された「JARDIN AU FOU」も名盤として名高い。本作は彼の連作のVol.1にあたり、極めて静寂感のある、知的で環境音楽的なサウンドに支配されたアルバムである。KLUSTER、CLUSTER、ハルモニア、そしてイーノとのコラボレイションと長い活動を続けるレデリウスであるが、尚今後の活動が楽しみなアーティストである。（山）



MICHAEL ROTHER (W.Germany)
Flammende Herzen

SKY 007　ポリドール 23MM 0237　1976年

A: FLAMMENDE HERZEN / ZYKLODROM
B: KARUSSELL / FEUERLAND / ZENI

かつてノイと並行しハルモニアに在籍していたギタリスト、ミヒャエル・ローターは現在スカイ・レーベルでソロ制作を行っており同傾向のアルバムを4枚発表している。これはその初作である。ここに聴かれるギター、シンセサイザーを中心とした透明感あるエレクトロニクス系サウンドはカンのヤキ・リーベツァイト（ドラム）の参加により軽快な味付けもされているものの音を詰め込み過ぎることなくリラックスした流れのある音作りが成されており、ハルモニアの2ndを継承しつつよりメロディアスに仕上っている。彼の使用楽器はG, El.P, デジタル・ベース, Syn, Org, El.Per。9ヵ月を費やし彼とドイツ・エレクトロニクス・ミュージックの立役者コニー・プランクのプロデュースの下で録音されている。（松）



ROUSSEAU (W.Germany)
Flower In Asphalt

STEYRER DISCO SD18003 '79 廃

A: SKYLIGHT / GLOCKENROCK / FLOWER IN ASPHALT / LE GRAND REVEUR
B: ENTREE / FOOL'S FANTASY / DANCING LEAVES

叙情派シンフォニック・ロックの宝庫西ドイツにおいて、近年のタンタルスと並ぶロマンティシズムの探求者ルソーの2枚目の作品。アスファルト（石畳？）の小路の裂け目にひっそりと咲く一輪の花とロマンティック街道の古い街並の佇まいを思わせる。ジャケットのイラストを象徴するかの様に彼等の音も味わい深い趣と哀愁感、耽美的な旋律で満ちている。G, B, FI, Key, Dsの5人編成に全曲インストゥルメントのみの構成の為、クセの強いVoが加入していた1st「Retreat」と比較してみると、歌の有る無しで好き嫌いが別れるところだが、1st, 2nd 共ジャケットアートを含めて甲乙つけ難いくらいの出来に仕上がっている。キャメルの「Snow Goose」を愛して止まない方々には是非聴いていただきたい作品だ。〔大〕

Pa — Ro



SAMETI (W. Germany)

Sameti

BRAIN 1972年
1020 廃

A: GET UP
THE USELESS APPEN-DIX
BIG FAT BROTHER JOINT
TO MY CONFIDENTIAL LADY

B: ANOTHERWAYTO SEE
IMPROVISATION

70年初頭、メトロノーム傘下のジャーマンロックシーン群雄割拠時代にいち早く商業的ベースを築いたブレイン・レーベルの隠し子、サメッティのファーストアルバムである。とりあえず、参加メンバーに注目すると、アモンデュールIIのシュラットを主軸に、ポポル・ヴフのエリスク、エンジニアとしてのクルト・グラウプナーは余りにも有名な存在。成程、妙に生暖かいパステル調のカヴァーアートは、ファウスト・セカンドのイラスト集を手掛けたエッダ・コェヒェル。凄じくもお膳立の行き届いた果てに出来上がったこのアルバムは、ブレイン・レーベルのカラーを代表する歴史的迷盤と言える。尚、74年にワーナーから「ハングリー・フォー・ラヴ」というセカンドも出している。 (丸)



CONRAD SCHNITZLER (W. Germany)

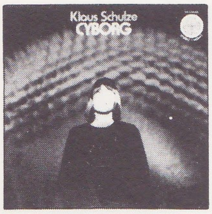
Con

仏EGG **キング** 1978年
EGG-90.184 **GP 709 廃**

A: ELECTRIC GARDEN
BALLET STATIQUE

B: ZUG
METALL I
BLACK NAILS

仏エッグよりリリースされ、日本でも発売になった事のあるコンラッド・シュニッツラーのこのＬＰは彼の持つエレクトロニクス感覚のサンプルと言った感のあるものだ。彼は本作以外にかなりの数の作品を発表しているものの、初期はほとんどが極少数の限定盤で、なかなか耳にするのが難かしい。彼の創る空間は全く独自な物で、他に類を見ない不思議な感覚を持っている。限定盤は本作を拡大した様なスペースミュージックがLP両面を埋めているが、最近はニューウェーヴに影響を受けたポップな作品が多い。特に独・RCAからの４曲入12インチシングルは素晴らしい出来を見せている。個性の強い人らしくプロデュース業も行なっているが、今後も活動に期待したい人ではある。 (中)



KLAUS SCHULZE (W. Germany)

Cyborg

KOSMISCHE MUSIK **テイチク** 1973年
KM2/58 005 廃 **UPS-670～1-EB 廃**

A: SYNPHÄRA
B: CONPHÄRA
C: CHROMENGEL
D: NEURONENGESANG

タンジェリン・ドリーム、アシュ・ラ・テンペルを経てソロとなった彼のシンセサイザーによる直向な作業と波及は現在Ｉ・Ｃ・レーベルという結実をもたらせている。1st「イルリヒト」に続く本作は彼がコスミッシェ・レーベルにおける電子音楽の核であった時期の作品。前作同様、冷たく寂しい音色と平面的広がりを見せるがオーケストラを自己のサウンド形成の栄養素としており音の輪郭がより明瞭になっている。根底に流れる人間味ある感性もここには強く感じられる。前作と本作を同ベクトル上とすれば「ブラックダンス」と「タイムウインド」、「ムーンドーン」を移行期としメロディアスな音作りの２作の「ボディー・ラヴ」、集積「Ｘ」、コンピューター・サウンド「ディグ・イット」以後に大別できよう。 (松)



KLAUS SCHULZE

Mirage

BRAIN **ポリスター** 1977年
0060.040 **22S-28 廃**

A: VELVET VOYAGE
B: CRYSTAL LAKE

シュルツェ８枚目のソロ・アルバム。初期から中期にかけての彼の試行錯誤の過程はこのアルバムを頂点として迎え、すべてここに流れつくと考えてよいだろう。本作以前の彼の作品群がアリアドネの糸だとすれば、さしずめこのアルバムは彼の行きついたアルカディアである。Ａ面はリズムレスの滔々とした世界でうっすらと色彩感覚のある作品である。Ｂ面は比較的躍動感のあるリズム・パターンのシークェンスの上にクリスタルの湖を情景描写したもので視覚的な要素が多く導入されている。クリスタル・レイクの上を吹く風の音、草木のざわめき、鳥の飛び立つ様などをイントロダクションに自己の内的宇宙へと旅立つ為の導入剤的な役割と、孤高のロマン主義的アイデンティティーとが見事に共存している。 (山)



KLAUS SCHULZE

X

BRAIN 1978年
0080 023

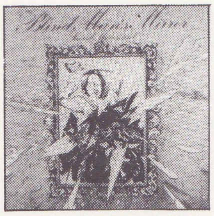
A: FRIEDRICH NIETZS-CHE
GEORG TRAKL

B: FRANK HERBERT
FRIEDEMANN BACH

C: LUDWIG II. VON BAYERN

D: HEINRICH VON KLEIST

クラウス・シュルツェの10枚目にあたるこのアルバムでは、ドラッグ、狂気、創造という３つの主題から、おそらく彼の心酔する６人の人物をタイトルに冠した作品が収められている（彼は最新作オウデンティティーに於いてもトラークルの詩を題材にしている）。70年代から常に第一線で活動してきた数少ないミュージシャンの一人であるシュルツェは、例えそれがシンセサイザーという注目を浴びた楽器のスペシャリストであったとしても、独自の語法と方法をもち、自己の音楽を絶えず発展させた音楽家として最も才能ある人であった。彼の文学性は初期より感じられたが、この作品によって現在の活動の基本的スタイルが生まれている。シュルツェはシーン全体として語るにはあまりに巨人で、今や孤高の道を歩んでいる。(島)



SECOND MOVEMENT (W. Germany)

Blind Man's Mirror

CASTLE : CAS 1003 '76 廃

HARALD KESSELHACK - VO
SIGGI ZEIDLER - KBD
THOMAS MOCKL - G
MANNI GREINER - B
MATTHIAS HELK - DS
MANNI BIERBACH - FL, S
PRO : SECOND MOVEMENT

小気味良いテンポの準シンフォニックサウンドで幕を開ける。派手なキーボードワークは無いが、泣きのフレーズが割と続くため、アイヴォリー、エデンといった"優等性"的な音とはまた違った味わいがある。歌詞は全て英語。じっくりと聴かせるパートではフルートが効果的な働きをしており、オルガンの音と相まって時には英国風、キャメルあたりを思わせる展開が見受けられる。76年という年代にしては割とスマートな曲作りをしているものの、前述のフルートの他、acギター、チェレスタ等により叙情性を前面に出し、要所はキーボードで締めるというパターンは大成功と言えよう。A面中程ではelピアノとサックスを交えてジャジーな展開を見せるが、ここを除けばパートのバランスが崩れることはほぼ無いと言っていい。 (江)

SERENE (W. Germany)
Serene



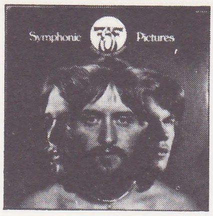
LAVA TCH 81001 81 廃

A: DOES IT MATTER AT ALL
SERENITY
DREAM STAGNATION
ADRIFT

B: YOUR MAGIC DOOR
A NEW MAN
WE'VE ONLY JUST BEGUN

カラフルな色彩で彩られた、セレーネの残した唯一の作品。81年にLAVAなるマイナー系レーベルで製作された（ただし、録音は79年に行われている）。今まで、ドイツのシンフォニック系はテクがなくある種の臭さを引きずっていたもの、と偏見を持っていた者の鼻を明かすかの様に、彼等は演奏とテクニック、曲作りにおいて、それらの要素を排除し曲そのものにも強弱や明暗、動と静のメリハリを効かせた開放的で英米の受けを狙おうとしていた印象さえ感じられる。Voも男性的な力強さと優しさが同居した歌いっぷりで、注目に値する所だろう。アルバムに針を落とすと、そこにはキャメル、B. J. H. UKといったブリティッシュの強者らがオーバーラップしてくる。硬派を思わせる強力な一枚。〔大〕

SFF (Switzerland)
Synphonic Pictures



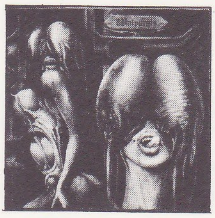
BRAIN 0060.010　テイチク UXP-748-EB　1976年

A: TAO
SOLUTION
DIALOG
SUNDROPS

B: PICTURES

SFFとはシッケ(Schicke)、フュアーズ(Führs)、フローリッヒ(Fröhling)の３人の頭文字をとったもので、76年に本作、77年に「Sunburst」《Brain 00 60.068》、そして最後に「Ticket To Everywhere Open Doors Sunburst」《Brain00 60.173》をリリースする。その後シッケが脱退してF＆Fの名で「Ammerland《Brain 0060.105》」、「Strings《0060.223》」「Diary《0060.333》」の３枚のアルバムをリリースしている。驚異的な変拍子を伴う素晴らしいシンフォニック・トリオで、ブレイン・レーベルのアーティストの中では異彩をはなっていた。数あるキーボード・トリオの中でも極めて高水準な存在である。（山）

THE SHIVER (W. Germany)
Walpurgis



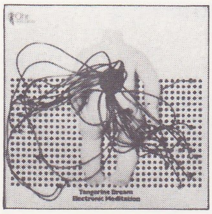
MARIS MUSIK 20501 廃　1969年

A: REPENT WALPURGIS
ODE TO THE SALVATION ARMY
LEAVE THIS MAN ALONE
WHAT'S WRONG ABOUT THE BLUES

B: HEY MR. HOLYMAN
DON'T LET ME BE MISUNDERSTOOD
NO TIME THE PEDDLE

69年を出発期とするドイツ・ロック。ではそれ以前当時の若者の間で何が聴かれていたか。このギーガーのジャケットに飾られたその内側にはポップス・バンドを思わせる５人のステージ写真も見られる彼等の唯一の作品も確立期以前の音楽状況を明確に示すものとして、それは英・米の輸入ロック、特にサイケデリック・ロックであった。ここに聴かれるオルガンと泣きのギターをメインに60年代的ポップ色を味付けした軟質のブルース・ロックはイギリス産のそれとあまりに似ている。時流を抜け出さない音楽ではあるが曲自体はよく練られておりメロディー・ラインも良くブルース・ロックとしては良質作である。メンバーに二人のイタリア人らしき人名、一人の英語名の人名が見られる。オーストリアはウィーンでの録音。（松）

TANGERINE DREAM (W. Germany)
Electronic Meditation



OHR OMM 56 004 廃　東芝 EOP-80618 廃　1970年
コロンビア YX-7124-AX 廃
コロンビア YZ-95-AX 廃

A: GEBURT
REISE DURCH EIN BRENNENDES GEHIRN

B: KALTER RAUCH
ASCHE ZU ASCHE
AUFERSTEHUNG

彼等の初作であり初期ドイツ・ロックの典型作。エドガー・フローゼ（G. Org）は現在もグループを率いクラウス・シュルツェ（Dr）は本作後アシュ・ラ・テンペルへ参加、１st制作後ソロ活動へKLUSTERでの作業を並行したコンラッド・シュニッツラー（チェロ）も同様に離脱、後にドイツ電子音楽を展開させる火種となり自らもソロ制作を行なう。すなわちクラフトヴェルクの系譜を別としてドイツ電子音楽の流路は全てここに遡る訳である。不気味な響きのチェロ、厳つい音色のギター、連打のドラム等、音自体は既成のものだがやや乱雑な混沌とした演奏はハード・ロックを演っていたE・フローゼが次作「アルファ・ケンタウリ」にてシンセサイザーの可能性を発見するまでの実験的試行と見なせよう。（松）

TANGERINE DREAM
Zeit



OHR OMM 2/56 021 廃　コロンビア YB 7001—2-AX 廃　1972年
コロンビア YZ-83—4-AX 廃

A: BIRTH OF LIQUID PLEJADES

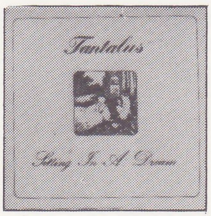
B: NEBULOUS DAWN

C: ORIGIN OF SUPERNATURAL PROBABILITIES

D: ZEIT

タンジェリン・ドリームの３枚目で初の２枚組。近年のタンジェリンとはかなり趣きを異にする内容である。メンバーはフローゼ、フランケの他にペーター・バウマン、ゲストにステーベ・シュロイダーとフローリアン・フリッケ、他に４人のチェリストを迎えている。現在のタンジェリンに見られるシークエンスは確固とした形としては見られず、混沌とした大気の流れの内に悠久の時を感じさせる世界が展開している。A面では電子楽器を使用した初期ポポル・ヴフとタンジェリンとの異和感なく溶け合った姿が見られる。またチェロと電気楽器の調和は現代の室内楽と呼ぶに値するものだ。蛇足ながらフローゼのギターをギターと聴きわけられる人は多くはないであろう。オーケストラルな作風を持ち高完成度を輝つ。（韮）

TANTALUS (W. Germany)
Sitting in a Dream



SRILANCA : 2280 廃

KLAUS BAUER - G, VO
BODO BURKHARDT - KBD, VO
WOLFGANG TERK - DS
CURD - JURGEN WULLE - B

「タンタルス」とはギリシャ神話に登場するゼウス神の子の一人。不遜にも神々を試そうとして父の怒りに触れ、罰として永遠の飢えと渇きを与えられたという話は有名だ。がカヴァーに取り入れられたビアズリーの絵は非常にメルヘンチックなもので、美しい音を端的に表している。acギター、ピアノ、シンセ等による澄み切ったサウンドが中心。A面途中で若干軽い乗りのパートが顔を出す以外は平均して割と良い出来のシンフォニックサウンドを聴かせている。A面ラストではacピアノ、ストリングシンセで美しく締めくくり、B面に入ると徐々にキーボードが前に出て来てそこはかとなく盛り上げていくという展開には殆ど抵抗無く溶け込めよう。濁りの無い素朴な音作りからは意識的に派手になるのを抑えているとの印象さえ受ける。（江）



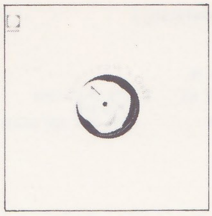
TIBET (W. GERMANY)
same title

BELLAPHON LC 1421 '79 廃

A : FIGHT BACK
CITY BY THE SEA
WHITE SHIPS & ICEBERG
SEASIDE EVENING

B : TAKE WHAT'S YOURS
EAGLES
NO MORE TIME

B級作品の多いベラフォン・レーベルであるが、このティベットが残した唯一の作品は、他のベラフォンの作品群とは一線を画す完成度を持っているといえる。6人編成だが、基本となるのは2人のキーボード奏者で、特にハモンド・オルガンの響きとメロトロンの哀愁が耳につく。A面4曲B面3曲が収録されている。どの曲も水準以上の作品であるが、特にA-3の輝きが白眉である。曲の構成自体は単純であるのだが、メンバーの感情移入の成せる業であろうか。ドイツ的な部分とオランダ的な感覚が感じられるが、それらは全てあの70年代の熱いシーンに想いを馳せるには十分なもの。 (今)



TOMORROW'S GIFT (W. Germany)
Goodbye Future

SPIEGELEI
28 515-5U 廃
1973年

A: JAZZI JAZZI
DER GEIER FLIEGT VORBEI
ALLERHEILIGEN
WIENERSATZ

B: NATURGEMÄß
DIDDEN FÜR DUNDEN

しばしばインターコードの名称を併用するスピーゲライ・レーベルには多数の良質な作品があるが本作はシンフォニック傾向にある同レーベルにあってフリー・パートを重視した良質作と言えよう。前作「トゥモロウズ・ギフト」(PLUS 1＋2) では女性ヴォーカルを中心にありきたりのロックを演っていたがこの2ndでは部分的に聴かれるシンフォニックなキーボード、煌々と響き渡るギターがフリー・スタイルのドラム、ベースに溶け込み小変化に富むやや瞑想的な淡々としたサウンドを展開している。グループは本作後消滅し3人のメンバーのうちヴォルフガング(ザッパ)・リンドナー (Dr) は実験作風のデュオ作を1枚発表その後この3人にメンバーが加わりリリース・ミュージック・オーケストラが始動する。 (松)



TRITONUS (W. Germany)
Tritonus

BASF
17 22384-1 廃
1975年

A: ESCAPE AND NO WAY OUT
SUNDAY WALTZ
LADY MADONNA

B: FAR IN THE SKY
GLIDING
LADY TURK

ドイツはシンフォニック・ロックの根付かない風土を持つ国である。独自性の欠如、形骸化したサウンド、技術の低さを浮き彫りにする発想の平凡さ、模倣のつぎはぎ、これらはその大部分のシンフォニック・ロックに適合する。残念な事ではあるが事実は否定出来るものではない。編成はキーボード、ベース、ドラム。これは1stで翌年「BETWEEN THE UNIVERSES」《BASF CC 229467》を発表し解散した。キーボードのペター・ザイラーは74年に「KEYBOARDS AND FRIENDS」《RBM Rec. 5004》を発表している。ELPをコピーしたにほぼ等しいサウンドは技術の裏付けと良質のセンスにより水準を越える出来である。芸術一般の命である独自性、その著しい欠如を考えると彼等は音楽家である以上に愛聴者であったことが判る。 (松)



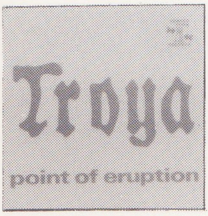
TRIUMVIRAT (W. Germany)
Spartacus

HARVEST
1C 062-29-567
東芝 ECS-80300 廃
1975年

A: THE CAPITAL OF POWER
THE SCHOOL OF INSTANT PAIN
THE WALLS OF DOOM
THE DEADLY DREAM OF FREEDOM
THE HAZY SHADES OF DAWN

B: THE BURNING SWORD OF CAPUA
THE SWEETEST SOUND OF LIBERTY
THE MARCH TO THE ETERNAL CITY
SPARTACUS

彼等の3枚目である本作はスパルタカスを題材にしたトータル・アルバムである。ドイツのナイス＝ELPと言われた彼等だが、その原因はバンド編成とハンツ・ユルゲン・フリッツのキーボード・ワークが比較的似ていた為であろう。ドイツ臭さは全く無く、ブリティッシュ指向のバンドではあるが、曲のセンスの良さは特筆に値する。又、歌詩の出来も良く特にB面の流れは名調子であると言えよう。バンドはこの後ドラマーを変え、さらにヴォーカリストを加え〝OLD LOVES DIE HARD('76)〞を発表している。他のアルバムとしては1st〝MEDITERRANEAN TALES('72)、ILLUSION ON A DOUBLE DIMPLE('74)、POMPEJI('77)、A LA CARTE('78)、RUSSIAN ROULETE('80)がある。 (千)



TROYA (W. Germany)
Point Of Eruption

Forder Turm T5476 '74 廃

A:SHE
BATTLE ROCK
CHROMATIK

B:FESTIVAL
SINCLAIR
CHOKE

自主製作に近い形で発売されたことでもあり、同時期の大手レーベルのレコードと比べると、音質的に見劣りするのはいた仕方ない。それでも、このTroyaが残した唯一のアルバムは捨て難い魅力を持っている。タイプとしては、Novalis, Faithful Breathに近く、メロディを重視したキーボードをメインにした音作りとなっている。テクニックは当時としては水準はいっているものの、今ひとつといったところ。彼らの本領はじっくりと曲を盛り上げて行くドラマチックな曲作りにある。となると、A②、B③が本作の代表的な曲といえよう。Faithful Breathを以前再発したCodaより、本作も再発されているらしく、ファンの熱い声が届けば再発の可能性もなきにしもあらず。その後メンバー4人については分っていないのが残念。 〔吉〕



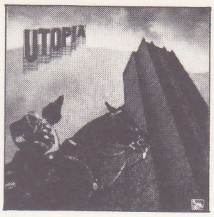
2066 & THEN (W. Germany)
Reflections On The Future

UNITED ARTISTS
UAS-29314 1 廃
1972年

A: AT MY HOME
AUTUMN
BUTTERKING

B: REFLECTIONS ON THE FUTURE
HOW WOULD YOU FEEL

音楽に限ったことではないが21世紀をテーマとしたものは意外に多い。この作品もその一つだ。グループ名とジャケから判断して、未来と宇宙をテーマにした壮大なロックシンフォニーを想像していたが、針を落してみると意外にも彼らはハード・ロックを演っていた。しかし、同様のテーマを扱った作品の殆んどが電子楽器を多用してSF的に凝り固ってしまっているため、ギターとダブル・キーボードを中心としたオーソドックスな彼らのサウンドからは逆に新鮮味が感じられる。このアルバムのメインは約16分を費したタイトル曲 (B-1)。長い曲ではあるが、曲構成が巧みで間伸びすることがない。ハード・ロックに有りがちな〝内容のない超大作〞に終わらせないところが彼らの非凡なところであろう。 (江)



UTOPIA (W. Germany)
Utopia

UNITED ARTISTS　キング　1973年
UAS 29438　K22P-329

A: WHAT YOU GONNA DO?
THE WOLFMAN JACK-SHOW
ALICE
LAS VEGAS

B: DEUTSCH NEPAL
UTOPIA No.1
NASI GORENG
JAZZ-KISTE

ロウター・マイトを中心としたユナイテッド・アーティスト系ミュージシャン(アモン・デュールII、エンブリヨ、パスポート、ナイアガラ等）によるセッション的作品。ロウターはエンブリヨ、パスポート、アモン・デュールIIといったバンドを渡り歩いてきたジャーマン・ロック史上屈指のベーシスト。本作はアモン・デュールIIの「WOLF CITY」にも収録されているB-1の為にマニアにも人気が高く、入手も困難だったが、最近国内発売されたの転換を目前とした当時のジャーマン・ロック界の状況を考えると、或る意味で象徴的な作品である。トリップ仲間を総動員してのロウターの試みは結局、ドラッグ・カルチャー最後の狂い咲きで終わってしまった。全曲マイト＆オラフ・クプラーのペンによる作品である。（千）



VARIOUS (Switzerland)
Heavenly And Heavy

KOH-I-NOOR KR-1 '74 廃

A: ISLAND-SILENT MAJORITY
HENRI-MARIA
GRUNSPAN-POLLUTION
HENRI-
DOYON KNOW WANT TO CHANGE IT

B: ERTLF-PLASTIC QUEEN
HENRI-HOW DO YOU FEEL
LEAR-PRESIDENT
GTRUNSPAN-
A GHOST MUST BE AROUND

スイスの５つのロック・グループを集めたオムニバス・アルバムで、Henri はフォーク・ロックタイプ、Grunspain, Lear はハード・ロックタイプ、何枚かＬＰも出している Ertlif は、メロトロンを大幅に導入したプログレシッヴ・ロックと呼んでもおかしくないサウンドを聴かせるのは、もちろん、Island である。名作 "Pictures" に先がけて '73年に録音された８分に及ぶこの曲は、あの悪魔的ともいえる音作りの域までは達ってはいないが、サックス、キーボード、ヴォーカルの扱い方には彼らの個性がすでにめばえている。メンバーは若干異っており、Benjamin Jager (VO-PERC), Guge Meier (ds, perc) に、Jack R. Conrad (Kbd), Dany Ruehle (g), Werni Froehlich (b), Bryn Collinson (sax, vo) の６人編成である。〔吉〕



WALLENSTEIN (W. Germany)
Mother Universe

PILZ　1972年
20 29113-8 廃

A: MOTHER UNIVERSE
BRAINTRAIN
SHAKESPEARESQUE

B: DEDICATED TO MYSTERY LAND
RELICS OF PAST
GOLDEN ANTENNA

ユルゲン・ドラゼ率いるヴァレンシュタインの２ndアルバム。メンバーはドラゼ(Keyb)の他にハラルド・グロスコプフ(Dr)、アメリカ人のビル・バローン(G)、そしてオランダ人のイェリー・ベルカース(B)の計４人である。このアルバムの時点で既に彼らはジャーマン・シンフォニック・ロックの頂点に達していたと言えよう。初期ヴァレンシュタインのサウンドはギターがヘヴィーな音色を多用するため全体的にハードな印象を受けるが、核になっているのはあくまでもピアノ、メロトロンをはじめとするドラゼのキーボード・プレイであり、表面的なダイナミックさのみならず、本質的には繊細な面を多く持っているグループであると感ずる。なお、ベースのベルカースは本作後に脱退し、ソロ・アルバムを発表した。（城）



WALLENSTEIN
Cosmic Century

KOSMISCHE MUSIK　1973年
KM-58. 006 廃

A: RORY BLANCHFORD
GRAND PIANO
SILVER ARMS

B: THE MARVELLOUS CHILD
SONG OF WIRE
THE COSMIC COURIERS MEET SOUTH PHILLY WILLY

ベースがディーター・メイアーに交替し、さらにヴァイオリニストのヨアヒム・レイゼを加えたヴァレンシュタインが発表した３rdアルバムである。基本的には前２作の延長線にある作品だが、ギターの音処理を若干変えてその存在を押えめにした分キーボードと新加入のヴァイオリンがフィーチャーされ、シンフォニックな趣きが強くなっている。本作が独シンフォニック・ロックの最良部に属する作品であることは疑う余地もない。自らを「ザ・シンフォニック・ロック・オーケストラ」と名乗るのは、当時の彼らが目指していた音楽を明確にしただけでなく、その大いなる自信の表われであろう。次なる４thアルバム「Stories, Songs & Symphonies」では若干パワーが落ちたものの、これもなかなかの佳作である。（城）



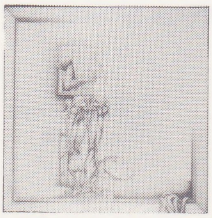
WALPURGIS (W. Germany)
Queen Of Saba

OHR　1972年
556 023 廃

A: DISAPPOINTMENT
QUEEN OF SABA
DAILY
HEY YOU, OVER THERE

B: WHAT CAN I DO
MY LAST ILLUSION

ドイツに限ったことではないが、伝説なり神話なりをモチーフに、その解釈の恣意的な面白さによって作品を残すという傾向が当時多く見られたようだ。ワルプルギスもご多分にもれず、ブロッケン山脈からの魔女たちの狂宴をしっかり残してくれた。A面ラストを除いて、何らインパクトのない虚飾だらけで思い入れたっぷりのハードロックは、出来そこないヴァレンシュタインと思えばよろしい。これ１枚のみ残して颯爽とシーンから退場してしまったのはいいが、後世マニアの頭を悩ましたケシカランアルバムの１枚である。カヴァーアートは明記されてはいないが、たぶんヘルムート・フリッツであろう。ゲストとしてユルゲン・ドラーゼのクレジットがある。彼のピアノが聴ける。（丸）



WANIYETULA (W. Germany)
A Dream Within A Dream

KLANGKUNST KK-2811-018 '83 廃

A: THE FOREBODING
ALONE
FEATHERY BIRD
VALLEY OF UNREST
YESSERTRONICS

B: A DREAM WITHIN A DREAM
SONG OF MASTER AND BOATSWAIN
IF I COULD TELL YOU
DREAMLAND

彼等は紛れもなく80年代のジャーマン・シンフォニックの中で、最高の部類に位置する存在であろう。ヴァニエトゥラ、83年に自主製作された恐らく唯一の作品かと思われる。ドイツ然とした臭さが強みとは正反対にブリティッシュ・ポンプ系から派生した速効性と斬新な感覚を全面に押し出したグループと言える。都会的センスとポップな要素で溢れた曲の進行と展開・構成共に申し分なく、何よりも一曲一曲ごとに、欧州的な美学とロマンティシズムが根付いている。バランス良くとれた演奏はおろか、各人のパートにも無駄がなく非常に聴きやすくなっている。キャメルタイプとしては最右翼であると同時に退屈極まる軟弱なメロディがないことも作品の大きな魅力。エニワンズ・ドーターばりの力作であろう。〔大〕



WARTER WEGMÜLLER (W. Germany)

Tarot

KOSMISHE MUSIK
KK58 003 廃 1972年

A: DER NAAR/DER MAGIER/DIE HOHEPRIESTERIN/DIE HERRSCHERIN/DER HERRCHER/DER HOHEPRIESTER
B: DIE ENTSCHEIDUNG/DER WAGEN/DIE GEREOHTIGKEIT/DER WEISE/DAS GLÜCKSRAD/DIE KRAFT
C: DIE PRÜFUNG/DER TOD/DIE MÄSSIGKEIT/DER TEUFEL/DIE ZERSTÖRUNG
D: DIE STERNE/DER MOND/DIE SONNE/DAS GERICHT/DIE WELT

ロルフ＝ウルリッヒ・カイザー主催するコスミッシェ・レーベルのミュージシャン達のセッション・アルバムでヴァルター・ヴェグミュラーのために集まった友人達のレコードである一そういえばアシュ・ラ・テンペルのロジも同姓だった一。ヴァレンシュタインからドラゼ、ベルカー、グロスコプフ、アシュ・ラ・テンペルからゴッチングとエンケ、W&Wのヴェストルップそしてシュルツェが参加している。音は「コスミック・ジョーカーズ」等の一連のサウンドと同系であるが曲としての完成度は保たれている。タロットカードにそった22曲から成りヴェグミュラーの詩（一部シュルツェなど）がその上で読まれるといった内容である。ブロマイドとタロットカード付。各ミュージシャンの個性差が曲に反映し面白い。（島）



WIND (W. Germany)

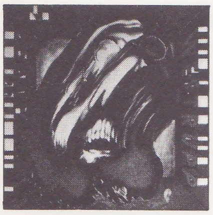
Morning

CBS
S 65 007 廃 1972年

A: MORNING SONG
THE PRINCESS AND THE MINSTREL
DRAGON'S MAID

B: CARNIVAL
SCHLITTENFAHRT
PUPPET MASTER
TOMMY'S SONG

初期ドイツ・ロックにあってファンタジックなサウンドを前面に押し出していた彼等の「SEASONS」(PLUS 3) に続く２作目、最終作。ステーベ・ライストナー（Vo, Per)、トーマス・ライデンベルガー（G, Vo)、アンドレアス・ブエラー（B, Vo, Per)、ルシアン・ブエラー（Key, Vo, Per)、ルッキーシュミット（Dr, Per, メロトロン、P, ヴァイヴ）によるもの。ヴォーカルはジェネシスの、メロトロンの使用法は初期クリムゾンの影響下にあるがジャケットやA-2、B-2の曲調に象徴される、まさに中部ヨーロッパが育んだと言える爽やかさあるメルヘンの香りが根底を満たしている。的を得たリヴァーヴ処理、繊細なアコースティック・ギターと効果的なメロトロンを特徴とするシンフォニック・ロックと言えよう。（松）



WITTHÜSER & WESTRUPP (W. Germany)

Trips & Träume

OHR
OMM 56 016 廃 1971年

A: LASST UNS AUF DIE REISE GEHEN
TRIPPO NOVA
ORIENTA

B: ILLUSION 1
KARLCHEN
ENGLISCHER WALZER
NIMM EINEN JOINT, MEIN FREUND

ベルンド・ヴィットゥーザーとヴァルター・ヴェストルップはオウル・レーベルに２枚、ピルツ・レーベルに２枚、コスミッシェ・レーベルに１枚の作品を残したフォーク・デュオである。これは彼等の２ndでありゲストにディーター・ディエルクス等が参加している。この彼等やヘルダーリン、ブローゼルマシーネ等の音楽性が素朴さに終始しない神秘的な響きを伴うのは単にリヴァーヴ処理による所のみであろうか。ピルツ系サウンドの中で最もフォーク色の濃い彼等の音色からも英、仏、アイルランド等のフォークにはないドイツ神秘主義絵画の画家達が描いたような深い霧に包まれた森のイメージが浮び上がる。時にはアメリカ指向やユーモアを見せるが本作は４th「BAUER PLATH」と共にメロディアスな曲が多い。（松）



YATHA SHIDHRA (W. Germany)

A Meditation Mass

BRAIN
1045 廃 1974年

A: PART 1
PART 2

B: PART 3
PART 4

ドイツロックには、機械文明への同化と肯定と共に、自然回帰、東洋的神秘主義への憧憬が強く感じられる。南ドイツースイス系グループには特にこの傾向が強い感があるが、ブレインの比較的初期に発表されたヤサ・シドラのアルバムは、ポポル・ヴフのような東洋の宗教的感覚に満ちている。単調な細かい反復（Ds、和声楽器）の上に、フルートが息の長いメロディーをのせる、という、インド音楽や東欧の民族音楽の影響がみられる。ロックからもドイツ音楽からも遠ざかる非西洋的音楽である。美しく、静かで自然な音であるが、シーン形成の主導的立場をとり得るようなものでは決してない。他のアルバムが発売されていないところをみると、多分にセッション・アルバム的性格の強いものだったのではなかろうか。（島）



STEFAN ZAUNER (W. Germany)

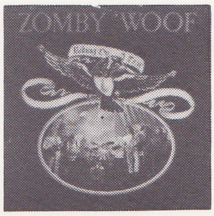
Narziss

ARIOLA 27026 '76 廃

A: INTRO
MARTIN
PREFFER
ZOLL
OH' LINDO

B: DIE INSEL
DER BEWUSSTE VIERTE MORGEN
CHAOS
SPIEGLEIN AN DER WAND

ステファン・ツァウナーは２枚のアルバム（2nd : Prism & Views-vinyl-）を残したマルチ・プレイヤーである。２枚共水準の高いシンフォニック・ロックであるが、どちらか一枚ということになればこのファースト・アルバムになる。彼は一人でキーボード類、ギター、ヴォーカル、ベース、ドラムスをこなし、ゲストに他のドラマーを起用しただけである。的を得たアレンジ。天才的なひらめきを持つセンスの良さ。水準以上の演奏技術。それらが生み出すファンタジー・ワールドは数あるドイツ・シンフォニックスの中でも最高位に位置するものだ。全体的に明るい曲想が多く、多少イエスあたりの持つすがすがしさを感じる。（山）



ZOMBY WOOF (W. Germany)

Riding On A Tear

JUPITER RECORDS 25231 OT '77 廃

A: INTRODUCTION
SUICIDE
RIDING ON A TEAR
REQUIEM

B: YOUR MAGIC DOOR
MARY WALKING THROUGH THE WOOD
WALKING THROUGH THE WOOD
FINALE

アイヴォリーを送り出した事で知られている、ジュピターレーベルから隠れた名盤を残しているゾンビーウーフ。恐らく唯一の作品かと思われる。〝甦った狼の屍〟と訳すのだろうか？少々無気味なネーミングのグループである。サウンドの方もおどろおどろしいヘヴィーな内容かと思いきや、彼等は軽快さと重厚さとを兼ね備えた、70年代初期から中期にかけてのブリティッシュ・ヘヴィ＆プログレッシヴタイプの曲をプレイしている。劇的なピアノソロで幕を開け、ツインギターとキーボードが程良くからみ合い力強いリズムセクションが加わるという、終始一貫したスタイルで進行させていきながらも、聴く者の心に一曲ごとの持ち味の良さというか、不思議な余韻を残してくれる。77年の作。〔大〕

Abacus
- Same(Polydor 2371 225)'71
- Just A Day's Journey away(Polydor 2371 270) '72
- Everything You Need(Zebra 2949 002)'72
- Midway(Zebra 2949 013)

Achim
- Trotz-Rock

Agam
- Alter Pfarrhof
- Erinnerungen An Eine Positive Phase(Agam 1377) '77

Agitation Free
- Malesch(Vertigo 6360 607)'72
- 2nd(Vertigo 6360 615)'73
- Last(Barclay 80 612)'76

Agamemnon
- Part 1 & 2(Agamemnon AGA 12410)'80

Ainigma
- Diluvium(ARC ALPS 151715)'73

Alcatraz
- Vampire Atate Building(Philips 6305 128)'71

Alex
- Same(Pan 87 305 IT)'74
- That's a Deal(Pan 88 831 OT)'76
- Alex Oriental Experience Live!(ML 517)'80

Altona
- Same(RCA PPL 1-1049)'74
- Chickenfarm(RCA PPL 1-4129)'75

Ambrosia
- Same(
- Somewhere I've never Travelled(WEA EB 56 600) '76
- Live Beyond L.A.(WEA WB 56 525)'78
- One Eighty(WEA WB 56 811)

Amon Düül
- Psychedelic Underground(Metronome MLP 15.332) '69
- Collapsing-Singvögel Rückwärts & Co.(Metronome SMLP 012)'69
- Para Dieswärts Düül(Ohr OMM 56.008)'70
- Disaster-Lüüd Noma(BASF 2929079-8)'71
- This Is Amon Düül(Metronome 2001.200.146)

Amon Düül II
- Phallus Dei(Liberty LBS 83 279)'69
- Yeti(Liberty LBS 83 359/60)'70
- Tanz Der Lemminge(Liberty LBS 83 473/74)'71
- Carnival In Babylon(United Artists UAS 29 327) '72
- Wolf City(United Artists UAS 29406)'72
- Live In London(United Artists UAS 29466)'74
- Vive La Trance(United Artists UAS 29 504)'74
- Hijack(Nova 6.22 056)'75
- Made In Germany(Nova 6.28 350)'75
- Lemingmania(United Artists UAS 29 723)'75* best album.
- Pyragony X(Nova 6.22 890 AO)'76
- Almost Alive(Nova 6.23 305)'77
- Only Human(Stand 6.23 561 AO)'78
- Same(RP 301 467)'81
- Vortex(Teldec 6.24 874 AS)'81
- Minnelied(Brain 0040.149)

Amos Key
- First Key(Spiegelei 26 413-U)'73

Anabis
- Heaven On Earth(PM 1080)'81
- Wer Will!(Anabis 11-81)'82

Don Anderson
- Feelin' Alright(Global 26 007-5U)'72
- The Eagle Flies(Global 26 012-5U)'73

Andromeda
- Same(Vogue LDVS 17 205)'70

Anima
- Same(Pilz 2029097-2)'72
- It's Up To You(Preiser Rec.)'72

Anima Sound
- (Alter Pfarrhof Production)(Melcord St-LP NBO.02)'71
- Stürmischer Himmel(Ohr OMM 56.011)'71

Annexus Quam
- Osmose(Ohr OMM 56.007)'70
- Beziehungen(Ohr OMM 556.028)'72

Anyone's Daughter
- Adonis(Brain 0060.186)'79
- Same(Intercord INT 145.612)'80
- Piktors Verwandlungen(Intercord INT 145.624) '80
- In Blau(Intercord INT 145.632)
- Neue Sterne(Spiegelei INT 145.640)

Apocalypse
- Same(Ariola 80 412 IU)'70

Aquarell
- Abflung(Pool 6.24 927)'81

Arktis
- Same(R 40 40)'74
- Arktis Tapes(Bonbons Rec.BBR 7502)'74

Armaggedon
- Same(Kuckuck 2375 003)'70

Ash Ra Tempel
- Same(Ohr OMM 56.013)'71
- Schwingungen(Ohr OMM 556.020)'72
- Join Inn(Ohr OMM 556.032)'72
- Seven Up(Kosm.Kur.KM 58.001)'72
- Starring Rosi(Kosm.Kur.KM 58.007)'73
- Inventions For Electric-Guitar(Kosm.Kur.KM 58.015)'74
- New Ages Of Earth(Virgin 28 598 XOT)'77
- Blackouts(Virgin 25 676)'78
- Correlations(Virgin 200 431-320)'79
- Boomerang(
- Belle Alliance(Virgin 202 284-320)'80

Asterix
- Same(Decca SLK 16 695-P)'70

Atlantis
- Same(Vertigo 6360 609)'72
- It's Getting better(Vertigo 6360 614)'73
- Ooh Baby(Vertigo 6360621)'74
- Get On Boad(Vertigo 6360 630)'75
- Atlantis Live(Vertigo 6623 900)'74/75
- Top Of The Bill(Venus V78 AT-F1002)'78

Peter Backhausen
- Planet Snow(Sky 037)'80

Peter Baumann
- Romance '76(Virgin 28 311 XOT)'76
- Trans Harmonic Nights(Virgin V 2124)'79
- Repeat Repeat(Virgin 204 014-320)'81

Jerry Berkers
- Unterwegs(Pilz 2029131-6)'72

Between
- Einstieg(Wergo SM 1001)'71
- And The Waters Opened(Vertigo 6360 612)'73
- Dharma(Vertigo 6360 619)'74
- Contemplation(Wergo SM 1011)
- Hesse Between Music(EMI 1C 062-29 546)'75
- Stille Über Der Zeit(Wergo SM 1023)

Birth Control
- Same(Metronome MLP 15.366)'70
- Operation(Ohr OMM 56.015)'71
- Hoodoo Man(CBS S 65 316)'72
- Rebirth(CBS S 65 963)'73
- Live(CBS S 88 088)'74*2 lps
- Plastic People(CBS S 80 921)'75
- Backdoor Possibilities(Brain 0060.019)'76
- Increase(Brain 0060.066)'77
- Titanic(Brain 0060.149)'78
- B.C.Live '79
- Count On Dracula(Ariola 201 299-320)'80
- Deal Done At Night(Ariola 203 423-320)'81

Blackbirds
- No Destination(Saga FID 2113)'68*u.k.pressing
- Touch Of Music(OPP 5-34)'71

Toto Blanke's Electric Circus
- Friends(Bacillus BAC 2063)
- Same(Bacillus BAC 2048)
- Tales Of Tomorrow(Bacillus BAC 2054)

Blue Motion
- Same(Amos 4057)'80*original fold open cover.

Brainstorm
- Smile A While(Spiegelei 28 505-6U)'72
- Second Smile(Spiegelei 28 596-5U)'73

Arik Brauer
- Same(Polydor 2371 224)'71
- Alles Was Flugel Hat Fliect(Polydor 2437 221) '73
- Auf Einen 7 Streich(Polydor 2371902)'78

Brave New World
- Impressions On Reading Aldons Huxley(Vertigo 6360 606)'72

Bröselmachine
- Same(Pilz 2021100-2)'71

Michael Bundt *K.B.of Nine Day's Wander
- Just Landed Cosmic Kid(Offers OMP 7704 E)'77
- Neon(Hansa 200 349-320)'79
- Electri City(Rockport BL 810 H)'81

Peter Bursch & Die Bröselmachine
- Same(Xenophon 161.012)'75
- I Feel Fine(Spiegelei INT 160.610)'77
- Steig In Meine Welt(Pläne 88264)'81

Can
- Monster Movie(Music Fanctory SRS 001)'69
- Soundtracks(Liberty LBS 83 437)'70
- Tago Mago (United Artists UAS 29 211/12 XD) '71
- Ege Bamyasi(United ArtistsUAS 29 414)'72
- Future Days(United Artists UAS 29 414)'72
- Limited Edition(United Artists USP 103)'73
- Soon Over Babaluma(United Artists UAS 29 673) '74
- Landed(Hör Zu 1C 062-29600)'75
- Unlimited Edition(EMI 1C 148-29 653/54)'76
- Flow Motion(EMI 1C 062-31837)'76
- Saw Delight(EMI 1C 062-32 156)'77
- Out Of Reach(EMI 1C 066-32 715)'78
- Same(Free Bird Fly 7)
- Cannibalism(United Artists UDM 105-6)'80
- Incandescence(Virgin OVE D3)'81
- Delay(Spoon 012)'81
- Only You(Pure Freude PF 23)'82*cassette only
- Prehistric Future(Tago Mago TM 4755)'84 *cassette.

Michael Caroli
- Deluge(Spoon 016)'84

Choice
- Just A dream(Rocktopus 202 812-320)'80

Circus
- Same(ZYT 208)
- Movin'On (ZYT-211)
- Circus All Stars(ZYT)
- Fearless tearless & Evenless(Illuminatus 001) '80

Cluster
- Trikolon(Ruanpool Acoustic RPA 1)'71

Cluster
- Same(Philips 6305 074)'71
- Cluster 2(Brain 1006)'72
- Zuckerzeit(Brain 1065)'74
- Sowiesoso(Sky 005)'76
- Cluster & Eno(Sky 010)'77
- After The Heat(Sky 021)'78
- Grosses Wasser(Sky 027)'78
- Curiosum(Sky 063)

Cobraa
- Same(EMI 1C 062-29 507)'74

Code 3
- Planet Of Man(Delta Akustik 25 125-1)'74

Cornucopia
- Full Horn(Brain 1030)'72

Cravinkel
- Same(Philips 6305 055)'70
- Garden Of Loneliness(Philips 6305 124)'71

Crossfire
- Colourful Music(

Curly Curve
- Same(Brain 1040)'73
- Forgotten Tapes(Ökotopia Collector)

Holger Czukay
- Movies(Harvest 1C 064-45 754)'79
- On The Way To The Peack Of Normal(Welt Rekord 1C 064-46 400)'81

Les Vampyrettes(Electrola F667.226)'80
How Much Are They?(Island 12W196701)'81
Full Circle(Tri AW 25026)'82
Snake Charmer(Island 205-969-270)'83
Der Osten Ist Rot(Virgin V 2307)'84
Rome Remains Rome(Virgin V 2408)'86

Demon Thor
Anno 1972(United Artists UAS 293931)
Written In The Sky(United Artists UAS 294961)

Deuter Georg
Same(Kuckuck 2375 009)'71
AUM(Kuckuck 2375 017)'72
Celebration(Kuckuck 009 AS)'76
Haleakala(Kuckuck 2375 042)'77
Ecstasy(Kuckuck 2375 044)'79
Silence Is The Answer(Kuckuck 049/050 DX)'80 *2 lps
Sountrack(White Kuckuck)

Dies Irae
First(Pilz 2020114-7)'71

Dom
Edge Of Time(Melocord St-LP D001)'72

Dorian Gray
Idaho Transfer( )

Dragonfly
Same(Highfly 11982)'80

Dzyan
Same(Aronda AS 10.006)'72
Time Machine(Bacillus BLPS 19 161 Q)'73
Electric Silence(Bacillus BLPS 19 202 Q)'74

Eela Craig
Same(Prodisc 208 711)'71
One Niter(Vertigo 630635)
Hat Of Glass(Vertigo 6360638)
Missa Universalis(Philips 6360 639)
Virgin Oiland(Ariola 202 311 320)

18 Karat Gold
All-Bumm(United Artists UAS 29 559)'73

Einstein
First Principles(WEA 58 060)'79
Beware Of Germans(Teldec 6.24 544)'81

Electric Sandwich
Same(Brain 1018)'72

Eloy
Same(Philips 6305 089)'71
Inside(EMI 1C 062-29479)'73
Floating(EMI 1C 062-29 521)'74
Power And The Passion(EMI 1C 062-29 602)'75
Dawn(EMI 1C 062-31 787)'76
Ocean(EMI 1C 064-32 596)'77
Eloy Live(EMI 1C 164-32 934/35)'78*2 lps
Silent Cries And Mighty Echoes(EMI 1C 064-45 269)'79
Colours(EMI 1C 064-45 936)'80
Planets(EMI 1C 064-46 483)'81

Embryo
Opal(Ohr OMM 56.003)'70
Embryo's Rache(United Artists UAS 29 239)'71
Father,Son And Holy Ghost(United Artists UAS 29344)'72
Steig Aus(Brain 1023)'73
This Is Embryo(Metronome 2001 200.152)'73
Rocksession(Brain 1036)'73
We Keep On(BASF 2021865-3)'74
Surfin'(Buk 1722385-3)'74
Embryo Live(Schneeball 0003)'76
Bad Hearts And Bad Cats(Schneeball 0005)'76
Apo-Calypso(Schneeball 0010)'77
Embryo's Reise(Schneeball 0020) 2 lps
Karnataka College Percussion(Schneeball 0023)

Emergency
Same(CBS S 64 381)'71
Emergency Entrance(CBS S 64 928)'72
Get Out To The Country(Brain 1037)'73
No Compromise(Brain 1052)'74
Hideaway(Brain 0040.175)

Emtidi
Same(Thorofon ATH 109)'70
Saat(Pilz 2029077-8)'72

Epidermis
Genius Of Original Force(Kerston FK 65063)'77
Muster Burger(Tontraeger ToTr 8502)'82

Epitaph
Same(Polydor 2371 225)'71
Stop,Look And Listen(Polydor 2371 274)'72
Outside The Law(Billingsgate BG 1009)'74
Return To Reality(Brain 0060.185)'79
See You In Alaska(Brain 0060.274)'80
Epitaph Live(Brain 0060.385)'81

Eroc*drummer of Grobschnitt.
Same(Brain 1069)'74
Eroc 2(Brain 0060.007)'76
Eroc 3(Brain 0060.197)

Et Cetera
Lady Blue(Brain 0040.177)'72
Same(Global 6306 901)

Eulenspygel
2(Spiegelei 28 760-7U)'71
Ausschuss(Spiegelei 28 780-7U)'72

Exmagma
Same(Neusi B 204)'73
Goldball(Urus Disjuncta 000.009)'74

Faithful Breath
Fading Beauty(FB AA 696 3233)'73
Back On My Hill(Sky 038)'80
Rock Lions(Sky 055)'81
Live(Noise 08.4409)'86

Faust
Same(Polydor 2310 142)'71
So Far(Polydor 2310 196)'72
Tapes(Virgin VC 501)'73
IV(Virgin V 2004)'80
Return Of A Legend Music & Elsewhere(Recommended RR 25)'86

Flame Dream
Calatea(Philips 6326 067)'78
Elements(Virtigo 6326 976)'79
Out In The dark(Virtigo 6367)'81
Supervision(Vertigo 6435 1446)'82
Travaganza(Aura AUL 727)'84
8 On 6(Vertigo 826 905-1)'86

Floh De Cologue
Vietnam(Pläne S 33 101)'69
Fliessbandbabys Beatshow(Ohr OMM 56.000)'70
Rockoper Profitgeier(Ohr OMM 56.010)'71
Lucky Steik(Ohr OMM 2/56.029)'72
Geyer Symphonie(Ohr OMM 566.033)'73
Mumien(Pläne S 99 201)'74
Tilt!(Pläne S 99 202)'75
Rotkäppchen(Pläne K 20 905)'77
Prima Freiheit(Pläne G 90 239)'78
Kantate Für Rockband(
Rockoper Koslowski(

Flute & Voice
Imaginations Of Light(Pilz 2021088-2)'71

Edgar Froese
Aqua(Brain 1053)'74
Ypsilon In Malaysian Pale(BRain 1074)'75
Macula Transfer(Brain 0060.008)'76
Ages(Virgin 25 756)'77
Stuntman(Virgin 201 036-320)'79
Kamikaze(Virgin V 2255)'82
Solo 74-79(Virgin V-2139)'84

Frumpy
All Will Be Changed(Philips 6305 067)'70
Frumpy 2(Philips 6350 098)'71
By The Way(Vertigo 6360 604)'72
Frumpy Live(Philips 6623 022)'72 2 lps

Führs & Fröhling
Ammerland(Brain 0060.105)'78
Strings(Brain 0060.223)'79
Diary(Brain 0060.333)'81

Galaxy
Nature's Clear Well(Import 1019)

Gate
Live(Brain 0060.043)'76
Redlight Sister(Brain 0060.093)'77

Ax Genrich
Highdelberg(Happy Bird 5017)'75

Gift
Same(Telefunken SLE 14 680-P)'72
Blue Apple(Nova SDL 8002)'74

Gila
Same(BASF 2021109-6)'71
Bury My Heart At Wounded Knee(WB 46 234)'73

Gomorrha
Same(Cornet 15 038)'70
Trauma(Cornet/BASF 2020413-8)'72*English version of above.
I Turned To See Whose Voice It Was(Brain 1003)'72

Manuel Göttsching
E2-E4(ID 20.004)

Grobschnitt
Same(Brain 1008)'72
Ballermann(Brain 2/1050)'74*2 lps
Jumbo(Brain 1081)'75
Rockpommel's Land(Brain 0060.041)'77
Solar Music(Brain 0060.139)'78*live
Merry-Go-Round(Brain 0060.224)'79
Volle Molle(Brain 0060.291)'80
Illegal(Brain 0060.365)'81

Harald Grosskopf
Synthesist(Sky 043)'80

Guru Guru
OFO(Ohr OMM 56.005)'70
Hinten(Ohr OMM 556.017)'71
Kän Guru(Brain 1007)'72
Same(Brain 1025)'73
Don't Call Us(Atlantic ATL 50 022)'74
Dance Of Flames(Atlantic ATL 50 044)'74
Mani Und Seine Freunde(Atlantic ATL 50 157) *75
Tango Fango(Brain 1089)'76
Globetrotter(Brain 0060.039)'77
Live(Brain 0080.018-2)'78
Hey Du(Brain 0060.187)'79
Mani In Germani(Boots 06-29)

Peter-Michael Hamel
Hamel(Philips 6641 055)'70
The Voice Of Silence(Vertigo 6360 613)'72
Buddhidt Meditation East West(Harmonia Mundi 2922292-6)'75
Nada(Wergo SM 1013)'77
Colours Of Time(Kuckuck 2375 046)
Silence Beyond Time(Wergo SM 1023)
Bardo(TIS/Kuckuck 048)'81

Hölderlin
Hölderlinds Tram(Pilz 2021314-5)'72
Hoelderlin(Spiegelei 26 511-6U)'75
Clowns And Clouds(Spiegelei 26 605-6U)'76
Rare Birds(Spiegelei INT 180.602)'77
Live-Traumstadt(Spiegelei INT 180.602)'78
New Faces(Spiegelei INT 145.605)'79
Fata Morgana(Intercord INT 145.626)'81

Michael Hoenig
Departure From The Northern Wasteland(WB 56 464)'77

Ikarus
Same(Plus 4)'71

Indigo
Meer Der Zeit(S 100)'77
Same(
Herbstwind(Indigo SSU828)'81

Iskander
Ouverture(ST/PR 010581)'81
Bohéme 2000(Herkules ETS027)'82

Ivory
Sad Cypress(Jupiter 202 428 367)'80

Island
Pictures(Round Records 01001)'77

Jane
Together(Brain 1002)'72
Here We Are(Brain 1032)'73
Jane 3(Brain 1048)'74
Lady Jane(Brain 1066)'75
Fire,water,Earth And Air(Brain 1084)'76
Jane Live(Brain 0080.001-2)'76
Between Heaven And Hell(Brain 0060.005)'77
Age Of Madness(Brain 0060.124)'78
Waiting For The Sunrise(Brain 0040.147)
Sign No.9(Brain 0060.218)'79

Jane(Brain 0060.354)'80
Joy Unlimited
Overground(Polydor 2371 050)'70
Schmetterlinge(Pilz 2021090-1)'71
Reflections(BASF 2021686-1)'72
Minne(BASF 1722331-0)'74
Kalacakra
Crawling To Lhasa(K-ST-2000)'74
Kashmir
Je Suis(DL 3300)'79
Histoire Cruelle(KOLP 949)'82
Kedáma
At Sunrise Studio(Sunrise 076-1949)'76
King Ping Meh
Same(Polydor 2371 259)'71
Same 2(Zebra 2949 005)'72
Same 3(Zebra 2949 011)'73
Virtues And Sins(Nova 6.22 015)'74
Concrete(Nova 6.28 370 DP)'75
Same 6(Bacillus BAC 2046)'77
Klockwerk orange
Abrakadabra (CBS-S-8119)'75
Kluster
Klopfzeichen(Schwann AMS 511)'69
Kluster Zwei Osterei(Schwann AMS 512)'70
Kollektiv
Same(Brain 1034)'73
Kosmishe Musik
Same(Ohr 2/56.027)'73
Kraan
Same(Spiegelei 28 778-9U)'72
Wintrup(Spiegelei 28 523-9U)'73
Andy Nogger(Spiegelei 26 439-OU)'74
Kraan Live(Spiegelei Spiegelei 26 440-8Z/1-2)'75
Let It Out(Spiegelei 26542-1U)'76
Wiederhören(Harvest 1C 064-45 210)'78
Flyday(EMI 1C 064-45 210)'78
Tournee(EMI 1C 1C 064-45 931)'80
Kraftwerk
Same(Philips 6305 058)'70
Same 2(Philips 6305 117)'71
Ralf & Florian(philips 6305 197)'73
Autobahn(Philips 6305 231)'74
Radioaktivität(Klinglang 1C 062-82 087)'75
Transeuroparxpress(Klingklang 1C 064-82 306)'76
Die Mensch-Maschine(Klingklang 1C 058-32 843)'78
Computerwelt(EMI 1C 064-46 311)'81
Electric Cafe(EMI EMD 1001)'86
Kyrie eleison
Fountain Beyond Sunrise(Merlin 001277)'76
Düsseldof
Same(Nova 6.22 550)'76
Viva(Teldec 6.23 626 AO)'79
Individuellos(ALB 1017)'80
Langstne
Same(Düsselton TS 2737)'76
Lava
Tears Are Goin' Home(Brain 1031)'73
Lightshine
Feeling(Trefiton HS 1049 st)'73

Liliental
Same(Brain 0060.117)'78
Lieder Und Tänze(Folk Freak FF 1001)
Drei Winter/Vier Sommer(Folk Freak FF 1003)
Jetzt Ist Zeit Und Stunde Da(Folk Freak 1005)'81
Limbus 3
Cosmic Music Experience(CPM LP-S 001)'69
Limbus 4
Mandalas(Ohr OMM 56.001)'70
Lizard
In Cincert(No Number)'80
Lucifer's Friend
Same(Philips 6305 068)'70
...Where The Groupies Killed The Blues(Vertigo 6360 602)'72
I'm just A Rock 'n'Roll Singer(Vertigo 6360 611)'73
Banquet(Vertigo 6360 618)'74
Mind Exploding(Vertigo 6360 633)'76
Good Time Warrior(WEA ELK 52 087)'79
Sneak Me In(WEA ELK 52 203)'80
Mean Machine(WEA ELK 52 298)'81
Madison Dyke
Zeitmachine(Racket RRK 15.001)'77
Lenny Mac Dowell
Flexible(EMI 1C 064-45 736)'79
Flying Torso(Ohrwurm O.W.2-12-48)'81
Balance Of Power(Biber BI 6230)'84
The Farthest Shore(Biber BI 6280)'86
Loter Meid
Mensch,Dieser Klaus!(Philips 6305 283)'75
Einbahnstr.(Atlantic ATL 50 447)'77
Sonstinges(Global 0063.209)'80
Message
The Dawn Anew Is Comin'(Bacillus BLPS 19 081)'72
From Books And Dreams(Bacillus BLPS 19 159 Q)'73
Same(Nova 6.22 213)'75
Synapse(Nova 6.22 513)'76
Using The Heard(Brain 0060.078)'77
Astral Journeys(Brain 0060.165)'78
Metropolis
Same(Pan 87 439)'74
Milestone
Same(WM 20012)
Emigration(CBS 65 738)'73
Midnight Circus
Same(Bacillus BLPS 19 108)'72
Moebius & Plank
Rastakraut Pasta(Sky 039)'80
Material(Sky 067)'81
Anthony Moore
Pieces From The Cloudland Ballroom(Polydor 2 310 062)'71
Secrets Of The Blue Bag(Polydor 2310 179)'72
Reed Whistle & Sticks(Polydor 2310 250)'73
*promo only.
Out(Virgin)*promo only
Flying Doesn't Help(HMG98)

Morpheus
Rabenteuer(34 705)'76
My Solid Ground
Same(Bacillus 6494 008)'71
Mythos
Same(Ohr OMM 556.019)'71
Dreamlab(Kosm.Kur.KM 58.016)'75
Strange Guys(Venus V 78 MY-F 1003)'77
Concrete City(Venus V 79 MY-B 1012)
Quasar(Sky 046)'80
Grand Prix(Sky 066)'81
Nautilus
20000 Miles Under The Sea(NLP 7801)'78
Space Storm(
Necronomicon
Tips Zum Selbstmord(Best Prehodi 60.634)'72
Neu
Same(Brain 1004)'71
Neu 2(Brain 1028)'73
Neu '75(Brain 1062)'75
Neuschwanstein
Battlement(Racket RRK 15 002)
Nine Day's Wonder
Same(Bacillus 6494 004)'71
We Never Lost Control(Bacillus BLPS 19 163 Q)'73
Only The Dancers(Bacillus BLPS 19 200 Q)'74
Sonnet To Billy Frost(Bacillus BLPS 19 234)'76
Nosferatu
Same(Vogue LDVS 17 178)'70
Novalis
Banished Bridge(Brain 1029)'73
Same(Brain 1070)'75
Sommerabend(Brain 1087)'76
Konzerte(Brain 0060.065)'77
Brandung(Brain 0060.094)'77
Vielleicht Bist Du Ein Clown(Brain 0060.164)'79
Flossenengel(Teldec 6.23 980)'80
Augenbliche(Teldec 6.24 529 AP)'81
Visionen(Ahorn 811 535-1)
Ocean
Melody(Bellaphon TSB 507/81)'81
Double Vision(LP 514)'82
Octopus
The Boat Of Thoughts(Sky 009)'76
An Ocean Of Rocks(Sky 016)'78
Rubber Angel(Sky 035)
Hart Am Rand(Rockport RO 003)'81
Odin
Same(Vertigo 6360 608)'72
Oktober
Uhrsrung(Trikont US 0024)'76
Die Pariser Kommune(Antagon ALP 3211/12)'77
Himmel Auf Erden(Eigelstein ES 2006)
Opus
1(Peak NR 8381)
Vorsicht Zerbrechlich(Teldec 66.23 632)
Organisation
Tone Float(RCA-Victor SF 8111)'70
Os Mundi

Latin Mass(Metronome MLP 15.381)'70
43 Minuten(Brain 1015)'72
Ougenweide
Same(Zebra 2949 009)'73
All die Weil Ich Mag(Polydor 2371 517)'74
Ohrenschmaus(Polydor 2371 700)'75
Eulenspiegel(Polydor 2634 714)'76
Ungezwungen(Polydor 2634 091)'77
Fryheit(Polydor 2437 576)'78
Ousflug(Polydor 2413 120)
Noch Aber Ist April(Polydor 2372 094)'81
Out Of Focus
Wake Up!(Kuckuck 2375 006)'70
Same(Kuckuck 2375 010)'71
Four Letter Monday Afternoon(Kuckuck 2640 10 1)'72
Pancake
Roxy Elephant(Offers OMP 7602)'75
Out Of The Ashes(Blubber Lips BL 801 H)'78
No Illusions(
Parzival
Legend(Telefunken SLE 14 635-P)'71
Barock(Telefunken SLE 14 685-P)'72
P'Cook
The Prephet(WEA/IC 58 178)'80
Incognito(IC/KS 80.005)'81
Pegasus
Seems A Long Time Gone(CPK 1/75)'75
Pell Mell
Marburg(Bacillus BLPS 19 090)'72
From The New World(Philips 6365 193)'73
Rhapsody(Venus VB 76-1PMa/b)'76
Only A Star(Venus V 78 PM-F 1006)'78

Popol Vuh
Affenstunde(Liberty LBS 83 460)'71
In Den Gärten Pharaos(Pilz 2021276-9)'72
Hosiana Mantra(Pilz 2029 143-1)'73
Seligpreisung(Kosm,Kur.KM 58.009)'73
Einsjäger & Siebenjäger(Kosm. Kur.KM58.017)'75
Hohelied Salomos(United Artists UAS 29 781)'75
Letzte Tage,Letzte Nächte(United Artists UAS 29 916)'76
Aguirre(French Cosmic 840.103)'76
Yoga(PDU pld.SQ 6066)'77
Herz Aus Glas(Brain 0060.079)'77
Brüder Des Schattens,Söhne Des Lichts(Brain 0060.167)'78
Nosferatu(Egg 900.578)'78
Die Nacht Der Seele(PDU pld A7014)'78
Sei Still,Wisse Ich Bin(IC KS 80007)'81
Agape Agape(Uniton U015)'83
Spirit Of Peace(CKADA 001)'85
Poseidon
Same(
Prof.Wolfff
Same(Metronome MLP 15.422)'72
Psi
Horizonte(Bacillus BAC 2049)
Lutz Rahn

Solo Trip(Teldec 6.23 663 AO)'78

Ramses
- La Leyla(Sky oo2)'75
- Eternity Rise(Sky 020)'78
- Light Fantastic(Sky 060)'81

Reaction
- Same(Polydor 2371 251)'72

Achim Reichel & machine
- Die Grune Reise(Polydor 2371 128)'71
- Echo(Polydor 2633 003)'72
- A.R.3(Zebra 2949 066)'73
- A.R.4(Zebra 2949 008)'73
- A.R.5-Autovision(Zebra 2949 016)'74

Achim Reichel
- Erholung(Brain 1068)'75
- Dat Shanty Alb'm(Nova 6.22 535)'76
- Klabautermann(Nova 6.23 010)'77
- Regenballade(Teldec 6.23 431)'78
- Heisse Scheibe(Teldec 6.23 741 AP)'79
- Ungeschminkt(Teldec 6.24 270 AP)'80
- Blues In Blond(Ahorn 6.24 882 AP)'81

Release Music Orshestra
- Life(Brain 1056)'74
- Garuda(Brain 1072)'75
- Get The Ball(Brain 1083)'76
- Beyond The Limit(Brain 0060.115)'76
- News(Brain 0060.194)'79

Roedelius
- Durch Die Wüste(Sky 014)'78
- After The Heat(Sky 021)'79*with Eno
- Selbstportrait(Sky 028)'79
- Selbstportrait vol.2(Sky 040)'80
- Selbstportrait Vol.3(Sky 044)'80
- Lustwandel(Sky 058)'81
- Wenn Der Südwind weht(Sky 064)'81
- Jardin au Fou(Egg 90 291)*french press.only

Michael Rother
- Flammende Herzen(Sky 007)'76
- Sterntaler(Sky 013)'77
- Katzenmusik(Sky 033)'79

Roussea
- Retreat(IL 7009)
- Flower In Asphall(L8003)

Rufus Zuphall
- Weiss Der Teufel(Good Will GLS 10.001)'69
- Phallobst(Pilz 2021099-5)'71

Sahara
- Sunrise(Pan 87 306 XOT)'74
- For All The Clowns(Ariola 89 377 OT)'76

Sameti
- Same(Brain 1020)'72
- Hungry For Love(WB 56 074)'74

Sand
- Golem(Delta Akustik 25-128-1)'74

Irmin Schmidt
- Film Music(Spoon 003)'80
- Toy Planet(Spoon 011)'81
- Film Musik 2(Spoon 013)'81

Second Movement
- Blind Man's Mirror(Castle CAS 1003)'76

Serene
- first(Lava 81 001)'81

SFF
- Symphonic Pictures(Brain 0060.010)'76
- Sunburst(Brain 0060.068)'77
- Ticket To Everywhere(Brain 0060.173)'79
- Open Doors Sunburst(Brain 0060.173)

Shiver
- Walpurgis(Maris 20 501)'69

Space Box
- Same(private press)

Damo Suzuki
- In The Night(Fünf Und View 216 EFA12-4502)'84

Conrad Schnitzler
- Canrad & Sohn

Konrad Schnitzler
- Schwarz(KS 1001)'71
- Blau(KS 1002)'72
- Rat(KS 1003)'73
- Con Aus Berlin(Egg 66.052)'76*French press only
- Contempora(
- Con3(Sky 061)'81

Eberhard Schoener
- Destruction Of Harmony
- Die Schachtel(Reprise
- A Day's Lullaby(Reprise REP 44 143)'71
- Meditation(Ariola 87 131 iU)'73
- Windows(EMI 1C 062-95 634)'74
- Bali-Agung(EMI 1C 062-29 647)'75
- Trance-Formation(Harvest 1C 064-32 526)'77
- The Book(Ariola 28 706)'77
- Bastien Und Bastienne(EMI 1C 065-30 231)'77
- Der Schauspieldirektor(EMI 1C 065-30 230)'77
- Flashback(EMI 1C 066-32 839)'78
- Video Magic(EMI 1C 064-45 234)'79
- Events(EMI 1C 064-45 879)'80
- Same
- Time Square(EMI 1C 064-46 049)'81

Klaus Schulze
- Irrlicht(Ohr OMM 556.022)'72
- Cyborg(Kosm.Kur.KM2/58.005)'73
- Blackdance(Brain 1051)'74
- Picture Music(Brain 1067)'74
- Timewind(Brain 1075)'75
- Moondawn(Brain 1088)'76
- Mirage(Brain 0060.040)'77
- Body Love(Brain 0060.047)'77
- Body Love 2(Brain 0060.097)'77
- X(Brain 0080.023)'78
- Dune(Brain 0060.225)'79
- Live(Brain 0080.048)'80
- Dig It(Brain 0060.353)'81
- Audentity(Innovative Communication KS 80.025 /26)'83
- Dziekuje Poland Live'83(IC KS80.040/41)'83
- Angst(Soundstrack)(Inteam ID 20.003)'84
- Interface(Brain 827 673-1ME)'85
- Dreams(Brain 831 206-1)'86

Sword
- No Remains(MUSK mp 824)'83

Tantalus
- Sitting IN A Dream(Srilanca 2280)

Tangerine Dream
- Electronic Meditation(Ohr OMM 56.004)'70
- Alpha Centauri(Ohr OMM 56.012)'71
- Zeit(Ohr OMM 2/56.021)'72
- Atem(Ohr OMM 556.031)'73
- Phaedra(Virgin 87 751)'74
- Rubycon(Virgin 88 754)'75
- Ricochet(Virgin 89 679)'75
- Stratosfear(Virgin 28 146)'76
- Encore(Virgin 25 495)'77
- SorcererMCA 62-085)'77
- Cyclone(Virgin 25 843 XOT)'78
- Force Majeure(Ariola 200 347-320)'79
- Tangram(Ariola 202 169-320)'80
- Thief(Ariola 203 472-320)'81
- Exit(Ariola 203 998-320)'81
- White Eagle(Virgin V-2226)'82
- Hyperborea(Virgin V-2292)'83
- Logos(Virgin V 2257)'83
- Poland(Jive HIP-22)'84
- Flash Point(EMI LP25)'85
- Firestarter(MCA MCF-3223)'85
- Le Parc(Jive HIP-26)'86

Think
- Variety(Menga MEL 3301)'73

Thirsty Moon
- Same(Brain 1021)'72
- You'll Never Come Back(Brain 1041)'73
- Blitz(Brain 1079)'75
- A Real Good Time(Brain 0060.009)'81
- Starchaser(Brain 0060.009)'81

Tibet
- Same(Bellaphon BBS 2581)'78

Tiger B.Smith
- Tiger Rock(Vertigo 6360 610)'72
- We're The Tiger Bunch(Bacillus BLPS 19 176Q) '74

To Be
- Same(Brain 0060.053)'76

Tomorrow's Gift
- Same(Plus 1+2)'70 2 lps
- Goodby Future(Spiegelei 28 515-5U)'72

Uli Treste
- Spacebox(SP 1)

Tritonus
- Same(BASF 1722384-1)'75
- Between The Univers(BASF CC 229467)'76

Triumvirat
- Mediterranean Tales(Harvest 1C 062-29 441)'72
- Illusions On A Double Dimple(Harvest 1C 062 29 491)'74
- Spartacus(Harvest 1C 062-29567)'75
- Old Loves Die Hard(Hör Zu 1C 064-29 567)'76
- Pompei(Harvest 1C 064-32 446)'77
- A La Carte(EMI 1C 064-45 184)'78
- Russian Roulette(EMI 1C 064-45 834)'80

Troya
- Point Of Eruption(Förderturm T 5476)'74

Twenty Sixty Six And Then
- Reflections On The Future(United Artists UAS 29 314)'72

Virgo
- Same(Vertigo 6360 624)'75
- Four Seasons(Bacillus BAC 2047)'77
- Lutello(Bacillus BAC 2053)

Virus
- Revelation(BASF CRC 015)'71
- Thoughts(Pilz 2021102-9)'71

Adelbert Von Deyen
- Atmosphere(Sky 041)'80 3 lps
- Eclips(Sky 062)'81
- Nordborg(Sky 029)
- Sternzeit(Sky 019)

Wallenstein
- Blitzkrieg(Pilz 2029064-6)'72
- Mother Universe(Pilz 2029113-8)'72
- Cosmic Century(Kosm.Kur.KM 58.006)'73
- Stories,Songs & Symphonies(Kosm.Kur.KM 58.0 14)'75
- No More Love(RCA PL 30 010)'77
- Charline(RCA 26.22 078)'78
- Blue Eyed Boys(RCA PL 30 061)'79
- Fräuleins(EMI 1C 064-45 932)'80
- Ssssstop(EMI 1C 064-46 307)'81

Walpurgis
- Queen Of Saba(Ohr OMM 556.023)'72

Waniyetula
- Same(KK 2811-018)'83

Welcome
- Same(EMI Columbia 73 C058-33869)

Wind
- Seasons(Plus 3)'71
- Morning(CBS S 65 007)'72

Witthüser & Westrupp
- Lieder Von Vampiren,Nonnen Und Toten(Ohr OMM 56.002)'70
- Trips Und Träume(Ohr OMM 56.016)'71
- Jesuspilz(Pilz 2021098-7)'71
- Bauer Plath(Pilz 2029115-4)'72
- Live '68-'73(Kosm.Kur.KM 2/58.004)'73

Xhol
- Hauruck(Ohr OMM 56.014)'70
- Motherfuckers GmbH & Co.KG(Ohr OMM 556.024)

Yatha Sidhra
- A Meditation Mass(Brain 1045)'74

Zarathustra
- Same(Metronome MLP 15.421)'71

Stefan Zauner
- Narziss(Ariola27 026 OT)'76
- Prism & Views(Vinyl 6.23 451 AO)'77

Zomby Woof
- Riding On A Tear(Jupiter 25 231 OT)'77

Zweistein
- Trip Flipout Meditation(Phlips 6630 002)'70

4

SPAIN
PORTUGAL
HOLLAND
BELGIUM
GREECE

プログレッシヴ・ロックに関してだけかも知れないが、ヨーロッパ（西欧）の国々でも、ここで紹介するオランダ、ベルギー、スペイン、ギリシャ、ポルトガルといった国々はいささか地味な印象を受けてしまう。周囲に腰をすえているドイツ、フランスといった大国が、評価の良きにしろ悪きにしろ関係なく、定期的（？）に多種のアーティストを放出しているのに比べ、あまりにも限られたアーティストとしか接する機会がないからである。しかし、これらの国では意外と洗練されたアーティストが見つかることも多いような気がする。大国のアーティストに負けてなるものぞと熱い気迫をこめたサウンドで語りかけてくる、素晴らしきアーティスト達を紹介してみたい。

オランダという国はイギリスと近接しているため、かなりブリティッシュ・ロックの影響が強くイギリスでも成功を修めたアーティストが数多い。代表格となるとやっぱりフォーカスであろう。このフォーカス（ソロ作品も多数）、クラシカル・ロックのエクセプションとトレース（リック・ヴァン・ダー・リンデン）、後にキャメルに参加したトン・シャーペンジールのカヤック、そしてアース＆ファイアー、フィンチあたりがオランダ・ロックの中心的な存在といえるだろう。個人的にはアース＆ファイアーのジェラルド・ケルツのメロトロン・ワークに非常に魅力を感じたものだ。他では泣きのギターが印象的なアルカスも良いバンドだ。キャメルとピュルサーをミックスしたようなバンドであるということで、当時はかなり話題になった。それ以後、注目に値するグループは久しく登場しなかったが、昨年素晴らしいグループが２組もデビューした。コーダとディファレンシスである。未聴の方は、ぜひともその研ぎ澄まされたサウンドを味わってほしい。

オランダの隣りに位置するベルギー。オランダ同様ブリティッシュ色が強いがオランダがクラシカルで陽的なサウンドであるのに対し、ベルギーは少々陰うつな叙情的サウンドを持つアーティストが多い。

代表的なグループとなるとトップはマキャベルあたりか。しかし後期の作品はロックンロールで聴くにしのびない。イエス・スタイルの変則リズムとコーラスを多用したバンザイ、ジェネシス・スタイルのボーカルでじわじわ盛り上げるイソポダの２枚の作品、美しいジャケットの印象的なプレリュード等はベルギー・シンフォニックの代表格といえるだろう。再発されたフライトも注目に値する。他にはチェンバー・ロックの代表格ジュルベルヌがいる。メロトロンを使用したドラゴンは、かなりブリティッシュ色が強い。サーケルも同様。

エレクトロニクス作品としては、ヴァルター・クリスチャン・ロートの作品が出色の出来を見せている。

フラメンコの国、スペインといえばトリアナ、トリアナといえばスペインといえるぐらいスパニッシュ・ロック界ではトップ・クラスの人気を誇ったのがトリアナだ。私もユーロ・ロックを本格的に聴き始めて、最初に気に入ったアーティストが彼らであるだけに、個人的な思い入れも強い。以前イギリスにカルメンと名のる、ずばりフラメンコ・ロックのグループが存在したが、フラメンコ特有の情熱的なサウンドを見事にドラマチックなロック・サウンドに消化しきったのは、やはりトリアナであると断言できるだろう。特に 1st と 2nd の完成度の高さは甲乙つけがたいものであった。しかし残念なことに後期の作品はポップ色が強くなり、リーダーの交通事故死も重なり、かなり人気を無くしてしまったようだ。グラナダは、テクニックではトリアナ以上だろう。特に 1st で聴かれる壮大なメロトロンやバイオリン、フルートを多用したサウンドは圧巻である。以前、国内盤も出たカナリオス、ハイ・トーンのなめらかなボーカルで洗練されたシンフォニック・サウンドを聴かせるイトイス。ロジャー・ディーン風のジャケットに包まれた、キャメル・タイプのゴシック。少々荒削りな部分もあるがハード・プログレの代表格ブロッケ、エドアルド・ボルトの 1st。シンフォニック・ジャズ・ロックのイ マン。 現在も活動を続けるエレクトロニクス・グループのニューロニューム。いずれもスパニッシュ・シーンを語るには、欠かすことの出来ないアーティストばかりだ。

地中海側に位置する国、ギリシャのロックというと、どうしてもソクラテスとバンゲリスかアフロディテス・チャイルドの話が先に出てしまうが、バンゲリスの一連のシンセ・アルバムは別として、「フォス」や「666」が高い評価を得ているのに対し、彼らの他の作品が話題にならないのには疑問が残る。あまりプログレ色の強くない、 ボーカル中心の作品だからかもしれないが、個人的には評価してやりたいと思っている。アフロディテスのメンバーだったルカス・シデラスのグループ、イプシロンも同様である。「666」発表後、完全なポップ・シンガーになってしまったデミス・ルソスが82年に発表した「Attitudes」はアランフェスをアレンジした壮大なクラシカル・ロックが収録された作品で、最近のギリシャではデメトリス・パパデミトリウーの 2nd と並ぶ秀作だ。大物ばかりの紹介になってしまったが、他には主としてフランスで活動したアクシス、いかにもプログレ然としたジャケットの印象的な PLJ バンド、アポカリシプス等がいる。

さて最後にポルトガルであるが、今まで紹介してきた国の中では最も情報量の少ない国だ（前号参照）。一番最初に我が国で知れわたったのはジェネシス・スタイルのグループ、タントラじゃないかと思う。MARQUEE を通じて知れわたったジョセ・シッドの「10000Anos～」は説明不要と思う。その他、どれ位のアーティストが、どの位のレベルの音楽を聴かせてくれるのかは私もよく分からないのが現状である。

本木利英

GRANADA　TRIANA

フランコ将軍の死と前後し、それまで抑圧されていたロック、あるいは広義の芸術活動は74年を境に台頭してきた。スパニッシュ・プログレッシヴ・シーンの幕明けである。沢山のグループ達がレコード・デビュウするが我々日本人にとってそれらの中で最も印象が深いのが共に75年にデビュウしたグラナダとトリアナであろう。

グラナダには3枚のアルバムがある。これらのアルバムはそれぞれ印象の違うサウンドを有するが、その変遷はリーダーのカルロス・カルカモの軌跡である。75年にリリースされたファースト・アルバム「HABLO DE UNA TIERRA」ではスパニッシュ・ロックの可能性と大いなるスペインの光と影を感じることができる。カルロス・カルカモはこのアルバムでフルート、ヴァイオリン、キーボード、ギターetc. と多芸なところを聴かせてくれるが、素朴なスペインの田舎町を想起するようなストレートな情熱が表現されている。演奏は決して秀れているとはいい難いが、悲しみが透けて見える人間味のある素晴らしいアルバムである。A面ラストの秀曲が彼等の位置を最も端的に表現していると思う。孤独なメロトロンのイントロダクションにフルートが舞い、街角をすりぬける秋風のようにアコースティック・ギターが響き渡る。セカンドはスペインの新しい波を象徴するかのように「ESPAÑA, AÑO 75」(イスパナ――1975年)と題され、76年にリリースされた。マキシモ・モレロの描いた美しいジャケットに包まれたこのアルバムでは、素朴さは後退し、トリッキーで雄大なキーボード群を配した幻想絵巻を繰り広げている。視覚的な効果と物語性を重視したサウンドを聴いていると、あたかもジャケットに描かれた幻想物語に身をすい込まれてしまうかのようである。その2年後、ラスト・アルバムとなった作品 VALLE DEL PAS が発表される。カルカモ以外のメンバーは一新され、オーケストラを導入するなど意欲的な試みが成されている。カルカモの心には音楽家としての進歩というものが大きな命題として横たわっていたに違いない。サウンド構成は前2作に較べるとはるかに緻密に、複雑になっている。この時点ではオーケストラのアレンジがもうひと息であるが、カルカモの音楽家としての進歩は手に取るように理解できる。音楽的見地から見れば彼等の最高作といわざるをえまい。しかし一方作品自体の主張が曖昧であり、聴き終えた後に残るインパクトに乏しい。これら3枚のアルバムに甲乙をつけることは非常に難しい。詩情の点ではファーストが最高であり、セカンドはコンセプトと表現力が程良く均衡を保つ好作品であり、音楽的水準をみるならばサードが最高である。どのアルバムを取るかは全くリスナーの自由であり、ここではカルロス・カルカモの自らの信ずる道を歩み続けたその姿勢を強調しておきたい。

一方、セヴィーリア出身のトリアナは74年、スペインのロックに新風を吹き込むべく始動した。彼等の音楽性も又、スペインの香りをプログレッシヴ・ロックへと投じたオリジナリティあふれるものであった。基本的にドラムス、キーボード、ギターという変則的なスタイルを続けたグループで、その編成の類似性から「スペインのフォルムラ・トレ」などと呼ばれたこともあった。75年にリリースされた彼等のファースト・アルバムでは、セヴィリアの古色蒼然たる街並を想わすような、フラメンコ・ギターと哀愁あるキーボード・プレイ、そしていかにもスパニッシュ然とした歌い回しのヴォーカルが融合され、素晴らしい世界を創り出した。アルバム・カヴァーはマシキモ・モレロで、カヴァー自体のイラストレイションは悪くないが、いささか彼等のサウンド・イメージとくい違っている点が彼等のサウンドを世界に紹介する際、マイナスになったような気もする。77年にはセカンド「HIJOS DEL AGOBIO」をリリース。よりシンフォニックな味付けがなされ、基本的姿勢は前作と同じであるが、彼等のアルバム中、一番シンフォニックと呼ぶにふさわしい作品となった。79年にはサード・アルバム「SOMBRA Y LUZ」をリリース。この作品は彼等のターニング・ポイントとなった作品といえるだろう。前作までのスペイン然としたサウンドが、より洗練され、よりインターナショナル志向を帯びてきている。演奏家の思想としてはあきらかに進歩したものであるが、スペイン特有の哀愁は減退している。基本的な音楽観の相違によってある人には彼等の最高作ともなりうるだろうし、ある人には彼等のスタイルの変化にいささか物足りない想いを与えることであろう。以後「UN ENCUENTRO ('80)」,「TRIANA ('81)」とアルバムをリリースしているが、プログレッシヴ・ロックという範ちゅうで語る以上、徐々にヴォルテージは低下していってしまう。やはり、70年代後半というスパニッシュ・ロックとして熱い時代に製作された初期3枚のアルバムが、トリアナにとっても我々にとっても、良い意味でスペインの持つ歴史と若い、新しい芸術意欲に燃えた心、あるいは陽の沈む国スペインの哀愁が創り出した好アルバムであるのだろう。スパニッシュ・ロックの雄―トリアナである。

山崎尚洋

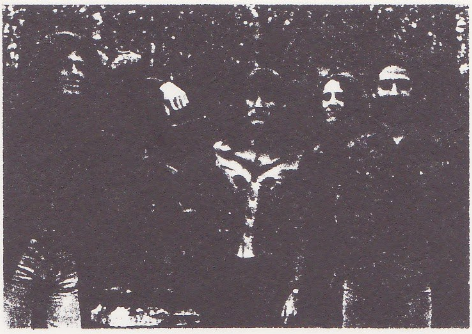
FINCH

オランダの興味深いインストルメンタル・グループのフィンチは、一般には、75年にリリースされたアルバム「グローリー・オブ・ジ・インナー・フォース」でデビューしたと言われているが、それ以前に「フィンチ」というタイトルのアルバムを発表しているという噂もある。現物を見たわけでも聞いたわけでもないので、とりあえず否存在ということで話を進めることにする。

アメリカでもリリースされたこのアルバムは、全曲ギタリストのヨープ・ヴァン・ニムヴェゲンのペンによるものである。であるからヨープが（表面上の）リーダーだろうと想像できる。メンバーは、ヨープ（g）、クレーム・デテルマイヤ（kb）、ベール・クラーセ（ds）、ペーター・フィンク（b）の4人。ペーターは、フィンチ以前にもフォンテッサというグループで活動しており、おそらく、プロ・ミューシャンとしての経歴は、彼が一番長いだろう。ところでこのアルバム、イメージとしてはフォーカス（ハンバーガー・コンチェルト以前）に代表されるコンチネンタル・クロスオーバーの傾向が強く、ギターの音色及びフレージングは、イアン・アッカーマンに近いものを感じさせる。蛇足だが、この時期のオランダのギタリストの多くは、アッカーマンに似ている。トレースのヤープ・ヴァン・エイクしかり、アース＆ファィアーのクリス・ケーツしかり。ジャケットには星座のサークル（星占いの）が描かれている。

同75年、ヨープはセカンド・アルバムのために、何曲か作曲し、バンドでリハーサルを繰り返した。夏から秋にかけてのことである。そしてアルバム・コンセプト決定後の翌年 1月、レコーディングにかかる。

セカンド・アルバムは「ビヨンド・エクスプレッション」と名付けられ、内臓のようなものが宇宙空間で燃えている（非常に抽象的な）ジャケットで発売された。メンバーの変更はなし。音の方は、よりハード・ロックに近い演奏となり、リッチー・ブラックモアがフュージョンを演っているような迫力のあるものとなっている。ファースト・アルバムが4曲しかなかったのが、このセカンド・アルバムではさらに減って（大作指向が度を増して）3曲になっている。ヨープの大作指向はこの後も続き、それはサード・アルバムで実証されることになる――それはさておき、彼らは、この年（76年）の夏頃までアルバムのプロモーションのためのギグを行っている。そして、秋から冬にかけて作曲活動というスケジュールなのだが、実はそれ以前にメンバー・チェンジがあった。キーボードがアド・ヴァンメスに、ドラムスがハンス・ボスボームにそれぞれ替っている。彼らはこのメンバーで翌年（77年）1月、ギグを行い、この時には、すでにサード・アルバムに収録される新曲まで演奏している。



さて、ギグとレコーディングのためのリハーサルを繰り返した後、彼らはサウンドプッシュ・スタジオで録音を開始する。プロデューサーは、それまでのロイ・ベルトマンからサンディー・ロバートン（をイギリスから呼び寄せて）に替った。そして、マスターリングもロンドンのパイ・スタジオで行った。これは、彼らのイギリス制覇を意図したものである。現実に新進レーベルのロックバラ・レコードより、リリースされることが決定しており、オランダ・バブル盤は逆輸入の形でリリースされている。

このサード・アルバム「ガレオンズ・オブ・パッション」は、A面3曲、B面1曲（組曲）の計4曲。それまではヨープが全ての曲を書いていたが、今回、ペーターとの共作（A－2）、アドの作（A－3）がそれぞれ1曲づつ収録されている。これは、ヨープを盛り立ててきたペーター（影のリーダー）の容認力にキ裂が生じたものであり、以後、ヨープの天下は次第に薄れ、ついにグループは崩壊することになる。さて、このアルバムは、前2作とは趣きが異なり、全面ギター弾きまくりは消えてなくなり、キーボードとギターを中心としたアンサンブルとなっている。ハードなギターが引込み、シンフォニックなキーボードが前にせり出してきた訳だ。この年、イギリスでは、ルネッサンスが「ノヴェラ」を、キャメルが「レインダンス」を、ジェネシスが「静寂の嵐」を、エニッドがセカンドを発表している。プログレ衰退期に、「これぞプログレ」で参入していったフィンチ、結果は始めから見えていたのではあるまいか。このサード・アルバムを最後に、フィンチの名は聞かれなくなる。ペーターはプロデューサーとして、バンス他のアルバムで活躍している。

中藤正邦

EARTH & FIRE

アース&ファイアーの結成は、1970年1月頃のことである。オランダのロック界ではパイオニア的存在のゴールデン・イアリングに見出され、同じレッド・バレット・プロダクションに所属する。当初は、ゴールデン・イアリングのコンサート・ツアーの前座をつとめていたが、デビュー・シングル「シーズン」のヒットにより、一躍人気グループとなる。因に「シーズン」は、ゴールデン・イアリングのギタリスト、ゲオルグ・クーイマンスの曲である。その後、2〜3曲のヒットを放ち、71年春、ファースト・LPが発売される。メンバーは不動の5人――ジャーネイ・カーグマン（vo），クリス・ケーツ（g），ジェラルド・ケーツ（org），ハンス・ツィーク（b），セース・カリス（ds）である。御存知とは思うが、クリスとジェラルドは双子の兄弟である。このLPは、基本的にポップ・ロックだが、ペーパー・マッチの形態をした変形ジャケットであり、さりにイギリス盤はロジャー・ディーンによる隠し絵の変形ジャケット、というプログレ・ファンにとっては興味深い装丁となっている。



同年、ドラマーがトン・ヴァン・ダー・クレイに替わり、早くもセカンド・アルバムを発表する。彼らはこのアルバムで激変し、素晴しいプログレッシヴ・ロック・バンドとなっていた。そしてプロデューサーもそれまでのフレッド・ハーイェンにさらにヤープ・エッゲルモントが加わった。ヤープはこのアルバムを皮切りに、5枚目までのLPをプロデュースすることになる――つまり、プログレファンの耳に耐え得る内容のものは、全て彼のプロデュースである。真黒地に黄金色でグループ名と白抜き文字の歌詞、というシンプルな装丁だが、二ツ折りジャケットを開くと、中には目もくらまんばかりの華やかなイラスト。現在はシングル・ジャケットになっており、味も素気もない。ドイツ盤初回プレスは黒字が黄色地になっており、金文字も赤になっている。

73年になるとサード・アルバムがリリースされるが、前作と同様に片面は組曲のみ、という大作指向である。彼らのもつ作曲／編曲能力はここにきて、十二分に発揮されている。カバー・デザインも前作と同じエリック・ヴァン・ダー・ウェイデンである。オリジナルは二ツ折りジャケットで、中にも表のイラストと同様のものがプリントされている。歌詞カード付き。現在はシングル・ジャケットで歌詞カードもついていない。尚、イギリス盤は、稲妻の黄色っぽいジャケット。こちらも初回はラミネート。

2年後の75年、4枚目のアルバムが発表されるが、ベーシストがテオ・ハーツに替わり、デザインもCREAMが担当するようになって彼らのサウンドも安定の極みに至る。そしてそのままのスタッフ陣で5枚目のアルバムが発売される(77年)。プログレッシヴ・ロック・バンドとしてのアース&ファイアーの経歴はここまでで、以後はどんどんポップ性を加味していく。

79年には、6枚目のアルバムが発売されるが、この頃には既にレッド・バレット・プロダクションとの契約が終了しており、新たにカヤックと同じ事務所に所属して、レコード会社もヴァーティゴへと移動する。この時には、ベーシストがバート・ルイター（元フォーカス）になり、ドラマーもアブ・タムベールに替っている。このアルバムではカヤックのメンバーがゲスト参加しており、外にもフレッド・リーフラング（sax／元パンプキン）が顔を見せている。4枚目からこの6枚目までデザインを担当したCREAMは、カヤックのデザインも担当しているチームで、アース&ファイアーは、ジャケットの良さと音の素晴らしさが見事にマッチしている数少ない例であった。時に4枚目のジャケットは秀逸である。

既にポップになってしまったアース&ファイアーから唯一人プログレッシヴなセンスをもっていたクリス・ケーツが脱退し、81年に7枚目のアルバムがリリースされる。ギターはロニー・メイヤーズ。翌82年にもポップなアルバム（8枚目）が発表されるが、この時にはヴァーディゴからも離れ、それ以後はアース&ファイアーの名は聞かれなくなってしまう。

数年を経た84年、ジャーネイのソロLPがリリースされる。ポップ・ボーカリストとしてソロ・デビューしたのである。このアルバムのサウンドは、ペーター・ショーン（アレンジ、キーボート／元パンプキン）の力に大きく依存している。タイトルは「メイド・オン・アース」――明らかにアース&ファイアーのメンバーだったことをもじっている。　**中藤正邦**

SUPERSISTER



スーパーシスターのリーダー、ロバート・ヤン・スティプスは1950年ハーグ（オランダの行政の中心地で王宮、官庁の大部分がある）で生まれた。地元ハーグのコンサールヴァトリーでクラシックの勉強をしていたが、ゴールデン・イヤリングを聴きロックに興味を持つようになった。学友３人とロック・バンドを結成、活動を続け、遂にスーパーシスターとしてシングル「She Was Naked」をリリースするに至った。残念ながら、このシングルはそれほど話題にはならなかったが、続いて発表されたファースト・アルバム「Present From Nancy」はそれなりの成功を収めた。ジャケットの内側(オリジナルは見開き)に“We are not perfect, we are not original,so,if I were you,I shouldn't buy this record”とスティプスは悪戯っぽく書いているが、実際には、とても70年の作品とは思えない高い完成度を誇っている。確かに、Robert－Jan stips (key,vo,vibe), Ron van Eck(b), Sacha Van Geest (fl,vo),Marco Vrolijk(ds,per,vo)の４人によるサウンドはエッグ、ソフト・マシーン等の影響を受けたものと思われるが、作品全体としての印象は彼らのオリジナリティを十分に感じさせるものとなっている。70年という制作年度を考えるとオランダはもとよりイギリスを含む他のヨーロッパ諸国を見渡しても本アルバムを凌ぐ作品は少ないと言える。なお、本作品はアメリカでも発売され、本国での再発もあって、世界中で20000枚近くが売れたとのことである。

ファースト・アルバム発表後、彼らはKralingenのフェスティヴァル（オランダで開かれた野外フェスティヴァルとしては最も成功したもの）にピンク・フロイド、ジェファーソン・エアプレイン、サンタナらとともに参加した。英米の大スターに交じって彼らも素晴らしいステージを展開しオランダのバンドの中でも最も好評を博した。以後も順調に活動を続け、72年に「To The Highest Bidder」、73年に「Pudding En Gisteren」とファースト・アルバムと同一メンバーによる、同傾向の好作品を発表、商業的大成功こそ収められなかったものの、ファンの強い支持を得ていた。

73年になりグループは一大転機を迎えた。アレキサンダー大王の伝説を題材としたフォース・アルバム「Iskander」の構想にGeestとVrolijkが異議を唱え、遂にはグループを去ってしまったのである。残された２人は新たにCharley Mariano(sax,fl,b－cl，50年代から活動を続けているベテラン・ジャズ・マン。エンブリオの作品にも参加している)、Herman Van Boeyen(ds)をメンバーに迎え、更に、ピエール・ムーランら数人のゲストの協力を得て、同アルバムを完成させた。当然のことながら、そこで聴くことのできるサウンドは従来の作品とは多少なりとも違うものになっている。基本的にはスティプスのサウンドとも言うべきもので前３作の延長線上にあるが、マリアーノがソロを取る部分は非常にジャズ色が濃く、全体としてよりジャズィになった印象を受ける。

このアルバムを製作したことを契機としてスーパーシスターは更にジャズィになっていった。結局、マリアーノはグループに馴染まず、後任として元ソフト・マシーンのエルトン・ディーンが参加した。「ソフト・マシーンはリラックスしすぎて刺激が足りない」と言ってマシーンを去ったディーンは非常にフリー・フォームな演奏を展開した。スーパーシスターはフリー・ジャズ的グループへと変身していったのである。しかし、あまりにもフリーなサウンドにファンは離れ、スティップスも自らの目指すものとは違った方向に進んでしまったことを悟り、遂にグループの解散を決意する。

スーパーシスターを解散したスティップスは一転ポップな音作りを開始した。こうして作られたのがスイート・オーケイ・スーパーシスター名義の「Spiral Staircase」である。ジャケットにはスティップス以外は旧友のGeestが作詩等でクレジットされているだけで、他のゲストが参加している可能性はあるものの、スティップスのソロ・アルバム的色彩が濃い。そのサウンドは一聴ポップでユーモラスであるが、よく練られており、スティップスの音楽的教養の深さを感じさせるハイ・センスなプログレッシヴ・ロック（シンフォニック・ロックではない）である。この作品を最後にスーパーシスターというグループ名を見かけることはなくなったのである。

スティップスはその後もゴールデン・イヤリング参加したり、Sweet d'Buster,Transister等のグループを結成したり，活動を続け，今もなおよりポップなフィールドで活躍している。

賀川雅彦


BANCO DEL MUTUO SOCCORSO



LE ORME



▲72年、イタリアで催されたプログレッシヴ・ロック・フェスティヴァルの為のポスター。出演バンドに注目。

IL ROVESCIO DELLA MEDAGLIA





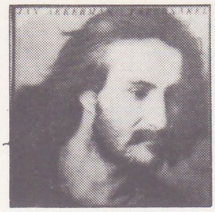
AGE (Belgium)
Demensions

GAMM 0093 廃 1982年

A: Day-Fly
Bruocsella
First Light
Cascade
Mysterious Call
Escape
Night And Day

B: Ballade
Dimensions
Meadows
So Long

エイジはピリオンとともにベルギーを代表するシンセサイザー・ミュージック・バンドである（ただし、両者の方向性は全く異なる）。本作品は彼らの第2作目にあたり、2人のシンセサイザー奏者、ドラマー、テクニカル・アドヴァイザーの計4人によって製作されている。シンセサイザー・ミュージックというと無機質なイメージがあるが、彼らのサウンドはこの種のアーティストでは比類ないほどに叙情的である。繊細かつメロディアスな曲作りがなされており、アルバム全体の構成も起伏に富んだドラマチックなものとなっている。ジャケット・デザインに象徴される宇宙愛を感じさせるこの作品、近年発表されたシンセサイザー・ミュージックのアルバムの中でも極めて高水準の出来である。（賀）



JAN AKKERMAN (Holland)
Tabernakel

ATLANTIC K 40522 廃　W.パイオニア P-8415 A 廃　1974年

A: Britannia By John Dowland/Coranto For Mrs. Murcott By Francis Pilkington/The Earl Of Derby His Ealliard By John Dowland/House Of The King/A Galliard By Anthonie Holborne/AGalliard By John Dowland/A Pavan By Thomas Morley/Javeh
B: A Fantasy By Laurencini Of Rome/Lammy

フォーカスのギタリスト、ヤン・アッカーマンのソロ・アルバム。彼のソロ・アルバムは他にもあるが、ややジャズ色のあるもので本アルバムとは一線を画している。このアルバムのモチーフになっているのはルネサンス期からバロック期（16～17世紀）の作曲家、ジョン・ダウランド、トーマス・モーリー、アンソニー・ホルボーン等の作品で、アッカーマンはそれらの曲をリュート等の古楽器を使用しながらも、時に現代ロック的なアレンジで斬新な息吹きを吹き込んでいる。ゲストはシリアス畑のミュージシャン達、ベースにティム・ボガード、ドラムスにカーマイン・アピスとおもしろい顔合わせである。ロック・ファンの為のルネサンス音楽への橋渡し的な作品として重要性を感じさせる一枚である。（山）



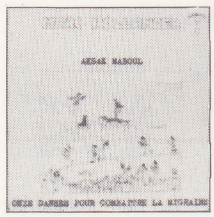
ΑΚΡΙΤΑΣ (Greece)
Same

POLYDOR 2421031 '73 廃

A: ΕΙΣΒΟΛΕΙΣ
ΓΕΝΝΗΣΗ
ΤΑ ΠΑΙΔΙΑ
ΜΝΗΜΗ
ΕΠΙΣΤΡΟΦΗ
ΑΓΑΠΗ
EGO
ΤΡΑ ΓΟΥΔΙ

B: ΤΟ ΠΑΝΗΓΥΡΙ
ΤΟΘΑΥΜΑ
ΤΟ ΟΝΕΙΡΟ
ΚΑΙ ΙΔΟΥ ΙΠΠΟΣ
ΧΛΩΡΟΣ
ΚΑΤΑΚΤΗΣΗ & ΖΕΤΑ
ΖΩΡΖΕΤΑ

ギリシャ出身のアクリタスの唯一のアルバムはすでに70年代からコレクターズ・アイテムとして外国でも注目されていたレコードである。アクリタスとはギリシャ語で神という意味だと聞いたことがある。サウンドは73年製作という所から当時人気のあった同じ3人組のＥＬＰあたりからの影響もあると見るのが妥当であろう。Ａ面の１曲目から流れ出るキーボードを聴くとラッテ・エ・ミエーレをも思わせ、全編ストーリー性を持って小曲に分かれた作品群は、ギリシャ独特の宗教がかったサウンドを醸し出している。この当時に彼らに追随するグループがギリシャに現われてこなかったことは、実に残念なことであり、それだけにアクリタスが持つ価値は大きい。のちにキーボード・プレーヤーがソロを出している。〔杉〕



AKSAK MABOUL (Marc Hollander) (Belgium)
Onze Danses Pour Combattre La Migraine

KAMIKAZE 1 廃 1977年

A: Mercredi Matin
Animaux Velpeau
Milano Per Caso
Son Of L'idiot
DBB
Cuic Steppe
Tons Les Trucs Qu'ily A La Dehors

B: Ciorane
Three Epileptic Folk Dances
Autree Epileptic Folk Dances
Autre Chose D'autre
Mastoul Alakefac
Comme On A Pit

ベルギーのカミカゼ・ディスク（マルク・ムーランの主宰する自主レーベル、４枚のレコードをリリースしている）の記念すべき１番としてリリースされたマルク・オランデル＝アクザク・マブールの1stアルバム。趣味的な作品であるが、それはジュルヴェルヌ等にも感じられるようなサティいうところの家具の音楽、あるいは遊びの音楽の変型である。そのセンスの良さには目をみはるばかりで、マルク・オラシデルが天才型のアーティストだったことが十分うかがい知れるアルバムである。短い小品の集成であるが、統一された雰囲気を感じさせるのでトータル感のある作品である。後にフレッド・フリス、クリス・カトラーらを迎え、2ndアルバムを仏ATEMレーベルよりリリースした後、クラムド・ディスクへと移行する。（山）



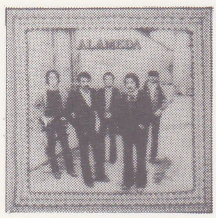
AKSAK MABOUL (Belgium)
Un Peu De L'Ame Des Bandits

ATEM/CRAMMED 002 廃

A: A MODERN LESSON
PALMIERS EN POTS
GEISTIGE NACHT
I VIAGGI FORMANO LA GIOVENTU
INOCULATING RABIES

B: CINEMA
A) CE QU'ON PEUT VOIR AVEC UN BON MICROSCOPE
B) ALLUVIONS
C) AZINOU CRAPULES
D) AGE ROUTE BRRE !

70年代後半にかなり注目をあびたベルギーのプログレッシヴ／ニュー・ウェイヴ・シーンだが、それらのアーティストの中で最も才に長けたアーティストの一人にマルク・オランデルがいた。これは彼のグループ、アクザク・マブールの2ndアルバムで、元ヘンリー・カウのフレッド・フリス、クリス・カトラーを含むゲスト・ミュージシャンを加えて制作された。前作の趣味的なサウンドから力強く、シリアスでテンポの速いサウンドに転化され、当時のニュー・ウェイヴの良質な部分をも取り入れたニュー・エイジ・ミュージックである。オランデルとゲスト・ミュージシャンのぶつかりあいが良い方向にむかって流れている好盤。このあと、彼はクラムド・ディスクを創りハネムーン・キラーズを結成しポップ化していった。（山）



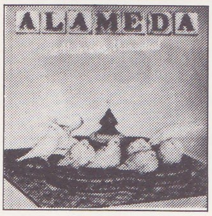
ALAMEDA (Spain)
Same Title

EPIC;EPC 83571 '79 廃

A: AIRES DE LA ALAMEDA
LA PILA DEL PATO
OJOS DE TRISTE LLANTO
HACIA EL ALBA

B: AMANECER EN EL PUERTO
A LA VERA DEL "JUERERES"
MATICES

アラメダはトリアナやメディナ・アサーラといったグループと同傾向の典型的フラメンコ・ロック・バンドだが、そのフラメンコ色は他の同類バンドのいずれよりも強い。特にその傾向は近作になる程顕著である。この1stアルバムは、そうした彼らの作品の中では最もロック・ファンの耳に慣じむであろう内容となっている。しかしながら、実の所彼らの作品間の差違はほとんどないと言ってよい。バックを流れるストリングス・シンセの比重など装飾部での違いがあるが、よく耳を傾ければ、ギターをサウンドの核としてあくまで"歌"を聴かせる彼らの姿勢は一貫している。中ジャケに見える古ぼけた建物の写真など見ながらそんな彼らの音を聴いていると、遠き異国のイメージがどんどん拡がってゆく。〔城〕



ALAMEDA (Spain)

Misterioso Manantial

EPIC 1980年
EPC 84315 廃

A: Aurora
Dos Amores
En Tus Labios
Canto Al Despertar

B: Misterioso Manantial
Vuelo De Cristal
Al Caer
Sobre Tu Piel

本アルバムはアラメダの2ndであるが、1stよりもまとまった仕上りとなっており,1stのジャズ的な音作りに美しさが加わっている。ヴォーカル・パートが多いが、曲想を考えればかえって自然である。メンバーは1stと全く同じである。キーボード担当のラファエル・マリネーリとギター担当のホセ・ロカが大部分の曲を書いており（1stでも同じ)、1stでゲスト参加したガダルキビールのルイス・コボが再び協力している。スペインの中ではレヴェルは高く、ある種の民族色の濃い音でありスパニッシュ・ロックの本来の姿を見せてくれる。ツイン・キーボードは前作より目立ってはいないが、パーカッションの音を前面に出している。本アルバム後、彼等は3rd“Aire Calido～”をリリースしている。（青）



APHRODITE'S CHILD (Greece)

666

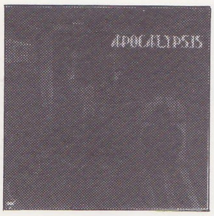
VERTIGO 6673-001 '74 廃

A: THE SYSTEN
BABYLON
LOUD,LOND,LOUD
TTHE FOUR HORSEMEN
THE LAMB
THE SEVENTH SEAL

B: AEGIAN SEA
SEVEN BOWLS
THE WAKENING BEAST
LAMENT
THE MARCHING BEAST
THE BATTLE OF THE LOCUSTS
DO IT
TRIBULATION
THE BEAST

C: SEVEN TRUMPETS
ALTAMONT
THE WEDDING OF THE LAMB
OFIS
THE CAPTURE OF THE BEAST

文字通りユーロロックの金字塔。それもあまり成功した例が少ない2枚組のコンセプト・アルバムなのだから、彼らの創造力だけではなく並々ならぬ体力なしには不可能なことであったろう。やはり、これだけの大作を作るには、ヴァンゲリス，デミス・ルソスの巨体の持つパワーが必要なのである。「雨と涙」，「エンド・オブ・ザ・ワールド」といったヒット曲を残した（もちろん名曲でもある）彼らがここまで大きく飛躍するとは誰も想像がつかなかったであろう。それがヴァンゲリスの才能によっているのはむろんだが、各メンバーの多様性に満ちた演奏技術にも感心させられる。それにも増して、ギリシァ人であるアイデンティティを失わず、それを音楽の中に注ぎ込んだ創造力と情熱は80年代のプログレ界が失いかけているものを未だ示唆してくれる。〔吉〕



APOCALYPSIS (Greece)

Same

MINOS MSM 385 '80 廃

A: METEMPSYCHOSIS
THREAT
EXRIATORY VICTIM

B: LIES MISTAKES & CLOSIN' EYES
MY DEATH AT A RUGBY GAME
JOURNEY IN THE NIGHT

ここに紹介するAPOCALYPSISのアルバムは、比較的聴き易いアルバムである。正統派の俗に言うシンフォニック・ロックであり、世界共通に受け入れられるであろうプログレッシヴな音作りがなされている。アルバム全体がトータライズされて、キーボード中心の展開はギリシャにおけるグループの中ではもっとも癖のないサウンドだ。これと言って強烈な印象がないだけに、平凡だと言ってしまうとそれまでだが、他国のシンフォニック・ロック・グループと比べても彼らには及第点を与えてもよい仕上がりになっている。ギリシャには個性の強いグループが多いように思うが、80年代に入っても数こそ少ないがプログレ系アルバムが出て来ていて、まんざら捨てたものではない。このAPOCAYPSISなどがいい例である。〔杉〕



ASTURCON (Spain)

same title

DIAL DISCOS 1981年
52.5061

A: Mayu
Xareu En La 214

B: El Ventolin
El Galope Del Asturon
Añada Pa La Mio Aidina
La Coralina

アストゥルコーンは81年という比較的近年にアルバムを発表したグループである。本アルバムは彼等の唯一の作品であり、その後の動向は一切不明である。聖書をテーマにした一大トータル・アルバムで、時おり聴こえるフルートが印象的なグループ。曲展開はいわゆる展型的なあくの強いスペイン・ロック調のものと、叙情性を加味したゆったりとした部分から成り、どちらかというと後者に彼等の持ち味があるようだ。特にB面の中盤部分の出来が素晴らしく、遠く太古を偲ばせるような独自の叙情を感じさせる。ピークを越した後のスペイン・ロックの中では（80年以降の）なかなかの好アルバムである。（山）



ATILA (Spain)

Intencion

BASF 1976年
355 3915 廃

A: Intencion
Cucutila
Dia Perfecto

B: El Principio Del Fin

アッティラの幻の2ndアルバムである。彼等の残した3枚のアルバムはどれも高水準の作品群であるが、ういういしさとその叙情性に於いてこの2ndアルバムの出来が秀れているように思う。3rdアルバムにはそれ程感じることができなくなってしまったヴォーカルの味を聴くことができるし、又、力のこもった演奏には好感がもてる。それは正に民族大移動の際のフン族の長アッティラの雄大な旅を表現しているかのごときである。ゴング＝ムービープレイ、チャパといった大レーベルからリリースされなかったことと比較的初期のアルバムであることからグループ自体は非常にマイナーな存在であるが、彼等の創り出したサウンドを考えると残念なことである。（山）



ATILA

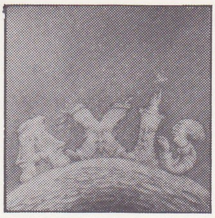
Reviure

EMI 1978年
10C 054-021.462 廃

A: Reviure
Somni

B: Atila
Al Mati

アッティラの3rdアルバムである。彼等はスパニッシュ・ロック界ではややマイナーな存在だが、アルバムの内容はかなり完成度の高いもので、スパニッシュ・ロックの平均的レヴェルを大きく上回っている。サウンド構成はギター、及びキーボードがツインでメロディーをとり、それらを中心にリズム・セクションがからむもので、オーソドックスな展開なのであるが、一種邪悪さを秘めた曲想が独自のアイデンティティーを創り出すことに成功している。たった3枚のアルバムしか残さず消えていったアッティラ──それはフン族の長アッティラが歴史の中に暗い影をおとしているように、謎めいた神秘をリスナーに与え続けるに違いない。（山）



AXIS (Greece)

Same Title

RIVIERA 421 088 '73 廃

A. WAITING A LONG TIME
SEWERS DOWN INSIDE
MATERIALIZING THE UNLIMITED
ASYMPHONIA I

B. SUSPENDED PRECIPIPICE
ROADS
ASYMPHONIA II
DANCING PERCUSSION
PA VU GA DI
THE PLANET VAVOURA

このアクシスは、ギリシャ人のバンドではあるがフランスで録音されている。メンバーはキーボード、ベース、ドラムが2人と変則的である。内容は、リズム主体に展開していくジャズ・エッセンスの強いものであり、全体的に自由な演奏が繰広げられている。同じ国のバンドで同じ73年にリリースされたアクリタスとは異なり、ギリシャの臭いは感じられない。当時のフランスをも意識したのだろうが、時折全体で畳掛ける展開など光る所もあり、メロトロンを使った曲も数曲ある。彼らには、これ以前にELA·ELA/OSANNAというアルバムがあり、ギターも入っているがただのロックであり魅力を感じない。フランスにまで渡り、成功を夢みた彼たちの意気込みはギリシャの存在を知らしめるには十分であったであろう。〔杉〕



AZAHAR (Spain)

Elixir

MOVIE PLAY GONG 17.1235/6 廃 1977年

A: Campos De Azahar
¿Que Malo Hay, Sr. Juez?
¡Es Que Esto No Tiene Nombrei
Mercaderes

B: Un Hombre Cansado
Cantaros De Fuego
Marruecos
a) Flipados
b) Que No Me Vean
c) Colgados De La Roma Gorda

発売当時、匂紙によるブックレットが付いていることで話題を呼んだアザハルの1st。ディック・ザッパラ(vo)、アントニオ・ヴァルス(g,mandlin)、グスタヴォ・ロス(key)、ホルヘ・バラル(b,per,g)から成る4人のメンバーはいずれも長い音楽歴を誇るミュージシャンである。ジャケット・デザインに象徴されるロスのスペイシーなsynに、ややハードなe-g、力強いvo、メロディアスなp等が絡み曲は進行する。そのサウンドはスペイン臭さをあまり感じさせないすっきりとしたものである。本作発表の後、ロスとバラルはアザバーチェを結成し「Dias De Luna (Movie Play Gong 17.1475/8)」「No,Gracias (同17.2030/3)」の2枚のアルバムを発表している。一方、アザハルも2nd「Azahar (同17.1536/3)」をリリースしている。（賀）



BANZAI (Belgium)

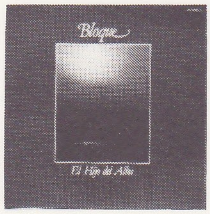
Hora Nata

DELTA DG-10001 廃

A: You Always Like an Entree?
Try (Hopeful Strive/Step by Step/Find the Way)
Obelisk (Like an Stalagtime/Hora Nata/Stalagtities in My Jam/Wet the Ropes)

B: Hattrick (My First Hot-Pants/Kick And Rush/The Final was the Third Game)
Three Magicians [Part 1] (Once/Theme of Rain bow/Bermst/We'll Bring You the Sun)

〝ベルギーのイエス〟などと噂されていたバンザイであるが、知られている限りではこれが唯一の作品である。オランダのデルタ・レーベルからのリリース、恐らくは72年前後の作と思われる。グループはkey,g,vo(g),ds,perの5人編成で、ほかにストリングスと3人のホーン・セクションが加わる。軽快なキーボードワークが中心であるが、あくまでも地味な存在に徹し、ゲスト陣も加えた全体としてのユニットによる自己表現というスタイルを貫く。A−1を除く4曲は、いずれも小組曲的な性格を持つが、全体的にソフトなタッチで仕上げられており、時々出てくるバイオリンが適度なスパイスとなって展開を引き締め、非常に聴き易い作品となっている。イエスとは明らかに一線を画す。（江）



BLOQUE (Spain)

El Hijo del Alba

CHAPA HS-35032

A: Poemas de Soledad
Alquimista Soy
La Danza del Agua
El Hijo del Alba

B: Quimerica Laxitud
El Silencio de las Esferas I
La Razón Natural de las Esferas II
La Elipse Esferas III
Fin Y Principio Esferas IV
Un Hombre Nuevo

スペインの中では、イビオやメズキータと違い、スペイン臭さをあまり感じさせないハード・プログレ・タイプのバンドである。シクスト・ルイスとファンホ・レスプエラのツイン・ギターがサウンドのメインで、それに力強いヴォーカルと美しいファン・カルロス・グティエレスのキーボードかからむ。またドラムの音もクリアーである。B面の組曲風の構成は他のスペインのバンドでは聞かれないものである。1stの「Bloque」はさして聞くものでもないが、2ndの「Hombre, Tierra y Alma」はこの3rdと甲乙つけかたいスペインの中では屈指のハード・プログレである。ブロッケエは宇宙宗教をうまく音にできるバンドで、それをうまくプログレに結びつけてしまう。（青）



EDUARDO BORT (Spain)

same title

GONG 1975年
S-32.642 廃

A: Thought (1ª parte)
Thought (2ª parte)
Walking on the Grass

B: Pictures of Sadness
Yann
En Las Riberas Del Yann

75年発表の1st。〝トリプルメロトロン〟という触れ込みでかなりの注目を集めた時期があったが、それはあくまでも一面的なものでありアルバムの全体像を正確にとらえた言葉ではない。どうも日本ではプログレ作品を紹介する際にメロトロンという言葉が軽々しく使われ過ぎる気がする。本作品でメインとなるのはあくまでもソロ・アーティストとしての彼だ。そのギタープレイは時にはハードで攻撃的、また時には限りなく甘く美しい。メロトロンはB面で使用される。特にラストでの使用が効果的かつ印象的。全体的な仕上りも良好で、〝トリプル〜〟の先入感を排除すればかなり楽しめる。なお最近本国ではシングル・ジャケの再発に加え新作もリリースされた。（江）



CAI (Spain)

Más Allá De Nuestras Mentes Diminutas

LACOCHU 1978年
LC-001 廃

A: Alameda
Mas Alla De Nuestras Mentes Diminutas

B: Solucion A Un Viejo Problema
Pasa Un Dia

3枚のアルバムを発表したカイ。自主製作盤の本1stがプログレッシヴ・ロックとしての最高作。2ndは多分にフュージョン色をとり入れ、より洗練されている為、プログレ＝フュージョンとしての最高作といえる。ここでの彼等は若さと力強さを感じさせる雄大でかつ繊細なイメージの交差する素晴らしい音世界を狂おしいまでに表現している。フラメンコの影響をそこはかに感じさせるギター・ワーク（時にツインになる）とキーボードのセンスがまず耳につくが、タイトなリズム・セクションもこのカイの世界を形成するのに大いなる貢献をしている。ギター、キーボード、ベース、ドラムスの4人編成。（山）



CAI
Noche Abierta

EPIC 1980年
EPC 84218 廃

A: Soñe Contigo
Despertar
Alegrias De Cai
Noche Abierta

B: Extraña Seduccion
La Fabula
La Loca Del Diablo

1 stよりもフュージョン化したカイの2 ndである本アルバムは、エキゾチックなヴォーカルに、美しいキーボードがからむ力作である。フュージョン的なスパニッシュ・ロックの美的な部分だけを取り出したアルバムと言っていいだろう。デュエゴ・フォピアーニ(ds, per, vo)、ホセ・フェルナンデス(g)、フランシスコ・デルガド(g)、セバスチャン・ドミングェス(key)ホセ・ペレス(b, vo)が本アルバムのメンバーである。各自のメンバーのテクニックはさして無いが、哀愁あふれるサウンドが全編を包んでいる。ジャケットに描かれた宇宙がカイのサウンドを表わしており、濃い内容を持ったレコードである。なおこの後の3 rdでは、ポップ化した。 (青)



CANARIOS (Spain)
Ciclos

ARIOLA キング 1974年
87905-XD 廃 GXD-1031-2 廃

A: Spring
B: Summer
C: Autumn
D: Winter

キャナリオスはスペインのグループとしてはかなり古くから活動を続けているベテラン・グループである。本アルバム以外にも数枚のアルバムを発表しているが、それらの多くはオーソドックスな時代物のロックであり あまりお勧めできるような代物ではない。しかし本アルバムはそれらのアルバムとは一線を画している。イタリアン・バロックの曲の中で最もポピュラーなナンバーであるヴィヴァルディの「四季」を非凡な才能で見事にロック化に成功している。しかも独自なアレンジにより、2枚組という大作に仕上げている。これは本アルバムのコンポーザーであるアルフレッド・カリオンに依るところが大きい。スペイン盤は豪華ブックレット付。オランダ盤、日本盤もリリースされている。 (山)



ALFREDO CARRIÓN (Spain)
Los Andares Del Alquimista

GONG 1976年
S-32838 廃

A: Espejo Sumergido
Tensa Memoria
Vino De Silencio
Romance

B: Los Andares Del Alquimista

鬼才、アルフレッド・カリオンの残したこの一枚は、スパニッシュ・ロックを語る上で欠かせないアルバムだ。B面全てを費やしたタイトル曲が圧巻である。ストリングスに加えブラス・セクションもフィーチュア、その見事なアンサンブルでスパニッシュ・ロックの名作群の中では類を見ないシリアスな世界を創り出している。むしろロックの枠には納まり切れず位置付け的にはイタリアのオパス・アバントラとの類似性がある(音質的には全く異なる)。なおA面は歌を中心としたアコースティックな展開。作曲は全てカリオン、ジャケット・デザインでセンスの良さを見せるホセ・ルイス・テレスはA－1、2では作詞も手掛けている。 (江)



PETRUS CASTRUS (Portugal)
Ascenção E Queda

廃

A: A CHEGADA
A REVOLTA
ASCENCAO

B: DECLINIO E RUPTURA
INDECISAO E DEMENCIA
QUEDA

ポルトガルといえばTantra、Jose Cid あたりを想い起すのが関の山で、一般的にはプログレ不毛の地といわれないまでも、無視されている。本誌22号でも紹介されたPetrus Castrus はその中にあって非常に水準の高いレコードを残している。今のところ2枚のアルバムしか存在が分らないが、これ程個性豊かで音楽性の高いサウンドを残した彼らがこれだけで消息不明になるとは考えにくい。ともかく、たった3人とは思えない変化に富んだこのアルバムは、かなり好き嫌いがはっきりしそうなラテン系特有のダミ声のヴォーカルをメインに、曲は複雑にからみ合い、時には情熱的に、時には哀愁に満ちて進行する。B面ではIL Voloの2ndを思わせる上昇指向型ジャズ・ロック・サウンドを聴くことができるのも付け加えておこう。 〔吉〕



WALTER CHRISTIAN ROTHE
Solitude (Belgium)

LARK 1982年
INL 3527 廃

A: Take Off
Solitude
Robot
The Return
Sunrise

B: On The Beach
Marleen's Solitude
Promenade
The Old Castle
Gentle Waves

ベルギーのエレクトロニクス・グループ、ピリオンのメンバーであるヴァルター・クリスチャン・ロートのソロ・アルバムである。ピリオン本来が流れるような(ドイツ的な)エレクトロニクス作品であったのに対し、本作品は極めてメロディアスな作品である。A面はダンサブルな作風でニュー・ウェイヴ風のビートが多少気にかかる。が特筆すべきはB面で、女性ヴォーカルを加えた叙情的な作品である。この面はエレクトロニクスというよりはシンフォニックと呼ぶべきものでアレンジの素晴らしさといい、曲自体の持つ輝きといい、近年の作品の中では秀逸のものといえる。ギーガーを多少甘くしたようなアルバム・カヴァーも素晴らしい。 (山)



JOSE CID (Portugal)
10000 Anos Depois Entre Venús e Marte

ORFEU FPAT 6001 '78 廃

JOSE CID:KED,VO.
ZE NABO:NABO,G,B.
RAMON GALARZF:DS.
MIKE SERGEANT:G.

スター・ウォーズ(俗!)のタイトル・バックのようなジャケット・ワークが先ず目を魅き、扉を開けると各曲をイメージした幻想的なブックレットが我々を楽しませてくれる。地球滅亡の前兆を示すオープニングからすでにジョセ・シドが織りなす音の宇宙絵巻の中に引き込まれて行く。殊にA—3を聴くたび、白く冷たい光を湛えた冬の星々を眺めたくなるのは私だけであろうか。このアルバムでメインとなるのは、ジョセ・シド操る重厚なキーボード群と彼の力強くも哀愁感のあるボーカル、時折り繰り出される甘美なギターだろう。ジョセ・シドは何枚ものアルバムをリリースしており、ポルトガル本国では有名なシンガーだが、本作と同じ傾向の作品は外にはないようだ。 〔幸〕



LUIS CILIA (Spain)
Memória

NOVOLA ZL-225 廃 1977年

A: Na Capela Ogival Das Tuas Maos/Até Quando/Assim Cantamos/O Mar Não Precisa'De Ter Ondas/Memoria

B: Redondilha/Não Podemos Calaro Que Nos Doi Para La Do Oceano/Se /Cancão Do Campones Operario/A Festa Nunca Acaba/Novembro/Na Capela Ogival Das Tuas Mãos

暗い部屋の中、一人で聴いていると心が和む、そんなアルバムである。ルイス・シリアの人を包んでくれるような暖かいヴォーカルと哀しい調べのアコースティック・ギター。ヴォーカルとヴァイオリンがお互いを慰め合うが如く語りあい、そっとそれを見詰めるようにキーボードがバックを固める。スペインの雄大な自然の中でルイスが歌う光景がアルバム全体より目に浮かぶ。牧歌的な印象を受ける本アルバムは、シンプルな音作りに仕上っておりそれはルイスのヴォーカルとバランスがとれていて無理がない。イタリアのカンタウトーレ達と同様、素朴な感情を大切にしながら愛や自然を唄いあげるタイプのシンガーが、スペインにも存在することが確認できる好アルバムである。（青）

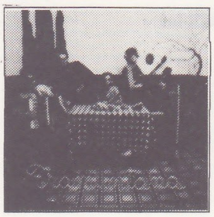


CODA (Holland)
Sounds Of Passion

Sym Info 286041 '86

FRIK DE VROOMEN:KBD,VO.
JOCK WITJES:G,VO.
MARK ESHUIS:DS,PERC.
JACKY VAN TONGEREN:B,VO.

その音に触れし時より、我々を虜にしてしまったオランダの新星コーダ。　全曲の作詞・作曲を担当するヴルーメンのピアノを多用するメロディアスなキーボード、役所を心得た力強いギター、的確にサポートするリズム陣、どれをとっても小気味よい。取り分け、A面からB—1までの組曲は正に白眉といえよう——巧みな効果音、修道院での讃美歌を思わせるコーラス、パイプ・オルガン、ゲスト・ミュージシャンによる管楽器 etc —美しき音のタペストリー、その前に我々は唯 dreamer になるのみ。70年代のエッセンスと80年代のエッセンスが見事に融合し、昇華しきった作品である。この作品の持つ高い完成度は、新たなユーロ・ロックの幕開けさえも予感させる。80年代を代表する屈指の名盤といっても過言ではないであろう。〔幸〕



COMPANYIA ELÈCTRICA DHARMA (Spain)
Tramuntana

ZELESTE/EDIGSA UM 2039 廃 1977年

A: Titu-Tiru-Ritu / Focs de Sant Joan / Moixeranga del Diable / La Mediterrània se'ns mor...

B: Tramuntana / Les Bruixes del Maresme / Festejada

スペイン一のチンドン屋バンド、コンパーニァ・エレクトリカ・ダルマの３rdアルバム。エスティヴ、ジョン、ホセのフォートゥニィ兄弟を中心に（それぞれ g, sax, dr）、ジョルディ・ソレイ（kbd）、チャールズ・ヴィダル（b）の不動のメンバーによるライン・アップである。75年に発表されたファースト・アルバムでは普通のジャズ・ロックを演っていた彼等だが、翌年に発表された「L'oucomballa」あたりから民族音楽色を取り入れ始め、78年、本作の発表になる。ジャケットに写っているメンバー達からある程度伝わると思うが、陽気な哀愁とでもいうような感覚がバンドの特色になっている。又、残念なことにお見せ出来ないが、内袋の絵の出来映えも素晴らしい。(Chihiro S.)



COMPANYIA ELÈCTRICA DHARMA
L'angel De La Dansa

CABRA/EDIGSA UM 2043 廃 1978年

A: Batalladora / Ballet Del Follet Foll De Lluna / Marxarãbiga / Dalt Les Onades! / Alegres Desesperats

B: Parida Saltimbanki / Barna Natal, Barna Mortal / Sants Impotents! / Cançó De Bressol / L'ãngel De La Dansa / Dansa Il Legal

78年に発表された、コンパーニァ・エレクトリカ・ダルマの４枚目である。いつものメンバーに加え、ルイス・フォートゥニィ（トランペット）というフォートゥニィ一家の４人目が２曲程参加している。彼等の音楽を聴いていつも想うのは悲劇／喜劇の表裏一体性である。悲劇は関係の無い（或いは関心の無い）第三者にとって喜劇でしかない。他人事は他人事でしかないのだ。又、喜劇は本人にとって悲劇に他ならないであろう。特に自分が演じているのが喜劇であり、その役を演じ続けなければならないと気づいてしまったからには。同じ様に彼等の作品は人間として限界の部分で、楽しく、又哀しい。イギリスのマイク・ウエストブルック、カーラ・ブレイ等の好きな人は気に入るでしょう。(Chihiro S.)



COS (Belgium)
Pastaeolian Train Robbery

EMI BEST SELLER 4C 054-97146 廃 1974年

A: Postaeolian Train Robbery / Cocalnut / Amafam

B: Karbok / Populi / Halucal / Coloc

コスはベルギーのプログレッシヴ・ロック・シーンにおける最も重要なグループの１つである。オリジナル・メンバーのうちチャール・ルース（key）は２枚組の大作ピアノ・ソロ「Ego Triste」を発表するとともにアブラクシスを結成、アラン・グーディエ（b）もサンハウスに参加している。そして、リーダーのダニエル・シェル（g, f, devices）は今なおコス名義で活動を続けている。また、2nd及び3rdに参加したマーク・オランデル（key）はアクサク・マブールとして２枚のＬＰを発表している。本アルバムは彼らのデビュー作であり、前述のメンバーの他に vo & oboe, ds, per が加わっている。そのサウンドはパスカル・ソンのソプラノ・スキャットとキーボードを中心にした軽快かつ心地好いジャズ・ロックである。（賀）



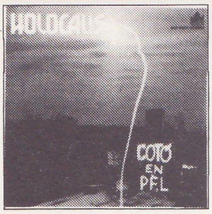
COS
Babel

IBC BEST SELLER 4B 058-23794 廃 1978年

A: Babel / Good Wind / Cha Cha Cha / Mein Maschine Ist Schön

B: Sors Ton Petard, Johnny Oostend, Oostend / Greeneldo

「Postaeolian Train Robbery」「Viva Boma（IBC Best Seller 4 B 062-23605） 76年」に続くコスの３rd。５人のレギュラー・メンバーに加えて、元メンバーのチャール・ルース（p, key-strings）、ザオのフランソワ・カーン（p）、マーク・ムーラン（org）らが一部ゲスト参加している。パスカル・ソンのボーカルは従来よりも絶叫部分が減少して、より繊細かつ微妙なものとなり、演奏もダニエル・シェルのギターを中心にまとまりのあるものとなっている。全体としてジャズ色が薄らぎ、起伏に富んだコス独自のサウンドが確立されている。79年、4thアルバム「Swiss Chalet（IBC Best Seller 1 A 064-23902」を発表、しばらく活動を停止していたが、83年に突如ロック・オペレッタ「Passiones」をリリースした。（賀）



COTÓ EN PEL (Spain)
Holocaust

NEVADA 1978年
ND-5021 廃

A: Aura de Sons
Lamentacions

B: Holocaust Part I
Holocaust Part II

トラディショナルな要素を一切排した斬新な曲作り。一聴しただけでスペインのグループとは判断できないであろう。ある意味では異色のアルバムである。78年、無名のネバダ・レーベルからのリリース。メンバー等のクレジットは無く、詳しい事は判らないが、演奏水準は非常に高く特にキーボードプレーヤーのセンスの良さが光る。他パートとのコンビネーションも申し分ない。派手さこそ見られないものの、きちんと計算された緻密な展開は、聴く者を十分に魅きつける。特にB面の２パートからなるタイトル曲において、前半の暗さとも重苦しさともつかない独得の雰囲気を途中メロトロンが優しく包み込み、徐々に盛り上げながらクライマックスに持っていく展開はさすがである。（江）



CRACK (Spain)
Si Todo Hiciera

CHAPA 1979年
HS-35021 廃

A: Descenso En El Mahë-llstrong
A Mantes De La Irrealidad
Buenos Deseos

B: Marchando Una Del Cid (Parte I) (Parte II)
Si Todo Hiciera Crack
Epílogo

プログレッシヴ・ロックという言葉から受ける印象を最も端的に表現したグループの一つにこのクラックがあげられるだろう。絶対音楽というものがロックの中にもあるとすれば、このクラックの唯一のアルバムは真の意味でのロック＝シンフォニーを象徴するものである。文句をつけることのできないまでに洗練された演奏テクニック、あまりに典型的な展開をするサウンド構成――正にプログレッシヴの王道を行くといった風情である。ギター、フルート、ヴォーカル、ベース、ドラムス、アコースティック・ピアノ、メロトロン、シンセサイザーといった楽器群によって重厚に演奏されている。聴く者に純粋な音楽的感動を与えるということに関しては異論はあるまい。（山）



DIEGO DE MORÓN (Spain)
same title

GONG 1977年
17.0914/6 廃

A: Aire Fresco
Recuerdo De Julia
Te Hubiera Entregado Todo
Sin Descanso

B: Despertar
Serena Calma
Recovecos
Sueños Rotos

全編にモーランのフラメンコ・ギターがフィーチャーされている本アルバムには気品の高い音楽が詰まっている。タランテラのような速い舞踏曲があったり、クラシックの流れを感じさせる曲があったり、一曲一曲スペインの情熱と哀愁を伝えてくれる"ロック"の枠に納まり切らないアルバムである。またこのアルバムにはトリアナ、グラナダの二大グループがアレンジと演奏に参加している。A-1,4 B-2,3がトリアナ（ファン・ホセ・パラシオス、ヘセウス・デ・ラ・ロザ、エンリクェ・カルモナ）、A-2,3、B-1,4がグラナダ（カルロス・カルカモ、グスタボ・ゴンザレス、ミグエル・アンヘル・ブリッド、チッチョ・ヒポリト）がそれぞれバック・アップしている。しかし彼等の演奏はあくまで控えめである。（青）



DRAGON (Belgium)
same title

英 ACORN 1977年
CF-268 廃

A: Introduction
Lucifer
Leave Me with Tears

B: Gone in the Wind
In the Blue
Crystal Ball

イギリスのアコーン・レーベルから77年にリリースされた恐らくは唯一と思われるドラゴンのアルバム。最初はフランスのグループという紹介がなされていたが、後から入ってきた情報を総合すると、どうもベルギー系のグループらしい。ギター、オルガンなどの使用法や、泥臭さの残るボーカルからはブリティッシュ・ロックの影響が感じ取れるが、メンバーの名前を見る限り英国人のグループでないことは確か。プログレ系のアルバムとしては標準的な出来である。時々出てくるメロトロンやフルート、パイプなどは効果的で、それなりに〝らしさ〟を見せつけるが、全体的な迫力不足や、曲によってバラつきが見られるなど、今一つ大物になり切れないでいる。（江）



EARTH & FIRE (Holland)
same title

POLYDOR ポリドール 1970年
MP 2162 廃

A: Wild And Exciting
Twilight Dreamer
Ruby Is The One
You Know The Way
Vivid Shady Land

B: 21th Century Show
Seasons
Love Quiver
What's Your Name

アース＆ファイアーは70年1月頃結成された。ゴールデン・イアリングのジョージ・コーイマンに見出されて、サポート・バンドを務めるようになり、やがて本作の発表となる。このファースト・アルバムから数曲シングルカットされている。（A-1,3、B-1,2等）、特に日本でも多少ヒットした「シーズン」（B-2）等は今でも覚えている人が多いようだ。彼等の魅力はジャーネィのボーカルとクリス＆ジェラルド・ケーツ兄弟によるギターとキーボードのコンビネーションがつむぎ出す日本人好みのメロディ・ラインにあると言えるだろう。この後、プログレ色を取り入れた「アムステルダムの少年兵」を発表する訳だが、ショッキング・ブルー等のダッチ・ポップの好きな方には本作をお勧めしよう。（Chihiro S.）



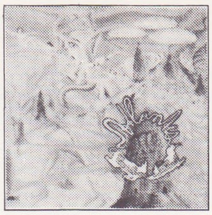
EARTH & FIRE
Song Of The Marching Children

POLYDOR 1972年
2925 003 廃

A: Carnaval Of The Animals
Ebbtide
Storm & Thunder
In The Mountains

B: Song Of The Marching Children
a) Theme of the Marching Children/b) Opening of the Seal/c) Childhood/d) Affliction/e) Damnation/f) Purification/g) The March

アース・アンド・ファイアーは70年代初期に日本でも「シーズン」のヒットがあったのでそのせいかポップス・グループだと思っている方も多いようだが彼等は1stからすでにプログレッシヴな方法論を持ったグループである。本作は2ndアルバムで以前アムステルダムの少年兵と題されて日本盤がリリースされたこともあった。いかにもアムステルダムといったホットな（当時のアムステルダムはヨーロッパ・ロックの一つの拠点でホットな町だった。もちろん今でもその名残りはある）感覚は今聴いても当時の熱い息吹きが伝わってくるようである。ユートピアを求めてさまようフラワー・チルドレンの切実な希求が大いに僕達の心をゆさぶってくれる。名盤。（山）



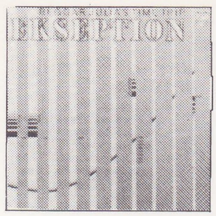
EARTH & FIRE
Atlantis

POLYDOR 2925 013 廃　1973年

A: a) Prelude
b) Prologue
c) The Rise & Fall
d) Theme of Atlantis
e) The Threat
f) Destruction
g) Epilogue

B: Maybe Tomorrow, Maybe Tonight
Interlude
Fanfare
Theme From Atlantis
Love, Please Close The Door

アース・アンド・ファイアーの数ある作品の中で最高作を選べといわれたら2ndと3rd(本作)を選ばざるを得ないだろう。この2枚は甲乙つけ難い程の完成度を誇っている。メロトロンを含む多彩なキーボード群と紅一点ジャーニーの哀愁を帯びたヴォーカルを前面におし出した作風は正に叙情である。この後なだらかに下降線をたどりながら4th-To The World Future, 5th-Gate To Infinity. 6th-Reality Fills Fantasy, 7th-Andromeda Girl, 8th-In A State Of Flex と続々とアルバムを発表し続けて現在に至っている。中期は宇宙的な香りを漂わせ、後期になると、ポップさが顔を出してきて明らかに完成度は落ちてしまっている。（山）



EKSEPTION (Holland)
Beggar Julia's Time Trip

PHILIPS 6314 001 廃　フォノグラム SFX-7286 廃

A: Ouverture
Prologue
Julia
Flying Power
Adagio
Space I
Italian Concerto

B: Concerto
Space II
Pop Giant
Space III
Feelings
Epilogue
Finale: Music For Mind/ Theme Julia

クラシックの名曲をロックにアレンジし、高度のテクニックを以て演奏するという手法を最初に行ったのがキース・エマーソンのナイスである。エクセプションの方法論も基本的にはナイスと同じであるが、ナイスがkey, b, dsの3人編成だったのに対してエクセプションにはトランペット、サックス等の管楽器も参加している。本作品は彼らの2ndアルバムにあたり、こじきのジュリア嬢が音楽のタイム・トリップをするという構成になっている。アルビノーニ、バッハ、チャイコフスキーの曲をそれぞれA-5、A-7、B-1に置き、その前後をクラシカルに構成された自作の曲で繋いでいる。クラシックにおける曲構成の妙をロックの迫力で楽しむというのが本作品の狙いであろう。R.V.D.リンデンのキーボードが素晴らしい。（賀）



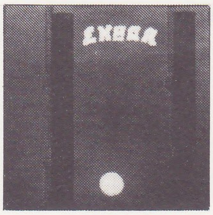
EKSEPTION
00.04

PHILIPS 6423 019 廃

A: AVE MARIA
BODY PARTY
MONLOPE
MONKEY DANCE
CHORAL

B: PARTITA NO.2 IN C MINOR
CICCADILLY SWEET

エクセプションの4th。ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラ、ダッチ・チェンバー・クワイヤのメンバーとの共演盤である。ナイスに影響を受けて結成されたエクセプションであるが、彼らのサウンドはより大衆的なレベルで受け入れられる結果となった。クラシックの名曲をロック・バンド形式でシンプルに演奏するという手法がイーズィ・リスニング的感覚で支持を得たのである。本作においても彼らはクラシカルな自作曲に加えて、バッハ、ジミー・スミス（ジャズ・オルガンの第一人者）の曲をクラシカルに、そして、ジャズィに、かつ分り易く演奏している。プログレッシヴ・ロックとしては多少イーズィであるが、各種キーボードを巧みに弾きこなすリンデンのテクニックには圧倒させられる。（賀）



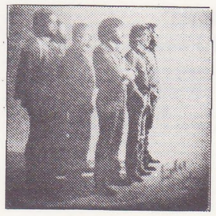
ENBOR (Spain)
same title

XOXOA X-11.117 廃　1979年

A: Ekaitzak
Ene Olatu Odolduak
Zu Maitatzea
Chorinoac Kaiolan

B: Ondoan Ez Dut Inor
Zuek Ez Dakizue
Agurra

ヨーロッパ最古の民族バスク人が孤立して残存しているので有名なバスコンダガス地方（バスク地方とも呼ぶ）。その最大の都市ビルバオの地方レーベル、ショショアをイトイスとともに代表するのがエンボルである。本作品は彼らのファースト・アルバムであり、a-g & vo, e-g, a-g & e-g & vo, b, ds, vo, reed & vo, kbd(ゲスト）の8人が参加している。そのサウンドはスペインに多く見られるアグレッシヴなものではなく、イトイスなどにも通じるゆったりとしたものである。コーラス中心のボーカルとメロディアスなギターにセンスの良いフルート、クラリネット、キーボードが絡む曲展開は十分に彼らのオリジナリティを感じさせる。アルバム全体の構成、曲の盛り上がり等、多少物足りない部分もあるが中々の力作と言える。（賀）



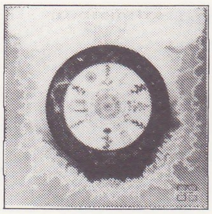
ENBOR
Katebegiak

XOXOA X-11-147 廃　1980年

A: Katebegiak

B: Kutsadura
Behin Une Batetan
Naska Adiskidea
Agurra II

エンボルのセカンド・アルバム。若干のメンバー・チェンジがあり、ベーシストが交替し、ボーカリストがB-4のみのゲスト参加になっている。他に3人のゲスト(sax, ds, kbd）を迎えて製作されたこのアルバム、内容的には明らかにデビュー作を凌いでいる。何と言っても最大の聴きものはA面全てを費した大作「Katebegiak」であろう。B面の4曲を含め、ゆったりとしたソフトな曲作りは前作と変わらないが、音が整理され曲にメリハリがある分、聴きやすくなっている。演奏の面では、メロディアスなギター、叙情的なフルート、感情過多にならず淡々と唄うボーカルが印象に残る。ギター中心のフラメンコ・ロックでもなく、キーボード主体のシンフォニック・ロックでもない、独自のロックを彼らは作り上げつつある。（賀）



FINCH (Holland)
Glory Of The Inner Force

NGGRAM 5N 038-25967 廃　1975年

A: Register Magister
Paradoxical Moods

B: Pieces
A Bridge To Alice

イエス的なサウンド構成にややジャージーな部分をとりまぜた独自の世界を築き上げたフィンチは75年から77年までに計3枚のアルバムをリリースしたオランダのグループである。音創りとしては3rdに移行する程洗練されてくるが、それぞれのアルバムに捨て難い味があり甲乙つけ難い。キーボードのクレーム・データーマイヤー、ギターのヨープ・ヴァン・ニンヴェーゲン、ドラムスのペール・クラーゼ、ベースのペーター・フィンクの4人によって結成され、本アルバムを75年2月に録音している。ギタリストの個性が全面に現われており、ホットで叙情的なそのギター・ワークとキーボードとの生み出すオランダらしいサウンドを聴くと、彼等がオランダを代表する程のグループだったことがうかがい知れる。（山）



FINCH
Beyond Expression

NEGRAM 1976年
NK-203

A: A Passion Condensed
B: Scars On The Ego
Beyond The Bizarre

オランダにおいて、テクニックと曲構成を考えた時最高峰に位置するバンドとしてこのフィンチがあげられる。オランダの多くのバンドはイギリスの影響をあまりに受けすぎているが、フィンチは独自のものを持っている。静・動・美をとてもうまく表現し、曲を一つの物語のように作成する。クリーム・データーメイヤーの気品あるキーボード。ベース、ドラムのリズムのうまさ。そして同じオランダのギタリストのヤン・アッカーマンと双壁をなす、ヨープ・ヴァン・ニムヴェーゲンの超人的なギター・ワークにはすさまじいエネルギーを感じる。76年に発表されたこのレコードにはジャケットからは想像もつかぬ、静・動・美につつまれたプログレが存在している。なお、フィンチは全作品インストゥルメンタルである。（青）



FINCH
Galleons Of Passion

BUBBLE 25.875-XOT 廃 1977年

A: Unspoken Is The Word
Remembering The Future
As One
B: With Love As The Motive
a) Impulse/b) Reaching
/c) Sinful Delight?
Reconciling

NEGRAMを離れ、BUBBLEに移ったフィンチの3rdは、1st、2nd以上に全体のバランスがとれており、フィンチの最高作と言っていいであろう。このアルバムでも静と動の対比がまるで美と剛の建築美の様に見事に表現されている。アンサンブルにおいてはもう言う事無しのアルバムである。この3rdでフィンチは行方知れずとなるが、フィンチの残した3枚のレコードはオランダのロックを知る上で重要である。情熱と緊張感がフィンチの音であり、本アルバムでインストゥルメンタルの一つの頂点を成したフィンチはヨープ・ヴァン・ニムヴェーゲンの超人的なギターを中心とし、ペーター・フィンク(b)、キーボードは2ndと違ってアド・ワマース、ドラムも2ndと違いハンス・ボスブームという編成である。（青）



FLAIRCK (Holland)
Variaties Op Een Dame

POLYDOR 2925 072
ポリドール 28MM 0024
1979年

A: Aoife
Voorspel In Sofia
April 3rd
Oneven Wals
B: Variaties Op Een Dame
Dubbelspel

フラレックは79年、11月5日にテレビ・ショウに出演してデビュウして以来、その安定したテクニックとクラシックとロックの枠を集めたような美しいサウンドが評判になり、本国のみならずヨーロッパで人気を博しているグループである。本ファースト・アルバムはたった2ヵ月足らずでオランダ・エジソン賞を獲得するという快挙を成し遂げ、以後数々の賞を取り続けている。以後「Gevecht Met De Engel」、「Live In Amsterdam」、「Circus」、「& Orkest」、等のアルバムを発表するかたわら、ジョルジュ・ムスタキとの共演盤を製作するなど、意欲的な活動を続けている。又、初期のヴァイオリニスト、ジュディ・ションペルはソロ・アルバムを発表しているがこちらはムード・ミュージック的でいまひとつの感がある。（山）



FLAIRK
Circus

POLYDOR 2925122 '81 廃

A: DE OVERTOCH
CIRCUS (ACT 1&2)
B: CIRCUS (ACT 3&4)
ES VIJF

アコースティック楽器のマルチ・プレーヤー集団、フラレック。しかし、その音楽はグリフォンでもなければ、ペンギン・カフェ・オーケストラでもない。むしろこの編成から生まれる音としては、オーソドックス過ぎるくらいだ。但し、それが単なるクラシカル・アンサンブルにとどまらないのは、各人のテクニックはもちろんのこと、クラシック、ロック、C&W、民族音楽等様々なジャンルから、その美しさだけを抽出したような曲作りによる。本作でも時にはユーモラスに、時には叙情味溢れるメロディをじっくりと聞かせてくれる。現在でも順調にアルバムを発表し続けているが、レーベルをEMIに移籍後は、国内盤は発売されず、かつてのポリドール盤もすべて廃盤になってしまい、残念な限りだ。〔飯〕



FLYTE (Belgium)
Dawn Dancer

DON QUIXOTE
DQ-40.002 廃

A: Woman
Heavy Like a Child
Grace
You're Free I Guess
B: Brain Damage
...You're Breath Enjoyer
King of Clouds
Aim at the Head

フライトのデビュー・アルバムは、どこか日本的で哀感を持ったイントロで幕を開ける。手許のレコードにはメンバー等がクレジットされたカードが付いていないので、詳しい事は分からないが、レーベルはオランダのドン・キホーテ、恐らく70年代後期の自主製作と思われる。ダブル・キーボードの7人編成はイタリアのロカンダ・デレ・ファーテと同じであるが音質は異なる。軽々しい比較は避けるが、大雑把に言えば本作の場合、泣きのメロディーをふんだんに盛り込みながらも、あくまでも中心は軽快なテンポの曲で、音的には彼らよりも幾分硬質的である。女性の横顔をあしらったジャケットはなかなか美しく、さわやかで澄み切った音を端的に表わしている。（江）

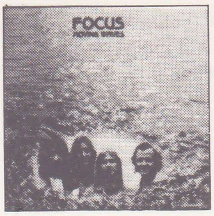


FOCUS (Holland)
In & Out Of Focus

POLYDOR 2310 085 廃
ポリドール MP-2330 廃
1970年

A: Focus
House Of The King
Why Dream
Happy Nightmare
B: Anonymous
Black Beauty
Focus

オランダの生んだ、最もインターナショナルな成功を得たグループ、フォーカスの記念すべき1stアルバムである。後のような円熟味は未だ感じられないが、早くもフォーカス節とでもいうべきものを確立しているのを見のがすわけにはいかない。この後2nd「Moving Waves(71)」、3rd「Focus 3(72)」、4th「At The Rainbow(73)」、5th「Hamburger Concerto(74)」、6th「Mother Focus(75)」とリリースするが、6thを最後にギタリストのヤン・アッカーマンが脱退、アウト・テイクスを集めた「Ship Of Memories」、フォーカス・ラスト・アルバムである「Focus Con Proby(78)」をリリースして空中分解してしまう。リーダーのタイス・ヴァン・レールはフォーカス在籍時から続々とソロ・アルバムを作成して現在に至る。（山）



FOCUS
Moving Waves

英POLYDOR 2931 002 廃　ポリドール MP 2311 廃　1971年

A: Hocus Pocus
Le Clochard
Janis
Moving Waves
Focus II

B: Eruption
I) Orfeus, Answer, Orfeus/II) Answer, Pupilla, Tommy, Pupilla/III) Answer, The Bridge/IV) Euridice, Dayglow, Endless Road/V) Answer, Orfeus, Euridice

有名な〝悪魔の呪文(A-1)″を含むフォーカスの2ndアルバム。リズム・セクションを一新しており、ベースがシリル・ハヴァーマンス（本作後脱退)、ドラムスがピエール・ヴァン・リンデン（後にトレイスに加入）に替わっている。彼等は本作のイギリスでの成功を機に、〝オランダにフォーカスあり″とその名を世界中に知らしめることになる。A面に収められた小曲は中世音楽、ジャズ、ロックの素養を十分に活かしながら、清楚で美しいメロディーが理想的なポピュラリティーをも獲得している。B面の組曲は構成がややラフだがタイス・ヴァン・レールのオルガン、ヤン・アッカーマンのソロがたっぷりとフィーチャーされ、特にアッカーマンの表情に富むプレイは後年の人気をうかがわせるものだ。（古）



FOCUS
3

IMPERIAL 5C 188 24753 '72 廃

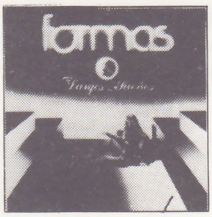
A : ROUND GOES THE GOSSIP...
LOVE REMEMBERED
SILVIA
CARNIVAL FUGUE

B : FOCUS III
ANSWERS ? QUESTIONS !
QUESTIONS ? ANSWERS !

C : ANONYMUS II (PART 1)

D : ANONYMUS II (CONCLUSION)
ELSPETH OF NOTTINGHAM
HOUSE OF THE KING

ジャズとロックとクラシックが70年代というフィールドで不思議な融合を遂げたグループ、フォーカス。彼等の3枚目の作品である。シングル・ヒットした小曲シルヴィアを含む2枚組で、大作としては雄大はFocus 3〜Answers ?..., Anonymus II、又、小曲としてもそれぞれ個性的な輝きを持つ作品群である。フォーカスはタイスとアッカーマンという個性のぶつかり合いから良作を残したが、それはすなわちジャズとクラシックをロックという枠の中でぶつかり合わせたとでも表現できるのではあるまいか。構築的な音楽水準(タイス)の高さもさることながら、アドリヴ・プレイ（アッカーマン）のすさまじさが印象に残る。ＰＦＭと並び、我々の目をヨーロッパにむけさせたグループでもある。（山）



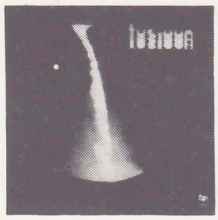
FORMAS (Spain)
Largos Sueños

SSD-5004 廃　1981年

A: Solea
Surtidores
Ahi, Abajo, La Tierra
La Gitanilla

B: Primer Amor
Elegia A Mis Poetas
El Viejo Artista
Aroma Sureño

81年に発表されたフォルマスという正体不明のグループの恐らく唯一のアルバムである。流れる様なキーボードに力強いヴォーカルとスペイン独特の音色のギターがからむ。効果音の入れ方も新鮮な感じがする。メンバー全員の名は分からないが、プロデュースにホセ・アロンソ・フェルナンデス（カイのギタリストと同一人物かは不明）があたり、アントニオ・ガルシア（グラナダのベースと同一人物かは不明)、先のフェルナンデス、マニュエル・ロペス、ジュリオ・マッティノなどの人物が作曲者としてクレジットされている。スペインでは知名度の低いフォルマスだが、このアルバムは聴きごたえのある好アルバムである。（青）



FUSIOON (Spain)
same title

BELTER 75-020 廃　1972年

A: Danza Del Molinero
Ya Se Van Los Pastores
Ses Porqueres
Pavana Española

B: Negra Sombra
En El Puerto De Pajares
Rima Infantil
El Cant Dels Ocells

フシオーンの1stアルバム。(彼らは3枚のアルバムを残しているが後作になる程円熟味が増している。）本作はピアノが印象的な好アルバムで後の2作に比べ荒削りであるがアコースティックな面に重きを置いた曲作りは素朴な中にも味わいがあり、非常に聴き易い仕上りになっている。プログレ然とした派手さはないが、時折顔を出すバイオリンがみずみずしさを感じさせる。今世紀前半に活躍した現地の著名作曲家、マヌエル・デ・ファーリャのナンバー等も含まれており、当時の概念で言えば彼ら自身としては一定の方向性は持ちながらもポピュラーアルバムの延長線上に位置付けられていたものと判断できる。いずれにしても、72年の時点でこれ程のアルバムが存在していたということは非常に興味深い。（江）



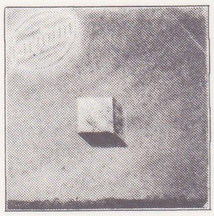
FUSIOON
same title

BELTER 22-809 廃　1974年

A: Farsa del Buen Vivir
Contrastes
Tritons

B: Dialogos
Concerto Grosso

74年発表の第2作。ジャケはワニをあしらったユーモラスなものだ。ピアノに加えシンセ類も多用した大胆なキーボードワークを披露、前作よりもずっとプログレッシヴな内容である。音的には3rdに近く、クラシカルな展開を随所に織り込みながらも一方では準アヴァンギャルド的な要素も採り入れ、全面を通して非常に密度の高い演奏を聴かせる。1stにはメンバーのクレジットが無いので正確なことは判らないが、本作以降はバイオリンなしの4人編成で、全てオリジナル・メンバーだと推測される。グループのリーダーシップをとるのはキーボードのマヌエル・カンプで、本作では全ての曲を手がけており、弟(?)のホルディ・カンフ（ベース）が詞を付けている。（江）



FUSIOON
Minorisa

ARIOLA　キング K22P-245 廃　1974年

A: Ebusus

B: Minorisa
Llaves Del Subconsciente

フシオンの最終作にして最高作である。通り一辺倒のスペインのグループとは一味違った作風を誇るフシオンは巧みにアヴァンギャルドな音創りを取り入れ70年代前半に彼等のサウンド・ボルテージを極限にまで高め、解散してしまった惜しむべきグループである。広範囲な音楽性は彼等の音楽的素養が極めて多岐に渡っていたことを証明している。この音楽性は手段こそ違え、ムジカ・ウルヴァナやパウ・リバあたりと共通点のありそうなもので、ドラッグ・カルチャー及びアシッド・ミュージックとの関連性を無にしては決して語り切れない種類のものである。極めて粘着性のあるポリ・リズムを多用した音創りで、時としてみせるブラック・ユーモアのセンスも抜群である。（山）



GALAXY-LIN (Holland)

same title

POLYDOR 2925 037 廃　ポリドール MP 2446 廃　1974年

A: Traveling Song
Boy For Sale
Mean Love
Rain And Snow

B: Utopia
I Look At My Watch
Curiosa

ギャラクシー・リンは74年にロビー・ヴァン・レーヴェン(mandolin) により結成された。このバンドのサウンドを語る時、ロビーの経歴――あの「ヴィーナス」「悲しき鉄道員」等のヒット曲を持つショッキング・ブルーのリーダー／リード・ギタリストであること――を語るよりも、ツイン・マンドリン、木管、ベース、ドラム、ボーカルという編成を語った方が意味があるかもしれない。勿論、A-4の様に、ショッキング・ブルー調の曲もあるが、ディック・レムリンク(sax, fl) の好プレイとヒューゴー・ヴァン・ハーステルドとロビーによるマンドリン・セクションのからみに注目すべきであろう。収録曲中A-2、B-1,3はインストゥルメンタルで、編成を活かした幽幻なサウンドを展開している。 (Chihiro S.)



GOMA (Spain)

14 Ablil

MOVIE PLAY GONG S-32.677 廃　1975年

A: Aqul Y Ahora
Madre Tierra
Pellizco

B: Un Nuevo Abril Sin Sal
Shootin' Up

75年に発表された本アルバムはゴマの1 stアルバムである。アルベルト・トリビオのキーボードは激しくまた哀しい変化に富んだプレイをしている。ペペ・サンチョスのサックスはプログレの音としては軽いが、マニュエル・ロドリゲスのスパニッシュ・ギターは聞く者を魅了する。また、ピヴのエフェクトも曲をより一層聞きごたえのあるものとしている。カナリオスの中心人物テディ・バウティスタも協力したこのアルバムはスパニッシュ・ロックの中でも高水準の音楽性を持つ貴重な一枚であり、ユーロ・ファンの期待を決して裏切ることはないだろう。この不思議な魅力を持つゴマは、79年に2 ndを発表するが、メンバーが全員変わっている。 (青)



GOTIC (Spain)

Escenes

MOVIE PLAY 17.1302/6 廃　1978年

A: Escenes De La Terra
En Festa I De La
Mar En Calma
Imprompt-1
Jocs D'ocells
La Revolucio

B: Danca D'estiu
I Tu Que Ho Veies Tot
Tan Facil
Historia D'una Gota
D'aigua

ファンタジックなデザインかつ美しい色合いのジャケットに包まれたゴティック唯一の作品である。小気味よいリズムをバックに、フルート及び各種キーボードが叙情味溢れる、透明感に富んだ演奏を繰り広げる。ゲスト参加のギターも無理なくバンドと一体化している。美しさという点において、彼らのサウンドはおそらくスペイン一を誇るものであろう。次から次へと移り変わるドラマチックな曲展開も素晴らしい。スペインの〝キャメル〞という呼称が決して的はずれでないことを痛感させるファンタジックな内容のレコードであり、スパニッシュ・プログレッシヴ・ロックを代表する名盤である。なお、本作を発表した後グループは解散した。 (賀)



GRANADA (Spain)

Hablo De Una Tierra

MOVIE PLAY GONG S 32.643 廃　1975年

A: Granada
Rompiendo La
Oscuridad
Hablo De Una Tierra

B: Nada Es Real
Es El Momento De Oir
Un Buen Rock

スペインのプログレッシヴ・ロック・シーンにおけるビッグ・ネームであるグラナダのデビュー作。一応バンド名義の作品であるが、fl, vln, key, g, per, vo, comp とマルチ・プレイヤーぶりを発揮するリーダーのカルロス・カルカモと他の3人のメンバー(e-g, ds & per, b) との間にはかなり力量の差があり、実質的にはカルカモのソロ・アルバム的色彩が強い。そうしたこともあってか、全6曲中半数の曲にゲストが参加している。中でもA-3の出来は秀逸である。メロトロン、コーラス、リズム・セクションをバックにフルート、ピアノ、スパニッシュ・ギター（ゲスト）が素晴らしいソロを展開する。それは正にスペインならではの演奏と言える。アルバム全体としては彼らの3枚の作品中最もハードな内容である。 (賀)



GRANADA

España, año 75

MOVIE PLAY GONG 17.0824/4 廃　1976年

A: El Calor Que Pasamos
Este Verano
(Por Donde Andamos/
Todo Hubiera Sido Tan
Bueno/La Autentica
Cancion Del Verano/
No Me Digas Bueno,
Vale)

B: Septiembre
Noviembre Florido
Ahora Vamos A Ver Que
Pasa

グラナダは70年代後半のスパニッシュ・プログレッシヴ・ロック全盛期を代表するグループの1つである。本アルバムは彼らの第2作目にあたり、マルチ・プレーヤーであり、実質的にはグラナダそのものとでも言うべきカルロス・カルカモの他、g, b, ds, saxの4人が参加している。楽器間の複雑なからみはなく、1つの楽器が前面で順次ソロを取り、他はそれをサポートするという曲構成になっている。そこではシンセサイザー、マンドリン、フルート、クラビネット、ギター、サックス等が安定したプレイを展開する。ギターとサックス以外全てのソロをカルカモが取り多才さを見せつける。そのサウンドはクラシック、ジャズ、民族音楽の香りがほのかに漂うテクニカルなプログレッシヴ・ロックと言える。 (賀)



GRANADA

Valle Del Pas

MOVIE PLAY GONG 17.0908/1 廃　1978年

A: No Se Si Debo
Breve Silueta De
Color Carmin
Noches Oscuras,
Ocas Contentas
Himno Del Sapo

B: Valle Del Pas
Calle Betis
(Atardeciendo)
Ya Llueve

グラナダ最後の作品となった3 rdアルバム。カルロス・カルカモ以外の全てのメンバーが一新されており、オーケストラの導入、バグパイプの使用、カルカモ以外のメンバーの曲作りへの参加（2 ndまでは1 stに1曲共作があるだけで他は全てカルカモの曲）等、新たな試みも為されている。音的にはエレクトリック・ギター、シンセ主体のややハードな部分とフルート、アコースティック・ギター、バグパイプを中心にして時折オーケストラが絡むメロディアスでクラシカルな部分があるが、いずれも楽器間の調和が素晴らしい。曲の展開もドラマチックかつ非常にスムーズである。カルカモの才能が見事に花開いたグラナダの最高作であり、スペインのプログレッシヴ・ロックを代表するレコードと言える。 (賀)



GUADALQUIVIR (Spain)

same title

EMI 10C 062-021 534 1978年

A: Guadalquivir
Baila Gitana
Cartagena
Generalife

B: El Manglis
Dominga
La Danza De Los Tigres

グァダルキヴィールのファースト・アルバム。ダブル・ギター、ベース、ドラムス、サックス&フルートのレギュラー・メンバーに数人のゲストを迎えて製作されている。その演奏はロック、ジャズ、フラメンコといった音楽的要素がバランスよく融合されたものとなっている。曲は各種楽器のソロを中心に進行する。そこではこの種のグループにありがちなテクニックの見せびらかしがなく、ただ聴き易いだけのフュージョン・ミュージックとは異なった、各フレーズが生きたドラマチックな曲展開を見せている。80年にはイスベルグのキーボード・プレイヤーであるキトフルスらの協力を得て、本作品と同系統の「Camino Del Concierto (EMI 10C 064 021676)」を発表、現在も活動を続けている。（賀）



GUALBERTO (Spain)

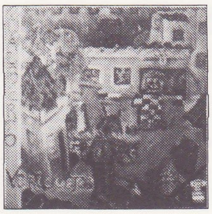
same title

MOVIE PLAY/GONG S 32.645 廃 1975年

A: Canción de la Primavera
Canción del Agua
Canción de la Nieve
Canción del Arco Iris
Cancion de los Gavio Gaviotas

B: Terraplén
Prisioneros
Tarantos (para Jimi Hendrix)
Diálogo Interion

トリアナ、グラナダとともにムーヴィー・プレイ＝ゴングのロックを代表する存在であるガルベルト・ガルシアの1stアルバム。そのサウンドはA、B面で大きく異なる。A面はトッド・ブルセルの素朴なボーカルをガルベルトの各種ギターとアルト・ウォールのバイオリンを中心としたバックがサポートするといった構成になっており、曲名に象徴されるほのぼのとした内容である。一方、B面はインスト指向の曲が並んでおり、フラメンコの要素を大幅に取り入れた演奏、エレキ・ギターを前面に押し出したヘビーな演奏、スパニッシュ・ギターとバイオリンのデュオによる叙情性溢れる演奏等を聴くことができる。なお、グラナダのカルロス・カルカモ(fl)がA-3、A-5にゲスト参加している。（賀）



GUALBERTO

Vericuetos

MOVIE PLAY GONG 17.0826/8 廃 1976年

A: Luz De Invierno
Continuando El Dialogo
! Corre, Vuela, Que Te Pillo!

B: Noche De Rota
La Mañana Siguiente

ガルベルトの2ndアルバムであり、彼の最高傑作でもある。前作にはボーカルを重視した曲も含まれていたが、本作はボーカルレスの完全なインスト作品である。アルトゥール・ウォールのリリカルなバイオリンとガルベルトの変幻自在なギターを要としてキーボード、ベース、ドラムスが一体化した演奏はスパニッシュ・ロックの最高峰に位置するものである。曲はゆったりかつ澱みなく進行しドラマチックな展開を見せる。音の傾向が固定化したアーティストが多いスペインにおいて、彼らの変化に富んだ音作りは貴重なものと言える。なお、ジャケットの内側にはそれぞれの曲を象徴する5枚の絵が描かれている。この作品以後、3rd「Otres Dias (Movie Play Gong 17.1473) 79年」及びアグジタスとの共作を発表している。（賀）



IA-BATISTE (Spain)

Un Gran Dia

DIABOLO 27.010 '72 廃

A: UN GRAN DIA
MAX
SIFON
SLEEPING ROCK
OLIBA

B: AMERICA TU YOU
PALLARES
SKY INTO THE BUS
ANNA
MORRISSONG

ロス・キャナリオスの「四季」はスパニッシュ・ロック界にとっては画期的なものであり、出発点ともなったレコードであったことは疑う余地がない。しかし、それ以前('74)のレコードが顧みられないのは非常に残念なことである。この紹介する2人組、Ia Clua と Jordi Batiste が '72年に残したアルバムは、スペインの友人から無造作に送られて来たレコードの1枚だった。ジャケットが何の変てつもないため、試聴したのは届いてから1ヵ月後という始末だった。内容的にはフォーク・ロックと呼べそうで、生ギターとヴォーカルが中心である。ところが、A面は切れ目なく進行し、中間に到っては、ハードなサウンドから、オルガンで一転してコーラスとブラスがサウンドを盛り上げる。この辺は実にすばらしい。B面ラストもミステリアスな雰囲気が有ってフォーク・ロックと呼べないものがある。（吉）



IBIO (Spain)

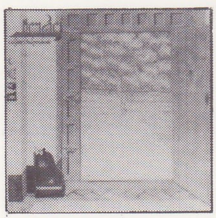
Cuevas De Altamira

GONG 17.1341/6 廃 1978年

A: Cuevas De Altamira
Romance Pel Conde Lara
La Vil ulencia Del Ferrocarril
Las Chicas De Laredo

B: A Lo Alto Y A Lo Bajo
Pastor
La Baila De Ibio

太古へと想いを馳せらされるアルタミラ洞窟を描いた美しいアルバム・カヴァーに包まれたイビオ唯一のアルバムである。78年のスパニッシュ・ロックとしては、サウンド・タイプ、演奏力共に平均的な作品である。ドラムスのイトー・ルナ（日本人）、エレクトリック&アコースティック・ギターのディオニ・ソブラド、ベース・ギターとヴォーカルのリリ・アレグリア、エレクトリック・ピアノ、クラヴィネット、シンセサイザー、ソリーナのマリオ・ゴメスの4人編成。リズム・セクションが他のスパニッシュ・ロック・グループと比べると弱いような感じを受けるが、他はほどよく小じんまりとまとめあげられている。中堅的なイメージを受けるグループである。（山）



IMAN (Spain)

Califato Independiente

CBS S 82843 '78 廃

A: TARANTOS DEL CALIFATO INDEPENDIENTE

B: DARSHAN
CERRO ALEGRE
CANCION DE LA ORUGA

元ゴマのギタリスト、マニュエル・ロドリゲスと元ガルベルトのキーボーダー、マルコス・マンテロが中心となり結成されたイマンのデビュー作。A面1曲、B面3曲から成るこの作品は、初期キャメル風インストあり、スパニッシュ・フュージョンあり、局部的にはピンク・フロイドの影響さえ感じられる、といった具合で、良く言えば多彩、悪く言えば掴み所のはっきりしない作品だ。それでも全体的に軽快な音に仕上げている所が魅力的で、居並ぶスパニッシュ・ロック・グループの中にあって平均点以上の出来である事は間違いない。プロデュースはカナリオスのテディ・バウティスタ。完成度はともかく、プログレ風の作風を求める向きには次作より本作を推す。なお本作品がイタリアでも発売された事は興味深い。（城）

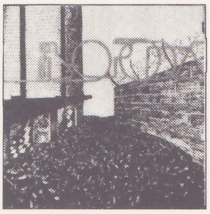


IMAN (Spain)
Camino Del Aguila

CBS　　1980年
S84277 廃

A: La Marcha De Los Enanitos
Maluquinha
A: Camino Del Aguila
Niños

ＣＢＳの三大バンドの１つ、イマンのセカンド・アルバム。ファーストに比べるとかなり洗練された内容である。全体を貫く流れるようなラテン・フュージョンの感覚に、ジャケットに象徴される幻想的なスパニッシュ・プログレッシヴ・ロックのエッセンスを織り込みながら、聴く者をいつしかイマン独自の世界へと引きこんでしまうその構成力は見事である。編成はギター、キーボード、ベース、ドラムスとオーソドックスだが、多様なトーンの配し方と随所にフィーチャーされるイマジネイティヴなソロにより壮大な空間を創り上げる。この透明感とラストのヴォーカル・ナンバーの叙情性はスペインでは異色と言えるだろう。（久野真澄）

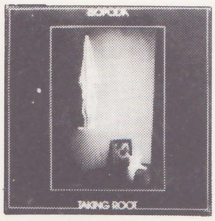


ISOPODA (Belgium)
Acrostichon

TWINKLE　　1978年
BGL 730 108-201 廃

A: Acrostichon
The Muse
Watch The Daylightshine
B: Don't Do It The Easy Way
Considering

イソポダは２枚のアルバムを発表しているベルギーのシンフォニック・ロック・グループである。２ndはウァルター・クリスチャン・ロートと同じLARKレーベルよりリリースされている。(「Taking Root」LARK 3528）この１stは初々しい彼等のサウンドがつめ込まれた好アルバムに仕上がっている。ジョーンズィー風のジャケット、イエスを意識した構成とブリティッシュ・プログレッシヴよりの強い影響を感じるが、単にコピー的ではなく十分にオリジナリティーが感じられる。２ndになるとタイトな感じになっているのだが、パワーはやや落ちてしまっている。ヴォーカル、ギター、ベース、キーボード、ドラムスの５人編成であり、Ａ-２でオルガンを弾いたGUIDO（78年に死去してしまった）に捧げられたアルバム。（山）



ISOPODA
Taking Root

LARK　　1981年
3528 廃

A: Taking Root
The Usual Start
Endless Streets
Sunset Alley
B: Harbingen
Girls Will be Girls
The Fall
O.K. With Me
Join With The Streams

イソポダのセカンド・アルバム。ファーストはvo,g,key,b,dsの５人編成だったが、ギタリストが脱退してしまったため、本作品はベーシストがギターも兼任する４人編成となっている（キーボード奏者も交替している）。内容的には前作同様、イエス、ジェネシスといったブリティッシュ・プログレッシヴ・ロックの影響を感じさせるものであるが、ファースト・アルバムより音が洗練されており明るい印象を与える。全９曲中７曲が唄入りの曲であり彼らのボーカル重視の姿勢が窺える。多少なりともジャズの影響を受けたアーティストが多いベルギーのプログレッシヴ・ロック・シーンにおいて、イソポダはフライトとともにシンフォニック・ロックの双璧をなす存在であると言える。（賀）

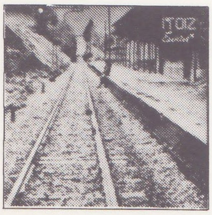


ITOIZ (Spain)
same title

XOXOA　　1978年
X 11.101 廃

A: Phuntzionariat
Goizeko Deihadar
Zati Txiki Bat "Lam'en"
Lau Tei Latu
B: Hilzori
Hilzori II
Foisis Jauna
Astelehen Urdin Batean

イトイスの１stアルバムである。彼等はスペインの辺境地方バスク地域で活躍しているグループである。本アルバム（１st）及び２ndがXOXOA(＝ショショアと発音する）レーベル（このレーベルのアーティストは田舎くささを漂わす多少なりともトラディッショナル志向の感じられるものが多い――イツィアール、イスガイス、エンボル、エロビ等々)、３rd及び４th（84年作）がELKAR（エルカール）よりリリースされている。現在でも活躍中のグループである。女性的なナイーヴさを持つヴォーカルを中心として、フルートやキーボード群がからみあうサウンドは荒削りながらもすでにイトイス節とでもいうべき暖かさを伴う叙情を確立している。オリジナルは観音開きになっている変型物である。（山）



ITOIZ
Ezekiel

XOXOA　　1980年
X 11.130 廃

A: Ezekielen Prophezia
Ezekielen Esnatzea I
Ezekielen Esnatzea II
Ezekiel
B: Ezekielen Ikasgaia
Ezekielen Ikas Ametsa
Ezekiel: Ia Maitasun
Kantu Bat

バスク地方の片田舎の駅に青年が一人佇む淡いモノトーンのジャケットが本アルバムの内容をほどよく表わしている。１stですでに確立されたサウンドはより洗練され、個々のテクニックもレヴェル・アップしている。さらに子供や女性ヴォーカル（彼女はソロ・アルバムを発表している―ITOZI-AR参照）をゲストに迎えより幼年時代への憧憬を感じさせることに成功しているようだ。数あるスパニッシュ・ロックは力でおしまくるものが多いが、歌を大切にしながら夢みるようなサウンドを創りあげるこのグループはそれらのグループとはあきらかに一線を画している。初恋の女(ひと)に恋こがれるような切なさをこのグループは持っている。もどかしいような、ういういしい見果てぬ少年の夢――そんなロマンティックな内容である。（山）

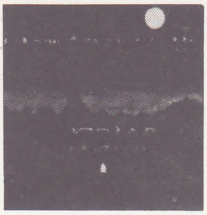


ITOIZ
Alkorea

ELKAR　　1982年
ELK 51

A: Beheko Plaza
Hire Bideak
Ixilik Egon Hadi...
Ixilik!
Errotaberri
B: Landrora
Marilyn: Sagardotegia
Eta Jazz Mana
Herri Neurak
Eroa Nezan
Hemen Gaur

２作目が多数のゲストを加えて製作されたのに対し、本３作目では極めてシンプルな音造りがなされている。前２作の中から本当に必要なものだけを抽出し、ソフィスティケイトさせたそのサウンドは一見ポップになったような印象を受けるが、実は彼等のより進化した形であり、演奏水準も確実にアップしている。ナイーヴなヴォーカル・パートを中心にシンプルなアレンジで淡々と進行する本アルバムはそういう意味でイトイス本来のサウンドが最も鋭角化されたアルバムということができる。特にＢ-４、Ｂ-５あたりの曲想はそれが最も端的に示された好例である。彼等はこのあと４枚目をリリースしているが、若干パワーが落ちてしまっている。（山）



ITZIAR (Spain)
same title

XOXOA 1978年
BI-1051 廃

A: Ameskoi
Espetxeratuarena
Manifestu Atzeratua
Harri Eta Herri

B: Gauaren Iratsoa
Mendigoxaliarena
Haizearen Gogoa
Beartsu Fameliak?
Agur Mikel

イツィアールとは本名をイツィアール・エギレオール（バスク語の発音に依る）といい、イトイスの２ndアルバムにゲスト参加している女性ヴォーカリストである。内容的にはイトイスの作風を女性ヴォーカルが歌ったという感じで、とても哀愁のある素晴らしいアルバムである。イトイスと同様にバスク語（バスク地方はスペインとフランスにまたがる人口50万の地方で、ヨーロッパ最古の民族といわれ、その言語はスペイン語にもフランス語にも似ていない独特のものである。最近の若者はバスク語を解さない者もいるらしく、文化は危機に瀕しているらしい。）で歌われており、その独特の節まわし、発音にはバスク歌謡の独自のアイデンティティーを感じることができるだろう。ここには歴史と文明が見事に融和している。（山）



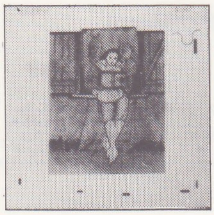
JULVERNE (Belgium)
Coulonneux

IBC
4B058-99069 廃

A: Le Fils Du Roy Est Névrosé/Joyeux Noël, Cap'tain Nemo!/Franklin Prend Son Thé Chaud/Savez-vous Planter Du Chanvre?/
Valse Cirque I

B: Prout De Mammouth
Communiqué Gouvernemental
Valse Cirque II
't Kofschip
Trois Trois Deux

ジュルヴェルヌはチェンバー・ロック・ミュージックと称されるアーティストの中では比較的趣味的なサウンドを得意とするグループである。アコースティック楽器を使用し、多方面からの音楽的素養の深さを感じさせるが、それはエリック・サティいうところの「遊び」の精神によって統合され、再構成されていく。本作はそんな彼等の１stアルバムで、現在までに３枚のアルバムを発表して、尚活躍中である。（最新作は84年。）どの作品もレヴェルは高く作風も似かよっているが、この１stアルバムを最高作とする人は多い。ピエール・クーロン（フルート）、ミシェル・ダイェズ（ギター）、ジャノー・ジラス（ヴァイオリン）、ジャン・ポール・ローラン（ピアノ他）の４人の他、ヴァン・エッケ等のゲストが参加している。（山）



JULVERNE
À Neuf

CRAMMED DISCS
CRA274 廃

A: 3 Pièces Dépareillées
—pasticcio
—un peu pretentieux
—polka
Spiering

B: Impuissance
La Joie Parfaite
Infractus
Layettes

リコメンディッド・レコードを通じ国外にもディストリビュートされたジュルヴェルヌの２ndアルバム。ピエール・クラン(fl, sax)、ジャン・ポール・ローラン(pf, fl)、ジャンノ・ジル(vln, tuba)を中心とした室内楽的作品である。ミッシェル・ベルクマン(bassoon)も参加しており、より緻密で、又、それでいて遊び心も忘れていないという、前作以上の出来映えとなっている。彼等は打楽器抜きの編成であるにもかかわらず、変則拍子、クロスリズムも気持ち良くこなしている。こんな書き方をすると、アール・ゾワイ等との親交から、彼等に似たサウンドを予想する向きもあるだろうがむしろZNR（仏）等の好きな人にすすめたい。（Chihiro S.）



JULVERNE
Emballade

HASARD HAS 037 '83 廃

A. LE SHEIK
SOLACE
MOON SONG
LE BONHEUR DES DAMES
TU ME PLAIS
LONG LOST MAMMA

B. CARAVAN
MAMMA LOVES PAPA
MEJICO TANGO
ORIGINAL RAG5.
WAHEN LIGHTS ARE LOW

ジュルヴェルヌの3rd。グループの持つ懐古趣味を思う存分前面に押し出した異色作である。収録された11曲はいずれもスコット・ジョプリン、デューク・エリントンら他人の曲であり、世紀末からアール・デコの時代を経て第２次大戦に至る古き良き時代の名曲である。ラグ・タイム、スイング、そして、シャンソン。その陽気なサウンドはどこか哀悲しさも秘めている。それは人生の苦しみを隠し、一時の快楽を求めてカフェに集う人々を迎えるための音楽である。極端にウエストを締めつけた若い女性が自転車に乗った姿を描いた年代を感じさせる色合いのジャケットも秀逸である。なお、３年間のブランクを置いて'86年には一転クラシカルな4thアルバム「Ne Parloms Pas De Mahleur〈IGLOO IGL 042〉」を発表した。〔賀〕



KANDAHAR (Belgium)
Pictures From The Past

CIP 143.026 廃 1978年

A: D.O.M.
Azucar
Virus
Mise Au Chateau
Synchron
Feeling Blue

B: Pictures From The Past
Darkness
Floating Pearls
Theme From "Tuin Der Lusten"(Miharca/Teloc/Zenon/Lais/Finale)

「In The Court Of Catherine Squeezer (IBC 4C 062 96846)」「Long Live The Sliced Ham (DWARF LP1)」に続くカンダールのラスト・アルバムである。B-4を除くすべての曲でギターとサックスをメインにヴィブラフォーン、エレクトリック・ピアノ等のソロも取り入れたジャズの香り漂うソフトでメロディアスな演奏を聴くことができる。そして、このアルバムのハイライトが９分強に及ぶB-4の組曲である。鳥の声、雷を伴った雨の音、波の音といった効果音をバックに、弦楽器、ピアノ、ギター、サックスをフィーチャーして曲はクラシカルな展開を見せる。中でも弦楽器とピアノの演奏は叙情溢れる素晴らしいものである。この作品以後のメンバーの動向に関しては残念ながら現在までのところ分かっていない。（賀）



KAYAK (Holland)
Starlight Dancer

VERTIGO フォノグラム 1977年
6360-856 廃 RJ-7373 廃

A: Daughter Or Son
Starlight Dancer
What You To Be Mine
Letdown
Irene

B: Golddust
May
Turn The Tide
Dead Bird Flies Forever
Sweet Revenge
Where Do We Go From Here?

デビュー作「See See The Sun(73年)」、2nd「Kayak(74年)」、3rd「Royal Bed Bouncer(75年)」など高水準のアルバムを発表しているカヤックの最高作となると、迷ったあげく５枚目に当る本作を選ぶ。初期にみられたプログレッシヴな要素は影を潜め、そのポップさによって、ユーロ・ロック・ファンには無視されているかもしれないが、クラシカルなピアノと親しみ易く美しいメロディは健在である。また、ゲスト・プレイヤーにリック・ヴァン・ダー・リンデンが参加しているのもうれしい。とりわけ、B-5,6のインストゥールメンタル部は初期の面影を残している曲であり、彼らの代表曲「ウインター・ソング」のような華麗な曲ではないが、A-5、B-2,3も好ナンバーである。（吉瀬孝行）



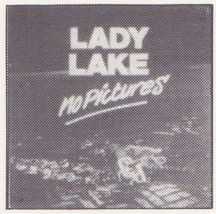
JOHN KERR (Holland)
Cathedral

WOODPECKER 88.074 '83 廃

A : WHERE MY HEART IS
SPRING OF ETERNAL YOUTH
THE MOUNTAIN SLEEPS
SUNRISE
SPIRITS OF THE EARTH
I'M ON MY WAY

B : GATHERING OF THE SPIRITS
FOND FAREWELL
GOBLIN
EDGE OF ETERNITY
FOR EVER & EVER
SUNSET

ジョン・ケール（ヴェルヴェット・アンダーグラウンドのジョン・ケールとは別人）はオランダのエレクトロニクス奏者で、現在までに3枚のアルバムをリリースしている。ジャケットの美しさとメモリアル的な意味合いでこのファースト・アルバムを紹介しておく。彼の作風はプログラムされたリズム・シーケンスの上にリリカルで感覚的なキーボードが乗るスタイルで、フランスのエデン等に通じるもの。雲の上に浮かぶ架空の古城を描いたジャケットが彼のリリカルな音を物語っているかのようである。ただ、ソロ作品であるので、グループ演奏のようなダイナミズムに欠け、それが線の弱さに結びついてしまう点がいささか残念である。しかし、近年増えつつあるシンフォニック系スタイルのエレクトロニクス作品として確実に水準以上のものを聴かせてくれる。（今）



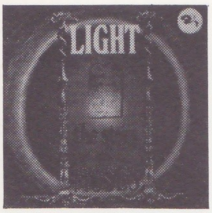
LADY LAKE (Holland)
No Pictures

Q RECORDS BW1001 70年代後半 廃

A: CORNWALL
MAGIC TWANGER
FADING TREES

B: YOU MAKE ME FEEL SO FINE
NO MORE GENTLE TREATMENT
BETWEEN BREMEN AND HAMBURG

オランダのインスト中心の4人組となるとどうしてもFinchを思い起こす。Lady Lakeと名乗る彼らが望む、望まないにかかわらず、比較せざるを得ない。かなり影響を受けているのは確かで、彼らが生ギターを頻繁に使用するのでその分、叙情的な味わいを持っており、Camelに近いところもある。技術的には本家本元に及ばないまでも、全員ともしっかりしており、安定した演奏を聴かせてくれる。ゲストによるヴォーカル曲が2曲有り、いろいろな面を見せようとしている。とはいえ、曲の傾向が似ているため、全体を通して聴くと多少単調さを受ける。ジャケットは路上に置かれた二眼レフカメラのモノクロ写真で、Finchの派手なジャケットとは対照的。恐らくこの1枚を残しただけで、解散したと思われる。〔吉〕



LIGHT (Holland)
The Story Of Moses

BRAIN 1013 '72 廃

A : THE WATER
THE BLACKBERRY BUSHES

B : WHITE TURNS INTO BLACK
THE NUISANCES
THE DESERT
THE RED SEA

ライトはオランダのグループであるが、ドイツのブレイン・レーベルからたった1枚のアルバムがリリースされた。モーゼを主題にした荘厳なトータル・アルバムで、ハモンドとメロトロンの重厚なイントロダクションから幕をあけ、ドイツのWINDを想わすようなヴォーカル曲やブルージーなギター・ソロをフィーチャーした曲等バラエティに富んだ曲が収録されているが、次々と変化していく作風はリスナーの耳を飽きさせることがないように配慮されている。key, g, b, sax & fl, dsの5人編成で、時にオランダのグループらしいジャーズィーな箇所もある。多少古さはあるものの音楽的水準の高い良質なシンフォニック・グループである。内カヴァーのモーゼの版画の雰囲気も良い。仏盤もある。（山）



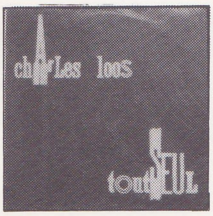
LLUIS LLACH (Portugal)
El Meu Amic El Mar

ARIOLA 1981年
25630-1 廃

A: Bressol De Tots Els Blaus
Cami Cap Un Nou Cant
Cançó De Rem I De Vela (N° XII)

B: Venim Del Nord, Venim Del Sud.../Quan L'onada
Em Durà A La Plataja
Dels Morts/La Poesia
Dels Teus Ulls/Companys, No És Això

近時、ヨーロッパ各国のシンガーに関心を寄せるユーロ・ロック・ファンが増えてきている。そして、彼らの作品の中に我々を魅了するものが数多くあることも事実である。中でもイタリアはシンガーの宝庫であり、今だ知られざる優れた作品が大量に存在するものと思われる。ポルトガルのルイス・ラックもそうしたシンガーの一人である。彼は作詩、作曲、アレンジに加えて、ピアノ、ギター等の演奏も行う非常に多才な人物である。本アルバムは海をテーマにしたもので、ラックの素朴かつ哀愁に満ちたボーカルをピアノ、フルート等によるシンプルな演奏が見事にもり立てている。それは様々に変化する海の情景を鮮やかに描き出したものと言える。曲は民族音楽風のものからロック調のものまで多岐に渡る。（賀）



CHARLES LOOS (Belgium)
Toutseul

IGLOO IGL-018 '82 廃

A : PREAMOLE-HEMATOME
ENCOR
SEPTEMBER SUN
ENCOR(E)

B : VALSE DE LA MORT
-INTERSTICE-CLEMENTINE
AJOEL
GROWLIN' FACE

キース・ジャレット、チック・コリアの成功に刺激されてか、ピアノ・ソロは一種のブームとなっており世界各国で数多くの作品が発表されている。しかし、それらの中には単に聴き易いだけのイーズィなものも少なくない。コスのオリジナル・メンバーであり、その後、アブラクシスを結成、現在もジュルベルヌ等で活躍しているシャルル・ルーもカミカゼからの「Ego-Triste」を皮切りに数枚のピアノ・ソロを発表している。本作は現時点（86年2月）での最新作であり、ジュルベルヌで知られるHasardからリリースされたものである。アコースティック、エレクトリックの両ピアノを巧みに使い分け、リリカルで表現力に富んだ演奏が展開されている。曲編成も凝っており、彼の実力が発揮されたものと言える。〔賀〕



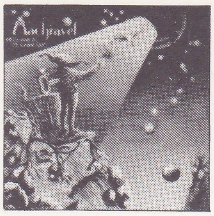
MACHIAVEL (Belgium)
Jester

HARVEST 1977年
1A 064 99289 廃

A: Wisdom
Sparking Jaw
Moments
In The Reign Of Queen Pollution

B: The Jester
Mr.Street Fair
Rock,Sea And Tree

ベルギーにあってアメリカに進出し成功しているロック・バンドとしてこのマキャベルがあげられる。77年に発表されたマキャベルの2nd「Jester」は、一曲一曲内容の濃い聞き手を遊ばせない展開である。ベルギーのシンフォニック・ロック、いやヨーロッパにおいて抜き出たロック・グループである。アルベルト・ルシュトゥールのキーボード群がサウンドの核をなしており、時には優しく、時には力強いヴォーカルがからむ。歌は全曲英語である。ジャケットや中のイラスト付きの歌詞カードは独特の不気味さがある。「ハッ」とさせられる曲展開は見事なものであり、エンジニアリング、プロデュースもしっかりしている。3rdの「Mechanical Moonbeams」は一段と向上している。（青）



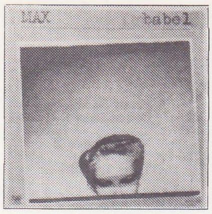
MACHIAVEL
Mechanical Moonbeams

HARVEST 1978年
1A 064 23805

A: Beyond The Silence
Summon Up Your Strength
Rope Dancer
Rebirth

B: After The Crop
Mary
The Fifth Season

2ndの「Jester」でシンフォニックな面で成功したマキャベルは、この3枚目でそれをより決定的なものにした。A面4曲、B面3曲、全て良い出来で、難しい変拍子もいとも簡単に楽しくやってしまう。さしずめシンフォニック・ロックの名盤と言える。マキャベル独特のハーモニーも美しくきまっており、マイナー調、メジャー調の曲構成、リズムの展開、盛り上がりと静かな部分、完全なまでの仕上りとなっている。B-1のメロトロンのヒューマン・ヴォイスのリズムは聴いていて爽快。またジャン・ポールデルゥのギターのテクニックも向上している。（青）



MAX (Spain)
Babel

CFE BOCACCIO 1978年
BS-32127 廃

A: Autopista
D'Una Manera Silenciosa

B: Reflexions (A Sobre D'una Canco Anonima Catalana)
Les Maquinaries De D L'Alegria
Jo Crec (Partes 1 y 2)

スペインの大物ジャズ・ロック・バンド、イセベルグは「Tutankhamon（CFE BS-32105）」「Coses Nostres（同BS-32108）」「Sentiments（同BS-32110）」「En Directe（同BS-32123）」「Arc-en-Ciel（同BS-32128）」の5枚のアルバムを発表して解散した。本作品はそのリーダーであったギターリスト、マックス・スーニィエがグループ存命中にリリースした1stソロ・アルバムである。J.K.マス（イセベルグのkey）、サンテ・アリサ（フシオンのds）、ら多彩なゲストのサポートを受けて、マックスは自由奔放にギターを弾き捲る。切れの良いリズムと一体となった演奏は軽快かつメロディアスであり、スペインのジャズ・ロック、フュージョンを代表する一枚と言える。以後、「Jocs Privats（同BS-32132）」等数枚のソロを発表、現在も活躍中である。（賀）

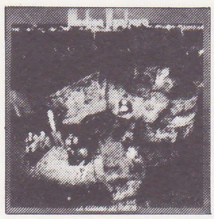


MEDINA AZAHARA (Spain)
same title

CBS : S 84014 '79 廃

MANUEL MARTINEZ - VO
JOSE ANTONIO MOLINA - DS
MIGUEL GALAN - G
MANUEL MOLINA - B
PABLO RABADAN - KBD

美しいカヴァーに包まれたMedina Azaharaの1stアルバム。ユーロプログレッシヴの華麗さ、スペイン音楽特有の異国情緒、ロックギターの持つ重々しい響き—全てを兼ね備えた好作品。キーボード系に比べギターがかなり前に出て来ている点を除けばどのパートが傑出する訳でもなく割と小ぢんまりとしたまとまりを示している。時折顔を出すフラメンコギターはとても印象的ではあるが、トリアナやアラメダの様にこれを多用することはせず、それでいてロック的な音作りに埋没しない程度のスペインらしさが色濃く漂わせてある。ある意味ではスパニッシュロックの一つの手本ともなり得べき作風だが、プログレ的見地からすればキーボード群にもう少し活躍の場を与えて欲しかったところだ。（江）



MEDINA AZAHARA
La Esquina Del Viento

CBS 1980年
S 84948 廃

A: El Rincon De Mi Mento
Sueños De Locura
Una Mañana De Mayo
Las Flores Blancas

B: La Esquina Del Viento
Me Invade Una Gran Pasion
Tiempo Del Miseria
Amanece En La Ciudad

メディナ・アザハラの2ndアルバム。1st「Medina Azahara（CBS S84014）」からメンバーの変動もなく、方向性もほぼ同一である。ヴォーカル・パートが多く、重いギターがソロをとるという型である。しかし、キーボードの音が2ndでは前面に出てきている。意表をつく展開こそないが、落ち着いたアルバムに仕上がっている。ロックと呼ぶには音創りが違うし、ポップと呼ぶには重い音である。ロック、ポップの中間に位置するサウンドであると言った方が妥当である。今回も、メディナ・アザハラ自身のアレンジで、メンバー各自のパートをしっかりとこなしている。アルバム全体を聞き通すと、これといった特徴がないのに気が付くが、これは前作同様、短かい曲構成の為、内容を把握できぬままに終るからである。（青）



MEDITERRANEO (Spain)
Estrechas Calles De Santa Cruz

APHRODITA AP 2001 '78 廃

A: ESTRECHAS CALLES DE SANTA CRUZ
MEDITERRANEO
EN MI

B: MANDRAGORA
ROLLO ATOMICO

スペインの無名のグループ、Mediterraneoの唯一のアルバムと思われる。叙情派ファンが喜びそうな曲が1曲含まれているので紹介してみよう。ＬＰのタイトルともなっている9分になるこの曲は、おだやかに幕を開け、徐々に盛り上がって行く。派手さはなく地味ともいえる音作りでスペインならではの哀愁を感じさせる。バッキングに徹しているピアノが何とも美しい。A面の他の曲は少し凝った演奏を持った歌もので、B面は12分という大作が含まれ、期待して聴くと、悪くはないが平均的なフュージョンでがっかり。A①があまりにも良すぎるため落差は大きい。スペインではこの手のバンドがたくさん有り、個人的にも興味があるので、いろいろと聴いてみたところ、まだこれはというグループにはめぐり逢っていない。〔吉〕



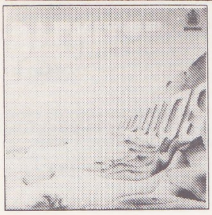
MEZQUITA (Spain)
Recuerdos De Mi Jierra

CHAPA 1979年
HS-35024

A: Recuerdos De Mi Tierra
El Biyco De Los Patios
Desde Que Somos Dos

B: Ara Buza (Dame Un Beso)
Suicidiio
Obertura En Si Bemol

しっかりしたアンサンブルに支えられたメズキータの唯一のアルバムは、スパニッシュ・ロックの中でも上位にランクされる内容を持つ。民族的な音楽を基盤として迫力のあるエキセントリックな展開で一つ一つ計算された音作りである。メンバー編成は、ギター、ベース、キーボード、ドラムスといったノーマルなスタイルだが、音楽はスペイン独特の色合いがでており、多くのユーロ・ファンが想像し得るスペインのイメージの音である。惜しくもメズキータはこのアルバム後ハードロック・バンドとなるが、残されたこの一枚がスパニッシュ・ロックの魅力を充分に伝えてくれる。トリアナやグラナダ等有名バンドの影に隠れたメズキータの音楽は決して色褪せることはない。（青）



MODULOS (Spain)
Plenitud

HISPA VOX 1973年
A HHS 11-238 廃

A: Promesas
Otra Vez
Piensa En Mi
No Quiero Pensar En Ese Amor

B: Como Un Sueño
Algun Dia Sabras Niña
Al Despertar

スペイン最初期のグループである。71年から74年にかけて1 st－REALIDAD(HHS 11-183)、2nd－VARIACIONES(HHS 11-214)、本作、4、と4枚のLP、及び5枚のシングルと一枚のベスト盤(10 MEJOR DE MODULOS/HHS 11-257)を発表して解散してしまった。初期の彼等は後期ビートルズの良質な部分を受け継ぎながらスペインらしさをブレンドしたもので、最終作である本作になるとプログレッシヴ色を強め、ヴァイオリンやメロトロンを効果的に使用しながら73年とはとても信じられない程の完成度を誇っている。カナリオスの「四季」以前にはスペインにはプログレッシヴ・グループは存在しないというのが定説であるが、実はこのモデュロスやフシオン等のグループが先鋭的な作品を生み出していたのである。（山）



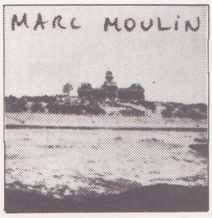
MODULOS
4

HISPA VOX (30)130 234 '74 廃

A: PARA UN MUNDO DIFERENTE
SOLO PALABRAS
AL PONERSE EL SOL
CERCA DE LAS CINCO
TU ERES TU MUNDO

B: SITU NO E STAS
SIGO SIENDO EL NINO
TAN SOLO TU
PARA QUE SEGUIR
WE'VE GOT TO GET TOGETHER
LUNA DE AGOSTO

モデュロスは70年あたりから70年代中期まで活動をしていたグループで、いわばスパニッシュ・プログレッシヴ・ロック最初期のグループということができるだろう。本アルバムは名作Plenitudの翌年にリリースされた彼等のラスト・アルバムと思われるもので、スペイン本国で84年に再発されて存在が確認されたものである。Plenitud よりも小品が増し、よりポップで歌中心な作品になってはいるが、基本的な音創りは変化してはいない。そこはかとビートルズの影響を受けながらもスパニッシュ然とした節回しのヴォーカル。メロトロンを多用した叙情味のきいたアレンジと彼等独自のオリジナリティは守られている。もちろん70年代後半のグループ達と比べると古さは感じるが、その分古き良きスパニッシュの味を味わえる。（山）



MARC MOULIN (Belgium)
Sam' Suffy

蘭CBS 1975年
80753 廃

A: Le Saule
Misterioso
From
La Blouse
La Bougie
La Beau Galop

B: Tohubohu

コスの2ndアルバム「ビバ・ボマ」やアクザク・マブールの1 stアルバムをプロデュースし、ベルギーの創造的マイナー・レーベル「カミカゼ」(4枚のアルバムをリリースして解散した)を設立したことでも知られるマーク・ムーランの唯一のソロ・アルバム。彼は本作品をリリースする以前にもファンキーなジャズ・ロック・グループ「プラセボ」を率いてアルバムを3枚発表している。ムーランは本アルバムでドラムをバックに、曲によってはフィリップ・カテリーン(g)やヤスパー・ヴァン・トフ(e-p,org)らフュージョン系のゲストを迎え、各種キーボードをプレイしている。全編に渡ってクリアーでジャズィーな音作りが成されているが、特に、B面のスペイシーなジャズ・ロック組曲は聴き物である。（賀）



MUSICA URBANA (Spain)
same title

ZELESTE/EDIGSA 1976年
UM-2033 廃

A: Agost
Violeta
"Vacas Toros y Toreros"

B: Font
Caramels de Mel
"El Vesubio Azul"

ムジカ・ウルバナはスペインではカンタベリー系の音を出す貴重な存在で、高度なテクニックに支えられたエキセントリックな曲展開は見事である。特にリーダーでゴティックのメンバーでもあるホワン・アルベルト・アマルゴスはピアノ、ムーグの他管楽器、ヴァイオリンをも操りムジカ・ウルバナの音楽をより個性的なものにしている。この後彼等は「IBERIA」(RCA:PL-35177)という2ndアルバムをリリースしているが、オーケストラとの共演という事もあり彼等の持ち味を出しきれずにおわっている。尚、ベーシストのカルレス・ベナベントはムジカ・ウルバナ解散後バニー・ブルネルの後釜としてチック・コリア・バンドに参加して、パコ・デ・ルシアと共に来日した。（長沼武司）



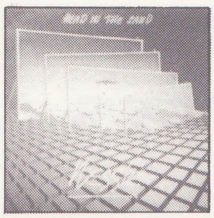
NESSIE (Belgium)
The Tree

JV-232614 廃 1978年

A: Gold Digger Ghost
The Tree
Kundalini is Rising
Love Dreamer

B: The Weapon
Vivid Memories
The World of the Tree
Rumble of Drums

ベルギーはフランス、オランダといったプログレ先進国に隣接しているため、入って来る情報量は多いようだが、活動の場となるとかなり制約されるという。そのためオランダ盤でのリリースや、国内での自主製作というケースが目立つ。本作も例に漏れず78年の自主製作。〝凄い〟と噂されていた割には全体的な軽さは否めないが、プログレ・ファンにとっては捨て難い一枚である。手法的には何ら目新しいものは無くフルート、メロトロンといったオーソドックスなもので、時に顔を出すポップなフレーズからはインターナショナルな志向が見え隠れする。特にボーカルにその傾向が顕著。アルバム全体の出来としては良い。グループはこの後、2ndアルバム「Head in the Sand」を発表、そのまま消息を絶つ。（江）



NESSIE
Head In The Sand

MD 0038 '79 廃

A: TOO MUCH MONEY
LOOKING IN YOUR EYES
A SONG OF WAR
LIGHTNING STARS

B: SPANISH SINGER
UNREAL BODY
IT'S A NEW DAY DAWNING
HEAD IN THE SAND

ひとえにヴォーカルのポップ指向のため、ほとんど良い評価を得ていない Nessie のこれは 2nd アルバム。全員がリードあるいはバッキング・ヴォーカルができるというのが、彼らの長所とも欠点ともいえる特徴であり、本作においても、一途なプログレ・ファンが耳をふさぎたくなるようなヴォーカルはまったく変っていない。それだけなら、いくら貴重盤とはいえ、即ゴミ箱行きとなるところだが、奇妙なタイトルを持つこのアルバム、前作同様、キーボードには仲々センスの良いところが感じられる。中でもA①の何度となくくり返されるリリカルなピアノの調べは美しく、このフレーズがメイン・テーマとして構成されていたらさぞすばらしかったろうにとあらぬことを考えてしまう。B③のフルートとピアノのかけ合いも良い。〔吉〕



TO NÉTO (Portugal)

Láctea

DIAPASAO DIAP 20006 '83 廃

A : ODDISSEA
LISA
CRISTAL
AFRICA BLUE

B : D.VAGABUND
DEVOCAO
ZUZU

ポルトガルという国は、スペインに隣接しているにもかかわらず、プログレッシヴ・グループの数はそれ程多くない。おまけに資料も全くないのが実情なのでシーンの概要は全くつかめない。このト・ネトなるキーボード奏者のソロ・アルバムは83年にリリースされたもので、完全に彼一人のオーバー・ダブにより製作されたものである。彼の使用する楽器は面白いことにローランド、ヤマハ、アリアといった日本製がほとんどである。感覚的なキーボード及びエレクトロニクスによる音楽で、テクニック的にいまひとつの感があるが、宇宙への憧憬を音に紡いだ製作意図には好感がもてる。他に同系統のサウンドといえば、これ又入手困難なアルバムで申し訳ないが、イタリアのブッケッリ・フランチェスコだろうか。（山）



NEURONIUM (Spain)

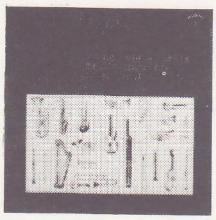
Vuelo Quimico

EMI 1978年
10C 064-021 523 廃

A: Abismos De Terciopelo
a) El Regreso De Ganimedes
b) La Llamada Del Vacio
c) Abismos De Terciopelo

B: Viento Solar
Vuelo Quimicó

ニューロニウムはスペイン初の本格的シンセサイザー・グループである。本アルバムは「Quasar 2C361」に続く彼らの2ndであり、B-2にはニコがゲスト参加している。２台のシンセサイザーとギターが作り出すサウンドは安らかなコズミック・ミュージックと表現できる。「Vuelo Quimico」は本作品のハイライトであり、ニコが朗読するエドガー・アラン・ポーの詩はあたかも無限の宇宙に響き渡る神の声のように聴こえる。本作以後、現在までに「Digital Dream」「The Vistor」「Chromium Echos」「Invisible Views」を発表している。また、メンバー関係のソロとしては、Albert Gimenesの「Un Somni P-etit」と「Imatge」、Michel Huygenの「Absence Of Reality」、更にはCarlos Guiraoの「Revelation」がある。（賀）



NOISES (Belgium)

same title

KAMIKAZE 4 廃 1977年

A: Passé Dedans, Hynne/Masaque Etnik/Tue-Toi Dans Le Vent/Ma Mere Etait Propre/Il Est Huit Heures/Rester Dans Le Silence/Les 24 Heures Du Mans/Rotative/Trois Voyelles/Romances Sans Parole/La Guerre
B: A Man/Mes Chers Compatriotes

ベルギー・ロックの黎明期に運営されていたカミカゼ・ディスクの４番としてリリースされたノイズィズは、カミカゼ・ディスクの中心人物マルク・ムーラン、そしてサクソフォンの新感覚派アリエル・カルマを含む７人によって演じられる摩可不思議なサウンドを持っている。サウンド・コラージュ、チェンバー・ミュージック、エレクトロニクスからの影響がごちゃまぜとなってまるでおもちゃ箱をひっくり返したような様相を呈している。A面は小品をつなぎあわせたもので各曲の作曲者の個性が強く打ちだされている。B面はアリエル・カルマ色の強いサウンドである。A面とB面とのリスナーの好みがわかれてしまいそうだが、あえてトータルな意味でのコラージュ的作品としての評価を下しておきたい。（山）



ÑU (Spain)

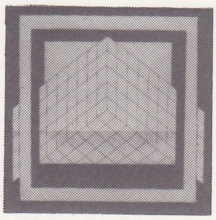
Cuentos De Ayer y De Hoy

CHAPA 1979年
HS-35007 廃

A: Profecia
Preparan
Algunos Musicos Fue ron Noso Tros
Cuentos De Ayer y De Hoy

B: El Juglar
Paraiso De Flautas

オザンナが好きな人（特に「パレポリ」、「ミラノ・カリブロ９」）には、このニューの1stを躊躇なくおすすめ出来る。飛びかうフルート、盛り上げるメロトロン、唸るギター、そして激しいドラム。特にB面はあのオザンナの混乱した世界を写し出した様であり、暗い時代を感じさせる。ホセ・カルロス(vo, fl, key, etc)、エンリクェ・バレステロス(dr, per)、ホセ・ガルシア(el-g, ac-g, mellotron)、ジョルジェ・カルボ(b)、ジャン・フランソワ(v-ln, etc)がニューのメンバーであるが、フランソワのヴァイオリンはすさまじい響きである。このヴァイオリンがニューのサウンドのメインである。なお2nd「A GOLPEDE LATIGO」を発表している。（青）



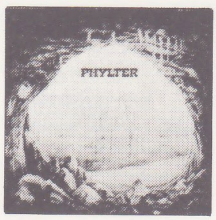
ΔΗΜΗΤΡΗS ΠΑΠΑΔΗΜΗΤΡΙΟΥ (Greece)

ΤΟΠΙΑ

ANTIOPE ANT 1000 '82 廃

A:Η ΠΡΩΤΗ ΗΜ=ΡΑ
Η ΠΟΛΗ ΠΙΣΩ ΑΠΟ ΤΗ ΘΑΛΑΣΣΑ
Η ΑΛΛΗ ΘΑΛΑΣΣΑ
ΧΡΗΣΜΟΙ ΤΩΝΦΑΩΝ
B: ΤΟ ΑΠΑΤΟΡFΧΜFΝΟ ΔΩΜΑΤΙΟ
ΑΝ=ΖΗΓΗΤΟΣ ΧΟΡΟΣ
Π=ΡΙΠΛΑΝΗΣΗ ΣΤΗ ΣΙΔ=Ρ=ΝΙΑ ΠΟΗ
ΣΤΗΔΙΝΗ ΤΩΝ ΑΝΘΡΩΠΩΝ

ギリシャのプログレというとアフロディテス・チャイルドの666に代表されるような神秘的黙示録的世界が頭に浮ぶがトピアと題されたこの作品は82年、デメトレス・パパデメトリウというキーボーディストにより製作された。青い彩色のジャケットカヴァーはエーゲ海を暗示しているかのようだ。それはヴァンゲリスが描いた混沌としたうねる海ではなく、幾何学的格子結合の海、切り立った岩に囲まれ静止した青い結晶世界を思わせる。アコースティックピアノは反射する光の粒子のようにきらめく。近年この国の電子音楽の分野からも注目すべき新人が登場しているが、やはりラテン系というか瞑想的であるより視覚的な傾向にあるようだ。後の84年、2nd アルバムを出すが映画のサントラという制約上からか、統一性はやや薄れた印象をうける。〔修〕



PHYLTER (Belgium)

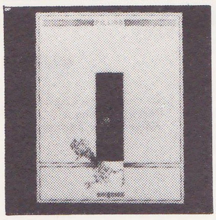
same title

PARSIFAL
4000/461` 廃

A: Overture
Dreams Of Yesterdays
Phylter
Promenade

B: Consideration
Down And Mood For Change

完全な自主制作盤でありグループに関する資料は皆無である。全ての曲に英語のタイトルがついており、歌詞も全て英語であるが、メンバーの名前及びブリュージュ（ベルギー西部、フランドル地方の小都市でオランダのアムステルダムとともに「北のヴェネツィア」と称される）のスタジオで録音されていることから推測してベルギーのバンドと思われる。フィルターはkey & vo, g & vo, b & vo, dsの４人から成り、一部の曲にはg, vlnがゲスト参加している。サウンドの要はパトリック・フィリップスのキーボードであり、シンセ、エレピを中心にしてメロディアスなものからハードなものまで変化に富んだプレイを展開する。かなりハードなギターと一体になった演奏は目新しさはないが、力の籠ったものである。（賀）



PILLION (Belgium)
Enigmas

MASTIK 1980年
MASLP 1011 廃

A: Enigmas　　B: Pompei

ソロ・アルバムをリリースしているヴァルター・クリスチャン・ロートともう一人のメンバーであるガイ・ドリーケッドのユニットであるピリオンは自主製作盤を一枚リリースしているベルギーのエレクトロニクス・グループである。クリスチャン・ロートのソロ・アルバムが整然としたアレンジをほどこされていたのに対し、本アルバムのほうは中期のタンジェリン・ドリームを想起させるようなゆるやかな流れを持つエレクトロニクス・ミュージックである。その内容には彼等の試行錯誤的な試みが随所に感じられるが、タンジェリンにはないほのかな香りも感じられ、それが彼等のオリジナリティへとつながっている。（山）



P.L.J.BAND (Greece)
Armaggeddon

VERTIGO 6483 336 '81 廃

A: INTRO
I SEE
EZEKIEL
WOE

B: ARMAGEDDON I
ARMAGEDDON II
ISOLATION
HYMN
STAR WISH

アルマゲドン、つまり世の中の破滅ということなのだろう。そんな恐ろしいテーマを基にアルバムを作ったのが、5人のギリシャ人によるPLJ・BANDである。旧約聖書にある預言者エゼキエルの書などをただ淡々と読み上げる中をバックでギターを中心にボーカルとは無関係に何とも暗い演奏が展開していく。インストゥルメンタル部分もかなりあるのだが、テーマ自体暗さがあるためにシンフォニックな展開など少なく、民族調のフレーズが続けざまに出てくる。トータル・アルバムということで作ったのだろうが、全体的に変化が少なく単調に終ってしまったようだ。だが、一つのメッセージがこのアルバムにはある。破滅は原子爆弾によるものだと言い、ジャケの無気味な人間は被爆した人の姿で人類への警告だったのだ。〔杉〕



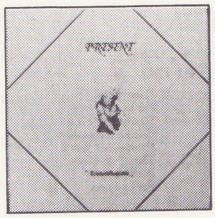
PRELUDE (Belgium)
Voyage

EUROPRODUCTION EP 803 廃

A: MOX
LIFE AFTER THE LIFE
WHEN

B: VOYAGE
JESUS, COME BACK
SUICIDED

小規模ながらもバンザイ、マキャヴェル、フライト、イソポダ、コス、ユニヴェル・ゼロ、ジュルヴェルヌ、アクサク・マブール等、忘れ難い名グループを生んだベルギーのプログレッシヴ・ロック・シーンも80年代にはいり低迷が続いている。こうした状況下、プレリュードの本ファースト・アルバムはベルギーから久々に登場したシンフォニック・ロックの力作と言える。グループはボーカル、ギター、ベース、キーボード、ドラムスの5人から成り、バランスの取れた聴き易い演奏を展開している。力強くもメロディアスなギター、繊細なキーボード等、技術的に卓越したものとは言えないが、味わいがあり説得力を感じさせる。青を基調にしたカラフルなジャケットに象徴されるファンタジックなサウンドである。（賀）



PRESENT (Belgium)
Triskaidekaphobie

仏ATEM 7008 1980年

A: Promenade Au Fond D'un Canal

B: Quatre～Bingt Douze
Répulsion

プレザンはユニヴェル・ゼロのメンバーであるダニエル・デニス(ds,per)同じくゼロのメンバーであったロジェ・トリゴー(g,p)〈ゼロの1st、2ndに参加〉、クリスチャン・ゲネ(b,per)〈ゼロの1stに参加〉及びピアニストのアラン・ロセットの4人から成るユニットである。本アルバムは彼らの1stアルバムで、ゼロの1st、2nd同様、全ての曲をデニスとトリゴーが作曲している。その内容は当然のごとくゼロの作品に酷似しており、変拍子主体の重々しいリズムとピアノ、ギターのソロが絡み合う緊張感に富んだ演奏が展開されている。バイオリン、バスーンといった楽器を使用していない分だけ、アルバム全体の印象はゼロより明るいものとなっている。なお、白と黒を反転印刷したジャケットも存在する。（賀）



PRESENT
Le Poison Qui Rend Fou

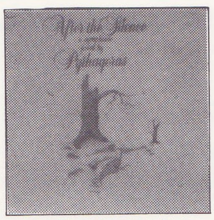
CUNEIFORM RUNE 3 '85

A: LE POISON QUI REND FOU,PAR1;
RAM RAM VA FAIRE "PIF PAF"
ERSATZ.

B: LE POISON QUI REND FOU;PART2;
DIDI DANS TA CHAMBRE!
SAMANA

Presentは80年にATEMよりレコードデビューしたがメンバーのDaniel Denis(PERC), Roger Trigaux(g)は77年同レーベルから世に出たUnivers Zeroの2ndを最後にPresentに専念する。Denisはその Zeroのリーダー格として活動しており84年に発売された"Uzed"がレイテスト・アルバムである。この Present の5年後の 2nd は前出の2人を中心に Alan Rochetle,Ferdinand Philippot(b), Marie Anne Pollaris(vo)を加えて製作された。

当然ながら Univers Zero と Present は多大な相似点を持つわけだがその差は2人の作風とアレンジの違いにあるのだろう。初期の作品の持つ衝撃性こそないが、"チェンバー・ロック"の先駆者としての風格は感じられる。〔修〕



PYTHAGORAS (Belgium)
After The Silence

WEA 58.465 '81 廃

A: AFTFR THE SILENCE　　B: AFTER THE SILENCE

ベルギーのエレクトロニクス・グループ、ピタゴラスのセカンド・アルバムである。彼等の創り出す音楽はエレクトロニクスというよりはシンフォニック・ロックというべきもので、従来のシンセサイザー系の作品とは多少趣を異にしている。ファースト・アルバムは、荒削りながらも無垢な精神性の現れた作品である。このセカンド・アルバムでは洗練されたサウンド・イメージをみせつけ、××風というレッテルの貼ることのできないオリジナリティあふれる演奏を繰り広げている。広がりのある、イマジナティヴで壮大な空間、それは80年代に創られたエレクトロニクス作品群の中でも最右翼に存するものと信じる。全編が7曲から成る組曲形式となっており、「シンフォニック・ポエム」という副題がつけられている。（山）

MIGUEL RIOS (Spain)
La Huelta Atomica

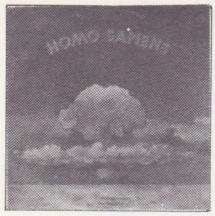


POLYDOR 1976年
2385 110 廃

A: Entre Arboles Y Aviones/Una Casa En La Guerra/Boenos Dias, Superman/Yankee Jhonny/Bienvenida Katherine
B: Una Siesta Atomica/Instrucciones A La Poblacion Civil/El Consultorio Atomico De La Sr Pum/El Carnaval De Los Espectros/La Burbuja Antirreaccion/La Cancion Del Megacristo/El Carnaval De Los Espectros/Por El Hombre Futuro/El <Dolce> Despertar

70年代初頭に「運命」のヒットをとばしたミゲル・リオスが何枚のアルバムをリリースしているのかは確認できなかったが、想像するに本アルバムだけがプログレッシヴな音創りをしている唯一のアルバムである。シンガーのソロという形式を一応とってはいるが、どちらかというと演奏面の比重のほうが強く、トータルなイメージで全面を構成させている。しっとりと歌うというよりはパワフルな展開をし、強固なリズム・セクション(特にドラムスのリズムの切れは特筆に値する）にささえられて重厚なキーボード群が飛び回る様は圧巻である。このサウンドは鬼才アルフレッド・カリオンを始めゲスト参加のバック・ミュージシャンに依る所が多いと推測できる。かなり水準の高いアルバムである。（山）

SAGA (Portugal)
Homo Sapiens



DISCOS MOVIEPLAY MOV-7002 廃

A: 6° DIA
FILIUS DOMINI, FILIUS HOMINIS
HIROXIMA
CANTIGA DE IMIGO
INVASAN

B: GUERRA
CARTA
NO 20° ANIVERSARIO DA MORTE DO POESIA
APRENDIZ DE FEITICEIRO
DUNAS

グルッポ・サーガはおそらく元々はポップス・グループではあるまいか。ちょうどイタリアのジガンティが一枚だけあの名作 Terra In Boccaを創ったように、このグループも様々なゲストを起用してこのアルバムを創ったものと思う。ヴォーカル・パート及び唱法が非常にオーソドックスであるのがその根拠である。バックの演奏は全てゲスト・ミュージシャンであり、様々に変化をつけたメリハリのある演奏はシンフォニック・ロックと呼んで良いと思う。各面5曲づつの配曲だが、全面を一つのトータル曲として各曲は創られているようである。全面を通して聴くと余りにオーソドックスな歌の部分もあるが、スタジオ・ミュージシャン達による自由奔放な演奏部分は素晴らしいものである。（山）

SAKRE (Spain)
Bizitako Gauzak



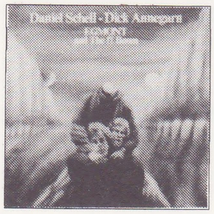
ELKAR 1978年
ELK-37 廃

A: Erreberentzia
Orain
Oroitzapenak
Ezengaino
Bakardadea

B: Heriotzaren Deia
Erantzuna
Izarren Hautsa
Guduan Jarrai
a)Guduaren Gogorra
b)Ihesari Emanik Nago
Bilatzea

カンタブリア海に面したスペイン北岸のバスク地方。フランス国境に近いサン・セバスチャンという街が彼らの根拠地だ。80キロ程西にはあのイトイスを生んだビルバオがある。スペイン国内でありながらバスク語という独自の言語が話され当然本作の歌詞もバスク語であるが、歌詞カードには更に標準スペイン語とフランス語が併記される。内容はプログレありポップありの盛り沢山。俗受けを狙ったためか一貫性を欠いた中途半端な作りになってしまったが、聴きどころとしては泣きのギターにメロトロンを配したプログレ・パート。テクはさほどでもないが、全体的な印象としては体のよい〝盛り合せ定食〟といったところか。ロップスによるカバーもなかなか良い。バスク地方のみのローカル・プレスと思われる。（江）

Daniel Schell-Dick Annegarn
Egmont And The ff Boom



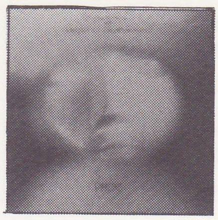
仏FREE BIRD (Belgium) 1978年
FLY 05 廃

A: UD
Piume Al Vento
Nelle
Sabina And First Variation
La Ballade Du Zwin
Geuzenlied
Un Instant Sous La Hache

B: Granvelle
Sabina And Second Variation
Ein Kleiner Man
Sabina
The ff Boom

コスのダニエル・シェルとフランスのシンガー、ディック・アンヌガルンの共作アルバム。実際にはほとんどの部分でシェルが中心となっており彼のソロ・アルバム的傾向が強い。しかし、その内容はコスとはかなり異なった、シェルが以前から興味を持っていたフランドル（ベルギー西部、オランダ南西部、フランス北部を含む地方で中世には国家を成していた）の音楽と歴史にインスパイアされたものとなっている。アンヌガルン、パスカル・ソン、ディル・ボガールを中心にしたボーカルをソロ又はコーラスで用いた部分、ギター、ベース等のアコースティック楽器主体の演奏部分、ジャズィなリズムをバックにシェルがエレクトリック・ギター・ソロを取る部分があり、それらが無理なく調和している。（賀）

SOCRATES (Greece)
Phos



VERTIGO 6331 950 '76 廃
米PETERS PILPS 9013 '76 廃

ギリシアのハード・ロック・バンド、ソクラテスの4th アルバム。ヴァンゲリスとの共演盤であり、両者の個性が融合してソクラテスの作品としては最もプログレッシヴ・ロック色の濃いものとなっている。収録された8曲中にはヴァンゲリスとの共作が1曲あるだけで、他は全てソクラテスのメンバーによる作品であるが、プロデュースをヴァンゲリスが担当しているため随所に彼の影響が感じられる。しかし、ボーカルを重視したソクラテスの持ち味は失なわれておらず、それにヴァンゲリスの叙情的かつ変化に富んだキーボードが加わって従来の作品とは一味違った音作りがされている。ギリシアを代表するミュージシャン達によるグリーク・プログレッシヴ・ロックを代表する1枚である。（賀）

SOLUTION (Holland)
Fully Interlocking

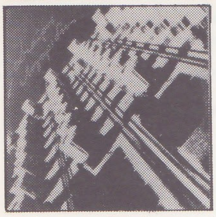


ROCKET 東芝EMI 1977年
ROLL 8 IVS-81034 廃

A: Give Some More
Carousel
Sonic Sea

B: Free Inside
French Melodie
Empty Faces

ソリューションの結成は以外に古く1966年である。アルバムは72年に1st「Solution」がリリースされ、続いて2nd「Divergence(73)」、3rd「Cordon Bleu(75)」、4th「Fully Interlocking(77)」と4枚のアルバムを発表した。のちやや作風を変えて「It's Only Just Begun(80)」「Cordon Bleu(80)」「Runaway(82)」等続々とアルバムを発表している。2枚組のライヴも近年リリースされている。70年代中期に於いての彼等の人気はオランダ本国では高く、人気投票ではグループ部門でベスト5には常にランキングされていた。サウンド的にはタイトで流れるように洗練されたもので常に清涼感を伴うものである。ポップな中にも非常に安定した構成力を感じる。玄人好みといったところか。初期はジャズ色が強い。（山）



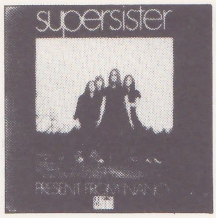
ΣΤΑΥΡΟΣ ΛΟΓΑΡΙΔΗΣ (Greece)
Same Title

POLYDOR 2421-122 '78 廃

A:1 ΤΟ ΠΡΩΤΟ ΤΡΑΓΟΥ ΔΙ
2 ΠΟ ΛΕΜΟ Σ
3 PANTH
4 ΣΝΙΦ ΣΝΙΦ
5 JANE

B:1 CLOSE THE DOOR
2 ΟΑΠΕ ΛΠΙ Σ ΜΕΝΟΣ
3 LIGHT
4 ΠΑΡ'ΟΛΙΓΟ
5 ΒΕΡΑ ΚΡΟΥΖ ΕΞΠ ΡΕΣ

Akritasの存在を知り、ギリシャのロックにも興味を持ち始め、それらしきレコードを捜し始めた。ご存じのように80年代にはいるといくつかの好作品が発表されているとはいえ、それ以前では今だにプログレらしき音を出しているレコードにさえお見にかかっていない。その中で、このレコードは、Akritasのギタリストのソロということでもあり、紹介するに値すると思われる。バラエティに富んだ内容になっており、イタリアン・ラブ・ロック調やらファンキーな曲まであったりする。なんといっても興味を引くのは、シンセをメインにして作り上げた3つの曲だろう。そこには、われわれがイメージするギリシャのメロディが散りばめられている。その後、私の知る限り3枚のレコードを発表し、活躍中。〔吉〕



SUPER SISTER (Holland)
Present From Nancy

POLYDOR 2441 016 廃 1970年

A: Present From Nancy
Memories Are New

B: Corporation Combo Boys
Metamorphosis
Dona Nobis Pacem

ロバート・ヤン・スティップス率いるスーパー・シスターの記念すべき1st。(オリジナルは見開きジャケット)この後2nd−TO THE HIGHEST BIDDER(1971)、3rd−PUDDING & GISTEREN(1972)、4th−ISKANDER(1973)、5th−SWEET OKAY(1974)を発表してグループは解散、後ロバート・ヤン・スティップスはゴールデン・イアリングへの参加を始めとして様々な活動を続けている。(R.J.スティップス参照) 変拍子を多用した実験的ロックを得意とするグループで本アルバムは強いていえばイギリスのEGGあたりに近い作風である。70年にしかもイギリス以外の国にこれ程の素晴らしいグループが存在していたということは驚異に値することだ。(山)



SUPERSISITER
Iskander

POLYDOR 2925 021 '73 廃

A: INTRODUCTION
DAREIOS THE EMPEROR
ALEXANDER
CONFRONTATION
THE BATTLE

B: BAGOAS
ROXANE
BABAYLON
LOOKING BACK

スーパー・シスターの4thアルバム、イスカンダルはアレクサンダー大王にまつわる物語のコンセプト・アルバムである。(イスカンダルとはアレクサンダー大王のペルシアン・ネーム) イギリスで録音されたこのアルバムは、GONGのPIERRE MOERLENがパーカッションで参加していて、R.J.STIPSの操るジャージーで軽快なキーボード類主体に進められていき、サックスが絡み付く。そして、フルート、クラリネットらの音色が主人公の舞台となっているペルシア風のイメージを再現している。オランダではフォーカスが当時活躍していたが、スーパー・シスターは彼ら程に威厳は大きくはないものの、2つのグループの音楽的方向性は決定的に異なるものでもなく、当時のオランダでの流れの一面として見ることが出来る。〔杉〕



SWEET OKAY SUPERSISTER (Holland)
Spiral Staircase

POLYDOR 2441 048 廃 1974年

A: Retroschizive (Introducing Schizo)
Jellybean Hop
Dangling Dingdongs
Sylvers Song (Groan, Stamp, Shock, Hoot)
Cookies, Teacups, Buttercups

B: Gi, Ga, Go (Gollumble Jafers)
It Had To Be
Nosy Parkers
We Steel So Frange (Epilogue)

スーパーシスターの5thアルバム。ロバート・ヤン・スティップスが作曲、アレンジ、演奏を行っていることとサッカ・ヤン・ギーストが作詩を担当していること以外メンバーに関するクレジットは何もない(エルトン・ディーンが参加しているという話もある)。内容は各種効果音及び電気処理されたものを中心とした様々なボーカルとピアノ、フルート、パーカッション等を巧みに組合せた明るく穏やかなものである。そのポップでハイ・センスな雰囲気は彼ら独特のものと言える。グループはこのアルバムを最後に解散、スティップスはゴールデン・イヤリングとスウィート・ドゥ・バスターに参加した後、自らのグループ「トランジスター」を結成してアルバム「Zig Zag(Ariola 201163)79年」を発表する。(賀)



TABURIENTE (Spain)
Ach Guañac

CBS S 83329 '78 廃

A: ACH GUANAC
LA SIMIENTE
FOLIA
SILENCIO DE SIGLOS

B: A VALENTINA
ISLAS
EL NUEVO CAIN
ELEGIA AL COMPANERO

74年に従来のスタイルとは全く違う壮大なコンセプト・アルバムをアルフレッド・カリオンと共に創ったキャナリオスであるが、それ以外の彼等の活動の中でプログレッシヴ・ロックの作品は見つかっていない。唯一彼等がゲスト参加したレコードがポツポツと存在するだけである。このタブリエンテなるグループもその一つで、キャナリオスのキーボードのテディとドラムスのアランがメンバーとしてクレジットされている。A面の流れは別にどうということはないロックなのだが、B面は一転、叙情味を加味したプログレッシヴ・サウンドに仕上げられている。ジャケットの美しさもあって全体としての評価も水準点は与えることができると思う。こういう作品にふれるとスペインのシーンに未だ埋もれた作品に想いが募ってしまう。(山)



TANTRA (Portugal)
Mistérios E Maravilhas

EMI 8E 068 40454 '77 廃

A: A BEIRA DO FIM
AVENTURAS DE UM DRAGAO NUM AGUARIO
MISTERIO E MARAVILHAS

B: MAGUINA DA FELICIDADE
VARIAGOES SOBRE UMA GALAXIA
PARTIN SENPRES

ヨーロッパの最西端に位置するポルトガル。かつて栄華を誇ったこの国も現在ではヨーロッパの開発途上国と言われている。プログレッシヴ・ロックに関してもそれは同様で、シーンの規模は、ギリシャとともに、ヨーロッパ諸国中最小と言える。こうした状況下、唯一例外的に世界各国のファンに知られているのがタントラである。本作は1stで、b, Key & VO, g & VO, dsの4人が織り成すサウンドはジェネシスの影響にある。ガブリエル・スタイルのボーカル・ナンバーも印象的であるが、中心はインスト曲で4人が一丸となってドラマチックな熱演を展開している。翌年発表した2nd「Holocausto〈EMI 8E 07240478〉」とともにポルトガルのシンフォニック・ロックを代表する作品である。以後ポップな3rdも発表して解散した。〔賀〕



TARANTULA (Spain)
same title

NOVALA 1977年
NLX-1073 廃

A: Recuerdos
La Arana Y La Musca
Singladura Final
Un Mundo Anterior

B: Imperio Muerto
La Danza Del Diablo
Lydia
Paisajes Pintorescos

タランチュラはスペインの持つ熱い息吹きを感じさせる本アルバムでマニアの間で高い評価を得ているグループである。全体的に男性的な力強さを感じさせる音創りであるが、そんな中にも感傷的なイメージを合わせ持っている。それは男の感じる淋しさ、男の持つ弱さというものを表現しているようである。ただ野性味のある作風なので洗練されたサウンドを好む向きには相性が悪いかもしれない。ギター、キーボード、ドラムス、ベース、ヴォーカルの5人編成である。この後彼等は女性ヴォーカリストを加え2ndアルバムを製作するが、ハード・ロック的な曲構成が災いしてかヴォルテージは落ちてしまっているのが残念だ。最もスパニッシュ・ロック的なアルバムとして掲げておきたい。（山）



TRACE (Holland)
same title

PHILIPS 6413 505 '74 廃

A: GAILLARDE
GARE LE CORBEAN
THE DEATH OF ACE
THE ESCAPE OF THE PIPER
ONCE

B: PROGRESSION
A MEMORY
THE LOST PAST
FINAL TRACE

トレイスは周知の通り、それまでエクセプションを率いてきたリック・ヴァン・ダー・リンデンが74年に結成したキーボード・トリオである。彼等の残した3枚のアルバムは、どれも味わいのあるクラシカル・ロックであるが、それぞれ特徴がある。このファースト・アルバムでは、未だクラシックとロックとのブレンドが未消化ではあるが、クラシックの名曲に時にロック色を、時にジャズ色を加味してスリリングに演奏するスタイルは確立されている。2ndはゲスト・ミュージシャンが生かされた名作。3rdはリックがトレースでやりとげたかったコンセプトが鋭角化された作品で、そういう意味では最高作と呼べるのではあるまいか。本作ではベースにヤープ・ヴァン・エイク、ドラムスにピエール・ヴァン・ダー・リンデンが起用されている。（山）



TRACE
Birds

PHILIPS フォノグラム
6413 080 廃 **RJ 7242 廃**

A: Bourrée
Snuff
Opus 1065
Penny
Trixie-Dixie

B: King-Bird
First Avenue
Sculptor-bird
Second Avenue
Preacher-bird
Third Avenue
Birdcorps
Firecorps 他

トレイスの2ndアルバム。1st「Trace(Philips 6413 505)」と同じトリオ編成であるが、ドラマーがピエール・ヴァン・ダー・リンデン(元フォーカス)からイアン・モズレイ(元ウルフ)に替わり、リック・ヴァン・ダー・リンデン(元エクセプション、key)、ヤープ・ヴァン・エイク（元キュビィ&ザ・ブリザース、g, b, vo)、モズレイの3人になっている。また、一部の曲にはダリル・ウェイ(vln)がゲスト参加している。A面はバッハの作品をアレンジした曲、クラシカルに構成された自作の曲等が並んでおり、歯切れの良いリズムをバックにリンデンがキーボード奏者としての力量をまざまざと見せつける。B面の組曲はクラシックの要素を巧みに取入れており、演奏、曲展開ともに極めて高い完成度を示している。（賀）



RICK VAN DER LINDEN & TRACE
The White Ladies

RCA フォノグラム 1976年
PPL 1.8125 廃 **RJ 7288 廃**

A: Legend(part 1)/Interlude 1/Confrontation/Interlude 2/Dance of The White Ladies/Doubts/Trace 1/Whitche's Dance/Surrender/Interlude 3

B: Pathétique/Legend(part 2)/Interlude 4/The Rescue/Trace 2/Back Home/Meditation/Flash Back/Conclusion

エクセプションを結成していたリック・ヴァン・デル・リンデンは後にブラス・セクションを排除し、キーボード・トリオとしてトレイスを始動させる。74年のことである。計3枚のアルバムをリリースしてトレイスは解散してしまうがこの3枚はどれをとっても高水準のものといえる。バッハのイタリア組曲を始め、バロック・サウンドを現代に甦らせた1st－TRACE、ダリル・ウェイを始め多彩なゲストを迎えスリリングなプレイを披露してくれる2nd－BIRDS、そして中世のオランダにまつわる伝説を見事にロック化した本作とそれぞれに素晴らしさはある。しかしトレイスというキーボード・トリオとしての最高作はこのホワイト・レィディースである。生のストリングス・オーケストラを加えた重厚なサウンドが満喫できる。（山）



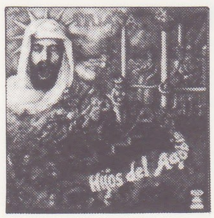
TRIANA (Spain)
same title

MOVIE PLAY GONG 1975年
17.0678/7 廃

Abre La Puerta
Luminosa Mañana
Recuerdos De Una Noche

B: Se De Un Lugar
Dialogo
En El Lago
Todo Es De Color

トリアナは数多いスペインのプログレッシヴ・ロック・アーティストの中でも最もスペインを感じさせるグループである。正式にはドラムス&パーカッション、キーボード&ボーカル、フラメンコ・ギターのトリオ編成であるが、実質的にはそれにベースを加えた4人がメンバーと言える。フラメンコの影響を大きく受けたギターとボーカルが、比較的オーソドックスなシンフォニック・ロック・スタイルのキーボードと一体になって作り出すサウンドは正にスペインのプログレッシヴ・ロックと言える。更にパルマード（手拍子）の効果的使用が彼らのサウンドをより個性的なものにしている。ロックに賭けたスペインの若者の情熱がストレートに伝わってくるレコードである。（賀）



TRIANA
Hijos Del Agobio

MOVIE PLAY GONG 1977年
170907/9 廃

A: Hijos Del Agobio
Rumor
Sentimiento De Amor
Recuerdos De Triana

B: ¡Ya Esta Bien!
Necesito
Sr. Troncoso
Del Crepusculo Lento Nacera El Rocio

トリアナの2nd。3人のレギュラー・メンバーにベースとエレキ・ギターが加わっている点は前作と同じであるが、サウンド的には多少の変化が見られる。ファーストではフラメンコ色がかなり強く出た部分が多くあったが本作ではそうした箇所が減少し、フラメンコ的要素とロックの要素が程よく調和している。情感に富んだボーカルをメロディアスなエレキ・ギターと情熱的なフラメンコ・ギターが盛り上げ、キーボードが音に厚みを加える。曲の展開も非常にドラマチックである。そこには多くの人々がイメージするスパニッシュ・ロックの典型がある。以後、「Sombra Y Luz(Movie Play Gong 17.1439/4)79年」「Un Encuentro(同17.1606/9)80年」「Triana(同17.2770/0)81年」をリリース、次第にポップ色を強めていく。（賀）



UNIVERS ZERO (Belgium)
same title

ATEM 7001 廃 1977年

A: Ronde
Carabosse

B: Docteur Petiot
Malaise
Complainte

チェンバー・ロック・ミュージック・シーンの中でも最も重要な、かつ記念碑的なアルバムが本アルバム――すなわちユニヴェル・ゼロの1stアルバムである。構成力、技巧的な部分はシリアス・ミュージック――特に初期コンテンポラリー・ミュージック的な要素を取り入れ、ロック的に処理をしたものだが、それはルーツをたどれば中世――ルネサンス音楽あたりまで溯ることができる。そしてコンセプトの中心はちょうどサード・イヤー・バンドが取った位置のように呪術的なもので中世的な暗さを感じさせる。ロックという概念に告別する象徴的な作品として高く評価したい。バスーン、パーカッション、ヴァイオリン、ハーモニウム等生楽器を主体とした意識革命のサンプル的作品である。（山）



UNIVERS ZERO
Heresie

仏ATEM 7005 廃 1979年

A: La Faulx

B: Jack The Ripper
Vous Le Saurez En Temps Voulu

チェンバー・ロック・ミュージックというジャンルをアール・ゾワイとともに確立したユニヴェル・ゼロのセカンド。ゾワイがジャズの要素を見事に昇華し取り入れた部分を有するのに対して、ゼロはより独創的である。オーボエ、バスーン、バイオリン、ギター、ピアノ等によって奏でられるメロディーは暗く、重々しいベース、ドラムと鮮やかに一体化している。それは暗黒の地獄へ引き摺り込まれるがごとくの恐怖を聴く者に与える、正にエレヅィ＝異端（アルバム・タイトル）という言葉に象徴されるサウンドである。ベルジャン・プログレッシヴ・ロック最高の作品の一つであると断言できる。以後、3rd「Ceux Du Dehors（英Recommended RR10）」、4th「Uzed（Cryonic MAD 3008）」、1枚のシングル及び12インチEPをリリースしている。（賀）



UNIVERS ZERO
Uzed

CRYONIC MAD 3008 '84

A : PRESAGE
L'ETRANGE MIXTURE DU DOCTEAR SCHWARTZ
CELESTA

B : PARADE
EMANATIONS

弦楽器及び管楽器を大胆に取り入れ、変拍子を多用した演奏を展開するチェンバー・ロック。その創始者とも言うべき存在であり、また、ベルギーの生んだ最大のプログレッシヴ・ロック・グループであるユニヴェル・ゼロの4th。そのサウンドは音楽的により昇華されており、従来の暗く重々しいものからやや軽快なものへと若干変化している。ドラムス、クラリネット、サックス、チェロ、ベース、ピアノ等による演奏は極めてテクニカルであり、絶妙のアンサンブルを誇っている。収録された5曲はいずれもダニエル・デニスの作品であり高い完成度を示している。チェンバー・ロックの頂点を窮めた名作である。本作発表後、2年以上に渡って、沈黙を続けているが、突如、新作が発表される可能性もある。（賀）



THIJS VAN LEER, ROGIER VAN OTTERLOO, LOUIS VAN DIJK (Holland)
Musica Per La Notte Di Natale

CBS 69239 1976年

A: O Jesulein Süss/Coventry Carol/Hark, The Herald Angels Sing/Es Ist Ein Ros' Entsprungen/Maria Die Zoude Naar Bethlehem Gaan/Vom Himmelhoch, Da Komm' Ich Her

B: Er Is Een Kindeke Geboren Op Aard'/Away in a Manger/Ich Steh' An Deiner Krippen Hier/Hoe Leit Dit Kindeke/God Rest Ye Merry, Gentleman

フォーカスのリーダー格であるタイス・ヴァン・レールはフォーカス活動と共にシリアス・ミュージック畑でも多才な活動をしていて、それはフォーカス解散後も続いており、現在ではシリアス・ミュージックに専念しているようである。これらの諸作品としてはINTROSPECTION連作が比較的有名だが、これらは多少ムード音楽的なものである。本アルバムは純粋なシリアス・ミュージックとしての作品で彼のよき理解者であるロジャー・ヴァン・オッテルローと共にバッハやプレトリウスの作品を扱っている。タイスはフルートにのみ専念していてその才能も仲々のものである。彼のもう一つの側面をかいま見ることのできる愛すべきクリスマス曲集である。マザー・フォーカスと前後して76年に製作された。（山）



VEGA (Spain)
Andaluza

MOVIE PLAY 17.1358/3 廃 1978年

A: Triana
Zona Rosa
Origen

B: Arco Iris
Andaluza
Lamentos

ジャンルを問わずスペインには優れたギターリストが多い。やはり、伝統上、ギターリストを志す人々の底辺が広いためであろう。本アルバムでデビューしたトマス・ヴェガもスパニッシュ・ロックを代表するギターリストの一人である。ここで聴くことのできる彼の演奏はフラメンコ、クラシック、ジャズ、ロックの各要素の混和したものであるが、中でもフラメンコ的フレーズを多く用いたアコースティック・ギターによる演奏は白眉の出来と言える。ベース、ドラムス、キーボードの各プレーヤーはバックに徹し安定したサポートを行っている。メロディアスかつ叙情的な曲が多くスペインのギターリストのソロとしてはロック色の濃い内容と言える。翌年、2nd「Jara」を発表、よりジャズィーな音作りがされている。（賀）



DANIEL VEGA (Spain)
La Noche Que Precede A La Batalla

MOVIE PLAY S-32840 廃 1976年

A: La Noche Que Precede A La Batalla
Jinete
Alma Gemala
Hacia La Eternidad
Compañeros

B: Tierra Minera
Esperando Al Sol
Cantábrico (I El Vuelo Del Albatros II El Acantilado)
Madre Asturias
Ciudad Luminosa
El Sol Cruza Todas Las Fronteras

高い芸術性の感じられるダニエル・ヴェガの本アルバムは、スパニッシュ・ロックの中でも出色の出来である。ペドロ・ペレスの美しいフルートはこのアルバムをより良いものにし、ルイス・メンドの音色の変わったエレクトリック・ギターはダニエル・ヴェガの表現力豊かなヴォーカルとうまく調和している。ミグエル・サンスのエレピもいい音を出している。また、ファン・カルロス・メドラーノのスパニッシュ・ギターは美しく激しく宙を舞い、いやが上にこのアルバムを盛り上げる。そしてラファエル・ペレスのエフェクト処理もうまく手助けしている。とても美しいモザイクのジャケットをそのまま音にした民族音楽の香りがするフラメンコ・ロックである。国内発売が望まれる一枚。（青）

5 SWEDEN NORWAY FINLAND DENMARK

北欧のロックというと最初からの食わず嫌いか、とっくの昔にその存在を忘れてしまったか、どちらかの人がほとんどと思うが、それはまだまだ大損に値する。そもそもレコードというものは“記録”という意味を持ち、一度制作されれば時に関係なくステレオ装置がある限り何度でも取り出し聴く事の出来る物体なのである。だから誰であろうといつ何を聴いても自由である。そこでもう一度北欧ロックの魅力を再点検してみよう。

まず北欧のアーティストの特徴は、他のヨーロッパ諸国に比べてテクニックの水準が大変に高いという事がある。これはやはり北欧特有の職人気質が影響していると思う。次に、ジャズっぽさとクールさを持ち、ストレートに文句なくかっこ良いという事。ヨーロッパ的というよりむしろアメリカ的な部分を持ち、特異な面を持つ。つまり60年代末ころ70年代初期のアメリカのシカゴ、ＢＳ＆Ｔ、ライトハウス等のブラス、ブラジル音楽の影響が強い上、特にスウェーデンではヘプ・スターズ、レーン＆リー・キングス、シャムロックス、スヴン・インクヴァース、スプートニクス等はビートルズを抑える程の人気のある地元のビート・シーンが母体となった。

また、クラシックに目を転じてみよう。北欧にはフィンランドの大作曲家であるシベリウスの他に、スウェーデンにはフランツ・ベルヴァルド(1796～1868)、ペーテルソン・ベルケル（1867～1942）、そしてフーゴ・アルヴェーン（1872～1960）が、デンマークにはニールス・ゲーゼ(1817～1890)そして有名なカール・ニールセン（1865～1931）、ヴァイセ、クラウ、前者は民謡、後者は国民的作曲家、ハートマン、ギャーゼ、両者共ロマン主義的作曲家である。ノルウェーには御承知のようにグリークという大作曲家が存在する。又、北欧は民族音楽の伝統が、最も保たれている土地柄である。

当然これらの音楽のロックへの影響も無視出来ない。これら自国の音楽的伝統こそが、ロック・オブ・スカンジナヴィアの無国籍化を防ぎ、他の国には見られないユニークで風変わりな雰囲気を与えているからである。英国のトラッドの影響の比ではない。

70年代に入ってからは、自国の民族音楽、フリー・ジャズ、その他ポップ等様々なプログレッシヴなグループが多く出現した。いずれも多かれ少なかれジャズの影響を受け、クラシカルでシンフォニックな要素は少ない。

80年代の北欧シーンは、ニューウェーヴやヘヴィー・メタル・バンドの活躍が大変に目立ち、英国にひけを取らず普通のロック・ファンにさえ注目を浴びている。だが、ソ連のモスクワにさえ、テクノ、ヘヴィメタ、プログレの様々なバンドが1,000ほどもある現在、どこの国であろうと誰もが好きなロックを思い思いに出来ている状況は大変に喜ばしい事である。

北欧ロックの黄金時代、60年代後半から70年代前半の名作群は、一種独特の世界を今もあせる事なく保っている。聴く側の感性によって、気に入るか気に入らないかがはっきり分かれると思うが、一歩その世界に入り込むと容易には脱け出せなくなるであろう。

私自身は決して北欧ロックしか聴かないのでもないしスカンジナヴィア政府観光局のまわし者？でもないが、北欧ロックは“旅行”好きな人に受けるような気がする。何度か書いたが、北欧の自然は日本人のように狭い国土にひしめき合って暮らしているうちに忘れ去ったものを取り戻させる効果があるのだ。自分の部屋からの眺めが、森と湖、平原、白夜でなくとも、北欧ロックはその代行品の役を果たしてくれる。居ながらにして、リゾート地に来た気分を味あわせてくれる。例えばボー・ハンソンなら放浪の気分、メイド・イン・スウェーデンなら広大な湖をモーターボートで飛ばすような爽快な気分を味わえる。それならまるで避暑地で遊んでいるようではないか、と言われるだろうが全くその通りだ。それはベネチアのル・オルメを聴いた際、頭に浮かぶのは古いどっしりした建築物、レオナルドやミケランジェロの絵画のように西洋の伝統的なものであるのと対照的だ。北欧ロックには、むしろ西洋的なものから脱却した姿を見て取る事が出来るのだ。新しいのだ。

良い事ばかり書いたが、北欧ロックの短所？として、ヴォーカルなしの作品が多く、又やや冷たく淡々としている点があげられるかもしれないが、一枚一枚の作りがていねいで、音の処理いわば録音技術の水準が高く、ジャケットのデザインも良く、一種の完全主義的な態度は高く評価出来る。音空間の広がり、にかけてはジャズ（ＥＣＭ等）に劣らない。これは本当に特筆すべき事だ。

最後に。日々がつまらなく、マンネリになったような気のする人、だまされたと思って北欧ロックを聴いてみて欲しい。ある程度までの新鮮な驚きは約束出来ると思う。絶対！

植村美穂子

WIGWAM

ウィグワムはフィンランドの最も有名なグループで、日本でも一時「10CCとイエスをたして2で割ったようなサウンド」と紹介され話題を呼んだ。彼等のデビューはかなり古く68年である。一作目は69年に出された“Hard'n Horney”、このアルバムはこの時代にしてはサイケデリックの要素のないわりと純粋なジャズ・ロックではあるが、ユッカ・グスタフソンのオルガンと、このアルバムにしか参加していないニカモというギター奏者が中心となった実に見事な作品である。また、このアルバムではフィンランド語の歌詞が聴け、それが氷のようなサウンドとマッチし、独特な世界を作り出している。続く二作目、70年に発表された“Tombstone Valentine”では、じつに磨ぎ澄まされた演奏をしていたニカモが脱退して、その代わりにタサヴァラン・プレジデントのユッカ・トローネンが参加している。又、ペッカ・ポーヨラは一作目には参加しておらず、彼はこのアルバムから正式なウィグワムのメンバーとなったようだ。(一作目のベースはマッツ・ハルデン)このアルバムはややポップ調ではあるが、ファーストで見られた北欧らしいのびのびとした自由なインプロヴィゼーションと、格調の高い重壮な音空間を保っている。続く三作目“Fairy Port”は71年の2枚組超大作で、やはりユッカ・トローネンが付き合っている。このアルバムでは二作目よりポップな出来であるが、聴きごたえ十分である。次に三年の沈黙の後に発表された“Being”は、ウィグワムの集大成と言えるトータルな作品で、ウィグワムの音楽を知るにはこの一枚をお推めする。次の五作目は二枚組のライヴアルバム“Twilight Zone”(75年)で、これは録音がヘルシンキのクラブ“Tavastia”であり、地元の彼等の人気を伝える物である。ここでは、ビートルズのナンバーや、アメリカのブルースの名曲等も彼等流のアレンジで演奏されており、ヴァラエティーに富み興味深い。

そして、次の“Dead at the Nuclear Night Club”から大幅にメンバーが変わる。これは承知の通りヴァージン・レーベルから発売された再デビュー盤であり、もちろん日本でも有名になった。ペッカ・ポーヨラとユッカ・グスタフソンが脱退し、代わりにギターのペッカ・レチャルト(彼は“Being”から参加)ベースはタサヴァラン・プレジデントのマンス・グランドストロームが加入している。このアルバムは、平凡なプログレ＋ポップに終始している。次のアルバムは“Lucky Golden Stripes & Starpose”(76年)で、このアルバムからは同じフィンランドのブラス・ロック・バンド、ペペ&パラダイスのキーボード奏者ヘズー・ハイタネンが加入している。この後ウィグワムは“Dark Album”(77年)“Rumours on rebound”(79年)と発表し解散した。約10年の間に9枚のアルバムが発表されたことになる。



次にメンバーのソロ・アルバムについて。

ペッカ・ポーヨラは、72年にソロ一作目である“Pihkasilma Kaarnakorva”を発表した。これは、ユッカ・グスタフソンも参加している傑作である。次に“Harakka Bialoipokku”(75年)これも大変良い出来である。次の“Mathematician's Air Display”は、マイクとサリー・オールドフィールド、ゴングのピエール・モエルレンとタサバラン・プレジデントのヴェサ・アルトーネンという二人のドラマー、そしてメイド・イン・スウェーデンのゲオルグまで参加している。この作品は日本でも発表されたがペッカというよりマイクの作品と呼べる物である。次の“Visitation”は80年の作だが、まさにロック版シベリウスと呼ぶべき交響楽的な秀れた作品である。他に、ヴォーカリストのジム・ペンブロークは、72年に一作目“ホット・サムズ・オリレイ”77年に“Corporal Cauliflowers Mental Functin”(LRLP214)等計三枚のソロ・アルバムを発表している。バックにはマッツ・ハルデンその他ウィグワムやタサバランのメンバーが参加し、ビートルズ調のポップな曲をやっている。キーボード奏者であるユッカ・グスタフソンも、77年に“The Alone Together Orchestra”及び“Valonvuoksi”(79年)を発表している。これ等のアルバムも、ペッカのソロに劣らない作品である。これ以外にも、特にソロ・アルバムではないが、78年の“The Group”75年の“Uni Sono”と、ウィグワムのメンバーが参加しているジャズ・セッション・アルバムがある。また、メイド・イン・スウェーデンの再結成アルバムにペッカ・ポーヨラが参加したり、タサバラン・プレジデントの四作目でジム・ペンブロークが作詞、作曲に協力したり、グループ以外の場での活動も多い。

その後はペッカは彼のグループで活動している。ウィグワムの長い歴史は今も色あせる事のない、北欧でも比較的ジャズ色の少ないプログレッシヴなバンドの歴史である。

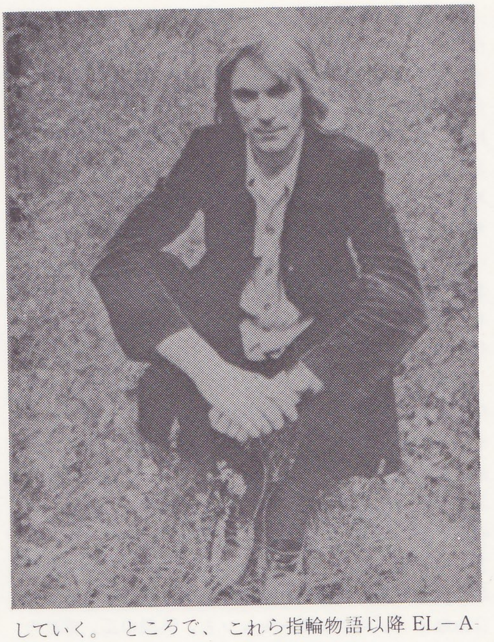
植村美穂子

BO HANSSON

スカンディナヴィアン・プログレッシヴを代表するグループ達。例えばサムラ・ママス・マンナ，ケブネカイゼ，ラルフ・ランゼン，メイド・イン・スウェーデン，サヴェイジ・ローズ，シークレット・オイスター，カイパ，ボ・ハンソン，ウィグワム等はアルバムも多数出しており、ある程度海外にも名を馳せたグループ達といえるのではあるまいか。これらの中で、ある程度アルバムが入手可能でかつ北欧らしさを感じさせるアーティストとしてボ・ハンソンを紹介しよう。

ボ・ハンソンは実に長い活動を続けるアーティスト（キーボード奏者）で60年代中期頃から活動を始動し、現在でもニュー・アルバムをリリースしている。プログレッシヴ畑のアーティストとしては恐ろしく息の長いアーティストである。彼のファースト・アルバムはドラマーであるヤン・カールソンとのデュオ・アルバムとして67年にリリースされている。以後３年に渡り、ハンソン＆カールソン名義でREX（68年），MAN AT THE MOON（69年）と３枚の作品をポリドール・レーベルに発表している。ここでのボ・ハンソンはジャズ・オルガンによるアドリブ・プレイを得意としており、フリーキーなインプロヴィゼイションも随所にちりばめられている。完全に２人のデュオ形式をとっており、サイケデリックからの影響もうかがうことが出来、当時としては大変革新的なサウンドであったと想像できる。しかしこれら３枚のアルバムから聴くことのできるものは、以後のボ・ハンソンの作品群とはかなり異う種類のものである。尚、これら３枚の作品からのテイクを集めて１枚物にしたLP,GOLDが後にリリースされる。（現在ではこれらは極めて入手が困難である。）

さて、事実上我々が想い描くハンソンの音楽が始まる作品は５枚目の作品であるLORD OF THE RINGSである。この作品は、かの童話作家トールキンの壮大なファンタジック作品「指輪物語」にインスパイアーされた架空のサウンド・トラックスとでも呼べる作品で、ハモンド・オルガンを基本とした幽幻な調べで彼独特の桃源郷とでも言うべきスタイルを確立したのである。この作品はオランダ，イギリス，アメリカ等でも発売され（英国のディストリビューターはカリスマである。）世界的に評価された。次に６枚目MAGICIAN'S HATが73年リリースされる。この作品から、ケブネカイゼのメンバー（特にギタリストのケニー・ハカンソン）を迎えている。ジャケットの絵に象徴されるように、森の奥深くに住む老マジシャンの帽子から飛び出した妖精達がそこかしこに飛びかい、踊る様を描写した作品で、絵画的、夢幻的な唯一無比の境地である。以後、７枚目ATTIC THOUGHTS，８枚目EL－AHRAIRAH（MUSIC INSPIRED BY WATERSHIPDOWN）と意欲的にアルバムをリリースしていく。



ところで、これら指輪物語以降EL－AHRAIRAHまでの作品はそれぞれ細部のニュアンスは違うとしても、どれも甲乙付け難い高いヴォルテイジを保っており、それらの作品群に通じていえることは、見事なまでに現実に背をむけた、いわば非現実的なファンタジー・ワールドの形成に最大の意志が投入されているということである。これらの作品を聴く時、我々の意識も現実を離れて、遠く冷たい北欧の森の中にある架空の桃源郷へとさまようことであろう。

ボ・ハンソンの音楽とは、70年代のプログレッシヴ・ロックの持っていた――形態――すなわちファンタジー・ロックとでもいうべきジャンルを代表するアーティストであるといえよう。日常そのものである現実との戦い――あるいは逃避というものが時間軸の流れの中でどれだけの持続を得られるのか――というテーマが彼の思想の中には流れていたに違いない。したがって我々がこれらの作品群を聴く時、リスナーがこの音をどのようにうけとめるかということは極めて重要な問題であるといえる。そこではリスナーの自己及び思想というものがためされていると言っても良いと思う。多くのミュージシャン，リスナー達は、自身、現実、夢、理想という位置付けをあいまいにしてしまった為に無自覚に現実にあるいは時間におし流されてしまっている。自分の位置をさだめ、より良い方向に進んでいくこと。それが我々のすべきことである。

尚、昨年ボ・ハンソンのニュー・アルバムAlpha Ralpha Bouvardがリリースされている。（現時点では未聴）

山崎尚洋

S(Z)AMLA MAMMAS MANNA

スウェーデン・サイレンス・レーベルが誇るサムラ・ママス・マナはウプサラ出身である。デビュー・アルバムは71年の"Samla Mammas Manna"(SRS4604)で、これは多少ボー・ハンソンの初期か又は同じスウェーデンのプログレッシヴなグループ F äsket Brinnerに雰囲気が似ている。キーボード中心のプログレッシヴな演奏は、群を抜いて知性的にして理知的、エネルギーやパワーよりも頭脳的なプレイが得意なのだということを感じさせた。米国のレジデンツの如く、あたかも学者がロックを演っているような感じだ。そして次の"Måltid"(73年)もフリージャズ的なインプロビゼーションとスウェーデン・トラッドの味がうまく調和された見事な作品である。彼等は一時ヘンリー・カウ主宰「ロック・イン・オポジション」のメンバーだったようだが、彼等はその中でも最も変わった存在だったに違いない。ここからは何故か追い出されてしまっている。ただヘンリー・カウの前座をつとめたこともある。

続く第三作目"Klossaknapitatet"(SRS4627)は74年に発表。これも前作の延長線上にある作品。そして四作目"Snorungarnas Symfoni"(MNW70)は77年に出された、それまでのアルバムとは異なったシンフォニックなものである。これはGreg Fite Patriekのプロデュースとオーケストラ・アレンジを得ている為だろう。ここではヴォーカルが不使用,全編インスタルメンタルで全四部構成である。第一部はキーボード中心.第二部はジャズ、トラッド等様々な音楽の複合体、第三部は奇妙な曲展開と変則的なリズム、後半のキーボード・ソロが聴き物。第四部はややオーソドックスな曲である。全体がジャズ風オーケストラと言える最高作であろう。

五作目"Sehlagens mystik Z för äldrehybegynnare"(SRS4640)は78年に発表されている。これは二枚組の集大成と言うべき作品で、ウィグワムならBeing と言う所だ。

A面は第三作目までの路線、B面以降は第四作目の経験を生かし、変拍子をふんだんに取り入れた実験的で前衛的なものである。このアルバムでは、ギター奏者がコステ・アペトリアから、Eino Haapalaに変わりグループ名も何故かZamla Mammas Mannaに改められている。ここで、彼等は自分達のやりたい音楽をやり尽くしたかのように見えたが、それは違い80年にやはりサイレンスから"Familesprickor"(SRS4662)を発表している。この作品では前作の路線で、圧倒的な高水準を持つ。ロックとは言え一つのアルバムの中にこれ程多様な音楽形態の要素を持ち込むことに成功したバンドは他に居ないであろう。まさに融合のバンドである。

そしてこの作品の後バンドは解散し(というより分裂し)Von Zamlaへと移行する。Von Zamlaは、ハッセ・ブルニウソンとエイノ・ハーパラが、アルベール・マルクールのバック・バンドのメンバー2人と共に結成した。このバンドの"Zamlaranamma"という作品も、やはり変拍子を多用、独特のトラッド味を、持っている。他にVon Zamlaはもう一枚アルバムを出している。

このグループはサウンドもさることながら、社会批判をとり混ぜた歌詞の方にも注目したい。しかし歌詞カードがないアルバムが多く大変残念である。また彼等の場合はほとんどの北欧のグループに見られる、音楽と自己の思想、哲学を全く切り離し、音の中では自然風景の描写に力を入れたロック情景詩を作り上げるだけに停まっていないので、貴重な存在と言えるだろう。スウェーデンには彼等の他に大変よく似た姿勢が感じられるグループとして、アルバムを17枚程度出しているアルベーテ&フリティッド,ナショナル・ティーテルン,イスクラ,このイスクラとは何とレーニンが発表した非合法の新聞のことで、この新聞がそのまま彼等のファースト・アルバムのジャケットに使用されている。



さて、メンバーのソロ・アルバムとしては、コステ・アペトリアの2枚、"Nyspolat"及び"Vanspel"がある。77年の"Nyspolat"は、コルネットのキーボード奏者,スティファン・ニールセン,メイド・イン・スウェーデンのギター奏者ゲオルデ・ワデニウスがベースで参加している。サムラ的な要素の全くないラテン・フュージョン的な作品で、コステ・アペトリアは実はスペイン人であることを十分に感じさせる。

またGregory Allan Fitz Patrickは、セカンド・ソロとして"Build Circus"を発表している。

サムラ・ママス・マナは、北欧でも珍しい位のアヴァンギャルドな姿勢を持ったグループであり、ある意味では北欧らしからぬ面をも持っているが、やはりどこの国にもインテリジェンスとそれなりの余裕を持ったバンドは存在するものだと感じる。ドイツロックのような重厚で過激な要素は全くないのだが。

植村美穂子



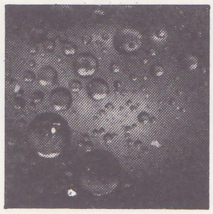
ACHE (DENMARK)
Green Man

PHILIPS 6318 005 廃 '71

PETER MELLIN: ORG. P. ETC.
FINN OLAFSSON: G. VO.
TORSTEN OLAFSSON: B. VO.
GLENN FISCHER: DS. PERC.

PRO: JOHNY REIMAR

デンマークのグループ、エイクは70年代に活躍したバンドでその間４枚のアルバムをリリースした。本作は71年にリリースされたセカンド・アルバムで、最もプログレッシヴな内容を持った作品である。前作同様、シアター・ロックとしての形態を持ち、バレー団と共に劇場公開された作品である。見開きのグリーンに色どられたジャケットといいその演奏といい、プロコル・ハルムのセカンド・アルバムあたりからの影響の強い素晴らしい内容である。時としてカット・インするチェンバロ、バロック的なハモンド、そして攻撃的なロック・ビート。70年代の熱い息吹を今に伝えてくれる好盤。その後、Blå Som Altid, Pictures From Cyclus をリリースするが、演奏は洗練されてくる反面サウンドに腰がなくなってしまう。　（山）



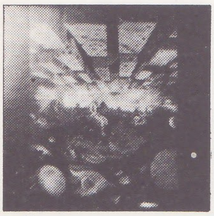
AKASHA (NORWAY)
same title

BAT BATLP-0002 廃 '77

SVERRE SVENDSEN: VO. MTN.
KJELL EVENSEN: DS.
ARILD ANDREASSEN: B.
JENS IVAR ANDREASSEN: G. MTN. SYN. P. ORG.

PRO: TORE STEFANUSSEN

AKASHAはノルウェーを代表するシンフォニックロッカーズである。一時日本にもレギュラー入荷されたのでその存在を知っているファンも多いはずだ。それ以前は〝メロトロンが入っていてかなり良いらしい〟との情報が飛びかっていたが、いざフタを開けてみると典型的なシンフォニックサウンドながら未だ成長途上という感じである。77年の作であるが、人によっては〝西欧のシーンより５～６年遅れた感じの音〟と評する。全体的なスタイルとしては極くオーソドックスで、acギターの爪弾きに背後を流れるメロトロン、といった箇所で力を発揮するが、その後の成長如何ではより劇的な展開も期待できたはずだ。たった１枚のアルバムで消息知れずになってしまったのはちょっと残念。　（江）



ÄLGAANAS TRÄDGÅRD (SWEDEN)
Framtiden Är Ett Svävande Skepp, Förankrat I Forntiden

ANDREAS BRANDT
MICHAEL JOHANSSON
DENNIS LUNDH
SEBASTIAN OBERG
DAN SODERQUIST
JAN TERNALD

後にジャズ・ロックが主流となった北欧にあっては異質の１枚。グループについては何一つ知られていないが、ジャケットに使用されたボッシュの「快楽の園」と同じく、呪術的な内容の極めつけを１枚残した。様々な効果音、エレクトロニクス、民族楽器を駆使したトータル・アルバム。一聴すると初期ジャーマン・ロックのように混沌としているが、実は計算の行きとどいた構成になっている上に、くすんだ弦楽器の音色を多用することによって民族音楽に近いニュアンスをも加えている。B-2の「トリスタンの嘆き」を始めとして、何曲かは中世・ルネッサンス音楽に原曲があると思われる。　（松）



COSTE APETREA (SWEDEN)
Nyspolat

MNW 81P 廃 '77

COSTE APETREA: G.
STEFAN NILSSON: KBD.
AKE ERIKSSON: DS.
GEORGE WADENIUS: B.
GREG FITZ PATRICK: SYN.
CARIN KJELLMAN: VO.

元サムラ・マンマス・マンナのギタリスト、コステ・アペトレアのソロ・アルバムである。Ａ面４曲、Ｂ面５曲からなる小曲集。サムラ・マンマス・マンナからその剽軽さをとり除き、ラテン・フュージョン色を強めたといえばこの作品の音を理解してもらえるだろうか。サムラよりの曲、ラテン色の濃いナンバー、カンタベリー―例えばギルガメッシュあたり―を想わすナンバーとバラエティに富んだ仕上がりになっているが、聴きどころはやはりコステ・アペトレアのギターを中心としたソロ・アドリヴ・パートが万華鏡のように次々と織りなす音模様であろう。シンフォニック・ファンには多少ジャンル違いの感があるが、フレンチ、あるいはカンタベリー・ジャズ・ロック愛好家の方にはもってこいの好盤といえる。　（山）



ARCHIMEDES BADKAR (SWEDEN)
Badrock För Barn I Alla Åldrer

MNW 53 廃 '74

TOMMY ADOLFSSON: TP.
JORGEN ADOLFSSON: SAX. G. MANDOLIN
PER TJERNBERG: P. ORG.
PETER RONNBERG: EL-G.
CHRISTER BJERNELIND: G.
MATTS HELLQVIST: G. B.
KJELL ANDERSSON: DS.
PYSEN ERIKSSON: PERC.

ベネルクス諸国以北には、ジャズ、クラシック、ポップ等の音楽を音楽的に非常に高いヴォルテージの中で融合させた無名のグループがいくらも存在する。サムラ、スーパーシスター等に代表されるそれらの多くはブリティッシュ・グループがそれらを実践した時期とほぼ同時期に自らのスタイルを築きあげていたのである。アルキメデス・バッカーもそんなグループの１つで、様々な音楽的スタイルが、プログレッシヴ・ロックというジャンルの中でごった煮的様相を呈し、知的に意図された良い意味でのアヴァンギャルド・ロックの一形態を形成している。例えばカンタベリーの、エッグ、ヘンリー・カウ、ハットフィールド等のグループが実践していたものに共通点があろう。ブックレット付。　（山）



ATLAS (SWEDEN)
Blå Vardag

BELLATRIX BLP-705 廃

UFFE HEDLUND: B. G.
JANNE PERSSON: G. PERC.
MICKE PIONOTTI: DS.
ERIK BJORN NIELSEN: SYN. P. MTN. ORG.
BJORN EKBOM: ORG. P. MTN. SYN.

ジャズロックが支配的な北欧のバンドにしては割と優等生的なプログレを演っている。派手なキーボードプレイ等は控え都会的に洗練されたサウンドは若干パンチ力に欠ける嫌いがあり評価が分れるところだが、透明感あふれる流れる様な音はユーロックファンの耳にも抵抗なく入ってこよう。軽やかなギターが主導権を取るケースが多い。しかし、殊更フュージョン系の音に傾倒する訳でもなく、バックを流れるピアノ、オルガンとも程良く調和が取れており、仲々心地良いサウンドは北欧の暗いイメージを払拭してくれる。トレッティオアリガ・クリゲットが〝剛〟なら、このアトラスは〝柔〟の方の代表格と言っても差し支えあるまい。　（江）

DICE (Sweden)
same title

MARILLA MALP-1033 '78 廃



A : ALEA LACTA EST
ANNIKA
THE UTOPIAN SUNTAN
THE VENETIAN BARGAIN

B : FOLLIES
LABYRINTH
AT THE GATE OF ENTERUDIVORE
I'M ENTRUDIVORIAN
YOU ARE?
YOU ARE...

スウェーデン及びスカンディナヴィア諸国のここ数年の動向はいまだによく解明されていない。カイパとこのダイスの発見により我々の関心が北へむかって行くのも無理からぬところだろう。このダイスなるグループのアルバムから聴くことのできるのは純粋なシンフォニック・スタイルのプログレッシヴ・サウンドである。そのスリリングで叙情的なサウンドもさることながら、人知れずにおそらく数百枚というわずかな量を自主製作した態度、カラフルで超現実的なアルバム・カヴァー、シンフォニックをこよなく愛するメンバー達が全身全霊を打ち込んで製作した姿が目に浮かぶ。商業ベースというものを全く考えずに、信じる音楽の究極にむかってつき進んだ彼等の信念の伝わる極めて良質な作品である。（山）

DIMMORNAS-BRO (SWEDEN)
Mål

SILENCE SRS4653 '79 廃



PETER BLOMKVIST : G.
ADRI : DS.
MATS JONSTAM : G.
KJELL THUNBERG : B.
STAFFAN HELLSTRAND : KBD.

ディモルナス・ブロは2枚のアルバム(1st : Dimmornas Bro SRS4643)を70年代の後半に残したスウェーデンのシンフォニック・ロックである。ジェネシスからの影響を受けたグループで、北欧にはめずらしい純正のプログレッシヴ・スタイル（ジャズの影響のない）を持っている。テクニック的には極、平均的であるが、オルガンを中心としたプレイはひたむきな姿勢が感じられ、好感が持てる。2nd（本作）のほうが出来は良い。かなりシアトリカルな要素を持ってい、ヴォーカルが自国語の為解読できないが、このグループのサウンドを理解する上で重要であるように思う。独特の哀愁を持った愛すべきグループ、それがディモルナス・ブロである。（山）

ALF EMIL EIK (Norway)
Joy & Breath of Eternity

HAVERST 8C-062-37377 '79 廃

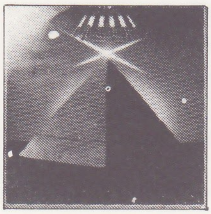


ALF EMIL EIK - ds, b. g, kbd, perc. vo
IRIS REUTZ - vo
SVEND UNDSETH - sax, fl
ANNE ENGH - vo
JOHN ERIK HOLTAN - p

マルチプレイヤーと呼ぶにふさわしい男，Alf Emil Eik が残したおそらく唯一のＬＰと思われる。この手のレコードが陥り易い単調さがまったくないというわけではなく、ここぞという時に演奏自体が盛り上らず、もう一歩踏み越えたものがほしい。そういいながらも、ゆったりとしたメロトロンをバックに女性スキャットが聴こえるA④は、北欧ならではの透明感あふれる曲で気に入っている。同傾向のB④も女性ヴォーカル、メロトロンを加えた安らぎを感じさせる美しい小曲。そこで弾かれるピアノもセンスが良く、どうやら彼の本領はリズムを押し出したものよりも、これらの２曲のようにスローなタイプの曲にあるといえるだろう。また、モノクロの写真では分らないが、ジャケットの寒々とした空の色調が、なんとも美しい。〔吉〕

THE GROUP (FINLAND)
same title

DIG IT LP1 廃 '78



VESA AALTONEN : DS.
OLLI AHVENLAHTI : KBD.
PEKKA POHJOLA : B.
SEPPO TYNI : G.
PRO : THE GROUP & TOM VUORI

78年にウィグワムのベーシスト、ペッカ・ポージョラが中心となって結成された「ザ・グループ」は本ＬＰ一枚をリリースして消えたジャズ・ロック・グループである。ペッカのソロ「マスマティシャンズ・エアーディスプレイ」に近い曲、よりフュージョン色の強い曲とあるが、全体の印象としてはかなりフュージョン色の強いジャズ・ロックということができるだろう。ドラマーはタサバラン・プレジデンティを経た強者、他のメンバー達もセッション活動をしている強者達である。ペッカがウィグワムの音楽性を離れ、徐々にジャズ色を増していく移行期にあたる作品として興味深い一枚といえる。この後、ペッカはペッカ・ポーヨラグループを率いてアルバムを同レーベルに録音することになる。（山）

JUKKA GUSTAVSON (FINLAND)
Valonvuoksi

KERBEROS KEL 604 廃 '79

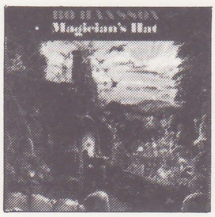


JUKKA GUSTAVSON
TIM FERCHEN
PEKKA SUVANTO
GUNNAR LAUSUND
PANU ANTERE
PENTTI MIKKONEN
SEPPO RISTOLAINEN
RISTO FREDRIKSSON

ウィグワムのキーボード奏者として知られるユッカ・グスタフソンのソロ・アルバム。ラヴ・レーベルからリリースされている同傾向のもう一枚のソロ・アルバム「Alone Together Orchestra (LRLP194)」からもうかがえるように、ソロではロック的な要素から離れて、幾分、初期のマイク・オールドフィールドに似た、どちらかと言えば硬派のサウンドを展開している。彼の演奏するキーボードにはエレクトロニクス志向も感じられるが、全体としては淡々としたもので、これにオーボエやチェロを加えて、ゆったりとした流れをつくり出している。このアルバムは裏ジャケットと内容のことを思うと、バレエの為の作品として書かれたものかもしれない。（松）

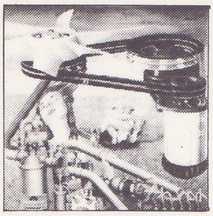
BO HANSSON (SWEDEN)
Magician's Hat

EMI 5C054-95109 廃 '73



BO HANSSON : ORG. G. B. SYN. MTN.
RUNE CARLSSON : DS.
KENNY HAKANSSON : EL-G.
ROFT SCHERRER : AC-G.
GUNNAR BERGSTEN : FL. SAX.
STEN BERGMAN : FL.
BOBO STENSSON : EL-P.
OWE GUSTAVSSON : B.
PELLE EKMAN : DS.
GORAN FREESE : SAX

ボ・ハンソンの６枚目のアルバム。(1 : MONUMENT, 2 : REX, 3 : MAN AT THE MOON, 4 : GOLD, 5 : LORD OF THE RINGS, 7 : ATTIC THOUGHTS, 8 : MUSIC INSPIRED BY WATERSHIP DOWN) 5th～8th までの作品はどれも北欧のエッセンスを加えた夢幻的サウンドであり、甲乙つけ難いヴォルテージを保っているが、その中から本作を一枚代表させてここに紹介しておく。ケブネカイゼのメンバーをバックに従え、多少民族色を加えさせたキーボード（オルガン）を中心にしたプログレッシヴ・ロックであり、現実とは何の交渉ももたない、世界の中にくくりつけられたファンタジー・ワールドの表現に徹するボ・ハンソンの姿勢は正に70年代のプログレッシヴ・ロックの持っていた大切な核の一つであると確信する。（山）



HANSSON OCH KARLSSON (SWEDEN)

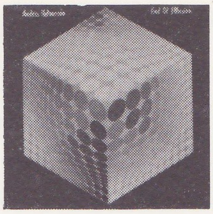
Rex

POLYDOR LPHM46 264 廃 '68

BO HANSSON: ORG.
JAN CARLSSON: DS.

PRO: BILL OHRSTROM

現在までに10枚（初期ベスト盤GOLDを含む）のアルバムをリリースして尚、活動中のボ・ハンソン。4th以降はケブネカイゼとのコラボレイションが知られているが、実はスウェーデン・ポリドールに67年から69年の間に３枚のアルバムをKARLSSON(ドラマー）とのデュオという形でリリースしていた。本作品はそのうち2ndにあたるもので、ライヴ・ヴァージョンを含むＡ面３曲、Ｂ面１曲から成る。ハモンド・オルガンとドラムスのデュオ・アルバムで、多少サイケデリックの影響下にあるキーボード・ロックである。ナイスあたりとの共通点もある暴力的な部分も感じられ、ファンタジー・ワールドを表現する 4th以降とは多少趣が異なっている。68年という時期を考えると先鋭的プログレッシヴな内容である。（山）



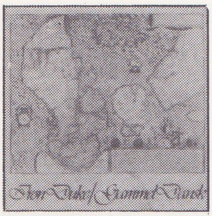
ANDERS HELMERSON (Sweden)

End Of Illusion

SKIV BOLAGET TMC 8001 '82 廃

ANDERS HERMESSON - KBD HELMERSON
KRISTER WIKINGSON - DS
PER JOHNSON - DS
PER BERGLUND - DS
MATS ENGLUND - B
STEN FORSMAN - E-G
LARS AKERLUND - A-G
MATS GLENNGARD - VLN
ANDERS JOHNSSON - TAMBOURA

アンデルス・ヘルメルソンのリリースしたおそらく唯一のアルバムと思われる作品「End Of Illusion」は80年代以降ににわかに脚光をあびているスカンディナヴィアのシンフォニック・ロックの中でも高水準の完成度を誇る一枚である。サウンドとしては一時のエマーソン・レイク・アンド・パーマーを多少なりとも意識した音で、テクニカルなキーボードのソロを全面におし出した、力強いシンフォニック・サウンドである。リズムは特に凝ったことをしてはいないが、スリリングなアドリヴ・プレイは特筆に値するものである。曲によってヴァイオリンやギターが加わるが、基本編成はキーボード主体のトリオである。スカンディナヴィアは発見される作品の水準が高いので、今後の研究が望まれるところだ。（今）



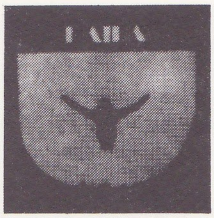
IRON DUKE (Norway)

Gammel Dansk

SUN MUSIC SLP 496 '77 廃

HANS RESEN - g. b
HENNING PEDERSEN - kbd
CLAUS SARUP - ds
SOREN GULDBERG - kbd

地図をあしらったジャケットといえばTriumvirat の"Mediterranean Tales"がまず思い浮ぶ。このレコードも古地図をジャケットに使っており、ロマンをかきたててくれる。ウラジャケのメンバー４人の写真からも期待を抱かせる。ところが、内容は ダブル・キーボード の割には音が軽く４分以下の小曲がほとんどで、期待はずれ。北欧独特の節まわしのため、重厚で劇的なところは望めないにしろ、技術的には及第点はつけられるので、聴いても損はない。 キーボード がメインとあって、ＥＬ＆Ｐの影響が感じられ、オリジナリティも今ひとつ。さらにもう１枚レコードを発表しているらしい。北欧のグループが解明されるのはまだ先のことかもしれない。なにせ、北欧のマニアの間でさえこのグループを知っている人は少ないという。〔吉〕



KAIPA (SWEDEN)

same title

DECCA SKL 5221 廃 '75

INGEMAR BERGMAN: VO. DS.
HANS LUNDIN: KBD.
ROINE STOLT: G.
TOMAS ERIKSSON: B.

75年にリリースされたカイパのファースト・アルバムである。この時期にアルバム未収録のシングルもリリースされている。４人のメンバーによって結成され、セカンド・アルバムまでは同じメンバーによってリリースされた。彼等の作風はすでに本作によって完成され、多少荒削りな部分もあるが、美しいシンフォニック・ロックを演奏している。彼等のサウンドは、いわゆるキャメルやジェネシスあたりからの影響のある甘美なギターとキーボード群の織り成すものであるが、他のヨーロッパのグループ達と一線を画す曲構成の巧みさ、演奏力、センスを持っている。カイパは82年までに５枚のアルバムをリリースしているが、４枚目以降はメンバーも変わり、ニューウェイヴ的なものに転化されてしまった。（山）



KAIPA

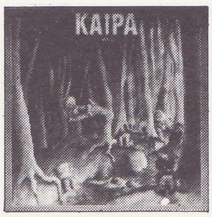
Inget Nytt Under Solen

DECCA SKL 5260 廃 '76

INGEMAR BERGMAN: DS. VO.
TOMAS ERIKSSON: B.
HANS LUNDIN: KBD.
ROINE STOLT: G.

PRO: KAIPA & TOMAS ERIKSON

日本に突然紹介され、以後そのサウンドの素晴らしさから人気を呼んでいるカイパ。ファーストからサードまではどれも甲乙つけ難いシンフォニック・サウンドを誇っている。本作はセカンド・アルバムで、キャメル・ジェネシス・タイプの完成度の高い仕上がりをみせている。グループはサード以降も Haender ('80)、Nattdjurstid (82) とアルバムをリリースしているがギタリストのロイネ・ストルト及び、ヴォーカリストのインゲマル・ベルイマンも脱退してしまい、ニューウェイヴ的なものに変化してしまい、我々の興味をひくものではなくなってしまっている。尚、ストルト、ベルイマン、ハンス・ルンディン（キーボード）はそれぞれソロ・アルバムを制作している。（今）



KAIPA

Solo

DECCA SKL 5293 廃 '78

INGEMAR BERGMAN: DS.
MATS LINDBERG: B. TAURUS.
HANS LUNDIN: KBD.
MATS LOFGREN: VO.
ROINE STOLT: G. ETC.
PRO: OLLE RAMM & EUGEN PETREN

カイパ３枚目のアルバムにして、最後の輝きを誇る作品。タイトルはSolo となっているが、別にソロ・アルバムではなく、グループとしての作品である。前作のメンバーより、ベーシストのトマス・エリクソンが脱退し代わりにマッツ・リンドベルグ（ベース）とマッツ・リュフレン（ヴォーカル）が加入し、５人編成になっている。初期３枚の中ではサウンド的には最も洗練された作品で、ハンス・ルンディンはメロトロン、クラヴィネット、ハモンド、シンセ等実にバラエティに富んだキーボード群を使用している。この後グループはニューウェイヴ的な４、５枚目をリリース。むしろカイパの作風はギタリストのソロ「ファンタジア」へと移行して行くのである。（山）



KALEVALA ORCHESTRA (FINLAND)

Abraham's Blue Refrain

CRYPTO ZAL6449 廃 '77

LIDO SALONEN: G.
LIMOUSINE LEPPANEN: VO. PERC.
ARI VAAHTERA: B.
BEAVER AITTO: DS.
HESSU HIEKKALA: LONG CHINESE HORN
PRO: TOMMI LIUHALA & KALEVALA ORCHESTRA

カレワラ・オーケストラは仏クリプト・レーベルでディストリビュートされて名を知られるようになったフィンランドのグループである。A面4曲、B面5曲の小曲から成るアルバムだが、その美しい青で統一されたジャケットとグループ名から音を想像している方々には多少とまどいを感じさせる内容である。ヴォーカルを中心としたロック・グループで摩可不思議な味も持ってはいるが、そのポップで力強いサウンドはプログレッシヴ・ロックの境界ぎりぎりのところに位置しており、当時流行りつつあったニュー・ウェイヴ＝ポップスの感覚をいち早く身につけたバンドということができそうだ。唯一のアルバムと思われる。（山）



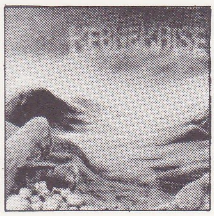
KEBNEKAJSE (Sweden)

Resa Mot Okant Mal

SILENCE SRS 4605 '71 廃

KENNY HAKANSSON - g
GUNNAR ANDERSSON -
TOMAS METGLER - b
MATS GLENGAND - mandlin
BAK HASSAN - congas. etc
PELLE EK MAN - ds
GORAN -
LAGER BERG - bs
PELLE LINDSTROM - pe
IN GEMAR BOCKER - b

スウェーデンの代表的プログレッシヴ・グループであるケヴネカイゼのファースト・アルバム。ケヴネカイゼとはスウェーデンで一番高い山の名前である。彼等は二作目から急に違った現代らしからぬ時代錯誤的な民族音楽に転身してしまうので、むしろスウェーデンらしい鋭さと透明ではあるが多少ドロドロしたエネルギッシュなパワーを感じる為にはこの作品以外に適しているものを知らない。ハード・ロックとしては同じく優れた三人組ノヴェンバーを上回り、すさまじさとしてはメイド・イン・スウェーデンの秀作二作目と肩を並べるものである。スピード感に満ちたハード・ロックと多少のトラッド感覚を加味した絶妙な演奏は、二作目以降全く消え去ってしまい本当に残念である。ジャズ色は全くない。〔植〕



KEBNEKAISE (SWEDEN)

same title

SILENCE SRS4618 廃 '73

KENNY HAKANSSON: G.
GUNNAR ANDERSSON
TOMAS NETGLER
MATS GLENGAND
BAK HASSAN
PELLE EKMAN
GORAN LAGERBERG
PELLE LINDSTROM
INGEMAR BOCKER

ボ・ハンソンのバック・バンドとしても知られるケブネカイゼ。本作は多少なりともハード・ロックの影響を感じさせる「Resa Mot Okant Mal (SILENCE SRS4605)」に続くセカンド・アルバムである。前作とは音の傾向が若干異なっており、彼らの持つトラッド的要素が巧みに取り入れられたメロディアスな作品に仕上っている。アフロ・パーカッションが印象的なリズム・セクションをバックに、トラッド色の濃いバイオリンとよりロック的なギターがソロを取るという展開が中心になっている。本作以後、同系統の「Ⅲ(同SRS4624)、アフロ色の強い「Ljus Fran Afrika (同SRS4636)」、「Elefanten (同SRS4642)」、ポップな「Vidrar Vidare (MERCURY 6363 015)」を発表してグループは解散する。（賀）



KEBNEKAISE

III

SILENCE SRS 4629 廃 '75

INGEMAR BOCKER :G.
RELLE EKMAN: DS.
MATS GLENNGARDG. MANDLIN.
BAH HASSAN: CONGAS. ETC.
KENNY HAKANSSON: G.
GORAN LAGERBERG : BASS.
PELLE LINDSTRORN: PERC.
THOMAS NETZLER: B.

ボ・ハンソンのバック・バンドとしても著名なケブネカイゼは、ケニー・ハカンソンを中心としたトラディッショナル・プログレッシヴ・グループで71年から78年まで6枚のアルバムを残している。1st はサイケデリック色の多少ある暗いイメージのアルバムで、2nd 及び本 3rd アルバムあたりで彼等のスタイルは確立された。ボ・ハンソンにも通じる、北欧の風景を想わす素朴な曲は独特の哀愁を感じさせるもので、確固としたオリジナリティを感じさせる。4th になるとアフリカ民謡を取り入れたもの。続く 5th は、ケブネカイゼの音楽性が一つの完結をみた作品で非常に洗練されている。人によってはこちらを最高作とする人もいるのではなかろうか。6th ではポップな部分が増している。（山）



KERRS PINK (Finland)

same title

PØTTITTSKIVER POT 02 '80 廃

TROND BØHN - G
JOSTEIN HANSEN - B
HALVARD HAUGERUD - VO
TOSE JOHANSEN - G
HARALD LYTOMT - G, FL TORE
TERJE SOLAS - DS
PRO - SVEIN RØNNING & KERRS PINK

フィンランドのシンフォニック・グループ、ケルス・ピンクである。彼等は2枚のアルバムを80年と81年に残しており、これはファースト・アルバムである。(セカンド：Mellom Oss - pot 03) これら2枚の作品はどちらも同水準のヴォルテイジを持っている。1曲目に針をおろすと、まるで日本の歌謡曲のカラオケのような軽いインスト・ナンバーが始まり愕然とするが、この曲は2分40秒であるのでガマンしてほしい。以後はスティーヴ・ハケットの弾くような12弦ギターの調べにフルートが舞い、時に力強く、時にナイーヴに叙情的なナンバーを演奏している。カイパやダイスなどと較べるとさすがに遜色があるが、ひたむきな情熱を感じさす好シンフォニック作品である。全10曲それぞれのイメージをイラストにしたブックレット付。（山）



RALPH LUNDSTEN (SWEDEN)

Nordisk Natursymfon N.2
Johannes Och Huldran Op.99

EMI 4E 061-35200 '75

RALPH LUNDSTEN: ALL INSTRUMENTS

20枚以上のアルバムをリリースし続け、現在も尚、活動中とおもわれるスウェーデンのシンセサイザー奏者（現代音楽家という説もあるが…)、ラルフ・ランゼン15枚目の作品で10枚目 Nordic Nature Symfoniの続編である。自らのスタジオ、アンドロメダで制作され「ヨハンと森の妖精」というグルタフ・サングレンの小説から受けた印象を作品化したものである。メンデルスゾーン、ワグナーの曲がパロディとして使用され、シンセによってトリッキーな演奏をくり広げている。この作品はバレーのバック・ミュージックとしても使用されたらしい。現代音楽家ではなくて、ドラッグの好きなロック・シンセサイザー奏者として聴くと納得がいくであろう。カヴァーは見開きで音をあらわした美しいものである。（山）



MADE IN SWEDEN (SWEDEN)

same title

SONET SLP-71 廃 '68

GEORGE WADENIUS: G. VO.
BO HAGGSTROM: B.
TOMMY BORGNDD: DS.
PRO: GUNNAR BERGSTROM

スウェーデン・ロック最初期のグループ。その名もずばりメイド・イン・スウェーデン。彼らはウェス・モンゴメリーから影響を受けたジャズを母体にして彼等のオリジナリティを追求していったグループである。68年といえば、プログレッシヴ誕生以前であり、ここに聴けるサウンドも完全にジャズのフィールドの作品としてのもので、ビートルズの曲をとり上げたりポップな処理をしたりと実験的なことを行なっているがそれが未だ明確な方向性を持っているわけではない。ある意味では初期のウィグワム的な作品ともいえるのであろうが、散漫な印象をぬぐいさることはできないようである。70年以前のスウェーデン・シーンのルーツを捜る意味でこのグループのアルバムを一枚あげておく。 (今)



MADE IN SWEDEN

Snakes In A Hole

SCNET SLP 2504 '69 廃

GEORGE WADENIUS - gui. vo
BO HAGGSTROM - bass
TOMMY BORGUDD - ds
Pro:GUNNAR BERGSTROM

スウェーデンの代表的ジャズ・ロック・バンド、メイド・イン・スウェーデンの二作目のアルバム。彼等は三人組で、George W のギターを中心としたまとまったスタイルを持つ。一作目のウェス・モンゴメリー・タッチに、独特のサイケデリック調とボサノバ調を加味し、一作目以上に出来の良い作品となっている。この作品とゲヴネカイゼのファーストは、まさにスウェーデンでしか生まれなかったであろう他のどのバンドの作品とも比較出来ない秀作であろう。聴き易さやとっつき易さを求めないファンにとってはまさに宝物のようなものである。69年の作にしてこれだけの急進性とさらりとした実験性を持ち得たのは今日でも驚くに値する。アメリカに端を発したサイケデリック音楽がスウェーデンまで来た一つの例である。 〔植〕



MIKLAGARD (Sweden)

Miklagard

EDGE LP 791 '79 廃

THOMAS SPELAR - kbd
LEIF SPELAR - b
BJORN SPELAR - ds
JAN SANDBORG - vln

客観的な見地からして、スウェーデンにおける、あるいはもう少し範囲を広げて北欧としても良いが、プログレッシヴな作品を考えた場合、確かに寒々とした全体像が見えてくる。ただ、ここ数年の間の良質なグループ等の出現を単に突発的な出来事として片付けるのは、余りに早急な判断かと思われる。言わずと知れたカイパやダイスが他に与えた影響は、きっと私などか考えているよりも、はるかに強烈で広範囲にわたっているに違いない。79年に唯一のＬＰを残したこのミクラガルドと言う キーボード ・トリオも、その中にいたひとつなのだろう。「ソルダーテン」という物語を題材に曲を７つのパートに分けたトータル・アルバムで、特に12分の大作を含むＢ面の流れが素晴らしく、北欧を強く感じる。 〔本〕



MR. BROWN (SWEDEN)

Mellan Tre Ögon

VOICE MUSIK FLY KHAN 0177 廃 '77

HAKAN ANDERSSON: A-G. MANDLIN. VO.
BO CARLBERG: A-G.
KJELL JOHNSSON: TP.
LARS MEDING: G.
ANDERS NILSSON: HAMMOND B3. LOGAN STR-MACHINE. ARP.
JAN PETER STRAHLE: FL.
ROBERT SVENSSON: B.
PRO: MR. BROWN

77年にリリースされた Mr. BROWN唯一のアルバムである。ジャズ及びジャズ・ロックが主流のスウェーデンに於いて、純正のシンフォニック・ロック・グループはそれ程多いわけではない。アトラス、カイパ等極少数のグループ達が存在しているだけである。そんな中で地味ではあるが味わいのあるアルバムを残したこのグループは７人編成というロック・グループとしては比較的大所帯である。しかしそのサウンドはシンプルでストレートなもので、キーボードのコード弾きの上にメロディがのせられたもの。構築美云々というのではなしにその裏に秘められた感覚的なものを大切にしたグループ。 (今)



NOVEMBER (SWEDEN)

En Ny Tid Är Här...

SONET SLP-2509 廃

CHRISTER STALBRANT: B. VO.
BJORN INGE: DS. VO.
RICHARD ROLF: G.

ノーヴェンバーはSONETに３枚のＬＰを残したハードロック・トリオである。クリームに基本的な影響を受けた音創りをしているが、その頽廃的な世界には大いに引きつけられるものがある。それはギタリスト、リヒャルト・ロルフに依る所が大きいであろう。日本ではシングル１枚がリリースされたのみであるが、その解説には、ロルフがヴィスコンティからの「ヴェニスに死す」の主演依頼を断わったというエピソードが記されている。タジオ役で結局主演し、一躍スターダムに踊り出たビョルン・アンドレセンは名門校アドルフ・フリードリヒ音楽院の後輩なのである。このアルバムは 1st であり、2nd「2:a (SLP-2520)」、3rd「6:e (SLP-2530)」、全てSONETから発表された。 (結)



NOVEMBER

6:e

SONET SLP-2530 廃 '72

CHRISTER STALBRANDT: B. VO.
RICHARD ROLF: G.
BJORN INGE: DS.
PRO: SAM CHARTERS

30年戦争（1618～1648）で活躍したスウェーデン王グスタフ・アドルフを描いたジャケは劇的でもあり、ユーロックファンの目を引き付けたことだろう。が、音の方はプログレとは無縁、典型的なハードロックである。重厚なギターに支配されたミディアムテンポの曲が彼らの得意とするところだ。正式メンバーは３人だが曲によってはゲストが入る。例えば両面ともラストには軽目のインストナンバーを据え、それぞれピアノ、パイプで聴かせるが、この辺はジャズロックが支配的な北欧の音楽的環境が反映されていて面白い。本作は彼らの３枚目にして最後の作。この後ベースのChrister は北欧神話からその名を取ったと思われる SAGA というバンドに参加するが、これもプログレ色は薄いものである。 (江)



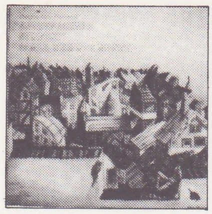
THE OLD MAN & THE SEA (DENMARK)

same title

SONET SLPS-1539 廃 '72

JOHN LUNDVIG: DS.
KNUD LINDHARD: B. VO.
BENNY STANLEY: G.
TOMMY HANSEN: ORG. P. VO.
OLE WEDEL: VO. PERC.
PRO: THE OLD MAN AND THE SEA, FREDDY HANSSON

「老人と海」と名乗るこのグループは72年にデンマークのSonetレーベルから1枚のアルバムを発表しているが、彼らについて語る資料は全く無い。本作は、米国の文豪ヘミングウェイの同名の小説をモチーフにしたトータルアルバムで、内ジャケにはそのストーリーがイラストでつづられている。音の方はハードロックでプログレ色は薄いが、重々しいギタープレイは余り聴かれず、徹底的にドライヴしたトミー・ハンセンのオルガンが大きな武器となっている。A、B面どこに針を落してもオルガンの聴こえぬパートが無い程、本作に於ける役割は重要だ。この点はブリティッシュロックからの影響が感じられるのだがフォローするギターが所々で派手に暴れまくるので、渋味には欠ける。（江）



GREGORY ALLAN FITZ PATRICK

Snorungarnas Symfoni (SWEDEN)

MNW 70P 廃 '76 705

G. A. F. PATRICK: KBD.
HASSE BRUNIUSSON: DS.
COSTE APETREA: G.
LARS HOLLMER: KBD.
LASSE KRANTZ: B.

一時期、サムラ・マンマス・マンナのメンバーでもあり、セッション・マンでもあったグレゴリー・アラン・フィッツ・パトリックのファースト・ソロ・アルバム。サムラのサードとフォースとの間に制作され、バックが全員サムラのメンバーということもあり、かなりサムラの音楽性に近いシンフォニック・ロックに仕上げられている。民族色とアヴァンギャルドな側面、そしてひょうきんさを加えたサウンドは極めて高水準のもので、部分部分にきらめくような北欧の叙情がつめ込まれている。この後、フィッツ・パトリックはセカンド・ソロ「Build Circus」を制作。マイク・オールドフィールド的なイメージの傑作に仕上げられた。この2枚が彼の往年期の名作である。（今）



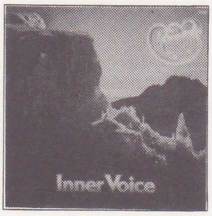
PEKKA POHJOLA (FINLAND)

Mathematician's Air Display

VIRGIN V2084 廃　日本ビクター VIP4055 廃 '77

PEKKA: P. KBD. B.
MIKE OLDFIELD: G.
SALLY OLDFIELD: VO.
PIERRE MOERLIN: DS.
ETC.
PRO: PEKKA & M.OLDFIELD

ペッカ・ポーヨラはフィンランドの重鎮、ウィグワムのベーシストとして、あるいはジャズからロックに至る広範囲でのセッションマンとして知られる秀れたアーティストである。ウィグワムでの活動と並行してPihkasilma Kaarnakorva（72: LOVE LRLP71）、Harakka Bialoipokku（75: LOVE LRLP118）、Kesojen Lhhto（77: LOVE LRLP219, 本作のフィンランド盤）、Visitation（80: DIG IT DIGLP4）と4枚のソロ・アルバムを出し、その後、ペッカ・ポーヨラ・グループを率いてアルバムをリリースし続けている。マイク・オールドフィールドとサリー・オールドフィールドをゲストにむかえての本作は透明感のあるタイトなジャズ・ロック＝プログレッシヴ・アルバムに仕上がっている。ペッカの最高作としてここにあげておきたい。（山）



RUPHUS (Norway)

Inner Voice

BRAIN 60 060 (0559) '77 廃

THOR BENDIKSEN - ds
SYLVI LILLEGAARD - vo
KJELL LARSEN- gu
ASLE NILSEN - bass
JAN SIMONSEN - key
Pro:TERJE RYPDAL

ノルウェーの代表的なグループ、ルーファスは72年の一作目の"New Born Day"と二作目"ランシャート"ではハードな面とプログレッシヴな面のある、美しいフルートと力強い女性ヴォーカルに特長のある、北欧ロックの名作を作り上げた。しかし76年の三作目からテリヤ・リプダルがプロデュースを受け持ち、クロスオーバー調のジャズ・ロックに転身してしまった。本作は四枚目だが、やはりテリヤ・リプダルの好みが反映してしまっているようだ。ノルウェーのロックは他の北欧諸国よりもスケールの大きさと力強さを感じ、ルーファス以外にもブロウ・アウト、サルキ、ヴァネッサ、アーント・メアリー、ホール・イン・ザ・ウォール、サフト、ヨナス、そしてテリヤ・リプダル夫人が参加したポポル・エースが居る。〔植〕

M
—
Sa



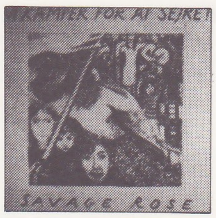
SAVAGE ROSE (DENMARK)

Dodens Triumf

POLYDOR 2380 016 廃 '72

ANNISETTE: VO.
ANDERS KOPPEL: KBD.
THOMAS KOPPEL: KBD. VO.
ALEX RIEL: DS.
RUDOLF HANSEN: G.
OLE MOLIN: G.
PRO: SAVAGE ROSE

サベージ・ローズ。その歴史は60年代にまで溯り、68年から現在まで実に10枚以上ものアルバムをリリースし続け、今尚活躍中の息の長いグループである。アンデルス・コッペルとトマス・コッペル兄弟を中心として活動してきた彼等のサウンドは、初期は、アース・アンド・ファイアーやショッキング・ブルー・タイプのポップスであり、中期になるとプログレッシヴ・ロック色を強め、又、後期は政治色のある（共産党と共に活動しているようである）、歌詞を使用して民族色のあるアコースティック・サウンドをその特徴にしている。本作は72年にリリースされた7枚目のアルバムで、ハモンド・オルガンを中心とした心暖まる好盤である。尚、アンデルス・コッペルのソロ「Aftenlandet & Regnbuefuglen」も良い出来。（今）



SAVAGE ROSE

Vi Kaemper For At Sejre!

NEXØ LP6 '84

デニッシュ・ロック・シーンにおいて最も長いキャリアを誇り、プログレッシヴ・ロック・グループとしては最も知られた存在であるサベージ・ローズ。デンマーク、ヨーロッパ、更にはアメリカと次々に活躍の場を広げていった彼らであるが、80年代に入り、音楽家としての姿勢を大きく転換させた前作「En Vugge Af Stal（NEXØ 1）」及び本作は極めて政治的内容を持った作品であり、扇動的なものとなっている。サウンド的にもとてもシンプルになっており、アンニセッテのボーカルをキーボードとパーカッションが巧みに盛り上げている。それは決して技巧的なものではないが、彼らの心情がストレートに伝わってくる説得力のあるものである。（賀）

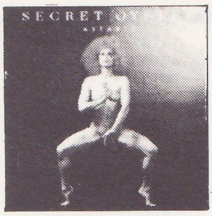


SECRET OYSTER (DENMARK)
Furtive Pearl

蘭 CBS S65769 '73 廃

BO THRIGE ANDERSEN: DS.
MADS VINDING: B.
KARSTEN VOGEL: SAX. ORG.
CLAUS BØHLING: G:

元バーニン・レッド・アイヴァンホーのカルステン・ヴォーゲルが同グループのドラマーだったボ・トリゲ・アンデルセン、当時コロナリアス・ダンスで活躍していたクラウス・ボーリング（元ハーディ・ガーディ）、ケンネット・クヌードセンらと結成したシークレット・オイスターの 1st。切れの良い軽快なリズムに乗って、サックス、エレクトリック・ピアノ、ギターが順次ソロを取る。それらはいずれもジャズの影響を受けたものだが、完全なジャズ・コンボであるコロナリアス・ダンス等のプレイ（シークレット・オイスターのメンバーは以前ジャズ・ミュージシャンとしても活躍していた）と比較すると明らかにロックを意識したものとなっている。本作以後、３枚のＬＰを発表してグループは消滅した。（賀）

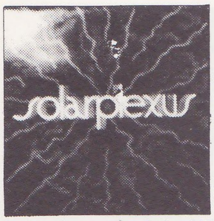


SECRET OYSTER
Astarte

CBS 81208 廃 '76

NENNETH KNUDSEN: P. KBD. SYN.
KARSTERN VOGEL: SAX.
CLAUS BØHLING: G. SITAR.
JESS STAEHR: B.
OLE STREENBERG: DS. PERC.

シークレット・オイスターはデンマークのグループで、他国(オランダ、イギリス、アメリカ等）でもレコードがリリースされる等、ある程度インターナショナルな成功を収めたグループでもある。73年の SECHET OYSTER 以来、70年代に４枚のアルバムを残している。彼等はジャズ・ロックとプログレッシヴ・ロックの中間点あたりを時にジャズ・ロックよりに、時にプログレッシヴ・ロックよりにと変化しながらアルバムをリリースしてきた。本作品はそんな彼等の代表的一枚とでもいえる作品で、ホットなプレイを聴かせる曲、ピアノによる叙情的小品、タンゴを基調にした曲と様々な側面を聴くことができるであろう。（今）



SOLARPLEXUS (SWEDEN)
same title

EMI 4E 154-34573/4 廃'72

MONICA DOMINIQUE: KBD.
CARL-AXEL DOMINIQUE: KBD. FL.
GEORG WADENIUS: G. B.
TOMMY SLIM BORGUDD: DS.
PRO: GUNNAR LINDGRIST

ソーラー・プレクサスは72年から76年までに５枚のアルバムをリリースして消えたスウェーデンのジャズ・ロック・グループである。オデオン・レーベルに２枚（1:SOLAR PLEXUS, 2: SOLA PLEXUS 2）、そしてポリドールに１枚(SOLARPLEXUS)、ハーヴェストに２枚(4: DET ER INTE BATEN, 5: HELLRRE GYCKLARE AN HYCKLARE)がそれら５枚である。本作は記念すべき彼等の 1st アルバムであり、最も意欲的な作品ということができると思う。当時の北欧のジャズ・ロック・グループがそうであったようにクラシックやポップスからの影響の強い作品であり、特に Side 3全編を費した Concerto Grosso はオーケストラを導入し、あるいはアヴァンギャルドなアレンジをほどこした実験的な良作である。再評価をうながしたい作品。（山）



ROINE STOLT (SWEDEN)
Fantasia

SVENSKA LOVE SLLP 06 廃 '79

HAKAN HULTMAN: DS.
HANS BRUNIUSSON: DS. ETC
MATS LINDBERG: DS. BASSPEDAL.
PER ANDREASSON: KBD.
ANDREAS ZEITLER: SAX.
ROINE STOLT: G. SYN. KBD. ETC.
PRO: ROINE STOLT

ロイネ・ストルト——ファンタジア——、カイパのギタリストのソロ・アルバムである。というよりはカイパの事実上の 4thアルバムといったほうが良いだろう。あの叙情的かつ洗練されたカイパ 1st～3rd までのサウンドはかわりはてた 4th アルバムではなくてこのギタリストのソロに受け継がれていたのである。ロイネ以外のカイパのメンバーは MATS LINDBERG のみの参加であるが、たおやかなギターワーク、分厚いキーボード・ワークは正にカイパそのものである。カイパの 3rd の翌年79年の作品。彼のシンフォニック・ギタリストとしての才能はかなりのもので、ブリティッシュの第一線のギタリスト——例えばスティーヴ・ハケット等と比べても少しも遜色がない。正にファンタジアである。（山）



SUME (DENMARK)
Sumut

DEMOS 13 廃 '73

MALIK HØEGH: VO. G.
PER BERTHELSEN: VO. G.
HANS FLEISCHER: DS.
ERIK HAMMEKEN: B.

デンマーク領グリーンランドというロックに関しては比較的意外な国からデビューしたスメは３枚のアルバムをリリースしたグループである。本作は彼等のファースト・アルバムである。彼等の音楽性を純粋にプログレッシヴ・ロックと呼ぶのは疑問が残るが、多彩なアイディアを盛り込んだサウンドには様々な音楽からの影響をうかがうことができる。上記のメンバー以外にサックス、ギター、オルガン、ヴァイオリン等のゲストをむかえている。ヴォーカルを中心にしたいわゆるロック・サウンドであり、多少の民族色を感じることができるのが彼等のアイデンティティー形成に貢献しているといえよう。ジャケは４ページのリーフレット付見開き。（今）



TABLA RASA (Finland)
Ekkepien Tanssi

LOVE LRLP 170 '76 廃

HEIKKI SILVENNOINEN - G
JARNO SINISALO - P, KBD, CEMBALO
TAPIO SUOMINEN - B
JUKKA ARONEN - DS
JUKKA LEPPILAMPI - LAULU, TAUSTAKUOROT

フィンランドで人知れず76年にリリースされていたグループである。メンバーは基本的に５人編成であるが、ウィグワムのキーボード奏者ユッカ・グスタフスンが協力している。Ａ面４曲、Ｂ面５曲の小品集であり、いわゆるシンフォニック的なサウンドを演奏するグループ。ジャズ色は余り感じられず、ゆったりとした曲調が多いが、そこは北欧、余りねばっこいアレンジはされておらず、クールにまとめられており、自国語のヴォーカルもそのイメージを形成するのに一役かっているといえる。メロディアスなギターが甘くリードを取る曲が多く、サポートするキーボードのアレンジも北欧らしさが感じられ好感が持てる。カイパをずっとそつなくしたような演奏が冷たいフィヨルドを連想させるかのよう。（今）

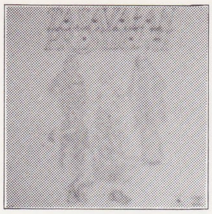


TASAVALLAN PRESIDENTTI (FINLAND)
same title

LOVE LRLP 7S 廃 '69

FRANK ROBSON: VO. P. ORG.
JUKKATOLONEN: G. P.
JUNNU AALTONEN: SAX. FL.
VESA AALTONEN: DS.
MANS GROUNDSTROEM: B. ORG.

ウィグワムと並ぶフィニッシュ・ロック・シーン最大のビッグ・ネーム、タサヴァラン・プレジデンティの 1st。リーダーのユッカ・トローネン(g)は他に自らのバンドを率い（タサヴァランのメンバーも何人か参加している)、ジャズ・ミュージシャンとしても有名であるが、タサヴァランではボーカル入りのロック色の濃い演奏を聴くことができる。彼等の３枚の作品(2nd「Lambert land」3rd「Milky Way Moses」)の中でも本アルバムは最もロック的内容を擁しており、69年という発表年度を考えるとかなり高水準の作品と言える。当時のブリティッシュ・ロックの影響を受けたサウンドであるが、彼らの持つジャズ的要素がうまく生かされており、ロック・リズムを基礎にややジャズィでメロディアスなソロ(g. f. sax)が展開されている。（賀）

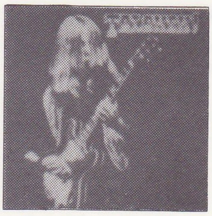


TASAVALLAN PRESIDENTTI
Lambertland

SONET SNTF 636 '72 廃

JUKKA TOLONEN -gui
MANS GROUNDSTROEM - b. org
VESA AALTONEN - ds
JUNENU AALTONEN - sax. fl

フィンランドを代表するジャズ・ロック・グループ、タサヴァラン・プレジデントの三作目。二作目 "Tasavallan Presidentti" (E 062-34264) の英語によるライナー・ノートによると、ユッカ・トローネンはバッハとストラヴィンスキーの愛好家でもある。もちろん直接的な影響はないが、彼のギターには格調の高さと整然とした様式美が漂っている。他のメンバーのテクニックも高い。このアルバムは初期の二枚に比べると、やや実験的な面もあり多少プログレ性が出ている。大変に美しくじっくり聴かせるアルバムである。これ以後の "Milky Way Moses" は、ややクロスっぽくなっている。その後解散。フィンランドはスウェーデンに次ぐロック先進国と言えるであろう。歌詞はすべて英語で歌われている。〔植〕



JUKKA TOLONEN (Finland)
Tolonen

SNTF 652 '71 廃

PEKKA POHJOLA - bass
PEKKA POYRY - sax, A-sax
RONNIE OSTERBERG - ds
JUKKA TOLONEN - gui
JUKKA GUSTAVSON - organ

フィンランドを代表するタサヴァラン・プレジデントのギタリスト、ユッカ・トローネンのソロ・アルバム。ウィグワムのメンバーも参加していて、彼のソロ・アルバムの中でも最も出来が良い。タサヴァラン・プレジデントの音楽よりは地味で素朴な感じではあるが、一人の天才ギタリストであればこの程度のアルバムはわけなく出来上ってしまうのだろう。他に彼のソロ・アルバムは "Cro Ssection""Summer Games" (73年) "The Hook" (74年) "Hysterica" (75年) 等けっこうどれも良い出来である。78年のユッカ・トローネン・バンドになってからのアルバム "Montreux Boogie" はコステ・アペトリアも参加しているが、あまり高水準とは言えないクロス・オーバー風な出来で残念である。〔植〕



ANNA SJÄLV TREDJE (SWEDEN)
Tussilago Fanfara

SILENCE SRS 4646 廃 '77

ANNA SJALV TREDJE: ALL INSTRUMENTS

スウェーデンのシンセサイザー奏者アンナ・スヤルフの唯一のソロ・アルバム。いわゆるクラウス・シュルツェ・タイプのエレクトロニクス・サウンドであるが、反復されるシーケンサーの上を流れるメロディー群はシュルツェのそれよりも遙かにメロディアスであり、シュルツェが自己の内部に暗く重く潜行するタイプのサウンドを好んだのに対し、夢幻的、楽園的な志向が感じられる。良質のドラッグ誘発剤あるいは天国的メディテイション助長剤とでもいうべき内容である。センスの良さが特筆すべきで、シュルツェの亜流的サウンドを有する一連のシンセサイザー作品の中では非常に洗練された作品としてここにあげておく。（山）



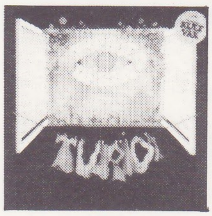
TRETTIOARIGA KRIGET (SWEDEN)
same title

EPIC EPC-80220 廃 '74

DAG LANDQVIST: DS.
STEFAN FREDIN: B.
ROBERT ZIMA: VO. EL-G.
CHRISTER AKERBERG: EL-G. AC-G.

PRO: ADRIAN MOAR

トレッティオアリガ・クリゲットのデビュー作は、彼らの最高作であると同時にスカンジナビアン・プログレを代表する名作と言ってよい。そのサウンドは、まさに「30年戦争」を名乗るにふさわしい壮絶なものだ。ハードなギターで幕を開け、やがて力強いリズムに導かれ攻撃的なプログレッシヴ・サウンドが前面に出て来る。キーボードレスのパートが殆んどながら、プログレとしての完成度は高いと言える。ユーロック的甘美性とは無縁であるが、2,3ヵ所でメロトロンが効果的に使われており、ギターを中心としたエネルギッシュなプレイは一層引き立って来る。なお彼らはこの後、2nd でもプログレを披露したが、3rd 以降はポップな色合いを濃くして行く。（江）



TURID (SWEDEN)
Tredje Dagen

SILENCE SRS 4628 廃 '75

TURID L.: VO.
TOMMY JOHNSSON: KONTRABAS, ETC.
BJORN WOLF: P.
CLAES WANG: DS.
ETC.

スウェーデンの女性ヴォーカリスト、トゥリド。サイレンス・レーベルに数枚のアルバムを残しているトラディッショナル・フォーク・シンガーである。ただし純粋なトラディッショナル・フォーク・シンガーではなく、ポップスやその他様々なジャンルのサウンドを吸収している姿勢はある意味でプログレッシヴとでもいうべきだろうか。彼女の情報はほとんど日本には伝えられてはいないが、もの悲しいジプシー風の響きはある程度のファンを獲得できる説得力を持つものだと思う。トゥリドのアルバムは、どれも美しいアルバム・カヴァーに包まれていて、北欧の冷たい大気と暖かい煖炉の灯を連想させるようなほのぼのとしたものである。（今）



UNI SONO (FINLAND)
same title

HI HAT HILP106 廃 '75

REINO LAINE: DS. PERC.
PEKKA POHJOLA: B.
PARONI PAAKKUNAINEN: FL. SAX. ETC.
OLLI AHVENLAHTI: P. SYN. ETC.
NONO SODERBERG: G.
PRO: PARONI PAAKKUNAINEN & OLLI AHVENLAHTI

「ウニゾノ」はウィグワムのペッカ・ポーヨラを含む5人編成のグループで、本アルバム1枚で解散してしまったところをみると、セッション的なグループと思われる。サウンドは各人のアドリヴ・プレイを中心とした自由なもので洒落たジャズ・ロックとでもいえる軽い内容である。各人の余裕あるプレイは成熟を感じさせ、センスも平均レヴェルは確実に持っているが、意欲的な音創りという点ではプログレッシヴ・ロック愛好家にはあまり向いている作品とはいい難いかもしれない。ジャズの持つ現実との共存の中で生き生きとプレイを楽しむことのできる方にだけお勧めしておこう。ペッカはゲスト参加といったところで、彼のグループではない。(山)



WIGWAM (FINLAND)
Hardn' Horny

LOVE LRLP-9 廃 '69

RONNIE OSTERBERG: DS.
JUKKA GUSTAVSON: VO. P.
JIM PEMBROKE: VO.
PEKKA POHJOLA: B.

ウィグワムは実に長い活動を続けてきたフィンランドを代表するグループであり、ヴァージン・レーベルよりワールド・ワイドに紹介され、日本でもアルバムがリリースされたこともあるグループである。ジャズからプログレッシヴ・ロックへと変化していった彼等のサウンドであるが、本作は彼等の記念すべきファースト・アルバムなのである。オルガンを中心としたジャージーなプレイが聴きどころであるが、すでにクラシック、ポップスetc. からの影響を強め、心暖まる愛すべき作品であるといえないだろうか。象徴的なジャケット・カヴァーといい、正に北欧プログレッシヴ・ロックの誕生とでもいいたくなるような作品である。(今)



WIGWAM
Fairyport

LOVE 2-LRLP 44/45 廃 '71

RONNIE OSTERBERG: DS.
JUKKA GUSTAVSON: VO. KBD.
JIM PEMBROKE: VO.
PEKKA POHJOLA: B. VLN.

69年から79年まで9枚のアルバムをリリースして解散してしまったフィンランドのウィグワム。ペッカ・ポーヨラの様々なセッション活動を始め、フィンランド・プログレッシヴ・シーンを語る上で欠くことのできないグループである。本作はHard'n Horney, Tombstone Valentineに次ぐサード・アルバムで、2枚組の大作である。ヴォーカルを中心としたポップなナンバー、ジャージーなプレイを前面に出したインストゥール・ナンバーとが収録されているが、様々なジャンルの要素が良くこなれ、ウィグワムのスタイルを築きあげた初期〜中期の代表作ということができると思う。ウィグワムというとヴァージンよりの「Nuclear Night Club (6th)」が有名であるが、むしろ本国のみのリリースの作品のほうが彼等らしい演奏をしている。(山)



ZAMLA MAMMAS MANNA (SWEDEN)
Schlagerns Mystik
/För Äldre Nybegynnare

SILENCE SRS 4640 廃 '77

HANS BRUNIUSSON: KBD.
EINO HAAPALA: G.
LARS HOLLMER: KBD. ETC.
LARS KRANTZ: B. TP.
PRO: ZAMLA

スウェーデンのアヴァンギャルド・トラッド・バンド、サムラ・マンマス・マンナ。ヘンリー・カウの主宰していた「ロック・イン・オポジション」のグループの中でも風変りで特異な音楽性で群を抜いた存在だった彼等のサウンドはオリジナリティあふれる素晴らしいものである。Samla Mammas Manna, Måltid, Klossa Knapitatet, そしてフィッツ・パトリックとの共演盤をはさみ、本作、Familjsplickerと5枚のアルバムを残し、分裂、VON ZAMLAへと移行し2枚のアルバムをリリースしている。サードまでの試行錯誤の上に完成したこの4thは彼等の最高作となってい、ひょうきんさをちりばめた万華鏡のようなサウンド。5thは力と変拍子で押しまくる違った意味での好作品になっている。2枚組、ブックレット付。(山)



ZAMLA MAMMAZ MANNA
Familesprickor

SILENCE SRS4662 廃 '80

LARS HOLLMER: KBD. VO. ETC.
EINO HAAPALA: G. VO.
LARS ERANTZ: B. VO.
VILGOT HANSSON: PERC. ETC.
HANS BRUNIUSSON: PERC. ETC.

スウェーデンのプログレッシヴ・ロック・シーンにおける最大のグループ、ツァムラ(サムラ)・ママス・マンナの5枚目、ラスト・アルバムである。前作の延長線上に位置する音作りがされており、圧倒的演奏力、緻密な構成、比類なきオリジナリティが見事に一体化した驚異的作品である。曲は目まぐるしく変化し、スピーディに進行する。極めて複雑な展開にもかかわらず、演奏は実にスムーズである。時折現われるユーモラスな部分には彼らの自身と余裕が感じられる。ロックを中心にトラッド、ジャズ、クラシック等、各種音楽形態の要素を鮮やかに融合し彼ら独自の音楽を創造することに成功した傑作であり、ユーロピアン・ロックを代表する1枚である。(賀)



VON ZAMLA (SWEDEN)
Zamlaranamma

URSPAR ULS-10

DENIS BRELY: BASSOON, OBOE, ETC.
JAN GARRET: B. ETC.
EINO HAAPALA: G. B. MANDOLIN. ETC.
LARS HOLLMER: P. ORG. ETC.

フォン・ツァムラはツァムラ・マンマス・マンナのハッセ・ブルニウソンとエイノ・ハーパラが、アルバム、"ファミリエスプリッカー"(サムラの5枚目)後にアルベール・マルクールのバック・バンドのメンバー2人と共に結成した、ツァムラ・マンマス・マンナの発展的形体を有するグループである。複雑にアレンジされた変拍子を多用した力強いサウンドが特長で、トラディッショナルな曲をも彼等独持の作風へと転化させてしまう巧みさを持った好作品である。ファミリエスプリッカーでツァムラが成し遂げた地平一力強くテクニカルなアヴァンギャルド・サウンドに多少余裕を加えたサウンドはバランスの良い均衡を保っている。スウェーデンの生んだ注目すべきグループ、それがツァムラ一派である。(今)

6 UNITED KINGDOM

1968年ごろからピンクフロイド、ムーディブルース、ボンゾドックバンド、ナイス等によって活発化してきたブリティシュプログレシーンは、1969年のキングクリムゾンのデビューによって一気にオーバーグラウンドへと拡大した。当時のブリティシュロック界は、ビートルズが崩壊を迎えつつありツェッペリンの大成功によって、ハード＆ヘビーロックが70年代をリードするかの様に予感された時代だった。この時期のクリムゾンの大成功は、その後のブリティシュロック界に大きな影響を及ぼしていく。そしてその後にデビューするELP、イエス、ジェネシス等によっていよいよブリテッシュプログレシーンは黄金期を迎える。

1969年から72年ぐらいに渡るこの時期はまた、アンダーグラウンドでも数多くのグループが産声をあげた時期でもあった。これらの無名グループの多くは、当時作られたばかりのマイナーレーベルからデビューしていったグループがほとんどで、レーベルが潰れたために解散して消えていったグループも多かった。この時期のプログレ系のマイナーレーベルとして有名なのは、ピンクフロイド、バークレー・ジェームス・ハーベスト、サードイアーバンド等のハーベスト、ブラックサバス、クレシダ、アフィニティのバーティゴ、レアバード、バンダーグラフジェネレーター、ジェネシス、ナイス等のカリスマ、クワイエットワールド、ジョンズィ、フルーブ等のドーンレーベル、インディアンサマー、スプリング、トントンマクートのネオン、エッグ、カーン、メロウキャンドルのデラム、プロコルハルム、ジェスロタルのクリサリスが有名だが、これらの有名レーベルの多くは、大手レコード会社の後押しや、商業的に成功した看板グループの存在などで比較的に安定した形で新人グループのリリースやプロモーションを行えたが、その他の小さなマイナーレーベルではレコードの製作も思う様に行なえず、また発表したレコードもプロモーションができないために全然売れずにほんの数枚リリースして潰れてしまったレーベルも多い。この様なマイナーなレーベルとしてマニアに知られているものとしては、バース、ヤングブラッド、キングダム、マッシュルーム、エボリューション、マンティコア、ダンデライオン、グリーンウィッチ等があげられる。そしてこれらのレーベルの作品の中には、プレス数自体が極めて少ないために、現在でも幻のままになっている作品もある。また現在プログレマニアの間で名盤と呼ばれているアルバムの中にも、これらの弱小レーベルから発表された作品も相当数含まれている。

1970年ごろから72年ごろまでの日本でのブリティシュロックの国内盤の発売に関しては、かなりマニアックな面があった。プログレ系に関していえば、ドーンレーベルのクワィエットワールド、タイタスグローン、コーマス、ポールブレッドセィジや、RCAネオンのトントンマクート、インディアンサマー、シェイプオブザレイン、ダンドーシャフト、フェアウェザー、バーティゴのフェアフィールドパーラー、パトウ、グレービートレイン、メイブリッツ、グレイシャス、アフィニティ、ウォホース、ニュークリアス、カリスマの、エブリウィッチウェイ、オーディエンス、エブリワン、ベルナアーク等がシリーズとして発売されているし、その他にも、ブロンドオンブロンド、ウォルラス、サムライ、マッチングモール等かなりの数にのぼる。国内発売されたこれらのマイナーなグループは当時ほとんど売れず、すぐに廃盤になるケースが多かった様だ。当時の日本のレコード会社は、プログレに関して発売の基準がでたらめで、RCAネオンではスプリングやロウマテリアルをお蔵入りして、ジェィプオブザレインやダンドーシャフトを発売したり、バーティゴレーベルに関しても売れ筋の作品が相当発売されないで残されてしまっている。その反面、知名度も内容も伴なわない作品を無造作に発売したりするなど今から見れば考えられない程レコード会社や評論家は、ブリティッシュのアングラシーンには疎かった様だ。

この様な事情で現在でも、英国盤では入手困難になった廃盤を国内盤の中古で手に入れることもできるわけであるが、廃盤ブーム以前はこの様な国内盤はマニア内で埋もれたアングラシーンを知る貴重な手掛りにもなっていた。しかし先に述べた様に国内発売されたのは数ある作品の中でもほとんど氷山の一角であり残りの名盤の多くは一部の評論家のみがその存在を知っている文字通り幻の名盤といえるものが多かった。

その幻の名盤の再発見に関して私が経験した最初の例がスプリングである。

当時私は、RCAネオンレーベルではトントンマクートとインディアンサマーを手にしており、ブリティシュのマニアの間でも両作を超える内容の作品はもはやネオンレーベルには残っていないというのが通説だった。ただ評論家の高見氏の話でネオンレーベルには国内発売が見送られたすごい作品が存在するとの情報もありスプリングに対する期待が高まった。しかしマニア内ではスプリングはただのフォークグループだとする意見もあり、それ以外にも、ロウマテリアルが本命だとする情報も乱れ飛んだりして話題は膨む一方だった。

その後数ヶ月してスプリングは某輸入盤店に入荷し、期待していた以上の内容で、あっという間にマニアの間に広まったことは御存知の通りである。その後もこの様な経緯をへて次々と幻の名盤が再発見されていき、しだいにブリティシュアンダーグラウンドの全容が明らかにされていくにつれてこの騒ぎも一段落していった。

そしてマニアの興味の対象は発掘しつくされたブリティシュシーンから、未だ知られざるイタリアンロックのマイナーシーンへと移っていく。

ブリテッシュロックのアンダーグラウンドな情報も1973年以降になると割と伝えられる様になってきたのだが、この時はすでにプログレシーン全体が円熟から衰退の道を歩み初めた時期だった。イエス、ピンクフロイド、ELPなど多くの有名グループもその方法論に行き詰まりを見せ始め、マイナーシーンにおいてももはや有望な新人の登場は見られなくなっていく。この時期に発表された作品の多くは、内容的にもテクニック重視の傾向がみえはじめ、小さなカテゴリーの中で凝り固まってしまった様な作品が多い。

この前後の時期の隠れた名盤として後にマニアの間で有名になった作品に、ケストレル、サーカス、ファンタジー、イングランド等があげられるがその数は少ない。

1977～8年ごろになるともはやブリティッシュのプログレは完全に死滅し、同じ時期日本のプログレファンの多くもユーロロックへ鞍変えするか、ニューウェーブへ転向してしまった者も多い。

現在のマーキー誌の読者の多くはこのころからのユーロロックブームによって増えてきたファンが多く、いわば第三世代のプログレファンともいえる。その意味でもはや「ブリティッシュロック」という言葉自体が一昔前の世代の残した遺産となってしまった感がする。

坂地昭一

EMERSON LAKE &PALMER

エマーソン，レイク＆パーマー（以下ELP）は、元ナイスのキーボード奏者として実力ナンバーワンのキース・エマーソン，衝撃的デビューを飾ったプログレッシヴ・ロックの最高峰キング・クソムゾンで美しいヴォーカルとベースを聞かせてくれたグレッグ・レイク，アトミック・ルースターで評判を呼んだ期待の若手ドラマー、カール・パーマーの３人によって、1970年６月、栄光のスタートを切った。

同年11月には、1st「エマーソン，レイク＆パーマー」を発表、ロックを基本にクラッシック、ジャズなど様々な要素を融合した音楽性は、クリムゾンの流れをくむ高度な精神性をテーマにした詩とあいまって、ヘビーで美しい響きを持つ革新的なものであった。

また、ライヴにおいては、以前より定評のあったエマーソンの派手なアクション（オルガンをひっくり返したり、鍵盤にナイフを突き立てる等はあまりにも有名）とロック界初のシンセサイザー導入による超人的キーボードプレイ、メンバー間の強烈なソロの応酬、一時の涼風のようなレイクの弾語りなど魅力溢れるパフォーマンスで熱狂的な人気を呼び、メロディメイカー紙のブライテストホープ部門の第１位に文句なく選ばれた。

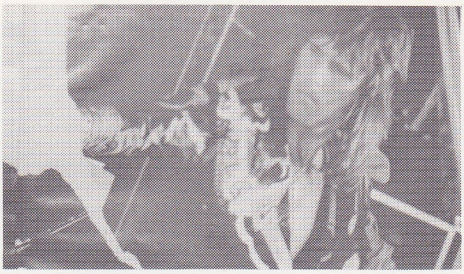
翌年発表の「タルカス」では、エマーソンの音楽性とレイクのアイデアが、20分にも及ぶ壮大な組曲として見事に開花している。そしてELPの人気を日本でも決定づけたのが第３作「展覧会の絵」である。ムソルグスキーの有名なピアノ曲を彼等独自に解釈したこのライヴアルバムは、ロックとクラッシックの融合を目差す彼等のイメージを明確に表現したこともあり、大ベストセラーとなった。また、別テイクではあるが、ビデオも発売されている。

とどまる所を知らないELPの活躍は、この年のメロディメイカー紙の人気投票で、レッド・ツェッペリンから第１位の座を奪い取り、以後数年間にわたって、常に上位にランクされていくこととなる。

72年には、一層円熟度を増した傑作「トリロジー」を発表、同時に待望の来日を果し多くのファンを魅了した。帰国後、自らのレーベル「マンティコア」を設立し、ピート・シンフィールド、PFM等と契約、特にPFMは大成功し後のユーロロックブームの先駆けとなった。

また、ELP自身も「恐怖の頭脳改革」を73年に発表している。メロディアスな曲から複雑な構成の曲まで「持てる力を集約し、練りに練った意欲作」のコピーそのままの素晴しい内容は最高傑作と評価されている。

そして、ここまで高められたエネルギーを持続しながら敢行した73〜74年のワールドツアーを収録した３枚組ライヴ「レディース・アンド・ジェントルマン」



は、彼等の集大成ともいえよう。

しかし、この後ELPに大きな変化が訪れた。デビュー以来５年余、向う所敵なし、常にファンの期待を遥かに越えた名作、名演の数々を提供してくれた彼等であるが、突然、活動を停止してしまったのである。

ようやく、77年に発表した「ELP四部作」も１〜３面が各メンバーのソロ、４面には３人の共演という変則的な作品で、そこには３人の力を凝縮したかっての爆発力はなかった。この傾向は、続く「作品第二番」でも同様で、収録された既発売のシングル４曲と未発表８曲は、いずれも趣味的で散慢な印象をぬぐいきれなかった。

以後、79年の「ラヴ・ビーチ」（タイトルからして彼等らしくない）、80年の「イン・コンサート」（77年モントリオールでのライヴ）という全盛期を知る者には信じられないヴォルテージの低い作品を残して、あえなく解散してしまった。（後にベスト盤が１枚発表されている）

70年代を疾走したELPの軌跡は、ロック史上でも重要である。特に、プログレッシヴロックを定着させた功績は大きい。地味なアーティストが多いなかで、その存在を広く世界に向けて、最も強烈にアピールしたのは、まさにELPであった。彼等に触発された人々は相当な数に及ぶであろう。

さて、各メンバーは解散後しばらく第１線から離れていたが、まず、81年にパーマーがジョン・ウェットン，スティーヴ・ハウ，ジェフリーダウンズとエイジアを結成した。プログレッシヴ・ロックの風味を僅かに残したアメリカ志向のポップな音作りで大成功し、現在までに３枚のアルバムを発表している。

一方、エマーソンは３枚のサントラ盤と「Honky」という趣味的なソロを発表した程度だったが85年にレイクと再び合流し、コージー・パウエルをドラマーに迎えた新生EL&P（エマーソン，レイクアンドパウエル）を結成、翌年には同名のアルバムを発表している。以前のような若々しいパワーこそ感じられないが、歴戦のベテランらしく計算された音作りと安定した演奏を聞かせてくれた。精力的にツアーも開始したようであり、今後の活動が注目されている。　**松本真和**

PINK FLOYD



ピンク・フロイドが活動しはじめた66年頃、ロンドンのアンダーグラウンド・シーンは、UFOクラブ、マーキー・クラブ、ラウンドハウス、スピーク・イージーなどのライヴ・ハウスが、拠点になっていた。彼等は、ケネス・アンガーの映画が上映され、詩人の朗読やら前衛舞踏やらが行なわれた同じこれらライヴハウスで、いちはやく、スライドやライト・ショーと大音響を結びつけた、といわれる。ほぼ連日連夜のギグ。よく彼等は他のバンドとあまり関わりを持たなかった、などと言われるけれど、ジミ・ヘンドリクスやソフト・マシーン、アーサー・ブラウンからサード・イヤー・バンドに至るまで、本当に数知れないアーティスト達とここで接触している。また大学でのコンサートも多く、中には対バンドがグレイシャスなどという日もある。ロジャーは後のインタビューで、この頃のことを「右も左もドラッグだらけ、その頃のことなど誰も何一つ覚えていないと思うよ」とさえ語っている。67年、サイケデリック・シーン真っ只中のことである。67年8月5日、デビュー作「夜明けの口笛吹き」が発売される。ライヴとは裏腹にひどくポップだが、それでも「星空のドライヴ」などは、当時のステージをしのばせている。68年初頭、シドが過労とノイローゼのためバンドを去り、替ってデイヴが加わった。一般に1作目と2作目「神秘」(68年6月29日発売)との間には、サウンドに大きな隔たりがあるように言われるけれども、実際のバンドは68年末まで、シド在籍時のサウンドを引きずっている。「神秘」は過渡期の作品なのである。収録された「追想」は1作目に収録されるはずだった曲だし、「太陽讃歌」は66年末から演奏されていた曲なのである。この68年から69年初頭にかけて、シド脱退によるバンドの低迷をしのぐかのように、ロジャーを中心にして多くの曲が書かれている。

「夢に消えるジュリア」「Point Me At The Sky」「Embryo」などの小曲や「神秘」「ユージン、斧に気をつけろ」「光を求めて」などのライヴでよく演奏された曲など。どれも、まだ小じんまりとした演奏だけれども。彼等が本格的に即興を重視するのは、69年に入ってからのことである。3作目「モア」(69年7月発売)と4作目「ウマグマ」(69年10月25日発売)は、こうしたステージでの実験から生まれた作品といえる。「ウマグマ」のスタジオ・テイクが端的に物語るように、69年のステージでの彼等は、非常に実験的なサウンドに走っている。整理がされていないだけに、とりとめがない。69年中頃から演奏されはじめた長大な未発表曲「The Man」と「The Violent Sequence」は、こうした即興から生まれてきた曲で、結局は完成品として陽の目をみなかった試行錯誤の一つだと言える。これらの断片は「モア」「ウマグマ」に分かれて収録されている。また、「ウマグマ」のライヴ・テイクは、ステージでの代表曲でもあり、この時期のサウンドをよく伝えている。69年はそして彼等にとっても野外フェスティヴァルの時期だった。その頃、彼等は急速に注目され始める。69年12月、映画「砂丘」のサントラ収録のため、ローマに滞在中、デイヴが「原子心母」のフレーズを思いついたことで、翌70年は「原子心母」の年となる。「モアのテーマ」「シンファス組曲」を演奏した初旬のツアーでは、ドラム・ソロを入れた、まるで「ユージン〜」の亜流のような曲調だったが、ロン・ギーシンの手をかりて、ブラス、合唱が加わった完成品が、70年10月10日に5作目「原子心母」として発売されると、各方面から絶賛を浴び、彼等を一気にオーバーグラウンドへと浮上させた。第一のピーク時である。また、70年後半は、これまでの実験が実りをみせた時期でもある。時に「embryo」「神秘」の複雑な演奏、音群移動装置を使っての「Cymbaline」のロング・テイク、「でぶでよろよろの太陽」でのリード・ソロなど、効果音とサウンド効果に充分な計算がありながらも、即興を最大限にいかしている。翌71年は「Return Of The Son Of Nothing」の制作で幕を開ける。曲は間もなく「Echoes」と改名され、重要なレパートリーとなる。そして8月には初来日を果たし、11月に7作目「おせっかい」が発売された。72年1月20日、イギリス・ツアーの幕明けは、ブライトンのドーム、ここでロック史上に名を残すことになる「狂気」が初演された。曲は徐々にまとめられていったものの、72年の「狂気」は比べようもなく未完成である。初期のサウンドの延長といった感が強い。「狂気」を持って世界中を巡るさ中、同年3月の二度目の来日を挟んだ時期には、フランスで8作目「雲の影」(72年6月3日発売)が録音されている。そして73年1月のスタジオ入り。この時、「狂気」は完成するのだが、映画「ピンク・フロイドの幻想」には、この時の貴重な映像が収められている。3月、アメリカ・ツアーと同時に9作目「狂気」が発売されるや否や、破格のセールスを記録しはじめる。あらゆる記録を塗りかえはじめる。まさに73年は世界中が「狂気」一色の年だったといっても過言でないほど。バンドにとって最大のピーク時を向える。この年からライヴも曲が固定されるようになった。「雲の影」「When You are In」「太陽讃歌」「ユージン〜」「Echoes」、そしてスタジオ・テイク型の「狂気」アンコールの「吹けよ風、呼べよ嵐」。ところが、次第にバンドの歯車が狂いだす。誰一人として予想もしなかった大成功が、ピンク・フロイドという名前が、メンバー個人をつぶしはじめたというべきか、発売日まで公式発表されたにもかかわらず、遂に未完に終った「Household Objects」なるアルバム、そして夏のフランスと冬のイギリスでしかツアーを行なわなかった74年の出来事は、いかにバンドが迷っていたかを表している。74年に初演された3曲「狂ったダイヤモンド」「Raving & Drooling」(後のSheep)「Youve Gotta Be Crazy」(後のDogs)は、結果的に10作目の「炎」(75年9月15日発売)、11作目の「アニマルズ」(77年1月23日発売)の骨子になった曲だが、裏を返せば、12作目「ウォール」(79年11月30日発売)の制作に入るまで、ほとんど新曲を書いていないことになる。ライヴも74年と75年は、ほとんどかわり映えしていない。実際、この頃、バンドが解散寸前だったことが、後にメンバーの口から語られている。一方、ステージだけは極端に大掛りなものになり、スタジオ盤をそのままステージで再現するという形をとりはじめる。旧タイプの曲は全て取り除かれ、いわゆるロック・バンドのようなサウンドにがらりとととって替ったのも74年からだった。確かに「炎」「アニマルズ」の出来はいいのだけれども、どこか心労にがんじがらめにされて出来上ったような雰囲気がついてまわっているように思えて、個人的には「ウマグマ」の持つ自由奔放さや「おせっかい」などのリラックスしたアコースティック・ギターの響きが懐しく思えてしまう。こうして沈黙する彼等が事実上、最後に腰を上げたのは、「アニマルズ」のツアー終了後の77年終盤から78年春頃である。これが「ウォール」である。ロジャーの作品と言ってもよい程、彼の占める割合が大きくなっている。最初、3枚組の予定もあったと、デイヴは語っているが、結局、「ウォール」と83年作の「ファイナル・カット」に二分された。「ウォール」は良くも悪くもピンク・フロイドの終着である。ステージング、映画化、コンセプトの内容、それらに必要な有能なスタッフ、まさに総動員での一大コンセプトである。「ウォール」発表後、リックが脱退し、ロジャーが「ファイナル・カット」を製作するが、この時、既にバンドは崩壊していたとみるのが妥当だろう。83年、ピンク・フロイドは解散した。

松本昌幸

KING CRIMSON

80年代後半を経た今日に至るまで、プログレッシヴ・ロックはおろかブリティッシュ・ロック史上において孤高の存在として君臨し、ロックシーンに様々な影響力を及ぼすと同時に幾多の名声と賛辞を博した巨大なカオス、キング・クリムゾン。それは、グループの絶対的なリーダーで鬼才と呼ばれていた男、ロバート（ボブ）・フリップ（G.Mtn.Devices…etc.）の研ぎ澄まされた意思と本能、感性、知性そのものと言っても過言ではないだろう。ロバート・フリップは1946年５月に、南イングランドはドーセットの田舎町、ウインボーンで生まれた。彼自身、鋭敏な感受性を持っているが故に、周囲の世界に対し疎外された孤立感を覚えつつ友人も誰もいない孤独で不幸な少年期を過ごしたという。地元の音楽学校で11歳の時、初めてクラッシックギターを手にしてから僅か３ケ月、独学でマスターした彼は本格的な活動に入るまでの間、ロックからジャズ、クラシック等を愛聴していきながらも着実に腕と実力を磨いていった。ボーンマス・カレッジに入学と同時に友人達とバンドを組み、パブやホテルを活動の場としていきながらも、その一方で自ら理想とするグループの構想を抱き、地元ウィンボーンでフリップと同じく名の知られていた、マイケル・ジャイルズ（Ds.Per.Vo）とピーター・ジャイルズ（B.Vo）の兄弟らと共に、1968年にジャイルズ・ジャイルズ＆フリップ（GG＆F）を結成。これを契機に正式な音楽活動を開始するが、アルバムを１枚発表した直後にピーターが脱退しグループ自体も消滅してしまう。しかし、フリップとマイケル・ジャイルズは臆する事なく新たなグループ結成への決意を固め、グレッグ・レイク（現EL ＆ P;B.Vo）、イアン・マクドナルド（Key.Vo.Mtn.Vibe.Woodwind…etc.）、そして作詩とライティングショウ等を手掛けるピート・シンフィールドを迎えて、同年12月にキング・クリムゾンを結成。翌69年10月には衝撃のデビュー作で名盤と名高い「クリムゾン・キングの宮殿」を発表…！ビートルズの「アビー・ロード」を抜いてトップの座に着き、各方面から多大な賞賛が寄せられ一躍脚光を浴びるのだった。何よりも本作品の根底には美と幻想、抒情、神秘、破壊、戦慄が横たわっており、クリムゾンの創造する西欧的音楽の構築美を物語る上で大いに貢献していたと言えよう。だが、本作品の成功とは裏腹にグループは早くも分裂の危機を迎えていた。2nd 製作前にマクドナルドが去り、発表後には更にレイクとジャイルズも抜け、先に脱退したマクドナルドはジャイルズと共にマクドナルド＆ジャイルズを、レイクは既に御存知の通りEL ＆ P結成の道へと歩むのだった。2nd「ポセイドンのめざめ」は、そんな状況のもと解散の危機にもめげずリリースされ前作で得た方法論をより発展させていき、広大な音宇宙を創作したのだった。本作では新たにメル・コリンズ（Fl.Sax）、キース・ティペット（P）をメンバーに加え、更にベースにはピーター・ジャイルズを再び起用。70年には多数のブラスセクションを配し迷宮の如き緻密な音の構成で迫った傑作「リザード」　を発表するが、ここではメンバーがゴードン・ハスケル（B.Vo）とアンドリュー・マックロック（Ds.Per）に交代され、Ｂ面の組曲の中ではイエスのジョン・アンダーソンもゲスト参加している。４作目「アイランド」でも大幅なメンバーチェンジが成され、ボス・バレル（B.Vo）とイアン・ウォーレス（Ds.Per）の他若干名のゲストを迎えて製作され、メロトロンに加え生のストリング・セクションをも導入した、前三作から較べると比較的に地味で隠やかな印象を与える作品に仕上がっている。しかし、本作においてシンフィールドとボズ・バレルは互いに意見の対立から折り合いが悪くなってしまい、活動意欲の低下していたシンフィールドはグループを去り、結局、グループ自体も「アース・バウンド」という駄作のライヴをリリースした直後に各メンバーの離散がもとで、一時的な活動休止状態に入ってしまう。残されたフリップの今後の動向が大いに注目されたが、72年装いも新たにジョン・ウェットン（B.Vo）、イエスを抜けたビル・ブラフォード（Ds.Per）と共に後期クリムゾンをスタート。２人の他にもデヴィット・クロス（Vln.Key）、ジェイミー・ミューア（Per）といった強い個性を持ったメンバーに支えられ、「太陽と戦慄」「暗黒の世界」そして活動の最後を締めくくるに相応しい傑作「レッド」をたて続けにリリースしていったのであった。後期クリムゾンの音の背景には魔術、秘教、錬金術といった秘儀体系に支配された金属質のヘヴィな旋律と、人間の持っている潜在意識に及ぼす強烈かつ狂暴性を伴った心理的インパクトが同居しており、前期に見られた幻想美と抒情的な面はすっかり影をひそめてしまったのだった。グループはその後、アメリカ公演を収録したライヴ盤「U.S.A」と、２枚組ベスト「新世代への啓示」を発表し、表舞台から遠去かってしまうが、ソロ活動と並行してセッション、プロデュース業等に精を出していたフリップは再びブラフォードを呼び寄せ、エイドリアン・ブリュー（G.Vo）とトニー・レヴィン（B.Stick.Vo）を迎えて81年「ディシプリン」でキング・クリムゾンを復活させ、以後「ビート」「スリー・オブ・ア・パーフェクト・ペア」をリリースした後に再び解散した。　**大関善行**

GENESIS



イギリスの名門校チャーターハウス・パブリック・スクールで当時学友だったピーター・ガブリエル（ヴォーカル）、トニー・バンクス（キーボード）、マイク・ラザフォード（ベース）、アンソニー・フィリップス（ギター）等によって、1967年にジェネシスは結成された。69年に1ST「創世紀」を発表したが、大きな反響を得ることなく終り、一時活動を停止してしまう。

再び彼等が登場したのは70年。フィル・コリンズ（ドラムス）、スティーヴ・ハケット（ギター）を新メンバーに、カリスマ・レーベルと契約を結び「侵入」を発表した。まだ、A・フィリップスとジョン・メイヒュー（ドラムス）による録音だったが既に繊細でロマン溢れる独自の世界を確立している。そして、72年には新メンバーを加えた「怪奇骨董音楽箱」によって劇的な曲展開、ユーモア、ミステリアスな雰囲気を見事に表現した。続く「フォックストロット」には、初期ジェネシスの集大成ともいえる20分にも及ぶ大作「サパーズ・レディ」が収録されており、代表作の1枚とされている。また、ユニークなライヴが評判になったのはこの時期からである。P・ガブリエルによる創作童話の朗読から始まり、劇的な曲調にあわせてコスチュームを代えてのパフォーマンス、巨大なスクリーンによる映像と視覚効果を最大限に発揮したステージは「天使が地上に舞い降りて、おとぎの国をさまよい歩いている」と評された。この当時の様子は、73年発表の「ジェネシスライヴ」と僅かに残されたコンサートフィルム等で知ることができる。

そして、同年暮に発表された「月影の騎士」では、メロディが一層美しくなり、インストゥルメンタルパートがより充実するなど今まで以上にまとまりを感じさせてくれた。

このように、一作ごとに成長を続けるジェネシスは、74年「眩惑のブロードウェイ」によって遂にその創造力を昇華する瞬間を迎えた。プエルトリコ人の青年レエルが体験する時空を超えた冒険物語をシュールな詞とイマジネーション豊かな演奏で展開する2枚組大作は、ジェネシス自身の持てる力を出しきった最高傑作である。なお、直後のツアーは筆舌に尽くし難い出来であったと伝えられている。そしてまた、この作品の持つ魔力的エネルギーはバンドの破綻をも誘発した。リーダーであるP・ガブリエルが75年5月に脱退したのである。

しかし、残された4人はP・コリンズをヴォーカルに起用して「トリック・オヴ・ザ・テイル」を発表。ヴォーカルスタイルがP・ガブリエルに似ていたこともあり、以前の作品と比較しても遜色ない内容に仕上げることができた。また、ライヴではドラマーにビル・ブラッフォードを迎え、P・コリンズがヴォーカルに専念できる体制を整えたのである。続く「静寂の嵐」では、よりダイナミックで叙情的なサウンドが新しい多くのファンを生んだ。77年のツアーから、ドラマーがチェスター・トンプソンに交代したが、この時期のスケールの大きな充実したライヴは「眩惑のスーパーライヴ」で聞くことができる。しかし、残念なことにこのライヴ盤を最後に、中世ロマンティシズムを湛えていたS・ハケットが脱退してしまった。

またも危機に瀕した彼等であるが、今度はM・ラザフォードがギターも担当し「そして3人が残った」を発表、健在ぶりを示すとともに、ツアーでは、ダリル・ステューマー（ギター）が迎えられた。このメンバーで78年11月に初来日を果し、多くのファンを魅了している。

この後、ジェネシスはその姿を大きく変貌させていく。ヨーロッパ的哀愁は徐々に影を潜め、ポップ化は「デューク」で明確化した。「アバカブ」ではなんと黒人音楽界の大物アース・ウインド＆ファイアーのホーンセクションと共演！「スリーサイドライヴ」、「ジェネシス」そして最新作「インビジブルタッチ」までの8年間にアメリカでも大成功を収めた。初期の魅力は失ったが、職人的な音作り、演奏のダイナミズム、そして独自のメロディラインは健在であり、切れのよいスピード感を身につけたジェネシスは今なお超一流のロックバンドとして高く評価されている。

また、各メンバーは多彩なソロ活動も行っている。特にP・コリンズは、70年代からブランドXをはじめ数多くのセッションをこなしていたが、80年代に入ると、ソロ、プロデュース等幅広い活動を通じて多くのヒットを生み、世界のトップスターになった。一方、過去に2枚のソロを出しているM・ラザフォードは、マイク＆メカニックスを結成活躍中、T・バンクスは2枚のソロの他、サウンドトラックをいくつか手掛けている。

その他、P・ガブリエルが精力的な活動を行っており、数少ない真にプログレッシヴなアーティストとしてカリスマ的な存在である。また、S・ハケットは長い地道なソロ活動を経て、86年にスティーヴ・ハウとGTRを結成した。そして、A・フィリップスは今なおイギリス的な素朴で心温まる作品を発表し続けている。

松本真和

YES

ピンクフロイド、EL & Pと共に70年代ブリティッシュ・プログレッシヴのパイオニアとして、トップの座に君臨し一つの時代を築きあげ、その驚異的な芸術性と構築美、高度な音楽性で数多くの根強いファンを持つイエス。その歴史は1968年の8月、マーキー・クラブでのギグによって幕を開ける事となる。当時メンバーは、兄アンソニーと共にウォリアーズで活動していたジョン・アンダーソン（Vo)、ザ・シンというグループに在籍していたクリス・スクワイア（B,Vo）とピーター・バンクス（G,Vo)、数々のグループでセッション活動を転々としていたトニー・ケイ（Key）とビル・ブラフォード（Ds)、計5人でスタートしたのだった。　マーキーでのギグをこなしつつ、その後はクリームの解散コンサートで前座を務めたり、故ジャニス・ジョップリンのバックも担当していきながらも、徐々にグループは知名度を高めていき、翌69年にはアトランティックと契約を交わし,同年8月に「イエス・ファースト」でデビューを飾る。翌70年にはオーケストラとの共演を試み話題になった2nd「時間と言葉」を発表。活動の方も順調な軌道の波に乗りつつあったが、その直後にピーター・バンクスが脱退しフラッシュを結成。後任にトゥモロウ、ボダストに参加していたスティーヴ・ハウを迎えて,「イエス・サード」を製作。彼等は本作品で初めてシンセサイザーを導入し、音的にも幅と広がりを持たせる事が出来た。

しかし、発表後に今度はトニー・ケイが脱退、彼はバジャーを結成する。ケイの後任にグループはストローブスのメンバーで当時キース・エマーソンと並んで高い評価を受けていた,"キーボードの魔術師"リック・ウェイクマンを迎えて、彼の持つオーケストラルな音楽性と手法を導入して、あの名作と名高い「こわれもの」を発表。各方面から絶大な支持を受けトップグループの座についた。ジャケットワークも本作品から幻想画家ロジャー・ディーンが担当、ファンタスティックなアートがイエスの創造する音世界に色を添えていった。「こわれもの」で得た高度な音楽性は、より以上に向上し翌72年に「危機」という最高傑作を生み出した。複雑かつ緻密な音の構築から透明感溢れるハーモニー、イエスの創りあげた壮大なシンフォニーと言うべき頂点の極みであろう。しかし本作品を最後にビル・ブラフォードがキング・クリムゾン加入の為脱退。後任にプラスティック・オノ・バンド等に参加していたアラン・ホワイトを加えて、翌73年3月、待望の来日公演を行った。翌月には3枚組ライヴ「イエスソングス」を発表、アルバムと寸分も変らぬ壮大かつ緻密な構成美とシンフォニーは、ファンを驚かせた。メロディメイカー紙の人気投票において、国際と英国内の両部門でも最優秀グループに選ばれ正に上昇期を迎えつつあった。同年の11月には2枚組大作「海洋地形学の物語」を発表。彼等の創造する世界は増々壮大なスケールを持った宇宙的な広がりを見せた。しかし「ヘンリー八世の六人の妻」からソロ活動を並行していたウェイクマンは、グループの方向性に疑問を感じ、本作品を最後に脱退。以後、ソロ活動に専念し「地底探検」「アーサー王と円卓の騎士達」といった傑作群を発表していく。ウェイクマンの後任は困難を極めたが、メインホース、レフュジーといったグループや映画音楽で活躍していた、スイス人のパトリック・モラーツを起用。74年11月に「リレイヤー」を発表,「危機」に負けず劣らず、より複雑かつ難解なサウンドを打ち出したが、ウェイクマンが脱けた後が災いしてか、本作品は賛否両論を呼んでしまう。発表後、彼等は75年の春に初期のナンバーと未発表曲を収めたベスト盤「イエスタデイズ」をリリースし、以後は各人共それぞれのソロ活動に入り、約2年近く沈黙を守り続けたのである。ハウは「ビギニングス」,スクワイアは「未知への飛翔」,ホワイトは「ラムシャッフル」,モラーツは「i」そしてアンダーソンは「サンヒローのオリアス」とそれぞれ各一枚ずつソロ作品を発表したが76年11月にモラーツが音楽的な意見の食い違いで脱退。結局、ウェイクマンがグループに再加入し、77年に「究極」を発表……！よりタイトな音作りを目指し、ジャケットワークもロジャー・ディーンからヒプノシスに変わり、開放的な印象を与えた。78年には前作の延長線上の「トーマト」をリリースし、よりポップで明確な路線を打ち出したが、79年には、何と！アンダーソンとウェイクマンの両名が脱退し、グループは重大な危機に直面する。しかし、グループは当時"ラジオスターの悲劇"でヒットを飛ばしていたバグルスのトレヴァー・ホーンとジェフリー・ダウンズを起用して、80年に「ドラマ」をリリース。全盛期の緊張感を再び取り戻し（ロジャー・デイーンも再びデザインに起用された),全英NO.1アルバムに選ばれた。が、しかし結局はグループ全体がうまくゆかなくなり、2枚組ライヴの「イエスショウズ」とベストの「クラシックイエス」を残して、81年に自然消滅してしまい、13年間もの長い幕を閉じてしまった。ところが83年に、スクワイアとホワイトの両名は、アンダーソンとオリジナルメンバーだったトニー・ケイを誘い、元ラビットのトレヴァー・ラビン（G,Key,Vo）を迎えて、復帰作の「ロンリー・ハート」を発表、見事に大成功を収めて返り咲いた。

大関善行

VAN DER GRAAF GENERATOR

VDGGがイギリスで結成されたのは1967年、ファースト・アルバムは68年に発表している。以後10年間に10枚のアルバムを残し、バンドとしての活動は終結している。しかしピーター・ハミル(g.vo)はバンド活動以外にソロLPの製作も精力的に行っていた。VDGG活動中にすでに7枚のアルバムを、その後今日に至るまでさらに9枚(最新作はAnd close as this. '86)リリースしている。VDGGがこの原稿の主題であるが彼のソロワークもバンドの作品と密接な関係にあり、切り離して論ずると逆に不自然となるので同時に考察したいと思う。1st LP "The Aerosoll Grey Machine"の裏ジャケットにはこのアルバムが完成するまでの経過がハミル自身の筆によって書かれている。結成当時の仲間、Chris Judze Smith (ds). Nic Peame(Org)がぬけ、Hugh Banton (Key). Keith Ellis(bass). Guy Evans(drm)の協力のもと、



バンドを再結成させたとのこと、そしてかなり突然のデビューの話であったようだ。したがって曲も以前にバンドの為に書いたストックもあったろうが、当時行なおうとしていたソロワーク用の曲も収められているかもしれない。後のソロアルバムに通じる曲もある。また録音風景のリアルな描写やレコード製作の興奮と喜びも語られている。この時すでにバンドは十分なオリジナリティを確立している。B面ラストの"Octpus"の曲展開は初期のVDGGサウンドの原型である。その後Keith Ellisがぬけ、Nic Potter(b)が参加する。彼は3rd後脱退するがVDGで復帰する。日本においても時間的なズレはあったにせよ、4thの"Pawn Hearts"を除いてフォノグラムより発売されていた時期があった。ソロも1st, 4, 6, 7thが出ていたはずだ。それにしてもよりによって"Pawn Hearts"を発売しないでいられたレコード会社の神経はどうも理解しかねるが。1stソロ"Fool's Mate"('71)は本人がVDGGとは無関係と注釈しているように、やや内向的でノスタルジックな曲や風刺的な曲まで入った味わい深い作品である。同年のVDGGの作品が"Pawn Hearts"であった。2nd"精神交遊"('70). 3rd"核融合"('70)と進むにつれ大曲でアルバムが構成されるようになってゆき、この4thでピークとなる。これを彼の最高作とする人も多い。精神の断崖に立ち彼は絶望の果ての希望、生と死について思いめぐらす。"神"の前では独裁者ですらチェスの歩にすぎないのではと。サウンドは高いテンションを終始保ち、イエス、ジェネシス、ピンクフロイドなどのはるかにメジャーなグループのいわゆるプログレファンの注目も集めるようになる。アメリカにおいてもリリースされ、またヨーロッパ各地でも知名度は飛躍的に上った。しかしその後バンドは解散状態になる。そして75年"Godbluff"で再編されるまでに4枚のソロアルバムを発表する。73年の"Chameleons…"続く"The Silent Corner and…"にはフールズ・メイトとVDGGタイプの作品が同居している。それぞれ"Black Room". "A Rouse is not a home"などはVDGGの曲だと言ってもおかしくない作品だ。驚くべき言葉の質量、そして密度。しかし何というしなやかなメロディだろう。音符を与えられてない単語はひとつもない。"In Camera"('74)では彼の夢想、自己への問いはエスカレートする。"Nadir's Big Chance"('75)では遂に人格を分裂させ、もう一人の自分を出現させる。その後再びVDGGは再結成され、いわゆる3部作"Godbluff"('75). "Still Life"('76). "World Record"('76)と間をおかず発表する。この強迫的な創造力の原動力は何であったのか。バンドの永続性はもはや幻であると悟っていたのだろうか。やがてその時は来りて77年のソロアルバムに"Over"と名付ける。しかし長年の同志であったバントンとジャクソンの脱退は確実に一つのピリオドであった。だが終りもまた始まりである。2人がまさにバンドの中核だったことをグループ名から"Generator"の文字を取り去ることによって表明し、同時にVan Der Graafの始まりを宣言した。バイオリンとベースの2種の弦楽器を導入した"静粛、歓喜"('77)はハミルの観念の宇宙空間だった。閉じだ円形の"ドーム"の内に歓喜の歌は響きわたる。そのまばゆい閃光は"Vital('78)と題された初の2枚組ライブアルバムに刻み込まれた。

VDGはここに終結する。久しく見てきたようなことを書いてきたが、確実なのはこれらのレコードの存在でありそれ以外の部分には私の勝手な思い込みもあるかもしれない。しかし"歴史"には真実もまれに書かれている、ということでこれをA VDGG Historyとさせていただくこととしよう。

なおそれ以後のソロ活動、そしてKグループなど形は変われど歴史は進行中であり重要性は依然不変である。彼のトレードマークにも組み込まれている蠍座的性格、おだやかな外面と内に秘めた情熱の発露する様を86年秋、我々は真近に目撃した。Tanks, Peter

松本修一

GENTLE GIANT

ジェントル・ジャイアント(以下GG)程、日本国内で評価と人気の差があったグループは珍らしいだろう。'75年当時において、日本のマニアの間ではイエスと比肩するとまで言われながらも、人気の何と低かったことか。最も、この評価自体にしても多少ピントはずれで、イエスが個々のソロ・パートを多少と言わず、売りにしていたのに対し、GGはクロス・リズム／ポリ・リズムを多用したアンサンブルと、シニカルさとペーソスをあわせもった明るさが特徴であった。だが、残念なことに、この辺の感覚は日本人とは相性が悪い。基本的に、日本人は、自分に理解できる程度に『暗くて重い』ものを好む傾向があった。ライト感覚のものが喜ばれるようになったのはここ、数年のことであり、しかも、同じライトでもトリッキーなものはダメ、知的なものも見せかけだけのものに限り可、という日本人気質からは、極めて肌の合わないグループがGGであったと言えよう。GGは様々な理由から、スタイル・コピーの非常にし難いグループであったと言えよう。一つに多少ジャージーなコーラス。これは多少音楽の経験のある者さえ驚嘆する程の難かしい動きのあるものも含まれている。もう一つは対位法的な曲構造と、極端なまでのクロス・リズム。これは個々のメンバーに演奏者としてのヴォルテージ／リズム感を要求する性格のものである。ようするに出来の良いソリストを1人、2人つれてきてバンドを作ることの方が、明らかに簡単なことだという訳だ。そして各メンバーがマルチ・ミュージッシャンである上、専門以外の楽器の技術がほとんど落ちないということ。これは驚異としか言いようがない。彼らは曲間で次々に楽器をチェンジしていく、というプレイを、平気でライヴ・アクトで行なってしまうのだ。楽器にしても、10CCのようにギターとベースが奏けて、シンセで遊べますといったセコイものではなく、ベースがヴァイオリン、トランペットまでこなし、キーボードがヴィブラフォン、チェロと変わりヴォーカルがサックス、ベースとチェンジしていく、という立体的なフォーメーションでしかも全員リコーダー、全員ギター、全員パーカッションといった大技まで持っているのだ。

GGは元サイモン・デュプリー＆ザ・ビッグ・サウンドのシャルマン兄弟──フィル (vo,saxces…etc)，ディレク (Vo,g,b)，レイ (B,vln,g,vo,etc) に加えてケリー・ミネア (Kbd,vib,cello,etc)，ゲイリー・グリーン (g)，マーティン・スミス (dr) のライン・アップで'70年11月に「Gentle Giant」でヴァーティゴよりデビュー。そして'72年の初めには 2nd「Aquaring the taste」を発表。この頃の作品は今聴いても、センスの良さ、編曲のうまさには驚嘆せざるを得ない。ほとんどファッショナブルでさえある。

そして同年暮にはM・スミスからマルコム・モルティモアにドラマーを変え、3rd「Three Friends」を発表。ヨーロッパ・ツァーを行ない、好評を博した。この頃からGGは本国よりヨーロッパでの方が人気が出始めたのだ。

'73年にはアルバム「Octopus」を発表。前作あたりからロック色を強く打ち出すことを彼等は考えていたようだが、それがドラマーを、さらにジョン・ウェザースに変えたことにより、見事に結実することになった。アメリカ・カナダ・ツアーも成功した。



だが、シャルマン3兄弟の一角、フィルが脱退してしまい、グループは残りのメンバーで同年に「In a Glass House」を発表。以後、解散まで、このメンバーで活動することになる。この頃から'74年の「The Power and the Glory」，'75年の「Free Hand」，'76年の「Interview」と極端に高水準のアルバムを発表し続ける。さらに2枚組ライブ「Playing the Fool」。彼等の真に恐ろしい点は、これだけの演奏を笑いながらやっていることだ。先日、GGのライブ・ビデオを見る機会があったのだが、R・シャルマンに至っては、あの複雑な変則拍子のパッセーシをダンス感覚で演奏してたりして、思わず腰を抜かす思いだった。

'77年「The Missing Piece」発表。当時、大物プログレ・バンドが続々とポップ色の強い作品を発表した時期だった。「GGもついに駄目になった」と言われた本作だが、B面ラストに代表されるように、ポップな曲調と裏腹に複雑な編曲はそのままだった。だが続いて'78年に発表された「Giant for a Day」は本当にいけなかった。何処にでもいるバンドのようなサウンド。そして'80年に多少ニュー・ウェーヴ色を加味した「Civilian」を発表。前作よりましとは言え「Missingー」にさえ劣る出来だった。翌年のことだったろうか、某クラッシック系音楽誌にGGの解散記事が載っていた。その一誌以外では報道されなかったように思う。以後、彼等の名はシーンから消えてしまった。　**斎藤千尋**

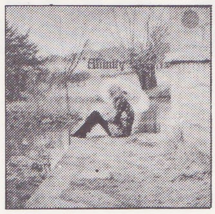


AARD VARK
same title

DERAM 1970年
NOVA : SDN 17 廃

Frank Clark : perc. ds.
David Skillin : vo.
Steve Milliner : org. p. celeste. vib. marimba. rec.
Stan Aldous : b.

デッカ、デラムレコードは、当時のニューミュージックのムーヴメントをいち早く認識し、その発表の場としてノヴァ・シリーズを発足させ数々のグループをデビューさせている（エッグ、ヤン・デュークス・ドゥ・グレイ等）。アードバークもその中のひとつで、キーボード・トリオ・スタイルのロックを演奏している。方法論としてはプログレッシヴというよりはむしろハード・ロックに近く、ハモンドを中心に八方破れなパワーで押し切るところなど、当時のロックシーンがいかに活気に満ちていたかを物語っている。本作のみで解散してしまったのは非常に残念であるが、彼らの残してくれた遺産は今尚語り継がれ、イギリス本国などでは新しいファンさえ増え続けているのである。（土）

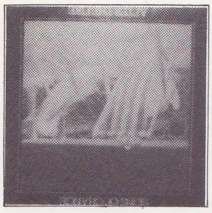


AFFINITY
same title

VERTIGO 6360 004 廃 フォノグラム
SFX 7283 廃

Linda Hoyle : vo.
Lynton Naiff : p. el-p. hpd. vib.
Mick Japp : g.
Mo Foster : el-double bass.
Grant Serpell : ds. perc.
brass arr : John Paul Jones, Chris Hughes
Strings arr : John Paul Jones

ブリティッシュ・ロック全盛期に唯一のアルバムを残したアフィニティー。ヴァーティゴ・レーベル、キーフの淡い色彩感覚が冴えわたるジャケット、典型的なハモンド・オルガンの音色、ハスキーな女性ヴォーカル、と今やこの種の代名詞とも言える１枚である。全編にわたるリンダの迫力あるヴォーカルとリントン・ネイフのスリリングなオルガンは共にジャズ色の濃いものだが、全体の骨組みはブルース・ロックの延長線上にあるオーソドックスなものである。今となっては古臭さを感じさせるが、曲のアレンジ、ブラスやストリングスの導入も実に決っていて、どこを取っても70年代初期の熱いものが感じられる。なお、リンダは翌年ソロ・アルバムを発表し、他のメンバーもセイラーを始めとして各方向へと散っていった。（昌）



AFTER THE FIRE
Signs Of Change

RAPID 1978年
RR 001 廃

Peter Banks : org : syn. p. vo.
Nick Battle : b. vo.
Andy Piercy : vo. g. perc.
Ivor Twindell : ds.

アフター・ザ・ファイアーは現在でも活動しているグループだが、このファースト・アルバム以外の作品はポップス、ニューウェイヴ色の強いまるで別グループとしか思えない作風となっている。本作では、イエス風のテクニカル・シンフォニック・サウンドを演奏しているが、メンバー個々のテクニックがいまひとつ未熟なため全体的な完成度は他の同系統のグループの作品より若干見劣りする。とはいうもののそれなりに楽しめるアルバムである。彼らは70年代初期から活動していた様で、地元ではある程度人気を博していたものの大手のレコード会社と契約がとれず自主製作によりリリースされたため日本においてあまり話題にも登らなかった。ちなみにキーボードのピーター・バンクスは元イエスのギタリストとは別人である。（土）



AMAZING BLONDEL
England

ISLAND 1972年
ILPS 9205 廃

Edward Baird : g. vo. perc.
Terence Alan Wincott : vo. fl. rec. harmonium. pipe-org. mtn. perc.
John David Gladwin : g. vo. b. tabor. tubular bells.
Pro : Amazing Blondel & Phil Brown

フォーク・グループとして有名なアメイジング・ブロンデル。９枚に及ぶ彼らの作品全てに流れる長閑さはイギリスの片田舎の風景を想起させる。しかしながら彼らのサウンドは常にオリジナリティーに溢れ、斬新な編曲方法といい普通のフォークとは明らかに一線を画す、かなり特異なものであった。その中でも４作目である本アルバムは当時のプログレッシヴ・ロックに影響されてメロトロンを導入したり、ＬＰ片面を費やした組曲を収録するなどの意欲作である。基本的にはフォークギターのアルペジョにオーケストラの味付け、その上にリコーダーやフルートが加わる演奏をバックにほのぼのと歌う明るく優しいサウンドで、それはエリザベス王朝時代の音楽をこよなく愛したというグラッドウィンに依る所が大きい。（土）

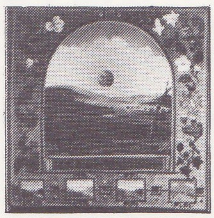


ARCADIUM
Breathe Awhile

MIDDLE EARTH 1969年
MDLS-302 廃

Miguel Sergides : 12-g. lead-vo.
Alan Ellwood : org. vo.
Robert Ellwood : lead-g. vo.
Graham Best : b. vo.
John Albert Parker : ds.
Pro : Austin John Marshall

69年に５枚の個性的なＬＰを発表して脆くも潰れてしまったミドルアース・レーベルにあって、Writing On The Wall（ベガーズ・オペラの前身）と共にマニアの話題を集めていたアルカディウム唯一のアルバム。一時ブリティッシュ・ロックの伝統を形成した、徹底的にハモンドの響きを多用するオルガンロックの中では、レア・バード、クリシダなど堂々たる初期の代表作といえるが、自ら出生を失ない、いかにも60年代末的症状を有するこのグループにはテクニック云々以前に何となく愛着を覚えてしまう。Ｂ面ラストの大曲で燃え尽きてしまった彼らだが、遺産は昨年めでたくドイツから限定で再発。目にした人は是非聴いてみて下さい。ユーロロックとは別の深淵がそこにあるはず。（Mo）



ART BEARS
Winter Songs

RECOMMENDED 1979年
RE 0618 廃

Fred Frith : g. vln. kbd. xylophone.
Chris Cutler : ds. noise.
Dagmar Krause : vo.

既存の音楽産業に反発、商業性の悪影響を排除した良質な音楽（U.Zero, ZNR, A.Zoyd, S.Six, etc）を独自に紹介し続けている反対派ロック（RIO）の盟主であるアート・ベアーズは、発展的解散を遂げたヘンリー・カウのメンバーで結成された。78年の「Hopes & Fears」に続く本作は、実験的音楽性と左翼思想を結合したカウの精神を一層先鋭的にした内容で、実存的パワーに満ちている。三者一体となって研ぎ澄まされた音塊には、甘美な夢など微塵もなく、現実の直視、対決のみが異様な迫力で存在する。この彼等の高揚した意識は、3rd「The world as it is today」でも、更にラジカルに、過激に展開した。そのA.ベアーズも強裂なインパクトの余韻を残して解散。各メンバーは、RIOの核として精力的な活動を続けている。（真）

ARZACHEL



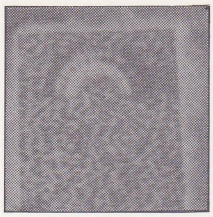
same title

EVOLUTION
Zel Z-1003 廃 1969年

Dave Stewart:kbd.
Mont Campbell:b.
Clive Brooks:ds.
Steve Hillage:g.

カンタベリーを代表する2人のミュージシャン、デイヴ・スチュアートとスティーヴ・ヒレッジが在籍していた最も初期のバンド、URIEL(ユリエル)がグループ名を変えてリリースした唯一のアルバム。録音はデイヴがEGGを結成した後に行われ、全員当時のスタイルにもどって録音したものである。サイケデリックな匂いのするオルガンとスティーヴのギターをメインにしたサウンドで古くささは否めないが、彼等のルーツを知る上では極めて興味深い資料である。契約上の関係で全員変名でクレジットされている(デイヴはSam Lee-Uff、スティーヴはSimeon Sasparella)。イタリア盤、ドイツ盤、アメリカ盤もリリースされていた。この後、EGG—KHANを経て2人は様々な音楽活動を開始したのは周知の通りである。(山)

ASGARD



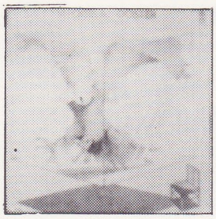
Same Title

THRESHOLD THS 6 '72 廃

James Smith (vo)
Ted Bartleth (vo)
Rodney Harrison (g. vo)
Ian Snow (ds)
Peter Orgil (vln)
Dave Cook(b)5

アズガードは、ムーディーブルースで有名なレーベル・スロッショルドから、レコード会社が第二のムーディーブルースとして売り出そうとしたいわくつきのののグループだった。バイオリンをフューチャーして、甘く、そして緊密に構成された音作りは充分にムーディーブルースに匹敵するものだったが、同じくスロッショナルドよりデビューしたトラピーズのデビュー作にもいえた様に、あまりにスロッショルドのレーベルカラーに染まりすぎた音楽性のために、どうしてもムーディブルースを越える個性を持つことができなかったといえる。トラピーズは一早くハードロック路線に転向したが、打開策を見つけられなかったアズガードは、1STのみで解散してしまった。〔坂〕

ATOMIC ROOSTER



Same Title

B & C CAS-1010 '69 廃
東芝 Stateside Trio Aw-3013

Vincent Crane (Kb)
Nick Graham (b, g, vo)
Carl Palmer (ds)
Produced By Atomic Rooster
(A- Produced By Tony Colton)

アーサー・ブラウンのバンド（クレイジー・ワールド）にいたビンセント・クレインとカール・パーマーがニック・グラハムを加えて69年に発表したデビュー作。メンバー・チェンジを重ねながら73年までに計5枚のオリジナル・アルバム「ATOMIC ROOSTER」「DEATHWALKS BEHIND YOU(以上B&C)」「IN HEARING OF」(PEGASUS)「MADE IN ENGLAND」「NICE'N GREASY」（DAWN）を発表している。彼らの音楽は、ビンセントの特徴あるオルガンの響きを中心としたヘヴィかつブルージーな演奏が特徴である。幾つかのシングル・ヒットも持ち本作にも「13日の金曜日」が含まれている。後期には、IBIS, NOVA等イタリアのシーンにもつながるリック・パーネルが参加する。グループは一度解散するが、後年に再結成されている。〔後〕

AUDIENCE



Friends Friends Friends

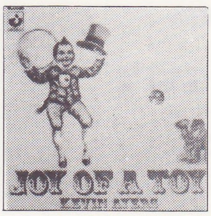
CHARISMA CAS 1012 '70 廃 フォノグラム SFX 廃

Howad Werth (a-g. banjo. vo)
Keith Gemmell (Sax Woodwind)
Tony Connon (ds. per. p)
Trevon Williams (b. vo)

英国のグループの中でも最もオーセンティックな香りのするグループ、オーディエンスのセカンドアルバム。これ以前にもポリドールから1STアルバムを発表しているが一般にはあまり知られていない。

彼等のサウンドは、リーダーのハワード・ワースが弾く特徴あるガットギターや、エレクトリックサックスを取り入れ、ジャズ、フォーク、クラシックをミックスした様な独自のサウンドを持つグループだった。このアルバムは最もプログレ色が強い作品だが、このあと、多少オールドタイマーな「ハウス・オン・ザ・ヒル」「ランチ」と好アルバムを発表している。〔坂〕

KEVIN AYERS



The Joy Of A Toy

HARVEST **東芝** 1970年
SHVL 763 廃 **OP 80337 廃**

Kevin Ayers:vo.g.
Robert Wyatt:ds.vo.
Rob Tait:ds.
Mike Ratledge:kbd.
Hugh Hopper:b.
David:Bedford:p.

ソフト・マシーンのオリジナル・メンバーであり、アルバム「The Soft Machine(Probe 4500)68年」を最後にグループを脱退したケヴィン・エアーズの1stアルバム。かつての同僚であるワイアット、ラトリッジ、彼に変わってマシーンに参加したホッパー（60年代前半、彼ら3人はいずれもデヴィッド・アレン・カルテットのメンバーだった)、更にはベッドフォードらの協力によって作られたこの作品は、エアーズが当時如何に進歩的なミュージシャンであったかを如実に示している。エアーズのボーカルとクラシック、ジャズの要素も取入れたバックの演奏が見事に一体化したサウンドは変幻自在に変化し驚くほどにポップである。ウィットに富んだ彼独自の世界が鮮やかに描き出された名作と言える。（賀）

BACK DOOR



same title

BLAKEY BLP 5989 '72 廃

COLIN HODGKINSON - B
RON ASPERY - SAX, FL
TONY HICKS - DS

バック・ドアの1st。自主製作盤としてリリースされた本作品はメロディ・メーカー、ニュー・ミュージカル・エクスプレス、クリーム等の大手音楽雑誌に絶賛され、改めてワーナーからリリースされた(WB K46231)という曰く付きの作品である（写真はワーナー盤のジャケット)。ギターのようにメロディアスな演奏を展開するベース、ジャズィなサックス、安定したドラムスによるサウンドは非常にテクニカルであるが、反面、曲としての面白味に欠けることも事実である。本作以後、「Eighth Street Nites〈WB K46265〉74年」「Another Fine Mess〈同 K 56098〉75年」「Activate〈同 K 56243〉76年」(カール・パーマーがプロデュースを担当）の3枚のアルバムを発表してグループは解散した。（賀）

A—Bac



BADGER
ONE LIVE BADGER

Atlantic K-40473 '73 廃
W・パイオニア P-8343A 廃
Tony Kaye (Kb)
Bave Foster (g)
Dave Foster (b)
Roy Dyke (ds)
Produced By Geoffrey Haslam
Badger and Jon Anderson

大胆にもライヴ・アルバムでデビューを飾ったバジャー。中心メンバーは、イエスのオリジナル・キーボードのトニー・ケイ。彼は、イエスの3作目まで参加したが、バンドがより複雑でがっちりと構築された音楽へと向かったことに反発。より自由な場を求めて脱退。フラッシュに参加した後、自らバジャーを結成した。バンドの母体となったのは、元ウォリアーズのデイブ・フォスターとのセッションであった。彼らの音楽はストレートなものだが、流麗なメロディ・ラインはバジャーとしての個性を決定づけていた。バンドは大幅なメンバー・チェンジの後、エピックより「WHITE LADY」(EPIC-80009) を発表。(76年) ファンキーに変貌した姿は、ファンを驚かせた。尚、トニーは83年イエスの再編に参加している。〔後〕



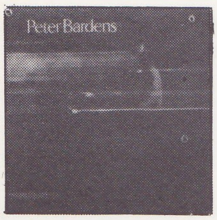
BARCLAY JAMES HARVEST
Live

POLYDOR 2683 052 廃 ポリドール MP 9484/5 廃 1974年

John Lees: g. vo.
Stewart Wolstenholme: kbd.
Mel Prichard: ds.
Les Holroyd: b.

Pro: Rodger Bain

J.リーズ率いるBJHの3枚あるライヴ・アルバムの内、最初のレコードである。アルバムとしては6枚目で、選曲から言っても、初期BJHのベスト・コレクションと言う事が出来よう。デビューは70年「Barclay James Harvest」で、EMIも彼等の為にハーヴェスト・レーベルを設立する程の力の入れ様だった。72年「Baby James Harvest」まで4枚の作品を発表、74年にポリドールに移籍して5枚目「Every One is Everybody Else」を発表、現在も活動は続いている。BJHはJリーズの甘いギターメロディーが売り物で、73年に「A Major Fancy」というR.アージェント、10ccのメンバー等をバックにしたソロ・アルバムも出している。叙情派プログレ・ファンには御推めである。(千)



PETER BARDENS
same title

TRANSATLANTIC TRA 243 廃 1971年

Peter Bardens: org. p. vo.
Vic Linton: g.
Victor Brox: el-vln. harp. vo.
Reg Isadore: ds. perc.
John Owen: b.

Pro: Peter Bardens

45年、ウェストミンスター生まれのピーター・バーデンスは14才からプロとしての活動を始めた。ハミルトン・キングス・ブルース・メッセンジャーズでデビュウし、ショットガン・イクスプレス、ゼム等、数々のセッションを繰り返し(モーガン・フィッシャーの最初期のグループ、ラヴ・アフェアーともプレイしていたらしい。)71年にキャメルを結成し、黄金期を迎えるが、キャメル結成以前に彼は2枚のソロ・アルバムを制作している。「THE ANSWER (TRA 222)」と本作がそれである。ラグ・タイム、ブルース等からの影響の強いサウンドで、うっすらと後のキャメルを予感させる部分もあるが、基本的には彼の60年代の総まとめ的なものといえる。尚、後にこの2枚からのベストである「VINTAGE 69」が76年にリリースされた。(山)

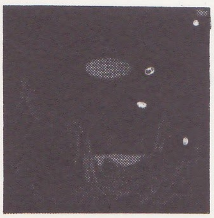


SYD BARRETT
The Madcap Laughs

HARVEST SHVL 765 廃 オデオン OP-8927 廃 1970年

all composed by Syd Barrett
Pro: David Gilmour & Roger Waters

ピンク・フロイドのオリジナル・メンバーであったシド・バレットは1st録音後グループを脱退する。その後2枚のソロ・アルバムを創るが、ドラッグと精神病の為、演奏活動がままならなくなり、以後彼の名前はロック界に見ることはできなくなってしまった。精神病院に入ったり出たりという生活をしていたと伝えられているが現在の状態は全く不明である。本作は彼の1stソロ(2nd BARRETT: Harvest SHSP 4007 1970)で、彼の非常に感覚的な世界観がある究極のあとの粋な平静の中に表現されている。そこには「ロック」本来の核のようなものが感じられる。曲は全てバレットのもので詩は一曲がジェイムズ・ジョイスのもの以外は彼のペンである。カヴァー・デザインはヒプノシス。(山)



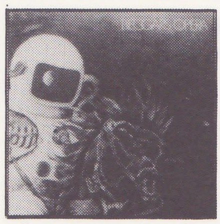
DAVID BEDFORD
Nurses Song with Elephant

DANDELION 2310 165 廃 1972年

David Bedford: pianica. rec.
Mike Oldfield: b.
Kevin Ayers: vo.
& many musicians

Pro. David Bedford

デヴィッド・ベッドフォードはイギリス若手現代音楽家としてもともと活動(レコードも数種リリースされていた。和声構造の複雑さ等にいくつか特色がみられるが、スタイルとしてはオーソドックスなもの。)していたが、ケヴィン・エアーズと交流を深め、以来、ロック界でマイク・オールドフィールドのよきアドバイザーとして、あるいはアレンジャーとしての名声の方が先行してしまっている。ロックサイドのソロ・アルバムとしては本アルバムが最初のものでケヴィン・エアーズとM・オールドフィールドがゲスト参加している。実験的な試みが強く、以降の作品は後になる程聴き易さを増していくようだ。本アルバムを含め、6枚のソロ・アルバムを製作している。(山)



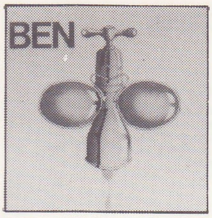
BEGGARS OPERA
Pathfinder

VERTIGO 6360 073 廃 フォノグラム RJ 7224 廃 1972年

Martin Griffiths: vo.
Alan Park: kbd.
Ricky Gardiner: g. vo.
Gordon Sellar: b. ac-g.
Ray Wilson: ds.

Pro: Beggars Opera

「Act One (Vertigo 6360 018) 70年」「Waters of Change (同6360 054) 71年」に続くベガーズ・オペラの3rd。クラシックの名曲のよく知られたフレーズが次々に登場する1stアルバムもそれなりに面白いものであったが、アルバム全体の出来から見て、本作品が彼らの最高作であろう。パークのピアノ、オルガン、ハープシコード等を用いたクラシカルかつメロディアスな演奏及びガーディナーのややハードなギター・プレイを主体としてボーカル、コーラスが絡む曲展開は無理がなく、非常に聴き易いものとなっている。以後、「Get Your Dog Off Me (同6360 090)」「Sagittary (独 Jupiter 88907)」「Beggars Can't Be Choosers (同27702)」の3枚のアルバムを発表、いずれもポップな作品となっている。(賀)

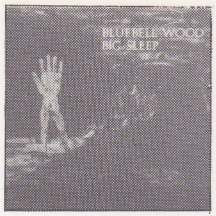


BEN
same title

VERTIGO : 6360 052　'71 廃

PETER DAVEY - S, FL, CL
ALEX MACLEESEY - EL-P, HPD, SYN
GERRY REID - G
LEN SURTEES - B
DAVID SHEEN - DS, PERC, VO
PRO : MALCOLM KOSS

ジャズロック・グループ、ベンは71年に唯一のアルバムを発表しているが、メンバーの経歴等詳しいことは分かっていない。オープニングはK.ジャレットのフレーズを採り入れた曲。軽やかなベースラインに導かれ流れる様な演奏が展開される。ジャズロックながらサックス系よりもフルートが前に出て来るケースが目立ち、el ピアノや巧みなギタープレイと相まって非常にスマートな印象を与える。一方では緊迫感溢れる展開も盛り込まれており、特にB面ラストでサックス、フルート、ギターが代わる代わるソロを取るパートは圧巻だ。全編インスト。ヴォーカルのクレジットも有るが、一部でスキャット様のヴォイスが聴かれるのみである。なお、余談になるがVertigo盤では唯一、カヴァーのロゴが欠落している。　（江）



BIG SLEEP
Bluebell Wood

PEGASUS　1971年
PEG-4　廃

Phil Ryan : org. p.
Ritchie Francis : b. p. vo.
John "Pugwash" Weathers : ds. vo.
Raymond "Taff" Williams : g.
Gary Pickford Hopkins : vo. g.

Pro : Lou Reizner

「大いなる眠り」と名乗るこのグループは、ナザレスのデビューアルバムをリリースしたことでも知られるペガサス・レーベルから70年に唯一のアルバムを発表している。本作の聴きどころは何といってもA-1,5のストリングスだ。キーボードのフィル・ライアンのアレンジによるもので大胆な導入が功を奏しているが、A面では次から次へと泣きのメロディーが続くため、センチメンタルな要素というよりも、むしろ適度な重量感を保つという方に作用しているようだ。もう一つ忘れてはいけないのが流麗なピアノプレイ。泣きのフレーズではどうしても英国臭の強いオルガンが目立ってしまうが、その好対照がかえって新鮮でもあり、本アルバムを成功作へと導いた中心的な要素となっている。　（江）



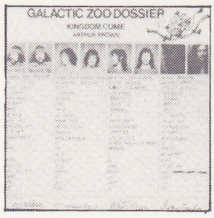
BRAND X
Livestock

CHARISMA　フォノグラム　1977年
CLASS 5　RJ-7361

Phil Collins : ds.
John Goodsall : g.
Percy Jones : b.
Robin Lumley : kbd.
Morris Pert : perc.
Kenwood Dennard : ds.

Pro : Brand X

ブランドXの3作目、76〜77年のイギリスでの実況録音盤。彼等はもともとブリティッシュ・ロック界のアンダーグラウンドなシーンで長年の実績を誇るミュージシャン達であった。バンドとしてのデビュー(75年)当時にもこのメンバーが参加した「ピーターと狼」「火星探険」といったアルバムがあり、セッションが高じてバンド結成に至ったものと思われる。卓越したリズム感によってしなやかに、そしてスピーディーに繰り広げられる彼等の音楽は当時の所謂フュージョンと重なる部分もあり評価の分れるところだが、「異常行為」「モロッカン・ロール」そしてこのライヴの3作におけるコンビネーションは秀れたものと言える。尚、コリンズ、ジョーンズ、ラムリィの3人はノヴァの「ヴィマナ」(76年)にも参加している。　（古）



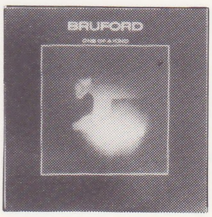
ARTHUR BROWN'S KINGDOM COME
Galactic Zoo Dossier

POLYDOR 2310 130　廃　1972年

Arthur Brown : vo.
Julian Brown : VCS
Andy Dalby : g. vo.
Desmond Fisher : b.
Michael Harris : org.
Martin Steer : dr.
Denis Taylor : lights.

Pro : Michael Finesilver
Peter Ker
Kingdom Come

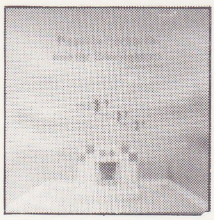
キングダム・カムの72年に発表された 1st アルバム。クレージー・ワールド解散後、J・マーシャル等とパドルダウン・エキスプレスで活動していたアーサーだが、相変わらず演劇性の強いトータル・アルバムに仕上げている。キングダム・カムはその後 2nd"KINGDOM COME"(73)、3rd"THE JOURNEY"(73)を発表、アーサーはその後ソロとなりガル・レーベルから"DANCE"(74)"CHISHOLM IN MY BOSOM"(78)の2枚のアルバムを出し他にもA・パーソンズ・プロジェクト、映画「トミー」への参加、シュルツェのICレーベルでの活動等、幅広い仕事をしている。最近はシンセ・プレイヤーとの作品が多く、最新作"REQUIEM"では、アーサーの新しい境地に触れることが出来る。　（千）



BRUFORD
One Of A Kind

ALLAN HOLDSWORTH(G)
JEFF BERLIN(B)
DAVE STEWART(KEY)
BILL BRUFORD(DS)

UKを抜けたビル・ブラッフォードは、UK参加直前に発表したソロ・アルバム「Feels Good To Me」に参加したメンバーを集め、自らのグループ、Bruford を結成、本作でデビューを飾った。ここで聞かれる音は、各人のキャリアがうまく融合された、新しいタイプのジャズ・ロックと言える。歴代の強者の中にあって新人のジェフ・バーリンも遺憾なくその実力を発揮し、以後その名を知らしめすことになる。前ソロ・アルバムも実験的要素がふんだんに盛込まれ、高い評価を受けているが、アンサンブルの高さで本作を推したい。その後、アランが脱け代りにジョン・クラークを加え、2枚のアルバムを発表するが、こちらはフュージョン的にまとまり過ぎてしまったのが惜しまれる。　〔飯〕



ROBERT CALVERT
Captain Lockheed & The Starfighters

UNITED ARTISTS　1974年
UAG 29507　廃

Robert Calvert : vo. perc.
Paul Rudolph : g. b.
Simon King : ds.
Dave Brock : g.
Adrian Wagner : kbd.
Arthur Brown : vo.
Lemmy : b. g.
Nik Turner : s.
Twin　Twink : ds.
Del Dettmar : syn.

Pro : Roy Baker

R.カルヴァートはホークウインドのメンバーとして著名な人物であった。彼の 1st アルバムである本作は74年にホークウインド＋ピンク・フェアリーズ＋豪華ゲストというバック・アップで発表されている。A.ブラウン、A.ワグナー、イーノ、V.スタンシャル、J.キャパルディ等、参加ミュージシャンの名前だけで紙面がつきてしまいそうだ。彼はホークスでは作詞を担当しており、本作以前にはグループでボーカルをとることは希であったが、この後、ボーカリストとしてグループにカムバックし、「PXR 5」まで在籍している。彼のソロ・アルバムとしては 2nd「Lucky Leif & The Longship(75年)」、3rd「Hipe(80年)」がある。本誌バック・ナンバー Vol.8 & 9 のホークウインド特集を参照。　（千）



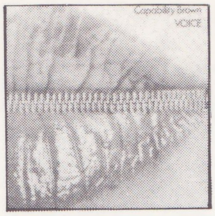
CAMEL

Moon Madness

DECCA　キング　1976年
TXS-R115　K19P-9052

Doug Ferguson:b.vo.
Andy Ward:ds.
Peter Bardens:kbd.
Andy Latimer:g.fl.rec.vo.

71年に結成されたキャメルは現在までに11枚のレギュラー・アルバムをリリースし、尚活躍中である。本作は4thアルバムで、前作スノウ・グースと共にキャメルの絶頂期に制作された名盤ということができよう。ソフトで甘いアンディー・ラティマーのギターと美しいバックを演出するピーター・バーデンスのキーボードに加え、洗練されたアンディ・ワードのドラミングも特筆すべきで、アレンジの端正さも好感がもてる。本作以後は円熟という形容も出来るが、作品のヴォルテージはややおちてしまっている。本作発表時に同時リリースされたシングルにはルナ・シーのライヴ・ヴァージョンが収録されている。又、グリージー・トラッカーズという２枚組のうちの片面にキャメルのライヴが収録されているアルバムもある。（山）



CAPABILITY BROWN

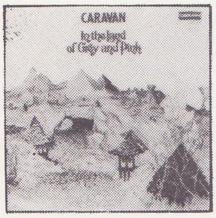
Voice

CHARISMA　フォノグラム　1973年
CAS 1068 廃　RJ-7223 廃

Tony Ferguson:vo.ac-g.el-g.b.fl.pedal steel
Dave Nevin:vo.g.b.rec.mtn.syn.kbd.perc.vib.
Roger Willis:vo.ds.p.harmonica.
Grahame White:vo.e-g.ac-g.lute.balalaika.kbd.
Kenny Rowe:vo.b.perc.
Joe Whilliams:vo.perc.

Pro:John Mills

元トゥデイズ・チャイルドのリーダーであったケニー・ロウによって結成されたケイパビリティ・ブラウンは２枚のアルバムを残している。（1st「From Scratch:CAS 1056」）本作は2ndアルバムである。1stは地味なフォーク・ロックとハード・ロックの交互する作品で、特にバラードに彼等の持ち味が発揮されている。本作になるとよりプログレッシヴ色を増し、特にＢ面の大曲にそれは表現されている。古楽器（リュート等）から現代楽器（メロトロン、シンセサイザー）、そして全員が取る絶妙なコーラスをまじえて素晴らしい独自の世界を表現している。後に２枚からの編集盤「ライアー」がリリースされ、又、リンダ・ルイスのＬＰに彼等が参加したものもある。（山）



CARAVAN

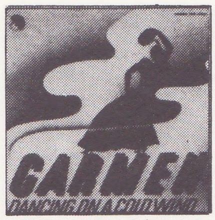
In the Land of Grey and Pink

DERAM　キング　1972年
SPL1　SLC-812 廃

Richard Sinclair:b.ac-g.vo.
Pye Hastings:g.vo.
Dave Sinclair:org.p.mtn.vo.
Richard Coughlan:ds.perc.
Jimmy Hastings:fl.s.
David Grinsted Cannon:bell.wind.

Pro:David Hitchcock

カンタベリーの重鎮キャラヴァンは67年にワイルド・フラワーズの最終解散後に結成された。（ワイルド・フラワーズからはもう一つのカンタベリーを代表するグループ、ソフト・マシーンが誕生する）以後11枚のレギュラー・アルバムをリリースして、世界中に熱心なファンを獲得することになる。彼等の存在は地味であるが、その音楽性は非常に高く、オリジナリティにあふれている。本アルバムは3rdアルバムで、初期のいわゆる最もキャラヴァンらしい時期の中では頂点に達した作品である。Ａ面はキャラヴァンのポップな持ち味を十分にいかしたものでＢ面は全面を費したプログレッシヴな作品「Nine Feet Underground」。Ｂ面にはデイヴ・シンクレアのキーボード・ワークがふんだんにとり入れられている。（山）



CARMEN

Dancing On a Cold Wind

REGAL ZONOPHONE　東芝EMI　1975年
SLRZ 1040 廃　EMS80082 廃

David Allen:g.vo.
Angela Allen:kbd.vo.
Robert Amaral:vo.perc.
John Glascock:b.vo.
Paul Fenton:ds.

Pro:Tony Visconti

D.アレン率いる（ゴングのとは同名異人）カルメンは驚異のフラメンコ・ロック・バンドとして73年にD.ボウイのショーでデビューした。D.アレンのスパニッシュなギター・ワーク、フラメンコのアクセントを巧みに取り入れたリズム・セクション、パッショネートなヴォーカル、デヴィッドの妹のアンジェラの美貌は他に追従を許さぬ特異なスタイルを築きあげていた。アルバムとしては、これぞフラメンコ・ロックといった1st「Fandango in Space（73）」、多少プログレ色を感じさせる2nd「Dancing in a Cold Wind」、Ｂ級好みの「The Gypsies（76）がある。J.グラスコック（元ゴッズ）は76年にJ.タルに参加、80年に病死するまで在籍。特異なラインとリズム・パターンを持った名ベーシストだった。合掌。（千）



CASTANARC

Journey To The East

PENINSULA RECORDS PENCIL 10 '84 廃

Paul Ineson:g
Mark Holiday:vo
David Powell:Key
David Kirkland:per
Neil Duty:b

一時のポンプ・ムーブメントからやや遅れてデビューしたキャスタナーク。だからというわけではないだろうが、他のグループとは全く趣が異なっている。軟弱と言えばそれまでだが、美しいギターとキーボードに甘い歌声は、ジャケットに描かれたお伽話の世界であり、キャメルのブレスレスあたりを思い出させてくれる。随所にちりばめられたプログレッシヴな感覚に、かつてのプログレ・ファンも思わず笑を漏らしてしまう、そんな内容に仕上がっている。こうして見るとポンプ・シーンも様々なグループが出揃ったが、中には１枚限りで行方不明のグループが早くも出て来ている。ある意味では貴重な存在であり、期待の持てるグループだけに、このキャスタナークも同じ運命を辿らないことを祈る。〔飯〕



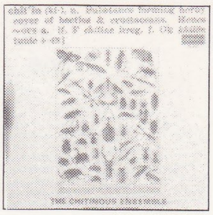
CATAPILLA

Changes

VERTIGO　1972年
6360-074 廃

Anna Meek:vo.
Robert Calvert:s.
Graham Wilson:g.
Ralph Rawlinson:kbd.
Bryan Hanson:ds.
Carl Wassard:b.

キャタピラは1st「Catapilla（Vertigo 6360 029）71年」と本「Changes」の２枚のアルバムをリリースしている。ロバート・カルヴァート（「ホークウインドにかって在籍した人物とは同名異人」という説が近時有力である）のサックスが大活躍する1stも迫力に富んだ仲々の力作であったが、本作はそれを凌ぐ素晴らしいものとなっている。カルヴァートの宙を漂うようなサックスとミークの力強い中にもどこか女っぽさを感じさせるボーカルを中心にギターのソロ等を加えて曲はダイナミックに展開する。そこには彼ら独自の音宇宙が拡がっている。演奏の主体がサックスであるため、一聴したところややジャズィーな印象を与えるが、本質的にはロック色の濃いサウンドである。（賀）



THE CHITINOUS ENSEMBLE
Chitinous

DERAM　　　　キング　　　　1971年
SML 1093 廃　DL 3011 廃

Paul Buckmaster: comp. arr. e-p. cello.
Ian Carr: tp. flugelhorn.
Brian Smith: ss.
Peter Robinson: el-p.
他.

Pro: Gus Dudgeon

エルトン・ジョン、デヴィッド・ボウイ、更にはサード・イヤー・バンド等、大物アーティストのアレンジを手掛けアレンジャーとして第一人者の地位を築いたポール・バックマスター。そんな彼が編曲家としてのみならず作曲家としての力量をも遺憾なく発揮したのが本アルバムである。総勢50人以上からなるオーケストラを率いて、自らも作曲、編曲、チェロ、エレクトリック・ピアノと大活躍している。クラシカルな弦楽器とジャズィーな管楽器を中心に、サード・イヤーを思わすタブラを含むパーカッションが加わったサウンドはダイナミックかつ繊細なものである。曲の進行も極めてスムーズであり70年代初期の作品であるということが信じられないほどに高い完成度を誇っている。　(賀)

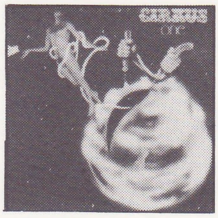


CIRCUS
same title

TRANSATLANTIC TRA 207 '69 廃

MEL COLLINS - S, FL
IAN JELFS - G, VO
KIRK RIDDLE - B
CHRIS BARROWS - DS

人呼んでメルコリCIRCUS。去年再発されて話題を呼んだKのCIRKUSとは全く別である。伝説の初期クリムゾンで〝Poseidon〞から〝Island〞迄在籍したフルート&サックスのメル・コリンズが67～69年に結成していた幻のジャズ・ロック・グループ。69年に出た唯一の作品〝Circus〞は表が海辺のサーカス小屋に見立てたメンバー写真、中ジャケではピエロに紛した各人をカラフルにデザインした美しいもので楽しくなってしまう。毎水曜にMarqueeクラブでショーをやっていて、中でもメルの卓越したフルートが注目されているとサンデー・タイムスに紹介された。あの〝Norwegian Wood〞、〝Monday Monday〞なんかをややブルージーなジャズ・タッチで軽やかに演じており、既に個性的な才能を感じさせる。　(OM)



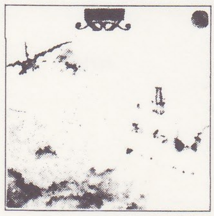
CIRKUS
One

RCB 1 廃　　　　70年代初期

Dog: el-g. ac-g.
Stu McDade: ds. perc. vo.
Drek G. Miller: org. mtn. p.
John Taylor: b.
Paul Robson: vo.

Pro: Ron Richards

自主製作であるがプレス枚数は多かったようで、一時日本に輸入されたとの情報もある。内ジャケの写真から判断してメンバー中数人はハイティーンと思われるが、音的には英アンダーグラウンドロックの最高峰だ。溢れんばかりのストリングスとメロトロンは日本人好みで、プログレファンの間で静かなブームを呼んでいるが、聴きどころはこれだけではなく、交錯するギター、キーボードサウンドをも加えた演奏総体として三重丸がつけられる。切れ味鋭く時には甘美、一方ではスマートさと泥臭さを併せ持った作品。特にA-1～2の動→静のコントラストには舌を巻く。発表当時は大した評価もされなかったようだが、しっかりした後ろ楯があればきっとビッグネームとして君臨していたのだろう。　(江)



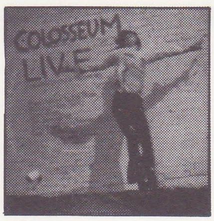
CLEAR BLUE SKY
Play It Loud

VERTIGO　　　　1970年
6360-013 廃

John Simms: g. vo. org. fl.
Mark Sheather: b.
Ken White: ds.

Pro: Patrick Campbell-Lyons

60年代中期からNIRVANAというプロジェクトを組んでアンダーグラウンドな名声を博したパトリック・リオンズ、70年代に突入するとプロデュース業にも意欲をみせ、ヴァーティゴ初期を拠点にDR. Z、AQUILAなどの新人単発組を紹介した。(ソロ・アルバムも72年にSOVEREIGNからリリースしている) 若さを象徴するグループ名を与えられたのは18才のトリオ。作品としては変拍子を採り入れた即興的なハード・ロックが主体で、様々なアイデアをねじ伏せたパワーはタイプこそ違えど、ハイタイド、メイブリッツに匹敵するものがある。セカンドも予定されたが、その前に早々とシーンから姿を消してしまった。〝BIRDCATCHER〞を連想させるジャケットはロジャー・ディーンが担当した。　(Mo)



COLLOSEUM
Live

BRONZE　　コロムビア　　1972年
ICD 1-2 廃　YS2647-8 廃

Dick Heckstall-Smith: ss. ts.
Dave Greenslade: org. vib.
Dave "Clem" Clempson: g. vo.
Mark Clarke: b. vo.
Jon Hiseman: ds.
Chris Farlowe: vo.

「Those Who Are About To Die (Fontana STLS 5510) 69年」「Valentyne Suite (Vertigo VO 1) 69年」「Daughter of Time (Vertigo 6360 017) 70年」、以上3枚のアルバムを発表して解散したコロシアムの、グループ解散後にリリースされた、最後のオリジナル・アルバムである。71年の3月にマンチェスター大学及びビッグ・アップルで開かれたコンサートの模様を収録しており、そこではメンバー全員が力の籠った演奏を展開している。ハイズマンのテクニカルかつ力強いドラム、ブルーズィーなファーロウのボーカルとクレムスンのギター、ややジャズィーなヘクストール・スミスのサックス（2本のサックスを同時に演奏することもある）等が一体となったサウンドは正にブリティッシュ・ロック黄金時代の音である。　(賀)



COMUS
First Utterance

DAWN　　　　コロムビア　　1970年
DNLS 3019 廃　YS 2543 廃

Glen Goring: g. vo. ds. etc.
Andy Hellaby: b. vo.
Colin Pearson: vln. vla.
Rob Young: fl. oboe. ds.
Bobbie Watson: vo. perc.

Pro: Barry Murray

70年という時期にアコースティック楽器を用いて、これ程までに魅力的なアルバムを製作したコーマスは、近年、世界的傾向にあるアンダーグラウンド・シーンのアコースティック化の最も原点となるべき存在である。それはリーダーであるロジャー・ウットンの才能に依るところが大きく、彼のセンスの特異性、オリジナリティは他に比するものがない。音的にはヴィオラ、ヴァイオリン、フルート、オーボエ、ギターというクラシカル楽器を基本としながらパーカッションやヴォーカルがからむスタイルである。このアルバムの他LP未収録のシングルも同レーベルよりリリースされている。この後、ヴァージン・レーベルより2nd「To Keep From Crying」を74年に発表してグループは解散する。　(山)

Cam
|
Com



CONTINUUM
Autumn Grass

RCA VICTOR 1971年
SF 8196 廃

Yoel Schwarcz: classical g. fl. harmonica. rec. s.
Tim Rice: org. p.
Peter Billam: b. g.
Harvey Troupe: ds.

コンティニウムは2枚のアルバム(1st: CONTINUUM RCA SF8157 '70年)を残したブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック最初期のグループである。ヘンリー・パーセルの曲をアレンジしたりしてクラシック——ロック——ジャズの融合をめざしたグループだが、そのサウンドはほのぼのとした香り漂うもので、いわゆるプログレッシヴ・スタイルとは多少趣を異にしている。人間の内面に語りかけるような曲想である。出来としては本2ndアルバムの方がやや優れている。メロディーは、フルート、リコーダーといった古楽器によって奏され、それが独特のムードを漂わせている。バックのハモンド・オルガン、ベース、ドラムスのアレンジは古さを感じさせるが当時としては平均的であったのであろう。 (山)



LOL COXHILL
Ear Of Beholder

DANDELION 1971年
DSD 8008 廃

Lol Coxhill: ss. ts. fl.
David Bedford: p. org.
Mike Oldfield: g.
Jasper Van'thof: p.
Burton Green: p.
Pierre Courbois: ds.

ロックからフリー・ジャズまで幅広い分野で活躍しているコックスヒルのソロ・デビュー作である。その内容は正に彼の音楽の原点とも言うべきものであり、バラエティーに富んだ音作りがなされている。フリー・フォームなサックス・ソロ、ベッドフォードのピアノ伴奏によるノスタルジックなボーカル・ナンバー、子供たちの歌、スポンティニアスなインプロヴィゼイション、デキシーランド・ジャズ風の曲等が次々に登場する。異色の展開を見せる当時としてはかなりアヴァンギャルドな作品であるが、そこにはどこか彼の風貌にも似たユーモラスな雰囲気が漂っている。翌年、「Toverbal Sweet(Mushroom 150 MR23)」を発表、以後もキャロライン、オガン、イスタス等のレーベルに数多くの作品を残している。 (賀)



CRESSIDA
Asylum

VERTIGO 1971年
6360 035 廃

Angus Cullen: vo. ac-g.
John Cullen: g.
Peter Jennings: org. p.
Kevin McCarthy: b.
Iain Clark: ds.
Harold McNair: fl.

Pro: Ossie Byrne

クレシダのセカンド・アルバムであり残念なことに最終作でもある。78年頃ヴァーティゴの名作群の多くが国内再発されているにもかかわらず、たまたま発売権がなく近年高値で取り引きされている泣かせる一枚だ。ミドルテンポの曲が多く全体から軽くジャズのエッセンスを匂わせるものの基本的にはキーボードをメインに、ボーカルを大切にした往年のブリティッシュ・プログレッシヴ・サウンドでとりわけメロトロン張りの生のストリングスをフィーチャーしたA-2は数多い叙情的な曲の中でも屈指の名曲であると断言できる。なおヴァーティゴのオムニバス・アルバムにも彼らの演奏が収められている。又、たくさんの石膏像をあしらった意味深なジャケット・ワークはキーフによるものである。 (土)



CURVED AIR
Phantasmagoria

WARNER **W.パイオニア** 1972年
K 46158 廃 **P-8226W 廃**

Darryl Way: vln. kbd.
Francis Monkman: kbd. g.
Sonja Kristina: vo.
Mike Wedgwood: b.
Florian Pikington-Miksa: ds.

Pro: Curved Air & Colin Coldwell

カーヴド・エアのサード。ウェイ、モンクマン、クリスティーナの3人を中心としたオリジナル・グループ、最後の作品(75年に再編成され「Live(Decca SML 119)」をリリースしているが)である。その内容はロックを中心にクラシック、トラッド、ジャズ等の各種要素を取り入れて構築されたオリジナリティ溢れる素晴らしいものである。ウェイのクラシカルなバイオリン、モンクマンの音楽的教養の深さを感じさせるキーボード・ワーク、クリスティーナの情感に富んだボーカルが一体になった演奏は聴く者を幻想的な夢の世界に誘い込む。デビュー作「Air Conditioning」、「Second Album」、エディ・ジョブスンが参加した「Air Cut」、前述の「Live」の4つの作品も、本作同様、極めて質が高いものと言える。 (賀)



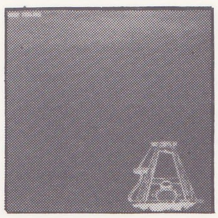
CZAR
same title

FONTANA 1970年
6309 009 廃

Bob Hodges: mtn. p. org. celeste. hpd. vo.
Del Gough: ds.
Paul Kendrick: b. ac-g. vo.
Mick Ware: g. vo.

Pro: Dave Voyde & Roger Wake
Dave and Roger: noises

ツァールの恐らく唯一のアルバムと思われる。経歴は何一つ分らないのだが、数曲でのメロディーからサイケデリック・サウンドの名残が感じられるグループである。基本的には初期のブラック・サバスやユーライア・ヒープが持っていた重い感覚を備えたヘヴィー・ロックを演っていて、70年前後のアンダーグラウンドなブリティッシュ・ヘヴィー・ロックに独特の重苦しさが伝わってくる。重々しいギターのリフやサバス風の粘りのあるリード・ギターが頻繁に横行する一方で、低音域のメロトロンとハモンド・オルガンがユニゾンやバッキングとして大胆にとり入れられている。廃盤なので例としては適切ではないが、グレイシャスを更にヘヴィーにしたようなサウンドを聴かせている。 (昌)



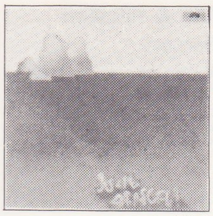
DEEP FEELING
same title

DJM RECORDS 1971年
DJLPS 419 廃

John Swail: vo.
David Green: b. fl. vo.
Derek Elson: org. harpsichord. p. vo.
Martin Jenner: g. vo.
Graham Jarvis: ds. vo.

Pro: Des Champ & Roger Easterby

71年という、ブリティッシュ・プログレッシヴ・シーンとしては比較的初期にレコードをリリースしたディープ・フィーリングの唯一のアルバムである。キーボード群がハモンド・オルガン、ハープシコード、ピアノといった比較的地味な楽器の為か、作品全体から受ける印象はそれ程インパクトは感じられないが、よく練り込まれたサウンド構成とアコースティックな響きが淡いロマンを感じさせる愛すべき作品集といえる。ヴォーカル・ナンバーはムーディ・ブルース風、インストゥルメンタル・パートはクラシカルなアレンジがなされている。一流グループとは呼び難いが、無名グループの作品として好事家に愛されるような独特な味わいを持つ好盤である。 (山)



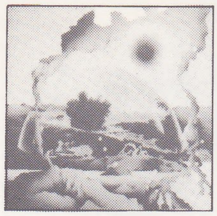
JULIE DRISCOLL
1969

POLYDOR 2480 074 廃　ポリドール 23MM 0197 廃　1971年

Julie Driscoll:vo.ac.g.
Jeff Clyne:b.
Elton Dean:as.
Trevor Tompkins:ds.
Brian Godding:g.
Chris Spedding:g.
Mark Charig:cornet.
Nick Evans:tb.
Keith Tippetts:p.celeste.
Bob Downes:fl.

Pro.Giorgio Gomelsky

ブライアン・オーガーズ・トリニティのボーカリストとして注目を集め、2枚組の大作「ストリート・ノイズ(Marmalade 608 005,6)68年」(トリニティの最高傑作と言われている)でその実力をまざまざと見せつけたジュリー・ドリスコール。本作品は、そんな彼女の「オープン(Marmalade607 002)67年」に続くセカンド・アルバムであり、トリニティ脱退後の初の作品でもある。製作会社のマーマレイドが倒産したため、69年に録音されたにもかかわらず発表されたのは71年のことである。当時の代表的若手ジャズ・ミュージシャンがバック・アップしているが全体としての印象はそれほどジャズィではない。切々と歌いかけるジュリーのややトラディショナルな歌声は聴く者に何かを感じさせずにはおかない。（賀）



DRUID
Toward The Sun

EMI EMC 308 1 廃　1975年

Neil Brewer:b.
Andrew McCrorie-Shand:kbd.
Cedric Sharpley:ds.perc.
Dane:g.vo.

Pro:Bob Harris

ドルーイド（古代ケルト、ゴール族の間に流布していたドルーイド教の僧のこと）はイエスに触発されてこのファースト・アルバムを75年にリリースした。メジャー・コードを多用して清涼感かつ透明感のあるソフト・タッチのプログレッシヴ・ミュージックを得意としたグループである。大変イエスからの影響が強い為、オリジナリティにかけるが、その大空をつきぬけるようなサウンドは当時のシーンをなつかしみたい方には良質のアルバムとなるだろう。この後翌76年に「FLUID DRUID」を同EMIレーベルからリリース（こちらは当時日本盤もプレスされた）してシーンから姿を消してしまった。2ndはややポップな仕上がりで、オリジナリティの面ではより独自性があるが、プログレ色はやや後退している。（山）



DR. Z
Three Parts To My Soul

VERTIGO:6360 048 '71 廃

KEITH KEYES - P, HPD, ORG, VO
BOB WATKINS - DS, PERC
ROB WATSON - B
PRO:KEITH KEYES

ドクターZは69年にフォンタナより1枚のシングルをリリースした後2年を経て本作を発表、以降消息知れずになってしまった謎のグループで、英本国でも彼らについて詳らかな知識を持つファンは少ないと言われている。3人編成で一応はキーボードトリオのスタイルと言えるが、チェンバロを中心に持って来るという類を見ない特異な形態を採っている。歌詞の内容からも分かる様に〝悪魔的〟な題材を扱ったコンセプトアルバムであるが、音作り自体は予想外に分かり易く〝ゲテ物趣味〟的な印象は全く受けない。が、その独創性豊かな演奏スタイルにより彼らの発するメッセージは余す所無く伝達されていると言ってよく、この手の作品ではBlack Widowの1st（音質的な共通点は無い）を遙かに凌駕する傑作となっている。（江）



EAST OF EDEN
Snafu

DERAM SML 1050 廃　キング SL 285 廃　1970年

Dave Arbus:vln.s.fl.
Geoff Nicholson:g.
Andy Sneddon:b.
Geoff Britton:ds.
Ron Caines:s.

68年に結成されたイースト・オヴ・エデンの「Mercator Projected」に続く作品である。デビュー作にあったサイケデリックな雰囲気が薄れ、彼ら独自のサウンドが確立されている。バイオリン、サックス、フルートを巧みに操るアーバスとエレクトリック・サックスも演奏するケインズの両者を主体とした軽快なジャズ・ロックであるが、リズム・セクションはロック色が濃い。曲及びアルバム全体の構成もよく考えられており、非常に聴き易いものとなっている。当時としては極めて完成度の高いプログレッシヴな作品と言える。以後、グループは解散状態にあったが、71年には再結成され2枚のアルバムを発表している（その後再び解散）75年、グループは突如復活、LPも発表したがかつての精彩は見られなかった。（賀）



EGG
same title

DERAM NOVA-SDN14 廃　キング SL 286 廃　1969年

Dave Stewart:org.p.tone generator
Mont Campbell:b.vo.
Clive Brooks:ds.

Pro:Egg

エッグはユリエルを経た三人の若者により結成されたキーボード・トリオである。69年にこの1st、70年には「Polite Force:DERAM SML-1074」を発表した後グループは活動を停止するが、74年にアルバム制作の為にオリジナル・メンバーが召集され最終作「Civil Surface:CAROLINE C 1510」を発表する。彼等の音楽が他のキーボード・ロックと一線を画すのは、その構造的な作曲法で、頻繁に使用される変拍子も、バッハから現代音楽まで吸収した和声も全て必然のうちにすんなり聴かせてしまうところなど非凡な才能を物語っている。この1stなど69年という時代とメンバーの若さを考えると実に驚くべき作品と言わざるを得ない。3rdはよりモント・キャンベルの影響が色濃くシリアスな内容を持つ。（古）

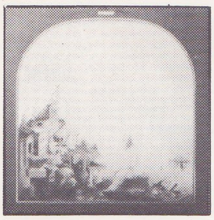


THE ELECTRIC SCORE

REVOLUTION REV 1/3 廃　1973年

※収録アーティスト多数につき割愛。

グラッドストン・ベリー・フェスティバルに出演したアーティスト達、デヴィッド・ボウイ、ホークウインド、ゴングetc.の実況録音盤。3枚組でブックレットがついており、ピラミッドをあしらった6面開きジャケットで、イギリス本国でも一般のレコード店にはならばなかったといわれる希少盤である。このアルバムに対する興味は収録アーティストの雑多なところから様々なジャンルの音楽愛好者の感ずるところだろうが、読者の興味はホークウインドとゴングに絞られるであろう。特にゴングはLP片面全てを費して収録されており、73年時のゴング——つまりフライング・ティーポットの典型的インプロヴィゼイションを聴くことができる。（山）

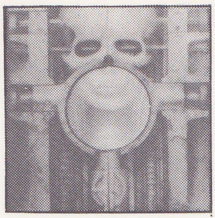


ELECTROPHON
Zygoat

POLYDOR　　ポリドール　　1974年
2383 270 廃　23MM-0239 廃

Burt Alcantara : comp.

誰もが夢に見る神秘と幻の世界を描いた美しいジャケット。そして、レコードに針を落とすと、ほとんどオーバーダビング無しでレコーディングされたと思われるシンセの音が、全面に渡って夢の中にでもいるかの様に舞っている。ポリフォニック・シンセ(Arp.RSE)を使用しており、当時最新の機材を用いてややフリー・フォームなシンフォニック・ロックを目指したものと思われる。又、速いアルペジオをシーケンサーに依らず手で弾いている事から考えてテクニック的にはかなりの実力を持ったキーボード・プレイヤーと推測できる。ドイツのシンセ・ロックとは一味違った作品である。エレクトロフォンを名乗る音楽集団は77年にも「Further Thoughts on The Classics(Polydor 2482 335)」という作品を発表している。(青)



EMERSON LAKE & PALMER
Brain Salad Surgery

MANTICORE　W.パイオニア　1973年
K 53501 廃　P-8395M

Keith : Emerson : kbd. syn.
Greg Lake : b. 12-ac-g. el-g. vo.
Carl Palmer : ds. perc. syn-perc.

Pro : Greg Lake

70年代が生んだ名実ともに最高のキーボード・トリオ。このスタイルとしてのパイオニアでもあり彼らに影響されたグループは数知れない。70年結成以来ライヴ3枚、ベスト一枚を含む11枚のアルバムを発表し80年に解散する。アルバム発表毎に一回りずつ大きくなり長所だけを敏感に取り入れて本アルバム（5作目）で一頂点を極めた。特にA面後半からB面すべてを費やした「悪の教典＃9」は、クラシカル・ロック、シンフォニック・ロック、ジャズ・ロック、各ファンを魅了するとてつもない作品だ。この後グループは方向を変えメンバー個々の趣味に走り、徐々にボルテージを落してあげくの果てには過去の栄光にしがみついたようなアルバム「ラヴ・ビーチ」を発表しうやむやの内に消えていったのが非常に残念。(土)

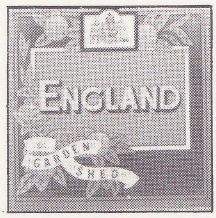


EMERSON LAKE & POWELL
Same Title

Polyor Pold 5191 '86　　Palydor 28MM-0510

Keith Emerson (Kb)
Greg Lake (b, vo)
Cozy Powell (bs)
Produced By Tony Taverner Greg Lake

噂ばかりが先行していたEL ＆ Pの再結成が86年に入って現実のものとなった。それも新たにPとしてコージー・パウエルを加えて。シンプルなデザインの新作の肝心の音は、往年の彼らを知る者にとって懐かしいものだった。本作が昔を上回る作品かどうかは評価の難しいところだが、今またかつてのコンセプトを新たなオリジナルとして再現することは正直言って驚きであった。彼らの最近のライヴでは、EL ＆ P時代ばかりではなくナイス時代の曲もプレイしているらしい。しかしただ懐古趣味に走っているのではないことは本作にも収められた「火星」のライヴではっきりとしそうだ。そこに表現される重厚さに彼らの底力が秘められていそうである。本LP及びシングル共にアメリカでヒットを記録したことも特筆すべきことだろう。〔後〕



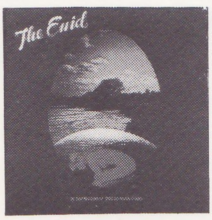
ENGLAND
Garden Shed

ARISTA　　1977年
ARTY 153 廃

Martin Henderson : b. vo.
Franc Holland : g. vo.
Robert Webb : kbd. vo.
Jude Leigh : ds. perc. vo. b.

Pro : England

イエスとジェネシスを足して2で割ったようなサウンドと評されるイングランド唯一のアルバム。確かにそういった感じを受けるが（イエス風コーラス、ハケット風ギターなど)、それ以上に良さを見い出せる部分は沢山ある。そのひとつにアレンジのよさがあげられる。何げなく聴くといわゆる典型的なプログレッシヴ・ロックなのだが、静と動の対比、歌のバックにおけるギターとキーボードの使い分け、時折り流れるメロトロン、実に見事だ。又、曲順がうまく構成されていて飽きが来ない。これだけのアルバムが作れるのにたった一作品を残して消えてしまったのは、やはり時流のせいだろうか。なお、別売で全曲の詩とイメージイラストの付いたブックレットがあり、アルバムのイメージをかきたててくれる逸品である。(土)



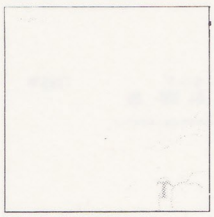
THE ENID
In the Region of the Summer Stars

BUK　　KING K22P-504
BULP 2014 廃　　1976年

Robert John Godfrey : kbd. perc.
Francis Lickerish : g.
Stephen Stewart : g.
Glenn Tollett : kbd. b. tuba.
Robbie Dobson : perc.

Pro : John Sinclair

もともとはバークレー・ジェームズ・ハーベストのアレンジ等をしていたロバート・ジョン・ゴドフリーは74年にソロ・アルバムを発表した後、エニドを結成し、本アルバムを76年に 1stアルバムとして発表した。クラシカルな手法（古典派～ロマン派）に基づくロック作品で、シンフォニックという言葉が最も端的に彼等の美意識を表現するであろう。以後エニドは2nd「Aerie Faerie Nonsense」3rd「Touch Me」、4th「Six Pieces」5th「Live at Hammersmith Odeon(vol.1とvol.2とある)」6th「Something Wicked This Way Comes」7th「Spell」8th「Live 1983」と続々と新譜を発表すると共に旧譜の再発（ほとんどが再録かリミックス盤）も自らのレーベルを設立して続々と発表している。(山)



BRIAN ENO
Music for Airports

AMBIENT 1　ポリドール　1978年
　　　　　MPF-1229

Robert Wyatt : p.
Brian Eno : effects

Pro : Brian Eno

イーノは71年にミキサーあるいはエレクトロニクス担当としてロキシー・ミュージックに加入した。これがロック界での彼のデビュウであり、ロキシー脱退後はソロ活動を行ない現在に至る。彼の活動の場はロック・フィールドにあるが、位置的にはジャンルを超えたもので、手法的にはコンテンポラリー・ミュージックの流れをくんでいる。エンジニア、プロデューサー的な視野から曲を創造しているが結果的に非常に聴き易いタイプの音楽に仕上げられている。これが彼のアンビエント・ミュージックの基本概念である。又、彼の音楽界に与えた影響は非常に強く、よくも悪くも一つの流行をつくってしまった。今や彼の作品量は非常に多くなってしまったのでそれに関しては他の資料を参照していただきたい。(山)



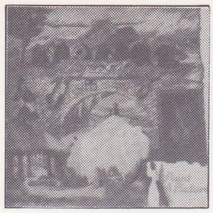
ESPERANTO

Last Tango

A & M　　　　　　キング　　　　　1975年
AMLH 68294 廃　GP-234 廃

Raymond Vincent : 1st vln.　　Pro : Robin Geoffrey Cable
Godfrey Salmon : 2nd vln.
Timothy Kramer : cel.
Tony Malisan : dr.
Gino Malisan : b.
Bruno Libert : kbd.
Roger Meakin : vo.
Kim Moore : vo.

R・ヴィンセント率いる世界最強のロック・オーケストラの3rdアルバムである。73年に"ROCK ORCHESTRA"でデビューしたエスペラントは当時15人編成、vlnがベルギー、kbdが英、リズム・セクションがイタリア／アメリカのハーフ等、様々な国籍のメンバーが集まっていた。74年にピート・シンフィールドのプロデュースで"DANCE MACABRE"を発表。だが最高傑作はこの3rdアルバムである。極端にアレンジされた「エリノア・リグビー」に始まるツイン・ヴォーカル&ツイン・ヴァイオリンの迫力はすさまじい。結局、これが彼等の最後のアルバムになってしまったのは残念なことである。チェロのT・クレイマーはコーマスの2nd"TO KEEP FROM CRYING"(74)にも参加している。　(千)



FANTASY

Paint a Picture

POLYDOR　　　　　　　　　　1973年
2383-246 廃

David Read : b. vo.
Paul Lawrence : 12g. vo.
David Metcalfe : kbd. vo.
Peter James : g. vo.
Jon Webster : perc. vo.

Pro : Peter Sames

童話のような美しいジャケットにまず魅きつけられ、このイメージを描きつつ針を落としてみる。厳密に言えばプログレの範疇からは幾分外れるかも知れないがイメージと寸分たがわぬ洗練された美しいサウンドがスピーカーから溢れ出て来る。耳のこえたプログレファンでも十分に傾聴に耐え得る魅力的なアルバムだ。だが、うわべだけをなでるような聴き方では本作の本当の良さは味わえないであろう。派手なキーボードプレイ等は一切採り入れず、あくまでも歌心を大切にして絶妙のハーモニーで聴かせるというタイプだからだ。また同じ美しさでもユーロック特有の甘美性とは一線を画す。瞬間的な美には酔えても、その裏にある「暗さ」をどう受け止めるかによっても本作に対する評価は変ってくるのだろう。　(江)



FIELDS

same title

CBS　　　　　EPIC　　　　1971年
69009 廃　　ECLP 9 廃

Graham Field : kbd.
Alan Barry : g. vo. b. syn.
Andy McCulloch : ds.

Pro : Fields

元レアー・バードのグラハム・フィールド、元キング・クリムゾンのアンディ・マックローチ、そして、マイケル、ピーターのジャイルス兄弟とダウン・ランス（レコードはリリースされていない）を結成していたアラン・バリーの3人からなるフィールズは、各メンバーの輝かしき音楽キャリアも手伝って、結成時、一部マニアの間で大きな話題となった。注目のうちに彼らが発表したLP「Fields」はファンの事前の予想とはやや異なる内容であった。キーボード、ギターのソロをフィーチャーして曲は流れるように進行する。そこではややポップかつ捻りの利いたサウンドを楽しむことができる。本作のみでグループは解散、マックローチはグリーンスレイドに参加する。　(賀)



FLAMING YOUTH

Ark 2

FONTANA　　　　　　　　　1969年
STL 5533 廃

Gordon Smith : g. b. vo.
Ronnie Caryl : b. g. vo.
Brian Chatton : org. p. vo.
Phil Collins : ds. perc. vo.

フィル・コリンズのデビュウ・グループとして名高いフレミング・ユース。本アルバムは彼らの唯一の作品であり、火星、金星、木星、パルサー等、宇宙的タイトルの曲を収めたトータル・アルバムである。サウンド的にはスペーシーな感じはほとんどなく、コーラスを主体にした曲、ギター、オルガンのややジャズィなソロを前面に押し出した曲、いかにも60年代風のブリティッシュ・ビート風の曲調が次々に登場する。いわゆるプログレッシヴ・ロックではないが、アルバム全体の構成は当時としては凝ったものと言える。また、ステンド・グラス風の三面開きジャケットも美しいものである。この後、コリンズはジェネシスに参加、チャットンはジャクソン・ハイツのメンバーとなる。　(賀)



FOREST

The Full Circle

HARVEST　　　　　　　　　1970年
SHVL 784 廃

Derek Allenby : vo. mdln. perc. harmonica.
Martin Welham : g. vo. p. vln. perc. el-hpd.
Hadrian Welham : vln. b. vo. cello. perc. g.
Pro : Forest & Malcolm Jones

日本に於いて全くの無名であるフォーレストは、ハーヴェスト・レーベルより2枚のアルバムを発表したプログレッシヴな感覚を備えたフォーク・グループで、本国ではそれなりの人気がある。アメイジング・ブロンデルをより暗く、ファンタジックにした様なサウンドは完成の域には達していないけれど、心魅かれるものがある。2枚共に同水準の出来であるが曲の良さを決め手にセカンドである本作を代表としたい。多種の楽器を導入した意欲的な曲作りは幾分持て余し気味とはいえ、一定の水準を保っている。A-2〝ブルーベル・ダンス〟などの佳曲があるだけに円熟した姿を見たかったが本作発表後、解散してしまったようだ。　(土)



FRIPP & ENO

No Pussyfooting

ISLAND　　　ポリドール　　　1973年
HELP 16 廃　MPF-1218 廃

Brian Eno : Revox A77 Tape Recorder. etc.
Robert Fripp : g. etc.

Pro : Fripp & Eno

フリップとイーノのコラボレイション・アルバム。後期クリムゾンの時期と平行してアルバムを2枚発表した。本作はその一枚目で、2ndは「EVENING STAR : Island HELP 22 '75」である。イーノのテープ・ループ・サウンドにやはりエレクトロ処理をしたフリップのギターをのせた作品で、両者共に80年代にまで渡るこれ以降の活動の原点が本アルバムなのである。現在まで流行するに至った環境音楽なるジャンルの音楽ももとをたどれば本アルバムあたりが一つの原流となると思う。2ndはより視覚的なイメージが加わりより聴き易くソフィスティケイトされている。又、本作のA面は後期クリムゾンの演奏前に流していたことが有名である。　(山)

Electro
|
Fri



FRUUPP
Modern Masquerades

DAWN　　　　　テイチク　　　　1975年
DNLS 3070 廃　UXP-670-YD 廃

Peter Farelly: b.g.vo.
Martin Foye: ds.per.
Vince McCusker: g.vo.
John Mason: kbd.
Ian McDonald: s.

Pro: Ian McDonald

アイルランド出身の4人組、フループはコウマス、ジョーンズィー等の先鋭的アーティストを発掘しているマイナー・レーベル、ドーンと契約を交し「Future Legend(DAWN DNLS 3053)73年」「Seven Secrets(同 DNL S 3058)74年」「Prince of Heaven's Eye(同 DNLH 2)74年」そしてこの4thをキーボード奏者を交替し録音している。ファンタジーに題材を求めたフループの音楽は他の大物アーティストと較べてしまえば演奏もアレンジも稚拙だが、失いかけていた童心を呼び覚ましてくれるような淡い郷愁の漂う曲想には捨て難い魅力がある。4枚中、特にこのラスト作では元キング・クリムゾンのイアン・マクドナルドの助けを得て、奥行きを感じさせる佳作に仕上げている。(古)



FUSION ORCHESTRA
Skeleton In Armour

EMI　　　　　1973年
EMA 758 廃

Jill Sward: vo.el-p.p.fl.syn.
Colin Dawson: g.
Dave Cowell: b.g.
Stan Land: g.syn.hca.
Dave Bell: ds.

ディストーションの利いたドライヴ感のあるギターと乗りの良い女性ヴォーカルを主体とし、ジャージーな展開を見せるフュージョン・オーケストラの唯一のアルバムである。全体的にアップ・テンポの曲で構成されており、ロック・ファンが聴いても違和感はないと思える。カンタベリー系のジャズ・ロックではなく、一般的なブリティッシュ・ジャズの要素を取り入れて、力強いロックと結合させていると言える。ジャケットを見ると邪悪なイメージがあるが、サウンドはそれほど暗くない。なおレコーディング・スタジオはロンドンの〝アビー・ロード〟である。このアルバム後のメンバーの動向は不明だが、実力を持った人達なので何らかの形で他のレコードに参加している可能性もある。(青)

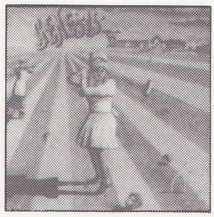


PETER GABRIEL
same title

CHARISMA　フォノグラム
CAS 4019　RJ-7637

Peter Gabriel: vo.perc.syn.p.
Phil Collins: perc.
Larry Fast: syn.
Robert Fripp: g.
John Giblin: b.
Tony Levin: b.
David Rhodes: g.
Pro: Steve Lillywhite

P.ゲイブリエルの3rdアルバムはスティーヴ・リリホワイトをプロデュースに迎え、驚くほど鋭角的な感性が表出した作品である。彼はプロデューサーによって随分と表情を変えるアーティストで、1stはボブ・エズリンが華やかなポップ・アルバムに仕上げていたし、2ndではロバート・フリップと共同してストレートなロック・ビートに徹しそれがかえって凝縮された情念のようなものを浮立たせていた。サウンド的にはシンバル類を一切用いない強力なパーカッション、歪んだギター音などリリホワイト及び参加ミュージシャンの個性が活かされた結果だが、ゲイブリエルは増々シンプルな言葉を選ぶようになり明らかにメッセージ色は強まっている。この後4th、そして2枚組ライヴ「Plays Live」を発表している。(古)



GENESIS
Nursery Cryme

CHARISMA　フォノグラム RJ-5143 廃1971年
CAS 1052 廃　フォノグラム 20PP-67

Peter Gabriel: vo.fl.
Phil Collins: ds.vo.
Steve Hackett: g.
Michael Rutherford: b.
Tony Banks: kbd.

Pro: John Anthony

68年にヴォーカル中心のトータル・アルバム「創世紀」でデビューしたジェネシスは、デッカからカリスマへ移籍しA.フィリップスの才能が突出したと言うべき「侵入」を経てこの「怪奇骨董音楽箱」で特異なロック・ミュージックを確立するに至った。ファンタジーへの傾倒、諧謔味を帯びたP.ゲイブリエルのヴォーカル、今となっては典型的とさえ言える曲展開にも、鬱屈したエリート意識が噴出したような攻撃性が感じられる。シンフォニック・スタイルが最も説得力を持った作品として記憶にとどめておくべきであろう。「フォックストロット」「月影の騎士」「幻惑のブロードウェイ」と傑作を発表し続けた彼等も、ゲイブリエル脱退後は暫く自己模倣を繰り返した後、ポップ路線がアメリカ市場に受け入れられ現在に至る。(古)



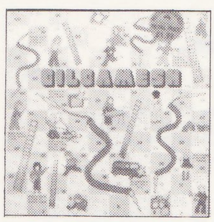
GENTLE GIANT
In a Glass House

WWA　　　日本フォノグラム　　1973年
002 廃　　RJ-5131 廃

Derek Shulman: vo.as.ss.rec.
Ray Shulman: b.vln.ac-g.perc.vo.
Kerry Minnear: kbd.perc.rec.vo.
Gary Green: 6 & 12-g.mln.perc.rec.
John Weathers: ds.perc.

Pro: Gentle Giant

ジェントル・ジャイアントの5枚目。オリジナル盤は中央がセルロイドの変形ジャケット。国内盤はセルロイドを使わず、裏ジャケットに歌詞を印刷したもの。シャルマン兄弟の内、年長のフィルが脱退した後のレコードだが、見事なコンビネーションである。変則拍子、クロス・リズムの多い彼等のサウンドは本国よりむしろヨーロッパで人気が高く、PFMを始め、影響を与えたバンドは多い。70年にデビューした彼等だが80年に発表された12枚目「Civilian」が最後のアルバムとなった。関連アルバムとしてSIMON DUPREE & THE BIG SOUND「Without Reservations」(67年、シャルマン3兄弟のグループ)、J.ウェザースが参加しているEYES OF BLUE「In Field of Ardath」('69)、BIG SLEEP「Bluebell Wood」('71)等がある。(千)



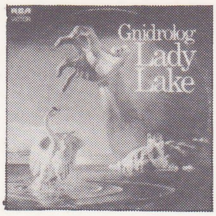
GILGAMESH
same title

CAROLINE　ビクター　　1975年
CA 2007 廃　VIP-4077 廃

Phil Lee: g.
Alan Gowen: p.el-p.syn.mtn.clavinet.
Jeff Clyne: b.
Michael Travis: ds.perc.
Amanda Parsons: vo.

Pro: Gilgamesh & Dave Stewart

カンタベリー系のビッグネームであるギルガメッシュはサンシップを前身とし、75年に本アルバムでレコード・デビューしている。正にカンタベリー系のジャズ・ロックを代表するサウンドでハットフィールズと並ぶ高い音楽性を有する。ゴウエンのキーボード(エレピ)が主体となっているがそれぞれの織り成すインプロヴィゼイションは緊張感に富んでいる。ギターのフィル・リーはあまりバックにはまわらず、ソロのパートをこなしている。ゴウエンの音楽的才能はこの時点ですでに開花している。77年頃にはギルガメッシュは解散状態となり(ハットフィールズも同様)、後にカンタベリー系のスーパー・グループ、ナショナル・ヘルスが結成される。(青)

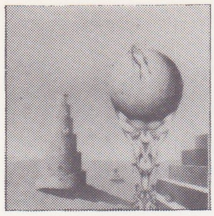


GNIDROLOG
Lady Lake

VICTOR 1972年
SF-8322 廃

Pro:Dick Parkinson & Gnidrolog

暗いアルバムである。けだるいまでの重苦しさこそ感じられないが、たとえ明るいメロディーであっても、一抹の淋しさを呈する彼らのサウンドは、リスナーの心理を動揺させずにはおかない。存在感を際立たせる強烈な自己アピールだ。前作"In Spite of Harry's Toe-Nail"では、強い個性を前面に出しすぎたため、標準的な出来ながらもあまり高い支持は得られなかったが、本作では目先を変えてブラス・セクションを導入。あくまでも独自のスタイルを保ちながら、個性の中でも特にアクの強い部分をこれに埋没させることによって秀作に仕上げた。カヴァー・デザインもまた秀逸。恐怖におののく白鳥の姿が本作の全貌を表していると言えそうだ。72年発表の2nd。本作を最後に解散したものと思われる。(江)



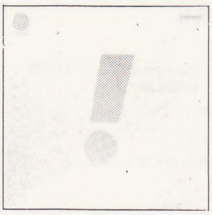
ROBERT JOHN GODFREY
Fall of Hyperion

CHARISMA **フォノグラム** 1974年
CAS 1084 廃 **BT-5167 廃**

Robert John Godfrey:kbd.
Christopher Lewis:vo.
Neil Tetlow:b.
Jim Scott:g.

Pro:Neil Slaven

後にエニドを結成するロバート・ジョン・ゴドフリーの唯一のソロ作品。73年の秋に録音され、74年にリリースされたものである。全ての作曲と全てのキーボードは彼によるもので、クラシカルなピアノ、ハモンド・オルガン、メロトロンのアレンジはかなり古典的なシリアス・ミュージックの影響が強い。後にエニドによって演じられる作風の典型が本アルバムに全てつめ込まれているといってよく、情熱的なロマンティシズムの流れでる様は圧巻の一語につきる。アルバム・タイトルは英国ロマン派の詩人キーツの作品名よりとられたもので、このタイトルこそが最も端的に本アルバムのサウンドを伝えているといえるであろう。ヒプノシスによるジャケットも又、素晴らしいものである。(山)



GRACIOUS
same title

VERTIGO **フォノグラム** 1970年
6360-002 廃 **SFX 7362 廃**

Paul Davis:vo.12g.perc.
Martin Kitcat:mtn.p.el-p.hpd.vo.
Alan Cowderoy:g.vo.
Tim Wheatley:b.
Robert Lipson:ds.

Pro:Hugh Murphy

グレイシャスのデビュー・アルバム。一部マニアの間ではメロトロンロックの代名詞として通っており、シンプルなジャケットデザインからは想像もできない様なバラエティーに富んだ演奏を繰り広げる。確かにメロトロンの使用頻度は高く聴く者をうっとりとさせるが、ピアノ、ハープシコードを含めた全体的なキーボードプレイに、むせび泣く様なギターとファズ(?)ボーカルを加えて展開されるヘヴィーな部分も持ち味の一つだ。それによって静と動とのコントラストが一層引き立つ。B-2の頭にベートーベンが出てくるように収録曲のうち何曲かは原曲があると思われ、彼らの演っているフレーズがイタリアのパンナ・フレッダ、フランスのヴィジターズの作品中でも聴かれる。なお1stツアーは68年、フーの前座だった。(江)

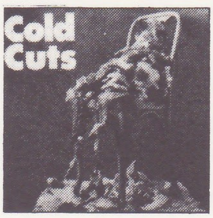


GREENSLADE
same title

WARNER BROS. **W.パイオニア** 1973
K 46207 廃 **P-8368W 廃**

Dave Lawson:kbd.vo.
Dave Greenslade:kbd.
Tony Reeves:b.
Andrew McCulloch:ds.

コラシアム出身のデイヴ・グリーンスレイドが中心となり73年にデビュウし、4枚のアルバムを残したグリーンスレイドはダブル・キーボード・グループとして当時話題を集めたグループである。本作はその記念すべき1stアルバム。荒削りではあるが、すでに独自のスタイルを確立している。2nd「ベッドサイドマナーズ・アー・エクストラ」は多少ポップさが感じられるが洗練された音創り。3rd「スパイグラス・ゲスト」はもう一人のキーボード、デイヴ・ロウスンとデイヴの間の対立が目立ってきたがサウンドはクラシカルな好盤。4th「タイム&タイド」はロック色が強く、メリハリの効いた作品。この作品後、バンドは解散し、デイヴはその後ソロ・アルバムを2枚製作した。1stはグループの延長線上、2ndはエレクトロニクスを多用している。(山)



NICHOLAS GREENWOOD
Cold Cuts

KINGDOM KVL 9002 廃 1972年

Nicholas Greenwood:vo.b.effects.
Dick Heninghem:kbd.
Eric Peachey:ds.
Bunk Gardner:woodwinds.
Bryn Howarth:g.
Chris Pritchard

Pro:Marc Chase & N.G.

オリジナル・クレイジー・ワールド・オブ・アーサー・ブラウンのベーシストであったニコラス・グリーンウッド名義のソロ・アルバムである。グリーンウッドはプログレッシヴ・ファンの間ではカーン(KHAN)のベーシストとしての名前のほうが知られているだろう。カーンと同じ72年に本作を発表していることから、ほぼ同時進行的に活動を行なっていたものと推測される。ドラマーのエリック・ピーチェイはカーンのドラマーでもある。ブルース・ロックの影をそこはかと湛えてはいるがやはり当時のプログレッシヴ・ムーヴメントに属するサウンドで、かなり高水準な出来である。その後、彼の名前をブリティッシュ・シーンに見い出すことのできないのが残念である。(山)



CAROL GRIMS & DELIVERY
Fools Meeting

CHARISMA 1970年
CAS 1023 廃

Steve Miller:kbd.vo.
Lol Coxhill:s.
Phil Miller:g.
Roy Babbington:b.
Pip Pyle:ds.
Carol Grims:vo.perc.

Pro:Tony Chapman

フィル・ミラー、スティーヴ・ミラー、ロイ・バビントン、ピップ・パイル、ロル・コックスヒル。後にブリティッシュ・ロック界で大活躍するミュージシャンたちが顔をそろえている。ソフト・マシーン、マッチング・モウル、ハットフィールズ、ナショナル・ヘルス、ゴング、キャラヴァン…どのバンドも彼等を抜きには語れない。そんな彼等が無名時代に、女性ヴォーカリスト、キャロル・グライムスを迎えて、このアルバムを製作した。ジャズっぽいブルース・ロックといった内容で、やや古めかしい感じもするが、個々の演奏を聴くと、この時点でそれぞれのスタイルを確立していることがわかる。地味ながらも好盤である。(松)



GRYPHON
same title

TRANSATLANTIC　東芝EMI　1973年
TRA 262 廃　IRS-80364 廃

Brian Gulland: crumhorn. bassoon. rec. kbd. vo.
Richard Harvey: rec. crumhorn. kbd. g. mln.
David Oberle: ds. perc. vo.
Graeme Taylor: g. kbd. rec. vo.

Pro: Lawrence Aston, Adam Skealing

グリフォンがデビュー当時からロック・バンドとして扱われた事は非常に興味深い。中世の曲やトラッド・ナンバーをプレイしながらロック・フェスに出演し、好評でさえあったという事実。(無論、後期にはイエス風なグループに変貌してしまうのだが)それだけ彼らが卓越したグループであったという事だろう。グループは74年に「Midnight Mushrumps」「Red Queen to Gryphon 3」、75年に「Raindance」、77年に「Treason」と5枚のレコードを発表している。R.ハーヴェイは2枚のソロ・アルバムを発表しているが、もう一人のグループの中心人物であるB.ガランドはグループ解散後、マリコルヌ(仏)に加入したり、イギリスで環境音楽風なオムニバス・テープに参加したりしている。(千)

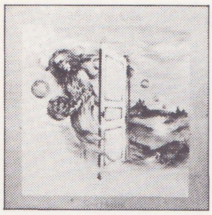


GUN
Same title

CBS 63552 廃　CBSソニー　1968年
SONP 50112 廃

Adrian Curtis: g. vo.
Paul Curtis: b.
Louis Farrell: ds.

ガービッツ兄弟のデビュー盤となったGUNの1stアルバム。アート・ロック界屈指のヒット曲、「Race with The Devil」をA-1に収録した名盤である。そのサウンドはアート・ロックをベースにしながら、ハード・ロックからアヴァンギャルド・ロックまで広範囲な要素を取り入れ、ブラス/ストリングス・セクションを大胆に導入したもので、当時としては画期的なものであった。ガービッツ兄弟は2nd「GUNSIGHT」(69)発表後、THREE MAN ARMYを結成、71年から74年にかけて4枚のアルバムを発表、74年にG.ベイカーを加えBAKER GURVITZ ARMYと名を変え、76年までに3枚のアルバムを発表。その後ムーディ・ブルースのG.エッジのバックを経て、アドリアンは現在ソロで活動している。(千)



STEVE HACKETT
Voyage of the Acolyte

CHARISMA　フォノグラム　1975年
CAS 1111 廃　RJ 7074 廃

Steve Hackett: el-g. ac-g. mtn. harmonium. vo.
John Hackett: fl. syn.　Mike Rutherford: b.
Phil Collins: ds. vib. perc. vo.
John Acock: mtn. harmonium. p.
Sally Oldfield: vo.　Robin Miller: oboe.
Nigel Warren: Green: cel.
Percy Jones: b.　John Gustafson: b.
Pro: S. Hackett & J. Acock

スティーヴ・ハケットがジェネシス時代に残した1stソロ・アルバム。今だにこれを彼の最高作と見る人も多いだろう。彼がジェネシス最盛期において核の部分をなすアイデアを提供していた事実は、本作を聴いても疑いようがない。ここでアコースティック・ギターをはじめ生楽器が醸しだす内省的な空間は言葉にするのももどかしい程、独特のもの。ゲストの好演もあるにせよ、一徹な幻視者のヴィジョンが本作をさらに高みへと引き上げているのがわかる。続く2nd,3rdは自らのバンドを率いた同傾向の作品。他に特筆すべきアルバムとしては生ギターだけを用いた「Bay of Kings」がある。ところで一貫してカヴァーを手掛けるキム・プーアは画集も出していてブレイクに通ずる幻想的なフォルムを得意としている。(古)



PETER HAMMILL
Over

CHARISMA　フォノグラム　1977年
CAS 1125 廃　RJ-7256 廃

Peter Hammill: vo. g. kbd.
Grahame Smith: vln.
Guy Evans: ds.
Nic Evans: b.
Michael Brand: orchestra arr. & conductor

Pro: Peter Hammill

ここに在るのは個人的な作品集である。V.D.G.G.のリーダーで内省的であるP.ハミルの6枚目のソロ・アルバムは広義でのラヴ・ソング集であると言えよう。彼の場合、グループとソロを比較するとソロの方が、よりアコースティックで、より個人的な問題を扱っており、その繊細さは、バイロンの描いたハロルド像の様だ。G.スミスのゲスト参加により、その色彩は強張されており、さながら過去にしか意味を見出せない男の迷宮世界のようである。彼はこの後、自分の年齢や同時代性を考慮に入れた作品「Future Now(78)」、「PH7(79)」等を発表、最近も来日する等意欲的に活動を続けている。(千)

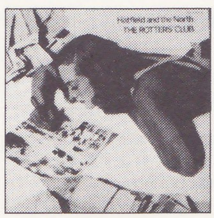


CHRIS HARWOOD
Nice to Meet Miss Christine

BIRTH RAB 1 廃

Chris Harwood: vo.
Tommy Eyre: kbd.
Roger Sutton: b.
Ian McDonard: s. fl.
Dave Lambert: g. vo.
Peter Banks: g.
John Morgan: tb.　etc.
Pro: Mark Plummer, Miki Dallon

イアン・マクドナルド(元キング・クリムゾン)、ピーター・バンクス(元イエス、フラッシュ)、デイヴ・ラムバート(元ストローブス)、ロジャー・サットン、トミー・アイアー(いずれも元リフ・ラフ)ら錚々たるミュージシャンとともに制作されたクリス・ハーウッドの唯一の作品である。彼女の唄は素人っぽさを感じさせる素朴なものであり、雰囲気で聴かせるタイプのシンガーである。一方、バックでは各人がその名に恥じない見事な演奏を展開しており、それはクリスのヴォーカルを盛り上げるとともに単なる歌手のサポートを越えた素晴らしいものとなっている。中でも、マクドナルドのメロディアスなフルート、アイアーのジャズィなキーボード等は印象的である。(賀)



HATFIELD & THE NORTH
The Rotter's Club

VIRGIN　コロムビア　1975年
V2030 廃　YX-7033-VR 廃

Phil Miller: g.　Pip Pyle: ds. perc.
Richard Sinclair: vo. b. g.　Dave Stewart: org. el-p.
Jimmy Hastings: fl. s.　Mont Campbell: French horn
Lindsay Cooper: oboe. bassoon.
Tim Hodgkinson: cl.　Barbara Gaskin: vo.
Amanda Parsons: vo.　Ann Rosenthal: vo.
Pro: Hatfield & The North

初期ソフト・マシーンが持っていた可能性は、マッチング・モウルに受け継がれ、このハットフィールズによってひとつの完成をみた。彼等こそカンタベリー最高のグループである。72年、経験豊富な4人によって結成された後、キーボードがスティーヴ・ミラーからデイヴ・シンクレアそしてデイヴ・ステュアートに替わり、74年にロバート・ワイアットの協力を得て「Hatfield & the North」を発表した。翌年発表された本作は、持ち前のウィットに富んだジャージーな感覚の音楽性にますます磨きがかかった最高の出来である。それだけに、直後の解散が惜しまれる。彼等の演奏は「V」(オムニバス)、「Over the Rainbow」(ライヴ)、「Afters」(ベスト)でも聞くことができる。(松)

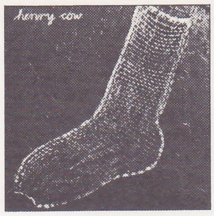


HAWKWIND
Hall of the Mountain Grill

UNITED ARTISTS　　東芝EMI　　1974年
UAG 29672 廃　　LLS-80068 廃

Dave Brock:g.syn.org.vo.
Lemmy:b.vo.g.
Simon House:kbd.mtn.vln.
Nik Turner:s.oboe.fl.vo.
Del Dettmar:kbd.syn.kalimba.
Simon King:ds.perc.
Pro:Hawkwind, Doug Bennet, Roy Baker

ホークウインドのターニング・ポイントとなった作品。彼等の5枚目のアルバムであるが、S.ハウスの加入を契機としてよりメロディアスでシンフォニックなスペース・ロックに仕立てられている。名盤「The Warrior on the Edge of Time」に至る布石とも言える作品だが、S.ハウスのヴァイオリン・ソロをフィーチャーしたA-2、レミー、ミック・ファーレン共作によるB-3（モーターヘッドの1st にも収録されている）等、隠れた名曲が多い。70年代においてドラッグ・カルチャーの為のスペース・ロックを演奏し続けて来たホークウインドだが、現在も活動を続けており、執念の17枚目「Hawkwind & Relations Vol.II」を発表している。尚、本誌Vol.8,9のホークウインド特集を参照のこと。（千）



HENRY COW
Unrest

VIRGIN　　コロムビアYX-7034-VR 廃 1974年
V2011 廃　　ビクターVIP-4096 廃

Tim Hodgkinson:org.as.cl.p.
Fred Frith:g.vln.xylophon.p.
John Greaves:b.p.vo.
Chris Cutler:ds.
Lindsay Cooper:bsn.oboe.rec.vo.

68年から78年まで活動を続けたヘンリー・カウは、カンタベリー・ミュージックのひとつの枢軸として今では計り知れない程の影響を及ぼしている。「Legend（73年）」を経て本アルバムを発表。初期ヘンリー・カウの名曲として知られる〝Ruins〟が収められている。その後、ドイツ出身の3人組スラップ・ハッピーと合体して「Desperate Straights（75年）」、「In Praise of Learning（75年）」を発表。スラップ・ハッピーと別れてからは「Concerts（76年）」、「Western Culture（79年）」を発表している。高度に構築的なジャズ・ロックとフリー・ミュージックを結びつけ、更に社会主義運動への共鳴を表明して行くという方法論を着実に実践し、アルバムを追う毎にそれらが不可分のものとなって行くのが判る。（坂）

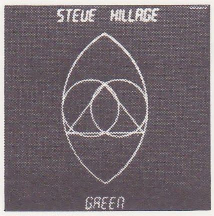


HIGH TIDE
Sea Shanties

LIBERTY　　キング　　1969年
LBS 83264 廃　　DY-5804-02（NOT FOR SALE）

Tony Hill:g.vo.
Simon House:vln.
Peter Pavl:b.
Roger Hadden:ds.

69年初めに結成されたハイ・タイドの1st アルバム。当時としてはロック界屈指のギタリストとも言える元ミスアンダーストゥッドのT.ヒルを中心としたグループ。S.ハウスは本誌ではお馴染み、ホークウインド、D.ボウイ・バンド等のヴァイオリニストとして著名な人物。ミスアンダーストゥッドはLPこそ残ってないが伝説的なグループでT.ヒル脱退後もN.ポーター、G.エバンス等を加えて活動をしていたようだ。ハイ・タイドは本作後、デニー・ジェラルドの「Sinister Morning（70）」に全員で参加、同年に2nd「High Tide」を発表している。サウンドは当時の時代を反映しており、プログレッシヴと言うよりはアート・ロックの方が近い。幻のグループであったが、最近は再発されており比較的入手し易いようだ。（千）



STEVE HILLAGE
Green

VIRGIN　　ビクター　　1978年
V2098 廃　　VIP-6918 廃

Steve Hillage:g.g-syn.moog.etc.
Miquette Giraudy:ARP & EMS syn.etc.
Joe Blocker:ds.
Curtis Robertson JR:b.
Pro:Nick Mason & S.Hillage

カンタベリー出身のギタリスト、スティーヴ・ヒレッジは古くはデイヴ・ステュアート、モント・キャンベルらとユリエルを、その後カーンを経てゴングに加入、アルバム「YOU」を最後に脱退してからは続々とソロ・アルバムを製作して現在に至っている。本作は彼の4枚目のソロ・アルバムで、彼の音楽スタイルの頂点を極める作品といえる。独特のディレイ効果とスケールを持つギター・ワークとそのドラッグに触発されたサウンドは彼独自のもので、加えてエレクトロニクスが効果的に使用されている。ゴングの傑作「YOU」の延長線上に位置するものである。オリジナルはポスター付で盤が緑色のもの。又、螢光塗料を使用した歌詞カードは光をあてると独特の輝きを放つ凝った代物である。（山）

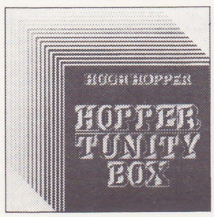


RUPERT HINE
Pick Up a Bone

PURPLE　　1971年
TPSA 7510 廃

Rupert Hine:vo.g.harmonica.
Simon Jeffs:a-g.e-g.slide-g.
David Maciver:g.
Peter Robinson:p.org.
Pete Morgan:b.,
Terry Cox:ds.
etc.
Pro:Roger Glover

ルパート・ハインの名前は、本誌の読者にはキャメル、キャラバン、K.エアーズ、A.フィリップスなどのプロデューサーとしておなじみだと思う。（これらのアルバムでは必ず演奏者としてもクレジットされていて、M.ジャイルス、J.G.ペリー、G.リチャードソンと行動を共にすることが多い。）ルパート・ハインの天才的なひらめきは、70年初頭から現在まで雑多なアーティストを精力的に手がけどれもを一流のインテリジェンスで着色してしまう。第一ピリオドとしての本作品では、P.バックマスターの協力によって若き頃のナイーヴな感覚が強調され、いかにも英国風のヴォーカルが印象的だった。その他ソロとしてPurpleに1枚、A&Mに3枚。唯一のグループ活動、ファンタム・ジャンプで3枚のアルバムを残している。（森）



HUGH HOPPER
Hopper Tunity Box

COMPENDIUM　　1977年
FIDADO 7 廃

Hugh Hopper:b.g.rec.perc.
Elton Dean:s.　　Mike Travis:ds.
Mark Charig:cornet.tenor horn.
Dave Stewart:org.pianet.oscillators.
Richard Brunton:g.　　Gary Wind:s.
Nigel Morris:ds.
Pro:Mike Dunne & Hugh Hopper

ソフト・マシーンをジャズに向かわせた男、ヒュー・ホッパー。彼のキャリアはそのままブリティッシュ・ジャズ・ロックの歴史でもある。古くはソフト・マシーンからギルガメッシュ、アイソトープなど。ソロ・アルバムやゲスト参加まで含めると、その意欲的活動はとても把握しきれない。77年頃、彼はベルギーのコンペンディウムからアルバムを発表している。本作もその一枚で、バランスのとれた好盤。強力メンバーによる好演の連続で、とりわけ、デイヴ・ステュアートのオルガンが冴え渡っている。他では、現代音楽的手法を取り入れた実験作「1984（73年）」やアラン・ゴウエン（シンセサイザー）との絶妙なコンビネーションを聞かせてくれる「Two Rainbows Daily（81年）」等が高く評価されている。（松）



LINDA HOYLE
Pieces of Me

VERTIGO 1971年
6360 060 廃

Linda Hoyle : vo.
John Marshall : ds. perc.
Jeff Clyne : b. el-b.
Karl Jenkins : p. el-p. oboe.
Colin Purbrook : p.
Chris Spedding : g.

Pro : Pete King

名盤「アフィニティ」でヴォーカルをとっていたリンダ・ホイルは、71年にこの唯一のソロ・アルバムを発表している。バックに、初期ニュークリアスの豪華な顔ぶれを迎えたスタンダード・ヴォーカル風の作品集で、ピアノによる伴奏曲からストリングス・オーケストラ（K.ジェンキンスのアレンジ）を配した曲まで、オーソドックスで実に味わい深い。とりわけ彼女の声に魅力を感じる。憂いを帯びたヴォーカルが、しっとりとした演奏によって更に美しく響く。フィンランド出身で、ロニー・スコット・ディレクションズの秘蔵っ子歌手だった彼女。一瞬のきらめきを残しただけで、二度と我々の前にその姿を見せることはなかった。（松）



IGGINBOTTOM
Igginbottom's Wrench

DERAM
SML 1051 廃

Alan Holdsworth : g. vo.
Dave Freeman : ds.
Mick Skelly : b.
Steven Robinson : g. vo.

Pro : M.J.M. Productions

ラヴ・アフェア（モーガン・フィッシャーが在籍した）に見出されたイギンボトムの唯一の作品である。そして、今をときめく人気ギターリスト、アラン・ホールズワースのプロ・デビュー作でもある。ホールズワース、ロビンソンのギターはチャーリー・クリスチャン以来の正当的ジャズ・ギターの影響を受けており、ベース・ギターのライン及びドラムにもジャズの香りが感じられる。当時としてはかなり大胆にジャズの要素を取り入れた作品と言える。時折登場する淡々としたややポップなヴォーカルとジャズィな演奏からなる彼らのサウンドはそれなりにオリジナリティがあり、新たなものを創造しようという意欲に満ちている。プログレッシヴ・ロックが確立される以前の一つの試みとして資料性は高い。（賀）



ILLUSION
Out of the Mist

ISLAND 東芝EMI 1977年
ILPS 9489 ILS 80856 廃

John Hawken : kbd.
Louis Cennamo : b.
Jane Relf : vo.
Jim McCarty : vo. ac-g. perc.
John Knightsbridge : g.
Eddie McNeil : ds.

オリジナル・ルネッサンス解散後、メディスン・ヘッド、アルマゲドンを経たキース・レルフは、妹のジェーン・レルフ、ジョン・ホウケンらとともにナウを結成するが、活動前に彼は亡き人となる。その後、彼の意志をついで、オリジナル・ルネッサンスのジム・マッカーティらを迎えてナウはイリュージョンとして生まれかわったのである。彼等のデビュー作となった本作品は、ルネッサンス同様クラシカルであり、とくに、A-1の「Isadora」は、ロック史上に残る名曲と言いきれるほど素晴らしい。また、B-2の「Face of Yesterday」は、オリジナル・ルネッサンスの2nd「Illusion」の中に収められている。その後78年には２作目を発表するが、惜しくもグループは解散してしまう。（山中）



INCREDIBLE STRING BAND
Earth Span

ISLAND キング 1972年
ILPS 9211 廃 ICL 48 ICL 48 廃

Robin Williamson : g. vo. kbd. vln. cel.
Mike Heron : kbd. g. vo. hca. fl.
Malcolm LeMaistre : v .kbd. g. mln.
Stuart Gordon : vln. vo.
Stan Lee : b.
Jack Ingram : handclap.
Likky : vo.
Brian Davidson : ds.
Dave Mattacks : ds.

66年にデビュー・アルバムをエレクトラから発表したI.S.B.の12枚目のアルバム。基本的にはトラッド・グループなのだが、シニカルなのか、冗談なのか、素朴なのか、ヘタウマなのか、何とも判断し難い点を持ち味にしている。本作もその例にもれず、J・エアプレインの様にルメイストルが唄い上げるA-5、ウィリアムソンとルメイストルの対比を生かしたB-2、ハーモニウムをフィーチャーしたB-4等、様々なタイプの曲が収録されている。他のI.S.B.のアルバムとしては８枚目にあたる“U”（70年）等も聴いてみて欲しいところだ。ソロ関係としてはヘロンのアルバムが２枚、マイクのソロが３枚、ロビンのソロが４枚ある。特にロビンの2nd“Journey's Edge”（77）は一聴に値する。（千）



INDIAN SUMMER
same title

NEON ビクター 1970年
NE-3 廃 SRA 5518 廃

Bob Jackson : kbd. vo.
Colin Williams : g. vo.
Paul Hooper : ds. per. vo.
Malcolm Harker : b. vib. vo.

インディアン・サマーとは小春日和の意味。国内盤のタイトルはB-1―Black Sunshineからとった「黒い太陽」だ。オルガン・ロックの典型であるが、まだプログレに十分陽が当っていなかった70年において、２～３年先に訪れるブームを彼らが知る由もなく、60年代の伝統を引きずった新しがり屋のオリジナリティにあふれたサウンドは当時としては画期的なものであったろう。もちろんELP等とは路線が異なる。たまにメロトロンが顔を出す他は電子楽器等の使用は一切控え、徹頭徹尾オルガンで通しているからだ。その合間に荒々しいギターが唸りを上げる。当然ある程度のパターン化は避けられないが、にもかかわらず、一度針を落すと最後まで聴いてしまいたくなる魅力あふれる作品である。（江）



IQ
Tales From The Lush Attic

CLASSIC ONE-SHOE MAJ 1001 '83 廃

PAUL COOK : DS
TIM ESAU : B
MIKE HOLMES : G
PETER NICHOLLS : VO
MARTIN ORFORD : KEY
PRO : IQ

とにかくジェネシス影響下のグループが多く目立ったブリティッシュ・ポンプシーン。そんなさ中、知能指数という意味深なグループ名を引っ提げて、一躍シーンに踊り出たＩＱ。彼らは中期ジェネシス――「月影の騎士」「眩惑のブロードウェイ」の頃を彷彿させるサウンドを得意としており、仏作って魂入れず的なこの手のグループが多かった中で、ある意味において正統的な後継者と言えよう。センスの良いギターワークにオルガン、メロトロン、シンセサイザーが絡み、ガブリエルスタイルの中では傑出した歌いっぷりを誇るＰ・ニコルスのヴォイスが聴き物である。85年には 2nd「The Wake」を発表。こちらも前作の要素に現代的な感覚を加味した好作品。グループはその後 VO を入れ替えて、現在も活躍中である。〔大〕

JACKSON HEIGHTS
Bump'n Grind

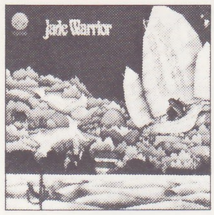


VERTIGO
6360 092 '73 廃

LEE JACKSON- B, G, VO
BRIAN CHATTON- KEY, VO
JOHN McBURNIE- G, VO, KEY

ベースのLEE JACKSONがNICEとREFUGEEの間で結成したグループCHARISMAに1枚、VERTIGOに3枚の作品を残した。VERTIGO盤ではあのMICHAEL JILES. IAN WALLACEが素敵なドラムスを聞かせてくれ、又メロトロンもかなり取り入れられている。一聴してストリングスと美しく躍るKB，コーラスを大切にしたソフィスティケイト・サウンドが見事なセンスで統一されている事に気付く。ホッと息をつけるソフト路線だけならどこにでもあるが、随所にハッと輝くアレンジや暖かさとテクに溢れたこのKB群は絶対に貴重なものだ。多数のストリングスを迎え、オシャレなスリーブに包まれたこの作品、チェンバロをフィーチュアした軽快なタッチにはNICEの影が見える。〔OM〕

JADE WARRIOR
same title



VERTIGO 1971年
6360 033 廃

Tony Duhig : g.
Jon Field : perc. fl.
Glyn Havard : b. vo.

Pro : Jade Warrior

グループの核であるトニー・ドゥーイグとジョン・フィールドの2人は、M.オールドフィールドに関係するトム・ニューマンと共同で68年にアルバムを一枚発表している。(「July [Major-Minor]」) 英国の伝統への固執はやがて遠く第三世界へと移行し、ヴァーティゴに3枚、アイランドに4枚のオリジナル・アルバムを残し、現在に至る。最新作は「Horizon (Nada Pulse)」。自らの対極である東洋への造詣の深さを、アフロ・ジャズ的手法に交錯させた独自の世界は、この1stに凝縮されている。レーベル移籍後は、そのうわずみを抽出したような全てインストゥルメンタル。より内面に潜行した感もあるがどれも完成度は高い。その他、アサガイ、ニアヴァーナとも交流があった。(森)

JAN DUKES DE GREY
Mice and Rats in the Loft



TRANSATLANTIC 1971年
TRA234 廃

Derek Noy : g. tp. tb. zelda chord.
Denis Conlan : ds.
Michael Bairstow : fl. cl. s.

Pro : Stuart Taylor

「Sorcerers《Decca SDN8》70年」に続くヤン・デュークス・ドゥ・グレイの2nd。ノイとベアストウの2人によって作られた1stは、ヴォーカル主体の、ほのぼのとしたフォーク色の濃いアルバムであったが、本作品は新たにコンランを加えたトリオ編成になっており、サウンドもインスト重視のハードなものへと大きく変化している。ギターを中心に、ヴォーカルも含めて、如何にもロックといった、自由奔放かつ大胆な演奏が展開されている。時としてジャーマン・ロックを思わすそのサウンドは、当時のイギリスにおいてかなり異端的なものであった。なお、レコード自体の内容とはイメージ的に異なるものの、ジャケット・デザインの素晴らしさは特筆に値する。(賀)

JETHRO TULL
This Was

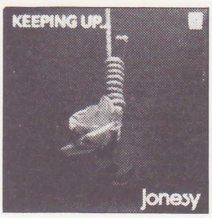


ISLAND ビクター・リプリーズ 1968年
ILPS 9085 廃 SJET 8129 廃

Ian Anderson : fl. p. vo. mouth organ. claghorn
Mick Abrahams : g. vo.
Clive Bunker : ds.
Glenn Corick : b.

フルートを本格的に用いた最初のロック・グループとして知られるジェスロ・タルは68年にデビュー、今なお活動を続ける非常に息の長いバンドである。現在までに20枚以上のアルバムを発表しているが、本ファースト・アルバムは「Thick as a Brick (Chrysalis CHR 1003) 72年」「Minstrel In The Gallery (同CHR 1082) 75年」などとともに彼らを代表する作品である。当時、ローランド・カーク（ジャズ・シーンを代表する盲目のマルチ管楽器奏者）と比較されることの多かったアンダーソンのノイズィかつワイルドなフルート、ロック、ジャズ、ブルースの各要素が巧くバランスした軽快なギター、それらを見事にサポートするドラムス等、彼らの演奏は時の流れに色褪せることのない輝きを今も放っている。(賀)

JONESY
Keeping Up



DAWN テイチク 1973年
DNLS 3048 廃 UPS 629 廃

John Evan-Jones : g. vo.
Gypsy Jones : b. rec. vo.
Jamie Kaleth : kbd. mtn. vo.
Plug Thomas : ds. per. vo.
Alan Bown : el-tp. el-fl-hn. per.

Pro : John Evan-Jones & Jonesy

ドーン・レーベルに3枚のアルバムを残しているジョーンジー。ファーストは荒削りなものの仲々の好アルバムでそれに続くセカンドが本作だ。初期クリムゾンの影響下にある内容といってしまえばそれまでだがジェイミーの奏でるメロトロンはロバート・フリップのそれより優しく、悲しい。最大の聴き所は「サンセット・アンド・イヴニング・スター」からのメドレーで老いた兵士の死、そのレクイエム…正にその情景が目に見える様だ。クレシダの「ミューヘン」と同等、あるいはそれ以上の名曲である。B面に2曲程フリーな曲がある他は落ちついて聴ける、名盤と呼ぶにふさわしい作品だ。サードは、一般的な評価は高い（モントルーのダイアモンド賞を受けている）が、デリケートな部分が失なわれてしまっている。(土)

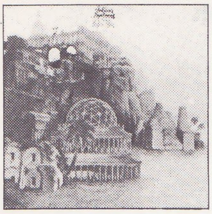
JULIAN JAY SAVARIN
Waiters on the Dance



BIRTH 2 1971年
RAB 廃

Julian Jay Savarin : arr.
Lady Jo Meek : vo.
etc.
Pro : Miki Dallon

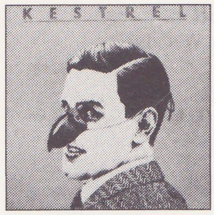
アルバムの名義はサヴァリンの個人名であるが、その実質はジュリアンズ・トリートメントの2ndと解して間違いない。本作は基本的に前作“A Time Before This”の路線を継承しているが、メロトロン及びオーケストラの大幅な導入によってスケールアップし、大いなる飛躍を遂げている。また前作ではあまり存在感のなかったギターも本作では多くのパートを与えられて活躍し、サウンドの重厚化に大きな役目を果たしている。しかしシンフォニックな要素が増しても、ポップな感覚をなくさないのが、彼らしい所で、それはパワフルな女性ヴォーカル—レディ・ジョミークの存在に負う所が大きい様だ。アルバムの中には、サヴァリンのペンになる原作本の宣伝広告が入っているが、彼の本業が音楽家か作家かは不明。(城)



JULIAN'S TREATMENT
A Time Before This

YOUNG BLOOD　SYB-2 廃　1970年

ジュリアン・ジェイ・サヴァリン率いるジュリアンズ・トリートメント、70年発表のアルバム。サヴァリン自身が、作曲・アレンジを担当し、さらにオリジナル・ストーリーも彼のペンによる物と推される。内容は、全編これ全て、ハモンドオルガンと女性ヴォーカルの独壇場である。部分的にはギター、フルートも聞かれるが、それはあくまで付加的存在にとどまっている。後の"Waiters on the Dance"が、あまりにも傑出している為、存在感の点で少々割を食っている様に感ずるが、グループの指向は本作において既に明確になっており、初期のブリティッシュ・ロックの中にあっては、かなり良質な作品である。派手なテクニックなど期待されては困るが、ブリティッシュ然としたオルガンワークが堪能できる一枚。（城）

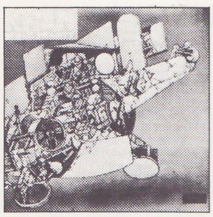


KESTREL
same title

CUBE　HIFLY 19 廃　1975年

Dave Black : g. vo.
John Cook : kbd. syn. mtn. vo.
David Whittaker : ds. per.
Fenwick Moir : b.
Tom Knowels : vo.
Pro : John Worth

Kestrel（チョウゲンボウ）と名乗る５人組は、75年にキューブ・レーベルから唯一のアルバムを発表している。プログレ・ファンにとってはメロトロンのクレジットが気になるところだが、そのポップな曲作りには驚かされる。軽快なリズムに乗った流れるような演奏が持ち味で、特にB-2などはカーステレオに最適!? 英国特有の香りを残しながらも妙にアカ抜けしたサウンドは若干重量感に欠けるが、それでもプログレ・ファンの人気を集めるのはポップなメロディーと異和感なく融合したメロトロンプレイ、従来の「泣かせ」のパターンから脱却したスマートな手法が支持されたためか。75年というプログレッシヴ・ロックの過渡期において次代を模索した作品とも考えられよう。（江）

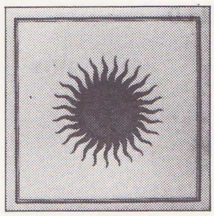


KHAN
Space Shanty

DERAM　SDLR 11 廃　キング　SL 288 廃　1972年

Steve Hillage : g. vo.
Nick Greenwood : b. vo.
Eric Peachey : ds.
Dave Stewart : kbd.
Pro : Neil Slaven

ユリエルを離れ、大学へ進学したスティーヴ・ヒレッジは、音楽が忘れられずカンタベリーに戻ると、71年４月、元クレイジー・ワールド・オヴ・アーサー・ブラウンのメンバーらとカーンを結成した。72年５月にこのアルバムを発表したが、録音ではキーボード奏者が脱け、代りに親友のデイヴ・スチュワートが全面的に参加している。曲によってはやや古めかしさを感じさせるものの、ロック寄りのカンタベリー・ミュージックの佳作となっている。当然ゴング色はまだない。録音後、エッグの解散に伴いデイヴ・スチュワートは正式メンバーになったが、72年10月にバンドは解散してしまつた。ヒレッジはケヴィン・エアーズのバックを経てフランスに渡り、ゴングで大活躍することになる。（坂）



KING CRIMSON
Lark's Tongues in Aspic

ISLAND　ILPS 9230 廃　W.パイオニア　P-8330A　1973年

Robert Fripp : g. mtn.
John Wetton : b. vo.
David Cross : vln.
Jamie Muir : perc.
Bill Bruford : ds. perc.

69年に衝撃的デビュー作「クリムゾン・キングの宮殿」を発表して以来、幾度かのメンバーチェンジを経て、74年の解散、７年後の81年再結成から現在に至るまで、ライヴとベストを含む計13枚のアルバムをリリースし、今尚、ロック界孤高の位置に君臨しているキング・クリムゾン。通算６枚目にあたる本アルバム「太陽と戦慄」は、初期の頃に見られた幻想・抒情的な面は後退し、潜在意識に及ぼす強烈な心理的インパクトを彷彿させる狂暴性と得体の知れないほろ苦い世界で満ちている。魔術的なフリップのギターとメロトロン、デヴィッド・クロスのヴァイオリン、ジェイミー・ミューアのパーカッション群が奏でる、金属質のヘヴィな旋律は、81年の「ディシプリン」へと見事に受け継がれていくのである。（大）

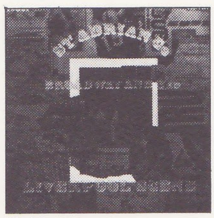


BASIL KIRCHIN
Worlds within Worlds

ISLAND　HELP 18 廃　1974年

Created and produced by Basil and Esther Kirchin.

バジル・カーチンの2nd。前作「A World Within Worlds《Columbia SCX 6463》71年」の続編である。ここではフリューゲル・ホーン、チェロ、オルガン等の通常楽器、昆中からフラミンゴ、ゴリラに至る各種動物の鳴き声、子供たちの遊び声、ジェット機及び波止場の騒音等を素材とし、それらを電気処理して組み合わせるといった実験的手法が用いられている。重くうねるようなミュージック・コンクレート・サウンドが主体であるが、時折現われる、フリップ&イーノを思わす部分、初期のグル・グル等のジャーマン・ロックに通じる部分、ジャズのフリー・インプロヴィゼイション風の部分等がこの作品をポップ・サイドに位置付けている。本作品以後のカーチンの動向は全く不明である。（賀）

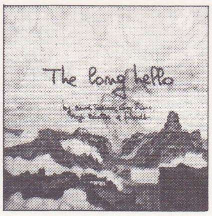


LIVERPOOL SCENE
St. Adrian Co. Broadway and 3rd

RCA　SF8100 廃　1970年

Adrian Henri : vo.　Mike Evans : vo. ts. ss.
Andy Roberts : vo. fl. g. vln. s-glockenspiel.
Percy Jones : b.　Pete Clarke : ds.
Ian Carr : tp. flugelhorn.　Karl Jenkins : oboe. b-s.
Pro : Sandy Robertson

リヴァプール・シーンは本4thアルバム以外に、「Incredible NewLiverpool Scene《CBS 63045》67年」「Amazing Adventures of《RCA SF7995》68年」「Bread on the Night《同 SF8057》69年」「Heirloon《同 SF8134》70年」の４枚、計５枚のＬＰを発表しているが、本作品はニュークリアスのイアン・カーらをゲストに迎えた異色作となっている。Ａ面はメンバーによるポップな演奏、カーらのジャズィな演奏、オーケストラによる演奏、電気処理したヴォイス等をヘンリのトーキング・ヴォーカルで繋いだ構成になっており、あたかもボンゾ・ドッグ・バンドを上品にしたかのようなユーモラスなサウンドを聴くことができる。一方、Ｂ面はよりトーキングに重点を置いたライヴとなっている。（賀）

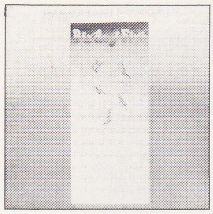


THE LONG HELLO
same title

UNITED ARTISTS (Italy) 1974年
UAS 29718 廃

David Jackson : s. fl. p.
Hugh Banton : org. p. b. el-g. ds.
Guy Evans : ds.
Pietro Messina : ac-g. el-g. p.
Ced Curtis : el-g. el-b.
Nik Potter : b.
Pro : Guy Evans

ヴァン・ダー・グラーフのメンバーの内、ピーター・ハミルを除く4人が中心となって製作したアルバムである。上のジャケット・カヴァーはイタリア盤のみのもので、イギリスでファン・クラブにより限定製作されたものは白ジャケットに通しナンバー入り。その後数回に渡り再発され、現在はシャンハイ・レーベルのものが入手可能である。このプロジェクトは後に断続的にレコードをリリースし、現在では4枚のロング・ハロー名義のアルバムがある。このアルバムのサウンドはアコースティック楽器を多用した牧歌的なもので、内省的な趣きのある好演奏である。2nd以降は多少現代的なスタイルをとり入れているが、本作を超える作品は未だでていない。（山）



MAHAVISHNU ORCHESTRA
Birds of Fire

CBS 65321 廃　CBSソニー SOPL175 廃

John McLaughlin : g.
Rick Laird : b.
Billy Cobham : ds. per.
Jan Hammer : kbd.
Jerry Goodman : vln.
Pro : Mahavishnu Orchestra

ジョン・マクラフリンが結成したマハヴィシュヌ・オーケストラの2nd。彼が参加した数多くの作品の中でも、前作「Inner Mounting Flame《CBS-64717》71年」と本作品は最もロック色が濃く出たものである。そして、本作品は彼の最高傑作の一つでもある。驚異的と呼ぶに相応しいコブハム（元ドリームス）の強烈かつ正確なドラムとレアード（元ブライアン・オーガー・グループ）のベースをバックに、マクラフリン、ハマー、グッドマン（元フロック）がインタープレイ、ユニゾン等による極めて緊張感に富んだスピーディかつメロディアスな演奏を展開している。翌年、ライヴ・アルバム「Between Nothingness & Eternity《同69046》」を発表してグループは解散、各メンバーは現在に至るまで各方面で活躍している。（賀）

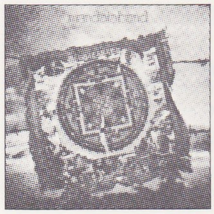


MAINHORSE
same title

POLYDOR 2383 049 廃　ポリドール MP2524 廃

Patrick Moraz : org. el-p. p. Klaviosynthesiser. vo.
Peter Lockett : g. vln. vo.
Jean Ristori : b. cello. vo.
Bryson Graham : ds. perc.

レフュジー、イエスを経てビッグ・ネームとなったパトリック・モラーツが無名時代に参加していたグループとして知られるメインホース。本アルバムは彼らの唯一の作品である。演奏の中心はモラーツとロケットであり、前者がプログレッシヴ・ロックとしての、そして、後者がハード・ロック部分の要となっている。モラーツはメロディアスかつクラシカルなプレイを展開するとともに、ハード・ロックとしての演奏や地味なバッキングも見事にこなしており、当時、既に彼が非凡なキーボード・プレイヤーであったことを痛感させる。他のメンバーもハード・ロック部分を中心に力の籠った演奏を展開しており、なかなかの力作と言える。なお、バンドは英国バレー団とともに来日している。（賀）



MANDALABAND
same title

CHRYSALIS CHR 1095 廃　キング CHY-1095 廃　1975年

David Durant : vo.
Ashley Mulford : g.
John Stimpson : b. g.
Tony Cresswell : ds.
Vic Emerson : kbd.

ロック・オーケストラの名がふさわしいマンダラバンド、75年発表の1-st。特にA面を費してのタイトル曲「曼陀羅組曲」は圧巻である。無気味な声の幕開けより、突如としてそれを引き裂くようにして壮大なロック・シンフォニーがはじまる。チベット語によるヴォーカルにははじめは馴染めない人もいようが、テクニカルなドラムに拍車をかけられながら、ときには優しく美しくときにはハードにキーボード群とギターのアンサンブルが登りつめていく展開のあとには、ちょっとした感動が残る。この作品発表後、サッド・カフェとリーダー格のデヴィッド・ロール率いる新たなプロジェクトに分裂し、後者は78年に「The Eye of Wendor」を発表。これには、美しいブックレットがついている。（山中）

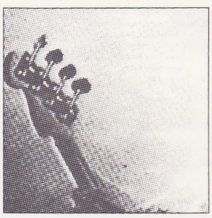


MANFRED MANN CHAPTER THREE
Volume Two

VERTIGO 6360012 廃　フォノグラム SFX-7267 廃　1970年

Mike Hugg : vo. p. el-p.
Craig Collinge : ds.
Clive Stevens : ss. ts.
Andy McCulloch : ds.
Manfred Mann : org.
Bernie Living : as.
Steve York : b.
Pro : Hugg, Mann, Hadfield

ブリティッシュ・ロック・シーンにおいて、62年頃から現在に至るまで20年以上も活動を続けてきたマンフレッド・マン。チャプター・スリーは、その名の示す通り、マン・ハグ・ブルース・バンド、マンフレッド・マンに続く彼の3番目のバンドである。グループは69年に結成され、同年、1stアルバム「Manfred Mann Chapter Three《Vertigo VO3》」を発表、翌年、ラスト・アルバムとなった本作品をリリースしている。そのサウンドはジャズ要素を巧みにロックと融合させた聴き易くかつロックとして完成度の高いものである。特にB-1の大曲「Happy Being Me」におけるハグとスティーヴンスのジャズィな演奏は最大の聴きものである。また、A-4ではクリムゾン加入以前のマックロックのプレイを聴くことができる。（賀）



PHIL MANZANERA
801 Live

ISLAND ILPS 9444 廃　ポリドール MPF 1101　1976年

Phil Manzanera : g. vo.
Brian Eno : kbd. vo.
Lloyd Watson : g.
Francis Monkman : kbd.
Bill Maccormick : b.
Simon Phillips : ds.

ロキシー・ミュージックが活動を中止していた76年、そのメンバー、フィル・マンザネラは実験的なプロジェクト、801でライヴを行ったが、これはその際の録音である。メンバーは彼の古巣で75年に唯一の作品「Mainstream」を残したクワイエット・サンの旧友達に当時転換期にあったイーノ等を迎えたもの。両者の代表曲を中心にロキシーでのコマーシャルな活動に対する彼の陰の部分、クワイエット・サンの音楽性が打ち出されている。曲はコンセプトにある実験性と切れの鋭いきめの細やかな演奏で平静さと原曲をしのぐ緊迫感を伴う。又ラテン系の血を引く彼の色濃いギター、イーノの効果音の様なシンセ等によるテクニカルで時として陰うつなサウンドからは、両者の知性がほとばしる様な知的な響きが感じられる。（昌）



MARILLION
Misplaced Childhood

EMI Mrl-2 '85

Fish : vo, Mark Kelly : key
Pete Trewavas :b, Steve Rothery : g
Ian Mosley : Per

所謂ポンプ・ロックの旗手として着実な活動を続け、イギリスではビッグ・ネームになってしまったマリリオン。アメリカ進出を狙いながらも、そちらはシングルのみで、アルバムではプログレ・スタイルを保っているのは、今時好感が持てるメジャー・バンドである。本作は彼らの４枚目。今までのアルバムでは各曲の出来具合の差が大きく、アルバム１枚を聞かせるには無理があったが、本作ではあえて両面切れ目なしのトータル・アルバムに挑戦しつつ、この問題をクリアしている。ゲイブリエル・スタイルをとるフィッシュ以外は、これといったフロント・プレーヤーこそいないが、40分以上にわたるこの演奏をそのまま再現した日本公演で、彼らの実力もまんざらではないことがわかったと思う。〔飯〕



MARSUPILAMI
Arena

TRANSATLANTIC 1971年
TRA 230 廃

Fred Hasson : vo. perc.
Dave Loverock : g.
Leary Hasson : kbd.
Mike Fouracre : ds.
Ricky Hicks : b.
Jessica-Stanley Clarke : fl.
Mandy Riedebanch : s. fl.
Pro : Peter Bardens

一部には「オランダのグループ」という説もあるマースピラミの2nd。前作「マースピラミ(Transatlantic TRA213)70年」も迫力に富んだ、当時としては完成度の高い作品であったが、本作は明らかにそれを淩いでいる。ローマ時代をテーマとしたトータル・アルバムであり、起伏の多いドラマチックな構成になっている。インスト中心に曲が展開しており、メロディアスなフルート、ハードなギター、ややジャズィなピアノ等が次々に前面に登場し、ある時は力強く、そしてある時は優しく、素晴らしいソロを繰り広げる。そのなめらかな演奏は聴く者を徐々に彼らの世界に引き込んでいく。知名度は低いものの、当時のプログレッシヴ・ロックを代表する傑作である。（賀）



MATCHING MOLE
same title

CBS 64850 廃 CBSソニー ECPL 45 廃 1972年

Robert Wyatt : mtn. p. ds. vo.
David Sinclair : p. org.
Phil Miller : g.
Bill MacCormick : b.
Dave McRae : el-p.
Pro : Matching Mole

今なおロック界の良心として意欲的活動を続けるロバート・ワイアット。その支持者は後を断つことがない。その彼が、71年ソフト・マシーンを脱退後、このM.モウルを結成した。本作は72年に発表された最初のアルバムである。美しいヴォーカル曲からフリー・インプロヴィゼーションまで、実にバラエティに富んだ内容で、持ち前の柔軟な音楽性がいかんなく発揮されている。また、73年には、イーノがゲスト参加、ロバート・フリップがプロデュースの「Matching Mole's little Red Record」を発表。その後の活躍が大いに期待されたが、同年末あえなく解散してしまった。しかし、M.モウルの遺志はR.ワイアットのソロ活動やハットフィールズ等によって新たな展開をみることとなる。（松）



McCDNALD & GILES
same title

ISLAND ILPS 9126 廃 W.パイオニア P-8034A 廃 1970年

Ian McCdnald : g. p. org. s. fl. cl. vo.
Michael Giles : ds. perc. vo.
Peter Giles : b.
Steve Winwood : org. p.
Michael Blakesley : tb.
Pro : McCdnald & Giles

69年末クリムゾンを脱退した両者による唯一の作品。この作品はイアン・マクドナルドのジャズ、バラード、ロックンロールといった幅広い音楽への関心が、マイケルの癖のあるドラミングに支えられてより個人的なレベルで打ち出されたものと言える。フルートやメロトロンの使用法は初期クリムゾンの流れをくむものだが、管楽器やアコースティックな音色がより好まれて用いられている。クリムゾンの「ケイデンスとカスケイド」とその原曲A-2「アイビスの飛行」の大らかさのある簡素なアレンジとの比較からも窺えるように、彼等のめざしたサウンドの根底には愛によってはぐくまれた様な物憂げで暖かなものが流れている。クリムゾンとの決定的な差違である。ジャケットが全てを語っていたのかもしれない。（昌）



MELLOW CANDLE
Seaddling Songs

DERAM 1972年
SDL-7 廃

Alison Williams : vo.
Clodagh Simonds : vo. perc.
David Williams : g. vo.
Frank Boylan : b.
William A Murray : perc.
Pro : David Hitchcock

メロウ・キャンドル――特異な地平に位置する、女性ヴォーカルを中心としたユニットである。彼等の音楽性はポップスとトラディッショナル・フォークの中間に位置し、アレンジの細部にはクラシック＝シリアス・ミュージックからのアイディアも随所にちりばめられている。イメージ的にはスパイロ・ジャイラの3rdアルバム、チュダー・ロッジのアルバムあたりと近い地平にある。ベースとギター以外は全て生楽器によって演奏されている。一聴するとトラッド・グループのような印象があるが、一概にそうも呼べない様々な音楽からの影響をうかがい知ることができる。女性ヴォーカルのタイプはルネサンスのアニー・ハスラムをよりフォークっぽくしたような印象である。この手のサウンドとしては最高の部類に属する。（山）



MOGUL THRASH
Same title

RCA
SF 8156 '71 廃

JAMES LITHERLAND- G
JOHN WETTON- B
BILL HARRISON- D
ROGER BALL- SAX
MAL DUNCAN- SAX
MIKE ROSEN- TP
PRO: BRIAN AUGER

COLOSSEUM のオリジナル VO ＆ ギターの JAMES LITHERLAND が69年に５人で結成、後に華々しい道を歩むことになる JOHN WETTON の在籍で知られるグループ。70年に BRIAN AUGER のプロデュースで発表された唯一のアルバムは、良く歌うベースとドラムスのリズム・セクションにブルージーな VO を配した典型的なブリテッシュ・ジャズ・ロックの作品である。特にサックスをメインとした分厚いブラス・セクションの金属光沢には COLOSSEUM を、長く続くファズ・ギターのインプロには CREAM 的な色彩を濃く感じ取ることができ、ただのコレクターズ・アイテムですますには惜しい力強さを持っている。なお、BRIAN も一曲ピアノで参加している。WETTONはFAMILY へ他の３人は AVERAGE WHITE BAND に散った。〔OM〕

MOODY BLUES



Every Good Boy Deserves Favour

THRESHOLD キング THL3 廃 1971年
THS 5 ポリドール L20P 1022

Mike Pinder: kbd. vo.
Graeme Edge: dr.
Ray Thomas: fl. s. vo.
Justin Hayward: g. vo.
John Lodge: b. vo.

ムーディー・ブルースの根底にあるテーマは〝愛と平和〞である。それが当時のウエスト・コーストあたりのグループの発言が言わばジャンキーが勢いだけで言ってるかのように見えるのに対して、ムーディーズの視点は生活レベルからのものであったのが特徴と言える。世界創造をテーマにした本作にもその考え方は滲み出ているはずだし、この次の9作目「Seventh Sojourn(72)」で歌われている〝音楽で世界を変える事は出来ないが、それでも愛を世界中で歌い続ける事は出来るんだ〞という骨の強さを我々は評価すべきだろう。80年に元祖メロトロンとも言うべきピンダトロンを操るM.ピンダーが脱退、パトリック・モラーツを後任に加えて活動を続けている。 (千)

MICHAEL MOORCOCK & DEEP FIX



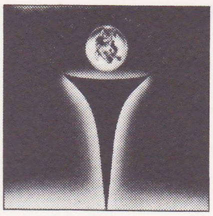
The New Worlds Fair

UNITED ARTISTS 1975年
UAG 29732 廃

Michael Moorcock: g. mln. vo. lyrics.
Steve Gilmore: g. vo. lyrics.
Graham Charnock: g. vo. lyrics.
Simon House: arr. vln. p. mtn.
Simon King: ds. perc. Alan Powel: ds. perc.
Snowy White: g. Kuma Harada: b.
Pete Pavli: cel. Dave Brock: g.
Pro: Steve Gilmore

M.ムアコックは本誌でも著名なイギリスのSF作家。最近は我国でも翻訳が多数出版され始めたのでご存じの方も多かろう。これ以前から彼のレコードが出るという噂はあったのだが、発表は結局75年になった。シャレたポップな曲調とS.ハウスの編曲――ストリング・セクションの多用を特徴とする――は聴いていて楽しい。ホークウインドとM.ムアコックの関係は本誌バック・ナンバーに詳しい。ムアコックは最近もP.パブリと共にDEEP FIXを続けており、「Hawkwind & Relations Vol.1 & 2」にも収録されている。無論、SF作家としての活動も続けており、話題作〝グロリアーナ〞が日本で紹介されるのも時間の問題であろう。 (千)

PATRICK MORAZ



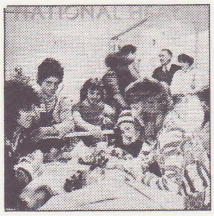
i

CHARISMA フォノグラム 1975年
CDS 4002 廃 RJ-7156 廃

Patrick Moraz: kbd. vo. perc.
John McBurnie: vo. Vivienne McAuliffe: vo.
Ray Gomez: g. Jef Berlin: b.
Alphonse Mouzon: ds. Andy Newmark: ds.
The Percussionists of Rio De Janeiro etc.
Pro: Patrick Moraz

スイス出身のキーボード・プレイヤー、パトリック・モラーツがイエス在籍時代に制作した1stソロ・アルバムである。彼は自分の「The Story of i」をもとに、自ら作曲・アレンジ・指揮・プロデュースまでこなしている。彼の卓出したキーボード・ワークもさることながら、アレンジャーとしても評価したい。ブラジルのパーカッショニスト達が参加しているが、その赤熱の音塊もエレクトロニック・サウンドとともに蒼穹にはめ込まれている。同様の布陣で2nd「Out in the Sun」3rd「Patrick Moraz」、また79年11月のテレビでのライヴより4th「Future Memories」を発表。81年ムーディ・ブルース参加後、ビル・ブラッフォードとの「Music for Piano and Drums」、そして5th「Time Cord《LMGLP6000》」をリリース。 (中)

NATIONAL HEALTH



same title

AFFINITY RVC RPL-3003 廃 1978年
AFF 6 廃 キング K22P-353

Dave Stewart: org. p. el-p.
Phil Miller: g. Neil Murray: b.
Pip Pyle: ds. perc. John Mitchell: perc.
Alan Gowen: syn. el-p. Amanda Persons: vo.
Jimmy Hastings: fl.
Pro: National Health

75年頃、元ハットフィールズのメンバーを中心に、元ギルガメッシュのアラン・ゴウエン、元エッグのモント・キャンベル、ビル・ブラッフォード等により活動を開始したナショナル・ヘルスはメンバー・チェンジを繰り返した後、77年に本作を完成した。ハットフィールズをよりジャズ的に発展させた内容で、ジャズ・ロック史上最高作の一枚である。78年には、ジョン・グリーヴス(元ヘンリー・カウ)が加入した第2作「Of Queues and Cures」で、より緻密な演奏を聞かせてくれた。その後、活動停止状態となり、82年にN.ヘルス名義で「D.S.Al Coda」(81年5月17日に急逝したA.ゴウエンの追悼盤的作品)が発表されただけで、各メンバーは地味ながらも独自の活動を行なっている。 (松)

THE NEUTRONS



Tales From the Blue Cocoons

UNITED ARTISTS UAG29726 廃 1974年

Will Youatt: g. b. vo.
Martin Wallace: g. vo.
Phil Ryan: kbd.
Stuart Holliday: ds.
Caromay Dixson: vo.
Toff Williams: g. b. etc.
Pro: David Charles, The Neutrons

アイズ・オヴ・ブルー、ビッグ・スリープ、マンの流れをくみ、ジェントル・ジャイアントのジョン・ウェザースが在籍(1stアルバム「Black Hole Star《United Artists UAS 29652》74年」に参加)したことでも知られるニュートロンズの2nd。収録された8曲はいずれもそれほど凝った作りではないが展開に無理がなく聴き易い作品と言える。音の傾向としては、女性ヴォーカリストを含むコーラス等によるヴォーカル主体の部分とインスト部分に二分される。前者もさわやかな印象を与えるが、やはり、聴き所は後者であろう。そこではライアンのキーボードを中心としたメロディアスな演奏が展開されている。それは決して技巧的とは言えないが、歌心溢れるセンスあるものである。本作発表後グループは解散した。 (賀)

TOM NEWMAN



Faerie Symphony

DECCA 1977年
TXS 123 廃

Tom Newman: glockenspiel. mtn. g. etc.
Jon Field: fl. etc.
Tom Nordon: g.
John Collins: vln.
& many more musicians
Pro: Tom Newman

ヴァージン・レコードのスタジオ、「マナー」のチーフ・エンジニアーであったトム・ニューマン。あの名作チューブラー・ベルズも彼の手腕に依るところが大きい。彼はソロ・アルバムを2枚制作しており、本作はその2ndである。(1st;ファイン・オールド・トムーVirgin V2022) 1stはポップな作品で、当時のヴァージンのイメージとは多少異なるものであった。本作品は1stとは大きく異なり、マイク・オールドフィールドとジェイド・ウォリアーをブレンドしたようなミステリアスで美しいプログレッシヴに仕上がっており、比類なきジャケットと相まって多くのファンに愛聴されている。68年にグループ・ジュライで活動を共にしていたジェイド・ウォリアーのジョン・フィールドのバックアップも絶妙である。 (山)

Mar
|
Ne



THE NICE
same title

IMMEDIATE　東芝　1969年
IMSP026 廃　IP 8839 廃

Keith Emerson : kbd.
Lee Jackson : b. vo.
Drian Davison : ds.

Pro : The Nice

「Thoughts of Emerist Davjack《Immediate IMSP 016》67年」「Ars Longa Vita Brevis《同IMSP020》68年」に続くナイスの3rd。バンドの絶頂期にリリースされた彼らの最高作である。A面がスタジオ録音、B面がフィルモア・イーストでのライヴという構成になっており、A面では、エマーソンがピアノ、オルガンを見事に使い分け端正なソロを展開する。そのクラシカルな、そして、ジャズィな演奏は彼がロック・キーボードのイノヴェーターであり、ヴァーチュオウゾであることを実証する素晴らしいものである。一方、B面ではオルガンによるワイルドかつエキサイティングなプレイを聴くことができる。他の2人のメンバーの熱演も印象的である。以後、カリスマ・レーベルに移籍、2枚のLPを発表して解散する。　(賀)



NIRVANA
Local Anaesthetic

VERTIGO 6360 031 '71 廃

A : MODUS OPERANDI　B : HOME

実験的な作品を多数70年代初期に残すニアヴァーナの中で、美しいキーフによるジャケットの成せる業か、一番ポピュラーな作品である。ジェイド・ウォリアーのメンバーやメル・コリンズ等が参加しており、泥くさいセッション的な作品といえよう。ブリティッシュ・アンダーグラウンド・シーンで無気味にアルバムをリリースし続けたこのグループの意図するものは一体何だったのであろう。サイケデリックから構築的なプログレッシヴ・ロックへと移行するこの時期に、たえず意識的に横道へとベクトルをはぐらかし続けたような印象を受けるニアヴァーナ。オーヴァー・グラウンドへと浮上することなしに流れた彼等の時間の意味は大いなる謎である。　(山)



NUCLEUS
Erastic Rock

VERTIGO　フォノグラム　1970年
6360 008 廃　SFX 7259 廃

Ian Carr : tp. flugelhorn.
Karl Jenkins : bs. oboe. p. el-p.
Brian Smith : ts. ss. fl.
Chris Spedding : g.
Jeff Clyne : ac-b. el-b.
John Marshall : ds. perc.

ドン・レンデルとの双頭コンボ、レンデル＝カー・クインテットを解散したイアン・カーは、69年10月、ニュークリアスを結成する。本作品は翌70年に発表された彼らの1st アルバムである。そのサウンドは、当時、大きな盛り上がりを見せていたニュー・ロック・ムーヴメントの影響を受けており、正統的モダン・ジャズにロックの要素を取り入れたものとなっている。各メンバーはいずれもかなりのテクニシャンであるが、中でも、ジャズ色の濃いカーのクールなトランペット、小気味良いロック・ビートを叩き出すマーシャルのドラム、当時としては一風変わったジェンキンスのオーボエ等が印象に残る。本作以後もヴァーティゴ、キャピトル等のレーベルから数多くの作品を発表している。　(賀)



OVARY LODGE
same title

RCA　1973年
SF 8372 廃

Keith Tippett : p. syn.
Roy Babbington : b.
Frank Perry : perc.

Pro : Robert Fripp

オヴァリー・ロッジの 1st 。72年にキース・ティペット名義で発表された「ブルー・プリント(RCA SF8290)」の続編とも言うべき作品である。同アルバムに参加した3人のメンバーに加えて、プロデュースも引き続きロバート・フリップが担当している。収録された全ての曲がインプロヴィゼイションによるものであり、トリオ、デュオ、ソロの3形態から成る演奏が展開されている。フリー・フォームなものが主体となっているが、一部を除き、音数が少なく、その感情表現の繊細さは見事としか言いようがない。演奏にグループとしての統一性があり、それが本作品をより聴き易いものにしている。76年にはオヴァリー・ロッジとしての第2弾「オヴァリー・ロッジ(Ogun OG600)」をリリースしている。　(賀)



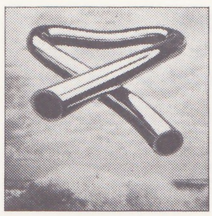
ANN ODELL
A Little Taste

DJM　1973年
DJLPS 434 廃

Ann Odell : kbd. vo.
Ray Cooper : perc.
John Gustafson : b.
Richard Taylor : rec.
Bruce Rowlands : ds. perc.
Ray Fenwick : g.
Christopher Neal : harp.
Madeline Bell, Liza Strike, Doris Troy : vo.

Arr. & Pro : Ann Odell

レイ・ラッセルと共に「ショパン」の中心人物であったアン・オデルは、73年、強力なバック・ミュージシャンに支えられて本アルバムを発表した。全ての曲で自らキーボードを演奏し、作詩・作曲はもちろん、アレンジからプロデュースにいたるまで一人でこなすという才女ぶりを発揮している。アルバム全体の印象はそのキュートな顔立ちから想像される暖かくやさしいものとなっており、ポップで美しい仕上りである。典型的プログレッシヴ・ロックではないが、聞く者に安らぎを与えてくれる作品と言える。特にA-6はピアノの弾き語りであり、彼女の歌からは愛が感じられる。又、オーケストラの効果的導入が印象的である。　(青)



MIKE OLDFIED
Tubular Bells

VIRGIN　コロムビアYQ-7005 廃　1973年
V2001　ビクター VIP-4146 廃

Mike Oldfield : g. b. kbd. mln. p. org. tubular bells.
Sally Oldfield : vo.
Steve Broughton : ds.
Lindsay Cooper : oboe.
Mundy Ellis : vo.
Jon Field : fl.
Viv Stanshall : vo.

依然ヴァージンの最主要アーティストとして活躍中のM.オールドフィールドは、68年に姉のサリーと結成したフォーク・デュオ、サリアンジーでレコード・デビューしている(当時14才) K.エアーズ・ホール・ワールドへの参加を主軸にカンタベリー・ファミリーとの交流を深めたが、彼の天才が開花するのは言うまでもなくこの 1st を含む初期3部作でのことだ。幾多の楽器による織物にも似た彼の音楽がもたらす精神的昂揚は当時のロック界には例がなかっただけに、コンテンポラリー・ミュージックの金字塔として絶賛に値するものである。しかし「エクソシスト」の成功にもみられるように、幾らかの誤解がつきまとうのがユーロ・ロックの宿命であるようだ。他に雄大な叙事詩「呪文」も忘れることはできない。　(古)



PALLAS
The Sentinel

Harvest Sp 8402 GL '84

Euan Lowson : vo
Ranrie Brown : Key
Derek Forman : ds
Graeme Murray : B
Niall Mathwson : g

大変美しいジャケットに飾られたパラスのセカンド・アルバム。基本的にはギターを中心としたハードな展開に、美しいキーボードによる味付けという構成は、所謂時代の風の音だ。そう言った意味では完成度は非常に高いが、果たして多くのプログレ・ファンにアピールするかというと、やや疑問である。それはA－1、2等の短い曲は明らかにシングル・ヒットを狙ったものでありハード・ロックの域を出ていないからだ。しかしA－3のような大曲にはイエスを思い起こさせるようなアレンジが施され、キーボードの洪水には誰もがハッとさせられるだろう。こういった面を大切にして欲しかったのだが、その後はアメリカを意識した普通のロックになってしまい、非常に残念な限りだ。〔飯〕



PATTO
Hold Your Fire

VERTIGO 6360 032 廃　1971年

Mike Patto : vo.
Olly Halsall : g. org. vib. p. vo.
Clive Griffith : b. vo.
John Halsey : ds.
Pro : Muff Winwood

今は亡きマイク・パトゥーと、中期ケヴィン・エアーズの良き協力者でもあったオリー・ハルソールの双頭グループ、パトゥーは3枚のアルバムを発表した。1st「Patto (Vertigo 6360-018)」は典型的なブリティッシュ・ハード。3rd「Roll'em Smoke...(Island ILPS 9210)」は一風変わったコミカルな作品。そしてこの2ndでは、M.パトゥーの熱唱とそれとはおかまいなしにジャズ・ギター（テンペストの2枚でアラン・ホールズワースと聴き比べるのも面白いと思う）をかき鳴らすハルソールとのコントラストがかつてない味を醸し出すという、ブリティッシュの王道をゆく重厚な内容。カヴァー・ワークも、ロジャー・ディーンの知られざる名作といえるであろう。（森）

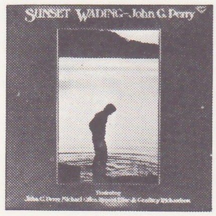


PENDRAGON
Fly High Fall Far

ELUSIVE ARRMP 001 '84

RETER GEE : B.G
RIK CARTER : KEY
NIGEL HARRIS : DS
NICK BARRET : VO, G

ブリティッシュ・ポンプロックにおいて、イエスやキャメルが持っていた70年代全盛期の熱いスピリッツを受け継いで実践に移したペンドラゴン。現在まで、デビュー直前に製作したテープによるデモ作品を含めて、ミニLPとライヴアルバム合わせて4作品発表している。音的には前述の2グループから強い影響を受けながらも、典型的なブリティッシュナイズされたプログレ＆ハードタイプの白熱した演奏を聴かせてくれる。本作品は1stの4曲入りのミニLPで初々しさと若々しい躍動感に満ちたナンバーが聴かれる。形式にこだわり過ぎている面も見られるが、商業ベースながらも自己の姿勢をかたくなに保持している点で大いに評価したいものだ。2ndの「The Jewel」も本作品の延長線上、白熱の演奏が聴ける。〔大〕



JOHN G. PERRY
Sunset Wading

DECCA SKL 5233 廃　キング K22P-118　1976年

John G. Perry : b. vo. p.
Michael Giles : ds.
Morris Pert : perc.
Corrado Rustici : g.
Rupert Hine : el-p. hhpd. syn.
Geoffrey Richardson : vla. fl.
Elio D'anna : s. fl.
Roger Glover : syn.
Simon Jeffs : koto. arr & conductor of string quartet
Pro : Rupert Hine

グレープフルーツ、トランキュリティ、キャラヴァン、そしてグリンゴとジョン・G・ペリーは数多くのグループに参加した、長いキャリアを誇るベーシストである。カーヴド・エア脱退後に本アルバムをルパート・ハインのプロデュースにより制作する。彼はもとよりバックの演奏もすばらしく、正にタイトルに象徴された夕焼けのごとく美しくも淡い音楽である。全体としての印象は、各自の個性あるインプロヴィゼーションが溶けあったジャージーなプログレタイプの作品と言える。中でも初期キング・クリムゾンのドラマー、マイケル・ジャイルズの飛ぶ様なドラミングが光る。なお、彼は本アルバム発表後、クォンタム・ジャンプを結成している。

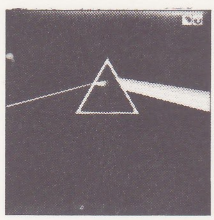


ANTHONY PHILLIPS
The Geese & The Ghost

HIT & RUN MUSIC HIT 001 廃　フォノグラム RJ-7241 廃　1977年

Anthony Phillips : g. b. syn. mtn. p. org. ds. perc.
Michael Rutherford : g. b. org. ds. perc.
Phil Collins : vo.
Rob Phillips : oboe
Lazo Momulovich : oboe.
John Hackett : fl.
Wil Sleath : fl. rec. piccolo.
and many more musicians.
Pro : Simon Hayworth, M. Rutherford, A. Phillips

「創世紀」「侵入」を残しジェネシスを去ったアンソニーは、音楽の研究に没頭する。そして6年もの歳月を経て本作を完成させた。初期ジェネシス特有の繊細で童話のようなロマンあふれる世界を、よりいっそう深めた作風は、いかにも夢想家の彼らしい。以後順調にアルバムを発表しているが中でも「Private Parts & Pieces」と称された6枚の作品の魅力こそ、彼の本質であろう。ほとんどがアコースティック・ギターだけでの演奏で、その素朴な調べには彼のいじらしいまでの純粋さが感じられ、実に心温まる思いがする。他に「Wise after the Event」「Sides」「1984」「Anthony Phillips Band」があるが、次第に彼らしさが薄れてポップになっている。コンポーザーとしての可能性を追求した結果だとは思うが…。（松）



PINK FLOYD
The Dark Side of The Moon

HARVEST SHVL 804　東芝EMI EMS-80324 EMLF-97002 EOP-80778　1973年

David Gilmour : vo. g. syn.
Roger Waters : vo. b. syn. effects
Richard Wright : vo. org. syn. p. el-p.
Nick Mason : ds. perc. effects.
Dick Parry : s.
Eng : Alan Parsons　Pro : Pink Floyd.

プログレ最盛期に最も商業的に成功したアルバムであり、現在もアメリカにおいてチャートの200位以内に時々ランクされる。アレンジ、スタジオ・ワークにおいては他の追従を許さず、時代に流されない音楽を創造してきた彼らが、69年の実験的レコード「Ummaguma」、オーケストラを使用した「Atom Heart Mother」、そして広がりのある音宇宙「Meddle」の長所を融合させ作り出したのが本アルバムである。「Wish You were Here (75)」「Animals (77)」で本作を最初とする三部作を終了、以後ウォーターズ以外のメンバーのソロ・アルバムがリリースされる。79年ウォーターズの一大コンセプトの下に「The Wall」を発表し、ロックにおける究極的な音世界を創造した。更に83年には続編「The Final Cut」を発表している。（青）

Ni
|
Pi

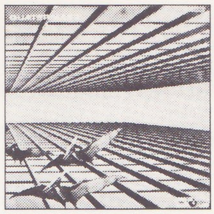


PROCOL HARUM
Grand Hotel

CHRYSALIS CHR-1037 廃　KING CHR-1037 廃　1973年

Gary Brooker:vo.p.
Alan Cartwright:b.
B.J.Wilson:ds.mln.
Mick Grabham:g.
Chris Copping:org.
Keith Reid:lyrics.
Pro:Chris Thomas

今も昔もプロコル・ハルムと云えばあの大名曲「青い影」の印象があまりにも強い。確かにRegal Zonophone時代前期にあっては、マシュー・フィッシャーの流麗なオルガンと大規模なオーケストレーションの導入一辺倒、その後期とChrysalisに移ってからは、ロビン・トロワーのハードなギターを売り物にするも転身には中途半端であった。ところがクリス・トーマスによる本アルバムではスウィングル合唱団とストリングスの登場が絶妙で、ヘヴィーなプロコルズとの絡みが実にスリリングな好結果を生んでしまったのだ。特にA-1、B-4などでののけぞる大叙情は、クラシカル・ロックという言葉が何の意味も持たないことを示してあまりある。続く「Exotic Birds & Fruit」(CHR-1058)も良い出来。(森)

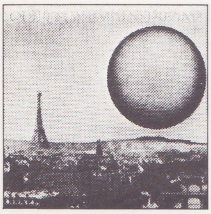


QUATERMASS
same title

HARVEST SHVL 775 廃　東芝 OP 80085 廃　1970年

John Gustafson:b.vo.
Pete Robinson:kad kbd.
Mick Underwood:ds.

69年末から70年代初頭にかけてのブリティッシュ・ロック・シーンにおいて、オーバーグラウンドな存在だったナイスを別格とすれば、エッグとともに最も優れたキーボード・トリオがクォターマスである。本アルバムは31人からなるストリングス・セクションを導入するなど、数々の意欲的な試みがなされた彼らの唯一の作品である。ヴォーカルを前面に押し出した典型的ハード・ロックと当時のロック・シーンにおけるメインストリームの一つであったブルース・ロックを主体に、ロビンソンのややクラシカルなキーボード(p,org)と、ポール・バックマスターを含むストリングス・セクション(vln,vla,cello,double-b)によるドラマチックな演奏が効果的に挿入されている。また、ヒプノシスによるジャケも秀逸である。(賀)



QUIET SUN
Mainstream

HELP 19　ポリドール MPF 1147 廃　1975年

Charles Hayward:ds.
Dave Jarrett:kbd.
Phil Manzanera:g.
Bill MacCormick:b.
Eno:syn.effects.
Pro:Quiet Sun

クワイエット・サンは60年代後期から72年まで活動を続けたグループである。解散から3年後、フィル・マンザネラがソロ・アルバム、「ダイアモンド・ヘッド」を制作するにあたり、彼等の遺産を世に伝えるべく、一時的に再編成しスタジオの控き時間を彼等の録音に提供した。当時としては画期的な24トラック・マシーンを使用しての本アルバムは皮肉なことに「ダイアモンド・ヘッド」よりもはるかに完成度の高いものになった。カンタベリー系の実験的な作風の中にメロディアスな要素を加味した名作で、サウンド構成も緻密である。後にドラムスのチャールズはディス・ヒートを結成し、リズムをテーマにした良作を発表したことは広く知られているが、そのルーツは明らかに本作品の中に横たわっている。(山)



THE QUIET WORLD
The Road

DAWN DNLS3007 廃　コロムビア YS2568 廃　1970年

Lea Heather:comp.
Neil Heather:comp.
Eddy Hines:fl.s.
Dick Driver:b.
John Hackett:ac-g.
John Schroeder:Pro.
John Heather:ac-g.vo.comp.
Sean O'Malley:ds
Steve Hackett:g.
Phil Henderson:p.tp.org.rec.
Gill Gilbert:vo.

クワイエット・ワールド・オヴ・リー&ジョンとして1枚のシングルを発表した後にリリースされたクワイエット・ワールドの唯一のアルバムである。70年という制作年度を考えると、極めて斬新かつプログレッシヴな作品と言える。一部ジャズィな箇所もあるが、大部分でクラシカルかつメロディアスな演奏が展開されている。オーケストラの使い方が非常に効果的であり、彼らのプレイを見事に盛り上げている。また、コーラス等を用いたヴォーカル重視の音作りも特色の一つである。「ザ・ロード」というアルバム・タイトル及び胎児と老人を描いたジャケットからも分かるように、人生をテーマとしたトータル作品である。更に、本作はスティーヴ・ハケットのファースト・レコーディングとしても有名である。(賀)

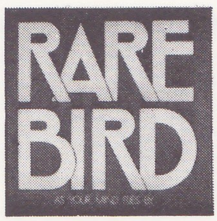


RAMASES
Glass Top Coffin

VERTIGO 6360 115 廃　1975年

Ramases:vo.
Roger Harrison:ds.
Eddie Lester Chorale:vo.
Barry Kirsch:kbd.
Jo Romero:g.
Pete Kingsman:b.
Kay Garner:vo.
Sel:vo.
Bob Bertles:s.
Colin Thurston:b.
Sunny Leslie:vo.
Sue Glorer:vo.

ラマセスとその妻セルという謎のアーティストによって2枚のアルバムが制作された。1st「Space Hymns(VERTIGO)6360 046)」は10cc(ホットレッグス解散後10cc結成の間に制作。)のメンバーの全面的なバックアップを得て71年にヴァーティゴ・レーベルよりリリースされた。スペイシーな感覚と宗教的ムードをたたえた好盤で、ロジャー・ディーンによる6面開きのジャケットも話題になった。本作は2ndで、バックは新たなセッションマン達に委ねオーケストラをフィーチャーして創られたものである。エキゾチックなムードのラマセスのヴォーカルとオーケストラのからみが見事でドラッグ・ミュージック的な印象も強い。ジャケットも前作同様印象的なもので水平線の上を飛ぶ不気味なフェニックスを描いた内ジャケットは一見の価値がある。(山)



RARE BIRD
As Your Mind Flies By

CHARISMA CAS 1011 廃　日本フォノグラム RJ7257 廃　1970年

Graham Field:org.kbd.
David Kaffinetti:el-p.kbd.
Steve ould:vo.b.
Mark Ashton:ds.perc.
Pro:Rare Bird

「レア・バード(Charisma CAS1005)69年」に続くレア・バードの2nd。A面には1stの延長線上に位置する、ヴォーカルとオルガン(一部ハープシコード)を中心とした、ややクラシカルな作品が4曲収められている。一方、B面は「フライト」と題された組曲になっており、彼らの最高傑作と呼ぶに相応しい大作である。作品全体の構成はシンプルであるが、4人のメンバーによるバランスのとれた演奏はメロディアスかつ印象的である。更に、エマージェンシィ・クワイヤによる混声合唱が効果的に用いられており曲を見事に盛り上げている。70年代初期のブリティッシュ・シンフォニック・ロックを代表する一枚である。以後もメンバー・チェンジを重ね、3枚のLPを発表したが、初期の2枚を凌ぐには至らなかった。(賀)



RAW MATERIAL
same title

EVOLUTION Z1006 廃　1970年

Mick Fletcher : s. vo. fl. harp.
Colin Catt : kbd. vo.
Phil Gunn : b.
Paul Young : perc.
Dave Green : g.
Pro : Ed Welch

71年に発表された「Time Is」(NEON : NE-8)は、サックスを採り入れたヴァン・ダー風の演奏、シンセサイザーの大巾な使用によってプログレ・ファンからも好評を得ているらしいのだが、それ以前にもう一枚アルバムを録音している。当時、新興のエヴォリューション・レーベルにあって、アーザチェルに次ぐ本格的ロック・グループのデビューとなったわけだが、60年代型ブリティッシュ・サウンドがいまだ生き残って、混沌とした中にブリティッシュ・ロックが蘇生しつつあった69年の状況をみると、実にフッきれて、ハモンドとヴァイヴの音色が魅力的な落ち着いた内容。語りとメロトロンだけで構成された終曲「Destruction of America」に、一つの時代に訣別を告げる彼らのメッセージを読みとることができる。（森）

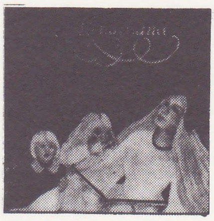


REFUGEE
same title

CHARISMA CAS 1087 廃　日本フォノグラム BT 5200 廃　1974年

Patrick Moraz : kbd. vo.
Brian Davison : ds. perc.
Lee Jackson : b. g. cello. vo.
Pro : John Burns & Refugee

ナイス解散後、ジャクソン・ハイツ、ブライアン・デヴィソンズ・エヴリフィッチ・ウェイをそれぞれ率いた、ジャクソン、デヴィソンが約４年ぶりに再会、新たにモラーツ（元メインホース）を迎えて結成したレフュジーの唯一の作品である。オルガン、ピアノ、シンセ等を豪快に弾き捲るモラーツのテクニックは素晴らしく聴く者を圧倒する。他の２人も中々の力演であるが、やはり聴き所はモラーツのキーボード・プレイであろう。エマーソンの影響を感じさせる部分もないことはないが、クラシックやジャズの要素を巧みに取り入れた独自の演奏スタイルを持っており、早弾きを中心に緩やかなプレイも効果的に挿入している。本作発表後、モラーツはイエスに加入、グループは解散する。（賀）

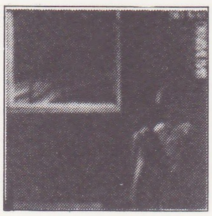


RENAISSANCE
Novella

W. BROS. K50422　1977年

Annie Haslam : vo.
Mike Dunford : g. vo.
Jon Camp : vo. b. g.
John Tout : kbd. vo.
Terence Sullivan : ds. vo.

今は亡きキース・レルフらによって68年に結成されたルネッサンスだが、現在のルネッサンスは第一期ルネッサンス解散後、一期とは完全に別のメンバーによって72年にリリースされた「プロローグ」を事実上のファーストと考えていい。以来、長い活動を続けるが、78年以後は多少ポップス的な味付けが強くなっている。それまでのアルバムはどれもそれぞれ持ち味のある素晴らしいものであるが、ここでは新生ルネッサンスの6枚目のアルバムをあげておく。彼等の特徴はアニー・ハスラムの透明感のあるヴォーカルとクラシカルな展開をする曲構成にあるが、エニドと同様に純正クラシカル・ロックの雄ということができるだろう。エニドと比べると地味な印象を受けるが、実際に音に接すると、その幽幻なるサウンドの虜となるに違いない。（山）



RIFF RAFF
Original Man

RCA LPL-1-5023 廃　1974年

Aureo De Souza : ds.
Tommy Eyre : kbd. vo.
Pete Kirtley : g. vo.
Roger Sutton : b. vo.
Jo Newman : vo.
Bud Beadle : s.
Joe O'Donnell : vla.
Steve Gregory : wind.

マーク＝アーモンドのファースト（HARVEST : SHSP-4011）において、主役の２人以上にいぶし銀の魅力を放っていたT.アイアーとR.サットンのコンビは、案の定自身のオリジナル・グループ「リフ・ラフ」結成へと向った。デビュー・アルバム（SF-8351）では、トラディショナルな香りもするアコースティックでブルージーな演奏と翳りのあるヴォーカルが特徴的だったが、本作では全体の印象がモノトーンからカラフルに若干変化している。いずれもニュークリアスなど内省的な英国ジャズ・ロックの伝統を踏まえながら、滋味に富んだ好アルバム。この後、ブラジル人パーカッショニスト、A.デスーザ帰国の為グループは解散、アイアー＆サットンは、ゼブラの2ndに仲良く参加している。（森）



ROXY MUSIC
Stranded

ISLAND ILPS 9252 廃　キング ICL60 廃　1973年

Bryan Ferry : vo. p.
Andrew Mackay : oboe. s.
Paul Thompson : ds.
Phil Manzanera : g.
Eddie Jobson : vln. syn. kbd.
John Gustafson : b.
Pro : Chris Thomas

72年にデビュー、派手な化粧とコスチュームにより一世を風靡したロキシーは、イーノを輩出した事やカンタベリーとの絡み(元クワイエット・サンのマンザネラ)、そしてエディ・ジョブスンの参加、助っ人のジョン・ウェットンなど、通受けする話題にこと欠かなかったグループである。そしてヒット作「アヴァロン」を最後に解散するまで一般的評価をも持続した特異な存在である。特に上流階級(或いはインテリ層)の屈折した愛の表現において彼等の右に出る者はいないと思われる。これはサードにあたり、初期のトリッキーな音響操作も最小限に抑えてメロディーの美しさを際立たせた逸品。中でも圧巻の「ヨーロッパ哀歌」など、意味深長なアルバム・タイトルと重ね合わせてじっくり味わって欲しい。（古）

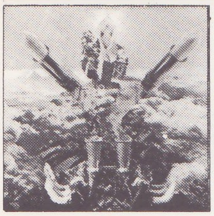


SAMURAI
Same Title

GREENWICH GSLP 1003 '71 廃

DAVE LAWSON : VOCALS, KEYBOARDS
JOHN EATON : BASS
TONY EDWARDS : GUITAR
KENNY BEVERIDGE : DRUMS
TONY ROBERTS : TENOR SAX,CONCERT & ALTOFLUTES,BASS CLARINET
DON FAY : TENOR,ALTO & BARITONE SAXES,CONCERT FLUTE

WEB時代の名盤 I SPIDER から加わったデイヴ・ロウスンとでWEBからSAMURAIへと名前を新たに発表されたのがこのアルバムである。サウンドは事実上前作である I SPIDER と同じ路線にある。ジャズ的要素が多分に感じられるが、ジャズ・ロックと呼ばれるものではなく、70年代初頭の深みのあるブリティッシュ・サウンドを土台とするものである。このアルバムを名作と呼んでも決して過言ではあるまい。しかしながら、SAMURAI もこのアルバムを１枚出しただけで解散してしまい、一時的なグループであったようだ。全曲を書いたリーダーのD. ロウスンは英国のサウンドを築いた１人として認めてもよかろう。国内盤も出ていた。（杉）

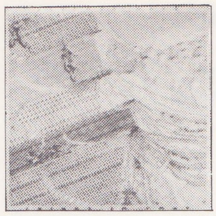


SECONDHAND
Death May Be Your Santa Claus

MUSHROOM W MRE2006 廃　　1971年

Ken Elliot : kbd. vo.
Rob Elliot : vo.
Kieran O'connor : perc.
George Hart : vo. vln.
Tony McGill : g.
Moggy Mead : g.
Paul Greedus : vo.

後にセヴンス・ウェイヴを結成するケン・エリオット率いるセカンド・ハンドは2枚のアルバムをリリースしている。本作はその2nd(1st : Reality, Polydor 1968)である。様々な種類の音楽をコラージュ的にまとめあげていき、その中にケン・エリオットのエッセンスを加えていく手法がとられ、そういう意味ではフランク・ザッパ的な印象を受けるが、音楽のフィールドは正に70年初頭のプログレッシヴ・ロックである。変拍子、ロマン派的和声、全音階、バロック、ブルース、ロックンロールetc とそのモチーフは多種多様で、それらがこま切れにされ、一曲の中でも様々につなぎあわされていく様を聴いていると、セヴンス・ウェイヴへの流れが良く理解できる。エリオットはかなり意識的な才人である。　(山)



SEVENTH WAVE
Things To Come

GULL GULP1001 廃　キング GP528 廃　　1974年

Ken Elliott : kbd. perc. vo.
Kieran O'Conner : ds. perc. vib.

Pro : Kieran O'Conner

初期ガル・レーベルを代表するセブンス・ウェイヴの1st。本アルバムは同レーベルの第1回作品として発表されたものである。元セカンド・ハンドの2人から成るセヴンス・ウェイヴはキーボードとパーカッションのデュオという当時としては斬新な最小編成のグループであったが、そのサウンドは多重録音を効果的に用いた厚みのあるものとなっている。各種キーボードを巧みに使い分けたエリオットのメロディアスなプレイにオコーナーのパーカッションが見事に呼応している。また、ボーカル・パートも印象的である。ややポップな部分もあるが、良質なシンフォニック・ロックと言える。翌年、ヴァン・ダー・グラーフのヒュー・バントンらをゲストに迎えて2nd「サイ・ファイ(同GULP1010)」を発表している。　(賀)



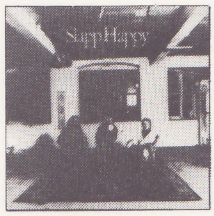
PETE SINFIELD
Still

MANTICORE ANTI 2001　W.パイオニア P8382　　1973年

Pete Sinfield : ac-g. syn. vo.
Greg Lake : el-g. vo.
Keith Tippet : p.
John Wetton : b.
Mel Collins : s. fl.
Boz : b.
Ian Wallace : ds.　他

Pro : Pete Sinfield

「宮殿」から「アイランド」までの期間、詩とアートワークで、キング・クリムゾンを、より文学性の高い存在ならしめていた彼は、R.フリップとの音楽的対立によって71年に脱退してしまう。以後、唯一のソロが本作である。彼特有の装飾的な詩を活かしながらも、クリムゾンでは実現できなかった牧歌的な曲や、幻想的な中にも暖かみを感じさせる曲など、素直に彼自身が表現され、全編を通じて非常に親しみやすい。彼のちょっぴり頼りなげなヴォーカルも初めて披露されたが、旧友たちの好サポートで実にほのぼのと聞える。その他、詩あるいはプロデュースを通じて、ロキシー・ミュージック、EL&P, PFM, アンジェロ・ブランデュアルディ、エスペラント等の作品に彼のキャラクターをうまく反映させている。　(真)



SLAPP HAPPY
same title

VIRGIN V2114 廃　コロムビア YX7036VR 廃　　1974年

Anthony Moore : kbd. vo.
Peter Blegvad : g. vo.
Dagmar Krause : vo.
etc.

ドイツに渡り、コンテンポラリーな活動をしていたアンソニー・ムーアとダグマー・クラウゼを核として結成された。72年 1st「SORT OF (独ポリドール)」、74年「SLAPP HAPPY(本作)」(英ヴァージン)そして同年ヘンリー・カウとの共演盤である「DESPARATE STRAIGHTS」(英ヴァージン)をリリースし、分裂してしまう。ポップでノスタルジックなサウンドに極めて昇華された前衛的手法をエッセンスとして加えたそのサウンドは新感覚派ポップスの先駆的なものである。後にリコメンディッド系一派に属し、各自各様の活動を行ない、特にニュー・ウェイヴ路線となったアンソニー・ムーアは現在でも精力的に活動している。　(山)



THE SOFT MACHINE
same title

PROBE CPLP4500 廃　キング SR303 廃　　1968年

Mike Ratledge : org.
Robert Wyatt : vo. ds.
Kevin Ayers : vo. b.

Pro : Chas Chandler, Tom Wilson

P.フロイドと並んでプログレのパイオニアであるS.マシーンの歴史は、66年まで遡る。当時からユニークなライヴ活動を展開していたというが、本作が 1st にあたる。ロックを基本にジャズ、現代音楽等の要素を巧みに消化、実験的でありながらもポップな内容には、今なお新鮮な響きがある。しかし、この第1期マシーンも、K.エアーズ、R.ワイアットが脱退、H.ホッパー、E.ディーン、J.マーシャル、K.ジェンキンス、A.ホールズワース等が加入、徐々にジャズ色が強まる。現在までに13枚のアルバムを発表しているが、最終的にはフュージョン的なバンドに変貌した。また、カンタベリートゥリーと称されプログレ界でも特異な活躍を続ける一連のアーティストたちのカリスマとしても、偉大な存在であった。　(真)



SOLSTICE
Silent Dance

EQUINOX EQRLP 001　'84　廃

ANDY GLASS : G.VO
MARK ELTON : VLN.KEY.VO
MARK HAWKINS : B
MARTIN WRIGHT : DS.PER
SANDY LEIGH : VO
PRO : MAZLYN JONES

マリリオン、トゥエルフス・ナイト…等の登場で俄に活気づいてきたイギリスのポンプロックシーン。出来不出来を問わず多数のグループが輩出されたが、ここに登場するソルスティスは数あるポンプ系の中で唯一、卓越したオリジナリティと演奏水準を持った第一級クラスに位置する存在と言ってよいだろう。色鮮やかな曼陀羅模様に彩られた見開きのジャケットを開くと、マザーグースの如き童謡の挿絵を思わせるイラスト付き歌詞で埋め尽されており、音の方もイギリスの古き良き時代を偲ばせてくれるかの様で、片田舎の田園風景が目に浮かんでくる。女性 VO を含む5人編成で、音のルーツは正に ルネッサンスそのものを思わせる。もし、まだ存続しているのであれば、次回作を大いに期待したい所なのだが？　〔大〕



SPIROGYRA
Bells, Boots & Shambles

POLYDOR SUPER　2310 246 廃　1973年

Barbara Gaskin:vo.
Steve Ashley:whistle
John Boyce:cel.
Henry Lowther:tp.
Stan Sulzman:fl.
Martin Cockerham:vo.
Steve Borrill:b.
Julian Cusack:p.vln.
Dave Mattacks:ds.

Pro:Max Hole

スパイロジャイラはバーバラ・ガスキンとマーティン・コッカーハムを中心にしたカンタベリー一派のフォーク・ロック・グループだった。これは「St Rodigunds」(71)、「Old Boot Wine」(72)に続くラスト・アルバム。フォークのイデオムに様々な楽器を持ち込んだ作風は共通しているが、この作品ではほとんどの曲でバーバラがその線の細い、夢見心地な歌声を聴かせていることもあって、繊細で陰りのあるさわやかさが一際印象的である。またトラッド界の大御所、シャーリー・コリンズとは姉妹で古楽に知識の深いドリー・コリンズが数曲で弦楽器のアレンジを担当していて、曲に盛り上がりやクラシカルな色相いが加わっている。バーバラのデリケートな感性が溢れたブリティッシュ・フォーク・ロックの名作。（昌）



SPRING
same title

RCA/NEON　1971年
NEO6 廃

スプリングは71年にネオン・レーベルから唯一のアルバムを制作したグループである。メンバーの内、3人までにメロトロンがクレジットされていることから「トリプル・メロトロン」の肩書きが付けられ、メロトロン・ロックの代名詞的扱いを受けている。しかし、3台同時に演奏されている部分はなく、フルート＋ストリングスとして2台併用している箇所もあるが、ほとんど1台のみである。それは別にしても本作にはブリティッシュ臭い独特の味があり、全体の感じは実に牧歌的で素朴な仕上りなのだが、内に秘めたものは極めて攻撃的で詩をとても大切にしているのがわかる。そういった内容を見事に表現した3面開きのジャケットは鬼才キーフが制作。国内盤も予定されたが残念なことにオクラ入りしてしまった。（土）



STRAWBS
Grave New World

A & M　キング　1972年
AMLH-68074 廃　AML-141 廃

David Cousins:vo.g.dulcimer.rec.
Tony Hooper:vo.g.perc.autoharp.
John Ford:vo.b.g.
Richard Hudson:vo.ds.perc.sitar.tablas.
Blue Weaver:org.p.mtn.harmonium.clavioline.

ストロベリー・ヒル・ボーイズというブルーグラス・バンドにいたデヴィッドとトニーがロン・チェスターマン（ベース）を加え、ストローブスは結成された。68年にサンディー・デニーを迎えて1st「All our own Work」を録音（発表は73年）してから、通算6枚目になる本作は、それまでの宗教色の濃いプロテスト・ソングを前進させて、北アイルランド紛争をテーマにしている。音楽的には起伏に富んだフォーク・ロックであるが、キーボードのブルー・ウィーヴァーは、前任のリック・ウェイクマン、そして後任のジョン・ホウケンという名プレーヤーに勝るとも劣らない演奏を繰り広げ、特にメロトロンの大胆な導入により、本作を成功に導いた。78年に「Dead lines」を発表後解散。同年、2枚組ベストを発表した。（隆）



STRING DRIVEN THING
same title

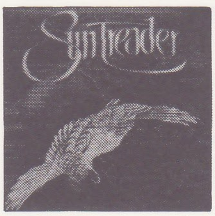
CHARISMA　フォノグラム　1972年
CAS 1062 廃　RJ5070 廃

Chris Adams:vo.g.
Pauline Adams:vo.per.
Grahame Smith:vln.
Colin Wilson:b.g.banjo

Pro:Shel Talmy

ヴァン・ダー・グラフのメンバーとして一時脚光をあびたG.スミスだが、これは彼が在籍していたことで有名なS.D.T.の2ndである。彼等は所属レーベルからの予想とは裏腹にプログレ・バンドではないし、又、トラッド・バンドでもない。だからといってただのロック・バンドではない。彼等の奇妙な持ち味を説明するのは難かしいが、アダムス兄妹のツイン・ボーカルとスミスのヴァイオリンとのからみは絶妙なバランスである。彼等は5枚の作品を発表しているが、本作と3rd「The Machine That Cried(73)」は名作と言えるだろう。特に本作A-3、4はスミス・ファンにはこたえられない名曲である。他の作品として4th「Please Mind Your Head(74)」と5th「Keep Yer'and On It(75)」がある。（千）

Se
|
Te



SUN TREADER
Zin-Zin

HELP 13 廃　1973年

Morris Pert:ds.perc.
Peter Robinson e-p.
Alyn Ross:b.
Robin Thompson:ss.

パート、ロビンソン（元クォターマス）、ロスの3人がツトム・ヤマシタズ・レッド・ブッダ・シアター・カンパニーで競演したことをきっかけとして結成されたサン・トレッダーの1st アルバムである。ロビンソンのジャズィな演奏は軽快であり、その音色は心地よい。また、ドラムスを中心に各種パーカッションを巧みに使い分けたパートの繊細かつ力強いプレイは、彼の打楽器奏者としての非凡な才能を如実に表わしている。ゲスト参加のトンプソンも中々の好盤である。グループが一体となった演奏はジャズ・ロックとして、パートのソロ部分は打楽器曲として、いずれも質の高いものでかる。76年に発表された「ミュージック・オブ・モーリス・パート(Chantry ABM21)」のB面にも彼らの演奏が収められている。（賀）



TEMPEST
Same Title

Bronze Ilps-9220 '73 廃
コロンビア Yz-13 '73 廃
Mark Clarke (b, vo)
Paul Williams (vo)
Jon Hiseman (ds)
Allan Holdsworth

やはりジョン・ハイズマンは凄いドラマーである。70年初頭のイギリスのシーンを賑わせたテンペストは、とかくアラン・ホールズワースのギターに話題が集中しがちであるが、忘れてはならないのがジョンのドラミングである。元々ジャズ畑出身であり、伝説のコラシアムII、その中間に位置するテンペストはその中でも最もワイルドで骨太のロックを聞かせる。また、イギリスならではの声質を持つポール・ウィリアムスも一級品だ。本作はジャケット・デザインのように「火」と「水」を思わせるうねりが感じられる。74年に2枚目「LIVING IN FEAR」(ILPS-9262）が出るが、ギターをオリー・ハルソールに替え一層燃え上がっていった。〔後〕



THIRD EAR BAND
Alchemy

HARVEST 東芝 1969年
SHVL756 廃 OP 80263 廃

Glen Sweeney : tabla. hand drums. wind chimes.
Richard Coff : vln. vla.
Paul Minns : oboe. rec.
Mel Davis : cel. slide pipes.
John Peel : jaws harp.
Dave Tomlin : vln.

Pro : Peter Jenner

心霊術と音楽の結合の実験に参加したことがある神秘のサード・イヤー・バンドは、68年に結成され、翌年に本作「練金術」を発表する。ヴァイオリン、オーボエ、ハンド・ドラム等の生楽器を多用した呪術的即興演奏は、聞く者を謎の深淵へと誘い込む様な魔力に満ちている。70年の「天地火水」では、後にアレンジャーとして大成功を収めるポール・バックマスターが加入、前作同様催眠的音世界を作りあげた。また、「マクベス」(72年)は、ポランスキー監督による映画のサントラである。以前のシャーマニックな潜在力は後退したが、その分音楽的まとまりを見せ、最も完成度の高い出来となった。まもなく活動は停止してしまったが、その音楽性は、ユニヴェル・ゼロ等に受け継がれ、尖鋭的価値は今なお失なわれていない。（真）



THE KEITH TIPPETT GROUP
You Are Here....I Am There

POLYDOR 日本ポリドール 1969年
2384 004 廃 23MM0196 廃

Mark Charig : cor.
Elton Dean : as.
Nick Evans : tb.
Jeff Clyne : b.
Alan Jackson : ds, glockenspiel.

Pro : Giorgio Gomelsky

現在のブリティッシュ・ジャズ・シーンを代表するミュージシャンであるティペット、チャリグ、ディーン、エヴァンスのデビュー作である。彼らの演奏は、後のややフリー・フォームなものとは異なり、当時のマイク・ウェストブルック・コンサート・バンドにも通じる、正当的ブリティッシュ・ジャズと言える。それはクラシックやロック(B-1の曲ではヘイ・ジュードのフレーズが登場する)からも影響を受けており、ポップな箇所やユーモラスな部分も少なくない。非常にゆったりとした演奏が整然と展開されており聴き易いものとなっている。個々のプレイではティペットのクラシカルかつリリカルなピアノが印象的である。71年に2ndを発表した後、グループは消滅するが、各メンバーは以後も数多く競演している。（賀）



JULIE TIPPETTS
Sunset Glow

UTOPIA UTS601 廃 RVC 1975年
RVP6021 廃

Julie Tippetts : vo. p. g. perc.
Keith Tippett : p. harmonium.
Brian Godding : g.
Elton Dean : as.
Louis Moholo : ds.
Harry Miller : b.
Mark Charig : cor. horn.
Nick Evans : tb.
Brian Belsman : b.

Pro : George Chkiantz, Julie Tippetts, Giorgio Gomelsky

ジュリー・ドリスコールはアルバム「1969」(16号カタログ参照）を録音した後、キース・ティペットと結婚しジュリー・ティペットと改名する。以後、スポンティニアス・ミュージック・アンサンブル、オヴァリー・ロッジ等で活躍したが、本作品は約6年ぶりに制作されたソロ・アルバム(3-rd)である。彼女の唱法は切々と歌いかけるものからフリー・フォームなものまで表面的には様々に変化するが、それは数多くの喜びや悲しみを体験した彼女の心の叫びに他ならない。そして、それは人々に感動を与える、芸術と呼ぶに相応しいものである。フリー・フォームな奏法の中にも叙情を感じさせるキース・ティペットらが、メロディアスなバッキングを行っており、それが本作品をよりリリカルなものにしている。（賀）



TITUS GROAN
same title

DAWN コロムビア 1970年
DNLS 3012 廃 YS-2468 廃

Jim Yoomay : ds.
Stuart Cowell : kbd. g.
Tony Priestland : wind.
John Lee : b.

アルバムとマキシ・シングルを各1枚ずつ発表して解散したタイタス・グローン。60年代末から70年代初頭にかけて、ブリティッシュ・ロックの一大勢力であったジャズやブルースの要素を大胆に取り入れたロック・バンドの1つである。本アルバムはベース、ドラムスのリズム・セクションをバックにギター、各種管楽器が次々にソロを取る曲とボーカルを主体としたポップな曲が中心になっている。中でもフルート、オーボエ、サックスを使い分けるマルチ管楽器奏者、トニー・プリストランドの意欲的プレイが印象的である。プログレッシヴ・ロック最盛期の作品と比較すると曲構成、テクニック等で見劣りするが、ブリティッシュ・ロック初期の一形態を示す資料と言える。（賀）



TONTON MACOUTE
Same title

NEON NE-4 廃 ビクター 1971年
SRA 5530 廃

Chris Gavin : b. el-g. ac-g.
Dave Knowles : as. ts. fl. cl. vo.
Paul French : org. el-p. p. vib. vo.
Nigel Reveler : perc.

Pro : Tonton Macoute

英国の伝統に培われた土の薫りと、いわゆるジャズロックを融合させたような音だ。グループの中心となるのはピアノ、オルガン、パイプ等を操るポール・フレンチ。特に彼の弾くピアノは本作に於るジャズロック的要素の8割方を構築、B-2などはリズムを刻むベースまでが完全なジャズのスタイルとなり、フレンチのプレイが冴え渡るピアノカルテットの形である。一方、時によってはパイプの音が幅を効かせ、忘れた頃にハモンドオルガンが唸りを上げる。更には渋めのｓａｘ（B-3はel.)、流れるようなフルートというように、割と限られた要素ながらも巧く組み合わせて案外多彩なプレイを聴かせる。A-1に針を落し、そのおとなしめのサウンドにがっかりしたとしても、全面聴き終える頃には満足感を得られるはずだ。(江)

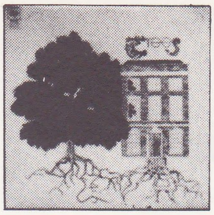


TRADER HORNE
Morning Way

DAWN コロムビア 1970年
DNLS-3004 廃 YS-2561 廃

Judy Dyble : vo. kbd.
John Godfrey : b.
Jackie McAuley : vo. g. kbd.
Andy White : perc.
Ray Elliot :

フェアポート・コンヴェンションを脱退したジュディ・ディブルが在籍したトレーダー・ホーン唯一のアルバム。内容はいわゆるフォーク・ロックであるが、彼女が在籍していた当時のフェアポートがまだあまりトラッドを取り上げていなかったように、トラッド色は薄い。聴き手をハッとさせるようなものはないが、ドラムスを用いず、美しいアコースティック・ギターの上に落ち着いたヴォーカルが重なり、曲によってはピアノや小編成のストリングスが加わる。さながら絹のような肌触りを持つ上品な音作りは、佳作と呼ぶにふさわしい。ジャッキー・マクオーレイは71年、同レーベルよりソロ・アルバムを発表している。(DNLS-3023) なお、ジュディはクリムゾンの「風に語りて」の別テイクで歌っている女性。（隆）



TREES
The Garden of Jane Delawney

CBS 63837 廃　CBS ソニー SONP 50305 廃　1970年

Celia Humphris : kbd. vo.
Bias Boshell : g. vo. b.
Barry Clarke : g.
David Costa : g.
Unwin Brown : ds. vo.

トゥリーズは70年に２枚のアルバムを残して消えた。フォークを基本と、したグループである。結成は69年。若い年齢層のグループで、女性ヴォーカリスト、セリア・ハンフリーを中心とし、トラディッショナル・フォークを演奏する。それはフェアポート・コンベンション系の音として水準はかなりなもので、当時も好意的に受け入れられていたようである。本作は1st アルバムで、同年 2nd「ON THE SHORE(CBS 64168)をリリース。ジャケットのセンスの良い2nd のほうが巷ではとりざたされているが、内容のほうは 1st, 2nd共に甲乙つけ難いものである。その後、メンバーをチェんジして72年頃まで活動していた様子だがその後の消息は明らかではない。（今）



T2
It'll All Work Out In Boomland

DECCA SKL-5050 廃　1970年

Keith Cross : g. kbd. vo.
Peter Dunton : ds. vo.
Bernard Jinks : b. vo.
Pro : Peter Johnson and T2

70年に唯一のアルバムを発表しているＴ２は基本的にはハード・ロック・トリオである。Ａ面３曲、Ｂ面１曲の構成。Ａ-1はキーボードレスでソリッドなギターで押しまくるヘヴィーなナンバーだ。彼らの本来のスタイルであろう。ところがＡ-2ではガラリと展開が変わり典型的なシンフォニック・ロックとなる。ac-ギター、ピアノ、ハープシコードそしてメロトロンと来ればユーロ族の感性を刺戟するのに十分であろう。この余韻はＡ-3へと引き継がれ、再び前面に出てくるヘヴィーなギターともうまく調和している。Ｂ面はＡ面各曲で聴かれるそれぞれの中心的要素をほぼ満遍なく織り込み21分に及ぶ大作をこなしている。彼らの持ち味であるハードな音がメインだがアコースティックパートではしっとりと聴かせてくれる。（江）

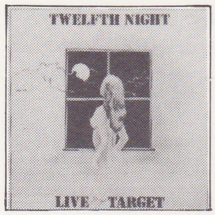


TUDOR LODGE
same title

VERTIGO '71
6360 043 廃

LYNDON GREEN - VO. G
JOHN STANNARD - VO. G
ANN STEUART - VO. G. P. FL

ニューヨークに生れたアン・ステュアートは69年に渡英して男性２人とグループを結成、その名はレディングにあるパブに由来している。ヴァーティゴに残した唯一のアルバム、内容的には同じレーベルに所属していたマグナ・カルタにも似た流麗な非トラッド系のフォーク・サウンドになっているが、全体の室内楽的なアレンジ、そしてなんといってもアン嬢のヴォーカルとフルートの調べが、抗しがたいような格調の高さを与えている。６面開きの美しいデザインのジャケットと共に、この地味なアルバムがある種の感慨をもたらす所以である。その他彼女に関する資料として、カーヴド・エアーの名曲「メリンダ」における好演、オムニバス「HEAD TOGETHER」のジャケットでは、その濃楚な面影を伺い知ることができる。（森）

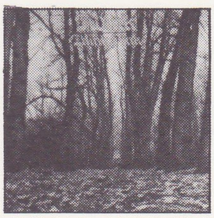


TWELFTH NIGHT
Live At the Target

TWELFTH NIGHT RECORD
TN 001 '81

Clive Mitten : b
Rick Battersby : key
Andy Revell : g
Brian Devoil : ds

ポンプ系のグループでは最古参のトウェルフス・ナイト。本作は彼らのデビュー作である。キーボード、ギター、ベースのいずれかが弾くシーケンス・パターンの上を他のパートがからんで行く展開、エレクトロニクスの多用はシンセサイザー・ニューミュージックからの影響を感じさせる。但しそれほど洗練されたイメージではなく、演奏も荒削りだ。しかしジェネシスのコピー的なバンドが多いポンプグループの中にあっては、充分にオリジナルティを感じさせるし、力強い演奏は新しい世代のプログレッシヴ・ロックを産み出そうとする、情熱を感じさせる、又、それが最大の魅力であり、情熱の爆発するＢ面の大曲は圧巻である。本作は全曲インストゥルメンタルであるが、その後ヴォーカルを加え、現在も活動中である。〔飯〕



TWINK
Think Pink

Polydor 2343 023 '70 廃

Duncan Sanderson-G
John Alder (twink)-dr
Steve Took-perc
Produced By Mick Farren

元ピンクフェアリーズのトウィンクことジョン・アルダーが、同じ元ピンクフェアリーズのダンカン・アンダーソン、元テラノザウルスレックスのスティーブ・トゥック等と結成したハードロックグループ。

彼等はピンクフェアリーズの様なストレートなハードロックよりは屈折したサイケデリックな傾向のハードロックを得意とした。

アルバムの中では随所に東洋指向の音作りがされており、ドイツのアシュラテンプルの最初期のころの様なドラックによるトリップ的なサウンドを聞かせる。全体的にけだるく、空に暗雲が垂れこめている憂うつな午後にでも聞くと共感できそうな内容の作品である。〔坂〕



UK
Danger Money

POLYDOR 2302 089　ポリドール MPF-1227　1979年

John Wetton : b. vo.
Eddie Jobson : kbd. vln.
Terry Bozzio : ds.

UKはプログレッシヴ系の大物バンドを渡り歩いて来たミュージシャン達の集合体であったが、音楽的指向の違いによって、ウェットンとジョブスンのロック派、ホールズワースとブラフォードのクロスオーヴァー派に分裂してしまう。前者の２人は、ドラムスにジョブスンの旧友テリー・ボジオを迎え、トリオ編成で本作の2nd を製作する。ジョブスンのキーボードとヴァイオリンをメインにした、現代的感覚に溢れた親近感のあるサウンドはバンドとしてのまとまりが、より一層強固になったことを物語っている様だ。同79年の来日公演の模様を収めたライヴ・アルバムを発表後バンドは解散してしまい、ウェットンはソロ活動等を経てエイジアへ、ジョブスンとボジオはそれぞれ独自のプロジェクトに着手する。（大）



VAN DER GRAAF GENERATOR
Pawn Hearts

CHARISMA
CAS 1051 廃 1971年

Peter Hammill: vo.
Dave Jackson: sax.
Guy Evans: ds.
Hugh Banton: kbd.
Robert Fripp: g. (guest)

ピーター・ハミルを中心として67年から78年まで解散、再編を繰り返しながら10枚のアルバムを発表したヴァン・ダー・グラーフは斬新なアイディアとインテリジェンスを誇り、一部に熱心なファンを持つ英アンダーグラウンド界の大物とでもいうべき存在だった。本アルバムは4枚目で前期ヴァン・ダー・グラーフの手法が頂点を極めたものとして高く評価したい。構造的にも非常に斬新なものである。この後、グループは内省的な方向に向いそれは6枚目のアルバム「Still Life」に於いて見事に結集された。尚、ピーター・ハミルは多数のソロを制作しており、現在も活躍し、デイヴ・ジャクソンらは「The Long Hello」名義のアルバムをリリースし続けている。ブリティッシュ・ロックを語る上で極めて重要なグループである。（山）



VARIOUS ARTISTS
Beyond an Empty Dream

CHARISMA
CAS1101 廃 1975年

ANAWIM
CAPABILITY BROWN
CHARTERHOUSE CHORAL SOCIETY
FRIENDS OF St. FRANCIS
JOHN McLAUGHLIN
CLIFFORD T. WARD

"Song For A Modern Church" とサブタイトルが付けられているように現代の教会音楽を創作する意図をもったアルバムであり、合唱、パイプオルガン、ピアノ、アコースティック・ギター等、生音を中心にしていることもさながら、作曲、アレンジの面に於いて教会というあの独得の雰囲気を作り出すことに成功している。マイク・ラザフォードとアンソニー・フィリップスが共作で一曲書き下している他、ケビン・ピーク（スカイ）も二曲クラシック・ギターを弾いている。又、ケイパビリティー・ブラウンの曲はレアバードの大ヒット曲のカヴァー・ヴァージョンであるが、絶妙なオーケストラ・アレンジがパイプオルガンと絡む様は夢から醒めた時の空しさを感じさせ、彼らの作品中でもかなりの秀曲である。（土）

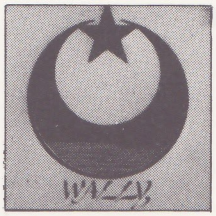


RICK WAKEMAN
The Six Wives of Henry VIII

A&M
AMLH64361 キング
AML 173 廃 1973年

Rick Wakeman: kbd.
Chris Squire: b.
Dave Lambert: g.
Alan White: ds.
Bill Bruford: ds.
Dave Cousins: el-banjo
Liza Strike: vo.
Laure Lee: vo etc. Pro: Rick Wakeman

当時、ブリティッシュ・ロック・シーンの頂点に位置したイエスのキーボード奏者として、ファン注目のうちに発表されたリック・ウェイクマンのソロ・デビュー作である。ヘンリー八世の六人の妻をテーマに、彼女たちからイメージされる6つの作品が収められている。キーボード・ソロであるB-1を除いて、ストローブス、イエスのメンバーらが彼をサポートしている。クラシカルな雰囲気を持ったウェイクマンのプレイはリリカルで暖かみのあるものとなっている。よどみなく進行する曲は起伏に富んだドラマチックな展開を見せる。キーボード・ロックを代表する一枚と言える。本作以後もオーケストラを本格的に導入した「地底探険」「アーサー王と円卓の騎士たち」の他、数多くの力作を発表している。（賀）



WALLY
same title

ATLANTIC
K50051 廃 W.パイオニア
P-10026 廃 1974年

Pete Cosker: g. vo. b.
Paul Middleton: steel-g. b.
Paul Gerrett: kbd. vo.
Roger Narraway: perc.
Pete Sage: el-vln. b. mln.
Roy Webber: vo. g.

「ボブ・ハリスとリック・ウェイクマンの共同プロデュース」ということで若干話題になった、ウォーリーのデビュー・アルバム。しかし、この2人の名前を売り物にしなくても充分に聴き応えのあるアルバムである。スティール・ギターとエレキ・ヴァイオリンの美しい調べに乗せて、フォーク・タッチのプログレッシヴ・ロックを聴かせるこのアルバムは、カーヴド・エアー・タイプ、普通のフォーク・タイプ等々、曲の傾向がはっきり分れているため、支離滅裂と言えばそうかもしれないが、1曲1曲はよく出来ている。翌年「Valley Gardens」(K50180) を発表。アルバム全体の構成がまとまり、シンフォニックな展開を見せた。なお、75年6月、彼等はミッシェル・ポルナレフのバックとして来日している。（隆）



DALLYL WAY'S WOLF
Canis Lupus

DERAM SDL 14 廃 キング
DL45 廃 1973年

Darryl Way: vln. vla. kbd.
Dek Messecar: b. vo.
John Etheridge: g.
Ian Mosley: ds.
Ian Mcdonald: p.
Pro: Ian Mcdonald

カーヴド・エアーでの活躍を通じ、ロックヴァイオリニストとしての地位を確固たるものとしたD.ウェイが結成したウルフの1st である。I. マクドナルド(元クリムゾン)がプロデュースしたことでも話題になった本作は、D.ウェイの演奏はもちろんのこと、J.エサリッジのスティーヴ・ハウばりのギターの好演が印象に残る。また、マクドナルドがピアノを奏でるB-2やメンバーがマクドナルドに捧げた佳曲B-3など、彼等のクラシックセンスが光っている。以後、厚みのあるアンサンブルが特徴的な「飽和点」、ヴォーカルにジョン・ホジキンソンを迎えた円熟の一枚「狼の夜の歌」を残し解散、D.ウェイは再編カーヴド・エアーへ、J.エサリッジはソフト・マシーンへ、I.モズレーはトレースへ、D.メセカーはキャラヴァンへと参加していった。（真）

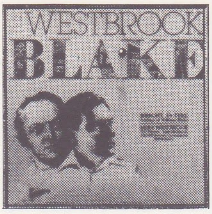


WEB
I Spider

POLYDOR 2383 024 廃 1970年

Dave Lawson: org. p. hpd. mtn. vo.
Lennie Write: ds. vib. perc.
Kenny Beveridge: ds. perc.
Tom Harris: s. fl. perc.
Tony Edwards: g.
John Eaton: b.
Pro: Lennie Wright & Web

不気味なジャケットに包まれたウェッブのサード・アルバムは、デイヴ・ローソンを迎えて制作された。このグループ、デラム時代は平坦なジャズロックという印象をぬぐえなかったが、本作で大きく成長、「金色の毒グモ」に取材した2ndのコンセプトを発展させて独特の終末観を見事に描き切っている。例えばB-1、ヘヴィーなブラス・セクションの間隙を縫ってメロトロンとティンパニが登場するあたりのゾクッとくる感覚は、聴く毎にブリティッシュの底力を思い知らされるような瞬間だ。全曲ローソンのペンになるものであり、またヴォーカル、キーボード・ワークともグリーンスレイドの頃とは比較にならぬ程攻撃性が感じられる。この後グループはSAMURAIと改名、またも優秀な作品を提供してくれた。（森）

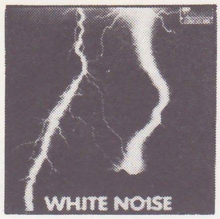


MIKE WESTBROOK
The Westbrook Blake

ORIGINAL RECORDS ORA203　1980年

Mike Westbrook:p.
Kate Westbrook:vo.tenor horn.piccolo.
Phil Minton:vo.tp.
Alan Wakeman:s.fl.
Chris Biscoe:s.cl.
Dave Barry:ds.perc.
etc.

彼の存在が、何故、日本でこれだけ無視されているのか僕には理解し難い。70年前後にはブリティッシュ・ジャズ界においてトップの人気と実力を誇っていたウエストブルック。ジョン・サーマンの盟友として、ウエストブルック・コンサート・バンド／オーケストラ／ブラス・バンド、そして伝説のソリッド・ゴールド・キャディラック、と彼の足跡をたどっているだけで枚数はつきるだろう。本作はあのウィリアム・ブレイクの詩に曲をつけた意欲作で、ケイトとフィルのヴォーカルを中心にした大作である。特にB面の出来は凄まじく、人間の生死の限界をかけたものが感じられる。ケイトの唄うB-1、フィルの熱唱が光るラスト・ナンバー等、ひたすら圧巻である。（千）



WHITE NOISE
An Electric Storm

ISLAND ILPS9099 廃　1969年

David Vorhaus
Delia Derbyshire
Brian Hodgson
Paul Lytton
Annie Bird

エレクトリック・キーボード群をメインにして驚くべき感覚派のプログレッシヴ・ロックを創りだしたデヴィッド・ボウハウス率いるホワイト・ノイズの1stアルバム。69年の作品ということを考えると、明らかに数年プログレッシヴ・ロックに先行している恐るべき代物である。トリッキーで摩訶不思議、とらえどころのないこのサウンドは、彼の感覚が中枢となって形成されていったようである。75年にヴァージンより2nd「White Noise」、又80年パルスより3rd「RE ENTRY」をリリースして現在に到るが、後の2枚はこの1stの領域を凌ぐことはできていない。作品発表の間隔が長いことから、他にも活動が予想されるが、残念ながら筆者にはこれ以上の知識はない。（山）



ROBIN WILIAMSON & HIS MERRY BAND
Journey's Edge

FLYING FISH 033 廃　1977年

Robin Wiliamson:vo,g,vln,mln.
Sylvia Woods:celtic harp,hpd,glockenspiel
Christopher Caswell:fl.kbd.perc.
Jerry McMillan:vln.
Likki Lambert:vo.
Brian Lambert g.
Jamie Faunt b.
Mark Bensi:dr.perc.
Larry Drummond:mln.
Gerald Walker:oboe.

インクレディブル・ストリング・バンドのヴァイオリニストと呼ばれることの多いロビンの2枚目のソロ・アルバム。ほとんど一人で全楽器をプレイしていた前作と比較すると、バック・ミュージシャンの充実によって彼の全作品中、一番派手で、技術的にも完成度の高いものに仕上がっている。ロビンを一言で表現するならば、道化の仮面をかぶった放浪者、と言ったところだろうか。明るいヴォーカル・スタイルの裏にあるのは『無常』の二文字なのかもしれない。彼は72年にISLANDレーベルで“MYRRH”を発表、77年に本作、78年に“AMERICAN STONEHENGE”、79年に“GLINT AT THE KINDLING”をリリースしている。本作以後の2枚も地味だが、出来の良い作品集に仕上がっている。（千）

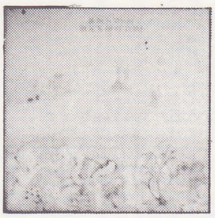


WRITING ON THE WALL
Power Of The Picts

MIDDLE EARTH
MDLS 303 廃

WILLY FINLAYSON- KBD, VO
BILL SCOTT-
JAKE SCOTT- VO
LINNIE PATERSON-
JIMMY HUSH-

ベガーズ・オペラの「GET YOUR DOGS OFF ME」でのヴォーカリスト、リニー・パターソンが在籍していたことで知られるライティング・オン・ザ・ウォールの唯一のアルバム。マイナー・レーベル、ミドルアースに残された5枚のうちの1枚である。荒削りなギターとブリティシュ然としたハモンドの音を中心とした魅力的なアルバムである。時折ヴォーカルの叫びがアーサー・ブラウンを思わせるが、クレイジー・ワールドとの活動時期がほぼ近いせいがあるかもしれない。B－1やB－4ではトラディショナルのアコーディオン演奏が頭を出しドキッとさせられるが、ヘヴィでブルージーな音があくまでも中心である。B－2はボレロ風のイントロが印象的。アルバム全体の雰囲気はベガーズ・オペラのファーストにとても似ている。〔後〕



ROBERT WYATT
Rock Bottom

VIRGIN V2017 廃　コロムビア YQ7017VR 廃　1974年

Robert Wyatt:kbd.vo.
James:ds.
Gary Wind:s.cl.
Mike Oldfield:g.
Richard Sinclair:b.
Hugh Hopper:b.
Fred Frith:vla.
Laurie Allan:ds.

Pro:Nick Mason

オリジナル・ソフト・マシーンの1人である彼の「The end of an ear」に続く2ndソロである。73年6月、事故のため不幸にも下半身不随となってしまうが、入院中の様々な思いが本作を生んだ。物悲しげに響く独特のヴォーカル、苦悩と不安が交錯したかのような感傷的美しさ。しかしながら、暗さは微塵もなく、奇妙な明るさが残る。翌年には、彼らしい余裕のある知性を感じさせる傑作「Ruth is stranger than Richard」（フレッド・フリス、イーノ参加）を発表、他でも客演等していたが、暫く活動を停止してしまう。80年に再起後は、4th「Nothing can stop us」やシングルで、万事を達観したかのような味わい深い作品を発表しているが、いずれの曲もメッセージ色が強い。彼は今、芸術を超えたヒューマニストとして活躍している。（真）



YES
Close To The Edge

ATLANTIC K-50012　W.パイオニア P-8274A　1972年

Jon Anderson:vo.
Chris Squire:b.vo.
Steve Howe:g.vo.
Rick Wakeman:kbd.
Bill Bruford:ds.

Pro:Eddy Offord

71年の「こわれもの」と並んで、最高作と名高いイエス5作目のアルバム。本作に於いて、彼らの持つ構築的な音楽性と独創性は一気に頂点を極めたと言っても過言ではない筈だ。一糸乱れる事なく、大河が流れる様に繰り広げられるA面四部構成の壮大なロックシンフォニーは、聴き手に息つく暇を与えない位の感動を超えた衝撃をもたらすだろう。メンバー個々の演奏も素晴しいが、クラシックを基盤としたウェイクマンのキーボードプレイも一段と光っている。R.ディーンのファンタスティックなカヴァー・ワークも見逃がすことは出来ない。グループは後に10作目の「究極」あたりからタイトかつポップな音創りを目指し、行く末に81年一時消滅するが、83年に「ロンリー・ハート」で活動を再開している。（大）

Aardvark
Same(Deram SDN 17)'70
Affinity
Same(Vertigo 6360 004) '70
After The Fire
Signs Of Change(Rapid RR 001)'78
Laser Love(CBS 83795)'79
Bof(CBS 84545)'80
Batteries Not Included(CBS 85566)'82
Amazing Blondel
Same(Bell SBLL 131)'70
Evensong(Island ILPS 9136)'70
Fantasia Lindum(Island ILPS 9156)'71
England(Island ILPS 9205)'72
Blondel(Island ILPS 9257)'73
Mulgrave Street(DJM DJLPS 443)'74
Inspiration(DJM DJLPS 446)'75
Bad Dreams(DJM DJLPS 472)'76
Live In Tokyo(DJM 48089)'77
Arcadium
Breathe Awhile(Middle Earth MDLS 302)'69
Art Bears
Hopes & Fears(RE 2188)'78
Winter Songs(RE Re o618)'79
The World As It Is Today(Recommended RE 6622)'81
Arzachel
Same(Evolution Evilution Zel Z 1003)'69
Asgard
In The Realm Of(Threshold THS 6)'72
Atomic Rooster
Atomic Rooster(B&C CAS 1010)'70
Death Walks Behind You(B&C CAS 1026)'70
In Hearing Of(Pegasus PEG 1)'71
Made In England(Dawn DNLS 3038)'72
Nice & Greasy(Dawn DNLS 3049)'73
Atomic Rooster(EMI EMC 3341)'80
Audience
Same(Polydor 583 065)'69
Friends Friends Friends(Charisma CAS 1012)'70
House On The Hill(Charisma CAS 1032)'71
Lunch(Charisma CAS 1054)'72
Kevin Ayers
Joy Of The Toy(Harvest SHVL 763)'70
Shooting At The Moon(Harvest SHSP 4005)'71
Whatevershebringswesing(Harvest SHVL 800)'72
Bananamour(Harvest SHVL 807)'73
Confessions Of Dr. Dream(Island ILPS 9263)'74
June 1st 1974(Island ILPS 9291)'74
Sweet Deceiver(Island ILPS 9322)'75
Odd Ditties(Harvest SHSM 2005)'76
Yes We Have No Mananas(Harvest SHSP 4057)'76
Rainbow Takeaway(Harvest SHSP 4085)'78
Thats What You Get Babe(Harvest SHSP 4116)'80
The Kevin Ayers Collection(Charly CM 117)'83
Diamond Jack & The Queen Of Pain(Charly CR 30224)'83
Deia...Vu(Blau Blau A 014)'84
As Close As You Think(Illuminative AMA 25)'86
Back Door
Same(Blakey BLP 5989)'72
Eighth Street Nites(WB.K 46265)'73
Another Fine Mess(W.B. K 560980)'75
Activate(WB K 56243)'76
Badger
One Live Badger(Atlantic K 40473)'73
White Lady(Epic 80009)'74
Barclay James Harvest
Same(Harvest SHVL 770)'70
Once Again(Harvest SHVL 788)'71
Other Short Stories(Harvest SHVL 794)'71
Baby James Harvest(Harvest SHSP 4023)'72
Early Morning Onwards(Starline SRS 5126)'72
Everyone Is Everybody Else(Polydor 2383 286)'74
Live(Polydor 2683 052)'74
Time Honoured Ghosts(Polydor 2383 361)'75
Octoberon(Polydor 2442 148)'76
Gone To Earth (Polydor 2442 148)'78
Live Tapes(Polydor PODV 2001)'78
Number 12(Plydor 2442 153)'78
Eyes Of The Universe (Polydor POLD 5029)'80
Turn Of The Tide(Polydor POLD 5040)'81
Concert For The People(Polydor POLD 5052)'82
Peter Bardens
The Answer(Transatlantic TRA 222)'70
Peter Bardens(Transatlantic TRA 243)'71
Heart To Heart(Arista SPART 1108)'79
Syd Barrett
Madcap Laughs(Harvest SHVL 765)'70
Barrett(Harvest SHSP 4007)'70
David Bedford
Nurses Songs With Elephants(Dandelion 2310 165)'72
Stars End(Virgin V 2020)'74
Rime Of The Ancient Mariner(Virgin V 2038)'75
Odyssey(Virgin V 2070)'76
Instructions For Angels(Virgin V 2090)'77
Rigel 9(Rigel 9 Chrisma)'85
Beggers Opera
Act One(Vertigo 6360 018)'70
Waters Of Change(Vertigo 6360 054)'71
Pathfinder(Vertigo 6360 073)'72
Get Your Dog Off Me(Vertigo 6360 090)'73
Sagittary(Jupiter 88907)
Beggars Can't Be Choosers(Jupiter 27702)
Lifeline(Vertigo 6350 060)
Ben
Same(vertigo 6360 052)'71
Big Sleep
Bluebell Wood(Pegasus PEG 4)'71
Brand X
Unorthodox Behaviour(Charisma CAS 1117)'76
Moroccan Roll(Charisma CAS 1126)'77
Live Stock(Charisma Class 5)'77
Masques(Charisma CAS 1138)'78
Product(Charisma CAS 1147)'79
Do They Hurt(Charisma CAS 1151)'80
Is There Anything About(CBS 85967)'82
Arthur Brown's Kingdom Come
Galactic Zoo Dossier(Polydor 2310 130)'72
Kingdom Come(Polydor 2310 178)'73
The Journey(Polydor 2310 254)'73
Robert Calvert
Captain Lockheed & The Starfighters(United Artists UAG 29507)'74
Lucky Leif & The Longships(United Artists UAG 29507)'75
Hype(IF 0311)'78
Freq(Sharp 021)'84
Camel
Same(MCA MAPS 6477)'73
Mirage(Deram SML 1107)'74
Snow Goose(Deram SKLR 5207)'75
Moonmadness(Deram TXSR 115)'76
Raindance(Deram-Gama TXSR 124)'77
A Live Record(Decca DBCR 7-8)'78
Breathless(Decca TXSR 132)'78
I can See Your House From Here(Decca TXSR 137)'79
Nude(Decca SKL 5323)'81
Stationaly Traveller(Decca SKL 5334)'84
The Single Factor(Decca SKL 5328)'83
Capability Brown
From Scrach(Charisma CAS 1056)'72
Voice(Charisma CAS 1068)'73
Caravan
Same(MGM 2353 058)'68
If I Could Do It All Over Again...(Decca SKL 5052)'70
In The Land Of The Grey & Pink(Deram SDL 1)'71
Waterloo Lily(Deram SDL 8)'72
For Girls Who Grow Plump In The Night(Deram SKLR 12)'73
& The New Symphonia(Deram SKLR 1110)'75
Cunning Stunts(Deram SKLR 5210)'75
Canterbury Tales(Decca DKLR 81-2)'76
Blind Dog At St Dunstans(BTM BTM 1007)'76
Better By Far(Arista SPARTY 1008)'77
The Album(Kingdom KVL 9003)'80
Back To Front(Kingdom 5011)'82
Carmen
Fandangos In Space(Regal Zonophonie SRZA 8518)'73
Dancing On A Cold Wind(Regal Zonophone SLRZ 1040)'75
The Gypsies(U.S.Mercury SRMI 1047)'76
Castanarc
Journey To The East(Peninsula records Pencil 10)'84
Catapilla
Same(Vertigo 6360 029)'71
Changes(Vertigo 6360 074)'72
The Chitinous Ensemble
Chitinous(Dream SML 1093)'71
Circus
Same(Transatlantic TRA 207)'69
Cirkus
One(RCB 1)'70
Clear Blue Sky
Same(Vertigo 6360 013)'71
Colloseum
Those Who About To Die(Fontana STLS 5510)'69
Valentyne Suite(Vertigo VO 1)'69
Daughter Of Time(Vertigo 6360 017)'70
Live(Bronze ICD 1)'71
Collectors Colosseum(Bronze ILPS 9173)'71
Comus
First Utterance(Dawb DNLS 3019)'71
To Keep From Vrying(Virgin V 2018)'74
Continium
Same(RCA Victor SF 8157)'70
Autumn Grass(RCA Victor SF 8196)'71
Lol Coxhill
Ear Of The Beholder(Dandelion 69001)'71
Toverbal Sweet(Mushroom 150MR 23)'72
Coxhill Miller(Caroline C 1503)'73
Story So Far...Oh Really 1/2 LP(Caroline C 1507)'74
Lol Coxhill & Welfare State(Caroline C 1514)'75
Fleas In The Custard(Caroline C 1515)'75
Diverse(Ogun OG 510)'76
The Joy Of Paranoia(Ogun OG 525)'78
Moot(Ictus 0008)'78
Lid(Ictus 0011)'78
Digswell Duets(Random Radar RRR 005)'79
Slow Music(Pipe Pipe 1)'80
Cressida
Same(Vertigo VO 7)'70
Asylum(Vertigo 6360 025)'71
Curved Air
Air Conditioning(WB K 56004)'70
Second Album(WB K 46094)'71
Phantasmagoria(WB K 46158)'72
Air Cut(WB K 46224)'73
Live(Decca SML 119)'75
Midnight Wire(BTM BTM 1005)'75
Airborne(BTM BTM 1008)'76
Czar
Same(Fontana 6309 009)'70
Deep Feeling
Same(DJM DJLPS 419)'71
Julie Driscoll
Same(Polydor 2480 074)'71
Sunset Glow(Utopia UTS 601)'76
Druid
Towards The Sun(EMI EMC 3081)'75
Fluid Druid(EMI EMC 3128)'76
Dr.Z
Three Parts To My Soul(Vertigo 6360 048)
East Of Eden
Mercator Projector(Deram SML 1038)'69
Snafu(Deram SML 1050)'70
Same(Harvest SHVL 792)'71
New Leaf(Harvest SHVL 796)'71
The World Of East Of Eden(Decca SPA 34)'71
Another Eden(Ger.EMI C062 97101)'75
It's The Climate(Ger.EMI c062 61810)'76
Silver Park(Ger.EMI C062 62639)'78
Egg
Same(Deram-Nova SDN 14)'70
Police Force(Deram SML 1074)'70
Civil Surface(Caroline C 1510)'74
Electric Score
Same(Reveration REV1-3)'72
Electrophon
Zygoat(polydor 2383 270)'74
Further Thoughts On The Classics(Polydor 335)'77
Emerson Lake & Palmer
Same(Island ILPS 9132)'70
Tarkus(Island ILPS 9155)'71
Pictures At An Exhibition(Island HELP 1)'71
Trilogy(Island ILPS 9186)'72
Brain salad Surgery(Manticore K 53501)'71
Welcome Back My Friends,To The Show That Never Ends Ladies And Gentlemen(Manticore K 63500)'74
Works(Manticore K 80009)'77
Works Vol 2(Atlantic K 50422)'77
Love Beach(Atlantic K 50552)'78
In concert(Atlantic K 50757)'79
Emerson Lake & Pawell
Same(Polydor POLD 5191)'86
England
Garden Shed(Arista ARTY 153)'77
Enid
In The Region Of The Summer Stars(Buk BULP 2014)'76

Aerie Faerie Nonsence(EMI INS 3012)'77
Touch Me(PYE NSPH 18593)'79
Six Pieces(Pye N 116)'79
Live At Hammersmith Odeon Vol.1(Enid 1)'83
Live At Hammersmith Odeon vol.2(Enid 2)'83
Something Wicked This Way Come(Enid
The Stand(Enid
The Spell(Enid 8)'84
Fand(Enid 9)'85
1985-1986(Stand 2)'85
Salome(Enid 10)'86
Lovers & Fools(DOJOLP 24)'86

Brain Eno
Here Come The Warm Jets(Island ILPS 9268)'73
Taking Tiger Mountain(Island ILPS 9309)'74
Another Green World(Island ILPS 9351)'74
Discreet Music(Obscure OB 4)'75
Before & After Science(Polydor 2302 071)'77
Music For Films(Polydor 2310 623)'78
Music For Airports(Ambient 001)'79
Possible Music(Editions EGED 7)'80
The Plateaux Of Mirrors(Editions EGAMB 002) '80
Fourth World(EG EGED 7)'80
My Life In The Bush(EG EGED 20)'80
Empty Lanscapes(EG
On Land(EG EGLP 53)'83
Ambient 4 On Land(EG EGED 20)'82

Esperanto
Same(A&M AMLH 68175)'73
Danse Macabre(A&M AMLH 63624)'74
Last Tango(A&M AMLH 68294)'75

Fantasy
Paint A Picture(Polydor 2383 246)'73

Fields
Same(CBS 69009)'71

Flaming Youth
Ark 2(Fontana STL 6020)'69

Forest
Same(Harvest SHVL 760)'69
Full Circle(Harvest SHVL HELP 22)'75

Fripp & Eno
No Pussyfooting(Island HELP 16)'73
Evening Star(Island HELP 22)'75

Fruupp
Future Legends(Dawn DNLS 3053)'73
Seven Secrets(Dawn DNLS 3058)'74
Prince Of Heaven's Eyes(Dawn DNLH 2)'74
Modern Masquerades(Dawn DNLS 3070)'75

Fusion Orchestra
Skeleton In Armour(EMI EMA 758)'73

Peter Gabriel
Same(Charisma CDS 4006)'77
Same(Charisma 4013)'78
Same(Charisma 4019)'80
Same(Charisma PG 4)'82
Plays Live(Charisma PGDL 1)'83
Birdy

Genesis
From Genesis To Revelation(Decca 4990)'69
Trespass(Charisma CAS 1020)'70
Nursery Cryme(Charisma CAS 1052)'71
Foxtrot(Charisma CAS 1058)'72
Live(Charisma CLASS 1)'73
Selling England By The Pound(Charisma CAS 1074)'74
The Lamb Lies Down On Broadway(Charisma CGS 101)'74
Trick Of The Tail(Charisma CDS 4001)'76
Wind & Wuthering(Charisma CDS 4005)'77
Seconds Out(Charisma GE 2001)'77
And Then There Were Three(Charisma CDS 4010)'78
Duke(Chriama BRA 101)'80
Abacab(Charisma CBR 102)'81
Three Sides Live(Charisma
Same(Charisma GEN Lp 1)'83
Invisible Touch(Charisma GEN LP-2)'81

Gentle Giant
Same(Vertigo 6360 020)'70
Acquiring The Taste(Vertigo 6360 041)'71
Three Friends(Vertigo 6360 070)'72
Octopus(Vertigo 6360 080)'70
In A Glass House(WWA WWA 002)'73
The Power & The Glory(WWA WWA 010)'74
Free Hand(Chrysalis 1093)'75
Interview(Chrysalis 1115)'76
Playing The Fool(Chrysalis 1133)'76
The Missing Piece(Chrysalis 1152)'77
Giant For A Day(Chrysalis 1186)'78
Civilian(Chrysalis 1285)'80

Gilgamesh
Same(Caroline CA 2007)'75
Another Five Tune You've Got Me Into(Charly CRL 5009)'78

Gnidrolog
In Spite Of Harry's Toenail(RCA SF8261)'71
Lady Lake(RCA SF 8322)'72

Robert John Godfrey
Fall Of Hyperion(Harisma CAS 1084)'74

Gracious
! (Vertigo 6360 002)'70
This Is(Philips 6384 004)'72

Greenslade
Same(WB K 46207)'73
Bedside Manners Are Extra(WB K 46259)'73
Spyglass Guest(WB K 56055)'74
Time & Tide(WB K 56126)'75

Dave Greenslade
Cactus Choir(WB K 5630)'76
Pentateuch Of The Cosmogony(EMI EMC 3321-2) '79

Nicholas Greenwood
Cold Cuts(Kingdom KVLP 9002)'72

Carol Grims & Delivery
Fool's Meeting(B & C CAS 1023)'70

Carol Grims
Warm Blood(Caroline CA 2001)'74
Carol Grims(Decca SKLR 5258)'76

Gryphon
Same(Transatlantic TRA 262)'73
Midnight Mushrumps(Transatlantic TRA 282)'74
Red Queen To Gryphon Three(Transatlantic TRA 287)'74
Raindance(Transatlantic TRA 302)'75
Treason(Harvest SHSP 4063)'77

Gun
Same(CBS 63552)'78
Gunsight(CBS 62683)'69

Steve Hackett
Voyage Of The Acolyte(Charisma CAS 1111)'75
Please don't Touch(Charisma CAS 4012)'78
Spectral Mornings(Charisma CDS 4017)'79
Defectors(Charisma CDS 4018)'80
Cured(Charisma CDS 4021)'81
1978 Tour(Ger,Carisma 6032 153)'81
Bay Of Kinds(Lamborghini LMGLP 3000)'83
Highly Strung(Hack 1)'83
Till We Have Faces(Lamborghini LMGLP 4000) '84

Peter Hammill
Fools Mate(Charisma CAS 1037)'72
Chameleon In The Shadow...(Charisma CAS 1067)'73
The Silent Corner(Charisma CAS 1083)'74
In Camera(Charisma CAS 1089)'74
Nadirs Last Chance(Charisma CAS 1099)'75
Over(Charisma CAS 1125)'77
Future Now(Charisma CAS 1137)'78
PH7(Charisma CAS 1146)'79
Black Box(S-Type PHS-1)'80
Sitting Targets(Virgin V 2205)'81
Enter K(Naive NAVL 1)'82
Patience(Naive NAVL 3)'83
The Love Songs(Virgin-Charisma CAS 1166)'85
The Margin(Foundry FOUNDL 1)'85
Skin(Foundry Foundl 3)'86
And Close As This(Virgin V 2409)'86

Chris Harwood
Nice To Meet Miss Christine(Birth RAB 1)

Hatfirld & The North
Same(Virgin V 2008)'74
The Rotters Club(Virgin V 2030)'75
Afters(Virgin VR 5)'79

Harkwind
Same(Liberty LBS 83348)'70
In Search Of Space(United Artists UAG 29202)'71
Soremi-Fasol-Latido(United Artists UAG 29364)'72
Space Ritual(Unieted Artists UAG 29364)'73
Hall Of The Mountain Grill(United Artists UAG 29672)'74
Warrior On The Edge Of Time(United Artists UAG 29766)'75
Road Hawks(United Artists UAK 29919)'76
Astounding Sounds(Charisma CDS 4004)'76
Quark Strangeness & Cham(Charisma CDS 4008) '77
25 Years(*Hawklords)(Charisma CDS 4014)'78
PXR 5(Charisma CDS 4016)'79
Live 79(Bronze Bron 527)'80
Levitation(Bronze BRON 530)'80
Sonic Attack(RCA LP 6004)'81
Church Of Harkwind(RCA LP 6004)'81
Church Of Harkwind(RCA LP 9004)'82

Henry Cow
Legend(Virgin V 2005)'73
Unrest(Virgin V 2011)'74
Desperate Straights(Virgin V 2024)'74
In Praise Of Learning(Virgin V 2027)'75
Concerts(Caroline CAD 3002)'76
Western Culture(Broadcast BC 1)'78

High Tide
Sea Shanties(Liberty LBS 83264)'69
Same(Liberty LBS 83294)'70

Steve Hillage
Fish Rising(Virgin V 2031)'75
"L"(Virgin V 2066)'75
Motovative Radio(Virgin V 2777)'77
Green(Virgin V 2098)'78
Live Herald(Virgin
Open(Virgin V 2135)'79
Rainbow Dome Music(Virgin VR 1)'79
Aura(GerAura 202 799)'80
For To Next/And Not Or(Virgin V 2244)'83

Rupert Hine
Pick Up A Bone(Purple TPSA 7502)'71
Unfinished Picture Purple TPSA 7509)'73
Immunity(A&M AMLH 68519)'81
Waving Not Drowning A&M AMLH 68541)'82
The Wildest Wish To Fly(Island ILPS 9747)'85

Hugh Hopper
1984(CBS 65466)'73
Tunity Box(Compendium Fidardo 7)'77

Linda hoyle
Pieces Of Me(Vertigo 6360 060)'71

Igginbottom's Wrench
Same(Deram SML 1051)'69

Illusion
Out Of The Mist(Island ILPS 9489)'77
Illusion(Island ILPS 9519)'78

Incredible String Band
Same(U.S Elektra EKS 7322)'66
The 5000 Spirits Or....(Elektra K 42001)'67
The Hangmans Beautiful Daughter(Elektra K 42002)'68
Wee Tam(Elektra K 42021)'68
The Big Huge(Electra K 42022)'68
Changing Horses(Elektra K 42037)'69
"U"(Elektra K 62002)'70
I looked Up(Elektra K 62002)'70
Be Glad For The Songs Has No Ending(Island ILPS 9140)'70
Liquid Acrobat As Regards The Air(Island ILPS 9172)'71
Earth Span(Island ILPS 9211)'72
No Ruinous Feud(Island ILPS 9229)'73
Hard Rope & Silken Twine(Island ILPS 9270)'74
Seasons They Change(Island ISLD 9)'76

Indian Summer
Same(Neon NE 3)'71

IQ
Tales From The Lush Attic(One Shoe Records MAJ 1001)'84
The Wave(Sahara SAH 136)'85
Nine In A Pound Is Here(Boxer 1)'85
Living Proof(Samurai SAMR 045)

Jackson Heights
King Progress(Charisma CAS 1018)'70
5th Avenue Bus(Vertigo 6360 067)'72
Ragamuffins Fool(Vertigo 6360 077)'73
Bump'n'Grind(Vertigo 6360 092)'73

Jade Warrior
Same(Vertigo 6360 033)'71
Released(Vertigo 6360 062)'71
Autumns Dream(Vertigo 6360 079)'72
Floating World(Island ILPS 9290)'74
Waves(Island ILPS 9318)'75
Kites(Island ILPS 9393)'76
Way Of The Sun(Island 9552)'78

Jan Dukes De Grey
Sorcerers(Deram-Nova SDN 8)'70
Mice & Rats In The Loft(Transatlantic TRA 2 34)'71

Jethro Tull
This Was(Island ILPS 9085)'68
Stand Up(Island ILPS 9103)'69

Bebefit(Island ILPS 9193)'70
Aqualung(Island ILPS 9145)'71
Living In The Past(Chrysalis CJT 1)'72
Thick As A Brick(Chrysalis CHR 1003)'72
Passion Play(Chrysalis CHR 1040)'73
War Child(Chrysalis CHR 1067)'74
Minstrel In The Gallery(Chrysalis CHR 1082)'75
Too Old To Rock'n'Roll(Chrysalis CHR 1111)'76
Song From The Wood(Chrysalis CHR 1132)'77
Heavy Horses(Chrysalis CHR 1175)'78
Live Bursting Out(Chrysalis CJT 4)'78
Stormwatch(Chrysalis CDL 1238)'79
"A"(Chrysalis CDL 1301)'80
Broadsword & Beast(Chrysalis CDL 1380)'82
Under Warps(Chrysalis CDL 1461)'85
A Classic Case(

Jonesy
No Alternative(Dawn DNLS 3042)'72
Keeping Up(Dawn DNLS 3048)'73
Growing(Dawn DNLS 3055)'73

Julian Jay Saberine
Waiters On The Dance(Birth RAB 2)'71

Julian's Treatment
A Time Before This(Young Blood SYB 2)'70

Kestrel
Same(Cube HIFLY 19)'75

Khan
Space Shanty(DERAM SDLR 11)'72

King Crimson
In The Cout Of The Crimson King)Island ILPS 9111)'69
In The Wake Of Poseidon(Island ILPS 9127)'70
Lizard(Island ILPS 9141)'70
Island(Island ILPS 9175)'71
Earthbound(Island HELP 6)'72
Larks Tongues In Aspic(Island ILPS 9230)'73
Starless & Bible Black(Island ILPS 9275)'74
Red(Island ILPS 9308)'74
USA(Island ILPS 9316)'75
Young Persons(Island ISLD 7)'75
Discipline(EG EGLP 49)'81
Beat(EG
Three Of A Perfect Pair(EG
The Compact King Crimson(

Basil Kirchin
A World Within Worlds(Columbia SCX 6463)'71
Worlds Within Worlds 3/4(Island HELP 18)'74

Liverpool Scene
Incredible New Liverpool Scene(EPIC 26336)'67
Amazing Adventures Of(RCA SF 7995)'68
Bread On The Night(RCA SF 8057)'69
St Adrian & Co.Broadway And 3rd(RCA SF 8100)'70
Heirloon(RCA SF 8134)'70

The Long Hello
Same(I.United Artists UAS 29718)'74
Long Hello vol 2(BUTT NoTT 004)

Mahavishnu Orchestra
Inner Mounting Flame(CBS 64717)'71
Birds Of Fire(CBS 65321)'73
Between Nothingness & Eternity(CBS 69046)'74
Apocalypse(CBS 69076)'74
Visions Of The Emerald Beyond(CBS 69108)'75
Inner Worlds(CBS 69216)'76

Mainhorse
Same(Polydor Polydor 2383 049)'71

Mandalaband
Same(Shrysalis CHR 1095)'75
The Eye Of Wendor(Chrysalis CHR 1181)'78

Manfred Mann Chapter Three
Chapter Three(Vertigo VO 3)'69
Chapter Three vol 2(Vertigo 6360 012)'70

Phil Manzanera
Diamond Head(Island ILPS 9315)'75
Listen Now(Polydor 2302 074)'77
K Scope(Polydor 2302 083)'78
Primitive Guitars(EG EGED 14)'81

Marillion
Script For A Jester's Tear(EMI EMC 3429)'83
Real To Reel(EMI JEST 1)'84
Fugazi(EMI MAL 1)'84
Misplaced Childhood(EMI MAL 2)'85

Marsupilami
Same(Transatlantic TRA 213)'70
Arena(Transatlantic TRA 230)'71

Matching Mole
Same(CBS 64850)'72
Little Red Record(CBS 65260)'73

Mccdonald & Giles
Same(Island ILPS 9126)'70

Mellow Candle
Seaddling Songs(Deram SDL 7)'72

Mogul Threash
Same(RCA SF 8156)'71

Moody Blues
Magnificent Moodies(Decca LK 4711)'66
Days Of Future Past(Deram SML 707)'67
In Search Of The Lost Chord(Deram SML 717)'68
On The Threshold Of A Dream(Deram SML 1035)'69
To Our Childrens Children(Threshold THS 1)'69
Question Of Balance(Threshold THS 3)'70
Every Good Boy Deserves Favour(Threshold THS 5)'71
Seventh Sojourn(Threshold THS 7)'72
Caught Live Plus Five(Decca MB3-4)'77
Octave(Decca TXS 129)'78
Long Distance Voyager(Threshold TXS 139)'81
The Present(Threshold TXS 140)'83
The Other Side Of Life(

Michael Moorcock & The Fix
The New Worlds Fair(United Artists UAG 29732)'75

Patrick Moraz
"I"(Charisma CDS 4002)'76
Out Of The Sun(Chrisma CDS 4007)'77
Same(Charisma CDS 4015)'78
Future Memories Live On TV(Fr.Carrere 67435)'79
Co Existence(Carrere CAL 117)'80
Music For Piano And Drums(EG EGED 33)'81
Timecode(Lamborghini LMGLP 6000)'84
Flags(EG EGLP 63)'85

National Health
Same(Affinity AFF 6)'78
Of Queues & Cures(Charly CRL 5010)'78
D.S.Al Coda(Us Europa JP 2008)'82

The Neutrons
Black Hole Star(United Artists UAG 29652)'74
Tales From The Blue Cocoons(United Artists UAG 29726)'75

Tom Newman
Fine Old Tom(Virgin V 2022)'75
Live At The Argonaut(Virgin V 2042)
*not released
Faerie Symphoniy(Decca TXS 123)'77
Bayou Moon(Coda NAGE 2)'85

The Nice
Thoughts Of Emerlist Davjack(Immediate IMSP 016)'67
Ars Longa Vita Brevis(Immediate IMSP 020)'68
Same(Immediate IMSP 026)'69
Five Bridges Suite(Charisma CAS 1014)'70
Elegy(Charisma CAS 1030)'71
Autumn 67-Spring 68(Charisma CS 1)'72

Nirvana
Simon Simopath(Island ILPS 9059)'67
All Of Us(Island ILPS 9087)'68
Dedicated To Markos III(PYE 28132)'70
Local Anaesthetic(Vertigo 6360 031)'71
Song Of Love & Praise(Philips 6308 089)'72

Nucleus
Elastic Rock(Vertigo 6360 008)'70
We'll Talk About It Later(Vertigo 6360 027)'70
Solar Plexus(Vertigo 6360 039)'71
Belladonna(Vertigo 6360 076)'72
Labyrinth(Vertigo 6360 091)'73
Roots(Vertigo 6360 100)'73
Under The Sun(Vertigo 6360 110)'74
Snake Hips Etcetera(Vertigo 6360 119)'75
Alley Cat(Vertigo 6360 124)'75
In Flagrante Delicto(Capitol 11771)'77
Out Of The Long Dark(Capitor 11916)'79
Awakening(Mood 24000)'80

Ovary Lodge
Same(RCA SF 8372)'73
Same(Ogun OG 600)'76

Ann Odell
A Little Taste(DJM DJLPS 434)'73

Mike Oldfield
Tublar Bells(Virgin V 2001)'73
Hergest Ridge(Virgin V 2013)'74
Ommadawn(Virgin V 2043)'75
Boxed(Virgin VBOX 1)'76
Incantations(Virgin VDT 101)'78
Exposed(Virgin VD 2511)'79
Platinum(Virgin V 2141)'79
QE 2(Virgin V 2181)'80
Airborne(Virgin V
Music Wonderland(Virgin V 2222)'81
Five Miles Out(Virgin V)'82
Moonlight Shadow(
Discovery(Virgin V 2308)'84
The Killing Fields(Virgin V 2328)'84

Pallas
Arrive Alive(CKLP 002)'83
The Sentinel(Harvest SHSP 2400121)'84
The Wedge(Harvest SHV 850)'86

Patto
Same(Vertigo 6360 016)'70
Hold Your Fire(Vertigo 6360 032)'71
Roll EM Smoke EM(Island ILPS 9210)'72

Pendragon
Fly High,Fall Far(Elusive Records ARRMP 001)'84
Fire In Harmony(Elusive Records ARRLP 100)'85
The Jewel(Elusive Records ARRLP 101)'85
9:15 Live(Awareness AWL 4042)

John G.Perry
Sunset Wading(Decca SKL 5233)'76

Anthony Philips
The Geese & The Ghost(Hit & Run HIT001)'77
Wise After The Event(Arista Spart 1063)'78
Private Parts & Pieces(APL AFLP 1)'78
Side(Arista Spart 1085)'78
P,Parts & Pieces II,Back To The Pavilion (US.PVC 7913)'80
1984(RCA SLP 5086)'81
P.Parts & Pieces III.Antiques(US.PVC
P.Parts & Pieces IV.A Catch At The Tables(US PVC 8919)'84
Invisible Men(
P.Parts & Pieces V.Twelve(US.PVC 8926)'84
Harvest Of The Heart(Chery Red BRED 66)'85
*best album.
P.Parts & Pieces VI.Ivory Moon(US.PVC 8940)'86

Pink Floyd
Piper At The Gate Of Dawn(Columbia SCX 6157)'67
A Saucerful Of Secrets(Columbia SCX 6258)'68
More(Columbia SCX 6346)'69
Ummagumma(Harvest SHDW 1-2)'69
Atom Heart Mother(Harvest SHVL 781)'70
Relics(Starline SRS 5071)'71
Meddle(Harvest SHVL 795)'71
Obscured By Clouds(Harvest SHSP 4020)'72
The Dark Side Of The Moon(Harvest SHVL 804)'73
Wish You Were Here(Harvest SHVL 814)'75
Animals(Harvest SHVL 815)'77
The Wall(Harvest SHDW 411)'79
Collection Of Great Dance(Harvest SHVL 822)'81*best album.
The Final Cut(Harvest SHPF 1983)'83

Procol Harum
Same(Regal Zonophone LRZ 1001)'67
Shine On Brightly(Regal Zonophone SLRZ 1004)'69

A Salty Dog(Regal Zonophone SLRZ 1009)'69
Home(Regal Zonophone SLRZ 1014)'70
Broken Barricades(Chrysalis ILPS 9158)'71
Live In Concert(Chrysalis CHR 1004)'72
A Salty Dog(MFP 5277)'72*different versions.
Grand Hotel(Chrysalis CHR 1037)'73
Exotic Birds & Fruit(Chrysalis CHR 1058)'74
Procol Ninth(Chrysalis CHR 1080)'75
Something Magic(Chrysalis CHR 1130)'77

Quatermass
Same(Harvest SHVL 775)'70

Quiet Sun
Mainstream(Island HELP 19)'75

Quiet World
The Road(Dawn DNLS 3007)'70

Ramases
Space Hymns(Vertigo 6360 046)'71
Glass Top Coffin(Vertigo 6360 115)'75

Rare Bird
Same(Charisma CAS 1005)'69
As Your Mind Flies By(Charisma CAS 1011)'70
Epic Forest(Polydor 2442 101)'72
Someboys Watching(Polydor 2383 211)'73
Born Again(Polydor 274)'74

Raw Material
Same(Evolution 21006)'70
This Is (Neon NE 8)'71

Refugee
Same(Charisma CAS 1087)'74

Renaissance
Same(Island ILPS 9114)'69
Illusion(Island HELP 27)
Prologue(Soverein SVNA 7253)'72
Ashes Are Burning(Sovereign SVNA 7261)'73
Turn Of THe Cards(BTM 1000)'74
Scheherazade & Other Stories(BTM 1006)'75
Live At Carnegie Hall(BTM 2001)'76
Novella(WB K 56422)'77
A Song For All Seasons(WB K 56460)'78
Azure D'or (Illegal ILP 008)'81
Camera Camera(Illegal ILP 008)'81
Time Line(IRS SP 70033)'83

Riff Raff
Same(RCA SK 8351)'73
Original Man(RCA 5023)'74

Roxy Music
Same(Island ILPS 59200)'72
For Your Pleasure(Island ILPS 59232)'73
Stranded(Island ILPS 59252)'73
Country Life(Island ILPS 59303)'74
Siren(Island ILPS 59344)'75
Viva(Island ILPS 59400)'76
Greatest Hits(Polydor 2302 073)'77
Manifesto(Polydor POLH 001)'79
Flesh & Blood(Polydor 2302 099)'80
Avalon(EG EGHP 50)'82
The High Road(EG EGMLP 1)'83

Samurai
Same(Greenwich GSLP 1003)'71

Secondhand
Reality(Polydor)'68
Death May Be Your Santa Claus(Mushroom MRE 2006)'71

Seventh Wave
Things To Come(Gull GULP 1001)'74
PSI FI(Gull GULP 1010)'75

Pete Sinfield
Still(Manticore 2001)'73

Slapp Happy
Sort Of(Polydor 2310 204)'72
Same(Virgin V 2014)'74
Acnalbasac Noom(Recommended)

Soft Machine
Same(US.Probe CPLP 4500)'68
Volume Two US PROBE CPLP 4505)'69
Third(CBS 30339)'70
Faces & Places vol.7(BYG 529907)'71
*French press only.original S.Machine.
Fourth(CBS 64280)'71
Fifth(CBS 64806)'72
Sixth(CBS 68214)'73
Seventh(CBS 65799)'73
Bundles(Harvest SHSP 4044)'75
Softs(Harvest SHSP 4056)'76
Alive & Well In Paris(Harvest SHSP 4083)'78
Land Of Cockayne(EMI EMC 3348)'81

Solstice
Silent Dance(Equinox EQRLP 001)'84

Spirogyra
St Radiguns(B & C CAS 1042)'71
Old Boot Wine(Pegasus PEG 13)'72
Bells Boots & Shambles(Polydor 2310 246)'73

Spring
Same(NEON NE 6)'71

Strawbs
Same(A&M AMLS 936)'69
Dragonfly(A&M AMLS 970)'70
Just A Collection Of Antiques(A&M AMLS 994) '70
From The Witchwood(A&M AMLS 64304)'71
Grave New World(A&M AMLS 68078)'72
All Our Own Work(Hallmark SHM 813)'73
Bursting At The Seams(A&M AMLH 68144)'73
Hero & Heroine(A&M AMLH 63607)'74
Strawbs By Choice(A&M AMLH 68259)'74
Ghosts(A&M AMLH 68277)'75
Nomadness(A&M AMLH 68331)'76
Deep Cuts(Pyster 2391 234)'76
Burning For You(Oyster 2391 287)'77
Dead Lines(Arista SPART 1036)'78

String Driven Thing
Same(Concord CON 1001)'71
Same(Charisma CAS 1062)'72
Machine That Cried(Charisma CAS 1070)'73
Please mind Your Head(Charisma CAS 1097)'74
Keep Yer'and On It(Charisma CAS 1112)'75

Sun Treader
Zin Zin(Island HELP 13)'73
Music Of Morris Pert(Chantry ABM 21)'76

Tempest
Same(Bronze ILPS 9220)'73
Living In Fear(Bronze ILPS 9267)'74

Third Ear Band
Alchemy(Harvest SHVL 756)'69
Same(Harvest SHVL 773)'70
Macbeth(Harvest SHSP 4019)'72

The Keith Tippett Group
You are Here I Am There(Polydor 2384 004)'70
Dedicated To You,But You Weren't Listening (Vertigo 6360 024)'71

Titus Groan
Same(Dawn DNLS 3012)'70

Tonton Macoute
Same(Neon NE 4)'71

Trader Horse
Morning Way (Dawn DNLS 3004)'70

Trees
The Garden Of Jane Delawney(CBS 63837)'70
On The Shore(CBS 64168)'70

T2
It'll All Work Out In Boomland(Decca SKL 5050)'70

Tudor Lodge
Same(Vertigo 6360 043)'71

Twelfth Night
Live At The Target(Twelfth Night Records TN 002)'81
Fact & Fiction(Twelfth Night Records TN 006)'83
Live And Let Live(Music For Nations MFN 18) '84
Art And Illusion(Music For Nations MFN 36)'84
IXX(

Twink
Think Pink(Polydor 2343 032)'70

UK
Same(Polydor 2302 080)'78
Danger Money(Polydor 2302 089)'79
Night After Night(Polydor 2302 096)'79

Van Der Graaf Generator
Aerosol Gret Machine(Fontana 6430 083)'68
The Least We Can Do Is Wave To Each Other (Charisma CAS 1007)'69
H To He Who Am The Only One(Charisma CAS 1027)'70
Pawn Hearts(Charisma CAS 1051)'71
68-71(Charisma CS 2)'72*best album.
Godbluff(Charisma CAS 1109)'75
Still Life(Charisma CAS 1116)'76
World Record(Charisma CAS 1120)'76
The Quiet Zone(Charisma CAS 1132)'77
Vital(Charisma CVLD 101)'78

Rick Wakeman
Six Wives Of Henry VIII(A&M AMLH 64361)'73
Journey To The Centre Of Earth(A&M AMLH 636 21)'74
King Arthur(A&M AMLH 64515)'75
Lisztmania(A&M AMLK 64583)'76
No Earthly Connection(A&M AMLK 64583)'76
White Rock(A&M AMLK 64660)'77
Criminal Record(A&M AMLK 64660)'77
Best Known Works(A&M AMLH 68447)'78
Phapsodies(A&M AMLX 68508)'79
1984(Charisma CDS 4022)'81
The Burning(
Rock'n'Roll Prophet(Moon Lunlp 1)'82
G'Ole(Virgin CAS 1162)'83
Silent Nights(T.B.G.President Records RW 1) '85
Live At Hammersmith (T.B.G.President records RW2)'86
Country Sirs(CODA NEGA 10)'86

Wally
Same(Atlantic K 50051)'74
Wally Gardens(Atlantic K 50180)'75

Dallyl Way's Wolf
Canis Lupus(Deram SDL 14)'73
Saturation Point(Deram SML 1104)'73
Night Music(Deram SML 1116)'74

WEB
Fully Interlocking(Deram SML 1025)'68
Thraphosa Blondi(Deram SML 1058)'70
I Spider(Polydor 2383 024)'70

White Noise
An Electric Storm(Island ILPS 9099)'69
Same(Virgin V 2032)'75
Re Entry(

Robin Williamson
Myrrh(Island HELP 2)'72
Journey Edge(USFlying Fish 033)'77
American Stonehenge(US Flying Fish 062)'78
Glint At The Kindling(US Flying Fish 096)'79
Songs Of Love & Parting(US Flying Fish 257) '81

Writing On The Wall
Power Of The Picts(Middle Earth MDLS 303)'69

Robert Wyatt
The End Of An Ear(CBS 64189)'70
Rock Bottom(Virgin V 2017)'74
Ruth Is Stranger Than Richard(Virgin V 2034) '75
Nothing Can Stop Us(Rough Trade Rough 35)'81
Old Rotten Hat(Rough Trade Rough 69)'85

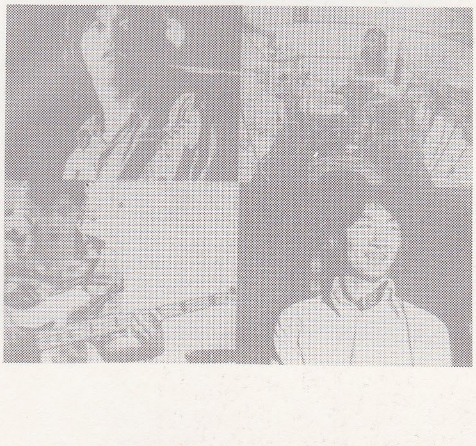
Yes
Same(Atlantic 588 190)'69
Time & A Word(Atlantic 2400 006)'70
The Yes Album(Atlantic 2400 101)'71
Fragile(Atlantic 2401 019)'71
Close To The Edge(Atlantic K 50012)'72
Yessongs(Atlantic K 60045)'73
Topographic Oceans(Atlantic K 80001)'73
Relayer(Atlantic K 50096)'74
Yesterdays(Atlantic K 50048)'75
Going For The One(Atlantic K 50379)'77
Tormato(Atlantic K 50518)'78
Yesshows(Atlantic K 60142)'80
Drama(Atlantic K 50736)'80
90125
9012 Live

7 JAPAN

四人囃子

四人囃子の歴史は、都立鷺宮高校において同級であった森園勝敏（G.）と岡井大二（Dr.）がMusic lifeメンバー募集により応募して来た中村真一（B.）を加えて結成した“ザ・サンニン”に逆上る。後に森園の武蔵ヶ丘高校時代の同級生、坂下秀美（Key.）が加入した時点で第一期四人囃子が誕生し、彼らは71年5月の東大五月祭においてデビューを果たす。彼らが高校3年の時であった。高校卒業後すぐの72年4月に彼らは当時絶頂期であったフラワー・トラベリング・バンドの帰国コンサートツアーに同行し、各地で評判を得る。これが「プロとして最初のステージ」（岡井談）であった。以後コンサート中心の活動を続けた彼らは、翌73年11月に初のLP　「二十歳の原点」を発表する。これは高野悦子という女性の手記を映画化した同名映画のサントラとして製作されたもので、映画での悦子役である角ゆり子の語りと映画主題曲の演奏を合い間に織り込みながら四人囃子の演奏が進行するものである。その演奏は、彼ら本来の姿とは少々異なり、「モア」～「おせっかい」期のピンク・フロイドのアコースティック・サイドに影響を受けたものとなっている。そしてついに74年6月に実質的1stアルバム「一触即発」を発表。この「一触即発」こそ70年代の日本のロック・シーンにおいて正しく最高峰に位置する作品であり、彼らをそのシーンのスターダムに押し上げたアルバムである。この時期、彼らのサウンドは全体にエコーを多用し、曲によってメロトロンをフィーチャーするなどの理由から“プログレ”と呼ばれる事が多かったが、一方ディープ・パープル張りのハードな面も合わせ持ち、決して一つのレッテルの範ちゅうに納まる物ではなかった。75年に入り四人囃子は初のメンバー変動を経験する。2月にナイス，E.L&Pスタイルのグループ「ミスタッチ」のキーボード奏者茂木由多加が加入し、ダブル・キーボードの5人編成となる。そして5月にはオリジナルメンバー中唯一人大学に進学していた中村が就職期になりグループを脱退し、代わってやはり「ミスタッチ」のベーシストであった佐久間正英が加入する。9月には初のシングル「空飛ぶ円盤に弟が乗ったよ」を発表。直後茂木がグループを離れ、再び四人編成に戻る。76年になりレコード会社を東宝からCBSソニーに移し、5月に2ndアルバム「ゴールデン・ピクニックス」を発表。この四人囃子のオリジナリティである「多面性」が最大級に発揮されたこのアルバムも「一触即発」同様好調なセールスを記録し、彼らは日本のロック界において不動の地位を確立したのである。当時のMusic Lifeの人気投票において彼らが国内2位であった事からも、その人気が近年のプログレ系バンドの比ではなかった事がうかがえる。しかしこのアルバム制作直後にグループは最重要メンバー森園の脱退という一大危機に直面する。年内のスケジュールはハルヲフォンの小林克巳の助けを得て消化するが、活動は一時休止を余儀なくされる。やがて北海道は札幌で「クロス・トゥ・ジ・エッヂ」「マーシャン・ロード」のギタリストとして活躍する佐藤ミツルを見い出し、77年2月に正式メンバーとして招く。ちなみに「マーシャン・ロード」にはあの中島優貴も共に在籍していた。この無名だが、驚異的なテクニックと個性を兼ねそなえたギタリストを得た新生四人囃子はキャニオンとＬＰ３枚制作の契約を結ぶ。高度でテクニカルな要素を多く盛り込みながらも、ポップなメロディーを前面に押し出した彼らは、新たな層のファンをも獲得し、77年8月に3rdアルバム「プリンテッド・ゼリー」を、78年7月には4thアルバム「包（パオ）」を発表して再び好調な活動を展開する。またこれらと同時期の78年1月には東宝レコードより73年8月の俳優座でのライブの模様を収めたアルバムが、グループの強い反対を押し切って発売された。この「'73四人囃子」は音質・演奏共粗悪だが、当時の彼らの姿を知る非常に貴重な資料である。79年に入りオリジナルメンバーの坂下が脱退。再び旧メンバーの茂木がヘルプの形で戻って来る。7月にカンフー映画の主題歌「拳法混乱（カンフージョン）」のシングルを発表。そして11月には5thアルバム「NEO－N」を発表る。この最終作となったシースルー・レコードのアルバムは森園脱退後の後期四人囃子の作品の中で最も充実した出来となっている。だがグループはこのアルバムのためのライブもほとんど行なわずに活動を停止し、解散状態となってしまう。

四人囃子の歴史を振り返ってみると、彼らが高い音楽性と絶大な人気を共有し得た、日本において稀有の存在であった事に今さらながら驚く。「良いものはアンダーグラウンド」といった図式が定着した感のある日本のプログレシーンに、彼らの様な活力溢れる存在が再び登場するのはいつの日か……。　城元隆志

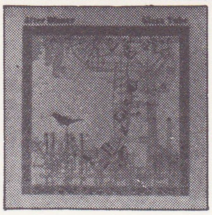


FAR EAST FAMILY BAND

ファー・イースト・ファミリー・バンド（以下FEFBと略す）の母体は73年に１枚のシングルと１枚のＬＰ（日本人—COLUMBIA CD 5047）をリリースしたファーラウト（FAR OUT）である。このグループは後にFEFBのリーダーになる宮下フミオを中心にジョーや喜多嶋修らをゲスト参加させて制作された。このアルバムは良くも悪くも70年代前半の日本のロック・シーンというものが反映されたアルバムで、60年代のブルース、あるいはサイケデリック・ロックからの影響と、その中に日本人としてのアイデンティティーを注入させようとしたものであった。この段階ではコンセプトだけが目立ち、あまりに未消化でプリミティヴなものであったが、後のFEFBの伏線としての役割を感じさせる。FEFBとしてのファースト・アルバムは75年にリリースされた「地球空洞説」である。FAR OUTのコンセプトをより発展させたLPで、日本ぶえなどを導入し、日本人としてのプログレッシヴ・ロックを暗中模索するひたむきな姿勢が感じられる。又、初期ピンク・フロイドからの影響が強い。この時のメンバーは宮下文夫（VOCAL & GUITAR）、伊藤明（Kbd）、深草彰（BASS）、福島ヒロヒト（GUITAR）、高橋正明（Kbd）、高崎しずお（D-RUMS）の６人で、このメンバーで「多元宇宙への旅」まで創ることになる。翌76年には前作からの曲と未収録曲を収録したアルバム「NIPPONJIN」がリリースされ、これはドイツ等でもリリースされた。明らかに前作の延長線上に位置する音である。このアルバムはクラウス・シュルツェによってミキシングされた。77年には彼等の最高作と思われる「多元宇宙への旅」をリリース。このアルバムは当時ブリティッシュ・プログレッシヴのメッカといわれた、ヴァージン・レーベルの古城を改造したスタジオ、「マナー」で、プロデューサーにクラウス・シュルツェを迎えて制作された。この作品にはA面３曲、B面が６曲の小品からなる組曲「多元宇宙への旅」が収められている。セッション的にメンバーの感性を大切にした録音がされており、ダブル・キーボードのうま味と文夫のデイヴ・ギルモア的なトーンのギターが印象に残る好作品である。オリジナルはポスター付で、後にジャケット違いで再発されたが、いずれも廃盤である。そしてFEFB最後のアルバム「天空人」がリリースされる。この作品はアルバム・カヴァーをジェネシス、ヴァンダー・グラーフのカヴァーで有名なポール・ホワイトヘッドに依頼したもの。サウンドはより洗練されているものの、メンバーの分裂もあり、広がり感には欠けている。このアルバムを最後にして各メンバーはそれぞれソロ活動に入って行くのである。高橋正明は名前を喜多郎とし、ビクターの新盤レーベル「ZEN」よりファースト・ソロ「天界」をリリースし、後に日本を代表するシンセシストとして世界に名を轟かすことになるのは御存知と思う。もう一人のキーボード奏者伊藤明は、名を伊藤祥と変え、「INNER LIGHT OF LIFE」というソロでデビューし、喜多郎と同系統のエレクトロニクス作品（カタログ参照）をリリース。後にアニメーションのサウンド・トラック盤を手がけながら現在に至っている。リーダーである宮下フミオはギターからシンセサイザーまでもこなし、やはりソロ・アルバムを続々とリリースするが、彼の持ち味を殺してしまっており、 単純極まりないエレクトロニクス作品をリリースするに甘んじてしまっている。ベーシストの深草彰は観世音というグループを結成し、アンダーグラウンドな活動を行なっていたが、自主制作で「MADE IN JAPAN」というアルバムの片面にレコーディングしただけで現在は解散してしまっている。日本的な音階をプログレッシヴに同化させた好作品であった。彼は現在はソロ活動をしており、今年SIRIUSレーベルよりソロ・アルバム（SC 2011）をリリースしている。内省的ではあるが良質な作品である。



FEFBの求めたものはプログレッシヴ・ロックと日本音楽の融合であった。その発想は、いささか60年代を感じさせる短絡的なものではあったが、日本のロックの黎明期から80年代への橋渡しをした重要なグループであったといえるだろう。日本人としてのアイデンティティーを追い求めた姿勢にも好感が持てる。ただ、同時代の欧米のグループ達と比べると、明らかに５年程は立ち遅れていたような印象を受けるが、それはなにもFEFBに限ったことではなく、70年代の日本のロックシーン全体に言えることである。FEFBはいろいろな意味で僕達日本の70年代の世代を代表する象徴的なグループといえるのではあるまいか。 **山崎尚洋**



AFTER DINNER
Glass Tube

KANG-GUNG RECORD AFT1001 '83 廃

デビュー・シングル「アフター・ディナー／夜明けのシンバル」に続く45回転ＬＰ。変形小冊子付き。テープ操作された効果音、昭和初期の歌謡曲、わらべ唄を思わせる女性ヴォーカリスト、ハコの唄、時として雅楽のような楽器の使用法の計算され切った組み合せが絶妙である。全体が、がらくたを精巧に組み立て上げて出来た作り物のようだ。まるで、幼ない頃、道に迷って見知らぬ風景に出会った時のような、不安で不思議で物淋しい感覚を覚える。前衛が昭和初期のイメージをもって、ハコの少女趣味の中で完結しているというべきか。比較的、寺山修司の世界に近い。暗示のようなハコの詩、唄は、どこか「夜明けの晩に鶴と亀がすうべった」という、あの唄へ、あの唄を歌ったリスナー達の遠い思い出へと連がる。（昌）



AIN SOPH
A Story Of Mysterious Forest

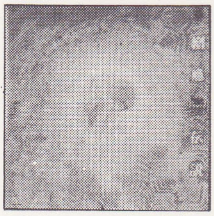
キング GP 801 '80 廃

天地創造、幽霊船といった関西の伝統的グループの強者らが集結したアイン・ソフ。オリジナルメンバーだったKeyの藤川から服部に交代後発表された本1stは、テクニカルかつ変拍子を伴った透明感漂うシンフォニック＆ジャジーなＡ面と、壮麗でクラシカルなシンフォニーを主体とした幻想美に満ちた組曲のＢ面で構成されている。収録された全曲中Ａ－２、Ｂ－２のアコースティックギターによるナンバーは、グループの要でもある山本要三の根底と心の描写を物語っている様だ。グループはその後服部とDsの名取が抜け、新作発表の話も跡切れてしまい、以後６年間の沈黙を守るが、86年の春、再び藤川を迎えベラフォンのDrを兼ねる富家も加えて、2ndの「Hat and Field」を発表する。（大）



A-MUSIK
ẹ kú ìrọ̀jú

竹田賢一(大正琴､vo) 率いるアヴァンギャルド・チーム。元パンゴの篠田(sax)、石渡(ds)の他、小山哲人(b)、工藤冬里(pf)、千野秀一(kbd) といったメンバーで、或る意味ではアンダーグラウンド・シーン最後のスーパー・グループという言い方も可能だ。ただ、残念なことに一般レベルでの侵透性がやや低い。その原因となっているのはグループの持つ政治性だろう。気がついてみると若者が政治を語らない時代になってしまったという訳だ。音楽的にはロック色より、むしろＣ・ヘイデンのリベレーション・ミュージックを思わせるジャズ的なアプローチを感じさせる。竹田の大正琴を大担にフィーチャーしたＡ-1は感動的である。多少、メンバーは流動的なようだが、今後の活動も期待したいところである。（千）



FUMITAKA ANZAI（安西史孝）
樹魔伝説

コロンビア CX-7080 '82 廃

少女マンガの持つ独特のロマンティシズムはどこかシンセ音楽に合う。マンガのＴＶや映画のサントラ、そしてイメージ・アルバムの発売は数多く、最近、内容の良さがアニメ・ファン、マンガ・ファン以外の人にも理解され始めたのはうれしい。本作品もすでに好意的評価を受けている。いろいろな制約を受けながらも、これだけのアルバムを完成させた安西の力量は見事なものだ。Ａ面のトップを聴けばこのレコードの良さが分るにちがいない。好みからいえば、リン・ドラムを使用したドラマチックな曲が見事である。このアルバムのようにシンセ奏者にレコードを作り出す機会が与えられるのは喜ばしい限りで、その機会を全力投球で全うすれば、すぐれた作品が残るという好例である。（吉）



ATARAXIA
刻まれた時間

MADE IN JAPAN MIJ-1007 '86

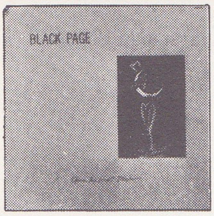
アタラクシアの記念すべきデビュー作品。84年の春、慶応大のユーロ研から現メンバーのVoとＢの村田、Dsの松尾、Keyの沼田、そして現アウターリミッツでＧの荒牧と４人編成で、アタラクシアの母体とも言うべきグループでスタート。翌年には、村田と共にグループの要であるKeyの小町明が加入。本作品発表前に荒牧がアウターリミッツに正式加入する為脱退、後任に大宮淳を迎えて現在のラインナップとなる。ジェネシスから影響を受けたシアトリカルかつヨーロピアンナイズされた音作りが成されており、またはＩＱあたりに近いポンプ系の音をも思わせる。個人的な考え方だが、レコードという形で作品を発表するのが夢であったからには、今後は自己満足に陥ることなく夢以上の目標を持ってほしいと願う。（大）



BIKYORAN（美狂乱）
Parallax

キング K28P410 '83 廃

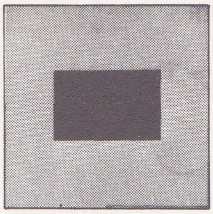
1stと2ndの二作品を残して、一身上の都合で（これが本当の理由かどうかはわからないが）惜しくも解散してしまった美狂乱。彼らの残した二枚の作品共、甲乙を付け難い位の完成度を持っているが、あえて代表作を選ぶならやはり2ndの本作が挙げられるだろう。前作と同じリズム陣に多数のゲストを迎えて、Ａ面は前後期クリムゾンタイプのナンバー、Ｂ面はアヴァンギャルドな室内楽とミステリアスな要素が全面に押し出された組曲構成を展開している。クリムゾンやＲ・フリップに多大な影響を受けた須磨邦雄自身が単なる模倣にとどまる事なく、前衛的な精神と本質を確実に会得した、いわば伝統と叙情の裏に潜む奥深い暗黒と真紅の迷宮への探究を極めてしまった頂点と言うべき名作である。（大）



BLACK PAGE
Open The Next Page

キング K28P 602

ブラックペイジ、衝撃のデビュー作。85年の春に結成され数回に渡るギグを消化、僅か1年足らずで見事に急成長を遂げ本作品のリリースまでに至った、近年には例を見ない驚異的な超テクニカル集団である。メンバー各人共長い間それぞれのバンドやセッションにおいて演奏活動を行っていたので、当然の事ながら素人臭さの全く無いプロの実力を思う存分に発揮している。UK的な曲から、ブラフォードや後期クリムゾンタイプのナンバーまで手掛けるリーダー、小川文明は単なる真似事という低次元とは無縁な、また、それを遙かに超えた自分自身にとっての音楽性を総決算的な形で表わしたのかもしれない。彼のKeyを含めて、弟のGと、B、Ds 共息の合ったプレイを聞かせてくれる。（大）



BRUSH
same title

自主制作盤

このアルバムの存在は一般にはまったく知られていない。1971年に自主製作で発表されており、当時アンダーグラウンドで活動していた二つ以上のグループが合体して完成させたセッションアルバムである。メンバーの中には、フライドエッグ加入前の高中正義も在籍し、作曲、ギター、ボーカルを担当している。内容はクリムゾン、ブラックサバス等の影響を受けたプログレッシヴなものであり、パワーこそ不足するが、当時の同傾向の作品の中でも、最も創造的なものである。レコードとして残っているものこそ少ないが当時アンダーグラウンドで活動していた創造的グループは意外と多かった様である。尚、アルバムには30ページのブックレットが付いている。（坂）



J.A.CAESAR（＋悪魔の家＋天井棧敷）
国境巡礼歌/J.A.シーザー・リサイタル

VICTOR SJX 130 '73 廃

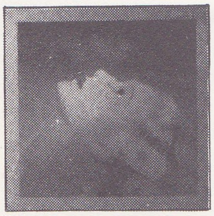
ピンクを基調とした渦状の花弁が起立する地獄に少女が着物をひるがえして舞い踊るカバーデザイン（及川正通か？)、頂きにはJ.A.シーザーらしき人物が立ち、はるか下には天井棧敷の人々の姿も。詳細は不明だが裏面に '73と記されている。かの唯一無二の劇団の劇中歌の集成である。ほぼ同時期に同劇団の"身毒丸"の公演の実況録音盤があるが、内容も近く、数曲重複している。寺山修司のテクストから触発された音は彼の内なる記憶の音符で構成されており、日本的普遍性を有する。肉体による表現はここでは民族楽器と電気音楽におきかえられ、言葉はその間を走りぬけ、あるいはからみつく。ここで生まれた劇的な音は後の映画のサントラでも再生されている。（修）



COSMOS FACTORY
トランシルバニアの古城

コロムビア YZ-41 '73 廃

卓越したオリジナリティーを身につけていた四人囃子、和風旋律に基づくプログレを築き上げたファーイーストと並び、初期の日本のプログレ・シーンを代表するのがこのコスモス・ファクトリー。彼らは4枚のアルバムを制作したが、プログレ色の強いのは初期の2枚であり、その中でもこの 1st アルバムが傑出した作品。陰鬱な空気の流れる中、冷たいメロトロンの波と泣き泣きのギターを中心として展開していく様は正しく初期クリムゾンの叙情パートのそれ。日本のプログレ史上、叙情派シンフォニック・ロックの先駆的アルバムであり、当時のプログレアルバムの中で1、2位を争う高水準作だ。なお、東芝に移籍しリリースされた2ndアルバム「コスモス号」の方はよりカラフルなサウンドへと変化した。（UNO）



CRONICLE
Live At "Whisky A-Go-Go"

東芝EMI ETP-72037 '75 廃

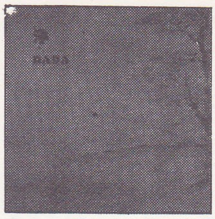
1975年に突如としてアメリカデビューをはたしたクロニクルは逆輸入の形で日本に紹介されたグループであった。(アメリカ盤のジャケットは日本盤と異なる。) デビュー直後はNHKに出演したり、PFMの日本公演の前座をつとめたりしてかなり話題になったが、その後セカンドアルバムを発表したころからファンが減りはじめ、1977年ごろまでは小さなライヴハウス等で活動を続けていた様だが、やがて自然解散してしまう。彼等は、ピンクフロイド世代のグループの一つであり、ファーイースト・ファミリーバンドとも共通する音楽性を持ったグループである。（坂）



CROSSWIND
そして夢の国へ

KITTY 28MS0008 '82

かつてフュージョン・グループとして売り出していたグループのアルバムの中で、最もプログレ色が強いものを1枚挙げろと言われたら、やはりクロスウインドの3rd（本作）だろう。スペース・サーカスやプリズムがスパニッシュ・メロディーを多用しているのに対してこのクロスウインドはあくまでハード・ロック色の強い派手な小川銀次のギターを中心とするサウンド形態をとっており、バックのリズムのロック乗り、キーボードもオルガンを多用したプレイをベースとして複雑な変拍子と派手なリフのアップ・テンポ・ナンバーとメロトロンや生ギターをバックにヴァイオリン奏法を多用し、泣きのメロディーを演出するギターをフィーチャーしたスローバラードとの対比が作り出すトータル・アルバムに仕上っている。（UNO）

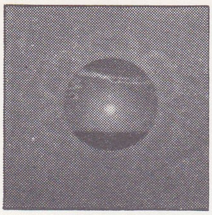


DADA

浄

VANITY 0001 廃

ヴァニティ・レーベルの記念すべき第一弾リリースの作品。初期ヴァニティはエレクトロニクス系の作品を中心にリリースしていたが、その中でも最高レベルにあるのがこの作品であろう。内容は、日本的な静かなイメージのもので、実験的な要素がかなり感じられる。当時はまだ、日本的なものを取り入れたエレクトロニクス・ミュージックは少なく、ダダのこの作品が先駆けといえる。ダダはその後、キングより2ndアルバムを発表した後、リーダーの泉奥陸彦は、ケネディを結成して活躍中であり、現在でもそのアヴァンギャルドな姿勢はくずしていない。（坂）

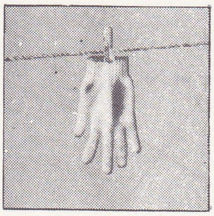


FAR EAST FAMILY BAND

地球空洞説

コロムビア CD-7139 '75

1973年頃にピンク・フロイドが爆発的な人気を日本で誇り、同時にピンク・フロイドからの影響を受けて幾つかのグループが日本で誕生した。その代表選手が四人囃子とこのファーイースト・ファミリー。彼らはピンク・フロイドの「おせっかい」あたりからの影響が強く、和旋律によってこれを表現するグループ。また精神的な内向性を重要視していたグループでもある。彼らは３枚のオリジナルＬＰとイギリス他で発売された編集ものの「Nipponjin」を発表しているが、最も欧米のプログレ・スタイルの構成を持っているのは 1st である本作。その他のものはインプロ傾向が強いシンセ中心のサウンドである。なお深草アキは観世音、喜多郎と伊藤祥はソロ活動へとグループ解散後、歩んで行った。（UNO）



FAROUT

日本人

コロムビア CD-5047 廃

ファーイースト・ファミリーバンドの前身グループがこのファーラウト。ファーイーストと同じくピンク・フロイドをベーシックにしたサウンドを有していたが、琵琶の喜多嶋修等の邦楽器のゲストを加え、より和旋律と精神性に基づくインプロヴィゼーションを中心とした荒削りで大胆なサウンドを持っていた。変にまとまりのついたファーイーストよりも自分達のスタイルを暗中模索している本作を評価する方が多く、私もその中の１人。特に〝Too Many People〞の出来がよい。また〝日本人」というアルバムに、リミックス・ヴァージョンで収められている。なお彼らにはＬＰ未収のシングル「シュシュ」があるが、これは聞くべきものはない駄作。(UNO)



FLIED EGG

Dr. Siegel's Flied Egg Shooting Machine

VERTIGO 8603 '72 廃

日本のプログレ黎明期の中で、ブリティッシュ・スタイルの本格的プログレッシヴ・ロックの形態を全面的に押し出した初めてのグループがフライド・エッグだ。エマーソンからの影響が多大なオルガン・ワークとギターを担当する成毛滋、パワフル・ドラミングと泣かせる歌声の持ち主であるつのだひろ、そしてベーシストであった高中正義の３人による強力トライアングルが結成され、1st アルバムである本作が発表されたのは1972年のこと。EL&Pのタルカスを思わせる〝Oke-Kus〞やK.クリムゾンのエピタフ調の泣き泣きのナンバー〝プラスティック・ファンタジー〞、Rare Bird の“As Your Mind...” 風のドラマティック・ナンバー“Guide Me”あたりがこのアルバムのハイライト。初期の名作だ。（UNO）

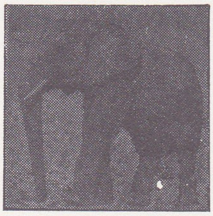


FLYING TEA CUP

same title

インターコム ICR-1207 '81 廃

東大のブリティッシュ・ロック研究会内で結成され、学園祭で活動していたグループが、卒業記念として制作した限定100枚プレスのアルバム。アルバムの1/2くらいは、ボーカルを中心とした２流のポップ&ロックだが、残りの1/2はUK的コード進行を中心とするプログレッシヴ・ロック。特にＡ面ラストの長編ナンバーは仲々の出来栄えでこのアルバムのハイライト。1980年前後に東京では UK から影響を受けたサウンドを有するグループが数多く存在していたが、その中の一例。全体的にはネガスフィアに近い音楽性を持ったグループである。おそらくこのアルバム後の活動はないと思われる。（UNO）

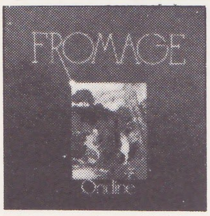


FOOD BRAIN

Social Gathering

ポリドール MP-2100 '70 廃

このアルバムは1970年に発表されたものだが発表当時はかなりの話題になり、ロック雑誌でも大きく扱われ賛否両論で物議をかもした作品だった。内容の方は、ジャズに影響されたアバンギャルドなインストゥルメンタルロックであり、当時流行していたサイケデリックで、やたらと楽器のソロを強調するスタイルの一つである。メンバーは、ドラムに角田ヒロ、ギターの陳シンキ、ベース加部正広、キーボードの柳田ヒロの４人で、そのテクニックとパワーはものすごい。しかし発表後15年以上たっているこの作品は、当時の時代背景をも考えて聞かないと理解できない面があるかも知れない。（坂）



FROMAGE
Ondine

BELLE ANTIQUE 8401 '84 廃

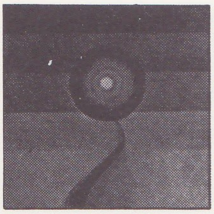
本誌マーキーが設立したベル・アンティークレーベルの第一弾としてリリースされた、京都のフロマージュの1st。現ページェントの中島一晃や永川敏郎（ノヴェラ、ジェラルド）が在籍していた事はあまりにも有名だが、そんなお定まりな経歴とは無関係に、彼らは日本語特有のイントネーションや響き、感性を大切に持った歌心あるグループと言えよう。派手な演奏ではないが、人間の本質に迫るかの様な瑞々しさと躍動感は、同じキャメル影響下のグループにおいて、フレンチ系やジャーマン系にはない趣を秘めている様だ。度重なるメンバー交代にも拘わらず、Vo＆フルートの東沢とDsの谷口を核に甘く時には切なく劇的に展開しつつも決して八ード路線に陥らない、極めて純粋な作品であると言えるだろう。（大）



GERARD
same title

KING K28P-424 '84

ノヴェラのキーボード奏者である永川敏郎のソロ・プロジェクトとしてスタートしたジェラルドは現在までにLP２枚と12"シングル１枚をリリースしているが、何と言ってもプログレとして傑出した作品なのはこの1stアルバム。美狂乱の伝説的ドラマー佐藤正治らをゲストとして迎え、メロトロン、オルガン、シンセ等の多彩なキーボード群をメインとして繰り出す大シンフォニック絵巻。大胆で陰鬱なベースラインから早いパッセージで繰り出されるA-2の中間部や、泣き泣きのメロトロンをフィーチャーして歌い上げる中期ジェネシス風バラードのB-1、スリリングなドラミングが聞きもののB-2、キーボード群の洪水によってドラマティックに演出されるB-3等聞き所が沢山のシンフォニック・ロックの傑作だ。（UNO）



HAPPENINGS 4＋1
引潮・満潮

東芝 CTP 9037 廃

ハプニングス・フォーというと「透明人間」のイメージからどうしてもポップ・グループと思われがちだが、彼等も初期のころは、ブリティッシュ・ロックに影響を受けた創造的なグループだった。このアルバムはトータルに作られており、人の誕生から死までを、引潮と満潮にたとえた内容で仕上げている。特にB面の「死に直面した人間の状態と心理」という10分以上の大曲では、当時のブリティッシュ・ロックの創造的な面を取り入れ、プログレッシヴに完成させた名曲である。ジャケットも天国に続く階段を描いたチト河内デザインのもので創造的な息吹きが伝わってくる。この作品にはメンバー以外に篠原信彦がオルガンで参加している。（坂）



HERETIC
Interface

SOUND OF POPPY INC. JHWH-1002 '85

元オシリスの河原博文が中心となって結成されたプロジェクト、ヘレティックのデビュー作。タイトルの「インターフェイス」はエルドンを意識したものとも思うが、内容の方はそんなにエルドン的でもなく、むしろエレクトロニクスとシンフォニックの良い面をうまく調和させた聞き易いものに仕上っている。地味なジャケットデザインや内容がいまひとつ盛り上りに欠ける点など、インパクトが弱い面もあるが、他の日本のグループが持っていない計算された音楽理論を取り入れてアルバムを制作している所など良い意味での日本のプログレ界のお手本となるべき完成度の高い作品である。（坂）



TERUTSUGU HIRAYAMA（平山照継）
Castle Of NOI

キング K28P 421 '83

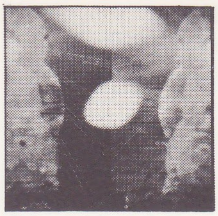
ノヴェラのギタリスト兼リーダー、平山照継のソロ名義第一作。自らのプロジェクト、テルズシンフォニアを率いて彼自身が創作した童話を元に壮大なシンフォニーと夢物語が繰り広げられている。プログレッシヴ系のギタリストのソロ作品はそう珍しいものではないが、S・ハケットにも通ずるファンタジーの世界、中世浪漫を題材にしたスタイルの作品においては、我が国では彼が初めてではないだろうか。構想からプロデュースに至るまで、トータルアートや大作志向を基盤とする彼の意図に沿った見事な名作に仕上がっている。85年には2ndの「シンフォニア」をリリースするが、こちらも壮麗な音ながら親しみ易いメロディが魅力の好作品。ノヴェラの音がどんなに変ろうと彼の本質は変りはしない。（大）



MORIO INADA（稲田保雄）& THE BEMI FAMILY
感覚思考

東宝 タム AX-5803 廃

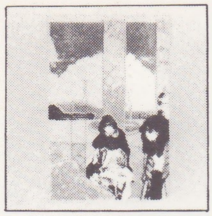
ジャズの中古盤コーナーで見つけたこのレコードとの付き合いもずいぶん長いものになってしまった。日本の音楽にだってまだまだ埋もれてしまうには惜しいレコードがたくさんあると教えてくれた１枚だ。それからというもの、日本のジャズ、映画音楽、現代音楽、効果音の中古盤を漁る羽目になってしまうのである。オルガン、シンセ、そしてメロトロンを操る稲田保雄なる人物ただ者ではない。彼に関する資料がないのが残念。ドビュッシー、ベートーヴェンの曲を用いている通り、クラシカルなジャズ・ロック・サウンドが聴ける。場違いな曲もあったりするが、イタリアン・ロック・ファンまっ青のAの中間、B面の前半のコーラス・メロトロンを用いたところなど聴き応え十分。（吉）



AKIRA ITO (伊藤詳)
Bosatsu & Mugen

BLACK BBL-2020 '78 廃

ファー・イースト・ファミリー・バンドのもう一人のキーボーダー、伊藤詳がグループ解散後に創ったソロ第一弾。以後、アニメーション・フィルムのバック・グラウンド・ミュージック等を手がけて現在に至っている。本作品は、日本舞踏家のハナヤギ・キヌスヨの依頼で、日本舞踏を今まで舞ってきた音楽とは違った新しい音楽で作りたいとの要望に答えて伊藤詳がイメージをサウンド化した作品である。彼も日本人のアイデンティティーを打ち出した作品を自分のものとしたいという欲求があり、それが、具体的に表現された第一作目ということができると思う。安易に日本音階を使用するということではなしに、日本の思想、宗教の持つ時間への独特のアプローチをある程度、サウンド化した作品として僕は評価したい。(山)



KATRA TURANA
same title

TELEGRAPH RECORDS TG-008 '82 廃

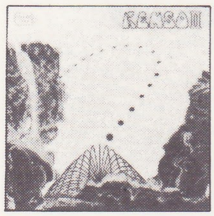
レコード・デビュウ以前のカトラ・トゥラーナはスラップ・ハッピィの影響を感じさす知的なサウンドを演奏していたが、このファースト・アルバム製作時にはかなりオリジナリティの面で進歩がみられる。少なくともあまたある自主制作レコード群の中では傑出した作品であったと思う。以後、大幅なメンバー・チェンジの後で一枚のマキシ・シングルと 2nd アルバムをリリースし、現在も活躍中である。カトゥラ・トゥラーナの音楽は一言でいうと知的なポップ・ミュージックである。現在の彼等は洗練されてきたと同時に多少マンネリを感じさす部分もあるが、アンダーグラウンド・シーンを見渡すかぎり、高水準のヴォルテイジを保っているといえるだろう。(山)



KENNEDY
Twinkling Nasa

KING K28P-597 '86

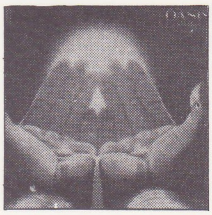
元DADAの泉陸奥彦がペール・アキュート・ムーンのキーボードの仙波基らをゲストに迎えて結成した新生ユニットがこのケネディだ。どうしても元DADAという冠語をつけ、またグループ名がケネディでタイトルがトゥインクリング・ナサとなれば、よくありがちなスペースもののシンセミュージックと想われがちだが、実際の所の趣きはかなり異なる。ドラム、キーボードが一体となり、全編に渡りスリリングに展開されるサウンドに乗せて鋭角に切り込んで行くアヴァンギャルドで大胆なギターソロがフィーチャーされる様は、ホークウインドやHELDONを連想せざるをえない。ましてメロトロンまで飛び出して来るのだからもう…。この機会に読者の皆さんに認識を変えていただきたい作品だ。(UNO)



KENSO
II

PAM-002 '83 廃

アウターリミッツと並び東京のプログレ・シーンを代表するグループであり、最も完成されたオリジナリティーと表現力を身につけている彼らは自主製作で「KENSO」と本作、キング・レコードから「KENSO(III)」、「LIVE」の4枚のアルバムを発表しているが、ライヴ・アルバムを除けば、彼らの本領を発揮しているのはこの 2nd とキングからの 3rd。複雑多彩な変拍子とジャズ・フィーリングに支えられ、目まぐるしく展開して行く流れる様なアンサンブルと美しい調べのフルートと印象深いメロディーを重ねて行くギターが作り出すサウンドは中期PFMやスペインのゴティックに相通じる所。特にいかにも KENSO 的なスリリングなアンサンブルを見せつける〝空に光る〟や〝はるかな地へ〟が素晴らしい。(UNO)



KITARO (喜多郎)
Oasis

CANYON C25R 0030C

「シルク・ロード」の成功以来、一般にも広く知られるようになった喜多郎だが、古くはファー・イースト・ファミリー・バンドのシンセサイザー奏者でもあった。彼のシンセサイザーとの関わりは、クラウス・シュルツェとの出会いがきっかけであった。ソロ・デビューは78年の「天界」であり、マインド・ミュージックとして紹介された。いわば環境音楽の走りとも言えよう。本作は彼の第3作であり、「シルク・ロード」以降の音楽性も既に本作で完成されている。言い尽くされた言い方だが、やはり彼の音楽からは東洋、禅といった言葉を連想してしまう。それは、ロック・フィールドであれほどの名声を博したツトム・ヤマシタもが到達した境地であり、東洋人に流れる血を感じずにはいられない。(飯)



TAKEHISA KOSUGI (小杉武久)
Catch-Wave

CBS SONY SOCM88 '75 廃

タジ・マハール旅行団、イースト・バイオニック・シンフォニア、ツトム山下&ホライズン、高橋悠治等に関わった筋金入りの前衛音楽家。60年代から暖めてきた音作りのシステムを用いて製作されたソロ第1作。タジ・マハール旅行団での試みを、より濃縮、整理したような、まとまりのあるサウンドである。A面は高周波発振機と受信機によって生じる半規則的な音のうねりとヴァイオリンの音色による即興。B面は替ってエコー処理、テープ操作された声が中心になる。共に、ゆったりした直観の音世界が広がるかのようだ。実験的というよりも、むしろ、適度の技術と計算にささえられた上での即興が、感性を一歩先走りさせるかのように、聴き手に音の柔かさとイメージの十二分な広がりを覚えさせる。(昌)

Fr—K



LACRYMOSA
same title

LLE-1008 '84 廃

カトラ・トゥラーナのベーシストであった斎藤千尋が結成したラクリモーザはカトラ・トゥラーナが持っていたアヴァンギャルドなアコースティック・サウンドをより発展させた形態、つまりフランスのユニヴェル・ゼロ、アール・ゾイに代表されるチェンバーロック・サウンドを演る日本では唯一のグループ。現在までにLLEレーベルからアルバム1枚とシングル1枚をリリースしているが、この 1st アルバムは現在の彼らのサウンドに比べるとアヴァンギャルドな即興的パートが多い。特にフランスの DUN あたりと近似した素晴らしい彼らのサウンドは、日本では異端児的存在として捕えがちだが、高い芸術性とスリリングなアンサンブルを持ったグループだ。 (UNO)



LOVE LIVE LIFE＋1
Love Will Make A Better You

KING SKK3009 '71 廃

L.L.L.というグループは当時のプログレ・シーンを支えたキーボード奏者の柳田ヒロとギターの水谷公生に、チト川内、東京ユニオンの管のメンバーを加えたスーパーセッション・グループであり、アルバム3枚を発表しており、本作がその 1st アルバム。このアルバムだけL.L.L.＋1という名義になっており、この＋1なるゲストの人物はあの布施明。(当時、彼はレア・バードが大好きだった!!) 全体的にブラス・アンサンブルとアヴァンギャルドなストリングス、ファズの利いたオルガンとギターを中心としたマクドナルド＆ジャイルズ風のサウンド。そしてラジオ・ボイス的なノイジーな布施明のボーカルがフィーチャーされた実に実験的な先進サウンドを試みている。なお 2ndアルバム以降はブラス・ロックへと変化した。(U)



MAGICAL POWER MAKO
Super Record

ポリドール MR 5055 廃

Polydor 時代の三枚のＬＰはメジャーからのリリースとしては稀なほど自由な創作姿勢に貫かれているように思う。'56年生まれの彼のレコード・デビューは '73年、コンテンポラリーなさまざまな日本の音を引用し、鮮かに定着してみせた。そして2年後この 2ndＬＰを発表。未だ見ぬ異国の幻野から遙か小宇宙までの mind trip。しかしその表現に大仰さはない。一聴すると平淡な音楽のようでいて、その実奥行を感じさせるのはこの音の発生の源が彼の深層部であるからだろう。スタジオという密室での個人録音というと閉鎖的な状況を想像しがちだが彼は多数の聴衆に向けて演奏しているようだ。77年の3rdはバンド編成ということでサウンドの外殻には変化がみられる。 (修)



TOKIHIKO MORISHITA(森下登喜彦) ＋HIS FRIENDS
Toccata

ダルマ ぶ-1 '72 廃

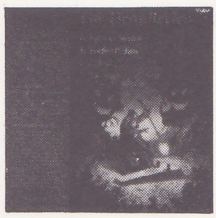
クラシックとロックを融合させた音楽がこんな早い時期に生れていたとは。自主製作に近い発売で、大勢の友人たちの協力を得て1枚のレコードを作り上げたこの人物、ほんとうに音楽が好きでたまらないというのが分る。付属のブックレットを見るとELPのポスターが彼の部屋にはってあり、当時全盛のELPあたりも意識されているのだろうか。ギター・テクニック、ヴォーカル曲はさすがに古さを感じさせ失望させられるが、ピアノを中心として作られたインスト曲は、森下の音楽の造詣の深さをうかがい知ることができ、興味深い曲になっている。パイプ・オルガン入りというのも珍しい。その後、78年に水木しげるの妖怪をイメージした「妖怪幻想」というシンセ・アルバムを発表している。



MUGEN(夢幻)
Léda Et Le Cygne

KING K28P 601 '86

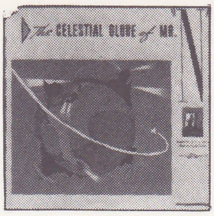
アウター・リミッツと並んで(個人的には) 80年代を代表するプログレ・バンドに成長しつつある夢幻。今までの日本には見られない叙情性とスケールの大きさを持ったデビュー作もよく聴いたものだった。選ぶとなると、ヴァイオリン(川口貴)、フルート(宮武和広)、ギター(中島一晃)の好演に因るものが大きいが一段と磨きのかかった本作であろう。Ｂ１の典型的シンフォニック・ロック・サウンド、フランスの映画音楽を想わせる美しいＢ２、夢幻のもうひとつの面を見せるポップなＢ３など彼らの作り出す音に酔いしれてしまう。ヴォーカルが力量不足であること、曲に意外性がないこと、さらにアレンジに奥行きが足りないことを感じるのは私だけの贅沢な不満であろうか。 (吉)



YUKI NAKAJIMA(中島優貴)
The Prophecies

TRASH 3F-25002 '82

突然われわれの前に現われたこのアルバム、かなりの衝撃を聴く者にあたえた。ヘヴィ・メタル・アーミーのキーボード奏者のソロ・アルバムから、このようなシンセをメインにした一大シンフォニック・ロックが聴けるのだから。リズム・セクション、ヴォーカルのパートなどヘヴィ・メタルの悪い面と良い面が出てとまどってしまうが、そのキーボードの表現力はさすがにプロの仕事である。その中でも、Ａ２は彼の持ち味が引き出されたドラマチックでヘヴィーな名曲。全曲通して50分以上のこの力作、ジャケットも仲々よろしい。その後、快調にレコードを発表しているものの、本作以上に印象を残すものはないのが残念。なお、参加メンバーも実力者が揃っている。 (吉)



HIROYUKI NAMBA（難波弘之）
The Celestial Globe Of Mr.N

WIN RECORDS RAL-8837 '86

デビュー当時から一貫したポリシーを持ち続けている貴重な日本のプログレ・バンドの１つ、難波弘之とセンス・オブ・ワンダー。1st アルバムこそ散漫さが目立つものの、ＳＦ作家でもある彼の作品を音楽化した 2nd「Party Tonight」以後、「飛行船の上のシンセサイザー弾き」、「ブルジョワジーの秘かな愉しみ」と良質の作品を発表し続けているが、本作では、彼の目指すポップスとの共存というテーマが理想的に展開されている。それはエイジア的な、アレンジのみにプログレの大仰さを残すといったものでなく、曲作りの段階からプログレをこよなく愛する彼のセンスが生かされているという点で、ファンも納得する作品に仕上っている。多々あるＳＦのイメージ作品も又、楽しめる。（飯）



NEGASPHERE
Castle In The Air

LLE 1007 '84 廃

ネガスフィアは77年、川崎薫を中心に結成された。81年にL.L.E.から同名のテープを発表し、オムニバスＬＰ「精神工学様変容」に１曲参加したが、この頃はまだバンドの方向性が定まっておらず、散満な印象をぬぐえなかった。しかし、84年に発表された本作で彼等は大きく前進した。菅野・徳武の超強力リズム・セクションに矢田・川崎の目くるめくキーボード・ワークが絡み、真嶋の早弾きギターが駆け抜けるというタイトなプログレッシヴ・ロックがこのアルバムでは展開されている。翌年矢田が脱退し、残りのメンバーにヴォーカルの平田を加え、2nd「Disadvantage」をDIWから発表。その後、菅野・徳武・真嶋が相次いで脱退するが、最近は来日したドイツのNOVALISのDetlef Jobと共演するなど、今なお健在。（降）



NOVELA
魅惑劇

キング GP-800 '80

関西のプログレ・シーンの最たる立て役者であり、日本だけのオリジナリティーを持つ〝ハード・プログレ〟という分野を作り上げたノヴェラの初期の４枚のアルバムは、どれもシンフォニックとハード・ロック色の均整の取れた秀作だが、ここでは懐しいデビューアルバムの本作を取り上げた。このアルバムにはＡ面にハード・ロック色の強い小曲、Ｂ面にシンフォニック色の強い大作が収められている訳だが、本誌読者にとって興味ある所はＢ面、特にラストの「魅惑劇」。メロトロンを始めキーボードの洪水は無論のこと、華麗に次々と展開して行く構成の各パートに飛び出すクラシカル&スリリングなアンサンブルは見事。平山のメロディーメーカーとしての作曲力に脱帽だ。イタリア的シンフォニックを演出する秀作だ。（U）



ORPHEUS
same title

SUBROCK 14710 '83 廃

関西プログレ・シーンでは、ノヴェラの台頭した1980年前後から、ノヴェラから多大なる影響を受けた数多くのグループが登場したが、このオルフェウスというグループもその中の一つ。一時期、夢幻に在籍していた事のあるギターの釜木を中心として、メタル色を持つドラマティックなナンバーを全面的に展開する。メロディーラインが美しく大作指向の楽曲はこの手のグループとしては仲々のもの。ボーカルの不安定な歌唱力と薄っぺらなキーボード・ワークに難があるのが残念。なおこのオルフェウスはこのアルバム発表後、シルフィードというオルフェウスのサウンドを後継するグループと、同じくノヴェラ系の音をベーシックとしながらもポップ・ロック色を加味したサウンドを展開する剣の舞とに分裂した。（UNO）



OUTER LIMITS
A Boy Playing The Magical Bugle Horn

MADE IN JAPAN MIJ-1009 '86

シンフォニックロックの王道を行くアウターリミッツのセカンドアルバム。作品の完成度は高く、グループのスタイルもこのアルバムによって確立された様に思う。音楽的にみてもクラシカルでシンフォニックであるにもかかわらずかなりシリアスな面も兼ねそなえている点など高度な内容であるし、この点から考えても現在でも彼等は本物のマニア向けのプログレグループとしての態度を崩してはいないと思うが、今後のこの手のグループの運命の別れ道ともいえるメジャーへの進出という問題が、彼等の音楽傾向をどのように変えていくかが気がかりでもある。（坂）



PAGEANT
螺鈿幻想

MADE IN JAPAN MIJ-1005 '86

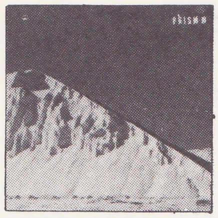
関西の大御所、ページェントのデビュー作。Made In Japan レーベルからアウターリミッツの 1st に続く第二弾としてリリースされた本作は、日本古来の旋律と耽美さが随所に鏤められた、夢野久作ばりの怪奇と幻想の世界から幻年期への回帰性まで、アナクロ的かつモノクロな色合いを湛えながらも聴く者の脳裏に鮮烈なイマジネーションを描き出してくれる。高度な演奏水準もさることながら、ライヴパフォーマンスにおいても圧倒的な好評を博していることは周知である。全編に渡って永井博子の独特の歌唱力には光るものがあり、それは可憐な少女、時には妖し気な鬼女さえも思わせる。中島一晃と宮武和広の刻む美しいメロディもまた絶妙で、職人芸にも似たベテランの域を感じさせてくれる。（大）



PALE ACUTE MOON
Newtopia

MONOLITH MN25005 '85 廃

平山照継のソロ「ノイの城」に参加していたキーボード奏者、仙波基のプロジェクト、ペイル・アキュート・ムーン（青白く鋭い月）の1st。Vo, G. B. Ds を含む５人編成に、同じく平山のソロに参加していた女性Voの下町をゲストに迎えて、R・ウェイクマンやエニドを彷彿させる、荘厳かつ雄大なシンフォニックロック絵巻を創作している。動と静の対比や計算し尽された曲の展開、作品のイメージを強く印象付ける劇的なカヴァーワーク等、良い面はかなり見い出す事が出来るのだが、その反面プログレを作るという観念にとらわれ過ぎて有名グループの使っていた様なフレーズまで聴こえてくる箇所もある為、少々オリジナリティの欠如が感じられる。グループはその後大幅なメンバーチェンジを行った。（大）



PRISM
III

POLYDOR MR3160

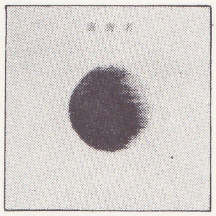
日本のロック・グループでこれだけ息の長いグループも珍らしい。1976年にデビューして、現在までにアルバム12枚(内ベスト２枚)をリリースしており、ギター少年から神様と拝められていた和田アキラというスーパースターが在籍しているグループだ。彼らはロック・サイドからアプローチしてはいるがあくまでフュージョン・グループなのでアルバム全曲がプログレしている訳ではないが初期の頃から最近のものまで、必ずプログレ色の強い長編のナンバーが各アルバムに収められている。森園(四人囃子)脱退後のこの3rdでも"風神"という大作があるが、ガムランをフィーチャーしたイントロに始まり、テーマ・メロディーに乗せて次々とスリリングに進行する名作。またA-5もオルガンとギターが泣かせる秀作だ。（UNO）



PUNGO
1980—1981

PINAKOTHEKA RECORDS 廃

パンゴは菅波ゆり子(vln,pf,vo)、篠田正己(sax,fl)、佐藤幸雄(g,vo)、今井次郎(b,vo)、石渡明廣(dr,後にgも）といったメンバーが中心で、時にはこの中の数人、極端な時は数十人でライヴが行なわれた。(この作品内にも50ある噂だった。「パンゴという、タンゴを得意とするパンク・バンドがあるらしい。」—彼らは確かにタンゴを取り入れたスタイルを持っていたが、むしろC・ブレイ、或いはリコメンデッド系の味わいを持つグループだった。当時の東京のシーンは、パンク／NW系ビート・バンドでなければ吉祥寺マイナー系フリー／ノイズ・バンドという状態で、多少なりともスコア的なナンバーを持つアヴァンギャルド・グループは非常に少なかった。その上、安定した技術を持つグループでもあった。（千）



RAREINYA（羅麗若）
Same

COLOMBIA YF-7046-N '82 廃

羅麗若(ラレーニャ)というグループを知っているだろうか？　東京の読者には馴染みない名前だと思う。彼らは５年程前に関西で活動していたジャズ・ロック・グループで、コロムビア・レコードから1982年に本アルバムをリリースしている。彼らのサウンドは基本的にはウェザーリポートあたりからの影響が顕著な訳だが、アマチュア時代にはクリムゾンなどのプログレを演っていた経歴の持ち主達だけあって、A１曲目あたりの曲などは変拍子ビシバシのクリムゾン・タイプのプログレとして仕上っており、やはり、一般のフュージョン・グループとは異なるひと癖もふた癖もあるグループだ。今日の関西のプログレッシヴ・ジャズ・ロック・グループへの影響も大きかったグループだ。（UNO）



SAB
Crystalization

VANITY 002 '78 廃

78年にロック・マガジンが設立した自主レーベル、ヴァニティの第２弾（第１弾は後にキングよりアルバムをリリースしたDADA)。サブとはシンセサイザー・ミュージックを奏するソロ・ユニットのこと。Crystallization と名付けられたこの作品は、文字通り、繊細な音の微粒子が宇宙空間に舞うようなイメージを持つ好作品。ジャケット・ワークも美しい。感覚的に優れた演奏をするミュージシャンで、ひたむきな情熱が音を通じてリスナーにまで伝わる。しいていえば、日本人の僕達の世代が共有しうる感覚。冒頭にピアノの黒鍵だけを使用して現代音楽風の箇所があるが、こういう気負い、わだかまりはなかったほうが良かったと思う。感覚的にだけで十分に素晴らしい作品であるのだから。（山）



SAGITTARIAN
same title

ARIES: RIO-842282 '84 廃

サジタリアンというグループは東京のグループであり、目ぼしい活動もないままに解散してしまった叙情派シンフォニック・グループだ。ROSEの主宰するROADレコードからカセットがリリースされたが、このカセット以前に限定100枚プレスでLPがリリースされており、カセットはこのLPからの抜粋編集されたもの。ツイン・キーボードに、ツイン・ギター、ベース、ドラムという構成のこのグループはドイツのノヴァリスやキャメルあたりのメロディアスなギターと爽かなストリングス・シンセを中心とするサウンドであり、演奏力、作曲力、アルバム完成度に於いてすべて今一歩の出来ながら、ほのぼのとした暖か味を感じる作品だ。なおリーダーの和田は現在ソロ・テープ制作活動中だ。（UNO）



MASAHIKO SATO(佐藤允彦)
& THE SOUND BREAKERS
恍惚の昭和元禄

東芝リバティ LTP-9018　廃

佐藤允彦といえば実験的な音楽を作り出したジャズ・プレイヤーである。この奇妙なタイトルのレコードも前衛的ではあるが、不思議な魅力を持った世界を築き上げている。B面はパーカッションを中心としたフリー・ジャズで、時々加わるオルガンと女性スキャットとのコントラストがおもしろい。A面は柳田ヒロ、水谷公生の黄金コンビの参加によってロック色が強く、演説、効果音、クラシック音楽やらが引用され、聴く者を飽きさせない。その2人もさることながら、他のメンバー(外人の名でクレジットされているが仲間たちの変名かもしれない)の演奏も刺激的だ。また、ジャケット、およびジャケットにまで書かれてある過剰ともいうべきライナーも秀逸。(吉)



SHINGETSU(新月)
same title

ビクター ZEN 1009 '79 廃

70年代末期、美狂乱、観世音、グリーン等と共にマイナーな存在ながらも精力的に活動していた新月のデビュー作。リーダー兼Keyの花本彰を始めとする5人編成(1曲のみ、サックス奏者がゲスト参加)で、日本的イマージュを重視した演劇的なステージは、当時かなりの話題と評判を呼んだそうである。近代日本文学の叙情性が香り漂う歌詞とメロディにおいて、日本という一種独特の風土に程良く溶け合った、初のオリジナリティを持ったグループと言えまいか。その後、2ndの予定もあったが、リズム陣の脱退から端を発した様々な原因がもとで、グループは解散してしまい花本とGの津田は共にフォノジェニックス結成の道へと歩む。尚、作品に収録された全8曲中「鬼」「白昼」の2曲が秀逸。(大)



SPACE CIRCUS
Fantastic Arrival

RCA RVL-8043 '79 廃

現在のブラック・ペイジを驚異的と言うならば、8年前の彼らはさしずめ神技的テクニックを誇っていたグループと呼ばなくてはいけない。彼らはリタン・トゥ・フォーエバーあたりから影響を受けたロック・サイドからのアプローチのフュージョン・グループである。当時新月らと共演していた事からも想像できる様に同じ系統に属するプリズム、クロスウィンドよりも明確にプログレ色を押し出したグループであった。彼等は2枚のアルバムをRCAから発表したが、特にキーボード&ヴァイオリン担当の豊田貴志が加入した本2ndアルバムは宇宙冒険物語をテーマとしたトータル作品仕立てになっており、スケールの大きいキーボード群と美しいヴァイオリン、スパニッシュ・エッセンスの利いたアンサンブルが素晴らしい。(UNO)



STARLESS
銀の翼

KING K28P 596 '85

ネクサス・レーベルのニュー・プログレッシヴ・リヴォリューションの記念すべき第1作となった本作は想像以上の出来映えだった。この手のバンドが落ち入り易い単調さもなく、曲作り、アレンジは仲々ツボを得ている。敢えていえば曲が小粒でグループ自体の印象を弱めてしまう結果を生じているようだ。個人的には中川隆雄の曲作りと、五十嵐久勝(元ノヴェラ)の影響が強すぎてマイナスになっているところもあるがジュラのヴォーカルに魅力を感じる。ノヴェラの初期の作品と並んで、プログレ・ハード系の代表作に数えられるだろう。その後、メンバー・チェンジがあったらしいが、再び元気な姿を見せてほしい。



STRAWBERRY PATH
When The Raven Has Come To The Earth

フォノグラム FX-8516 '71 廃

日本のプログレ史上初の本格的なブリティッシュ・スタイルのプログレを築き上げたフライド・エッグの前身グループがこのストロベリーパスだ。成毛滋とつのだひろのメンバーにゲストでベーシストの江藤勲が加った布陣。あのつのだひろの大ヒット・ナンバー"メリージェーン"のオリジナル・ヴァージョンがこのアルバムに収められており、ポップ色の強いロック・ナンバーがこのアルバムの中心だ。このアルバムの中で唯一プログレ色が強いナンバーはB面ラストのタイトル・チューンの大作で、嵐のSEと不気味なフルートが絡む朗々とした曲。フライド・エッグを形成して行く過程に於いて重要な通過点的レコードだ。あおフライド・エッグ解散後、再度ベースに江藤を迎え成毛滋グループとして活動していた。(UNO)

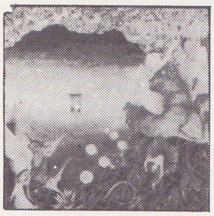


TAJ-MAHAL TRAVELERS
July 15, 1972

CBS SONY SOCM-95 '72 廃

60年代、ニューヨークでブレヒト、白南準、小野洋子、ジョナス・メカス等、各国の音楽家、画家、映像作家、詩人等から成る総合芸術集団、フルクサスに参加していた小杉武久が、帰国後の69年に結成した即興音楽集団。初期タンジェリン・ドリームやアーバン・サックスに非常に近い、直観にたよったサウンドのためか、ロック・サイドでも前衛音楽、実験音楽の草分けとして有名だが、小杉の経歴を考えれば、仮に一般的なわけ入れをするとしても現代音楽の範中に入れるべきだろう。これは東京、草月ホールでのライヴをまとめたもの。このユニットでは他に、やや散漫な2枚組ライヴ「August 1974」を残している。エコーをきかせたヴァイオリン、声、発振機による瞑想的な音群のうねり、と書けば、想像がつくだろうか。(昌)

Pal
|
Taj



HIROKI TAMAKI（玉木宏樹）& SMT
Time Paradox

コロンビア CD-7157 '75 廃

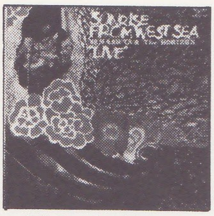
こうもプログレを意識させるジャケットも日本では珍しい。ライナーの玉木自身の言葉によれば、音楽はみんな好きだが、とりわけドビュッシーとインド音楽とキース・エマーソンが好きだということもあり、彼の作り出す音楽にはひとつのジャンルに収まりきれない多面的要素を持っている。彼の想像豊かな音楽をバック・アップしているのは、杉本喜代志、高中正義、江藤勲、松武秀樹…といった実力者たち。彼らの力演も見のがせない。アルバムのトップにふさわしい緊張感と美にあふれたA1、バッハの名作をアレンジしたB2、そして最大の聴きものであろうアルバム・タイトル曲と当時の日本ロック界の最先端を行くものだろう。82年発表された「存在の詩」もヴォーカルの多重録音に挑んだ異色作。（吉）



MICHINORI YAMAMOTO 山本道則）
微笑

ポリドール MR 5063 '75 廃

大量に作られているニュー・ミュージックの副産物といえるかもしれないこのレコード、もう10年以上も前の作品ではあるが、未だに新鮮に響いて来る。なぜか。テクニカルな面やらメカニックな面が強調され易い最近の傾向に反して、歌心を大切にしているからだろう。それを浮き上らせているのが、美しいストリングス、インド音楽風なパーカッション、効果的なシンセであり、その的確で変化に富んだアレンジ（水谷公生と渋井博）は並々ならぬものを感じさせる。全曲聴きものといえるが、B2、3は当時のユーロ・ロックの名曲に匹敵する傑作である。山本道則とバックで好演している水谷公生グループについては不明。ニュー・ミュージック界から人知れず秘かに第2の〝微笑〟が生まれているかもしれない。（吉）



STOMU YAMASH'TA & THE HORIZON
Sunrise From West Sea "Live"

KING SLC(J)359 '71 廃

現在も地道な活動を続けているツトム・ヤマシタの1971年のライヴ作品。この作品は海外では発表されていないため、外国人のマニアが入手したがっている作品でもある。この当時の山下は、クラシック界から抜け出てきたばかりのみずみずしさを持っており、ほとんど即興に近いその演奏は、ライヴでの観客との一体感が感じられ、非常に熱気のあるものになっている。当時の聴衆は、ジャンルを問わず、この手の先進的な音楽を好意的に受け入れる状況があった様だ。尚、バックには佐藤允彦や小杉武久など、クラシック、ジャズ界の大物が参加している。（坂）



HIRO YANAGIDA（柳田ヒロ）
same title

W.パイオニア P-8027A 廃

初期の日本のロック界において、日本のキース・エマーソンとも呼べそうな存在の柳田ヒロの 1st アルバム。彼はフードブレインのメンバーでもあり、LOVE LIVE LIFE、ミルクタイムにも参加している重要人物である。彼はかなりのソロアルバムを出しているが、その中でもこの1st アルバムは一番プログレ色が強い。A面はキーボード中心のインストゥルメンタルナンバーであり、ELPの影響をかなり受けている。サイケデリックで、ソロプレイ中心の演奏は当時の流行のスタイルであり、フードブレインとも共通するものである。B面はポップな小品が多いが、その後、彼はこの路線で完全なフォークシンガーになってしまった。（坂）



HIRO YANAGIDA GROUP
Milk Time

東芝リバティ LPC-8037 廃

当時地道ながら革新的な音作りをめざしていた男たちが集まって作られた日本版スーパーグループといえるのが柳田ヒロ・グループだ。メンバー1人、1人の略歴を書くスペースはないが、名前だけでもあげておかなければならない。柳田ヒロ(kbd)、水谷公生(g)、角田ヒロ(ds)、玉木宏樹(vln 市川ケイジュ(b)、それに中谷ノゾミ(fl)といったメンバー。ここでくり拡げられるのは情熱と若さに満ちたヘヴィーなロックである。ヴァイオリンを使用したということでも記憶に残すべき作品かもしれない。チェンバロとフルートの美しい曲が間奏曲として使われ、対称的な効果をあげており、柳田ヒロが残したレコードでは本作とワーナー時代のソロがベストと思われる。（吉）



YONINBAYASHI（四人囃子）
Golden Picnics

CBS SOLN 7 76 廃

日本のプログレ・グループの中で最も商業的な成功を収めたのが、この四人囃子だ。四人囃子の代表的アルバムと言えば直ぐに73年に東宝レコードよりリリースされた 1st アルバム「一触即発」という返答が多いが、本質的により〝プログレッシヴ〟であり、完成度の高い作品はこの 2nd アルバム「ゴールデン・ピクニックス」の方だ。アルバム全編にストーリー形式を用いて、多種に渡る音楽の隔合及びパロディーまで加味された豊かな彼らの感性が発揮された名作。特に本作のハイライトである大作〝泳ぐなネッシー〟はピンク・フロイドの「狂気」的な音のコラージュの手法や複雑多岐に及ぶ変拍子を駆使した曲構成、ギルモア&フリップ・スタイルのギターワークが一体となったオリジナリティー溢れる名曲だ。（UNO）

8 SINGLES

筆者の記憶では我国のユーロ・ロック・ファンが中古盤に目を向けるようになったのは77年頃のことだったと思う。もちろん、それ以前にも中古レコード店はあり、ユーロ・ロックのレコードも極少数ながら売られていたはずであるが、それはロックあるいはポップスの一部としてであり、少なくとも専門店はなかったものと思われる。それとほぼ並行して、マニアの間で廃盤ブームが起った。その後の約5年間ぐらいはブームの最盛期とも言うべきもので、ヨーロッパ各国から珍しいレコードが数多く我国に入ってきた。こうしたこともあり、また、日本人の国民性もあってか、現在の日本はヨーロピアン・ロックに関して世界中で最も多くの情報を持った（情報のみが先行し、肝心の音がそれに付いていっていないという大きな問題もあるが）国となっている。

廃盤ブームが峠を越えた頃、一部のマニアがシングル盤にも関心を持つようになった。こうした1人に、始めて、マクソフォーネ、ロカンダ・デレ・ファーテらのシングルを見せられた（見ただけで聴かなかったが）時のことは今でも覚えている。その後しばらくして、山崎氏がヨーロッパへ行き、イタリアでシングル盤を大量に買ってきた。それは100枚近い量で、資料としても重要なものとなった。PFMの前身として知られるクエッリがビート・サウンドのシングルをかなりの数リリースしていること。フィリップスからLPを発表する以前のレ・オルメがポップス・グループとしてカー・ジュークボックス・レーベルに少なくとも6枚以上のシングルを残していること。ラッテ・ミエーレ、グルッポ2001、ジェットがLP（ラッテ・ミエーレは3rdアルバム）発表後、いずれも数枚のシングルをリリースしながら、70年代後半まで活動を続けていたこと、アルンニ・デル・ソーレが1stアルバムリリース以前に初期のアルバムに収録されたいくつかの曲をシングル（別テイク）で出していたこと等、各種情報を実際に確認するに至った。それにも増して、イル・バレット・ディ・ブロンゾ、ラッテ・ミエーレ、R.D.M.（ピクチャー・スリーブにアルバムからのカットと記されており、4thアルバムを必死で捜したことを思い出す。その後、アルバムはリリースされていないことが判明した）、ブロッコ・メンターレ（内容が充実していることもあって、これは特に印象に残っている）等のLP未収の作品は筆者にシングルの面白さを教えるに充分なものであった。

こうしてシングル盤に興味を持った筆者はフレンチ・ロックを中心にシングルを集め始めたのである。今、筆者のレコード・ボックスには200枚近いユーロ・ロックのシングルが収められている。特に思い出深いものを以下にいくつか上げてみたい。最も印象に残っているのがアール・ゾイの「Sangria／Something In Love」である。かなり前に外国の雑誌でアール・ゾイが「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cites」以前にもレコードを出していることを知った。その後、フランス人にそれがシングルであり、非常に珍しいレコードであることを教えられた。フェイヴァリット・グループの1つであるアール・ゾイのデビュー作。音だけでも聴いてみたいとつくづく思ったものである。約2年前、本シングルの入手が決まった時のこと、音とピクチャー・スリーヴを想像しつつ心待ちにしたレコードが到着した時のことは今なお忘れられない。レニス・コレアのシングルに関する思い出も忘れ難い。3年以上前、ジャン・ピエール・アラルサンとクロード・ピュトゥルフラムのコラボレーションであるということ以外一切分らぬ1枚のシングル盤を入手できるかもしれない機会を得た。あのサンドローズのギターリストであり、ザカ、ベランジュのアルバムでも素晴らしいプレイを展開しているアラルサンであるが、単なるバック・ミュージシャンに徹した作品もあり、シングルということもあってこのレコードを簡単にあきらめてしまった。これが大間違い。「Mea Culpa」はサンドローズのアルバムに収録されたものの原曲で、アラルサンもメロディアスな好プレイを披露していた。時、既に遅し。二度目のチャンスは今もってやって来ない。その他、マグマ、ヤニック・トップ、アンジュ、タイ・フォン、シゾー、ラッテ・ミエーレ、イル・バレット・ディ・ブロンゾ、コーマス（33回転）等、思い出のシングルは数多いが、それらについてはまたの機会に書いてみたい。

長い曲が多く、作品としてのトータル性を重視することの多いプログレッシヴ・ロックでは元来シングル盤の重要性は低いものであった。個人的には今もこの考えは変わっていない。また、入手が難しく一般性に乏しいというのも事実である。しかし、主たるLP作品を聴き終えた人達がシングル盤に興味を持つことも、これまた当然のファン心理と言えるだろう。　**賀川雅彦**



PATRIZIO ALLUMINIO

Tu Anima Mia
L'Isola

FONIT SPF 31314 '75

プログレッシヴ・オルガン・ロック・トリオのALLUMINOGENIはアルバム1枚とシングル5枚をリリースして1974年に解散したが、そのリーダーであったキーボード奏者のパトリッツィオ・アルミニオは翌75年にソロ・シングルを1枚発表している。アルミノジェニ時代にはいかにも一部のマニア向けの2流オルガン・ロックであったが、このシングルは、雄大に溢れ出すストリングス・シンセと悲愴感を漂わせるピアノ、果てしなく響き渡る低音シンセによって作り出されるシンフォニック・サウンドにイタリアならではの歌い上げる泣き泣きのカンタウトーレ・ボーカルが絡む名曲。アルミノジェニ時代にこれだけのサウンドが出来たなら、もっと評価も変っていたのに… (UNO)



(Gli)ALUNNI DEL SOLE

Fantasia
Fiori

LIBERTY LIB 9063 '70

アルンニ・デル・ソーレ（太陽の徒弟とでもいう意味）は実に息の長いグループである。60年代中期から活動を続け、現在でも活動中であるから、足かけ20年近くも活動していることになる。彼等のサウンドは、イタリアを象徴するといっても過言ではない程、南欧の哀愁に満ちて悲しい。このシングルは彼等のＬＰデビュー以前のもので、70年にリリースされたもの。最初期の叙情と初々しさを感じさせるサウンドで、パオロ・モレルリを中心とした彼等独自のサウンドは既に確立されている。Ａ面はファンタジアという佳曲。Ｂ面「花(Fiori)」はP.Aレーベルより後にリリースされる2ndアルバム「E Mi Manchi Tanto…」の中の曲だがテイクもアレンジも全く違う。アルバムの録音より若さを感じさせる好テイクに仕上がっている。 (山)



ARIES

Soli Noi
Donna Straniera

PDU:P.A.1121 '77 廃

プログレッシヴ・サイドから見た場合、はっきり言って余り大した事の無いのがこのレーベルＰＤＵなのだが、それでもこんな思わせぶりなシングルに出会うこともある。多分別人なのだろうけれど、そのボーカルは余りにもAlvaro Fglla（Jumbo, Prenestum Blocco 452）に酷似し過ぎている。Ａ面はポップ指向乍、このボーカリストの独壇場で思わず聴き惚れてしまう。Ｂ面は構成のしっとりとしたかなりプログレッシヴな作品。前半は清らかなボーカルでたおやかに流れるのだが後半に差し掛かるや否や、突如としてあのボーカルが叫び、キーボードの高鳴りがそれに続き、一気に終局へと流れ込む。Jumboの活動が伝えられていない頃だけにかなり気に懸るボーカリストでありグループである。 (鈴)



AZIENDA TRANVIARIA

Passagio
Parole Inutili

BASF 05 13315-0 '74 ?

イタリアンBasfといえばMurpleしか紹介されていないようだが、その手のマニアには謎めいた魅力を持っている。今回紹介するこのシングル、まずジャケットが良い。私がもう１枚持っている同じBasfのPolifeno（こちらはブラス・ロック）と同じ人の手によるものだろう。音の方もＢ面はブラス・ロック風で好みではないが、Ａ面の「Passagio」は仲々の秀曲である。イタリアン・ロックには珍しくフルートがメインを取っており、バックに美しいストリング系シンセが流れる。ラヴ・ロックと呼ぶには、ヘヴィーな感じで、改めてイタリアの層の深さを思い知らされる。このレーヴェルにはまだ他のシングルがあると思われるが、水準が高いのではないかと想像される。 (吉)

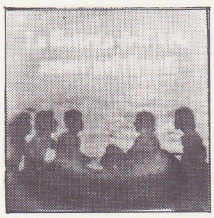


BLOCCO MENTALE

L'amore Muore A Vent'anni
Lei E' Musica

TITANIA TA101 '73

レアー盤の多いイタリア・シンフォニック・ロックの中でもより入手が困難なブロッコ・メンターレであるが、彼等はティタニア・レーベルにアルバム一枚とシングル一枚を録音している。本シングルは両面ともＬＰ未収録曲で、サウンドはアルバムと同じような清涼感のある良質なプログレッシヴ・ロックである。決して派手さはないが、イタリアらしいグループで、そのせいか、多々イタリアを聴き込んだマニアの間ではその評価は高い。Ａ面は生ピアノやアコースティック・ギターにヴォーカルがのるのどかな曲、Ｂ面も同タイプのメンバーだがマイナーな感じのする切々とした曲。共に往年のイタリアの息吹を感じさせる好ナンバーである。 (山)



BOTTEGA DELL'ARTE

Amore Nei Ricordi
Mare Nustrum

EMI 3C006-18185 '76

たおやかなメロディー・ラインと多種のキーボード群を絶妙に使いこなした見事な演奏力で、トップ・クラスのボルテージを誇る作品をリリースしたボッテガ・デッラルテ。特に初期2枚のLPは素晴らしい作品である。そんな彼等のシングルはLP未収録曲が多い。このシングルはＡ面が未収でＢ面はファースト・アルバムからのインストゥルメンタル・ナンバー。他にも「Che Dolce Lei/Pastelli」（Ｂ面が未収）、「Bella Sarai/Restà Co L'occhi Chiusi」（両面未収）等、LPのボルテージと同等の名シングルを残している。サラリと歌い流している為か日本での評価はまだまだ低いグループであるが、この機会に再評価を促したい。イタリア人の持つ叙情と素晴らしい演奏力をかね備え持つグループ、それがボッテガ・デッラルテである。(山)



IL BALLETTO DI BRONZO
La Tua Casa Comoda
Donna Vittoria

POLYDOR 2060 053 '73

シングルが３枚確認されているバレット・ディ・ブロンゾ。１枚目は1st Sirio 2222からのNeve CaldaとＬＰ未収曲Comincio' Per Giocoのシングル。ハード・ロックである。２枚目は両面ともSirioからのカット曲で、1st時の名曲「Meditazione」が収録されている。(残念ながら最後のリリカルな生楽器によるエンディングがカットされている。)そして本作が３枚目のシングル。名作ＹＳ時のもので両面共未収録曲。ＹＳが多少ポップになるとこうなるというようなセンスの良い作品で、レオ・ネロのヴォーカルが絶妙の好盤である。往年期のバレット・ディ・ブロンゾのＬＰ未収作品としてその価値は高い。ジャケットはＹＳのジャケットと同じコスチュームを着た彼等が川辺にたたずむものでこれ又、必見の価値あり。　(今)



THE COUNT
Abracadabra
Magic Drops

RCA TBBO-1270 '76

前回のシングル編で私の持っている貴重盤はかなり紹介されてしまったので、今回自分のレコード棚を物色していると某氏よりもらったこのシングルが目に止り聴き直してみた。盤にオリジナル・キャストと書いてあることから、ラジオかテレビの番組のテーマ曲かもしれない。音はイージー・リスニング風なジャズ・ロックとでもいえそうな軽めの感じであるが、キーボードの使い方などプログレ然としており謎を呼ぶバンドである。一切手掛かりになるようなことがジャケットに記入されておらず書きようもないのだが、RCAということもありひょっとして有名な人でも参加しているのではないかと想いをめぐらせるのも楽しいことだ。　(吉)



CRASH
Meditation
Ekstasis

VALIANT ZBV 7073 '77

イギリスの有名なパンク・バンドにCLASHがあるが、こちらは彼らとは何の縁もないイタリアのCRASH。彼らについての資料がないので、正式なグループであったのかどうかは定かでない。また手元にあるこのシングル以外のレコードが存在するのかも不明だ。さて、この謎多きレコードのサウンドの方であるが、A面のナンバーは爪弾かれるピアノとオルガンをバックに優雅なフルート、泣き泣きのギター、そして後半のハイライトに華麗なヴァイオリン・ソロが次々とオーバーラップされて行くクラシカルな秀作。クェッラ・ヴェッキア・ロカンダの2ndやルネッサンス的な味わいのある作品だ。シングル数枚だけをリリースして埋れてしまった多くのグループの中にも素晴らしいサウンドを持ったグループがいるという好例である。　(UNO)



GIANNI DALL'AGLIO
Aria Triste
Mai Bambole

CGD CGD10046 '78

Il Voloのドラマーとして著名な彼も1st LPの「Sono」で名ソング・ライターぶりとヴォーカルを披露してくれた。もともと彼のグループDall'Aglio Sera Mattinoを聴いた人なら分る通り、メロディアスでドラマチックな曲を書ける人なのである。78年発表されたこのシングルのA面は彼のちょっとたよりないヴォーカルを活かしたラヴ・ロック調のすばらしい曲。女性スキャットが絡むあたりの美しさは彼のファンでなくても気に入ることだろう。この曲その他の聴き所も多いのだが、それはCGDの優秀なスタッフの力によるところが大きいかもしれない。作曲はGianni Bella, G.Bigazzi と彼の手によるもので、B面はリズムを押出したポップス調。　(吉)



DALTON
La Donna E Il Bambino
Vuoto

IAF 1902 '74

60年代後半から活動を開始したイ・ダルトンは数枚のシングル（これらはいわゆるビート・グループ・スタイルの作品）をレーベルを点々としながらリリースした後、72年に名作〝RIFLESSIONI : IDEA D'INFINITO〟をMUSICレーベルにて製作。そして2nd〝ARGIALI〟をIAFレーベルよりリリースして解散してしまうわけだが、本作は両面共に、2nd LPからのカットである。ジャケット・カヴァーの絵が非常に印象的なのでここにあげておくことになった。この時期には、すでにプログレッシヴ色は後退しているが、ほのぼのとした歌を全面におし出したもので、切々とした哀愁がイタリア然とした叙情をかもし出している。それはメタモルフォーシにも通じる泥くさいものだ。　(山)



DELIRIUM
Jesahel
King's Road

FONIT SPF 31293 '72

デリリウムは３枚のレギュラー・アルバムの他に僕の知りうるかぎりでも６枚はシングルをリリースしている。71年から75年の間にリリースされているが、それらのほとんどはＬＰ未収録曲である。本作品もその例にもれず、両面未収録曲で、ことにＢ面は彼等の全作品中、最もプログレッシヴで叙情的なナンバーである。インストゥール・ナンバーであり、もの悲しげなピアノがメロディーをとる前半部から、ややジャージーなアドリブを展開する中間部（やはりピアノがメイン）、そしてためにため込んだ後に登場するメロトロンの洪水と力強いシンフォニック・サウンドである。イタリアの重鎮でありながら遂に国内盤がリリースされずじまいのデリリウムであるが、彼等はオリジナリティーあふれる良質なグループである。(今)



DIETRO NOI DESERTO

Dentro Me / Aiuto

Decca : C 17017 '71

JOCULA の結成以前に ANTONIO BARTOCCETTI が在籍していたグループ。編成は4人でサウンドの要はボーカルも兼ねるオルガニストの LUCIANO LUCA と作曲、ベースの ANTONIO。両面共に単なるオルガン・ロックの域を出ず、聴くべきものは殆んどない。所謂コレクターズ・アイテムであり、後に開花する ANTONIO BARTOCCETTI の非凡な才能は未だ混沌の中に埋もれていたのだろう。蛇足ながら、ジャケットの美しさだけは、特筆ものである。〔鈴〕



EQUIPE 84

Sogni Senza Fine
Meditazione

ARISTON AR 00682

エキペ・オッタンタ・クァトロはLP5枚と多数のシングルを70年代に残したが、基本的にはポップス・グループである。しかし73、74年頃の彼等は他のポップス・グループがそうであったように一度はプログレッシヴ・ロックの影響を受けた時期があった。LPでいえば SACRIFICIO であり、シングルでは本作品あたりが一番、プログレッシヴな内容ではないだろうか。本作品は両面ともメロトロンを大幅に導入して、曲構成こそ単純ではあるがメランコリックなムードを出しており、情緒あふれる見事な仕上がりである。プログレッシヴ・ロックがイタリアで隆盛を極めたこの時期にはポップス・グループまでもがそのイディオムを吸収して百花爛漫であったのだということを想い出させる一枚。（今）



FORMULA 3

La Folle Corsa

NUMERO UNO ZN50.115 '71

フォルムラ・トレは多数のヒット曲を出したグループであるからして当然シングルの数も多い。しかしそれらのシングルの中でも最も話題性のあるのがこのシングルである。両面を通して一曲という異色の作品でライヴ・レコーディングである。71年であるから 2nd アルバム頃の作曲で、アルベルト・ラディウスのヘヴィーなギター・ロック、ラフなガブリエレ・ロレンツィのオルガン・トーン。ホットなトニー・チッコのドラミングとライヴ演奏の熱いムードを良く伝えた好盤。演奏はアート・ロック的なヘヴィーなものである。他にもソニャンド・エ・リソニャンドの別テイクというような話題シングルもあるが、こちらのほうは彼等のベストに収録されているテイクなので今でもなんとか入手できるだろう。（今）



FORMULA 3

Sognando E Risognando
Storia Di Un Uomo E Una Donna

NUMERO UNO ZN 50148 '72

最もプログレッシヴな作品として評価の高いフォルムラ・トレのサード・アルバムからのカットである本シングル。しかし、A面 Sognando e Risognando はLPとは別テイク。どちらかといえばこちらのほうがスリリングなテイクに仕上がっていて出来は良いと思う。このテイクは後にヌメロ・ウーノ・レーベルからリリースされた彼等のベスト・アルバムに収録されているものと同テイクである。フォルムラ・トレが従来のサウンドと、当時流行したプログレッシヴ・サウンドを非常に高いレベルで結合させた珠玉の名作ということができると思う。テクニック云々という壁を越えて、今、尚、良質のグループであったと僕に確信させる、素晴らしいロック・ユニット、フォルムラ・トレの名シングルである。（山）



FORUM LIVII

Space Dilemma
Homesick

MIMO ZM50199 '72

ミノ・レーベルからシングル1枚をリリースしたのみ（LPがあるという説もあるが筆者は未だ見ていない）のフォルム・リヴィは70年代前半に活動していたグループである。ヘヴィーな部分とプログレッシヴなアイディアが交差するプログレ＝ハード路線のグループで、このシングルから全てを推測するのは余りに危険であるが、おそらくライヴではノリの良いホットな演奏をしていたものと思われる。ギター、ベース、ドラムス、キーボードの編成でメインになるのはやはりギターである。A面が様々なアイディアを盛り込んだ仲々の曲で、B面はブリティッシュナイズされた完全なハード・ロックの曲。イタリアにはまだまだシングルのみで終わったバンドの名盤が埋もれているようである。（今）



GATTI ROSSI

E Dire Che A Maggio/Se Ne Va

Philips:6025 076 '72

60年代からビート・グループとして活動していた彼等は68年1stLPを発表する。編成は Ninni Carucci を含む4人。サウンドは当時の Dik Dik や Equipe 84 と同様のもので、Moody Blues の"サテンの夜"なども取り上げている。LP同様シングルもヒット曲路線で大したものはないが、唯一これだけは別格である。両面共プログレッシブな演奏・展開が極めて魅力的である。特にA面はあの Mauro Pelosi の記念すべき 1st の名曲で、彼の唱法から完全に離れ、ダイナミックで劇的な曲へと変貌している。高揚するボーカル、華麗なキーボードそして感動的な旋律。全てが我々の感性に訴えかける。真に偉大なる曲であったと再認識させられると共に、最盛期イタリアの底深さを感じずにはいられない。〔鈴〕



GENS

Per chi/Piccolo Grande Amore

Philips:6025 056 '72

60年代から活動しているGENSが、驚くべきことに、メロトロンを使用していた頃のシングル。フィリップスのＬＰは極平均的ポップスの為、無視されがちな存在だが、このシングルを聴いた後ではそうした彼等のイメージを払拭せざるを得ない。ポップでドラマチックなメロディー・ライン、イタリア的なハーモニー、それらを包み込む重厚にしてダイナミックなメロトロンの波、全てが一つの極点に流れ込む様は圧巻の一語である。他にもこの作品に前後して同傾向の良質なシングルを２、３数えることが出来る。ラブ・ロック、ポップス系のグループにも隠れた名曲が有り得る好例である。〔鈴〕



GIGANTI

Lungo E Disteso
Piento Di Sole Pieno

RIFI RFN NP16460 '71

60年代にイタリアのみならず、人気を呼んだジガンティは、いわゆるビート・グループである。が、しかし、ラスト・アルバムの〝Terra In Bocca〟が、素晴らしいプログレッシヴ・ロックの名盤である為に、マニアの内では評価の高いグループである。本作はそんなラスト・アルバムの冒頭部分からのカットである。力強いイントロダクションから始まってヴォーカルがひとくぎりするまでの部分が収録されている。ただしアレンジもテイクもかなりＬＰとは異なるというマニアを悩ますシングルである。ジャケットもＬＰと同じであるのにテイクが違うというめずらしい例の一枚。ジガンティは他にも実に多数のシングルをリリースしているが、それらほとんどはビート・グループとしてのものである。（山）



GRUPPO 2001

L'anima
Angelo Mio

K.UNIVERSAL NSP 56140 '73

国内盤もリリースされているグルッポ2001（ドゥエミッラウーノ）は70年頃から70年代後半までにＬＰ１枚（ラルバ・ディ・ドマーニ以前に 1st があるという説あり）と少なくとも７枚のシングルをリリースしており、内"Una Bambina.../Messagio"以外は全てＬＰ未収曲である。本シングルは73年にリリースされたもので彼等の歌の部分が強調された出来の良い作品である。イタリアらしい清涼感あふれる名曲といえそうである。KING レーベルに３枚のシングルを残した後、Mercury, CP, Strega レーベルを点々としながらシングルを発表するが後の作品になる程、ヴォルテージは落ちていき、最後の作品はテクノ色がある作品となってしまった。彼等の盛期は71～75年頃までと推測される。（山）

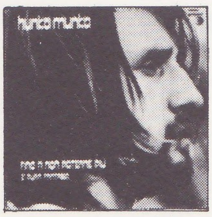


IL GUARDIANO DEL FARO

Il Gabbian. Infelice

RICORDI SRL 10671

イル・グアルディアーノ・デル・ファーロは一言でいうとイージー・リスニングを演奏するユニットである。アルバムもシングルも多数リリースされているので、一度くらいは輸入盤店で名前をみかけた人も多いものと思う。ジジ・カペロット（ベース）やトゥリオ・デ・ピスコポ（ドラムス）が在籍していたこともあるが、基本的にはシンセサイザーをメインにイージーリスニングを奏でている。本作はそんな彼の代表的なサウンドであまりプログレッシヴとは関係ないが彼の代表的な作品としてリストアップしておく。彼の多数の作品の中にはプログレッシヴな佳曲も多々あり、シングルとして聴くとハッとするものもあるが、ＬＰ全面を通してのプログレッシヴはない。（山）



HUNKA MUNKA

Fino A Non Poterne Piú
E' Pura Fantasia

RICORDI SRL 10647 '71

Hunka Munka の本名はロベルト・カルロット。彼は1967年に〝Anonima Sound〟というビート・グループの一員としてデビューし、1972年にリコルディから初のソロ・アルバム１枚と２枚のシングルを発表。同時にディク・ディクのアルバム「Suite Per...」の制作を協力したのがきっかけとなって、ディク・ディクに加入し、「Volando」、「Amico」の2枚のＬＰに参加後脱退し自らのグループを率いて活動する傍ら、1981年にヌメロ・ウノよりソロ・シングル１枚を発表し、現在アレンジャーとして第１線で活躍しているアーティストだ。そして1971年にリコルディからリリースしたＬＰ未収録曲の 1st ソロ・シングルは美しいストリングスと独得の音色のオルガンが印象的な「Volando」をしのぐ秀作。思わず涙してしまう。（UNO）



HUNKA MUNKA

Dolce Mela
Sull'aereoplano

NUMERO UNO ZBN7214 '81

72年に「Dedicato A Giovanna G」というアルバム（歌の情感とプログレッシヴな演奏がブレンドされた好作品）をリリースしたフンカ・ムンカ（元アノニマ・サウンドLTDのロベルト・カルロットの変名）であるが、それ以後の彼の活動は一切わかってはいない。がしかし、81年になって、突然シングルをヌメロ・ウーノよりリリースした。それがこのシングルである。両面共、アレンジをひき受けたエンリコ・リッカルディの曲。フンカ・ムンカはヴォーカルをメインに録音している。特にＡサイド、ドルチェ・メーラがたおやかなヴォーカルを主体にした秀曲。プログレッシヴな演奏こそ期待できないが、それをおぎなってあまりある熱唱。本物のイタリアの歌というものを感じる。（今）



J.E.T.
Anikana～O
Guarda Con I Tuoi Occhi

DURIUM Ld A 7796

変型ジャケットのほうが先行して話題になっているふしのあるジェットであるが、彼等のサウンドは基本的にはプログレ＝ハードであるといえる。しかしそこはやはりイタリアらしく、地中海の太陽につかれたような甘美なメロディーラインと流れるようなサウンドを持ち、不思議な魅力を放っている。それは彼等のシングルにもいえることであり、今尚我々に問いかけるイタリアの恋の炎はおとろえてはいないといったところだろう。本作品は73年のサンレモ音楽祭で彼等が歌った作品がA面に収録されたもので、ホーンセクションを加えたポップな好ナンバーと生ギターとヴォーカルのからみが哀愁をそそるナンバーを収めたＬＰ未収作品である。従来のスタイルとは少々傾向が違うが、その核はやはりジェットであるといえる。(今)



JUMBO
Vorrei
Il Re Dei Re Del Rock & Roll

ATLANTIC T10672 '75

JUMBOはＬＰ３枚をリリースしたことが知られているが、そのブルースをルーツにするあくの強いプログレッシヴ・サウンドは一部に根強いファンを持つ。牧歌的な渋い味わいを持つセカンド「DNA」、多彩なゲストを迎えて重厚なシンフォニック作品に仕上げられたサード「Vietato...」は特に素晴らしい作品である。サード・アルバムを録音した73年にメンバーの一部がPrenestum Blocco 452というグループ名でシングルを一枚発表するが、JUMBO自体、その後も活動を続けていたようだ。75年にAtlanticレーベルから本シングルを発表した。おそらくこれを最後にグループは解散したものと思われる。ここではすでにプログレッシヴ色は失なわれてしまっていて、本来のオーソドックスなロック・バンドとなってしまった。　(今)



I KREL
Fin Che Le Braccia Diventino Ali
E Il Mando Cade Giu

RICORDI/SRL 10573 '70

PFMの前身グループとして〝QUELLI〟はあまりにも有名であるが､PFM＝QUELLIという単純な図式は成り立たず、QUELLI に在籍していたのはKeyのプレモーリとギターのムシーダの２人のみで、例えばベースのG.ピアッツァは自らのグループを率いて活動し、アルバム１枚をリリースした後にPFMへ加入している。ここに紹介するクレルもPFM 関係の重要なグループであり、ドラムのF.チョッチョが在籍していたグループだ。シングルという限られた枠内であり、しかも1970年という年代の制作であるので当然、本格的なプログレは望めないが、重厚でスリリングなハモンド・オルガンを中心としたポップ＆ロックでビート・グループであったQUELLIよりPFM のサウンドへの直接的な影響は強いと思われる。　(UNO)



LANDO E LUCA
Il Nostro mondo/Gocce Di Rugiada

Rifi : Rfn-Np 16695 '77

LA VERDE STAGIONE. TAVOLA ROTONDA の中心人物、IHLEの兄弟による秀逸なる１枚。特にＢ面に於けるあまりにも美しいサウンドは70年代後期イタリアの中にあって一際清純な音世界を展開してくれる。どこまでも清らかな彼等のサウンドは、何百のラブ・ロック、ポップスとは一線を画し、それらが決して辿り着くことの出来ない夢想と哀愁と感傷の空間となる。

決してＬＰをリリースする機会を持てなかった悲運の兄弟、LANDOとLUCA。しかし彼等が60年代から遺してくれた何枚かのシングルは、今もなお、我々の感性を操り、忘れかけていた感動を呼び覚ましてくれる。聴く度に味わいが増す彼等のサウンドは決して派手ではないが、とても大事なもののように思えてならない。　〔鈴〕



LATTE E MIELE
Mese Di Maggio
Tanto Amore

POLYDOR 2060 085 '74

ラッテ・エ・ミエーレは3rd ＬＰ発表後も活動を続けており、レーベルを点々としながらもシングルのみはリリースしてきた。もちろん 3rdまでの時期もＬＰ未収シングルをリリースしており、その中には佳曲も少なくない。本作は74年のリリースで、2ndパピヨンの一年後のもの。おそらくポリドールからの最後のシングルと推測される。曲は両面共ＬＰ未収録曲で、たおやかなイタリア然としたヴォーカル曲。例えば 1st のB-2のヴォーカル・ナンバーを想い出してほしい。あの叙情が同ヴォルテージで演奏されていると思えば大かた想像がつくのではないだろうか。正にイタリアン・ロック往年期を謳歌する名盤である。彼等の初期のシングルについては未だ良くはわからず、他にもＬＰ未収曲があるのかもしれない。　(山)



LATTE MIELE
Un Silenzio Diviso In Due
Per Poter Vivere

MAGMA MAG06 '77

ラッテ・ミエレは1971年に Duriumレコードからシングル・デビューして以来、同レーベルから２枚、1972年にPolydor に移籍して３枚をリリースした後、1976年にGrogから２枚と1977年にMagmaから１枚リリース。以降、移籍を繰り返してRCAから２枚、さらにＥMIから2枚リリースして現在までに12枚ものシングルを発表しており、その大半のものはＬＰ未収録曲シングルで、その中でも77年までにリリースされたものはどれも甲乙をつけがたい程、好ナンバー揃いでマニアでなくとも収集意欲をそそられる訳だが、その中でも77年にMagmaからリリースされた本シングルは出色の作。スリリングなストリング・アンサンブルを大幅に導入し、甘く切ない〝ラッテ・ミエレ〟の世界を華麗に演出している。　(UNO)

MARQUEE
EUROPEAN ROCK CATALOG



LATTE MIELE
Un Mattino
Pavana

MAGMA GR02 '76

Latte E Miele といえば1st LPの印象があまりにも強くあの面影を追って行くと失望してしまうことのほうが多い。このシングルは1st LPにこだわって聴かなければ、水準以上の出来であるといえる。キーボードを多用したラヴ・ロック・サウンドで翌年発表されたシングル(Magma MAG 06 先号参照)と比べるなら新メンバーのためかアンサンブルの点で物足りなさが残る。とはいえ、時代の波に流されず自分たちの音楽をやりとげた彼らの執念に敬服する。B面はLPからのカットでだらだらと長くやっているよりこの方が聴き易い。まあ、LPのさわりをB面に持って来たということだろう。 (吉)



LATTE MIELE
Fiore Di Strada
Severamente Proibito

RCA PB 6350 '79

ラッテ・ミエーレは70年にリリースしたサード・アルバム後もRCA～EMIとレーベルを移りながら、シングルをリリースしている。テレビの司会等を手がける等、彼等も時代の波を泳ぐ為には苦労をしてきたようだ。77年以降は完全なポップス・グループとして再出発した彼等だが、過去のプログレッシヴ・グループというレッテルにとらわれなければ、良質な作品を歌っているといっても良いと思う。本作品はそんな後期のラッテ・ミエーレを代表させる一枚で、都会派ポップス的サウンドが両面を占めている。後期のラッテ・ミエーレを聴くと、往年のイタリアン・ロック・ムーヴメントへの想いが募るが、古い概念でこの作品を評価するのは彼等にとっても無礼であろう。良質のアーバン・ポップスである。 (山)



LEO NERO
Fremo
Monitor

EMI 3C 006 18364

レオ・ネロことジャンニ・レオーネは、70年代前期にバレット・ディ・ブロンゾのキーボーダー及びセッションマンとして活動していたが、バレット・ディ・ブロンゾ解散後はソロ活動を行なっていた。高水準の演奏技術と天才的なひらめきを持つ独得のヴォーカル・スタイルで、イタリアン・ロック・ファンの心を動かす名作アルバム「VERO」を77年にEMIに録音する。80年にはCBOレーベルよりセカンド「MONITOR」をリリース。前作の名ごりを残しながらもニュー・ウェイヴ・グループへと変容していった。本シングルは78年のものでA面はLP未収曲でポップな中にもセンスの光る曲。B面はアルバム「VERO」よりのカットで、たおやかな彼のヴォーカルをフィーチャーした叙情ナンバー。共に彼の才能の開花した好作品。 (山)



LM SPECIAL
Funky Prugna
Avventura

GROG CR03 '77

数年前からマニアの間で噂されていたグループにLM・スペシャルがある。これはラッテ・ミエーレの改名したグループでレコードが残されているらしいという曖昧なものであった。それがこのシングルなのである。サード・アルバムの翌年77年にグロッグ・レーベルに残されたこのシングルで聴くことのできるサウンドは、キーボードをメインにしてはいるものの、ディスコテックな作品であり、出来はそれ程良くはないが、読者への解答という意味でここにリストアップしておく。明らかに商業的視野にたっての作品であり、彼等の持ち味はここでは後退してはいるが、ヴォーカルラインにそのなごりをとどめている。 (山)



LOCANDA DELLE FATE
New York
Neve Lune

POLYDOR 2060-169 '78

ロカンダ・デレ・ファーテには3枚のシングルがあり、1枚は1st LPからカットされた「Non Chiudere A Chiave Le Stelle」(1976/Polydor：2060-148)、もう1枚はこの7インチ・シングルに1曲加えた12インチ・シングル。そして最後の1枚がLP発表の2年後にリリースされたLP未収録曲の「New York c/w:Neve Lune」。ツイン・キーボードの片割れであったオスカーとボーカルのレオナルドが脱退し、代わりにサックス奏者とボーカリストが新加入して録音されたこのシングルのA面は、いかにも彼ららしい甘いポップなスローバラードで、B面の方はアルバムの名曲であるA-1に非常に近いナンバー。今回紹介したシングルの中で1、2位を争う名曲だ。 (UNO)



LUNA
Hallo
Siliah Era Diversa

ARISTON AR 00786 '77

針を落すや否やディスコ調のイントロに思わず身を乗り出してしまう。終りまで聴けば特に悪い出来でもなく、キーボードを中心としたテクノ・ポップとディスコを取り入れた一般受けしそうなサウンドを持っている。レコードをひっくり返すと別人の如き哀愁のラヴ・ロック。Sandro Giacobbe のラヴ・ロックの名作「Bimba」というLPを想い出してしまった。泣きのフレーズで盛り上げて一気に聴かせてしまうというその手のファンにはこたえられない1枚であろう。Danilo Rusticiのグループのシングルと思い買ったわけなのだが、これは別グループであり、メンバーその他についても分らない。レコード会社から考えると結構人気があってもおかしくないのだが。



MAXOPHONE
Il Fischio Del Vapore
Cono Di Gelato

PRODUTTORIASSOCIATI PA/NP-3267 77

Pro: Sandro Colombini

彼らは75年に唯一のＬＰを出しているが本作がリリースされたのは77年。この２年間の空白について語る資料は何もない。ＬＰが高水準のシンフォニック･ロックだったため若干ポップな色合いを増した本作は音無しく聞えるかもしれないが､A面は仲々の秀作といえそう。メロディーライン等に彼ら特有の持ち味を残しながらも､とても美しい歌物に仕上がっている。ac.ギターによる静かな幕開けながら後半の盛り上がり方などは往時の面影を忍ばせる。一方Ｂ面に入ると澄み切った音色は相変わらずだが現代風でかなりイージーな作りになっており､後半部分のピアノ､サックスなどはともすればジャジー。もっとも､ジャズ風の音作りも彼らの守備範囲であることはＬＰのＡ１の曲中程で顔を出すパートを聴けば判ることではある。（江）



I. MIGRANTS
In Una Sera
Fiore

BLA BLA BBR1304

プログレ・イコール大作というお考えの方にはシングルはあまり魅力がないかもしれない。だが、実力はありながらもシングルだけで終ってしまったグループは数多い。それでも無視するか、それとも、その一端にでも触れようとシングルを買い集めるか、迷うところである。このBla Blaレーベルより発表されたMigrantesの多分唯一のシングルは70年というまだ早い時期にありながらかなりの完成度の高いサウンドを持っていた。オルガンのイントロから始まりヘヴィーなギターとドラムが加わり、ヴォーカル・パートになると叙情的になる。Ｂ面もイタリア独特の生ギターのつま弾きから始まる叙情的な面を持ったヘヴィー・サウンドの秀曲。（吉）



NEW TROLLS
La Prima Goccia Bagna Il Viso

CETRA SP1460 '71

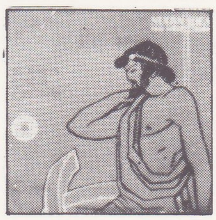
多数　ＬＰ未収シングルがあるニュー・トロルスだがそんな彼等のシングル群の中から本作を代表してあげておく。71年、ヴェネチア音楽祭のライヴ・レコーディング作品でＡＢ面あわせて８分半の演奏が収録されている。日本ではＡ面が71年に、Ｂ面が79年にと別々に発表されている。初期ニュー・トロルスのハードな側面をかいまみることができるだろう。聴く曲々によって、多少統一感のないグループだが、どのアルバムもそれなりに素晴らしい作品であり、いぶし銀のようなしぶさを秘めた玄人好みのグループであるといえるだろう。トロルスを軽視している向きにはこの機会にぜひ再評価をうながしたい。（今）



NEW TROLLS
Black Hands
Percival

CETRA SP1494

Ｂ面が「Searching For The Land」からのカッティングなので72年頃の発売だろう。Fonitは発売年が明記されていないので困る。次々と名作を発表する以前とはいえ、この「Black Hand」の出来はすばらしい。TVドラマのテーマ曲のためか、いままでの彼らのサウンドと多少異なる部分があるが、メロディの感じは前述のＬＰの１曲「Searching」に良く似ている。さらにロック調でドラマチックな曲作りにしたという感じ。(ドラマチックな曲が好きなので、私の担当にはこの言葉が多くなってしまう。) ジャジーな感じのGianni Bellenoのドラムがいい。曲全体をひきしめている。さらに効果的なピアノといい、ヴォーカルのメロディーラインといいNew Trollsファンでなくても魅力的なシングルにちがいない。（吉）



NUOVA IDEA
Pieta, Un Uomo Contro Lìnfinito
Dolce Amore

OREGON OR/700 '70

ヌオヴァ・イデア―知られているだけでも3枚のLPと４枚のシングルをリリースしているグループである。本シングルは､LPリリースに先がけて彼等がリリースした最初の録音で､LP未収録曲である。70年ということもあって荒削りなサウンドであるが､後の彼等のサウンドへの伏線的な役割を担っているといえば良いのだろうか。数あるイタリアンロックの中でも､名前こそ知られているものの､日本では､人気のないグループであるが､プログレッシヴでかつポップなサウンドは､オリジナリティあふれる素晴らしいものであるといえよう。初期オザンナ風1st､軽快なプログレッシヴ・サウンドを有する2nd, 2ndの延長線上にありながら自己の音楽性を最も明確にした3rdとどれも仲々の好作品である。（今）



OFFICINA MECCANICA
Bambini Innocenti (Strumentale)

PICCI L63929 3029 '73

読者の皆さんにはこの〝オフィチーナ・メカニカ〟というグループ名はあまり馴染みのない名前だと思う。それもそのはず、現在３枚のシングルの存在が確認されているだけの超マイナーグループだ｡(恐らくＬＰは制作していないと思われる｡) ここに紹介するものは確認されている３枚のシングルの中で最も新しいシングルで、暗い讃美歌風コーラスをイントロとして、クリムゾン張りのブラス・アンサンブルと憂い溢れる生ギター＆ボーカル・パートが相互に織りなすプログレを展開する。チェルヴェッロやイル・バレット・ディ・ブロンゾの「ＹＳ」のイントロ的雰囲気だ。Ｂ面はこの曲のインスト・ヴァージョンで、こちらはイフ・タイプのブラス・ロック・アレンジに仕上っている。また他の２枚も同様のブラス・ロック・サウンド。(UNO)



OFFICINA MECCANICA

Amanti Di Ieri/Insieme Al Sole

Vedette:Vvn 33285 '77

Officina Meccanica の Vedette 移籍後の秀逸な１枚。Picci 時代のサウンドは、Osanna や Cervello 等にも通じる妖し気な暗さとＰ・Ｆ・Ｍや Latte E Miele 的清澄さとが、練り上げられた構成の中で極めて魅力的に作用し合った非常に優れたものだった。真にプログレッシブなグループであり、当時の第１級のグループと同列に扱われ論じられるべきである。このシングルは彼等のそうした持ち味を失うこと無く更に純化され、無垢なまでの清楚さを漂わせた名曲である。穏やかな情感ど不思議な温もりに色どられたこの作品は、静かに高まる緊張感を伴って、再び我々に忘れ難い Officina Meccanica 節を聴かせてくれる。〔鈴〕



LE ORME

L'aurora
Finita La Scuola

CAR JUKE BOX CRJ-NP1059 '70

現在まで実に長い音楽活動を続けてきたオルメだが、一般に知られているのはフィリップスに移籍後のアルバム群である。しかし、オルメはそれ以前にも数年の音楽キャリアを持ち、カー・ジューク・ボックス・レーベルに２枚のＬＰ(Ad Gloriam, L'aurora）と知っているだけでも６枚のシングルを70年までにリリースしている。本作は2nd LPからのカットであり、フィリップス以前の最大の名曲である「ラウロラ」が片面に収録されているので、前後オルメの作品を代表させてリスト・アップしておく。最初期のビートルズとサイケデリック・ミュージックからの影響を離れ、たおやかなオルメ節とでもいうべきものを確立したモニュメント的作品で、正にイタリアの夜明けの空をかざるオーローラ的名曲である。（山）



LE ORME

Concerto N.3
Blue Rondo' A La Turk

CAR JUKE BOX CRJ-NP 1090 '73

オルメ73年の作品。すでにフィリップス時代であるのに何故か古巣カー・ジューク・ボックスからリリースされた。片面がバッハ、片面がデイヴ・ブルーベックの曲で両面ＬＰ未収。インストゥールメンタル・チューン。両面の曲共キース・エマーソンがナイス時代に演奏していた曲である。両面ともナイスに非常に良く似た演奏で、従来のオルメとは又、違った側面のプログレッシヴ・クラシカル・ロックを聴くことができる。オルメはカー・ジューク・ボックス時代、フィリップス時代を通じてＬＰ未収録のシングルをリリースしており、他にもコントラプンティ時のＬＰ未収曲「Sera、フィリップスよりの 1st 時の未収曲 Ricordi Piu Belli 等秀曲がある。（山）



(LE) ORME

Sera
India

PHILIPS 6025 134 '75

レ・オルメ——イタリア語の美しさを聴かせる愛すべきプログレッシヴ・ロック・グループだった彼等はその長い歴史の中にシングルも多数録音している。本シングルは75年。アルバム「Contrappunti」録音時に同時リリースされたものでＡ面がＬＰ未収曲。Ｂ面が「Contrappunti」からのカットである。「夕暮れ(SERA)」と名付けられたＡ面はオルメ従来の歌心を大切にした好ナンバーで、暖かさを感じさせるほのぼのとした作品。オルメは数あるイタリアン・ロックの中でも最近は軽視されるむきがあるのでここで読者の注意を再度促したい。特に「Uomo di Pezza」「Felona e Sorona」「Contrappunti」「Storia o Leggenda」「Florian」等は少なくとも一聴すべきアルバム群である。オルメを聴かずしてイタリアン・ロックを語ることなかれ。（山）

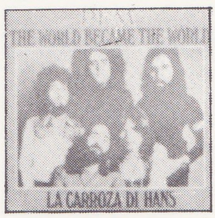


PREMIATA FORNERIA MARCONI

La Carrozza Di Hans
Impressioni Di Settembre

NUMERO UNO ZN50126 '71

〝セレブレーション〞と並ぶ大ヒット・ナンバー〝甦る世界〞と〝ハンスの馬車〞という 1st アルバムの名曲の豪華カップリングによるデビューシングル。Ａ面の〝ハンスの馬車〞の方はアルバムよりも多彩な展開としっかりとした構成を持つヴァージョンに仕上っており、特にクラシック・ギターのソロ・パートに続く展開部は著しく異なり、ヴァイオリンのソロがフィーチャーされている好アレンジ。Ｂ面の〝甦る世界〞の方は 1st アルバムのテイクのショート・ヴァージョンに当り、全世界へ向けてリリースされたアルバム「甦る世界」に再録された英語ヴァージョンと同じ構成だが、このシングルでは再現部の名フレーズがフルートではなく、シンセで演奏されキーボードがより重厚なアレンジに仕上っている。(UNO)



PFM

The World Became The World
La Carrozza Di Hans

MANTICORE 13 505

プレミアータ・フォルネリア・マルコーニのリリースしたシングルの中で最も話題性のあるのが本シングルであろう。本作は英マンティコアから彼等がオーバーグラウンドへと浮上した時期にリリースされたもので、ドイツ、フランス、日本他（全てジャケットが違う）でもリリースされている。このジャケットはフランス盤のもので、日本盤はカラー・ジャケット（といっても紙一枚ではあるが）である。Ａ面は甦る世界であるが、特筆すべきはＢ面であろう。ハンスの馬車(La Carrozza di Hans)のライヴ・ヴァージョンが６分にも渡って収録されている。もちろんこのライヴ・テイクは他のＬＰ他では全く聴くことのできないもので、ＰＦＭが最も多感な時期の素晴らしい演奏を聴くことができる。（山）



PRENESTUM BLOCCO 452
E Lui Chi E'
Occhi Chiari

UNIVERSAL SOUND USA001 '69

プレネストゥーム・ブロッコ・クァットロチェント・チンクァンタ・ドゥーエというとてつもなく長〜いグループ名を持つこのグループは1969年にユニバーサル・サウンドという超マイナーなレーベルからこのシングルを唯一リリースしたグループでありまた、キーボードとベースのピナ兄弟を中心として、あのJUMBOのボーカルであるアルバーロ・フエラが在籍していたグループでもある。音の方は1969年という年代から想像がつく通りかなり古めの音作りであるが、あの嗄れ声で歌い上げるカンタウトーレ・メロディーの合間に重厚なオルガンやメロトロン、陰鬱なメロディーを奏でるギター&ベース等を盛り込んだ当時としてはかなりの意欲作。ジャケットは最低だが、音の方はなかなかのもの。特にJUMBOファンは注目。 (UNO)



QUELLI
Mi Sentivo Strano
Dettato Al Capello

RICORDI SRL 10.502

プレミアータ・フォルネリア・マルコーニ(PFM)はクエッリ(QUELLI)、クレル(KREL)というグループを母体として誕生したが、フランコ・ムッシーダとフラヴィオ・プレモリを正式メンバーとし、一時期ラディウスが在籍していたクエッリはプログレッシヴ・ムーヴメント以前としては忘れてはならない人脈を形成するグループであるといえる。彼等は数枚のシングルと一枚のアルバムをリリースしてその歴史を閉じたわけだが、サウンドのほうは、PFMからは想像もできないようなビート・サウンド。アフロディティス・チャイルドやディープ・パープル等のカヴァー・ヴァージョンを得意としていた。本シングルもそういったビート的作品で、プログレッシヴ以前のイタリアのサウンドを象徴する一枚である。B面はLP未収録曲。 (山)



RICORDI D'INFANZIA
Mani Fredde
Latte E Rhum

FONIT CETRA SP1497

本誌12号のイタリア・カタログから漏れたアーティストの補足として後号で紹介した幾つかのグループの中に"リコルディ・ディ・インファンツィア"というグループのアルバム「Io Uomo」が紹介されていたのを憶えているだろうか？ このアルバムは重厚なオルガンが印象的なブラック・サバス張りのヘビー・プログレ・サウンドであったが、彼らが残した唯一のLP未収録曲によるシングルは前記したサウンドを一切感じさせない朗々としたイタリアン・カンタウトーレをベーシックとした歌心溢れるメロディアスなナンバーで、雄大なメロトロンをバックにじっくりと聞かせてくれる。特にブラス・メロトロンが奏でるエンディングのハイライト・シーンは圧巻！ アルバムよりシングルの方が良い作品であるという数少ない例です。(UNO)



ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Let's All Go Back
Anglosaxon Woman

FROG FRS 3001 '75

名作、コンタミナツィオーネをリリースしたイル・ロベッシオ・デッラ・メダリャはRCAに3枚のLPをリリースした後も活動を続け、フロッグ・レーベルにニュー・アルバム(4th)を録音した。本作はその4thアルバムからのカットである。しかしシングルを出した後、何かの理由でLPリリースはたち消えとなってしまい、そのマスター・テープの所在もわからずじまいという状況である。サウンドのほうは、オーケストラこそはいっていないものの、洗練されたシンフォニックを聴かせてくれ、ことにA面は叙情的なヴォーカルをフィーチャーして、徐々に盛りあげていく作風。威風堂々として、円熟したサウンドを聴かせてくれる。RDM最後の一撃である。 (今)



TITO SCHIPA JR.
Sono Passati I Giorni
Combat

FONIT SPF31290

ファンの間でもあまり口にのぼることがないようだが、Tito Schipa Jr.が中心となって作られた「Orfeo 9」はよく聴いたレコードであった。70年あるいは、71年に発表された、彼の最初期のシングルであろう。A面は、「Io Ed Io Solo」に収まっている。生ギターをバックに彼独特の語りかけるように唄うスタイルはすでに確立されている。うって変ってLP未収のB面「Combat」はロック調のかなり凝ったアレンジによるドラマチックな曲。Bill Contiのアレンジに因ることも多いと思われるが、発売時期の古さを感じさせない。彼の知る人ぞ知る「Occhi Del Nord」に次ぐ名曲といえよう。こんな曲をシングルのB面として封じ込めてしまうイタリア人の大胆さと創造力に脱帽せざるをえない。 (吉)



SIGNORI DELLA GALASSIA (Italy)
Creazione
Terza Fila

BANG BANG BG-042 '76

シニョーリ・デッラ・ガラシア(S.D.G)というグループは1976年にこのシングルでレコード・デビューし、4枚のシングルと「Iceman」(1981年)というLPを2枚リリースしているグループであり、このシングル及び3枚目まではラッテ・ミエーレ+イ・プー風のシンフォニック・ラヴ・ロックを主体とするサウンドだ。どれも良質な作品だが、その中でもこのデビューシングルの出来が良い。A面は優雅なピアノと女性スキャットが印象的なインストゥルメンタル・ナンバーで、B面の曲が、美しいストリング・シンセのアルペジオとオルガン、ピアノによって作り出されるシンフォニック・ラヴ・ロックの傑作。なお3rdシングル以降のシングル乃び2ndアルバムは、ポップ要素が強く押し出されたサウンドへと変化して行った。 (UNO)



ENZO STAVOLO
Fiaba Popolare
Mater

BCE P04942 '78

フィアバ・ポポラーレなるこのシングルをリリースしたエンツォ・スタヴォーロについては残念ながら現在のところ他の何の資料もない。78年に本シングルをリリースした以外は全て謎に包まれたままだ。さて内容だが、いわゆるカンタウトーレであって、国内盤がリリースされているGRUPPO 2001を想わすような清涼感のあるヴォーカル、バロック調のアレンジをほどこされた演奏が一体となり極めてイタリア然とした雰囲気をかもし出すことに成功している。ことに生の弦楽器とメロトロンを併用したバッキングがなんとも絶妙なアンサンブルを聴かせてくれる。A、B両面共好作であるだけにLPがリリースされているとすればそれにかける期待は非常に大きいといわねばなるまい。数あるカンタウトーレの中でも出色の一枚。（山）



TAVOLA ROTONDA
Principessa/Destino

RIFI:RFN-NP 16542 '73

La Verde Stagione 解散後 Ihle 兄弟が新結成したグループ・Tavola Rotonda の唯一（？）のシングルは、数あるシングルの中でも屈指の一枚。夢見心地のボーカル、ハーモニー、華麗にして気品漂う各種キーボード、爪弾かれる清澄な生ギター、幽玄かつ流麗なフルート、そして深遠なメロトロンが聖神の中に翳りを添える。クリムゾン、ジェネシス、キャメル等のエッセンスを巧みに吸収しイタリア独特の繊細で奥深い美意識で包み込み、嘆息も出んばかりの叙情で我々を圧倒する。A・B面共甲乙つけ難い完成度を誇るこのシングルはＩhle 兄弟渾身の１枚であり、比類無き美しさを湛えた信じ難い逸品である。〔鈴〕



TRIADE
1998
Caro Fratello

DERBY DBR 1855 '73

ＬＰ一枚を残して消えた愛すべきキーボード・トリオ、トリアーデ。彼等はＬＰ以外にもシングルを一枚だけリリースしていた。残念ながら両面共、ＬＰからのカットである。ジャケットはＬＰのカヴァーになっている３つの頭を持つ男のイラストが渋い茶色の紙に印刷されている。彼等のサウンドはテクニック的にいまひとつではあるが、独特の哀愁を秘めたアイデンティティーはやはり人の心を打つものがあるようだ。セカンド・アルバムがぜひとも聴きたかったグループの一つであるように思う。オーバーグラウンドに浮上できずに消えた数々のグループの中でも特に、印象の強いグループであっただけに、現在から回顧する想いは募るばかりである。（今）



TRIP
Fantasia
Travelin' Soul

RCA PM3561

かつては幻の名盤としてファンを騒がせた「Time Of Change」。グループ自体の人気も下がる一方でちょっと残念。70年11月に発売された彼らのデビュー・シングル、まずジャケットに目が行ってしまう。いかにもそれらしき出で立ちで当時イタリア国内でそう多くはない演奏主体のバンドだと分らせる。1st LPと同じくUp & Down Studioのデザインによるものだろう。1st LPはプログレ・ファンを喜ばせる内容とは言い難いが、それでもオルガンの使い方、曲の構成など注目すべき点を見つけることはできる。この２曲、やはり、オルガン中心のブリティッシュ・ロック風とはいえ、曲の良さもあって仲々飽きさせない。初期のトリップを知るには最適な１枚といえる。（吉）



FEDERICO TROIANI
Lupo Solitario
Tarantella

RCA PB6014 '77

レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカのキーボード奏者、フェデリコ・トロイアーニが、ソロＬＰ「Strada」に先がけて発表したこのシングルは、レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカの蘇生を思わせる貴重な１枚。特にＢ面「Tarantella」には、ただただ驚嘆あるのみ。深遠かつ幽幻なピアノの音色に導かれ、物悲し気なメロディー・ライン、唄心充分なボーカルそして華麗にしてダイナミックな演奏が交錯する様は、正しくあのレアーレ節の再来。イタリアン・プログレ・ファンを満足させうる名曲・名演である。（鈴）



UT
La Mia Vita
Afrodite

ERRE RR 3076 '75

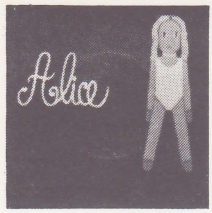
ウー・ティ（UT）は一枚のアルバム（MARQUEE 12号ヨーロピアン・カタログ・イタリア編参照のこと）の他、そのアルバムからの抜粋とシングル・テイクを収録したベスト・アルバム的色彩の強い「La Strada Era Bella」と計２枚のアルバムをリリース後、シングルを数枚リリースしながら70年代後半まで活動を続け、解散してしまったグループである。後期のシングルは当然、LP未収曲で、かなりタイトになってしまっているものの、UTのオリジナリティを感じさす好作品群である。ここでは両面ともLPに収録されてはいるが、ジャケットの美しさが光る本シングルを代表的一枚としてリスト・アップしておくことにする。カンタウトーレとプログレッシヴ・ロックの橋渡し的なグループUT。機会があったらぜひ聴いてほしい。（山）



LA VERDE STAGIONE
La Verde Stagione
Lacrime Sul Cuscino

NUMERO UNO ZN50003

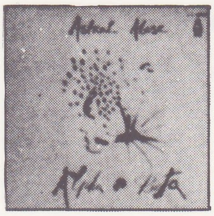
レコードに針を落とすや否や、なつかしいようなイタリアン・ラヴ・ロックの世界へと引きこまれてしまう。70年発表ながら後年たくさん生まれてくるこの手のグループと比べても遜色はない。同じレーベルのFormula 3が派手な活躍を見せているのに比べ、実に対照的なサウンドを持った地味とはいえ良いグループだったのに、何枚かのシングルを発表して解散してしまったようだ。せめて1枚はLPでも作ってくれていたらと思うのは私だけではないだろう。私の持っている3枚の中ではこのシングルが推薦できる。A面は甘く切ないメロディ・ラインを持ったラヴ・ロックの典型ともいえるサウンド。ストリングスも美しい。B面は幾分ポップな曲で、ギターのメロディが楽しい。（吉）



ALICE
De L'Autre Cote Du Miroir
Viens

BYG 129019 '70

フレンチ・ロック・シーンにおける最初期のプログレッシヴ・ロック・グループ、アリスはBYGレーベルに3枚のシングル(2ndのA面以外は全てLP未収)を残している。本シングルは彼らのデビュー作であり、クロード・オルモ(本作のみでグループを脱退し、クール・マジックを結成した。その後、マグマにも参加している)を含むオリジナル・メンバーによる唯一の作品である。シングルということもあってか、ボーカルが中心になっており、プログレッシヴ・ロックと呼ぶには多少ポップ過ぎる感は否めなが、曲作り及び演奏はそれなりに工夫されたものであり、彼らの音楽に対する斬新な姿勢が窺われる。なお、本作に続く1st アルバムは初期のフレンチ・プログレッシヴ・ロックを代表する作品と言える。（賀）



ALPHA BETA
Astral Abuse
Who Killed ?

BYG 129 032L '70

アフロディティス・チャイルドのヴァンゲリスを中心としたアルファ・ベータは70年代初頭に極短期間活動し、本シングル1枚を残して消滅したグループである。ここで聴くことのできるサウンドはアフロディテス・チャイルドの「666(Vertigo 6673 001)'72」及びヴァンゲリスの1stソロ・アルバム「Earth(同6499 693)'73」の両傑作の原点とも言うべきもので、彼の特異な才能が十分に発揮されている。女性のなまめかしいボイスとパーカッションを大胆に使い、シンセサイザー、ピアノ、ギター等を巧みに加えた音作りはオリジナリティ溢れるものであり、ギリシャ神話にも通じるエロスを感じさせる。ヴァンゲリスの数多い作品の中でもギリシャ人としての意識が最も色濃く出たものの1つである。（賀）



L'AME SON
Je Veux Juste Dire
Unity

BYG 129.023 '70

仏BYGレーベルは70年代初頭に数多くの作品をリリースしているが、中でも、ジャケット右上に通し番号を入れたアクチュエル・シリーズは当時フランスで人気のあったフリー・フォームなジャズを中心とした同レーベルの看板シリーズであった。その中に例外的に含まれていたロック系の作品がデヴィッド・アレン、ゴングの「Magick Brother」「Banana Moon」「Camembert Electrique」とアム・ゾンの「Catalyse」であった。「Catalyse」は彼らの唯一のLPであり、フルートとギターが印象的な、初期のゴング的要素を持ったサイケデリック・サウンドの力作である。本作品はLP未収の2曲を収めた、これまた唯一のシングルであるが、内容的にはLPと同系統のものとなっている。メロディアスなフルートが心地良い。（賀）



ANGE
Israel
Cauchemar

CAEPE JCP25.002 '70

2枚のシングルをリリースして消滅したCaepeレコード(アンジュのマネージャーとして有名であり、後にアルカン、クリプトの両レーベルを設立したジャン・クロード・ポニャンのレーベル)の第2弾として発表されたのが、このアンジュのデビュー・シングルである。その内容は後のシアトリカルなサウンドとは多少異なり、当時のブリティッシュ・ロックに影響されたものとなっている。A面のややブルーズィな演奏、B面で聴くことのできるキース・エマーソン(ナイス)を意識させるオルガン・ソロ等、彼らの音楽のルーツを知る上で興味深い。この翌年、有名なGolf Drouotのセッションにピュルサーらと出演、好評を得た後、フィリップス・レコードと契約してスターへの道を歩み始める。（賀）



ANGE
Tout Feu Tout Flamme
Docteur Man

PHILIPS 6009 191 '71

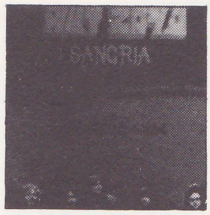
アンジュのフィリップス・レーベルからの第一弾、1st アルバム「Carricatures(Philips 6332 066)'72」に先立って発表された2ndシングルである。1st シングルが後の彼らの音楽性とは多少なりとも異なった作品であったのに対して、本シングル(両面LP未収)のA面はアンジュ・サウンドの原点、フレンチ・シンフォニック・ロックの根源ともいうべきものとなっている。メロディアスなキーボードとギターをバックにした情感に富んだボーカルは正に彼ら独自のものである。一方、B面はややハードな内容となっており、デビュー作と以後の作品の中間に位置するものと言える。なお、本作に続く3rdシングル「Le Soleil Est Trop Vert/Le Vieux De La Montagne(同6009 284)'71」の2曲もLP未収である。（賀）



ARGILE
Perce Neige
Demain La Terre...

VOGUE 45.V.4210 '73

72年に行なわれた「BEST」誌グラン・コンクールの覇者アルジル。本シングルはその優勝を記念してリリースされた彼らのデビュー作である。メンバーの名前を始めとして、グループのパーソネルに関する詳しい資料は無いが、レコード及びピクチャー・スリーブから推定するに、ギター２人（内１人がボーカルを取る）、フルート＆サックス、ベース、ドラムの５人編成だったものと思われる。そのサウンドは初期の（シンフォニックな音作りをしていた頃の）マルタン・サーカスの影響下にあるもので、Ａ面はボーカルを中心としたポップな作品に、一方、Ｂ面はフルートを前面に押し出したメロディアスなインスト曲に仕上がっている。その後の活躍を大いに期待された彼らであるが、本作１枚を残して消えていった。（賀）



ART ZOYD
Sangia
Something In Love

OPALINE 1105 '71

今や伝説的存在となった、アール・ゾイのデビュー・シングル。1st アルバム「Symphonie Pour Le Jour Ou Bruleront Les Cités (Production Michel Besset 001)」に先立つこと５年前にリリースされた作品である。ピクチャー・スリーヴから考えて５人のメンバーによるものと思われるが、1st アルバム発表時には全員がグループを脱けていたとのことである。ギター、ベース、ドラムス、サックスにボーカルが加わった演奏は、ＬＰ発表後のものと比べて、かなりハードな印象を受ける。それはニュー・ロック、アート・ロックと呼ばれた頃の英米のロックの流れを汲むものであるが、サックスのソロを大胆に導入するなど、彼ら独自の斬新な試みも見られる。フレンチ・ロック黎明記の作品としては高水準にあるものと言える。（賀）



ATOLL
Je T'aime Quand Je Te Vois
Change Ta Vie

EURODISC 12.806 '73

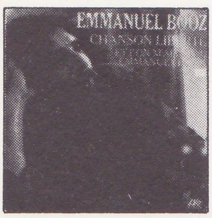
アンジュ、ピュルサーなどとともにフレンチ・シンフォニック・ロックを代表するアトール。約６年に渡る活動期間中に、彼らはＬＰを４枚（グループ解散後にベスト・アルバムが出た）、シングルを少なくとも４枚（ＬＰからのカットも含む）発表している。本シングルは 1stアルバムに先立ってリリースされた彼らのデビュー作であり、ＬＰ未収の作品（両面とも）である。シングルということを意識してか、そのサウンドはＬＰと比較してポップなものとなっている。Ａ面にはハイ・トーンのボーカルを効果的に用いた明るく軽快な曲が収められており、Ｂ面ではビートの利いたシンプルでややヘヴィな演奏を聴くことができる。なお、本作に続く 2ndシングル「Le Secret Du Mage/Je Fais Un Reve（同12.811）」のＢ面もＬＰ未収である。（賀）



EMMANUEL BOOZ
Ma Terre
Tout Est Trés Bien Comme Cà'

BARCLAY 61420 L

エマニュエル・ブーズの4thシングル。彼はバークレイ・レーベルに「Le Mont Des Oliviers(Barclay 61.185)」「Au Restaurant D'Alice/Jean Et Jean(同61.273)」「Rosy-Rag/La Rone En Bois(同61.314)」そして本作の計４枚のシングルを残している。2nd,3rdはLP「Au Restaurant D'alice(同920 186)」からのカット、1st と本作はLP 未収である。バークレイ時代の作品はいずれもブーズのシンガーとしての面が強く出たものであるが、3rd までの３枚がカントリー・ミュージック等からの影響を感じさせる、ほのぼのとしたものであったのに対して、本作品はより歌い込んだ、奥行きの深いものとなっている。特に叙情的なフルートをバックにしたＡ面、羽根の生えた赤ん坊を描いたピクチャー・スリーヴのデザインは初期の傑作と言える。(賀)



EMMANUEL BOOZ
Chanson Liberte
Et L'On M'Appelle Emmanuel Booz

ATLANTIC 10633 '75

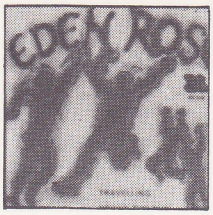
存在しないというのが定説だった（2nd アルバムからカットしたプロモーショナル・シングルのみが知られていた）エマニュエル・ブーズ（数人のフランス人に尋ねたところ、ブとボの中間、Ｚも発音するらしい）のアトランティック・レーベルにおけるＬＰ未収シングルである。彼が同レーベルから発表した２枚のＬＰでは、ウイリアム・シェラーの壮大なオーケストレイション(2nd)、クリアライトのメンバーを中心にしたテクニカルな演奏(3rd)と、バッキングの比重が極めて高かったが、本シングルではあくまでも彼の唄を中心に、キーボード、ギター、コーラス等がそれを巧みに盛り上げている。説得力あるボーカルと派手さはないが的を射たバッキングが見事に一体化した好作品である。（賀）



CRISTAL
Les Yeux Fermés
Le Magicien

EPIC EPC 7245

Epicレーベルの AKTシリーズはクロード・デルクローのプロデュースのもと、幾つかの創造的作品をリリースしている。代表的なものとしてはムーヴィング・ゼラチン・プレイツの作品(ＬＰ２枚、シングル１枚)、フランシス・モーズ、アラン・アトらマグマ・ファミリーによるレジュス・オの「Rhesus O (Epic EPC 64560) '71」等がある。ここに取り上げたクリスタルはジャズの影響下にあるアーティストを擁した同シリーズで、唯一例外的にジャズ色を感じさせないグループである。彼らの唯一の作品と思われる本シングルでは、ギター、コーラスを中心にフルート、ヴィブラフォーン等も用いた、最初期のアトールにも通じるメロディアスかつポップなサウンドを聴くことができる。（賀）



EDEN ROSE
Travelling
Under The Sun

KATEMA KAT 45512 '69

エデン・ローズは本作及び「Reinyet Number/Obsession(As De Trefle AS 8702)」の2枚のシングルをリリースしている。後者がLP「On The Way To Eden」からカットされたプロモーション用のシングルであるのに対して本シングルはＡ面にＬＰ収録曲の別テイクが、Ｂ面にＬＰ未収録曲が収められた貴重なものである。ＬＰ同様、両面ともアンリ・ガルラ作曲のインスト・ナンバーであり、Ａ面では軽快なリズムをバックにアラルサンがややハードでブルーズィなソロを、ガルラがややジャズィでブルーズィな演奏を、それぞれ展開している。一方、Ｂ面はガルラのメロディアスなオルガンを中心としたスロー・テンポのバラードで、甘くムードのある作品に仕上っている。69年という制作年度を考えると完成度は高い。（賀）



ERGO SUM
Tijuana
It's Me

THELEME 6152 003 '72

地元フランスのマニアの間で人気の高いエルゴ・サム。彼らは約３年間に渡る活動期間中にLP1枚とシングル2枚を残している。デビュー作である1-stシングル「Give Your Name/Everyday(AZ SG170)'70」はかなりブルーズィなものであったが、本シングル(両面ともLP未収)及びLP「Mexico(Th-élème 6332 500)'72」はよりプログレッシヴな内容となっている。リオネル・レディスのボーカルは非常にブルース色が濃いが、ジャン・ジュエラン(Key,fl)、ローラン・メイネ(vln,g) らによる演奏はテクニカルで洗練されている。本作でもレディスの個性的なボーカルとバイオリン、フルート、ギター等による巧みにアレンジされた軽快な演奏が一体となって彼ら独自のサウンドを作り出している。（賀）



GONG
Hip Hip Hypnotise You
Est-Ce Que Je Suis

BYG 129021 '70

73年以降、活動の場をイギリスに移し、数多くの作品を発表したため、フランスのグループと認識されることの少ないゴングであるが、70年代初頭、彼らは正にマグマと並ぶフレンチ・ロック・シーンのビッグ・ネームであった。本シングルは彼らの唯一のＬＰ未収作品であり、1stアルバム「マジック・ブラザー(BYG 529305)」とほぼ同時期にリリースされている。そのサウンドは初期ゴングの典型的な音であり、デヴィッド・アレンの感性による音作りがなされている。各種音楽要素を雑った煮にしたかのようなユーモラスな演奏、狂気をも感じさせるギリ・スミスのウィスパー・ボーカル、そこにはゴング神話の幕開けを告げる彼ら独自の音宇宙が広がっている。（賀）



HELDON
Baader-Meinhof Blues
O.D.B.

DISJUNCTA 101

エルドンの 1stシングル。両面とも33回転、計15分を越える力作である。いつ頃の作品かはっきりしないが、内容から推測するに、2ndアルバム「Allez Teia」とほぼ同時期に作られたものと思われる。Ａ面ではスピーディかつうねるようなシンセ・リズムをバックにリシャール・ピナスのギターが唸りを上げている。単調なリズムと電気処理されたギター音が一体となって呪術的雰囲気を醸し出している。一方、Ｂ面はフリップ&イーノの影響を感じさせる作品で、同じフレーズを繰り返す穏やかなギターの流れる中、シンセサイズドされたギターが音の伸びを生かしたプレイを展開している。なお、本作以外のシングルとしては「Perspective 1/同4(Urus 000 102)」(4th アルバム「Agneta Nilsson」からのカット)が知られている。（賀）



IRIS
Aux Portes Des Villes
Opus 340

SONOPRESSE CONECTION CTN907 '72

イリスはフレンチ・ロック・シーンにおける最初期のシンフォニック・ロック・グループの１つである。彼らは本セカンド・シングル以外にＬＰ「Litanies(Sonopresse Conection CTN69561B)'72」及びシングル「Chrysalide/Décadance(同CTN902J)'72」(両面ともにLPからのカット)を発表している。本シングルはＡ・Ｂ面ともにLP未収の作品であるが、内容的にはLPと同系統のものとなっている。 ボーカルとオルガンを中心にコーラス、ギター等を巧みに組合せた曲展開はシンプルではあるが、非常にメロディアスで独特の味わいがあり、強いオリジナリティを感じさせる。なお、グループ解散後、主力メンバーだったカルボナール兄弟はマシャン、更にはウルタンベールへと活動の場を移していった。（賀）



KOMINTERN
Fou, Roi, Pantin
Elle Était Belle...

HARVEST 2C 006-11775 '72

フランスにおける幻の名盤の代表格だった、コミンテルンの唯一のＬＰ「Le Bal Du Rat Mort」も遂に再発(Cryonic MAD3019)され入手が比較的容易になった。本作品は同ＬＰからカットされた、彼らのやはり唯一のシングルである。バイオリン、サックス、ギター、ベース、ドラムス等によって展開されるメロディアスな演奏は、かすかにジャズの香り漂うノスタルジックかつユーモラスなものであり、正にフランスのエスプリ、他国のシーンでは聴くことのできないサウンドである。ＺＮＲ他、以後のフレンチ・ロック・シーンに対して、音楽的に、また精神的に、多大な影響を与えたコミンテルン。本シングルでその姿を垣間見ることが可能であるが、やはり、その本質を理解するためにはＬＰを聴くことが必要であろう。（賀）



TEDDY LASRY

Tarzoon's March
Bug Blues

PATHE MARCONI 2C010-14222 '75

テディ・ラスリーの作品としてはRCAからの２枚のＬＰがよく知られているが、彼はその他にも数多くの作品を製作している。しかし、それらはいずれも放送局用、あるいはプロモーション用に作られたもので、その内容も我々の興味を引くものとは言い難い。そうした中で、上述のＬＰ以外に、唯一公式に（一般に対する販売を目的として）リリースされたのが本シングルである。とは言うものの、このレコードもまた、映画「Tarzoon La Honte De La Jungle」のためのサントラであり、彼自身が目差す音楽とは異なったものとなっている。Ａ面はシンプルなリズムをバックにしたボーカル作品、Ｂ面にはダルな感じのジャズィな作品が収められており、完全なコレクターズ・アイテムと言える。（賀）

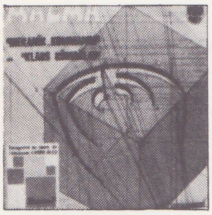


LENIS CHOREA

Mea Culpa (vocal)
Mea Culpa (instrumental)

FLAMOPHONE FLAM 4503

レニス・コレアとはフラモフォン・レーベルの創設者クロード・ピュトゥルフラムの変名であり、本作ではアラルサンと共演している。一般にサンドローズの前身はエデン・ローズと言われているが、エデン・ローズが60年代のグループであったのに対して、本作品は70年にリリースされておりサウンド的にもサンドローズに近いものとなっている。それもそのはず、「Mea Culpa」はＬＰ「Sandrose」のＢ-1に収められた「Old Dom Is Dead」の原曲なのである。Ａ面には、システム・クラプチック以来の付き合いである２人によって作られた、同曲のボーカル入りナンバーが、Ｂ面にはインスト・チューンが収められている。ギター、コーラス、ボーカル(仏語)等が叙情的サウンドを奏でる名作である。(賀)(協力：中藤正邦)



MAGMA

Mekanik Kommando
Klaus Kömbälad

PHILIPS 6009 185

フレンチ・ロック・シーンにおけるカリスマ的存在であるマグマ。彼らは15年以上の長きに渡ってトップ・アーティストの地位を占めてきた。この間に12枚のＬＰを発表した他、８枚のシングルをリリースしている。本シングルは 3rdに当たるもので、両面ともＬＰ未収の作品である。Ａ面の「Mekanik Kommando」は同曲の最初の録音であり、Theleme レーベルから２枚のオムニバスＬＰ(「Puissance 13+2」「Music Is My Honey」）にもほぼ同一メンバーによる別テイクが、更に 3rdアルバム「Mekanik Destruktiw Kommandoh」にステラのボーカルによるものが収録されている。一方、Ｂ面は本誌 019で紹介した彼らのベストアルバムに収められた作品である。両面とも力強くまとまりのある演奏で高い完成度を示している。（賀）



MAGMA

Mekanik Machine
Köhntarkösz Part 2

VERTIGO 6061 800 '74

マグマの 4thシングル。ＬＰ未収の「Mekanik Machine」が収められていることもあって、彼らの８枚のシングルの中でも人気が高い。ヤニック・トップによって作られた「Mekanik Machine」は彼の超ヘヴィー級、地の底から沸き上がる地鳴りのようなベースのイントロでスタートする。そして、重々しいベースを基礎に、クロース・ブラスキ、ステラ・ヴァンデルらが「メカニック・マシーン」を連呼するなか、ドラムス(クリスチャン・ヴァンデル)、ギター(ブライアン・ゴディング)等が曲を盛り上げていく。その混沌とした音宇宙は決してフォロワーを生むことのないマグマ独自の世界である。数多い彼らの作品の中でも名曲の一つと言える。Ｂ面はLP「Kohntarkosz」収録の「Kohntarkosz Part 2」からのカット(後半部)。（賀）



MEMORIANCE

Sparadrap
Telephone

PHILIPS 6010 302 '81

20周年を迎えたGolf Drouotの、新人コンテストで金賞を受賞したメモリアンス。アトールと同じアラベラ・プロダクションに所属し、デビュー・アルバム「Et Après (Eurodisc 913 084) '76」を発表、79年には 2nd「L'Ecume Des Jours (Philips 9101 265)」をリリースして中堅シンフォニック・ロック・グループとしての地位を築いた。その後の彼らの消息についてはほとんど伝わってくることなく、一部でニュー・ウェイヴに転向したと噂されていた。果たして彼らは活動を続けており、81年にグループとしての方向性を変えて本シングルを発表していた。定型ビートをバックにボーカルを重視した音作りは確かにニュー・ウェイヴ的であるが、ピアノ、ギター等のプレイにはかすかながらも懐旧の感がある。（賀）



MORMOS

Magic Stone
Hey Gilles

CBS 7575 '71

モルモスは70年代初期にフランスで活動したアメリカ人のバンドである。活動期間は約２年と短かかったものの、その間にLP2枚―「Great Wall Of China (CBS S64440) '71」「The Magic Spell Of Mother Wratch (同S64979) '72」、シングル２枚―本作及び「Listen To The Flavor/Paranoid Night Dream (同7962) '72」―更にフランソワ・ベランジェとの競演盤「Ça Doit Être Bien (同64558) '71」を発表している。プログレッシヴ・フォーク・ロックと呼ばれることの多い彼らのサウンドはトラッド色の濃い女性ボーカルとクラシック、ジャズの素養をも感じさせるフルート、チェロ、サックス等による演奏が無理なく融合したもので高い完成度を誇っている。本作でも巧みにアレンジされた演奏が展開されており実力が窺われる。（賀）



MOVING GELATINE PLATES

Funny Doll
Cauchemar

CBS 7752 '72

70年代初期のフレンチ・ロック・シーンにおいて、マグマとともに、最もプログレッシヴな存在だったムーヴィング・ゼラチン・プレイツ。彼らは2枚のＬＰ「Moving Gelatine Plates(CBS 64339)'71」「The World Of Genius Hans(同64168)'72」を発表しており、両者とも充実した内容を有していたが、特にセカンド(ファーストよりレコード番号が若い)はヨーロッパのファンの間で非常に高い評価を得ている。本作品は同アルバムからカットされた彼らの唯一のシングルであり、大胆な変拍子に乗せて、サックス、フルート、トロンボーン、バスーン、ギター等が、ソロやユニゾンで、次々に多少ジャズィでメロディアスな演奏を展開している。発表年度を考えるに、極めて斬新な作品であり、後進に大きな影響を与えたものと思われる。　(賀)

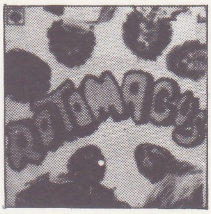


PULSAR

Sorrow In My Dream
Dawn Over Darkness

CBS 5875 '77

日本のプログレ・ファンの間でアトールと並んで絶大な人気を集めているピュルサーの演劇用サントラ・アルバム「Bienvenue au…」や、このアルバムに続く作品がカセットのみでリリースされている事、また彼らのアルバム・デビュー以前のライヴが収められているオムニバスＬＰ「Groovy Pop Session」(ＬＰ未収録曲)等の存在が確認され、さらにはグループは現在でも存在し新譜ＬＰを出したがっているというニュース等…。ファンにはとっても気になる所。当然シングルが存在するかどうかというのも話題の的。そして、これが彼らの唯一のプロモーションのみのシングルで名作「Halloween」からカットされたもの。残念ながらテイクも同じですが、資料的な価値は高いのです。　(UNO)

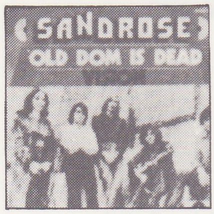


ROTOMAGUS

Eros
Madame Wanda

CBS 4997

ロトマギュは60年代末から70年代初頭にかけて活動したバンドで、本セカンド他2枚、計3枚のシングルを発表している。グループはベース、ギター、ボーカル、ヴィブラフォーン&パーカッション、ドラムス、フルートをそれぞれメインとする6人から成り、ドラマー以外はコーラスも担当している。本レコードのスリーヴの裏側に各メンバーが影響を受けたミュージシャンが記されており、ティム・ボガート、ピート・タウンゼント、ジョー・コッカー、ヴァニラ・ファッジ、ジンジャー・ベイカーらの名前が挙げられている。クラシックのフレーズを使いながらも極めてワイルドなA面、ややブルーズィなB面、いずれもそれなりのオリジナリティを感じさせるが、上述の人々の影響下にあることもまた事実である。　(賀)

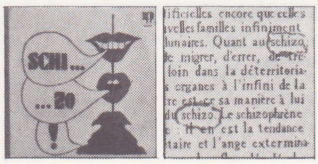


SANDROSE

Old Dom Is Dead
Vision

POLYDOR 2056 150 '72

サンドローズの唯一のシングル。残念ながら両面ともＬＰ「Sandrose (Polydor 2393 030)」からのカットであるが、それでも彼らの素晴らしさは十分に伝わってくる。本カタログでも述べたように、Ａ面は２年前アラルサンのグループ、レニス・コレア（アンリ・ガルラが参加していたか否かは不明）がレコーディングした「Mea Culpa」を原曲とした作品である。ボーカリストを男性から女性に変え、歌詞もフランス語から英語に変えている。アラルサンのギターもより叙情的になっており、新たに導入したメロトロンと一体化してシンフォニック・ロック色を強めている。一方、Ｂ面はアルバムのトップを飾った作品で、ローズの力強いボーカル、アラルサンのメロディアスなギター、ガルラの巧みなバッキングが印象的である。(賀)



SCHIZO

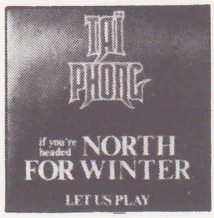
Schizo (and the little girl)
/Paraphrenia Praecox

SFP 44005 廃

Le Voyageur/Torcol

Disjuncta Intensité
0&1 廃

シゾー（発音はピクチャー・スリーヴから推定）はエルドンの前身である。彼らの残した２枚のシングルにはリシャール・ピナスを始めとして、パトリック・ゴーティエ、ジョルジュ・グランブラット、ココ・ルッセルらが参加している。ファースト・シングルに収められた２曲はともにギターとボーカルを主体とした、サイケデリック・サウンドを思わすものである。これに対して、セカンド・シングルはインスト指向になっており、フリップの影響を受けたピナスのギターやゴーティエのエレクトリック・ピアノ・ソロを聴くことができる。なお、「Le Voyageur」はエルドンのファースト・アルバムにも別テイクで収録されている。以後、彼らはエルドンと改名し、２枚のシングルをリリースした後、初のアルバムを発表する。　(賀)



TAI PHONG

(if you're for headed) North For Winter
Let Us Play

WEA 16542 '75

フランスにおける叙情派プログレの代表的存在であるタイ・フォンは以下に挙げる６枚のシングルをリリースしている。「Sister/Crest(WEA16-542)'75」「North For Winter/Let Us Play(同16692)'75」「Games/The Gulf Of Knowledge(同16748)'76」「Follow Me/Dance(同16955)'77」「Back Again/Cherry(同17174)'78」「Fed Up/Shanghai Casino(同17408)'79」このうち、1stと3rd以外は全てＬＰ未収作品である。グループが絶頂期に至る過程で発表された本2ndシングルは彼らの持ち味が十分に発揮された素晴らしいものとなっている。Ａ面はアコースティック・ギター、ピアノ、ストリングス、コーラス等をバックに甘い歌声が響き渡るタイ・フォンならではの甘美な作品である。また、Ｂ面では多少ビートを強調したメロディアスなサウンドが楽しめる。　(賀)

L
|
Ta



TAI PHONG
Back Again
Cherry

WEA 17174 '78

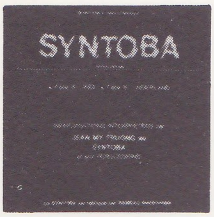
タイ・シン(vo,b)とジャン・アラン・ガルドゥ(key)が脱けた（新メンバー２人が参加した）新生タイ・フォンの第１作（翌年発表された3rd アルバムには両面とも収録されていない）である。ジャン・ジャック・ゴールドマンのペンによるＡ面はメロディックなピアノとスウィートなボーカルで幕を開け、両者を中心にコーラス、ギター、オルガン等も加わって、曲が徐々に盛り上がるというドラマチックな展開になっている。また、同様に、カーン・マイ作のＢ面も切々と歌い上げるボーカルをピアノ、コーラス等が巧みにバック・アップした叙情的作品であり、タイ・フォンならではのロマンチックなサウンドを楽しむことができる。Ａ・Ｂ両面を通じての印象は3rd アルバムよりも前２作に近いものと言える。（賀）



JANIK TOP
Utopia
Epithécanthoropus Erectus II

UTOPIA 42519 '75

ベルナール・パガノッティ、ジョエル・デュグルノー等とともにフレンチ・ジャズ・ロックを代表するベーシストであるヤニック・トップはマグマのメンバーとして、また、フランス・ギャル等多くの人気歌手のバック・ミュージシャンとして安定したプレイを展開している。そんな彼であるが自分名義の作品は本シングル１枚のみである。「Kohntarkosz」を発表し絶頂期にあったマグマのメンバーを従えて製作された本作はトップの本領が十二分に発揮された傑作である。重々しくもリズミカルなベースを基礎にキーボード、ギター、ドラムス、ボーカル等が一体となった力強いサウンドは当時のマグマに酷似したものとなっている。それは当時のマグマがヴァンデルのみならずトップの影響下にもあったことを感じさせる。（賀）



JEAN MY TRUONG
Indi
Indenland

無番号

フレンチ・ジャズ・ロック・シーンにおけるトップ・ドラマー、ジャン・ミ・トゥルオン。彼の活躍はザオ、スルヤ(Surya)等を通じて広くファンの知る所となっている。そんな彼がラモー・エレクトロニック社に請われて、同社開発の「Syntoba」というインストゥルメントのデモンストレーション用に作製したのが本シングルである。「Syntoba」自体がパーカッションなのか、あるいは、従来の楽器に接続して音をシンセサイズドする装置なのかは不明であるが、ここで聴くことのできるサウンドは極端にシンセサイズドされた典型的な電子音である。その電子音とドラムの生音が奇妙に融合したスピーディかつドライヴ感に富んだ演奏はトゥルオンの力量が十分に発揮された素晴らしいものである。（賀）



TRYPTIQUE
If You Are In A Bad Mood
Don't Worry

OPALINE 45-1102 '70

トリプティクの唯一の作品。本シングルのスリーヴにはメンバーの顔写真が載っているだけで名前の記載はないが、フランスの雑誌によると、メンバーはアラン・ルノー(g & vo, 後にディスジャンクタ・レーベルから２枚のソロ・アルバム「Renaud」「Out Of Time」を発表、エルドンの「Allez-Teia」「Third」にも参加)、ディディエ・バタール(b & vo, エルドンの「Interface」、リシャール・ピナスの「Chronolyse」等に参加）クレマン・ベリー(ds,& vo, 後にマグマのメンバーとなる。ルノーの２枚のソロにも参加）とのことである。そのサウンドは当時のブリティッシュ・ロックの影響下にあるブルージィなもので、Ａ面はクリームを思わすギター中心のややハードな曲に、Ｂ面はより内省的な暗い感じの曲に仕上がっている。（賀）



VOYAGE
Slicker
Live Your Life Again

OPALINE 45-1104 '71

ヴォヤージュは、アール・ゾイのデビュー・シングルで知られるオパライン・レーベルに２枚のシングルを残した他、デッカ、ポリドール等のレーベルからもシングルを発表するなど、ＬＰこそリリースしていないが、比較的息の長いグループであった。各作品ごとの詳しいパーソネルは不明であり、何回かメンバー・チェンジもあったようだが、ギター(２人)、フルート＆ボーカル、ベース、ドラムスという編成を基本にしていたものと思われる。本セカンド・シングルのＡ面はゲスト参加のチェロとボーカルを前面に押し出し、それにフルート、アコースティック・ギター等が絡むという、彼らとしては異色な、ややクラシカルな作品になっている。一方、Ｂ面はブルーズィな雰囲気を持った彼らの本質的サウンドである。（賀）



FRANÇOIS WERTHEIMER
Le Compagnon De Voyage
L'Automne

BYG 129030L '71

異色のシンガー、フランソワ・ヴェルテーメの２枚のLP「Wertheimer (BYG529 028)'71」「Fermez Le Yeux (Philips 9101 133)'77」は実力派ミュージシャンを擁したプログレッシヴな作品として知られている。彼の唄は同系統の作品を発表したエマニュエル・ブーズ、オメタクサリアと比較してよりナイーヴであり、シャンソン色の濃いものと言える。本シングルは彼の唯一のシングルであり、LP未収の作品が両面に収められている。Ａ面はピアノと管楽器をバックにしたヴェルテーメの叙情的な唄から始まり、厚みのあるコーラス、ハードなギター、効果音等が次々に加わり曲を盛り上げていく展開になっており、彼の本領が発揮された力作である。一方、Ｂ面はアリスのサウンドを思わすややハードな作品である。（賀）

9 私の愛聴盤

山崎尚洋

▷MARQUEE編集長。大学のサークル誌から数え、約8年に渡ってMARQUEEと共に青春を歩んできた。趣味はクラシックを含む音楽鑑賞及び演奏、オーディオ。自称食通。

A.POPOL VUH/Hosianna Mantra
B.GENESIS/Nursery Cryme
C.BALLETTO DI BRONZO/Sirio 2222
D.UMBERTO BALSAMO/Malgrado Tutto... L'Angelo Azzurro
E.OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
F.IL VOLO/same
G.ISLAND/Pictures
H.CANARIOS/Ciclos
I.CARPE DIEM/En Regardant Passer Le Temps
J.EARTH & FIRE/Song Of The Marching Children







自分で決めた企画ながら、10枚の愛聴盤を選び、限られた枠の中で説明するのは、本当に困難なことだ。又、愛聴盤というからには、単に評論家として音楽性の高い作品をあげるのと違い、私情をまじえた、これだけはコレクションとして大切にしているレコード達ということになるだろう。そう視野で10枚を選んでみたが、これらの他にも同等の愛聴盤は多数存在することをおことわりしておきたい。

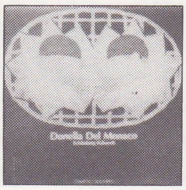
まず、多感な20才前後に没頭していたドイツ・ロックの中からAを代表させておこう。当時はこのレコードは極めて入手困難で、見ることさえ容易ではなかったものである。ようやく友人から譲り受けたこのレコードに酔いしれた当時がなつかしい。深いゲルマン・ロマンティシズムあふれる作品。イギリスはきりがないのでBを代表してあげておく。高校時代の想い出として、プログレッシヴの美意識に目覚めた原点として。プログレッシヴだけが唯一の救いであった時分の愛聴盤。イタリアの一番手はCである。意外に思う方が多いだろうが、レコードを物としてみる時、僕にとって非常に価値があるレコードがこれである。プレミアムのことをいっているのではない。イタリアン・プログレッシヴの黎明70年に創られた一枚で、いわゆるハードロックである。特にA面が好きだが、ことA面ラストの“MEDITAZIONE”は僕にとってはイタリアン・ロックの中でも5指には入れたい曲。録音の悪さもここでは魅力である。個人的な趣味性が余りに強いレコードなので、一般の方には勧められないけれども…。Dはカンタウトーレの代表として。他にMAURO PELOSI, BOTTEGA DELL'ARTE. R.COCCIANTE, ALUNNI DEL SOLE等いくらでもあげたい物はあるが、現時点で最も良く聴くものを選んだ。生活のきびしさをもふまえた上で尚、暖かく語りかける彼の歌声は僕には本当の優しさに聴こえる。シリアス畑寄りの作品の代表としてはEである。バロック、ポップス、フリーの様々な要素をインヴォルヴしながらも、イタリアという風土に根ざした見事な独自性を持つ。プログレッシヴ・ロックの生んだ最大の遺産の1つである。Fは僕の目をドイツからイタリアへと向けさせたグループのアルバムとして忘れるわけにはいかない。叙情派のイタリアン・ロックの作品としては最も好きなものである。もちろんセカンド・アルバムのほうが音楽的には完成度が高いが、初々しさと個人的な思い出とでファーストのほうをあげておこう。Gはヨーロピアン・ロックの中で最も次元の高い構築美を誇る作品として。今聴いても、やはり驚くべきコンポース能力演奏水準、センスである。Hはスパニッシュ・ロックの中から。高校生の頃、何も知らず、若さだけを持ち、ヨーロッパのロックの底しれぬ淵を予感しながら買い漁ったレコードの1つにCANARIOSがあった。当時の僕はこんなグループが存在するヨーロッパというものに想いをはせながらむさぼり聴いたものである。今でもよく、回想にふけりながらターンテーブルにのせるアルバムである。Iはフランスである。昔、レギュラー・プライスでARCANE盤を買ったそのレコードがずっと今でも棚の中にあるので愛着を感じるものである。ジャケットのセンスの良さもさることながら、その音色が新鮮だった。明らかにフランスの音である。最後にその他の国ということでJをあげよう。70年代初頭の赤裸々な青年達の真実への希求を感じとることができる作品で良くも悪くも70年代のアムステルダムのホットな息吹きを聴かせてくれる。僕の年、あるいはそれ以上のファンにとってこの音は郷愁をさそうものだろう。以上、イタリアが多くなってしまったが、各国を代表させて選んでみた。何故か想い出のレコード選のようになってしまったが御許し願いたい。

賀川雅彦

▷マーキー発行人。最近ワインに凝っています（まだ、駆け出し）。近時、印象に残ったものとしてはシャトー・ピション・ロングヴィル・バロン、シャトー・マルゴー・パピヨン・ルージュ（シャトー・マルゴーのセカンド・ワイン）他。ワインのヤクラとも言うべきロマネ・コンティ、オパス・アヴァントラとも言うべきシャトー・マルゴ（いずれも価格に関して）を飲める日は来るのでしょうか？

EMERSON LAKE & PALMER/Brain Salad Surgery
GENTLE GIANT/Playing The Foole
ALUNNI DEL SOLE/Dove Era Lei A Quell'Ora
ANGELO BRANDUARDI/Cercando L'Oro
DONELLA DEL MONACO/Schönberg Kabarett
KOMINTERN/Le Bal Du Rat Mort
ZAO/Kawana
UNIVERS ZERO/Uzed
JULVERNE/Umballade
(+1)







早いもので、僕がプログレッシヴ・ロックと言われる音楽を聴き始めてから15年以上の年月が経った。60年代最後の高校生（69年４月入学）だった僕は我国にプログレッシヴ・ロック、更にはユーロ・ロックが根付く過程を最初から見てきたファンの１人であろう。そんな僕がこの15年間を振り返って10枚のレコードを選んでみた。

エマーソン・レイク＆パーマーの各種作品はプログレッシヴ・ロックがメジャーな存在だった頃に最もよく聴いたレコードである。エマーソンの華麗で迫力に富んだプレイには何度も驚嘆させられた記憶がある。初期の５枚のレコードは全て僕の愛聴盤であったが、代表作として「恐怖の頭脳改革」を挙げた。なお、エマーソンがロック界最高のキーボード・プレーヤーであったという認識は今も変わっていない。ELPを始めとして、キング・クリムゾン、イエスらの大部分の作品を聴いた後、僕の興味はイギリスのよりマイナーなアーティストに移っていった。そんな中で最も気に入ったのがジェントル・ジャイアントである。日本盤で出た「ガラスの家」を聴いて虜になり、それ以前の作品を苦労して輸入盤で集めたのを思い出す。その後少しして入手したブートレッグでは、変拍子を多用し多くの楽器を持ち変えて変化に富んだ演奏を展開するという、彼らの持ち味が十二分に発揮されたライヴ・プレイを聴くことができた。正式のライヴ・アルバムが発表された後、このブートレッグは手放してしまったが、本当に僕の愛聴盤であった。

そして、ユーロ・ロックの時代へ。最初に我国に入ってきたのがジャーマン・ロック。好きなレコードも幾つかあるが、残念ながらここに挙げるほどの愛聴盤はなかった。我国で一番人気のあるイタリアン・ロック。シンフォニック・ロックの代名詞のように言われており、実際、優れた作品が数多くある。しかし、僕が挙げた３枚はやや趣を異にしている。アルンニ・デル・ソーレは所謂ポップス・グループである。しかし、その叙情性は際立っており、ジャン・ピエロ・リベルベリ、アレンジのオーケストラをバックに、見事に愛の世界を唄い上げている。アンジェロ・ブランドゥアルディのレコードはいずれも高水準の出来であるが、特に「Cercando L'Oro」は曲がバラエティに富み、細かい部分にも気を配ったサウンド作りがされており、聴く度に感心させられる。そして、巷では幻のレコードと言われているドネラ・デル・モナコの「Schönberg kabarett」。完全なクラシックの作品であることを考えると、その内容は恐ろしくポップである。世紀末のウィーンを夢見つつ、ワインを飲みながらこのレコードを聴く時間は何物にも代え難い。フランスには愛聴盤と呼ぶに相応しいレコードが少なくないが、今回は敢えて２枚だけを選んでみた。コミンテルンは正にフレンチ・ロックの原点と言うべき作品である。表面的にはユーモラスであるが、その実、知性と毒を隠し持ったサウンドはフランス以外では決して聴くことのできないものである。ジャズ・ロック王国フランス。その頂点に位置するのがザオの「Kawana」である。セファー、カーン、トゥルオン、プレヴォス、ロックウッドが織り成す白熱のプレイは世界最高のジャズ・ロックと言える。シーンの規模は小さいものの ベルギーにも２枚の愛聴盤がある。ユニヴェル・ゼロの「Uzed」。軽快なリズム、絶妙のアンサンブル、オリジナリティ溢れる曲作り等、チェンバー・ロックの一品である。もう一枚がジュルヴェルヌの「Emballade」。その趣味性の極致とも言うサウンドはヨーロッパの古き良き時代に憧れる僕にとってはたまらない魅力である。最後の１枚。いろいろ考えたがいずれも上述の９枚と比較してターン・テーブルに乗った回数は少ない。そういう訳で10枚目はあえて空席とした。今回選ばれなかった僕の愛する沢山のレコードのためにも。

江田和宏

＊＊プロフィール＊＊栃木県宇都宮市出身。83年早大卒業後、地元企業に就職。現在は現地コレクターとの個人レベルのコンタクトを保ちながら、日本盤とのトレードを中心に興味のあるレコードを取り寄せている。

MUSEO ROSENBACH/Zarathustra
LATTE E MIELE/Passio Secumdum Mattheum
IL BALLETTO DI BRONZO/YS
BIGLIETTO PER L'INFERNO/same
METAMORFOSI/Inferno
QUELLA VECCHIA LOCANDA/Il Tempo Della Gioia
RUSTICHELLI & BORDINI/Opera Prima
SEMIRAMIS/Dedicato A Frazz
CERVELLO/Melos
FORMULA 3/La Grande Casa
DELIRIUM/Dolce Acqua






80年前後、ヨーロッパに赴いた日本人業者の手でプログレファンを仰天させる様なレコードが次々と発掘された。とくにイタリアからは完成度の高いシンフォニック系の作品が多数入荷、いつの間にか“専門店”に足繁く通う様になっていた私は、この驚くべき事実に大いなる興味をそそられた。しかし絶対的な入荷枚数が少なかったため市場は過熱。プレミアムはウナギ上りとなり、一般収集家の手に負える額を遥かに越えて行った。そこで、懇意にしていた輸入盤店の某氏に頼み込み、入手可能なレコードを一枚ずつテープに録音してもらって毎日の様に聴きまくる。当時、ユーロロックについて僅かな知識しか持っていなかった私にとって、一種異様な魔力を持ったそれらのサウンドは余りにも刺激が強過ぎ、結果、コレクターという泥沼の道を歩むきっかけとなってしまった訳である。その後、苦労に苦労を重ねて一枚一枚入手して行ったのであるが、実際に現物がターンテーブルに載る遥か前から各々の作品に対して限りない愛着を覚えていた。以来、現在に至るまで、どんなに素晴らしい作品に巡り会っても、当時を上回る感動を味わったという記憶は無い。従って愛聴盤を挙げろと言われれば当然、思い出深いイタリア盤の数々ということになろう。

いずれも演奏技術の巧拙等は度外視し、全くの個人的好みで選ばせて頂いたが、客観的に見ても完成度の高いものばかりと言える。うち約半数は国内盤がリリースされ、多くのファンがその素晴らしいサウンドに接することが出来る様になった。何故あれ程騒がれていたか、改めて納得してもらえたことと思う。ここで、既に国内発売が実現した物も含め数枚をピックアップ、簡単なコメントを記しておきたい。

MUSEO ROSENBACH／Zarathustra: 壮大なキーボード群、イタリアンロック特有の叙情性等既に分かり切っている事は改めて言うまでもない。本作の魅力を増幅するのは何と言っても強力なリズムセクションだ。プログレ特有の目まぐるしいリズムの変化もソツ無くこなし、クライマックスではそのパワーが一気に爆発する。

LATTE E MIELE／Passio Secumdum Matheum: たった3人の若者が“キリスト受難”という難題に真っ正面から取り組んだものであるが、多彩なキーボード群や壮大な混声合唱の導入等により驚異的な作品を創り上げてしまった。「遠くはルネッサンス時代、いや、もっと前から連綿と受け継がれて来た美意識をロックという現代的な手法により見事具現化」などという歯の浮く様な言葉にも何故か抵抗を感じない優れた芸術性には誰もが魅了されることだろう。

MATAMORFOSI／Inferno: 紋切り型の表現になるが、壮大なキーボード群…但し本作の場合、その後に続く言葉が見当たらない。悪く言えばキーボードのワンマンバンド。それ故、ある程度のパターン化は免れない訳であるが、個人的にはキーボード音の大判振る舞いにより次から次へと畳み込む展開にたまらない魅力を覚え、ビブラートの効いたスピタレッリのヴォーカルからも何故か劇的な香りを感じ取ってしまう。

QUELLA VECCHIA LOCANDA／Il Tempo Della Gioia: 叙情派シンフォニックの最高峰。ヴァイオリンとピアノを核に構築される“究極の美”その前では理性の存在さえも危うくなり、こみ上げて来るものを禁じ得ない。限りない甘さの他、一種異様な重々しさをも併せもった作品。某店による再発が着々と具体化しており、多くのファンが待ちに待った「歓喜の時」も遠からず訪れることだろう。

DELIRIUM／Dolce Acqua: ここで取り上げた作品の中では最も地味なものであるが、個人的には愛すべき一枚となっている。プログレ的見地からは3rdの方が高い評価を得ているものの、acギター、フルートそれにフォッサーティの語り掛ける様なヴォーカルによって醸し出されるどこか郷愁めいた味わいは捨て難い魅力と言えよう。A1の曲を耳にする時、何故か、地中海に夕陽が沈む光景が想起される。

吉瀬孝行

▷世界各国に強力なコンタクトを持つシンフォニック・ロック愛好家。情報の早さにも定評があり、彼によって初めて我国に入ってきたレコードも数多い。また、日本のロックにも造詣が深く、広く海外でもその名を知られている。(賀川)

THE BEATLES/Sgt. Peppers Lonely Hearts Club Band
KING CRIMSON/In The Court Of The Crimson King
SANDROSE/same
IL BALLETTO DI BRONZO/YS
MUSEO ROSENBACH/Zarathustra
FORMULA 3/La Grande Casa
QUELLA VECCHIA LOCANDA/Il Tempo Della Gioia
IL VOLO/same
IL VOLO/Essere O Non Essere?





ユーロ・ロックも再発ブームである。それは80年代のレコードへの不満を反映しているのかもしれない。新譜もかなり買い求めているけれども、とうとう80年代のレコードをこの9枚の中に選ぶことはできなかった。愛聴盤ということで、音楽性よりも、音楽観を変えたレコード、何回となく聞いたレコードに重点を置いた。ジャンルを問わず選んだにもかかわらず、それらしきレコードばかりならんでしまい、われながら許容範囲の狭さを嘆かずにいられない。残りの1枚は日本のアイドル歌手なので、名まえを残念ながら伏せることにしょう。

(イギリス) ビートルズとクリムゾンを抜いてしまうと収まりがつかない。彼らとの出会いがなければ、まったくちがう人間になっていただろう。ほんとは、「アビィ・ロード」と「リザード」もいれておきたいところだ。この2枚を挙げてしまうと、他のイギリス勢はかすんでしまう。演劇的で個性的なヴォーカルはあまり好きではないから、ジェネシス、VDGGはパス、もちろん、演奏面においては好きなので、不届と自分でも思うが、ヴォーカルパートを飛ばして演奏だけをよく聴いたものだった。EL&P、ピンクフロイド・イエスは今となっては、 あまり聴く気が起こらず、どのレコードという訳ではないが、かえってジェントル・ジャイアント、キャメルのほうが新鮮な感じがする。廃盤組の中では、Spring. Fantasy. Twinkとここで名まえだけでも紹介しておこう。

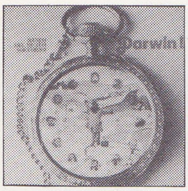
(イタリア) どうしてもこの国がメインとなってしまう。次々へと発見されて行ったこの国のレコードに当時のファンがどんな熱い想いをめぐらせていたか。今となっては遠い過去のことになってしまった。ラジオでもよくかかっていたPFMが最初に買ったイタリアものだったとはいえ、その英語ヴァージョンは彼らの魅力を十二分には伝えてくれず、彼らとの出逢いには最初から“Storia Di Un Minuto”を聴いていたなら、この10枚の中にいれておいただろう。フォルム・トレの「夢のまた夢」はB－2があるがために、愛聴盤と呼んでもおかしくない。それでも、「神秘なる館」に比べると完成度は低いということで、見送り。イルヴォーロはどうしても両作ともいれねば気がすまない。バンコ、ニュートロスは1枚のレコードに絞るのは難しい。曲によっては好きではないのもある。イル・バレット・ディ・ブロンゾ「YS」、ラッテェ・ミエーレ1st、Maxophoneは今聴いても古さを感じさせず、聴くたびに新しい発見さえある。すさまじいとは思っていたものの、そのヘヴィーさのために何回とは聴く気になれなかった「YS」 をこの3枚の代表として選ぼう。ここまで、徹底的に作り出された音楽も珍しい。その対照的ともいえるQVLのセカンドはあふれんばかりのクラシカルなメロディが美の極致へと招待してくれる。他にもムゼオ・ローゼンバッハ、トリアーデ、Biglietto Per L'Inferno, アルティ・エ・メスティエリどれをいれても構わない。これらのレコードはあまり聴かなくなったとはいえ、最初に聴いた時のインパクトも強く、この中から1枚選び、これでイタリアは打ち止めにしよう。

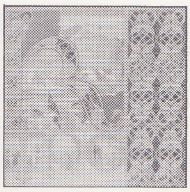
(世界各国) フランスのベスト5はタイ・フオンの1st、アトール「夢魔」、Asia Minor“Between Flesh&Divine” Sandrose, Arachnoidあたり。中南米ベスト3はBacamarte, Pablo El Enterradore, Crucis 1st。スペインでは、Granadaの1st、Crack, Tarantula, Atila－Intencion。その他、わが日本の山本道則「微笑」、トレース「島人王国」、Parzival “Ba－Rock”, Wind “Morning”。この中から1枚となるとヤケクソで選ぶしかない。女性ヴォーカルがちょっとひっかかるが、Sandroseにしておこう。ギター、メロトロン、曲作り文句なし。もし、何年か先にこのような企画に参加させてもらえるなら、きっと日本、アメリカ、カナダあたりからも候補作がたくさんでるであろうと信じている。

NUMERO UENO

▷９年程前、もともとイタリアン狂だったが、マニア２、３人と共にソシアル・コンプレックスという輸入卸の会社まがいのものを設立。その会社で当時レコードコンサートや日本のプログレバンドのライヴ企画等をやっており、それが契機で当時結成したばかりのアウターリミッツ、観世音等と知りあい、彼等のプロデュースをするようになった。その時MADE IN JAPAN RECORD としてスタートし、現在はプロデュースのかたわら、エジソンの店頭で大好きなレコード達に埋もれている。

1. BANCO/Darwin!
2. KATE BUSH/Never For Ever
3. MAXOPHONE/same
4. CIRKUS/One
5. RENAISSANCE/Novella
6.   /same
7. PFM/Storia Di Un Minuto
8. KING CRIMSON/Lizard
9. IL BALLETTO DI BRONZO/YS
10. QUELLA VECCHIA LOCANDA/
    Il Tempo Della Gioia



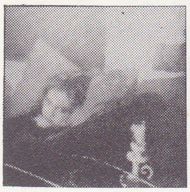



本誌編集長の山崎氏から、「愛聴盤10枚を選んで書いて欲しい。」と言われ、色々思い浮べた末、選んだのがこの10枚。僕のバンコ狂は有名な事だけれど、10枚中の半分までがイタリアで見事に占められている。（これでも随分遠慮したつもりなんだが…）思えば、レコードを買う場合、どこの国のものだろうとイタリア臭さがあれば分別なく買ってしまう癖が僕にはある。僕にとって愛聴盤の条件というのは、①お気に入りの曲が１曲でもあれば、それでいい。②とにかく派手で、クラシカル・シンフォニックしていれば…③一緒に歌えれば、なを最高。など々…。結構、理由は単純な訳だ。サーカス/Oneやマクソフォーネなんて、③の一緒に歌うのが大好きなレコードの一つ。サーカスの１曲目の例の“You are～”って繰り返して歌うあのフレーズを今か、今かと身構えて、ど派手なオーケストラ・アレンジに耳を澄せて聞いて、例の所に来たら我を忘れて歌ってしまう。マクソフォーネも、しわがれ声で歌われる。“C'e un paese al mondo…”って歌い出しが大の気に入り。いつもこのフレーズを聞くたび、“やっぱりマクソフォーネは英語盤じゃなくて、イタリア語盤に限る！”と納得している。もちろん、サウンドの方も言う事なし。次に PFM の 1st 。 2nd の「Per Un Amico」も大好きなのだが、“甦える世界”や“ハンスの馬車”といった名曲が入っている 1st の方を、よくレコード棚から取り出してみる機会が多い。これぞ、イタリアン・クラシカル・シンフォニックの極致です。クェラ・ベッキア・ロカンダの 2nd は僕のヴァイオリン大好き嗜好の代表選手。“泣き々きの…”というフレーズはこのレコードの為にある様なものではないでしょうか？　イル・バレット・ディ・ブロンゾは、全編一気に聴くにはあまりにヘビーなレコード。このレコードを初めて聞いた時の衝撃と言ったら、もう。このレコードのオリジナルが欲しくて、当時、某レコード店の廃盤セールに徹夜で並んだ事もあったっけ…このレコードの為に、僕はマニアの道へと入り込んでしまったんだ。そして、イタリア勢の最後はもちろん、バンコ。曲では 1st に収められている“Metamorfosi”が一番のお気に入りだけれど、アルバム全体としては何と言ってもこの「ダーウイン」。愛聴の度合（病気？）が進み、このレコード、過去に10枚程、聞き潰している。また７年程前にローマで彼らのライブを初めて見た時の興奮は、今でも僕の一番の宝物。イタリア勢の次は、キング・クリムゾン。よくプログレ・ファンをジェネシス派とクリムゾン派とに２分するけれど、僕は断然、クリムゾン派人間。どのレコードも愛聴盤だけれども、彼らの中で最も叙情的であり、怪しい幻想を秘めた「リザード」を選んでみました。ところで、僕は女性ボーカル・マニアな訳で、海外へ行くたびに得体の知れないマイナーなレコードを無限に買って来てしまう癖がある。そんな僕が、愛聴盤10選に入れたのが、ケイト・ブッシュの「魔物語」とルネッサンスの「ノヴェラ」の２枚。ルネッサンスの方は Progressif の斎藤君のオハコだけれど、あの壮大なオーケストレーションといいアニーの天使の歌声といい、僕だって大ファンなのだ。ケイトの方については何も言う事はない。とにかく多彩なアイデアとボーカル・スタイルを持った天才歌手なのだ。最後に、日本の新月。このアルバムは、“鬼”という１曲しか聴けないと陰口を言う方もいるが、この１曲だけで充分なのだ。今まで、これ程までにパーフェクトなプログレ・ナンバーがあったろうか？　この曲は日本、いや世界のプログレを代表する名曲の一つ。僕は現在、メイド・イン・ジャパン・レコードをプロデュースしている訳だけれど、“いつの日か、この曲を抜けるレコードを作りたい！”と心に秘めている永遠のライバルなのです。

中藤正邦

▷元マーキー・ムーン誌ライター。モノリス・コミュニケーションズを通じて日本のプログレ・バンドの紹介に努める。マーキーの賀川氏に次ぐ長老。

OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
MELLOW CANDLE/Seaddling Songs
ABEL/1+2(cassette)
PALE ACUTE MOON/Newtopia
FLYTE/Dawn Dancer
STEVE LACEY/Truments
ANNETTE PEACOCK/Revenge
TAJ-MAHAL TRAVELLERS/July 15,1972
JEAN LUC PONTY/Enigmatic Ocean
SOFT MACHINE/Softs






まず、オパス・アヴァントラのファースト。これは本当に優れものの1枚だと思う。ドネラ・デル・モナコの歌声とアルフレッド・ティソッコの作曲能力に、いたく感銘をうけている。おそらく、セカンドのロード・クロムウェルを持っていたら、これも愛聴しただろう。その時は90分テープにカップリングでダビングして、オート・リバースで年中再生しているだろう。きっと。



メロウ・キャンドルのスワッドリング・ソングス。言わずと知れた名盤。スパイロジャイラのサード、チュダー・ロッジと並んで、英フォーク・ロックの3本柱と評されているが、文句なくトップ・ランクである。二人の女性ボーカリストによるかけ合い、アレンジ、コーラス、どれをとっても最高の部類。デビッド・ヒチコックのプロデュースの勝利か。

アベルのテープ2本（どちらも30分）を60分テープにダビングしたもの。厳密に言えばレコードではないので、まずいかな。アベルは、かつて東京で活躍したプログレ・ハード・バンド。そのノヴェラからの影響をモロに受けたサウンドは、ほほえましくもあって、大好きだったりする。

ペイル・アキュート・ムーンのニュートピア。我田引水というか、自分で制作したものをこの項でリスト・アップするのはおこがましいかな、とも思うが、実際にかなりの頻度で聴いている。本誌ではオリジナリティ云々で批判をしていたが、僕にとっては、そんな事はとるに足らないこと。親しみやすいメロディー、シンフォニックの音の渦、アレンジ力、演奏力、どれをとっても安心して心地良く聴くことができる。しかも変形ポスター・カバーだったりして。おっと、これはCMだった。かんべん。

フライトのドーン・ダンサー。これは、ライナー・ノートを書いたので良く聴いた。安定していて、力強くて、美しい。そろそろ飽きてきたかな。

私的なことで恐縮だが、昨夏に転居をした。その際に、レコードはほとんど実家に預けており、手元には数える程しかないという現状なので、以下のレコードは、かつて頻繁に聴いていた、とか心に残っているものを挙げてある。

スティーヴ・レイシー。これは間章のモルグから出されたもの。ソロ。エコーと緊張感がたまらなくすごい。しんみりする。

アネット・ピーコックのファースト。ポール・ブレイとのコラボレーションだが、この時期のこういうアヴァンギャルドなセンスにノスタルジーを感じたり、ノイズ、エレクトロニクス、ボイスの絡み合いに一喜一憂。

リベンジと同じ感覚でよく聴いたのが、タージ・マハール・トラベラーズ。これはやはり小杉武久の構築力によるところが大なのであろうが、アンサンブル（と呼ぶにはあまりにおぞましい）仲々のもの。

ジャン・リュック・ポンティ、ソフト・マシーン。共にプログレ・フュージョンのノリ。ポンティのヴァイオリンとホールズワースのギターの絡みは圧巻。どちらがどちらの楽器か、と見極めるのも大変だったりして。ソフツの方は、カール・ジェンキンスの楽曲／アレンジ力が、ジョン・エサリッジのギターを伴って派手派手に展開する。前任のホールズワースのぬめぬめギターと対称的な、エサリッジの鋭角的なギターがカッコ良い。大げさなくらい良い。

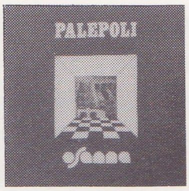
その他、選には漏れたが、ロバート・ジョン・ゴドフリーのヒュペリオン、ザムラ・ママズ・マンナのファミリエスプリッカー、ユニヴェル・ゼロのサード、そして、ルネッサンス、ブランドX、ジェントル・ジャイアントのライヴ盤も忘れられない。

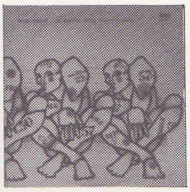
鈴木伸一

▷プログレは10数年前に聴いたクリムゾンとピンク・フロイドが最初。イタリアン・ロックは、PFMが最初で、特に固執し出してから10年近くなる。最近ではカンタウトーレの個性的な作品やシングルに興味がある。又、ここ1年位LDも集め出したのだが、イタリア映画を買ってしまう事が多く我ながら苦笑してしまう。Taviani兄弟の「カオス・シチリア物語」が、特に気に入っている。

MUZZI LOFFREDO/Tu Ti Nni Futti
TITO SCHIPA JR./Io Ed Io Solo
MAURO PELOSI/Al Mercato Degli Uomini Piccoli
CERVELLO/Melos
BANCO DEL MUTUO SOCCORSO/same
MUSEO ROSENBACH/Zarathustra
JUMBO/Vietato Ai Minori Di 18 Anni?
OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
IL PAESE DEI BALOCCHI/same







MUZZI LOFFREDO／Tu Ti Nni Futti

余りにも傷ましい女性ボーカルで、愛聴という言葉は似付かわしくないが、情念の噴出とも言うべきこのボーカルは経験を遥かに越えた苦渋と怨念の彼方へと我々を葬り去る。決して妥協を許さぬ彼女の声の狭間でPierrot Lunaireの演奏がとても哀し気に木霊する。

TITO SCHISCHIPA Jr／IoEdIoSoIo

存在自体が奇跡的なアーティストである。繊細にして劇的な表現力、凄絶なまでの感情移入。全てが極限の状態で張りつめ、その連続する緊張感は、いかなる神経の弛緩をも許さない。個の表出という点において右に出るもののない孤高の1枚である。

MAURO PELOSI／Al Mercato Degli Uomini Piccoli

淡々と唄われる哀愁に満ちたこの作品を聴く度に染々とした情懐と静かな感動に包まれる。正に珠玉の名編である。



Mauro Pelosi

OSANNA／Palepoli

CERVELLO／Melos

共にミステリアスな雰囲気を漂わせる蒼黒とした闇の音世界である。秘教的Palepoli，神話的Melos，その衝撃と破壊力を決して忘れることは出来ないだろう。

BANCO DEL MUTUO SOCCORSO／same

哀しみを秘め乍も大らかに包み込むFrancescoのボーカルは慈愛に溢れた優しさで満ちている。数あるクラシカル・ロックの中で最も敬愛して止まない極上の傑作である。

MUSEO ROSENBACH／Zarathustra

何と言ってもStefano Galifiの壮絶なボーカルとクリムゾン顔負けのメロトロンの洪水に圧倒される。その重厚にして大胆なサウンドは逆巻き奔流となって脳裏へ傾れ込み永遠の渦を巻く。

JUMBO／Vietato Ai Minori Di 18 Anni?

より味わい深く滋味を感じるDNAも愛聴盤だが、スリリングで妖し気な展開を見せるこの作品こそ悪夢の如き音の迷宮である。Alvaro Ferraのボーカル自体変化に富んだ魅力的なもので、この不思議な音世界に一層の複雑さと奇怪さを増幅させている。

OPUS AVANTRA−DONELLA DEL MONACO

妖気漂う逸品であり、夜の闇に包まれながら聴く時、更にその真価は発揮される。前衛と古典が美しく融合しているが、最も感動的なのはやはりDonellaのボーカルである。Saint Just, Pierrot Lunaire, Jacula等もとても気に入っているが、彼女のボーカルが最も深みがあり忘れ難い。2nd Lord Cromwell, A. TisccoのKatharsis，そしてDonellaの各ソロ・アルバム等、彼等が遺した種々の作品は各々独自の魅力に富み乍も極めて普遍的な美意識に貫ぬかれている。

IL PAESE DEI BALOCCHI／*same*

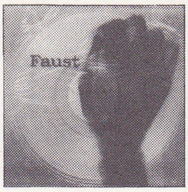
幾多有るイタリアン・ロックの中でも一際異彩を放つ1枚。深遠なる空間と深い静寂を感知させるこのアルバムは、魅力的な小曲を巧みに繋ぎ合わせ、あたかも水面に浮かぶ泡沫の如く現われては消え、聴者の感情を弄ぶ。正しく名作と呼ぶに耐え得る作品である。

イタリアばかりで偏執的だが、因みに他国ではEmmanuel BoozのLe Jour Ou Les Vaches, King Crimsonの1st, GenesisのNursery Cryme, HammillのCameleon等が特に印象深い。Wallenstein, Itoiz, Marsupilami, A. Carrion等も忘れ難い。シングルではTavola RotondaとOfficina Meccanicaが群を抜いている。共に超弩級のサウンドで驚愕を禁じ得ない。

山本雅幸

▷大学卒業と同時に、某出版社に入社し、三流エロ劇画誌の編集に従事して７年。現在、「漫画エロトラブ」という月刊誌の編集長をつとめながら、劇画誌混迷期の中、新人の養成及び、コミックスの単行本企画など幅広い編集作業を展開中。

1.FAUST/same
2.KLAUS SCHULZE/Cyborg
3.ASH RA/Correlations
4.POPOL VUH/In Den Gärten Pharaos
5.AMON DÜÜL/Yeti
6.CAN/Landed
7.NEU/3rd
8.ANTHONY MOORE/Secrets Of The Blue Bag







振り返ってみれば、今からもう15年ぐらい前、つまり70年代前半というのは、ドイツにしろ、イタリアにしろ、ユーロロックを語る上で、一番おもしろい時期だったように思う。初めて手にするアルバム、聴くアルバムが実に衝撃的で、心地よく、当時は１日中でもよくレコードを聴いていたものだ。そんなアルバムの中で、特に最近でもよく聴くものをリスト・アップしてみると——。

FAUST／1st: ジャーマン・ロックの中でも、これだけは時代を感じさせない、究極のプログレッシヴ・ロックだ。71年という数字が、単なる記号でしかなく、今もって、ロックの内包するあらゆる可能性を垣間見せてくれるアルバムである。巷では、やたら破壊的で攻撃的な音などと評されがちだが、これ程、やさしく柔らかい音は他にはないのではないかと思う。

KLAUS SCHULZE／CYBORG: このアルバム（2LPs）は、今も昔も変わらず、絶品のヘヴィ・メタル・ロックだ。ワグナーのオペラにも匹敵する壮大な音空間と、強迫神経症的にジリジリ迫ってくるシンセサイザーの洪水が心地よい。

ASHRA／CORRELATIONS: このアルバムには、姿形は変われど、かつてのジャーマンロックの巨星、アシュ・ラ・テンペルの織りなすストイシズムが連綿と脈打っている。ジャケットのセンスも抜群だが、マニュエルの憂愁を帯びたギターが何と言ってもいい。宵闇の子守歌ってところ……。

POPOL VUH／IN DENGÄRTENPHARAOS: まさに、ルードヴィヒ２世に捧ぐアルバム。静けさの波間に見え隠れする狂気、不安感、焦燥感にジャーマン・ロックの宿命的な重さを感じることができる。ポポル・ヴフは、3rd以降の洗練された音より、やはり初期のエネルギッシュな音の方が好きだ。

AMON DÜÜL Ⅱ／YETI: コンセプト、内容に関して言えば、今となっては、もう古き良き時代の産物であるが、ハード・ロックスタイルの音造りの中では、このアルバム程完成されたものはないと思う。妙に粘っこい演奏がアモン・デュールならではの歴史を物語っているようだ。

CAN／LANDED: アモン・デュールと並んで先駆者的な存在として知られているカンの後期アルバム。“フューチャー・デイズ”も名盤だが、ダモ鈴木の亡霊から逃れ得た（？）安堵感が全体をおおっていて、イージーリスニング的な構成が聴きやすい。このアルバムでのミヒャエル・カローリのギターには、思わず顔が微笑んでしまいそうだ。

NEU／3rd: ノイほど、パンク以前に、真剣にパンクしていたグループはないであろう。1st及び2ndの内容の素晴らしさは、言うに及ばず、3rdの完成度は聴いていて、実に小気味よく、血湧き肉踊るものがある。一家に１セット、ノイの残した３枚のアルバムは、今、聴いても、やっぱり“新しい”音だ。

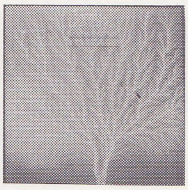
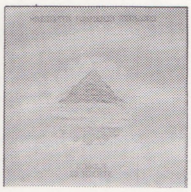
ANTHONY MOORE／SECRETS OF THE BLUE BAG: ある人は、寝入ってしまい、また、ある人は、いら立って思わずレコード盤を放り出したくなるという、非常にナイーヴで扱いにくいアンソニー・ムーアの2ndアルバム。でも、この間延びした５音階の呪術にかかってしまうと、もう脱け出せなくなってしまう。このアルバムは唯一、あのトニーコンラッド・ウィズ・ファウストの大作“アウト・サイド・ザ・ドリーム・シンジケート”に対抗できる究極の金太郎飴ミュージックの決定版でもある。

以上、10枚にも満たなかったが、古き良き時代の懐古趣味的な寸評としてまとめてみた。ドイツ以外、イタリアやフランス、ブリティッシュなどの愛聴盤を挙げることができなかったのは残念だが、やはり、一番思い入れ深く、かつ今でもよく針を落としては聴き込んでいるレコードは、ジャーマンなのだ。

松本修一

▷東京都荒川区在住、最近はフランス物を聴く時間が多いが基本的には地域限定はありません。シンフォニック、アイドルも可。

MAGMA/Attahk
GENTLE GIANT/Octpus
KATE BUSH/The Kick Inside
UNIVERS ZERO/Uzed
OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
GENESIS/The Lamb Lies Down On Broadway
VAN DER GRAAF GENERATOR/Still Life
CHRISTIAN VANDER/Offering
PETER HAMMILL/And Close As This
PFM/L'Isola Di Niente

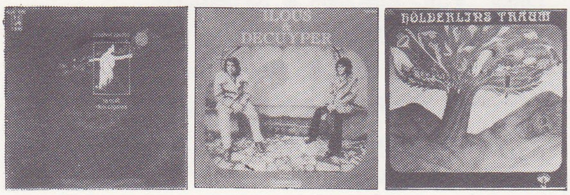
ここにピックアップしたレコードは日常よくターンテーブルに乗る個人的な愛聴盤であり私自身の音楽的体験の推移のなかで出合ったこれからも長くつき合えるであろう10枚です。音の説明は不必要と思うのでこれらの音楽に出合った状況を思い返してみたいと思います。10代の初め頃、そろそろ意識的に音楽を聴くようになってもやはり知識や経済面での不足のためやはりその中心は流行や環境がほぼ決定していたのだろう。ステレオなど持っていない頃であり、音楽専門誌なども読む習慣はなかったので情報源はAMラジオぐらいのものだった。当時はベトナム戦争を背景としてウッドストックを頂点とするイベントやフラワームーブメントなどと呼ばれるある種のドラッグ・カルチャーが日本にも伝えられ、その本質は理解し得ないまでも、一種のカルチャー・ショックを受けたのは確かだった。ずいぶん昔のことなので記憶が不鮮明になりつつあるが当時スターだったジェファーソン・エアプレイン、CSNY、ジョニ・ミッチェルなどが好きだった。高校に入ってステレオ装置を手に入れても、レコードは依然高嶺の花であった。したがってあいかわらずFM放送や、近所の図書館の貸しレコードなど金のかからないところから音を収集していた。当時のコレクション・テープには日本のフォーク・ニューミュージックからマイルス、コルトレーンまで、採集、分類されていた。当時イギリスの音楽産業も隆盛を誇り、末期ビートルズからハードロック、またプログレ以前のアート・ロック、と呼ばれるものまで多種多様だった。NHK･FMでも渋谷氏の紹介でブリティシュ・ロックはよくオン・エアされていた。その中のBBCライブはキャメル、クリムゾン、ジェントル・ジャイアントなどの演奏も含まれていた。そしてあるとき昔の友人に再会したおり、互いの音楽の好みについて話が及んだのだがジャンルは同じらしいのにまったく聞いたこともない名が彼の口から出てきた。アンダーグラウンドとまでいかなくても、マスメディアからの情報の中には含まれない未知の世界があるらしいことにようやく気づきはじめた。新しいもの、非コマーシャルなものはそれ自体の質が高くても多数に承認され、知られるようになるには時間を必要とするのだ。しかしそれを待っていられるほどの時間を所有しているわけではない。私は彼の話をヒントにはじめてレコードを探しはじめた。しかしいきなり輸入盤店へ直行したのではなく、行った先は秋葉原の有名レコード店だった。そこの海外アーティストの日本盤コーナーで自分の知らないようなレコードから選び出してみた。VDGGにめぐりあったのはこのときだった。このレコードの紹介者であるたかみ氏のおかげで、それに連なる奇妙な味のブリティシュ・ロックを知ることができたのであった。たいへん感謝している。音を聴かずにレコードを買うのも初めてのことだったが、ライナーが無かったらさすがに二の足を踏んでいただろう。

一方メジャーな“プログレ”も今までまともに聴いていなかったので同時に集めなければならなかった。日本盤を集めているうちはまだよかったがすぐに限界はやってきて、輸入盤に手をだすようになる。しかしそこには廃盤、プレミアの壁があった。それは現在もこの世界につきまとっているが。この当時はまだキングのユーロック・シリーズなど影もない頃であり、その道の険しさに因果な物に手を染めてしまったものだと暗くなるのだった。しかしマルコポーロが思い描いた日本のごとく、西方に宝があると信じた私はあとに引くことはできず、マニア諸氏のうしろをうろうろし、首をつっこむのだった。実際そこにはまぎれもない傑作も存在していた。その後状況も関係者の努力などにより徐々に変化し、半ばあきらめていた音に接することができるようになった。しかし“今”の音楽に関しては相変らず紹介されているとは言い難い。その日が来るまでまだ長い時間を要するのだろうか。

坂地昭一

▷日本でユーロピアン・ロックが騒がれる以前からの、愛好家。ジャンルにこだわりなく、幅広い趣味と知識を持つ。「クエラ・ベッキア・ロカンダ／2nd」を某中古レコード店で発見し、このレコードが知られるようになった話は、あまりにも有名。　(松本昌幸)

MICHEL ZACHA/La Nuit Des Cigales
ILOUS & DECYPER/same
SANDROSE/same
DAN AR BRAS/same
MILESTONES/Emigration
FRANCK DERVIEUX/Dimension "M"
PARZIVAL/Barock
HÖLDERLIN/Hölderlins Traum
ASIA MINOR/Between Flesh And Divine
OUTER LIMITS/Misty Moon



私がプログレと呼べるレコードを最初に聞いたのは、ピンクフロイドの「原子心母」が初めてだったと思う。1971年、中学2年の時である。それ以来プログレに狂って15年余り、30になった現在でも好みの傾向はあまり変わっていない。

中学、高校時代は主にブリティシュ系の有名グループ、クリムゾン、ジェネシス、イエス、ジェントル・ジャイアント等を中心に聞き、その後75年ごろからは、ブリティッシュのマイナーシーン、さらにユーロロックへと興味の対象は移っていく。

私の好みの大半は、シンフォニックロックでアバンギャルドで暗いサウンドよりは、わかりやすくメロディアスなものが中心である。

国別で好みの順位を書いてみると、1位イギリス、2位フランス、3位イタリア、4位カナダ、5位日本、6位ドイツ、7位北欧という様な順になる。以下ブリティッシュは除いて現在の10枚の愛聴盤をあげてみると…

① MICHEL ZACHA／LA NUIT DES CIGALES

このアルバムは72年に国内盤もでているが、発表当時はまったく話題にならなかった作品。内容は当時のフランスのアンダーグラウンドを代表する、重くて暗めのサウンドで、ピンク・フロイドの影響を受けている。72年発表ということから言うと、当時のフランスの状況からいって録音、アレンジがきわめて良く古さをまったく感じさせない。ミッシェル・ザカはその後も何枚かアルバムを出しているが内容的には本作より劣ると思う。

② ILOUS & DECYPER

ミッシェル・ザカの作品と同じくジャン・ピエール・アラルサン参加の名盤である。どちらかというとミッシェル・ザカの1stよりはポップでアンニュイなフランス的な仕上りであり、幻想的なフランス映画を見ている様なストーリー性もある。

③ SANDROSE

フレンチロックの最高峰はなんと言ってもこの作品に尽きる。ジャン・ピエール・アラルサンの才能が最も良く生かされた作品といえる。

④ DAN AR BRAS

この人はエキサゴンレーベルに籍をおくコンテンポラリーなギタリストである。内容はエキサゴンレーベルのトラディショナルなカラーが強いのだがアコースティックギターのつまびきや、リコーダーのソロには、ハッとするきらめきがある。またエレキギターの力強いソロパートは、アラルサンのそれに匹敵するものである。

⑤ MILESTONES／EMIGRATION

マイルストーンをプログレグループとするのはむずかしいが、この2ndアルバムB面におさめられた組曲は、ドイツシンフォニックロックの良質なサンプルである。ギラの2ndアルバムとも傾向を共にしておりクラシカルなストリングスと、オーボエのソロが素晴らしい。

⑥ FRANCK　DERVIEUX／DIMENSION「M」

このアルバムはあまり知られていないが、カナダにおけるシンフォニックロックの名盤の一枚としてあげたい。内容は、イタリアのフェスタ・モビーレに近く、パイプオルガンの効果的な導入はシンフォニックファンにはこたえられないだろう。フランク・デルビューは本来はジャズ系の人らしく、ゲストにもジャズ系の女性ボーカル、バイオリニストが参加している。製作年度は75年ごろと思われる。

以上の6枚以外に愛聴盤としてあげらるものに、パルジバルの「バロック」やヘルダーリンの1stアルバム、それにアジアマイナーの2ndアルバム等をあげておこう。そしてやはり日本のプログレではアウターリミッツの1stアルバムをあげるしかない。

松本昌幸

▷３年間の企業生活をはみ出し、これから、ワールド・ディスクのお店を担当することになりました。「求む！」ケイト・ブッシュのポスター。

CATHERINE RIBEIRO + ALPES/Paix
MAGMA/Live
OPUS AVANTRA E DONELLA DEL MONACO
IL PAESE DEI BAROCCHI/same
ALAN HULL/Pipe Dream
SANDY DENNY/The North Star Grassman And The Ravens
POPOL VUH/Einsjäger & Siebenjäger
PINK FLOYD/The Dark Side Of The Moon
PFM/Per Un Amico
SPIROGYLA/Bells,Boots And Chambres







Catherine Ribeiro + Alpes／Paix

「L'temps De L'autre」「Passions」なども良いけれど、とにかく、このアルバムのB面につきる。深く沈み込んでいくようなリベロのヴォーカルが、美的に感じられる。



Magma／Live

スタジオ・テイクを何倍も上回る凄味と、テクニック、熱気があって、筆舌につくしがたい。後期クリムゾンの持っていた、力量を越えているかのように、ぼくは思うのですが。「Kontarkoz」の演奏が終わった瞬間、声を張り上げている貴方の気持ちが、よく理解できる。

Opus Avantra e Donella Dell Monaco／Sameお馴染みの１枚。果実が熟し切った時の、濃厚な甘みを持って朽ち果てていく、その瞬間をとらえたような甘美さが魅力。

Il Paese Dei Barocchi／Same

物憂気な雰囲気が、非常に心地良い。A面後半部で、同じメロディー・ラインが繰り返される所など、夢がどんどんと広がっていく。

Alan Hull／Pipe Dream

元リンディスファーンのギタリストのソロ第１弾。イギリスの片田舎の臭いが、よく伝わっている。くったくのないフォーク・ロックです。

Sandy Denny／The North Star Grassman And The Ravens

亡き彼女のソロ１作目。イギリスの湿った空気と海の匂い､灰色の空、どれもピタリとくる。「Blackwater Side」などは、もう、たいへんです。

Popol Vuh／Einsjäger & Siebenjäger

「Hosianna Mantra」は深い。「Das Hohelid Salomos」もいいけれど、思い出が残っている分、このアルバムを入れておきたい。「Aguirre」のメイン・テーマとか「Morgengruss」か、どれも美的な音色だと思う。良い良い。

Pink Floyd／The Dark Side Of The Moon

フロイドは好きです。今、唯一のコレクト対象アーティストでもあるし、何よりこの作品が、ぼくの道を誤まらせた張本人でもある。特に「神秘」からこの作品までのフロイドが良い。ちなみに今、最も好きな曲は「望みの色を」。

P.F.M／Per Un Amico

物思いにふけるような抜群の始まりが、特に印象的なこのアルバム、１作目よりも、ぐっと繊細さが出ていて良い良い。マンティコア・レーベルに移籍してから希薄になってしまった、さりげなさが、実に魅力だ。

Spirogyla／Bells, Boots & Chambres

バーバラ・ガスキンにつきる。ブリティッシュ・フォーク・ロックの最もいい面が出ていると思う。とても良い。

クリムゾン、ジェネシス、E.L & P, イエスは､言うに及ばず､変則拍子から抜けるようなコーラスになだれ込むジェントル・ジャイアントの「Three Friends」、月並みながらラッテ・エ・ミエーレの 1st. 2nd ソフト・マシーンの 2nd のA面、V.D.G.G, 本当を言うとCzarの１曲目、グレイシャスの「！」, スプリング、クレシダ２作、などのコレクターズ・アイテム、カテリーナ・カッセルリの「Primavera」、初期ゴング、初期タンジェリン・ドリーム、「Cosmic Century」などなど、ケストレルとか、話がつきなくなるのでやめておきますが、最後に、はっきり言ってケイト・ブッシュは好きです。

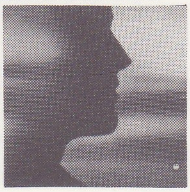
CHIHIRO S.

▷MARQUEE が大学のサークルだった頃から本誌にたずさわっている男。元発行人。現在はグループ LACRYMOSA のリーダーとして精力的に活動を続ける彼は、今や日本アンダーグラウンド・ロックの生き証人ともいわれている。

1. HORSLIPS/Happy To Meet, Sorry To Part
2. SPOTNICKS/?
3. RAYNOLD & CAMERIA/Mula Meria
4. MIKE WESTBROOK/The Westbrook Blake
5. VANILLA FUDGE/Renaissance
6. COMPANYIA ELECTRICA DHARMA/L'Angel De La Dansa
7. ESPERANTO/Last Tango
8. CARMEN/Fandango In Space
9. ROBIN WILLIAMSON/Journey's Edge
10. JETHRO TULL/"A"







最初に、編集部の意向により、クラッシック／現代音楽物，及び民族音楽は今回のセレクトからはずしていることを書いておくべきだろう。したがって、メシアンもベルリオーズも、バルカン半島の民族音楽も、伊福部昭も、これに含まれていない。この時点で普段聴くものの内、半分以上は無くなったと言える。又、今回の原稿担当分、すなわちアレア、ジェントル・ジャイアント，アモンデュールは意識的に避けた。話がダブるとクドくなるからである。同様にホークウインド、A．ブラウンも避けた。ホークスのレコードが必ずセレクトされると思っていた読者もいただろうが、人がホークウインドを白面（シラフ）で聴いているとは思わないで欲しい。それから、大方の予想に反して、リコメンディッド系のレコードは、今となっては持っていない。(複数の理由による。)ユニベル・ゼロのレコードは自分では買ったことはない。又、それぞれの番号は、単に今日思いつた順番で、他の日にセレクトしても、似たようなメニューにはなるだろうが、順番は変わっているだろう。逆に言えば、この辺の物ならば、自分の中であまり価値に相異がないのも事実である。さらに余談になるが、自分には基本的に、レコードを聴くという習慣がなく、日常聴くのはテープのみである。それぞれに関して、多少解説めいたことを書くと、ホースリップスはアイルランドのトラッド・ロック・バンド。アイリッシュ・トラッドに演歌ギターが炸裂するこの1st アルバムはほとんど圧巻である。

スプートニクスは「霧のカレリア」のヒットで有名な、あのスプートニクスである。

レイノルド＆カメリアは昨年来日したインドネシアのポップ・グループ。「'70年代は様々なロック・バンド――J．エアプレーンやジェスロ・タル等――のコピー・バンドをやっていた」というレイノルド率いるシタール，竹笛，syn-dr，ツイン・kbdを含む11人編成。後進国なのを良いことに（こんな事書いて良いのかな？）禁じ手無しの曲展開には、ひたすら絶句してしまう。

M．ウエストブルックは本誌のレビューでも何度か取り上げられたが、これはタイトルからもわかるように、W．ブレイクの詩に曲をつけた作品を集めたもの。特にB面は15分の曲と9分の曲の2曲のみという力作で、B－2のフィル・ミントンの熱唱は是非聴いて欲しい。

ヴァニラ・ファッジに関しては、何を今さらという声もあろうが、この時期のティム・ボガードの演奏は語り継がれるべきだろう。豊富な意表つきバッキング・パターン、当るを幸いの半音進行など、この時期のプレイはすさまじい。プログレ系ベーシストの7割は黄金時代のティムには軽く負けてしまうだろう。

未確認ではあるが、どうも、コンパニヤ・エレクトリカ・ダルマのフォートゥニィ3兄弟の内、ギターのエスティーヴが昨年、亡くなってしまったらしい。ジョアンのサックスが泣き、ギターがボケるという得意のコンヴィネーションはもう聴けないのだろうか。

エスペラント，カルメン，R．ウィリアムソンに関しては本誌カタログを参照。

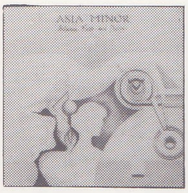
ジェスロ・タルは'80年代に入ってからエディ・ジョブソンを迎えて作られたアルバム「A」を。意外と知られてないが、これが名盤だったりするから世の中はおもしろい。元々、エディの最大の欠点は底の浅さだった訳だが、イギリスの怪人「子泣きじじい」イアン・アンダーソンのサポートで、ほとんど目立たなくなっている。A面最後の“Black Sunday”は隠れた名曲。

このセレクトの中には単に、聴くことがある、というアルバムからある種のメモリアルアルバムまでランダムに入っている。どれがどれであるかを語る程、今日の私は正直ではない。一つ言えるのはメモリアル・アルバムには2種類あって、時々ひっぱりだして聴きたくなるものと、嫌いではないのに二度と聴きたくないと思うものである。後者はこのセレクトに入っていない。

田中昌延

▷　こうした音が好きになったきっかけは意外だが、おそらく中学生の頃に聞いたエルトン・ジョンの２枚組ＬＰ「Goodbye Yellow Brick Road」に入ってる〝葬送〟じゃなかったかと思う。あれはキーボード他の音の洪水だった。その頃カンサスなどがデビューし、スターキャッスル他アメリカにこったりもした。ある国のひとつのバンドが気に入ると、しばらくはその国ばかり探すようだ。最近は南米、ユーゴ、今は北欧の冷たいSymphonicを探している。

1. MIKE OLDFIELD/Incantations
2. ANYONE'S DAUGHTER/Adonis
3. KESTREL/same
4. GENESIS/ Second Out
5. TODD RUNDGREN/Something Anything
6. ASIA MINOR/Between Flesh & Divine
7. KAIPA/Inget Nytt Under Solen
8. LOCCANDA DELLE FATE/Forse Le Lucciole Non Si Amano Piu'
9. LA MAQUINA DE HACER PAJALOS
10. TAKO/same







ちょっと考えただけでも、愛聴盤を10枚だけ挙げろと言うのは酷な企画だった。仕方がないので取りあえず思いついた順に書き連らねることにしたが、当然そこには順位などなく、またこれ以外にも、自分にとって同等に値する作品があることは言うまでもない。

実際のところ、その候補としてレコード棚から抜き出してしまったジャケット達の大半が、誰もが見なれているものだと言うことに、今さらながら、メジャーのメジャーたり得る当然さを思い知らされた気がした。ここで最初に白状しなければならないことは、私がマイク・オールドフィールドのミーハーだと言うこと。こうあっさりと告白してしまえば、話も進めやすい。いっそのこと、この10枚をすべて彼の作品で固めてしまうことも出来たが、その中でも、何か聞きたいと思った時に流れているのは「呪文」だったと思う。タイトル通りの優しい螺旋音と、マディ・プライアのリフレインは今だに永遠を奏でている。一時ピルツ系の再発などもあり、ドイツに固執した時期もあった。エニワンズ・ドーターはその頃出合ったグループで、「アドニス」には、随分と悩まされ続けたものだった。

それに比べると、ケストレルは十分に健全な感動を与えてくれた。初めて音に触れた時から、あの粋なメロディが体中を駆け巡り今もって耳から離れないでいる。思い通りにゆき過ぎた、いやに懐しい体験をした。懐しいと言ってしまうのはどうかと思うが、ジェネシスを忘れてはならない。彼らには「セコンド・アウト」と言う不動の名演があったのだ。中でもとびきり“ファース・オブ・フィフス”が好きで、スティーブ・ハケットのギター・ソロが、スタジオ盤よりもやけに生々しく、震え、同時にその震えを自らも味わうのだ。これ以外に何がいいと言うのだろう。

突然だが、プログレ・ファンには余りなじみのないトッド・ラングレンも、どうしようもなく好きな１人だ。彼の作る曲、歌うバラードには、人間愛が満ち溢れていて常に建設的だ。ちょっとおかしいだろうが、１人で歌うのではなく、何人か仲間を集めて合唱したくなってしまう。「サムシング・エニシング」には、そんな歌がたくさんつめ込まれている。話題を元に戻そう。

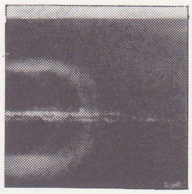
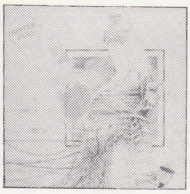
ある時期を過ぎた頃、ひとつの壁を乗り越えたかのように、イギリス以外の言わゆるヨーロッパの国々が気になり出した。それ以前にもつまみ聞き程度には聞いていたが、ある種のＢ級志向なるものへと目覚めさせてくれたのは、ノヴァリスであり、タイ・フォン、そしてアジア・マイナーだった。特にアジア・マイナーの「ビトウィーン・フレッシュ・アンド・ディバイン」は、真に生涯を誓い合うことの出来るひとつだ。そして、これに匹敵する程聞き込んで来たのが、カイパだ。巷ではサード・アルバムが持てはやされていたようだが、真実はセカンドである「インゲット・ニット・アンダー・ソーレン」にあるのだ。これが僕を北欧病にした原因で、今なお進行している。ダイスはそれに優るとも劣らないと言いたかったが、規定打席に満たないので番外。さて、普通ならたくさん出て来るイタリア勢だが、特異体質の私はロカンダ・デレ・ファーテにとどめをさす。このＬＰもケチのつけようがない程に感動的。こうしたイタリア勢に少なからず影響を受けてきたのが、中南米のグループ達だったのだろうか。他の国々にひけをとらない第一級のバンドが多くある。ここでは、ラ・マキナのファースト・ＬＰを挙げておこう。ミアやクルチスよりも、僕には親しみがあった。これに共通した色彩を持つものがタコで、どことなく垢抜けない泣きが、いつも鳴り響いて止まなかった。

こうして思いつくままに進めて来たが、いつの間にか規定枚数に達したようだ。読み返してみると、他にもっと良いのがあったような気もするが、それは他の筆者の方々にしても同様だろう。

杉山 薫

▷現在、故郷である静岡市に在住。基本的には世界中のどの国のグループも聴いている。数ヵ月に一度上京し、コレクターたちと会い情報交換の場を設けている。

ODISSEA/same
FESTA MOBILE/Diario Di Viaggio Della Festa Mobile
LOCANDA DELLE FATE/Forse Le Lucciole Non Si Amano Piu'
MAXOPHONE/same
BANCO/1st
SAMADHI/same
ATOLL/Tertio
TAI PHONG/same
CRACK/Si Todo Hiciera
GENESIS/Nursery Cryme


僕はレコードを聴く時に、それがキーボード中心でメロトロンも入っているとか、大曲揃いで組曲構成であるとかいうプログレ系のレコードの条件的なものなど、僕の好みとなる絶対的な対象にはなり得ない。無論、それらの事を毛嫌いするのではなく、より僕が魅力を感じる事に、アルバム全体に同じ音楽性を貫ぬいている、自国の国民性をサウンドに反映していることなどがあげられる。さて愛聴盤だが、どうしてもイタリアのレコードが多くなったが、そこは誰でもプログレを聞く人にとって通るであろう領域であり、一度足を踏み入れたなら魅了させられてしまう。釣では鮒に始まり鮒に終るなどと聞くが、プログレではブリティッシュに始まりブリティッシユで終るという事になろうし、僕も実際にそうであった。ところがまたイタリアに戻ってしまっている。イタリアは僕にとって底無し沼のようだ。さて順を追って紹介すると、まずODISSEAは僕が一番数多く聴いたアルバムだと思う。彼たちのサウンドに対してプログレ云々は必要あるまい。彼たちの特徴は、イタリアの味だ。つまりイタリア語の響きであり、イタリア独特のメロディーなのだ。8つの小曲は、正に聴けば聴く程に味わいが出るもので、イタリアン・プログレの原石がちりばめられているアルバムであり、僕にとって大切な一枚だ。

FESTA MOBILEはとにかく、テクニシャン揃いで切れのいいサウンドも僕好みである。エモーショナルなサウンドがイタリアには多い中、異彩を放っている。世界にフェスタ・タイプが出て来ているが本家本元のフェスタには足元にも及ぶまい。LOCANDA DELLE FATE、彼らのアルバムはA－1ばかり目立ちすぎてしまい、残る作品は霞んでしまっているが、ボーカル・ナンバーも瑞々しく聴き残せない。黄金時代に出し忘れたように77年に登場したこのアルバムは、忘れ物にしては高価な、喜ばしいものだった。MAXOPHONEの唯一のアルバムだが中世のイメージを現代に置き変えた様なサウンドは洗練され、余裕をも感じる。久しぶりにイタリアのレコードを聴こうと思う時、ジャケットの美くしさもあってか、まずこのアルバムに手が掛かるのである。BANCOはアルバムを出すたびにパワーが落ちてく感じがする。確かに完成度は高くなってはいくが、荒々しくパワー漲る1stアルバムが好きなのだ。SAMADHIはあまり知名度は高くはないが、東洋的な風味があり、イタリアでは一風変ったサウンドである。しかしボーカル主体ではあるが、そこにはやはり当時のイタリアのサウンドが宿っている。次にフランスに移り、ATOLLとTAI-PHONG。アトールはセカンドでの堅苦しい演奏に比べ、サードは何と伸び伸びとしたサウンドか、彼たちのポップではあるが本来の姿がここにあると思う。タイ・フォンはデビュー時のシスター・ジェーンの印象が強く、本格的にフランスに注目するきっかけとなったアルバムであり今もって愛聴している。そしてスペインのCRACK、あの小川のせせらぎの音が聞こえるとほっとする。ほんとにこのグループがスペインから出てよかったと思う。カナリオスがあったにせよ、当時のスペインの株を彼らの一枚のアルバムで一気に上げてしまったのだから。最後にはGENESIS. このアルバムに関しては何も言う必要がないだろうが、世界中に影響を及ぼした、特に変幻自在のあのサウンドはこのNURSERY CRYMEが主に手本となったであろう。本家の面目躍如たるものがある。さて以上のように70年代のレコードに集中してしまったが、此の頃のプログレのレコードには魅力が少なく感じるのは僕自身正直な所で、いつまでもレトロ感覚と言うか、昔のレコードを求め聴く心を目覚めさせてくれるグループが今、出現してくれないものかと思う。だが、プログレの全盛期の音にどっぷりと浸ってしまっている現在、そんな期待も難しい。この世界で、僕はもう旧人類なのだろうか。

belle musique d'aujourd'hui

Marquee

5 JULY
税込定価
3090円

ブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック集成

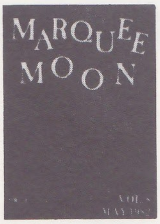
今まで詳細が語られることのなかったブリティッシュ・プログレッシヴ・ロック・シーン。その全てのユウロ・ロックの源であるシーンの全貌を明かす為にこの本は世に出ます。プログレッシヴ／フォーク／ジャズ等，様々な側面からみたブリティッシュ・シーンを知る為に，ぜひお読み下さい。

035
8月10日発売予定
税込定価830円

胎動する'90年代のユーロ・シーン！
香りの音楽
後ろの正面
レーベル・ディスコグラフィー
ブリティッシュ・ロックの巨人達
他

BACKNUMBER

○掲載されていないものは在庫切れです。御了承下さい。



008 ¥670
特集：香りの音楽（ポポル・ヴフ／中世音楽と現在／ダンスリー／バート・ヤンシュ，ジョン・レンボーン／コールド・ブルー・レーベル／フレイグラント・ミュージックカタログ）／クラウス・シュルツェインタビュウ／ルイス・フューレイ／ホークウインド（第1回）／ベルナール・スジャネール



009 ¥670
ロルケストラ・レーベル／映画の中のユーロ・ロック（アギーレ，ノスフェラトゥ，マクベス）リッカルド・フォッリ／エイジア／コーネリアス・カーデュー／アラン・ホールズワース・インタビュウ／ホークウインド第2回）／キャラヴァン／非常階段／カトラ・トゥラーナ／フランク・ザッパ（第1回）



020 ¥510
ジャップス・プログレッシヴ（夢幻，アウターリミッツ，ページェント，ラクリモーザ）／ヴィクトール・ボッス（ピュルサー）インタビュウ／アルゼンチン・ロックの全貌／ジャーマン・シンフォニック／東欧のプログレッシヴ・ロック／ザ・ブートレッグ：ピンク・フロイド（第2回）／コレクターズ・コーナー



021 ¥510
ジャップス・プログレッシヴ（フロマージュ，ベラフォン，マグダレーナ他）／コンパクト・ディスク・レポート／コレクターズ・コーナー／ザ・ブートレッグ：ピンク・フロイド（第3回）香りの音楽：ドビュッシー／ヴァーティゴ・レーベル／ユーロピアン・ロック・カタログ：シングル編（第2回）



025 ¥510
ヴァージニア・アストレイ／ユニヴェル・ゼロ，アール・ゾイ／エニワンズ・ドーター／ロベルト・カチャパリャ／ユーロ幻想紀行／ジャップス・プログレッシヴ／デトレフ・ヨーブ（ノヴァーリス）インタビュウ／ブリティッシュの巨人達：グリーンスレイド／ネオン・レーベル／香りの音楽



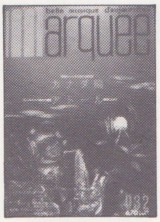
027 ¥510
須磨邦雄（美狂乱）インタビュウ／ジャップス・プログレッシヴ（ケネディ，フロマージュ，ヘレティック）／アルトゥーロ・スタルテリ，ティト・スキッパJr／ブリティッシュ・フォーク／ブリティッシュの巨人達：キャメル／プログレッシヴ・ロック・カタログ：中南米編／香りの音楽



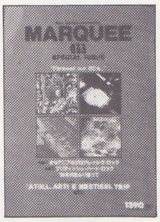
028 ¥510
ヴィエナ・スペシャル・インタビュウ／ヘレティック／フロマージュ／ペッカ／トロル／イシルドゥルス・バーネ／ムジカンテ／アルファIII／ブリティッシュの巨人達④ジェントル・ジャイアント／ザ・ブートレッグ―ソフト・マシーン／ブリティッシュ・フォーク／高見博史のプログレシヴ！／香りの音楽



029 ¥2260
●総勢19名によるユウロ・ロック・エッセイ集‼
○付録：ユウロ・ロック・ジャケット写真集／イタリアン・カンタウトーレ・カタログ／特別寄稿…メロトロンとプログレッシヴ・ロック



032 ¥670
ウィリアム・シェラー／イエツダ・ウルファ／ジャップス・プログレッシヴ89／ブリティッシュの巨人達⑦キャラヴァン／レーベル・ディスコグラフィー⑤ドーン／究極のヘヴィー・ロック／英文学とブリティッシュ・ロック／プログレッシヴ・ロック・カタログ④カナダ編／アトール来日に寄せて／他



033 ¥1390
SPECIAL ISSUE
特集①ブリティッシュ・ハード・ロック（総論，各論，そしてアルバム・カタログ全120掲載）②オセアニアのプログレッシヴ・ロック③80年代をふり返って―FAREWELL '80's／香りの音楽／ソフト・マシーン／アトール・インタヴュウ／ニュー・トロルス／スティーヴ・ヒレッジ



034 ¥830
オール・アバウト・イヴ／プログレッシヴ・メタルの現在（VOIVOD, WATCHTOWER etc.）／アメリカン・プログレッシヴ未紹介アルバム選／レーベル・ディスコグラフィー＝オール，ピルツ，コズミッシェ／ブリティッシュの巨人達＝ジェスロ・タル／文部省検定外アメリカン・プログレッシヴ／香りの音楽

●送料は一冊のみの場合200円，2・3冊は250円，4・5冊は300円，6・7冊が350円です。
●お近くでお求めになれない場合は，定期購読をお勧めします。6回分で6480円（送料・税込）を，現金書留か郵便為替で御送金下さい。雑誌が出来上がり次第，送せて頂きます。
●御送金後2週間以内に雑誌が届かない時は，御連絡下さい。（TEL：954-2055）

MARQUEE
未紹介アルバム選

選評・協力
（敬称略）

内田哲雄
江田和宏
賀川雅彦
沢田　守
城元隆志
鈴木伸一
高橋　理
田中昌延
林　克彦
松尾宏正
松本昌幸
山崎尚洋
吉瀬孝行
吉野正哉

ABISSI INFINITI (ITALY)
Tunnel
KNIGHTS/K.N.R.001　'81年



A①Come Bambini Di Sera②il Segreto③Spirale④Tunnel⑤Abissi Infiniti
B①Nebbia Incantata②Fessure Di Luna③Merlino④La Grotta Di Cristallo

Claudio Liotto:p,vo.
Andrea Zanatta:g.
Paolo Fin:ds.
Lucio Negretto:b.
Alberto Cazzola:key.
Enrico Kötterl:solina

このアルバムは'81年に発表されたにも拘らず，自主製作の少数プレスの為昨年になってイタリア本国のマニアによって発掘された一枚である。厚手のWジャケットでいやがうえにもあの'70年代への熱い思いが甦る。ジャケットのデザインからはハードな音が予想されるが，実際はカンタウトーレの流れを汲むヴォーカルを中心に据えた歌心溢れるバンドである。バックのAc.ギターが効果的に使われ，ソリーナ専門奏者を加えた二人の奏でるキーボード・プレイは非常にメロディアスで，トータルのイメージはとても瑞々しい音作りである。'70年代の多くの名盤に付け加えたい一枚。 （高橋）

AERODROM (YUGOSLAVIA)
Kad Misli Mi Vrludaju
JUNGOTON/LSY-66072　'79年



A①Kad Misli Mi Vrludaju②Nestada Dobrota③Vrati Se, Ivane④Pusti Neka Traje
B①Sareni Kolaci②Kraj Tebe U Tami③Razgovor Pred Zoru④Bjegunci

personnel:**No Credit**

正統派シンフォニック・バンド，エアロドロムの１作目。ジェネシスの影響を感じさせる軽妙なフレーズ。ハーモニックな美しさを大切にした音作りからイエスとの共通点を指摘する人もいる。さ程仰々しいキーボード・プレイ等は無いが，透明感を前面に押し出した演奏は清々しくもあり，本場のポンプ勢ともさして変わらぬレベルに位置すると言える。ポップな要素を適度にブレンドしたサウンドは重量感にやや欠ける嫌いはあるが構築性は十分で，70年代の共産圏では希に見る爽快な作品。ジャケはシングルだが裏カヴァーのデザインも秀逸。 （江田）

AGATHORN
Agathorn
private 6.16002　？年



A①Suferagette-Sei②Mr. Suicide③Impression④'85
B①Good Days②Day Mare③Reflections Part 1,2

Jan Heidebo:key.
Lars Jensen:key.
Morten Bruun Pedersen:b.
Henrik Dall:g.
Erik Havaleska Jensen:ds.
Jan Kargaard Madsen:g.

確かどこかのグループで名前を見かけたことのあるキーボード担当のLars Jensenを含む６人組のAGATHORN。彼以外にもう１人のキーボードがいると書けば，かなり派手な期待を持たれそうだが，全体的な印象は少々地味だ。それでもその特性を活かしたA②やA④には納得。また，ギタリストも２人いるせいか，彼らの絡みは仲々の聴きどころで，叙情性と以前何かで書いた北欧性とがうまく噛み合って，異常な盛り上がりを見せるところもある。特にパートⅠとⅡに分かれるB③の９分弱の曲までの流れが素晴らしい。 （田中）

ARMANDE ALTAÏ (FRANCE)
Atavisme
RCA/PL 37329　'79年



A①Miroir Miroir Magique②Turco Lyrico Rock③Quand Jetais Oiseau④Le Chant De La Mer
B①Kacsam/Si Je Pouvais Fuir②Barbarock③L'Onge De Lumiere④Le Message De L'Espace⑤J'Aimerais Devenir Une Fee

Armande Altaï:vo.
Jay Gottlieb:p.
David Rose:vln.
Joel Dugrenot:b.
Serge Heouzi:ds.
François Jeanneau:s-sax, fl, syn.

アルマンド・アルタイのデビュウ作。全ての曲の作曲とアレンジを元ザオのジョエル・デュグルノーが担当しており（作詩は全てアルタイ），アルタイと彼の共作的色彩が濃い。力強くも伸びの良いアルタイのメゾ・ソプラノ・ヴォイスとデュグルノー他，デヴィッド・ローズ，フランソワ・ジュアンノーらフレンチ・ジャズ・ロック界の強者達の演奏が見事に融け合い，エレガントかつインテレクチュアルなサウンドを作り出している。アルタイの歌手としての才能はもちろんのこと，デュグルノーのアレンジャーとしての実力を見せつける力作である。 （賀川）

ÄNGRABARN (SWEDEN)
Ängrabarn
PLUMP/PLP-1000　'73年



A①Angrabarn②I Farger③Se Pa Mej④I Skuggan Av Ditt Ljus(Tillagnad Titti)⑤En Kvinnas Drom⑥Den Lilla
B①Frihet, Fred Och Mat②Tag Min Oro③Ilyckans Land④Dikt Och Vers⑤Ur Drommen

Dan Tillberg:vo,ac-g,el-g, conga
Sven I. Ohlsson:vo,b,ac-g.

アングラバーンはD. Tillberg（vo & g）とS. I. Ohlsson（vo & b）のシンガー・デュオ。全12曲収録と小品集の感が強いが，18人のゲスト陣がバックをしっかりと固め，プログレ・ファンにも十分に訴え掛ける作品だ。陣容はヴァイオリン，トランペットが各４台，他にキーボード，チェロ，パーカッション等々。特にピアノとストリングスの奏で出す叙情的な雰囲気は特筆に値し，加えてコーラス隊をも導入したラスト・ナンバーの美しさは感動的でもある。一部パートではヴァイオリンが積極的にソロを取り，ギター伴奏のみで聴かせるA④はライヴ録音。 （江田）

DAN AR BRAS (FRANCE)
Douar Nevez
HEXAGONE/883009　？年



A①Intro②Retour De Guerre③Naissance De Dehud④Mort Et Immersion De Malguen-Fin Du Voyage⑤Naissance De La Ville⑥Morvac'h(Cheval De La Mer)
B①Orgies Nocturnes②L'ennui Du Roi③Les Forces Du Mal④L'appel Du Sage⑤Submersion De La Ville⑥Douar Nevez(Terre Nouvelle)

Dan Ar Bras:el-g,ac-g.
Patrig Molard:fl, Uilean Pipes, Biniou Bras
Benoit Widemann:el-p,ac-p, syn,org,eminent
Dave Pegg:b.
Michel Santangeli:ds.
Marc Chantereau:perc.
Emmanuelle Parrenin:Vielle a Roue
Bruno Menny:
Prod.:**Hugues De Courson**

トラッドの血である民族性とフランスの基盤を形づくるジャズの接点を，ミュージシャンの独創性の中に求めたならば，この作品以外にはない。洗練された音色にひそむ夢幻的な響き，これを支える卓越したテクニック。彼がこのデビュー作で示した方法論は，ブルターニュ系ギタリストの彼の証明でもあり更に説得力を持ち得る。エッセンスの取り込み方の流麗さが，全体に及んで繊細なトーンとなり，これがジャズ・ロック・パートやバグ・パイプ，ピアノなどの音色をも巻き込んでいる様は，自然に産まれ出てきたプログレッシヴ感覚というべきものだ。現在もソロで活動中。 （松本）

ARCHAÏA (FRANCE)
Archaïa
CHORAVOX/CC77976　'77年

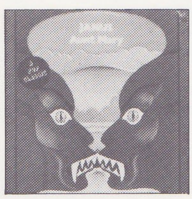


A①Soleil Noir②L'Arche Des Mutations③Surlestraces De Vieux Roy
B①La Roue②Le Festin Du Lion Vert③Massa Confasa④Le Grand Secret⑤Vol Du Phenix

Pierrick Le Bras:g,syn,vo.
Philippe Bersan:vo,syn,per.
Michel Munier:b.
Prod.:**Dominique Calmel**

アルカイア唯一の作品。フランスにはART ZOYD, ETRON FOU LELOUBLAN, ARBERT MARCŒUR等，混沌とした中にも知性と強いオリジナリティを感じさせるアーティストが少なくないが，アルカイアもそうしたものの１つである。ドラムレスのため重々しさこそないが，シンセサイザーを中心にベース，ヴォイス，ギター，パーカッションを独特の方法で組み合わせ呪術的で暗いサウンドを作り出している。かつてのジャーマン・ロックのように技術ではなく思想を基本としたグループであり，万人向けの作品とは言い難いが中々の力作であるのも事実である。 （賀川）

AUNT MARY (NORWAY)
Janus
re;PHILIPS/6478 055　'73年



A①Path Of Your Dream②Mr. Kaye③Nocturnal Voice④For All Eternity
B①Stumblin' Stone②All We've Got To Do Is Dream③Candles Of Heaven④What A Lovely Day

Personnel:**No Credit**
Prod.:**Stein Robert Ludvigsen & AUNT MARY**

これはノルウェイのアント・マリーというグループの作品。３枚のアルバムがあるが，最も完成された作品はこの最終作である。イメージとしてはプロコル・ハルムのセカンド（これ自体，シーンに先がけた一大トータル作品だったが）あたりに共通点が感じられるもの。オルガンとギターを核にした豊かな表現形式を持ち，素晴らしいアレンジ能力を誇り，異国的な香りを放つ各楽曲は，古さこそ感じるものの，相対的なヴォルテイジはすこぶる高い。一聴に値する好アルバムだ。 （山崎）

PATRICK BERNARD (FRANCE)
Exil
GOPAL/R.P.110　'81年



A①Un Et Different②Voir Le Soleil③Le Lieu D'ou L'On Ne Pevient Pas④Interieurs
B①Exil②Les Mendiants D'Amour③Le Veritable Ami④Le Pere Qui Regarde

Patrick Bernard: vo,g,key,b.
Robert Lafond: key,vo,b.
Pat Martel: b,ds,per.
Claude Laplante: g.
Michel Pepin: ds.
Nirantara Dasa: b.
Brigitte Pellerin: vo.
Prod.: **Marc Hamilton**

「Montre-Moi Con Visage(Gopal 2212.78 '79)」に続くパトリック・ベルナールのセカンド。前作を遥かに凌ぐ出来を誇っている。フランスにはエマニュエル・ブーズを始めとして，シンガーとバックを務めるミュージシャンとが一体となった好作品が少なくないが，本アルバムもそうした1枚である。ベルナールはブーズ，リベロ等の先人に匹敵するほどの強い個性こそ持ち合わせていないものの，繊細な感性の持ち主であり，リリカルなキーボードを中心とする演奏をバックに情感に富んだヴォーカルを披露している。地味ながらもフランスならではの一枚である。 （賀川）

BLAKULLA (SWEDEN)
Blakulla
ANETTE/ALP 218　'75年



A①Frigivning②Sirenernas Sang③Idealei④De'Ea'La Sta Oppe'Tess Vidare⑤Maskinsang
B①I Solnidgangen②Drottningholmsmusiken, Sats 1③Varldens Gang④Erinran

Bo Ferm: key.
Dennis Lindegren: vo.
Tomas Olsson: ds.
Hannes Rastam: b.
Mats Öhberg: g.

KAIPAのファーストが出された'75年，このBLAKULLAもAnetteと言う自主レーベルから，ひっそりとアルバムをリリースした。片やメジャー，片やマイナー・レーベルだが，その類似した音楽性の下に作られた作品が，条件の違いによっては，これ位の差が出てしまうのだろうか。しかしながら，A②においてはBo Fermのオルガンとamp;Mats Ohbergのギターは，まるでKAIPAのHans LundinとRoine Stoltのそれに近い。硬質なシンフォニックというイメージだが，大作になる程出来が良く，これも北欧のトップ。 （田中）

BONFIRE (HOLLAND)
Bonfire Goes Banana
EMI/5C062.25163　'75年

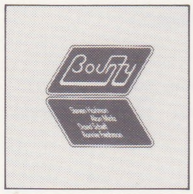


A①Delirium②Contrast③Vuurstaalpt. 2③Chinese In Europe pt.1⑤Circle
B①The Sage Of The Running Nose a) Running Nose b) Cabaret c) Third Eye d) Cabaret Again e) Running Nose II

Frank Witte: key.
Eugine Den Hoed: g,fl.
Kees Den Hoed: b.
Cees Meerman: ds.
Prod.: **John D'Andrea & Toni Scotti**

ボンファイアーはオランダのシンフォニック・ロック・グループである。彼等の得意とするところは，確かなテクニックに裏付けられた，軽快でテクニカルなインストゥールメンタルである。そこにはジャズやクラシックのイディオムもうっすらと香り立つが，どこかほのぼのとした暖かさを持つのは，やはりオランダのグル－プの性(さが)だろうか。次から次へと様々なフレーズが沸き出る様を聴いていると，彼等の才能の冴えにいつしか舌を巻くことになる。強いていえば，中期のスーパー・シスターにどことなく似ているだろうか。共に一筋縄ではいかないグループである。 （山崎）

BOUNTY (USA)
Bounty
HARTS/H755　'81年



A①Juango Zingo
B①So Have A Good Time②Fireflight

Steven Hartman: key.
Alan Mintz: b.
David Scheff: ds.
with
Ron Freshman: g.

BOUNTYと言うアメリカのグループは，キーボード担当のSteven Hartmanを中心とする，キーボード・トリオ。10分程の大作が3曲収録されているが，録音はリリース時より4年古く，'77年とクレジットされている。自主制作らしさを丸出しにしたジャケットの様に，オープニングの安っぽいピアノのソロが気に入らないが，ものの1分もしない内に，"テクニカル・トリオ"らしさが全編を覆う。ほんの少しゲスト参加のギタリストも加わり，3曲全てがそれ相当の盛り上がりを見せてくれる。 （田中）

ALAIN BURO (BELGIUM)
Fume, C'est Du Belge
OMEGA/LPZ 505-Y　'75年



A①Trilogie a) La Chine b) Bah...'tes Niks Santei c) La Race Des Soiffardes②L'etang Mort
B①Brel②Les Reactions Chimiques③Grandeur Et Decadence④Post-Scriptum

Alain Buro: vo,etc.
Eric De Wolf: b,vo.
Robert Beleyn: g.
Gerry D'Ayens: ds,perc.
Prod.: **Lou Deprijck**

ジャケットから受ける粗悪なイメージに反して音の方は主人公であるAlain Buroのヴォーカルを中心にタイトで引き締まったシンフォニック・ロックを聞かせてくれる。特にA①の組曲Trilogieの出来が特筆に価する。全曲フランス語で歌われているせいかアンジュ，モナリザといったフランスの大物グループに非常に近い音創りがなされてはいるものの，流石にこれらの大御所連に比較すると小ぢんまりした印象は拭い切れない。隣接国がフランスである事からもベルギーには本作以外にもこうした方向性を持つ未知数のミュージシャンが少なからず存在すると思わせるに充分な好素材でもある。 （松尾）

FABIO CELI (ITALY)
Follia
STUDIO 7/LP1101LG　'73年

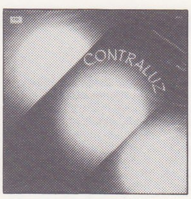


A①Follia②Uomo Cosa Fai③Il Capestro
B①L'Artista Sadico②Il Presidente③Distruzione

Fabio Celi: org,p,syn,vo.
Ciro Ciscognetti: org,p,syn.
Roberto Ciscognetti: ds,perc.
Rino Fiorentino: b.
Luigi Coppa: g,hca.
Prod.: **Eduardo Conte**

Fabio Celliなる人物については，この自主制作による作品以外には何等知る術も無いのが残念だが，INFERMIERIというグループと共に創出したそのサウンドは，ダイナミズムとリリシズムの交錯する凄絶なイタリアン・ロックである。魂の雄叫びのような，又時に虚しい呟きの如きFabioのボーカルに，彼自身とC.Ciscognettiによるダブル・キーボードが，ミステリアスにスリリングにそしてクラシカルにと変幻自在に絡み付きせめぎあう様は圧巻!逞しい生命力と狂おしい美意識の発露が，何処迄も何時迄も熱く切なく胸を焦がす。傑作である。 （鈴木）

CONTRALUZ (ARGENTINA)
Americanos
EMJ/64041　'73年



A①Indios Sin Prision②Sin Trabajo③No Sta Qui Cai Gas Mendigando④Clave De Sol
B①La Sarna Del Vieto②El Charco③Abrir El Dia④Seamos

Personnel: **No Credit**

今のところこのCONTRALUZは，アルゼンチン盤ではあるものの，ブラジルのグループという可能性もあり，どちらとも言えない。現地ではTELLAHよりも希少価値が上らしく，実際の作品の評価もかなり高い。'73年という時代も反映してか，プログレッシヴ・ロックとしての十分な完成を見ることは難かしいが，力強いヴォーカル，オルガン・ワーク，そして随所にちりばめられたフルートが一体となって，恐しい程のインパクトを与えてくれる。オザンナ・タイプのヘヴィなプログレッシヴ・ロックと言ってしまえば簡単だが，それで片付けたくはないグループ。 （田中）

COSMONATUTA (SPAIN)
Tránsito Espacial En Cuatro Estancias
ACCIOY/ACX-30.006　'71



A①El Estallido Del Miedo②El Estallido De La Luz
B①El Estallido De La Maquina②El Estallido Del Silencio

Soprano: **Mercedes Valimana**
lector: **José Antonio Muñoz y Luis Gomez Escolar**

本作は非常にシリアスかつアヴァンギャルドな作品で，なんとフランコ政権下の'71年の作である。圧力に抵抗するかのような唸るフル・オーケストラと，美しいチェンバロ，ドネラ・デル・モナコを思わせるオペラチックな女性ヴォイス。跡絶える事のない不協和音と地を這うような呪文的コーラス。'76年にリリースされたアルフレッド・カリオンのソロ・アルバムを思い出すが，もっと別のアンダーグラウンド・パワーに満ちたハングリーで暗黒をさまよう芸術の魂を感じ取ることができる。独裁政権崩壊後，一気に燃え上がったスパニッシュ・ロックを予感させる1枚。 （LUNA）

A—C



DADO (BRAZIL)
Atras Da Luz
private '84年

A①Euar Menino②Deixa O Amor Viver ③Ondas④Viajante
B①Sob A Luz②A Ponte③Atlas Da Luz ④Romance⑤No Espeeho

Dado:p, vo.
Joe Varella:b.
Carlos Eduardo:g.
Francis Drake:ds.

ブラジルは,'80年代に入ってからもCOMUNIDADE S8のように,自主制作ながらプログレッシヴなグループの活動が比較的多いが,年代が新しい割に知られていないものも多い。このDADOもそのひとつで,これは'84年の作品。DADOは個人名で,ヴォーカルとピアノを担当,その他にベース,ドラム,ギター,シンセが脇を固めている。魅力なのは表情豊かなピアノ,ヴォーカルで,そのためかアルバム全体に,しっとりと落ち着いた印象を受ける。控え目ながらギターも効果的。

(田中)



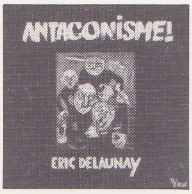
DANGER (HOLLAND)
Danger
COW/RCS315 '73年

A①Danger
B①Danger

Mike Floothuis:org.
Jaap Lindijer:syn.
Kees Neeteson:t-sax.

オランダのグループであるが,体質的には'70年代のジャーマン・ロックの一派に属するといっていいと思う。オルガン,シンセ,サックス等による即興曲だが,そのトーンは鉛のように重く,無機的で,思考を不安に陥れるような種のものである。インダストリアル・ビートの原点のようなサウンドで,この種の即興ロックとして非常に高いクォリティを有している。このようなアグレッシヴなロックは,'80年代には存在すらできなかったような獰猛な感覚であり,今となっては極少数派となってしまったものである。硬派のファンよ,ぜひ入手されたし。

(山崎)



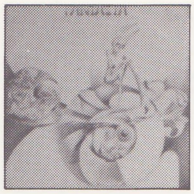
ERIC DELAUNAY (FRANCE)
Antagonisme!
VOGUE/574021 '80年

A①Antagonisme②Histoire De Monsieur K.③Ballade
B①Amuse Gueule②Celui Par Qui Tout Arrive③Final

Eric Delauney:ds.
Philippe Bambak:g.
Jean-Marc Thiebaud:key.
Paul Amar:b.

デビュウ作が好評を博したTIEMKOのドラマー,エリック・ドゥロネイがグループ結成以前に発表したソロ・アルバム。TIEMKOのアルバムで聴くことのできたリズム・パターンは既に本作品で完成していたと言える。力強く躍動感溢れるリズムを受けてギター,キーボードが軽快なソロを展開している。4人のメンバーのアンサンブルも良く,グループが一丸となってのたたみかけるような演奏は聴く者を圧倒する。知名度こそ低いものの,高い完成度を誇る作品であり,フレンチ・プログレッシヴ・ロック・シーンの奥深さを痛感させる1枚である。

(賀川)



FANTASIA (FINLAND)
Fantasia
HI HAT/HILP-107 '75年

A①Pilvien Takaa②Unikuva③Huutokauppa④Suihkuliidolla⑤Hautausmaani Rannoilla
B①Tulen Pisara②Agressio③Harma Jazz④Depressio

Roul Helantie:p, org, syn.
Hnnu Lindblom:g.
Harri Piha:b.
Karl-Erik Rönngard:ds.

75年にフィンランドで製作された作品。思わせ振りなグループ名,幻想的なカヴァー・アート等で好事家の注目を集めているが,内容的にもまずまずの出来。ギタリストとキーボーディストが殆どの曲を書き上げ,演奏面でも2人がリーダーと言える。使用キーボードはハモンド,各種シンセ類が主でメロトロンの導入は無し。派手な展開で攻めまくる場面はないがストリング・シンセやメロウなギターワークで叙情性を打ち出したパートが最大の見せ場となる。十分に楽しめる作品ながらリズム陣が若干貧弱なのが気に掛かる。

(江田)



HALINA FRACKOWIAK (POLAND)
Ogród Luizy
MUZA/SX-2346 ?年

A①Podroz Z Ukochana②Jedyna Swiatlosc③Na Samym Dnie④Milosc⑤Usta Twoje Caluja⑥Umilowanie⑦Do Nocy
B①Smutek②Noc W Miescie③Lekcja Natchnienia④Piesn Weselna⑤Coraz Blizej⑥Koleda Dziecinna

Halina Frackowiak:vo.
Josef Skrzek:key, b, perc, cl, vo.
Hubert Rutkowski:perc.

ハリナ・フラコヴィアックはポーランドの女性ヴォーカリスト。これまで数枚のアルバムを残しているが,SBBのキーボーディスト,ヨゼフを迎えて製作された本作は聴き応えも十分だ。'80年代前半の作と思われ,音作り自体は少々新しめながら,全体がムーグ類やピアノの優しい音色に彩られて彼女の歌唱も俄然冴えを見せる。さ程目立たないが,バックにさりげなく織り込んだ鐘の音等が適度なスパイス効果を見せると共に,時折ソロを取るムーグの働きも見逃せず,一部には歌よりも演奏に重きを置いたパートも見られる。

(江田)



GIANT (FRANCE)
Giant
INTERNATIONAL/ZO201V ?年

A①Black On A White Ground②Underground Session
B①Xenos Cosmos②Giant Locomotion ③Mouvements Aquatiles

Janko Nilovic:arr. direction
Andre Ceccarelli:ds.
Jean Pierre Alarcen:g.
Antonio Rubio:b.
Graziella:org, p.
他:tp, tb, fl, sax, cl, vln, vla, cello, etc.

ジャイアントはジャンコ・ニロビックを中心に30人を越えるミュージシャンを擁したオーケストラ的セッション・グループである。ニロビックはホーン,ストリングス,リズムの各セクション及びコーラスを巧みにまとめあげ,流麗なシンフォニック・ジャズ・ロック・サウンドを作り出している。収録された5曲はいずれもハイ・レヴェルの出来であるが,やはり話題はSANDROSEのアルバムでも聴くことのできたA②であろう。ジャズィなホーンとクラシカルなストリングスが混り合う中,アラルサンが短いながらもソロを展開する部分は特に印象的である。

(賀川)



GIOVANNA (ITALY)
Ho Passato Un Brutto Inverno
ARISTON/AR/LP 12104 '73年

A①Questo Amore Un Po' Strano②Il Fiume Corre E L'Acqua Va③A Tutti Quanti④Ricordo Di Un Amore⑤Shalom Shula Shalom⑥Misto Inventando Un Mondo
B①Dolci Fantasie②La Grande Risposta③Quanto Amore④Ma Tu Chi Sei⑤Piu' Di Tutto Il Bene⑥Canzone Di Un Inverno

Giovanna:vo.
Dario Baldan Bembo:p, org, mtn, syn, celeste
Gigi Cappellotto:b.
Andy Surdi:perc.
Massimo Lucca:g.
Andrea Sacchi:g.
Prod.:**Leo Ricchi**

達者なバック陣を従えて,GIOVANNAは我々に唄心の大切さを再認識させてくれる。確かに豊かな広がりのあるオーケストレーションや,メロトロンまで使用したキーボード群の極上の美しさは,この作品を語る上で決して欠かすことの出来無い要因ではあるけれども,心の深奥に潜む諸々の感情を,その起伏や微動のままに多様なメロディーに織り込んでゆく彼女の唱法が,何と言っても魅力的だ。つくづく表現力の豊富な歌い手だと感心してしまう。尚,彼女はこの他にも何枚かのアルバムを発表している。又,デビュー曲は,"Io Volevo Diventare"。

(鈴木伸一)



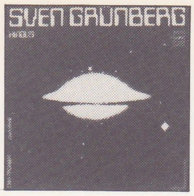
MAREK GRECHUTA (POLAND)
Szalona Lokomotywa
PRONIT/SX1496 '77年

A①Na Skale Czarnej②Nad Zrebem Planety③Hop Szklanke Piwa④Z Glebiny Nocy Nieqojetej⑤Przez Uczuc Najdziwniejsze Sploty⑥Oto Ja-Oto On⑦Motorek⑧Zagadki⑨Pomne Jak Niegdys
B①Czy To Tu ?②Taniec Szewcow③Ktoz Moze Byc Bardziej Szalony④Zabu Ten Lek⑤Ikar⑥Wez Mnie Ze Soba⑦Ostatnia Stacja Rezygnacja⑧Chce Cie Uchronic

Marek Grechuta:vo, key.
J.K.Pawluskiewicz:vo.
Michat Poltorak:skrzypce
Piotr Techmanski:fl. cl, s.
Jerzy Wysocki:ac-g.
Pawet Scieranski:el-g.
Krzysztof Scieranski:b.
Marian Bronikowski:perc.
Jerzy Grzywacz:key.
Jan Kanty Pawluskiewicz:fortepian

彼はNIEMENと並んでポーランドを代表するシンガー,詩人,コンポーザーである。ノスタルジックで内省的な曲を,バック・バンドANAWAの水準の高い重厚なジャズ・ロック・サウンド,そして弦を中心とした時代的なクラシカル・サウンドをバックに歌う。又随所に現われるフィメール・ソプラノ・ヴォーカルが作品にアクセントを与えている。小曲が並び曲調の変化が激しいが散漫な印象はない。本作はヴォーカルと演奏のバランスが良く彼のスタイルを確立している。以降同傾向内容の作品が続き,アレンジがシンプルになりシャンソン的感覚が次第に強くなる。

(吉野)



SVEN GRÜNBERG (USSR)
Hingus
MELODIA/C90-16301-2　'80年

A①Hingus I②Hingus II③Hingus III④Hingus IV
B①Teekondo②Valgusois

All compositions: **Sven Grünberg**

スヴェン・グリュンベルクは，ソビエトのエレクトロニクス奏者である。何枚のアルバムがあるのかはわからないが，知り有る限り，これが彼の最高作であると思う。エレクトロニクスというものをヴィジュアルに演ずる場合，その作品の完成度に貢献するのは，まず第一にミュージシャンの感性である。技術はその感性に仕える下僕である。このミュージシャンの豊かな表現を聴く限り，彼は，エレクトロニクス・ミュージック界でも有数の天才的な感覚を有している。この雄大な感覚は，広大なロシアの平原を明らかに連想するものだ。彼の'78―'80年までの作品が収めてある。（山崎）



NACHA GUEVARA (SPAIN)
Para Cuando Me Vaya
HISPAVOX/S60.146　'78年

A①Para Cuando Me Vaya②Ay, Del Amor③Don Carlos④Esta Cancion⑤Vuela Pena
B①Yo No Te Pido②Anos③El Manantial④Diario⑤En Busca De Una Nueva Flor

Nacha Guevara: vo.
Alberto Favero: Arr.

アルゼンチン生まれで，スペインで活動をしているナチャ・グェヴァラが何枚のアルバムをリリースしているか正確には知らない。しかし，初期の作品に違いない'77年の"AMOR DE CIUDAD GRANDE"と次作である本作の出来は素晴らしい。オーケストラをバックに歌う彼女の歌声は声楽的な唱法で，ノスタルジックに彼女の世界を描いていく。生の喜びと悲しみとの間を揺れ動く歌声は，モノトーンに限りなく近い淡い色彩感に満ち，祖国を遠く離れた人の心に映る異国的な郷愁を感じさせる。古いラヴ・ストーリーを観るような，そんな気持ちにさせてくれる名品であると思う。（山崎）



HANUMAN (W.GERMANY)
Hanuman
KUCKUCK/2375 012　'71年

A①Schadel Statten②Machtwechsel
B①Lied Des Teufels②Taue Der Fremdheit③Sonnenaufgang

Wolf-Rüdiger Uhlig: key, vo.
Peter Barth: fl, a-sax, vo.
Jörg Hahnfeld: b.
Thomas Holm: ds.
Prod.: **HANUMAN**

'71年，ミュンヘン出身の4人のアーティスト達によって人知れず発表され本作のみで消えて行ったこのグループ，先ずこの時代にしては異常な位，録音レベルが良い事に驚かされる。音楽形態としてはオルガンを中心にフルート，サックス，ギターが各自一体となってジャージーでスリリングなインター・プレイを繰り広げ，その上にヴォーカルが重なるといった形式を取っている。同レーベルにはMurphy Blend, Armaggedon, CWT, Lied Des Teuffels, Out Of Focusといったミュージシャンが名を連ねているがこの内，Out Of Focusに近い良質なジャズ・ロックを聞かせてくれる。（松尾）



HAIKARA (FINLAND)
Haikara
RCA/LSP 10392　'72年

A①Koyhan Pojan Kerjays②Luoja Kutsuu③Yksi Maa-Yksi Kansa
B①Jallen On Meidan②Manala

Vesa Lehtinen: vo, per.
Vesa Lattunen: key.
Harri Pystynen: t-sax.
Timo Vvorinen: b.
Markus Heikkero: ds.

その名の示す通りハイカラであるかは別にして女性キーボードを含む5人編成からなる彼らの音は正にクリムゾンのIslands, Lizardを初めて聞いた時のあの感動を如実に呼び起こしてくれる。ジャージーな展開を持つ曲から時として情感豊かに切々と歌い込むヴォーカル，北欧神話から題材を取ったと思われる大曲指向かつトータルな音創りはドラマー自ら描いたジャケットの素晴らしさにも見て取れる。本作発表後同年に2ndの"Geafer"，翌年には3rdとコンスタントにアルバムを製作していて，そのどれもが甲乙つけ難い。こうしたグループとの出合いによって筆者はコレクターとしての甲斐を見い出すのである。（松尾）



HAIKARA
Geafar
RCA/YFPL 1-809　'73年

A①Change Kun Menet Tarpeeksi Kauas Tulevaisuuteen Huomaat Olevasi Menneisyydessa③Kantaatti
B①Laulu Su Surullisesta Pilvesta②Geafar

Auli Lattunen: vo.
Vesa Lattunen: key.
Harri Pystynen: sax.
Timo Vaorinen: b.
Markus Heikkero: ds.

ハイカラのセカンド。ややブルーズィなA面も悪くないが，やはりB面の出来が圧倒的である。B①はクラシカルな小品でフルート，弦楽器，ピアノ，ソプラノ・ヴォイス等をフィーチャーしたリリカルな演奏を聴くことができる。また，B②は14分を超える大曲であり，グループの本領が発揮されたものとなっている。管楽器を巧みに使った力強い演奏は時として初期のクリムゾンを彷彿させるが，ややジャズィな要素を持った独特のシンフォニック・ロックと言える。北欧のシンフォニック・ロック系の作品の中でも屈指の1枚であり，非常に魅力的である。（賀川）



INQUISTION (DENMARK)
Inquistion
GENERATION/GRL-8518　'85年

A①Evil Eyes Intro②Evil Eyes③Hide Away④Evil Eyes Part 2⑤Pointifix Maximus⑥Right Away
B①Old Wise Man②Moonlight Dancer③Water Test④The Court⑤Voteing⑥Judgement⑦Time Passenger

Personnel: **No Credit**
Prod.: **Gert Hilmfred, Bo Moller**

中世ヨーロッパの宗教裁判を描いたトータル・アルバム。美しい見開きジャケの内側には曲毎のイメージを表したセピア色のリーフレットが付されている。主な演奏者は16人，他にオーケストラとブラスが加わる。全曲英語で，歌い手が曲によって随時入れ代わる。情趣満点のストリングスで幕が開くA①。その厳かなムードは，クリアーな女性ヴォーカルに受け継がれ，非常に劇的な展開を予想させる。が，作品全体を見るとシンフォニック一辺倒ではなく，適度にポップなサウンドをも包含。軽快なテンポといい，いかにも80年代らしい作品。（江田）

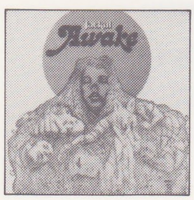


INTERNATIONAL HARVESTER (SWEDEN)
Sov Gott Rose-Marie
LOVE/LRLP-1005　?年

A①Dies Irae②I Villande Skogen③There Is No Other Place④The Runcorn Report On Western Progress⑤Statsmistern⑥Ho Chi Minh⑦It's Only Love⑧Klockan Ar Mycket Nu⑨Ut Till Vanster⑩Sommarlaten⑪Sov Gott Rose-Marie
B①I Mourn You②How To Survive

Bo Anders Passon: g, vo.
Thomas Gartz: ds.
Torbjörn Abelli: b.
Thomas Tidholm: vo.
Arne Ericsson: ce.

"北欧のアモン・デュール"，インターナショナル・ハーヴェスターの作品。A①にはフォルムラ3でお馴染のトラッドミサ曲"Dies Irae"，更にトラッドを1曲継げた後，初期のAD IIを彷彿とさせる破壊的ナンバーに突入。A面は全11曲の細切れながら，小鳥の囀りや犬の吠え声等効果音を随時導入，不気味な鐘の音が醸し出す呪術的な味わいや，各種管弦楽器によるシャーマニックな装いがドイツ・ロックの愛聴家を喜ばせそう。ストックホルムでのショウの模様を収録した約13分にも及ぶB①が本作のハイライトと言えそうだ。（江田）



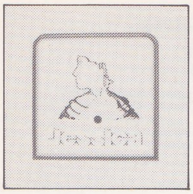
JACKAL (CANADA)
Awake
PERIWINKLE/PER7309

A①At The Station②For You③Sunny Side Of The Day④A New Day Has Arisen
B①How Time Has Flown②Lost In The World③In The Heavens④Awake

Personnel: **No Credit**
Prod.: **JACKAL & Periwinkle Records**

'71年，カナダはトロント出身の幻のグループJACKAL，噂のみぞ聞く存在であったが実際に手にしてみてその音楽水準の高さに改めて感心させられた。プログレ，サイケ，ハード・ロックと言った全てのカテゴリーを超越し，ロック本来の持つ血の熱くなる様な高揚感をその卓越したテクニックと素晴しい楽曲センスでキーボード，ギター，ベース，ドラム，ヴォーカルを通じて徹底的に押しまくり，尚かつリリシズムも兼ね備えた彼らのサウンドは正に圧巻という言葉が相応しい。ジャケットのセンスもこの手の大物らしさを感じられて好感が持てるが，メンバーのクレジット等一切無いのは残念である。（松尾）

JESSICA (W. GERMANY)



Jessica
KNÖTERICH/Kn583　'75年

A①Allegretto Grazioso②Andantino
B①Vivace②Allegro Con Spirito

Henner Herdick: p.
Peter Büchel: g.
Lother Piechottka: b.
Klaus T. Tolges: perc.

独の自主制作盤。おそらく唯一のアルバムであろうが，あまり知られていない。1900年前後のドイツの作曲家，マックス・レーガーの作品「4つのソナチネ」を編曲・演奏した内容。キーボード，ギター，ベース，ドラムのオーソドックスなインストゥルメンタル・バンド編成ながら，キーボードはピアノか電気ピアノ系の物以外は使用されておらず，所謂シンフォニック・ロックとは一種異なったサウンドである。むしろ軽快なジャズ・タッチのアレンジが印象的だ。しかし全体的に一本調子で，各メンバーのセンスと技術的な問題に不満が残る。（沢田）

KARUSSELL (DDR)



Entweder Oder
AMIGA/8.55-687　'79年

A①Entweder Oder②Der Gitarrist③Autostop④Whisky⑤Mcdonald
B①Fenster Zu②Ehrlich Will Ich Bleiben③Tanzen④Ein Langer Weg⑤Besinnung

Reinhard Huth
Jochen Hohl
Wolf Rüdiger Raschke
Bernd Dünnebeil
Peter Gläser
Claus Winter

東ドイツのカルッセルはラヴ・ロック様のサウンドを得意とするポップ・バンドで，残された数枚の作品のうち本作の出来が最も良い。イタリア物等には見劣りするものの哀愁感の漂う繊細なフレーズ，やや民族がかった演奏，非常に泥臭いパート，片肘張らないソフトなナンバー…とかなり雑多な要素が詰め込まれている。グループの性格上，プログレッシヴな色合いはさ程濃くはないが，6分強のA①泣きのメロディーが次々と続く他，B②，B④などでも質の良い歌が聴ける。シンフォニック系よりも，歌物の好きな人に薦めたい。（江田）

KORAL (HUNGARY)



Koral
PEPITA/SLPX 17633　'80年

A①Eloszo②Kiuzetes A Paradicsombol③Fekete Barany④Hangoddal Ebrest A Szel⑤Maradj Velem
B①A Masik Oldalon②Anyam, Vigasztaljengem③Tudom, En Megnyugodnek④Amit Nem Mondhattam El⑤Utoszo

Balazs Ferenc: key.
Fischer László: g.
Scholler Zsolt: b.
Dorozsmai Péter: ds.

KORALはキーボードを含むハンガリーの4人組。'80年にペピータから出された「Koral」は，ハード・ロック的な手法をベースにしているものの，ハモンド・オルガンやシンセサイザーを担当するDorozsmaiのセンスは，紛れもなくプログレッシヴ・ロックのそれである。ハードな展開ながら，愛くるしいメロディが印象的な彼らの活動は，'75年と古いが，この作品がファーストらしく，この後「Az Ocean-Koral Ⅲ」と「1975～1985 Koral Ⅳ」が出ていることから，4枚の作品を発表していることが分かる。（田中）

KULTIVATOR (SWEDEN)



Kultivator
BAUTA/Bar 8101　'81年

A①Hoga Hastar②Vemod③Smafolket④Kara Jond
B①Barnoomens Stigar②Grottekvarnen③Varfol

Stefan Carlsson: b, b-pedal
Johan Hedren: p, key.
Jonas Linge: g, vo.
Ingemo Rylander: vo, rec, p.
Johan Svärd: ds, per.
Prod.: **KULTIVATOR**

スウェーデンのマイナー・レーベルからリリースされた作品。女性ヴォーカルをフィーチャーしたカンタベリー系のサウンドで，所々ハットフィールド・アンド・ザ・ノースを思わせる。彼らに比べると少々曲展開の面白味に乏しいが，それでも好感が持てるのは，各メンバーの確かなテクニックとセンスの良さ，そして印象的なメロディによるものであろう。ある意味ではベルギーのコスに近い位置にいる様にも思える。ダイナミックなドラムスやテンションを抜いた女性ヴォーカルは，その手のファンにはたまらない演奏スタイルだ。（沢田）

LAGGER BLUES MACHINE (BELGIUM)



Lagger Blues Machine
CBS/S65230　'72年

A①Symphonie 1er Partie②Darknessly③Tanit
B①Symphonie 2eme Partie②Born To Be Alone On A White Desert Island

Personnel: **No Credit**

ラガー・ブルース・マシーンと名乗るベルギーのバンドの唯一の作品である。グループ名から所謂ブルース・ロックと思われがちだが，その要素は極めて少なく，'70年代のベルジャン・プログレッシヴ・ロック・シーンが生んだトップ・クラスの作品の1つと言える。そのサウンドはシンフォニック・ロック，サイケデリック・ミュージック，ジャズ・ロック，ブルース・ロック，更にはマグマ的要素までが入り混じった幅広いものであり，彼らのプログレッシヴな姿勢が窺える。フルート，ギター，ピアノ等のソロをうまくちりばめた曲展開は非常にドラマチックである。（賀川）

LIFT (DDR)



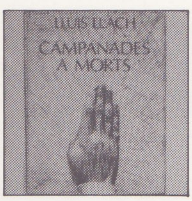
Lift
AMIGA/8.55-550　'77年

A①Wasser Und Wein②...Fallt Der Erste Reif③Und Es Schuf Der Mensch Die Erde④Jeden Abend⑤Fruh Am Morgen
B①Ballade Vom Stein②Du Falsche Schone③Komm Her④Abendstunde, Stille Stunde

Werther Lohse: ds, vo.
Michael Heubach: syn, org, el-p.
Till Patzer: a-sax, fl, vo.
Wolfgang Scheffler: el-p, mellotron, syn.
Henry Pacholski: vo.
Gerhard Zacher: b, vo.

東ドイツのシンフォニック・バンド，リフトはギターレスの変則6人編成。'77年に発表された本作はメロトロンが効果的に使われるなど聴き応えのある内容になっている。冒頭から暫くはややポップなフレーズを交えながらほのぼのとしたムードで進むが，A③になって華麗なピアノのイントロと共にメロトロンが参入。B面に入ると更に佳曲が続く様になる。優しいフルートの音も所々で登場。メロトロンの効用としては短いながらも柔らかいタッチで仕上げたB②，オルガンと併用し叙情的な盛上げが最高潮に達するB④等が目に付く。（江田）

LLUIS LLACH (PORTUGAL)



Companades A Morts
MOVIE PLAY/17.0915/8　'77年

A①Campanades A Morts
B①A La Taverna Del Mar②Luna③Vinyes Verdes Vora Al Mar④Canco D'Amor

Lluis Llach: vo, p.
Laura Almerich: g.
Prod.: **Joan Molas**

過去に多くの作品を残し，その精力的な活動ぶりが日本のファンにも幅広く認知されている彼。しかしシンフォニック性という点では本作にとどめを刺す。特にA面全部を費した18分弱にも及ぶタイトル曲の存在はユーロ狂を大いに満足させよう。オーケストラと混声合唱団をフィーチュアし壮大なスケールで描き上げた純シンフォニック・ワールド。全体的にロック的な要素は少ないものの，B面収録の4曲もクラシック・ギターやピアノをバックに切々と歌い上げる秀作揃い。彼の多才ぶりを改めて見せ付けた作品とも言える。（江田）

BARIS MANCO (TURKY)



2023
YAVUZ/LP-1015　？年

A①Acih'da Baga Vir!②Kayalarin Oglu③2023④Yolverin Agalar Beyler!⑤Uzun Ince Bir Yaldayim!
B①Yine Yol Gorundu Gurbete②Baykoca Destani a) Gulme Ha, Gulme! b) Gelinlik Kizların Dansi c) Kara Haber Turnanin Olumu d) Vur Ha, Vur! e) Durma Ha, Durma!③Tavuklara Kissst De!④Kol Basti!

Personnel: **No Credit**

トルコのバリス・マンチョは現地では非常にメジャーな存在らしく，道端で露天商が売るカセット・テープの中には彼の作品が多数含まれているという。従って何枚のアルバムが出ているか想像もつかないが，本作はたまらない郷愁感と異国情緒がたっぷりと詰め込まれた好作品。民族楽器をふんだんに使ったオープニングも印象的ながら，フルート，シンセ陣が醸し出す叙情性や水音，鳥の囀り等の効果音にトルコ語のヴォーカルが絡んでの独特の装いが最大の持ち味だろう。いかにも“東西文化の接点”を思わせる作品。（江田）



JUAN MARTIN (Brazil)
Picasso Portraits
POLYDOR/2383 630　'82年

A①Harlequin②Desire Caught By The Tail③Three Musicians④Sleeping Girl⑤Self Portrait
B①The Aficionado②Girls Of Algiers③Weeping Woman④The Picador

Simon Phillips:ds.
Ian Mosley:ds.
John Gustafson:b.
John G.Perry:b.
Tony Hymas:key.
Rod Edwards:key.
Juan Martin:g.
Prod:**Roger Hand**

全曲ピカソの作品を題材としたインストゥルメンタル。彼の生まれ故郷であるスペインを意識したフラメンコ・スタイルのギターを中心に，哀愁と情熱を表わしたフュージョン・サウンドをバランス良く収録。ギタリストのマーティンが全て作曲したソロ作品の形態を取っており，彼の個性的アレンジ能力が特筆すべき事である。しかしロンドン録音である本作が質を保っているのは，ブリティッシュ・ロック界超ベテラン達の的を得た演奏に依るところが多大である。又このメンバー，エレクトリック時代のゴードン・ギルトラップと重複しているのが興味深い。

（吉野）



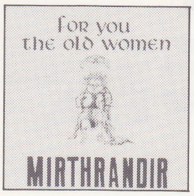
AMEDEO MINGHI (ITALY)
Amedeo Minghi
APOLLO/DZSLA55165　'73年

A①E Tu Con Lei②Fratello In Civilta③L'uomo E La Terra④Candida Sidelia
B①La Speranza②Mexico③Un Uomo Grande④Racconto

Massimo Buzzi:ds.
Piero Montanari:b.
Luciano Ciccaglioni:g.
Jimmy Tamburelli:g.
Aldo Pizzolo:org,p,syn,key.
BABA YAGA:chorus
Prod.:**Edoardo Vianello**
Arr.:**Amedeo Minghi**
Aldo Pizzolo

コチャンテ，バリオーニといった若きカンタトゥーレ達が，より柔軟で積極的なアプローチにより伝統を見つめ直したのと同様に，この作品も又，古法と同時代性を混在させ乍ら，本質的な美を追求した好例である。Amedeo Minghiの優しい唄声を包み込む豊かなオーケストレーション，花を添えるキーボード，艶やかなバイオリン・ソロ，あらゆる楽器が美しく華やかで，生命あるもの全てを心から讃えているかのようだ。尚，この年同レーベルよりI-Vianellaと共に2nd "Homeide" を発表している。

（鈴木）



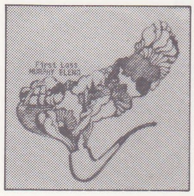
MIRTHRANDIR (USA)
For You The Old Women
private /2276　'76年

A①Number Six②Light Of The Candle③Conversation With Personality Giver
B①For You The Old Women②For Four

Robert Arace:ds.
James Miller:b,fl.
Simon Gannett:key,vo.
John Vislocky:lead-vo,tp.
Rich Exlon:g.
Alexandon Romanelli:g.

本作のテープを某店長の好意により送って戴いた。アメリカがいまだ未開拓であるのを実感させられる内容であった。まずフルートによる幻想的な曲から始まる。ヴォーカルの表情豊かな張りのある声が作品全体の印象を良くしている。A②のハードな曲はその典型。そしてこのバンド，GENTLE GIANTのスタイルを独自に消化した水準の高い演奏を行なう。B①で本領を発揮，トランペットが効果的。B②の大曲はプログレッシヴ・ロックの定形パターンが次々と現われる曲。彼等の造詣の深さと愛着を感じる。全体的にメリハリが効いて密度の濃いイタリア最盛期を想わせる音。

（吉野）



MURPHY BLEND (W.GERMANY)
First Loss
KUCKUCK/2375 005　'70年

A①At First②Speed Is Coming Back③Past Has Gone
B①Praludium/Use Your Feet②First Loss③Funny Guys④Happiness

Wolf-Rodiger Uhlig:org,vo,chembalo,
Wolfgang Rumler:g,vo.
Andreas Scholz:b.
Achim Schmidt:vo.

本作はOUT OF FOCUS, HANUMAN, CWT等の好盤をリリースしたドイツの中堅レーベルより発表された。ハード・ロック・ファンからも好評であるこの作品，アシッド・サイケデリックの色のあるハードな曲が中心。そしてB①冒頭部のCURVED AIR「ヴィヴァルディ」のようなクラシカル・フレーズを大仰に使う部分もある内容。レズリーの効いたハモンドを中心としたアート・ロックからの影響が強いが，ドイツ特有の混沌とした雰囲気もある。又スタジオ・ライヴ一発録り的な熱気のあるロックの原点のようなものを感じさせるのが魅力である。

（吉野）



MUSICALIA (ITALY)
Musicalia
MADAU DISCHI/D-017

A①'O Giocatore②Antidotum③'O Tiempo Che Vo' Chiove④Mille Stoccate⑤Santo Revolio
B①Tarantella Figurata②Ninna Nanna③Serenata④'A Festa Rint'o Vico⑤Musicalia

Amerigo Ciervo:p,key,fl.
Marcello Chiervo:g.
Giuseppe Fucci:vo,per.
Gennaro Cappabianca:vla,vln.
Antonio Di Francia:cello.
Luigi Mazzeo:ac-g.

本作はトラッド・レーベル，MADAU DISCHIからリリースされたもので，年代は'80年初期だろう。アンジェロ・ブランドゥアルディに似たトラディショナルな音作りが基本となっているが，彼らはもっと南イタリアの香りに満ちた土着的な要素を含み，それでいてコンテンポラリーなサウンドだ。特に，オペラチックな女性ヴォーカルが歌い上げるB②，B③の哀愁と美には誰しも心を震わせることだろう。ヴァイオリン，フルートも最上のアンサンブルを奏でている。僕は本作を聞くとカオス・シチリア物語に映し出される貧しくも美しい南イタリアの村々を思い出す。

（LUNA）



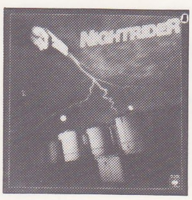
NIEMEN (POLAND)
Aerolit
MUZA/SX1192　'74年

A①Cztery Sciany Swiata②Pielgrzym
B①Kamyk②Daj Mi Wstazke Blekitna③Smutny Ktos I Biedny Nikt

Czeslaw Niemen:mellotron,syn,vo,etc.
Piotr Dziemski:ds,perc.
Andrzej Nowak:key,p,etc.
Jacek Gazda:b.
Stawomir Piwowar:g.

ニェーメンは'60年代終りから活動を続けている東欧一のアーティストである。泣きのブルースを基本にジャズや実験色をも採り入れた独特の音楽で，デビュー前のSBBやリック・レアード，ヤン・ハマーらとの共演でも知られている。オルガンを大胆にフィーチャーした「Enigmatic」，SBBのバックが冴える「Strange Is This World」，アヴァンギャルドな方向へ走った「Vo.1」「Vol.2」，合唱を導入した「Mourner's Rhapsody」等の出来が良い。本作は重いメロトロン・ブルースから軽快なリフまでが様々に交錯するバランスの良い作品で，入門用には最適である。

（沢田）



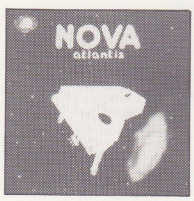
NIGHTRIDER (FRANCE)
Nightrider
CBS/83886　'79年

A①A Change In Time②Juggernaut③Blinded
B①Hard Rock Kid②Nightrider③Albatross④Angel Heights

Herve Guido:key,org.
Jean-Louis Bianchina:ds.
Christian Banet:b.
Fred Rossini:syn,b.
Andre Roe:g.
Bobby Salazar:vo.

グループ名，ジャケット，更にはA①のハードなイントロからハード・ロック系の作品と判断しがちであるが，確かにそうした要素は持っているものの，シンフォニック・ロックとしても十分に聴けるサウンドである。聴き所はインスト部分であり，クラシカルでリリカルなピアノ，多少なりともSTEP AHEADを思わす軽快でメロディアスなギターが特に印象的である。ハード部分とメロディアスな部分をうまく組合わせた変化に富んだ展開も中々のものである。ジュネーヴで録音されており，スイスのグループの可能性もあるが詳細は不明。

（賀川）



NOVA (FINLAND)
Atlantis
LOVE/LRLP169　？年

A①Se Vuosi②Kauounginn Naiset
B①Atlantis②Vanha Surullinen Laulu

Antti Ortamo:key,vo.
Jukka Marjala:ds.
Micca Vasenius:g.
Petri Peltola:b.
Jouka Helatie:g.

この作品，北欧においてソネット，サイレンスと並ぶ三大レーベルよりリリースされた。やはりこのレーベル色であるジャズ・ロック・インストゥルメンタル中心のサウンドであり，プログレッシヴ色の濃い内容に仕上げられている。A①は15分以上の大曲。技術的水準は高いが，それを前面に出さず歌，演奏のメロディーを聞かせる淡々とした演奏が続き渋さを感じさせる曲。②はギター・ソロ中心のモダン感覚ブルース・ロック。そしてB①②はこのバンドの特性といえる北欧の風土を感じさせる，アコースティックな響きを大切にした，しっとりとした展開をする曲。

（吉野）

ORME (ITALY)



L'Aurora
CAR JUKE BOX/CRJ-LP00023　'69年

A①L'Aurora②Milano 1968③Fumo④
④Irene⑤Non So Restare Solo Lacrime Di Sale
B①Senti L'Estate Che Torna②I Miei Sogni③Finita La Scuola④Mita Mita
⑤Casa Mia⑥Fiori E Colori

レ・オルメの幻のセカンドとしてリリースされたこの作品，数あるイタリア盤の中でもレアー中のレアー盤として我々を悩ます作品である。その内容はカー・ジューク・ボックス時代のベスト・アルバムであった。推測するに，まずファーストがリリースされ，収録されなかったシングル曲を集めてこのベストを作り，オルメはフィリップスに移籍して再デビュウすることになるのだろう。タイトル・チューンを始め，美しいバラードをも含むアルバムで，オルメの歌の部分に惹かれる方になら，最初期の曲もぜひ聴いてもらいたいと思う。

（山崎）

PANDORA



Measures Of Time
SMA/3002　'74年

A①Measures Of Time②Dusty Ledger ③The Queen
B①Life Is Good, Life Is Bad②Tailor③ Mind Of Confusion

Björn Malmqvist: b.
Peter Hjelm: vo.
Ake Rolf: g.
Jan-Erik Deckner: key.
Leif Hellquist: g.
Bertil Jonsson: ds.

LOTUSなどを出しているSMAレーベルの'74年の作品がこのPANDORA。全曲英語で歌われているせいか，ブリティッシュ・ロックに近いものを感じるが，確かにセンスの良さはそのものと言える。が，北欧独特の滑らかギター・ワークはここでも聴くことが出来る。時折りRoine Stoltに近いラインもあると書くと誉め過ぎかも知れないが，それ程的はずれとも思えない。またそれ以上にピアノの旋律が胸をえぐる。言葉では表現しにくいが，タイトル曲のピアノ・ソロには誰もが泣かされるのではないだろうか。

（田中）

PANTHÉON (HOLLAND)



Orion
VERTIGO/6360 850　'72年

A①Daybreak②Anais③Apocalyps④ The Madman
B①Orion

Ruud Wouterson: key, vo.
Albert Veldkamp: b, g.
Hans Boer: fl, sax, vo.
Rob Verhoeven: ds.

極度なまでにFOCUSナイズされたオランダのグループ。知る限り唯一の作品である。メンバーの構成はFOCUSとは若干異なり，ギターの活躍が若干減りサックスがプラスされた形になっている。が，その曲創りと各自の演奏スタイルはFOCUSそのもので，特に各楽器のサウンドメイクは影響というよりコピーと呼ぶにふさわしい。こうした要因は当然聴き手により対極の意見を持たれるのは間違いないが，結果としての作品全体のヴォルテージは正に本家FOCUSに迫る内容で，数年後に登場する「剛」のFINCHに対極する，「柔」のイメージを抱く作品である。

（城元）

PETRUS CASTRUS



Mestre
GUILDA DA MUSICA/DP-025　'73年

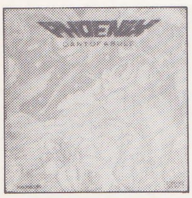
A①Mestre②Patria Amada③Porque④ Pais Relativo⑤Macao
B①S.A.R.L.②Pasargada③Velho Avarento④Tiahuanaco⑤Historia Do Azul Do Mar⑥So Mais Nada

Pedro Castro: g, vo.
Jose Castro: p, xilophon, vo.
Rui Reis: p, org.
Julio Pereira: g, b.
Joao Seixas: ds, per.

ペトルス・カストルスの１作目。78年に高水準のシンフォニック作品"Ascencao E Queda"を発表した彼らだがその間の活動内容は不明。本作はピアノとacギターの使用頻度が高く，オープニングのタイトル曲の美しさはシンフォニック大作への序曲の様にも聞える。が，繊細さと泥臭さが雑居する本作ではオルガンの出る幕も多くプログレッシヴな趣では後作に後れを取る。小品が中心でもあり歌物の延長として楽しむのが順当な所。A①等数曲で認められる洗練された美的センスが５年後の作品にもしっかりと受継がれていることだけは確かな様だ。

（江田）

PHOENIX (ROMANIA)



Cantofabule
ELECT/STM-01115/6　？年

A①Invocatie②Norocul Inorogului③Scara Scarabeului
B①Delfinul, Dulce Dul ful Nos tru②Uciderea Balaurului③Stima Casei④Pasarea Calandrinon
C①Filip Si Cerbul②Vasiliscul Si Aspida Sirena④Pasarea Roc...k And Roll
D①Cintic-Lu A Cucuveaua-Lliei②Zoomahia③Phoenix

Nicolae Covaciu: g, vo, fl.
Iosif Kappl: b, vo, fl.
Mircea Baniciu: vo, ac-g.
Günther Reininger: key.
Ovidiu Lipan: ds, per.

ルーマニアのフェニックスは68年にデビュー，本作以前に２枚のアルバムをリリースしている。民族音楽的な要素を取り入れた前作はやや消化不良気味で完成度も今一つだったが，初の２枚組となった本作では非常にパワフルな演奏を聴かせている。元来がハード・ロック・バンドながら，シンセ，チェレスタ，フルート，各種打楽器等を効果的に活用，そこそこのハード・プログレッシヴ・サウンドが散りばめられている。この手のバンド共通の弱点は曲の出来，不出来の差が激しい点で，その意味では密度の濃い１枚物にまとめて欲しかった。

（江田）

PING PONG (ITALY)



About Time
EMILIANA/LP 5022　'70年

A①About Time②You And Me③Dark Morning Skies④Daft⑤Confusion
B①Drinking②Someway③Bahshee④ Diamond Seller⑤Funny Wife

Personnel: **No Credit**

イタリアン・ロックが，あの輝かしい時代への胎動を徐々に具現化し始めた頃，このPING PONGも混沌とし錯綜した自己の音楽表現の確立を目指していたのだろう。全曲英詩による為，イタリア然とした面が薄れてしまったのは残念だが，それでも時に軽やかに浮遊し，時に扇情的に狂舞するフルートを多用し，ジャージーにクラシカルにそしてハードに迫るそのサウンドは一聴の価値有り。特にA①は、プログレッシヴ且つアグレッシヴに展開する名演で，溢れんばかりの情熱を感じずにいられない。

（鈴木）

POLIFEMO (ARGENTINA)



Polifemo
EMJ/8406　'77年

A①El Sueno Termino②Viene Del Sol③ Superhombre
B①Tropico De Cancer②Dualidad③Pie

Rino: vo, b.
David: g.
Ciro: key.
Juan: ds.

今となってはアルゼンチンのスーパー・グループと呼べそうなPOLIFEMOは，SUI GENERISのRinaldo Rafaneri，Juan Rodriguez，COLOR HUMANOやSERU GIRANのDavid Lebon，そしてESPIRITUのCiro Togliataの４人によって'75年に結成され，'76年にファースト「Same」，'77年にセカンドである本作「Same」を発表後，それぞれの活動のために解散。'83年には，未発表曲２曲を含むベスト盤「Retrospectivo '75～'77」も出ている。

（田中）

POLYPHONY (USA)



Without Introduction
ELEVENTH HOUR/EH-1003-S　？年

A①Juggernaut②40 Second Thing In 39 Seconds
B①Ariels Flight 1) Gorgons Of The Glade 2) The Oneirocritic Man 3) The Frog Prince②Crimson Dagger

Martin Ruddy: vo, b.
Christopher Spong: ds.
Craig Massey: vo, org, moog
Glenn Howard: vo, lead & slide-g.
Chatty Cooper: congo-ds, Timbales, per.
Prod.: **Chuck Taylor**

NICEからELPへの進化は批判性を持った革新的攻撃スタイルの確立であった。そして全世界的にポスト・ELPが出現し，個性的な良さはあったが，ほとんどが実質的にNICEの域を出ていなかった。しかしこのバンド，サウンド面においてELPを継承した数少ない音楽性を持ち得ている。加えてスライド，アームを用いたハードなギターが各曲効果的に活躍する。更に実験的サウンドの導入やワルツの曲等バンド・オリジナリティーを感じさせる部分もある。リズム感覚がやはりアメリカ的（テキサス出身）といえ洗練された演奏が聞ける作品。

（吉野）

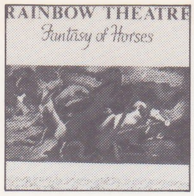


RÅG I RYGGEN (FINLAND)
Råg I Ryggen
RONDO/RON-ST-114 '75年

A①Det Kan Val Inte Vara Farlight②You Know It Ain't Easy③Spangaforsens Brus
B①Jan Banan②Naked Man③Queen Of Darkness④Sahningsserum

Jonas Warnerbring:vo.
Christer Sjöborg:key.
Björn Aggemyr:b.
Björn Nyström:g.
Jan Aggemyr:g.
Peter Sandberg:ds.
Prod.:**Kjell Gradin**

URIAH HEEP等に代表されるヘヴィ・ロックの躍動感にプログレの持つ繊細さをうまく融合させ北欧独特の淡々としたメロディー・ラインで味付けするとこのRAG I RYGGENの音になる。本作1作のみで消息を絶ってしまった彼らだが，その才能はハード・ロック・ファン，プログレ・ファンを問わず，その双方を納得させざるを得ない演奏技術，センスの点で数ある北欧産ハード・ロック・バンドの中にあっても頭一つ抜き出た存在である事は疑いの余地も無い所である。 （松尾）

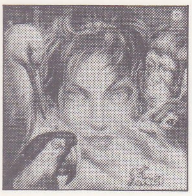


RAINBOW THEATRE (AUSTRALIA)
Fantasy Of Horses
CLEAR LIGHT OF JUPITER/CLOJ783 '76年

A①Rebecca②Dancer a)Staircase b)The Big Time c)Spin d)Theatre e)Farewell③Caption For The City Night Life
B①Fantasy Of Horses a)Early Light b)Frolic c)Trappers d)Captives e)Frolic f)Escape g)Cliff Edge

Julian Browning:g,key.
Ferg Mckinnon:b.
Graeme Carter:ds.
Keith Hoban:vo,org.
Frank Graham:tp.
plus **string section**
& brrass section
Prod.:**Julian Browning**

レインボー・シアターには2枚のアルバムがあるが，やはりこのアルバムのほうが出来は良いと思う。トランペット，サックス，トロンボーン，ヴァイオリン等の生楽器が多用されているのが特徴だが，オルガンやメロトロンも多用されており，情感に満ちたシンフォニック・サウンドが収められている。管楽器系のアレンジに多少難を感じるのであるが，それ以外は素晴らしいアンサンブルである。オセアニアのシンフォ系の作品でも5指には入れたい出来であるばかりでなく，世界的にみても屈指のシンフォ系のコレクターズ・アイテムである。 （山崎）

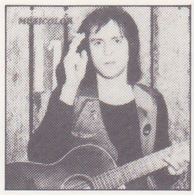


RAMINGHI (ITALY)
...il Lungo Cammino Dei Raminghi
BENTLER/BE/LP1016 '72年

A①Donna Hai Ragione Tu②La Nostra Verita③Cose Superate④Partire
B①Every Day Jesus②Non Moriremo Mai③Buio Mondo Nero E Giallo④Guarda Tuo Padre

Prod.:**Gualtiero Guerrini**

'70年にBentlerよりシングル・デビューを果たした彼等の唯一(?)のアルバム。メンバー等は不明だが，1stシングルのジャケを見る限りでは男性四人組である。サウンドはサイケ色を残したオルガン・ロックといった所だが，A①の9分を超える大作が，意欲的な展開・暗い曲調による中々の出来映えで，我々にとっては最も説得力のある曲だと思う。シングルは3枚を確認出来るが，取り分け3rdシングルのA面“Rendini L'anima”(Bentler：BE／NP 5093)は，色彩感豊かなキーボードをバックに配した名曲で，彼等のベスト・チューンであろう。 （鈴木）



PIERRE RAPSAT (BELGIUM)
Musicolor (French Version)
ATLANTIC 50108 '74年

A①Faut Pas Grand Chose Pour Etre Heureux②Un Jour, Les Couleurs③L'ombre Et La Lumiere④Djumbo L'averick⑤Chanson A Ma Femme
B①Nusicolon②Adieu, Les Clowns③Le Brochet④Rapsatus Vulgaris⑤Buster Keaton

Pierre Rapsat:vo,g.
Albert Marcoeur:ds,per,cl.
Patrice Tison:g.
Michel Bernhole:p.
Pascal Arroyo:b.
François Breant:key.

JENGHIZ KHAN，LAURELIEのメンバーだったピエール・ラプサット。グループ解散後は活動の場をベルギーからフランスに移し，ソロ・アルバムを10枚近く発表している。本作品は「New York」に続くセカンド・アルバムである。アルベール・マルクール，パスカル・アロヨ，フランソワ・ブレアンらのベテラン・ミュージシャンらが派手ではないが実に効果的な演奏を展開する中，ラプサットは情感を込めて切々と歌い上げている。それはプログレッシヴ・ロックの香をほのかに残したヌーベル・シャンソンと言うに相応しい。本作以降の作品もポップかつ良質なものである。 （賀川）



MICHAEL SALVATORI (USA)
Waiting For Autumn
NIGHTSHADE/N-001 '82年

A①When I Look In Your Eyes②Waiting For Autumn③Throw In To The Wind
B①Letter From The Front a)Our Love Is Real b)A Place Of Solitude c)The Final Entry②A Matter Of Time③Epilogue

Michael Salvatori:g,b,syn, effects,vo.
Henry Bahr:ds,perc.
Gary Polkow:key.
Prod.:**Michael & Thomas Salvatori**

生ギターを基調としたサウンドは一聴すると地味な印象を与える。しかし，B面を聴き終える頃には，このレコードの不思議なエナジーに包みこまれて行く自分に気付く。同時期のルディ・ペローネのソロに傾向は近く，演奏技術，音楽性は見劣りするものの，静けさの中にも盛り上がって行く様は，すがすがしく心地良い。サルヴァトーリはギター，ベース，シンセ，ヴォーカルを担当。それに加え，ドラマーとキーボード奏者の3人が基本的メンバーで，曲によって6名が客演し，一役買っている。といっても，客演なしのB③が一番の出来なのだが。 （吉瀬）

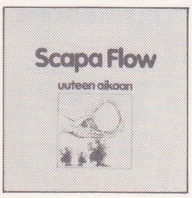


SBB (POLAND)
Pamięć
MUZA/SX1345 '77年

A①W Kolysce Dloni Twych②Z Ktorych Krwi Krew Moja
B①Pamiec W Kamien Wrasta

Josef Skrzek:b,p,org,syn, vo.
Apostolis Antymos:g.
Jerzy Piotrowski:ds,perc.

彼らは本来直情的な即興バンドでありながら，ある種の「抑制」をテーマとしていた様だ。そういう観点からすると，本作はその二者の均衡が絶妙であり，最高作といえる。抑制する意志もなく爆発した1stは別として，中途半端なバランスの2nd，本作，少々抑制しすぎた4thの3作はプログレ色が濃い。以後は徐々にポップ性を加えていくが，8th「Welcome」までは出来が良くおすすめ品。本作B面，延々と疾走する15/16等，アレンジ次第ではいくらでも過激になる所を，最後までモコモコし続けるあたりが彼らの本質だと思う。SBBはSearch, Break-up, Buildの略との事。 （沢田）



SCAPA FLOW (FINLAND)
Uuteen Aikaan
KOMPASS/KOLP22 '80年

A①Valmmiina Heraamaan②Salaisuuksien Satiiniverhot③Mika Aamu
B①Uuteen Aikaan②Tuuleen Kaiverretut Portaat③Koi④Askel Ylospain

Ismo Järvinen:vo,sax
Leevi Leppanen:ds,perc.
Timo Ssppänen:g.
Pia-Maria Noponen:vo,key.
Eelo-Pekka Kolehmainen: key.
Asmo Ahonen:b.

フィンランドでは数少ないシンフォニック・グループの唯一の作品。フィンランドの音というよりはむしろゲルマン系，隣国スウェーデンのMR. BROWNあたりに近いアコースティックなカラーを有している。生ギターやフルートを多用した明るいフォーク的曲調は一聴すると地味な感じがするものの味わい深い佳曲が多く，まとまりも良い。ドラマーが以後PEKKA POHJOLAの“Arban Tango”に参加した他はメンバーのプロフィールは不明。フィンランドは民族柄かシンフォニックが根付きにくく，ジャズ・ロックやトラッドを追った方が面白いのだが，突然変異はどこにでもいるものだ。 （内田）

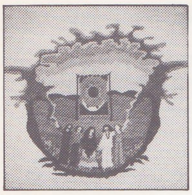


SCHWARZARBEIT (W.GERMANY)
Schwarzarbeit
private '80年

A①Danke②Verheiszung③Ich Bin Anders④Missverstandnis
B①Geschandet②Zeche Frauengluck③Mein Spielplatz④Leden Nach Dem Leeben⑤Vertreibung Aus Dem Paradies

Gerd Bracht:ds.
Dieter Ixter:b.
Jo Post:key.
Klaus Schröder:g.
Nina Schulte:vln.

ドイツ・ロマン派的味わいを持つ彼らの作品は，一時セカンドの「Traum Oder～」が大量に輸入されたが，この作品は，それより2年前に出されたファースト・アルバムで，同じく自主制作。アコースティック・ギター，ヴァイオリン等のアコースティックな趣を大切にした，とても詩情的なアルバムだ。泣きのギターを含め，叙情性という点においてはセカンドとは比べものにならない程の深みがあり，強いてルーツを遡るとするならば，それはジャーマン・ロックの一時代を築いたEMTIDIであり，NOVALISだろう。 （田中）



SEGUIN (CANADA)
Festin D'amour
CBS/PFS 90385 '76年

A①Global Refus②J'avais Oublie③Proclamation④V'la L'bon Vent⑤Dialogue Avec Galadriel
B①Le Silence②Alison③Si On Prenait Le Temps④L'homme Du Nord⑤Crepscule

Richard Seguin: vo, g, banjo hca, mandline
Bruce Munchison: vln, vo.
Yves Cloutier: g, vo, mandline
Guy Richer: b, perc, p, fl, vo.
Serge Locat: syn.
Yvan Oullet: p.
Richard Grégoir: p, vib.
Gilles Valiquette: g.
Marie Claire Seguin: vo, fl, perc.

カナダはケベック州のフォーク・バンドのたぶん3rd。基本的には初期MALICORNEに近い音だが，彼らは心の奥底に眠るムキ出しの「愛」をとても素直に表現している。加えてA面後半からB面にかけてはジプシー・ヴァイオリンが突如クラシカルになったり，天にも昇るような伸びやかな女性ヴォーカルがソロを取ったりしてシンフォニック顔負けの盛り上がりを見せる。彼らはHARMONIUMと交流が深く関連アルバムもリリースされているが，そういえばサウンドにも共通点が見られる。なお，マイナー・リリースの1stもTUDER LODGEをケベック・フォークに寄せたような好作品。（内田）



SFINX (RUMANIA)
Zalmoxe
ELECT/STM-EDE 01537 '77年

A①Ursitoarele②Blana De Urs③Mierea④Pestera⑤Epiphania
B①Furtuna Cu Trup De Balaur②Calatorul Prin Nuuri③Kogaion④Epilog

Dan Andrei Aldea: g, vo.
Corneliu Bibilonescu: b.
Nicolae Enache: key.
Mihai Cfrnea: ds.

ルーマニアのグループ。セカンドは軽いリズムのシンセが全面を支配し，とても勧められるような代物ではないが，このファーストの完成度の高さは素晴らしい。典型的なシアトリカル・シンフォニックの形式を持ち，トータルな流れの中に幻想的な世界を描く彼等のサウンドは，世界的レヴェルで考えても第一級のものである。全員共，豊かな表現力を身に付けているが，特にキーボーダーのそれは見事で，シンフォニック系のキーボーダーの中でもトップ・クラスの実力／センスを身に付けている東欧らしい味わいのカヴァーもLPならではの魅力を持っている。（山崎）

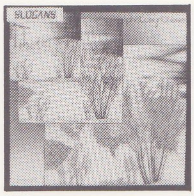


SKALDOWIE (Norway)
Stolen From Time
POLYDOR 2480 332 '76年

A①Krywanin Krywanin
B①Juhas Zmarl②Jescze Kocham③Gdzie Man Ciebie Szukai④The Violet Lady

Jerzy Tarsinski: g.
Konrad Ratynski: b, vo.
Jan Budziaszek: ds.
Jacek Zielinski: vln, tp, perc, vo.
Andrzej Zielinski: org, p, vo.
Jozef Gawrych: conga

A面はMOODY BLUESスタイルの親しみのある曲から始まる。ハモンドによるクラシカルな演奏から次第に盛り上がりNICEの強い影響下「ロンド」のライヴ・ヴァージョンを意識している。そして「プロムナード」のフレーズを挟み，初期のダリル・ウェイ的荒々しいヴァイオリン・ソロと続く。「ウィリアム・テル序曲」からの引用でクライマックスを迎え，PFMのライヴを想わせる。プログレッシヴ・ロックの初期段階のスタイルを並べており，当時のポーランドの水準を窺わせる内容。B面は凡庸。なお本作はこの国では珍らしい見開きジャケット。（吉野）



SLOGANS (ITALY)
Photosynthesis
private/SL-001S '84年

A①La Festa Del Tiranno②With The Sun We Hide③Bianca④Old Family⑤Aspetta il Giorno
B①Corri Nel Vento②Fastum③Con La Tua Musica④Photosynthesis⑤L'Altra Faccia

Roberto Gemo: g, vo.
Michele Bianchini: syn.
Ivano Tolio: p, syn, vo.
Palmiro Gnoato: b.
Marco Carlesso: ds.
Silvia Bizzotto: vo.
Prod.: **SLOGANS**

ミラノからヴェネツィアに行く列車に乗って途中パドヴァで乗り替え，そこから約40分の所にある小さな町，バッサーノ・デル・グラッパ出身の女性ヴォーカルと2人のキーボードを含む6人組。'84年のローカルプレス。音の方は伸びのあるギターを中心としたものでA③などは哀愁を帯びたピアノのイントロで始まり，アルゼンチンのパブロと音作りが似ているが，リズム陣が多少甘いことと，単調なフレーズが所々に出て来て，完成度はもう一つで，イタリアらしさもあまり感じないが，淡い色彩のジャケと相まって，コレクターの心理をくすぐる一枚である。（高橋）

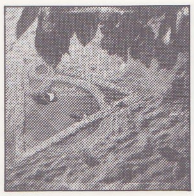


SMAK (YUGOSLAVIA)
Smak
SAKOJ/1079 '76年

A①Perle②Mracni Mol③Blues U Parku④BISKA 2
B①Put Od Balona

Zoran Milanovic: b.
Slobodan Stojanovic: ds.
Radomir Mihajlovic: g.
Lazar Ristoyski: key.
Boris Arandelovic: vo.
Prod.: **IV**

A①～②とハードでキャッチーな曲で始まる。16ビート感覚を取り入れ安定した演奏力があるのが分る。後の作品（フュージョン化する）が米，独盤等でリリースされ，ユーゴ（共産圏）では異例といえる足跡を残したバンド。③は曲名通り泣きのギターをフィーチャー。④はハード・ロック寄りのリフを中心とした曲。本作の目玉はやはりB面全てを費やした大曲。各自のアコースティック・ソロからハモンドを中心としたアドリブがほとんどない最後まで見事な展開をするプログレッシヴ・インストゥルメンタル。このデビュー作，彼等はコンポーズ能力があることも示している。（吉野）



GREG SNEDDON (AUSTRALIA)
Mind Stroll
MUSHROOM/L35356

A①Mind Stroll②Winter③Take It Slow And Easy
B①A Spell Of Destruction②Minuet In E③Concerto For Two Handed Plectrum Madman

Greg Sneddon: p, org, syn, mtn, el-p, per perc, vo.
Dayle Alison: vo, perc
Phil Buston: g.
Jerry H. Speiser: ds.
Gary Ricketts: b.
Prod.: **Charles Fisher**

本作はオーストラリアのキース・エマーソンという触れ込みであった。しかし攻撃的な緊張感のある展開は聞かれず，逆にやさしさを感じさせメロディーを引き立たせるシンプルなスペイシー感覚のアレンジが全体的に施されている。シンガー・ソングライター的性格の強い作品。　A③は当時シングル・カットされたメロトロンを伴うバラード佳曲。又彼のピアノ，オルガンを中心としたインストゥルメンタル部分が多く収録されており，水準を保った出来となっている。この国の国内発売されていない他の作品も聞いたが，本作同様淡白な印象が残るものが多いようである。（吉野）



SOLUNA (ARGENTINA)
Energia Natural
MICROFON/SEL 844 '77年

A①Esperame Encendida②Manana Puede Sel El Dia③Ella Despertaba④Voy A Hacer Las Paces⑤Sin Zapatos Es Mejor
B①Si El Manzano Duerme②Detras De La Valla③Una Vida Para Amar④El Terror De La Abuela⑤Detras Del Vidrio Roto

Gustavo Santaolalla: g.
Alejandro lerner: key.
Sergio Polizzi: vln.
Ricky Libman: b.
Horacio Gianello: ds.
Charly Garcia: mellotron

数々の名盤を送り出して来たMICROFONレーベルに，またひとつ加えなければならない作品が出来た。それがこのSOLUNA。Sergio Polizziのヴァイオリンが，かなり重要な位置を占め，女性ヴォーカルMonicaと共に，このグループの大きな魅力となっている。殆んど今までに聞いたことの無い人物ばかりだが，ギターを始め他のパートもしっかりしている。また，アルバム中3曲で，恐らく解散直後のLA MAQUINAのCharly Garciaのメロトロンが聴ける。AUCANやETERNIDADと同系統でしょうか。（田中）



IGRA STAKLENIH PERLI (YUGOSLAVIA)
Vrt Svetlosti
RTB/2120070 '80年

A①Igrac②Carobnjacivo.
B①Vrt Svetlosti②Lunarni Modus③Sanjas

Zaran Lakic: key, vo.
Vojkan Rakic: g.
Boba Trbojevic: b.
Peda Vukovic:
Dragon Soc:
Dragana Saric: vo.

タコと並ぶユーゴのトップ・プログレッシヴ集団，イグラ・スタクレニー・ペルリ。本作は彼らの2作目だが，デビュー作共々，ズシリと重たい重量級のサウンドが楽しめる。タコと同様，ポンプ勢の様な手法は一切取り入れず，一貫して重々しい演奏で攻める。A①がやや毛色の変わった作風ながら，他はギルモアを意識したと思われるギターと，キーボード陣を柱に息もつかせぬ展開。演奏テクも一級品で見せ場ではピタリと決める。1作目，2作目共，作詞作曲は全てISP名義で，メンバー全員がかなりの実力者と見受けられる。（江田）



STIG & STEEN (DENMARK)
Forchromede Dage
SONET/SLPS-1543 '73年

A①Nedenomsvej②Foraesvise③Maelkebotterne④Bag Et Ukendt Landskab
B①Forchromede Dage②Natten Over Stranden③Tabte Slag④Bring Hosten Ind

Stig Kreutzfeldt: vo, g, per.
Steen Toft Andersen: vo, b, ac-g, har, mellotron
Nis Jorgensen: vo, org, fl, per, mellotron
Ken Gudman: ds.

2人のギタリスト，スティク・クロツフェルトとスティーン・T・アンデルセンが，更に2人のミュージシャン（key, ds）の助けを借りて創り上げた作品。オープニングこそ地味ではあるが，常に流麗で叙情的な音作りを心掛け，北欧の澄みきった青空の様な爽やかさでシンフォニック通の心を満たす。大らかなストリングス・アレンジ，清らかな小川のせせらぎを思わせるリリカルなピアノとフルートの調べ，そしてスティーンとキーボーディストが奏で上げるメロトロン。劇的な展開が少ない事と，僅かな泥臭さを除けば躊躇なく及第点がつけられる作品。（江田）



STORM (SPAIN)
El-Dia-De-La-Tormenta
ALBA/PA6017 '79年

A①Este Mundo②La Luz De Tu Voz③Saeta Ensayo (Part 2)
B①Saeta Ensayo (Part 2)②Lejos De La Civilizacion③Desde El Mar Y Las Estrellas④El Dia De La Tormenta

Personnel: **No Credit**

このグループ，前作では'70年代前半スペインにおいては数少ないハード・ロック・バンド（D. PURPLEスタイル）として良質な作品を残した。それから5年後，本作は再起をかけた意気込みが感じられる。まずキーボードを前面に打ち出した厚みのある音作りをしている。そして熱唱型ヴォーカルと泣きのギターを中心としたメロディアスな曲が収録されている。前作よりテクニック的に安定しており，発表年度から当然だがかなり洗練されている。全体的にハードな印象が残り，結局ÑUやBLOQUEと並ぶハード・プログレッシヴ・バンドといえる。（吉野）



TABULA RASA (FINLAND)
Tabula Rasa
LOVE/LRLP135 '78年

A①Lahto②Miks' Ette Vastaa Vanbat Puut③Tubo④Gryf
B①Tyhja On Taulu②Nyt Maalaan Elamaa...③Vuorella Istuja④Prinssi

Heikki Silvennoinen: g.
Jukka Leppilampi: laulet.
Tapio Suominen: b.
Asko Pakkanen: rummut.
Jarmo Sormunen: builu

ユーロ集成で紹介したものはセカンドで，これが幻のタブラ・ラーサのファーストである。白地に金のレリーフ文字，インナー・スリーヴに裸女が山頂に佇む幻想的な絵を配したもので，ジャケットだけでも，LPレコードを所有する喜びに浸れるような代物。音は'75年ということを考えると古いスタイルではあるが，北欧のグループ達が黎明期に創るような，ポップ，ジャズ，サイケデリックを融合させたような音である。ウィグワムの初期に共通するような，とてもなつかしさを感じるようなプログレッシヴなもので，北欧らしい，とても心暖まるサウンドだ。（山崎）

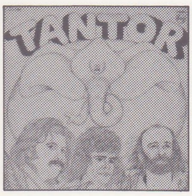


TAKO (YUGOSLAVIA)
U Verci Za Spavanje
RTB/2120305 '80年

A①U Verci Za Spavanje②Senke Proslosti③Na Putu Ka Sebi
B①Price O Leni②Dolina Leptira③Igra Devojcice

Dusan Cucuz: b.
Djorde Ilijin: fl, hca, syn, mellotron
Miroslav Dukic: g.
Slobodan Felekatovic: ds.

タコは80年前後に高水準のアルバム2枚を残しているユーゴの4人組。キーボードとギターを中心に組み立てた本格派シンフォニックを得意とし，両者のコンビネーションに冴えを見せる本作の聴き応えは十分だ。地を這う様なベースライン，意欲的にソロを取るギター。ポンプ勢の様な明るい彩りとは無縁で，キーボード音はどこか気怠い独特の雰囲気を醸し出し，その端々には一流の美的センスが見え隠れする。派手なソロは無いものの常に重々しさを失わないのも特徴。更にキーボーディストの吹くフルートが加わり，音の厚みは一段とアップする。（江田）



TANTOR (ARGENTINA)
Tantor
PHONOGRAM/5240 '79年

A①Guarreras Club②Niedernwohren③Llama Siempre④Oreja Y Vuelta Al Ruedo
B①Halitos②El Sol De La Pobreza③Carrera De Chanchos

Personnel: **No Credit**

以前南米カタログで紹介したのがセカンドだったが，これは'79年に出されたTANTORのファースト・アルバム。7曲中5曲にMIAのLito Vitaleが参加して弾きまくっている。セカンドでは，テクニックはあるものの，余りにもフュージョン的だったが，このファーストは良い。SPINETTAとの共作になるA③，B②はさすがに歌そのものが良く，LitoとLeo Sujatovichのキーボード・バトルが楽しめるA④など，久々の感動を味わえる。作風としては，ESPIRITUのサードを多少ジャズ・ロックよりにした様なものか。（田中）

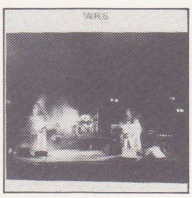


TAU (W. GERMANY)
Tau
PLÄNE/88304 '82年

A①Willkommen②Der Traum③Todesfuge
B①Wenn Die Rote Sonne Bei McDonalds Versinkt Im Hausermeer②Eins Morgens Im April③Gotl④LSD

Dirk Martens: vo.
Michael Barfuß: key, vo.
Michael Pickerott: g, vo.
Fritz Keipper: b.
Helge Birlow: ds, vib.

ドイツらしからぬジャケット・ワーク。オープニングの軽快な曲にたじろぐ。次なる曲は，ジェネシス調のアンサンブルを持ったドラマティックな出だしで期待を抱かせる。それもつかの間，中間部が平坦で曲が長く感じられる。それはそれで，聴き所の多いマニア好みの曲にはちがいない。A③B①は好みに有らず。インストのB②はキーボードをメインにした雄大な曲。B③は後半泣きのギターで盛り上がり，B④はビートルズの「ルーシー・イン・ザ・スカイ・ウィズ・ダイアモンド」をベースに熱い演奏でアルバムを締めくくる。5人編成のタウの唯一の作品と思われる。（吉瀬）



TAURUS (TAURUS)
Tapes-Live
WORLD RECORDS/WR83.011 '83年

A①Robot Romance②Waiting For You③Voodoo④The Boatman⑤Window Of Your Mind
B①One For The Kingdom②Resistance③Man In The Mirror④Show It To Me

R. Spierenburg: key.
M. Scheffer: vo, g.
D. Bevan: ds.
P. Traanberg: b, Taurus
T. De Jong: b, Taurus
J. Schild: b, Taurus
R. Stulp: ds.
K. Wassenaar: ds.
J. Phillippo: vo, key, g, fl.
Prod.: **Rijno Zeulevoet**

タウラスには2枚のLP（内，一枚はマーキーよりCD化されたもの）と2枚のシングルがある。本作は2枚目のLPで，'77年から'82年までのライヴよりセレクトされたライヴ・アルバム。しかし，前作の曲とは一曲も重なっていないから，彼等のレパートリーがいかに多かったかがわかる。録音が悪いのが残念だが，曲はよくアレンジされており，端正なイメージのシンフォニック・ロックが展開されている。この後，グループは'80年代中頃まで存在するが解散してしまう。オランダ特有の暖かみのあるサウンドを持つ，素晴らしいグループであった。（山崎）



TEMPO DI PERCUSSIONE (ITALY)
Tempo Di Percussione
PHONOTYPE/AZQ40031 '75年

A①Le Alture Del Golan②Po Chung And The Chung③Invenzione Di J.S.Bach n°1④Invenzione Di J.S.Bach n°2⑤African Sketches⑥Go Down, Moses
B①Deep River②The Battle Of Jerico③Double Music④Spazio Zero

Gianni Desidery: perc.
Cuono Correra: perc.
Gianni Nicotra: perc.
Vittorio Buonomo: perc.
Walter Scotti: perc.
Benny Forestiere: perc.
Antonio Romano: perc.
Loredana Neri: vo.
Prod.: **Antonio Buonomo**

ナポリの超マイナー・レーベル，フォノタイプ・レコードから人知れず世に送り出されていたこの作品は，種々多様な打楽器類のみによって創り上げられた非常にユニークで独創的なものである。まるで闇の淵から湧き出でるかのようなイントロに始まり，魅力的なメロディーによる美しくも果敢無い小曲や，憂愁に満ちた女性ヴォーカル曲（但し英語）等を交え乍ら深く静かに進行し，アヴァンギャルドなクライマックスを迎えるこのサウンドには，正にプログレッシヴという形容が相応しい。尚，素晴らしいジャケット・ワークはOSANNAのLino Vairetti。（鈴木）



TETRAGON (W.GERMANY)
Nature
EINE SOMA/SM1 '71年

A①Fuga②Jokus③Irgendwas
B①A Short Story②Nature

Hendrick Schaper:org,p,vo, clavinet,chembalet.
Jürgen Jaehner:g.
Rolf Rettberg:b.
Joachim Luhrmann:vo.
Prod.:**P.Kretschmann**

ドイツ北部，オスナブルックの出身。'70年には，ギタリスト参加以前のキーボード・トリオで前身に当たるTRIKOLON名義作「Cluster」を150枚限定リリース。これは4曲入りで，サイケデリックなオルガンやピアノを多用したNICEの亜流作風ながら，明らかに当グループの布石に，そしてグループの歩みが当キーボード奏者のそれであることも明かす。本作のA①はバッハ，B①はバーンスタインの作をアレンジ。更にジャズ感覚も備わり，ハモンド・オルガンの洗練と多用が映える高水準の自主製作。近年，キーボーダーはウド・リンデンベルグのバンドで活動。（松本）



TEVERANO (SPAIN)
Teverano
DISCOPHON/TL-10001 '82年

A①Cowboys②Converses Amb L.'Aire③Son A Cuba④Per Tu...
B①Musical Express②Volen, Pero Sentrebanquen Amb Nuvols③Temps④Cel De Nit

Josep Ma Bardagi:g.
Josep"Kitflus"Mas:p.
Pere Bardagi:vln.
Jordi Clua:b.
Francesc Rabassa:ds.

'82年，スペインはバルセロナの完全自主制作盤で出されたTEVERANOのファースト・アルバム。実はこのレコード，数年前にドイツの輸出業者が何枚か持っていたものを取りよせて，以前勤めていたお店でレギュラー価格で数枚売ったのだが，その後スペインのマニア連に探して欲しいと頼んだところ，名前すら知らないらしく，それから一年程後に，ものすごい価格を提示されてびっくりした経験がある。あの時入手したお客さんはラッキーのひと文字である。音はギター，ヴァイオリンのバカテクものが4割と，胸キュン叙情ものが6割のハイセンスな作品。（田中）



TIME (YUGOSLAVIA)
Time
JUNGOTON/LPYVS-60978 '72年

A①Istina Masina②Pijesma No.3③Hegedupa Upa
B①Kralj Alkohol②Za Koji Zivot Treba Da Se Rodin

Branelambert Zivkovic:key, fl, el-g.
Dado A.Topic:vo,b,ac-g.
Mario Mavrin:b.
Ratko Divjak:ds,perc.
Vedran P.Bozic:g,vo.
Tihomir Pop Asanovic:org.
Dabi Lukac:syn,mellotron
Prod.:**Vladimir Mihaljek-Miha**

タイムはスマック，ゴルディ等と共にユーゴを代表するハード・ロック・バンド。オープニングの様な重々しくパワフルな展開が本来の持ち味と思われるが，A②のスローバラードとB面の"泣き"の連続が人気を集める。渋めのハモンドとギターが中心的な存在だが，B面ではメロトロンまで登用。一瞬ジャズっぽいピアノが流れる他，フルートも鋭い切れ込みを見せ，目一杯迫力のあるプレイを繰り広げる。曲の出来に多少バラつきがあるのが難点だが，英国臭が好きな人なら容易に溶け込める内容。72年発表のデビュー・アルバム。（江田）



V.A. (ITALY)
Concerto D'Estate
CBS/69150 '75年

A①E Quando(**Marcella**)②Mary Clair(**S.Giacobbe**)③il Giardino Proibito(**S.Giacobbe**)④Sei Bellissima(**L.Berte**)⑤Le Ferite Dell'Amore(**L.Berte**)⑥Love Said Goodbye(**Toto Savio**)⑦Canzone E Carcere(**Concetta Barra**)
B①Notte(**Cico**)②Agua(**Toto Savio**)③Allegri Beviam, da"L'Ernani(**La Banda**)④Fantasia:La Pioggia, Banbolo(**G.Cinquetti con La Banda**)⑤La Bussola(**La Banda**)⑥Human Glow(**Black Blowing Flowers**)⑦Amore Nel 2000(**Al Bano e Romina Power**)⑧Un Momento Di Piu(**I Romans**)⑨Cadiamo In Amore(**Tutti Insieme**)

CBS系のアーティストが'75年に一堂に会したライヴ。題して「夏のコンチェルト」。マルチェッラ，ベルテ，ジャコベ等，気になるアーティストが参加しているが，何といってもB①のチコの「Notte」とB面のBBFという謎のグループが本命。このBBFというグループはイル・ヴォーロのメンバーか，彼等の内の何人かがいるグループで，何とイル・ヴォーロのファーストのA②を女性スキャット入りで演奏している。後半にはあの独特のキーボード・ソロも入る。彼等のライヴを聴くことのできる，たった一つのアルバムなのである。マルチェラもいいよ。（山崎）



WERWOLF (W.GERMANY)
Creation
F667.943 ?年

A①Hohenflug②Die Reise Ins Land Der Flugschweine③Way To Paradise
B①Daydream②The Game Is Over③Der Achte Tag

Peter Besting:ds,vo.
Gerd Heuel:g.
Burkhard Hackestein:b.
Wolfgang Unthan:key.
Gitta Löwenstein:vo.
Luis Lopes:vo,g.
Prod.:**No Credit**

ドイツのシンフォニックと言えばAmenophis, Eden, Faithful Breathの1stあたりが良質な作品として思い浮かぶが，本作品もこうした作品群と並び称されるべき典型的ジャーマン・シンフォニックの知られざる傑作と言えようか。製作年度はクレジットが無い為明確ではないが'80年前後と推測される。男女混合によるヴォーカルのユニゾンが嫌が上にも各曲を盛り上げる。演奏は叙情派の極地。どっちに転んでもドイツ人にしか出せない音でありそれが又，妙に嬉しくなって来る。このドイツこそ今だ最も開拓の余地の残されたプログレの宝庫であると筆者は声を大にして言いたい。（松尾）

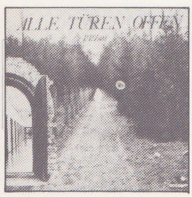


IGOR WAKHEVITCH (FRANCE)
Docteur Faust
EMI PATHE/CC72-11537 '71年

A①Aimantation②Meteria Prima③Eau Ardente
B①Tenebres(Warpurgis)②Mantines③Licornes④Sang Peurpre

Personnel:**No Credit**

イゴール・ワケヴィッチはバレー音楽を中心にしてコンテンポラリー・ミュージック・シーンで活動している作曲家である。現代音楽的手法をメインとしているものの，デビュウ作「logos」ではTRIANGLEと共演するなど，ロックの要素も積極的に取り入れた曲作りを行なっている。本セカンド・アルバムはCreation Mondiale Au Festival D'Avignon 71におけるNorbert Schmuckiのバレーのための作品を収めたものであり，オーケストラによるダイナミックな演奏とバンドによる力強い演奏を組み合せることで躍動感に富んだサウンドを作り出している。（賀川）



P.P.ZAHL (W.GERMANY)
Alle Türen Offen
ANTAGON/ALP3216 '78年

A①Meinen Kultivierten Bekannten②Minguneo
B①Alle Turen Offen 1)Hinter Der Dunklen Seite Des Mondes 2)Zuruckgebombt...3)Dynamos 4)...In Die Steinzeit 5)Alle Turen Offen

Michael Iven:vo,g.
Hansi Schwarz:g.
Peter Robert:syn,str.org.
Kalla Wefel:b.
Ali Husseini:ds.
Prod:**Peter Robert**

自主製作盤。A①の語りからA②の22分以上の大曲は，アコースティック・ソロ（フラメンコ・スタイル）と弾き語りが中心。ジャケットからも窺えるようにベルリンの壁にまつわる政治色の濃いメッセージ的な歌を聞かせる。社会派バンドOKTOBERやJOY UNLIMITEDのメンバーがバックを務め，前者のリーダー格キーボード奏者ピーターが音楽面において中心となっている。B面はA面に比べ癖のあるシンセサイザー・ソロや，テクニカルなギター・ソロが盛り上げる。そして実験色のあるアレンジが施されインストゥルメンタル重視になっている。（吉野）



ZINGALE (ISRAEL)
Peace
KRYPTON/DD-35095 '77年

A①Love Song②Carnival③Help This Lovely World④Heroica
B①Lonely Violin Crying For Peace②Stampede③7 Flowers Street④One Minute Prayer

David Hofesh:lir.
Yonathan Stern:lir.
Ehud Tamir:b.
Efrain Barak:g.
David Shanan:ds.
Ady Weiss:key.
Tony Brower:vln,mandlin
David Rosental:syn,per.
Prod.:**Yaacov Bachar**

イスラエルのプログレッシヴ・ロック・グループZINGALEの唯一の作品。「音楽のある星では戦争はすぐに終わる」をテーマとしたトータル・アルバムである。ソフトなヴォーカルを全面に押し出したヴォーカル曲と力強いヴァイオリンとややジャズィなキーボードが特に印象的なインスト曲を組み合わせた展開になっており，リリカルでラヴリーな曲調の前者とシンフォニックでたたみかけるような演奏の後者が無理なく調和している。イスラエルという特殊な状況にある国ならではのオリジナリティ溢れる特異な作品であり，聴く者に強く訴えてくるものがある。（賀川）

BELLE
MUSIQUE
D'AUJOURD'HUI



ENCYCLOPEDIA OF



EUROPEAN ROCK

2me EDITION

税込定価3090YEN
（本体価格3000YEN）